GANSHO-DO BOOK STORE, LTD. TOKYO
植民
GANSHO-DO BOOK STORE, LTD. TOKYO

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

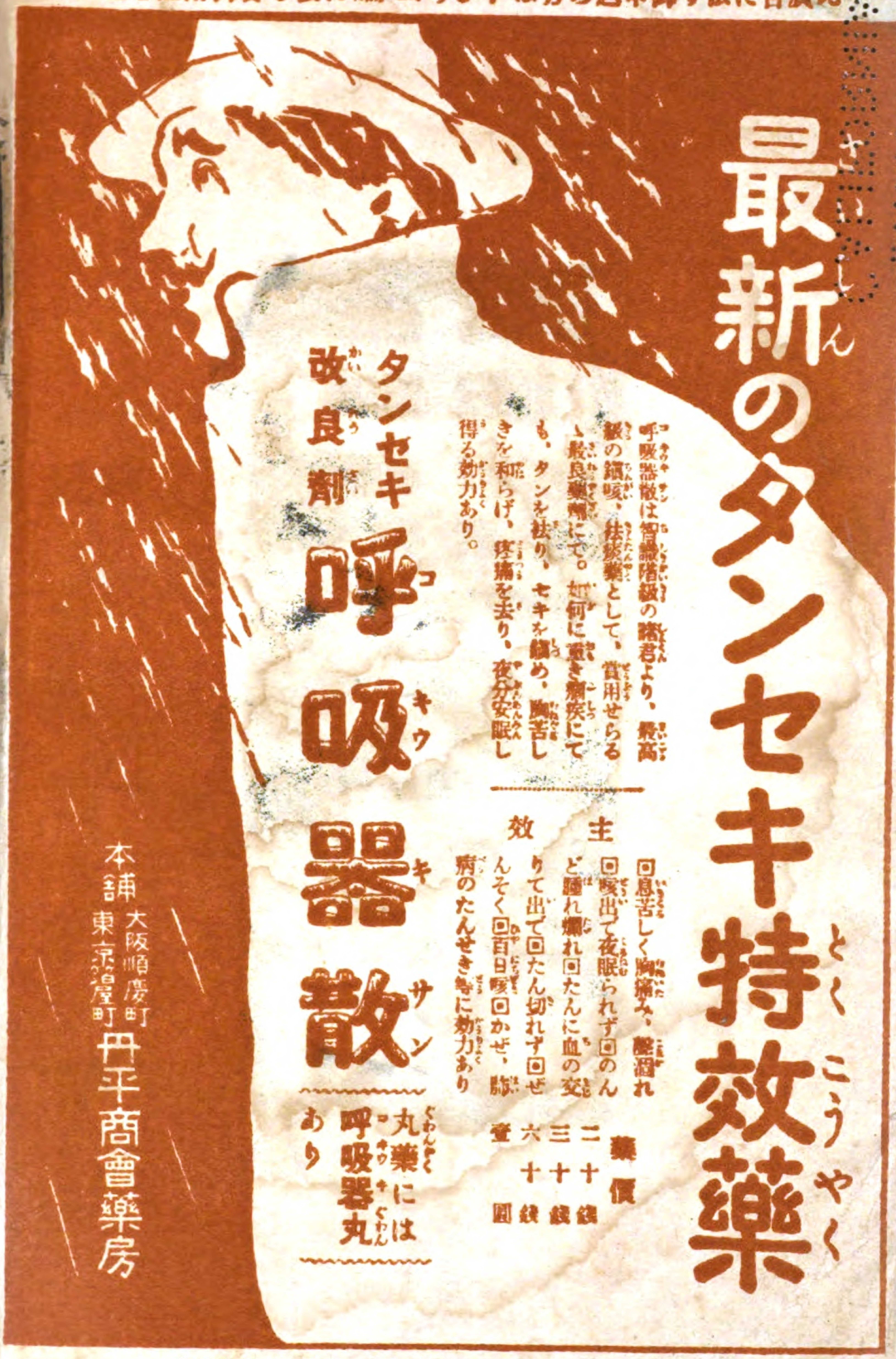
LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第三十八年　第一號　第四百七十號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

GIFT OF Sidney M. Ehrman

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

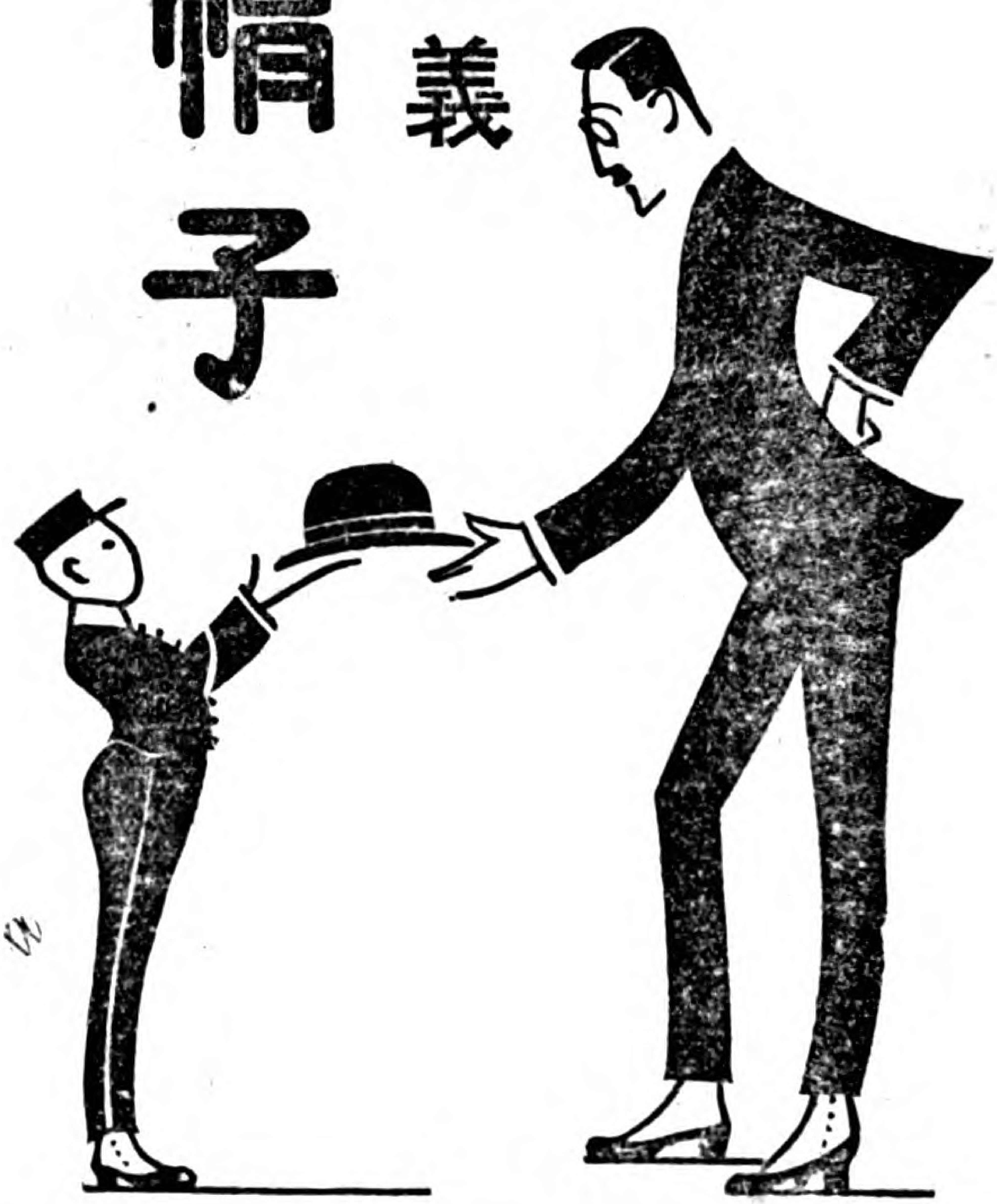
時代と共に

貴君がそのスタイルは
現代文化の表象として

純品質主義

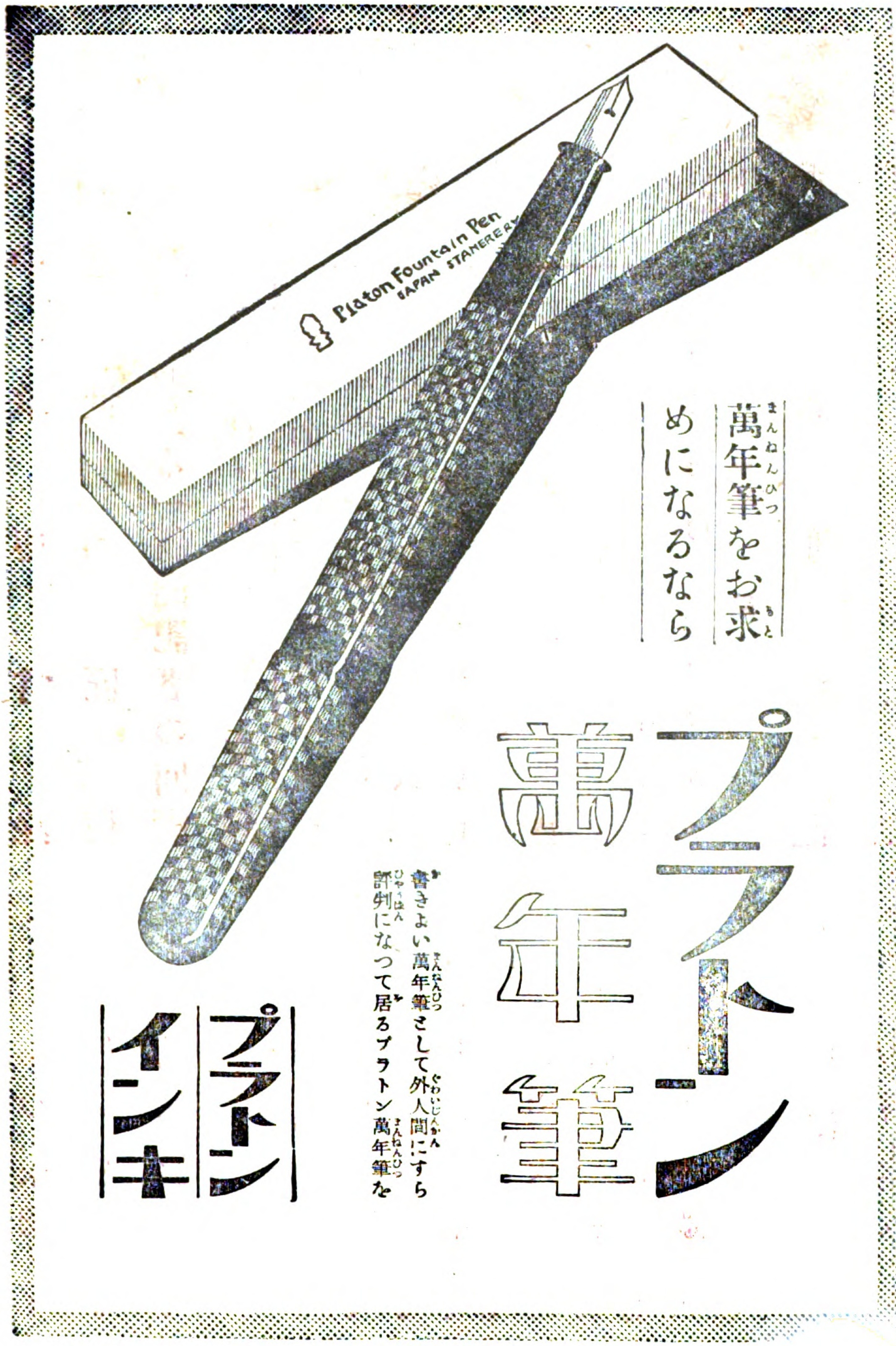
鷹(タカ)印帽子

貴君の風采を彌が上に堂々たらしむ

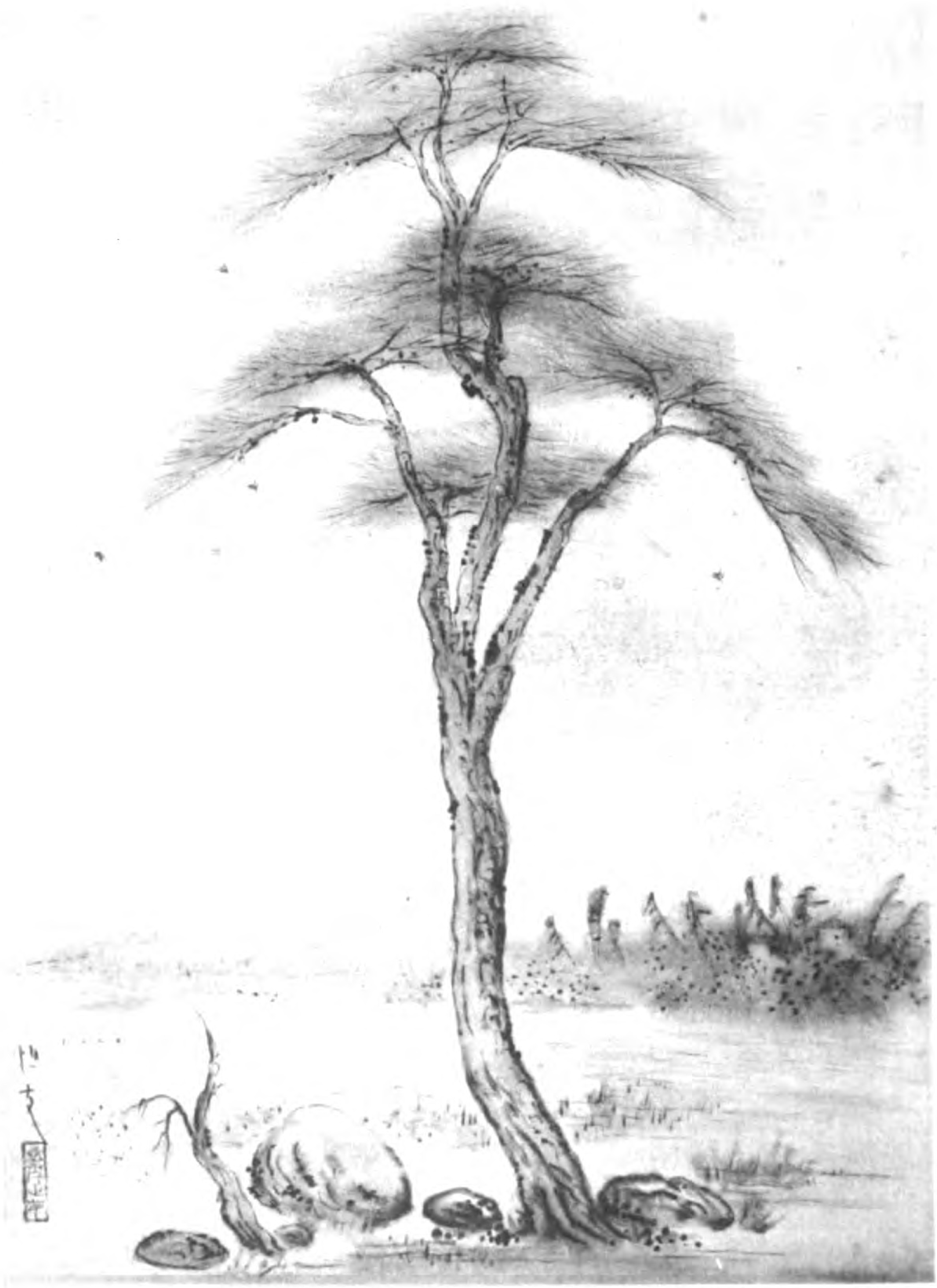


大阪
株式會社 高橋製帽所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



原松　　森田恒友筆

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大正十二年

中央公論

一月一日發行

新年號

第卅八年第一號

第四百十七號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

覺醒の眞義に徹せよ

北淸事變から日露戰爭の前後にかけて、支那帝國が俄に文武兩面の改革に鋭意し以て富國强兵の實を擧げんとするや、世界の人々は一齊に聲を揃えて「支那の覺醒」を叫んだのであつた。更に之と相前後して土耳共に青年軍人の一團あり、進歩と統一との旗幟を飜へし猛然として國運を積弊の廢墟の中より恢興せんとするや、世界の人々はまた驚嘆の眼をみはつて同じく其の「覺醒」を叫んだのであつた。之より後所謂遲れたるもの虐げられたるものゝ奮起躍動は一時大なる共同の潮流を爲し、覺醒卽ち Awakening なる辭は世界の各地に持て囃されたのであつた。就中わが日本の如きは、東洋に於て眞に覺醒した唯一の國家として、又世界全體に於て最も見事なる覺醒の實蹟を擧げた國家として、一方には先進列國の驚歎の標的となり、他方には後進諸國の憧憬の中心となつたのであつた。

然るに共後歲月は流るゝ如く十數年は瞬く間に過ぎ去つた。支那や土耳共の事は姑く措く。少なくとも我が日本は共間鋭意革新の歩武をすゝめて一刻も休まなかつた。而して今や世界の我國に對する批判は如何。曰く、日本は未だ醒めずと。又曰く、何時まで日本は舊時代の惡夢に昏睡を續けんとするのかと。知らず先きの醒めたりといふもの非か、今の醒めずといふもの是か。

日本は醒めたのか又は未だ醒めないのか。

或人は曰ふ。日本は覺めた。覺めて後この五十餘年間に於ける國力の發展には驚くべきものがある。東亞の天地に在ては、日章旗は大陸の彼方此方にたなびくに至り、遙か西歐の方面に於ても日本帝國の威望は相

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

富に重きを爲して居るではないか。是皆國民が富國強兵の振興に覺醒して努力を惜まなかつた結果であると。

又或人は曰ふ。我が日本は空虚なる膨脹の爲に著しく內面的活力の萎靡を來して居る。見よ、國民は官僚軍閥の鞭を揚ぐるまゝに或は東し或は西し、所謂國威の宣揚に安價なる滿足を表して居る。而かも國民の何の部分に創造的生命の潑溂たる活動があるか。鐵と血とに依て日章旗は遠く大陸の各處に樹てられた。焉んぞ知らん、その日章旗や所在住民の良心の信服の上に果して鞏固なる根帶を得て居るか否かを。吾人は今の樣な狀態の下に朝鮮を取り臺灣を取り將た滿蒙西伯利の地に伸びて往かふとする積りはなかつたと。

吾人はこの二樣の見解の孰れに贊成すべきかを知らぬ。然れども嚮きに醒めたりと云へるもの必ずしも醒めたるに非ず、我々は更にも一度覺醒せねばならぬとする特獨の見解の存することは之を承認せざるを得ない。而してこの意味に於ての覺醒の催告は、今や後進國と思つて居た支那からさへ發せられて居るのは、大に注目に値する現象である。支那の新人は曰ふ。支那も、日本も、東洋は概して昏迷して居る。眠れるもの多きは言ふを待たぬが、醒めたりと自信するものも眞に時代の眞諦に目覺めて居るのではない。新時代の警鐘を亂打して東洋全體を改造するは我等の責任であると。之を空元氣と譏らば譏れ。兎に角先進國を以て任じたりし日本帝國の鼎の輕重が、今や隣邦青年の間に疑問とされつゝあることだけは隱すことが出來ない。

之を要するに、我々はこの空前の一大變轉期に際會して眞に活眼を開かなければならぬ。醒めたりや否やの見さかひはどうでもいゝとする。非常の時期に於ける非常の要求は、ボンヤリした頭にははつきりと映じて來ないのだ。少くともこの意味に於て我々はこの來るべき一年に於て大に活眼を開かうではないか。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第卅八年第一號
新年號
第四百十七號

科學の道徳化、生活化

田中王堂

一、唯物主義の意義と由來

「現代は唯物主義に依つて支配される時代である。」「現代生活は唯物的なることを其れの基調とする生活である。」「此等は世の無識者と、併せて有識者(を以て自任するもの)の大數とが常に口にする言葉である。そして、現代の、現代生活の斯くあることが其等の一大缺陷であるとするの判斷の下に、彼等は科學と其れをヴエヒクルとして勃興した產業とをして之れが責任の全部でないまでも、殆ど其れに近いものを負はしめようとして居るのである。恰も唯物主義に依つて支配される時代と、唯物的なることを其れの基調とする生活とが獨り科學と產業とに依りて醞釀され得、其の他の何物に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

依つても蘊醸され得ないものであるかのやうに。彼等は唯物主義、若しくは、唯物的といふ言葉を斯く安價に語るのであるが、彼等は果して彼等自づからが語つて居るところのものの意味を理會して居るのであらうか。これは彼等が科學と産業とを以て、現代が唯物主義に依つて支配される時代であり、現代生活が唯物的なるを以て其れの基調とする生活であることに對して最も大なる責任者であると想像する一事からしても頗る疑はしい。事實、さうであるとすると、唯物主義と唯物的たることが彼等の想像とは異なつた、そして、正しき見地よりして確かに好ましからざるものであり、非難すべきものであるにしても、わたくしは先づ此等のものの意義を限定し、此等のものゝ構成を說明せねばならぬ。

抑も唯物主義とは何か。唯物的であるとは何か。唯物主義と唯物的であることとの意義は如何に。由來は如何に。そして、其等が生活に及ぼす結果は如何に。

一切の議論を進めるに先き立ち、讀者に取つて其れの理會を容易ならしめ、明晰ならしめるために、わたくしが豫め提示しなければならぬ二つの眞理がある。

一、總べての欲望は獨自には悉く同格にして絕對的である、

一、欲望の對象は、其等が對象たる限りに於て、悉く性靈的である、

等が其れである。さうすると、唯物主義及び唯物的たることと、精神主義及び精神的たることとを反立せしめ、前者を好ましからざるもの、非難すべきものとし、後者を好ましきもの、稱讚すべきものとすることに何等かの根柢があるならば、其れは、必らず、こゝにわたくしが提示した二つの眞理の範疇の內に於てなされねばならぬことは明かである。

此等の二つの眞理に依つてわたくしは如何なることを語らうと志すか。尠しく其れの意義を說明して見よう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

總べての欲望は其等の一つ一つに生活の持續に一つの効用があるためにはたらかされるのであるから、獨自には、卽ち、衝動としては、それぞれ其れの權利に於て絕對的であり、其れの價値に於て同格であらねばならぬ。然し、此等の欲望が有限の資力しか有たぬ人間の生活の機關となるには、是非とも容認と互讓との精神に基づいて、適當の場合に、適當のものが適當の風に、程度に、はたらき得るために、此等の欲望の間に一つの合議體が組織されねばならぬ。斯くして、さきに此等のものの有つて居た絕對的の權利は殘らず相對的とならねばならぬ。されば、さうなつた後に、苟くも絕對的の名稱の附せられ得るものは、獨り、其の合議體そのものに限られる。

然し、この合議體の組織されるのは、どこどこまでも、『適當の場合に、適當のものが適當の風に、程度に、はたらき得るため、』といふことを必須條件とした上のことであつて見れば、人間の生活は漸遷するが、急變しないといふことの假定の下に、この合議體に依つて作られる欲望の階統なるものは決して固定したものではなくして、時には小さく、時には大きく、絕えず改整され、且つ、其れを必要とする底のものであらねばならぬ。

若しこの考察が其の眞を得たものであるならば、如何なる欲望が如何ほどの價値を有つたものであるか、有たせられねばならぬかは、其れのはたらく場合が先づ指定されねば何んとも言へぬ事柄である。

こゝには心的經過、若しくは、意的活動がないならば、一切の物的存在は成り立ち得ない。物的存在の成立と構造とには既に心的經過、若しくは、意的活動がはたらいて居ることが假定されるといふやうな細い議論に立ち入ることは差し控へる。そして、一般の常識が疑ふべからざる事實として認めて居るやうに、主觀の意思から獨立して、其れを以て一概に左右することの出來ない形相や、色彩や、香味を有つた事物が客觀に現存するとする。さうしたところで、其等の孰づれもが欲望の對象となるには、其れが性靈的のものとなる瞬間に於て始めてさうなるのである。其れが性靈的

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のものとならざる限りは、人間に取つて何等の交渉も有ち得ないわけであるから、決して未來永劫に亘つて欲望の對象とはなり得ないとわたくしはいふのである。このわたくしの宣言は殆ど一つのツルイズムに過ぎないから、別に證明することを要しないやうに思はれるが、強いて要すとあらば一つ例を引いて其れを試みても宜しい。

こゝに大厦、美服、乃至、滋味に無上の價値を置き、其等の獲得に熱中する人があるとする。世人は彼れの行爲、若しくは、品性を唯物的と稱して其れを指彈する。そして、彼等がさうすることに對して彼等の與へる理由は至極單純なものではあるが、間違つたものである。彼等の考に隨へば、是等のものは悉く物質より成り立つて居る、つまり、物質的のものである。總べて物質的のものの欲求は人間の生活を墮落に導びくものであるといふのである。こゝに假定された人物の行爲の、若しくは、品性の稱讃さるべきものでない理由は全然他に存するのであつて、其れはこの論文に於ておつつけわたくしの說明しようと企てて居ることである。然し、其れに先き立つてわたくしが高調しなければならぬことは、此等のものが物質的たるに止まる間は、決して欲望の對象とはならない。欲望の對象となるのは此等のものが或る人に依つて受用される瞬間よりのこと、即ち、此等のものは、大厦にしても、美服にしても、乃至、滋味にしても、客觀に横はる物件としてではなくして、體驗として生ずる、若しくは、生じ得ると豫想される鑑賞となつてよりのことであると言ふことである。さうなると、其等は既に物質的ではなくして、性靈的であると言ふことである。此等のものが或る人々に依つて欲求されるのは、此等のものがその時、その時に彼等の欲求するものに相應する性質の視覺や、觸覺や、味覺を供給する材料となるからである。彼等の直接眞に欲求するところのものは此等の體驗そのものであつて、其等の材料ではない。たゞ、此等の材料を俟たずしては彼等の欲求する體驗は得られないし、又、經驗上、此等の材料を彼等の完全なる支配の下に置くならば、（彼等の性情と此等の材料の性質とは急變しないといふことを假定して）彼等の

欲求する體驗は何時でも彼れの意のまゝに得られるものであるといふ信仰と、豫想との上に此等のものを欲求するのである。

この眞理は繪畫、若しくは、音樂の性質に關して考察する時、一層明瞭になると思ふ。通例、物質的たる家屋や衣服に對照して、精神的であると解されて居る繪畫や音樂と雖も其等が一次的の意義に於て存在するのは、其等が鑑賞される瞬間だけに限つてのこと、即ち、性靈的のものとしてに限つてのことである。繪具と畫布とより成り立つ繪畫も、樂器と音譜とより成り立つ音樂も、たゞ創作家と鑑賞家とに對して類似の鑑賞を無期限に亙つて意のまゝに繰り返へすことの出來る機會の保障に過ぎないのであるから、一次的の意義に於ける存在の條件、若しくは、準備として二次的の意義に於て存在するに過ぎない。さうすると、繪畫や音樂の物的方便たる繪具と畫布、若しくは、樂器と音譜との如きは、遙かに下つて一次的の意義を有する存在よりの光被に依りて、纔かに三次的の意義の存在を得るものと言へよう。

既に、總べての欲望にして獨自には悉く其れの價値に於て絶對的であり、又、欲望の對象は一つとして性靈的でないもののない以上は、若し生活の覺悟として、一方に、非難さるべき唯物主義と、唯物的たることとがあり、他方に、賞讃さるべき精神主義と精神的とがあるとするならば、わたくし共は如何なるところに兩者の間の差別を立つべきであるか。わたくしは端的に次のやうに道破しようと思ふ。曰く、欲望の種類を問はず、何んにしても個人的に、社會的に、生活の調和を破るやうにはたらくものが唯物主義であり、唯物的であるのであつて、之れに反し、何んにしても個人的に、社會的に、生活の統一を助けるやうにはたらくものが精神主義であり、精神的であるのであると。

さうすると、理窟からしても、事實からしても、科學や、其れをヴエヒクルとして發生した産業が精神主義、若しくは、精神的たり得ることは、丁度、宗教や藝術が唯物主義、若しくは、唯物的たり得るのと同樣であると言はねばならぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二、欲望滿足の合理化の經過

未開人の生活と、文明人の生活との間にも、其れの材料たり、道具たる衝動の性質と數とに關しては普通に考へられて居る程の相違はない。文明人の生活に於ても、未開人の生活に於けると等しく、衝動は依然として(何とはなしにさういふ風にはたらくのが天賦であるといふ意味に於て、)不合理であり、その數も限られて居る。ただ、文明人の生活に於ては、未開人の生活に於けるよりも其等を滿たす樣式が遙かに有效になつて居るだけである。言ひ換へれば、一つの衝動と他の衝動とを調節することが遙かに妥當となり、其れの方便を工夫することが遙かに自由になつただけである。俗に、前者の經過は道德の進歩と呼ばれ、後者の經過は產業の發達と呼ばれて居る。然し、その實、此等は單一なる方向への進行の單一なる經過の二重の發現に過ぎない。內延的に一つの衝動と他の衝動とを調節することが妥當になることは、取りも直さず、外延的に其れの方便を工夫することが自由になることである。そして、この事實を逆に觀察しても、關係は全然同一である。今、わたくしは一つの例を擧げてこの道理を明らかにして見よう。

こゝに是れより彼れの有てる衝動をはたらかして彼れの生活を組織することを始める一人の孩兒があるとする。彼れの現在有てる衝動は、彼れの生活を持續する道具として彼れに賦與されたものであるといふ單純な事實からして、其等の間に一つの合議體が組織されて、互に協同し、責任を持ち合ふ可能性を有つては居る。が、現在に於ては、其等の間に、さういふものは組織されて居らぬ。其等は(比較的に言つて)互に矛盾し、衝突し合つて居るのである。然し、其等の衝動の孰づれでも、一度、外界に對つてはたらくや、否や、其れは必然にそこより或る種の結果を惹き起す。この結果は其れを惹起した衝動に反應して其れの意味を構成する。さうして、斯く構成された意味は、その衝動の內容とな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ると同時に、その衝動が他の衝動に對する、即ち、彼れの生活全體に對する關係となるが故に、其れの性質に隨つて、或の機會に於て、その衝動と他の衝動とを調節する方法の參考となると同時に、其れを滿たす方便の工夫のヒントとなるのである。

かういふわけであるから、倫理上の問題として、從來、動機と結果との關係が時々議論されたが、一旦事實の眞相が理會されさへすれば、其れは全然問題にはならぬほどのものである。經驗に依つて組織された生活を營む人間である限り、彼れが或る一つの行爲を計畫するならば、其の動機は、必然に彼れの過去の經驗より豫想される結果より制限を受けて居らなければならぬ。又、其れに就いて、其の結果が評價される時には、必然に其の動機の性質が計算の中に入れられたものでなければならない。されば、動機は善くても、其れが惡しき結果を齎らすことがあるとか、結果はよくあつても、其れは惡しき動機より作り出されることがあるとかいふやうな疑問は、尠なくとも倫理上の問題としては、志向と其れのはたらく舞臺とを内的、外的に區分し、兩者の交渉を、全然偶然のものとした抽象的の見解より生じた一つの問想に過ぎない。

この點よりすると、一時、わが國に於て有識者を以て自任する多くの無識者に依つて盲目的に持て囃されたラツセル氏の欲望論ほど不徹底であり、不合理であるものは苟くも哲學の名に依つてなされるものの中に於ては稀有に發見されるものであると思ふ。彼れは極力衝動を擧げ欲望を抑へた、否、斥けた。そして、彼れがさうする理由として、衝動は其れ自づからを目的とする活動であつて、欲望は其れ自づからの外に、一つの目的を立てておのれの活動を其れの方便として居る活動である。そこに、人間の生活の墮落が生じ始めると彼れは言ふのであつた。こゝに彼れは一心理學者として何等の素養もなく、何等の洞察も有たぬことを暴露して居るとわたくしは考へる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人間は如何なる場合に於ても衝動を以て彼れの活動を始める。其の衝動を滿たすことが彼れに取つて一切の目的である。然し、この世界に在つては、多くの場合に於て衝動はたゞ、衝動として端的に其れを滿たすことはむづかしく、其の目的を實現するには、必らず或る方便を俟たなければならないことになつて居る。目的たる衝動の其れが方便に關する觀念に依つて制限されたものが、即ち、欲望と呼ばれるものであるのである。さうすると、衝動にしても、欲望にしても、おのれの活動を目的として居ることに於ては何等の相違もない。たゞ、兩者の相違するところは、おのれを實現する樣式に關してだけである。衝動の方は（嚴密に考察すると其れも比較的のことに過ぎないが、）或る方便を藉りずしておのれを發動し、欲望の方は十分におのれを實現する方法として或る方便を工夫するだけのことである。（創造と所有とに關する彼れの理會にも多くの誤謬は含まれて居るが、こゝでは其れには言及しないことにして、）衝動と欲望との關係に關する彼れの理會の中にも多くの混同と混亂とが含まれて居る。例へば、藝術の活動、科學の活動を目して創造の衝動として居るなども其等の一つである。嘗て、ゲエテは當時十四五歲になる少年で何人にも就かず非常に繪畫を能くする一天才のあることを彼れに對つて語つた一人の婦人に答へて『若し彼れが凡物であるならばそのまゝ放任して置いてもよい、然し、若し彼れにして眞に一個の天才であるならば、何故に彼れをして堪能な師匠に就いて嚴格に繪畫の道を學ばしめないのか』と言つたのである。藝術や科學の活動は、その始め、衝動として起ることは事實である。然しながら、其れが眞に創造の名に價するだけの或るものを創造するためには、其等は必然におのれを適當に實現する方便を工夫しなければならぬ。言ひ換へれば、最初の衝動は欲望にまで醇化されねばならぬのである。

わたくし共人間は、畢竟するに、地の子である。どんなことをしても、わたくし共は地球を離れるわけには行かぬ。わたくし共の一生を通じてわたくし共に依つて演ぜられる悲劇も、喜劇も、はた、悲喜劇も地球を其れの舞臺として演

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぜられねばならぬ。わたくし共に何か計畫があるか。それならば、其れの遂行はそこに見出だされる材料に依つて協同されねばならぬ。わたくし共に何か理想があるか。それならば、其れの實現の樣式はそこに見出だされる條件に依つて制限されねばならぬ。つまり、目的たる衝動を敎養して、其れをして其れの實現に必要なる方便を工夫せしめるとは、それをして地球に見出だされる條件に順應しながら、そこに見出だされる材料を利用せしめることである。何故ならば、この一事を外にして、他に一つとして衝動を欲望と化す方法はないからである。

さうして見ると、欲望滿足の方法を合理化することは、衝動が外界に惹き起す結果に準じて外延的に產業にまで其等を組織すると同時に、內延的に道德にまで其等を組織することであらねばならぬ。

三、產業と科學

今日、わたくし共の有てる學問の標準よりすれば、二宮尊德の其れは勿論言ふに足らぬほどのものであるが、わたくしは猶ほ彼れを以て是れまでわが國が產出した少數の偉人の一人であるとするに躊躇せぬ者である。何故ならば、彼れの思索は極めて粗笨であり、彼れの思想には多くの矛盾が含まれて居るが、それに拘はらず、彼れは端的に、千古に亘つて、あらゆる人間に取つて處世の、隨つて、學問の要諦たるべきものを道破したからである。如何にも、其れは、彼れの手に於ては、一つの萠芽たるに止まつた。そして、彼れは其れを正しく養成するの道を知らなかつた。然し、其れは、その限りに於ては、徹底したものであつたことに異論はあり得ない。それは『人道を以て天理に打ち克つ』の一句に依つて最も遺憾なく言ひ表はされて居る。『人道を以て天理に打ち克つ』！　わたくしは、是れまで人間の爲して來たこと、是れより先き爲して行くことは、其れが產業の形に於てなさるるにしても、宗敎の形に於てなさるるにしても、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道德の形に於てなさるるにしても、政治の形に於てなさるるにしても、乃至、藝術や科學の形に於てなさるるにしても、たゞこの一句に含まれた精神を體現するに過ぎない。

人間は彼れの生を營むべくこの地球の上に發生したものである。随つて、其れの狀態は、在るがまゝでも、大體から見て、彼れの生活の持續の目的と全然乖反しては居らぬことだけは明らかである。然しながら、其れが、在るがまゝでは、彼れの生活の理想の實現に取つて出來るだけ都合のよいものとなつて居らぬことも明らかである。さういふものにするには、尙ほ改善の餘地が多く存し、そして、或る程度にまでは、其れを改善する能力が人間に賦與されて居るのである。自然のまゝに放任して置いても、この地球は急に人類を絕滅する狀態には立ち到らないであらう。然し、人間にして彼れの幸福の增進を標準として、其れの諸の要素のはたらき振りを考察しながら、其等の新らしき結合を圖れば、其れは現在よりも一層彼れの生活を利益するものとなる。『人道を以て天理に打ち克つ』の一大眞理たることの根柢はこゝにあるのである。

然し、この一大眞理の道破者たる二宮尊德はどこまで其れの意義と方法とに徹底して居たか。大して徹底して居なかつたのである。彼れとしては徹底することが出來なかつたのである。彼れの說いた分度とか、推讓とかいふことも人間の意思に依つて、彼れの欲望を支配することであるから、無論、これも人道を以て天理に打ち克つ方法であると言へないことはないが、此れは要するに消極的である。積極的の方法に關しては、わたくしは彼れの氣宇の餘りに褊小にして彼れの經綸の餘りに凡庸であつたことを、彼れのために氣の毒に思ふのである。産業に於て、『人道を以て天理に打ち克つ』といふ格言の意義を實踐しようとするならば、農業よりも工業が擇ばれなければならぬわけであるが、彼れの産業の觀念の中には農業しか含まれて居なかつた。又、たとひ産業を農業だけに限るとしても、『人道を以て天理に打ち克

つ』といふ格言の志向を運出すれば、土地を改良することも、農具を改造することも、新らしく肥料を發明することも、必然に其の中に含まれねばならぬのであるが、彼れは全然さういふものに著想し得なかつたのである。この結果として、彼れは『人道を以て天理に打ち克つ』といふことの最高典型を纔かに開墾の一事に見出して居たのである。これだけのところに落ち付いて了つては、わたくし共の期待を裏切ることの餘りに甚だしきにわたくし共は失望せざるを得ないものである。これだけのところに落ち付くくらゐならば、何も、初めから、『人道を以て天理に打ち克つ』なぞといふ格言を標榜する必要はなかつたではないか。

然し、この過失の責任は獨り二宮尊徳が負ふべきものであるとわたくしは考へない。道徳の改革家は同時に科學の創造者でなければならぬといふことが決定されない限りは、この過失に對して二宮尊徳は尠しの責任をも分つべきものでないかも知れない。二宮尊徳が生れ、そして、はたらいた時代に於て、わが國の產業には近世的の意味に於ける科學といふものは殆ど全然存在して居らなかつた。そして、彼れは道徳の教師であつて、科學の創造者でも、研究者でもなかつたから、彼れの說いた產業道徳の觀念の中には、自づから科學に關する思想は尠しも含まれて居らなかつたのである。事實はたゞ其れだけである。但し、どんな立派な理想の宣言でも、それが科學の方便に依つて具象化され、事實化されなければ、永久に空疎な宣言に止まらなければならぬといふ一つの證據にはなる。

產業は人間の生活の出現と時を同うして出現したものであつて、生活の機關としては最も舊きものである。其れと能く齡を爭ひ得るものは、多分、遊戲と祭祀ぐらゐのものであらう。然しながら、不思議に其れの發達は、或る程度に達するや否や、早く中止して了つて、宗教や政治や道徳がそれぞれ多少の變遷を閲して來たに反して、獨り產業だけは數千年に亘つて其れの舊態を墨守して來た。それでは、人間が產業の改良にそんなに無頓着であつたのは、彼等の日常生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

活を一層便利にし、豐富にすることに彼等は何等の欲求も有たなかつたのであるか。否、そんなことはない。彼等が感情の上だけでは、其れを熾烈に欲求して居つたことは、彼等の信仰に於て、即ち、彼等の想像に依つて描かれた未來生に於ける幸福生活なるものの條件からしても優に窺知される。彼等は一日と雖も彼等の日常生活を、特に、衣食住を一層善きものとする念慮を棄てたのではなかつた。たゞ、彼等は產業の方便を通してこの理想を實現する力を缺いて居ただけである。事實、さうであつたに相違ないといふことは、一旦彼等の一人が支配者たる、若しくは、征服者たる位置を占め、當時に於て優れた權力と富力とを自分の掌中に收めて來ると、今日のわたくし共の趣味からすると、極めて幼稚な、そして、途方もない驕奢な生活を營んだ一事からしても解る。

この事實からすると、大して人間の欲望を中心として科學と產業との關係を十分に考察したことのない人々のいから、『科學の進步は產業の發達を齎らした』といふやうな意見をわたくし共の常に聞くところであるが、產業といふことを近世的の意味に取り、そして、科學と產業との關係を單に外的のものに解釋すれば、彼等に依つて無雜作に說かれるこの意見にも十分の根柢がある。彼等が想像するやうに、そこには勘しも生活改善の欲求がはたらいて居ない、純粹理論としての科學が近世に至つて突如として出現し、其れが產業の方法に應用された時に、後者の發達を促がすことになつたといふことは勿論、一つの神祕に過ぎない。が、生活改善の欲求は人間の心の中に永劫にはたらいて居るのであり、そして、其れの體現は產業であるが、產業は間接に先づ科學の形式にまで分化して、始めて生活改善の欲求は其れの當初の目的を實現することが出來るのであるといふならば、此れは事實の眞相を得たものである。この意味に於て、確かに科學の進步は產業の發達を齎らしたのである。

總べての科學や產業は欲求の醇化であり、體現であるといふ意味に於て「必要は發明の母である」といふ諺が久しく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行はれて來た。然し、實際の事實はさうではない、反つて『發明が必要の母である』と主張した一人の學者があつた。わたくし共は是等の二つのどちらの意見に左袒すべきであるか。どちらにも相當の眞理はある。然しながら、わたくしは矢張り前者を一次的の眞理とし、後者を二次的の眞理とせざるを得ない者である。火藥は支那に於て發見されたものであると言はれる。然し、そこには其れを利用する社會狀態が存在しなかつたがために、支那に於ては其れと其れの發見者の名とは全然世人より忘れられて了つた。其れが始めて戰爭に應用されて近世戰術の基を開いたのは歐羅巴であつた。この事由からして、嚴密な意味に於ては、始めて火藥の發見されたのは支那でなくして歐羅巴であると言はなはればならぬ。『必要は發明の母である』とはこの眞理を語るものである。然し、一度蒸氣機關の發明されるや否や、其れは恰も大旱に於て雲霓が望まれる勢を以て、倏ち歐羅巴の產業狀態を一新した。が、其れの發明は一個の天才たるワットに依つて爲されたのである。其れを應用した民衆一般に依つてなされたのではない。この事實は『發明は必要の母である』ことの眞理を語つて居るものである。

それならば、どうしたらば此等二種の見解を適當に改釋して調和することが出來るであらうか。『必要は發明の母である』と見るのは、發明を其れの發生より考察して居るのである。『發明は必要の母である』と見るのは、發明を其れの成果より評價して居るのである。總べての創造者は水蒸氣を民衆より受け取り、其れを雨と化して、再び、彼等に送り還すものであると言つたならば、此等の二種の見解を簡明に、正當に調和することが出來ると思ふ。

トオマス・ハックスレエは近世に於ける科學の一大家であつた。然し、多くの科學者と等しく、彼れは科學の志向を理會しなかつた一人である。科學の性質に關して彼れが如何に不徹底な意見を抱いて居たかといふことは、彼れのものした一つの論文に於て明瞭に現はれて居る。この論文に於て、始め、彼れは近年ロンドンに於て、火災の度數の尠なく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつたことと、流行病の慘害の減じたこととは、科學知識の普及された恩惠であると述べて居る。然し、彼れは進んで共れは偶然に生じた結果である、科學の本領は全然人間の欲望滿足の方法を改善するといふやうな卑陋な目的を達するためにあるのではなくして、純客觀的に存在する宇宙の莊嚴なる法則を發見するにあるのであると論じて居る。それならば、どうしてそんな努力が人間の心の中に生じて來るか。そして、其の努力に依つて發見された宇宙の法則が、偶然にもせよ、どうして人間の幸福の增進に役立つことになるかと彼れに尋ねるならば、彼れは、多分、共れに對して、この問者を納得させるだけの答辯は與へることは出來まいと想ふ。

ハックスレエのこの見解がたゞに科學者一般の科學に關する見解を代表するのみならず、哲學者の一部、例へば實在論者と稱する人々の科學に對する意見を代表して居るものである。然し、此れは科學といふものを、共れの構成の動機と、共れの發展の經過とより考察しないで、纔かに共れが一つの體系を成した後に於て、共れを研究する專門家の假定と共れの歸着した成果とよりのみ考察することより生ずる見解である、誤解である。

科學者が客觀の事物のはたらき振りを考察して、共れを或る法則の觀念の下に統一するに方つては、彼れが是れより創造しようとする法則は、既に事物そのものの中に伏在して、彼れはたゞ共れを實驗に依つて見出だすだけであると假定し、時々刻々に起る彼れの喜怒哀樂の感情をして勝手に共れを混淆せしめないだけの覺悟は必要である。然し、共れもたゞ比較的のことである。共の始め、人間として彼れの欲望滿足の方法を改善しようとする意思の發動より共れの研究に興味を有つて來た以上は、共れの觀察の方法と研究の方法とが徹上徹下人間的の見地に依つて支配されて居ることは言ふまでもない。人間的の見地を離れては、人間としては何が眞理であり、何が虛僞であるかさへも一切定め得られないではないか。さうであるのに、共れに氣付かないのは、人間に追はれた時、自分の首だけ砂の中に埋めて、それで、

人間から安全距離にまで逃れたと自欺する駝鳥の所爲と尠しも異なるところはない。

科學は常識の洗練されたものである。それだけ、常識よりも科學に一層多く人間的の要素が含まれて居るわけである。されば、産業が常識に頼るよりも科學に頼ることに依つて一層自由に其の材料を支配し、一層正確な結果が擧がるならば、其れは選擇、實驗、證明等の形に於て科學に織り籠まれた人間的の要素に負ふのである。

四、科學の謂ふところの非人格性

トオマス・カアライルが強固なる、否、頑冥なる科學の反對者であつたことは周知の事實である。彼れの意見に隨へば、もと、宇宙は潑溂たる生命に充ち、滿ちたものであるのに、科學者は勝手に其れを切り刻さいて一つの死物として了ふといふのであつた。世の中には、今日に於ても、尙、カアライルのこの意見を無反省に襲套し、把持して居る人々が尠なくない。そして、彼等は自分の叫んで居るところのものの意味をさへも十分に理解することなく、科學は人間を唯物主義に導びく、唯物的にすると叫んで居るのである。然し、この誤れる想像は彼等が生活の一つの機關として科學が如何なる位置を占めて居るか、如何なる役目を滿たして居るかを知ることの出來ないことより生じて居るのである。

大觀するに、總べて人間の活動は其れの起點に於て人格的であり、其れの中程に於て非人格的となり、其れの歸着點に於て再たび人格的となるのを、其等の通有性として居るやうに見える。この通有性は戰爭をするのでも、政治を行ふのでも、繪畫を描くのでも、等しく有つて居るものである。そして、人間の生活に分業の工夫が行はれて來てから、科學は總ての種の活動に對して一つの系統を作つてこの中程の樣式と役目とを準備することになつたのである。

わたくしは一つの例を引いて、わたくしがこゝで語つて居るものの意味を説明して見ようと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こゝに新らしく一つの住宅を建てる人があるとする。彼れは自分の趣味や便利を中心として自分の人格そのものの發動、若しくは、表現として其れの設計を考へるに相違ない。其れの位置、其れの背景、其れの輪廓、其れの間取り、其れの色彩より、其れの内に用ゐられる什器、几帳の末に至るまで彼れの興味の表現として其等を計畫するに相違ない。此等のものは彼れが是れより實現しようとする彼れの觀念として著想されるのである。つまり、此等のものは悉く人格的である。然し、彼れがいろ〳〵と考慮を旋らした結果、一旦もうこれで宜しと決斷した後は、彼れの注意は主として土地の測量、地形の整理、材料の蒐集、其等のものの總合等に移つて行かなければならぬ。この期間に於ては、彼れは彼れの人格とは全然沒交渉と考へられる物質たる石や、土や、木の測量や、計算に沒頭して、出來るだけ彼れの情操をして其等を動亂せしめず、混濁せしめないことが好結果を齎らす道であるのである。つまり、この期間に於ては、彼れの活動は非人格的とならなければならないのである。然し、最後に至つて、この住宅が落成したとする。さうすると、彼れはそれを當初の計畫に照らして、其れに依りて果してどれだけ當初の理想が運出されたか、どれだけ善く自分の趣味や便利が表現されたかを吟味せねばならぬ。つまり、その成績は彼れの人格に依つて批判され、再たび人格的となるのである、人格的とならねばならぬのである。

此れはほんの一つの例に過ぎないが、總べて人間の行爲は其れの起點より、其れの歸着點に至るまでには、必然に、此等の三つの段階を經過しなければならぬことになつて居る。そして、科學とは特に大規模を以て其等總べてに對して豫めこの中程の活動を觀念上の構成として準備して居るのである。

わたくしは一歩を進めて、こゝに一方に於て、人格的と呼び、他方に於て、非人格的と呼んだものの關係を一層精細に檢討して見ねばならぬ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さうして來ると、人格的のものが、主觀の感情と思索とを離れて成り立ち得ないと同樣に、非人格的のものも、亦、其等を離れて成り立ち得ないことを知り得るのである。一般には、質的存在が量的關係に組織し直された時に、人格的のものが非人格的のものに化せられたといふのである。わたくし共はわたくし共の經驗を統一する便宜のために、確かに絶えず質的の存在を量的の關係に組織し直して居る。然し、さうしたところで、わたくし共は決して全然主觀の要素を取り除いた純客觀といふものを捕捉して居るのではない。たゞ、思惟のはたらきを借りて、或る種の知覺的經驗を他の種の知覺的經驗に轉換して居るだけである。例へば、赤、青、黃といふやうな色の關係をわたくし共が一層取り扱ひ善いやうに、エーテルの運動の數の關係で言ひ表はしても、運動といふもの、數といふものがわたくし共の知覺を、離れて存在しないものであるならば、前者を後者に轉換しても、矢張り、主觀の經驗内に起つた事件を主觀の興味を以て、主觀の便宜のために、其れの内で改整して居るのに過ぎない。さうすると、人格的、非人格的と區別しても、この區別はたゞ相對的に取られて、始めて一つの意義を成すものである。わたくし共の行爲は必然に情的評價と知的計算とより成り立つて居るが、わたくし共にして知的評價に重きを置く場合には其れを人格的と呼び、知的計算に重きを置く時は其れを非人格的と呼ぶのである。

大體から言つて、人間が神話を以て彼れの生活を統一しようとする時代に於ては、自然の勢力は情的に評價された。隨つて、其等は人格的であつた。彼れが常識を以て彼れの生活を統一しようとした時代に於ては、自然の勢力は交錯して、同時に情的評價と知的計算とを受けた。隨つて、其等は紛糾して半ば人格的であり、半ば非人格的であつた。然し、彼れが科學を以て彼れの生活を統一することを學んで以來、自然の勢力は、尠なくとも其の統一の勢力が行はれる經過の或る時期に於て、一度は純乎として非人格的であることになつたのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（こゝには神話に關する考察は姑らく措き、）常識に依つて生活を統一するのと、科學に依つて其れを統一するのとの優劣を商較することにする。

自然の勢力のはたらきたる外界の現象なるものは、殆ど總べての場合に於て不可分の一體ではなくして、多くの成分より成り立つて居る一體である。そして、其等の成分の悉くがそこに變化を生ずる要因ではなくして、眞に要因となるものは其等の成分の中の或るものだけである。それで、變化を起すといふ見地からすれば、一つの現象を形造る成分は重要と不重要との二つに分たれねばならぬ。外形はどんなに異なつても、若し重要なる成分がそこに見出だされるならば、わたくし共は同じ結果を豫想することが出來る。之れに反して、外形はどんなに同じでも、若し重要なる成分にして缺けるならば、わたくし共は決して同じ結果を豫想してはならない。然るに、一つの現象を分析して其れを重要の成分と不重要なる成分との二つとすることは、獨り科學の能くするところのものであつて、常識はたゞ其れを一體として其れの經過に於ける前後の聯絡を記録するに過ぎない。こゝに、生活を統一する道具として、常識と科學との間に自由の範圍と正確の程度とに關して非常な相違が生じて來る。斯くして、常識は習慣に基づく知識たるに止まるが、科學は進んで推理を能くする知識となるのである。

科學は固より（さきに說明した意味に於て、）非人格的である。然し、其れは科學の誇りであつて、又、其れを工夫するに至つた人間の誇りでなければならぬ。何故ならば、一時に方つて其れが非人格たるのは、さうであることに依つて、人間の生活に一層人格的の價値を附け加へるためであるからである。

五、生活への科學の還元

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗てベエコンは『知識は其れ自づからの正しき用を知らぬ。其れを正しく用ゐるものは其れの外にあり、上にある智慧である。』と言つた。さうすると、知識は生活の改善には全然無關心であること、猶ほ柳下惠に依つては母を養ふに用ゐられ、盜跖に依つては錢を盜むに用ゐられた飴のやうなものであるか。わたくしはベエコンのこの意見に反對する。強いて智慧と知識とを引き離し、あのカントの有名な宣言を飜案して『知識を伴はない智慧は空虚であり、智慧を伴はない知識は盲目である』とするのは、智慧の性質を知らず、知識の作用を知らないところから生じた謬見であるとわたくしは斷言する。智慧は知識にまで分化して、始めて本來の目的を完成するのである。然し、こゝでは詳しく説明して居られない事情からして、久しい間智慧に止まつて居た。それが近世に到つて、好機會を得て知識にまで分化することが出來たのである。されば、わたくしから言はせれば、眞理は『智慧は其れ自づからの正しき用をなさぬ。其れを正しく用ゐるものは其れの自然の發展たる知識である。』であらねばならぬ。

俗耳には一つのパラドックスと聞えるかも知れぬこのわたくしの主張の意味をわたくしは説明するであらう。

性情と境遇とはわたくし共がわたくし共の行爲、若しくは、行爲の連續たるわたくし共の生活を或る興味から分析した時に現はれる二側面である。されば、衝動の斷片的たるの缺陷を救ふがために、其れを正當に醇化して欲望とすれば、一擧にして性情を整頓し、境遇を統一することが出來るのであるが、古代人は其れを偏頗に醇化し、若しくは、空化して單なる情操、若しくは、憧憬として了つた。此れが從來の意義に於ける智慧といふものである。この種の智慧はウパニシヤッドにも、論語にも、佛教の經典にも、基督教の經典にも澤山ある。是等の智慧は行爲、若しくは生活の一側面たる境遇の統一をそのまゝにして置いて、纔かに其れの一側面たる性情の整頓だけに沒頭した。この必然の結果として、性情そのものさへも十分に整頓されず、纔かに、想像上に於ける其れの麻醉に止まつて居たことに何等の不思議はな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。數千年に亘つて數多の諺や、格言や、訓誡が重疊して說かれて來た。然し、その間にどれだけ政治の改善が行はれたか、どれだけ産業制度の改造が企てられたか。民衆の大多數は依然として無智と、迷信と、貧困と、疾病と、罪惡との壓迫と强迫との下に奄々たる氣息を洩して居たのである。

この累世の積弊に痛憤し、猛然として起つたのが科學であつた。總じて學問の革新を志した科學の首唱者は、同時に道德の改新を志したヒユウマニズムの鼓吹者であつた。否、彼等は悉とく完全にヒユウマニストたらんがために科學者となつたのである。事實、さうであつたことはブルノオ、ベエコン、ホッブス、ロック、ジデロオ、コンドルセエの徒の意見を見ても解かる。彼等の期待は事實に依つて裏切られなかつた。科學が生活の一つの機關として組織され、出現して以來、比較的に僅かな年所しか經て居らない。それの兄たる宗敎や藝術に比して遙かに年若である。科學はまだその丁年にも達して居らぬ。其の早熟の才に依つて漸く其の仕事を始めたところである。今日のところではたゞ其れが一つの驚くべき未來を有つことを暗示して居るだけである。隨つて、まだ、かれこれと其れの功過を評定する時期に達して居らぬ。事實さうであるに拘はらず、今日までのところでも、科學は生活の機關として人間の工夫したものの中で最も成功したものであることを證明したのである。ウィリアム・レンはウエストミンスタア・アベエの設計者である。同寺院の內には一つの碑が立つて居て、其れには、『ウィリヤム・レンの功績を知らうとする者は、この四邊を見廻はせ』と刻まれてあるさうである。科學が組織され、出現して以來、人間の生活に於てどのくらゐ幸福が增して苦痛が減じたか。どのくらゐ正義が榮えて邪惡が衰へることになつたか。わたくしは、今、其れの功績を一々數へ上げることは出來ない。わたくしはたゞ眼あり、理會ある人々に對つて、『科學の功績を知らうとする者は、卿等の身邊を見廻はせ』と叫ばうと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いつの時代に於ても、悲觀論者と稱する輩はある。彼等は彼等の空想を尺度として、總べての事物を出來るだけ黑色に塗らうとして居るのである。彼等の意見に隨へば、いつの時代でも其れに先き立つ時代よりも、生活は困難になり、雇人は横着になり、小供は不柔順になつて行くのである。彼等の意見に隨へば、世はいつでも澆季に屬するものである。此等の輩は科學に對しても其れの功績を認めないで、其れの過失、若しくは、彼等が其れの過失と想像するものだけを見ようとする。そして、一層おかしなことには、彼等自身と雖も世間並に科學の所産を利用し、其れの恩澤に浴することを望んで居ることである。無論、人間の生活の機關として彼れに依りて、工夫され、操縱されて居るもので、其れの濫用や、誤用の尠しもないやうに保障されて居るもの、され得るものの一つでもありよう筈はない。宗教にしても、藝術にしても、非常に濫用され、誤用されて來たし、現にさうされて居る。獨り科學に關してさうされないといふことはあり得ない事である。然しながら、公平に考へて、宗教の濫用され、誤用されたのに比して、科學の濫用され、誤用されることは遙かに尠ないとしなければならぬ。

科學に對して世人の發する非難の最も大なるものは、それは欲望を滿たす方便の改良は圖るが、欲望そのものの整頓を圖らない。否、さういふことをするのには、其等は全然無力であるといふのにある。然し、科學は智慧がおのれを實現する方便を得て知識となつたもののヴェヒクルではないか。して見れば、欲望を滿たす方便の改造の中には、おのづから欲望そのものの整頓の志向は既に含まれて居らねばならぬ筈である。欲望そのものを整頓するといふ目的の具體化されたものが、即ち、其れを滿たす方便の改造なのである。この目的がまづはたらかないならば、其の方便の改造だけの出現する理由はないではないか。そして、其れが出現した後になると、倏ち、この目的が其の方便の用途の指揮を閑却して了ふといふことは考へ得られざることではないか。事實、總べての他の點に於ては全然同一である二人の個人があ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて、一方は衛生の知識を有ち、他方は其れを有たないとすれば、前者は後者よりも一層衛生の道を實行して居ることをわたくしは信ずる者である。總べての他の點に於ては全然同一である二人の個人があつて、一方は社會生活の知識を有ち、他方は其れを有たないとすれば、前者は後者よりも一層善良なる市民となつて居ることをわたくしは信ずる者である。

わたくしがかういふ風に述べて來ると、讀者の中には、科學が生活の害惡を幇助する反證として、戰爭の慘禍と資本主義の暴虐とを擧げる者があるかも知れない。そして、若し科學といふものが出現しなかつたならば、此等のものは今頃地上に行はれなかつたであらう、行はれるにしても、其等の弊害は現にあるところのものよりも遙かに小なるものであつたに相違あるまいと言ふかも知れない。如何にも此等は科學あるがために其れの損傷を大にし、其れの殘酷性を深くして居ることは爭はれない。然し、わたくしが讀者に問はなければならないことは、此等は科學の意思を運用して、其等が現に取つて居る狀態を取つたものであるか、或は、科學の意思に逆行してさうして居るのであるかといふことである。科學はヒユウマニズムの發動として、後來現在の大戰爭や資本主義の組織を形造る私欲や功名心を掃蕩することを目的として、この世に出現したのである。一方に於て科學と他方に於て戰爭及び資本主義とは、その精神に於て到底兩立し得るものではない。たゞ、今日までのところ、科學に依つて代表される意思と戰爭及び資本主義に依つて代表される意思との間に實力の相違があつたために、科學はおのれの意圖に反して其れの門出に於て、此等のものに惡用されただけである、恰も忠僕が惡主人に惡用されるやうに。戰爭や資本主義は科學の結果だけを利用して、科學より全心的の協贊を得て居ると空想し、そして得々として居る。然しながら、科學の精神は其等の氣付かない中に、現に地下道と包圍攻擊とに依つて、彼等の倒壞と滅亡とに從事して居るではないか。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

トルストイは當時に於けるロシアの農民の生活を理想のものとして、近世の藝術と科學とに反對したのであつた。彼れは謂つた、『人間はロシアの農民の有てる衣食住と基督教の信仰とさへあれば其れが最も幸福なる生活の條件を形造る。近世に發達した藝術や科學のやうなものは人間を墮落の淵に導くに過ぎない』と。一體トルストイの心の中には、彼れの著作たる『戰爭と平和』や、『アンナ・カレニナ』に於ても容易に窺はれる通り、貴族の生活と農民の生活とが對象され、傲奢な生活を送る貴族は腐敗の極に達し、粗野な生活を送る農民は純潔の模範であるとされて居た。それでは傲奢な生活を送る貴族が、どうして、さう腐敗したかと言ふと、其れは彼等が徒らに彼等の生活を飾らんがために、西歐文明を輸入したからであると彼れは解釋するのである。こゝに到つて、トルストイは純潔なる生活の保護のために、西歐文明の内容たる藝術と科學とを呪はざるを得ない。然し、わたくしは科學に關するトルストイの視界を狹隘とし、其れに關する彼れの理解を淺薄とする者である。

トルストイは如何なる標準に憑りて、ロシアの農民の生活が人間の幸福の黄金世界を實現して居るものと測定し得たか。彼れは如何なるヴィジョンに依りて彼等の生活に尠しでも科學の知識と科學の恩澤とを加へれば、彼等の幸福は倏ち破壞されると推定し得たのであるか。トルストイは彼れの經驗の及ぶ限り、彼等ロシアの農民が人類の中で最も幸福なる者の標本であつたといふのであるが、彼等の生活より、小兒の死亡率を減じ、迷信より來たる恐怖を除き、彼等をして同じ勞作で一層多くの收穫を得せしめることが、何故に彼等の幸福を破壞することになるかは、わたくしの一向に理會出來ない事柄である。トルストイは一個の詩人として科學に依つて墮落の淵に陷れられたと彼が想像した貴族の生活(實は自分の過去の生活の幻影)に對する反感を以て、其れに全然反對するものとして農民の生活を詩化し、其れを謳歌したのであるが、彼等農民自身としては、彼等の生活に特有な苦痛や、煩悶や、爭鬪や、罪惡のあることに事實である。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若し彼等にしてそんな生活の中に幸福を味つて居るならば、其れは無智より來たる幸福であるから、そんなものには、永く抑留され得る種の幸福ではない。彼等と雖もいつか彼等の自覺より生ずる幸福を求める日の來たるべきことは火を睹るより明らかなことである。

人間に取つて、永久に亙つて幸福なる、生活の條件は何か。其れは內延的にと等しく外延的に、おのれの欲望の調和を保ちながら生存することである。この外に一つでも彼れに取つて幸福なる生活の條件があり得るとは想像されない。內延的にとは、個人としておのれの欲望を調和することである。外延的にとは、協同生活の一員として、他人の欲望と交渉しておのれの欲望を調和することである。然し、不幸にして人間は歷史が示し、現在の社會が示すやうに、まだ外延的には無論のこと、內延的にも自分の欲望を十分に調和し得ないのである、調和し得る文化の程度に達して居らないのである。科學は此等二樣の調和を助成するために來たつたのであつて、其等を破壞するために來たつたのではない。何故ならば、科學の職分とするところは人間の生活改善の欲求を標準として、其れの理論の方面では、合理的に事物の性質を考察し、其れの實際の方面では、經濟的に其等の構成を改整するにあるからである。されば若し今日に於て個人的に、社會的に、欲望滿足の方便が公平に分配されず、有てる者には更に與へられ、有たざる者からは更に奪はれることがあるならば、其れは科學の過失ではなくして、科學に依りて濟はれねばならぬ人間それ自づからの過失である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國政並に市政に對して私の持つ不服の廉々

法學博士　堀江歸一

國政に對する吾人の態度

私は日本國民の一員として、年々國家の爲めに納税の義務に服して居るとし、其他の義務にして國法の認めて、課するものである以上は、之を履行するに躊躇しない決心を持つて、多年渝らない。固より私が是等の義務に服するや、國民たるの故を以つて、之れを爲すのであつて、一方に此種の義務を盡したからと云つて、他の一方に之に酬ひられるだけの利益を獲得することを期す可きものでなく、單に國民として國家の爲めに、負擔を荷ひ、斯くて國家の一般的繁榮を招くことを以つて、滿足す可きものであり、又斯る一般的繁榮を通じて、國民として偶然種々の利益に浴することに依つて、甘心しなければならないと信じて居る。即ち國家と國民との關係は前者に對して後者が一般的負擔に當る代りに、前者は後者に與へるに、一般的報償を以つてすることゝ爲るのである。斯の如く國家の國民に與へる利益は其性質に於て一般的報償に屬し、多く無形のものであり、又數量に於て、測り知る可からざるものであるとすると、國民として國政に向つて持つ感情は勢冷淡に流れる嫌なきを得ない。私は現に最近我國に於て國政に對して著しく冷淡と爲りつゝある國民の多くを見受ける。即ち是等は內閣は誰れが組織しようが、其內閣が如何なる政策を施さうが、殆ど風馬牛相關せざる態度であり、其れ等の事柄が新聞紙に報道された所で、之に對する感興は三面記事に對するものに比較して、遙に劣ると云ふことの如き、何としても國政に對する國民の交渉の餘に懸け隔つて來たことを示す材料としなければならぬ。斯の如きは要するに我國民が政治的に訓練されず、又政治家が國民に對して政治を公開して、彼等の理解を求めようとせず、普通選擧の國民的要求も常に政友會一派の爲めにする私黨に抑制されて、一般國民をして益々政治に遠ざからせ、政治と云ふものは富豪と私黨と結託して、行ふものであるかの感を國民に懐か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せ、加ふるに近年議會が開會の度毎に幾多の醜態亡狀を暴露することを以つて、重なる原因とするのである。

然しながら國民をして斯る勢の赴く所に任さしめたならば、一方に政治を否認する傾向を生ずると共に、他の一方に之に代つて危險なる思想の流布するに至ることを免かれない。私は今日の處では飽くまでも政治の形式に於て、議會主義の可なることを信ずるものであつて、議會が無爲であり、無能であり、又却つて有害であるとしても、直に之に絶望して、議會政治を否認する態度に出でず、寧ろ之を改善し、國政をして正しきに就かしめ、斯くて國政を通じて、吾人の國家から獲得する一般的報償を大ならしめることに勉めたいと考へる。此點から見て、私は何を以つて今日の國政に對して不滿足の嫌ありとするであらうか。觀察を經濟上の方面だけに限つて、之を論ずるが、今日の實際問題として、私の最も不滿足とする所は近代に於ける文明發達の齎した幾多の利益が廣く社會の全般に向つて、又此利益を生ぜしめることに努力した人々に向つて、公正に分配されず、一部少數者の獨占に歸する一事に外ならない。何故に斯る事實が生ずるかと云へば、其根本の原因は私有財產の制度が餘りに強く尊重され、人々の間に自由競爭が無制限に行はれると云ふ二ツの事實に存するのである。財產權の社會的に承認されるる所以に至つては、世人の間に種々の說、行はれるであらうが、從來多數の論者は之を以つて、第一物を一個人に獨占的に使用せしめる爲めに、始めて其効用を增進するを得ること、第二物の發生し、又存在するに就ては、多くは人の勤勞を基礎とするのであつて、隨つて勤勞を致した者に其結果を與へる制度を認めなければ、何人も進んで勤勞に勉めるように爲らないことの二點に歸したのである。十九世紀の大半を通じて、歐洲諸國に行はれた法制の如き、將た又明治年間を通じて、我國に行はれた法制の如き、何れも右の如き信條に基いて、發達したものであると認められる。

個人主義的經濟組織

所謂個人主義的經濟組織は右の信條に據る財產制度を重要なる支柱として、發達し來つたものであるが、假令今日に至つて、其結果を顧みると、吾人に如何なる感を與へるであらうか。如何にも人の勤勞は財產私有の制度——是れから胚胎した財產の交換、移轉、相續に關する自由の法制上に其れ〴〵承認されたことに依つて、大なる刺戟を受け、時には其刺戟の餘りに強きに過ぎはしないかと思はれる場合もあるが、其爲に天然富源は到る所、人工に依つて開發され、勤勞の能率は人の工風創意に依つ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、增進され、富の增殖著しきに至つたことは、爭ふ可からざる事實であるが、斯く增殖された富は如何なる狀態の下に分配されて居るであらうか。今日の經濟組織に於ては、社會の比較的少數者が天然物件や、生產交換の諸機關を所有したり、支配したりして居ることの結果、眞實生產者として、富の增殖に最も多く貢獻しつゝある階級に屬する者は斯る有產階級に隷屬し、其經濟上に於ける地位の薄弱である爲めに、富の公正なる分配を受けることを得ない。何を以つて富の公正なる分配とす可きかと云へば、人が富の生產に貢獻したと同一の程度に於て、分配を受けたことを以つて、目標としなければならぬ。然るに有產者と無產者と相對立して、經濟上に行はるゝ取引の條件を決定する場合には、前者は財產に依賴し、之を所有し、又運用することに依つて、利潤利子地代若しくは財產の自然的增加を收得するに反し、後者は單に自己の勤勞なり、勞力なりに依賴して、其報酬を收得するに過ぎない。斯る境遇に居る人の社會的地位の不安であり、又薄弱であるのは勿論であつて、其薄弱であることが更に其人の所得を維持し、又は財產を獲得する上に甚だしく不良の影響を及ぼさゞれば已まないのである。

自由競爭の利弊

更に自由競爭の利弊に就て考へるに從來自由競爭に絕對の利益を認めた論者は第一個人は自分の利益を知る點に於て、最も明敏であること、第二國家に於て何等の制限を加へなかつたならば、個人は必ず自己の利益を逐うて行動し、各自の利益を發揚するに勉めると、第三斯くて發揚された個人の利益は必ず社會全體の利益に調和するに至ることの三點を主張するのであつて、其間に自然淘汰の法則の行はれ、優勝劣敗の事實を生ずるが如き、論者の認めて以つて、必然の事相とする所であつた。然らば斯る自由競爭の下に、社會生活は如何なる狀態と爲つたであらうか。自由競爭の行はれる一の方便は即ち契約の自由であつて、苟も法律上の能力者の締結した契約であれば、其條項が公の秩序又は善良の風俗を害しないものである限り、法律は必ず之を保護して、履行の保障をするのであり、一方に個人は他人に向つて、自己の契約した事項の外に、何等の義務を負はない、自己の爲さんとする所は之を爲し爲さゞらんとする所は之を爲さないのである。斯くて十九世紀を通じて、多年間に亙り、文明諸國の法制は斯る風潮に左右されて、今日に至つた次第であるが、其經濟生活上に及ぼした結果は如何であるか。現行組織の下に於て、經濟上の方面に關して、幾多不公正なる事實の續出しつゝあることは、掩ふ可からざる所であつて、私は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

之を左の數點に概括するを得ると考へるものである。

第一物質的文明の發達に依つて、有形上に於ける諸般の便宜は著しく增進し、又是等の施設を利用する力と爲る富は大に增加したが、其富は廣く國民の間に分配されず、一部の所有階級が之を專私して居ること、

第二、勤働者や俸給衣食者の如き、如何に勞働に就かうとか、勤勞を供へようとか云ふ誠實なる意思を持つて居つても、其意思を充すに足るだけの職業が彼等の爲めに開かれず、彼等をして失業者として生活上に困憊するを得ざるに至らしめること、

第三、彼等が自己の希望する如く、或る職業に就いたとした所で、又彼等の爲す職業に依つて、社會に與へる効用は如何に大であるとした所で、其所得は今日の經濟組織に於ては、概して豐富なるを得ない、斯くて當面の生活を維持するに支障を生ぜしめるのは勿論、老後に於ける生活の安定、子女の教養すら、之を全うするを得ず、勢現代の貧民に次ぐに、次の時代に於ける貧民を以つてすること、

第四、斯る生活上の苦痛は自ら人々を驅つて、過勞に傾かしめ、內職を盛ならしめ、結局心身を破壞する程度に達しなければ、已まざらしめること、

第五、經濟社會に變動が起つて、爲めに事業主に損害を加へるやうな傾向を生ずると、事業者は或は從業者の一部分を解傭するとか、或は彼等に對して給與する俸給賃銀の類を削減するとか云ふやうな形で、經濟社會の變動から、事業の上に損害の及んだことに就て、何等の責任の負ふ可きもの丶ない階級に負擔を加へること、

第六、之を生產の方面から考へても、今日生產業に資本が放下されたり、又事業が經營されたりするのは、純然たる營利の目的に出るのであつて、何等社會公共の利益を目的としない、随つて營利の目的を達する爲めには、當業者自ら物資の生產を制限し、其間に匱乏價値の獲得を謀ること、

弊害は我國にも歷然たり

右の如き現行經濟組織に伴ふ弊害は以前に在つては、遠く西洋諸國に於てのみ行はれるものと考へられ、我國に於ては、之を對岸の火災視するの趣きであつたが今日に於ては決して斯る觀察の行はれることを許さない。經濟社會に變動の起る度毎に、從來の富豪資產家の如きは、其機に乘じて、資產增殖の計を爲し、益々其基礎を堅實にする一方には、經濟社會の變遷を捉へること、頗る巧妙であつて、爲めに徒手空拳から、鉅萬の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

富を積む者がある。固より斯る成金者流の內には、其後の經濟的反動に依つて、産を失ふ者があるとしても、尙ほ其一部分の者は難局を切り拔けて、資産家としての地位を築き、世襲的富豪と略ぼ異ならざる境遇に居らうとする。而して彼等が一旦斯る地位に上るや、或は自家の營業を株式會社の組織に變更して、家の所有に係る財産と事業に投下した財産とを區別し、假令ひ今後經濟社會の變動に依つて、當該事業に波瀾を招き、其極社會に多額の債務を負うた爲め、後者に屬する財産は責任を果す必要上、盡く拂出されるやうに爲つても、前者の財産は尙ほ安全なる地位を占め、斯くて富豪の家運を永久に存續せしめる。第二に彼等の行ふ方法は所謂家憲なるものゝ制定であつて、家憲の一個條に於ては、必ず或る金額を超へる財産の處分に就ては、當主の一存に依らしめず、之を親族會議の決議に依らしめることゝする。斯くて富豪財産家の當主なるものは、日常些細なる行狀に於ては自分勝手に振舞ふを得るとしても、事の稍や重大なるものに爲れば、必ず家憲に掣肘され、自分一個の裁量を以つてしては、之を如何ともするを得ない。此事たる、恰も一家の主人をして準禁治産者と同一の地位に陷らしめる次第であつて、主人に甚だしき侮辱を加へるものであるが、其代りに家の財産なり、事業なりは、當主の賢愚肖不肖に拘はらず、永久に存續し、當主一個の意思を以つてしては、何等其基礎を搖播せしめるに至らない。即ち富豪資産家の如きは、當主の人格を侮蔑し、又其自由を束縛してまでも、家名の存續家産の無事を謀らうとするものであつて、家憲の制定が一の流行と爲つて以來、富豪の家の些細なる經濟上の變動に依つて、沒落しないことゝ爲つたのも、亦敢て異とするに足らないであらう。若し夫れ斯る富豪が相當に家名を維持し、社會公共の爲めに、若干の寄附を爲し、時の政權を掌握する者と理解でもあつて、華族に叙せられるやうなことゝ爲つたならば、富豪に兼ねるに、華族を以つてして、家運の永久に繁昌するに至ることは、當然の數と爲る。

國民教育制度の眞意如何

斯の如く社會に起る或る變動の爲めに、微動だも受けず、益々有産者としての地位を鞏固にし、然も其地位を世襲的のものとする階級のある一方に、無産者としての世襲的地位に居らなければならぬ階級を生ずることは、現代經濟社會に於ける最も大なる病弊であると考へられる。我國に於ては國民教育制度が布かれて、五十年に相當する故を以つて、大正十一年十月某日を期して、全國に盛大なる記念祝典の擧行されたことは、吾人

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の記憶に新なる所であるが、之に對して世人は單に慶賀する外に、他念なかつたであらうか。私は此國民教育五十年記念に際して、緊切に感ずる二ツの所懐を持つことを禁ずる能はなかつたものである。第一國民教育制度の勵行と云ふことは、我國民に向つて、持つ可き知識の最小限度を決定したものに外ならない。換言すれば日本國民として生を今日の我國に享けた者は瘋癲白痴不具癈疾の者に非ざる限り、小學校の教育は必ず授けらけなければならぬ次第であつて、學齡兒童の保護者に向つて、兒童を就學せしめる義務を負はせ、一方に小學校の授業料は事情の許す限り、之を低廉にして、以つて國民教育普及の實を擧げることを期した。而して斯る低廉なる授業料では、小學校の經濟は到底之を維持するを得ないから、或は市町村費を以つて、或は國費を以つて維持する計を立て、或は保護者會なるものを組織して、學用品の費用を負擔せしめる手段に出でたことは、要するに國民の間に其財力の異同を問はず、總て知識の分布を公平にしよう、時に强制的手段を以つて、其分布を行はう、其代りに公共團體に於て教育に要する費用を負擔して、以つて其目的を貫徹するに資せしめようとする次第であつて、智育上又は知識分布上に於ける社會政策は五十年以前に於て、夙に我國に確立したものと斷言せざるを得ない。英國に於て或はシドニー、ウエッブであるとか、バーナード、ショーであるとか云ふやうな一派の人々は國民的最小限度の政策なるものを主張し、之を以つてフエビアン社會主義の綱領に充てゝ居る。其説を聽くに國家が工場法其他の法律を以つて、勞働者の勞働時間を限定するのは、國民に休憩の最小限定を保障する趣意に基き健康衛生に就て種々の施設を要するのは、國民的保健の最小限度を認めたものであり、更に國家が或る種類の事業に行はれる賃銀の決定に干渉し、賃銀をして國家の干渉に依つて決定された率以下に低落せしめないことを期するのは、國民所得の最小限度に對する維持に外ならない。斯の如くして國民の生活は國家の干渉に依つて、其維持され可き最低限度が定まり、此以下には決して低落しないことゝ爲り、文明の進歩と歩調を保ち得ると云ふ趣意に概括するを得るのである。

然らば從來國民教育の制度が我國に施行され、而して半ば强制的に、又半ば國家並に公共團體補助の下に勵行されたと云ふことは、知識分配の方面に於て、社會化政策の行はれたものと稱するに、憚らざる次第である。國民教育の普及並に其勵行に依つて、我國の文化を進める上に、効果を奏したことの少なからざるは勿論であつて、要するに今日の國民は國家の要求する所に據り、國家の要求した程度以上の知識を共有する國民とし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、社會に立つに至つたのである。我國が國民知識の分配に就て、夙に社會化政策を施したことは、頗る賢明なる處置であつたとされよう。而して其結果として小學程度以上の知識を持つ國民は續々社會に供給され、之を基礎として、益々其知識を增進するに至つたことは、爭ふ可からざる事實であつて、我國が開國當時の半開狀態から、世界五大國の一と爲つたり、又或る場合には佛蘭西伊太利を凌駕し、英米兩國と班を共にする三大强國の一に列したりすることの如き、一に其原因を國民教育の普及に歸さなければならぬ次第であつて、五十年記念式の盛に行はれたことの如き誠に意義ありとしなければならぬ。

社會的生活の完成

然しながら社會的生活を完成する見地から考へると、社會化政策は國民生活に於ける各般の方面に亘つて、普偏的に行はれることを要する道理であるのに、我國に於ては國民知識の分配に於て獨り社會化政策の行はれたこと、上述の如く頗る早いに拘はらず、他の方面に於て如何なる社會化政策の行はれたものを見る可きであらうか。近年に於てこそ或は工場法が實施されて、緩漫ながら勞働者の就業時間を制限するとか、幼少年工女工に對して、保健的施設を講ずるとか、鑛山勞働者に對して、特別の保護が加へられるとか、公共團體の管轄下に於て、職業紹介所が設立されたとか云ふようなことはあるが、社會化政策の行はれる範圍の狹くして、程度の薄いことに至つては、文明國に類を見ざる所であつて、如何に資本主義が旺盛であらうが、又此主義の下に、資本家が跋扈しようが、我國に於ては、勞資の關係に於て、雇傭の關係に於て、富の分配問題に於て、將た又物價の決定に於て、自由放任主義の全盛時代を現出する觀を呈して、已まなかつたのである。

斯る事情の下に於ては、經濟生活の表面に於て、大なる矛盾の生ずることを免かれざるに至るであらう。即ち吾人は國家の定むる教育制度の下に、國家の要求する所に應じて、或る標準に依つて定められた程度の小學教育を受け、爲めに授けられた知識なり、其後の修養に依つて開發された知識なりを利用して、世の中に立たうとする場合に臨んで、社會は果して其人をして知識を自由に運用するに適せしめる職業を供與するであらうか、將た又斯る職業に就いた場合に、依つて生ずる所得は其人の增進した知識に酬ゆるに足るであらうかどうか。知識分配の上に於ては、夙に社會化政策が行はれ、國民の有する知識の最小限は國民教育制度の下に劃定されたに拘はらず、經濟生活上に於ては、依然たる私有財産制度の無制限なる承認と自由競

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爭の極端なる適用とを以つてしたならば、人は相當の知識を有しながら、競爭に制せられて、充分の報酬を得ることが保證されず、又生來財産を有しない者は其無産者であると云ふことに、束縛されて、知識に適した社會上の地位を占めるに困難を感ぜざるを得ないであらう。近來社會的不安と云ふことは、常に多くの人々に依つて、唱へられるが、其由つて來る所は果して何れに在るであらうか。私は人が自分の知識才能に適した地位を得ることが出來ず、現在就いて居る地位に滿足せず、何か社會上の變動に應じて、地位を轉換しようとし、常に社會の變動を望んで居るが如きは、社會的不安を釀成するに至らしめる有力なる原因と認めざるを得ない。我國が明治初年に於て早くも國民知識の分配上に、社會化政策を實行しながら、他の方面に於ては全然同一趣意の政策の行はれることを閑却し、知識ある人に知識に相當する待遇を認めず、極端に云へば、時に陋巷に窮死せしめるが如き、狀況を放擲したことは、社會の發達を畸形的のものたらしめ、又殊更に社會的不安を大ならしめた所以とせざるを得ない。

實際問題に徵す

然も近年に至つても、我國が斯る畸形的政策を施して、顧みざるの弊害は依然として其趨きを更めない。現に之を最近吾人の眼前に現はれつゝある問題に就て、觀察しても、事の一斑は明瞭と爲るであらう。兩三年來我國に於て、商工業界に吹き荒みつゝある不景氣風は甚だ猛烈なるものであつて、如何なる當業者も之に堪へて、平然たるを得ない、不景氣の加はるに隨つて、當業者は頻に之に對抗する爲めに、營業費の節約を企て、其之を節約する有力なる方便として、從業者の馘首を行ふことを憚らなかつた。由來從業者は其勞働者であると、俸給衣食者であるとを問はず、自家の勤勞なり、勞働なりに依賴し、之に對する報酬を以つて、衣食の計を立てるのであるから、生活の安定を謀るには、仕事の繼續を期しなければならず、仕事の繼續の豫期され難き場合には、解職後若干の期間に亘つて、就職當時に於けると同樣の給與を受けるとか、解職の際には、之に先だつて、若干時日前に於ける豫告を受けるとか云ふような保障が付せられなければならぬ道理であつて、權利思想の發達した國に於ては、家庭に於ける下婢の雇傭にも此位の保障的條件の付せらるゝを常とする次第であるのに、我國に於ては俸給衣食者であらうが、勞働者であらうが、其從事する會社商店の都合とあれば、即時の解職も亦之を回避す可からざる譯であつて、馘首と云ふ言葉は誠に我國の事實に適中して居ることを認

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

められる。而して斯く從業者を馘首しなければならぬやうに爲つた營業上の困難に就ては、從業者には何等の責任はなく、寧ろ此困難を除却するを得なかつた經營者の無能不定の然らしめる所であるとしたならば、愈々以つて現行經濟組織の亂暴であり、無秩序であることは、論を俟たないであらう。

更に物價問題に就ても、同樣である。我國近年に於けるが如き物價の騰貴は異常の事であつて、平凡の手段を以つてしては、調節の効果を擧げるを得ない。隨つて私の如きは從來調節の手段を工風し、其内で政府が同業組合に干渉を加へ、組合の力を以つて生産を制限したり、賣價を引上げたりする處置を絶滅せしめる必要を絶叫して已まなかつた。詰り民間當業者が暴利獲得の方便として、物價を暴騰させ、消費者の費用と負擔とに於て、此目的を達する。斯の如きは個人の利益の爲に、社會公共の利益を犧牲に供することの甚だしき物であつて、國家としては公共の利益を擧げる爲めに、暴利獲得の手段と爲るものに對して、檢束を加へ、其刈除を期することを要する次第であるのに、斯る趣意に副うが如き施政は如何なる内閣の下に於ても、其行はれるを見ない。斯くて團結力ある商工業者は常に團結力なき消費者階級を壓迫すると云ふ不合理なる事相を生じて、已まないのである。勞働者は將來勞働組合の下に團結し、時に盛衰はあるとしても、益々團結を鞏固することに依つて、各自の利益を發揚するを得るかも知れないが、一般消費者が消費者としての團結に依つて、生産業者に對抗するに至るのは、何の日を以つて、之を期す可きであらうか、私の判断を下し難き所である。

資本主義的政治の弊

斯の如く經濟生活上に種々の弊害の顯著なる場合に、今日の政治は之に對して如何なる處置に出で丶居るであらうか。私を以つて之を見れば、今日の政治なるものには、甚だしく弱い所がある。其弱い所は如何なる關係から生ずるかと云へば、要するに今日の政治は資本主義に其根據を置く爲めに外ならない。立憲政治の下に於ては、政黨が政權を掌握し、國民の輿望を荷つて、議會に多數の同志を得た政黨が朝に立つて、政治の局面に當ることを以つて、自然の勢とするのであるが、斯くまでに政黨をして大なる勢力を擁せしめるに就ては、徒手空拳の能くする所でなく、必ず相當の資金を世間に向つて、撒布することを必要とし、而して此資金たる、專ら有産者階級の醵出に之を仰ぐものである以上は、政黨は自家の立場に顧みて、此有産者をして益々大ならしめるに足る政治を施してそすれ、有産者を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

壓迫するが如き政治は勉めて之を避けようとする。斯くて一國に於ける選擧權が擴張されて、選擧權の分布が公平に爲れば、必ず既成の政黨に相對して、社會黨とか、勞働黨とか云ふようなものが起り、從來の政治の下に、壓迫されることを免かれなかつた一部階級に保護を加へる爲めに、努力を致すことゝ爲るのである。歐洲諸國の如き、政治上から見れば、今や正に此狀態に居るものに外ならない。而して斯る狀態の下に於て、諸國に於て專ら行はれるのは、所謂社會政策なるものであつて、其項目は多岐多端に渉るが、要するに從來の經濟社會に存する病弊の或るものを除却する目的の下に種々の働きをする。社會政策が行はれゝば、如何なる結果を生ずるかと云へば、成る程現在の自由競爭制度の下に於ける機會の不平等、斯くて生ずる幸福の不平均を或る程度に於て、減ずることはあるであらう。然しながら一方に私有財產の制度なり、資本的生產なり、競爭的賃銀なりの存在すること、依然として舊の如くであつたならば、社會政策の如き、國政の誤まれる方針を改善するに就て、幾何の資するものがあるか、疑なきを得ない。我國に於ても近來官僚も政黨者流も頻に社會政策を唱へ、社會政策を行ふことが何か一廉の善政であるかの如き觀を生じ已まないが、彼等の社會政策を主張し、又之を實行しつゝある一面に於て、國民の生活は幾何の改善を告げたであらうか、國民の多數が常に生活に脅威を覺へて已まないことは、必ずしも今日に始まつた事實ではないが、近年に至つて、殊に其甚だしきを加へつゝあることは、何人と雖も之を了知する所であらう。固より事の斯の如く爲るに就ては、彼の原敬、高橋是清の兩氏を其れ〴〵首腦とした政友會內閣があつて、金權者階級に勢力を張る爲めに、殊更に金權政治を濫行したことの與つて力あるは、論を俟たないが、更に事の根源を尋ねれば、我國に於て經濟組織の根柢を築くに當り、餘りに私有財產制度に偏倚し、同時に自由競爭の利益に眩惑したことを以つて、主要の原因としなければならぬ。

國有並に公有主義を提唱す

事情右に如くでありとすれば、我國今日の經濟生活に於て、圓滿なる發達を期するには、私有財產制度を制限する目的を以つて、國有並に公有の政策を或る種類の事業殊に大規模の事業に適用し、一方に自由競爭を制限する目的を以つて、國民的最小限度の政策を實行することを急務なりとせざるを得ない。大正七年から八、九年に至る好景氣時代に當り、我國に於て國民生活の必要品又は有用品を製造し、販賣する會社が巨額の利

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

益を營業上に收めつゝ、一方に物資の價格を騰貴せしめ、所謂消費者の負擔に於て、資本家の利益を謀ることの頗る露骨であつた際に、世間には斯る私的營利に偏倚した會社の經營法に對して、大なる反感が起り、或は斯る會社の利益配當を制限せよとか、或は會社の供給する物資の價格を公定せよとか云ふような議論を生ずるに至つた。若しも當時或る人が其會社の株主であつたならば、利害關係は如何なるものであらうか。消費者として物資の價格の騰貴することに依つて、損失は蒙るが、其代りに配當金の增加に依つて、右の損失を償い得る次第であつて、株主でさへあれば、物價騰貴の害を受けないのである。然しながら六千萬の同胞をして盡く紡績會社なり、砂糖會社なりの株主たらしめ、又は農產物を產出する土地の所有者たらしめることは、事實に於て不可能であるとしなければならぬ。隨つて上述の趣意を基礎として、私は會社と消費者との利害の背馳した場合には、之に處する道は事業其ものを國有とする、即ち國民の總てをして事業に於ける利害關係者たらしめるのが最捷徑であると云ふことを信ぜざるを得なかつた。即ち國家が營利業者に代り、營利の考を持たず、社會公共の爲めにする考を以つて、事業の經營に當ることは、斯る營利業者の暴利獲得を制するを得せしめる所以であるとしなければならぬ。唯從來私有財產制度の下に、私人が自ら事業を經營し、其經營に伴つて生ずる利益の一部分を利潤として、自家の掌中に收めることは、私人に對する刺戟と爲り、利潤を大ならしめる爲めに、營業費を節約することに勉め、結局消費者に對して、低廉なる價格を以つて、物資を供給する一方に、當業者をして高い利潤を得せしめるに至ると云ふ理論を提げ來つて、以つて自由競爭の效果を誇張する論者もあるが、自由競爭が斯くまでに徹底的效果を現出するものであるかどうか。當業者が是れまで爲し來つた以上に營業費を節約するのは、競爭に刺戟される場合に於ても、甚だ難しとする所であるから、或は互に競爭に從ひつゝある際、事の半途に於て飜然態度を一變し、當業者の間に遂に聯合を設け、斯くて競爭に依つて律されるよりも、遙に高い程度に於て、價格を律するに至ることとなしとしない。殊に我國の如き同業組合法の如き法律あつて、同業者の聯合を奬勵する場合には、當業者が或は生產高を減少するとか、或は操業を短縮するとか、或は價格若しくは料金を協定し、以つて自由競爭の働きを或る點に於て遮斷し去らうとするが如きは、最も行はれ易き所に屬するのである。果して然らば自由競爭にさへ、事業を任せて置いたならば、必ず生產費の縮小を招いで、價格の低落を見ると云ふのは、大なる間違であると共に、國有主義の場合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、其主義の適用される事業の擔任者が誠實なる意思を以つて、社會公共の利益の爲めに、之に當り、競爭に伴ふ失費を避けると共に、統一に基く利益を擧げることに勉めたならば、國有主義の適用必ずしも價格の高貴を惹起すものと斷ずるを得ない。私有財産制度に基く營業者の暴利獲得を絶滅せしめる効果に至つては、何ものと雖も、之を否定するを許されないのである。

國有主義の二方面

單に國有主義と云へば、必ずしも今日に始まつたことでなく、又敢て我國に於て稀らしいことでもない。現に鐵道郵便電信電話の如き運輸通信事業は永く我國に於て國有と爲つて居り、又近年煙草鹽樟腦の諸事業に行はれる專賣法の如きものも、亦國有主義の適用に外ならないやに思はれる。然しながら吾人は決して國有主義の趣意を到達したものとして、是等を認めるを得ない。私の考へる所を以つてすれば、國有主義には其應用上に於て、三ツの理想を持たなければならぬ。之を列擧すれば、

第一、社會的基礎を以つて、事業の効用を廣く社會全體に分配すること、

第二、國有主義の下に廣く社會に棲息する人々に適當の勤勞を課し、以つて世間に閑散階級なきに至らしめること、

第三、國有と爲つた事業に對しては、之に從事する勞働者の代表者並に其事業の産出する物資を消費する者の代表者をして事業の經營に參加せしめること、

の三點であつて、斯る條件の備はつた國有主義は其名は Nationalization であつても、其實は即ち Socialization であると云へる。從來我國に於て行はれた國有主義の如きは盡く右の三條件を缺いたものであつて、如何なる事業も財政上に收入を得る見地で經營される爲めに、代價料金は正常利潤を標準として、定まつたものよりも遙に高く、其高いだけ事業の効用の社會に普及される勢を抑制し、國有主義の行はれる際、政府に事業經營の權利なり、財産なりを賣却した者は其代金として國債を受取り其利子に依賴して生活する爲めに、自ら是等の輩をして一個の閑散階級に屬する民たらしめざれば已まないし、更に國有事業の管理は全然官僚の掌握する所であつて、民間に於ては何等の交渉を持たないのである。斯の如き形態の國有主義を以つてしては、到底社會全體の利益に副ふものと考へられないのである。

國有主義と民主的管理との二ツを根本の要件として、經濟組織を革新することは、卽ち產業をして國民的利害に伴はしめ、當業者の暴利收得を絕ち、勞働條件の改善に資する所以と爲るのである。然しながら國有主義の下に於て、國家の各種產業に及ぼす力には自ら限りがあるのであつて、其完璧を期するには、勢市政の力を藉りなければならぬ。我國に於ては國政が資本主義の尊重に偏倚して居るが如くに、市政も亦同一の主義に支配されて、渝らないのであつて、斯くて國政の爲めに、國民生活上に生じつゝある缺陷は更に市政の爲めに、其上塗りをされて居る趣きの頗る著しきものがある。東京の市政が其輦轂の下に在るに拘はらず、頗る不振の狀態に居ることは、常に世人に指摘される所であるが、其不振と云ふのは、抑も何れの邊に存するのであらうか。私は必ずしも市政當局者の人物であるとか、市會議員の經歷であるとか云ふ事を云々して、市政に非難を加へようとするものではない。私の平生考へる所を以つてすれば、市政なるものは、若しも國政に誤まりある場合には、市政の及ぶ限りを盡して、其誤まりを匡正す可きものであり、國政が正しき道に就いて居るとすれば、市政の最善を致して、國政を助長し、國政と市政との間に、唇齒輔車の關係を保たしめなければならぬと信ずる。我國の市政は今日國政に對して、斯る關係を持つて居ると見る可きであらうかどうか。國政に於て國有主義の適用されなければならぬことは、前論の如くであるが、本來事業の內には、一國を以つて、其經營される地域の單位とせず、一の都市を以つて、其單位とするものがあり、今日に於ては、斯る事業は其數に於て敢て少なしとしない。市街鐵道、電燈、瓦斯、市場、給水の如きは、何れも市民の生活を完成する爲めに、都市自ら公共的觀念を以つて、經營す可き事業であつて、苟も其經營上に營利の方針の行はれることを許されざるものである。斯る市民の日常生活に密接の關係を有する諸種の事業は所謂公共的效用—Public Utilities—を社會に頒つことを本質とするものであつて、料金を低廉にして、廣く市民をして其效用に浴せしめてこそ、事業の本質を發揮するものと見られる。固より是等の事業は其經營を私法人に託する場合に於ても、公共團體の特許を受けなければ、着手するを得ない性質のものであり、而して公共團體は特許を與へる場合に、當業者に向つて、種々の條件を付し、斯くて事業の經營をして市民一般の利益に一致せしめるを得るやに考へられるようであるが、公共團體の理事者が間斷なく私人の經營する營利事業を監督し、又督勵して、常に社會公共の利益に伴はしめたり、又時勢の變遷と共に、一々之に適するように、特許條件を變更して、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

誤まらざるが如きは、至難の業とせざるを得ない。

東京市の實例

現に東京市に於ける瓦斯事業に就て見ても、如何であるか。先年瓦斯料金に引上げの行はれる際、一方に東京瓦斯會社の利益配當率を九分に制限し、將來同會社の利益金増加して、九分以上に配當率を増加する場合には、瓦斯料金にも亦引下げを行はなければならぬことゝし、料金の高低と利益金の増減との間に、一種のスライヂキング、スケールを設けたことは、頗る賢明の處置であるが如くに思はれたが、今日に爲つて考へると、其結果は如何であらうか、瓦斯會社は一方に配當率を九分に制限されて居るから、他の一方には從來の料金を維持しようとする、配當率が九分に制限せられて居つては、瓦斯會社は增資に依つて、資本金を吸收し、斯くて事業の擴張を謀らうとしても、資本家の應募を得ること困難である爲めに、自ら增資を見合せ、毎年冬季に爲れば、瓦斯供給量の不充分である結果として、市民をして生活上に幾多の不便を感ぜしめされば已まない。隨つて今日に至つて見ると、瓦斯會社の配當率制限の如きは、之を撤廢し、會社をして相當の利益金を株主に配當せしめると共に、增資に依つて、充分に事業を擴張せしむる方が却つて市民全體に利益に適合する所以ではなからうかと云ふ說の唱へられるように爲つたのも、敢て異とするに足らぬ。然しながら私を以つて之を考へるに、瓦斯とか電氣とか云ふような燃料として、燈火として、將た又動力として、市民の生活に缺く可からざる物資の供給に營利業者が介在して、若干の利益を貪る、其之を貪る方便として、料金を實費以上に維持し、以つて物資の供給を制限するが如きは、事の本質に誤まつて居るのであつて、宜しく公營主義の下に、實費に依る供給を期しなければならぬ。而して瓦斯事業に於て石炭を必要とし、電氣事業に於て水力を必要とする場合に、國有に屬する炭坑なり、或は同じく國有に屬する水力事業なりから、低廉なる價格を以つて、公共團體に向つて、石炭なり、水力電氣なりを供給する方法に出でたならば、國家と公共團體と相協力して、市民の生活發展に資するを得るに至る次第である。

物價問題と地方團體

從來我國に於て國政と市政との間に、如何なる點まで聯絡の密接なるものを存したであらうか。物價問題の如き國家の問題であると共に、都市の問題であることは、疑を容れない。東京市の市街鐵道の如く、均一料金制の下に、殆ど其極度と思はれ

る邊まで料金が引下げられ、然も東西南北の一端から他の一端に至る長距離の輸送を掌つて居る場合には、如何に國家に於て物價引下げを急要とするとしても、料金其ものを引下げて國家の政策に順應することは、困難であるかも知れない。然も割引乘車券の如きに至つては、尙ほ之を引下げて、特殊階級の生活に便利を與へること位は之を期し得られる譯であるのに、國政と市政との間には、斯る聯絡を存しない。公設市場の如きは、公共團體の大に活動を試むべき領域に屬する仕事であつて、殊に市營電車の如きを利用して、市場に物資を運搬する者に便を與へるが如き、當然行はれ可き所であるに拘はらず、我國に於ては、公共團體自ら進んで是等の方面に施設するの跡を認めるを得ない。加藤内閣が過般發表した物價調節施設十九個條の一項として「主要都市に於ける電車に夜間貨物運送の設備を爲さしめること」とあつたが、其後如何に取扱はれて居るであらうか。私有電車會社に對しては兎に角、公共團體の經營に係る電車事業に對して、斯る義務を負はしめるのは、國家として當然爲し得べき所であるのに、今日に至るまで音沙汰の無いに至つては、國政と市政との間に於ける聯絡の缺乏も亦甚だしとせざるを得ないではないか。

若し夫れ東京市に於ける電燈斯瓦事業に至つては、如何に其料金引下げが市民の生活費を節約するに至らしめるか、動力に要する費用を減縮することに依つて、物價の低落を刺戟するかゝ明瞭であつても、其私法人の企業に屬する以上は、國家なり、公共團體なりの力を以つて、積極的に料金引下を要求するを得ない。斯くて我國民は國民生活に於て、生活必要品の供給が資本家に壟斷されて、營利獲得の犧牲に供へられるが如く、市民生活に於ても、亦電燈に、瓦斯に、營利業者の爲に、負擔を強いられる境遇に居るのである。從來我國の市政は常に不振の狀態に沈淪しつゝあつたばかりでなく、市政の内部に醜怪なる事實の潛んで居つたことは、之を掩ふを得なかつた。斯る市政の狀況を以つてして、市有市營事業を擴張したならば、事業の實績を擧げるに至らざる間に、早くも市政當事者をして腐敗に腐敗を重ねしめる材料を供へるに至るに過ぎないと云ふ議論が行はれて、常に市營事業を擴張する妨碍と爲つたのである。然し之を實際に徵すれば、瓦斯事業の如き、其私設會社に屬するに拘はらず、最近發露された通り、大規模なる腐敗事件を現出するに至る原因と爲つた事實もあり、一方に市有に屬する電車事業に於ては、時に些細の不正事件ありとしても、又時に市民の間に設備不足の點に就て、非難はあるとしても、其れ程に規模の大なる不正事件を見るに至らないし、又相當の便益を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

市民に與へて居る。然らば市營事業は市政當局者が一點の微瑕なきまでに、廓清され、廉正された曉でなければ、之を託するを得ないと云ふが如きは、甚だ窮屈なる議論であるとしなければならず、寧ろ市營當局者に市營事業を託して、彼等の自尊心を大にし、一方に彼等の治績の如何に依つて、現實の生活の上に蒙る可き影響の大であることを親しく市民に體驗させて、以て市民の市政に對する監督を力強きものたらしめることを以つて、得策であると考へざるを得ない。

殊に私が市營事業の盛に行はれるやうになつた場合に、望を屬する所は、市營事業の下に使役される勞働者の勞働條件が公明正大なるものと爲り、一般事業界に對して、勞働條件の進む可き標準を示す一事に外ならない。英國に於ては、多年公正賃銀條項 —Fair Wages Clause— と云ふことが認められて居る。即ち倫敦其他全國有數の大都會に於て、勞働者を使役する場合に、契約を締結する一方の當事者である市役所が公共團體である面目を尊重し、世間一般に行はれる所よりも、優良なる條件を勞働者に許す次第であつて、是れが世間の大勢を指導するに、大なる勢力を持つことゝ爲るのである。我國市政の當局者にして勞働問題に對して、斯る理解を持つ人のあるかどうかは、私の知らない所であるが、市の公營事業と勞働問題との關係は正に斯の如く爲らなければならないのである。

市政當局者の心掛け

我國政に大なる間違の存することは、吾人の日常感ずる所であるが、市政亦同樣の感なきを得ない。固より市政は其行はれる地方に依り、又理事者の人物手腕に依つて、自ら狀況の異なるものがあつて、一概に之を論斷するを得ないが、東京市だけに就て之を見ても、市理事者の力に依つて、市民生活に幾何の改善を告げられたものがありとす可きであらうか。上下水道、點燈、動力、交通、衞生、教育等は市民生活上に必要缺く可からざる設備であり、住居、娛樂の如きも、市政の下に屬する項目と爲り、又更に進んで社會的見地に於て、市民の職業なり、生活なりの安定を謀ることも、市の事業とす可きであらう。東京市が市長を選叙するや、常に大臣級の人物を以つて、其職に充てようとする。大都會の面目を保つ上から考へ、又外國貴賓を迎接する點から見て、此般の用意は無用でないかも知れないが、然し斯くして高祿を以つて聘された大臣級の人物が今日まで市民生活を安定し、之を愉快にし、之を便利にする上に於て、果して幾何の貢獻を爲したであらうか。彼等の多くは或る機會に來つて、他の機會に去るだけであつて、其去るや、跡に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

功績の記す可きものを認めないのである。或は市長の内には調査に沒頭し、之に藉口して、實際の施設を遷延する者もある。調査の輕卒に付す可からざるは論を俟たないが、根本の方針さへ確定して居れば、些細なる事柄の如き、之を不問に付する位の勇氣あつてこそ、始めて大なる事業も其緒に就かしめるを得るのである。微を正し、細を穿つは「サイヤンス」の妙とする所であるが、一方に實際の生きた問題を解決する場合には、實驗に依つて、始めて事の當否を知り、其當れるときに進み、其誤まれるときに之を正す方針に出でることが必要であつて、斯の如くにして、事物の進捗を告げるを得るのであり、是れが「サイヤンス」に對する「アート」の面白味とする所である。科學者が机に對して、一事一物學理の命ずる所に據つて、計畫を立てたとした所で、之を實際に適用するに當つて、社會に存在する事物其ものゝ動くに於ては、當初の計畫に幾多の狂ひを生ずるのは、已むを得ざる所に屬する。調査に沒頭するが如きは、畢竟技術者の事であつて、其結果を利用して、事に處する者の頭腦には、實際の變動に應じ、幾樣にも之に備へるの用意がなければならず、此用意は科學者の分析や、解剖や、圖表で出來るものではなく、寧ろ人の天賦に有する知識から直覺的に判斷する所に據るものゝ多きを認めざるを得ない。

若し夫れ市政に於て爲す可き事業は山積して居り、夏季酷暑の候には、水道の給水量が減じたり、冬季寒冷の節には、瓦斯の供給量が思はしくなかつたり、電燈には屢々停電が起り、電車は朝夕の通勤者を運搬し切れず、自働車の通行の烈しきに隨つて、道路の破壞されること甚だしきに至るが如き、市政上の故障の續出しつゝある際に、市政の首腦者が御祭騷ぎの音頭取りに忙はしかつたり、或は政變が起れば、後繼内閣の組織者に祭り上げられたり、市政に幾何の執着を持つて居るか、測り知るを得ないことの如き、市民をして安んぜしめる所以ではない。

從來東京市が仕事をする場合に、最も苦痛とする所は財源調達難の一事に外ならなかつた。然も此大都會に於て、市理事者に確乎たる決心があれば、土地增價稅なり、開地稅なり、其他の手段なりで、財源を得ることは、敢て困難であるとしない。國政の資本主義に制されつゝある場合に、市政の獨り資本主義の圏外に逸出することは、或る事情に於て難しとするものあるかも知れないが、畢竟斯の如き情實に拘泥した話であつて私の取らざる所である。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勞農露國の外交

法學博士　米田實

一

レニン系の過激派政府が、露西亞の政權を掌握し之を支配して以來玆に五ケ年の星霜を經過した。其間屢過激派政府の崩壞顚覆說を傳へられたのであるが、今日に於ては、其基礎弱まる所か、却つて强きを加へつゝあるが如き姿を示して居る。最初一九一七年末過激主義の國家が成立した當時は、其支配する範圍も、唯中央露西亞に止まつて居た。南露西亞即ちウクライナはレニンの政府を認めず、西伯利には反過激派政府が樹立された。然るに其後西伯利の反過激派政府は、一九一九年末コルチヤク政府の倒壞で蹉跌し、又た實際上過激派政府の傀儡たる極東政府が組織され、而して今や更らに日本の撤兵と共に、赤手は浦潮まで延んだのである。ウクライナ亦一九二〇年の條約によりて、多少半獨立的姿を存して居るものゝ、事實上に於ては赤化して居る、一方過激派に反抗したデニキン軍は一九一九年末遂に倒滅し、其後を承けたウランゲル軍も一九二〇年十一月破れて、最早其後なきに立至つた、北方に反過激の旗を擧げたユーデニツチの軍亦脆くも破れ、今や歐羅巴露西亞の全部に亙りて、過激派の統治下に服して了つた。民族主義から形成された波蘭、芬蘭、ラトヴィヤ等の獨立國を除いては、舊帝制時代に於ける露西亞帝國と、今日過激派治下の露西亞とは、敢て其選を異にせざるの實情となつた。

然らば如何にして斯の如く過激派の政權が、繼續するのであるか。或人は一面から觀察して曰く、是れ露西亞人民が常に受動的で、不法不都合なる政府の存在に對しても、破壞顚覆の策を講ぜず、何等の努力を拂はない爲めであると。又或者は曰く是れ反過激派例へば社會革命黨と云ひ、或は立憲民主黨と云ふが如き系統其他種々なる團體が、小異を固執して大同に就かぬ爲めであると。併し吾々が根本的に之を觀る時に於ては、今日の處、現過激派政府は他の露人の政治團と比較して、政治的

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、露西亞を支配する資格を、多分に備へて居る爲めではなからうかと思ふ。

熟々露西亞の現狀を觀ずるに、過激派政府の政治に就ての缺陷は決して尠くない、而して國民の多數を占むる農民は此缺陷に不滿を感じながらも、大土地の國有並びに自己等が其上に行つた占領によつて、實質上に於ては之が分配を受けた姿となつたことに對し、非常に悅んでゐる。從來强慾非道なる地主の支配に惱まされたる彼等としては、假令土地は國有となるも、實際に於ては自己の所有地なるかの如く自から經營し行かるゝことに滿足を表するも、不思議では無い。又過激派が所謂「プロレタリアットの專制」であり、虐政暴政をやるとしても此虐政も飜つて革命以前即ち帝制時代の露西亞も、所謂平等自由の政治で無く、形を變へたる虐政が公行されて居たのであるから、國民はそれ程に其缺陷を感じないのも事實である、併し過激派の權力維持は何と云つても、其國家支配の能力を有する點である。一九一七年革命以前のロマノフ帝制も或程度迄は、露國の國民性に適ふ國家支配の能力を有した爲め繼續したのであるが、革命と共に現はれたケレンスキー執政は、此能力がなかつたものである。然るに此度の過激派政府は此意味の國家支配の能力を有する、換言すれば、今日の如き露民の狀態では、ケレンスキー流で無い所の鐵腕政治は止むを得ぬ所である。併しそれのみが、過激派政府繼續の要素では無い、之よりも一層の重大なる其要素はアタプタビリテーである、卽ちその時局の變動、形勢の變化に對して、適應的に政策を變更し行く、廣い自由を示して居ることである、言ひ換ふれば彼等は主義によつて立つ政府なるに拘らず、實際政治に於ては驚くべき千變萬化を敢てして更に憚からぬことである。

勿論今日勞農政府の中心にも、共産主義を急速に徹底的に行はんとする分子がないことはない、併し此分子は現在其勢力劣位にあることを認めなければならぬ。强硬派の大將は例のツロツキーである、彼は軍力を以て西歐小國を亂し其間に世界革命を實現するやうな亂暴な計畫さへ持つて居る男である。本來ツロツキーは曾て穩和派であつた時期があり、メンセヴイキに接近してゐたこともあつて、レニンの過激派に加はること能はず、或時期には少數ながらも自から所謂ツロツキー派なるものを組織して居たこともあり、レニンも度々論爭した、ところが其後レニンに降服し過激派に參加すると、極めて强硬なる急進派となつた、彼は一九二〇年波蘭との戰爭に於て一時聲名を失墜したが、それ以外に於ては着々成功を收め、名聲を恢復し例のデニキン軍を破り、コルチヤクを倒滅し、ユーデニツチ軍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を潰走せしめて、勢威極めて高きものがある。彼は固より強硬派にして一九二〇年以後即ち今日に於ても、非妥協派であるが、併し露西亞過激派の潮流は遺憾ながらツロツキーに有利ではなかつた。今日過激派政府に於て穏和派妥協派が著しく勢力を得て居ることは、去る六月レニンが中風にて病臥せる時に、其代理者として選ばれた三人の顔觸に見るも自から判明する、それは誰かと云へば第一にスターリン、第二にカメネツフ、第三にリコツフである。然るに此三人の中カメネツフは明治十六年ジヨルジヤに生れた猶太人で、非常なる穏和派であり且妥協派である。歐洲大戰に對してはレニン程の戰爭反對論者ではなかつたが、過激派執政の後は所謂近親政策並に近親手段を頻りに唱道して居る、ツロツキーの妹を妻と爲し、同人との關係も親善であるが、政治上の政策に就ては反對である。リコツフと云ふは明治十四年サラトフに於て生れた農民出身で、之も大の妥協派である、曾てメンセヴイキとボルシエヴイキとの間に於ける、紛議を緩和し相和睦せしめんとした歴史を有つて居る人物である、次にスターリンは土耳其系の出にして、非常な手腕家であり活動家である、之はカメネツフ程に穏和派ではないが、大體レニン直系にしてツロツキーの如く極端派ではない。一度此三人がレニンの病中に三頭として、政治を總覽することに決定せるに觀ても、ツロツキー、若くはジノウイエフが出無かつたことを見ても、過激派政府の妥協的政策の大勢が現はれるのである。之と同時に地盤を外務省に有し外交關係に携はつて居る現外務卿チチエリン、同次官クラヘン、並に能く獨逸方面に活動するラデツク等に於ては、尚一層の妥協派である、又海外貿易大臣として知られて居るクラシンに至つては勿論さうである、彼等は皆海外資本家と妥協せんとする態度を持し、決して共産主義の徹底的實現派ではないのである。以上は勞農露國政治家の態度を云つたのであるが、此點に就て最も重要視すべきものは、レニンそれ自身が大の妥協派であることである。レニンは齢五十二歳、所謂過激派の中心人物で、革命以前に於ても亦革命後に於ても、過激派の俊傑連は大部分レニンの門下後輩ならざるはない。此のレニンは其執政以來極端なる妥協性を發揮し、獨逸の露西亞研究者などは、レニンの融通極まりなき遣口に驚駭措く能はざる有樣である。之に就ては勞農過激派系内にも、異論を挾むものあるが、レニンの潔白なる性格、超凡なる機略、對者の心理を捉へ得る妙腕、何とも知れぬ卓拔なる魔力などに動かされて、多數は遂に其政策を援助する外はない姿になつてゐる。レニンの病中紛紛たる議論を唱へたものも多かつたが、昨年夏一度レニンが十分ではないが健康を恢復し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或程度に於て政務を執ることゝなるや、妥協政策は一層鞏固なる地盤の上に立つの狀態を示して居る。然らばレニン及勞農露國の閣員等が何故に妥協政策に出たかと云へば、之に依るにあらざれば露西亞國家を維持することが困難であり、同時に之に據るにあらざれば所謂共產黨政府の權政を維持することが出來ないからである。彼等は固より共產主義者にして、從つて其實現の一日も速かならんことを希望するのは無論であるが、併し之を實現する方法として、何事よりも第一に彼等の政府を維持することが最も緊切なる問題である。此妥協策に依るにあらざれば、露西亞國民の生活を支持することが出來ない、支持すること不可能なれば差當りて、政府自身の繼續困難である。是等の關係上今日では、彼等の希望する共產主義の完全なる實現は、之を將來に讓り今や漸進主義に依るべく方針を立直して來た、斯くして此妥協政策は露西亞の內政々策にも現はるれば、又外政々策の上にも現はれつゝあるのである。

勞農政府の妥協政策が如何に內政に於て現はれつゝあるかと云へば、最初過激派政府は、一切の財產一切の生產業を、國有とする方針であつたのを、一九二一年以後に至り之を一變した、是れ最も重要なる現象の一と認めねばならぬ。始め過激派政府は農民の農作物に對し、農民自身が需要するだけの分量を、民農の家に殘して其殘餘は、總て之を國家の手に提供せしめ、その代りに國家は農民の要する工業品其他の日用品を、農民に供給するの制度を設けた。然るに社會道德心の發達足らぬ露西亞農民は此制度の下に於て漸次耕作の區域を縮少したのである、其理由の一は、國內工業不振で、農民如何に農作物を政府に提供するとも、政府は之に代るべき工業品を供給し能はざるの狀態に陷つた爲めであり、又一は農民は多く働いてもその所得が自己の手に落ちぬので怠惰となつた爲めである。玆に於て過激派政府は一九二一年三月新法律を設け、穀物の徵收を廢し、農民には唯農作物に對して課税することゝし、徵收に代るに課税を以てすることゝした。卽ち農民は自己の所要するだけの穀物を自から保持し、更に税として若干の農作物を政府に納入し、其殘餘は之を自由に市場に於て販賣し、若くは他の物品と交換することを許されたのである。レニンは此政策の實行に關して、一九二一年秋論文並に演說によつて辯解して居る、それによると『農民は此徵收制度により、十分に必要なる食糧品を政府に供給し得、之によつて政府は軍隊及工場其他に十分なる食糧を、供給することが出來ると政府側は信じて居た。然るに該徵收法の下に於て右の豫期は遺憾なく齟齬し、國內の生產力は自然減退を來した。是れ共產主義の一敗北と見做さゞるを得な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い、茲に於て政府は新經濟策を執るべき必要を生じた、即ち徴收に代るに課税を以てする事とした、之は資本主義に對する後退である、併しながら我國情を觀ると、急速に共產主義を十分に實現することは至難である、今日の場合漸進的に行るより外はない』と言明して居るのである。而して此方針變更の結果、農業生產は大に增加するの好成績を示すに至つた、經濟上にも多少改善の實を擧げ得たのであつたが、併しそれだけ共產主義の實現が後退したことは疑ひが無い。

次に工業上にも亦變化を生じた。政府は從來の農作物徴收制度の下に於ては、農民から多數の農作物を收めしめ、從つて軍隊を含む約三千五六百萬の生產工場勞働者其他に對し、政府自から食糧の供給が出來たのであつた、然るに新課税制度の下に於ては、税としては約六百萬人に供給する食糧しか、徴收し能はざる狀態となつた。茲に於て政府は勢ひ國家經營の工業を縮少せざるを得ざる破目に陷つた、詰り勞働者に食物を供給することが不可能となつた結果として、其工業も亦同程度に縮少しなければならなくなつた。之が爲め國家は大工業のみを維持し、小工業は國家の手より解放し、個人團體の經營に移さゞるを得ないことゝなり、今日に於ては最早小工業は大體國家の手を離れて了つたのである。

次ぎに吾人は亦た小工業が個人團體に移されたる結果として一九二一年露西亞に造られたトラスト組織を顧みなければならぬ。一九二一年夏露西亞に於ける多數の工業家の間には、新らしい組織が生るゝに至つた、それは即ち政府經營の工業縮少の結果として、小工業が政府の手より解放されたるを機とし、同種の工業に屬する若干の工場が、一の團結即ちトラストを組織したことである、トラストは無論國家に屬するといふ、形式ではあるが、若し政府が原料品を供給し能はざる時は、該トラストは自己の生產品を公開市場に於て賣却し、同時に自から必要なる原料品及機械油類其他の必需品を、自由勝手に且獨立的に購買し得ることになつたのである。斯くして是等のトラストは恰も今日商人が自己の利益を基礎として商賣をするやうにトラスト自身の利益を考慮することゝなつて居る事實を忘れてはならない。

斯の如き形勢にある露西亞に於て、今日國有となれるものは何かと云へば、一、土地の國有　二、鐵道交通機關の國有　三、大工業の國有　四、海外貿易の國有てふ、四項の事實に限られざるを得ないことゝなつた、然るに土地國有は如何と觀るに、露西亞に於ては革命後、土地を國有としたものゝ、現に其土地を占領し居るものに對して使用權を與ふることゝした、名

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

義こそ異れ土地の使用者自身に於ては、自己の所有地と大差はない、何となればその所有者即ち自分に貸して居るものが個人で無くて國家であるからである、次ぎに交通機關の國有は我日本にも其例があり、世界文明國中亦之を行へるもの多數ある、大工業の國有は共産主義の局部的成功であるが、是等重要生産機關の國有も小範圍に於て行へる國が少くない、斯くの如く大工業のみ政府經營の手にありて、各種の小工業、小商賣が個人の經營に讓られたのは、是れ豈共産主義から見て明かに後歸りであるまい乎。

併し予は敢て露國の共産主義やら内政を論評せんとするのでは無い、それが本文の目的でない、本文で以上の點を述べた所以は、内政に於ける露國の妥協策及び妥協態度は、その對外國、對外人、對外政策に反映せねば止まぬからである、又た斯くの如き内政策の採用こそは、レニン政府の對外妥協策の實行を比較的に正當にし、無矛盾無接撞着にし、又た容易にしたものたるからである、思ふに共産主義の終局的實現の爲めにも、自己の政府の存立繼續を第一の必要としなければならぬとして居る彼等としては、露西亞國民の生活の爲めに、外國の援助を得協力を俟たねばならない今日に於ては、自己本來の主義を對外的にも固持するといふことの代りに、多少之を犧牲としても外國人の同情と援助を得、而して自から露西亞の利益の爲めに、諸強國の力を利用する政策に出でなければならなくなつたのは、止むを得ぬことかも知れぬ。蓋し今日露西亞に於て缺乏して居るものは何かと言ふに、第一に各種の工業品である、此缺乏は戰後は勿論世界戰爭中に於ける、産業荒廢の結果でもあるが、其上に急激な共産主義の採用に伴ふ、産業制度の變更により、益共甚しきを加へたものである。然るに斯くの如く露西亞の需要する各種機械工具を海外より輸入せんとすれば、之に對して代價を支拂はなければならぬ、代價を支拂ふの途は、何れの國に於ても同樣であるが、自己より外國に貨物を輸出することによつて支拂ふか、若くは現金を輸出することによつて支拂ふことである、然るに今や露西亞の産業は衰頽し、海外に輸出すべき貨物は殆どない。さればとて現金の輸出によつて支拂ふかといふに、露西亞は世界戰爭開始の當時は十六億圓の正金を有し、其後戰爭中二億圓餘の金産出があり、羅馬尼より預けられたる二億五千萬圓の正金があり、其他を合して約二十二三億圓の正金を所有して居た筈であるが、之も今や大部分は海外へ輸出された、或物はブレストリトウスク講和條約によりて支拂つたものもあれば、亦過激主義世界宣傳の爲めに、海外へ撒布した金も四五億圓はある、西伯利に投下した金額も尠からざるも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ので、其他種々な出費があり、最早五億圓位ゐしか殘つて居るまいと云はれて居る。此狀態に於ては現金輸出亦困難なりと云はざるを得ない。

玆に於て露西亞が執るべき最後の手段としては、何と云つても對外借款若くは露國内に於ける外人の起業に依る資本の流入に求むるより外はない、是れ單に貿易を增進し、海外の物貨を購買する爲めのみではない、露西亞國内に於ける産業發展の見地から、第一機械其他の設備を爲し、富源開發に努むべきであるが、産業發展に供すべき資金が露國にはない、又其事業を經營し若くは維持する金もない、況や擴張すべき資金などある筈はない、露西亞國内の事業が不振であると、自然勞農政府の財政的經濟的基礎の存立も危くなることは言ふ迄も無い所である。

是に於て乎過激派政府は今や共産主義の眞の實現を、將來の理想化した緩和策を内政上に執ると共に、此變更に依つて困難から容易と變りかけた對外的妥協策につき實現の機會を造り以て一は過激派政府自身を、一は露國民を今日の窮境より救はんと努力して居る、是れ實に今日の赤露外交の要諦である、彼等は、世界革命よりも世界赤化よりも差當り之を第一位に置いて居る、然らば彼等は之に就て如何なる方策を執らんとして居るかと云ふと、第一に外國人に對しては(勞農露國の制度として財産の私有權は許すことは出來ぬが)内國に於て或程度に認めつゝある所の、所謂使用權制度によりて外國人に對し、露西亞に於ける財産使用權を得せしめ、之によつて事業を爲さしめんとして居る、又た彼等は外國人に對して所謂讓與(コンセッション)なるものを許し、營利主義の下に大事業を經營せしめんとして居る、尤も此讓與なるものも共産主義の立場として、無限且無期限に許すことは出來ないのであつて、或一定の年限を定め、其期限經過後は自然に露西亞政府の手に復歸せしむる案であり即ち之に依つて、將來或時期に於て共産主義を行ふ場合に支障とならぬとの形式を示し、以て天下に對し自己の體面を維持せんとする策を執つて居る。第二には負債問題に對する讓歩である、レニン政府は共建設後、共産主義に基きて一切の國債を沒收したので、英米佛並に日本の各聯合國より、露西亞に貸與せる金額約二百億圓の承認は彼等が最も困難とする所である、然れども露西亞は外資を要すること極めて急なるものあるが爲めに、此負債全部を承認すること困難だが、其一部を承認し以て外國の露西亞に對する態度を緩和し、之によつて外資輸入を企圖する態度を示して居る。而して彼等は此等の手段で列强を動かし以て、露西亞政府の公式承認をも列國より得、以て一は對内的にも對外

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的にも、過激派政府の權威を高め、新露國を打ち立てんとの策に出でゝ居るのである。

二

然らば露西亞の妥協政策は果して實現したか、其成否如何と言ふに、西歐羅巴諸國及び、其他大國との直接關係に於ては失敗し、蹉跌を見るの外はなかつた。此失敗を語るものは蓋しゼノア會議の結果であらう。勿論同會議以前レーニンの卓見なる、露西亞の孤立の不可能なるを觀破し、夙に各國との通商關係樹立に努力して居た、而して或程度の成功を收めない譯でもなかつた。今レニン政府の努力の一端を紹介すれば、第一に米國に對する運動を擧げなければならぬ、レニンは米國の金力を重視し、之によつて露西亞の經濟的復興を企てんとした、之は昨も今も依然として變りがない。先づレニンは過激派政府樹立の半年後恰も露都に滯在中であつた、米國赤十字社代表レーモン、ロビンを經て、米國人及び米國資本の協力によつて、露西亞の交通機關（鐵道其他）並に農業の恢復及び改善を圖らんと企てたのであつた。這は一九一八年七月一日ロビンが米國々務卿宛書翰、其他幾多の公私文書に明かなる所である。翌一九一九年にも露紙セベルナヤコミンナ等に記述せられた如く、レニン政府は表面上諸成資本家ハネヴイツク及び露國美術家ボリツフの名義によつて、有力なる數名の米國資本家と交渉を重ね、西伯利及び歐露北方の鐵道線路三千哩の敷設權及び、森林八百萬英町の讓與（コンセッション）を米人に許さんとしたことがあつた。一九二〇年に於ては當時盛んに消息を傳へられ、英國文豪ウエルズ等も其著述中に素破拔いた如く、米人ヴアンダーリツプに勘察加方面の、廣大なる租借權を許す約束を結んだ、之を以て露西亞の米資誘致及び米露通商協定に如何に熱心なるかを知るに足るのである。併し此方面は今以て米露兩國間の協定が今以て出來ぬので、米資の對露活動も實現し兼ねて唯た紐育のライド、ドラツグ會社及びハーウエスター會社が多少活動して居る位ゐである、而して一九二一年三月露西亞はウイルソンの民主黨政府の沒落、ハーディングの共和黨政府の成立に際し、米國政府に公文通牒を送り、通商開始を說いたが、國務卿ヒユーズは三月二十三日其回答に於て、露西亞の生産組織の健全なる基礎に立つまでは、通商の開始を肯ずることは出來ぬと、明したのであつた。一九二一年八月米國は露西亞に經濟狀態實査委員を派遣するの議を提出したが、是亦實現困難となり萬事失敗の歷史を繰返すに過ぎなかつた。唯比較的幾分かの成功を收めたりと認むるものは英露兩國間の關係であつた、英國は一九一九年十月歐

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露北方アルハンゲル方面に配備してあつた自國軍隊を撤退せしめ、玆に一九一九年十一月八日英國前首相ロイド・ヂョーヂは聲明した如く、反過激派援助を中止し、先づ捕虜交換の外交交渉を露西亞と開始するに至つた、而して捕虜交渉は一九二〇年二月英國委員オグラデーと露西亞代表リドヴィノフとの間に協定成立し、此協定と共に英露通商の端緒は開かれ、露西亞政府代表クラシン及びカメネツフ等は倫敦（ロンドン）に赴き、英露通商開始に就て屢〻會商を重ね、同年秋に及んで一度行惱み、捕虜交換の實行問題、宣傳問題等の爲めに、兩者の衝突を來すなど、容易に通商開始の實現を見るべくもなかつたが漸く一九二一年三月二十二日に至り、始めて英露通商協定が成立したのである、併し此協定とても、兩國の使節の地位を確保すること、或程度に於ける露西亞負債問題の決定及び露西亞側の宣傳中止等を定めたのに止まり、多少通商を進むる可能性を作りしに過ぎず、此協定によつて思ふやう英露の貿易を發展せしむるの程度には達しなかつた。殊に同年秋、露西亞の對波斯、對印度、對阿富汗の宣傳問題などの爲めに、英國外相カーゾンと露國外務大臣チチエリン間に爭論を惹起し、春に現はれたる良好なる形勢は、秋に於て一層良好となる可くも見へなかつた。併し此英露通商協約が間接に他國の上に幾分良好なる影響を及ぼしたことだけは明かである、即ち之に刺戟せられて一九二一年六月に於ける獨露通商協定の成立、同年九月に於ける諾露通商協定の成立、及び同年十二月に於ける伊露通商協定の成立を見、墺露との通商協定も結ばれたのであつた、次ぎに翌一九二〇年には露西亞と瑞典間に單獨的通商協定も結ばるゝに至り、多少づゝ實際的功績が示された、即ち露西亞側よりは主として英國に對して、材木獸皮其他若干の輸出行はれ、英國側よりは食料品は勿論露西亞が最も要求せる農具及機械類が送られた。今一九二一年に於ける貿易狀態は前年に比し激増し輸入二億五千萬圓輸出二千萬圓を數へて居る、併し之は一九二〇年、一九二一年を比較しての話しで、露西亞の希望せる外資及借款等に至つては、容易に實現しさうにもなかつたのである。

　併しながら露西亞は西歐諸國に對して盛宣傳を試み、就中露西亞の執れる前述の新經濟政策を紹介し、露西亞に於ける外國人の企業の可能安全を説き、大に歐洲人心を動かさんと努めたる結果、多少の反響があり、斯くしてゼノア會議の開催を導くに至つたのである、ゼノア會議の開催は、露西亞の對外關係開始に對する努力の反映でもあるが、一は西歐大國が世界の陸地の六分ノ一を占め、人口一億六千萬を有する露西亞の如き大國を除外して、戰後の經濟的復興、國際貿易の隆盛を期する能は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずと悟つたのにも依つたのである。就中痛切に之を感じたのは英國で次は伊太利であつた。玆に於て英伊兩國の主張により、一九二二年四月十日より約四十日間に亘り、伊太利ゼノアに露西亞を含める三十六ケ國の會議は開催されたのであつた。若し此會議にして成功したならば、英國及伊太利は最も苦める失業者問題の解決、海外貿易伸張に貢献すると共に、露西亞も自國の經濟的發展及び、現在の苦境脫却を見得たかも知れなかつたのである。然るに會議は不幸にして失敗に歸した、伊太利の如きは同會議の成功に熱心し、之が爲めに國內の電信電話改善費一千二百萬リラ、鐵道改善費に百五十萬リラ、宿所事務所設備費九百萬リラ合計二千二百萬リラの巨費さへも投じたが、之も會議不成功で酬ゐられなかつたのは氣毒の至りである。今ゼノア會議の結果を見ると、唯同會議は若干の國際經濟關係を緩和する決議を作りて其體面を繕つたこと、同會議の開催によりて露西亞と獨逸をして、一部的ではあるが初めて他國と均等なる地位を占めしめたこと、露獨の接近を早め協定成立を促進したこと、延いて英佛の爭を强め、且英國と伊太利の接近を來さしめたることなどであり、その成果は寧ろ英首相ロイド・ジョーヂ伊太利首相フアクタ等が、豫想もせざる點にあつたが、彼等も希望し亦露西亞も希望して止まなかつた諸點に至つては遂に不成功に終つた、卽ち同會議に於ては、露西亞が希望する歐洲諸大國の對露投資を誘致する基礎の確立を見ざるは固より、露西亞が希望して止まなかつた、赤露政府の承認問題も亦實現するに至らなかつた。何が故に失敗したかといへば、其第一は今日世界の最大富國であり眞に對露投資の能力を十分に具備し、或は少くとも歐羅巴諸國の對露投資を後援し得る、可能性を有せる米國が同會議に參加せざりしが爲め、露國の希望せる外資輸入は勿論對外借款が困難に陷つたことであつた。此事實は、佛白等の他の主張と相俟つて、少くとも露西亞自身に執つては同會議は何物をも與へらるゝ所なく、唯徒らに佛英白日其他の債權のみを承認しなければならぬことゝなり、彼等から見れば甚だ愚なる立場に立たねばならぬ破目に陷つた、人或は同會議に於ける露國が戰爭借金の責務を否認し、唯だ戰前の借金の元金のみの返還を約し、然かも其支拂延期を求めた(四月二十日の露國回答參照)態度を非とするものもあるが、米國の不參加で新らしい大借款が困難となり、小借款しか可能でなかつた事情を見ると、我等から評すれば不都合でも、共產主義を本として居る彼等の立場として、之以上の妥協案が出來無かつたのも、全く無理とは言へないのであつた。

次ぎの原因は露西亞が多少讓步せんとしても、西歐諸國の對

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露疑惑深く、少くとも同會議の成功に對する精神的準備が出來て居なかつたことである。西歐諸國は資本主義の國であり、露西亞は共產主義の國である、彼は所謂ブルジョアの國であり是はプロレタリア專制の國である、從つて立場思想社會組織其他の根抵の差が、相互間の疑惑不信用を作つたのも或點から見て亦已むを得さる次第である、殊に英伊こそ比較的露西亞に同情を示したが、佛白は第三者から觀ても多少無理に失せずやと思はるゝが如き態度を示した。例へば露西亞は同會議に於て、佛白が希望する露西亞共產制度採用以前に於ける、外人の所有財產の返還要求に對しては、是等に共產主義の立場から、絕對に所有權を與ふる譯にはいかず、使用權のみを附與せんとするの態度を執つた爲め、相互の意見が一致するに至らなかつた、是れ盖し共產國たる露西亞の對面としては亦已むを得なかつた所であらう。若し公式に所有權を許したならば、共產國たる露西亞の體面は丸潰れではあるまい乎。英國は多少此間の消息を認承したが、佛白兩國は無理解的態度を固執した、之には過去に於けるレニン政府の缺陷が自から禍因を爲した點もあつたに違ひ無い、それは兎も角も、斯の如き相互間の信用缺乏せる狀態に於て、協定の困難なるは無理もなき次第である。斯くして露西亞が希望する外資の輸入も望みなく、露西亞に於ける外人の企業も起らず、從つてレニン政府が希望する、現政府維持の政策即ち右外資借欵及外人企業による、利益の分配により、現勞農政府を潤し以て其難境を救はんとする政策は水泡に期し、又た彼が熱望する赤露承認問題も遂に、不成功に終つたのである、即ち同會議は聯合國の要求が破れたる如く、露西亞の求めんとせる所も亦失敗に期し、成功の機會を他日に讓らなければならぬことゝなり、唯此間に於て成立したのは露獨の協定のみであつた。

露獨兩國は一九二二年四月十四日即ちゼノア會議開始後直ちにラッパロに於て獨逸外相ラテナウと露西亞外相チチエリンとの間に協約を締結した。それは戰爭に基く一切の賠償義務若くは政府の行動による賠償の義務を相互的に否認し、戰爭中の捕擄收容費支拂の義務をも相互的に破棄し、以て兩國通商其他經濟的協同の障害物となるべきものを一掃し以て、獨逸人の對露發展策に便せしむることゝなつたのである。尤も之は從前から兩國間に企てられて居た、政策の繼續であつたに違ひない、先づ露獨間には一九二一年六月通商協定が成り、同年十二月露西亞使節は伯林に於て、首相ウイルトと會見協議し、一九二二年二月帝制時代の外相にして駐支公使たりしヒンツエが莫斯科に於てレニンと協議したる後を承け、該協約は成立したもので

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるから、決して突發的に起つたものではない。又た此協約以前に於ても獨逸は夙に、對露發展を企て、獨逸財界の大立物スチンネス及び鐵道界の名士ミュラー等は、露西亞より鐵道の讓與（コンセツシヨン）を獲得し、漢堡アメリカン汽船會社系は波羅海よりペトログラードに至る通航權の讓與を得、其他一昨年末成立せる露國の鑛物を、獨逸に齎らす目的の下に計畫されたる、露獨開發會社の如き、バクー石油採掘權の讓與を獨逸人に許された如き、其外獨人の對露發展の企圖は決して僅少ではなかつた、且つ近年獨逸人の資本は苛酷なる課税を避けて、海外に流るゝもの多數に上り、此の幾分かは露西亞內へ投資せられたるものもあり、又一九二二年中獨逸より露西亞に輸出されたる、機關車貨車等の數量も尠くないと傳へられて居る。斯の如き從從の關係によりて、獨露の協定は締結されたものであつて、決して突如的のものではない、然かも他方から見ると此協定の成立がゼノア會議に刺戟せられたることは確かであり、一面同會議の貢獻せる結果とも見られないこともない。併し遠き將來はいざ知らず今日の貧弱なる獨逸として果して窮乏せる露西亞を十分に救ふべき實力を有するや疑はしい、玆に於て露西亞が更に種々なる術策を廻らし、西歐諸大國との關係恢復に努力を惜まざるのも敢て不思議とするに足らないのである。

三

然らば西歐諸國との直接談判で失敗せる露西亞は、今や如何にして西歐各國を動かし、國際的地步を占めんとしつゝあるかといふに、彼は東方に於ける勢力發展を利用して以て、歐洲大國の反省を促し、露西亞が列强の班に復歸する機會を捉へんと、其作戰おさ〳〵怠りなき狀態である。本來露西亞は一九一八年のレニン革命後、東洋殊に亞細亞民族に對する宣傳によつて、共產主義を世界に流布し、世界革命の期を早めんとする作戰に出でゝ居た、而して此策は既に相應の成果を占めて居るのであるが、一方緊急なる外資の輸入及借欵等、外國の經濟的援助を受くることは、今日の經濟力なき露國民を救出する所以であり、現過激派露國政府の維持を圖る所以であると信ぜる彼等は、今や東方に於ける自己の勢力を利用し、共產主義宣傳其物よりも、寧ろ之によつて焦眉の急たる、露西亞の國際的地位の恢復並に經濟的救治策に資せんと試みて居る。而して第一に利用せんとしつゝあるは土耳其問題である、勞農政府は夙にスターリン（土耳其人の血を承けたものにて目下レニンの股肱たる人）エンベル・パシヤ（前土耳其陸相）。アラロフ（アンゴラ駐劄露國使節）等の力によつて土耳其との接近を策し、一九二〇年十

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一月、翌一九二一年三月及び其後に於て、遂に若干の協約及協定が露土兩國間に成立した。右の協定中にはダーダネルス、ボスフオラス海峽問題の決定は、土耳其露西亞其他黑海に沿へる諸國の協議によりて之を定むること、右海峽地帶に於ける土耳其の主權は飽くまで之を保持する事、土露兩國は互に他方の同意なくして、第三國と條約を締結するを得無いこと等を定めて居る、又た露西亞は一九二〇年以來希臘軍に反抗して居るムスタッフア・ケマル・パシヤ麾下のアンゴラ國民黨政府軍に對して、幾多の武器（之は佛國からデニキン軍に供給し、デ軍敗北後、南露に殘されたもの多い）及物資を供給し、多大の援助を與へた、其結果土耳其は一九二二年八九月、希臘軍を擊破し、スミルナを恢復したが、更に進んで今や外交的に歐洲土耳其のスレシアの回復、ボスフオラス、ダーダネルス兩海峽に於ける、土耳其の主權恢復等を列強に要求するに至つた、而して此戰勝の結果、土耳其をして勞農露國の恩義を感ぜしめ、或點から觀て露西亞の傀儡化する傾向を現はして居るのである。是等の點は最近數ケ月の間歐羅巴に於ける消息によりて既に判明せる所で、土耳其はダーダネルス、ボスフオラス兩海峽問題の處分に就ては、現在一九二〇年八月ゼーブル條約による、英佛伊日以下の國際海峽管理委員會に反對し、飽くまで同地帶に於ける土耳其の主權恢復を主張し、以て從來自己の制海權を利用し、海峽委員會を傀儡として、海峽地帶を支配せんとする英國の野心に、打擊を加ふると同時に、同海峽問題の解決には、必ず露西亞を參加せしめざるべからざることを强硬に主張した、露西亞自身も亦土耳其と相呼應し、赤露政府は「海峽處分問題に參加する權利を有す、我の同意なくしては海峽問題決定を爲す能はざるものなり」との主張を爲し、又た「海峽問題の決定は近東問題の全體と相結び離るべからず、又た露西亞は地理的にも歷史的にも、近東問題とは至大の關係を有す。從つて近東問題の全部に亘りて、露西亞を參加せしめざるべからず」と主張して居る。之は一九二二年九月十四日外務次官カラハンの公文、及同年九月三十日伯林に於ける露使節リトヴイノフの公言、同年十月中旬露國外相チチエリンの英伊兩國宛公文等に照らして世人に明かなる所である、而して其結果ローザンヌ會議に於ては、露西亞は少くともダーダネルス、ボスフオラス兩海峽問題の協議に參加せしめらるべく決定し、既に其使節は同地に赴いた、然もそれに滿足することなく、海峽問題のみならず一般問題に參加せんことを主張して止まない。蓋し露西亞政府の考によれば、此近東會議の參加は一は露國々內に於ける、國權尊重論者の信望を過激派政府に集むる妙策である、何となれば是等國權派は、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露西亞が久しく右ダーダネルス、ボスフォラス兩海峽及び君府方面問題に關係せる歷史に執着心を有し、之に對する露西亞の發言權を飽くまで、確保しなければならぬと主張して居るからである。之は一七七二年のクチクカイナルヂー條約、一八三三年のウンキヤスケレヂー條約及び、一八七一年倫敦協約等に現はれたる、露國と海峽地帶及び土耳其との關係を見る時は、自から首肯し得られる所であらう。

併し露西亞政府が最も重きを置く所は今日前述の問題に對するよりも、寧ろ歐洲の最重大政治的問題の一たる、近東問題會議に於て、その土耳其操縱の實力を示し、又た自國の參加を強要することに依つて、一は西歐諸國に露國を除外して、何等重大問題を決定する能はずとの教訓を與へ、二には彼等就中近東問題を重視する英國をして、露西亞の軍門に屈服せしめ、延いては赤露政府の承認及び、對露經濟援助の機會を促進することである。併しながら露西亞の土耳其援助並に利用は之れのみに止まらず、露西亞は土耳援助によつて、世界回々教徒の意を露國に向はしめ以て、一は共產主義の宣傳に便せしむると同時に、是等回々教徒を驅つて英國始め佛伊兩國を脅威するの機會を作らんとするものである。蓋し土耳其は由來、回々教の中心國と目せられ、從來の土耳其皇帝が回々教々主權を所有する關係上、世界の回々教徒は深甚の同情を土耳其に寄せ、土耳其の休戚を以て自己の休戚として居るのである。回教徒は世界に於て二億三四千萬人を數へ、其中一億は英國領土内にあり中六千萬人は印度に居る、露西亞が回々教徒を親土政策によりて、自己藥籠中のものと爲すことに成功するならば、之を煽動し英國を脅威する敢て難事ではないのである。殊に印度回教徒の如きは、英國が一九一六年土耳其征伐の際、土耳其皇帝の不利を來さゞるべきを約束し、回教系印度兵を土領に轉戰せしめて居り又一九一八年一月ロイド・チヨーヂが、土耳其領土の處分に對し公正を期すべく約束せるにも拘らず、今や却つて土耳其を虐待するの態度に出でたるを憤慨して居る、その結果回教派團領袖モハメツトアリー共他は反英熱運動に從ひ、ヒインヅ系の反英派のガンヂーと提携し、印度形勢不穩を釀成するの狀に在る、玆に於て露西亞としては此際彼等の尊敬する土耳其と接近し、以て回教徒操縱の機會を得、以て英國政治家をして「結局露西亞と相和するにあらずんば英領危し」との感を生ぜしめんと企てて居る、然かも之れ英國のみでない、同じく多數の回教徒を含むトルゼリー、チユニス、モロツコの領有者たる佛蘭西、トリポリの領有者たる伊太利も、露土 近よりする脅威を感ぜねばならぬことは言ふ迄も無い所である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四

併し露西亞の活動は、獨り土耳其及印度回々教徒の利用に止まつて居らない。露西亞は更に阿富汗斯坦、波斯及中央亞細亞の回々教徒を利用し、殊にその過去數年間に亙つて行へる宣傳の、好結果好果實をも利用し、英國及聯合國を壓迫せんとするに於て、形勢は一層重大とならざるを得ないのである。蓋し一九一七年十一月レニンの露國政權掌握當時の赤露外交政策は、特に亞細亞各民族の赤化宣傳を行ひ、世界革命の實現を期せんとすることであり、之が過激派政府の對亞細亞に於ける活動の重要な目的であつた、然るに今や露西亞の政情の變化及び其一層必要とする新對外政策の立場から、其收め得たる宣傳の果實を提げて、專ら對英壓迫の爲めに轉用するに至つたのである。

然らば赤露は今日如何なる地位を、阿富汗斯坦及波斯等に於て占めて居るか、先づ之を面積二十四萬方里人口六百萬の阿富汗斯坦に就て檢しやう。阿富汗斯坦は十九世紀に於ては、英露勢力の衝突地點となつて居た。一八三三年英國が「シヤジヤ」阿富汗斯坦王位回復遠征を後援するや、露國は間もなく波斯を煽動してヘラト攻撃を敢行せしめた。其以後に於ても兩國の角逐狀態は峻烈を極めたが、大體英國が有利で、一八七九年には英國は阿富汗斯坦の外交監督權を得、翌一八八〇年には英國の權利は承認せられ、一九〇五年後に於ては、英國より每年百二十萬留宛の補助金を與へ、又武器をも供給して居た。而して一九〇七年英露協約締結せらるゝや、阿富汗斯坦に於ける英國の地位は確保せられ、此協約によりて初めて英露の角逐は一時終局を告げたのである。然るに一九一七年過激派政府確立以後阿富汗斯坦に於ける、英國の勢力は漸次減退せるに反し、露國の勢力は益增大を示すに至つた。其顯著なる例として見るべきは、一九一九年二月阿富汗斯坦王ハビヴウラー汗死去し、其第三子アマヌラ汗即位するや、同年五月阿富汗斯坦は英國に對して、戰爭を開始した、這は全く露西亞系の煽動が主因を爲したものである。此戰爭は八月終了し一度講和條約を締結せるも、それ以來阿富汗斯坦は英國の權力支配を脫して獨立國となつて居る。當時阿富汗斯坦王及同國外務大臣がレニンに送つた手紙(一九一九年四月七日阿富汗斯坦公文書等參照)は露國の革命を賞讃し、公平に各民族の均等主義を、努めて主張する露西亞の行動に同情を表したものであつた、又たスリッツ及びブラーウインの兩露西亞使節はカーブル方面に於て、盛に露西亞の宣傳を行ひ、大いに阿富汗斯坦の人心を收攬した。本來ブラーウインは露西亞に於ける有名な東洋通で、嘗に波斯テヘランの露

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國公使館（帝制時代の）に外交官として居り、其後セースタン領事ともなり、ヒンドスタン始め東方問題に關する一の權威と見られて居る人である。又スリッツは宣傳に巧みなる所から、中央亞細亞方面の宣傳部の要位に居たものである。猶當時如何に露西亞が阿富汗斯坦に重きを置けるかは、多年帝制時代より露西亞外務省の官吏であり、過激派政府の外務省東方局長ウォスネステンスキーの、阿富汗斯坦の重要なる所以を詳述した言明によつて見るも明かである、次で一九二一年二月には露阿間に條約の締結を見た、之で露西亞は曾て帝制時代に阿富汗斯坦の領土であつた人口約二十萬を數ふるメルブ附近地帶を、同國に讓つて大いに厚意を得、又同條約第十條によつて、露西亞は阿富汗斯坦に補助金を與ふることゝした。此露阿兩國の接近と相對して土耳其亡命政治家が着々阿富汗斯坦に入り、各要路を占むるの傾向が出來て居たので、（彼のゼマル、パシヤの如き一時外務大臣の要位に就いて居たなど）益露西亞、土耳其、阿富汗斯坦間の接近は增進するに至つた。而して一九二二年露國海軍出身にして一度海軍提督ともなり、交際家として知られて居り、曾て英國の手に捕虜となつたこともあるラスコルニコフが、阿富汗斯坦駐屯の露西亞公使となり、他方には一九一九年より一九二〇年まで露西亞駐剳公使として、レニンと接近し親露派として知らるゝバリ汗が、新たに阿富汗斯坦外務大臣に任命せられて露阿の接近は一層深くなつて來た、尤も今日にあつても露阿間の境界問題、就中クシュカ還付要求等の懸案を有せるも、大體に於て兩國の接近は密を加へ、よしや阿富汗斯坦赤化策は成功せずとも、之を排英化するの策は成功し、爲めに同國は今や印度內叛亂挑發の陰謀策源地の一となつて居るのである。

次に面積六十萬方里人口九百萬を有する波斯は如何と言ふに、一九一七年露西亞革命以來、波斯と露西亞の關係は改善され、之に反し英波の關係は惡化しつゝあつた。露西亞は革命當時卽ち一九一七年四月九日非併合主義、非帝國主義を聲明し、「腕力による外國の領土侵略を非とし、民族自決を以て永久平和の基礎なり」と宣明した。次で此主義に基き波斯に對しても、ウルミヤ駐屯の露將チエルナゾポフを伺め、在波斯露西亞官吏を引揚げ、久しく波斯人に暴戾なる行動を爲したる露人を一掃せしめたのである。而して新任の露官吏は波斯の自由政治を鼓吹し、其自由祭等にも自から參列した。一九一八年一月一日には過激派政府外相ツロツキーは、一公文を波斯外交代表者に送り、露西亞軍隊の波斯引揚げ、並に波斯領土保全及び經濟的政治的獨立の主義を聲明したのであつた、此一事が非常に波斯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人心に好感を與へたるに反し。英國は波斯に於ける帝國主義を拋棄せず、一九一九年八月波斯政府に對し、一種の半保護的條約を作り、各省に於ける英國顧問の任命、英國士官による軍隊の教育、其他を約せしめたことは、痛く波斯人の自負心を損し斯くて波斯人の排英熱を昂上せしめたのである、而して遂に波斯政府は英波條約を否認し、明かに勞農露國政府と結託するに至つた。爲めに北波斯に於ける英國軍隊は存續駐屯に堪へず、一九二一年一月十八日より撤退を開始し、テヘラン府に於ける英國軍隊も、五月十六日を以て退去した、次て英國出身波斯財政顧問アーミテージ・スミス氏も猛烈なる波斯諸新聞の攻擊に堪へ得ず、九月を以て退去するに至つた。而して之に對する英國外相カーゾン卿の煩悶は非常なるものにて、其一端は同年七月二十六日の演說にさへ現はれて居るのである。之に反し露西亞と波斯間の關係は、漸次接近の度を加へ、同年二月二十六日には露波間に新條約の成立を見た、之には波斯駐屯露西亞使節ロスタインの卓拔なる手腕與つて力ありと認めらる。ロスタインは英國に遊び新聞記者の經歷を有し、戰爭中英國通信局に聘用せられたこともあり、頗る英國の事情に精通して居るだけに、對英籠引は巧妙にして深刻を極むるものがあつた。併し一は露西亞は英國と異り、波斯に於ける特權を要求せず、寧ろ波斯自身の發展、波斯の獨立權及領土權を恢復せしむることにより、此形勢を釀成し得たとも見られるのである。而して一九二一年には波斯はタギザデ（一九〇八年波斯の民主的革命の首領であり、名聲大いに高い所謂國民黨系の名望家）をして莫斯科に赴かしめ、露波間の通商的接近を協議せしめた、右の如き狀態で波斯は愈親露的となり、將に露西亞の傀儡たらんとするの狀に在る。尤も波斯人も私有財産の廢止、共産主義等に共鳴するには至らないけれど、少くとも露西亞との親交を策し、相提携して以て排英的態度を執るの程度に迄兩國の親善は進捗を示してゐる、換言すれば露西亞が巧みに波斯を利用して英國を威嚇せんとする計畫が、相當の成功を收めつゝあることを否認することは出來ぬのである。

以上の阿富汗斯坦波斯に續きて露西亞が、對印度威嚇の策源地の一と爲せるは土耳其斯坦（トルキスタン）である。土耳其斯坦は面積六十八萬三千方哩人口五百萬を下らざるが、其九割五分は回々敎徒を以て占むる、回々敎徒に對しては彼等は其の民族自決熱に乘じて獨立の名を與へ、無數の小國家の出現を見るに至つた、又タシュケンド等には露西亞政府の宣傳部、並に宣傳學校を設けられ多數の印度人阿富汗斯坦人其他回々敎徒を收容し、養成に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

怠らないのである、次ぎに中東アゼルバイジャン、アルメニア、ジョルヂヤ等が一九二〇年夏から一九二一年春にかけ赤化せるあり、茲に於て東南亞細亞中部亞細亞の形勢は、或は露西亞の英帝國脅威に對する、好地盤と化せるの有樣である。

尤もアゼルバイジャン、土耳其斯坦等に於ては、多少反露熱の存在も否定されないのである、本來アゼルバイジャン國は土耳其系が立てたものを、露西亞系が顚覆して有力者數百名を慘殺し、此處に赤化政府を建てたので、回教徒中に反對するもの少く無い、一九二〇年バクー會議に於ては、代表者千八百名會合し、モハメット教徒其大部分を占め、露西亞過激派政府よりはジノヴイエフ、ラデック、ボハリン等出席せるが、其場合に於ては親露よりも回々教熱高しと云ふが如き事實もあつた、又前土耳其陸相たるエムベル・パシヤも、中央亞細亞に於て起ち、必ずしも赤露の傀儡となるを甘んぜざるが如き現象もある。併し之は程度の問題にして、大體に於て最近露西亞の土耳其援助と、從來の民族獨立尊重主義とは、彼等を其味方化し、爲めに英國印度總督レッデイング伯を初め、印度政府の心膽を寒からしめつゝあるは疑ひなき事實である。從つて露土及各地回々教徒の接近が、亞細亞英領の憂患となり、今や、英國は自身の貿易政策よりも、既に業に必要を痛感せる、露西亞との接近政策を益尊重視せざるべからざる形勢を呈し來たれるは、見逃すべからざる現象である。

五

以上述べた所で、最初世界赤化、資本主義的國家及社會組織の顚覆運動を、主要目的とせる露西亞外交が、實際政治の教訓と、其政府維持策の必要より、世界の資本主義國家との協力狀態恢復の爲め、差當りて餘儀なく主要目的を變更し來つた大體を説明し得たと信ずる、而して又た歐洲に於ける右目的の直接的成功困難となるに伴ひ、一層東方政策に對して努力を强め來り、既に或程度迄露西亞の鋭鋒に屈服し始めたる英國を威壓し、露西亞との了解提携を急がしめんとしつゝあることも亦判明したと考へる。

説て茲に至れば人或は謂はう。「然らば斯の如き露西亞が何故に彼の長春會議を、失敗せしめたのであるか。」と。此疑問を生ずる、亦無理からぬことゝである、實際長春會議を成功せしむることとは露西亞に取りては極めて必要事であり、又好都合であつたに違ひ無い、即ち彼等が是により日本側の資本を露西亞に流入せしめ、第一に或程度に於て露西亞の經濟的復興を救けしめ、同時に之に對する政府の割前收得をも爲し、目下困難の狀にあ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る赤露政府の財政をも、或程度に於て救濟し、第二には日本との協定によりて他の列強に教訓を與へ、以て赤露と列強との接近の機械を作ることを得るならば、這は彼等に取つて一大成功なりと云はざるを得ないからである。併し翻つて顧るに、同會議は露西亞の通商關係改善の希望甚だ少かりし爲めといふより寧ろ、他に已むを得ざる原因の存して、失敗す可き運命にあつた。第一原因としては我日本が赤露の主要希望たる「日本と赤露共者」との協定を欲し無かつた結果と觀て差支無い、何となれば昨年九月四日同會議開始の最初十日間の重要なる難問題、否或程度に於て最後まで引懸つたる問題は、日本が交渉の相手として所謂チタ政府とのみ、協定を爲さんことを希望した點である、九月十二日内閣々議の結果、チタを主とし歐露を從とするの案は、日本側に於て放棄せりと云はれた後も、條約文に於ては其前文に「全露及極東と日本を相手とす」としても本文には「極東共和國と日本のみを締盟國と爲す」可しといふやうな愚なる主張も見へたのであつた、次ぎに協議の相手の問題でも斯くの如くであるが、更らに協議の内容如何と見ると、日本は專ら極東に關する問題に限り、歐露にも及ぶが如き問題は、努めて避けんとしたのであつた。露骨に云へば相手としても協議の事項としても、勞農露國との關係に就ては、成る可く回避せんことに努力した。斯の如き日本の態度で赤露對日本との通商協定その他の協定成立が、圓滿に進捗する筈なきは自然の數ではあるまい乎、勿論、我日本としては過去の大連會議其他外交々渉の歴史の立場から、斯く主張する相當の論據を有したに違ひ無い、然かも赤露から見ると、孰れにしても赤露日本間の協定が困難だと言ふことを示すものとしか映じ無かつたのである、次ぎに同會議では相互の事情の理解が無く、信頼が無かつた、之には露西亞側が、日本の事情に甚だ疎漫であつた爲め生じたものもあつた。一例を擧ぐれば日本に於ては露西亞が急に樺太撤兵問題を提出した際、露西亞が故意か又は無法に不可能を日本に強んと試むるものなりと論ぜられたが、眞の事情を精探すると、露西亞側に於ては或通信の行違錯誤があつたのであつた。一九二二年春政府の薩哈嗹撤兵聲明、日本各新聞の薩哈嗹撤兵記事は亞細亞大陸に於ける薩哈嗹州の撤兵といふ意味であつたが、本來薩哈嗹州行政區域の中に樺太即ち薩哈嗹島は含まれて居るので、頗る混同を生じ易き有樣であつた。而して當時來朝中の「アントノフ」は日本の新聞に薩哈嗹撤兵の記事あるを見て、早合點して其儘先方へ打電し大陸薩哈嗹州のみならず、島嶼たる薩哈嗹亦含まるゝものゝ如く消息を傳へたとの事である、斯くの如き事例は、露人の對日本情報の粗漏その機關の缺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

路を證明するものではあるまい乎、次ぎに尙勞農政府は日本に對し頗る不信用の念を抱いて居た、その原因の一となつたのは、日本軍の白軍援助の歴史であつた、彼等は又た日本を軍國視して居り、依然侵略的慾望を有するものゝ如く、今も尙疑惑の念を持して居る。而して長春會議に於て日本が唯極東關係問題の協定を先きにし、勞農露國との暫定協商を後にせんとし、然も極東協定の實行及び有効的保障を急速に決定せんとする態度を以て、日本は唯自己が既に實行の期に當面せる、撤兵の後始末に屬する問題のみを、長春會議に於て決定し、他の勞農露國との協商問題の如きは、一切之を放棄せんとする猾策にはあらずやと疑つたのである。同時に、日本側に於ても同一の程度に於て不了解があり、結局同會議の蹉跌を見たのは止むを得ぬ次第である、世上之を以て、過激派側に日露協和の誠意無きに出づと見るものあらば、それは大なる誤謬であらう。

以上述べた所で、予は一應本文を終り度いと考へる、併し上述の如き態度を有する露國と日本との協商實現の期は何時であらう乎、是れ吾人の面前に現はるゝ一問題であらねばならぬ、予の所信に依ると、之には我日本政府が、對西伯利亞の經濟的發展の爲めに、進んで他に先たちて、露國の承認を敢てする丈けの決意をなすことが大切であり、同時に露國側に於ても亦た北樺太問題の穩當なる解決（之は尼港事件の賠償に北樺太を與へよと言ふ如きことでは無い、露國を對等の國家と見、其國權論者の立場をも害せざると共に、公平で正當な形式及方法で、日本の北樺太に於ける立場をも擁護する解決）に同意し得る時機來らねばならない、之はレーニンの近時外交策に照して必らずしも困難ではないと思はれる、而して其時機の早からんことを希望して止まぬものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猪突的精神と猪突的人物

文學博士　三宅雪嶺

□世界は力の現はれであつて、機械は其力を最も有効にしようとして造られて居り、粗末な機械で動力に富むのは、精巧の機械で動力を缺くに優る。風を動力とする頃、風さへあれば筏で海を越すことが出來、風が無ければ、何程帆を揚げても毫しも動かぬ。そこで機械を重ずる時代は動力を重ずる時代であり、石炭を以て動力を起す時、石炭買占めに努め、石油を以て動力を起す時、石油買占めに努め、日本の僅かの石油さへ、スタンダアトの手が及んで居る。水力電氣を動力とすると成つては、凡そ水力を利用し得る所に就いて權利を獲やうと奔走する。世間で新機械に驚き、改善に次ぐに改善を以てするは、其半面、動力を求めて已まぬのである。自動車が年々盛んに成つても、ガソリンの原料の盡きる時、奈何すれば可いかと心配になつて居る。□

之と同じく、人の仕事は、智慧から出るやうであつて、氣力に基くこと多く、場合により智慧なくして氣力ある方が、智慧あつて氣力ないのに勝つ。何程機關を完全にしても、動力が缺乏しては、少しも運轉することが出來ぬ。智慧の増すやうに、知識の増すやうに、詳しく統計を擧げるやうにと望む時、何が何でも斷行の力に若くはないと考へ及んだりする。實に他の事情を同一とせば、動力一つで優劣が決するのであり、唯、他の事情を顧ず動力のみを頼みにしては、失敗に終り勝ちになる。他の事情を考へ、あゝでもない、かうでもないとしては、斷行の勇氣を缺き、何でも構はずやつつけてしまへとせば、躓いて倒れてしまふ。其の兼合ひが難しく、殆と富籤に類する所もある。人の智慧で前の前まで見透し難く、可いと知り得た所で決するの外ない。所謂人事を盡して天命を待つべきである。眞に人事を盡くしたか何うかが、疑問に屬するが、それとて他人から見てのことであつて、自ら何とか決せねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

□

昔から勇氣を讃めたり、誹つたりするのは、勇氣で成功するのがあり、勇氣で失敗するのがあるに由る。喧嘩の起る所で幾人かを投げ倒すのがよいとて、客が集まつて床の間の生花を賞する所で腕を振上げては、巡査にでも引渡すことになる。日本の歴史で猪武者が善いか惡いかを論じ合ひ、猪武者が物の見事に成功したのは、源義經と梶原景時との逆櫓論に於てする。景時が逆櫓を備へ付けようとし、義經が之を無用とし、景時が進むを知つて退くを知らぬは猪武者と云ふや、義經は猪か鹿かは知らず、只進んで敵に勝たうとするのみであると云ひ、義經は連戰連勝するを得た。義經は直覺的に勝負の機を知ることが出來、退くの用意しなくても澤山としたらう。景時には海上の戰ひが困難と見え、心配したのであつて、退くべき場合に逆櫓を以てするのは可からう。敵軍が勁く、如何しても退かねばならぬとなつては、景時の云ひ分が當つたのであるが、結果から推せば餘計な心配となつて居る。勝つて見れば、何の心配なかつたと知られるが、勝たぬ前は一かばちかと思はれ、義經の冒險を危ぶまずに居れぬ。義經は果して豫想通りに勝つたか、幸にして勝を得たか、いくらか運に歸すべき所があらう。景時の鎌倉に報告したのは、全く運に歸して居る。然し義經が隅から隅まで敵軍の勢を見透したかは別とし、猪武者で大事に成功して居る。何うせ平氏が負けるに極つて居つても、義經の力で短日月で平定したのを打消すことが出來ぬ。彼の如き場合には、何でもかでも叩き付ければ、それで事が濟むのであつて、心配すれば延び延びになるだけのことであつた。

□

ところで義經が凱旋して、鎌倉に入らうとすれば拒絶され、腰越で歎願状を出して聽かれず、其儘引反さねばならなくなつた。義經にそれが豫め分らなんだか何うか。賴朝の不快を買つたことは知つて居つても、叛逆、それ程のことはなからうとしたらしい。それも尤もであるが、既に引反し、京都に歸つて宣戰する位ならば、何故に腰越で押問答し、何うして鎌倉に乗込まなかつたか。兄が拒絶する筈がなく、必ず惡奸の所爲であり、君側の奸を除くに、已むを得ぬとて、電光石火の振舞したら、形勢を一變し得なかつたと限らぬ。猪武者が突出すると思ひきや、頭を返して退いたので、猪の長所が無くなつた。本來猪突のみで成功するのは、極めて短期間の事であつて、永引く時は智慧の闘になる。義經は勇氣のみでなく、智慮も適れて居り、猪突すべきに猪突したので、成功したが、鎌倉幕府に對して決斷し兼ねた所があると思はれる。戰爭よりも事が複雑し、前に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經驗したことなく、勝ち得べきで敗れるやうになつた。不意に鎌倉に乗込んで、成功し得たと云へぬが、一層の事、思ひ切つて之を敢てするの勇氣があつた方が宜からう。戰爭の猪武者は、政治の家男になつた姿がある。

□

義經のやうな軍事的天才は少いが、後に織田信長が桶狹間で勝ち、豐臣秀吉が賤ヶ嶽で勝つたのは、機を見て突進したのに因る。餘り難しい事でなささうに思はれるけれど、當時猛進して少しも躊躇しなかつた所は有繫と云はねばならぬ。それにつけて怪しむべきは柴田勝家である。勝家は戰場の老武者、勇氣に於て秀吉に優る筈であるのに、佐久間盛政に賤ヶ嶽より引返せと督促するのみであつた。盛政が引返したならば、秀吉は手持ち無沙汰になるが、盛政が引返さず、秀吉が必ず攻め寄せると知つては、勝家自ら全軍を以て賤ヶ嶽附近に進み、敵を待つべきである。秀吉は何うして勝家の來らぬのを知つたか、さういふ事を爲し得る男でないと看做したか、若し勝家が出ぬやうに見せて出て、敵の長途を進んで來り、疲れて居る所を猛烈に襲擊したならば、柴田側の勝利になつたでないか。矢張、猪突するは單純なる勇氣でなく、機を見るの明なければならぬか。勝家は、盛政の止まつて敗るべきを知りながら、只心配して過ぎたのは何とも合點が行かぬ。勝家が赴援しようとしても、出來ぬ事情があつたか。

□

德川家康は秀吉の戰畧の、主として敵の勝つて進むのを逆襲するに在るを知り、之を避けるに努めた。敵が勝つて疲れて居る所をば、新手で突擊するのが、熟練した將帥の悉く知つて居る所でも、秀吉は特に其邊に會得し、之を外にして餘り好い工夫が無い。後に家康が秀吉と爭ひ、池田の軍に勝つと共に、早速引返し、秀吉が新手で急に進んで來り、花も實もある家康と賞めたのは、そこである。秀吉に對しては、何でも勝つた時に引返すに限つたのである。秀吉は毎時敵の來つて戰に疲れるのを待ち、さうならねば徒に日を送り、根氣較べにならうとする。若し秀吉がもう一つ別の戰畧に通じたならば、將才に一段の光を添へたらう。家康も秀吉の突擊に備へるの外、別段に目立つた工夫ないが、平素深く思慮し、輕卒を警めるに拘らず、乾坤一擲といふを敢てするの勇氣を具へた。信玄と戰ひ、秀吉と戰つたのもさうであるが、後に上杉景勝が兵を起すや、自ら將として之を討ち、西軍が美濃に集るや、轉じて之を討たうとし、兵が少くても、敢て戰ふを辭しなかつた。關ケ原には家康が敵の裏切りを賴みにし、戰畧戰術の、特別に稱すべきもののない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、自ら將として奮戰すると云ふだけ、味方を勵まし敵を懼れしめた所がある。家康自ら出馬せねば秀秋が裏切つたかが疑はしい。西軍で石田三成が頻りに骨折つた時、若し何人か毛利輝元を戰場に連れ出して來たならば、輝元自ら木偶坊としても、頗る味方の勢を強くした所があらう。

□

之について思ひ出すべきは、毛利家の臣井上馨の戊辰役に於ける働きである。薩長土が聯合したものの、兎角足並みの揃はぬ處れがあり、山内容堂が土佐軍を率ゐて鄕里に歸らうと云ひ出した。井上は之を見るや、血相を變へて迫り、今となつてさう云ふことが出來ますか、朝廷を何となさる、とて刺違へ兼ねまじき勢を示し、それで容堂が折れて納得した。薩長だけでも鳥羽伏見の如きで勝ち得たらうが、井上の容堂引留め策は、立派に適中した。關ケ原役の際、石田側にそれ位の擔當をする者が無かつたとは、是非もない次第である。實は井上も鄕里でかゝる手段が功能あるを知つて居つたのである。井上は威嚇のみでなく、自ら捨て身になる勇氣あるが、高杉晉作が奮進して成功した例を知つて居る。毛利側で幕府の兵を受け、謝罪を表し意氣沮喪した時、高杉は何うしても幕軍と戰はうとし、山縣有朋に說いたが、山縣は時機が好くないとて應ぜず、去つて伊藤博文を訪れた時、伊藤が卽座に應じ、若干名と共に連れ立ち、それから兵を驅り集め、俗論黨と戰ひ、幕軍と戰へば、敵は案外に脆く、何處ででも勝ち、勝てば響きに應じなかつた者も應じて來たり、勢頗る振ひ、幕府から泣きを入れるやうになつた。此呼吸が倒幕側の熟知する所であつて、西南の亂に薩摩側で、勝てば官軍負くれば賊と唄つたのも、其名殘である。何でも勝ちさへせば、事が定まると云ふのであつて、桐野等は猪突して失敗したのである。桐野は其以前に勇氣で克つて居り、勇兵を以て稱せられた。二大隊を以て西伯利を橫行し得ると云ふたのも、勇に任せての事である。

□

西南の亂は征韓論の破裂に由來するが、當時の非征韓論は、着實らしく聞えたけれど、後になつて事實を誤つて居つたことが知られた。岩倉は露國に苦情が起ると云ふたけれど、其頃露に其樣子が無く、支那を容易ならぬとしたのも、日淸戰役でそれほどでないと分つた。內治の整はぬのに妄りに外に兵端を開くのは、愼むべきであつても、征韓論當時に心配した所のものは、杞憂に屬して居つたのを覺つた所があり、川上や兒玉や、各々自ら信ずる所を以て當局者を促した。斷行すれば成功すると知られた所から、何でも力を以て敢てすれば出來さうに考へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猪突猛進を履き違へたのもある。西伯利出兵の如き、單純に取扱ひすぎて失敗した、それも一層勇氣を以て深入りしたならば、乘るか反るか、失敗の恐あると共に成功の望が無いではない。さういふ危險を冒すべきでないとし、何の得る所なく、負け戰の如く、悄々と立歸るなど、勇氣を缺くも餘りである。

□

勇氣は必要であるけれど、明治維新當時の單純なる勇氣では役に立たぬ。然し唯、案ばかり陳べ立て、着手するかと思へば取換へ、あゝでもない、かうでもないで日を送り、何でも資え切らぬ姿にならうとし、之が甚だしきに過ぐる時、遮二無二突進するのが勝利を得るが、長續きするには、思慮を以て練りに練らねばならぬ。思慮に過ぎては杖で石橋を叩くやうになり、好加減に決斷すれば、馬の脚を溝に陷してしまふ。何うしても成功は失敗の隣であつて、多くの失敗で若干の成功を贏ち得る事になる。星亨は押通るの渾名があり、何處でも隨分押通つたが、駐米公使となつた時、小村の云ふやう、星は外交に不適當である、外交では押して行くべき所は何處までも押して行かねはならぬが、いよ〳〵と云ふ所で轉回するの術を要する、星にはそれは出來ぬと。其點に於て支那の猪突は外交向きに出來て居る。猪突猛進で成功するには、餘りに場面が廣くてはならず、義經が支那に戰ふには、異なる戰界戰術に於てせねばなるまい。戰國時代場面も狹い所もあり、猪突を一つの成功秘訣とした所もある。中にも趙に其傾向があり、藺相如の秦王に於ける、毛遂の楚に於ける、何れも劍を按じ、今にも斬り付けさうな所で成功して居る。記錄はあてにならぬけれど、世に傳へる所は、さういふ事もあり得べしと考へられたのであつて、いくらか似た事があつたらう。一種の國際法が存在し、脅かされても王が承知した以上、濫りに言を食んでならぬとなつて居つたらしい。さもなければ、客の從者が劍を以て脅かし、それで事の決しやうがない。其場で承知しても、後に復讎するに極つて居る。

□

全國統一した後は、かゝる事が容易く行はれず、或一部分に於てこそ、虎穴に入らずんば虎兒を得ずとすれ、中原に爭ふ際全力を以て戰ふの勢を示し、また實に決心して進みながら、不利の兆を見るや直ちに引返し、逃げれるだけ逃げようとする。戰爭が示威運動の競爭であつて、旌旗野を蔽ひ、いよ〳〵旌旗を多くし、いよ〳〵勝味が多くなるけれど、一つ間違へば、風聲鶴唳で怯えてしまふ。近年革命が起り、支那の西郷と云はれた者も、進むに第一、退くに第一であつた、隨一の武將と見られた段祺瑞も、今度こそはと決心して戰場に出でながら、戰ふか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戰はぬかに逃げてしまひ、張作霖も堅い決意を示しつゝ、急に屏息して靜り返つて居る。最後まで奮戰しても何の利益なく、死ねば笑はれるだけであつて、命を繋いで居れば、何とか爲すを得べく、又捲土重來の例に匱しくない。國境が何處に在るか知れぬ程であつて、一時全勝を制するよりも、何時でも打つて出られる餘裕を蓄へて置くに如くはない。支那で、斷じて敢て行へば、鬼神も之を避くと云ふは、其の斷じて行ふ所が有利なる勢を條件としての事であつて、不利に變ずると共に其反對に出るを厭はぬ。

□

歐洲では希臘時代、猪突の功能頗る著しく、マケドニア王アレキサンドルの如き、何處で戰つても自ら劍を拔き、眞先き馳け出し、時として縱橫無盡に斬り結んだりした。それで味方に勢を付け、必勝を期し得る所もある。羅馬時代では餘程支那に似て來るけれど、支那ほど涯てしも無く廣いのではなく、伊太利とて狹いものである。ケーザルがルビコン河に臨み、之を渡れば國法を犯すとせられ、勝つか負けるか、まゝよ進めと賽を振つた所、義經の腰越にかけるよりも、決斷が好かつた。軍事にかけてはアレキサンドルに劣る事、後にチエルも云ふて居り、義經ほど勇氣及び才能無かつたと思はれるが、政治上の智畧に長じ、此河一つを渡れば天下は我が物と見て取り、之を渡るや果たして豫想通りであつた。

□

後に列國分裂し、盛衰さまざまであるが、如何に威嚇の効能あるとも、支那に較べて實力爭ひと云はねばならぬ。旌旗野を蔽ふ位では敵を脅すことが出來ぬ。實際に血を流し、退引きならぬ所を見せねば、敵が承知して吳れぬ。支那の如く大將が後陣に控へ、戰爭の樣子を觀て居る位では間に合はぬ、ナポレオンがロヂで我軍の不利と見るや、自ら旌を持ち、敵の銃砲を冒し、橋を馳け渡つたのは、尙ほ等級の低い頃とは云へ、斯くするのが戰爭を決するの要訣と知つたのである。帝位に卽いてからでも、いざとなれば自ら陣頭に現はれ、人をしてはら〳〵させた。或は運命を信じ、何うしても彈が中らぬと信じて居ると噂した。ナポレオンは聞いて曰ふやう、下らぬことを云ふでないか、誰が彈に中らぬと思ふものか、唯中る時は何處に居つても中る、それで何處と選ばぬのであると。當時の銃砲では、さう多寡を括ることが出來たらう。海軍を以て之を悩ましたネルソンが、敵艦と見るや、何ほど發砲されても、平氣で艦を進め、其の機を圖つて、猛烈に攻擊したのも、いくら彈を受けても船が沈まぬとしての事である。中る時は中るにせよ、之を氣にし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て戰へず、機を見て徒らに進み出すのは、何でもないやうなことで、位とか階とかの特權で總司令官に成つたりする者の、眞似の出來ぬことである。

□

ナポレオン三世はセダンで陣頭に現はれ、戰死を望んだかとも思はれる。戰場で死ぬことが出來ぬので降參すると敵軍の君主に言ひ込んだ。そこが何の意味か明白を缺くのが三世の缺點である。彼は初め猪突の勇を以て知られ、大統領と成り皇帝となつたのもそれに因る。今少しく待つて居れば、クーデーターしなくても宜かつたにと思はれるのに、彼は之を斷行した。何れほど勇氣があるか知れぬと云はれ、佛國で獨軍と戰ふ時、進軍が後れたのは、深い思慮あつてのことと云はれたが、後より考へれば、兎角後れ勝ちになる癖がある。普國と開戰する時にも、初めようか初めまいかと迷ひ、皇后及び宰相に促されて漸く決定し、決定しても出兵が遲延した。意外に準備の缺けたにも依るけれど、一時間をも爭ふべきに、幾日も幾日も後れた。敵國側では待ちに待つて居た事とて、一夜に六十萬の兵をライン河に集めた。ナポレオンは本來決斷に長じたか長ぜぬか、前に長じ後に於て衰へたか、いろいろ考へ樣があるが、負けても落膽せず、英國に寄寓して、運の向く日あるを信じて居つたと云ふ所が尋常でない。獨り息子が阿弗利加で戰死し、帝政が長く絕えたが、後五十年、佛國が獨逸を仆し、復讐するを得た。佛國が獨逸と戰はうとせねば、世界戰役は起らず、戰役の起つたのは、誰が何と考へてのことか。何としても戰はずに居れず、戰ふ以上、最後の勝利を得るまでとし、如何なる損失をも忍び、堪らへ堪らへて四年半も續いた。何の必要でか、考へて見れば夢のやうであつて、一千萬人が戰死したり、不具になつたりし、三千幾百億圓が煙に化し、不換紙幣の多寡が量り知られぬ有樣である。東洋で之れ位の戰亂が見られるか何うか。白人には何處かかゝる戰亂を惹き起すの質があると見ねばならぬ。勇氣と云はば大いなる勇氣、其勇氣で世界に力を伸し、其勇氣で禍を蒙つた。禍を辭せぬ勇氣で、前に增して恢復するであらうか。

□

同じ白人國でも、歐洲が禍を蒙り、米國が福を得た形がある。米國が求めてさうしたのでないが、數十年來何かにつけて世界第一だと稱したのが、世界戰役と共に國家として第一に位するやうになつた。實は日本で猪突猛進と稱するのは、米國風を受けてのことであり、寧ろ一の譯語とすべきである。歐洲で夙に其氣風があり、米洲を發見し、秘露及び墨西哥を占領したのも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猪突猛進の著しい例を示して居る。ピサロが僅かな兵を以て秘露に突進し、之を切り従へた。東洋から見れば、白人は向ふ見ずの事をするが、米國で猪突猛進とするのは、戰爭に關してでなく、平和的事業に關してである。米國で富源開發の頻りなのに伴ひ、如何に成功すべきかに重きを置き、何よりも突進の勇氣無くてならぬと云ふに一致する。貧富の懸隔著るしく、それが絶えず動搖し、昨日の貧者が今日の富者、昨日の富者が今日の貧者と云ふことが頗る多く、何うすれば可いか。國立私立の大學に遊ぶ者は數限りも無く、それが何れだけの仕事をするか。仕事しさうであつてさうでないと云ふ所で、氣力第一と云ふに考へ付く。突進すべきであり、プッシュすべきであるとする。失敗するとかせぬとか、餘計な心配することと無く、失敗したとて何程のことあるか。失敗は成功の飛び石である。失敗するのが惡い譯でなく、失敗して起き上らぬのが惡いのであると云ふやうに說く。ルウズベルトが大統領になつたのも、其氣風に押上げられて居る。彼自ら奮鬪的生活を唱へ、又之を事實に示して居る。彼は飽くまで奮鬪的である。奮鬪して大統領になり、奮鬪の效果を證明しただけ、いよいよ成功熱が盛んである。亞米利加魂といふを振廻すが、それに奮鬪が着き纏つて居る。何でも奮鬪して成功しようと云ふのが通り者である。日本で如何に成功すべきかといふことが頻りに云はれたのも、之に感染れてであつて、日本で間も無く廢れ、成功と云へば時代後れと聞えるが、米國はなかなかさうでなく、近年如何に頭腦の力を増し、百難に堪へ、印象を世界に貽すべきかと云ふを攻究する勢がある。新聞雜誌の記事及び廣告を見ても察し得られる。

□

米國で考へる所では古今東西、何か業績の見るべきものは、氣力の發揚である。突進に次ぐに忍耐を以てし、千辛萬苦に屈しないに在るとする。政治のみでなく、實業のみでなく、宗教もさうであり、科學藝術皆さうであるとする。ウオルタア・スコットが詩名を馳せたが、バイロンが算へ年二十六で勃然起り、一世を風靡するや、スコットは物語に轉じた。自身關係の會社が倒れたと云ふので、筆を以て其負債を償却しようとし、書き擲ぐるも書き擲つたり、夥しい數に上り、神經衰弱を極めて斃れた。誰でも此調子といふでないが、普通に遊び半分と思はれる所でさへさうであり、努力を要すると知らるゝ所は、斃れて已むを當然とする。畫家でも音樂家でも、藝に成功するのは只勉強である。天才か天才でないか、さういふことは關はず、何にせよ勉強すべし、天才も勉強して良くなり、常才は尚更ら勉強せねばならぬと說く。如何に藝術家が勉強するか、其實際を見る者

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が驚かずに居れぬ。斃れるまで勉強せよとの調子である。

□

そこで神經衰弱症に罹る者が多く、之を一名米國病と稱する。米に限つたことでなけれど、成功しようとして斃れる者が多いだけ、神經衰弱が目立つのである。成功者を以て知られる者は幸に凱旋し得た連中であつて、萬骨果々たるを認めずに居れぬ。病氣になるなど、さういふ弱い事で堪るものか、身體を健全にすれば、百病も侵さぬと云ふが、何うして之を健全にするか。そこで又強健法が盛になり、功能があるか何うか、いろいろの吹聽がある。斯くて現に最も隆盛なる米國を始め、何處でも突進しようとし、獨逸にニイチエが出たのも、割合に早く此潮流に乘出したに過ぎぬ。佛敎の所謂修羅の巷を現出した事になる。之れが人生か何うか。

□

そこで或る一角から無抵抗主義と云ふやうなものが擴まらうとして居る。今の所、猪突猛進の勢が盛んであつて、無抵抗主義など云ふ者は勝手に云へよ、此浮世を苦しんで通して何ゝするものか、思ふ存分金を得、思ふ存分快樂を享受せよと云ふが、共度びに何れほど苦痛に堪へて居るか知れぬ。快樂を得やうとして苦痛を忍び、眞に何程の快樂を感ずるか。快樂は苦痛の間に感ずべきものか。考へれば考ふるほど疑問が湧いて來るけれど、それを構はず、何でも突進せよ、プッシュが肝要、プラックが肝要とするのが、米國を主なる背景として著しく現はれつゝあり、本年の亥年に緣んで、此邊に考ふる所あること無益とせぬ。

生存慾と行爲慾と所有慾との飽和を理想として

林　癸　未　夫

一　三慾を體現する勞働者と企業家と資本家

人間は生れながらにして生存慾と行爲慾と所有慾とを有つて

ゐる。生存慾は人間が一個の生物として自からに有する本能であつて、言ふまでもなく最も自然的な衝動的な慾望である。行爲慾は人間を無爲であることに堪へしめない一種神來的な要求に出づるものであつて、やはり衝動的な、そして神秘的とも言へる慾望である。**人類の社會に科學あり、藝術あり、文化あら**しめたものは、主として此行爲慾の賜物であつて、倫理的に最も重要視されなければならぬものである。

近世の社會思想家の中には、屢々所有慾を不純視して、非倫**理的なものと看做す傾向がある。それ**は所有を私有財産と等しく排他的な利己的な手段によつてのみ滿足せしめられるものと速斷するからである。彼等の所說に從へば、全體の人が全體の物を支配することのみが正義であつて、しかもさういふ世界に於ては、一個人が一個物を所有するといふ觀念の成立ち得ないことは、何人も空氣を所有するといふ觀念を有たないのと同一であるとするのである。

併しながら所有といふ觀念は或人が或物を專有するといふ積極的な事實からばかり發生するものではなくして、總ての人が何物をも專有しないといふ消極的な事實からも亦發生するものである。例へば吾々が國有の或博物館を訪ねて、そこに最も自**己の嗜好に適つた一箇の美術品を見出したとする。**吾々は此場合、出來得べくんば之を自己の書齋の中に置いて、朝夕觀賞したいといふ慾望を起すのである。此慾望はそれ自ら決して排他的でも利己的でもない。唯朝夕日々に此美術品を眺めることのできる方法としては。これを博物館に置かずに、自己の書齋に置くことが唯一の手段であるがゆえに、さうすることを欲するに止まるのである。かういふ慾望は全く衝動的であつて、此美術品が決して私有を許されないものであることを豫め知つてゐたからといつて、刹那に起る此衝動を未然に制止するわけにはゆかないのである。若しそれが空氣のやうに、到る處に無盡藏なものであるならば、恐らくかういふ所有慾は發生しないに相違ない。それは旣に自ら所有してゐるからである 併し吾々が生存のため又享樂のため要求する對象の大部分は、常に人類の全體を飽滿せしめ得る程に無盡藏でないのみならず、吾々の要求が洗練され向上するに從うて、ます〳〵對象が制限されて行くのである。其結果として、吾々の所有慾が不斷に激しい衝動を受けることは餘儀ないことであつて、それが倫理問題を超越したる自然の慾望たる點に於て、生存慾や行爲慾と毫も相違する所はないのである。

是等の三欲は人間に自然の本能であることは同樣であるが、就中最も原始的な基本的な慾望は生存慾でなくてはならない。

行爲慾も所有慾も、生存慾を充した後のことである。生存慾を充したる後に行爲慾を發する。從て其行爲は生存の手段であつてはならない。知識の獲得、藝術の創造、享樂の追求、何にてもあれ、それは直接には、生活資料の獲得手段から離れたる精神的或は肉體的の活動を意味するのである。

所有慾も亦生存慾を充したる後に生ずる。從て其所有は生活に直接必要な資料以上のものゝ獲得を意味するのである。自己の衣食住に絶對必要な資料の所有は單に生活の一手段であつて所有慾から來る所有ではない。從て此場合の所有される物が、自己の生存に必要以上のものであつて、しかもそれが他人の必要資料を制限する程度或はそれを拘束する方法によつて取得されるならば、非理倫的たることを免れないのである。そこに私有財産に對する倫理的批判の免れ難い理由がある。併し此危險があるからと言つて總ての所有を非倫理的と呼ぶことのできないのは勿論であつて、殊にそれが行爲慾を充す手段としての所有である場合には、倫理的として認容されることが原則であらねばならぬ。

生存慾と行爲慾と所有慾とは總ての人に同時に共存することが自然の狀態である。從て其一つが充されなくても人間は不平不滿を感ずる。此三慾が箇々に充足されると同時に、或一慾が他の一慾を制限、無視、壓迫することなしに、互に融合飽和の狀態に在ることが、人間としては最も滿足なる狀態であつて、それが個人としては圓滿なる生の相であり、社會としては最高至善の文化の建設である。

併しながら不幸にして人類の中には、此三慾中の行爲所有の二慾は、終生之を充すことができず、又充さうとする努力を試むべき機會すら與へられないで、ひたすらに唯生存慾充足の手段にのみ沒頭してゐなければならぬ部類の人がある。次には生存慾を充したる上に所有慾を充し、或は充すべき機會を捕へることにのみ焦慮してゐる部類の人がある。又次には生存慾を充した上に、行爲慾を充し、或は充すべき機會を捕へることにのみ鋭意してゐる部類の人がある。而して彼等を富の生産といふ一問題の關する限りに於て命名するならば、第一の部類の人は勞働者と呼ばるゝものであり、第二の部類の人は資本家と呼ばるゝものであり、第三の部類の人は企業家と呼ばるゝものである。畢竟經濟上の觀念としては、勞働者は生存慾の、資本家は所有慾の、企業家は行爲慾のパーソニフイケーションと看做すべきものと私はするのである。

二　奴隸の勞働

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何處如何なる時代に於ても、唯生存慾にのみ驅使されて一生を終る人間は數限りもないが、併し彼等が一つの社會制度として、當然しかあるべき地位に置かれてゐる例としては、古代の奴隷と現代の工業勞働者とを擧げなければならない。

古代の奴隷は所有する者でなくて所有される物であり、行ふ者でなくて行はれる物であつた。彼等は唯生きることだけを許された。併しそれは無條件にではなくて、何等かの勞役に服することによつてのみである。彼等は赤裸々なる勞働者である。勞働することより外に衣食を得るの途なく、又勞働するがためにのみ衣食を給せられてゐたのである。從つて戰勝の結果として多數の奴隷を捕へて來ることは、有用な生産要具を無償で收得するとができるといふ意味に於て何よりの戰利品であつた。希臘羅馬の權力者は此生産要具を驅使して必要な生活資料の生産を行はしめた。今尙當時の榮華をしのばしめる宏壯な建築や大軌模な土木事業は皆無給料の奴隷の勞働の結果に外ならない。

かく古代の希臘人や羅馬人が、牛馬と等しく無給料の奴隷をして絶對的の服從の下に、無制限に其勞力を提供せしめることができたといふ事實は、それが奴隷自身のために如何に悲慘な生活であつたにせよ、古代文化の發達のためには至大なる貢獻を爲したものと言へるのである。何となれば當時の希臘人や羅馬人は奴隷を有することによつて、自ら生活資料のために勞働するの必要がないので、其時間を總て學術文藝其他享樂的方面に費すことができたからである。彼等が哲學に科學に藝術に光彩燦然たる文化を遺施することのできたのは主としてこれがためであつた。從つて彼等が奴隷を有することは、彼等の道德上の修養のために、學術の研鑽のために、文藝の發達のために、必要缺くべからざるものであつた。

かういふ當時の世相はプラトーの倫理觀が全く奴隷の人格を無視したことによつても明かである。彼の道德論は常に行爲と所有との自由を有する希臘の公民によつて組織せらるゝ社會のみを對象としてゐた。彼の見解によれば、勞働は人を高尙ならしめないで却て卑賤ならしめる。何となれば人は勞働に從事してゐる間は、學藝に携はり、道德を磨くことができないからである。此故に希臘公民が奴隷の勞働によつて自らの生存慾を滿すことができるのは、即ち希臘人の文化を高め、國家を隆昌にするための必須條件であつて、此理由によつてプラトーは奴隷制度を是認したのであつた。

かういふ奴隷觀は希臘から羅馬に文化の中心が移つてから後も依然當時の人心を支配して變る所はなかつた。しかも奴隷は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勞働することによつてのみ其存在が認容せられ、勞働するものは奴隷にのみ限られてゐたのであるから、奴隷を卑むことは同時に、勞働を卑むことを意味したことは言ふまでもない。即ち此時代に於ては、奴隷は專ら生存慾のために、公民は專ら行爲慾と所有慾とために生くべきものとされてゐたのである。

奴隷を解放するといふことは、彼等をして生存慾の外に、行爲慾と所有慾とを充すべき機會を取得せしめることを意味する。而して羅馬に於ける奴隷が漸次解放されるに至つた主な原因としては次の二つを擧げ得る。其一つは思想上の變化である。羅馬が帝政時代に入ると同時に羅馬人の道德思想の根幹をなしてゐたストイックの倫理觀が次第に變化して、從來の國家主義は、世界主義に、羅馬人至上主義は四海同胞主義に轉じ、克己勇猛よりも慈悲博愛が尊ばれるやうになつた。此傾向は漸次羅馬人をして奴隷の非人道的境遇に同情を寄せしめる機緣となつて、自發的に奴隷に自由を與へる者が續出するやうになつたのである。（羅馬に於ける倫理觀の變遷に就ては本誌昨年七月臨時號の拙論『人類愛思想としての基督教とストア學派の倫理觀』參照）

他の一つは經濟的理由である。羅馬の政治的勢力が其最高潮に達した時代に於ては、奴隷の員數は羅馬人全體の數より數層倍の多きに及んでゐたが、奴隷に課すべき生産其他の作業には限りがあつて、建築や土木工事も必要なものは既に完成し、個人としても國家としても奴隷の勞力を必要とする分量が、それを供給する分量よりも遙に超過するに至つたのである。併し不必要だからと言つて奴隷を撲殺するわけにも行かぬ。相當の衣食を給せなければならぬ。然るに貴族の富も奢侈と濫費とのために次第に衰へて、多數の奴隷を養ふことを許さぬ狀態になつて來たので、寧ろ彼等を解放して自由に浴せしめると同時に、自らも亦彼等を養ふことの義務から免れることが得策とされるに至つたのである。

解放された奴隷中には學術文藝の方面に名を成したものも少くはなかつたが、其大部分は農工の勞働者となつた。又そうなるより外はなかつた。併し彼等は必ずしも不熟練勞働者ではなかつた。彼等は奴隷として奉仕してゐた間に、既に種々なる生産に從事してゐた其修練と經驗とを利用して、生活の糧を得ることができたのであつた。固より彼等はやはり勞働はしなければならなかつた。併しそれは自由人としての勞働であつた。獨立した一企業者としての、若しくは將來獨立した一企業者になることのできる徒弟職人としての勞働であつた。彼等は未だ所有慾を充すことの喜びは知らなかつたとしても、行爲慾を充すことの喜びは知ることができた。そこに勞働の新意義が生れたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。

三　自由勞働によつて創造されたゴシック藝術

奴隷勞働と自由勞働との相違は、前者が生存慾を充すためにのみ行はれる勞働であるのに、後者は生存慾の外に行爲慾を充すために行はれる勞働であることの點に存するのである。言ひかへれば奴隷勞働はそれが眞實の奴隷たると、名義上の自由人たるを問はず、純然たる勞働者によつて行はれるものであり、自由勞働は企業家としての職能を兼ね有する所の勞働者によつて行はれるものである。

古往今來の工業史上に於て、勞働者が完全に企業家を兼ねてゐた例としては、ギルドといふ組織の下に結束されてゐた手工業の親方だけであつたと思はれる。而して手工業の親方となつた中世紀の工匠の一部は解放された羅馬の奴隷であり、一部は北歐土着の住民であつた。

西羅馬帝國の滅亡は羅馬に於ける白人奴隷の解放を完成した。そして彼等に自由なる勞働が與へられた時に、彼等は工匠として或は農夫として生活の途を求めた。併し、言ふまでもなく當時に於ける工匠や農夫は獨り奴隷若しくは其後裔ばかりではなく、夙に事實上羅馬の覊絆を脱してゐた北歐諸國に於ける住民も亦等しく工匠として又農夫としての生業に就てゐたのである。

併しながら所謂闇黑時代に於ける勞働者の生活は、政治的に支離滅裂の狀態に在つた當時の歐洲に於ては、必ず獨立都市か地方的に割據してゐた王侯か、さなくば領土を有する教會の權力の下に支配されなければならなかつたがゆゑに、一面に於ては權力者の保護を享くべき便宜を有してゐたと同時に、一面に於ては屢々其苛歛誅求を免かれることはできなかつた。彼等は勞働者として決して完全なる自由を——今日に於ても同樣であるやうに——有つてゐたのでは固よりなかつた。併し彼等は不完全ながらも人格として認められ、自己の勞働に對する自主權と、工業上の企業權とを與へられてゐた點に於て、決して往時の奴隷と同一視するべきものではなかつた。殊に此點は農夫よりも工匠に取つて一層顯著であつた。何となれば彼等は概ね都市に居住し、農夫よりは遙に多くの自由を樂むことができたからであつた。

中世の都市の工匠等が自らの安全と利益とを擁護するために案出した一つの組織は所謂ギルドであつた。ギルドの起原及發達に就ては學者の間に異論がある。この異論の大半は大陸に於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けるギルドと、英國に於けるそれとが種々なる意味に於て區別して考察されなければならぬ筈であるに拘らず、その區別が無視されてゐるがために生ずるのではないかと私は考へてゐる。併し今は其問題に深入すべき場合でない。唯吾等は十二世紀に端を佛蘭西の諸都市に發したらしい此ギルドなるものが、企業權を有する工匠の民主的自治團體であつて、しかも彼等は外面に於て權力者に服從し、其權力の庇護を利用しつゝも、内面に於て窃に權力其ものを蝕み、自家の勢力を政治的に伸張することを怠らなかつた一種の無意識的な民主主義運動たるの實を具へてゐたことに於て、皆同樣であつたことを注意しなければならない。數世紀の後に彼等は多數の都市に於ける政治上の實權を掌握しギルドホールは即ち市政府たるの實を有するに至つたことは、今更說くまではなく、人の良く知る所の事實である。

當時の工匠によつて營まれた工業中最も著しい發達を告げたものは建築であつた。何となれば當時の都市は城壁を以て防衞せられ、王侯は堅牢な城塞を設け、敎會は壯麗な禮拜堂を建立するの必要があつたからである。

北歐に於てゴシック建築が生れた時代と、ギルドの組織が創められた時代とが略一致してゐることは、吾等の見逃してはならない事實である。唯ふにルネサンス運動が未だ伊太利の胎内深く行つてゐた頃、既にゴシック建築は北歐佛蘭西に於て發育しつゝあつた。シヤーレマンが佛蘭西からサラセン族を驅逐して帝冠を戴いたのは第九世紀の初めであつたが、これは歐洲政治史の一新紀元であつたと同時に、ゴシック建築の最初の基礎を据ゑたものであつた。彼が其鴻業を記念するために建立したアーヘンのパラッチナの大伽藍は、彼の領土のあらゆる地方から建築術に勝れた工匠を呼寄せて造營させたものであつたが、その出來ばえは彼が豫期した古羅馬建築の再現ではなくして、それとは少しく趣きを異にしたものであつた。勿論それは建築上の新樣式を案出するといふ意識された努力からではなかつたが、疑ひもなく其中に、美術史家の回顧によつて、ゴシックの萠芽と認められるものがあつたのである。

第九世紀に於て萠芽を生じたゴシック藝術は堅實に發育して第十一世紀及其以後の數世紀間に、巴里のノートルダムやキョルンのカテドラルを初めとして幾多の壯麗なる標本を今尙誇らしげに吾等に示すとのできるまでに發達したのであつた。しかも此新興藝術の造就者はギルドの工匠であつた。古代に於ける希臘羅馬の大建築は、一設計者の意志の下に、意思を有た以多數の奴隸の勢力によつて築造されたものである。其點に於てはルネサンス時代の大建築家並に現代の科學的建築技師によつて行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はれる諸建築も亦同様である。然るに羅馬滅亡以後ルネサンス時代に至る約十世紀間に於ける歐洲の建築は、それ以前及それ以後に於ける建築と異り、技術上各々の專門に分れて獨立してゐる數多のギルドの合議制度によつて設計施工されたものであつた。彼等は一人の統制者の指揮の下に、單に器具として働く多數の勞役者ではなくして、己れの創意、考案を十分に主張することのできる地位に置かれてゐた、簡單にいへば、當時の建築事業は民主的な組織によつて經營されてゐたのである。

かくの如き經營上の民主主義が藝術的に表現されたものが即ちゴシック建築の眞髓である。試に純ゴシック式の大伽藍を希臘時代の神殿やルネサンス式の寺院に比較せよ。クラシック建築に特有な正面の大圓柱やルネサンス式に缺くべからざる屋上のドームは貴族主義的精神の表現であつて、前者は希臘人羅馬人が奴隷若しくは異民族に對する唯我獨尊の誇りを示すものであり、後者は法王權の優越や新興國家に於ける專制君主の權勢を示すものと見られるのである。其表現する所は壯嚴の美であり、威壓の力である。ドームを以て獨裁政治に比するならば圓柱は寡頭政治に比すべきであつて、貴族主義を把持してゐる點に於ては乃ち一つである。

然るに眼を轉じてゴシックの建築に對するならば吾等は全く別個の表現に出會するであらう。例へばキョルンの大伽藍やミランのそれを見よ。そこにはドームの代りに競うて天に沖せんとする無數の尖塔の排列があり、圓柱の代りに小さな數箇の扉を飾る複雜な彫刻の交錯がある。殆ど總てのゴシック建築がさうであるやうに、算へ切れぬ垂直線の音樂的諧調が兩寺院を圍繞して、其處にやゝ煩瑣なる併しながら均齊したる特獨なる莊嚴美をいみじくも顯現してゐるのである。然りそれは諧調の美である。從つて一部の誇張によつて他部の價値を侵すことを敢てしない。それは又均齊の美である。從つて各部分のデテールに自由にして快意なる創意が許されてゐる。それはクラシックやルネサンスのやうに單化せられ集中された美ではなくて、綜合せられ調和された美である。民主主義の精神が一貫して其間を流れてゐる。此の如きものがゴシックの藝術であり、ギルド工匠の建築であり、自由勞働の所産であつた。

要するにゴシック藝術は、生活慾にのみ束縛されてゐた人間が、初めて行爲慾を充足することよつて享受する所の歡喜が、いかに熾烈なるものであるかを示現すべき一個のシムボルと看做すべきものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四　資本主義によつて滅ぼされたる　ギルド工匠

ひとり建築師がさうであつたばかりでなく、ギルドを組織してゐた他の種類の工匠も等しく勞働者兼企業家であつた。固より彼等は親方として若干の徒弟や職人を使役してゐたには相違ないけれども、親方自らも亦勞働に服してゐたことに於て、全く徒弟や職人と異る所はなかつた。併し親方は一面に於て企業家であつた。而して彼等の徒弟や職人も亦或一定の年限の後には、必ず企業家たり得べきことに於て親方と同一であつた。從つて親方も徒弟も職人も、決して主人と奴隷、傭者と被傭者との關係に於て相結ばれてゐるのではなくして、全然同一の社會階級に屬し、且同一の階級利益を享有してゐたことに於て、等しく自由勞働者の一群と見るべきであつた。

然るにギルドが非常に發達して都市に於ける工業經營權を獨占したばかりでなく、又都市行政の實權をも掌握するに至つてからは、彼等の中の比較的勢力あり財力ある者は、又資本家たるの實をも併せ有するに至つたと想像せられる。併しギルドは其仲間の或者のみが格段なる特權を掌握することを妨げるために種々なる制度を設けてゐたからして、ギルドの內部が一種の寡頭政治から來るアリストクラシーに惱まされるやうになつたのは、近世資本主義の發達以後に屬する現象であつて、少くもそれ以前に於ては、彼等は資本家として職能を發揮するには餘りに貧弱な財產しか所有してゐなかつたと思はれる。何となれば當時の工業は今日から之を見れば、極めて少數者の勞力によつて行はれる家內工業に過ぎなかつたから、之によつて巨萬の富を蓄積するが如きは、到底不可能な狀態に在つたからである。近世の所謂資本主義的精神は彼等の未だ與り知る所ではなかつたのである。

資本主義なる觀念は、現代に於ては主として工業上の問題として取扱はれるけれども、其精神は最初商業上に現はれ來つたものである。工場制度發達以前に於ては、庶民として巨富を致すの途は單に商業に限らると言つて可かつた。殊に遠距離の運送交易を業とする問屋は其最も優なるものであつた。我國に於ても舊幕時代に一代の財豪と謳はれた紀文奈良茂の徒は何れも問屋業者であつた。十字軍以來地中海の商權を支配した伊太利の商人、北歐の貿易を獨占してゐたハンサ同盟乃至は其後に東西印度の通商を掌握してゐた和蘭、西班牙の貿易業者の如き、悉く皆商人であり、問屋業者であつた。從て工業家として巨富を致すことができるやうになつたのは全く產業革命以後の事で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あると斷じて差支ないのである。

資本主義が中世の伊太利の商業都市に發したことは、近世産業組織の發達と離るべからざる關係を行つてゐる合名、合資及株式の三會社並に複式簿記法が總て其濫觴を伊太利に發したことによつても首肯されることである。殊にゾンバルトの精到な研究は吾等に資本主義の經濟的並に心理的發展の過程を說明して殆ど餘蘊なしと言つて可いのである。唯併し吾等がゾンバルトの資本主義的精神と呼ぶものゝ內容を理解しやうとする時に、注意しなければならぬことは、彼の所謂資本主義的精神と呼ぶものは私が前に揭げた觀念上の區別からすれば、實は資本家的精神と企業家的精神の結合されたものであることと之である。彼が資本家と呼ぶ時には、實は資本家兼企業家たる或人々を意味してゐるのである。例へば彼は其著「資本主義の眞髓」に於て資本主義的精神の發達を敍するに當り、先づ黃金慾を舉げ、次に黃金獲得手段としての暴力、奇術、發明、金貸を舉げ、次に企業家たるに必要なる資格として、征服者たり、組織者たり、商人たる素質を舉げ、更に資本的企業の根本形態として、海賊、地主貴族、官吏、投機師、商人、及工匠を舉げてゐる。併しながら私から之を見れば、これは所有權卽ち無行爲にして利子を得やうとする資本家の立場と、行爲によつて利潤を得やうとする企業家の立場とを混同したものである。私は必ずしもゾンバルトに對する非難として之をいふのではない。實際に於て資本家の職能と企業家の職能とが判然別個の人によつて擔任されるやうになつたのは、工業組織の際限なく擴大した近年の事實であつて、産業革命以後に於ても、資本家と企業家とは大抵同一人の職能として見られてゐた頃もあつたのであるから、まして數世紀以前に於ける歷史的事實として敍述される場合に、此兩者を唯資本家なる名稱の下に結合して考察することは、決して不當とは言へぬのである。

併しながら又他の史實によつて見れば、資本主義の發芽時代に於ても、資本の利子と企業の利潤といふ觀念は既に明確に區別されてゐたと見るべき證左がある。例へば合資會社の起源の如きがそれである。合資會社は中世の伊太利の貿易商人の間に行はれたるコンメンダなる契約に創つたものだと傳へられる。此コンメンダなるものは、或金持と或商人とがあつて、金持は單に資本のみを提供して自らは營業に携らない。そして利益の配當を受けるが、責任は有限である。商人の方は自らは資本を出さずに、(或は多少出すこともあるが)營業を擔任し利益の一部を收得すると同時に無限の責任を負ふ所の契約をいふのである。これによつて明に資本家と企業家との職能が別人によつて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分擔されてゐたことを知るのである。等しくベニスの市民ではあつても、シャイロックは資本家であり、アントニオは企業家であつたのである。

新興企業としての商業は其資本の多額を必要としたことに於て、又利潤の豐富であつたことに於て、到底當時の手工業の及ぶ所ではなかつたに相違ない。しかも當時企業家としての商人によつて賣買せられる貨物の製作者は言ふまでもなく當時の工匠に外ならなかつた。工匠等は次第に消費者の直接注文によつて生産に從事した既往の習慣から遠ざかつて、所謂商品の生産に從事し、その生産品は一反問屋たる商人の手に集中せられた後に、廣く消費者に販賣されることになつたがために、玆に問屋制度と稱する工業上の一新形態を現出するに至つた。其結果として元來勞働者兼企業家ではあつても、資本家としては極めて微力なギルドの親方等は、問屋商人なる資本家兼企業家のために壓迫せられて、其下風に立たざるを得ない事情に陷つた。言ひかへればギルドの工匠は新興の資本主義の作用によつて、彼等の獨立したる企業家としての半面を奪はれることになつたのである。

しかもそれのみでない。彼等は又獨立したる勞働者としての他の一面をも次第に喪失するに至つたのである。それは彼等が際限なく增加して行く職人連が、親方としてのギルドに加入し來ることを防止する手段として、親方たるべき資格に種々なる制限を設けたことに初まるのである。其制限の結果として、一方に於てはギルドの加盟者たることが特權として、勢力或は財力ある少數の親方に限られて、そこにギルド內に於ける貴族主義の色彩が次第に濃厚になると同時に、他方に於ては工匠として一人前の技能を有する多數の職人が、いつまでも親方になり得ないので、被傭者としての地位に膠着してゐなければならぬことになつた。從つて親方は既往の如く自ら勞働に從事しないでも、單に傭主として職人の作業を指揮監督することによつてのみ相當の所得を收めることができるやうになつたのである。此の如くにして彼等は自由勞働者としての傳統的地位を棄てると同時に、己れの下に不自由勞働者の多數を造出するに至つたのである。

ギルドを滅した原因は單純でない。殊に英國と大陸とには其事情に著しい相違のあつたことを認めなければならぬ。併し以上に擧げた諸原因は何國のギルドに對しても恐らく共通に認めらるべきものである。ギルドの生命は自由勞働者たり獨立企業家たる多數人の民主主義的組織の中に宿つてゐた。然るに彼等がその獨立を傷けられ、その自由を奪はれ、而して又其民主主

義をも失うた時に、彼等に殘るものは破滅の外はなかつたのである。

五　重商主義から重工主義へ

伊太利の貿易業者や問屋商人の間に發育した資本主義は、次第に北上して、獨逸、和蘭、佛蘭西、西班牙、葡萄牙の諸國に一しきり繁昌した後に、英國に入つて空前の發展を遂げた。從つて經濟思想史上に所謂マーカンテイリズムを確立したものは獨り英國商人だけではなかつたにしても、マーカンテイリズムの總決算によつて、其利益の主たる部分を收得したものは疑ひもなく英國の貿易商人であつた。世界的帝國を建設した英國の偉大なる功業は、其原因を資本主義的精神に煽揚された貿易商人の黄金慾に歸すべきものである。シュモーラーがマーカンテイリズムの眞髓を說いて、近世的國家の建設を目的とする國民的理想の產物としてゐるのは、唯その結果に於てのみ首肯せらるべきであると私は思ふ。

マーカンテイリズムの發現は當然工業の發達を促した。何となればマーカンテイリズムの信條に於ては、外國品の輸入を絕對に禁遏して、國品の輸出を增進することが、最も重要な政策とせられたからである。國内の生產はあらゆる手段によつて獎勵せられた。其結果として、マーカンテイリズムの最も成功した英國に、工場制度が最も先に施行せられ、機械が最も先に採用せられ、玆に產業革命の端緒を拓いたことは寧ろ自然の成行であつて、必ずしも英國人の事務的天才にのみ歸すべきではないのである。

產業革命の一つの重要な効果として認むべきことは、商業上に發達した資本主義を、工業上に轉向せしめたこと之である。工場制度の出現以前に於ては、工業は何れも分散した小企業に過ぎなかつたから、黄金慾と冒險心とに燃ゆる資本主義的精神の渴望を醫する手段としては餘りに貧弱なるを免れなかつた。從つて其努力は專ら商業の方面に集注せられたのであつた。然るに新に起つた工場制度は工業的企業を家庭から工場に移し、分勞と協働の組織作用によつて、俄かに生產能率を增大せしめ大量生產の利益を十分會得せしめた。其曉に、更に機械力の應用されるに及んで、躍進的に其規模が擴張せられ、主要なる諸工業は所謂大經營となつて、容捨なく手工業を驅逐し閉息せしめた。玆に於て工業は資本主義的精神を鼓舞することに於て毫も商業に讓らざるに至つたのみならず、工業家は同時に商業家としての活動と利益とを併せ占めることができる地位に置かれたゝめに、遠慮ある資本家、達識なる企業家は、寧ろ其志を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

商業よりも工業に主とするに至つたと思はれるのである。

しかのみならず産業革命の當時に在つては、經濟思想も亦其面目を改め、過去のマーカンティリズムは次第に凋落して、インダストリアリズムが漸に勢力を加へつゝあつた。此思想の變化を一言にして盡せば、黄金即ち富の觀念が生産力即ち富の觀念に代り、國家主義が個人主義に代り、保護主義が自由主義に代り、重商主義が重工主義に代つたことを意味するのである。此思想上の變化は産業革命以後に於ける工業の隆昌に大なる間接を與へたもので、資本主義的精神を商業上から工業上に誘引するに與つて力あつたことは爭はれない所である。而して、其結果工業の驚くべき發達を促して、新に工場勞働者なる一階級を生ずるに至り、そこに近世勞働問題の中心を形造るに至つたことは今更めて說くまでもないことである。

六　大工業に於ける企業家の地位

上記の如きインダストリアリズムの興隆によつて、資本家と勞働者との外に、別に企業家專門の職能が、商業的資本主義の時代よりも、一層重要なる經濟的意義を有するに至つたことを認むるのである。由來經濟學上の觀念としては、資本家と企業家と勞働者とは、各別個の「人」として理解さるべきものである。資本家は單に其資本を提供して利子を要求するものであり、勞働者は其勞力を賣つて賃金を取得するものであり、企業者は此資本と勞力とを結合して生産事業を經營し、其報償として利潤を獲得するものである。しかも現實の世界に於ては是等の三者は必ずしも別個の人によつて體現せられるのではない。中世に於けるギルドの工匠は勞働者にして企業家を兼ねたものであつたとは前に述べた。資本主義の勃興以後に於ける通商貿易業の如きは、時としては資本家と企業家とが別人であつたこともあるけれども、それは會社組織の大企業に限られたもので、全體として見れば、商業は同一人が資本家兼企業家として之を經營したものであつたと斷じて差支あるまいと思ふ。それは今日の第二流以下に屬する商人が概ねさうであるに鑑みても明白である。

商業がさうであつたやうに、初期の工場工業がやはりさうであつた。工場工業は手工業のやうに、勞働者兼企業家によつては經營できない。從つて先づ勞働者と企業家とは完全に別人の職能に歸したけれども、企業家と資本家とは直に之を別人の職能に分けなければならぬ必要に迫られはしなかつた。これは學者の所謂マヌフワクチユアの時代であつて、工場制度は勵行されても、人力が未だ能く機械力に置き換へられない、産業革命の前半に相當するのである。

併しながら産業革命が後半期に入り、機械力の普及によつて其事業を完成した後に於ては、資本家と企業家とは次第に別人によつて分擔される職能となつた。其理由は工場制度と機械力との結合によつて、工業の形態が非常に大規模となり、其組織が複雑となり、種々なる機械を運轉し、多數の人員を使用し、對外交渉も對内關係も多岐多端になつて來たゝめに、工業の經營が金持の常識を超越して、特別の才能、智識を有するものでなければ、到底之に當ることができなくなつたからである。等しく資本的企業にしても、商業は工業よりも常識によつて經營され易い。元來商業はシングル・プレーであり、工業はチーム・ウオークである。從つて商業上の勝負は瞬間的であつて個人の直覺的によつて決する場合が多く、工業上の成敗は理詰であつて、團體としての經驗によつて左右され易い。此故に企業的天才は工業よりもより多く商業によつて成功するのである。

工業上の企業家として適當なる資格は種々あるけれども、事業上に必要する專門的智識に通曉することが何よりも大切である。しかも此專門的智識は、工業が機械力を以て行はれるに至つてから、全く常識の範圍を超脱してしまつて、是非とも特別な科學的教養を必要とするに至つた。しかのみならず工業はチーム・ウオークであるから多數の職員被傭者を使用し、適材を適所に配置して皆良く其能を盡さしめるだけの、鑑識力と組織力とに秀でゝゐることが肝要である。いかに個人としては優秀な技師であつても、人を御するの手腕に於て缺ぐる所あつては、到底工業經營者として成功することは難いのである。

かくの如くにして工業經營が特別の智識才能に俟たなければならなくなつたと同時に、工業に必要なる資本は莫大なる額に上つて來た。而して此資本を有する者必ずしも工業經營者として必要なる智識才能を有せず、工業經營者として必要なる資格を有する者必ずしも資本を有せざるがゆゑに、資本家と企業家とは勢ひ別人の職能に歸することになつたのである。

工業上に於ける資本家と企業家との分離作用は、近年に於ける株式會社の發達によつて最も能く之を窺ひ知ることができる、株式會社は其初め航海、通商、殖民に關する企業に於て發達したものである。何となれば通信機關の不備な、造船術の幼稚な蒸汽機關の發明されない以前に於ける外國貿易は頗る危險の多い企業であつたが故に、資本家は自ら其企業に當るの志望なくして、萬一の暴利を僥倖すると同時に、其責任を有限として、企業者が如何なる失敗を演じても累を出資額の程度に及ぼさないために、株式會社を最も便利な組織としたからである。これは資本家が同時に自ら企業家でない場合に於ける當然の用意に出

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

づるものである。

右の如く先づ商業上に發達した株式會社が、後に工業上にも發達して來たことは、工業上の資本家が自ら經營に當らないで之を企業家たる他人に一任することから起る自然の危險を防衛する必要に基くものである。現代の大工業は殆んど全部が株式會社によつて經營されてると言つて可い。又株式組織を以てしなければ到底大資本を集注することは困難である。經營其者には何等の才能も興味も有たぬ多數人が、唯利子の多からんことをのみ目的として、株式會社の資本家となつてゐるのであつて企業家は單に少數の取締役に過ぎないのである。

かくの如くにして資本家と企業家は別人の職能に歸した。しかも此兩者が相結合し、更に勞働者の勞力を加ふることによつて、初めて生產が行はれるのである。而して之によつて新に造られた貨幣價値は、一部は利子として資本家に、一部は利潤として企業家に、一部は賃金として勞働者に三分されることになつたのである。即ち此三者は分離してゐては何れも用を爲さない。相結合し、相協働することによつて、初めて各自固有の職能を果すことのできる關係に在るのである。言ひかへれば、此三者の結合作用によつてのみ、生存欲と行爲慾と所有慾との飽和が實現されるのである。

七　資本家と企業家と勞働者との三角關係

工業上に於ける資本家と企業家と勞働者との三角關係に關する上述の見解からすれば、從來勞働問題を資本家と勞働者との鬪爭と觀じた世上の通説は、法律學的には誤謬であり、經濟學的には不正確であると斷ずることができるのである。

勞働問題を法律學的に觀察すれば、それは產業上の傭主と被傭者との間に締結せらるる雇傭契約の形式及内容に關する問題である。併しながら產業上の傭主は常に必ず企業家であつて決して資本家ではない。實際に資本家が傭主である場合はあるけれども、それは彼が企業家たる資格に於てさうであるに過ぎない。何となれば資本家は單に資本を提供して利子を收得するものであつて、工業の經營に當るものではないからして、自ら直接に勞働者の傭主たるべき筈がないからである。從つて傭主たり得る者は單に企業家に限らるるのであつて、企業家は本來資本家とは別個の「人」として觀念され、又事實に於てもさうである場合が多いのであるから、(少くも大工業に於ては)雇傭契約の形式内容は、專ら企業家對勞働者の問題であつて、資本家の與り知る所ではないのである。

次に勞働問題を經濟學的に觀察すれば、それは生產によつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

増殖された貨幣價値を、如何なる方法及割合を以て、利子と利潤と賃金とに分割すべきかといふ問題である。それは決して資本對勞働の問題ではなくして、資本と企業と勞働との三角的問題である。利子が餘りに高ければ、利潤も賃金も削減せられ、利潤が餘りに多ければ、利子も賃金も削減せられ、賃金が餘りに増さるれば、利子も利潤も削減せられる。即ち此三者は互に利害關係を異にするものであつて、時としては或二者が連衡し時としては他の二者が合縱する場合はあるとしても、理論上決して截然兩箇敵對關係に置かれてゐるものではないのである。

勞働問題を資本家對勞働者の關係と觀ずることが、法律學的にも經濟學的にも不當であることは右に述べた通りである。然るに何故にかく不當なことが多年學者の間に不問に附せられてゐたかといふのに、私の考へる所では、それは次の二つの理由に歸することができる。

第一は學問上の理由であつて、過去の經濟學者が生産の要素を土地と資本と勞働との三つとして、そこに企業といふ一要素を観過してゐたからである。これは曩に述べたやうに、産業革命以後に在つても、十九世紀の前半頃までは工業の帆模が今日の如く尨大複雜ではなかつたからして、資本家と企業家との職能が同一人によつて行はれるか、或は別人であつても企業家の地位は未だ資本家の影に蔽はれてゐた爲に、此兩者を同一視することが、學説構成の上に格別の不都合を生じなかつたのである。然るに其後に至つて、企業家は漸次其頭角を現はし、資本家は寧ろ企業家に操縱せられ、其恩惠によつて居ながら莫大な利子を收得することができるやうな事情になつたので、經濟學者も此事實に刺激せられ、生産の要素として企業を観過したことの非を悟るに至つたのである。併しそれは近年の事であつて過去約一世紀間に流布した舊學説の影響は容易に拔くべからざるものあるがため、今日尚生産の剩餘價値を資本と勞働との爭奪としてのみ觀る者が多いのである。

他の一つは實際上の理由であつて、資本家と企業家と勞働者とは理論上交錯した利害關係の上に立つものであるに拘らず、過去に於ける事實としては、多くの場合に資本家と企業家とが同盟して、力を合せて勞働者に當るといふ關係に在つたのである。此關係が如何にして生じたかは後に說くとして、とにかく此事情が資本家と企業家とを包括して單に資本家と呼び、之に勞働者を對立せしめる形に於て勞働問題を論じることが、格別不都合には感ぜられなかつた理由である。

然らば過去に於て何故に資本家と企業家とが同盟關係に在つたかといふにこれには次に列擧するが如き種々なる原因を算へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ることができる。

第一には、資本家と企業家と勞働者との間に於ける生産價値分配の鬪爭場に於て、勞働者の職鬪力が最も劣弱であつたがために、資本家と企業家とは相爭ふよりも相提携して勞働者の分前を奪取し、之を兩者の間に分配することが得策であつたこと言ひかへれば勞働者の弱味に付込んで、資本家と企業家との間に攻守同盟が結ばれたこと之である。

第二には、資本家と企業家とは概ね同一社會階級に屬し、社交的に友人としての情誼を有し得べき關係に在つたことが、自然經濟的にも一致の行動を取らしめ易かつたこと之である。しかも此關係は社會主義學說が階級鬪爭思想を鼓吹するに至つてから、一層增長された傾きがある。

第三には、企業家中の優秀なる人才は、資本家自らが企業を經營してゐた舊時代に、被傭者として使用されてゐた者の中から躍出したものが少くなかつたので、彼等は企業家として獨立の地步を占めた後も、舊傭主たる資本家に拔き難い關係に置かれてゐたこと之である。

第四には、企業家は資本と勞働とを聯結することによつて生產を行ふことができるのであるが、資本を得ることは、勞働を得ることよりも遙に困難であつたが故に、勞働者の歡心を買ふよりも、資本家を滿足せしめることの方が、必要であつたこと之である。

第五には、企業家が利潤の全部を生活費に投ぜずして其一部を蓄積し、之を資本化して、彼自らも資本家を兼ねるやうになる場合の多かつたこと之である。

以上の如き諸般の事情が、企業家をして、資本家に接近し、勞働者と疎隔せしめた原因であつた。其結果として企業家は出來るだけそれだけ少い賃金を勞働者に與へて、利子と利潤との取分を增大しやうと努めたが故に、勞働者の不平不滿を惹起し彼等の猛烈なる反抗運動を激成したのであつた。

併しながらこれは、過去から將來に亘る永い歷史の上から見るならば、恐らく一時の變態に過ぎない、無論、現在の社會制度や經濟組織が現狀のまゝである限りは、右の狀態も亦其まゝ維持されるに相違ないけれども、此制度や此組織は突然にか、徐々にか、いづれにしても變化すべきものであり、又現に變化しつゝあるのであるから、右の狀態も之に伴うて變化することは言ふまでもない。此變化の內容如何によつては、資本家と勞働者とが同盟して企業家を壓服する場合もあり得るし、企業家と勞働者とが同盟して資本家を壓服する場合もあり得るのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八　生存慾のためにする勞働運動

『共産黨宣言』は其最後の一節に於て、社會革命の結果、プロレタリヤの失ふべきものは鐵鎖の外に何物もないと言つてゐる。實に産業革命以來の工業勞働者の地位は「生存慾」といふ無形の鐵鎖に繋がれて、「所有慾」も「行爲慾」も少しも充たされない機械的勞働に服することによつてのみ、生存することを許されたといふ意味に於て、古代の希臘羅馬の奴隷と、殆ど同一の境遇に在ると言つて可いのである。

古代の奴隷が屢々其主人に對して叛逆を企てたと同じやうに工業勞働者も亦其傭主に對して叛逆を企てた。しかも工業勞働者の叛逆は奴隷のそれよりも遙に秩序的な根强さを以て行はれたがゆえに、奴隷反亂のやうにたやすく鎭壓されなかつたのみか、ます／＼其勢を增し、力を加へて、最早いかにしても打勝つべからざる大勢力を形造るに至つたのである。これが今日見る所の勞働運動なるものである。

過去に於ける勞働運動は、大部分の力を生存慾のより多き滿足に向つて傾注してゐた。それは勞働者が資本家と企業家との同盟軍を敵として戰はなければならぬ場合に於ては、蓋し當然の爭戰であつたのである。中世の手工業に於ては、勞働者は同時に企業家たることによつて其行爲慾を滿足せしめることができ、又それによつて自由勞働の歡喜を味ひ、ゴシック建築の如き民主的藝術を創造する力を養ふこともできたのであるが、近代の工場工業に於ては、勞働者が同時に企業家たることは全く不可能のことであつて、彼等は全くそれを要求の外に置いたのである。資本家たることに於ては固より望みがない。そこで彼等は自ら資本家たり企業家たらんとするの志を棄てゝ、唯彼等から少しでも多くの分前を得て、自己の生存慾を豐かにしたいといふ方面にのみ其努力を向けたのである。これ過去の勞働運動が雇傭條件の改善、就中賃金値上を中心として行はれた所以である。

勞働運動の中心的題目が賃金の値上に在つたがゆゑに、これに對抗する傭主側も亦其防戰の主力を此點に置いた。これ十九世紀中に於ける工場法及其他の勞働者保護立法が、時間の制限傷害の賠償、其他種々なる雇傭條件に於て、傭主の自由に制肘を加へたに拘らず、唯獨り賃金の法定に及び得なかつた理由である。

勞働者は賃金の値上を通じて生活程度の向上に努力し、又其努力は組合組織と團體交渉との手段を通じて多少の効果を擧げたことは疑はれないのである。併し彼等は之のみで滿足すべき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でないことを徐々に悟つて來た。彼等は社會主義者の學説に啓發されて、次第に社會上に於ける自己の地位を正當に理解しやうと努めるやうになつた。具體的に言へば、彼等は其努力によつて多少づゝ雇傭條件が改善せられ、生存慾が充足されたからと言つて、何處までも彼等は資本家たり得ず、企業家たり得ずして、勞働者の地位に膠着してゐなければならぬものとするならば、それは少しも彼等を繋ぐ鐵鎖を斷ち切る力とはならないことに氣付いて來たのである。玆に於てか彼等は、少くも彼等の中の思想的に最も進んだ分子は、雇傭條件改善の運動から社會改造の運動に進んで行かうとするに至つたのである。

九　所爲慾を無視した國家社會主義

經濟學者すらが勞働問題を資本對勞働の關係としてのみ説明してゐた影響として、新に興された勞働者の社會改造運動が專ら資本家征伐を其旗印としたことは怪しむに足りない。資本主義を絶滅するといふことは、資本其者の絶滅を意味するのでなくして資本家によつて私有せられることを禁じることは言ふまでもない。既にそれが資本家といふ個人に禁じられる以上は、勞働者といふ個人に對しても同樣に禁じられなくてはならない。そこで社會改造運動者の間に資本の公有といふ標語が案出されたのである。

併しながら資本の公有といふことは畢竟勞働者が全體として(勞働者だけの全體でなく、消費者をも含む國民の全體として)資本家でありたいといふ慾望の學説的表現である。生存慾から所有慾への飛躍である。唯それが個人として生かし、社會として所有しやうとする點に於て、倫理的價値を有するのである。

此運動の標的は國家社會主義者しくは集産主義(コレクチビズム)の名を以て呼ばるゝものであるが、其主張の中に吾等の認め得る缺陷が二つある。其一つは、それが公有にされたる資本の管理者としての最高權力を、生産者以外の消費者をも包含する單一なる國家に認めて居るといふこと之である。從つて生産者としての勞働者は常に國家の統制の下に服從しなければならぬ。しかも國家の統制は民選の議會によつて行はれる。議會は地理的選擧區によつて選擧された議員によつて支配される。地理的選擧區に於ける選擧民は必然的に消費者としての共通の利害を有し、生産者としては共通の利害を有し難い立場に在るから、此方法によつて選擧された議會は要するに消費者の利害のみを標準として、若しくは其利害に重きを措いて一切の事物を決定することになり易い。其結果國家社會主義は其實國家資本主義になつて、勞働者は搾取の當事者が個人から公法人に代つたゞけで、資本主義

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の誅求に惱まされる點に於ては、前後何等の相違もないことになるのである。殷鑑遠からず、今日國有や市有にされてゐる諸事業の從業員の地位に顧れば直に領解されることである。

次に國家社會主義は、何人が企業家の地位に在つて國有工業の經營を擔任するかといふ問題を餘りに輕率に取扱つてゐる。資本の公有といふことは、企業其者が直に公營となることを意味するのではない。何となれば國家が資本を投じて、私營企業存立を保護するが如きことも現に行はれてゐるからである。併し國家社會主義の立場からは、資本の公有は當然企業の公營を意味することは明かであるから此點は問はない。併し公營企業は當然勞働者が企業家の地位に上つて之を管理することを少しも意味しはしないのである。之が管理に任ずる者は特別の智識又は經歷を有する高級官公吏に限られて、普通勞働者は毫も經營に參加することを許されない場合があり得るのである。尤も此場合に於ける官公吏は勞務に對して報酬を受くる被傭者としては、勞働者と同じ地位に在るものであるけれども、彼等は經營者としての行爲慾を滿足せしめることができる點に於て明に企業家と目さるべきものである。若し企業家といふ語を利潤の獲得を目的とする私營工業の經營に限るものとするならば、公營工業の經營者を企業家と呼ぶことは適當でないけれども、少くも彼等は官僚化したる被傭者であつて、其社會上の地位と、其行爲の內容とから見れば、彼等は決して勞働者と一列に置かるべきものでなく、全く企業家と同一視されなければならぬ者である。果してさうだとすると、國家社會主義は、ひたすら資本にのみ着目して企業に注意することを怠り、其結果として勞働者が公營企業の下に依然生存欲にのみ拘束せられ、毫も所爲欲を滿すことのできぬ立場に縛り付けられる危險を氣付かなかつたと言へるのである。

十　社會としての三慾飽和と個人としてのそれと

國家社會主義が行爲慾の無視に歸着する一つの缺陷を有することが明瞭になつてから、此缺陷を補修するために新に案出された社會改造思想が三つある。それはサンヂカリズムと、ギルド社會主義とボルセビズムとである。

是等の三主義は生產者が資本家と企業家と勞働者との三職能を兼行して、そこに社會としての所有慾と行爲慾と生存慾との完全なる飽和を見出さんとする點に於て悉く一致してゐる。彼等に相違する所は主として對國家の關係に在る。サンヂカリズムは國家の存立を否定し、勞働組合及其經濟的聯合體の外に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

消費者をも包含する國家の法的權威を一切認容しないものである。ボルセビズムは窮極の理想に於て國家を否定する點に於てはサンヂカリズムと同樣であるが、唯其理想への過程に於て必然存在せなければならぬ筈の現實國家を認容する點に於て、サンヂカリズムよりは幾分か妥協的であると言へる。併しさうすることによつて國家社會主義と同樣の危險に陷ることを避ける手段として、彼等はプロレタヤの獨裁政治といふ獨特の安全地帶を設定するに至つたのである。即ち彼等の認容する國家に於ては、あらゆる公的生活をプロレタリヤのみによつて組織される機關に獨占すると同時に、プロレタリヤが單純に消費者としての地位に在ることを許さないで、幼老癈疾にあらざる限りは、必ず何等かの勞働に服することによつて、生產者としての資格を保有せしめることを强ゐてゐる。此方法によつて彼等は國家資本主義と官僚企業とを排除しやうと企てたのである。

ギルド社會主義は單に國家を否定しないのみか、國家生活の全般を抱擁する最高法的權威としての其地位をも亦あながち否認しやうとはしないのである。唯彼等は富の生產と分配とに關する限りに於ては、國家からギルドと稱する生產者團體に向つて、完全にして恒久的なる自主權の賦與を要求するのである。而して何物を、幾何、如何にして生產すべきかを、又如何にして分配し、處分すべきかを全然ギルド及其聯合團體に於て決定施行しやうとするのである。勿論此場合に於ても全く消費者の要求を無視することは不必要でもあり、又生產者自身が、同時に消費者である以上は、國民全體としての生活と、ギルド內部の經濟との間に扞格を生ずることは、生產者消費者双方に取つて不都合なことに相違ないから、ギルドは其自主權を侵害されない程度に於て、國家からの要求に傾聽することを惜まぬだけの雅量を有つであらう。併しそれ以上に進んで國家がギルドを制肘することは、決して之を許すまいとするのである。

此の如く是等の三主義は對國家の關係に於て其主張を異にするけれども、生存、行爲、所有の三慾の融合調和した一社會組織を造就しやうとする努力に於ては全く同一であつて、是等の三主義の何れが世界を征服すべき可能性を最も多く有するかは別問題として、ともかく彼等は等しく其理想とすべき所を把握してゐると認めなければならぬのである。

併しながら假令彼等が將來其理想を實現し得た場合があつたとしても、それは社會全體としての三慾の調和であつて、各個人が之に依りて亦其三慾の調和を實現し得るか何うかは、全く別個に考察しなければならぬ問題である。此論文は其問題には觸れない。唯數言私の所感を附加へて置きたい。吾々の有する

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生命は、無限の空間と時間とに亘つて唯一箇である。吾々は何物にも代へ難い此一箇の生命を尊重愛惜しなければならぬ。從つて吾々が個人としての充足圓滿を離れて社會の充足圓滿を想像することは不可能であると言つて差支ない。果して然らば社會としての三慾飽和が個人としての三慾飽和に合致する世界が見出されない間は、吾々は決して社會改造事業を中止すべきではないと同時に、個人改造事業に一層の努力を拂はなければならぬのである。しかも右のサンヂカリズムとボルセビズムとギルド社會主義との何れもが、現在の社會制度に比較して如何程優れてゐやうとも、まだまだ吾々の理想には遙に距離のあるものであることを疑ふわけには行かない。

吾々は又吾々の子孫はサンヂカリズムや、ボルセビズムや、ギルド社會主義や、其他之に代つて將來發生するであらう所の幾多の主義の廢墟を踏み越えて、更に更に其進行を續けるであらう。生存慾と行爲慾と所有慾との飽和を理想として。永遠に。

（終）

一時の反動現象に昏迷する勿れ

——軍備の基礎を國際主義と對外正の上に置け——

水野廣德

一　反動時代が來た

反動時代が來た。世界的反動時代が來た。戰時中より引き續き帝國主義、軍國主義を持して歐洲の平和を脅やかせる佛國は云ふ迄もなく、伊國にはムソリニの暴力的政權掠奪に依つて保守的國粹黨内閣が成立し、英國にはロイド・ジョージの聯立内閣倒れて、帝國主義保守主義の色彩強き統一黨が議會に絕對多數を制し、近東には快傑ケマル・パシヤの蹶起に依りて、バルカンの天地動もすれば再び戰塵の漲るを見んとして居る。我が日本に於ても亦社會運動、勞働運動に一頓挫を來した樣な觀があると共に、反動思想團の跋扈が漸く露骨となつて來た。貴族院内閣の次には俠客内閣が出來るかも知れぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

華府會議に於ける海軍縮小協定は、會議終了後既に一年ならんとするも、佛國の愚圖つきにより尚ほ未だ條約の効力を生じない。軍備制限を主目的とせる國際聯盟は、小田原評定四年に及ぶも尚ほ未だ軍備縮小の成案すらも見出し得ない。一時世界を風靡したる平和の叫びは今や漸く影薄く、聲消へんとしつゝある。一時世界を燒き盡さんとしたる各種の進歩思想は今や將に保守思想の脚下に蹂躙せられんとしつゝある。砲火歐洲の天地に絕へてより年を迎ふること僅に五回、進歩思想の勃興何ぞ夫れ急にして其の凋落の何ぞ夫れ速かなる。保守的なる帝國主義者や、軍國主義は『夫れ見たことか』と、平和論者を空想の幻覺者と冷笑しつゝ、新正と共に一陽復來の春を祝して居ることであらう。

二　向上の本能と滿足の惰性

動あれば必ず反動あり、壓あれば必ず反壓あるは、力の原則である。而して反動や反壓やは、時に摩擦の抵抗となつて小刻みに動と壓とを管制することもある。又時に彈力の反撥となつて一時に動と壓とを跳ね返へすこともある。

人間には自己向上の本能がある。此の本能あるが爲めに、文明が開發せられ、社會が進歩する。此の本能の心理的表現が即ち進歩思想である。人間は此の進歩思想の活動に依つて常住不斷に社會を前へ〳〵と押し進めつゝある、上へ〳〵と押し上げつゝある。故に此の思想を抑壓し、撲滅すれば、社會の進歩は停頓し、人類の向上は阻害せられる。

人間には自己滿足の惰性がある。此の惰性あるが爲めに、因襲に執着して破壞を恐れる。此の惰性の心理的表現が即ち保守思想である。人間は此の保守思想の發動に依りて何時までも、社會を現狀の儘に引留めんとて力めて居る。故に此の思想を破壞し撲滅すれば、社會の秩序は急變し、人類の安靜を脅やかされる。

進歩思想は社會を前に推し進めんとする動力である。上に押し上げんとする壓力である。保守思想は之に抵抗し、之を反撥せんとする反動力である。反撥力である。而して普通の場合に於ては、進歩思想は恰かも長距離競走の如く、緩く永く不斷的に働いて居る。故に保守思想は摩擦の抵抗となつて、進歩思想をば絕へず小刻みに制肘しつゝ、減速度を以て社會を前進上昇せしめる。されば社會前進の速度は、加へられたる動壓力の大小即ち進歩思想の强弱に正比し、摩擦の抵抗力の大小即ち保守思想の强弱に反比する。

然るに特殊の場合に於ては、進歩思想は恰かも短距離競走の如く、急激に猛烈に發動し、保守思想の抵抗を突破して社會を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不自然に急進せしむることがある。併しながら斯くの如き突發的思想の力は、多くの場合に於て永續せざるのみならず、其の力緩む時は保守思想に依つて反撃反撥せられるが常である。歐洲大戰は人類社會に於ける非常特別の場合であつた。戰爭と云ふ破壞的大苦煉に依り、國家社會の缺點陷所を露骨に暴露したる後に於て、新文明を創造建設せんとする各種の進歩思想が油然として發現するは當然の勢である。而して此等の新思想は戰時非常の際に於て勃發湧出したるだけ、夫れだけ、其の性質に於て自ら精煉鍛冶を缺けるものあるを免れない。急進過激の傾あるものあるを免れない。されば現代の人間に對しては或は直に適用し難きものあるかも知れぬが、理想として、眞理としては、そこに考ふべき充分の價値があると信ずる。

三　戰爭の産みたる唯一の生産物

新らしき思想は常に必ず新らしき生命から生れる。即ち舊き慣習に未だ泥まざる若き人と、因襲に拘はれざる若き心の持主から發動せられる。然るに何れの時代に於ても權力の地位に在る者は、因襲の惰性に富む舊き人である。故に新らしき思想の發達成育には、常に大なる抑壓と迫害とがある。唯幸に舊き者は天の攝理に依りて自然に凋落し、自然に衰滅し、いつしか新らしき人の世の中となる。併しながら其の時には更に進みたる新らしき思想が既に發生して居る。昨日の新思想は今日の舊思想である。今日の進歩思想は明日の保守思想である。日本に於ても三十年前の新思想は現代の舊思想である。現代の危險思想なるものも恐らく三十年後の保守思想となるであらう。國會開設當時自由民權を大呼したる當年の進歩思想家が、今日普選尚早論を唱へ居るなどは其好適例である。幾年かの後、世界が共産化せざることを、今日何人が克く斷言し得るであらう。

無形の思想は風の如く、不斷に、連續に、後から後へと新らしきものを發生する。然るに有形の社會は新舊思想の衝突抗爭に依り、波浪の如く一高一低、一張一弛しつゝ、進まぬが如くにして而かも其の波動を次から次へと傳へて行く。戰後新思想の暴風に依りて吹き高められたる社會の波は、今や其の頂點に達して再び落下せんとしつゝある。併し次の新らしき波は已に既に高まりつゝある。

世界は今將に反動時期に入つた。平和の鐘の聲漸く低くして軍國の砲の響動もすれば高からんとして居る。併しながら是れ豫定の變遷である。豫期の推移である。平和を欲求する吾人は毫も失望するを要しない、落膽するを要しない。現代の世界は絕對平和の理想郷を距つること尚ほ甚だ遼遠なりとは云へ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歩一歩平和の域に向つて進みつゝある。今日の世界を以て之を大戰前の世界に比すれば、そこに著しき進歩の跡が見へる。世は今や反動時期に入つたりとは云へ、今日の保守思想は之を戰前の保守思想に比すれば遙かに進んで居る、無學無識なる資本家も最早や勞働者を以て物言ふ機械とのみ見ることは出來なくなつた。無知無思想なる政治家軍閥も最早や理由なき侵略戰の不可能なるを知つて來た。横暴專恣なる特權階級も漸く人間平等の眞理に自覺めかけて來た。伊國の國粹黨内閣の政綱には社會主義の色彩が濃やかである。英國の議會には勞働黨が第二位を占めて居る。

十丈の深坑は一簣の土では埋まらない。併しながら假令埋まらざるにもせよ、入れた土だけは必ず淺くなる。如何に打たれても壓されても、元の深さに復へることはない。二簣の土は二簣の深さを、三簣の土は三簣の深さを埋めるに極つて居る。五個年間に亘る歐洲大戰に依つて激成せられたる人間思想の進歩は平時に於ける五十年間の進歩にも匹敵するであらう。反動思想に依つて如何に強打され、如何に強壓さるゝも、社會は再び元の深さに陷ゐることはない。加之、反動思想に依つて打たれ壓さるゝが爲めに、投ぜられたる土は搗き固められて、社會は確實に進歩することが出來る。直接間接に、二千五百萬の人命と、六千五百億圓の金力とを消盡したる歐洲大戰は、人類の一大慘事として悲しむべく、文明の一大破壊として惜しむべきも、之に依つて平時に十倍する社會の進歩を遂げ得たりとすれば、此の大慘事大破壊も亦大なる意義を有するものと認めることが出來る。人間思想の進歩こそ、此の不生産なる大戰爭の生みたる唯一の生産物である。

四　戰爭か、平和か

世界の將來が果して絶對平和であるか、或は永久の戰爭であるかは、尙ほ蠻性に富める現代人の知識と道德とを以てしては豫斷することが出來ない。併し若し此處に人あり、戰爭に依つて國家若くは個人として何等利益する處なしとの前提の下に、汝は戰爭を好むか平和を愛するかと問はれたりとする。苟くも現代文明人と稱せらるる人間は、血を見て悅ぶ變態心理の狂人以外、平和よりも戰爭を好むと答ふる者は恐らく無いであらうと信ずる。卽ち今の文明人の好む處、欲する處、愛する處は、戰爭にあらずして平和である。然るにも拘はらず今日尙ほ戰爭の絕へぬ所以は、國家として、若くは個人として、戰爭に依つて物質的に或は精神的に利益を得んとするが爲めであると言へる。嘗て國際關係が尙ほ單純にして、國際制裁が尙ほ微弱なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し時代に於ては、戰勝者は戰敗者を掠奪することに依つて、多大の利益を貪ぼることが出來たのである。從ふて帝國主義が鼓吹せられ、侵略戰爭が慣行せられた。之が爲め、或るものは侵略を行ふが爲めの軍備、他のものは侵略を防ぐが爲めの軍備が必要であつた。斯くて競爭的軍備の擴大が行はれたのである。

然るに現代に於ては國際關係――就中經濟關係――が錯綜密接したる結果として、世界は國家分立より國際共存の域に進みつゝある。乃ち國家的自給自足より國際的分業に移りつゝある。故に戰敗國の衰弱は忽ち戰勝國の繁榮を阻害することは、歐洲戰爭が之を實證して居る。加之、不完全ながら國際道德觀念の發達と國際協調精神の發生とに依り、國際制裁なるものが實現して來た。事の當否は別の問題とするも、露國の共產主義に對する世界的絕交や、佛國の對獨强壓に對する國際制肘の如きが其の實例である。是等の關係に依り、今や戰勝者も猥りに其の吞噬の慾を恣まゝにすること能はず、强者も擅まに侵略戰を開始することが出來なくなつた。殊に科學の進步に伴ふ戰爭の大規模は至大の戰費を要するに至り、假令勝つも戰費を償ふことが出來難くなつた。要するに、戰爭に依つて國家の利益を得ることは、今後益不可能となると共に、掠奪を目的とする侵略の戰爭は之を行ふことが困難となつた。戰爭に依つて國家の利益を擧げ得ずと云ふことが國民に徹底すれば、進步せる立憲國に於ては戰爭を最小度に局限することが出來るのである。

之に反し政治の進步せざる國、例へば資本家或は軍閥の如き戰爭に依つて個人的利益を受くる者に依つて政治が左右さるゝ國に於ては是等の人間が國家の利害を無視し、個人の利益の爲めに戰爭を歡迎し、戰爭を挑發する場合が多い。故に世界の强國と稱せらるゝ國の中、唯一國なりとも斯くの如き政治的未開國が存する時には、他の國は何れも脅威を感ぜざるを得ないのである。されば一般國民が如何に平和を好愛し、平和を希望するとも、其の國の政治の局に當る者が斯くの如き思想を抱いて居るか、若しくは其の國の政治制度が斯くの如きことを爲し得る如く作爲せられあるならば、其の國は軍國主義、侵略主義の危險國と非難せられても辯解の辭は無いのである。

我が日本人は、我が國の歷史より說いて頻りに日本國民は軍國主義にあらずとか、大和民族は平和を好愛するとか言つて、外人の誤解を除くに汲々として居る觀がある。併しながら一度其の政治制度と、政治の實情とを窺へば、政府も議會も決して國民の意思を完全に代表して居るものでない。即ち日本の政治は軍閥に依つて左右せられ、日本の議會は資本家に依つて操縱せられつゝあることは明らかである。日本人が如何に聲を大に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、喉を枯して辯明するも、斯かる制度と實狀との存する限り、到底他の誤解を解くことは出來ない。誤解する者も惡いか知らぬが、誤解さす者は尚ほ惡いと云はねばならぬ。數年前讀んだ米國の排日記者の書いた書物の中にも、日本人の好戰種族であることをいろ〳〵な極端な例を擧げて書いて居た、中には吾人より見れば誠に噴飯の至りに堪へぬこともあつたが、宣戰講和の權を國民が握れる民主主義の米國人より考ふれば、斯かる誤想を抱くのも或は無理でないかも知れぬ。

過去の歷史を見るに、幸に戰爭に勝ちたる場合には軍事當局者は勿論、政府の要路者に至る迄も授爵叙勳、國家の重賞に浴したるに拘はらず、不幸にして敗戰の場合には統帥上の責任者以外、殆んど其の罪を蒙むらさることが常であつた。我が國に於ても歐洲戰爭に關係ある人々や、西伯利亞出征軍司令官等は何れも其の功を錄されて國家の恩賞を貪れるにも拘らず、政策としては大失敗たる西伯利亞出兵、統帥として大恥辱たる尼港の慘劇に對しては、唯一人の責任者さへも出して居ない。斯くの如き責任の不明確、賞罰の不嚴明が、動もすれば要路に在る政治家並に軍人をして、猥りに兵を弄せしむるに至るのである。最近外電の報ずる處に依れば、希臘新政府は對土敗戰の責任者として國王を審判に附し、前閣員並に軍事當局者を死刑に處したとある。

斯くの如き極端なる制裁が果して當を得たるや否や、或は不純なる政爭の復讐が其の間に含まれ居るや否やの研究は別とし、政府並に軍事當局者に對し、嚴酷なる敗戰の責任を課するの先例を作りたるの一事は、少くとも野心家の好戰心と、利己心とを抑制し、以て國際戰爭の勃發を減ずるに至らしめたる點に於て、其の効果頗る大なるものがある。

五　制度的軍國主義の日本

日本人の熱心なる辯明に拘はらず、世界は今尚ほ日本を以て最も危險なる軍國主義國と認めて居る。是れ一は日本の軍閥政治、軍閥外交の招きたる禍であるが、一は亦日本に於ける政治の制度と、政治の實狀とが齎らしたる罪である。凡そ當今に於て軍國主義の色彩最も强きものは佛國である。佛國はアノ狹き國土を以て、アノ尠き人口を以て、アノの窮迫せる財政を以て、今尚ほ七十餘萬の大陸軍を擁し、頑として縮小を肯ぜさるのみならず、華府會議に於ける海軍協定の批准をすらも拒否せんとしてゐる、假令對獨關係ありとは云へ、僅に十萬の獨逸軍に對して七十萬の軍隊は餘りに多きに過ぎる。其の軍國主義の濃厚强烈なる點に於ては實に世界一である。然るに世界は佛國を責む

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ること比較的緩にして、我が國を責むること頗る嚴である。斯くの如きは唯單なる人種的偏見に依るものと、他人をのみ責むべきでない。日本の國家制度と政治の實際とが、佛國以上に軍國主義的にして他を脅威することの大なることを反省せねばならぬと思ふ。

佛國の軍國主義は今の佛國國民の意思である。佛國政府の執れる政策は國民意思の代表である。佛國政府は國民に強要せられて、已むを得ず軍國主義的政策を執つて居ると云ふのが寧ろ正しき見解であらう。そこに國民的背景がある。國民的了解がある。國民的後援がある。之に反し、日本の軍國主義は今の日本國民の意思でない。或は日本政府の意思でも無いかも知れぬ。唯一部の軍閥に強要せられて、已むを得ず軍國主義的政策或は制度を守つて居ると云ふのが正しき事實であらう。そこに國民的背景も、了解も、後援も無い。實質的に軍國主義なる佛國が軍國主義と非難せられるは當然の次第で、國民も已むを得ずと諦めるであらう。世界も亦或る程度まで佛國の境遇を諒とするところがあるであらう。然るに制度的軍國主義なる日本が軍國主義と攻撃せられるは、國民の迷惑此の上もない。しかも世界は何等の同情を日本に寄せぬであらう。

日本國民が佛國々民の如く、自國の生存上眞に軍國主義の必要を感じ、列國の反感憎惡を意とせず、斷々乎として之に應ずる政策を執るならば、國民として尙ほ自ら慰め、自ら覺悟することが出來る。然るに日本國民が軍國主義を好まぬにも拘はらず、誤まれる制度の爲めに、或は其の缺陷に乘ずる一部の野心家の爲めに、心にもなき軍國主義の惡名を負はされ、之が辯解に汲々たる如きは、餘り賢き國民とは云へぬ。

吾人は大多數の軍人は素より、政界の名士或は學界の識者と稱せらるゝ人々の口より、屢次の如き言を聞かされる。曰く、

我が日本は物資財力に於ても、文化施設に於ても、歐米諸國に及ばざること遙に遠い。然るにも拘はらず、今日我が國が世界の一等國に位し、五大強國の中に入り、三大強國の一と數へらるゝ所以のものは、唯一強大なる軍備あるが爲めである。若し日本より軍備を取り除かば、一朝にして二等國三等國に落下せざるを得ない。故に日本の國威と地位とを保持する爲めには、先づ第一に軍備の充實を圖らねばならぬ。

と。而して之が地方の青年團や、在鄉軍人會に於ける軍事講演なるものゝ御極まり文句である。

日本が今日の國際的地位に達し、國際的に稍や重きを爲せるは主として軍備の力に依ること、名士の言を待つまでもない。併しながら過去は兎に角、將來に於ても尙ほ軍備のみに依つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國位を維持し、國富を増進せんとするは、時代を解せず、時勢を知らざる、大なる謬想錯覺である。軍備に依つて國位の維持と國富の増進を圖るは、是れ軍備第一の軍備立國策である。軍備立國策は他の言葉を用ゐれば軍國主義である。軍國主義が國際平和の脅威者として現代の世界に容れられざるは、更めて説くまでもない。

六　砂上樓閣の軍備立國策

爰に人あり、「己は財産もなく學問もなければ唯腕力強きが故に、同僚間に重きを爲す、されば財産よりも、學問よりも、先づ第一に腕力を鍛はざるべからず」と云ふ。成る程、腕力の是認せられたる野蠻時代に於ては是も一つの處世法である。腕力の尊重せられたる未開時代に於ては是も一つの護身法である。併しながら腕力の否認せられたる文明社會に於て、尚も腕力のみを頼りに世を押し渡らんとするは、無頼の壯士として世の指彈と擯斥とを受くるを免れない。腕力の價値を失したる開明時代に於て、尚ほも腕力のみを信じ空拳以て短銃に抗せんとするは、無知の蠻勇にして身を誤まるの基である。日本の國情と國力をも省慮せず、今の時代と時勢をも考察せず、唯過去の成功に眩惑して、今尚ほ軍備立國主義を唱ふる如きは、正に之に類するものである。

世界は最早や不法なる武力侵略を許さない。世界は最早や空拳の腕力を恐れない。兵器の進歩と、戰爭の發達とは、軍備と經濟とを相關ならしめた。今や經濟なくして軍備は自立し得ない、經濟なくして戰爭は遂行し得ない。確固たる經濟の基礎の上に立たざる軍備は砂上の樓閣である。山田の案山子である。結構如何に大なるも到底戰爭の暴風に堪へることは出來ない。外形が如何に壯なるも鳥以外に對しては嚇しは利かない。物質並に精神的文明なくして、唯軍備のみに依りて國家を維持せんと説く論者は、砂上に樓閣を造らんとするものである。案山子に依つて瓜泥棒を防がんとするものである。見懸倒しの樓閣を砂上に築かんが爲めに、鳥嚇しの案山子を瓜畠に立てんが爲めに、國費の四五割を投じて惜しまざる國は名譽である。國民は光榮である。見よ田園は荒れつゝあるではないか。産業は沈みつゝあるではないか。汝の貧民は飢に泣きつゝあるではないか。汝の子弟は就學難に苦せつゝあるではないか。

世界の交通通信機能の發達し、諜報調査機關の整備せる現代に於て、一國の經濟資源と經濟實情とは世界に公知せられて居る。如何に日本人自ら經濟資源を無視し、經濟實情に瞑目し、形體のみ尨大なる軍備を整ふるも、其の地盤が果して堅である

か秒であるか、其の實體が果して人であるか案山子であるかは日本國民以外のものは悉く知つて居る。英國と米國とは、日本に鐵と綿花とを供給せず、日本の生糸絹布を購入せざれば、日本を經濟的に屈伏せしめることを知つて居る。支那は日本に鐵鑛鐵塊を送らざれば、日本を軍事的に苦しめ得ることを知つて居る。何處に軍備立國の基礎があるか。伊勢の神風や、拔刀隊の日本魂を説くには餘りに時代が進み過ぎた。

七　現代的有意義なる軍備

併しながら吾人は現代の世界形勢の下に於て、現代の國際狀態の下に於て、更に現代の人間心理の上に於て、國家軍備の絕對不要を唱ふるものでない。國際聯盟が軍備縮小の標準を決定し得ざるは何故であらう。佛國が華府會議の協定を批准せざるは何故であらう。是れ各國が成るべく優越なる軍備を保たんと欲するが爲めに外ならない。今の時代は掠奪の目的を以て、不意に或は惡意に他人を襲ふことは出來なくなつた。町の散歩にまで危險なる大刀を提げる如き軍國主義は容れられなくなつた。併し決鬪は尚ほ許されて居る。而かも決鬪の原因たるべきものは尚ほ多く存して居る。されば正當の理由ある場合には、決鬪を挑む爲めに、或は挑みに應ずる爲めに、相當の武器を携ふることは必要である。然らば國家間の決鬪即ち戰爭の原因たるべきものは何であらうか。

將來に於ける戰爭の原因たるべきものは、先づ第一に國際間の經濟上に於ける利害の衝突であらう。掠奪的侵略戰の許されざる今日以後に於て、國家の發展は一に經濟の發展に待つ外はない。從ふて國際間に於ける經濟衝突は今後一層頻々として發生するであらうと思はれる。併しながら經濟の根本目的は物質上の利益である。故に武力の戰爭に依つて被むる物質的損害が戰勝に因つて獲る經濟利權よりも大なることを覺るに至れば、經濟問題の爲めに武力の戰爭に訴ふることは、漸次無くなるであらうと固く信ずる。殊に經濟の競爭は經濟の力に依つて勝負を決することが出來る。

次に戰爭の原因たるべき第二の問題は、人種的偏見と、國民的猜忌とである。此の問題は主として人間の感情に基づくものなるが故に、教育道德等に依つて人心を改良する外に之を除去する道は無い。併しながら斯くの如き偏見猜忌の生ずる所以は主として國際狀態の不平等に歸因するのである。日本人が米國人に對して人種的偏見を責むるは、日本の土地が狹小貧弱にして移民を米國に送くるが爲めである。若し日本が米國の如き廣大豐富なる領土を有し、移民を海外に出すの必要なければ、斯く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の如き問題は發生せざる譯である。支那人が日本に對して國民的猜忌を抱くは、過去に於る日本の對支政策の結果のみでなく、小さき日本が國際的に優位を占めて居ると云ふ嫉妬心も幾分加はつて居るであらう。左れば之を排除する爲めには、國際デモクラシイより更に進んで、國際社會主義にまで徹底せねばならぬ。併し斯くの如きは將來或は實現することありとするも、前途尙ほ頗る遼遠にして今日の問題ではない。

日本人の多くは、印度の獨立運動者を以て志士と稱し、之を尊敬するも、朝鮮の獨立運動者を目して不逞と呼び、之を虐待して居る。英國人の心理は正に之と反對であらう。米國人は愛蘭の獨立運動に同情したるも菲律賓の獨立を許さない。米國の排日に對して抗議したる日本の官憲は、支那勞働者を强制的に放逐した。公平なる見地に立つて之を見れば、明らか過ぎる程矛盾撞着せる不合理なる心理である。而かも斯くの如き矛盾せる、斯の如き不合理なる心理を稱して、或は正義と呼び、或は愛國心と稱して恥ぢざる程、現代の人間は我利で、我儘で、愚味で、迷信で、不徹底で、鐵面皮なる心の持主である。同じ國民たる特種部落民や併合國民に對して極端なる差別待遇を爲しながら尙ほ且つ臆面もなく世界に向つて人種平等や差別撤廢を叫ぶ國民あるを見ては、其の常識の有無をさへ疑はれる。

斯くの如き不平等なる國際狀態と、斯くの如く沒道理なる人間心理の存する限り、世界の絶對平和は期し得ない。從ふて國家として存立する爲めには、戰爭に備ふる爲めの武力が尙ほ必要であると言ひ得る。併しながら其の武力たるや、絶對のものでなく、相對のものである。即ち國家經濟の基礎の上に築かれたるものでなければ無効である。現代世界の時潮の流れに順應したるものでなければ却て危險である。此の二條件を具備したる軍備にして、初めて現代的に有意義なる施設と云ふことが出來る。

八　危險思想家と危險思想國

吾人は不自然に不平等なる國家の現狀に對して不滿なると等しく、日本國民として、不自然に不平等なる世界の現狀に對しても亦不滿である。吾人は此の不平等なる國際現狀の打破を希望する。然るに國家の現狀を打破せんとするものは、危險思想家として國家の迫害を蒙むり、叛逆人として國家の刑罰に付せられる。之と等しく、國際現狀を打破せんとする國は、危險國として國際の迫害を蒙むり、叛逆國として國際の責罰を免るゝことが出來ない。國家の現狀を打破せんとする個人に對し、危險思想家として之に制裁を加ふることが、國家の正當なる權利

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であるならば、國際の現狀を打破せんとする國に對し、危險國として之に制裁を加ふることも亦、國際の正當なる權利と言はねばならぬ。

故に若し日本にして國際平等實現の陳呉たらんとする覺悟と決心とが有るならば、大なる武力を蓄ふる爲めに國を擧げて軍國化するも亦可なりである。假令其の目的を達せずして殪るゝことあるも、人類發達史の上に大和民族の崇高なる光輝を放つに足るであらう。併しながら朝鮮民族を虐げつゝある日本國民には、斯くの如き雄大なる覺悟も決心も有る筈がない。同時に國際平等を唱ふる資格も無い。此の覺悟と決心と無くして唯漠然と過大の軍備を設置する如きは、徒に侵略的軍國主義の誤解を世界に抱かしむるに過ぎずして、益日本を孤立危險の地位に陷るゝものである。列國承認の下に行ひたる青島攻略さへも外交手段に依つて締結されたる對支二十一個條さへも、今日の如き狀態である。國際監視の嚴重なる現代に於て、火事泥主義は決して功を奏するものではない。況して武力侵略に於てをやである。若し我が國民にして北樺太の永久占領を夢むる如きものあらば、越中褌の外れた場合、不體裁を演ぜぬだけの用心が今より肝要である。

世界は保守的反動時代に入るとも、武力侵略が是認せらるゝ時代は最早や永久に過ぎ去つた。日本の軍備は過去に於ては侵略の爲めでなく、他國の侵略に備ふる爲めであつた。唯帝國主義者や軍閥者流者が之を惡用して支那に威壓を加へたことは有る樣である。支那が日本を恨むは主として之が爲めである。然るに今や日本に對する武力侵略の危險は殆んど消滅した。支那はアノ通りである。露國はアノ通りである。彼より積極的に我に對し武力侵略を行ふ如き懸念は萬々ない。しかも日本は今尙は依然として帝政露國の侵略主義に備へたると同一勢力の陸軍々備を有して居る。最近漸く國民の聲に促されて、漸々ながら若干の人員を整理したるも建成部隊には何等の縮小を行はない。抑も二十一個師團の大軍は何處に向つて、何の目的を以て用ゐんと欲するのであるか。日本國民にさへも判らない。

今日世界の軍國主義國として鼻摘みせらるゝものに、西に佛蘭西あり、東に日本がある。併し佛蘭西と日本とは大に其の立場を異にして居る。佛蘭西は事の是非と眞の目的とは兎も角とし、獨逸に對し條約勵行監視の爲めと云ふ世界的に公認せられたる理由と口實とを有して居る。之に反し日本は現在の大軍を擁すべき何等の理由も口實も有しない。劍付鐵砲に依つて赤化を防止せんとするは、餘りに滑稽である。サーベルの閃めきに依つて支那を威嚇せんとするは、餘りに古風である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九　對外硬より對外正へ

軍備の目的は侵略か、自衞か、二者其の一である。侵略的軍備が既に不必要とすれば、當然自衞的軍備でなければならぬ。抑も侵略は暴力である。自衞は正義である。帝國主義的侵略を行ふ爲めには、國民を導きて盲目的對外硬とならしむることが必要である。他人の頭を擲つても道理は我に在りと信ぜしむることが必要である。之に反し國際主義的自衞を爲す爲めには、國民を教へて理性的對外正とならしむることが肝要である。是非曲直が彼我の孰れに存するかを公平に冷靜に考察せしむることが肝要である。一面に盲目的對外硬を鼓吹しながら、他面に自衞的の軍備を設くるが如きことあらば、是れ自家撞着の甚だしきものである。對外正は決して對外軟ではない。道理に強くして非理に弱きが即ち正である。

帝國主義と對外硬、國際主義と對外正とは、互に因果相關である。侵略的帝國主義なるが故に自ら對外硬を生み、對外硬なるが故に自ら侵略的帝國主義に墮する。自衞的國際主義なるが故に自ら對外正を要し、對外正なるが故に自ら自衞的國際主義に進むのである。對外硬の爲めには國民の敵愾心を盲目的に激發せしむる必要上、國民をして眞を知らしめざるを可とする。對外正の爲めには國民の判斷を道理的に發表せしむる必要上、國民をして眞を知らしめねばならぬ。故に對外硬は專制政治であり、對外正は民本政治である。

民本主義の軍備は理知的に國民の了解が無ければならぬ。國民の支持が無ければならぬ。民本主義の戰爭は理性的に國民の同意が無ければならぬ、國民の後援が無ければならぬ。國民の理知的了解と支持あつて後、軍備は初めて其の全能を發揮することが出來る。國民の理性的同意と後援ありて後、戰爭は初めて終局の目的を達することが出來る。彼の僞瞞的宣傳に依つて設けられたる軍備や、盲目的愛國心に驅られたる戰爭には、鋼鐵の如き堅確なる國民的魂魄が宿つて居ない。少しく稅金が高ければ直ぐ苦情が出る。少しく難局に立てば直ぐ挫折する。

之を要約すれば現代の軍備は帝國主義的侵略の爲めでなく、國際主義的自衞の爲めでなければならぬ。自衞的軍備の爲めには對外正でなければならぬ。對外正の爲めには民本主義でなければならぬ。民本主義は國民の意思を基礎とせねばならぬ。即ち國民に依つて設けられたる軍備でなければならぬ。決して海軍の爲めの海軍、陸軍の爲めの陸軍の如き觀と實とがあつてはならぬ。況して現在我が國に於けるが如く、一部軍閥者流の私兵化するが如き制度と慣習とは斷じて排斥せねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

既に軍備が國民の意思の上に立つ以上、國家内外の環境に應じて伸縮自由である。不要の時は減じ、有要の時に增すことが出來る。今や我が國は、内に産業の不振あり、國民は生活苦に泣き、國家は財政難に苦しんで居る。外には歐洲の渾沌あり、侵畧露國の崩潰あり、華府會議の協定あり、當に大に軍備を弛めて大に國力を涵養すべき絶好の時期である。火事場の泥棒は最も恥づべき行爲なるも、鬼の留守に洗濯するは賢き策である。軍事當局者が一たび軍備を減ぜば再び增すこと能はずと憂慮する如きは、是れ日本の軍備が國民の意思の上に立たざる證據である。

現在我が國の自衛的軍備の目的は、朝鮮の治安維持と、滿蒙に於ける我が正當なる利權の擁護とである。之を爲すには現在陸軍の半勢力を以て餘りがある。然るにも拘はらず民膏を絞り國帑を傾け、二十一個師團の大軍を擁して虎視耽々否な戰々兢々己の幻影に恐れて居る。弦を佩ひで自ら急にするとは、蓋し今の我が陸軍當局者の謂である。

植民思想の革命期

永井柳太郎

一

人は内面的に出來得る限り自己の生活を深めんとすると同時に又外面的にも出來得る限り夫れを擴めんとする本能がある。苟も生物にして自己擴大の本能を有せざるはなく、飲食も、生殖も、思索も、活動も、共に其の本能の發現である。アリストテレスの所謂「生氣」(Entelcheia) もホッブスの所謂「能力欲」(le désir du pouvoir) もオーグスチンの所謂「生活意志」(Wille zum Leben) も、又ニイチエの所謂「權力意志」(Wille zur macht)も、其名は異つて居るが、同じ本能を意味するものである。ショーペンハウエルは悲觀論者であつて眞の解脱は意慾の斷滅に存する事を論じたが、尚且つ人に强烈なる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活欲あつて、盲目的に、又不斷的に、前進せんとする必然的傾向ある事を認めた。

之れは個人としても、又民族としても同一であつて、民族間に於ける自已擴大の本能は古くから植民運動となつて現れた。故に植民運動は其の衍き事、人類の歴史と期限を同じうすると云てよい。近時の研究に依れば、ヒクソス人は紀元前二千年代に於て、既にユーフラティスよりナイルに亘る大帝國を建設しアツシリアのティーグラス、ピレザー一世も又紀元前十二世紀の頃四隣を征服してメソポタミヤに新帝國を興した。ザークセスはサラミスの海戰に大敗し、其志を成す事は出來なかつたが、紀元前約五百年既に世界帝國の大計畫を抱いて居たのである。次でマセドニア帝國興り、ローマ帝國現れ、植民運動は益々擴大したのであるが、紀元千四百年代に入り、歐羅巴より印度に通ずる航路が開かれ、又米大陸の發見せらるゝと共に、其運動の範圍は、事實に於て、世界大となつた。今日世界に植民地を有する國は、日本、英國、佛蘭西、露西亞、西班牙、葡萄牙、和蘭、白耳義、及び米國の九ケ國であるが、其全面積は合計約五百万方里であつて　世界の全面積の約五分の三に當り其住民は約六億であつて、全人類の約五分の二に達する。だから植民事業が、正しき意味に行るゝか否かと云ふ事は、今や更に全世界の五分の三に當る、土地の盛衰に關係し、又全人類の五分の二の運命を決するのである。世界戰爭は或意味に於て植民的帝國を建設せんとする者と、既に植民的帝國たる者との衝突から發したのであつて、植民事業が其方針を誤つ時は、時として全人類の大災害を惹起するに至る事の最も現實なる、且つ最も痛切なる證據である。

(二)

植民運動の根本思想は、其時代の時代思想と共に移つて行く新らしき時代並びに環境は、其必要に應じて新らしき思想を生み、新らしき思想が軈て又次の新らしき時代並びに環境の基礎となるやうに、植民運動の根本思想も亦其時代の生活狀態と生活理想とに應じて不斷に變化したのである。併し私は、大體に於て近代植民思想の變遷を四期に分ける事が出來ると思ふ。第一期は十五世紀より米國獨立戰爭時代に至る迄の間であつて、此間に於ける植民運動は當時の支配階級たる君主及び貴族の領土的野心及び其經濟的慾望を追求する事が中心思想であつた。

固より此他にも別個の多數なる動機が働らいて居た事は事實である。第一に宗教的動機の存在した事を否定する事は出來ぬ。コロムブスが大西洋の横斷を企てたのも、其動機は世人の屢々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ふ如く、單に東洋の黄金國を訪ぬるためのみでなく、又基督教を傳へんためであつた。十字軍が敗北に歸してから歐羅巴人は亞細亞人に壓迫せられ、殊に千四百五十三年君府落城後は小亞細亞及びバルカン地方に於ける、伊太利商人の通商根據地も消滅し、從來伊太利商人を通じて買ひ求めて居た東洋の貨物も全然來なくなつた。茲に於てコロムブスは路を西に求めて東洋に出で、東洋の黄金及び香料を獲得すると同時に又基督教を宣傳し、以て十字軍の精神を徹底せんとしたのであつた。コロムブスと前後して希望峰を廻航して印度に達したバスコ・ダ・ガマが印度に上陸した時、「我等は基督教徒と香料とを得んがために此地に來る」と叫んだのでも其動機に宗教的なものがあつた事は爭はれない。千六百六年英國々王ゼームス二世のヴァジニア會社に與へられた特許狀の中にも特に基督教を宣傳すべき事を命じ、千六百六十六年ルイ十四世が佛蘭西西印度會社の設立を認可するに當つても其特許狀に於て「神の光榮を宣傳するを第一の目的とすべし」と要求して居る。

第二に信仰及び思想の自由を求めて海外移住を企てた者も決して少數ではなかつた。千六百二十年男女合せて約百名の清教徒が英國に於ける迫害を免れんため和蘭に逃れ、更にメーフワラー號に搭じ、米國に渡つてニュー・イングランドを開いた事は歴史上著聞の事實であるが、佛蘭西でも新教徒がフランシス一世、ヘンリー二世、フランシス二世の三代を通じて迫害せられ、殊にチャーレス九世に至つて大虐殺を行ふたので、其殘徒の相次いで難を和蘭に避け、軈て米國に移住した者が頗る多數であつた。

第三に犯罪人及び危險人物と認めらるゝ者を國外に放逐する目的で植民地を建設した事もある。英國は千七百七十年に濠洲が發見せられてから、千八百十年頃迄は專ら犯罪人を輸送して其數年々二三千に達した。哲學者ベンサムの如きは各國は各々其國境内に於て、自國の犯罪人を仕末する義務ある事を絶叫したけれども、當時の英國政府は斯くの如き議論に傾聽する事なく、啻に濠洲のみならず米國に迄も其犯罪人を輸送した。

其他探險又は黄金鑛の發見に對する個人的慾望のために植民運動を起した者も決して少くはないが、併し、當時の植民運動は、大體に於て、君主及び貴族の財政的慾望を滿す事が他の何れの動機よりも重大であつた事は爭はれない。蓋し歐洲各國の君主及貴族は約二世紀間に亘る十字軍戰爭に次で起り來れる新舊兩教徒間の宗教戰爭と、王位繼承戰爭のため莫大の軍費を支出したので國庫疲弊せざる者なく、何れも新なる大財源の必要を感じた。茲に於て歐洲各國の君主は一度コロムブスの大西洋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

横斷とバスコ・ダ・ガマの希望峰迴航とに依つて歐洲以外に新大陸ある事を知るや、何れも爭つて新領土の獲得に努め、封建制度に倣つて、其經營權を貴族又は拓植會社に委ね、之等の貴族及拓植會社から統治權委任の代償として出來得る限り貢納金を徵集すると同時に、又其新領土の住民に出來得る限り自國の商品を賣り付け其賣り上げ高の幾割かを貿易商人より取立てる事に依つて政府の歲入を增加せんとしたのである。當時西班牙の如きはアメリカに於ける自國の新領土より急速に財貨を取得せん事を努めて、所謂レパルティーミエントス制度を實施した。レパルティーミエントス制度と云ふのは總ての土人に一定量の有價天産物を納附する義務を負はしむるものであつて、其義務を果した者に領收證として銅標を與へ、此銅標を示す能はざる者は嚴罰に處したのである。西班牙政府は此制度と共に又所謂エンコミエンダス制度を實施し、廣大なる土地と之れに居住する土人とを自國から移住した西班牙人の强奪するまゝに一任したのである。之れがために奴隸制度は行はれ、過度の土人虐待の結果重要なる生産要素たる勞働力に缺乏を來たし、更に此缺乏を補ふためアフリカから黑奴を輸入したので、其植民地は一時殆んど掠奪、虐待、强姦、殺人の巷と化して道德上の大荒廢を見たのであるが、併し斯くの如き暴政は啻に西班牙のみでなく葡萄牙でも、英國でも、佛蘭西でも、和蘭でも、略々大同小異の狀態であつた。

然し斯くの如き道德上の荒廢よりも更に痛切に新領土の住民を苦しめたものは所謂重商主義の商業政策であつた。何れの政府も出來得る限り多額の貴金屬を其植民地より獲得する事に努めた結果、一方に於て自國の植民地に自國の製産業と競爭する如き製産業の起るを出來得るだけ抑壓すると同時に、他方に於て其植民地の生活必需品を專ら政府の特許したる御用商人の手から出來得る限り高價に供給せしめて、其代價として出來得る限り多量の貴金屬を植民地から搾取する事を方針とした。茲に於て各國政府の特許せられたる少數の御用商人は各々自國の植民地に於て思の儘に高價に其商品を植民地の住民に賣り付けるとが出來た。植民地の住民は其商品が高過ぎると思つても、他國からの輸入は絕對に禁止せられて居り、さればと云ふて植民地自身に於ても其商品を製造する事が許されて居ないから、勢ひ高價を忍んで買はざるを得ない。買はなければ生活必需品の缺乏の爲めに坐して死を俟たざるを得ぬ。茲に於て彼等は甘じて本國の命令に盲從して死を待つか、敢然として本國より獨立して生を求むるか、孰れかの一を選ばざるを得ざるに至つたのである。茲に於て坐して死を待つよりは、戰つて生を求むるに如

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かずと考ふるに至つて、其思想の最初に勃發したるものが即ちアメリカの獨立戰爭である。アメリカの獨立戰爭の成功は、軈て世界各國の植民地に重大なる刺激を與へ、引て南北兩米の各植民地に於ける反逆となつた。

(三)

蓋し第一期の植民時代に於ては、啻に殖民地の政治思想が君主專制主義であつたのみでなく、其本國たる歐羅巴諸國の政治思想も亦君主專制主義であつて、植民地に於ける專制主義は即ち歐羅巴諸國に於ける政治思想の反映に過ぎなかつた。當時歐羅巴の政治思想を支配するに最も大なる勢力を有したるは、マキアベリの政治思想であつた事は云ふ迄もない。彼の政治思想は十六七世紀の政治家に大なる感化を與へた。人類は自然の儘に放任すれば墮落あるのみ、之を統制して最高の生活に向はしむるには絶對の權力を必要とする。之が爲めには絶對の權力者たる專制君主を必要とすると云ふ事を力說したのであるが、此思想は封建制度顚覆して後、未だ中央政府の權力確立せず、社會の秩序の混沌たる時代に於て、世人の思想を君主專制主義に傾けしむるに大なる力を有したのであつた。

斯くの如くにして歐羅巴諸國は自ら專制君主の下に中央集權の政治組織を現出したのであるが、それが植民地に對しても同様の反映を與へ、當時の植民地に於ては、其住民の自由とか權利とか云ふが如きものは殆んど問題とせられなかつた。況んや未開野蠻の域を脱せざる土人の自由及權利をや。

殊に當時の歐羅巴は一般の思想の傾向から云ふても、所謂啓蒙思想期であつて、頗る理智を重んじた時代であつた。スピノザやライプニッツの哲學に明白であるやうに、當時の思想界の傾向は一切の精神活動の根本を理智と觀じ、人生の一切を理智に依つて指導せんことを主張したのであるから、其結果社會生活を法律化し、規則化し、機械化せんとする弊風を生じた。即ち當時の社會に於ける最高の智識階級を以て自任したる貴族や官僚は、自己の智識と自己の要求とを標準として、自己の思ひの儘に政治、產業、貿易、植民の總てを統一せんとしたので、十七八世紀に於ける歐羅巴の政治思想は君主專制主義と、官僚主義との結合したる最も極端なる中央集權主義を生じ、人民の生殺與奪の權は、唯少數なる君主、貴族、及、官僚の手に掌握せられ、人間が人間らしく生きる事は殆んど絶望となり、支配階級に屬する者は只自己の欲する儘に其人民の膏血を搾取した。生きんとする强烈なる意慾を有する人間が長く斯くの如き狀態に屈服し得る道理はない。反動は來らざる可らずして來つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(四)

此反動期を境として植民思想も亦其第二期に入つた。此反動期に於ける歐羅巴及其植民地の思想界の先頭に立つ者はルツソーであるは云ふを俟たぬ。固より英國に於ては十七世紀の昔既に詩人ミルトンはルツソーの天賦人權論に似たる説を立て、人間は本來自由に生れたものであるが、自己防衛の必要から互に契約に依て國家を造つたのである。故に政府の權力は無限なものでなく、一定の制限があるので、其制限外に於ては個人は常に自由でなければならぬと云ふた。其の他哲學者のホツブスやロツクも亦之に類似の思想を抱いて居たけれども、併し自由民權に對する思想を最も徹底的に且つ最も力強く主張した者はルツソー其人であつた事は爭はれない。ルツソーは十七八世紀時代に於ける主理生活に反抗して主情生活の必要を説いた。ルツソーに依れば我々の生活に於て最も尊い者は理性や、法則でなく、内的生命、卽ち生れながらの情意である。而て此情意は自然のまゝで何等の壓迫も、束縛も受けない時に、最も尊嚴で且つ最も麗はしい。而して其人間の自然性を、其尊き儘に、且つ其麗しき儘に、自由に發揮する事が卽ち人生の最高の目的である。從て彼は人生を以て箭に規則や法律の綜合其者に過ぎないものゝ如く取扱はんとする君主、貴族及官僚の專制政治に反抗し、感情のまゝに自然の子の如く生活し得る自由平等の世界の必要を叫んだ。此自由平等の思想が當時專制主義の爲めに悶えて居た人々の魂に食ひ入つて自然にそれが殖民地の人々にまで偉大なる感動を與へた。

之れと略々同時に經濟學者の間にも自然法哲學の見地から重商主義に反對する者が續出した。第一は佛蘭西に於ける、フラレツソア・ケネーの率ゐたる重農學派である。彼等は自然法は神の定めたるものであるから濫りに干渉すべからずと唱へ、國家は只個人の生命財産を保護するに止め他は各個人の自由競爭に一任すべしと主張した。英國に於てはアダム・スミスが又人を神の造りたる一定の法則に從ひて運動する機械にたとへ、人は皆幸福を受くる樣に作られて居るから、各人は其固有の衝動の導くまゝに生活する事が最も幸福だと主張し、其見地から重商主義を攻撃して「貴金屬も亦經濟上の貨物なれば、需給の增減に依り價値に變動を生ずるが故貴金屬のみを蓄積して富まんと欲するは愚である」と嘲笑し、殖民地に對する貿易は之れを自由に放任し、殖民地の住民と本國の住民とが各々自己の計算に於て最も利益なりと信ずる取引をなさしるむ事が本國と殖民地と共に富む所以なる事を力説した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯くの如くにして殖民地に於ては本國政府の專制政治に對する反感は其極度に達し、千七百七十六年米國の獨立戰爭を導火線として南北兩米の各地に獨立戰爭起り、殖民地に對する歐洲人の思想は其根柢より一變するに至つた。ルイ十六世の大藏大臣チユルゴーが「殖民地は果實の如し、熟すれば其枝を離る」と嘆聲を發したのも、グラッドストンが英領殖民地の前途を悲觀し、加奈陀及濠洲の獨立を豫言したのも、歐羅巴人の殖民地に對する思想が、如何に悲觀的となり、植民運動が一頓挫の時機に達したかを示す有力なる證據である。

(五)

然るに十九世紀の後半から植民思想に又々一大變化を生じ、所謂第三期に入つたのである。第三期の特色は何かと云ふに、資本的帝國主義の思想の勃興である。勿論十九世紀に於ける帝國主義は唯物的帝國主義に限られて居たのではない。同時に又唯心的帝國主義とも云ふべき思想が存在した。故ジョン・クラム教授は純然たる唯心的見地より帝國主義を唱道した第一人者であるが、彼は其著「帝國的英國の起源及運命」の中で彼が「英帝國」(British Empire) と云はずして「帝國的英國 (Imperial Britain) と云ふ理由を說明して次の樣に述べて居る。

「予は帝國的英國たる言葉を使用し、英帝國なる言葉を使用するを避けるは、之れ英帝國なる言葉は必然的に印度、加奈陀、埃及等の如き領土的觀念を聯想せしむればなり。予は本書に於て我民族の內心より發し、過去に於ても亦現在に於いても世界の物質的形態を決定する見えざる力なる號令的精神を說明せんと欲す。」と云ふて居るが、此の言葉に徵すれば彼の所謂帝國主義が物質的膨張を目的とするものでなくて全世界の人道的征服を理想とするものである事は疑ひない。獨逸のロールバッハも又其著「世界に於ける獨逸思想」に於て道德的征服の理想を說いた。彼は道德を以て人間の生活に於ける唯一の絕對的權力と認めたのみならず、又道德の完成を以て人間の進歩の目的なりと信じた。從つて彼は獨逸國民も亦單に自己のみならず、又人類の道德的完成の爲めに努力すべき義務ありとした。彼は必しも軍事的及經濟的征服を否定しなかつたけれども、道德的征服を目的とせざる軍事的及經濟的征服は決して永久的成功を贏ち得ないと確信して居た。ベルン・ハルディー將軍も亦獨逸文化の宣傳を高唱し、常に宗教改革に現はれたる獨逸人の良心自由の力、カントの哲學に現れたる獨逸人の認識力、ゲーテ、シルレル等の文藝に現れたる獨逸人の深刻なる人生觀を世界文明の根柢たるべきものと信じ、所謂「獨逸の世界文化的使命」を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鼓吹して止まざりし點に於て唯心的帝國主義者に屬したものと云ふ事が出來る。此思想は佛蘭西に於ても彼の植民學者、マーセル・ドウボアや、ジロールやルロア・ボリユー等の唱道す所である。ボリニーは其著近世殖民論に於て「世界の民族は四種に分類する事を得、一はクリスト教文明國民なり、二は異教文明國民なり。三は半開國民なり、四は野蠻人なり。而て前二者は後二者を指導して文明に赴かしむるの義務と權利とを有する事恰も親の子に於けるが如し。然らずんば世界の一半は遂に不生產的の部分たるに終らん」と云ふて居る。斯くの如く唯心的帝國主義の思想は侮りがたき勢力を有したるには相違ないが、併し實際殖民地の獲得に從事したる各國政府を刺戟した最大の動機は唯物的帝國主義の思想、即ち自國の製造品に對する有利なる販路と、其製造業に必要なる原料及び生活必需品の確實なる供給地と、其國內に剩餘せる資本に對する安全且つ有利なる放資地と、自國民の交通貿易を保護するに必要なる海陸軍根據地とを獲得せんとする思想であつた。ラインシュが其著「殖民行政論」に於て「或者は猛烈なる侵略的欲望を蔽ふに純理想主義の學說を以てせんとすと雖も總ての膨張的精神が劣等人種を指導せんとする愛他的精神に出づるとなすが如き思想は眞面目に考慮すべき價値なし、列國は相次いで起り來る國內の諸問題を解決するに忙しく未だ他國民の利福を增進するがため貴重なる人命と資本とを犧牲とするの餘裕を有せず」と云ふたのは、少くとも十九世紀に於ける世界各國の膨張運動に對する批判としては最も事實の眞相を穿つた言葉であると云はざるを得ぬ。

何故に斯くの如き思想が勃興し、一度は極端に悲觀せられた植民運動が、再び世界の人心を刺戟するに至つたかと云ふに、其主要なる原因は次の二ケ條にありと云はねばならぬ。第一は現實主義思想の勃興である。十八世紀時代のローマン主義思想は人間の感情に重きを置き過ぎた結果、稍々もすれば現實の生活を無視したる過激なる革命思想を生じ、歐洲も其殖民地も共に其社會の秩序は根底より破壞せられ、之れを恢復するの容易ならざるに苦しんだ。玆に於て現實の生活を重んじ確實なる事實の上に立つて、秩序ある、文明を建設せんとする思想が勢力を占め、それが自然科學の發達を促し、自然科學の發達が漸て產業革命を生み、產業革命の結果所謂資本主義の勃興を見るに至つた。資本主義の勃興と共に其資本の利殖と其商業の發展との爲め、新たなる土地に對する欲望が俄然として增大し、遂に資本的帝國主義の勃興となつた。

第二には國家主義思想の勃興も亦帝國主義思想の發達を助くる上に大なる影響があつた。十九世紀に入り現實主義思想の發

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生と共に著るしく其勢力を增加したのは國家主義思想である。佛蘭西革命以來政治の民衆化したる爲めと、交通機關の進步の結果智識の普及した爲めとで、歐洲諸國を通じて國民的自覺が旺盛となり、國際的生存競爭は著るしく激烈となつた。殊に伊太利が、ビクトル・エンマヌエル二世の下に、獨逸がビスマークの手により、各々其國內を統一するに及んで國家主義の勢力は愈々高まり、それが何れも世界的大勢力たらんとして競爭する事となつた。

斯くの如くにして資本的且つ國民的帝國主義の思想は各國政府を驅つて植民地獲得に熱狂せしむるに至つた。固より此時代に於ても總ての人々が殖民運動を讃美したのではない。英國のゼームス・ミルの如きは、依然として殖民運動を悲觀し、殖民地は一部の野心家を利するに過ぎず、國家は之れが爲めに何等の利益を受くる事なく反つて戰爭の危險に陷るものなりと云ふ事を主張した。然し斯くの如きは一部の小數なる人々の意見に過ぎずして到底大勢に反抗する事は出來なかつた。佛蘭西の如きは普佛戰爭により歐羅巴に失墜したる國威を亞細亞及び亞弗利加に殖民地を求むる事によつて恢復せんとし、英國や獨逸や伊太利や白耳義やボルトガルも亦、アジヤ及アフリカの兩大陸を佛蘭西の野心に委ねる事を欲せず、相競つて之れが分割に努め、數年ならずして此兩大陸中の防禦力の缺乏したる土地は小る一珊瑚島に至るまで之れ等の國々の分割する所となつた。

(六)

然し各國が各々帝國主義を行はんとする結果必ず起るべきは其衝突である。十九世紀後半に起れる、大戰爭にして植民的野心に其端を發せざるはない。クリミヤ戰爭も露土戰爭も、米西戰爭も南阿戰爭も又日露戰爭もすべて交戰國の双方か一方かの植民的野心が其原因をなして居る事を爭ふ事は出來ぬ。最近の世界戰爭も亦其主要原因は現に世界的帝國たる者と將に世界的帝國たらんと欲する者との衝突であつて、即ち帝國主義が其當然拂ふべき代價を支拂ひたるものに他ならぬ。而も其衝突に際し自國の帝國主義を擁護すべき任務を擔はせられて戰場に出で其屍を敵前に暴すべき者は誰であるかと云ふに其大多數は帝國主義の恩惠に浴する事最も大なる資本家階級の人々に非して、反つて帝國主義の恩惠に預る機會の殆んど皆無なる勞働者階級の人々である。玆に於て資本的帝國主義の思想が、益々其勢力を加ふると同時に、又資本的帝國主義に對して反抗の聲を擧ぐる者次第に增加し、殊に最近の世界戰爭に依り、未曾有の慘禍を體驗するや、世界の大植民的帝國たる英國、佛蘭西、米國等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於てさへ資本的帝國主義を呪咀する思想が依然として其勢力を加へた。

茲に於て資本的帝國主義の思想が、益々其勢力を加ふると同時に植民思想は第四の變遷期に入つた。即ち再び殖民事業の悲觀時代となつたのである。固より帝國主義に對する非難は今日に始つたのではない。社會主義者は資本主義其物に對する立場から資本的帝國主義に對しても又夙に反抗の聲をあげた。然し今日は只に社會主義者のみならず社會主義者に非る人々の中にも多數の反對者を生じたのであるが、今其非難の主要なる論點を擧れば次の三つに歸する。第一の非難は植民地より受くる利益の分配に就てである。植民地の經營は植民學者の云ふ様に本國の有力なる財源であるかも知れぬ。然しそれは本國に於ける誰れの財源であるか。十七八世紀時代に於ては、それが君主及び貴族の財源とせられたが、今日は植民地の事業に放資する本國の資本家や、又植民地の株劵及債劵を取扱ふ本國の銀行家などの財源である。毎日の生活を彌縫する他、又他を顧る暇なき勞働者は植民地から何等の利益をも受ける事が出來ぬ。それだのに勞働者は其植民地を防禦する爲めに必要なる海陸軍費と本國の資本家や銀行家の用事を辨ずるために置かれてある役人の俸給を支辨すべき租税を負擔しなくてはならぬ。否啻に租税を負擔しなければならぬのみならず、一旦戰爭とたれば、眞先に徴發せられて戰場に送らるゝ。だから殖民地を獲得すると云ふ事は、それは只資本家にのみ必要であつて勞働者にとつては有害無益だと云ふのである。第二に資本家が勞働者の膏血を搾取する事が罪惡である様に强國が只强いと云ふ丈けの理由に依つて自己の意志の儘に弱國を利用せんとする事も又罪惡である。人が他人を、又一民族を、恣まゝに自己の生活の手段とする事は宜しくない。植民地の購買力を增加し本國の製造品の販路を作る事が植民政策の秘訣である様に說く學者があるけれどもそれは植民地が本國の生活手段であると云ふ誤れる思想から出發して居る。植民地は植民地自身の精神的及物質的要求を有する筈であつて、本國が自己の精神的及物質的要求のために、或は關税を悪用して植民地に發達すべき產業を抑壓し、或は自國の資本家に特權を賦與して土人の競爭を不可能ならしむると云ふやうな事は、恰も專制君主が自己の勢力を擴大するがために戰爭をしたり、資本家が暴利を貪らんとして勞働者を搾取すると其根本思想に於て同じである。斯くの如き植民政策は恰も暴君が革命を挑發し、橫暴なる資本家が、勞働者の反抗に遭遇する樣にやがて植民地の動亂を誘發するに相違ないと云ふのである。第三は社會主義者の議論でなく、社會心理學者の立場から資本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的帝國主義に對して加へらるゝ非難である。それは個人としても國民としても自ら勞働する事なく、他に貸付けたる金利のみによつて生活する者は、勢ひ其精神及肉體を鍛錬するの機會が乏しいから自然に墮落する傾向がある。貴族又は富豪の家庭に生れ、暖衣飽食の中に生長した兒女の生活能力が比較的柔弱であると同じやうに、國民としても亦國外の事業に放資したる物より生ずる金利に生活し、機械の運用に於て、取引の方法に於て、商品の製造に於て、常に他國と激烈なる競爭をなす必要を感じない者は、自然に其生産能力が減退するのである、現にシュルツエ・ゲーベルニッツは其著「英國の帝國主義と自由貿易」と題する本の中で此弊害が既に英國に於て顯著なるものある事を説明し、千八百五十一年に英國の主要産業に從事したる勞働者の總數は全人口の二割三分なりしが半世紀後には其數全人口の一割五分に減じ、輸入は著るしく增加したるに反し、輸出は同程度に增加するに至らなかつた。而して米國及獨逸は今や造船業、機械工業及び化學工業に於ては其生産能力に於て明らかに英國を凌駕するに至つたと云ふて居る。

斯くの如くにして資本的帝國主義の缺點を指摘し、之を攻擊する聲が次第に高まつて來たのであるが、此思想が如何なる程度まで將來の植民政策を左右するかは尚未だ未知數である。けれども資本的帝國主義に對する以上三點の非難に贊成する人も亦せざる人も、今や資本的帝國主義の遂行は屢々戰爭を挑發する危險性を有すると同時に、又多くの點に於て人類共存の倫理的觀念に一致し難きものある事を認めるであらう。今日の世界に於ける資本的帝國主義の最も顯著なる代表者は英米兩國なる事云ふを俟たぬ。此兩大資本國が過去數世紀に亘つて幾多の弱國より搾取したる大資本を引提げて、全世界に號令せんとする帝國主義的野心と又其掠奪品たる廣大なる領土を未開墾のまゝに封鎖して有色勞働者の入國を許さゞ排他的態度は人類の生存及び自由に對する一大脅威である。英米兩國が其卓越したる資本と其强大なる軍隊との力を以て如何に其の帝國的野心を維持せんとしても世界に於ける正義と自由との觀念が普及すると共に早晚其野心を放擲する事を餘儀なくさるゝに相違ない。

(七)

併し資本的帝國主義の滅亡は必しも植民事業其物の滅亡でない。十七八世紀時代に植民地が君主及び貴族の財源に過ぎず、其植民地の住民が君主及び貴族の利益を獲得する手段に過ぎなかつた時代に、歐洲に於て民權自由の思想が勃興し、それが歐洲に於けると同じやうに植民地に於ける君主及び貴族の專制主

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

義を根柢から破壊した。而て一時は啻に植民地に對する君主及び貴族の專制のみならず、植民地其物をも否認したやうに見えた。併し專制主義の植民政策は亡びたけれども植民事業其物は復活した。今日社會主義者の議論がそれと同樣に資本的帝國主義の思想を呪咀するのみでなく、亦植民事業其物をも呪咀しつゝある。果して資本的帝國主義の消滅と同時に植民事業其物も消滅するであらうが。私は十八世紀に於て重商主義の植民政策は亡びたけれども植民事業其物が殘存したやうに、資本的帝國主義は消滅しても眞正なる意義に於ける植民事業は猶人類の高尙なる國際事業の一つとして殘存するに相違ないと信ずる。

今後の植民政策と過去の植民政策との根本の相違は、植民地統治が植民地自身の爲めに行はるゝか、植民國の爲めに行はるゝかに在る。近世科學に依つて最も確實に立證せられたものは「種の進化」といふ事實である。「種の進化」といふ事は、其本質に於て、各個性の不平等といふ事から出發する。即ち進化といふ事は、畢竟するに、各個性の間に於ける淘汰若くは特種化を意味する。凡そ生物界と無機界との本質的なる相違の一つは生物には個性があるけれども無機物には個性がないといふ事である。金や、銀や、鐵や、石炭は何處にあつても同じである。若干分量の金屬を同種類の金屬に混和して了へば、其後は如何に分析しても當初の若干分量を個別的に見出すことは出來ない。之れに反して生物は總て個性を有し、其個性は益々完全なる形態をとるに從つて益々著るしく現れて來る。殊に人間に至つて其個性の特質は最も明瞭に發揮せらるゝのであつて、其各個性の特質を自由に發揮せしめ、之れを完成する事が即ち人類文化の中心思想でなくてはならぬ。佛蘭西革命の中心思想であつた自由、平等、友愛の觀念は人類文化の發展を刺戟したには相違ないが、それは人間の「普遍性」といふ事から出發した考へであつて個人の「特別性」を主とした解放論でない。人間は貴族たると平民たるとを問はず、本來自由に生れたものであるから、自由に歸らなければならぬと考へたけれども、各個人の個性を解放し、各個人をして思ひ〱に其生活の眞意義と信ずる所に徹底せしむる事に重きを置くものでない。然るに今日の人類の中心思想は自己の判斷で正しいと信ずる事を自己の力で成就する事に於て自己の生活意義を發見せんとするのである。

譬へば勞働運動にしても此中心思想を離て眞の解放はない。現代社會の最も顯著なる一つは疑もなく機械主義である。機械の運用は一大事實となり、人間は機械力を補助する者の如く取扱はるゝ。其結果技倆と熟練とが其人の人格や信念よりも重要視せらるゝ事となつて、稍々もすれば人間の眞價をも機械と同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一の標準に依つて評價せられんとする傾向を生じた。從つて勞働者の個性は無視せられ、譬へそれが勞働者の生活理想に合致してもしなくとも、只食ふ事の必要の爲めに、資本家の命令する場所で、資本家の要求する仕事に從事する外なくなつた。玆に於て此機械化したる生活から自己を解放し、其獨特なる個性の要求に基きて新らしき生活を建設せんとする事が、即ち今日の勞働運動の中心思想である。

それと同じやうに今後の植民政策も又其中心思想は各植民地の民族個性を尊重して其民族個性を完成するが爲めに必要なる政治的環境を作る事を最高目的とする事に於てのみ其價値が認められ得ると思ふ。凡て政治は、如何なる時代に於ても、亦如何なる場所に於ても、それが常に一定の道德的理想を内容とすべきものであるが、今後の植民政策に於ては殊にそれが重要となつた。譬ひ現在に於て其植民地の現住民が其文化の程度に於て如何に低級であり、亦其能力に於て如何に劣等であるとしても、適當なる環境と適當なる教育とが與へられるに於ては他日必ず世界文明の不可分なる重大要素となるべき文明を建設する可能性を持つて居る。其可能性を持つ我々の姉妹民族の將來を確信して、其確信に基きて共存共榮の方法を立つ事が即ち今後に於ける植民政策の根本思想でなくてはならぬと思ふ。

昔から植民地を統治するに正義と親切を以てする事が其現住民を信服せしむるに最良の方法であと說いた學者が少くない。譬へば大思想家にして同時に大政治家たりしベーコンの如き、其著「植民論」に於て之を論じて居る。最近に於ても英國の植民學者メリベールの如き、佛蘭西の前印度支那總督ラネッサンの如き、又獨逸の植民學者チンメルマンの如き、此種の論をなす者頗る多いが、併し本國政府が植民地を永久に所有し、且つ其土人を無難に取扱ふ爲めの手段として正義と親切とが必要であると云ふのは、未だ正義と親切とを以て本國がその植民地を支配するが爲めの手段とせんとするものであつて、植民地の原住民の民族個性を尊重し、其完成を以て植民政策の最高の使命となす觀念と相去る事遠いと云はざるを得ぬ。今後の植民政策に於ては、恰も貴族が平民を自己の生活手段とし、資本家が勞働者を自己の收益手段とする事が不正であるやうに、本國が植民地を自己の單なる生活手段に利用する事は絕對に許すべきではない。凡そ人類は啻に國家を作り上げる其事が目的で國家を作り上げたのではない、國家に依つて眞の人間たらんが爲めに國家を作つたのである。彼のベルトランド・ラッセルが「權力なるものは人間の所有の衝動を制限すると同時に、其創造の衝動を助長して人間の本性を遺憾なく發揮せしめるための公共力

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

としてのみ其存在及び行使の意義がある」と云ふたのは卓見であつて、今後各國が其植民地に臨むに對しても、其植民政策の根本方針は畢竟するに此一語に歸せざるを得ない。斯くの如くにして地球上に於ける總ての民族が各々其民族個性を完成するに必要なる環境と、機會と、教育と、自信とが與へられ、各民族の獨特なる個性が思ひ〳〵の特色に從つて完成の途に就く時、初めて百花爛漫として咲き亂れて、其處に大自然の麗しさを生ずる如く偉大なる世界文明は靄然として起り來るのである。

工藝美術論

工學博士　佐藤功一

世上萬般の事、或一人に或る種の思想の浮んだ時には、同じ狀態のもとに置かれた他の人々にも同樣の思想の浮んで居る事と見做す事が正しい。ニウトンでもダーヰンでも、同時代の同學者だちの頭腦に自ら充ち〳〵た斯思想の眞先きに火蓋を切つたものに過ぎない。

私は昨年の本誌十月號に「實生活の藝術化としての工藝美術の振興」といふ題下に工藝美術論を發表した。恰度其の頃から世上に工藝美術論が盛に目に付くやうになつた。其の重なるものゝ一つは昨年の本誌十一月號に於けるヴエ・ブブノーヴア氏の「美術の末路」であり、他は同年同月號の工藝通信誌上、農展の感想中諸家の發表せられた意見のうちの二三である。折柄年來の宿題であつた工藝美術部を帝國美術院の展覽會へ加へる事に付て同經費が文部省の豫算に計上せられたといふので（大藏省の査定に遇つて明年度には設置不可能に了つたそうであるが）、これがまた斯界の主たる話題となつた。兎に角、今日迄比較的閑却されて居つた工藝美術問題が世の注目をひくに到つた事は誠に喜ぶ可き事である。

茲に於て改めて此の論を草し、十月號に於けるものゝ意味の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不完なる所を補ひ更に深く考察を進むる事は、大に意義ある事と考ふるのである。

先づ最初に述べんとする事は、十月號に述べたるもの丶中の「空間藝術に於て繪畫彫刻の如き單に美的觀照を目的とする藝術を純正美術と名けて第一位のものとし、これに對して實利的用途を伴ふ或は實利的用途を主とする藝術を工藝美術と稱して第二位に置く事が一般の習慣であるが、これは單に審美的立場の極めて限られたる範圍よりせるものであつて、吾人の實生活の立場よりすれば、前者の如き對象物を描寫する事を主とする藝術は工藝美術に對して描寫美術と名けて寧ろ第二位に置く可きものである」との辭句に就てゞある。論旨は決して絶對的に描寫美術即ち所謂純正美術の低價値を意味するものではなく、一般民衆の實生活を立場として論ずれば寧ろ工藝美術を先きにす可きものといふのである。所謂純正美術と工藝美術との關係は恰も純正自然科學が工學の如き應用科學に於ける同じ關係にある可きもので、吾人の生活上の直接用途に對して物理化學の研究は一見其價値甚だ少きが如くなれども、これが研究の進歩に依て初めて工學の如きもの丶發達を見る事は識者を待たずして明かな事である。藝術至上主義の藝術即ち藝術の爲めの藝術が工藝美術に對するまた斯くの如き關係にある事を斷言するに憚らぬ。

藝術至上主義の論者は、彼等が餘りに自らを高うする見地より功利主義を侮蔑して私の此言を以て快しとせられぬに相違ないと同時に、功利主義の淺薄なる遵奉者もまた必ず反對の意見を挿まらる丶事と思ふ。

人間の實生活の爲めに作らる丶總ての機物の形と色とは、其目的とする用途と、これを構成する材料と、其の構成方法と、此三者に依て定まる可きもので、此三者の基本原理が眞の要求に對して過不足なく純一無雜に統一せられ融合せる丶場合に、其機物の表現は美觀をなすべきもの、換言すれば機物の美は、其形が實利的使用に對する役立能力に過不足なく一致し、從て其各部が恰も生物の體軀に於ける各部の如く機能的の調和と均衡とを保てる際に自ら發現すべきものであつて、これが工藝美術の據て基く可き眞乎の信條であり、これに附加せられたる彫刻及び色彩の如き所謂「裝飾」は第二義のものとなす可き事は勿論異議なきところである。併し乍ら此の機能的調和なるものは確かに自然的調和の人工的再現であつて、人間が其同規のものを自然から引出す事である。換言すれば其製作物を天地の法則に一致する最高完全におかんとする事である。實に工藝美術に取つてもまた其基本をなす所のものは自然美の研究でなけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ればならぬ。併し此の自然美の研究なるものは、科學のなす如く客觀的に部分と部分との關係を論ずるものでなく、端的に主觀に訴へての觀照から來る表現でなければならぬ。卽ち繪畫彫刻の如き描寫美術が其根本をなさねばならぬといふ理由は茲に存する。斯くの如く工藝美術の發達には、恰も工學に對する純正自然科學の如き、他に何等の用途を考慮に置かずして美そのものゝ表現を目的とする藝術至上主義の美術が全く必要である。たゞ是等の美術家の多くが、自己の専門に從事するうちにいつしか横道にそれて偏狭なる獨りよがりの専門家になりすまし、眞の自然美に對しては寧ろ鈍感に、たゞ徒らに筆勢やタッチの巧妙をこれ事とするに至るか、或は却てこれより脱せんとして殊更に小兒や蠻人の幼稚なるテクニークを模する事を以て能事了れりとなすに至り、觀者の多くもこれを喜ぶ風あれども、斯くの如きは實に甚だしき墮落者であり、斯の如き傾向は工藝美術に取ても何等の益を與ふる事をなさゞるのみならず寧ろ害をなす事甚だしきものである。

次に述べんとする事は世人が極めて概念的に工藝美術なる名稱を家具及び室内調度、文房具、樂器、書籍、化粧道具、馬具、武器、食器、酒器、燈具、計量器、裝身具、玩具、花盛器等の所謂美術的なるものを指すものとなし、他の個人の實生活に必要缺くべからざる所謂卑近なる機物と、社會生活に最も必要なる大機物とを其圏外に置くことである。

在來美術展覽會に陳列された工藝美術の多くは香爐、花盛器、其他斯くの如き大人の玩具ともいふ可き主として鑑賞を目的としたものゝみであつて、私の意味する工藝美術から見れば極めて特殊なるものに限られて居る。從つて世人の多くは斯くの如き種類のものゝみを工藝美術と考へて居るらしく感ぜられる。之れを證明すべき最も手近かなる實例は農商務省の美術工藝品展覽會を見るがよい。農商務省の取扱ふものである以上、實用を主とした、そして大量製産の産出法に依るもので、而も之れを使用する人々に快感を與へるものでなければならぬ筈である。然るに實際はどうであるか。寧ろ特殊の贅澤者の快樂を主とした、而も工匠の手工に成る小機物に限られるのである。大機物の工藝化の奬勵が、小陳列場の展覽の如きものを以てしては到底不可能の事であつて、之れを取り扱ひ得ないのは止むを得ぬとしても、是等の小機物の選擇の方針が全く誤れるものなる事は明瞭な事である。更に之等の出品の多數に徒らに古代の様式を挟し、中には骨董品の如く古びを附するものあるに至つては沙汰の限りと云はねばならぬ。

試みに先きに述べた「工藝通信」誌上に於ける農展の感想か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら二三氏の説を引用して見やう。

東京高等工藝學校長松岡壽氏の曰く、

農展に就いては貴族富豪や好事家の滿足するやうな出品よりも、民衆一般の享樂となり、又彼等の趣味性涵養ともなり得る向きのもの、即ち藝術家の指圖の下に出來た普通の日用品の趣味あるものを望みたく思ひますが、餘りさういふ方面の出品を見ないのは遺憾に存じます。

工藝美術の製作者の高村豐周氏は曰く、

………私は彼等の作品に非難の矢を放つものではない。彼等の作品は作品としての存在の價値を認める。只あれ以外に、私は私達の生々しい生活に必要な作品が欲しい。本當に欲しくて欲しくて堪らない。某店の出品になる書齋家具一式、あれを見たまへ、美しい結構な家具であるには違ひない。併し……尻を持つて行くと椅子がギシ／＼と後ずさりするやうな氣が起るではないか。私の欲しいのは勞作に疲れた大きな圖體をドシンと放り出すとカッチリと受け止めてヤンワリと抱いてくれる椅子であり、手丈夫で素朴で、そして暖かい椅子である。しみ／＼感謝したい感じを起させる椅子である。さういふ椅子を誰か作つてくれる人はないか。さういふ椅子は必要ではないのか。某氏の大きな青磁の花瓶を見たまへ。あの花瓶を觀賞し役立て得る人間を想像したまへ。尊い人間の勞苦と、物質と、時間とが如何に其處に浪費されて居る事か。私も花瓶が欲しい。小さな花瓶――書棚の上に飾られる位の手頃な花瓶が欲しい。………書棚の上に適在するに足る小花瓶が。とさういふ要求が誰にも起らないのか。……秋の夜長を倘短しと思ふ人々のためにふさはしい灰皿が、菓子盆や、茶道具は、あの夥しい農展の陳列の中に一でも見出されないのか。磨き込んだ九尺床に人工の南天でも活けるに適當な鋳物の花瓶はあるにはある。………しんみりとした質素な室にダリヤの一輪挿しを挿したいと思ふやうな壺が私には欲しい。………日本で只一つの官設大工藝展覽會も、之れでは餘りに偏り過ぎて居て不自由千萬ではないか。

私の最も意を得た所論は森口多里氏のものである。

賣價の高い贅澤品ばかり作らせるのが工藝品奬勵の本趣ではなからうと思ふ。其賣價の高い理由も大部分は古い藝術品の表現を眞似ていろ／＼に凝る所から來て居る。どの作品を見ても皆古い傳統に憑かれて居るものばかりで作者が直接に端的に自然の中から見出した形態や、構造の神秘は少しもない。其結果として「模樣」と「化粧」とは同意義のものとなつて居る。作品に殊更にさびをつけて古代めかして仕上げる事な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どもおかしな事である。何故「現代」と「自分」とをもつと信ずる事が出來ないのか。表面のお化粧に浮身をやつす事が美の創造だと思はれては困る。第一そんなに手數をかけたゝめに賣價が高くなるし、次に共様な贅澤品の生産が工藝美術の性質だと世間から誤解されるからである。

之等の諸氏の評論を見ても農商務省の美術展覧會の出品が如何に誤れる狀態の下に取扱はれて居るかゞ分る。併しながら私は之等の手工藝になる高價な美的鑑賞を主とした工藝品が私の云ふ一般工藝品の發展の上に意義なきものとするのではない。斯くの如き性質の物は寧ろ帝國美術院の美術展覧會、即ち帝展の中にこそ出陳せらるべきものと思ふ。帝展が近代文化の趨勢に對して如何なる位置に在るべきかに就いては種々の議論の存する所なれども、私は之れを藝術至上主義の展覧會の最も權威あるものとして益々發達せしめたい。此意味に於て帝展に工藝美術部が設けられて、美的鑑賞を主とする工藝品の陳列せれらる事を希望する者である。それにしても徒らに考古學的の模倣（古代美術の研究を無意義とする譯ではない）に陷つたり、殊更に古色を附した物の出品の如きは拒絶せられん事を希望する。

併し乍ら今日最も急務なる問題は寧ろ、新用途の爲めに製出されたる、並びに新生産法に依つて生じたる總ての機物の美化に存する。此問題に關して少しく考察を試みたい。勿論日本近代の文化は一般世界文化の円内に在つて西洋様式の直接採用か然らずんば其様式變遷の道程の習得より成れるものなるが故に西洋に於ける變遷を主として述ぶれば事足る譯である。

中世紀に於ては自己意識の藝術化といふものはなかつた。總ての藝術が純な心を持つた工匠の手に依つて取扱はれたのみならず、美術や藝術なる確定したる言葉もなく、藝術と科學との區別もなかつた。

ルネサンスが齎らした社會上の大變動の一つは藝術が民衆から分離するやうになつた事である。元來藝術なるものはそれに依つて一般の要求が滿足せしめられた所の共通的の傾向のものであつた。併しながらルネサンス以來藝術は自分達のみが之れを理解して居ると考へる所の專門家乃至美術觀賞家のみに依つて理解されるやうになつて來た、其結果個人的藝術に於ては高い表現に達したが、民衆との疎隔の結果、藝術は豪奢と、美觀と乃至趣味と外觀との問題として思考せらるゝやうになつた。——印象主義以後の藝術は此反動である。

ルネサンスが藝術上に持ち來した他の一つは古典への回顧が重きをなした事であつた。此事は特に工藝美術に於て甚しくあつた。建築を始め總ての工藝美術に於けるルネサンスの要諦は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其外形にローマ式を模する事であつた。之れが二百五十年も續いた。次で十八世紀の後半期に文學と相伴つてギリシヤ式への修辭を事とするに至つた。――ローマンティシズム以後の藝術は此反動である。

藝術が趣味と外觀の問題としてのみ取扱はれ、古式模倣を以て能事了れりとなしたる爲めに、自ら意識的なりと考へた以上に自己意識的であつた是等の藝術家達にも大藝術は大科學の如く必然發見であるべき事が會得されなかつた。(但しレオナルドダビンチのみは藝術の意義の此概念に到達して居た)斯くの如き傾向を以て十九世紀末まで來た。――後期印象派の絢畫や、機能主義の工藝美術の運動は此反動である。

ルネサンス以後十八世紀末迄總ての機物は、建築も家具も、武器も、墓石も、食器も、衣服を除いての指環其他の裝身具も、何れも外形の古典模倣を事としたものであつた(十八世紀のギリシヤ憧憬時代にはパリに於て一時ギリシヤ風にサンダールを穿つて大道を濶歩することが流行した事もあるが、大體に於て衣服にだけは古代模倣は、少なかつたと見てよい。)

以上の如き古代模倣は在來存した機物にのみではなく、文化の進展に伴れて漸次に生じ來れる新用途の機物にも是等の外觀を與へられる事が行はれた。(陶器に於て支那工藝の採用があつたにしても、それは異國情調を喜ぶ支那模倣に過ぎず、寧ろ支那よりの將來品として眺めたかつたのだ。)ルネサンス以後に生じた新用途の機物の大なるもの丶二つは大砲と馬車とであつた。之等のものすらも其外觀を様式化すべく企てられた。よき大砲とは美しき古代模様の薄肉彫刻の表面に附加された大砲の事であつた。宮廷馬車は最も様式的のものであつた。近代に及んで汽車の發明あつて後すらも其初期の機關車は、美々しき希臘復興模様の鍍金の裝飾を施したものであつた。

斯くの如く總ての機物に外觀の古典模倣を事として十九世紀に至つた。大奈翁大戰爭後に起つた國粹主義の思想は、ローマギリシヤへの回顧は地的環境を異にし、別個の歷史的傳統を有する自國の工藝に對しては意味をなさぬものである事に氣付いた。併し乍らそう氣付いたにしてもそれは單にルネサンスと同一方針に依つて自國の古き傳統の外部的形式模倣に依るより外はなかつた。即ち玆に中世紀の模倣が起つた。而も古典の回顧が全然中世紀の回顧に途を讓つた譯ではなかつた。斯の如くして十九世紀初期以後から工藝に二つの様式が生じた。即ち一はクラシック式、一つはゴシック式であつた。此傾向の最も顯著なものは英國であつた。ローマ式、ギリシヤ式、乃至はゴシック式たらんとする約百年間の入錯つた努力の後に次のやうな結

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

果が生じた。即ち、是等の努力はルネッサンスの有して居た確信と堅實とを缺いて居たから、當然ルネッサンスに比して不足せる努力であつて、其結果更に大なる様式上の無政府狀態が生じたのである。或怜悧なる人々は埃及式の纔かな様式の加味に依つてギリシヤ式を取扱ひ、或はバビロニア式、或はビザンチン式、或はローマネスク式、更に或物は初期ネッサンス式、なほ一層甚しきはすぐ前の時代のクラシツク復興式を更に復興せしめて使用するに至つた。而して彼等工藝美術家の間には次のやうな事が動かすべからざる規則だと考へられたものであつたそれは譬へば或種の機物にはゴシツク式が適し或種のものにはクラシツク式、或種には何式、或種には何式が用ゐらる可きだといふやうに一種の選擇が行はれねばならぬといふ事であつた。此傾向がエクレクティシズム、即ち選擇主義、或は折衷主義と呼ばれるものである。

斯くの如くにして工藝には最近代まで後ろを回顧する事が止まなかつたものである。新に生じた新用途の機物に、或は新材料を用ひて製作した機物に、古き様式の採用の無意義なることは極めて明瞭な事であるにかゝはらず、是等の工藝美術家達は全くそれに氣付かなかつたのである。明治時代に西洋建築が最初日本に入り來つた折は、ルネサンス式、クラシツク式、ゴシツク式の對立時代であつた。茲に虎の門の工部大學、日本銀行の如きクラシツク式、遊就館、帝國大學の元の法文科、及び工科の建物の如きゴシツク式、參謀本部、司法省の如きルネサンス式の如きものゝ對立を見た次第である。而も是等は建築と家具、調度のみに限られたが、之等の中のゴシツク式の中に含まれた根本思想即ち國粹的古代回顧の思想は、一方に我國の識者を目醒まし、我國古代藝術の研究が行はるゝに至り、次でそれの近代的應用が企てられた。丸ノ內裁判所の一部勸業銀行等の建築の如きは其の大機物に屬するもので、なほ一般貴族的小工藝品に應用せられ、其流れの現在に於ても太き脈を保てる事は人の知る所であり、各種の工藝品の展覽會がこれを證明する。

斯くの如く古代回顧の選擇主義は二十世紀の初頭、佛のアール・ヌーボーと、墺のセセツションの出現に依つて攪亂せられ、覺醒せらるゝに至つた。而も之等の覺醒の源をなしたものは古くウヰリアム・モーリス等の所説であつた。彼は新工藝に根本の主義を確立し、全歐洲の工藝を覺醒せる動機となつた一世の大人物である。彼の工藝美術に關する原則は須く歷史的傳統を超越し、現代の問題に應じて解決すべし、形に於ても質に於ても模倣すべからず、新物を用ひて適當に施工すべしといふ事に歸する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これは言論に表はれた工藝美術の直接の羅針盤であつたが、實は總ての方面に於て機物の近代的樣式の發達の爲めに十九世紀の後期以來廣い文化的根柢が次第に生れつゝあつたのである「ヘルデルとマダム・ド・スタイルは文學に於ける國民性と有機的進化を論述し、ヘーゲルは此學說を擴張して歷史と藝術とに及ぼした。シナーゼは其著「造形美術史」に於て學說の具體的適應を行つた。此書に於て彼は初めて環境、人種、信仰に對する種々の國の藝術の關係を探つた。テーヌは此思想に窮極の組織的論述と廣い批判とを與へた。之等の總てと相並んで自然界に於ける進化と環境との重大を認識する事が行はれた、そして之がダーキンの生物學說に於て最頂點に達した。總ゆる種類の歷史的傾向に對する反動は、創造的藝術にも矢張り現れた。即ち文學に於けるニーチエ、ゾラ、イブセン、トルストイ、繪畫に於けるミレ、モネ、シヤバンヌ、彫刻に於けるムニエー、ロダン、音樂に於けるワグナー諸氏のラヂカリズムにも現れたのであつた。」之れと同時に十九世紀の驚くべき物質の發達が、巧利說と應用科學とに依據して起り、社會狀態や、工藝の流行型や、材料や、工作方法を加速度を以て變化せしめた。此急激の加速度を生じたる重なる動因は鐵の大量生產の完成であつた。社會の革新より生ずる著るしき新用途の機物の發生と同時に、各種の新材料の發見と、空間、時間及び技術的資源の最も有効なる使用の熱望と、衛生思想の發達などから當然起り來るものは新機物に對する新樣式の問題であつた。

實際、十九世紀の工藝家達が其樣式を缺ける時代を嘲ち始め彼等の樣式を選擇主義に依つて與へんと決心せる遙か以前に、工學者達は彼等の樣式相を現代に與ふる基線を決定したのであつた。爲めに工學と美術との間に深き溝渠が穿れた。此溝渠を取去つて工藝を一つの純乎たるものに築き上げんとする事は、最も敏感の頭腦を有する人々に當然起り來るべき問題であつた。

モリスの直接の行き方に於ては寧ろ、機械工業より手工業へ、世界的よりも自國的に、物質科學の原則よりも自然美への色彩が著しくなつたにしても、彼の貢獻は先きに述べた如きものであつた。殆んど同時代に獨逸にゴツドフレツド、ゼンパーがあつた。彼の主張は寧ろ物質科學の原則がより濃厚であつたと見てよからう。

佛國にはこれに對すべき大勢力がなかつた。

兎に角之等の思潮が遍く歐米に行き渡つて其處に三つの分派が生じた。

一、純機能主義派　純理論的に科學の原則より打算するもので、總ての機物の役立能力と、之を作るべき材料と兩者に依

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて決定せらるべき構成方法とが機能的に純一無雜になる時に之れに依つて來る表現に高き美が得らるゝとなすもの。

二、外面的形式派　絶對的內容、單なる構成が美の最後の言葉であるとは云ひ難い。それは理性を滿足せしめ得るであらうが、心情を滿足せしめる事は出來ぬ。工藝には美の外面的形式なるものがあつて、之れなしには美は得らるゝものではないとなす者、此派は美の形式を自然に求めんとする者と、歷史的形式に求めんとする者と、及び幾何學的配列に求めんとする者との三つに分れた。

(イ)自然派　在來の回顧的歷史主義を排して他に美の形式を探らんとする者で、勢ひ自然の中に之れを求めんとする者、其最も多く研究の材料となるものは植物の形態及び動物の四肢であつた。進んでは生物の細胞の顯微鏡的配列の文樣すら研究せられたものであつた。

(ロ)歷史派　廣く古今東西の工藝史を按じ、其形式變遷の系統を尋ね、其徑路を未來に向つて發展せしめんとし、從つて歷史的工藝品の細部(ディテール)をモーティーフとして自由に使用せんとするもの。

(ハ)純幾何學派　歷史的の何物をも、また自然の言葉の暗示をも借らずに、線條や、圓やの幾何學的組合せに美を求めんとするもの。

而も以上述べ來りたる新傾向の總てには日本固有の建築及び日用品の研究と、千八百九十四年米國市俄古萬國博覽會の時著るしく認められたる機械製の家具、燈具等の影響があつた事を忘れてはならぬ。

(一)の機械主義の製作としては、其最も顯著に人目に觸るゝ所のものは、現今の汽船、(室內裝飾を除く)機關車、自動車、其他電車、汽車等の車輛、諸機械、飛行器等であつて、之等が何等の外面的附加物なくとも、何れも人の心情に觸れて美感を持つ事は異論を挾む餘地のない所である。又建築、家具、室內調度、文房具、食器、酒器、燈具等に於て又此種のものゝ多く製出せられつゝある事は人々の直ちに諒解する所である。汽船以下車輛、諸機械等は純粹に工學者の所産であつて、建築、家具、家內調度、其他の小藝術品の製作は在來の工藝品の徒らに修飾を施したるに鑑みて、藝術家が意識的に事を簡明に解決し、無意義なる煩雜を避け、無用の突出を斥け、純一無雜に總てを過不及なからしめんとして特に意匠せるものである。若し其處に外面的裝飾と云ひ得べきものがあらば、それは簡單なる色彩位に過ぎない。ゼ、ツション派の中のピーター、ベーレンス等の一派は之れに屬する。主張に於て此派は此最も有力なるもので

ある。

（二）の外面的形式派の中（イ）の自然派には、所謂佛のアール、ヌーボーは之れに屬し、其間に譬へ中世紀のフラン、ボーヤン、ゴシック式や、ルイ十五世紀式の如き佛國固有の傳統的精神の仄めきを見るものありと雖も、概して植物の枝根、動物の四肢の如き生物の形態が之れの元をなすものである。千九百年巴里大博覽會以後數年間全盛を極めた後、大勢力をなさずして消滅した。之れ其根本思想に於ては、總ての工藝品は機能と環境とに對する形態の適應といふ點に於て、生物學的概念に一致せしむべきものであるといふ高き哲學的考察に基くものであつたが其表現方法が餘りに常識的に生物の形態を直ちに工藝品に移さんとした事に誤謬があつたが爲めである。

（ロ）の歷史派は在來のエクレクティシズムの如く一の工藝品に古き或る一の樣式を考古學的に採用するといふのではなく、歷史的モーチーフの自由選擇であつた。譬へば或一機物の或部分にクラシック式の文樣を、他の部分にゴシックの形態を附する事は平氣である。要するに、それが其處に置かるゝ時に最も好いと考へらるゝ文樣形態を、各種の古代の樣式中より選擇して自由に採用したものであつて、エクレクティシズムの延長と見れば見られぬ事もない。セ、ッション派の中オットー、ワグナー等の大部分は之れに屬し、同じく其影響を受けて生れた獨逸のユーゲンドスタイルの如きは亦多く之れに屬する。今やセゝッションやユーゲンド式なる名稱は廢れたりと雖も、其の行き方はまだ割合に行はれつゝあるものである。

（ハ）の幾何學派は、既に述ぶるが如く、幾何學形、重に平行直線、多角形、方射狀直線の數學的規律に依る組合せを以て美觀を得んとするものであつて、一面より見れば音樂の諧調を機物の表面裝飾に移さうとするものともいふ可く、然かも多角形と方射狀直線との組合せは勢ひ鑛物の結晶形の如きも意義ある暗示をこれに及ぼして居る。日本に於ては日比谷の帝國ホテルの室内裝飾の一部に此手法を見出すであらう。

勿論自然派の手法なる動物の形態を機物に採用する事は古くは埃及や希臘や羅馬や支那などの家具に見る所であり、幾何學的文樣のみを以て工藝品の美を得んとする企てはアラビヤに於て古來用ひられたものである。

以上は工藝美術の近代的趨勢を擧げたものであるが、要するに其要諦は新機物には新時代の表現を必要とし、それは機能主義に基かねばならぬといふ事である。如何なる事物にも其窮極の目的に向つて進展しつゝある道程に於て、時々反動的現象の惹起せらるゝ事は數の免れぬ所である。最近表現主義の運動の

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如きは其一例である。之れは昨年五月號の本誌に於て「腰越驛感」の中にも述べたが、此主義の唱ふる所は科學的合理を主とする事を避けて、他に美を求めんとするもので、而も傳統主義の流れなる浪曼的の行き方を避けて新しい美の領域へ突き進まうとするのである。譬へ題材は自然の印象から取り入れても、それを其儘に用ひずに、自我の熱に熔解して、主觀的に所謂藝術的創造に依つて表現しなければならぬといふのである。而して此主義は工藝の領域にも當然入り來つて居る。其の傾向は、在來殆ど藝術として顧られなかつた蠻人藝術や、或地方の有史以前或は古代の郷土藝術や、東洋の或種の金屬細工及び紙細工やとげ／＼したる織物の形態及び三角形やギザギザ模樣等によつて暗示せられたる文樣及び形態の使用である。これが繪畫や彫刻や、工藝品にても花盛器其他斯くの如き觀照を主とするもののみに用ゐらるるものならば何等の差支へなく、又それが機物の表面裝飾或は附加物として取扱はるゝならば、其合理的を妨ぐる事なく、格別の支障を生ぜずと雖も機物の眞の目的を曲げてまでもこれに依つて其主要なる形態を取扱はんとするものあるに至つては驚かざるを得ない。信用ある獨逸雜誌、モデルン・バウフォルメンの昨年九月號に於て、表現主義の家具を紹介せる文中に「是等の家具の形態が主義と一致せぬ所は、職工の不熟練と目的限定の故障あるが爲めである云々」といふ意味の辭句があつた。眞に此の主義が機物の表面裝飾をはなれて其形態をも決定せんとするならば、恰も先きに高村豐周君の工藝通信誌上に於て論じたる椅子と等しく、甚しき時代錯誤であつて到底不成功に終るのは分り切つた話である。

機能主義こそ今後の工藝美術家の取るべき道であり、新らしき機物には新らしき線の美、面の美、及び新らしき高さ、廣さの美に對する意識を覺醒する事が必要である。而も新しき機物に於て、其完全さが理性に於て肯定し得られても、心情に於て否定せらるゝものあるは、それが藝術を理解せざる工學者に依つて取扱はれた爲めである。如何に深き研究と考察とよりなる機物と雖も、單なる目的に基きての推究のみでは、適應も、統一も、明快も、活氣も、威嚴も、膺揚も、殆ど得らるべき筈のものではない。其處には知力の表現の外に、殆ど忘我の境に入る程も歡喜、熱情、甘美、悦樂等の高調に達する「たましひ」の働きが其の製作に必要である。これ當然工藝美術として取扱はれねばならぬ機物の製作に從事する工學者の深き藝術的教養を必要とする所以である。今後の工學教育は必然改革せられねばならぬ。而も餘りに有頂天の喜びと、餘りに強き激情とを示す外觀は寧ろ厭はしきものであつて、多量の經濟的實用

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の存するものは反つて破壞的に終るといふ事もまた深く注意せねばならぬ事項である。

次に裝飾の問題であるが、假令ひ機能主義に基く機物の製作に於ても、適當に考慮せられたる外面附加の裝飾を必要とする場合が往々にして存する事を忘れてはならぬ。人間の能く整ふたる體軀は純裸體に於ても美を感ずる。併し乍ら適應を得たる髮飾り、首飾り、腰衣、腕環が更に一層の美を附加する場合の多い事を忘れてはならぬ。況んや人は神ではない。譬へ工藝家が其製作物を自然の方則の再現に一致する程の完全さに置かんとしても、其處には自ら幾多の缺點を生ずるは勿論である。此缺點を被ふ爲めに、或は一層の美を加ふるために施された適應せる裝飾は決して無意義のものでは無い。

假令歴史的モーチーフの自由撰擇でも、生物の形態でも、幾何學的文樣でも、表現主義者の好んで用ゐる手法でも、それが其處に適當せるものであるならば裝飾として用ゐられてよい。たゞ何處までも斯くの如き裝飾は第二義的のものである事を忘れてはならない。根本は機能主義に基くものである可き事を深く銘記せなければならない。

以上は私の近代工藝美術に對して抱持する議論である。終りに臨で再び、工藝美術とは今日農展に陳列せらるゝ如きもののみを指すにあらずして、これは僅にその一小部門をなすに過ぎざる事。總ての工藝美術は機能主義に基きて製作せられざる可らざる事。しかも藝術至上主義の藝術が總ての工藝美術の發展のためには必要なる原動力の一をなすものであり、從て文展に此部門の設置せらるゝ事が意義ありといふ事。個人的生活に使用せらるゝ小機物以外、建築工學に屬するものは勿論、造船工學土木工學機械工學に關するもののうち社會生活に密接なる關係を有する大機物もまた工藝美術として取扱はれざる可らざる事。此の四項を繰返し、更にこれに加ふるに、小にしては都市、大にしては國家に、風景建築其他一切の工作物に對して美觀に關する問題を取扱ふ可き職制を設け、藝術的天分と教養とを有する吏員を以てこれに充つ可き事の一項を以てして、茲に此稿を結ばうと思ふ。

（大正十一年十二月六日記了）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子孫崇拜論

過去と現在とは全て、
未來の爲めの奉仕なり。
子は親よりも敬ふ可く、
門人は師よりも尊かる可し。

小野俊一

丘博士は其の著『生物學講話』の中に於て「生物とは何か？」といふ問ひに對し、極めて要領よくも、「生物とは、森羅萬象の中で、食ふて、産んで、死ぬものをいふのである」と答へて居られる。いま、其の定義の可否は兎に角として、然らば凡そ生きとして生けるものは、其の動物なると植物なるとを問はず、抑々、食ふ爲めに生きて居るのであらうか？ それとも生きる爲めに食ふて居るのであらうか？ といふことになると、まう問題は只單に我らの『生物學的見地』ばかりから論ずるわけにも行かなくなる。

他の生物のことは暫く措き、いま我々人間のことだけを考へて見る時、「やはり人間も、他の生物と同樣、食はむが爲めに生きて居るのであつて、生きむが爲めに食ふのであるなどといふ議論は、畢竟するに全人類の極めて極めて小部分に過ぎぬ有産有識階級の人間共の妄想である」といふ樣に主張する人達も可成りに多いにちがひないが、然しまた其れとは反對に、(決して特別に宗教家などゝ名のつく人達ではなく、また何も富裕なる

家庭の人といふのでもなく、どうかすれば翌日の糧にも實際果してあり付け得るかどうかわからぬといふ様な境遇の人々の間にも。」「いや〳〵さうぢやあない、いま此のおれ達が眼の前に見てゐる世の中の現狀こそはたとひどうであらうとも、人間といふものはほんとうのところ、決して食ふ爲めに生きてゐるといふのではなくて、やはり各々、生きむが爲めに食ふ可きものであり、さうして此のおれ達だつてやはり、生きむが爲みにこそ食ひ度いと思ひもするのだ」と、己れ等自らの胸の裡に確く信じてゐる様な人達も必ず相當にあることゝ考へる。要するに、人々各自の人生觀の差異によるのであるが、此の差異たるや上述の如く、必ずしも、其れ等の人々の持つ生物學的の智識、常識の有無多少によつて起るといふわけでもない。

筆者はいま此に場に於て、此れ等二說の當否を論じ、或ひはまた筆者自身の考へを闡明し様とするのではなく、爰で筆者が、表題として揭げたる『子孫崇拜論』の前提として考へ度いと思ふのは生物の第二、第三の特性たる産むといふことゝ死ぬといふことゝの二つである。

食ふといふことが生きるといふことの手段であると、或ひはまた目的であるとに關せず、生物がみな死なゝければならず、また、産まなければならぬといふことは事實である。死なゝければならぬ爲めに産むのであるか？　それともまた産む爲めに死なねばならぬのであるか？　といへば、それは、死ぬといふことがあるのではじめて産まなければならぬのであると同時に、また、産むといふ事實があつてはじめて死といふことも起るのである。

眼を開いて廣く自然界を觀、想ひを回らして宇宙の諸現象を察する時、我々は、今日我々がなし得る未だ極めて不完全不充分なる範圍内に於てすらも、其處に如何に完全なる調和があり、整然さがあるかといふことを認めて驚歎しないわけには行かない。まことに自然界そのものは　たとひ其れが、少くも地球を中心として考へ我々人類を本位として考ふる時には未だ進化の過程の半を辿りつゝあるとはいへ、さうして其の現狀には我々の理想に照して慊らざる所が未だ甚だ多いとはいへ、徹頭徹尾 Zweckmässigkeit （合宜性或ひは合目的性）といふことによつて一貫され、支配せられてをる。我々は無限の過去に亘つて其の Zweckmässigkeit であつたことを信じ、現在も（幾多の缺陷と、我等の慊らざる所あるにも拘らず）其の然ることを見、而して其の自然の合宜性は今より後も時の經過と共に必ずや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其れ等の諸缺陷を次第に消失せしめて、人類としての我等の理想を實現するであらうことを確く信ずる。

筆者はいま此の場に於て、所謂『宇宙の創造』なることが果して何を意味するかを論じ樣とは思はない。けれども、もしも其れが、假りに或る一部の人々の考へつゝあるが如く、所謂『無』より始めて『有』の生じたる時といふ樣なことであつたとすれば、筆者は一も二もなく、其の所謂『無』より始めて『有』を生じたといふ事變をも、單に自然界の合目的性に　つてのみ起されたことであることを信ずる。同樣にして、極度の渾沌たる狀態より次第に或る度の整然さが生れて來、一塊の火焔より各々一つの太陽系を生じ、其の内に含まれたる力と物質との分散によつて一つの太陽系中には更らにまた中心となる所の一つの恒星と其れをばめぐつて運行する大小幾多の惑星とを生じ、斯くして我等の太陽が出來、地球が產まれ、月が生じたることをも、只々、自然界の合目的性によるのであると信ずる。

始めは今日の太陽の如く、やはり赫灼として燃えつゝある一つの火團であつた我等の地球の表面が次第に冷却して、其の上に空氣といふものが出來、水といふものが出來る樣になつて、今日の生物なるものは、はじめて出現した。我々は其の際、所謂「生命なき」物質より、如何なる狀態のもとに、さうして如何なる化學的合成の方法によつて、「いのちある」物質が生じたのであるかを知らず、また其の最初に現れたる生物なるものが、果してヘッケルの說きたる所謂『モネラ』といふ如き形態のものであつたかだうかを審かにせぬけれども、理論の上から察する所、其れは恐らく未だ細胞質と核との分化を生ぜず、また恐らくは、今日我々が考ふる如き意味に於ての細胞といふ如き判然たる境界と單位とを表はすことなき原形質(プロトプラズム)の塊りであつたであらう。其れは最初には、或ひは可成りに大なる肉眼的の大いさを持つた、(云はゞ、今日も見らるゝ變形菌のプラズモヂウムから、其の中に分散して含まれにゐる核を除き去つたといふ樣な)原形質の集塊であつたのが、後に生活の便宜上、二次的に、(云はゞ今日のアメーバとも云ふ可き)顯微鏡的の單位に分れて、細胞なるものゝ始祖となつたのであるかも知れない。

其の最初の生活物質が、或る程度まで繁殖し、分化し、或る程度の原始的進化を遂ぐるに及んで、さうして大氣の中に酸素の出現するに及んで其處にはじめて植物と動物との區分をも生じ、生物の進化に二つの異なつた方向が出來てきた。

原始的生活物質は、今日植物の大部分が行つて居る如く、空氣と水と土壤との中から若干の元素及び無機の諸化合物を攝取

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、太陽からの光りの助けを借り（或ひは借りることなく、）其れ等のものから、遙かにより複雜な含水炭素やプロテインといふ如き所謂有機化合物を合成し、其れをば同化することによつて生長し繁殖したものと察せられる。其れ故に、若しも生物なるものが其のまゝで、其の一つの方向にのみ進化して行つたものとすれば、地球の表面は只、植物的生物のみによつて棲息され、從つて、各自が生存の爲めに必要なる物質竝びにエネルギーの泉源たる空氣、水、土壤乃至は日光等といふものを對象として、互ひに少しでも都合よき場所を占有せむとする間接の生存競爭だけは、勿論避け難かつたに違いないけれども、一つの生物が直接に他の生物を殺戮して食ふといふ、所謂「強食弱肉」的生存競爭の場面は（特別なる寄生植物の場合などは假りに除外例として數へるとして）恐らく地球上の何處にも見ることが出來ずして終つたであらう。無意識的なる『優勝劣敗』といふことは行はれ、適者は生存して次第に其の領土を擴け、不適者は壓迫せられて滅亡もしたであらうけれども、意識的なる鬪爭といふことは、生物界を通じて全く見られなかつたに違ひない。

我々が凡そ今日、動物なりと考ふる動物の全てが、未だ曾て一と度ひも地上に現れたことがなかつたと假定した時、上述の如く植物性を帶びて現れた最初の原始的プロトプラズムが、全然、動物界といふものなしに、如何なる進化の過程を辿つたか、さうして如何に少なく見積つても、其の後二千萬年以上の歲月を經たる今日、果して如何なる植物相を地球上に現出したであらうかといふことは素より明かになす可くもないが、現に今日地上に生存して居る無數の植物及動物各々の間に實に錯雜し密接せる相互關係が存在してをることを充分に知つて居る我々は、動物界竝びに植物界といふ其の二大區分の一方が最初から全然缺如したと假定する時、殘りの一方もまた殆ど我等の想像も許さざる程度に異なりたる相を顯出したであらうといふことを信ぜざるわけに行かない。

然し乍ら、我々がわざ〳〵左樣なる事實を假定して其の時の結果を考察するまでもなく、自然の合目的性は、はじめから其の樣なる生物進化の道程を允許しなかつた。原始的生活物質の總量が可成りの大いさに達し、其の中に可成りの分化が行はれ、可成りの進化が見られたる時に、其れ等の生物の或るものは、（いつ、如何なる時からかは知らないが）、從來の如く無機の無生物を攝取して食物とすることを止め、（或ひは其れをなす以外に）、最初同一なる原始生活物質より由來し、從つて己れの同胞であり近親である所の他の生物を捕へ其れをば食物として攝取することをやりはじめたのであつて、之れが抑々動物

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なるものゝ生じたる端緒である。此の時を境として、生物に『生存競爭』に對する意識がはじめて目覺めたのであるといつてもよく、此れをば一轉機として、同じ『自然淘汰』なる現象も其の意味と内容とを著しく變へたのであると考へてよい。

もしも、擬人法を用ゐて言ひ表はすことを許されるならば、其の時、全生物の心は急に緊張し、全地球の面上には生氣が著しく鮮明に漲つたのである。さうして生物進化の道程は、此の時只單に一步を進めたといふ様なわけでなくて、實に一大飛躍を完成したのであつた。

もしも、自分等の同屬であり近親である他の生物までをも攫つて食ふといふ如き亂暴を敢てする動物といふ奴が、此の時生れ出て來なかつたならば、勿論、自然界はもつと〳〵平和であつたに違ひない。生物は只、空氣、水、土壤、――其の内に含まれてをる元素及び無機化合物――、また太陽より受くる光と熱とのエネルギー等を、如何にせばよりよく、而してより多く利用することが出來るかといふことのみを工夫し、さうしてまた他の一方では、其れ等の生なき天然物から被る所の災害――即ち暴風であるとか、大雨であるとか、降雹であるとか、或ひはまた寒冷であるとか、旱魃であるとか……いふものから、如何にせば、最も苦しまずして濟むかといふことを工夫したゞけでよく、さうして、此れ等比較的少數の必要のみが生物の進化を促す主なる原因となつたに過ぎなかつたらう。

けれども、一旦既に、動物ゝ稱する物騒なる奴が飛び出して來た以上、自然界の事情はまるで異つてゐた。有意識的なる生存競爭の開始によつて、『生きる』といふことは次第々々に『戰ふ』といふことのシノニムともなり、其の戰ひに敗けさらむとして、或ひは自ら進んで他をば征服せむとして、己れを防禦し、また強くせむが爲めにも、個々の生物は、否應なしに『進化』の途を辿る可く強ひられたのである。其の動物的環境により多く適應し得たる生物は、より多く生存して己が『子孫』をば遺すことを得、之れに反し、よく適應し能はざりし生物は、他のものより直接間接に壓迫され、殺戮せられて次第に衰頽し、或ひは終ひに絶滅の運命をも免れることが出來なかつたのだ。

實に其れ等生物の棲む環境たるや、只に地球の年齢の進むに從ひ、また地球と其の所屬する太陽との相互關係の異なるに從ひ、其の表面に於ける土と水と空氣ゝ熱と光との狀態の變化によつてのみならず、また彼れ等生物界自身の狀態の變化によつても、素より時々刻々に推移し來つたものである。

地球上にはじめて生物なるものが發生した時の環境が果して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如何なるものであつたか？　また其の後今日に至るまでに、其環境に起つた幾多の著しい變化が如何なるものであつたか？さうして其れ等環境の變化に應じて地表の生命が現したる變化は如何なるものであつたか？　今日存在し、或ひは曾て存在した、一種屬或ひは一群の生物が、生物創成の時以來辿つて來た道程――生物界の系統樹の細目……といふ樣なことに關しては、不幸にして今日の我々は未だ頗る無智であり、また例へば、長年月に亘り生物界が斯くの如き進化變遷を遂ぐるに當つて、一つの生物の一世代中に所謂『後天的』に獲得したる特性が果して其の次ぎの世代に傳はるものであるかだうかといふ樣たる一事すら、我々の今日持つ智識では、諸說區々として、未だに事實が的確に決められてをらぬ樣な次第である。然し乍ら一言を以て之れを表はせば、今日に至るまでの生物進化の道程は、六十餘年前ダーヴインが彼の劃世的著書に冠したる表題"The Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of favoured Races in the Struggle for Life,"といふ字句の中に、少くも半ば盡きてをるといつて差し支へない。其の『生きむが爲めの苦鬪』に促されたることによつて其の始め、言はゞ、葛饅頭の微小なる片塊の如きものに過ぎざりし原始的生活物質から、乃至はアメーバの如き、また變形蟲の如き遥々として詳細なる物陰を辿つてゐた生物から、或ひは荒海に潮噴く長鯨の偶軀をも生じ、或ひは森に咆哮する獅子や豹狼の爪牙をも生じ、大烈る隼の眼や鷹翼ともなり、獲物を追ひ出す獵犬の嗅覺ともなり、また穴に逃げ入る狡兎の耳や後肢ともなつたのである。枝に囀る小鳥の聲も、淺間に躍る魚の閃きも、また花に舞ふ胡蝶の姿も、軒端に張られたるクモの巣の網も、或ひは驚嘆す可き團體生活的本能によつて營まれつゝある蜂や蟻の社會に見られるゝ相互扶助の事實も、また若蟲や管水母等の群體に於ける個體間の分業と平等制も、乃至ヤドカリとイソキンチヤクの共棲の現象も、アハビ、伊勢蝦の甲殼も、カタツムリの家も、またヤマアラシの棘も……何れもみな生存競爭と環境による自然淘汰によつて造り出されたのでないものはない。然し乍ら、我等が、其れ等の外觀的形態の分化向上にもまして重大視す可きは、實に其れ等の形の内部に潜在して、各器官の作用を司り、其れをば統御する所の神經系の發達である。

己れの同屬をも遠慮なく取つて食物とするといふ『動物』なるもの丶出現はまことに全生物界に取つては一大恐慌來であつたに相違なく、全生物界の精神は此の時を一轉機として著しく緊張し、其の緊張は時の經過と共に次第に其の度をも增して終ひに今日にまでも及んでをるのである。生活は遊戯ではなく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、どこまでも眞劍である。植物といふ部類の中に入るものにも、或ひはモウセンゴケ、蠅取草の如く生きたる動物を取つて餌となすものもあり、また多くの病原菌の如く、動物の身體に寄生して之れをば忽ちに斃す樣なものもあるが、然し植物界の主要部を形成してをる所謂『綠色植物』やまた『硝化バクテリア』の如き或る種の分裂植物の如きは、依然として只單に己が周圍より簡單なる無機物のみを攝取し、其れをば(太陽からの輻射エネルギーを利用し、或ひは利用することとなくして)、遙かにより複雜なる有機化合物に造りなほすだけである。

今より僅か百年にもたらざる以前(一八二八年)、ドイツの化學者ウエーラーが『無機』物なるシアン酸アムモニウムより人工的方法によつて、從來動物體內に於てのみ生成さるゝ『有機』化合物と信じられゐたる尿素の生成に成功したる以來、幾多の化學者は、元素或ひは簡單なる『無機』化合物より、各種の『有機』化合物を合成し得て、從來吾人の所謂『有機』物なるものも、全然、『無機』物と同一なる化學原理によりて支配され、兩者の間に何等根本的なる差異をも認む可からざることを證明し、爾來『有機』物なる名稱は、只單に、組成複雜なる炭素化合物なる意味にのみ解せらるゝ樣になつた。エミル・フイツシヤーのプロテイン合成に關する業績の一とたび世に發表されて以來、生化學者の此の方面に對する興味は著しく其の度を增し、人は生物の人造をすら夢想するにまで至つた。まことに近年に於ける有機化學の發達たるや、實に微に入り細を究めて、我等の心より驚異す可きものがあるのだ。然かも我等が今日持つ最高の化學的智識を以てするも、元素より、或ひは簡單なる無機化合物のみより、蛋白質とか、脂肪とか含水炭素とかの如き複雜なる有機物の合成し得られざることは、なほ全動物(並びに非綠色植物の大部)に其れ等を造り出す力なきと同じである。我等は今日、人類の持つ化學的智識を誇りとする。さうして我々は比較的近き將來に於て、例へば豆の如きものより、今日市場に見らるゝる落花生バタの如きものには非らざる眞正なるバタを製出し、或ひはまた麥の如きものより、卵の白味や黃味と全然同一なるものをも造り出すことに成功するかも知れない。然し乍ら假りにさういふことが出來たにしたところが、綠色植物たる豆と麥との恩惠に與らずして其の化學的處理の不可能なることは、恰かも土のみを食つて牝牛が乳を出す事能はず、石と水とのみを攝取して牝鷄が卵を生み得ざることゝ同樣であるだらう。

議論の複雜ならむことを惧れて、硝化バクテリア等の如き少數の特殊なるものに就ては暫く言はず、凡そ我等が日常眼に見ゆる綠といふ植物の綠なる部分を形づくる細胞の中には、各々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若干數の葉綠體（クロロプラスト）と呼ばるゝ小體が含まれてゐて、其れ等の葉綠體は內に葉綠素（クロロフイル）なる物質を含み、特殊の能力を現して、外界より吸收した太陽の光を借りて、水及び二酸化炭素より複雜なる含水炭素（即ち澱粉粒）をば合成するといふ炭素同化の事實は初步の植物學教科書にも記してある所である。我々は一つのクロ、ブラストなるものゝ內部が果して如何なる構造を持つてをるか、さうしてまた植物細胞內の此の限定せられたる小さき空間の中に於て、光のエネルギーとクロ、フイルが如何樣に働いて澱粉粒の合成が行はれるのであるかを審かにせぬけれども、實に此れ等の葉綠體と稱する微小なる物體こそは、地球上に存在する所の最も重要なる化學工場であつて、全生物界の經濟、現時の地球上に於ける全生命の維持といふことは、一つに此れ等葉綠體の作用のみによつて行はれて居るのだといつても過言ではないのである。思へば地上に生きとして生けるものにして、直接或ひは間接に、此の葉綠體による澱粉合成作用に其の生命の基礎をば置いてをらぬものは殆どなく、さうして、其れが間接の關係である場合に於てすら、其の間接の程度たるや、決して人々が漫然と考ふる如く、然かく廻りくどいものではないのである。自ら葉綠素（或ひはまた褐藻、紅藻、硅藻等に見らるゝ如き、色彩を異にし機能を同じくしたる此の物質の變種、乃至は、此のものと他の色素との混合物）を保持して、親しく炭素同化を行ひ得る所謂「綠色植物」（並びに其の變種）自身の生命に取つて、如何にそれが重大なる意義を有して居るかは素より言ふまでもないことであるが、其の他、或ひは落葉腐木の下にはかなき生を營む黴や菌（きのこ）の類にせよ、或ひは各種の寄生植物にせよ、また或ひは泥土の中より養糧の全部を攝る蚯蚓の如きものにせよ、更らにまた、小にしては蚜虫、蟋蟀、數限りなき昆虫の種類、各種の魚類、鳥類、鼠、リス、兎……の如き小獸、而して大にしては、羊、鹿、牛、馬、駱駝乃至又犀、河馬、麒麟、象等の如き大獸にせよ、……凡て木の芽、草の葉、或ひは其れ等の花、果實、根、地下莖等を常食とせる動物は皆悉く、殆ど直接に葉綠植物の葉綠體の働きによつて其の日〳〵の生命を支持されてをるのだといつてもよいわけであつて、只、純粹なる所謂『肉食動物』のみが、間接に、或ひは間々接に其の恩惠を被つてをるといふことになる。

此の關係は勿論、何も陸上の生物のみに就ての話しではなくて、陸表の三倍に達する海水中の生物界に就ても全然同じことである。只、其處では陸上に於て著しく發達した顯花植物の類は全く見ることが出來ず、其の代用をば、進化の程度の遙かにより低級なる幾多數限りなき海藻の種類が勤めてをるのであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り、また我等が一括して『植物性プランクトン』と總稱する微小なる浮游植物が無量に含まれてゐて『動物性プランクトン』(微小なる浮游動物の總稱)の食物ともなり、また其れと共に魚類をはじめ多くの海産動物の主要なる餌料をなすのである。海産動物の數と量とは、陸産のものゝそれに比して殆ど比較にもならぬ位に夥しい。けれども、此れ等の藻類(綠藻、褐藻、紅藻……)並びに植物性プランクトンの有するクロ、プラスト(或ひは其の變種)の炭素同化の恩惠を被ることなくして其の生を營み得るものと云つては只の一つもないのである。例へば體長幾十尺、大いさ城の如き長鯨の肉塊にしても、其の全てを形づくれるものは要するに、其の始め母體内に生じ殆ど顯微鏡的大いさに過ぎぬ卵細胞と父より由來し同樣に微細なる一精子との合一したるもの、プラス、外界より母及び自己が攝取し同化したる物質の總量以外には素より何物もないわけであるのだが、其れ等の、同化さる可く攝り入れらるゝ鯨の食物は何かと云へば、其れは、脊美、長須、座頭鯨等の如き所謂『鬚鯨』の場合に於ては專ら浮游性の小蝦類や鰯の如き小魚の大量であり、たゞ抹香鯨等所謂『齒鯨』類のみのが主としてタコや烏賊の類を海底に漁つて食ふのである。けれどもタコ、烏賊の類の主として食するものはやはり魚であり、魚の食とする所のものは已れより弱小なる他の魚類か、或ひは種々なる無脊椎動物、海藻、……然し主としては動植兩樣のプランクトンであり、而して動物性プランクトンは植物性プランクトンあつて始めて生存し得るものなのであるから、畢竟する所、彼の鯨の受精したる卵をば産れ出づるまでに發育せしめ、さうして其れをば時に九十尺の體長にまでも育て生かしむる營養物は、決して吞舟の大魚によつて供給さるゝのではなくして、やはり海藻或ひは植物性プランクトンの内に含まるゝ葉綠體によつて日夜支給されつゝあるのである。斯くして廣義に於ける『綠色植物』のクロ、プラストなるものが、硝化バクテリア等の如き少數の除外例を議論外に置けば、現時地球上に於ける全生命の維持者であり、さうして全生物界の營養經濟の基礎が、クロ、プラストの營む炭素同化に置かれてゐるといふことは、何處まで行つても我れ等の否むことの出來ぬ事實であるのだ。

佛教の方では慈悲哀愍の心をば禽獸草木にまでも及ぼして、『五戒』の最初にも先づ『殺生戒』といふことを說いてゐるが、然し心持や態度は如何あらうとも、事實に於て此の『殺生戒』の對象はたゞ動物界のみに限られてをる樣であつて、植物の方は同樣に生あるものとは見られてゐない。たとひ、『精進潔齋』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する人々が、已れの血を吸ひたる蚊をば一つ〳〵放してやり、蚤をば庭の隅まで逃しに行く位のことことはやつてをるにしても、また例へば我々が今日の動物學上の智識から『鷄の卵』とか「牛の乳」とか云ふもの丶意味を説明する時其れ等の佛教徒が直ちに、從來の如く「必要以上に出來るものであるから」など丶云ふ口實をつけることをやめて、今後其れ等を攝ることを『肉食』と同『罪』なりと考ふる樣になるにしても、生きて行く以上、夜明け前に啜る一日一度の粥までを長日月に亘つて廢するわけには行かず、たとひ『仙人』だとても霧や霞を吸ふ以外、時に松の葉位は食はねばならぬ。『生』といふことを今日の生物學が解する如くに解釋する以上、さうして已れ自身の生を實際に殺し終はる丶ことを敢てせぬ限り、徹底的に『殺生戒』を守るといふことは如何に工夫しても同じく一つの生物たるに過ぎぬ人間に取つては到底不可能なのである。然しまた、さらばといつて、もし已れ自身を故意に殺し終はるならば、其れはやはり、最も大なる殺生の罪であらう。

已れ自身の『宗旨』をば是非とも他の宗旨よりも優れるもの丶如く結論せむが爲めに、また、現に已れ等が行ひつ丶ある所の肉食的生活を辯護せむが爲めに、キリスト教徒中の或る人々は、佛教に於て説く『殺生戒』の矛盾をば嗤ひ、其れをば徹底的に實行し得ざることを寧ろ喜ぶもの丶如くである。其のキリスト教の教義に從へば、全ての動物、植物は神が已れ自らの像に似せて造つた『人』の爲めに最初から創造されてをるのであつて、當然『人』によつて統御せられ治められ、或る程度までは勿論生死與奪の權をも握られてをる可き筈のものなのである。則ち、創世記の第一章、第二章、天地創造の五日目以下の條に記して曰く、

「神いひたまひけるは、水には生物饒に生じ、鳥は天の穹蒼の面に地の上に飛ぶべしと。神、巨なる魚と、水に饒に生じてうごく諸ての生物を、其の類に從ひて創造り、また羽翼ある諸ての鳥を、其の類に從ひて創造りたまへり。神、之れを善と觀たまへり。神、之れを祝して曰く、生めよ、繁息よ、海の水に充てよ、また禽鳥は地に繁息よと。夕あり朝あり是れ五日なり。

神、言ひたまひけるは、地は生物を其の類に從ひて出し、家畜と、昆蟲と、地の獸を、其の類に從ひて出すべしと、即ち斯くなりぬ。神、地の獸を其の類に從ひて造り、家畜を其の類に從ひて造り、地の諸ての昆蟲を其の類に從ひて造りたまへり、神、言ひたまひけるは、我儕に象りて我等の像の如くに、我等人を造り、之れに海の魚と、天空の鳥と、家畜と、全地と地に匍ふ所の諸ての昆蟲を治めしめむと。神、其の像の如くに人を創造りたまへり、即ち、神の像の如くに之れを創

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

造り、之れを男と女に創造りたまへり。神、彼等を祝し、神、彼等に言ひたまひけるは、生めよ、繁殖よ、地に滿盈よ。之れを服從せよ、また、海の魚と、天空の鳥と、地に動く所の諸ての生物を治めよ。神、言ひたまひけるは、視よ、我全地の面にある實蓏のなる諸ての草蔬と、核ある木菓の結る諸ての樹とを汝等に與ふ、これは汝らの糧となるべし。また地の諸ての獸と、天空の諸ての鳥及び地に匍ふ諸ての物など、凡そ生命ある者には我食物として諸ての青き草を與ふと、即ち斯くなりぬ。神、其の造りたる諸ての物を視たまひけるに、甚だ善かりき。夕あり朝あり是れ六日なり。斯く天地及び其の群衆悉く成りぬ。第七日に、神、其の造りたる工を竣たまへり、即ち、其の造りたる工を竣て七日に安息たまへり。神、七日を祝して之れを神聖めたまへり、其は、神、其の創造り爲したまへる工を盡く竣て、是の日に安息みたまひたればなり。エホバ神、地と天を造りたまへる日に、天地の創造られたる由來は是れなり。野の諸ての灌木は未だ地にあらず、野の諸ての草蔬は未だ生ぜざりき、其は、エホバ神、雨を地に降らせたまはずまた土地を耕す人なかりければなり。霧、地より上りて土地の面を遍く潤ほしたり。エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣を其の鼻に嘘入れたまへり人即ち生靈となりぬ。エホバ神、エデンの東の方に園を設けて、其の造りし人を其處に置きたまへり。エホバ神、觀るに美麗しく食ふに善き各種の樹を土壤より生ぜしめ、また園の中に生命の樹及び善惡を知るの樹を生ぜしめたまへり。河エデンより出で、園を潤ほし、彼處より分れて四つの源となれり。(中略)

エホバ神、其の人を挈て彼をエデンの園に置き、之れを理め之れを守らしめ給へり。エホバ神、其の人に命じて言ひたまひけるは、園の各種の樹の果は汝意のまゝに食ふことを得。然れど善惡を知るの樹は、汝その果を食ふべからず、汝之れを食ふ日には必ず死ぬべければなり。エホバ神、言ひたまひけるは、人獨なるは善からず、我、彼に適ふ助者を、彼のために造らむと。エホバ神、土を以て野の諸ての獸と、天空の諸ての鳥を造りたまひて、アダムの之れを何と名づくるかを見むとて之れを彼の所に率ゐいたりたまへり、アダムが生物に名づけたる所は皆其の名となりぬ。アダム、諸ての家畜と、天空の鳥と、野の諸ての獸に名を與へたり、然れどアダムには之れに適ふ助者みえざりき、是に於てエホバ神、アダムを深く睡らしめ、睡りし時其の肋骨の一つを取り、肉をもて其の處を塡塞たまへり。エホバ神、アダムより取りたる肋骨を以て女を成り、之れをアダムの所に携れきたりたまへり。アダム言ひけるは、此れこそわが骨の骨、わが肉の肉なり、此れは男より取りたる者なれば、之を女と名づくべしと。是故に、人は其の父母を離れて其の妻に好合ひ、二人一體となるべし、アダムと其の妻は二人倶に裸體にて愧ぢざりき。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神話的なるこれだけの說話の中に我等はまう充分に、植物をば生物並みに取り扱はず、禽獸草木は全て之れを萬物の靈長たる人類の利用物なりと考へ、而してまた同じ人間のあひだに於ても『女』てふものは本質的に『男』なるものに從屬し附隨す可きものであるといふ、原始猶太教の思想を窺ふことが出來る樣に思ふ。

其の次に續く創世記の第三章は、人々の熟知せるが如く、アダムの妻エバが、蛇の爲めに騙されて「智慧の果」を食つた話しであるが、其處で我々はまた更らに女といふものに對して、云はゞ「女賢しうして牛賣り損ひぬ」的なる輕侮の念、並びにまた、たとひ佛教で說くほどの酷い程度に於てゞはなくとも、「女人は罪業深く汚多し」といふ考へや傾きのあつたことを窺ふて、エホことが出來ると思ふ。則ち其の事變が起つて後、其の罪を裁いバ神がエバ及びアダムに與へたる判決は如何なることであつたかと云ふと、其れは次ぎの樣に記されてゐるのである。(第三章十六節以下)

「エホバ神、また婦に言ひたまひけるは、我大いに汝の懷妊の劬勞を增すべし、汝は苦みて子を產まむ、また汝は夫をしたひ、彼は汝を治めむ。またアダムに言ひたまひけるは、汝その妻の言を聽て我が汝に命じ食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしに縁りて、土は汝のために詛はる、汝は一生のあひだ劬勞て其れより食を得む、土は荊棘と薊とを汝のために生ずべし、また汝は野の草蔬を食ふべし。汝は面に汗して食物を食ひ、終に土に歸らむ、其はその中より汝は取られたればなり、汝は塵なれば塵に皈るべきなりと。

アダム其の妻の名をエバと名づけたり、其は彼は群の生の母なればなり。エホバ神、アダムと其の妻のために皮衣を作りて彼等に衣せたまへり。エホバ神、曰ひたまひけるは、視よ、夫人我等の一の如くなりて善惡を知る、然れば恐くは、彼れ其の手を舒べ生命の樹の菓實をも取りて食ひ無限生きむと。エホバ神、彼をエデンの園よりいだし、其の取りて造られたるところの土を耕さしめたまへり。斯く、神其の人を逐出し、エデンの園の東に、ケルビムと、自ら旋轉る焰の劍を置きて、生命の樹の途を保守りたまふ。」

此れに續く第四の章にもまた、キリスト教の先驅となつた猶太教の思想の中で動物と植物とを、どれだけ區別して考へて居たかと云ふことを示す實例が述べられてゐる。其れは、やはり人がよく知つて居る、カインとアベルとの話しである。アダムとエバとの間に二人の男の子が生れたが、其の兄の方がカインであり、弟の方がアベルであつて、カインは土を耕す農夫となり、アベルは羊を牧ふことを職とした。然るに其ののち日を經て、或る日カインは土の中から出る果を携へて來てエホバへの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

供物とし、同時にアベルの方も　羊の初生と其の肥えた者を携へて來て供物としたところが、其の時ヱホバは何故か、アベルとアベルの供へた羊のみを嘉みして　カインの供物をば少しも顧みられなかつたので、其れ以來カインの心は日夜快々として悦む可くもあらず、如何にするも其の嫉妬不平の心を制することと能はずして、終ひに一日、弟アベルと共に野に出て物語りしつゝありし間に、突然起ちかゝつてアベルをば撲倒し、之れを刺し殺したのである。

「ヱホバ、カインに言ひたまひけるは、汝の弟アベルは何處にをるや、彼言ふ、我しらず、我あに我が弟の守者ならむやと。ヱホバ言ひたまひけるは、汝何をなしたるや、汝の弟の血の聲、地より我に叫べり。されば汝は詛はれて此の地を離るべし、此の地その口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受けたればなり。汝、地を耕すとも、地は再び其の力を汝に致さじ、汝は地に吟行ふ流離子となるべしと……」

舊約聖書にあらはれたる諸ての說話をば其れ〲或る思想の象徴なりと考ふる時、筆者自身はいま此處に述べたるカインとアベルとの傳說が、果して何を意味するのであるかをしかと解し得ぬけれども、いまもし假りに聖書に記されたる宇宙及人類創造說をは我々が其のまゝに受け入れるとすれば、此のカインとアベルとの間に起つた流血の慘事こそは、實にキリスト誕生

後一九二三年なる今日に至るまで地上の到る處に演ぜられ來り、また現に演ぜられつゝある所の大小幾多の同胞血の皮切りであり、人と人との間に起る不和鬪爭の始まりたのであつた。さうして其の原因は何であつたかと云へば、元來、公平にして私なき筈なる　ヱホバが、不合理至極にも、たゞアベルの供へたる小羊のみを　嘉みして、カインの供物に一顧をも與へなかつたことに由來する。我々はカインの捧げたる『土より出づる果』なるものが何であつたか、——云はば馬鈴薯とでもいふ樣なものを意味するのであるか、それとも一般に土から、栽培された農作物を表徴してをるのであるかを知らぬけれども、兎に角、或る植物性の供物よりも動物性の供物なる肥えたる羊肉の力を、ヱホバが餘計に喜んだものと考へて差し支へないものと思ふ。

抑ゝ『供物』とか『犧牲』とかいふものは、欽仰、敬慕、或ひは恐畏の的なる、神格者或ひは人格者に對し、崇拜者が誠心誠意よりする自發的財物、特別なる庇護を得、歡心を買はむが爲めの手段、或ひはまた己が犯したる罪科を贖はむが爲めの代償として、持ち來つて捧げるものなのであり、さうして其の際、供物や犧牲物として何物が捧げられるかといふことは、禮拜の對象たる神格者或ひは人格者の性質により、また場合々々の禮拜者側の主意動機によつて異なるのであるから、素より多種

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

多樣たる可き筈である。けれども之れを要するに、たとひ如何なる場合と雖ども對象たる『神』或ひは『人』の機嫌を得せむが爲めに行はれる樣なことはなく、何れも其の喜びを求めむが爲めに行ふことなのであり、さうして其の物品の選定判斷といふことは、大抵の場合、禮拜者自身が、主として己れの心を以て他をも忖度したる結果なのであるから、我々は一つの供物、一つの犧牲物、並びに其れが對象物に向つて捧げられる時の儀式方法等によつて、一方に於ては其の對象物たる神格者或ひは人格者の性質を察し得ると同時に、他方に於ては禮拜者の頭の程度、心の動き方、思想、宗教、人生觀、宇宙觀……の大體を可成り的確に窺ひ知ることが出來るのである。

キリスト教の先驅をなしたる猶太教の思想の中に於て、神の人間に對する關係、男子の女子に對する關係、人間と他動物との關係、また動物と植物との關係……等が如何樣であつたかといふことは、既に上に引照したる天地創造の條だけによつても大體推察し得る所であるが、然し筆者は、脫線して岐路に入る弊を充分に知り乍らも、人類が未開時代に有したる思想及び心理を解剖する爲めの材料として、以下少しく其れをば更らに論じ續けて行くであらう。例へば創世記の六章から九章までは彼のノアの洪水に就て述べた記錄であるが、其の劈頭第一に先づ

「人、地の面に繁衍はじまりて女子之れに生るゝに及べる時、神の子達人の女子の美しきを見て、其の好む所の者を取りて妻となせり。ヱホバ、いひたまひけるは、我が靈、永く人と爭はじ、其の彼も肉なればなり、然れど彼の日は百二十年なるべし。當時、地にネピリム（巨人）ありき、また其の後、神の子等人の女の所に入りて女子を生ましめたりしが、其れ等も勇士にして古昔の名聲ある人なりき。」

とある如きは、ヱホバなる神、及び意義明白ならざる『神の子達』といふものを全然人間扱ひにしたるわけであつて、恰かも、日本に於て我れ等が祖先に就ての最初の歷史なる、古事記や日本書紀の中に書いてある、『神』であり『神の子』である所の『○○○○ノ神』とか『△△△△ノ命』とかいふ八百萬の方々が人間界に對して持たれた交渉其のまゝの如き感がある。爰に記してある神並びに神の子たちと云ふものを、もしも被征服者、被統治者等が崇拜と恐畏との念を極度まで抱いたる結果、恰かも全智全能であり、宇宙萬物の造り主なるものゝ如く誤信した民族の支配者、征服者であり、また其の統治者階級に屬する他の面々であつたと考へるならば、勿論一應の解釋がつかぬでもないが、然らずして我れ等が『神』を神とし、人にも非ず禽獸草木にも非ずと考ふる限り、其れはだうしても無稽の說話であると言はざるを得ない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯くて（といつても其の實際の理由や眞相はよくわからぬのであるが、神と人との間が以上の如く齟齬したる爲であろか、何か。）「人の惡の地に大いなると、其の心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡しきのみなるを見」たまひたるヱホバの神は、「地の上に人を造りしことを悔いて心に憂ひたまひ、」大洪水を起して「我が創造りし人を我が地の面より拭ひ去らむ、人より獸、昆蟲天空の鳥にいたるまでほろぼさむ」とまで意を決するに至つたのであつたが、其の時たゞノアといふ人間だけは充分に彼れの意に適つた義人だつたので、豫め大いなる方舟を造り、其の内に入つて己が家族と共に難を避ける樣にと告げられたのであつた。即ち

「ヱホバ、ノアに言ひたまひけるは、汝と汝の家みな方舟に入るべし我れ汝が此の世の人の中にてわが前に義を觀たればなり。諸々の潔き獸を牝牡七つ宛汝の許に取り、潔からぬ獸を牝牡二つ、亦天空の鳥を雌雄七つ宛取りて種を全地の面に生のこらしむべし。今七日ありて我れ四十日四十夜地に雨ふらしめ、我が造りたる萬有を地の面より拭ひ去らむ。ノア、ヱホバの凡て己れに命じたまひし如くなせり。地に洪水ありける時にノア六百歳なりきノア、其の子等と、其の妻、及び其の子等の妻と倶に、洪水を避けて方舟に入りぬ。潔き獸と、潔からざる獸と、鳥および地に匍ふ諸ての物、牝牡二つ宛ノアに來りて方舟にいりぬ。神のノアに命じたまへるが如し。かくて七日の後、洪水地に臨めり。ノアの齡の六百歳の二月即ち其の月の十七日に當り、此の日に大淵の源みな潰れ天の戸開けて。雨四十日四十夜地に注げり。」

「水、甚だ大いに地に漲りければ天下の高山皆おほはれたり。水はびこりて十五キュビトに上りければ、山々おほはれたり。凡そ地に動く肉なる者、鳥、家畜、獸、地は匍ふ諸ての昆蟲および人皆死ねり。即ち、凡そ其の鼻に生命の氣息のかよふ者、都て乾土にある者は死ねり。斯く地の表面にある萬有を、人より家畜、昆蟲、天空の鳥にいたるまで盡く拭ひ去りたまへり、是れ等は地より拭ひ去られたり、唯ノアおよび彼と倶に方舟にありし者のみ存れり。水、百五十日のあひだ地にはびこりぬ。」

「神、ノア及び彼と倶に方舟にある諸ての生物と、諸ての家畜を眷念ひたまひて、神、乃ち風を地の上に吹しめたまひければ、水減りたり亦、淵の源と天の戸閉じ塞りて、天よりの雨止みぬ。是に於て水次第に地より退き、百五十日を經てのち水減り、方舟は七月に至り其の月の十七日に、アララテの山に止まりぬ。水次第に減り十月に至りしが、十月の月朔に山々の巓現はれたり。四十日を經てのち、ノア其の方舟に作りし窓を啓きて鴉を放出ちけるが、水の地に涸るゝまで往來しをれり。彼地の面より水の減少しかを見むとて、亦、鴿を放ち出しける鴿其の足の跡に止むべき所を得ずして、彼れに還りて方舟に至れり、其は水全地の面にありたればなり。彼れ乃ち其の手を舒て之れを執へ、方舟の中におのれの所に接入たり。なほまた六日待ちて、再び鴿を方舟

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

より放出ちけるが、鴿、暮に及びて彼れに還れり。視よ、其の口に橄欖の新葉ありき、是に於てノア、地より水の減少しを知れり。なほまた七日まちて鴿を放出ちけるが、再び彼れの所に歸らざりき。六百一年の一月の月朔に水地に涸たり。ノア乃ち方舟の蓋を撤きて視しに、視よ、土の面は燥きてありぬ。二月の二十七日に至りて地乾きたり。爰に、神、ノアに語りて言ひ給はく、汝および汝の妻と汝の子等と汝の子等の妻、ともに方舟を出づべし、汝と倶にある諸の肉なる諸ての生物、諸の肉なる者、即ち、鳥、家畜、および地に匍ふ諸ての昆蟲を率ゐて出でよ、是れ等は地に饒く生育ち、地の上に生み且つ殖え増すべし。ノアと其の子等と其の妻および其子等の妻、ともに出でたり。諸ての獸諸ての昆蟲および諸ての鳥等、凡そ地に動く者、種類に從ひて方舟より出てたり。ノア、エホバのために壇を築き、諸の潔き獸と、諸の潔き鳥を取りて、燔祭を壇の上に獻げたり。エホバ、其の馨しき香ひを聞ぎたまひて、エホバ其の意に謂ひたまひけるは、我れ再び人の故に因りて地を詛ふことをせじ、其は人の心の圖維るところ幼少時よりして惡かればなり、又我れ曾て爲したる如く、再び諸ての生ける物を撃ち滅さじ。地のあらむ限りは、播種時、收獲時、寒さ、暑さ、夏、冬、および日と夜、息むことあらじ、」

「神、ノアと其の子等を祝して之れに曰ひたまひけるは、生めよ、増殖よ、地に滿てよ。地の諸ての獸畜、天空の諸ての鳥、地に匍ふ諸ての物、海の諸ての魚、汝等を畏れ、汝等に懼かむ、是れ等は汝等の手に與へらる。凡そ生ける動物は汝等の食となるべし、菜蔬のごとく我れ之れをみな汝等に與ふ。然れど、肉を其の生命なる其の血のまゝに食ふべからず。汝等の生命の血を流すをば、我れ必ず討さむ、獸之れをなすも、人これを爲すも、我れ討さむ、凡そ人の兄弟人の生命を取らば、我れ討すべし。凡そ人の血を流す者は人其の血流さむ、其は、神の像のごとくに人を造りたまひたればなり、汝等生めよ、増殖よ地に饒くなりて其中に増殖よ。神、ノアおよび彼と偕にある其の子等に告げて言ひたまひけるは、見よ、我れ汝等と汝等の後の子孫、および汝等と偕なる諸なる諸の生物即ち、汝とゝもなる鳥、家畜、および地の諸の獸と契約を立てむ、都て方舟より出でたる者より地の諸の獸にまで至らむ。我れ汝等と契約を立てむ。總て肉なる者は再び洪水に絶るゝ事あらじ、又、地を滅す洪水再びあらざるべし。神言ひたまひけるは、我が、我れと汝等および汝等の偕なる諸ての生物の間に、世々限りなく爲す所の契約の徴は是れなり。我れ、わが虹を雲の中に起さむ、是れ我れと世との間の契約の徴なるべし。即ち、我れ雲を地の上に起す時、虹、雲の中に現はるべし。我れ乃ち我れと汝等および總て肉なる諸の生物の間のわが契約を記念はむ、水再び諸の肉なる者を滅す洪水とならじ。虹、雲の中にあらむ。我れ之を觀て神と地にある都て肉なる諸の生物との間なる永遠の契約を記念えむ。神、ノアに言ひたまひけるは、是れは我が我れと地にある諸の肉なる者との間に立てたる契約の徴なり。」

之れを要するに、すべて此れ等の言葉の中には明白に、植物をば生物扱ひにせざる思想、動物は全て之れを人間の隷屬物なりとし、萬物の靈長なる人間に其の生死與奪の權を委ねて暴君振りを發揮することを許す思想、「生めよ、殖よ」といつて祝福する時すら夫なる男性のみに其の言葉を述べて妻なる女性を無視するまで男尊女卑なる思想、また神たる可きエホバをば低く地上にまで引きおろして、人間同樣に淺ましき智、情、意の所有者として考ふる思想などがよく言ひ表はされてゐる。さうして玆に今一つ注意す可きことゝ思ふのは、此れ等舊約聖書の記錄を言葉其のまゝに解して、最初天地創造の五日目と六日目とに當り神が何等造作もなく創り出し、而して其の結果を『善しと視て』自ら滿足し、安心して翌日一日は休息されたといふ動物だとか人間だとか云ふものが、其の後、神自身の豫期に反し、成績甚だ香しからぬといふので、一度全て其れ等を地上から拭ひ去り滅亡させ終らうとすると、此の度びは中々一日や二日で壞滅せしむることは出來ず、四十日四十夜雨を降らせたり、百五十日も水浸しにしたりする苦心を要したといふ記述である。破壞するといふことは創造するよりも遙かに容易なる業である可きに事實が著しく其れに反してゐるといふことは、第一、動物が最初創造されて地上に現出して以來、自然の合目的性に從つて、其の量に於ても、質に於ても、また數に於ても駸々として日夜其の發育と進化とを續け來てゐるのだといふ事實を裏書きし、（舊約の記錄に從へば、天地の創造よりノアの洪水に至るまで僅に一六五六年のみに過ぎぬことゝなる）、さうしてまた第二には、自然の合目的性による其れ等の人及び動物の進化發展といふことゝ、舊約に說くエホバといふ『神』の如き「神」の智能といふものとは全然沒交涉であることをば實に暗々の裡に肯定して居るのである。自然の合目的性に對して後者の無智且つ無能なることは恰かも愚昧にして頭なき父や母が子供の成人に對して持つ關係と、幾分似たる所ある樣な感じさへする。

モーゼに現はれたる神エホバは、未開人が頭に描く神として實に適はしき如く、徹頭徹尾人格的の神であり、然かも可成りに橫暴なる酋長的素質をば備へたる者である。先づ有難くないことの第一として、彼れは己れ自らの業蹟をば切りに恩に被せ、さうして人間の尊敬をば自分一個だけでモノポライズし樣とする、——例へば、彼の『十誡』のまつ先きに•「我は汝の神エホバ、汝をエジプトの地、その奴隷の家より導き出せし者なり。汝、我が面の前に、我れの外何物をも神とすべからず。」汝、自己のために何の偶像をも彫むべからず、又、上は天にある者、下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

形狀をも作るべからず、之れを拜むべからず、これに事ふべからず。我れヱホバ、汝の神は嫉む神なれば、我れを惡む者にむかひては、父の罪を子にむくいて三四代に及ぼし、我れを愛しわが誡命を守る者には、恩惠をほどこして千代にいたるなり。」といひ、續いて第三の誡めには、「汝の神ヱホバの名を、妄に口にあぐべからず。ヱホバはおのれの名を妄りに口にあぐる者を、罪せではおかざるべし。」と嚇し附け、さうしてまた第四には「安息日を憶えてこれを聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし。七日は汝の神ヱホバの安息なれば何の業をも爲すべからず。汝も、汝の子息、息女も、汝の僕婢も、汝の家畜も、汝の門の中にをる他國の人も然り。其はヱホバ六日の中に、天と地と海と、其れ等の中の一切の物を作りて、第七日に息みたればなり、是を以てヱホバ安息日を祝ひて聖日としたまう。」と獨裁的に定めて、彼のノアの大洪水などをわざ〱引き起し、折角「生み、増殖え、地に滿ち」かゝつた生物の殆ど全部を、一旦地上から殲滅し拭ひ去つてしまはなければならぬほど不出來であつた所の業蹟を紀念せむが爲めに、人が七日目毎に祝意を表す可きことを強要してをるのである。特別に斷るまでもなく、斯く申す筆者だとでも、『月』といふ單位の外に『週』といふ單位があり、七日目々々々毎に『日曜日』なるものゝ存する所のシステムに對して、反對を唱へるわけではない。もし全ての人々がそれ〲各自の天分に適合した職業に有り付くことが出來、さうして其れ等の日々の職務そのものゝ中に、たとひ理想的までとはゆかず或る程度だけにでも、廣い意味に於ての而して懸命、眞劍なる意味に於ての、自分の趣味や個性の滿足を見出すことが出來たとしたら(卽ち、職業といふものによつて只單に日々のパンを得るばかりでなく、此の世に生れて來た各自のいのちを生かして行き育てゝ行くことが出來たとしたら、)其の時我々は確かに、今日我々が有つ樣な意味に於ての『休日』なるものゝ必要をばもはや少しも感じなくなるであらう、——身心の健康を維持せむが爲めに、而して其れによつてより良く、より多く生き且つ働かむが爲めに黙想し、談笑し、適宜に飲食し、適當に眠り、天日に浴し、大空に息し、或ひは全身の筋骨に適度の運動を與ふ可く……勿論、我れ等は自己の仕事を休む可き時間をば持たなければならぬであらうけれども、其れ等の休息時は人と仕事との事情及び性質に從ひ、臨機應變に見出す可きものであつて、決して杓子定規的に萬人に對し等しく七日目々々々毎などゝ定む可きものではない。もし、各人にさういふ意味の職業が當てがはれる時、我々は仕事の『苦しみ』を苦しみ乍らもなほ胸に希望の光明を絶やさず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して、其の仕事の樂しみをも味つて行くことが出來るであらう。人々が身をも魂をも自分の仕事の中に打ち込んでほんとうに寢食を忘れる樣なことが決して稀ならず起るであらう。さうして其の時恐らく我々は、今日『怠け』たがる人々を『働か』せ樣とすることが困難である如く、健康其の他の爲めに休息させ樣としても容易に仕事より手を離すことを肯ぜざる人達の意外に多いことに驚くであらう。それがだうして不思議であらうか？　生れたるものは凡て生きむことを欲してゐる。さうして生きるといふことは、(少くも既に今日のところまで進化して來た人間に取つては、)決して單に醉生夢死するといふだけのことではない。(後段參照)他よりの命令によるに非ず、他より壓制によるに非ず、唯已れ自らの『止まれぬ心』に動かされて仕事の中に我れを忘れ、沒頭しつゝある人の姿の、あゝ如何に尊くも美はしきことであるか！！　其れこそ實に人間の生きる姿の本態である。さうして其の生きる姿の本態は、必要已むことを得ざる場合のみを除き、故意に攪亂し中絶せしむ可きものでは決してない。覗よ、太陽は日曜にも休日にも雲の彼方には常に輝けるに非ずや！？　草や木は、所謂『神の安息日』にも其の根を延ばし葉や枝を擴げて其の仕事をば營みつゝあるではないか！？　さうしてまた我々の身體の中でも、肺は呼吸することを止めず、心臟は鼓動することを休まぬではないか！？　然るにそも何故なれば、人のみが杓子定規的に、七日目々々々に否應なく其の生活の本態を中絶せしむ可く餘儀なくされなければならのであるか？！　もしも創造の神が眞に心より觀ることを喜ばれるものがあつたとしたら、それは我を忘れて『仕事』に沒頭する人々の姿であるに相違なく、人間が創造の神に捧ぐ可き最も高き讃美、最も深き感謝、最も嚴肅なる祈禱……も亦、かういふ意味に於ける眞の『仕事』以外に何もある可き筈はない。然るにそも何故なれば其れ等の讃美歌を拙劣なる歌に代へ、其の無我の感謝や祈禱をば徹底せざる意識や言葉の上にあらはす可く、日曜や祭日を設ける必要があるのであるのか？　日曜や祭日は只奴隷の爲めのみの必要物である。エホバの所謂『汝の僕婢』だけの必要物である。奴隷ならざるものに取つて其れは決して必要ではない、——何故なれば彼れ等は、何も七日目毎になどゝ杓子定規的に命ぜられずとも、また毎年何月何日になどゝ千篇一律的に定められずとも、其れを毎日の己れの仕事の中にも持ち得るのであるから。然し乍ら、前にも述べたる如く、斯く申す筆者だとても、今日の日曜、休日制に對し決して絶對に反對を唱へる者ではない。百萬の人間中九十九萬までが奴隷である樣な今日の世の状態の下にあつて、さうして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

支配者階級に屬する其の殘りの一萬のものすらも、其の大部分は、因襲や偏見や世間的榮辱などの奴隷たるに甘んじて居る現狀の下にあつては、寧ろ却つて何よりも先きに眞の休日や祭日を作ることが必要であるとさへ信ずる者である。形式はたとひ何であらうと少しも差し支へない——我々は今日歐米に於ても、また我が國に於ても、一週七日の中で日曜日が最も肉の罪惡の多く行はれる日であることを知つてをる。けれどもさういふ日曜日でさへも差し支へないのである。また名稱なども何であらうとかまはない——たとへば我々は『春季皇靈祭』といひ『秋季皇靈祭』といつたところが、其の日を何故に祝はねばならぬかを理解し會得せぬ人々の居ることをも知つて居り、また『神嘗祭』といひ『新嘗祭』といつて祝ふ時に、其の傍らに新米は愚か臭い殘飯の一塊さへも口にすることが出來なくて、餓死しかゝつてをる同胞の群れの存在をも知つてをる。けれどもさういふ樣な祭日や旗日でもよいのである。もとより我れ等の日曜や祭日によつて、ほんたうの休日や祭日の主義を徹底させ樣などゝは、謬見も甚だしいはなしなのであるが、然しそれでもまだ、右に述べた樣な我々上、中、下種々なる階級の奴隷達が、たとひ二十四時だけでも、自發的ならぬ強制勞働から免れ各自の本性に逆つた社會制度の羈から解放されるといふ意味に於て、多少役に立つてをるわけであるのだ。本心の大部分を痲痺させられてをる奴隷達のことである故、勿論、大抵はろくでもないことに其の時間を過してしまうに違ひない。けれどもたとひそれにしても、自由勝手に我々が行動させて置かれるといふ其のこと自身が確かに各自の本心をよび醒まし、本性をよみがへらしむる何等かの機緣となり得るのである。此の意味に於て、筆者は實に、我等の社會生活が現狀の如きものとして續き行く限り、一般の民衆に對して寧ろ一時一日でも多くの休暇が作られ與へられむことを希望する、——其れがエホバの神の定めた日曜日であらうと、高天原系統のお祭りであらうと、乃至は此の夏あたり問題になつた官吏の暑中休暇といふ樣な奴であらうと、或ひは職業々々による定休日や小僧さん達の『藪入り』であらうと、また佛教關係の盂蘭盆であらうと……出來などは何であらうと特別に中心問題には關係ない、たゞ人々が其れ等の機會によつて人形や機械ではなく人間らしき喜怒哀樂を感じ、出來るだけ『自然』に歸り、自我に還り得ればよいのである。籠の戸が開かれて鳥の天空に還る如く、また鉢の魚が放たれて淵に入る如く、(其の籠が竹製であると金銀造りであるとを問はず、また其の鉢が泥製であると水晶碧玉製であるとを論せず)兎に角いつか人々がそれ〴〵各自の天性天分に逆らつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て人爲的（傳統的、門閥的……）に置かれたる地位、境遇や職業といふものを離れ、『己れ自ら』を知り『己れ自らの處』を得る爲めの機緣として其れ等の休みや祭りが幾分でも役立てばよいのである。さうして一旦さういふ『身』と『心』と『場所』との解決がついた人々に對して、筆者は逆に、既に上述したる如く、個人的にもまた一般的にも所謂『休日』や『祭日』の絕對的に不必要なることを信ずる者であるのだ。

Longfellow は、彼れ自ら第二の "Psalm of Life." であると書いたあの名高い "The Village Blacksmith" といふ詩の中に於て、一週六日間の勞働日と七日目の安息日といふものゝ意義を實によく表はして出してをる。然し筆者の如き者をして論ぜしむるならば、之れはロングフエロー自身が一八三九年當時のアメリカに存在してゐたキリスト教的社會制度をば其のまゝ無條件に是認した上でのはなしであつて、我々が今日、比較的に囚へられざる頭や心を以て其れを批判的に讀み且つ考ふる時、我々は其の一節毎に幾多の條件や特別なる解釋を附することなくして其れを肯定することは出來ない。——敍景詩としてならば兎も角も、到底其れをば百年後に生活しつゝある現代の我等の "Psalm of Life." などゝして認めるといふわけには行かない。同じく六日の勞作の日と七日目の日曜日のことを書いた詩ではあつても、筆者などの頭や心には、『敎會』とか『寺』とか『神』とか云ふ樣なことを一言半句も交へて居らぬにも拘らず、次ぎの啄木の短詩などの方がどの位より眞的に感ぜられるかわからず、また我れ等の行く可き道に就ての暗示に富んでゐるかわからないと思はれる。此の詩の題は『飛行機』といふのだ。

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

筆者はなほ引き續いてもう暫らく、神エホバと彼れが曾てイスラエル人に與へたと稱せらる、『誡律』との批判をやる。既に前にも記したる如く、殆ど一つの專制的酋長の化身とも云ふ可きものに過ぎなかつた神エホバは、勿論、奴隸的階級や人身賣買すらをも肯定して少しも怪しみはしなかつたのであつて、其れ等の實證はまう舊約の至る處に錄されてゐ、まことに枚擧の煩にも堪へさる程である。此の奴隸制度を認容し、また

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

弱者が强者の犠牲となることを當然なりと考ふる根本思想と、苟も支配者であり統治者であるだけに其れだけ誇張され力強くされた所の人間的喜怒哀樂の情とが、互ひに結合し相錯雜し、種々なる言葉や形となつて表はれたものが、即ちヱホバの神意であり、誡律であり、猶太教であり、さうして其れに屬する諸ての儀式であり風習であつたのだ。

尤も其の誡律や風習の中にも、恰かも今日に於ても人が子供に向つて「雷樣にお臍をとられては大變だから……」などゝおどし乍ら腹掛けをさせるといふ樣な要領を以て、人々をして知らず識らざる間に不衛生的なることを避けしめ、天理に反する行ひより免れしめむとして居る樣なことも可成りに多い。例へば男子の生れたる時に之れに施す『割禮』の風習の如きは其の身體より一つの黴菌發育處を除き去るわけであつて、特に、氣候が常に温暖な小アジアの如き土地に於ては決して無意義であるといふことが出來ず、また理由としては「蹄わかるれども反芻ことをせざれば汝らには汚れたる者なり、汝ら是等の物の肉を食ふべからずまたその死體にさはるべからず」(申命記一四章利未記一一章) といふ樣な不得要領なことが述べてあるばかりであるが其れによつて一般に豚を食ふことを嚴禁したるが如きもやはり、多くの寄生蟲を有し、殊に人間に取つて恐る可きトリヒナ虫を保持してをる豚の多い小アジア地方に於ては、コレラ流行の際に生魚を食ふことを禁ずる當局者の布告と同じく機宜に適した掟であると云へよう。其の他、或ひは骨肉近親間の性交を禁じたる誡めの如きも、或ひはまた彼の安息日を守れといふ掟の如きも其の理由とする所には一向贊成出來ないが、奴隷制度を肯定しつゝあつた狀態の下にあつては實際極めて好ましい法度であつたらうことを認めないわけには行かない。(汝六日の間汝の業をなし七日に息むべし、斯く汝の牛および驢馬を息ませ汝の婢の子および他國の人をして息をつかしめよ。——出埃及記二三章)

神ヱホバはまた此れ等の外にも幾多限りなき數の戒めを、云はゞ道學先生の如き口吻を以て人間に與へてゐる。けれども其れ等の戒めをば熟讀して見るに、元來ほんとうに深い根柢があり、已むにやまれぬ主義主張があつて說いてゐることではないらしく、其の結果として、言葉の到る處に矛盾があり、教への中に極端なる言行の不一致が見られる。試みに其の一例を擧ぐるならば、『汝殺すなかれ』とは彼の『十誡』の第六番目に嚴かに述べられてゐる所であるが、(出埃及記二〇章) 其のすぐ次ぎの章にはまう、「もし害ある時は生命にて生命を償ひ目にて目を償ひ、齒にて齒を償ひ、手にて手を償ひ、足にて足を償ひ、烙にて烙を償ひ、傷にて傷を償ひ、打傷にて打傷を償ふべし。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふ様な徹底的復讐を唱道してをり、また「人を撃て死しめたる者は必ず殺さるべし」とも斷じて居る、——則ち十誡に「殺すなかれ」とあるのは「正當なる理由なくして」といふ條件附きの意なのであつて、もし正當なる理由さへあるならば、武士の仇討ちと同様、殺人を遂行せぬといふことこそ却つて法律違反となるわけであるのだ。然らば其の『正當なる理由』とは何であるか？　人が殺人罪を犯したる時のみに限るのであるか？　と問ふて見るに必ずしもさういふわけでもないのである。「人もし故らにその隣人を謀りて殺す時は、汝これをわが壇よりも執へゆきて殺す可し」とあるのは、謀殺罪は必ず死刑に處すべしといふことであつて、理屈はよくわかるのであるが、其の次ぎに「その父あるひはその母を撃つものは必ず殺さるべし」、「その父あるひは母を罵る者は殺さるべし」とある如きは實に死刑の濫用であり、また道理にも悖る法令である。儒教等に於けると同様、猶太教に於ても子が親や長上に對して孝悌ならむことを強要し、其の結果であるか何か、筆者の知れる範圍に於ては、今日ですら猶太人の間には家族制度を尊重しまた家族の中に孝悌なる子供の多きこと到底他の歐米人の比でない様に思はれるが、さて然らば何故に子は親や長上を尊敬し其れに絶對的服從をあらはさねばならぬのであるかと云ふと、其れに對しエホバの與ふる説明たるや極めて漠然たるものである。即ち十誡の第五に、「汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に、汝の生命の長からんためなり」とあるのが其れであるが、此處に記しある「父母」といふ文字の代りに「子供」といふ文字を入れるならば其の時は道理がよくわかるにしても、此のまゝでは決して理屈が徹らず、況んや違反者に死刑を要求する理由などは毛頭ない。蓋し從來の所謂「孝悌」とか「忠順」とかいふ道徳なるものは、時代と場所との如何を問はず何れも私有財産制と階級門閥制との産物であり、また其れ等の社會制度を世襲といふことによつて、いつまでも維持せむとする部類の人々の要求だつたのであつて、根柢に於てエホバの教へなどもまた此の兩制度に囚へられてゐた所の教へであるに過ぎない。もとより世の中の全ての人と人との間に、「孝悌」とか『忠順』とかと名付け得る様な相互關係が認められる様になるといふことは、極めて好ましいことであるに相違ないのであるが、然しさういふ理想境を實現する手段方法として上記二制度の確立といふことがuniqueのものであるなどゝは何人も斷ずることが出來ないであらう。もしも我れ等が假りに、只我れ等の頭の中だけに於てでも、「天上天下の物質は全て天上天下の物質なのであつて決して個人の私すべきものではない」といふこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とも信じたとするならば、さうして「人々各自が生れ乍れにして其の身に持ち具ふる才能や健康や容貌の千差萬別、また此の世に生れたる時以來、偶然なる外因的機會によつて遭遇し坐せしめらるゝ種々なる運命、境遇の差異、……といふ樣なことの全てをヒキクルメたる總量を、天が一人々々の人間に夫れ〴〵其の一生の間に成し遂ぐ可き異なりたる使命を與へ、役割りを充てがつたことに起因してをるのだ」と觀ずるならば、我れ等は直ちに總ての人間には、彼れ等が持つ所の、或ひは持たざる所の、財産とか地位とか門閥とかいふものとは離れ、また彼れ等自身の素質の賢愚强弱善惡美醜などゝいふことからも離れて、侵すべからざる一つの資格の存ずることを悟るであらう、さうして其の資格に於てすべての人は、其の間に見らるゝ幾多の人間世界的差別に關らず、平等に尊ばれ敬まはれなければならないのだ。まことに人生とは大自然を背景とし舞臺として、其の上で全人類の演じつゝある芝居である。さうして其の芝居を演じつゝある老若男女無數の役者達は、各自の役割りを自覺せると自覺せざるとに論なく、何れもみな其の『宇宙・人類進化劇』の筋書きを表現し進展させて行く上に是非とも缺くことの出來ぬ要素なのであつて、帝王の役を演ずる者が必ずしも乞食坊主に扮する役者に比して優つてをるとは云へず、貧乏詩人と成る役者が金持ちの事業家と化ける者より劣つてをるとも限らず、其の他、年長者が若い者に、男が女に、教師が落第生に、家主が借家人に、大地主が水呑百姓に、裁判官が被告に、め明きが盲に、健康者が病人に、學者が無學者に、主人が婢僕に、美人が醜婦に、大將が兵卒に、善人が惡人に、常識家が狂人に、……比して必ずしもより優秀なものであり、よりねうちあるものであるなどゝは、素より芝居のことであるから決してわからない。否、一般的にいふならば、寧ろ貧しく賤しく見榮えのせぬ割の惡き役を充てがはれて其れをば見事に演じこなす役者の方が富み且つ貴くして華麗なる役を演ずる役者よりも大抵は腕が上なのである。さうして王樣となり金持となり貴女となつた人間達も、彼れ等のまとへる服裝や容貌の美々しきが故に、彼れ等の住まへる宮殿邸宅の壯麗なるが故に、また其の藏に積まれたる寶物の無量なるが故に、身分賤しく貧しき人々に向つて少しも誇るわけには行かない筈である。何故なれば、普通の芝居に於けると同樣、其れ等の美麗なる服裝や宮殿や寶玉などは、たとへ其れがほんとうに如何ほど價高く貴重なるものであつたにせよ、何れもみな衣裳や道具建ての全部の造り手であり所有者である興行主のものであり、同時にまた參加者全部の共有物なのであつて、個々の役者達はたゞ芝居の筋書と役割りとの都

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

合に從ひ、或る限られたる短時間のあひだ其れ等をのものを借り受けて使つてゐるに過ぎないのであるから。否、たゞに上記の如き外部の物質的附屬品のみには止まらず、人生の芝居に於ては普通の芝居に於けるとは異なり、個々の役者が『內的、本質的』に具備すると考へられる才能技倆の優劣も、頭腦の賢愚智鈍も、體　强弱や健康狀態も、肉體と心との美醜善惡も、情愛の深さも、趣味性の色彩も、自覺心の有無も、勇氣の大少も、道心克己心の堅固さも、……みな同じく興行主や仲間からの借り物なのであつて、もしも個々の人間がほんとうに自分自身のものと云ひ得るものがあるとすれば其れは實に、上記の精神的諸性質竝びに前に述べたる種々なる物質的附屬品、階級門閥的地位境遇……等の『各別的に特異なる時間的且つ空間的取り合にせ(コムビネーシヨン)』といふことのみに過ぎないであらう。だから、世の中から聖者とまで稱へられた樣な高德者と、其の反對に極惡非道の兇漢として蔑しまれた樣な囚人との間にも其れ等の人々本來の價値には何等の區別もなく、また蒼生の苦難をば救ふ可く所謂「身を殺して仁をなした」志士仁人と、其の蒼生をば苦しめて專横飽くことをば知らざりし暴君との間にも、芝居の筋書きゝ演出する重要さの上に於ては、やはり何等の差別もなく、或ひはまた聰明神の如き賢者と盲昧土龍(もぐら)の如き田夫野人との間にも人間としての資格には寸毫の區別もある可き筈でない。また同じく此の意味に於て、深窓の奧に育ち一生を淸く且つ平安の裡に送る淑女達と、娼家に媚と肉體とを賣つて其の日〳〵の生を繫げる女性の群れとの人間的價値も同じであれば、自ら發心して山に入り修道院に入りたる人と、法を破り戒を犯して牢獄に繫がれたる人との價値もまた同一であり、或ひは永久平和の敎へを說く敎會と、不斷に戰鬪の準備をなしつゝある兵營や軍機工場、諸ての學藝の蘊奧を究むる所なりといふ大學校と、諸罪惡の發生地なりといはるゝ貧民窟、……等の價値もまた、『宇宙・人類進化劇』の筋書きを開展せしめ行く上での重要さに於ては全然同一であり平等なのである。**全てはみな全人類の共有物であり廻り持ちである**、——**其れが金錢を以てプラス及びマイナスに代表し得らるゝすべての物質であらうと、また金を以てしては表はし得ざる人間の心の眞善美或ひは僞惡醜なるあらゆる性質であらうと、其れ等全てのものゝ總量は畢竟する所みな、人類全部の共有物であり廻り持ちである。たゞ其の分布配置の模樣が均一ではなく平等でないが爲めに、我れ等の眼の前には人間生來の不平等相が現はれてゐるが、然し其の不平等相の由來する所とかまた其の事實に附隨して起る貧社會問題の議論とかは兎も角もとして、人々が其れ等の好ましき或ひは好ましから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざるものを、多く受けたか少く受けたかといふことは、全く彼れ等が生前及び生後の偶然の機會に依るのであつて彼れ等自身の與りかゝはる所ではない。其れ等のことに關して人々自身が少しも責任ないといふことは、丁度彼れ等が或ひは男と生れ或ひは女と生れたことに對して自身責任を持ち得ないと全く同様であるのだ。キリスト教が現世に於ける人間の諸行爲を來世に於ける賞罰といふことだけに結び付けて說くに反し、佛教の方では所謂「因・縁・果」といふことをば人々がまだ此の世に生れなかつた限りない過去の時にまで擴張して、來世といふことを考へると同時に前世といふことをも說き、其處に於て我れ等が積みたる功德また犯したる罪業の總量といふものが我れ等が此の世に生れ出る時の境遇や其の後の運命を定めるのであると教へ、たゞに人間のあひだに認められる貴賤貧富賢愚强弱男性女性等の差別のみではなく、人間の爲めに使驅せらるゝ牛馬等の如き動物までもやはり前世に於て罪業深かりし人々の生れかはりであるといふ様に說く。此教へは此の世に於て不遇に泣き失意の涙に咽ぶ人々をして實際己れ等が運命に對する諦めを得させることに幾分役立つかも知れず、また其れとは反對に、此の世に於て得意の境遇にあり、華かなる希望に輝く人々をしては、彼れ等の幸運が決して偶然なる出來事ではなくして當然なる應報であることを思はしめ、決して人々に氣兼ねすることなく各自の幸福を享樂すると同時に、不幸なる人々は實際其れが如何に氣の毒であるにしても宿世とあれば如何とも救助の完全なる方法は講じ難く、寧ろ此の世に於ては與へられしまゝの其の患難の中に苦行を積ましめて後生のたすけとなす可きであるといふ様な傍觀的態度を執らしめもするであらう。

例へば史實は兎に角として、謠曲の中に記されてゐる蟬丸は延喜帝第四の皇子とさへ生れた身なのであるが、幼少の頃から明を失して盲となつた爲め、敕定によつて終ひに逢坂山に捨てられるのである。然るに其の捨てらるゝに當つて、供なる淸貫が「さるにても我が君は、堯舜よりこのかた、國を治め民をあはれむ御事なるに斯様の叡慮は何と申したる御事やらむ、かゝる思ひもよらぬことは候はじ」と云つて嘆きかなしむに對して「あら愚の淸貫がいひ事やな、本來盲目の身と生るゝこと、前世のかいぎやら拙き故なり。されば父帝も山野に捨てさせ給ふこと御情なきに似れども、此の世にて過去の業障を果し後の世をたすけんとの御はかりこと、是こそ誠の親の慈悲よ、悲なげくまじの敕定やな」といふ様に答へて却つて彼をばたしなめて居る。

國王のことは別にまた『十善の君』ともいふ、――前世に於て殺生、偸盜、貪欲、愚痴、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、瞋恚の『十惡』を行はず『十善』のみを力め行つた人の現世に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生れかはつて斯かる榮位を與へられたのだといふ意味である、――然し乍ら既にさういふ佛教流の高徳者であつたとすれば、恐らく妻帶もせず子供もない場合が多かつたであらうから、其の人が今生に於て國王となつた場合、其の王子として生まれ後に王位に登り得る人は、當然前生に於ては其の人自身の子供ではなくして赤の他人であり、同じく苦行を重ね『十善』を行つてゐた他の人であると考へなければならず、從つて佛教に於ては、たとひ『在家』の人々の間に現世に於て見らるゝ門閥や階級の制度また私有財産の制度を默認しつゝあるとは雖ども、もしも過去・現在・未來の三世に亘つて之れを觀ずるならば此れ等の制度は既に其の根柢から覆へされてゐるのだと考へてもよいのである。其れは兎に角として、善には善が報いられ惡には惡が報いられるといふ因果律の教へは、其れが佛教に於けるが如く說かれたる場合にしても、またはキリスト教に於ける如く說かるゝにしても、要するに我れ等が眼前の不平等相の根源をまだ少しも釋明することなどが出來ぬものである、――前世に於てもせよ現世に於てにもせよ、何故に或る人々は誘惑の少き境涯に生まれ育てられて而して或る人々は其れに反するのであるか？　何故に或る人々は強固なる意志を持ち幾多の誘惑にも打ち克つて功德を積むことが出來るのに、或る人々は薄志弱行にして僅かの誘惑にも打ち負け罪業のみを重ねなければならぬのであるか？、といふことは、たとひ其の事情や理由が如何ほど詳細に說明出來たとしても、要するに本人自身の關知したることではなく、恰かも我々が何故に男と生れて女と生れなかつたか？　或ひはまた女と生れて男と生れなかつたか？　といふ事實などゝ同じく決して其れを以て人を賞したり罰したりすることが出來る係合のものではない。實に全ては人類の共有物であり廻り持ちである。もしも功德なるものあつて悅樂を生み福祉を生むならば、其れはそのまゝ直ちに人類全體の悅樂とし福祉とすべきものでなければならず、もし罪障なるものあつて苦惱を生み不幸を生むならば、其れもまた其のまゝに人類全體の苦惱であり不幸でなければならぬ。

得意の境涯にあり、心が希望に満ちたる人々は未だ曾て極樂を思ひ天國を渴仰したことがなかつた、何故なれば彼れ等に取つては現狀そのものが極樂であり天國であり、或ひは少くも其筈なのであるから。逆境にあつて悩み且つ悲しめる人々、或ひはまた他のものより見れば幸福らしき境涯にあり乍らも切實に世のはかなきことを感じたる人々のみが眞に『西方の淨土』を望み、『天國』の來らむことを願つたのである。――然し今迄に其れ等多くの人々が考へた『極樂』や『天國』また今迄に

佛教やキリスト教などによつて說き教へられた『極樂』や『天國』が、果してほんとうの極樂と稱し天國と名づけ得る樣な理想鄉であるだらうか？　其れもいつも『地獄』の對照として說かれたる『極樂』や『天國』であり、罪業あり悔い改めざりし多數者が投げ入れらるゝ永劫の苦悶世界の上空に、前世にて或ひは現世にて功德を積みたるもの、或ひは悔い改めたる者のみが迎へ入れらるゝ爲めの特別世界であるのだ。もしも萬一にも『極樂』や『天國』がさういふ相對的のものであるならば、さうして『極樂往生』とか『天國に入る』とかいふことが萬一幾分でもの利己的動機を必要とするならば、現世に於ける富貴安樂恩愛を犧牲にすることによつて來世に於て幾十倍かの其れ等のものを獲得せむとすることは當然一種のスペキユレーションであつて、例へばいま、自分の持ち金を投げ出して一圓に付七八十萬ルーブルのモスクヴアつ紙幣をシコタマと買ひ込み置き其れがいつかまた一ルーブル一圓以上するまで騰貴した時の自己の成金振りを夢に見るのと五十步百步である。棚から垂れ下つてゐる葡萄の房をめがけて幾度びか空しき飛躍を試みたる後に、狐は「葡萄の果はスツパくてまづいものだ」といふ言葉を殘してたち去つたとイソツプの喩へ話はいふが、我々は今までに此の狐に似た樣な宗教家や學者や求道者をば餘りに多く持ち過ぎてはゐなかつたらうか？　自己が持てるものゝ一部を『布施』し『喜捨』することによつて後生の安樂多幸ならむことを願ふ人々は正しく蝦を餌として大鯛を釣らむと欲する者であるのだが、然し我々は更らに其れよりも多く、單に棚の上なる葡萄の果をば斷念し或ひは斷念し樣とすることの代償として葡萄の美酒に飽かむことを欲する人々を見ないであらうか？「豪貴學道難」といひ「富者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却つて易し」と云ふけれども「極樂」が金銀や寶玉で飾られたる『極樂』である限り、また『天國』が幾多の階級制度を有する『天國』である限り、恐らく貧しき者に取つても、ほんとうに『極樂』に行き「天國」に入ることは極めて困難であり、殆ど不可能なることでさへあるだらう。我々は我々の理想鄉をば果して此の地上に建設す可きであるか、それとも其れはたゞ天上のみに組み立て得るものなのであるかを知らず、また同樣にして所謂『地獄』なるものは我れ等が現實なる此の地上生活の中に存在するのであるか、それとも其の現實からは時を距て處を異にした別の空間に見らる可きものであるかを知らぬけれども、たゞ一つ我々の明確に知つて居ること　は、我れ等が現作する此の世界が幾多の缺陷を有し、好ましからぬことを有して我れ等の改造や革命を必要とするが如く、從來の所謂『極

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樂』や『天國』なるものも亦た實に多くの缺陷や不合理なることを有して我れ等の改革せむことを待つてをるといふことである。まことに我々は『天國』をも『地獄』をも改革し革命しなければならない。我々は『天國』に革命を起して其れをばほんとうの天國、――心の貧しき者にも富みたる者にも、物質に乏しきものにも豐かなるものにも、病者にも健康者にも、惡人にも善人にも、信者にも不信者にも、同國人にも異邦人にも……共に到達し得る樣な天國としなければならない。其の革命の發源地は人々の心であり、さうして既に幾多の人の心の中にはいま現に行はれつゝある革命なのである。舊き『天國』や『極樂淨士』は、も早や我々を誘惑するだけの權能を有たず、同時にまた舊き『地獄』にも、我々を威嚇するだけの力はない。人々の心の中にはそれ〲已むにやまれぬ『或るもの』が與へられ萠せられてゐ、其の『或るもの』に支配せられて人は、時には『天國の悅樂』に顏を背けて默想もし、また或ひは『地獄の苦悶』をも恐れ怖ぢずして己れの道に精進もする。――

「或人きたりてイエスに曰ひけるは、善き師よ、我れかぎりなき生を得んが爲めには何の善き事をなすべきか？　彼れに曰ひけるは、何故われを善きといふや、一人の外に善き者はなし、即ち神なり。もし生命に入らんと欲はゞ誡めを守るべし。彼れ答へけるは、何か？　イエス曰ひけるは、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、妄りの證を立つる勿れ、爾の父と母とを敬へ、また己れの如く爾の隣を愛すべし。少者彼れに曰ひけるは、是れみな我れいとけなきより守れるものなり何の缺けたるところ我れにあるや？　イエス彼れに曰ひけるは、全からん事を欲はゞ往きて爾が所有を售りて貧しき者に施せ、然れば天に於て財あらん、而して來り我れに從へと。少者この言を聞きて憂へ去りぬ。彼れの產業おほいなりければ也。イエスその弟子に曰ひけるは、誠に爾曹に告げん、富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却つて易し。弟子之たを聞きて甚く驚き曰ひけるは、然らば誰れか救を受くべきや？　イエス彼れ等を見て曰ひけるは、是れ人には能はざる所なり、されど神には能はざる所なし。この時ペテロ答へてイエスに曰ひけるは、我們一切を棄てて爾に從へり、されば何を得べきか？　イエス彼れ等に曰ひけるは、我れまことに爾曹に告げん、我れに從へる爾曹は、世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐したイスラエルの十二の支派を鞫くべし。凡て我が名の爲めに家亡あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あるひは田畝を棄つる者は百倍を受け、かつ、窮りなき生を嗣がん多くの先きなる者は後になり後なる者は先きになるべし。」

――之れは馬太傳の第十九章にある有名なる部分であるが、これ等の記述が如何に今日の我れらの心をして、所謂キリスト

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

教の天國なるものからの距りをば感ぜしめ、また其れに對する期待を失はしめるものであるか！　筆者らは先づ第一に思ふ、小さた茅屋と一つの小舟と網の外に殆ど何物をも持たなかつたペテロなどゝ、大きな財産家の家に生れてゐた彼の若者と、「全てのものを棄てゝ我れに從へ」といはれたる時、どちらが容易に其のことを卽時に斷行し得るか？　さうして何故に一人ののが天國行きの爲めに、はじめから身輕なる扮裝を許されてゐる時に、他のものは重荷を負はせられた上更らに手や足に太い鎖さへつけられてゐるのであるか？……さうしてまたイエスの弟子たちの心根や態度が如何にさもしく、且つ、あさましいものであるか。――もしも斯ういふ人間達が幅をきかす場所であるならば、「天國」などゝいふ處へはたとひ無理に招待されたとて、とても行く氣にはなれぬと思ひ、萬一進退を過つて行つたとしたところが、三日と辛棒は出來ないと思ひ、それよりも寧ろ筆者などは、古今の嫌はれ者であるユダのともだちにでもなつて「地獄」に行く道を辿つた方が遙に愉快であらうとさへ思ふ。（筆者はあのユダといふ『醜惡』なる男に心から同情を持つ人間である。さうして曾てアンドレーフの書いた小説『イウダ・イスカリオト』を讀んで其處に自分と同じ樣な感じの暗にあらはされてゐることを知つた時、非常にうれしく感じたことであつた、――ユダヤには少くも

今日でさへ所謂キリスト教徒の大半に見られる樣な手前味噌的の心理や天國行き特權階級といふ樣な態度を認めることが出來ないのだ。）求道の動機に多くの利己的要素が含まれてゐ、修道の結果に複雜なる階級制度の樹立されてゐることは佛教の方もまた同じである樣に思はれる。例へば――「佛言。辭親出家。識心達本。解無爲法。名曰沙門。常行二百五十戒。進止清淨。爲四眞道行。成阿羅漢。阿羅漢者。能飛行變化。曠劫壽命。住動天地。次爲阿那含。阿那含者。壽終靈神上十九天。證阿羅漢。次爲斯陀含。斯陀含者。一上一即得阿羅漢。次爲須陀洹。須陀洹者。七死七生。便證阿羅漢。愛欲斷者。如四肢斷不復用之。」――とは佛説四十二章經の中にある文句であるが、恰かも『恩給』とか『勳章』とか『位階』とかいふものによつて象徵せられてをる今日の世の官僚的思想、乃至は槍先きの功名の如何によつて、或ひは大なる或ひは小たる領地をあてがはれむとも欲したる封建武士の心根と異なる所そも幾何ぞやである。斯ういふ要素が含まれてゐたればこそ、大空の如くまた太陽の光の如く本來公平にして絶對に私無き筈である宗教の領域内に於てまで、やゝともすれば彼の「一將功成つて萬骨枯る」といふ現象の裏打ちともなる可く「一擧昇天し一萬靈地に苦む」といふ樣なることが恰かも理の當然であるかの如く思はれて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐたのである。荒野に萬人の骨が徒らに曝されたる時にも、將軍等は『武威赫々』として『凱旋』し、己が身の好運なりしを喜び、恩寵の厚きことに感泣し、さうして一門の名譽と繁榮との中に毎夜晩酌でも傾けながら安んじて其の餘生を送ることが出來るのであるかも知れない。けれどもほんとうの『天國』であるとか『極樂淨土』であるとかと云ふものは、一方に『地獄』など、稱するものが存在する限り、決して成り立つことが出來る筈のものではなく、只一人だけでも『罪障』ある人の存在する限り、世は全てを擧げてまだほんとうに『救』はれてはゐないのである。もしも『功德』といふものがあり、『罪業』といふものがあるならば、其れ等は全ての人間の共有であり、連帶責任であり、其の連帶責任をば避けむとして『罪ある者は地獄にも落ちよされど我れ等は直ちに天國に赴かむ』といふ樣な『善人』の數が多ければ多いほど世は益々天國の域から遠ざかるのみである。斯くしてたとひ人々が如何なる經路の理窟を辿るにしても、最後の『罪障』の消ゆる時まで『地獄』と『極樂』とは同一のものであり、最後の一人なる『罪人』が悔い改むるまで決して『天國』なるものはやつて來ない。さうして衆と共に、不幸にして『罪業』の重荷を負へる周圍の兄弟等と共に其のすべての勞苦を分つて、もしも『地獄』に墜つ可き必要があるならば、それも如何とも爲し難く、甘んじて『地獄』にでも諸共に落ちて行かふといふ樣な『人の心』の總量が多くなれば多くなるほど、それだけほんとうの天國は近づくのである。——

たとひ數千億年の過去にまで溯つて考へたとしても、未だ曾て世に『極樂』なるものはなかつた。さうして絕對的なる極樂とか天國とかいふものは、未來に於ても、決して短かい時間の中には來ないであらう。何故なれば其れは『宇宙・人類進化劇』の最後の場面に外ならないのであるから。之れに反して、相對的なる『地獄』『極樂』なるものは過去に於ても存在しまた未來にも存在する。さうして筆者自身の如く、宇宙大自然の合目的性（Zweckmässigkeit）が駸々として一刻も休止することなく萬物の上に働いてをるといふことを信ずる者に取つては、而してまた其の合目的性の發現の極致である『宇宙人類進化劇』の最後の場面が、（もしも不完全なる言葉を以て假りにいひ表はすとすれば）絕對的なる地獄には非ずして絕對的なる極樂であり天國であることを信ずる者に取つては、我れ等の持つ『今日』は『昨日』に對しての極樂であり同時に『明日』に對しての地獄である。我れ等は長い〳〵過去の歲月の間、一日々々と斷えず『地獄』なるものを征服し消滅せしめて來、今もなほ其の征服を續けて一刻々々と絕對的なる天國に近づきつゝあるのであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。其の速度は我れ等の眼に或ひは餘りに遲々たる如く見ゆるかも知れない。或ひは時には逆行しつゝあるのではないかとさへ疑はれるかも知れない。けれども我々はそれでも決して心配し落膽しなくともよいのである、――我れ等が覺めて働きつゝある間にも或ひは深き睡りの中にあつて全然意識せざる間にも、直徑八千哩にも近き地球が一日に一回は必ず回轉するが如く、また其我のれ等の地球が一分時に約二千哩の急速度を以て斷えず太陽の周圍を廻りつゝあるが如く、更らにまた其の太陽が已れに隷屬せる多くの星と共にヘルクレス星座の方に移動しつゝある如く、全體としての人類はカチ〳〵と刻む時計の一刻み毎に日夜其の終局の理想境に向つて現實に一歩々々進みつゝあるのだ。――素より未だ起らぬ將來のことは、要するに其の時になつて見なければほんとうの事はわからず、其の終局の場面が如何なるものであらうかといふことを想像するのは人々各自の自由である。或る人々は自ら高遠なる理想を有し乍らも、いま目前に見る人間世界の現狀が餘りにも其れを距たること遠く、餘りにも僞瞞に充ち醜惡であり利己的である爲めに、此の世に於てさういふ理想などは到底實現し得られぬのでありさうして世は之れより益々廢頽し墮落し行くものであると考へてゐ、また或る人々は（例へば丘淺次郎博士の如き）は其れ等目前の事實をば更らに生物進化の理論と結び合はせ、人類は其の始め腦と手との力によつて他の動物に打ち勝ち、火と器械との次第に複雜なる使用法を案出することによつて終ひに絶對の優勢なる地位を占めることを得たが、其の腦と手との働きの進んだ結果、今後は益々、貧富の懸隔が甚しくなり、生活の困難が増し、身體は退化し、神經は過敏となり、不平懷疑の念が進み、私慾のみが盛になつて、協力一致の働きが出來なく成る可き運命を有するに至つた。人類の場合に於ても、初め生存競爭上最も有効であつた其の自身性質が限りなく發達して、後には却つて禍をなし、今後滅亡の方向に進むの外なくなつたことは、恰かも我れ等人類の出現に先だつて此の地球上に全盛を極め覇權を持して居つた他の動物（古生代に於ける魚類兩棲類、中世代に於ける巨大なる爬蟲類第三紀に於ける偉大なる獸類……等）が一時は今日の人類が占むる如き絶對的優勢を占めて到る處に跋扈してをり乍らも、最初他動物に勝つに有効なりし己が特性の極端たる發達の爲め終に内因的に頽廢しはじめて絶滅するの運命を免るゝ能はざりしと同樣であつて、恐らく人類の終局も地質學上の次ぎの時代までには略ぼ全滅するを免れぬものと見るか適當であらうと、いふ樣に推測して悲觀論を唱へる。

丘博士によつて代表せられておるさういふ樣な悲觀的人類觀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に對して、筆者は同じく生物學の立場から、さうしてまた進化論の立場から、徹底的反駁論を唱へやうとする者であつて、其序論とも云ふ可きものは既に本誌昨年の夏期增刊に掲げたわけであり、また其詳細なる本論は今後幾つかの稿となつて讀者の前に呈せらるゝであらう。(而して此の稿の如きも又實に其一つを成すものなのである)。――要するに Data が全然明確であり同一であゐ場合にも、其上に加へらる可き判斷や解釋は當然或程度まで主觀的となるを免れず、況んや複雜なる生物界の現象には今我々が親しく目前に眺め得ゐ日常卑近の事實にすらまだ其裡に含まれたる事の眞相を握み得ざることが無量無數にあるのであり、更らに遠き過去の時代にまでも溯つて生物が今日の現狀まで進化變遷し來つた道程の詳細事を考慮するに當つては、たとひダーウヰン等の投げたゐ光明が如何に著大だつたと云へ、未だ幾多の暗黑なる帶によつて其大部分が覆はれてゐるのであるから。例へは、我れ等人類が未だ出現せざりし以前地球上に全盛を極め世をば我が物顔に橫行してゐた巨大なる動物達、(即ち中生代に於ける爬蟲類、第三紀に於ける獸類……等)が其後殆ど根こそぎに絕滅の悲運に遭遇したるとの原因をば、只單に最初彼れ等が優勢を占むるに到つた長所其ものゝ過度なる發達によるのであると斷定して居られる丘博士の獨創的解釋の如きも、藝術的面白さは持つてゐるかも知れないが、要するに博士自身の所謂『懷手式推理法』の產物なのであつて、決して純學術的に肯定せらる可きものではなく、幾分かの眞理は含まれてゐるであらうけれども全體としては殆ど假設として考へるにも餘りに基礎の薄弱なる說である樣に思はれるのだ。かういふ問題に就ての議論には、多少、生物學上の事實をば挿圖や表などをも用ひて詳しく說明する必要があるので、筆者は七月の稿に於ても殆ど何も述べず、また此處でもいま特別に深入りすることをせず、全てを他の機會に一つにまとめて論じ度いと思ふのであるが、嚴正なる科學的立場から見る時、上記丘博士の獨創的解釋なるものが如何に根據の淺薄なるものであるかといふとは、例へば二年前に出た仝じく動物學者なる H. G. Wells の偉著 The Outline of History――彼の "Being a Plain History of Life and Mankind" と但し書されたる『世界文化史大系』の第一乃至第二篇(昨年大鐙閣で刊行したる全譯の第一、卷筆者等の同志の一人、北川三郎の譯註したる部分)を一讀したる後に、併て明治四十三年の本誌新年號に掲げられ今は『進化と人生』の增補中に編入されて居る丘博士の『人類の將來』といふ論文などを讀み較べて見るならば、誰れでも直ちに氣付かれる所であらうと思ふ。

一度び地上に創造せられたる生命には、外物を攝取して其れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を同化し、限りなく生長し限りなく生存せむとする執拗たる力が與へられてゐるのであつた。此の力には、生物の創造後數億年なる今日に於ても何等の變りなく、實に此の力ありしが爲めに生物は今日までも生存し進化し來たることを得たのである。然し乍ら此の力をかこむ所の外圍、此の力を與へられたる所の生物が置かれた環境といふものは、單に漸進的に變化して生物創造の當初と今日との間に、殆ど天地霄壤とも云ふ可き差異を生ぜしめたのではなくして、其の數億年數千萬年の過去の歳月の間には實に幾度びも／＼天變地異的大變動を經て來てをるのである。支那人の所謂「桑田變じて海となる」位のことはまだものゝ數にもならない。丘博士は「山が海となり、海が山となつて天地も覆るかと思ふ様な大變動が地球の表面に起つた場合はいさ知らず……」といつて居られるが、さういふ大變動、否、それよりもまだまだ非常なる大變動が幾度びも此の地球上に起つたといふことは、實に一點の疑ひもなき地質學、古生物學上の歴然たる事實であつて、生物進化の道程を論じ乍ら其れ等(下記の如き)諸事實を全然無視してをられる丘博士の態度は筆者等の如何にしても了解し得ざる所である。此れ等の大變動の起る原因の一つは、地球の冷却によつて其の表面に生じたる地殼の上に地球自身の内部より及ぼす種々なる力の作用であつて、則ち其れは或ひは徐々に地表を皺曲せしめて其處に幾多の起伏を生じ、或ひは突如として噴火を起して忽ち廣大なる連峰連山を地上に出現せしめ、深海の底をば押し上げて高原たらしめ、また陸地をば陥没せしめて海の底ともなした。其れ等の實例や實證は日本内地だけに就ていふも實に枚擧するに暇もない、(海に縁の遠いことを以て名高い信州の松本附近から鯨の骨が掘り出され或ひは箱根の山上から鮫の化石が見付けられ、さうかと思へば瀬戸内海の小さき島々からは象の化石などが切りに出るといふような有様である)。さうして本來から云ふならば、いつ如海面下にあつたかといふ様なことは別として、『日本』といひ何なる部分が『大八島』などゝ云ふ國全體の骨組みが(富士の『神山』などゝも諸共に)曾て火山的噴出によつて造られたる地殼の隆起であるに過ぎないのだ。尤も其れは言ふまでもなく何も此の連島だけに限つたわけではなく、山の中にての山と稱へらるゝ彼のアルプス、ヒマラヤ、アンデス等の大山脈なども、何れも爬蟲類の全盛期なりし中生代が終つて後、さうして哺乳類の出現し繁榮した第三紀の開幕時に當つて地底から空高くまで噴出し隆起し皺寄つたものなのであつて、一般に世界現在の地圖の主要なる輪廓といふものは其の前後に造りかへられたものであつたのだ。第二以下の主要原因は、みな天文學上の現象

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に基づる。ウエルスの著書には可成り詳しく、さうして、要領よく書いてあることであるが、其の第一は、地球が太陽の周圍を廻轉するに際してゐがく所の軌道が正圓ではなくして卵橢圓形をなすことであり、然かも其の軌道の形が年々歳々決して同一なるものではなくて他の諸遊星からの引力により徐々に變化し、或る時代には殆ど圓形に近づくけれどもまた或る時代には樣々の橢圓形に歪むことである。其の橢圓形が最も圓形に近くなつた時には橢圓の焦點の一つに位置する太陽は最も中心に近づき、從つて地球が太陽から享ける熱の量は一年中いつも殆ど同じであるけれども、軌道が最も、橢圓形になつた時には其の焦點の一つにある太陽は軌道の中央から一方に最も偏して位置し、從つて地球が最も太陽に近くて（近日點）享ける熱が多量なる時と、最も太陽から遠くて（遠日點）享ける熱が甚だ乏しい時との兩極端が出來、一年の中に怖ろしく甚だしい氣候の變化を生ずることゝなる。斯くの如き地球の軌道の變化は全遊星の引力に原因するものであるのだが、或もは（R.Ball の如く）其の變化に何等規則的なる循環を算出し得ないといふ學者もあれば、また（G.H.Darwin の如く）約二十萬年を一期として最も圓形なる軌道から最も橢圓形なる軌道までの循環が行はれるのだといふ事を主張する學者もある。其れは兎も角もとし、もしも一年中を通じて今日の極熱帶以上に高溫度なる環境に於て特殊なる發達を遂げ繁榮の絕頂にまで達したる生物群があつたとし、さうして例へば此の地球軌道の變化によつて地球全體に甚だしい夏と冬との差が起り始めて來、然かも其の冬の寒さが逐かに或る限度を超えて年々下降しはじめたと假定　るならば、恐らく其れ等生物群の殆ど全部が、比較的短年月の中に、全滅の悲運を免れ難いだらうと云ふことは何人も容易く首肯し得ることだらうと思ふ。然るにさういふ寒熱的變動を起す原因といふものは、決して地球の軌道の變化ばかりにゝ限らず外にも數多くあるのである。即ち先づ第二の原因として數ふ可きものは、地球の赤道面と地球の軌道面とのなす傾斜の度の變化である。我れ等が今日地球上の何處に於ても一年の中に春夏秋冬といふ如き季節の變化を持ち、さうして兩極に近づけば近づく程、夏は晝のみが長くなり冬は夜のみが長く續くといふ樣なことの主因は、何人も知る如く地球の赤道面が地球の軌道面に對して或る角度だけ傾斜してゐることであり、さうして現在に於ける其の傾斜度は二十三度二十七分である。「もしも地球の地軸なるものが軌道面に垂直に立ち從つて赤道面と軌道面とが全く一致してをつたとしたならば（假りに軌道が圓形であると考へた場合）、赤道は太陽の直下にあつて常に最も暑く、それより兩極に向ふに從つて幾分づゝ次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第に寒冷となりまた晝夜の區別の判然さを失ふといふ様なことはあるが然し、地球上の何れの地點に於ても一年の季節の變化といふことは全然無いことゝなりさうして晝夜は何處でも必ず正確に十二時間づゝといふことになる可き筈であるのだ。」然るに Laplace によれば、赤道面と軌道面との此の傾斜にも約三度の變動が起り得るものであつて、此の傾斜度の最小（二十二度六分）なる時には世界の氣候は今よりも遙かに恒常となり均等となるであらうけれども、もし其れが反對に最大（二十四度五十分）となつた様な場合には、季節による氣候の變化といふものは今よりも遙かに激烈となり、冬と夏との寒熱の度も當然著しく增大さる可きわけであるのである。――此れ以外にまた第三の主要なる原因としては『歳差』（Procession of Equinoxes）といふこともある。其れは地球が一日に一回さうして一年に三百六十五回自轉するに際して、丁度獨樂がよく澄んで廻つてゐる時その心棒の頂點がまた別に一つのゆるやかな輪を描いて廻つてゐる様に、二萬五千八百七十年に一回の割合で地軸が輪を描いて廻つてゐるといふ事實なのである。地球の北極は、此の事あるが爲めに、決して常に諸星辰間に於ける同一北方點を指して居るのではなくて、其の點は約二萬五千年に一めぐりする様に動いてゐるのである。此の第三の事實と第一に擧げた軌道の偏心の現象とが結び付いて地球の一つの半球には、丁度其れが近日點にある時に夏（或ひは冬）が來ることもあれば遠日點に於てさうなることもあり、或ひはまた遠日點近日點で春や秋を迎へ其の中間の途で夏となり冬となることもある。例へば、今もし、地球の軌道が長楕圓となり太陽が其の一方に偏したる焦點の上に位置してゐたとする時に丁度近日點に於て北半球に夏が出たことゝ假定するならば、太陽に近きが故に北半球の夏は非常に暑く南半球の冬は比較的溫暖であり、（さうして一般に遊星の速度は近日點に於て最も大であり遠日點に於て最小である爲め）其の夏や冬は短かいのである。けれども其の代りに、地球が遠日點に廻つて來て北半球には冬が、また南半球には夏がやつて來る時、その冬は怖ろしく寒いものであり其の夏はまた凉しいものであり、さうして地球の速度が遲い爲めに此の時の冬や夏は前の夏や冬よりも長く續くのである。もしも萬一此の上になほ、第二の原因として上に述べた、赤道面と軌道面との傾斜度の著しき增大といふ様なことが同時に起つたとするならば、北半球の夏は一層多く太陽の熱を正面に享けて暑きが上にも暑く焼け、冬はまた太陽の熱から益々遠ざかつて寒きが上にも寒く凍ることであらう。――此れ等三つの、さうしてまた其れ以外に多くある、天文學上の現象の外に、既に最初に述べたる地球上に於ける地形の變

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化といふこともまた其れ等の諸現象を相聯關し相錯雜して、或ひはプラス的に或ひはマイナス的に、我れ等が世界の舞臺をば變へ、生物生存の環境をば造り改めることの原因となつたのであつた。我れ等は其のプラスとかマイナスとか云ふことをいろ〳〵な事に就て考へることが出來るであらう。例へばいま述べた樣な場合に、北半球に於ける夏と冬との温度の差といふことに就て差異の増大することをばプラスと考へ減少して相近づくことをマイナスと考へるならば、上に記したる如く地球の軌道が楕圓となり、歳差によつて夏を丁度近日點の所で迎へ、さうして然かも地軸傾斜が最大になるといふ樣な事は、何れも皆同じ樣にプラスの働きのみをなす原因なのであり、從つて其の結果もまた非常に恐畏す可きことゝなるのだ。プラスの力とマイナスの力とが時を同じくして生ずるならば互ひに中和して別に著しい變動をも起さずに済むであらうけれども、もしもプラスとプラス、マイナスとマイナスのみが重なり合つた樣な場合には、其の爲めに起る變化の著大なること實に理の當然であると言はなければならない。斯くして地球上に於ける地形の變化といふこともまた勿論、いま考へつゝあつた夏と冬との温度の差といふことに對して或ひはプラス或ひはマイナスに大なる影響を有するのであつて、則ち、地表に高い隆起や深い陷沒が出來、陸に多くの山脈が出現し、海洋が深くなるといふ樣な變動はプラスの方に働いて、一年の中の晝は太陽の熱を餘分に享けることゝなり、一年中の冬や一日中の夜は一度び享けたる熱より多く放散して餘計に冷えることゝなるのである。(其れは主として地球を包む大氣の中に水蒸氣の量が減少することに基くのだ)。大氣中に含まれる水蒸氣の量がふえればふえる程、太陽の輻射熱が地表に達する速力はそれだけ著しく阻められて地表に達し難くなるのであるが、然し其の代りには一度享けられたる熱が地上から逃げ去ることも困難となること、人々が濕潤なる海岸地方に避寒して夜も暖かきことを經驗する如くであつて、大氣の濕潤なることは寒熱を二つ乍ら緩和せしめ、之れに反して大氣の乾燥は、夏の炎熱をもまた冬の沍寒をも共に著しく助長せしめるのである。然るに陸が低く海が淺く、從つて水の蒸發する面積も廣い、といふ樣な地形が變じて、山嶺高く空に聳え、海洋の底は計り難く深い、といふ樣になつたとするならば、海洋はたゞ其の深さを増したことに反比して其の水面を減するばかりでなく、高き山々の嶺が直ちに大氣の中から水分を吸收し凝結せしめ其れをば雪や氷河と化して水を其の不斷なる天地循環の軌道から奪ひ去ることにより、事實其の水量の幾分をも失ひ、從つて水の蒸發面をも益々縮小せしめ、大氣は次第

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に乾燥して夏の炎熱を高め冬の寒苦をば強めるに至るのである。――斯くの如くにして、たゞ單に爰に擧げたる四つの原因のみに就て考ふるも、此れ等のの原因が或ひは單獨的に或ひは複合的に起ることによつて、我れ等が生存の世界には現實的に天變地異的なる大變動が起り得るのであり、さうして既に生物發生後の過去の時代に地球の全表面を通じて事實、幾度か起つたことでもあるのだ。此れ等の諸原因の組み合せによつて地上に溫暖和樂の境が造り出されたこともあつたが、然しまた全地を擧げて嚴寒酷暑の苦境に化せられたこともあつたのである。ウエルスは彼れの著書の中に、其の事に關して次ぎの樣なことを述べてゐる（主として北川三郎氏の譯により白山抄）。

「地球上に於ける氣候の變化といふものは決して漸進的なるものではなくて、其れは極暑と極寒との間を徐々に移行する所の波動である。太陽と地球とは其の昔、白熱してゐたのであるから、世界氣候の變遷の歴史とは單に其れが次第に冷却して行くに過ぎないと考へる人があつたなら其れは大なる誤りである。地球の中心は今日に至るまで確かに極めて高熱である。が然し地球の表面では我々は此の内部の地熱を少しも感じ得られない。噴火や温泉を除けば、最古の岩石（原生片麻岩）が固化して以來地熱は地表では認められず、從つて氣候には直接何等の關係をも持たないのである。然るに極めて古い昔、無生代や太古生代に於てすら、氷のために磨滅せられた岩などの如き極寒期の痕跡の存在することが認められる以上、我々は斯樣なる寒期の波といふものが酷暑の時期と交互に、歴史に沿ふて、常に到る處に襲來したものと考へざるを得ない。さうして地表の全部を通じて大滋潤の時期と大乾凋の時期とか幾度も々々來襲したのでもあつたのだ。」「地球の岩石に刻まれた過去帳を繰つて見ると、上記天文學上の三現象の影響が互ひに作用して生んだ所の不規則なる氣候變化の痕跡をば、我々は殆ど連續的に讀み且つ辿ることが出來る。此れ等三つのシステムの各別なる律動が互ひに不一致を示し、其の爲めに大氣は温和で全世界を通じ温暖なる氣候を樂しみ得た樣な長い時代もあれば、また或る時には此れ等の三つが各々精一杯の極端を盡して生命を冷結せしめ其れに極度の壓迫や苦難を加へた樣な時代もあつた。さうして此の樣なる外圍の變動に應じて、生物もまた或る時は長いあいだ大擴張大膨脹を續けて地に漲りあふれ千姿萬態を誇り得る樣な時代を持ち、また或る時はそれに反し苦難の時代を迎へて、『種』は勿論幾多の『屬』『綱』に到るまでの生物の大群が根こそぎに地表の上から消滅し去り、辛らじて後に殘存し得たものも嚴酷なる鞭にむち打たれねばならぬのであつた。かういふ事實はみな岩石の過去帳に記されてゐるのである。石炭紀の低地生物の豐饒なる繁茂の時代は前者の樣な好都合なる狀況であつたに違ひなく、之れに反し、其の古生代の終末期を凍固せしめたのは即ち後者の樣な悲運逆境の週り合はせた時であつたに違ひない。さうして極寒の時代に比べるならば暖かい時代は長く續いたもので

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるらしい。――然らば今日我々の住める世界は如何なる狀態にあるのだらうか？　之れは誰れもが知り度いと思ふ問題である。現今の世界はいま丁度長い間の苦難逆境から、而指はしながらも漸く浮び上りつゝある狀態にあるらしい。或ひは五十萬年後の未來には再び彼の溫暖和樂の時代が來て世界は冬なしとなり、遠く兩極地方までも樹木草葉に飾られる樣になるかも知れない。勿論、現在ではこんな豫言に確信を置くことは出來ないが、將來に於ては、我々の智識が增すに從ひ、次第に精確なる豫言が出來る樣になり、斯くて人類は、來る可き變動に備ふ可く、數千年もの將來に對する計畫を立て得るやうになつて行くことだらうと自分は信ずる。」

生物の『進化』といふことに對して、生物そのものゝ內部に發する力といふものが如何なる關與をなすかといふことは後に考ふ及き別問題として置いて、さて他方に於て生命そのものを圍繞する大自然の諸力諸相、（即ち我々生物が生存の環境）といふものが抑々如何なる程度まで進化の道程の上に與るところ大であるか、而して其れ等自然の諸相が如何にうつろひ易きものであり、力の發現と組み合はせの模樣によつて如何に容易く所謂『天變地異』的大變動をすら惹き起し得るものであるか……といふ樣なことは以上に述べ來つた簡單なる論議だけによつても大體肯定し得らるゝことであらうと思ふ。さうして、詳細なまた確實な事情といふものは勿論、今日人類の有つて居る生物學並びに地質學的の智識が不幸にしてまだ極めて不充分である爲めによくわからぬにしても、彼の中生代に於ける爬蟲類や第三紀に於ける獸類などが各々其の繁榮の絕頂に於て突如として活劇の幕をば閉ざし殆ど絕滅的に地表から其の影を消し去つたといふ事實なども、素より內因的の理由も幾分あつたといへ（後出）主としてやはり上に記したる如き天變地異的なる外界の變動に基因したことであつたらしく、少くとも丘博士の所說の如く「平家の亡びる可き原因が既に內から働いて、最早危く成りかゝつてゐた所を源氏が外から突き倒した故、恰かも內部の朽ちた枯木が些細の風にも倒れる如くに、容易に亡びたのである」といふ樣な事情では決して〱なかつたのである。其れは決して源氏が起つて平家を亡ぼしたといふ樣なことではなくして、恰かもたとふるに物なき程の大海嘯が襲來して日本の國土全部を洗ひ流したといふ樣な天災なのだ。源氏や平家や藤原……といふ樣な、そんな差別などとは更らに何等の關係もなく、寧ろきなふまでの敵や身方までが一緒になつて難を避け落ち延び樣と努めたであらうにも關はらず、やはり溺れるものは溺れ、辛ふじて助かるものだけが助かつたといふ樣な性質の大事變だつたのである、勿論其の時まで生きてをつた生物相互の間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には所謂『生存競爭』の事實もあり、烈しい鬪爭も不斷に行はれてゐたに違ひないのだが、然し一旦、自然の手によつて全てが一樣に慘く擲きのめさるゝに及んでは、まう今まで各自が競爭の爲めに持つてゐた武器や特性などゝいふものは殆どみな一樣に無價値無能力のものと化し終はり、彼れ等の生命を左右し、死ぬか生きるかを定める自然淘汰、適者殘存の標準も突如としてまるで新しいものと變つてしまつたこと、恰も上記の如き大海嘯が襲つて來た時に源平とか藤原とかいつて地上の人間達が相爭つてゐた場合に有力だつた武器や特性（或ひは位階が高いとか、權勢を握つてゐるとか、門閥がよいとか、權謀術數に長けてゐるとか、金が多いとか少ないとか、弓が上手だとか下手だとか、……いふこと）が奔到する潮の流れや渦卷きに對して何等の資格ともならず、人々は老若男女貴賤貧富の別なく大宮人も乞食も一樣同列に、怒れる濤に呑まれ狂へる水に溺れさせられたであらうことゝ同じであるのだ。もしも其の際、運よくも助かつて生きのびた者があつたとしたら、其れは從來は立身出世の爲めに何の足しにもならなかつた「肺や心臟が強くて息が長く續く」といふ樣な特性を持つた人々、乃至、河童や獺や溝鼠の類でもあつたであらう。また然らずして、大人達がみな悉く死に絕えたのに搖籃にねてゐた嬰兒だけが無事に助かつたといふ樣な種類の奇蹟的偶然事もあつたかも知れず、或ひはまた高山の奧深く棲んでゐて今まで其の存在をすら知られてゐなかつた樣な見榮えのせぬ人々だけが、たまく住んでゐた嶺が高かつたといふ原因のみの爲めに死滅を免れ得たといふ樣なこともあつたらう。けれども其れ等は、言ふまでもなく、何れも偶然のことである。誰れか其の事實を捉へ其結果だけを見て「既に內から亡びる原因が働いて、其の運命が傾いてゐた場合であつたので、源氏も平家も藤原等も今まで劣等の位地にあつたもの丶爲めに、忽ち倒されてしまつたのである」といふ樣な議論を主張し得る者であらうか？　我々生物の過去に起りたる地質學時代の幾多の大變動に對しても理窟は全く同樣でなければならない。たとひ丘博士は「中生代に天下を我物顏に橫行したイクチオサウルスやプレシオサウルスが僅かに一時代限りで滅び失せたのも、第三紀の恐るべき猛獸、懼るべき巨象が暫くで全く死に絕えて後に子孫を遺さぬのも、全く平家の亡びたのと同樣の理由に基づくのである」と確く斷言して居られるけれども、（甚だ禮を失した言葉ではあるが）其れは科學上殆ど何等の根據もなき丘博士一個の思ひ付きであるに過ぎないのだ。筆者は次ぎに先づ、中生代の終末に關して、恰かも特に丘博士の議論を駁す可く書かれたのではないかとさへ思はれるウエルス

の言葉をば讀者に紹介し、然る後更らに、己れの言はむと欲する所に論じ進むであらう。

「生命の歷史の第二卷たる中生の大時代は、實に爬蟲の繁榮し發展したる驚異の時代である。けれども此の時代の終末に起つたこそは更らに其れにもまして最も驚嘆に價する。中生代の最末期の岩層までは、あらゆる種類に屬する爬蟲類が何等の壓迫も蒙ることなく繁榮してゐたことを我々は認める。其の當時の彼れ等の世界の遺跡中には、彼れ等に對する敵手や競爭者の姿も見えないし、また戰ひを挑まれたあとも無い。然るに、俄然、過去帳はこゝに於て中斷されてゐるのだ。然かも此の中絶はどの位の長さの時間に相當するものであるのか、我々には全く見當がつかない。恐らく澤山の頁が拔け落ちて、なくなつてゐるのだ、――さうして其れはきつと、何か大きな天變地異的なる氣候の激變に相當する頁なのだ。斯くて其の次ぎに陸生の植物や陸棲の動物の夥しい痕跡が見出される時（卽ち新生代の來た時）には、「昔の爬蟲類の雜多なる種類の非常なる大群は、も早や其の影を消してゐる。彼れ等の大部分のものは其の後裔を遺してゐない。彼等は根そぎに拭ぎ去られてしまつたのだ。プテロダクチルス（翼指類）は全然見えない。プレシオサウリア（長頸龍）、イクチオサウリア（魚龍）は一匹もゐない。モササウリア（滄龍）も消えた。蜥蜴類では二三の小さな型の者のみが殘り蘭領東印度產のモニトルが今日では最大なものである。さうしてデイノサウリア（恐龍）の大群や其の幾多の種類もまた消え失せた。「たゞ鰐と海龜及び陸龜の種類だけがどうやら新生代まで相當の數量を持ちこたへて來てをるのみである。斯くて、次ぎに來た新生代の化石が其の後まもなく我々の前の開展して示す場面の中に於ては、絕滅し去つた爬蟲類の諸型によつて從來占められてゐた所の位置、卽ち生物界の王位なるものは、其れ等中生代の爬蟲類とは餘り近緣ならざる、而して少くとも其の中の主權階級型のものゝ子孫では決してなき所の、外の動物によつて占められて居る。生命の全然新しき型（卽ち『哺乳動物』といふ型）が世界の覇權を掌握するに至つたのだ。――此の爬蟲類の遂に急激なる斷滅は、人類出現前に於ける地球の全歷史を通じて最も驚異に充ちた大革命であつたのだ。さうして其れは前にも述べたる如く長いあひだ中庸を得て氣候溫暖なる狀況の續いた時代が終ひに其の終末に近づき、冬は厳しくして長く、夏は暑くして短かきあの恐ろしき苦難の時代が始まりかゝつて來たことに恐らく關係あつたことの樣に思はれるのである。中生代の生物は、動物もまた植物も、溫暖な狀況には適應してゐたが寒冷に對しては殆ど何等の抵抗力をも有たなかつた。然るに此の度び覇權を掌握したる新しき生命を見ると、其れは何よりも先きに、溫度の大變化に對する強き抵抗力を具へてゐるのである。――中生代の爬蟲類の絶滅を惹起したる眞因がたとひ何であつたにもせよ、其れが非常に廣汎な範圍に亘る大變動であつたといふことだけは確かである。何故なれば、此の時、海の生物もまた實に時を同じうして、同樣なる大終末的變化を受けてゐるのであるから。同じ中生代に於て、陸上の爬蟲類の漸進的勃興繁榮並びに最後の俄然た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る緯度に丁度平行して、海の中ではアムモナイト（菊石）の類がやはり漸進的なる勃興及び繁榮と最後の突發的斷滅の曲線を描いてゐる。菊石類とは卷貝を持つた軟體動物（鮹、烏賊等）の一部類であるが、古代の、洋には雲の如く夥しく棲息してゐたものと見えて、中生代の全てを通じ、岩の過去帳は常に此の卷貝の無數なる集群と種類とを包含してをり、其の種類は數百にも上り、殊に中生代の終末期に向つては益々其の種類を増し、大いさを増して、繁榮の絶頂にあつたにも拘らず、新生代の記錄が再び始まれる時には此れ等のものもまた爬蟲類の如く全部一時に消滅し盡してをる。もしも爬蟲類のみに就て論ずるならば、人々は哺乳類なるものが其れと競爭し、而して哺乳類の方がより生活に適しゐたるが爲め、生き殘つて爬蟲類の位置を奪つたのであると主張することも出來るかも知れないが、然し菊石類に對しては決してさういふ議論を成立たすことが出來ない、何故なれば彼れ等の位置は今日に至るまでも其れに取つて代る者がまだ出てゐないのであるから。彼等はただ單に消え去つて行つただけなのだ、何であるかはよく判然しないが兎に角或る外界の特殊な條件によつて彼れ等は中生代の海洋に棲息し、一時、其處に極度の發展を遂げることが出來たのだけれども、然し其の後また或る判らざる激變が突發して、彼れ等の生存を一擧にして不可能としてしまつたのである。あの限りない變異に富んだ多くの者の中から現在ではも早や唯の一屬も存在せず、たゞ極めて菊石類に似たる所の眞珠鸚鵡貝の類が、孤立した一屬をなして殘つてゐるだけに過ぎない。さうして其れが今日、印度洋や太平洋の如き温暖なる海中にのみ發見されるといふことなどもまた何事かを語るのではあるまいか。――哺乳類が自分等よりも生存により不適當であつた爬蟲類と競爭して彼れ等を逐斥したとか、兩者の間に闘爭があつたとかいふ様なことに就ては、よく話はある様であるが、さういふ直接な競爭の痕跡などはたゞの一かけも認めることが出來ない。今日我々が讀むことを得る岩石の過去帳によつて判斷するならば　先づ第一に爬蟲類が、よくハツキリと説明はつかないけれども、或る事情の下に全く絶滅し終はり、然る後、一時、地球上の全生物に取つて非常なる苦難の時代が襲來し、而して更らにまた其の後、外圍の狀態が再び都合よくなつて來たにつれて、はじめて新しい型の生物（即ち哺乳類）が次第に發達し散布し終ひに空しかつた世界を充すに至つたのだらうと信ずる方が正しい様に考へられる。」（主として北川三郎氏の譯による自由抄）

終ひに最後には我々人類の如きものにまで進化し發展した所の哺乳最初の祖先が果して如何なる動物であつたかと云ふことは、まだ今日でもよくわからない。けれども、現時の古生物學者から、恐らく其れに近いものだらうと考へられてゐるのは、四足獸の様な形をしてゐた爬蟲類（Theriomorpha）、其の中でも殊に異齒類（Anomodontia）と呼ばれたる部類であつて、化石としては今まで主として南アフリカの二疊紀三疊紀の岩層か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら見付けられる。世界の他の場處からは餘り見出されぬのに、南アフリカだけには可成りに繁榮したものと見えて、發見される種類もいろ〱と多く、(Endothiodon, Dicynodon, Cynognathus, Ptychognathus,……)、其の一般的特徴とする所は、彼れ等の齒が蟲を食ふにも、肉食するにも、また植物性のものを食ふにも何れも適應し得る樣になつて居たことゝ、さうして四肢が極めてよく發達してゐたことである。後肢でも物を掴み得たので恐らく樹上生活をもしてゐたものだらうと考へられてゐる。大きさもまち〱ではあるが、要するに小形なるものゝみであつて、もし彼れ等の大いさをば、其の當時陸に海に河に跳梁跋扈しゐたる他の巨大なる爬蟲類に比較するならば、恐らく今日の象に對する鼠にも及ばぬことがあつたであらう。何故なれば、所謂龍足類 (Sauropoda) の一種なるブラキオサウルス (Brachiosaurus) といふ奴の如きに至つては、體長實に百呎にも達して如何なる鯨より大きく、また軀幹や四肢の肥大さは古來の象中の最大なるものにも勝さり、頸は今日の麒麟よりも長く、さうして後方に其の首よりもなほ長大な尾までを引き摺つてゐたのであるから。――巨大なる恐龍の或る種類は小さき此れ等の異齒類と時を同じくして南アフリカにも棲息してゐた。けれども哺乳類は、異齒類或ひは其れに類するものから既に原始的哺乳類とも云ふ可きものが出現してゐたのではなからうかと察せられる白堊紀の半ばに於ても全盛を極めてゐたのであり、さうして其の地理的分布はアフリカ以外ヨーロッパにも南北アメリカにも極めて廣く及んでゐたのであるから、哺乳類の出現の爲めに彼れ等の全てが壓迫を受けて絶滅せしめられたといふ如き議論は決して成立しないのである。殊に此の議論は、海産のものなどに就て考へる時に、益々其の根據の薄弱さを暴露する樣に思はれる。即ちはじめ陸生だつた哺乳類が二次的に海に侵入して終ひに今日の鯨やアザラシ等の如きものを生ずるに至つたのは新生代第三紀の漸新世 (Oligocene) 前後であるのに、遠く其の出現に先だつて既に中生代白堊紀の終末には、其れ以前あれ程の繁榮を極めてゐた海産の巨大なる爬蟲類 Ichthyosauria (魚龍類)、Plesiosauria (長頸龍類)、Mosasauria (滄龍類) 等は全て絶滅に歸してゐたのであるから。さうして今日まで現存して居る爬蟲類で、小形なるトカゲ、カナヘビ、ヘビ、陸龜、等の如きものより大形なるワニ、蟒蛇、海龜、等に至るまで何れもみな熱帶的性質のものであり、氣候が寒冷となれば土にもぐつて冬眠せねばならぬものばかりであることを思へば、さうしてまた爬蟲類衰滅の後を承けて地上に跋扈しはじめたる鳥類や哺乳類が何れも暖血なる動物であること

を思ひ、また同時に鱗の變形物として羽毛とか毛髮とかいふもののゝ始めて地上に出現したことなどを思ふならば、彼の中生代の終りに當つて死滅したるものをば死滅せしめ生き殘り得たるものをば生き殘らしめたる原因といふものは、たとひ植物群に著しい變化が起らなかつたといふ樣な反證はあるにしても、少くも全地球上の氣候（特に『寒さ』といふこと）に關聯した自然界の一大變動であつたのだらうといふ推察は恐らく當らずと雖ども遠からずであらうと思ふ。決して生物相互の間に急に前代未聞なる烈しい爭鬪が起つた爲めでもなければ、さうとか云つてまた丘博士の獨創的所說の如く、絕滅し去りたる生物は全てみな己れ等自身の內部から彼れ等を絕滅さす可き原因に働かれたから亡びたのであるといふのでもない。主なる原因はどこまでも天災である。たとひそれが、例へば南アフリカに於ては巨大なる恐龍類を鏖にしさうして、反對に矮小なる異齒類のみに對して後に彼れ等が哺乳類となつて偉大なる發展を遂ぐ可き原因として働いたとしても、地球上の多くの場處に於ては、もし其の天災さへ起らなければまだ〱之から隆盛期に入らうとしてゐた生物で、然かも、早晩自然に消滅す可き樣なるものと無差別に殺されてしまつた樣なものも多かつたのであらう。

――實は筆者自身は此の篇の中に於て人類及び生物の過去の化石時代のことを此の上、長々と述べ度いなどとは思はない。けれども七月の本誌增刊に、人類の將來に關する丘博士の悲觀說を駁して筆者が樂觀主義を唱へたに對し、一部の讀者から「主義としては共鳴しまた是非ともさうあつてほしいと心では希ふが、盛者必滅、地質學上の各時代に地上に覇をとなへたる幾多の動物がいつも其の繁榮の絕頂に於て滅亡したるが如く、我れ等人類も今日の所謂文明が其の極に達したる時に於て同じ運命を免れることが出來ぬといふ議論の根據を覆へすまでには、まだ材料が不充分である。其の點をまう少し力說してもらひ度い」といふ樣な注文を受けたので、あの篇の本論はまた更めて外の機に書くこととしても、此處にも序でにもう少し理窟の正否を明かにして置き度いと思ふ。何故なれば其れは、一度丘博士の如き態度を以て論ぜらるゝ時、只單に數萬年後といふ如き人類の遠き未來のみに關係ある問題ではなくして、實に我々が日常生活の一擧一動にも、而してまた筆者が爰に提唱せむとする子孫崇拜主義の根柢にも實に決定的なる交涉を持つてゐるのであるから。博士は云ふ

「一時絕對の優勢を保ち得た動物種屬を內から働いて滅亡せしめた原因は何であるかと云ふに、我等の見る所によれば、何れの場合にても必ず初め其の種屬を急に勃興せしめた原因と同一のものである。或る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

動物は體の大きく筋肉の强いことによつて他の種屬に打ち勝ち、或る動物は武器の鋭いことによつて他の種屬に打ち勝ち、其の他それぐ異つた方面に他に優れた所があつた爲めに、優勢の位地に達し得たであらうが、假に身體が大きく力が强かつた爲めに他に打ち勝つた動物に就いて見るに、體の大きく力の强いといふことは確に生存競爭上他の動物に勝つに都合のよい性質であるが、また生活に多量の食物を要すること、成長に多くの年月を待たねばならぬこと、蕃殖の遲かるべきこと、動作に敏捷を缺くこと、其の他なほ種々の不利益なことが必然に附帶して來る故、一定の度を超れば體の大なることは却つて生存競爭上都合が惡くなる譯である。また牙や角の大きく鋭いことは之を用ひて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之れとても牙や角が單獨に發達し得るものではなく、之を載せる爲めの頭骨頸骨も、之を運用すべき筋力も、其の筋肉を養ふ可き血管も、共に發達せざるを得ぬ故、牙や角が大きくなれば、それだけ其の動物の負擔が重くなつて、之れも一定の度を超えると、恰も不相當に多くの海陸軍を造つた貧乏國が、武器を維持する爲めに重税を課する結果として、總て他の方面が疲弊し、終ひには國全體が衰へざるを得ぬ如くに、やはり生存競爭には却つて不適當なものとなつてしまふ。凡そ或る性質を備へたるが爲めに總べて他の種屬に打ち勝つて、絶對に優勢の位置に進んだ動物は、後には更らに其の性質を用ゐて相互に競爭するを免れぬもので、筋力で天下を取つた種屬は後には自己の種屬内で相互に牙を以て鬪ふ故、益々體の大きなもの牙の强いものでなければ生存することが出來ず、斯くして初め其の種屬をして他に優らしめた性質は何所までも際限なく進まねば止まぬ有樣となるが、前に述べた通り、如何に初め生存競爭に都合の好かつた性質でも或る程度を超えると却つて生存競爭に不利益なものとなり、且つ身體が或る一定の生活法に適する樣に專門的に遠く變化すると總て他の方面には、それだけ不適當なものと成らざるを得ず、隨つてそれだけ融通の利かぬものとなり、終ひに生存競爭上不利益な位地に陷つて、漸次他の種屬の爲めに滅されるに至つたのである。以上述べたことをなほ詳しく論ずれば、多くの實例を擧げて證據立てることが出來るが、斯くては餘り專門學の範圍に深入りすることゝ成る故、此所には略する。たゞ我らの考への要點を述べれば次の如くである。即ち地質學上の各時代に優勢の位地を占めてゐた諸種の動物が後に至り忽ち亡び失せたのは、決して單に他の種屬の爲めに攻められて敗けた譯ではなく、寧ろ其の亡びる原因が内部に生じたるに因るのである。然して、其の内部に生じた原因といふのは、即ち初め其の種屬をして總て他の動物に勝つて優勢の位地に達せしめた原因と同一のものである。シヤミセンガイやオウムガイの樣な何處の隅に生きてをるか分らぬ程の微々たる生活を營んで居るものは、却つて古生代から今日まで引續いて細長く生存して居るに反し、一時急に盛になつて、暫くは絶對に優勢を保つてゐた樣な動物が、悉く次の時代に滅び失せたと云ふことは、我らが此處に述べた如き原因

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

によると考へる外には到底說明の仕樣は無い樣である。斯くの如く化石學上の例の示す所によると、一時地球の表面に優勢の位地を占めてゐた動物種屬は、何れも初め其の種屬をして他の動物に打ち勝つて、優勢の位地に達せしめた其の同じ性質が、やがて却つて禍をなして、其の爲めに悉く亡び失せてしまふたが、さて人類は如何であらうか。人類だけは獨り他の動物とば全く違うて、人類をして、今日の優勢なる位地に達せしめた腦と手との力に依り、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮え行くであらうか。將また他の動物と同一の法則に從うて、曾ては人類をして他の動物に打ち勝たしめ、文明人をして野蠻人を征服し得せしめた其の腦と手との働きが、やがて却つて禍をなして、人類をして、恰も空に向うて投げた石が降ち來るときの如きパラボラ線を畫いて一刻毎に速力を增しつゝ滅亡の運命に向うて進ましめ居る如きことは無いであらうか。」

直接人類のみに關する問題の方は、順序としてしばらく後まわしとし、先づ太古に滅びた動物の問題を片づける。さうして丘博士が考慮に入れて居られるのは、前に述べた中生代の巨大なる爬蟲類が全滅したことであり、また新生代第三紀に於ける偉大なる獸類の衰亡したことであり、後者に就ては「單に身體の大きさのみに就て云ふも、ヂノテリウムと稱する象類の如きは頭骨だけでも長さが一間近くあり、マケロッスと云ふ虎は牙の大きさが短刀ほどあり鹿には左右の角が二間以上に擴がつたものがある。されば此の時代に於ける獸類は中世代の蜥蜴類と同じく、如何なる動物が出て來やうが到底亡ぼされる如きことは夢にも有り得べからざる勢であつた。然るに其の成り行きは如何と見ると、實際に於ては忽ちにして亡び失せ、次の時代には殆ど全滅の姿と成り終つたのである」、といふ樣に述べてをられる。――けれども要するに丘博士の所說は、（其れをば「證據立てることが出來る」と信じて居られる實例の多くを愛割してしまはれたことを筆者は非常に殘念に思ふが）、單に博士御自身の所謂『懷手式推理法』による所の高級常識論とも云ふ可きものであつて、一讀したる所では極めて學術的の確實さを持つてゐる樣に思はれるが其の實は東海道膝栗毛の六部爺の話しと大差なき位に危い推理によつて出されたる決論なのである。以下、上に引用したる博士の議論中。。を附したる部分に就て一言するならば、體の大きな動物は生活するに多量なる食物を要するといふことは素より言ふまでもないとであるが、然し其れなからと云つて直ちに、植物性の食物を攝る象とか麒麟とか河馬とか犀とかといふ樣な大形の菜食獸や、或ひはまた獅子虎等の如き大肉食獸が、日々の食物を得るのに困難を感ずるであらうなど〻考ふるならば、其れは實に早吞み込みもまた甚だしいと云はなければならない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

物價騰貴や生活難に惱まされてゐる日本の首府などに於てこそは、一頭の獅子、一頭の象を動物園に養ふにも費用の大なることを氣にしなければならぬかも知れないが、然し此の小さな島國の中だけに囚はれた常識を以て、さうして現時の不自然なる社會制度に脅迫された我々の貧乏人根性を以て、大なる自然界のことまでを推測するわけには行かない。地球をば小さいと云ふのは、其れを太陽に較べ、他の恒星に比べ、光波や電波の速度に比べた時の言葉である。象や鯨や、乃至また體長百尺を超えた中生代の大蜥蜴などを大きいと云ふのは、單に人間を標準としてのはなしである。人類が我が物顔に地球の上を跋扈してをるといふ今日に於てすら、印度南洋一圓にあるジャングルやさてはアフリカ一帶の大草原や森林やは、まだ無數の巨大獸を養つて餘裕綽々たるものがある。印度や南洋には日本からも可成りに出掛けた人々があるから尋ねて見られてもわかるが、象や虎などの棲息してをる場所は中々人間などには足を踏み入れることも出來ぬ樣な藪や密林の中である。もし愈々象狩とでも云ふことになれば、人間は大勢がかりで、或ひは樹木を伐り倒して途を拓き或ひは舟に乘つて沼池を渡るといふ樣に苦心慘憺して、少しづゝ進まなければならぬ樣な密林の中を、象などは非常なる速力で常に易々樂々と横行し濶歩して居るのである。たとひ極めて贅澤に樹木の嫩芽ばかりを食つたところが、食物は殆ど無盡藏であつて少しも不足の心配などはないのである。だからさういふ環境の下にあつて象や犀などの體が大きく力が強かつたからと云つて、其れは決して只鬪爭のみを目的としたる貧乏國の軍備擴張といふ樣な意味のものではなく、實に其の境遇に對する適切なるアダプテーションであり、却つて日常の食生活の爲めの必要條件であるのだ。さういふ樣な舞臺とし環境としてのアフリカ大陸は更らにそれよりも一層尨大である。今度の世界大戰の始まる少しばかり前にルーズヴェルト父子が遂行した "African Game Trails" の紀行文を讀んだゞけでも、我々はあの涯しない草原、林野、沼河山岳等の中に、文明國にをる人間の殆ど想像もつかぬ程、如何にまだ夥しい象や犀や河馬、麒麟等の如き菜食性の大獸が食に飽きて養はれつゝあるか、また斑馬、角馬、あらゆる種類の羚羊（アンテロープ）の數百千萬が群をなして草を食んでゐ、さうしてまた、其れ等の草食獸の一部を犧牲として、如何に多く獅子等の如き肉食獸が生存して、鐵道の沿線や人里近き處にまで徘徊してをるか、といふことを知るだらう。けれども一度、其れ等の地に於て保證されてをる食物の潤澤さが如何なるものであるかを悟るならば、我々はもう象のからだの大きさをも決して大き過ぎるなどとは思はず、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

獅子の筋力の强さをも決して過當であるとは考へぬだらう。全てがそれ〲の環境に對する實に當然なる適應の結果であり、缺く可からざる必要條件の充實であつて、たとひまだ不充分なる所、此の上にもなほ望ましき所などは多いにしても、其處には決して毫末も、不合理であり無理である所などはない。さうして彼が置かれたる環境に普通起り得る波動的變化の限界内に於ては、(次ぎに筆者が列擧する如き外因的なる新しき現象の起つて來ぬ限り)、彼れ等自身の持てる特性の中の如何なるものでも決して、彼れ等を滅亡せしむる『内的素因』などになり得るものとてはないのである。生物の屬種を絶滅せしむる原因は、何時も必ず外よりの力であり、廣義に於ける環境の大なる變化である。

地球の歴史あつて以來、未だ曾て我々人類ほど、所謂『自然の征服』といふことを行ひ、自然界より受くる好ましからぬ壓迫に反抗し得たものはなかつた。さうしてまた火力による機械を發明したる以後の人類ほど他のあらゆる動植物の上に、恰も其れ等をば己が隷屬物の如くに思ひなして、暴威を振つた動物も未だ曾てなかつた。然かも其の人類の擅なる殺戮を以てしても、單に其れのみの爲めに絶滅に歸せしめられた動物或ひは植物の一部族が果してあつたかといふことを反問する時、人々は其の實例を擧ぐることの意外に困難なるに驚くであらう。

【尤も毛皮が貴重なる爲めに取り盡されて今日殆ど絶滅に瀕してゐる獵虎の様な例がないでもない。其の他、同じく皮や羽毛、或は角や牙や肉や脂肪等を得むが爲めに人間が濫獲したる結果、小さなる區域内に於ては絶滅し、乃至、全体として其の數の極度に減少した様な鳥獸の種類が決してないといふわけではない。印度やアフリカに於ける上記の猛獸なども、人類の文明が進むに從つて今日まで次第に減少して來たことは否むことが出來ず、さうして何時か未來に於て其れ等の陸地の全部が人類の文化的都市や田園と化せらるゝ時、彼れ等は印度象の如く家畜として人に利用せらるゝか、乃至は天然紀念物として限られたる區域内に養はるゝ外全部撲滅されてしまふこと、恐らく今の日本に昔の所謂『狼』が其の影を絶つたと同じ様にもなるであらう。けれどもさういふ未來の人類による場合を外にして今日までの所では、我々人類の殺戮によつても、或ひはまた他の生物との生存競爭的闘爭によつても、動物或ひは植物の一部族が大なる範圍に亘つて全然根絶せしめられたといふ事實は殆どなかつたといつてもよいのである。生物の、種屬を絶滅せしむる原因は何時も必ず廣義に於ける環境の大なる變化であるのだ。】

互ひに競爭的立場にある二つ以上の種屬間に於て、或ひは一方を食物とし他方が一方に食はるゝ如き關係にある生物間に於て、Aの盛んなる繁殖がB、C等の滅亡を惹き起すといふ實例

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、決して人々が漫然と揣摩し臆測するが如く然かく普遍的なるものではない。

(よく其の例として引かれるのは、溝鼠による家鼠驅逐の事實であつて、卽ち中央アジアを原産地とし一七二七年裏海沿岸の地方から大擧ヴォルガを渉つてはじめて西ヨーロッパ諸國に侵入した溝鼠(Mus decumanus)は其の後極めて短い歲月の間に歐米諸國に移住して非常なる繁殖を遂げ、到る處に於て以前より棲息してゐたる家鼠(Mus rattus)等を驅逐して次第に其の地位を奪ひ、斯くして目下の趨勢を以てすれば、後者は前者の爲めに遠からぬ未來に於て恐らく全滅せしめられるだらうといふのである。此の事實は他の數例と共にダーウヰンの種原論の第三章「生存競爭」の中で "Struggle for life most severe between individuals and varieties of the same species : often severe between species of the same genus." と題する部分にも記してある名高い例なのであるが、然し一方が他を驅逐しつゝあるといふ事實だけを以て我々に直ちに一方の絶滅を豫期するわけには行かない。何故なれば、生物に取つての天地は廣く環境は種々雜多であつて、移住する自由が許されてをる限り甲地に於ける劣敗者が乙地丙地に於ても必ず依然として劣敗者であるとは限らないのであるから。さうして現に此の鼠の場合に於ても我が日本などでは事情が丁度反對であつて、溝鼠は家鼠に先だち遠く今より約千五百年も前に朝鮮を經由して越前に入つて來たものゝ樣に考へられて居るにも拘らず今なほ其の勢力は家鼠よりも下にあるのだ。)

然し乍ら只、生活の範圍が比較的小さな區域内のみに限られる時は、また事情が異つて來て、其の區域内に於て或る種屬が非常なる發展を遂げた爲めに其の區域内に於て或る他の種族の根絶を見るといふ樣なことは勿論有り得るであらう。庭園の芝生だけであるならば、はじめ少しばかり種子のこぼれたクローヴァが次第に茂つて庭中の芝を全滅させるといふ樣な(丘博士の擧げられた例の如き)ことも起り得ようし、また其れとは反對に、一本殘らず雜草を拔き去つて純粹に芝ばかりにすることも不可能ではあるまい。其れは生活の舞臺が小さく、さうして環境が單純だからである。

(例へば次ぎの事實の如きもまた其の一例であるに過ぎない:一八七二年に當時甚だしかつた鼠の害を除く目的でジャマイカ島に雄四頭雌五頭のマングース(印度原産イタチの樣な動物)がはじめて輸入されたのであつたが、忽ち非常なる勢を以て繁殖しジャマイカの島は山の頂より谷の底まで到る處マングースの影を認めざるなきに至つた。間もなく鼠の數は減り其の害も少くなつたが然し其れと同時にマングーズは漸次に鳥以外の動物をも襲ひはじめ、各種の蛇、蜥蜴、蛙、陸蟹、小鳥、種々なる鳥の巣、陸龜海龜の卵、…等はもとより、仔豚、小山羊、小羊、犬及び猫の子すらを屠るに至つて幾多のジャマイカ特有なる動物は忽ち其の爲めに滅亡に瀕し、さうして蛙や小鳥等の減少に反比して昆蟲の恐る可き大發生を來たしたのであつた。けれども、それだからといつてマング

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ースの原産地たる印度に、鼠や蛇や小鳥が生存し繁殖する餘地がないといふわけでもなく、また其れを新たに移入したジャマイカ島に於ても、其のことのみが原因となつて全く絶滅されてしまつた動物植物の種類があつたわけでもない。砂糖畠の鼠害を減少させる目的を以て、同じ様なマングースの輸入とさうして同じ様に悲慘なる結果とは、他の西印度諸島やハワイ群島などにもあつたのであるが、何れの場合でも一時或る程度まで上記の如きマングースの跳梁跋扈を見たる後は他の動物も此の新敵に對して多少各自の習性を變ずる様になり、マングースの繁殖は次第に阻止せられ、從つて其の害もまた減じたのである。――へ然新たなる動物が移殖せられた爲めに或る地域内に於ける生物界のバランスの攪亂されたる例は其の外にも多い。濠州に最初小供のオモチヤとして持ち込まれた兎が忽ちにして恐ろしき數に達し、今では一つの都市にて一週に三萬頭消費せられてもなほ增加する一方であるといふ様な事實もそれであれば、また同じく濠州に南洋犬（Canis din o）が輸入された爲めに有袋動物中の所謂タスマニヤ狼（Thylacinus）やタスマニヤン・デヴィル（Sarcophilus）が濠州本土から全く影を消した事實の如きもそれである。から云ふ對敵關係を利用して今日の應用動物學（分けても應用昆蟲學）の方では害獸害蟲等を驅除する爲めに有力な新しい敵對動物の發見竝びに移殖を行ひ、さうして例へば各種の毛蟲を除く爲めに種々なる寄生蜂を繁殖させまたカイガラムシを撲滅さす爲めにテントウムシを育てる方法の如き現に着々として効を奏してをるわけでもあるが、然しそれだからといつて此の對敵關係だけでは、まだ決して廣大な區域に亘つて一方の動物（或ひは植物）の種屬（まして況んや綱目を）を根絶させるといふことは出來ない。――生物に取つて地球の表面はまだ廣大無邊であり環境は多種多様である。さうして生活の舞臺や環境が『島』といふ如な小局部に限られたる場合に於てすら、生物の有する變移性（Variability）は上記マングースの例の場合に於けるか如く、被侵入者も侵入者も幾分各自の習性特質をば變ずることによつて一と度び攪亂せられたるバランスを漸次に再び落ち付けむとし、最も優勢なる征服者も或る程度以上に繁殖し發展することを阻止さるゝと同時に、最もみじめなる被征服者もなほ其の間に處して生存の餘地を見出し得るのが普通なのである）

土地の面積がせまく生活の舞臺が小さければ小さいほど、所謂生存競爭は激烈となり。生存競爭が激しいほど生物界に變化の起る速度と程度と密度とは著大となり細密となり、さうして一見したるところ敗者として滅亡した如く思はれる動植物の種類の數もまた增加することであらう。けれども我々は生物間に於ける生存競爭といふことの結果が、（さうして生物進化といふことの原因が）、必然的に優勝者の殘存、劣敗者の滅亡といふことのみを意味するのではなくして、同時に、相互の接觸といふことに起因する兩者各自の內質的變化でもあり、方向の轉換でもあることを考へなければならない。――自然の大なる舞臺の上には兎を養ふと同時に、象や麒麟を養ふだけの餘裕もある

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鼠に存在の餘地があると同時に、獅子や虎にも棲む可き場所は與へられてゐる。蟻の身體を單位として考へる時、我々の庭ですらも如何に巨大なるものとなり物資に豐かな天地と考へられることだらう、然るに其の蟻の生活にも幾多の苦難はあり窮乏はあるのだ。大海は眼に見えぬ微生物の莫大なる量を浮べ鰯の如き小魚を泳がすと同時に、長さ數十尺の鯨の多數をも裕に泅游せしむることが出來のであつて、もしも苦惱といひ生活難といふならば焉んぞ其の鰯なると鯨なるとを論ぜむやである。

然らば何故に中生代に於ける巨大なる蜥蜴類や第三紀に於ける巨獸類は絶滅したか？　といふ問題に立ちかへると、先づ第一に我等の頭に入れて置かねばならぬことは、絶滅した動物は只巨大なるもののみに限つたわけではなくして、現に存在してをる普通形のものにも、或ひは其れより更らに小形なるものにも、幾らもあつたのだといふことである。また第二に、此れ等の諸期に起つた生物界大變動の原因に關して、たとひ丘博士は、「古生物學の書物にも何も論じてなく、生物學者等の間には何の説もない樣で、……云々」と述べて居られるけれども、其の實これは生物學、古生物學を通じての大問題なのであつて、今より八十餘年前なる一八四〇年、キューヴィエが彼の名高い"Discours sur les revolutions de la surface du globe et sur les changements qu'ils ont produits le regne animal," によつて所謂『天變異説』("Cataclysmic theory") を唱へて以來、或ひは其れを支持する方の議論として、また或ひは其れを否定して反駁する所の『天律不變説』("Uniformitarianism") の方の議論として、多くの學者間に探究し考察された所のものであり、從つて、決して「何の説もない」樣なわけではないといふ事である。――中生代、爬蟲類の世界の幕をおろし、さうして新生代の幕をあけた所の事變が一體何であつたらうかといふことに就ては既に上にも幾分述ぶる所があつた。陸・海・空の三界を通じて大分けにしても十八の部類（目）に屬した爬蟲類が、現今までも殘存する龜、蛇、ワニ、トカゲ等の僅か五部類（目）だけを除いて、其の他はみな悉く、形態の如何に拘らず、また必ずしも體の大小を論ぜず、約千二百萬年の全盛期を打ち切りにして根こそぎに屠られたのであつたのだ。さうして此の時單に彼れ等のみに限らず當時まで海中の到る處に繁榮しゐたる（丘博士が滅亡の内因の最も少なきものとして例に舉げられてをるオウムガイの近緣者）菊石類がやはり一擧にして葬られてをることなどを見ると、たとひ當時の植物群にはそれ程の大變化が起つてをらぬにしても、我々は何かしらむ全世界の狀態に大變動の起つたことを推察し、其の意味に於て、キューヴィエ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のカタクリズム說にも或る程度までの眞理が含まれてをるといふことを認めざるを得ぬのである。――第三紀の哺乳類が一度び與つては倒れ、倒れてはまた再び興隆して居る數回に及ぶ波狀的大變動の原因に就ても、學者の間には種々なる說があり、さうして恐らく其の何れもが眞相の一部々々を形成するものなのである。此處には主として。今日、古生物學界の第一人者たるオズボーン老教授の與へてくれる材料を基礎とし必要と思ふ要點だけを次ぎに附記して置くことゝする。（主としては H. F. Osborn—The Causes of Extinction of Mammalia. 1906. American Naturalist. Vol. XL, pp. 769—795, 829—857, 同じく—The Age of Mammals 1910 —The Origin and Evolution of Life. 1918, また O. Abel.—Die vorzeitlichen Säugetiere 1914. 等參照）

外因　外因の第一は物質的環境の變化であつて、土地の降起陷沒等による地球表面の變化、竝びに、其のことに附隨し、或ひは然らずして天文學上の原因により起る、氣候の變動である。此れ等のことに就ては既に幾らか上段に於ても記した。氣候の變動といふことを更らに幾分詳しく分ければ、劇しい寒氣の永續であるか、濕氣の非常なる增加であるか、或ひは恐る可き大規模の旱魃かである。――溫血動物であり且つ毛皮といふ防寒具を持つてをる哺乳類に取つては氷河時代の非常なる寒氣も、其れが爬蟲類等に對して持つほど大きな滅亡的の直接原因とはならなかつたかも知れないが、然し間接の原因としては疑ひもなく大きな力を持つてゐたに違ひない。殊に北半球では歐亞米三大陸に跨つて數千呎乃至は數哩の氷の厚い層が其の北半を蔽ふてゐたのであつて、イギリスはテームス河まで、また大陸の方はバルト海沿岸から中部ロシヤを經て中央アジアに到るまで、さうして北米ではニューイングランド或ひはそれよりも更らに南方なるオハイオ州まで氷河の限界は進んだのであつた。數千年の間進んだかと思ふとまた數千年に亘つて北の果まで退いて行く、また進んで來てはまた退いて行く、……斯くして所謂『氷河時代』なるものは四度まで繰り返され今は丁度約四・五萬年前まで續いた其の第四の氷河期が遠ざかり地球が其の最後の寒氣の大波から徐々に拔け出でつゝある所なのである。此れ等の廣大なる面積が厚い氷の層を以て蔽はれる爲めに如何に莫大な水の量が大洋から吸ひ取られて行つたかは想像も及ばないだらう。海と陸との境、大洋の水面といふものは全世界に亘つて種々樣々なる變化を起したのであつて、今は再び海底となつてをる廣漠なる面積が氷河期には其の膚を露出し、さうして『間氷河期』にはまた水中に沒したのであつた。氷河は吸收された水量が莫大なものであつたゞけ、一旦それが溶けた場合に諸處に起つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た汎濫、其の後凹地に殘された湖や沼地……等の範圍といふものも、勿論、非常に洪大なるものであつたことがわかる。——厚い氷の層か北氷洋の方から次第に南下して北ヨーロッパを蔽ひ終ひにロシヤの中部までを一面の氷原と化してしまひ、其の後その氷が溶けた時、丁度今日のフィンランドに見る樣な無數の湖と沼とが連る土地を生じ、また其の後長い時代が過ぎ去つた時緩慢な乾燥作用が始まつて終ひに今日の東部ヨーロッパ乃至西部シベリヤの原野となり、さうして其の乾燥作用の進捗したる結果、今日に於ては中央アジアが既に不毛の地としてすたれ、また將にヨーロッパの東南部も同じ厄に遇はむとして居るのだといふことは、昔まだ有爲の青年地質學者として活動してゐた時のクロポトキンがはじめて結論し提唱したところであつて大體に於て其の正しいことを今日の學界は一般に認めてゐるのである。また長い毛を以て蔽はれた彼のマンモスといふ象の絶滅したことに關してホワースは多くの證據を擧げて (H. H. Howarth.—The Mammoth and the Flood. 1878)、所謂『マンモスの時代』の終焉が地球の大部に亘つて起つた或る非常なる天變地異的の大變動であつたこと、其の大變動といふ中には極めて廣い範圍に及んだ大洪水も含まれてゐて、マンモス及び其れと共に棲息してゐた他の獸類達は只單に洪水によつて殺されたるのみではなく、同時に流されたる土砂の層の中に埋沒され終り、然かも其の變動と共に北部シベリヤに於ては從來比較的溫和だつた氣候が突然に急變して其の埋沒されたる全てのものを氷結せしめ、以て今日にまでも至つたのであると決論してをる。——寒さが間接の原因となつて各種の哺乳類を滅亡せしむる場合としては先づ第一に寒さが增した爲めに森林が枯死することによつて（例へば最新世に於けるアラスカの獸類の大部が死滅した場合）、或ひは氷雪の厚い層が食物となるものを埋沒し終る事によつて起される所の飢餓を擧げなければならない。現今我々と同時代に生きてゐる獸類に就て觀察してみても、長い寒さや激しい降雪によつて起される新しい境遇に對しての適應性は各獸類によつてまち／＼であつて、例へば馬は積雪がまだ三四尺の深さであれば雪を掻き分けて食物をさがし、だうやら自ら冬を越して行くことが出來るが、牛の方はさういふ場合に忽ち餓死してしまふ、けれどもたとひ此の場合の馬の如く、幸ふじて死ぬことだけは免れても、其の結果は死滅と同じになることもあるのであつて、飢餓に迫つた獸類は食を選ばない爲め自分或ひは少くも幼獸に有害なる物をも貪り食ひ、（例へば馬が柳の枝を食ふといふが如く）斯くして間接に死滅の原因を作る。全てが氷結して飲む可き水の無いこともまた死滅の一因となるこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とを考へなければならない。また寒氣が烈しいことは動物の交尾にも障害となり、或ひは交尾は行はれても卵の受精が行はれず、或ひは受精だけは完了しても完全に胎兒の發生することを阻止され或ひは更らに出產は行はれても幼弱なる間に殺される。現に北方に棲む馴鹿の如きは冬の直前に交尾して受精したる卵が少しも發生をはじめず冬が過ぎ春がめぐり來てはじめて發生しはじめるといふので有名なのである、だからもしも其の冬の樣な、或ひは其の冬以上の寒氣が何年も〳〵限りなく續いたとしたら、たとひ親は寒さの爲めに殺されなかつたとしても、結局、其の獸類の種は滅亡するわけである。(もしも溫血動物である哺乳類に於てさへさうであるとすれば、假りに同じ樣な寒さが續いたとした時に、外界の熱だけによつて卵を孵化させる爬蟲類が恐らく忽ちにして滅亡してしまつたらうといふ事は想像し難いことではないだらう。)斯くして例へば北アメリカに最新世の始めに當つて夥しく見られた駱駝、ラマ、馬、貘、象、マストードン等の大獸類は氷河期の間、或ひは其の直後に、實際全部絶滅してしまつたのであつたのだ。——次ぎに過剩なる濕氣の害は、嚴寒よりは弱いかも知れないが、やはり死滅の大きな原因となる。濕氣は植物の爲めには概して都合よいかも知れないが、陸生の獸類に取つてはそれだけ益々好ましくなく、寧ろ乾燥の害の方が(或る程度を超えざる限りは)害がまだ輕いのである。長雨、汎濫、大洪水などの害はいふまでもないが、然し其の外になほ重大なのは各種の有害植物或ひは有毒植物の繁殖することにより草食獸の蒙る打擊であり、また種々なる害蟲やダニ等の非常なる發生、更らに其れ等を媒介者とし(或ひは媒介者なくして)傳はる所の各種の寄生蟲病や疫病の漫延である。また雨量多きが爲めに大森林、大密林の形成が容易くされることは象等の如き獸類に取つては都合好いにしても、草原をば生活の舞臺とせる馬の如き草食獸に取つては活動の天地を小さく限られることゝなつて直接間接に退化衰滅の原因となり得る。——現時、地球上では、前に記した中央アジアの砂漠地方の外にも長期に亘る緩慢な乾燥を續けてゐる部分が可成りにある。即ち、北部及び中部アフリカにあつては漸新世以來乾燥しはじめた所謂"Fayum District"であり、濠州に於ては最新世以來の中部地方、南アメリカにあつては鮮新世の終末以後のパタゴニア及びパムパスの大草原、さうして北アメリカに於ては漸新世の頃からの西部の平原地方、不毛なる高原及び山岳地方であつて、其れ等の區域内に於ては何れも今日に至るまでに幾多の哺乳動物の種類を絶滅に歸せしめる樣な環境の變化が起つたのである。濕氣が不足して來ると先づ第一に食物供給の情

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

況が變つて來る。柔軟な水氣の多い植物が減少して剛強な植物が殖えて來る。さうして年々の乾燥期も次第に長く且つ堪へ難くなつて行き、森林といふ障壁を取り拂つて新しい競爭者の侵入を容易ならしめ、水源の數を減じ、さうして食物や水を得る爲めに長距離を往復し得ざる樣な動物を見殺しにしてしまふ。濕氣多き時とは反對に、象や犀等の如く密林中に棲んで嫩葉を食ふ獸類を逆境に陷らしめ、原野に草食する獸類の生活を有利ならしめるけれども、然しまた後者と雖ども旱魃が益々劇しく且つ長引いて自然の平衡が全く攪亂さるゝに及んでは、是非とも水草を逐ふて長途の移住をも行はなければならず、疲勞と空腹と、空腹のため無選擇に有害なる植物をも食ふことなどによつて斃死するものも多く、或ひはまた長く身體を視野に曝露して猛獸の餌となるものも多い。殊に幾多の猛獸は草食獸が否應なしに集合せしめられる限られた水呑み場處附近に身を潛めて其の爪牙の威を逞しうするので、水を飲む度數が少なくてよい動物であればあるほど、生活の安全率が多いことゝなる。——舞臺を中央アフリカだけに限つて今日もなほ岡のあたりに見得る具體的光景を書いてみれば、(其處は前述の如く年々歳々少しづゝ乾燥の度を増しつゝある土地なのであるが)、長い乾期が深くなつて泉や水呑み場の數が次第に減つて行き、其の間の距離が遠くなつて三十哩四十哩といふ樣にもなると、草食獸類は諸處の草食ひ場處から長い道程を辿つて其處まで水を飲みに行かねばならず、其の途中に於てまた其の泉の附近に於て猛獸からの襲擊あることは必然であるけれども、渴したる時の彼れ等はそんなことを少しも顧慮せずして行く。最後にさういふ少數の泉の中からまた若干のものが涸れ切つてしまひ、さうしてグレゴリイが(J. W. Gregory.—The Great Rif Valley. p. 208.) Here and there around a water hole we found acres of ground white with the bones of rhinoce-roses and zebra, gazelle and antelope, jackal and hyena……all the lion, cs were there fresh and ungnawed……と書いてをる觀察の如く、菜食獸も、また其れを餌とする所の肉食獸も、涸れて行く泉の周圍に群集して最後の水の一滴を爭ひ乍ら枕を並べて死滅するといふ樣な場面を實際稀ならず演出するのである。さうしてさういふ事情は南北アメリカ濠州、中央アジアの乾燥地帶に於ても今日現に存在してをることであり、またさういふ場面は漸新世以來年々歳々繰り返されて、實際幾多の哺乳動物の種類を絶滅せしむる直接間接の原因となつたのである。

或程度迄の波動を繰返へし乍らも同じ樣なる外界の狀態が續いて行く限り、其環境の下にあつて進化し發展して來た所の生

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

物の種々なる特質は、只單に彼れ等が滅亡の原因とならざるのみではなく、寧ろ加速度的に益々其の方向に向つて發展し、進化し、完成せられる。我れ等が今日同時代の動物に見る所の、（例へば象鯨等の）身體の巨大さも、また多くの動物の視覺・聽覺・嗅覺器官等の複雜さも或ひはまた消化・呼吸・排泄・運動……系諸器官の構造の微妙さも、何れもみな長い歳月の間に、それ〴〵各自の置かれたる種々なる環境に對する順應の結果として現はれたものであつて、環境の波動に非常なる過劇高低の起らぬ限り、其處に何等彼れ等を絶滅せしむ可き内因的要素などが含まれて居る可き筈はない。たゞ然し、地球の表面には、宇宙間のあらゆる諸相と同じく）一瞬一刻と雖ども不變不動なる環境といふものはなく、時の流れと共に環境といふ環境はすべて、みな刻々に變化し其れに順應して生命もまた刻々に其の表現の形式を變へつゝある。さうして生物の有する變移性（Variability）が順應し得る範圍内に於ては環境の變化は常に創造的方向のみに作用するけれども、一と度び其の限程を超ゆる時、其れは自らの程度に正比して種・屬・科・目・綱等次第に大なる範圍に亘る生命をば死滅せしめる。――天文學上の原因によるのであらうと、或ひは地球の表面に於ける地形の變化によるのであらうと、從來氣候溫和なりし或る地域の上に非常なる永續的寒氣が襲來したと假定する時、或ひは從來濕潤だつた地域に旱魃が始まり、乃至、乾燥しゐたる地域に激しい濕氣が瀰漫したと假定する時、從來其の地域の上に棲息し其の環境に順應して進化して來た生物の取り得る途は、極度に變移性を發揮して更らに其の新たなる環境に對し急激に順應するか、從來の棲息地を見捨て他に從來の環境と類似する地域を見付けて移住するか、乃至、第一も第二も共に不可能なる時、そのまゝ運命に敗けて死滅するかの三つより外にはない。第一の方法が不可能であつた場合、一部の人々は死滅の原因をば「其の生物の進化が餘りに一方に偏して、特殊のものとなつてゐた爲め」であると說明するかも知れないが、其れは少しく誇張していへば、洪水に溺れたる人を指して、「呼吸の方法が一方に偏し空氣中のみに住み得る樣な特殊のものとなつてゐた爲め」であると評し、其の人が魚の如き鰓や鰭などを持たず、また蛙の如く水中にも生活出來なかつたことを死滅の主因に數へる樣なものであり、また第二の方法が屢々不可能であることを許る人々は、同じく洪水に流された人が乾いた陸地まで泳ぎ付き得ずして死ぬことある場合を忘れた所の態度人々である。は往々にして進化の(cul de sac)（＝行き詰り）といふことを考へる。けれども生命進化の『系統樹』なるものは、其の始め地上に創造せられたる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同一共通なる生活物質から（恰かも根足類に屬する原蟲の體から）無數に射出せられたる原形質突起（所謂「虛足」"Pseudopodia"）の如きものであつて各方面に向つて射出せられた其れ等の虛足の太さ長細さ短さ及び相互の網狀關係を決定してをるものは其の時の外圍の事情であり、各點に於ける環境の力である。或る方向に向つて一つの虛足が太く長く延びて行く。けれども或る處まで延びると其の伸長が停止されるのは、決して虛足を形成してをるプラズマ其のものに其れ以上延びる能力が無いからでなくて、其の點まで延びた時に其れをば其の上延ばすことが出來ぬ或る事情にぶつかつた爲めに、其の虛足の伸長を止めて他のまう少し異なつた方向へ別の分枝を發展させて行く樣にする爲めであるに外ならない。中生代の終りまで太く長く延びて來た所の爬蟲類といふ生活物質の一大虛足が、其處で突然著しく伸長の勢を弱め、其の代りとして其の一方から分れた所の哺乳類といふ枝が別の方向に向つて偉大なる伸展を遂げる樣になつたのも全くそれと同じことである。もし其の時何等さういふ環境の變動が地球の上に起らなかつたとしたら、さういふ變動の起る時までは、爬蟲類もまだまだ彼れ等に取つて獨特な進化を續けて行つたのであらう。例へば第三紀曉新世の初頭まで米大陸と濠洲とが陸續きであつた爲め其のどちらにも初期の有袋類は棲息したのであるが、前者に於て各種のより高等なる獸類が發展し有袋類の進化は極めて貧弱なるまゝに阻止せられて今日僅かに小形なるコモリネズミ(Opossum)程度のものを存するのみに反し、其の後、大洋を以て遮斷せられ孤立せしめられたる濠洲の方では、有袋類は有袋類としての華々しき發展を遂げて、高等なる有胎盤的獸類の殆ど全ての形に竝行する如き多種多樣の形態を生ずることが出來、現に今日に至るまで六尺大の大カンガルーなどを飛躍せしめて居る事實の如き、やはり筆者の主張を裏書きしてをるものと考へてよいであらう。

曉新・漸新時代の世界に跋扈したウィンタテレス (Uint-atheres)、ティタノテレス (Titanotheres)……等の如き犀様の巨獸や、中新世に見られたヂノテレス (Dinotheres) といふ巨象、其の他の數多くの巨大獸の種類は、滋潤にして大森林の存在に適した從來の氣候が乾燥しはじめ、同時に柔軟にして多汁性なる樹葉が減じて剛き葉を持ちたる草が地表を蔽ふに至つて次第に死滅しつくしたのであつて、絕滅の主因はどこまでも外なる物理的環境の變化であるが、然し其れに附隨して起つた事情として、もし所謂『行き詰りたる進化』の内的素因といふ可きものを求むるならば、其れは決して一部の人々の考ふる如く彼れ等の體の巨大であつたことではなかつた。其れは主として彼

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れ等の持つてゐた臼歯の形質が新たなる食物として現はれた剛強なる草の葉を咀嚼する爲めには餘りに貧弱なる形質のものであり、且つまた其の貧弱なる程度に『行き詰つて』充分役に立つものまで急速に變化して行くことが出來なかつた爲めである。また時には、臼歯だけには、森林を離れて草原の生活に入り得る様な變化が起つたこともある、けれどもさういふ場合にも、食物殊に飲み水を求める爲めに上に述べた如く遠距離の往復をなさねばならぬ乾燥期にあつては、短大なる四肢を持つた森林獸は非常に不利なる地位に置かれて衰退せざるを得なかつたのだ。長距離を行き得る様に其の脚が細長になるように變化が起つた種類は殘存することが出來たが、脚部にさういふ改造が不可能である様な『行き詰つた』構造を持つてゐた種類は、自然、何時ともなく滅び去つてしまはなければならなかつたのだ。漸新、中新の兩時代の間に絶滅しまた絶滅せずして生き延びたる草食動物の臼歯及び脚部の比較構造論は既に大冊の書物ともなし得る位に古生物學者によつて試みられてをる次第であるが、之れは歯とか足の骨とかゞ化石によつても完全なる研究材料として保存されてをる爲めであつて、もしも我々が當時の動物の内臓諸器官（例へば消化器）等をも化石によつて充分に比較し研究することが出來たならば、滋潤なる氣候が乾燥せる氣候に急變した時、體に如何なる新しき變化の起つた種類だけが殘存し得たのであるかといふことを、もつと確かに知ることが出來たのであらう。――

今日我々の見る馬の先祖は最初は森林の中に棲んで樹の嫩葉を食つてゐた獸であつた。曙新世の頃にはエオヒップス（Eohippus）といつて體長が今の馬の五分一にも滿たぬ小犬ほどの、倭少な獸であり、前肢には四本、後肢には三本の地に付く趾があり、さうして歯も極めて原始的に不完全な形態をしてゐたのであつたが、時と共に臼歯の構造が複雑にさうして長く大きく完全なものとなつて來、同時に身體もまた大きくなつて、中新世の頃、まだ森林生活を續けてゐたヒポヒップス（Hypohippus）に於ても既に今日の驢馬位となり、且つ四肢も細長となつて前後共に三指を存し、然かも中間の一指だけが非常に大きくなつて地につき、兩側の他の二指は退化してたゞ上方に殘つてゐる。中新鮮新兩時代に地球表面の諸處に起つた長期の旱魃は馬の祖先をして森林を棄てゝ草原生活に入らしめた。則ち、既に中新世の頃、上記森林生ヒポヒップスと竝行して、歐亞米三大陸の草原には駱駝の祖先なるプロカメルス（Procamelus）などゝ共にプロトヒップス（Protohippus）やヒッパリオン（Hipparion）といふ様な馬の祖先が横行してゐたのであつて、此れ等のものに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於ては歯や脚の構造がなほ一層進化してゐたのだ。さうして其の完成の度が次第に進んで鮮新世にはプリオヒップス（Pliohippus）やネオヒッパリオン（Neohipparion）を生じ、終ひに最新世に至つて大略今日我々の見る如き大いさの、一脚一指の蹄だけで立つ、さうして極めて複雑となり完備した構造の臼歯を持つ所の馬（Equus）にまで進化して來たのである。エオヒップスから今日の狀態にまで到達した所の馬の進化の經路をば篤と考へて見る時、我々は、馬といふ動物を單に一つの例證として、恐らく次ぎの様なことを認めることが出來るだらう。（一）其の始め地球の表面にはじめて生活物質なるものが創造されたる時その物質の内に宿された所の『いつまでも生きやう〳〵とする欲求』『周圍のものを出來るだけ多く同化して出來るだけ大きく育たうとする力は』彼等の小さき馬の先祖たるエオヒップスの體の内にも勿論やはり充ち滿ちてゐたのであり、其の欲求が原動力となり、さうして一有機體としてエオヒップスそのものが其の際に具へてゐた諸條件、竝びに其れ以來時々刻々彼れの上に働きたる周圍の環境の力、といふものが互ひに相感應し錯雜し融合して約三―四百萬年の間に終ひに今日の馬といふ如きものを造り出したのである。故に、たとひ比較形態學の見地から云つてエオヒップスと今日の馬との間に如何ほど大なる差異が認められやうとも本質的にいつて今日の馬は、エオヒップス自身の『生れかはり』であり、數百萬年前エオヒップスの姿を取つて現れてゐた所の生活物質と生命欲との、別な表現であるといふに外ならない。（二）言葉を換へていふならば、今日我々が見る所の馬といふ生物は數百萬年の間周圍の大自然から種々なる迫害と恩惠とを兩つ乍ら感受して、曙新世のエオヒップスが生れ變つたものに過ぎないのである。――斯くの如き系統發生的（phylogenetic）の見地より考ふる時、今日の馬に取つてエオヒップス以下三―四百萬年の間に現れた幾多の中間型なる祖先は何れも恰かも我々に對し我々が幼時より今日に至るまでの過去の各時代の寫眞が持つ關係の様なものでありさうして岩石の中に發見せらるゝ彼れ等祖先の化石は、程度に於てこそ非常なる差あれ、いはゞセミの脱け殼とも云ふ可き性質のものであるのだ。セミの場合には實質的内容は空を飛び樹にとまつて歌をうたつてゐ、系統發生的に見た馬の場合では實質的内容の全部は祖先といふ過去の脱け殼を脱け出していまの馬として地上を走つてゐる。（三）けれどもまた我々がもしさういふ系統發生的見地を離れ、一世代々々々といふものを各別のものとして考へてみるならば、馬が貧弱なりしエオヒップスの昔から今日の狀態にまで進化し得た理由といふものは、其の三四百萬年の過去の各

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々の時代に於て、いつも其の時の『子孫』が其の時の『祖先』よりも優良であり彼れ等を生存競爭場裡に打ち敗かし得たが爲めである。生物を圍む外部の環境は一刻一瞬と雖ども不變のまゝに停まつてはゐない。或る時は殆ど氣附き得ざるほど緩慢に、けれどもまた或る時は驚く可きほど急激に、其れは時々刻々、不斷に變轉し推移しつゝある。さうして環境が變轉し推移する場合々々に於て、其の環境の下に生存す可く『子孫』中の或るものは彼れ等の『親』に比し『祖先』に較べて、或ひは身體各部の構造に於てまた或ひは精神的能力に於て、常により完全なものであり優秀なものであり得たのである。我々はまだ生物の有する變移性が果して何に起因するのであるかを知らない。それは時々刻々に變移する全宇宙の、さうして其の一小局部的環境の、物理的相に對して生活物質の現はす合宜的順應であるのか、或ひはそれとも周圍の環境とは何等の關係なく起る所の變動であるのかをよく審かにしないけれども、我々はたゞ生れたる子供が如何なる場合にも決して親と同一なものでないといふ事實を知り、さうしてまた同一なる親から生れたる二つ以上の子供の間にも決して全く同じものは無いといふ事實を確かに知つてをる。其れは只單に兩性生殖によつて生じたる子供に就て然るのみならず、單爲生殖により或ひは芽生や分裂によりて生じたる子孫の場合に就てもやはり同じことであつて、變移したる程度微弱にして一部の學者が所謂『彷徨變異』といふ部類に入る可きものであると、或ひは其の程度が顯著であつてドフリース等の所謂『突然變異』に數ふ可きものであるとに論なく、兎に角『親』から『子供』が出來る時、生物は必ずいつも（其の原因はハッキリとわからないけれども）或る程度の變移をなして其の特質に多少の變異を現はすのである。筆者はいま此の場に於て遺傳問題の議論に入つて行くことを避ける。けれどももしも議論の根據をぬきにして一言にして筆者の思ふ所を言ふならば、如何に些細なる外界の變化も生物に變異を起させずには終らず、さうして外界はたとひ我々の氣附かざる時にも常に刻々に變移しつゝある、否、筆者を以て言はしむるならば、單に時間の經過するといふことと其のこと自身が既に外界（全宇宙）に起る所の一種の變化であり、從つて生物の變異といふことをも同時に意味するのである。既に出來上りたる生物の身體にも或ひは今なほ發育中のものにも、乃至また體内に宿つて居る生殖物質にも、其れ等の變異は起るであらう。如何なる部分に如何なる程度の變異が起るかといふことは、其の時々々々の事情によつて種々樣々であるだらうけれども、我れ等觀察者の眼に附くと附かざるとに拘らず、また外觀的程度の顯著不顯著に關

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せず、本質的に見て、或る時は強く大きな、さうして或る時はまた弱く小さな變化が起り、其の何れもがみなそれ〳〵の相對的强さに比例して（其の後は既に生物の内的素因として）其の力を現じ外部よりの力に對して種々なる反應を顯はすであらう。高等なる生物になればなるほど、さうして發育の完成した個體であればあるほど、身體の組成が次第に複雜となり各部間の分業制度が益々確立され來る爲め、身體物質の方に局部的に起つた變異の生殖物質に及ぼす影響が間接となり微弱となつて、一見したるところではヴァイスマン一派の唱ふる如く「後天的に獲得せられたる新しき性質は遺傳せず」といふ樣に見えるかも知れない、またたとひ生殖物質を通じて現はれた差異ではあつても、其の程度が僅小である爲め子孫への現はれ方が不顯著であつて「決して遺傳することなし」と一部の學者から斷ぜられてをる所謂『彷變徨異』の部類に入れられてしまうかも知れない。けれどももしも我々が、過去の生物界に起り或ひは現在の生物界にも見らるゝ幾多の現象を公平なる態度を以て觀察するならば、『親』の身體物質に起つた所の變異と生殖物質に起つた所の變異とが『子孫』に及ぼす影響といふものには本質的に何等の差別なく、其處にはたゞ直接間接の區別があり程度の强弱といふ區別があるのみに過ぎぬといふ事を認めぬわけに行かぬだらうし、また同樣にして「明かに遺傳する」といはれてをる所謂『突然變異』も「遺傳せぬ」と稱へられてをる『彷徨變異』も程度のみの異なる同一現象であることを認めないわけに行かないであらう。「徐々に」といひ「漸進的に」といひ、或ひは「急激に」「跳躍的に」といふが此れ等の言葉は何れも主觀的相對的なる意味を表はしてをるに過ぎないのであつて、もしも我々が『子供』といふものが『親』といふもの自身の一部であり、其の『生まれ變つたもの』であり、さうして所謂「生れ出でざる」以前にも最初から生殖細胞として『兩親』の體内にあつて、共に生きてゐたものであることを忘れるならば、（即ち、もしも我々が『親』と『子供』といふものをば各別に相獨立したる一世代々々であると考へるならば、）進化の道程は常に不連續的であり、跳躍でありさうしてあらゆる變異はすべて悉く突然變異（"Mutation"）であると言はなければならないだらう。ドフリース等が『突然變異』の實例として舉げたるものゝ如きはダーウィン等の說きたる一世代毎に現はれる所謂「些細」なる變異の極端な場合であると考へることが出來る。――此れ等一世代毎に現はれる變異の度は勿論、兩性生殖を營む生物に於て特に著しく起る可き筈である。何故なれば父と母とが各別に有する在來の諸性質の單なる組合せのみによつて、未だ曾て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつた性質の出現せしめらる可き機會も僅少ではないから。

(四)斯くて生物の一個體に、而してまた其の系統に、斷えず起る所の變異は、必ずしも常に其の時與へられたる外界の變化に對し合宜的なるもののみであるとは限らないだらう。恰かもアミーバ等の體より出される根足の如く、變異はあらゆる方向に向つて可能であるかも知れないが、然しアミーバが匍ふ時その根足が其の時の環境下に於て最も都合よき方面に延長され最も都合惡しき方面には延ばされざる如く、變異もまた其の時の周圍の物理的狀態に制御せられて、恰かも最初より變移す可き方向を知りゐたるものゝ如く、最も目的に適する方向に延長せられて行く『適者殘存』といひ、『自然淘汰』と稱する現象が卽ち其れなのだ。――馬の祖先が曙新世の森林中に棲んでゐた時にも其の臼齒や脚部の構造、或ひはまた大腦の發達程度如何による智的能力の大小等には勿論種々なる變異が起つた。さうして其れ等の多樣なる變異の上に自然淘汰が働いて其れをば大體一定の方向に發展せしめ、臼齒は次第に長く大きくなり、且つ其の咀嚼面が完成され、(さうして恐らくまた消化器全體も、同樣に漸次完全のものとなつて來た結果)、營養の增進と共に體の大いさを增し、また脚部は次第に細長となり趾の數を減じ蹄を生じて疾走に適する樣になつて來たのである。中新・鮮新兩時代の旱魃が起つて彼れ等が森林を離れ草原生活をなす可く餘儀なくさるゝに及び、更らに其の際涯もなき原野の上に群れて遠く水と食とを求めて移住し幾多猛獸の襲擊に脅かさるゝに及んでは、自然淘汰は急激に其の力を强めて一世代每に現はるゝ所の變異を烈しく篩にかけ、生存に適せざるものは容赦なくはね除けて行つた。Hyrohippus, Parahippus, Merychippus……等の型が次第に影を消して Hipparion, Protohippus……の如き型が殖えて行き、更らに Neohipparion Pliohippus が現はれて其れに代り、終ひに最新世に至つて今日の馬に最も近き Equus 型のものゝ出現を見たのは全くその樣な自然の擇り分け作用によつたのである。卽ち臼齒の構造をはじめ一般に消化器官が完備して乾地に生ずる剛强なる草の葉をも容易に食し得るものほど食し得ざるものよりも繁榮し、群棲生活を營むに際し相互扶助的の精神に富むもの、雌を保護し子供を哺育するに當つて愛情に厚きもの、また幾多の不慮の災難に遭遇したる場合智慮の進みたるもの、廣大なる草原を、往來するに際しまた猛獸の追擊から免るゝに當り、脚部が發達して遠く速かに走り得るもの等はそれ〴〵之れに反するものよりもより多く生存に適して殘存し次第に地を蔽ふに至つたのであつた。また馬以外にも例へば駱駝の胃袋にある水を蓄へる裝置であるとか、或ひはま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た急行列車程の速力を以て疾走し得る羚羊の脚であるとか……いふ様なものも、やはり同様にして乾燥期の草原生活が創造り出したる所の產物である。さうして其れ等のものはみな、云ふまでもなく、極めて一方に偏して發達したる所の形質であるに違ひない。然し、それならば丘博士などの說かるゝ如く、臼齒が發達し過ぎたる爲めに、或ひは脚が餘りに疾走に適する爲めに、乃至また愛情や相互扶助的精神が強くなり過ぎた爲めに、其れが或る時代に於ける馬といふ動物の絕滅した『內的素因』の一小部分にでもなつたかと反問するに、未だ曾てさういふことはなかつたのであり、また今日と雖どもないのである。否、過去の各時代に於ては素より、現に今日に於てすら未だ野生生活を送りつゝある野馬なると、家畜として人類に飼はれつゝあるものなるとに論なく、此れ等の所謂「一方に偏したる」特質が少しでも多く發達したものであるほど其れだけ生存により多く適して居るのである。――人間の手と馬の前足とは恐らく相同なる一器官のあらはした二つの兩極端なる型であらう。けれども此の『極端』といふのは、兩つのものを相對的に較べて見た時の言葉であつて、各々の立場となつて考へて見るならば、まだ／＼決して其れは發達の頂點などに達してをるわけではなく、もしも他に何か不慮の絕滅を起さしむる様な事變が起らぬ限り其れ等はまたそれ／＼に、長い進化の未來を持つて居るのである。馬の前足には馬の前足として生存す可き天地があり、人間の手には人間の手として生存し發展す可き天地がある。成程、極めて一方に偏した、（もし「不具的」であると名付け度い人があるならさういふ言葉も使へぬわけでない程に偏して發達した）、特質である。けれども地球上の環境の多種多様さは、其れ等の不具的器官に充分なる生存の餘地を提供するのみならず、寧ろ却つて其れが今後も益々各自の進んで來た方向に發達し進化し行くことを要求してゐるのだ。否、實に其れ等の環境故にこそ、此れ等の器官は過去の年代の間に今日の様なものとして造り上げられて來たのではないか。『不具』といひ『畸形』といふはたゞ云ふ人々の心の感じのみであつて、松の葉の細くして針の如く、楓葉の濶くして團扇の如くなると同様、諸てはすべて有るまゝにしてそれが最も自然なのである。馬に其の前足を以て耳の孔を掌くれといふならば、勿論それは出來ないであらう。人に其の手を地につけて沙漠を橫切つて步めと命じたとて、勿論それは不可能事であらう。けれども自然は決してさういふ無理な注文を出して生物を根絕などさせはしない。各自の與へられたる環境が堪へ得る範圍内の波動を描いて推移して行く限り、生物はみな各々其の特性を守つて其れをば益々完全

に近づけて行けばよいのだ。さうして其れ等の特性の完成といふことは、絶對的にいつて、また本質的に言つて、決して然かく速かに其の極限などに逹しはしない。況んや與へられたる環境が刻々と徐々に移つて、決して停止せざるに於てをやである。——或る特性が自然淘汰の埒外に置かれてある時、其の特性は變移するまゝに勝手にあらはれることを許されるのであるが、然し如何なる器官の如何なる小部分と雖ども其の形成に多少の物質とエネルギーとを必要とする以上、精力經濟の關係上それ等の不用なる部分は次第に退化して終ひに殆ど消失するを常とする、暗黒なる洞窟内の動物が二次的に眼を失つて盲となる如きもまた其の一例に外ならぬ。けれども之れに反して自然淘汰の埒内に置かれてをる限り、さうして環境に狂倒的變化が起らぬ限り、一と度び其の環境下に淘汰せられて發達し進化したる特性は、時間の經過と共に益々發達し進化す可きものであつて、如何なる場合にも其れが逆に、其の生物を絶滅に導く所の内的素因などになることはない。變異の誘因となり、而して其れ等多様の變異を淘汰することによつて生物の進化を遂げしむる外的環境なるものこそ、同時にまた生物絶滅の原因ともなるのである。自然淘汰が行はるゝに際し其れは直接にまた間接に、生物の個體の上に働いて其の生存に不適當なるものを殺す。或ひは既に發育を終はりたる成體に、或ひは未だ發育中なる幼者にまた未だ産出せられざる胎兒に、而してまた更らに受胎せしめむとする精子、並びに受精せられむとする卵細胞等……に働いて其れは不適當なる多數の者を殺す——即ち之れ外圍の環境が生物死滅の因をなす場合の第一である。けれども此れ以外にまだ環境が生物を死滅せしむる別の場合がある。さうして其れは適不適を擇り分け一個體々々を單位として滅ぼすのではなくして、全然、從來の環境が淘汰の標準とした所のものを無視し、老壯・強・弱・適者・不適者……の差別なく非常に大なる範圍に亘つて『十把一からげ』的に生物の或る種・屬・科・目・綱等の大部分が根こそぎに死滅せしめられる場合である。我々は既に、生物の斯かる大規模なる絶滅を惹き起す最も重大なる外因として外圍の物理的狀態の大變動といふ事に就いて、寒氣、濕氣並びに旱魃の三つを擧げて説く所があつた。さうして中生代終末に於ける爬蟲類大部分の絶滅の原因が實際斯かる物理的外圍の大變動によつたのであらうといふことをも述べた。

外因の第二として考ふ可きは**生物的外圍の變動**であつて、更らに詳しく云ふならば植物群(フローラ)及び動物群(フアーナ)に起る所の變動であるけれども、其れ等の生物的外圍の變動其のものは

主として物理的外因變動の結果として起るのであるから、其れは只單に近因として考へ得可きものであるに過ぎない。何十萬何百萬方里といふ樣な面積が厚い氷の層に蔽はれ植物の多くが其の氷雪の下に埋もれた時、菜食性の動物が如何に困難なる境遇に陷れらるゝか、さうして其の結果として菜食動物をば餌となせる肉食動物もまた同じく食糧難に襲はるゝであらうかといふことは誰にも容易く想像することが出來る。また長い々々旱魃が續いて大きな森林が段々と消えて行き剛强なる草のみが地に蔓る樣になつた時、其の植物相の變化が、如何に其の場所の動物群に對して大なる變動の原因となるかといふことも馬などを例として既に記したる如くである。非常なる濕潤が來る時、植物は一般にそれによつて生育を盛んならしめられ到る處に大森林の出現を見る。けれども哺乳類の如き高等なる動物に取つては、有用なる植物の繁茂と同時に、幾多の有害植物、有毒植物も著しく增加することゝなり、殊に乾地には決して發育し得ざる樣な幾多の病原菌や病原蟲、並びにこれ等の病毒を媒介し感染せしむるダニや昆蟲の發生を極めて好都合ならしめて、直接間接に死滅の重大なる原因となるのである。――一つの生物によつて他の生物の絶滅されるといふことを說く時、人々は直ちに「弱肉强食」といふ如き場面を頭に想ひ浮べるが常である。

さうして實際にもまた、前に述べたるマングース移入の結果や、濠洲に南洋犬の入つた爲めに所謂「タスマニヤ狼」等の絶滅したといふ事實などは大體其の實例として數へ得らるゝものゝ如く見え、また鮮新世以後、其の當時肉食獸類の全くゐなかつた南米大陸へ、はじめて犬科や猫科の食肉獸、殊に彼の短刀ほどの牙を持つたスミロードン(Smilodon)といふ大きな虎などが現はれた場合なども、それが一部の菜食獸類滅亡の一因となつたことは確かであるらしい。けれども其れ等の實例は何れも菜食獸の方で何等の準備もしてゐなかつた所へ突然に强き肉食獸が現はれた場合のみであつて、勿論、其の結果なるや悲慘たるものに違ひないけれども、然かも、マングースの例によつても示されたる如く(ジャマイカやハワイの如き孤島の小天地に於てすら)、或る時日の經過したる後には、餌になる動物の方もまた食肉獸の方も多少其の習性を變へて行き、一と先づ擾亂せられたる生物界のバランスは再び漸次に回復して或る一定の所に落ち付くのである。菜食動物と肉食動物との間に或る一定のバランスがあり、さうして種々なる突發事件の爲めにたとひそれが一時的に攪亂せらるゝことはあるにしても、結局、自然の或る調節作用によつて一定の所に落ち付くといふ事實は、生活の舞臺が大きくなればなる程ハッキリと表はれて來ることで

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。地質學上の種々様々なる年代を通じて、肉食動物の繁榮したる時代はいつも必ず菜食動物に取つても全盛時代であつた。さうして後者が衰微する時前者もまた必ず其れと共に衰へた。ニコライの說によれば、太陽から受けるエネルギーを全部利用し得たものと假定する時、地球の表面各一平方メートルの上に棲息せしめ得る生物の極大量は二〇〇キログラムであるのに、現在その單位面積の上に生存してをる生物の量は、植物が一キログラムであり、動物は其の百分の一なる一〇グラム、また人類は僅かに〇・四グラムの割に過ぎないといふことである(G.F. Nicolai— The Biology of War. 1918. p.32. 手元にある英譯による、日本語でも近々畏友山本宣治氏の全譯が出る筈)勿論、之れは大體の計算であるに過ぎないが、然し此の比例によつて見ても、太陽の輻射エネルギーを直接に利用して炭素同化を營む所の植物が如何に生活物質の大半を占めて居るか、さうして其れを唯一の食糧供給者と賴んでどれだけの動物が生命を保つて居るかを知ることが出來、從つてまた其の動物界でのもの丶內輪に於て一部の肉を犧牲として養ひ得らる丶肉食動物の總量が更らに如何ばかり小さきものであるといふことも窺はれやう。加ふるに食肉動物が如何に其の爪牙を磨かうとも、餌となる可き動物も只漫然と食はれてはゐない。運動の速かなるものは逃れ去り、運動の遲鈍なるものは堅き甲殼や角や鱗に身を固め、其の他、擬態、保護色、惡味、惡臭、……等、實にあらゆる方法を以て食はれぬ工夫を講じてをぬわけであるから、種々なる他の原因によつて被害者が既に絶滅に瀕しをる種屬である場合、或ひはまた未知の加害動物が新しき小地域にはじめて侵入した場合などを除けば、肉食動物の爪牙の力だけで他の動物の種屬が全然根絶せしめられるといふ様なことは決して容易に起り得ぬであらう。——然らば生物が生物の他の種屬を絶滅せしむる樣なことは外にも決してないか? といふに、それ以外には大いにあるのである。其れは然し筋骨の逞しい猛獸や猛禽によるのではなくて、眼にも見えぬ微生物によつて起さる丶各種の疫病によるのである。猛獸や猛禽の害はまだ免れる術がないでもないが、眼に見えぬ此れ等の病原體の或るものに對しては、生來其れに對して免疫性を有する動物でない限り身體に其の病毒の侵入を受けて後、如何に動物の體內で白血球の常備軍を働かせ、また反毒素などを出して戰つて見ても個體の死滅を免れ得ぬことが多く、さうして一と度び或る外界の事情に基いて其の流行を見る時、其の病毒は燎原の火の如くにはびこつて一氣に數十數百萬の個體を犧牲にすることも珍しくない。——生物の過故の歷史から云ふならば、ほんとうにま

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ「つひ先刻」といはなければならない約百三十年ばかり前に、人類中のエドワード・ジェンナーなる者の智能が彼の種痘免疫の法を發見するまでは、さうして其の後やはり人類の腦髓の働きによつて、或ひは所謂『ワクチン』としてまた或ひは『血清』として人類自身竝びに家畜の疫病の中或る少數のものに對して兎も角も豫防法や治療法の成功を見たまでは、すべては只運命のまゝに委せられ、さうして人類も動物も、大なる生死與奪の權をば其れ等の病原體に握られてゐたのであつた。對應策の發見といふことも直接には人類の利害關係に立脚してゐるのであるから、一見したところ人間の利害と餘り交渉のない様な下等動物などに、果して如何なる程度まで疫病の恐畏があるかといふ様なことは殆どわかつてゐないけれども、例へば蠶の微粒子病の如きはさらぬだに年々直接間接に養蠶家が莫大な損害を受けつゝあるので、もしも注意を怠つて一旦其の大流行を見るに至つたならば如何に其の結果が慘澹たるものであらうかといふことは一部の人々のよく熟知する所である。鷄のコレラや牛・羊の脾脫疽病なども一八八〇年に其の豫防免疫の法が見付けられるまでは常に莫大なる數の動物を犧牲として斃してゐたのだつたが、丁度去る十一月二十七日に世界各地の學界で誕生百年祭を擧行された所の あの生物界の恩人ルイ・パストゥール（Louis Pasteur）が種痘の原理を應用して其の豫防法を確立したのではじめて其の慘害から免れ得るに至つたのだ。また同じく豫防法の出來た今でこそ（一八九三年以後）世間から餘り恐ろしく思はれてゐないが、所謂『牛疫』（Rinderpest）の如きも、それに罹つた牛の死亡率は九乃至十割であつて、まかりまちがへば、日本全國の牛などは忽ちにして全滅し得るほどの惡性なる病氣である。其れは牛ばかりでなく、水牛、野牛、麒麟、角馬其の他羚羊の類をも襲ふのであつて、最初は東部ロシヤから中央アジヤの邊だけに廣がつてゐたのであつたが、一八八〇年にエヂプトに入り僅か十五年間に全アフリカ大陸を縱斷してトランスヴァールにまで達し、殊に一八九〇—一八九三年に亘つては非常なる猛威を逞しくして南亞一帶の畜牛をはじめ野生動物の麒麟、角馬、而して特に水牛の群れを襲ひ其の莫大なる數を屠つた。南亞一帶の地にはまた十年二十年の間を隔てゝ大流行を來たす一種の馬の疫病があるが、其の病原體も、牛疫の原因と同じく、やはりまだわかつてゐないのだ。——人間に縁故の近い牛、馬、犬、猫、羊、山羊、豚、兎、鼠……等の獸類に就ては、それぞれ彼れ等に對する種々なる惡疫のことが可成りわかつてゐる。けれども繁雜になることを避けて、此處には生物滅亡の外因としての疫病のことを、主として馬だけに就て略記し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て見れば、先づ"Surra"と呼ばれる悪疫があつて主として印度からビルマ、トンキン、フイリッピン、乃至朝鮮にまで廣がつてゐる。フイリッピンでは先年六ケ月間に二千頭の軍馬を斃された。兩期の間或ひは直後といふ樣に滋潤なる時に限つて流行し、病原はトリパノゾーマの一種、そして或る種の蠅によつて媒介され、馬や驢馬以外に象や駱駝等をも斃すのだ。またアフリカには其れと同じ樣な疫病で"Nagana"病といふのがあり之れは馬以外に牛や犬などをも侵すのだが、病原はやはりトリパノゾーマで、(Trypanosoma brucei)所謂『ツェッツェ蠅』の一種("Tse-tse"—Glossina morsitans)によつて媒介され、滋潤にして其れの發育が盛んなる病毒地には方數千哩に亘つて只の一日と雖ども牛、馬、犬等は罹病することなくして足を踏み入れることが出來ないのだ。因みに、此のツェッツェ蠅の他の種類により他のトリパノゾーマが媒介される時、同じくアフリカ大陸に見られる彼の人間の睡眠病も起されるのであつて、其の人間の睡眠病と、家畜の疫病と、さうして作物に對する蝗の害といふものは古來アフリカ大陸に人間の文化を發達させることが出來なかつた三大禍因であるとさへ云はれてゐるのである。

アフリカの北部なるアルヂェリヤからスペイン及びフランスにかけては Trypanosoma equiperdum による"maladie de coit"と稱する馬及び驢馬の悪疫があり、また南米では T. equinum の寄生によつて馬や驢馬以外、牛や豚などにも"mal de caderas"といふ疫病が雨期になる毎に流行する。——

さて再び化石時代の問題に歸つて、馬の祖先の死滅に疫病といふものが果して關係を持つてゐたかどうかを考へて見るに、他の時代、他の場處に於ける場合は暫く之を論せず、少くも彼の最新世の時代に南北アメリカ大陸の全部に亘つて當時全盛を極めてゐた馬といふ馬が一頭も殘らず死滅してしまつた事實の重なる原因は、之れを何か或る、上に記した如き疫病の慘害に歸さなければ說明がつかぬのである。則ち斯界の第一人者たるオスボーンは、漸・中・朝鮮新世に於ける北米大陸の狀態をば、近世に於けるアフリカ大陸の中央高原地方の生活環に似たものであつたとし、最新世に於ける馬の根絶をも、恐らく"Nagana"或ひは"Surra"病の如き寄生虫病の非常なる蔓延によつたのではなからうかと推察して居る。

「アメリカに於て起つた最新世時代の生物の絶滅に關する全ての問題中、馬の滅亡に就ての問題は確かに最も難解なるもの、一つである。一般に馬の類は牛に比して遙かに環境の變化に對する適應性に富み、冬の嚴寒に對しても頗る堅忍力が强い。最新世の始めに當つて彼れ等は北米大陸の上に實に夥しく群れてゐた、然るに其の終末になると殆ど全部が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

根絕に歸してゐるのだ。さうして最新世に於ける其の絕滅の事情が南北兩アメリカを通じて同樣であることを見ると、其の現象をば直ちに氷河時代と結び付けて考ふることは不可能である。其の當時のメキシコの高原は、風土といひ、食物といひ、馬の生活の爲めには最も都合よき狀態にあつた筈なのであつて、其處に彼れ等は何時でも逃げ込む可き場所を持つてゐたのであるが、其のメキシコに居つた多數の、さうして極めて高い程度まで發達してゐた馬の種類も、やはり同時に根絕の運命に終つてゐるのである。此の理由に基き著者並びに他の古生物學者は、彼れ等は、或る一種或ひは數種の疫病によつて、根こそぎに兩大陸から一掃されたのではあるまいかといふ說を出したのである。此れ等の疫病は蠅によつて傳播され、濕氣によつて發生を容易にされるので、時には例外的に他の期節にも起るけれども、主として降雨期の間や其の直後に猖獗を極める。さうしてさういふ濕潤な狀態はオレゴンやネヴァダの廣い盆地やメキシコの峽谷には週期的に起つたものなのである。……斯かる疫病が傳播されるに際しての迅速なる速度はアフリカの大陸をば只の十五年にて南北に縱斷した牛疫蔓延の事實がよく之れを示してゐる。――氷河時代の濕潤期の間にアメリカに於ける馬が疫病の爲めに絕滅したといふ以上の說は最近にコツクレル (Cockerell) がコロラド州フロリスサントの中新世の岩層から彼のアフリカ產の種類に極めて近似した二種のツエツツエ蠅 (Glossina) の化石を發見したことによつて更らに幾分支持せられるわけである。則ちもし最新世の間の或る時期に、濕潤なる氣候が南部諸州からメキシコにかけて瀰漫し、それがかういふ蠅とか或ひはダニの如き病原媒介動物の莫大な發生と分布とを助長したと考へるならば、それが馬の絕滅といふ結果を惹起したといふことは決して不可能なる推論ではない。」(Osborn.—The Age of Mammals. p. 507)

最新世にアメリカ一帶に棲息してゐた馬は、進化の度に於て既に今日の馬と殆ど全く同じである種々なる Equus の類であつた。だから上記の疫病說が事實であつたとすれば、(さうして兎に角目下のところでは、それが最も可能性の多い說なのであるが)、臼齒や消化器や脚部やまた智能などの進化によつて、旱魃の爲めに森林が消滅した時にも草原生活に適應し、さうして其處で乾燥せる氣候や幾多の猛獸の害を受け乍らもなほ非常なる繁殖をなすことを得た所の馬が、トリパノゾーマの樣な眼に見えぬ微細なる原虫の爲めには忽ち一氣に、あの廣大なる全面積に亘つて、根絕され終つたといふことになるのである。或る病原體に對して生物の個體が先天的に持つ所の免疫性の有無强弱といふことをやはり一種の變異であると見、また病毒に侵されたる場合、反毒素などを出して其れに對抗する抵抗力の程度を新しき環境に對する適應性の强弱なりと考ふる時、疫病による生物の個體(乃至種屬)の死滅といふ現象も確かに自然淘汰の一つの相であるに違ひない。けれどもたとひ如何に[illegible]なこ

ね測さうとも、例へば上記の馬の場合、最新世に死滅したるアメリカの種類を指して「其の進化の方向が餘りに一方に偏してゐた爲め、既に内部から其れを亡ぼす可き原因が働いたのである」など丶云ふことは出來ないだらうし、また其れを以て「初め其の種屬をして他の動物（即ち齒や脚の構造などが乾燥期に生じたる草原の生活に適せざりし動物）に打ち勝つて、優性の位置に達せしめた其の同じ性質が、やがては却つて禍をなして、その爲めに悉く亡び失せてしまつたのである」など丶考へるわけにも行かないであらう。何となれば最新世以後約五十萬年なる今日に於てすら、其の時亡ぶ可き內因を持つてゐたのだといはれる馬と同じ樣なる種類の馬が、野生の狀態に於てもまだ數多く存在して居るのであるから。さうして特殊なる毒や病原に對する抵抗力の有無强弱は、決して必ずしも常に、一有機體としての其の生物が環境に對する適應不適應の程度や進化の完全さといふものと一致するものではないのであるから。（次號完結）



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暴力的團體の存在を默認する當局の怠慢を糺彈す

「國家」の外「力」の使用を許さず

法學博士　吉野作造

○

「無理」が通れば「道理」が引つ込むと云ふ諺がある。暴力の横行は則ち眞理と正義との權威の失墜を意味し、やがて社會を無政府的混沌狀態に陷らしめずば熄まない。之を防ぐのが政府の職務の最も重要なる一つであるべきである。若し暴力的團體の存在と其横行とを默認する政府ありと云ふが事實上眞なりとせば、そはたゞ當局の怠慢を糺彈するに止むべき問題ではない。

なか〳〵「道理」が素直に通らないからとて「力」の對立競爭を認めて居つた國際關係に於てすら、何とかして「道理」に物言はしめやうと云ふが現代人の熱烈なる要求ではないか。所謂實證主義者は、幾ら「道理」を立てやうとしたつて立つた例しは無いではないかとて、弱肉强食を凡ゆる共同生活の常態だといふけれども他方から觀れば人類の歷史は「無理」の横行に對する限りなき「道理」の抗議の記錄と謂ていゝ。政府なる組織は畢竟「道理」をして人類の生活の基準たらしむべき工夫に外ならない。「道理」を無視して腕力の勝利を目指す底のものは、政府に於て何よりも先きに取締らねばならぬ筈だ。是れ啻に政府それ自身の權威のためばかりではない、抑もまた人類共者の進步の爲に必要な條件である。

○

國際關係のことは姑く措く。少くとも國内の關係に於ては、一切の暴力の横行を許さぬといふのが所謂近代國家の理想であり又其最も重なる屬性の一つである。道德と謂つて語弊ありといはゞ法と謂つて置かうか、法的秩序の最も嚴格なる維持者として國家を戴くところに、近代人は安じて其の生活を開展して來たのだ。凡ての「力」は之を國家に集中する。國家以外に「力」を以て我々に臨むものあるを許さない。即ち一切の暴力團體を許さぬ所以である。若し强て近代人の生活に於て「力」の權威を認

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

むるものありと云はゞ、そは唯「國家」に限られて居る。國家以外に「力」を認めないといふ原則は、何れの點から觀ても之を疑ふ餘地はないのである。

而して近代人の生活經驗は、この「國家」に對してすら單純なる「力」の組織としてのみ觀たくないと云ふ要求を起し始めて居る。元來「國家」がそれ自身「力」の組織であるといふことは已むを得ないことなのだ。間食してはいけないといふは不規則に食つてはわるいといふ事である。不規則なる食事を整理する爲には之を一定時の食事に統制せねばならぬ。我々の生活に强制的統制の必要ある以上（人類の不完全を條件とする限り絶對の不羈自由の生活は考へられぬ）、之を規則正しき組織の中にまとめて國家を作ることは、自然にして又必要だ。秩序それ自身の權威は、即ち客觀的に「力」として吾人に臨む所以なのである。加之「國家」は秩序其自身が「力」として吾人に臨むことの外に、秩序の維持者として自分自身を維持防衛する必要がある、この第二次的要求よりして「國家」はまた更に違つた意味に於て吾人に臨むに「力」として對して來る。是れ國家が時に誤つて「暴力」そのものとして視らるゝ所以であり、又往々其の本來の意味を超へて「暴力」そのものたるの過誤を犯す所以でもある。夫れでも昔の人は、之に對して必要なる又は已むを得ざる禍惡として其の横暴に我慢して來た、又我慢すべきだと諦めて來た。孰れにしても、假令「國家」を「暴力」なりとしてもその國家たるや許されたる「暴力」の最後の者たることだけは疑ない。國家以外に在ては、何等の名義を以てするも、「暴力」の横行は疾うの昔に既に許されざることになつたのである。

斯く久しい間仕方がないと諦められた國家の「力」に對してすら、近代人は段々我慢がし切れなくなつた。「力」に代るに「道理」を以てせんとするの要求は、この殘されたる最後の牙城にまで突入するに至つた。近代立憲主義の流行が即ち是である。

立憲主義といふと世間には其の深奧なる意味を聽かずして直に之を輕々しく取扱つて仕舞ふ者が多い。立憲主義とは、單に立法權を議會に與ふるといふ事ではない。所謂民衆の名の下に少數市民に代議士を選擧せしむることだけではない。今までのやり方がまづい所から其の本來の意味を十分に發揮し得なかつたのではあるが、元來は國家の「力」の維持防衛の根據を一般民衆の良心の自由に置かんとする點に本當の意味は在るのだ。國家に「力」の作用あるの當然にして又必要な事は既に述べた通りだ。只併し乍らこの「力」は動もすれば當局者より濫用され易い。殊に其の濫用は當局者自らその地位を如何にして維持擁護すべきやを策する時に甚しくなる。昔は此の問題が少くとも常

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に純然たる腕力の抗爭に依て決せられたのであつた。今は即ち然らず。一般民衆の良心の地盤の上に自由なる競爭を試み、其の自由判斷に基く多數の推挽を得たものが勝つのだから、權力掌握乃至地位維持の終局の賴みどころは、民衆の信望といふことである。こゝで始めて權力の作用は道德的條件に依て左右さるゝことになる。之が立憲主義の根本の眼目だ。して見れば近代立憲主義の流行は、一面に於て、殘されたる最後の堡壘にまでも突貫し、「力」そのものゝ組織たる政府までをも徹頭徹尾「道理」の支配下に統制せんとする要求に外ならぬと謂ふべきである。（そが理想通りに行はれてゐるや否やはまた別の問題だ）。

かう云ふ時代に當つて、若し、何の觀る所あるにせよ、當局者自ら率先して所謂暴力團體の發生に助勢し、又は其の存立橫行を援けんとするの事實ありとせん乎、其は時代錯誤の最も甚しきものである。僕は斯の如き事實が眞面目な人々に依て默認せらるゝことをすら想像することが出來ない。

○

然るにも拘らず、非常變轉の時代だとはいへ、今日歐洲の各地に於て暴力團體の存在橫行が一時の流行をなして居ることは悲しむべき事である。只聊か吾人の意を强うするは、之等の現象は決して識者の嚴しき批難なしに起つて居るのではないこと

である。加之、深くその內面の事情に立ち入つて考へて見れば、かゝる病的現象の現はれねばならぬ理由の諒とすべきものもないではない。之等の事情を察せずして、徒に一時の流行に多少の恒常的意味を推定せんとするは、深く愼むべきだと思ふ。僕の觀る所によれば、現今歐洲に於ける一時的變態現象として現はれて居る暴力的團體には二つの種類がある。一は云ふまでもなく所謂プロレタリアートの要求といふ形で社會改造を目的とする直接行動であり、二は其の反動として最近例へば伊太利ことには希臘等に起りつゝある暴力團である。而して社會改造運動に於ける直接行動主義に對し、其の發生の歷史的事情（殊に相手方たるブルジョア階級の執拗なる反抗と改造運動の抑壓の爲めにする國家權力の不當なる利用）に大に諒とすべき理由あるに拘らず、所謂理想主義的立脚地よりして盛に之を阻止せんとする勢力のあることは、換言すれば社會改造運動に飽くまで「理」を以て漸進的に推して往かうといふのと、「力」に對する正當防衛として亦「力」を以て對抗して往かうとするのと、二つの潮流あることは、我々の看過してはならぬ所である。然るに何事ぞ、この社會改造運動の大勢を抑止せんとする守舊派の、一朝の變態的形勢に乘じて其の腕力的爪牙を逞うせんとする運動をば、多少でも假借助勢せんとは。之こそ誠に惡むべき

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自暴自棄の非常手段を執るべく、プロレタリアートを激せしむるものではない乎。西歐の革命史に於て我々の常に學ぶ所は、禍亂挑發の最大禍因は常に頽勢を旣倒に回さんとする守舊黨の無謀の暴擧にあることである。彼等には一片愛國の誠意はあらう。併し此種の頑迷な誠意程世に有り難迷惑なものはない。

○

非常の時に於ける當局者の任務は重い。殊に彼等の隱忍抑遜は最も時代を救ふ爲に必然だ。王政維新の際、江戸城を預る者が聵々者流と一緒になつて官軍と一戰したなら、日本はどうなつて居つたらう。我々の勝海舟に感謝する所は、飢えたる者食を擇ばずの窮境に處して而かもよく大局の開展の爲に措置を誤らなかつた點に在る。社會運動家のワイワイ連が癪に障るとて之よりも一層下らぬ意味に於ての守舊派のワイワイ連の暴力的橫行を、もし當局者にして痛快がる樣な素振りでもあらば、之こそ將來の爲に由々しき大事であると思ふ。

僕は今日の當局者に事實右述ぶる如き失態ありや否やを知らない。只時として警官壯士と結托して一部運動家の集會を蹂躙したとか、又は守舊頑迷の徒が腕力を見せびらかして一部の論客を威脅するに對し官憲の取締甚だ其意を得ずとかの風說を耳にする。この種の報道時に誇張に失するものあるを知るが故に悉く之を信ずるものではないが、斯かる風說の起る丈けが旣に甚だ不祥の事である。國家は「力」の唯一の操持者である。他に力の橫行を許してはならない。政府は「理」に從て「力」の運用に當るべきである。此間に偏僻の沙汰あつてはならない。この極めて平凡明白な原則は、當今の如き變轉の時代に於ては特に其の恪守を必要とする。一歩の過誤は他日悔ゆるも及ばざるの禍害をのこす恐なきを得ぬが故に、分り切つたことながら、讀者と共に、短見なる政治家と淺慮なる局僚とを警戒する所以である。

暴力默認と國家否認

水野廣德

一

人間の生活に國家なるものが必要なりとすれば、夫は國家が其の有する權力を以て、法律に依つて許されたる國民の權利を保護するが爲めである。或は他の言葉を以てすれば、法律に依つて禁ぜられざる國民の自由を擁護するが爲めである。故に若し國家が、國民の許されたる權利を保護するを怠り、禁ぜられ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざる自由を擁護することを忘れたる場合には、人間生活に取りて國家なるものゝ必要を認めない。

國家の權力に服從するは國民の義務であると等しく、國民の權利自由を保護擁護するは國家の義務である。國家と國民との關係は、道徳的の精神結合にあらずして、徹頭徹尾權利と義務との相互對象である。國家が國民に對する義務を盡さざれば、國民も亦國家に對する義務を守るの必要はない。而して國民は國家をして國民に對する義務を行はしむる爲めに國家に對して絶大の權力を與へて居る。國家は此の權力に依りて法律規則を制定し、之に準據して國民の生命財産をさへ自由に徴發することを許されて居る。故に國民は國家の權力に服從するの義務あるのみならず、國家は國民をして、國家の權力に服從せしむべき責務がある。國家が若し此の責務を怠る時は、國家自ら其の權力を拋棄したるものである、權力を拋棄したる國家は最早や存在の意義を有しない。

二

文明の政治は道理の政治である。道理の政治は暴力の行使を許さない。文明國家が國民の權利を保護し自由を擁護する爲めに必要なる第一の途は、國家自ら國民に對して暴力を用ゐざると同時に、國民間に於ける暴力の行使を禁斷することである。國家が、國民間に於ける暴力行使を公認若くは默認するは、是れ斬棄御免の野蠻政治である。されば今の文明國なるものに於ては、相互承諾の個人決鬪さへも、學生の修養目的以外之を禁止して居る。暴力行使の默認せらるゝ唯一の例は米國の私刑である。併し之とても文明人の恥辱として今や世界非難の焦點となつて居る。外國に於て決鬪の尚ほ許されたる我が維新當時に於て、我が國の爲政者が斷然之を嚴禁したるは、誠に賢明なる策と賞讃すべきである。素より個人の決鬪は其の爭ひ、當事者の間に限定せられ、又米國の私刑は犯罪者に對する公衆の憤怒に發するもので、其の間に主義思想等に關する何等政治的並に社會的の問題を含んで居ない。從ふて斯かる暴力の行使は勿論忌むべく惡むべきであるが、國家並に社會に對して重大なる影響を及ぼすことはなかつた。

然るに近時就中歐洲大戰以來、各種の新思想勃發して世界思想界に大變動を來し、新舊思想の衝突は到る處の國に行はれた。之が爲め、種々の思想的團體、主義的團體が公然に或は秘密に結ばれ、暴力に依つて反對者を威嚇迫害せんとするの傾向を生じた。我が國の如きも亦新舊思想の衝突に加ふるに、更に東西思想の混亂あり、爲めに我が思想界は恰も亂麻の如き狀を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

呈して居る。殊に最近に於ては、疑獄事件の頻發に依りて政府に對する國民の信用衰へ、政界の墮落に依りて議會に對する國民の信賴減じ、加之、物價騰貴の爲め國民は生活難に苦しみ、産業不振の爲め多數の失業者を生じ、曩に流行的の觀ありたる思想の變動は、今や漸次眞劍味を加へ來つた。直接行動、共産主義、無政府主義などの叫は、好奇心時代を過ぎて眞面目に考へらるゝに至つた。

現狀に滿足し、現狀に利益する人々は、驚かざるを得ない。恐れざるを得ない。新思想を以て外來思想と難じ、危險思想と戒め、種々の手段を講じて之が抑壓と撲滅とに力めた。或る政治家は、神佛基の三教合同に依りて、國民思想を統一せんとするの名案を試みたこともあつた。浪花節的武士道鼓吹に依りて國民思想を善導せんとするの妙計を講じたこともあつた。共に大正政治史を飾るに足るべき後鑑の大經綸である。更に又日東君子國の國粹を發揮せんが爲め、大に天下の俠客を糾合して官許俠客團を製造し、以て積極的に所謂危險思想壓伏の任に當らしめんとした。由來俠客とは挫強扶弱を本領とし、幕府の政府者たる旗本の横暴を制したる當年町奴の流である。凛として權門に屈せず、淡として利慾に迷はず、稜々たる俠骨に男兒の意氣を磨きたる當年の町奴も、今は知事師團長等を顧問に戴き時と

しては弱き勞働者を苦しめんとする。慥に俠客の進步である。

政府要路者自ら斡旋奔走して公許俠客團を製造し、暴力團體是認の範を作つた。俠客不俠客各所に黨を結んで私設暴力團を作り、各自主義を標榜して白晝帝都に横行せんとするを見るに至つた。眼中黨あつて國家なき政黨者流は屢々此等暴力團を買收し、使嗾し、警官監視の面前に於て堂々暴力を振つて反對黨の演說會場を蹂躙せしめたこともある。新聞紙の報ずる處に依れば、官憲亦往々彼等を利用し暴力を以て社會運動、勞働運動等を迫害せしむることもあると云ふことである。或る國の政府は官養社會主義者を使つて、盛に食ひ逃げ、飲み逃げ、借り倒しを行はしめ、世人をして社會主義を嫌惡せしむるの策を取つたと云ふ話を聞いた。又或る國の官憲は普選運動の盛なりし時官許普選運動者を雇ひ、民衆を煽動して暴行を行はしめ、以て議會解散の口實を作ると共に、普選運動者の兇暴を世間に宣傳したと云ふことである。斯くて官許煽動者は多額の賞金を與へられ煽動に應じたる無知の民衆は捕へられて監獄に打ち込まれた。何と賢い政治家もあるではないか。何と氣の毒な民衆もあるではないか。之をしも支那人の言ふ反間苦肉の計とでも呼ぶのであらう。宗教合同や、浪花節鼓吹よりは餘程念が入つて居る。

三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立憲的法治國に於ては、如何なる場合も、如何なる人間も、法律の許したる範圍外に於て暴力を使用することは許されない。之を用ゐたる者に對しては、國家は國法の命ずる處に遵ひ嚴重に之を處分せねばならぬ。又之を用ゐんとする者に對しては、豫め之を警戒せねばならぬ。其の主義の如何と、其の思想の如何と更に又時の政府に利あると否とを問ふべきでない。社會の秩序と安寧とは唯暴力行使の禁斷に依つてのみ保たるゝのである。進歩思想的暴力は嚴禁するも、保守思想的暴力は默認するとか、或は社會主義的暴力は嚴罰するも、國家主義的暴力は看過すると云ふ如き性質の問題でない。事は國家綱紀の根本に關する重大問題である。抑も暴力の是認或は默認は、流血的革命の是認或は默認である。國家主義者の暴力を默認することは、是れ即ち社會主義者に對して革命を默認することである。社會主義者の暴力に對しても亦然りである。斯くの如き重大問題が動もすれば、思慮淺き低級の警察官憲の手心に依つて、群衆凝視の中に露骨に無遠慮に取扱はるゝは、法律の信嚴を損じ、官憲の公明を傷つけ、國家の危險之より大なるはない。

暴力の否認は獨り國民相互間に於てのみ必要なるものでなく、政府對國民間に於ても亦然りである。近時新聞紙の報ずる所に依れば、政府の命を奉じて行動する官憲が、社會運動勞働運動等に對し、必要以上に暴力を濫用して居る樣である。吾人の目撃せる處に依るも、其の例に乏しくない。官憲自ら法律を蹂躙して、暴力の行使を國民に示す以上、何を以てか法律の信嚴と官憲の信用とを保つことが出來やう。或る主義或は思想に對し、官憲が不法に暴力を行使する毎に、政府に對する國民の信頼は減殺せらるゝと同時に、不法に虐げられたる主義思想に對する國民の同情は增加するのである。元來、暴力に依つて飽くまで現狀を固執せんとする思想と、暴力に依つて飽くまで現狀を打破せんとする思想は、國家社會の中堅たる國民の大多數より見れば、共に等しく惡思想である。危險思想である。其間に何等の徑庭はない。即ち國民の大多數は中正である。故に若し政府官憲にして、一方の惡に加擔し不法に他方の惡を暴壓せんとせば、中正の國民は自ら弱者に同情するに至るは人間の自然である。

四

新聞報に從へば、昨年夏京都に於ける勞働爭議の際、地方官憲は地方國粹會員を手先に使ひ、勞働者の合法的なる集會をば暴力を以て蹂躙せしめ、爲めに法曹界の問題を惹起したことがある。吾人は事件の眞相を知らざるも、吾人の心理には新聞記事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を肯定するに充分であつた。幸に賢明なるべき司法權の發動に依り、國粹會の暴漢數名は下手人として檢擧せられたるも、地方官憲は之に干與せずとの判決が與へられた。吾人は此の形式的判決を以て、直に吾人胸中の疑惑を一掃するを得ざることを甚だ遺憾とする。其他關西地方に於ては國粹會員と稱せらるゝ者の暴行を屢々耳にする。然かも之に對する官憲の處斷は頗る遠慮勝ちであるとの世評を耳にする。素より知事師團長などの歴々たる閣下連の關係せる國粹會其のものゝ主旨綱領なるものは、まさか國憲を紊り暴力的直接行動を以て反對主義者を迫害するを目的とせるものでないことを信ずる。併しながら其の會員なるものが會の勢力を笠に着て、屢々暴力を行使するに於ては、政府として嚴重なる處置を執ることは、一は國家の綱紀を維持し社會の安寧を保ち、一は國民の權利を保護し國民の自由を擁護する爲め、政府の當さに爲すべき義務であり、盡すべき責務でなければならぬ。

殊に京都に於ける勞働爭議の際、地方官憲が、公開の演説會場に於ける辯士の安全を保障し得ずと公言したる如きは、若し事實とすれば、一面に於ては國家が國民を保護すべき任務を怠り、一面に於ては國家が暴力を取締るべき權力を抛棄したるものである。且つ官憲當局者としては曠職無責任の甚だしきものである。國家が權力を抛棄すれば無政府である。國家が暴力を是認すれば革命である。苟くも國家として無政府を惡み、革命を恐るゝならば、政府自ら暴力の行使を停止すると共に、國民間に於ける暴力の行使を嚴禁せねばならぬ。

五

思想に對しては思想を以て戰はざるべからずとは、世間並に政府當局者の屢口にする處である。誠に至言であると信ずる。元來思想なるものは無理由なる感情の發露にあらずして、理性に依つて練られたる信念の產物である。故に思想は外力に依りて表面的に壓迫し得るも、決して内面的に撲滅することは出來ない。しかも外力の壓迫烈しきに從ひ、内面に燃ゆる思想の焰は益々熾くなる。昨年の議會に政府當局が、過激法案を提出したる際、社會主義者は「吾人の時代近づけり」と手を拍つて悦んだと云ふことである。多少思想の何たるを解する者より見れば、強ち彼等の負け惜しみの言とのみは思はれない。思想を壓迫するは恰かも火藥を壓搾するが如きものである。壓迫大なれば爆發の力も亦從つて大である。火藥は自然に燃燒せしむべきである。思想は自由に發表せしむべきである。唯國法に觸れ、暴力を用ゐる場合にのみ禁ずれば足れりである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然るに世間には今尚ほ動もすれば、銃劍の力を以て思想の傳入を遮り、サーベルの光りに依つて思想の傳播を防がんとするものがある。近時頻出する各種の暴力的團體は、暴力に依つて反對思想を撲滅せんと欲するものである。暴力に依つて抑へ付けたるものは、暴力に依つて跳ね返へさるゝに極つて居る。主義思想に對する暴力的壓迫は到底其の目的を達せざるのみならず、却つて國家に大害を殘すものである。思想を解せざる短見無識なる政治家や資本家や特權階級者は、自己現在の權勢を保ち、自己現在の利益を貪り、自己現在の地位を守らんが爲めに或は權力の保護を與へ、或は財力の後援を與へ、以て暴力的團體を製造飼養して自己に不利なる思想主義を迫害せんとしてゐる。露國の革命が酷烈酸鼻を極めたるは、官權並に特權階級者等が反對主義者に對して、極端なる暴力的抑壓と迫害とを加へたる報復的結果である。極端より極端に走るは世相人情の常である。

五

昨年十月伊太利にファスシスチ(國粹黨)の政變起り、現首相ムツソリニ氏は議會に僅に三十名の黨員を有する國粹黨を率ゐ、暴力的に政權を奪占した。元來伊國國粹黨は伊國共產主義の暴力に對抗せんが爲めに產出したる暴力團體である。左れば共產黨の跋扈に苦しみたる政府も資本家も、國粹黨に對して種々の便宜と保護と後援とを與へた。之を以て國粹黨は所謂暴を以て暴を制したるに過ぎずと雖ども、共產黨が純民衆的暴力團體なるに反し、國粹黨は官立暴力團體の如き觀がある。然るに此の官立暴力團體たる國粹黨は、共產黨を擊破したる後、更に其の暴力を利用して遂に政府を殪し、自ら政權を奪取したのである。即ち伊國政府は飼犬に手を咬まれたと云ふよりも、飼犬に咬み殺されたと云ふべきである。

伊國國粹黨內閣の政綱が如何なるものであるかは尚ほ不明であるが、日本國粹主義者の抱ける思想の如き偏屈頑固なるものではないらしい。故に國粹黨內閣の成立は伊國として或は幸福であるかも知れない。現に國民の信賴を博して居る樣である。併しながら憲法の精神を蹂躙し、暴力を以て政權を奪掠したと云ふことは、伊國の將來に對して極めて重大なる惡例を作つたものと云はねばならぬ。國粹主義が共產主義の反動であるならば國粹主義の反動は共產主義である。一度國粹主義の暴力政變を是認したる伊國は、次に來るべき共產主義の暴力革命を否認することは出來ぬであらう。而して之が値を作りたるものは、權力と財力との保護後援を國粹黨に與へたる政府と資本家とで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。國家の政權が暴力の直接行動に依つて爭奪せられるに至れば、是れ憲政の破滅である。野蠻時代に逆戻りである。國家の安寧も、社會の秩序も保たるべきものでない。

策士と野心家との多き我が國に於ても、私かに和製ムツソリニを夢み居る者も決して尠くないであらうと思ふ。二葉にして摘まずんば斧を用ゐるの煩がある。政府にして眞に國家社會を念とするならば、虚心に、公平に、總ての思想、總ての主義に厲する暴力的團體に對し、一律平等に嚴戒を加ふべきである。暴力の默認は是れ國民をして國家否認の觀念を抱かしむるものである。

政府の生命は一時的である。國家の生命は永久である。一時的なる自家政府に好都合なるの故を以て或る種の暴力團體を默認するが如きは、禍を國家百年の後に貽すものと云はねばならぬ。眞に國家を愛する國民は、断乎として之を糺彈せねばならぬ。

暴力的團體の存立を默認するか

法學博士　堀江歸一

文明國の大都會に於て生活する我々市民は日常種々の方面に亘つて、生活上の危險を感ぜざるを得ない。此危險に對して、吾人の爲めに、保護の任に當るものは、即ち警察であつて、今日の警察が治安行政衛生の諸點に盡す所は敢て少なしとしない。時に警察の及ぶ所に何等かの缺陷があるかして、大都會に虎列刺病が流行したり、黒疫蔓延を告げたり、又は强窃盗時に殺人狂とも云ふ可き暴漢が跋扈したりすることは、市民の戰慄を禁じ得ざる所であつて、當局者に向つて、一段の猛省を望まざるを得ない次第であるが、私が警察に向つて、最も熱心に所望する個條は必ずしも盜難を未然に防いで貰いたいことでもなければ、衛生上の細い事柄に干渉を加へられたいことでもなく、市民全體を同一樣に取扱つて貰いたい、換言すれば警察當局者又は警察行政權を掌握する内務當局者が自己の色眼鏡で定めた或る標準に據つて、警察權を運用するに當つて、濫に寛嚴剛柔の差別をしないと云ふことに外ならないのである。

十數年前までは、我國には壯士と稱する一種の團體が横行し暴行を看板に掛け、團體の力を以つて、他人の自由を束縛し、斯くて自分等を飼つて呉れる人の爲めに働いた時代があつた。今日でも何か政治問題でも紛糾すると、壯士と名乘る輩が現はれるやうであるが、固より一夜作りの代物であつて、別に世間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から注目され、以前のように社會の爲めに演說會が潰されたとか、反對派の有力者が襲撃されたとか云ふような話は殆ど之を耳にしない。然るに此頃に爲つて我國に一種の團體が組織され、其一派の主張する信念と違つた立脚地に居る者は全く之を目の敵きにし、暴力を以つて、之を壓倒することを辭せざる趣きの現はれつゝある一事は私の認めて奇怪する所であるばかりでなく、斯る團體が暴力を揮つた場合に、警察が充分の干渉を加へないと云ふ風說すら傳へらるゝに至つては、奇怪の上に、奇怪を重ねるものとせざるを得ない。

由來我國の內務省內に固陋の思想が瀰漫して居ることは、隱れもない事實であるが、特に近頃に爲つて、斯る固陋なる思想の外部に露出し、又實際に內務省の方針を左右したのは、原內閣の下に床次竹二郞氏の內務大臣在職中であつた。床次氏が普通選擧を以つて、我國體を危うすると主張した故原氏の股肱であつた事から考へても、又法律を以つて、所謂過激思想の侵入を取締らうとした發頭人であつた事に徵しても、又勞働者の權利や自由を壓迫することに依つて、勞働問題を解決しようと試みた手際に照らしても、其思想の如何に頑迷度す可からざるものであるか、或る點に於ては、恰も露國帝政時代の權力者に類するものであるかの一斑は窺はれるが、不思議にも床次氏の在職中に、一種の反動的團體が我國に起され、而して床次氏の庇護の下に居ると稱されて居る。此團體が今日まで如何なる事を社會に向つて爲して居るか、或は政友會の別働隊として、大に政治上に行動する積りであるといふ說もあり、次回の總選擧に於て、何か形跡を示すかも知れないが、今日は未だ左程世間に現はれない、反動的團體の今日までの仕事と爲つて居るのは、總て社會上の新思想を反抑し、時に直接行動に訴へるを辭せない一方に、勞働爭議の起つた場合に、資本家に與して、罷業者の團結を破らうとすることの二點である。床次氏が內務大臣在職中、最も熱心に企畫した所のものは、官權を以つて、勞働運動を壓迫することゝ、同じく政府の干渉に依つて、自己の嫌忌する或る種の思想を根絕することゝであつた。然らば今日反動的團體の爲す所は床次氏の意を承けたものであつて、同氏と團體との間に何か關係の存するやうに想像されるのも亦敢て異なりとするに足らない。

今日勞働者が事業主の虐遇に堪へ難く、團結の力を以つて、之に對抗しようとする場合には、如何に其事が正しい企てゞあつても、二つの方面から壓迫の來ることを免かれない。一ツつは警察方面からの壓迫であつて、治安警察法の規定に依つて、運動者は片つ端から拘束される、他の一ツは反動的團體の資本

家擁護の爲めにする運動であつて、勞働運動者を壓迫して、資本家に對する對抗運動を困難ならしめる。元來勞資双方の關係は飽くまでも、之を對等のものとし、兩者をして自由に勞働上の契約を締結せしめ可きものであるのに、我國に於ては勞働者の團結に種々の困難が伴つて、容易に資本家に對して、對等の力を持つを得ない、殆ど決死の覺悟を以つて、或る運動に從うと、警察權以外に、或る團體の勢力――時に暴力――が勞働運動を妨害し、然も警察權は此暴力の使用に對して、取締の適當なる方針に就かないことのあると云ふが如き、今日の社會組織に大なる不公正を及ぼすものと認めなければならぬ。

社會一部の人士に依つて、所謂過激思想として、蛇蝎の如くに嫌忌されるものが果して我國社會の秩序を攪亂する程に、有力であるかどうか、官權を以て、壓倒しなければならぬ位に、廣く天下の人心を左右して居るものであるかどうかは姑く別問題とするも、思想は思想を以つて、相對せしめ、其間に漸を以つて國民思想を進ましめるのが當然であるに、此場合にも或る反動的團體の勢力が立ち入り、其團體の認めて正しいとする說と一分一厘でも違つた說を持つ者があれば、恰も異端者と見做し、暴力を以つて其說の傳播を謀る計畫を阻止するが如きは甚だしき間違であると考へられる。

北米合衆國に行はれる私刑に對しては、世間に何人と雖も、之を承認する者はないであらう。然しながら或る團體があつて暴力を以つて、反對者を壓迫する、假令ひ相手方の肉體に何の暴行を加へないとしても、精神的壓迫を加へるとは、私刑の弊害と事實に於て、異なる所はない。而して壓迫される側の方でも亦團結を設け、暴力に對するに暴力を以つてするに至つたならば、我國が法治國であり、文化國である面目は遂に蹂躙されざるに得ない。我國の議會が單に多數を擁する政黨に支配され言論思想の力に依つて、政治の左右される趣きのないことは、我國の恥辱とする所であるのに、更に暴力を看板とする團體があつて、國民の行動や、思想を束縛するに至つては、恰も我國の社會をして封建時代の昔に立ち歸らせ、武士や町奴の跋扈を復活させた觀なきを得ない。德川治世の末に江戸市中に町奴なるものが出たのは、武家の横暴跋扈に反抗する趣意であつて或る場合には武家を向ふに廻して、良民を保護する任に當つたこともあるやに認められた。然しながら之を全體から見れば、一國に武士と云ふような特權階級がなく、隨つて彼等を彈肘する町奴の必要もなかつた方が市民全體をして生活上の安全を樂ましめる所以であつたのに相違ない。若しも今日我國に起りつゝある反動的團體にして、昔の町奴の如く權力者に依つて枉屈

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

されるの已むを得ざるに至つた特殊の階級の爲めに、働きをする、勞働爭議の場合には、勞働者の爲めに、小作爭議の場合には小作人の爲めに援助を辭さない、抂屈された權利を恢復し、侵害された利益を補償する爲めには、水火をも辭さないと云ふならば、存在の理由ありとも見られやうが、他に何ものの支持なくとも、既に强い、而して其强い權勢を濫用しないかと氣遣はれる政府や、資本家に加担し、强者を益々强くし、弱者に對する虐げを益々深くして、其處に何の公正が保たれるであらうか、私の知るに苦む所である。

政府が政を爲すや、公正を旨とし、國民に對するに一視同仁でなければならぬ。政府自ら色眼鏡を以つて、國民を眺め、其一部に偏私するばかりでなく、其一部の力を不當に利用しようとするが如き、政の大本を紊ること、是れより甚だしきものはないと云へるであらう。

國粹會に望む

文學博士　三宅雪嶺

日本に國粹會の起つたのは、初めから國粹の語に絡んだのでなく、出來上つたのに他人が名をつけ、其名が當つて居るか否か、人によつて意見を異にする。外國感染れの思想及び運動に反對すると云へば、國粹と稱して當らぬ事はない。國粹の語を專有すると云ふのでなく、國粹と稱するだけでは不都合が無い。併し初め國粹と云ふを意識せず、所謂俠客なる者が集まつたのであつて、國粹と俠客とが何の關係あるかも疑問に屬する。或は俠客が國粹中の粹なる者と云ふのがあらう。如何にしてさう云へるか。史記の遊俠傳を何と見るか。支那で之を國粹とすべきであるか何うか。

それはそれとして、俠客の意義が明白を缺き、舊幕時代にも種々樣々に解して居る。一應、强きを挫き弱きを扶けると云ふのが標語になつて居り、かゝる事は或る程度まで社會の必要とし、之を敢てする者を稱讃せねばならぬ。政權金權を恃み、横暴を逞くしては、法律の下に爭つても効能が無く、力を以て爭ひ、何とか解決を告げ得る事がある。甚だしきに過ぎ、安寧秩序を壞つては、利が害を償はず、深く警めねばならぬが、さもない限り一種の社會制裁と稱するに足る。舊幕時代に浪士が天誅と稱したのも、同樣の制裁振りに出づ、忠臣藏とて畢竟するに社會制裁の現はれたのである。如何に幡隨院長兵衛の演劇が今猶ほ興味を牽くかは、世間で俠客の活動を望んで居るを示す。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併し人が長兵衛を賞讃するのは、俠客と稱せられて居るからでなく、其行動に感心すべき者あるからである。史實について種々の疑問あり、頗る演劇と違つたりするけれど、演劇に現はれた通りならば、殆ど申分が無い。當時武家と町人との懸隔甚だしく、武家から懇望され、長兵衛一人で乘り込み、禮すべき所に禮し、それで何處までも屈せず、泰然自若、双方から槍に突かれて死んだ。初めから死を覺悟して居つた。乾兒が附き從うのを拒み、それとなしに訣別して出掛けた。水野と互り合ひ、之を殺し自らも殺されればそれまでであるが、單に殺されただけで人が水野の卑怯を憎み、武士の風上に置けぬとせずに居れぬ。後果して水野は相當の制裁を受けた。若し長兵衛が多くの乾兒を引連れ、水野の玄關で怒鳴り合つたならば、何うであらうか。舊幕時代、長兵衛に似た俠客がいろいろあるが、今日より云へば兎角博徒の親分の如きものが混入し、其親分にも相當の人物あるにせよ、乾兒の多いので人を威嚇し、勝手次第な事をしたのがいろいろある。町内で困りながら、乾兒の荒ばれるので、仕方なしに云ふ事を聞いたりした。眞に男達で通る程なのはさうでなく、新門辰五郎の如き、胡坐をかかず博奕を打たぬと知られたが、無頼漢が徒黨を組んで良民を痛めた害が少くない。之を兵にすれば可からうとて、集めたけれど、割合に良い働きをせず、幕府の最後を飾るに與らなんだ。

徒黨を組んで人を脅し付けるは、强を挫き弱を扶けるのではなく、寧ろ其反對に出て居る。俠客としては多數を恃んで少數を威嚇するやうな事をしてはならぬ。少數を以て多數と鬪ふのは可く、ならう事ならば、一人で全責任を負ひ、事に當るべきであり、其處に俠氣があり、俠客の俠客たる所がある。議論しては際限なく、腕力を以て決しようとするのも、現代の不完全なる社會で、時に已むを得ぬとするが、其場合にも、飽くまで弱者を虐め付けぬやうに心掛けねばならぬ。或る人の行動を憎み、之を詰らうとするとき、相手が一人ならば、自らも一人、相手が腕力をなければ、鬪ふべき何物かを選ばすべきである。其邊は歐洲の決鬪が相應に整つて居る、相手一人に對し、大の男が幾人も出掛け、剩へ力の無い弱々しい者を、捻ぢ伏せるなど、暴とも亂暴とも何とも云ひ樣が無い。若し警察官が之を捨てゝ置いたならば、別に横暴防止團を造り、力を以て力に當るの外無く、實に惡い意味の無政府に異ならなくなる。舊幕時代には强きを挫き弱を扶けると云ひながら、之を實行するについて、一定の習慣が成立つに至らず、動もすれば亂暴して反對の結果を見た。凡そ世間で卑怯な事、多數を恃んで少數を威嚇し淩辱する程、甚だしいのは莫い。今日、俠客の出るのも可い。强を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

扶き弱を扶けるのは至極結構である。少しでも强を扶け、弱を挫くの恐あつては、遺憾千萬とせねばならぬ。

國粹會はいろいろの人があり、意見の一致せぬ所もあらう。從來の狀態では思はしくなく、何とか改めたいと考へるのもあらう。如何なる團體でも良い分子のみでなく、數が多ければ多い程、他の迷惑になるのがある。併し、多勢に無勢、力を以て弱者を威壓するやうな事なく、弱者をして、成程と思はしめるやうにありたい。今日、誰が强者か、誰が弱者か。假りに弱者と見えるのは弱者でなく、何とかして制裁を加へねばならぬとし、一人に對し一人で出掛け、始末を付けるを適當とする。病身な者に對してそれ相應に用捨するを要す。是非とも改悛させねばならぬ者あらば、其事を告げ、自らはたゞで歸へられず、貴方が改悛するか、又は我を放逐するか、其中一を選べよ、放逐するの方法に於て貴方の望む所を云へよ、と云ふ調子に出掛くべきでないか。愚圖愚圖云ふ者は打ち叩いて終ふぞと云ふのは、封建時代の良い遺習でない。之を許す位ならば、決鬪を許した方が可い、決鬪が何れ程男らしいか知れぬ。曾て壯士が流行し、幾人もして一人を叩いた事あるが、之に比ぶれば、中岡の首相に於ける、朝日の銀行王に於ける、更に男らしいとすべきである。國粹會には思慮に長じた人もあり、知識に富んだ人もあり、考へて見たならば、良い工夫がいろいろあらう。

近頃他の國々で、一時の劇動に對し反動熱の高まり、伊國の國粹會の如き、政權を握り、意のまゝに支配して居る。ファスシスチを國粹團と譯するのは、日本の國粹會にも依つて居るが初めからいくらか國粹を意識した所がある。俠客から起つたのでなく、世界戰役の際、國防に從事した者の集りである。我國を我手で維持し來つたのであり、濫りに瓦解させてはならぬと言張つて居る。社會主義者、共產主義者に於て、今一層公共の安寧幸福を念としたならば、それ程の反動が起らなんだのであり、何分にもドサクサ紛れの勢に乘り、戰後の恢復を怠つた者に飽かれ、それでは到底先きの希望なく、何とかせねばならず、矢張國力を充實し、力を外に伸すに越した事無いとするに至つた。國に由つて反動の勢の强いのがあり、弱いのがあるが、いくらか前の弊を矯めるの効能がある。併し反動のまゝで長續きすべくもなく、勢に乘じ無理な事をせば、遠からず大反動が起り、血で血を洗ふやうになる。何でも無理をしては、一時愉快を感じても、決して長續きせず、昨日は人の上、今日は我が身の上と云ふ事になる。人を呪はゞ穴二つとは、事實である。呪ふならば自ら同運命となるの覺悟なくてならぬ。覺悟するは可いが、それで同胞民衆及び人類に何の貢獻する所あるかを考

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふべきである。一時を痛快にし他を顧みぬのは、我儘勝手である。身を捨てたとて、利己的精神に出て居る。自ら痛快を感ずるに止まらず、世間の或る部分に悪い印象を殘すに終る。單純なる時代は、それも避け難いとするが、今の國家社會では、更に幾段の思慮分別を肝要とする。

法治國に暴力を許すとは何事か

安部磯雄

今日のやうにあらゆる文明國が法律を以て人民を支配するやうになつてからは、腕力といふものは一切要らない筈である。野蠻時代に於ては法律の制裁が十分に徹底しなかつたから、或場合には止むを得ず腕力の制裁が行はれたけれども、今日のやうに法治國と云つて、制裁が法律で行はれるやうになつてからは腕力を用ゐる理由は少しもなくなつたのである。是れに依つて見れば各文明國の文化の程度といふものは、其國がどの位まで腕力といふものを抑へ付けて、法律の力に頼つて居るか、其程度如何で文化の進歩の標準とする事が出來ると思ふ。何故に文明國に於て腕力を抑へるやうになつて來たかと云へば、それは腕力に依つて總ての事を決定することは弊害があるので、それに代るべき法律の力に依つてもジヤスティスを行ふ事が出來るといふ理由によるのである。我國の諺にも無理が通れば道理引込むといふことがある。腕力は道理の反對で無理である。腕力が盛なれば道理や正義が行はれぬから、今日では之れを排斥しなければならぬといふ思想が勢力を占めて來てゐるのである。例へば運動競技は、それを行ふ人々にとつては腕力といふことが出來る。併しその競爭といふものは腕力ではあるが、同時に鍛練されたる技術の爭でなければならぬ。若し勝敗が技術に依つて決せられないで、他の理由に依つて決せられゝば、それはフエアープレーといふことは出來ぬ。フエアープレーを行ふには技術を戰はす以外に絶對に他の何物の入る事を許さない。然るに日本に於ては運動競技が輸入せられてから歲尙淺いために競技を行ふに際して屢々爭ひが起る。競技に負けると復讐のために腕力を以て喧嘩を始める。之れは獨り田舍ばかりではなく、都會に於てもある事で、競技を戰はすに際して惡辣な野次で勝ちを得やうとする。斯くの如き行爲は野蠻時代の腕力を以て事を決するのと同じであつて、フエアープレーに於ては飽く迄も之れを排斥しなければならない。幸にして野蠻時代から見れば腕力は次第にそれを用ゐる機會や範圍が減少せられて、今日に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於ては如何なる國と雖も其國内に於ては戰爭といふものは見られなくなつたと云つてもよく、戰爭の如き腕力競爭は只國際間にのみ起る現象に過ぎない。國際間に戰爭の起る事は今日止むを得ない事で、出來るならばそれをも廢止させる事が我々の理想であるが、それは未だ實現の機會に到達する事は困難である。その理由は明かで、一國内に於ては法律が行はれて居るから腕力を振ふ餘地がないけれども、國際間に於ては法律が完全に行はれて居ない爲めに、法律は纔かに國際法の形式で幾分存して居るものゝ、其背後にそれを勵行する警察權、軍隊の力がないから、今日國際間に於ける腕力は跡を絶たない。腕力は國際間に於ける總てを解決する唯一の方法となつて居る。此事に關してはどうしても今後の人類の理想の實現に俟たねばならぬ所であつて、それは國際間の爭は總て法律に依つて解決されると云ふ事でなければならない。これは將來の人類の大なる努力であると思ふ。然るに茲に今日尚ほ國内に於て時々腕力が行はれるといふ事實があるのは如何なる現象と見るべきであらうか。必要なくして國内に於て腕力が行はれ、而も人々も餘り之れを怪しとして居ない。此事實はどうしても我々の野蠻時代の性質が惰性となつて今日まで遺つて居ると云ふより外に説明の仕方はない。我々の内には物に觸れて怒るといふ性質が遺つて居る。此憤怒の性質あるがために或事に出逢ふとそれが出發する。文化の力に依つて人間の憤怒の性質は幾分緩められて來たが、どうしてもそれは火山と同じやうに機會があれば表面に向つて爆發しやうとする。そして此憤怒の性質が一度爆發すると、其時には最早や法律も、道理も、正義も考へられないで、只腕力に依つて事を解決しやうとするに至る。これが腕力の行はれる一の理由であつて、他の一の理由は、人間は冷靜なる時に於ても稍々もするとそれを必要と感ずる事があるのであつて、何か事が起つた場合に勝ちを占めるには腕力を用ひる方が捷徑だと考へる事である。道理に訴へるは迂遠だといふ考へから、譬へば仲間中に氣に食はぬ者があると、廻りくどい道德的制裁よりは手つとり早い鐵拳制裁を加へるといふ事になる。之れ等は皆野蠻時代から傳はる人間の性質であつて、今日文明の世界に於ても尚腕力が用ひられることが往々ある。殊に日本人は過去に於て永い間さういふ教育を受けて來た。封建時代に於て、鎌倉時代から云へば七八百年間もそれに關する訓練を受けて立派な道德的觀念となつた。その一つは武士道であり、他の一つは所謂男だて、俠客道とでも云へるであらう。此二つが日本人の精神の内で永く養はれて來たので、今日でも我々は此二つのものに對して尊敬とか憧れとかを持つて居るやうに思はれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。之れらのものは既に過去に屬するもので、今日依然としてこれを保存するとか、憧憬するとかいふ事は甚だしき時代錯誤である。之れ等のものは長い期間に於て馴練されて來たが、尙ほ其弊害を遺傳して來て居る事は爭はれない。

武士道は理想化 れたものとして見る時には立派なものであるが、それ自身の起つた由 を考へると、これは腕力と云ふ事が主となつて居る。武士といふ者は何事かある時は道理よりも腕力を賴りとする。武士道が盛んな時代に於ては劍道や柔道に卓越して居ないと武士としての體面が保たれない。弱い者が幾ら正義を唱へても役に立たなかつた。武士の强味は只腕力といふ點にあつた。反對黨に對する場合でも、此方の意地が通されない時には腕力で事を決するといふ判斷に依るより他はない。如何なる場合に於ても武力を用ゐても差支へないといふ事になる。これは確かに弊害のある事に違ひないが、事實如何なる方面に於ても腕力が濫用されて來た事は明かである。戰爭で金が要る時には、武士は腕力に訴へても平民から金を出させる。甚しきに至つては戀愛に於てもさういふ事實があつた。戀愛は本來自由なものでなければならないが、武士道の盛んな時代に於ては、普通の道で戀愛が遂げられない場合には腕力に依つても相手を無理に自分の者にするといふやうな事があつた。若し自分の妻が姦通でもした場合には直ちに姦夫姦婦は斬り捨てるのが普通であつた。さういふ風で結局は何か其處に自分の方に不都合な事があつた時には自殺をする、そして自殺をすれば責任解除ですべては解決するのである。武士道では自殺といふ事は好い行爲と認められて居たが、斯う云ふ思想は今日では極めて危險な思想である。自分で自分の命をとる、それで事が濟むといふ考へ方は、自分の命をもさういふ風に輕く考へるのであるから、他人の命はちつとも大切と思はないやうになるのは不思議はない。自分を殺す事をさして惡く考へないといふ事から、他人の暗殺が行はれた所以である。近頃の事件ではあるが、竹内仁氏の事などに就いても同じやうな事が考へられる。戀愛を暴力でつき通すといふ事は甚だ危險な事でなければならぬ。また自分が死にさへすれば人を殺しても構はぬ、人を殺して自殺しさへすれば責任は解除するといふ、此思想は武士道の弊害を或程度まで現はしたものである。我々は戀愛の如きものは全く自由なもので、暴力の之れに伴ふ事を絕對に許さぬと云ふ信念の上に立たなければならない。

俠客道は武士の時代に於て平民の反抗の精神の現れたものとして見る時に、興味がある。武士が全盛で武力で平民を壓迫した時に、平民の中から俠客が現れてそれに反抗した事は、俠客

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

傳を讀んだり、芝居を見たりする時に非常に痛快に感ぜられる。併し昔は暴に酬ゆるに暴を以てするといふ事が行はれたから悪くはなかつたらうが、今日の時代に於て俠客を尊敬したり、憧憬するのは小しおかしな事ではなからうか。俠客といふ者は大分理想化された傾きがあつて、よく其人を調べて見ると其性格に矛盾した點が少くない。一方に於て弱きを扶け、强きを挫くといふが、一方に於て彼等は博徒の親分である。博奕を打つと云ふ事は既に是認すべき行爲ではない。封建時代に於て之れ等の親分達が武士に反抗したといふ點に於てこそ興味もあるが、その性格を分析すれば好い所もあつたけれど、隨分悪い點もあつたと考へなければならぬ。國民の過去の生活に於て武士道と俠客道が鼓吹されたので今日文明の世界に於て不均合な腕力沙汰が尙跡を絶たない。今でも都會や田舍の新聞に講談が載せられて、そこには武士道や俠客道が傳へられて居る。之れを讀む者が興味を持つから新聞がそれを掲げるのであるが、それが及ぼす感化はどうかと云ふと腕力の宣傳に過ぎない。若し活動寫眞が小供に悪い感化を及ぼすならば、青年や大人に或意味で悪い感化を與へるものは新聞の講談物ではないか。之れは別に差し止める事の出來るものではなく、國民が自然に反省して之れを取りのけるより外はない。斯う云ふ點についても政府は注意しなければならない事があるのではあるまいか。

法治國に於ける政府は腕力を排して、法律で總てを解決して行かなければならぬ。あらゆる爭ひは法律で是非曲直を定めるといふのが文明國の政府の爲すべき事である。その目的を達する爲めには政府は止むなく腕力を用ゐる事がある。警察や軍隊はそれ自身は腕力であつて善くないが、併し國民をして全く法律に服從せしめ、腕力を禁ずる爲めには政府自身腕力を要する場合がある。併し玆に注意すべき點は、個人に於ても、國家に於ても、自分に强い腕力があると、之れを濫用するといふ事である。譬へば個人にしても柔道、劍道に達すると、餘程立派な人格者でないと腕力を濫用するやうになる。一國の場合に於ても强い陸海軍があると遂にそれを濫用して國際問題に無理が生ずる。

私は今日の日本の政府に對して甚だ遺憾に堪えない事が二つある。第一に警察權の濫用といふ事である。それは明かに腕力の濫用である。譬へば議會のある時に日比谷などで普通選擧の大運動が行はれる。斯かる時に警察が取締る事はいゝが一寸した事でもすぐ權力を濫用する。之れは警察の側では濫用せぬといひ、運動者の方では濫用したと主張して、どちらが眞か分らないけれども、只もう一つ此事に就いて丈けは爭はれぬやうに思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はれる。それは一旦警察に引つ張られた者があつた場合に於ける警察の態度に就いては疑がないやうである。まだ罪狀が極まらぬ中に、抵抗の出來ぬ者を毆ぐつたり、拷問にかけたりする事を屢々聞くが、法治國にして、法で治めるが腕力で治めないといふ原則の上に立つてる國に於てかゝる事があるはどうした事であるか。斯ういふ事は國家が餘程注意しないと國民に悪い手本を示す事になる。國家が腕力を濫用する時には、國民の間に腕力が行はれても止むを得ないとしなければならぬ。第二に政府が自分の持つ警察や軍隊を濫用するの外に、數年前の問題であるが、床次竹二郎氏が内務大臣であつた時に國粹會を組織した事がある。其成立に就いては床次氏が自ら發起してやつたのではなく、行き掛り上止む得ずさうなつたのだと傳へられて居る。國粹會は丁度昔の侠客の系統を受け繼いだ人が中心となつて成立つて居るが、その鋒鋩を現はすのは國粹會員が集會に於て腕力で演說を妨害したり、又は反對黨政治家を襲つて危害を加へる時である。之れは國民にとつては甚だ奇怪に感ぜられる所で、政府は何の目的を以て斯くの如き會を作つたか、若し或場合には必要があれば腕力を使用して一部の人を壓迫しても差支へないと考へるならば夫れは大なる問題である。政黨の内にも壯士といふ者があつて政友會に屬する壯士とか、憲政會に屬する壯士とか云はれて居るが、立憲政治國の我國としては之れは悲しむべき事でなければならない。斯う云ふ壯士を使つて政治上の問題を解決するのは正しい途ではなく、明かに腕力を跋扈せしめる事になる。政黨が今日斯くの如き事をやる事は苦々しいが、政府が國粹會と云ふ團體の存在を認めて、多少なりともそれに保護を加へる形があるのは甚だ悲しむべきである。政府の立場は公平であるべきで、假令自分の立場に贊成する者でも、反對する者でも、腕力を濫用する者は嚴格に取締らなければならぬ。基督の言葉に、劍を持てる者は劍に依つて亡ぶべしとあるやうに、政府が腕力を認める時には、遂には政府自らが腕力の爲めに窮境に陷入るやうになる事あるを覺悟せねばならぬ。繰り返して云ふが我國に於ては國民が昔からの習慣として未だ腕力の弊風を脫する事が出來ぬ。種々なる方面に於て其弊害は著るしい。政府は此點に於ても模範を示さなければならぬ筈であるのに、政府自らが腕力を是認し、之れを利用するが如き事あるは大に愼まなければならぬ所であつて、同時に國民も亦十分に政府を監視しなければならない。

私は最後にトルストイの事に就いて一言述べて置きたい。トルストイは絕對的無抵抗主義者であると同時に極端なる無政府主義者であつた。彼が無政府主義である理由は斯う云ふ點に在

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。それはつまり腕力を用ひる事は如何なる場合に於ても罪惡であるが、之れを最も多く用ゐる者は政府である。自分は腕力若くは腕力を用ゐる事は絕對に否認するから無政府主義を稱へるのだと云ふて居る。如何なる國家も公平なる心を以てトルストイの此言葉に傾聽すべきではなからうか。

暴力的團體と國家及社會

林　癸未夫

一

現在我國に於て、「暴力的團體」と呼ばれるやうなものが存在してゐるかどうか、又さういふ團體が存在するとしても、それを官憲が故意に默認或は庇護するやうな態度を取つてゐるかどうか、實際問題としては私は何等知る所がない。從て今具體的の事實を捉へて之を論評することは私の任ではないからして、唯抽象的な問題として、所謂暴力的團體と國家及社會との關係を少しく考察して見たいと思ふ。

先づ以て暴力的團體とは何ぞやといふ問題から先きにきめてかゝらなければならぬ。私の領解する所によれば、茲に問題として提供されてゐる暴力的團體とは、政治的或は社會的の或主義を奉持してゐること、而して其主義に敵對する所の他の勢力に對して暴力的制裁を加ふることを以て、主義の實現に必要な手段としてゐること、といふ二條件を具備するものでなければならぬと思ふ。從て私怨を晴らすためにするもの又は强盜其他物慾のためにするものは全く度外されなければならぬ。又勞働爭議中に於ける偶發の暴行沙汰或は寄宿舍に於ける賄征伐や惡德學生に對する鐵拳制裁の如きものも問題外であることは勿論である。

二

たとひ公的な動機からであるにせよ、今日の法治國家に在りては、國家それ自身以外に暴力を以て他人に制裁を加へることを認容されてゐる者は絕對に無い。それにも拘らず暴力を振ふことを目的の一つとする團體が存在するとするならば、それは次の場合でなければならぬと思ふ。

第一は政府に對する不信用の場合である。例へば某團體の奉ずる主義からすれば、現存の政府の政策態度はかくあられねばならぬ筈であるに拘らず、實際政府の行ふ所は其注文に一向はまらない。言論を以て政府を警醒し督勵しても容易に動きさうに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も見えない。さりとて卽座に現政府を瓦解せしめて、其注文にはまるやうな他の政府を成立させることも烏渡期待できない。さういふ事情の下に於て、平素蛇蝎の如く相敵視してゐる他の一團體があつて、それが到底寛恕することのできない或種の行動を現に取りつゝあることが分明である。それは主義に於て全く正反對の運動であつて、之を認容することは國家社會のために、多大の害毒を流すものだと考へる。本來ならば政府の權力によつて容捨なく之を壓服することを望むのであるが、政府は右の通りであるから、それは見込がない。それかと言つて反對主義者の眼前の跳梁を観過することはいかにしても忍び難い。そこで餘儀なく自らの腕力を用ゐて反對主義者に制裁を加へ、其勢を殺ぐことが必要であると感ずるに至るのである。卽ち此場合は團體から見て、政府其者は必ずしも味方でも敵でもないのであるが、唯其政策に對して不信用であるがために、政府に代つて反對勢力を膺懲しやうとするのである。從て其結果に對しては政府の好意も惡意も明白には期待し難い。善く行けば默認で濟むかも知れぬが、惡く行けば刑法上の處罰を覺悟しなければならぬのである。

第二は政府の味方としての場合である。現存の政府は保守的であるにせよ、急進的であるにせよ、暴行團からは同主義者若しくは同じ思想上の傾向にある人々によつて組織されてゐる。從て之を擁護するがためには、反對主義者の激烈なる反抗運動を壓迫するの必要があるのであるが、政府自身としては結社及言論の自由に對する憲法上の保障といふが如き法律的の理由からか、或は迂濶に手を下しては却て反抗運動に火の手を加へて形勢を不利に導くかも知れぬといふやうな政策上の理由からか、どちらにしても直接に反對運動者に其權力を用ゐることを避けなければならぬやうな事情のある場合に、政府の味方たる一團體が、政府の內密の使嗾によつてか、或は自發的にか、敵黨に對して腕力的制裁を加へるのである。此場合には暴行者の方に、刑事問題などが起つた所で、政府の庇護によつて有耶無耶の間に葬り去ることができるか、或は秘密恩賞附の犠牲者くらゐで、巧に局面を糊塗することができるといふ期待のあることが多いのである。

第三は政府の敵としての場合である。此場合は組織的な陰謀であることもあれば、突發的な自暴自棄的行動であることもある。又其目的からすれば、或一部の權力者を排除しやうとするためのこともあり、政府全部を轉覆しやうとするためのこともあり、或は進んで××又は××の根本的××を謀る計畫の一部として行はれることもある。何れにしても此場合は、敵は政府

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若しくは其擁護者であるから、あらゆる權力の壓迫監視の下に、之を行はなければならぬのみならず、逮捕されたら嚴刑に處せられることを覺悟してゐなければならぬのであるから、強固なる意志と、熱烈なる感情と、秘密なる計畫と、大膽なる實行と、機敏なる逃走とを必要とすることはいふまでもないのである。

第四は前の三つの場合とは全く異つて、單に主義宣傳の一手段として行はれる場合である。前の三つの場合は何れも暴行者が被暴行者を憎み、それを打ち懲らすために行ふのであるが、第四の場合は之と異つて、暴行者は被暴行者に對して直接に之を憎むとか、又は特に其者を打ち懲して思ひ知らせてくれやうといふやうな心術なしに、單に或暴行を行ふことの必要から、被暴行者は只偶然其對象として選擇されるに過ぎないのである。然らば暴行を行ふ必要とは何ぞやといふと、それは自己の奉ずる主義の宣傳に在るのである。

三

以上四つの暴行の場合は古今何れの國に於ても多數の實例を有することは勿論であるが、現代の社會現象としては特に第四の場合が最も注意すべきものであると私は思ふ。何となれば近世社會思想の急激なる動搖に伴れて、主義宣傳手段としての暴行が倍々多きを加へつゝあることは爭はれない事實であつて、それが社會に及ぼす効果も亦等閑に附することを許されないからである。

凡そ何人にせよ、現存の政治又は社會の根本組織を否認して、之に代るべき他の組織を新に打ち建てることが、人類全體の福利のために絕對に必要であるといふやうな、或思想を懷抱し、之を實現することを主義として、自分の全生涯を之に捧げる決心をしたとするならば、其實行手段として彼の第一に爲すべきことは、之を實行するに必要缺くべからざる力を掌握するといふことでなくてはならない、然るに現存の實際政治の情勢から見て、彼が今直に其力を掌握することは夢想だもされぬことであるばかりか、之に接近することすら殆ど絕望であるとするならば、彼は即座に主義の實現を企てることを姑く斷念して、其奉ずる主義を單に一箇の思想として之を世人に訴へ、世人が之を理解し、同情し、是認し、信奉するを待つて、漸次同志を糾合し、必要なる力を蓄積して、他日一擧に主義を實現し得べき機會の到來を待つといふ方法を取るより外はないことになるのである。

かくの如くにして或一團の主義者は、其主義宣傳の手段として、先づ筆と舌とを用ゐることに全力を竭すに相違ない。しか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も彼等の筆舌の力が鋭利であればある程、彼等に對する權力の壓迫は加つて行くであらう。併し權力の壓迫は常に必ずしも彼等に對して不利とばかりも言へないことがある。偶々權力の壓迫があつたことによつて、彼等の主義思想が一層く良く世間に傳唱されて、彼等としては思はぬ儲け物をする場合もないとは言へぬのである。時としては彼等から進んで權力の壓迫を歡迎したいやうな氣持になることさへもあり得るのである。

主義宣傳者に取つて眞に怖るべきものは、權力の壓迫でもなければ、異主義者の攻擊でもなければ、同志の裏切でもなくして、實に世人の無感覺(インディファレンス)といふことに在るのである。彼等の心事から言へば、かくの如く合理的な、感動的な、萬人等しく共鳴を禁じ得ない筈の主義主張に對して、何故に世人はかくの如く冷淡、無頓着、無關心、無熱情であり得るかを怪むのである。此現在の政治及社會の制度の下に於ては、或多數者は等しく不合理偏頗なる待遇を蒙つて、終生不幸不滿の境遇から脫却することのできない桎梏の裡に置かれてゐる。吾々は彼等を其桎梏から解放して、彼等が從來思ひも及ばなかつた程の幸福なる地位に彼等を救上げてやらうとしてゐるのである。而して其手段は只彼等が吾々の主義を是認し、其實現に一臂の力を添へてくれさへすればそれで好いのである。それで立ち所に理想する社會が吾々の間に成立つのである。これは彼等のために無上の福音でなければならぬ筈である。彼等がこれに贊同し、協力するためには一秒時間の躊躇もしなくて可い筈なのである。然るに、嗚呼然るに、いかなれば彼等はかくも此福音を聞くこと、知らぬ人の弔ひの鐘ほどに冷淡なのであらうか、何故もつと吾々の主張に傾聽しないのか、何故もつと吾々の運動に注意を拂はないのか、何故もつと吾々の思想を咀嚼しないのか。何うかして世人を警醒してやりたい。そして彼等に、眞に視るべき物を視るの眼、眞に聽くべき物を聽くの耳を與へてやりたい。何うかして、何うかして……。

かういふ焦燥の念に驅られないではゐられないのが、主義に忠實なる眞劍の社會改造運動者の心事であらうと思ふ。しかも彼等の此焦燥を醫すべき手段として、言論も、文章も、他のあらゆる合法的平和的手段もが、悉く無効に終つた時、彼等は最後の手段として「暴行」を選ばうとするに至るのではあるまいか。

四

右に述べるやうな心理から來る所の暴行は、暴行其者が目的ではなくして、暴行が惹起する所の世人の感情的激動(センセーション)が目的なのである。例へば或國の大統領が暗殺される。或國の大銀行が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爆破される。或國の大工場が燒燬されるといふやうな事件は、電報となり、號外となり、大活字となつて、大噴火のやうな、大地震のやうな、大海嘯のやうなセンセーションを世界一般に勃發せしめるに相違ない。而して物見高い世人は何者が、如何なる趣意によつて、かくも大それた所行に及んだかといふことを、根堀り葉堀り詮索して、自分の好奇心に滿足を與へやうとあせる。之である。此世人の好奇心である。此一般の好奇的氣分をさへ造り出すことができさへすれば、暴行の直接の目的は完全に達成されたと言へるのである。何となれば此センセーションの昂奮狀態に在る數日間に於ては、世人の注意は一齊に暴行者の主義、思想に向つて傾注されるからして、彼等は平素彼等に冷淡無關心なる世人をして、深刻なる注意を自分の方へ集中せしくめ得た刹那をねらつて、自動的にも他動的にも其宣傳を逞ましくすることができるからである。

宣傳手段として暴行の實例は澤山あつて、其中には世人の記憶に新たなるものも少くないから、玆に一々之を擧げて說明するには及ぶまいと思ふ。唯此種の暴行として最も好い實例の一つであり、又比較的血腥くないタイプに屬するものとして、英國の女子參政權運動者の取つた方法を一言するに止めやう。彼等は女性だけに他人の生命を擬ふやうな手段は成るべく避けたが、併し隨分いろ／＼な暴行を演じたものである。例へば白晝群を成して倫敦の繁華な商店のショウ・ウヰンドーの硝子戶を鐵槌を振つて打壞して步いた如きがそれである。又ダービー競馬會の日、×××の××を遮り、自ら×××××××××た如きがそれである。是等は暴行には相違ないが、被暴行者に對する敵意は少しもないのであつて、唯暴行から生ずるセンセーションだけを欲するがために行ふのである。しかも彼等は是等の暴行の數年の後には、見事に選擧權を獲得して、今や當時を笑ひ話として回顧しつゝあるのである。

私は此小文章を終るに先立つて次の一言を添へて置きたい。それは宣傳手段としての暴行者の目的を達成せしめることに、最も有力なお手傳をする者は、いつも政府であることと之である。政府が左程でもない出來事を「重大事件」扱ひして、騷げば騷ぐほど、宣傳者からすれば、其思ふ壺にはまるのである。これは悲しむべき人生の皮肉であるか、喜ぶべき自然の惡戲であるか、それは知らない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國際公刑と國內私刑

杉森孝次郎

日本は國家として國際聯盟に贊加した。國際聯盟の一大趣意は、國際私刑を禁絕するにある。聯盟員としての各國家は、宣戰の自由をみづから制限して、それを自國の私手から聯盟の公手へ移した。いふまでもなく進化的意義ある現時代の一事象だ。

國際聯盟に贊加した國家が、同時に國內私刑を默許する國家であるといふことは、健全態でない。國際にさへも私刑を禁絕する意思ある國家が、國內にさへも私刑を默認する意思ある國家であるといふことは、單純な道德論理では無論理解されない現象だ。國際私刑の禁絕に贊加したその國家の動機も不徹底であり、あるひはすくなくとも不純であり、もしくはさらにすくなくとも、不單純であり、國內私刑を默許する同じ國家の動機も、やはり、多少、別のしかたに於いてではあるけれども、要するに不徹底であり、あるひはすくなくとも不純であり、もしくはさらにすくなくとも不單純であることは明白だ。

國家の尊威は、國內的には、その國家の意思及び行爲が、すなはち立法及び行政が、純粹に國民的公的興味にもとづいてなされるところに成り立つ。公明正大性と秋霜烈日性とは、司法の缺くべからざる條件だ。私刑の默許と司法の存在とは兩立しない。私刑が公化されたかたちが司法だからだ。司法は私刑を不用にすべく創設され、維持される。

國家の現在の役人が、國內のある主張や運動をば國家に忠誠であると判斷し、他のある主張や運動をば國家に不忠誠であると判斷した場合に、その役人の感情が一方に同情的に、そして他方に敵意的にかたむく自然性あることは理解される。けれども、それだけの理由で、その役人が國內に私刑を默許するならば、それは、意味に於いては、ある程度に、國家の名に於いてその役人が私刑するのだ。その役人の職責違背だ。あるひはすくなくとも職責怠慢だ。いはんや、役人の判斷そのものが、なほ反省の餘地ある場合に於いてをや。

產業的十九世紀の歷史はそれの國家的側面に於いては、資本の延長としての意義を多大に有する國家の歷史であつた。最近、勞働の延長としての意義をいくらか有する國家の歷史がはじまつた。國家は、しかしながら、それの存在理由としての正しき機能をば、國內のいかなる部分の力にも屈從せずに、國內のすべての部分の力を、合理的に、合理的としての合法的に、すなはち理性にしたがつて、理性としての法律にしたがつて、支配する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ところに持つ。國民的公正が國家の對内原則であるべきだ。

國家が、精確には國家の役人が、國内の私刑的行動を利用的、に同情的に默許する可能は、どの國家にも多少ある。またその實例が、どの國家の最近の歴史を見ても多少ある。比較的にこの邊の弊習を脱却してゐる英國も決して純粹に例外ではない。しかし、これは、どの國家の場合にしても、その國家の不完全を證據立てる一事實だ。國家が、國内の私刑的行動に對して嚴勵でないならば、暴力による革命を馴致する危險も決して絶無でもなければ、少小でもない。法は、良心と理性の前には從順であることを必要とするが、力のために枉げられることは、すこしでも、一度でも、あつてはいかん。利用的に、同情的に、默認された私刑的行爲の能動者が、天下取りの勢ひにまでその暴力主義を増進させることもある。私刑的行爲の默認は、その受動者を刺戟して、同じくまた天下取りの勢ひにまでその受動者自身の暴力主義を發達させることもある。そのいづれの場合も國家としては、まことに面目次第もないはずの事柄だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

類のない味のよい 保健飲料

カルピス

合奏

美味と滋養の合奏で
愉快と精力へ導く

寒風が吹きます

白湯の中へ……一ぱい
紅茶の中へ……一ぱい
お吸物の中へ一てき
お料理の中へ一てき

正に是れ
天來の仙藥、精力の源泉



顧問 三宅驥一理學博士
販賣所 酒店・食料品店・藥店
發賣元 東京日本橋區・國分商店
製造元 ラクトー株式會社



再び亞米利加へ來て日本の友人に寄せる手紙

佐々木指月

紐育の九月二十六日は、私の部屋の火爐(ファイアプレース)に少しの火をたかせる程のうすら寒さを感ずる。

私のもと居た華盛頓角園(ワシントン・スクエヤ)の美術家町には、私のもとの友人は、もう一人も住んでゐない。皆四方へ散ばつて、そこには一人、氷菓子屋(アイスクリームや)の若者が私の顏を見覺えてゐたばかりだつた。

日本にゐての二年は、私には、長い長い月日のやうに思へたが、私の乘つたマニラ丸がシヤトルへ着いて、私の足の爪先(つまさき)が、そこの波止場(はとば)の板を踏むと、つひ、此間(このあひだ)、立つて行つて、すぐまた歸つて來たやうな感じがした。かうして暮せば一生も夢のやうなものだと、その晩逢つた友達に語つた程だつたが、紐育へ來て、尋(たづ)ねる友人が、もとの處にゐないのを見て、なる程二年の月日が過ぎてゐたのだと、今更のやうに思ひ返した。

私は前(まへ)の知り人をたよつて、東側(ひがしがは)の、五十七丁目のはづれに近い或る家に住むことにした。モルガンとか、バンデビルトとか云ふやうな富豪の家も、この近所に建てられて、紐育としては先づ上等の町(まち)であるが、私の住むにきめた家は、何も富豪と云ふのではない。マダム・ダーリングといふ老齢な女詩人が、前から私を、その家のもの丶やうに親しくしてくれたその緣で、またこのダーリング老夫人の家にゐることにした。

私が紐育へ着いたのは、去る九月十七日の、もう、とつぷりと日が暮れてからだつたが、大中央停車場(グランドセントラル・ステーション)には、エリザベスと云ふ情話作者と、その叔母さんに當る人とが迎ひに來てゐてくれた。

生み捨てた異鄕の都へ歸つて來て、そこに私を迎へてくれる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人があつたり、また私に住む部屋を與へてくれる人があつたりすることは、私をして、本當に人間の人情の偉大さを感じさせる。

私は今朝から自分の部屋を留守にして、三階目の畫室（ステューヂオ）の、大きな佛蘭西窓（フレンチまど）から往來を眺めてゐた。

秋の空は澄みきつて、鳩の群が空中で、ダンスでもするやうに翼（つばさ）をかへして、一つところを往つたり來たり飛んでゐた。向ふ側の赤い煉瓦のアパートメントには日が射して、そこの三階目の窓の日蔽（オーニング）の下からは、ピンクの寢間着を着た女が、その袖から眞ツ白な腕を出して、ぼんやりこちら側を見てゐた。街の幅は、東京の本郷の通り程もあらうか？　然し、兩側の建物が高いから、それが何となくせまく見える。

私はその女の腕を見ながら考へた。何を考へたかと云ふと、紐育の高價な生活と云ふことをつくぐ〵考へた。

あの位なアパアトメントに住んでゐて、あの位な寢間着を着てゐて、あの位な白い綺麗な手をしてゐることが出來るとすれば、下女は勿論つかつてゐるやうし、部屋のなかには贅澤きはまる寢臺や鏡臺が飾り立てゝあるだらうし、自働車もどこかのギアラーヂにあづけてあるだらうし、して見ると、彼の女の御亭（ごて）の收入は少なくとも、月に千弗は下るまい。けれどもあれで、この都會の標準では先づ中の下と云ふ生活だ。私が東京でしてゐた生活のそれに比ぶべきものであると思ふと、大部そこに違ひがある。

あゝして、亭主の留守に、寢間着姿で、ぐつたりと、日のあたる窓に顏を出してゐる女は、東京にしたところで、秋のこの頃の一日に、何萬人あるかわからない。また私も、それを何度も見たことがあるに違ひない。然しその時に私は、さうして過す女の一秒時間が、金につもつて幾何（いくら）と云ふ値（ね）ぶみをして見たことはなかつた。

ところが、先月の今日今夜日本を立つて、やつと今日此頃この土地に落ち着いて見ると、あゝして女の白い手に射してゐる日光の價がいくらと云ふ事を算（かぞ）へて見る氣になつた。いや、高架電車のある、地下電車のある、さうして往來のどこからどこまで石とセメントで固められた都會に住むと云ふことは決して安いことではない。たとへ下駄の尻に泥がはねあがつて、往來で思はぬダンスを踏まうとも東京の方がむしろ氣樂だと、呪つた都會をなづかしむ心になつた。

東京の道を歩いて、玉川砂利を踏むたびに靴がへるので、これはとんだ通行税を拂はせられると驚いたが、この紐育へ來るとそれどころではない。スカイスクレーパーを建てる煉瓦か一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つかさなる度に、その貧乏の割前が、その建築には縁もない赤の他人の私の頭にも、ちやんと割りあてられてくるのだから、うつかりはしてゐられない。誰も私をせきたてるものもないが、何となくそはそはして、氣が落ちつかない。向ふ側の窓の女の手はだらりとしてゐたが、私の頭の骨はかたくなつてしまつてゐた。

同じ往來をさしはさんで、同じく窓から往來を見てゐたのだが、向ふはゆつくりとしてゐた。こちらはせかせかとしてゐた。そのゆつくりとした氣持が、この紐育では頗る高いものにつくのだ。

街を見卸すと、誰れも彼れも忙しさうだつた。自働車はしつきりなしに通つた。高架電車は絶え間もなくその響きを送つて來た。私の目の前をこの都會の時間は飛ぶやうに過ぎた。然し向ふの窓の女には秋の日も長さうだつた。

彼の女は御亭の事を思つてゐたかも知れない？　うちの亭主は働きものだ。よくまあ、かうして一ケ月に千弗もお金を儲けて、女房を遊ばして置く。だがまだ働き方が足りないやうだ。せめて一ケ月に二千弗の收入がなければ、なぞと思つてゐたかも知れない？

御亭主が、どこかの事務所で、雇主の暴力を恐れながら働いてゐる間に彼の女房は來月の新流行の衣裳を、いの一番に買はうなぞと、きつとそんなことを心に思ひ浮べたらう？　お點前から、ぶらりと窓に手をさげて、あれで一家の女房だと云ふのなら、この國の女房は樂な役目だ。いやいや、日本の女に對つて苦情は云ふまい。亭主になるなら日本の亭主だ。あゝしてぐたりとしてゐる女房一人を養ふために、一生事務所の奴隷となつて暮さなければならないかと思ふと、この國の男の生活は莫迦々々しい。

月に千弗と云へば日本の二千圓だ。日本では氣のきいた收入と云へやうが、この紐育では、やつと紳士の仲間入りで、然もまだそのくらゐの收入では無産階級たるをまぬかれない。したがつてどこかの雇人たるをまぬかれない。なんのかのと云つたところで日本の雇主と雇人との間にはまだ幾分かの人情と云ふものが殘つてゐるが、この紐育と來た日には、人情どころか、その關係はまるで仇敵だ。たゞそこには憎惡と云ふものがあるだけだ。資本と勞力との間柄は、もうこの都會では聞くもうるさいものになつてゐる。

日本へ歸つてゐた二年の間に、とんと忘れてゐた雇はれ人の苦しさが私の胸に歸つて來た。奴隷と云ふものゝ境遇をしみじみ味はさせられるこの都會の雇はれ人の生活。それは全く精神

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的の監獄部屋だ。

勞働は神聖だといふその言葉も、もうこの都會では意味がない。神聖といふ言葉の内容は、人間の欲望のために蹂躪されてしまつてゐる。そこにはたゞ黄金の冷たさが感じられるばかりだ。さうしてそれが、この都會へ來てまだ十日もたゝない私に、今度といふ今度こそは、人には雇はれまいと云ふ決心を固めさした。

もう何も、小さくなることもないし、恐れることもない。何を憚かつて太陽の照る晝間を、暗い仕事部屋なぞにかゞまつてゐる必要もない。のるかそるか、とゞのつまりは腹がへると思へば何の事もない。と、私は、足をのばして頸の骨をゆつたりと體の上にたてゝ見た。

向ふ側の女は、いつまでもいつまでも、その出した手を窓から引つこめなかつた。私は彼の女と根くらべをするつもりで、いつまでもこちらの窓でふんぞり反つた。

かうして息のあるうちは、これでも自由の體だ。かうして過ごせば私の生活と、向ふの窓の女の生活とは同じ値段だ。いやこちらのは月に一千弗の收入のある御亭の御蔭を蒙つてゐるのでない。全く收入なぞと云ふことは、てんで頭に置いてゐない。全部自然のなり行きに任してあるのだから、それに値段をつけることは出來ない。若し値段をつければそれは絶對價値だ。天地の價値と同じだ。この土地では、かう云ふ心もちの生活をするのでなければ嘘だと私は考へた。勞働と資本の問題も皆がかう云ふ心もちを持てば解決できるのだらう？　何からかにまで黄金で切りつめたこの紐育へ來て、かう云ふ信念を私が持つたと云ふことは、あくせくしてゐるこの都會の人間に對して、一種の皮肉かも知れない。然し貯へもなくて、人に雇はれまいとするのだから、かう云ふ心を持たなければならない。

さうしてかう云ふ心を持つと、時間は金だと云ふ言葉に、新らしい意味を見出す。なぜならば、金はなくとも時間さへあれば、他の人々が金の力によらなければ得ることの出來ない、のんびりとした氣持を味ふことが出來るからである。なる程、生活は心の持ち方一つだと云ふことが肯かれる。かうして一生暮して行けない事もあるまいし、また黄金が暴威を振ふこの都會では、かうして暮すのが賢明な方法だ。

何も資本家の驕を増長さして、彼等に自分を縛させるには當らない。とは、この土地の勞働者たちの古い云ひ草だ。私もどうやらそれに同意する。然し私は云ひ方が違ふ。私に云はせれば、嫌ひなことはいくら金になつてもしない。好きな事ならたゞでもする。そこに興味をつなぎ得ることならばどんなことでもやつて見やう。さう思つて事をすれば、この都會の無産者の

やうに有產者の鼻息を伺ふには及ばない。私は急に勇者になつた。さうして、社會に獨歩すべき一人前の人間の心を持つたと信じ得た。

こちらは北向きだから、日は生憎さしてゐなかつた。然し靑い空も、呼吸してゐる空氣も、今日は皆私のものだと云ふ感じがした。向ふの女はまだ窓にゐた。それが丁度、彼女の御亭の富を往來の勞働者たちに示してゐるかのやうに見えた。

私は笑つた。私は私の度胸を、やつぱり往來を走る人々に示さうとしてゐたのだ。なげ出したり、力んだりして。富んだる人の決して考へ出さない生活の方法を考へながら、大いに紐育の偉大なる物質の壓迫を感じたその感じに反抗した。

マダム・ダーリングが、晝のランチをたべろと云つて來た。私は向ふの女を見切つて、寢室から出て一階下の食堂へと階段を卸りた。

さうして今は日暮れ方だが、自分の部屋へ歸つて來て、この手紙を書いてゐる。先づこれが再び紐育のものとなつた私の最初の感じである。

九月二十六日

T君に　　　　Sより

今度、亞米利加へ來やうと云ふ君の爲に、大陸橫斷の汽車のなかの事を少し書かう。多分は君が來るときの參考にもならうと思ふから。

だがその前に一寸した話を書かう。私の乘つたマニラ丸のキヤンピンメートは全部で十一名だつた。亞米利加人の夫婦が二た組と、關西の學生が二人と、始めて洋服を着、始めて西洋料理をたべると云ふ老人が一人と、その人の孫と、それから、京津電鐵の重役が一人と、その人の同伴者たる法學士が一人と、それから私とそれだけで、日本美人はキアビンメートのうちにはなかつた。三等船客のうちには渡米する花嫁たちが五六人乘り込んでゐて、そのうちの一人は、キアビンの方迄遊びに來て、大部問題を起し、京津電鐵の重役はそれがために憤慨したりなにかしたが、皆さん紳士だから別に問題も起らなかつたらしい？

何しろ十四日の乘り込みが、暴風のために十五日にのびて、まだ海が靜かでないと云ふので、出帆はまたのびた。私を送りに來た、丹いね子さんや、藤澤衛彦君や、成業堂の杉田君などは、私が船にゐないので、雨のなかを途方にくれて、やつと、私が[illegible]問屋の福井屋に泊つてゐたのを尋ねあてゝ來た程だつた。

さうして船は八月の十六日の午后六時に、ぽつぽつ横濱の岸壁をはなれた。見送り人は一人もゐなかつたし、日は暮れかゝつてゐたし、不景氣な出帆だつた。私はデツキの上の椅子によつて、遠ざかる横濱港の灯を見渡したが、東京はあの邊だらうと、空の雲間に星の照るのを眺めた時、少からず心細かつた。

だが海は平穩に、船は房總半島をめぐつて東へ東へと進んだ。出帆の翌朝からはもう陸は見えなかつたが、夜毎に弦月がかゝつて、そのわきには横濱港で見た星が、月を離れず照つてゐた。キアビンの人たちは日增しに親しみを加へて行つた。

船が百八十度を過ぐる頃からは、船客たちの間に大分面白い事も持ち上つた。然しそれはまたいつか語る機會もあらうからここには略すが、船がいよいよビクトリヤに近くなると、キアビンの客の一人たる京津電鐵の重役が、シヤトルへ上陸してどこへ泊つたらよからうかと云ふ質問を私に持ちかけた。

どこへでもお泊りなさい。安いところならば日本人の經營してゐるホテルもあります。私は、泊りつけのフジヰホテルと云ふのに泊るのですが、あなたは見受けるところ日本の第一流紳士だから、私たちの泊るホテルでは御迷惑を感じるでせうとかう答へた。

すると重役は、いや氣樂なところがいい。肩の凝る西洋禮式をぬきにして、浴衣がけで一ぱい呑める處がいいとかう云ふ。

ですが、シヤトルの氣候は、もう浴衣には適しません。あなたのお召しになつてゐるサンマースーツでは上陸は出來ますまい。それに亞米利加は禁酒國ですから一ぱい呑めると云ふやうなわけには行かないかも知れません。のみならず、ホテルでは泊つた客の荷物にそのホテルのレツテルを粘ります。濃い糊でぴつたりと粘りますから、一度安いホテルへ泊ると、どこへ行つても、この客は安旅籠を泊つて來た客だと云ふことがその荷物で知れます。するとあなた方が、市俄古や、華盛頓へお出でになつた時に、上等のホテルへ泊つたとすると、どんな侮辱を受けるかも知れませんと私は冗談まぢりに云つた

そりや、かなはんなアと、重役は嘆息する。重役の同伴者たる法學士は苦笑してゐる。

ですから、私は惡いことは敎へません。シヤトルへ着いたらフライホテルとか、ニユーワシントンホテルとか云ふ第一流のホテルへお泊りなさい。さうすると、あなた方の荷物に、そこの印のレツテルが粘られます。その荷物を持つて旅行をなされば、汽車のなかでも、ホテルでも、優待される事請合ひです。これが亞米利加内地を旅行する秘訣ですと、かう私は話した。

さうか、それでは、その第一流のホテルへ泊ることにしやう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、重役さん、傍らの一語をきいて慄え上つた。

私は笑つた。然し、私ならば、日本人經營の安いホテルに泊つて、レッテルだけ、第一流のホテルから貰つて粘ります。ホテルでは廣告のために喜んで分けてくれますよと云つてやつた。

重役さん、あつけに取られてゐた。皮肉なやつがあるものだと思つたらしかつた。

そのうちに船はシヤトルのピーア六號についた。棧橋の上には、見知り越しの移民官などが立つてゐて、歸つて來たたと云はないばかりに、片方の目をつぶて見せたりなにかした。

移民官の訊問は船の食堂で開かれた。訊問が私の番にまはつて來た。然し別段しらべもなく直ぐにパスを渡してくれた。私は十四日間乘つてゐた船に名殘を告げて上陸した。

稅關の荷物しらべは、入國者の取扱ひでなしに、歸國者の取扱ひにしてくれた。フジヰホテルの主人が來てゐて、やア歸つて來たね、どうだつたい日本はと云ふ。

無茶苦茶だつたよと、私は答へるより外はなかつた。

眞ぐに自働車に乘つてホテルに走つた。さうして、シヤトルには五日間ゐた。八日の晩に上陸して、十三日の朝、オレゴンワシントン停車場から、シカゴ、ミルヲーキー、セントポール行きのオリンピアンと云ふ汽車に乘つて、朝の九時三十分に立つた。

シヤトルにゐての五日間は私に色々なことを考へさせたがそれはまた暫くとして、これから直ぐ汽車旅行の話にうつらう。

シヤトルからシカゴへ通ずる鐵道に三つある。大北鐵道と云ふのと、北太平洋鐵道と云ふのと、私の乘つたシカゴミルヲーキー線鐵道とこれだけあるが、そのうちでシカゴミルヲーキー線は、シヤトルから、ロッキー山の東麓のハーロートンと云ふ處まで、八百五十四哩を電力のエンジンで走る。殆んど全線の三分の一以上を煙を立てずに走るのである。キアスケード山脈もロッキー山も皆この電力で乘り越える。車は線路を滑かに走つて車内に灰のふるやうな事もない。さうして沿線の景色も他線にくらべて惡くはない。なんだかシカゴミルヲーキー鐵道の提灯を持つたやうなことになつてしまつたが然しコンミッションを貰つてゐるわけでは決してない。

尤もこの汽車は市俄古までゞ、紐育へ行くのには、シカゴでニューヨークセントラル線へ乘り換へなければならない。市俄古からニューヨークセントラル線へ乘り換へるのが一番便利だと云ふことになつてゐる。私はシカゴから、ニューヨークセントラル鐵道の、二十世紀急行列車と云ふのに乘り換える事にして來た。シカゴでの時間の都

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

合がいいからである。

汽車賃を君の參考のために書いて置かう。シヤトルから紐育迄の連絡切符を買つて、それが、百〇八弗と十三仙。プールマン寢臺車の下寢臺を取つてそれがシヤトルから市俄古まで廿三弗六十三仙。それから市俄古から紐育までの寢臺車が、私は上寢臺を取つたが、それが七弗と廿仙。別に急行券が九弗と六十仙。〆て、百四十八弗と五十六仙。日本の圓に換算すると先づこの倍額の少し上を越えると思へばいい。それに太平洋を横斷する船賃の三百弗を加へると、横濱から、紐育迄の旅費の全部が出る。だが大坂商船の船賃は日本金の四百五十圓だから、それに乘ればいくらか安くなるわけだ。安くとも、亞米利加へ着く事はたしかに着く。尤も大阪商船の船は燕尾服を着て食堂へ出るやうな機會はないから、洒落者は乘らない方がよい。

けれども、これだけで旅行が出來ると思つてはいけない。船のなかでも汽車のなかでもテイプスと云ふものがいる。私はこの旅行中に三十七弗いくらと云ふテイプスを拂つた。何んの事はない、ポケツトに孔が明いてゐて、到るところで小錢を落して歩いたやうなものだ。さうしてそれを惜むと、つまらない處で恥をかかせられる。敬意を受ける代金も安くはない。關所々々でこの敬意の代價を拂はせられるのだから旅行者は弱いところだ。どう云ふ處で、私はこのテイプスを拂つたか？　それは明日書くことにしやう。今丁度、夜の一時半だ。流石の紐育も寢靜まつたと云へる。然し往來では、荷物運搬の自働車が、文明の雜音を立ててゐる。明日は、十月の一日だから、大抵の獨身ものは引き越しをする日で、私の友人なぞも今日は大抵引き越しをやつた。

なぜ、引き越さなければならないか」聞くと一年のリースがきれると、どこかへ變つて見たくなるのだと云つた。夏中休暇から歸つて來て、新しく住むところを求める連中は、丁度この頃から、借家のリースをする。だから今が紐育の引き越し季節だ。多分その引き越しの荷物でも運搬してゐるのだらう。今夜は莫迦に自働車の音がする。

それに今日は澤山、お弔ひがあつた。土曜日で半日休みだから、その休日を利用してお弔ひを出す。死人も紐育では、いつでも天國へ行けると云ふわけには行かない。明日は日曜だが、紐育の亡者を引きうける天の使たちはさぞ急がしいことだらう。尤も、この都會では天國は日曜のものときまつてゐる

お弔ひも日本のは哀れだが、この國のは陽氣だ。樂隊入りで葬禮行進曲と云ふのを奏して通るのだが、あれでは亡者が浮かれて活きかへりはしないかと心配される。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だが、行列の人は皆殊勝氣な顏をしてゐた。腹のなかでは何を考へてゐたかも知れないが、遲く練り歩くだけに、あたりとの調和を缺いて、それが如何にも滑稽に見えた。

蠟燭がもう盡きさうだ。こゝの家では、電氣や瓦斯の灯は人間の眼には適しないと云つて、家中、皆蠟燭だ。物質文明に倦き倦きしたと云ふ有樣だ。日本の人たちが、夜がな夜中電燈を燈してゐるのとは大分趣きが違ふ。

さあ寢よう。明日また汽車のなかの事を書く。お休みと云つても誰も返事はしない。廣いルームに私はたつた一人きりだ。時計の鳩が、妙な聲をして半を告げた。

さて、約束の汽車のなかの話しを、横道へそれずにしやう。

私は九月の十三日の朝、シヤトルに住んでゐる昔からの友人たちに送られて、昨夜書いた通りに、オリンピアンに乘つて紐育に向つた。

私の取つたプールマンカーには、あまり客が乘らなかつた。勞働者風の男が、向ふ側の窓に近いシートに腰をおろしてゐる。丁度、私の窓はプラツトホームに面してゐたものだから、その男は私の前のシートに來て、窓から彼の女房らしい肥つた色白な女と別れを惜んでゐた。窓は二重の硝子窓で、手の力では明けられない。それ故、彼等は、無言で、たゞ身振だけで、別れの心をかはしてゐた。男は泣きさうな顏をしてゐた。女は笑ひ顏を見せてゐた。

私が友達たちに手を振つてゐる間に、汽車は音なく滑り出して、私の越えて來た、太平洋の水をうしろに、私をまたも東の方に旅立たした。私はエリオツト灣の波を望んで、遠く日本の事を思つた。

この汽車に乘つて紐育へ行くのはこれで二度目である。この道は往復で三度通つてゐるから沿線の水も山も樹も停車場も、私の目にはなじみがある。私は車内の人々の顏に目を向けた。

私のシートから三つ目には、オールドミスらしい、神經ばかりでこしらへた顏をしてゐる女が乘つてゐた。さうして、それと同列の向ふ側のシートには、若い男女が睦しさうに二人並んで身をよせ合つて腰掛けてゐた。新婚旅行者とは誰れの目にも見える。

汽車が進むに從つて彼等は追ひ〳〵身をすり寄せる。一つの肉體に二人がならうともがいてゐるやうだ。オールドミスはと眺めると、肘を窓に頰杖をついて目を閉じてゐる。時々目を明いて二人を見ては、一寸眉をひそめ、私を見ては、いやな顏をする。彼女の視線のつき當りに黄色の一外國人がゐることは如

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何にも不愉快であらうと私は彼女に同情した。然し、急に白色になるわけにも行かずまことに氣の毒の至りであつた。

のみならず、彼女の耳の鼓膜には、蜜月旅行者の甘い甘い話し聲がきこえるのだから、彼の女が目をとざして心を平靜に保たうと强めてゐるのも尤もだ。二人は、何の遠慮もない、天下晴れての蜜月旅行振りを發揮してゐる。私は興味を持つて、その二人の手や足の行きどころと、オールドミスの顏面の神經の微動する關係とを見まもつた。汽車は私たちの上半身を左右に振りながら走つてゐた。

二時間程たつた。汽車はキアスケート山脈にかゝつた。奈落に沈む松林、石は傾く雲間よりと、始めて私がこゝを通つた時の詩に詠み込んだ如く、全く絶景である。スノーコールミーのトンネルは、一萬一千八百九十呎の長い闇を車のなかに齎した。尤も淡く電燈はついた。然し山の半腹を穿つたなかを通るのだから、體も心もほてつて來て、人間と云ふ氣持からしばらくは遠ざかる。

汽車がトンネルを出ると、例のオールドミスは、險しい顏をして突ツ立つて、車内のポーターを呼んでゐた。黑人のポーターは怖る／＼やつて來た。

この車はどうも居心がよろしくないから、他の車に換えさしておくれと、憤然として云ひ出した。

ポーターは、恭しくその意を奉じて、彼女の荷物を持つて、彼女のあとに從つて次の客車に引き越した。然し、その時ポーターの眞面目くさつた顏のどこやらに、一寸した嘲笑を私は見つけ出した。さうしてそれと同時に私は氣がついた。

さうだ、汽車がトンネルへ這入つてから電燈のつく迄に少しばかりの時間があつた。なる程と私は例の蜜月旅行者の顏を見ると、二人は、何喰はぬ樣子をしてゐる。私は顏をそむけて笑ひを殺した。隣のシートの勞働者風の男の視線と、私のそれとが合つた拍子に彼は片方の目を、ほんのちよツぴり瞬いて見せた。私は、ほんの少し唇の角をつり上げてそれに答へた。

やがて私と、その男の間には、それには着かぬ外の話がかはされた。

彼は彼の新案の煙草の灰皿を紐育に持つて行つて、その市價を問はんが爲に、この旅行をするのだと云ふ。なる程彼れの皮鞄のわきには、日本のおき上りこぼふしのやうに、さはつても蹴つても倒れない竪灰皿が、大切さうに黑い布に包んであつた。

こんな事を書いてゐると限りがない。だが日本内地の汽車旅行にくらべて、如何にアメリカのそれの方がゆつたりとした氣持をもつてゐることが出來るかと云ふことは君にもわからう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

食堂車のウエーターが晝のランチを告げに來た。私は立つて私のゐる車よりは、一つ前に連結されてゐた食堂車にはいつた。

食堂車のなかの模様を一寸書く。白い卓布をかけたテーブルが、兩側に並んで、片側は四人づゝ、片側は二人づゝ差し向ひで、スチユアードが一人、黒人のウエイタアが四人。窓には景色が走つてゐて、卓には銀色の食事道具が並んでゐる。

私が食堂車にはいると、スチユアードが案内して、入口に近い隅の卓に向はせた。前には、髯を短かく刈り込んだ、學者か醫者かとにかく智識階級の老紳士が食事をしてゐた。

私が席に着くと老紳士は、一寸目で挨拶をした。私もそれに答へた。スチユアードが、さて何を召し上りますかと問ふ。手には注文を取る用紙を持つてゐて、獻立の表は卓の上に立てゝある。ところがそれが達筆でよほど氣をつけて讀まないと何が何だか分らない。さうだなア、君はあまり英語は得手の方ではなかつたから、君ならばこゝでこまるだらう。ランション―中食―には順はない。何でも一品注文すれば、あとはそれについてゐる。そこで私は、何を注文したか今覺えてゐないが、何でもローストしたものを注文したと思つた。スチアードは去つた。しばらくして黒人のウエータアが私のランチを運んで來た。こゝで私の汽車内の始めての食事ははじまつた。キアスケード山頂に鏡のやうな水を湛えてゐるキツチエラースと云ふ湖水の面を、右側の卓を隔てた、窓の向ふにながめながら私はナイフとフオクを持つた。

スチユアードには、テイプをくれる人もくれない人もある。何しろ食堂車のスチユアードは、人品も選んであるし、態度も落ち着いてゐるし、ユニホームや、エプロンなどもつけてゐない。他の黒人のウエータアなぞとは一緒にならない。だからテイプをやるとすれば、餘程上手にやらなければならない。と云つてやらないと、注文書きも書いてくれないし、案内もしてくれない。さうなると、自分で注文書きも書かなければならないし、食堂車の込んでゐる時などは、妙なところへ割り込んで飛んだきまりの悪い思ひをしないとも限らない。ことに英語の不得手な人なぞは、このスチユアードの御機嫌を取つて置く必要がある。

どうかすると、スチユアードが食堂車の出入口に立つてゐることがある。そこをつかまへて、君は葉卷を吸ひますか？と聞いて見る。オー、イエスと答へるにきまつてゐる。そこで、手早く、一弗銀貨を彼の手につかませる。サンキユーと笑ひ顏をする。その効能は著しく、案内もいゝ場所へしてくれるし、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

注文書きも必ず書いてくれるし、ことに、自分は讀めないし、書けないと云ふ事を手眞似か何かでして見せれば、その邊を了解して萬事うまくやつてくれる。食堂車が込んでゐるので出掛るのを見合してゐると、自分のゐる車までわざわざ迎ひに來てくれる。だが、スチユアードにやるテイプは、シヤトルからシカゴ迄の四日の間に一度でいい。

黑人のウエータアにやるテイプスは、食事ごとに、十五仙から廿五仙やればいい。米國の汽車のなかの食事は、大抵一回、一弗から一弗五十仙までと見て置けば、そのなかにテイプスも含んでゐる。

それから、自分の乘つてゐる車内のポーターにテイプスをくれる事を忘れてはいけない。これには、一晝夜一弗と見て置けば多過ぎる程だ。その代り、寢てゐる間に靴も磨いて置いてくれゝば、餘分な毛布もかけてくれる。衣服の塵も拂つてくれゝば、忙しい停車中に電報も打つてくれる。一弗やつても損はない。ことに外國から來た旅行者はテイプスなぞを惜むものではない。

さてから云ふ風にして私の乘つてゐたオリンピアンは、シカゴに向つて毎日走つた。私は大抵、展望車へ出て、何も讀まず何も考へず、勿論何も書かずに、ぼんやりとして毎日續く茫漠とした大平原を眺めた。

喫煙室へ來て、日本の敷島を喫つてゐると、モンタナのビユウテから乘り込んだボストン行きの二人の學生が、珍しがつてあの顏の意匠を見た。煙卷を一本づつくれると、これは露西亞風の卷き方だな、なぞと云ひながら、一ぷく喫つて、なる程、東洋の風味があると云ふ。もう一人の學生は鼻を動かして、竹のやうな臭ひがするとは、なかなかうまい事を云ふ。

十分間の停車のある毎に、私たちは、汽車から降りて、停車場の地面を踏んだ。列車内の客は大抵降りる。展望車へ行き來する度びごとに幾つもの車内を越えるので見覺えたその顏を、またこゝで、今度は外の光のなかで見合はせることになる。女と男は手を組んで、あつちへ行つたりこつちへ來たり、短い時間の間にも、その邊をあるきまはる。若い二人連れの男女の客がかなり多かつた。或る男は、この汽車は、蜜月急行列車だなぞと皮肉つてゐた。學生も隨分多かつた。丁度、東部の諸大學の始まる季節なので、地方の男女學生は、夏を暮したその故郷から出てくる。

シヤトルから乘り込んだ蜜月旅行者の二人づれの、女の方はデトロイトの大學の女學生で、男は、シヤトルの、ピーアイの新聞記者だ。女の旅行をいゝ機會に、夫婦氣取りで乘り込んで

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

晝も夜も傍若無人の振る舞ひをしてゐるものと知れた。それは、女の友人たる一人の女學生が途中から乘り込んでゐたのが、十分の停車時間に落ち合つて、不意のことなのでどちらも驚いて話をした。その會話をすつかり私は立ち聞きした。米國の女學生のうちにもかう云ふのがある。男は汽車賃を遣つて、夜る晝そばにつきツきりで、このスイートハートをシカゴ迄送るのだと云ふ。高い送り賃だ。然し彼にとつては安いものなのだらう。その邊は、寢臺車の上と下とのカーテインのなかにかくれて、車內のポーターにも分らないに違ひない。

私の汽車は、十六日の午前十一時四十五分に市俄古のユニオン停車場に着くべき筈のが、約一時間と十五分延着したゝめにラツセルストリートステーションから立つ、十二時四十分發の紐育行きの急行列車は、私がまだユニオン停車場へ卸りない前に出發してしまつた。だがそれは私ばかりではなかつた。兎も角も、私たちは、停車場付きのタキシに荷物もろともせられて、ラツセル停車場へ送られた。私は赤帽に、紐育行きの連絡車に立たれてしまつたことを話すと、その赤帽が引き受けて、私と二人で切符掛りへ行つて、午後の五時三十分の急行列車に乘るやうに切符を切り換えて貰つてくれた。私は、赤帽に五十仙のテイプをやつた。赤帽は私の手にさげてゐたスーツケースを荷物預り所に預けてくれたり、また出發の時には、こゝに來て待つてゐて下さいなぞと、馴れぬ旅客と見て取つたか色々世話をしてくれた。

アメリカの汽車の遲着は珍らしい事ではない。だから、君が若しこの國へ來る時に、かうした事に出遇つたならば、まごまごしないで赤帽に賴むことだ。赤帽の胸には番號を刻んだニツケルの徽章がついてゐる。だからその番號を覺えてゐて、手荷物を預けた合札を渡し、自分の乘る寢臺車の番號を知らして置けば、汽車の出發する時には、手ぶらで乘り込んでも、自分のシートはちやんと前もつて取つてあるし、そこに自分の手荷物も置いてある。私はそれをさせる爲に別に廿五仙のテイプをやつた。

ミシガン湖畔の夕暮を汽車のなかから見ながら、私は紐育へ向つて立つた。西部の汽車のなかではものも云はなかつた人たちが、またこゝで再會して、私たちは長い旅行をしましたなアなぞと話しかける。彼等も東部米國へ來れば、何となく、異鄉へ來たやうな心持ちがするのだらう。さうして、彼等の住んでゐた西部から乘り込んだ外國人の私をも急に親しく思ふのだらう。人情の美はこゝにある。日本にゐた時には隨分日本を惡口した私も、この國へ來てこの國の人に、日本の事情なぞを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かれると、なるたけならば、よく云はうとする。悪く云ふと、自分の老爺の顔に唾をはきかけたやうな氣がする。どうか思ひ切つて自分の國は褒めたいが、あの電車の込む、道のぬかる、砂利を喰ふ役人のゐる東京のことを思ひ出すと、さて日本はと云つたきりで、默つてしまはなければならない。

十七日の午後からは、汽車は、ハドソン河に沿ふて走つた。紐育の四十二丁目の中央停車場へは、やつぱりこの汽車も一時間おくれて六時廿五分頃ついた。

私を見て獨りぽつちの外國人だと思つてゐた西部から來た人たちは、私を迎ひに出てゐるものがあつて、然もそれが、彼等と同じ人種で、私を見て別に大した挨拶もなく、話しながら、歩き出したのを見て、吃驚したらしかつた。

日本人を排斥したり、日本人と白人との結婚を禁止したりするやうな考を持つてゐる西部の亞米利加人たちには、この紐育に、日本人を迎ひに出る、斷髮の若い女があつたり、また品いのゝ態度と言葉とを持つてゐる老夫人があつたりすると云ふことは如何にも腑に落ちないことだらう。私たちは、タキシに乘つて、宵の紐育の街を横ぎりながら、テンネッシーと云ふその老夫人のシエリダンスコエヤの家に向つた。

先づ無事に紐育へついたわけだ。安神してくれ。

十月一日　Sより、

M君に。

君にはシヤトルの事を少し書かう。日本から、亞米利加へ立つ時に、何月何日、横濱發のマニラ丸で、亞米利加へ歸りますと云ふ端書を刷つて諸方へ廻して、その歸りますと云ふ一語のために大部皆の質問をうけた。

日本人が亞米利加へ行くのに歸ると云ふのは間違つてゐないか？　と云ふやうな質問で、なる程、さう問はれて見ると間違つてゐたやうな氣もした。歸るのか行くのか自分にもはつきりとはわかつてゐなかつたが、歸ると云つた方が、自分の心持にはかなつてゐた。然しそれを諸方へ廻して見ると、なる程少しをかしかつた。

或る親友は、そこが佐々木の馬鹿たところだと云ふ批評をした。またもう一人の友達はいやその心持はわかつてゐるがと、如何にも穿つた觀察をした。皮肉で面白いと云ふ人もあつたし、亞利米加の方がいいと見えますね、なぞと、おつにからんでくる人もあつた。普通ならば行くと云ふのを、君は歸ると云はるゝがと、少し哲學的な意味に取つて下すつた先生もあつた。歸るなら歸るでよし、その位の覺悟でなければいかぬなぞと、け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかける人もあつた。お歸りになりますかとそれがさもあたりまへのやうに云つてくれる人もあつた。

何が何だかはつきりせずに、日本を立つて船に乗り込むと、三等船客のなかの再渡米者たちが、あなたも、歸るのですかと云ふ。いや行くのですとは答へかねた。

いよいよ船がビクトリヤへ着くと、昔からの波止場の巡査が、朝の日のあたる倉庫の前を、新聞を讀みながら、のつそりのつそりとやつて來た。如何にも閑日月のなかに、安閑と生活してゐる人間であると云ふことがわかる。まるく肥つて赤ら顔で、足をはこぶのに、肩から持ち上げてばたりとおろす。日本人の歩きかたをこれにくらべると、あたまの上の丁髷をほごすまいと、足先で加減して歩いた六十年以前の樣子がまだ殘つてゐると云へやう。支那人の歩くのを後ろから見ると、まだ例の豚尾のふらふらしてゐた俤がほの見えるやうなものだ。あたまの上に載せたものが爪先にまで影響して、その國民固有の歩き方を作り出すとはをかしいではないか。

ところがこゝに不思議なことは、その巡査や移民官のうしろからついてくるビクトリヤ在留の日本人が、體の小さいくせにやはり肩から歩き出すやうな、歩き方をしてゐた事である。知らず知らずに感化されて、いつの間にやら、その國の風習に染みてしまつたのだ。

船がシヤトルへ入港すると、この感はいよいよ深くなつた。第一に私の知つてゐる、奥田さんと云ふ、前の沙市日本人會長までが、やつぱり肩から體全體を釣り上げるやうな足の運び方をしてゐる。船橋の上に立つてゐた私を見つけて、光る眼鏡に胡麻鹽だらけな眉毛をのせて、棧橋の上から見上げて、ハロー、ハロー、よく歸つて來たなア、日本にはとても居られなかつたらうと、その云ひ方が、私の來たのを如何にも當然だと云はないばかりの有樣だ。

よく歸つて來た。歸つて來たと云ふ言葉がこゝでは不思議でなかつた。

フジヰホテルの主人が私をつれて、自分のホテルのオフイスへ引き上げると、私をそこへ立たして置いて、シヤトルの大北日報と云ふ新聞社の社長さんの竹内さんと云ふお父ツあんに電話をかけた。

あのなア、日本へ行つた、のつぽさんが歸つて來たよ。と大聲で怒鳴る。

いくら竹内さんが有名な新聞記者でも、日本へ行つた、のつぽうの牛飯泥棒では誰れの事だかわからうわけがない。電話の押問答はしばらく續いたが、日本へ行つた、指月が歸つて來

た。行きよりは歸りの方が、荷物も餘計になつたし、さうして肥つて歸つて來た。日本も割り合、いいところだと見えるぜ。あッははは、と云ふやうなわけで話が通じた。早速ホテルの自働車で、その日本から歸つて來た半鐘泥棒を逃がさないやうに、連れて來い。今日釣つた鮭の味噌汁を喰はしてやると云ふ竹内さんの厳命だ。ホテルの主人は、私をたつた今おりたばかりの自働車にまたのせて、ベーコンヒルの竹内さんのレシデンスへと急いだ。もう日はとつぷりと暮れてゐた。

私は日本を立つ時に、歸ると書いて皆に不思議がられたそのわけが、こゝではまた不思議になつた。日本へ行つた指月が歸つて來たのに違ひはない。故郷をはなれて東京に長く住んだ日本内地の人でさへ、故郷を訪れて、東京へまた出る時に、東京へ歸りますと云はなかつたか？　さうしてそれが、故郷の人にも當然な言葉であると思はれなかつたか？

それが、海を隔てたばかりの米國となると、歸ると云つた一語が妙になつてくる。然も、米國には十五年、日本には二年、さうしてまた米國へ渡るのを、なぜ、歸ると云つてはをかしいのだらう。なぜだらう？　日本の人は、あまり、海外と云ふものを、遠くに置いて考へてゐるせいではあるまいか？また日本人は、いつも日本に土着してゐなければならないものと思つてゐるせいではあるまいか？　丁度田舍の祖父祖母が、それに似た迷信を持つてゐるやうに。それともまた、私の家が、牛込の早稻田町にあるせいか？　或はまた私を長く友達と思つてゐてくれるその心から、私をやはり、日本の地に着いた人間と見てくれたせいだらうか？

亞米利加へ來て見れば、日本は海の向ふにある。どちらでも長く踏んだ土が自分の土となるのではあるまいかと私には思はれた。

シヤトルの四五日は私の胸に色々な思ひ出をくり返へさした。それは、この土地で、私はつや子と一番樂しい生活をしたからである。シヤトルから電車に乘つて一時間程西に走ると、グリンレーキと云ふ小さい町がある。湖水に添うた丘の上に、私の小さい家があつた。私は竹内さんに頼んで、自働車にのせて貰つて昔のその家のあたりを見てまはることになつた。

一日二日たつうちに竹内さんの暇な日が來た。私と、竹内さんの子供と、竹内さんと三人乘りで、然もそれが私にとつては六年ぶりで、懷かしいグリンレーキに向つた

湖畔の丘の小さな家は、昔のまゝで建つてゐた。私の堀つた溝からは青い草が生えてゐた。子供たちの靴のあとが、若しやその邊に殘つてゐはしないかとさへ思はれた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日の暮れる頃、シャトルへ歸つて來て、その晩、この土地の今の日本人會長甲木君が私のために計らつてくれた、私の講演會に出席した。會場は日本館ホールと云つて小高い坂の上にある。私たちは昔し、この日本館で、沙市日本人文庫設立の資金を集める爲に、素人演劇をやつたが、私はその時、中村春雨作「剃刀」の爲吉に扮して大當りで、それから以後、シャトルの人は私を爲吉と呼んだ。

私が講演をする演壇にあらはれると、爲吉！　爲吉！　と野次るものがあつた。またなかには、文士はやめて、この土地で理髪店をやつたらどうだ。なぞと深切に云つてくれる野次もあつた。

私はもう米國の地を踏んでゐる、日本の內務省の勢力範圍をはなれてしまつたのだから、その晩は、思ふ存分日本の現狀を批評した。題は『藝者ガールと、僕と、英國皇太子。』と云ふので、とツてももの凄い題であるが、これは、米國の太平洋沿岸を鳴らして步いた川尻北濱と云ふ新聞記者が、私の爲につけてくれた題だ。

甲木日本人會長は、大北日報社主催、傍聽無料とふれ廻して置いて、聽衆から入口でホール代を取り、また私が講演を終ると私に原稿用紙の代を贈けすると云つて、皆のポケツトマネーを徵集した。その爲に私の汽車中のお小遣ひは豐富だつた。聽衆は三百人ほどあつたので、大分あつまつたが、あれが日本だつたら、大騷ぎだつたらう。だが、シャトルの日本人は裕福だから、だまつて出して行つた。

シャトルの事はまだ書きたいが、もうそろ／＼疲れて來た。何しろ、シャトルにゐる日本人の女は皆別嬪が揃つた。そして皆血色がいい。あの順では日本人の發展は年を逐ふて目覺しくなるだらう。馬と女の痩せてゐる國は駄目と相場がきまつてゐるさうだから。その反對のシャトルは大いに希望すべしだ。

十月三日　　　　より、

K君に。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年頭磊磈言

田中貢太郎

新年劈頭、屠蘇の醉を借りて、草莽危言ならぬ心に映るよしなしごとを云ひちらして、逸民たるの責めを塞がばや。禁酒會員は怒り、耶蘇教徒は眉を顰め、寛大なる讀者諸君に、またしても微笑せらるるなるべけれど、西は以て東となすべからず、右は以て左となすべからず、醉狂の徒は遂に神の詞を傳ふべからざるを如何にせむ。

○

理化學研究所の鈴木博士、アルコールを土臺にして、それに澱粉などを交へ、香氣あり風味ある酒を造り、一升五十錢なれば酒徒の前に致すことを得べしと云ふ。杜氏を雇ひて莫大なる費用と時間とを費すのみならず、その出來不出來の計られざる、投機的性質を帶びたる從來の酒の醸造に比して、その製造の容易なる、所謂文化生活者流の理想的醸造法となす所ならんも、それは生絲に對する人造絹、藝術品に對する工藝品、吾輩未だその酒を口にしたることなきも、彼の微妙なるところとしたる香觸と、不死鳥の羽毛を思はする如き快き風韻とは望むべからざるや必せり。博士はこれ神ながらの芳醇の叛逆者と云ふべきか。

平和博覽會の開會中のことなり。我が母の從弟にして、馬場孤蝶翁と共に東京にて少年の日を過したる早川香波、久しぶりにて上京せしかば、ある日、一杯やりたる後にて、打ち連れて博覽會場に往き、例の文化村のマッチ式小屋を見せしに、香波『これでは神事が出來ないね』と一笑に附したり。香波の云ふ神事とは、我が郷里の氏神の祭禮のことにて、夏祭は季節の若きために、それほどでもなきが、秋祭の頃は、夏の熟衣を袷に更へて、西風肌に快く、魚亦肥えたる折とて、大皿鉢に盛りたる肴を座敷狹しと並べて、近村の親類は元より知人酒友を招きて大宴會を催し、中には見知らぬ客まで歡迎して徹宵酒を飲むが故に、交際多き家にありては、その一夜五十人や百人の客を迎へざるべからず。從つて座敷も廣からざるべからず、香波が神事

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が出來ないと云ひたるは尤なる詞なりき。その文化村と云ひ、鈴木博士の酒と云ひ、輕便を尙び情趣を無視する今日主我の徒には、理想的のものならんも、人生に縹渺たる韻律を鳴らし、延いて人生に氣品と敦篤とを加へんとする者に取りては、忍ぶべからざるものなり。要するに文化村のマッチ式小屋は、これ人生のチョンの間なり、衆と共に樂しむ所にあらず。而して鈴木博士の酒は、そのチョンの間に用ゐるシンネコ酒なり。單に利己主義者の情慾を滿たするための偶作なり。

山水に遊行したる者は、往往その案内者より、この峠よりの眺望は、跨間に首を突き入れて見る方美しなどと敎へられたることあらん。この原始的なる寧ろ痴愚なる眺望法も、遊行途上の路草としては面白きものなり。郊外を散策するにも、丘の上に立ち、木の下に休み、小川の堤に腰をおろし、茶店に憩ひ、三叉路には杖を立ててその方向を定めなどしてこそ、はじめて散策の趣味の出づるものなり。人生には路草なかるべからず、彼の文化村や鈴木博士の酒は、藝術の人生を工藝品にするものなり。陋巷の窮措大、若し金を得ば、むだの多きだだつ廣き紳事のゆつくりと出來る家を建て、世の齷齪を忘れて灘の杜氏の藝術になりたる芳醇を飮まんかな。但し廿口の酒は天下の悪味なり。

○

吾輩の家に椎川翁の筆になりたる一幅の軸かかれり。それには翁自作の五言の古詩を書きたり。

我に杖頭錢有り
徜徉春又秋
古祠大木を仰ぎ
曠野清流に俯す
人間長く擾擾
天地何ぞ悠悠
心中一德を懐ふ
神佛豈に外に求めんや

杖頭錢は晉の阮宣の故事にて、今日で云へばバーやカフェーへ行く小遣錢のことなり。阮宣は竹林の七賢の一人なる阮咸の從子にして老莊清談の徒なり。性、簡任、人事を修めず、百錢を杖の頭に掛けて遊び歩き、酒店と見れば立ち寄りて酣暢するを常としたれば、小唄に云ふなる[illegible]。四十餘歲になりても、細君を迎へることも出來ざるにぞ、後には晉の社會を傾けんとしたる王敦をはじめ當代の名士が錢を斂めて結婚さしたる程なるが、名利を好むの徒は、その醵金の中へ加はらんとて運動せしも、加はるを得ざりき。我が同業が円四年などの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中へ己の小說を加へんとして自己投票までやりたると同じき今も古もかはらざる名利の徒のさもしき心理なり。この好漢、後に太子の洗馬となれり。

畢卓も阮咸阮宣等と放達を共にせる清談の徒なり。自ら標持すること高く、世を靑眼視白眼視して禮法をあなどり、醉裸して非となさずと云へば、酒を飲み裸でひつくりかへつて睡るなどを得意としたるなるべし。彼はその時吏部郎の官に在りけるが、隣家に釀したる酒の熟したることを知り、ある夜、醉に乘じて、墻を越えて忍び入り、酒甕の間に坐して飲みしに、折あしく酒守の男來りて捕へられ、縛せられて朝まで置かれけるが、朝に至りて酒守、その畢吏部なることを知りければ、驚きて縛を釋く。その光景を想像するに、柱の本に縛せられて、好い心地にぐうぐうと睡りゐたる酒盜人、縄を釋かれたるに眼を覺して、一つ二つ欠伸しながら肱のあたりを搔き、さて酒守の顏を見て『おい、一杯持つて來い』、とでも云ひたるやうに思はる。史には卓遂に主人を引きて、甕の側に宴し、醉を致して去るとあり。盜人が主人公となりて『一杯やらう』、と自分の物でも饗するやうに飮みて、好い氣持になりて歸りしなるべし。この畢卓は酒の理想を人に語りて、酒を得て數百斛の船に滿て、四時の甘味を兩頭に置き、右手に酒杯を持ち、左手に蟹螯を持ち、酒船中に拍浮せば、便ち一生を了するに足れり、と云へり。愛すべき酒徒なるかな。

阮宣も畢卓も皆竹林の七賢の亞流なり。竹林の七賢とは、晉の山濤、嵆康、阮籍、阮籍の兄の子咸、向秀、王戎、劉伶の七人のことにて、老莊虛無の學を崇尙して、禮法を輕蔑し、縱酒昏酣して、世事を遺落したりと云ふより見れば、皆頽廢的なる思想家なりしなるべし。その七賢の中にて酒趣の尤も意を得たるは、酒德頌を著はしたる劉伶の劉伯倫なり。彼は容貌甚だ醜陋なりしかば女子供に持てる質にあらざりしも、建威將軍となりたる程なれば凡物にはあらず。ある時、酒のために體を傷めて病床の人となりしが、それでも酒が飮みたくてたまらず、細君に向ひて『一杯持つて來い』、と云ひしに、細君はあまりのことに呆れはつると共に悲しくなり、殘りの酒を捐て杯を碎いて、泣きながら『そんなにまでなつてゐて、まだ飮むなんて、體のことを考へないにも程があるぢやありませんか、これを機會にどうかすつかりよして下さい』、と云へば、劉伶は領付きて、『よし、では今日限りよすとしよう、が、俺は一人では禁酒が出來ない、神樣に誓つてからにしよう、神樣に供へる酒の用意をしてくれ』、と云ふ。細君非常に悅びて、酒肉を調へて、神前に供へ、劉伶に向ひて『では、どうか誓をして下さい』、と云ふ。劉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伶神前に跪きて、『天の神様は、この劉伶を世の中へお遣はしになつて、酒飲みの名を與へてくださいました、で、一飲みに一斛を飲み、五斛で醒をさましてをります、女などの詞は愼んで聽きません』と云つて旨さうにその酒を飲みたり。

○

支那の文人と酒とは、一にして二にすべからざるものあり。その中にて酒の名と共に思ひ出さるるは、陶淵明と李太白なり。淵明は晉の微士、晉滅びて宋の世となりしより、隱逸してその節を全うせり。亦老莊虛無の說に鎔鑄せられたる者たるが、縱酒放逸、世を嘲り人を罵るの徒にはあらず。昭明太子の撰にかかる陶淵明傳に據れば、閑靜にして詞すくなく、榮利を慕はず、好んで書を讀み、甚だ解するを求めず、會意有る每に、欣然として食を忘ると有り。以てその人となりも讀書の容も想像するにかたからざるなり。淵明は天性の酒徒なりしも、家貧しければ恒に飲むこと能はず。親類故舊の招く者あれば、悅びてその招きに應じ、行けば醉ふまで飲みて、醉へば後に未練を殘さずしてそのまま歸り來れり。素より貧家なれば、環堵蕭然、風日を蔽はず、簞瓢屢空しきも晏如として意となさず、親老いたればその供養のためにと州の祭酒となりしが、吏職の煩はしきに堪へずして、數日にして止め去る。後ち鎭軍建威參軍となり、彭澤の令に移りしが、その時公田に悉く秫を植ゑんとせしに、妻子の反對に逢うて、五十畝に秫を植ゑ、五十畝に秔を植ゑたり。歲の終りに郡より督郵を遣はすに逢ひしが、部下の吏、淵明に注意して、束帶して迎へよと云ふ。淵明、我れ豈に五斗米のために腰を折りて、鄕里の小兒に向はんや、と云ひて、即日職を去り、歸去來を賦したり。江州刺史王弘、その閑曠高遠の人となりを慕ひて、これを招きしが至らず。その廬山に往くを伺ひて、淵明の故人龐通之に旨を授け、酒肴を持たして中途に邀へしむ。淵明は脚に疾あり、一人の門下と二人の子供とに籃輿を舁がして往きしが、龐通之の在るを見て、悅びて飲酌せしかば、弘は時刻をはかりて出でしに、淵明は逆はずして席を共にしたり。故人顏延之と云ふ者、始安郡の令となりて、潯陽を經、淵明を訪ひて酒を飲み、去るに臨んで、二萬錢を遺きしに、悉く酒家に送りて、必要に應じて酒を取りたりと云ふ。嘗て九月九日、酒無し、家の邊の菊叢の中に坐して、花を摘みをりしに、王弘酒を送りて至る。淵明は家へもかへらず其所にて酒を酌み、醉ひて後はじめて家に入れり。その淵明の家に一張の無絃琴あり。音律を解せざりしも、醉へば取り出してかき鳴らし、その意を寄せて樂しめり。酒あれば貴賤の別なく來る程の者に出したるが、己れ先に醉へば、我れ醉うて眠ら

んと欲す、卿去るべしと云ひて、客を去らして眠れり。郡將、常に伺候せしが、ある時、酒の熟したる時ありしに、淵明頭につけたる葛の頭巾をはづして、酒を漉し、畢りてそのまゝ復た頭に著けたり。

李太白は英雄の器度を具へて青雲を望みたる大才なりしも、轗軻不遇、胸中の磊磈を漏らすの伎に過ぎざりし詩を以て稱せらるるに至れり。生地は山東と云ひ、隴西と云ひ、蜀と云ひ、紛紛として一定せず。天寶の初、會稽の吳筠に隨うて長安に至りしに、賀知章その文を見て、玄宗に薦めければ、それより玄宗の愛する所となり、しばしば座側にて酒を賜はり、翰林に供奉することとなりければ、日日市に出でて醉を買ふ位の餘裕を生ぜり。杜甫の飲中八仙歌は、太白がその徒と市に出でて醉遊せしことを歌ひたるものなり。

知章が馬に騎るは船に乘るに似たり
眼花井に落ちて水底に眠る
汝陽三斗始めて天に朝す
道麴車に逢ふて口涎を流す
恨むらくは封を移して酒泉に向はざるを
左相の日興萬錢を費し
飲むは長鯨の百川を吸ふが如く
杯を銜んで聖を樂しみ賢を避くと稱す
宗之は瀟灑たる美少年
觴を擧げて白眼青天を望む
皎として玉樹の風前に臨むが如し
蘇晋長齋す繡佛の前
醉中往往逃禪を愛す
李白一斗詩百篇
長安市上酒家に眠る
天子呼び來れども船に上らず
自ら稱す臣は是れ酒中の仙と
張旭三杯草聖傳ふ
帽を脫し頂を露はす王公の前
毫を揮ひ紙に落せば雲煙の如し
焦遂五斗方に卓然
高談雄辯四筵を驚かす

太白の逸話は小說家の附會したるもの多く、眞僞混淆し一辨別すべからず、醉ひて水中の月を捕へんとして水に落ちたりと云ふも附會の言なり。玄宗、楊貴妃と沈香亭にありて、太白に樂章を爲らしめんとせしに、已に醉ふて至る能はず、左右扶持し來りて、水をその面に灑ぎしに、稍醒めて、たちどころに一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寵を失せり。嘗て玄宗に侍して酔ひ、高力士に靴を脱がせしことありしが、力士はこれを含み、太白が楊貴妃を詠ぜし、憐むべし飛燕新粧に倚るの詩句を指摘して、楊貴妃を激せしめ、玄宗の太白を官に補せんとするを沮止せり。太白はこれがために驥足をのばす能はずして、再び江湖に放浪せり。酒徒太白には酒の詩多し。その中にて、

天若し酒を愛せずんば
酒星天にあらず
地若し酒を愛せずんば
地に酒泉無かるべし
天地既に酒を愛す
酒を愛するは天に愧ぢず
已に聞く清は聖に比すと
復た道ふ濁は賢の如しと
賢聖既に飲む
何ぞ必ずしも神仙を求めん
三杯大道に通じ
一斗自然に合す
但酒中の趣を得て
醒者の為に傳ふることなかれ

の詩に至りては、酒の趣を究めたる者にして、酒仙にしてはじめて云ひ得べし。

○

昔の烈宗と云ふ天子、酒に沈湎して、長星の出でしを見、杯を挙げて、長星汝に一杯の酒を勧む、世豈に萬年の天子有らんやと云ひしは、やや極端なる嫌はあれど、一杯の酒に萬乘の尊貴を忘れたるは酒徒としての本領を發揮したるものなり。考へて見れば、下戸も上戸も、禁酒會員も、耶蘇教徒も、聖人も君子も、強盗も詐欺師も、博徒も隠亡も、毎年一つ歳を取らざるべからず。酒は害毒とか罪悪とか云ひて、つまらぬおせつかひに短き一生を棒にふらんとするは、寧ろ哀むべきにあらずや。酒を解する者の眼より見れば、杯の中に極あり涅槃ありて、短き一生の中に恒久の生命を見出すことも出来れば、生死一如の工風も自ら體得するを得べし。この頃世の中険悪になりて、智識階級の眼に剣光あり。養父母を切つて自殺したる大學生、高利貸を惨殺したる農學士、宰相を斃したる文學少年、實業家を誅殺したる壯士、姑に切りつけたる女優あがりの婦人。これ等は皆酒がすくなくなりて、人生に狂を生じたるがためなり。

故人佳肴を贈る
一杯の酒無かるべからず

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦に問ふ婦曰く無し
錢有りやと問ふ曰く有り
樽を提げて夜自ら行く
深巷狗の吠ゆるを聞く
酒を得て心未だ足らず
迂路吟友を呼ぶ
談笑相和して高し
月下雙影走る
春來久しく逢はず
借問す詩有りや否

この詩は桂月翁の作なるが、知人から肴を貰ひたるにより、樽を提げて酒を買ひに行きしが、一人では面白からずとて、酒友にして吟友なる友人を呼びに廻はりて連れ來り、詩の話をしながら飲むと云ふ所に泰平の氣象動き、その詩酒の間に桂月翁の涅槃を見る。世の中は桂月翁の詩の如くにしてはじめて和平を致すを得べし。萬葉の歌人は酒飲まぬ者は猿に似たりと云へり。酒の害罪を口にする者は山猿の徒なり。劉伶の病は災厄なり。職工が調革にて手や指を痛めると同じ性質のものなり。酒も飲まずサイダーも飲まず、上等の米の飯ばかり喫ひたりとて病氣になる者もあり、行く所へは屹と行くものなり。

○桂月翁も劉伶の轍を履みて、彼の災厄に遭ひたることありければ、吾輩に教訓して『前車が覆つたから、後車は誡めんといかんよ』と云ひしが、今や酒を節して、十和田湖畔に悠悠詩想を養へり。

吾輩の少年時、村に山川と云ふ酒好きの老人ありたり。その家は山の麓に在りて、門の前を小さき谷川流れたれば、一幅の板橋を架したり。酒好きの老人は、夜遅くぐでぐでに醉ひてその板橋を渡りて歸りしが、細君は常にこれを氣遣ひて注意したり。その日も老人、知人の許より酒に招かれて出て行かんとするにぞ、細君は復た『あまりぐでぐでに醉はずに戻りなされ、彼の橋があぶないから』と注意せしが、その夜歸り來れる老人は頭からづぶ濡れに濡れてゐたり。細君はそれ見たことかと小言を云はんとせしに、却つて老人の方より「お前がつまらんことを云ふからこんなことになつた、いつもは氣持の好い位酒を飲んで來るから、あの橋が三つに見える、で、眞中を渡るから、落ちることはないが、今日はお前が出足によけいなことを云ふから、酒を控へて來たところが、橋が二つに見えた、で、右の方を渡らうとすると落ちた、これからよけいなことを云ふな」と叱りたりと云ふことを聞けり。十和田湖畔にありて、附近の山

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水に遊行せらるる排月爺、途か二つに見えて怪我をなさるること無きか否や。吾輩は翁の健在を心より祈る者なり。

○

吾輩はこの一年位、青年雜誌『新青年』の來るを待ちかねて、それに掲載せられたる飜譯の探偵小說を讀む。薤の皮を剝ぐと同じく最後には何も無くして、ただ平凡なる臭氣のみ殘る如き創作ばかり多き現文壇にありて、新青年の探偵小說は吾輩のためには天の醍醐味とでも云ふべきものなり。

その雜誌には昨年の十月頃より歐米の新進探偵小說家の短篇數篇宛を掲げはじめたるが、十一月號にはヘルマン・ランドンの短篇を收めたり。その短篇集の中なる『葬式フランク』の一篇の如き諷刺の横溢せる者。そは葬式有る家を專門に詐欺をはたらく老人のことを書きたるものなるが、その短き文章の中に描寫せられたる詐欺漢の愛犬を失ひし苦悶の心理に至りては、現文壇終に彼れランドンの右に出づる者有りとは思はれず、女の話や飯の話をくどくどと書きて小說の能事終れりとなす人人に見せてやりたきものなり。

○

吾輩も一つ二つは不良少年もすと云ふ小說を書きたることあり、決して人樣に向つて云ふにはあらず。この頃雜誌位見る者にて、創作を志さざる者もなければ、すこし毛の生へて、私は生きて往かなくてはならぬ、彼の女はかう云ふ氣持ちでをるだらうと云ふやうな短き物を一つ二つ書きたる輩に至りては、出ます、もう出ますと渡船が客を呼ぶやうなことを云ふ。東京は云ふに及はず、日本全國にわたりてこの出ます出ますを叫ぶ者、何万何千なるを知らず。何故にかくもむつかしき創作を熊公も八公も志望するかと云ふに、吾輩思ふに、お袋のほまちをくすねたことでも、親爺の時計を質に入れたことでも、學校をなまけたことでも、兩親の罪惡でも、女中と關係したことでも、女房と喧嘩したことでも、他の女房を盜んだことでも、女房を奪はれたことでも、隨徳寺參りでも、電車の中で女をこしらへたことでも、横合から他の女に惚れたことでも、なんでも立派な創作と持ちはやされるより、その經驗ある者、乃公にも立派な材料ありと思へる故のことならん。恐るべきことなり。

○

自己の創作の中に愛を說き、神を說きて、少年少女の間に喧傳せられ、崇拜者の來り投ずる者多く、側に平兵衛さんの長女來りて、子を生むかと思へば、夕に源吉さんの三女來りて、平兵衛さんの長女の後釜に据はるあり。夕の風、朝の雨、雞屋に悅びあれば、茶氣草履屋に悲しみあり。今日天下一の創作家の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細君となりし擬ね子嬢も、四時の序、功成る者は去られて明日は病床の外の人となる。その變轉の激しきこと走馬燈も只ならざれど、それが小說家の雅名と同じと思へばさのみ驚くこともなし。その他同業の中には風流才子多く、波の音の魂をそそるなる海岸の町にて、持參金付の崇拜者を得たる者あり。細君を失ひし鰥暮らしの徒然を慰めに來りし同業に孕ませたる者あるなど、瀧澤馬琴の文句ならねど、指折りかがのふれば、さてはてしもなく羨ましきことの限りなれど、所には兩面あり。その一方には唯一の崇拜者たる細君を盜まれたる者もありて、大に世人をして同情の涙を注がしめたる者もあり。されど是れ等は不成合題と成除題とを持てる者の相對づくのことなり。當人同志が承知づくなら他より口を出す權利なけれど、ただ一つ惡むべきは、横合より他の女に岡惚れして、それを生涯の創作の材料にする痴者のあることとなり。

○

それは或夜、二合のおしきに陶然と醉ひて、二階の書齋に入り、ぽかぽかと煙草ふかしをりし時のことなり。神を見たる文士として知られたる綱島梁川の口吻を借りて云へば、云はば歸依の醉心地の縹緲たる時のことなり。吾輩の前に怪しき男ひよこひよこと來れり。吾輩に松前鐵之助の勇なければ、お前も只の鼠ぢやあんめへとも云へず、ただ、眼を見張りて驚くのみなりしに、彼の男苦笑して、『わたいは、おまはんのお仲間のかつぎなはる視線だつせ、日蓮はんがかつがれないやうになると、わたいの番になつてな、それや煩さうおまつせ、それも日蓮はんのやうに、學者さんやお寺さん、……お寺さんはなまぐさだすが、それでも病人や、監獄行きや、へぼ小說家にかつがれるよりはましだつせ。わたいもかつがれるなら、體のぴんぴんした者か、正直者か、上手な小說家にかつがれたいがな、おまはんどうかなりませんかな』と云ひて歎息せり。吾輩何んと云つてよいのか、ちよとその返事に困りたり。

○

賄賂を取りたる代議士、詐欺を働きたる會社員、恐喝をなせし雜誌記者、相當智識ある者にして入獄せる者は、たれもかれも云ひ合せたやうに宗教に走りて、救世軍に入る者、日蓮宗に歸依する者、眞言宗に走る者、皆、己の罪の恐ろしかりしに鑑みて、爾を救はんとする者あり。甚だ悅ばしきことなり。されど吾輩思ふに、古より惡漢にして宗門に入りて、名僧智識となりし者は、皆、激情により一朝の怒に前後を忘れて大罪を犯せし者にて、巧智によりて罪惡を犯せし者には無きやうなり。尤もこれは吾輩寡聞の致す所なるやも知れず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

宗教小説を背き、教祖を創作にするものありて、眼暗千人の坊間に喧傳せらる。宗教及び教祖を筆にせんとする者は、宗教を體得し教祖の人格に冥合する程の人ならざるべからず。書肆と結托して廣告にて世人を瞞着し、原稿料をさる方面に提供して出版前雜誌に掲載するやうのことをなす小人輩が、如何にして本當の宗教及び教祖を描寫せる小說などを書くを得べき。これに就いて思ひ出さるるは、僧俊乘のことなり。彼は飛驒の袈裟山千光寺の僧にて、その心友圓空は、常に一丁の鉈を携へて立枯の木にあれ何木にあれ、不用の木と見れば、それに佛像を刻めりと云ふ。俊乘は神の如き人格、すこしも機心なく、如何なる場合にも物を疑はさりき。蓮華坂にありける時、蓮華躑躅と云ふ躑躅ありしが、その花の頃、人、彼に向ひて、彼の花に背を當ててあぶれば、暖なり、試み給へと云ひしに、俊乘その言の如くなせしに、折柄の春の陽、背に當りて暖なり。俊乘日影とは思はず、誠の花のためなりと思ひて悅べり。又ある時、坂を登るには、牛馬の如く這ひて登れば苦しからずと云ふ者ありしに、これも誠と思ひて、袈裟の麓より八町の嶮路を這ひ登りしが、それは如何にも苦しかりければ、これは人の云ひしに似ず苦しかりきと語れり。

宮筠圃は伊藤東涯及び[illegible]に學びたる[illegible]儒者たり。ある日、東山に往きて、その歸途、雨に逢ひ、二條加茂川の東なる賤妓の居處を過ぎ、簷下を步みけるに、妓ども筠圃を呼びて、おはいりやす、おはいりやす、と呼ぶ。筠圃家に歸りて、人に語りて曰く、仁と云ふものは、實に人の固有のものなり、吾れ雨に逢へるを見て、彼の輩、頻りに呼べり。これ我を仁さむとしたるなるべしと云ふ。人人それより筠圃を『仁と云ふもの』と渾名して笑ひあへり。俊乘と云ひ、筠圃と云ひ、かく俗習に染まず、世情に疎き者は、今の所謂小說は書けざるべけれど、かかる機心なき高雅閑曠の人にして、はじめて自然と冥合し、神と冥合し、久遠の生命と冥合して宗教及び教祖を描寫せる生彩ある小說を書くを得べきなり。

○

この數年一燈園の生活を讃美する者あり。又それをけなす者あり。それも善し、これも善し。されども徒手徒坐して人の勞働にて得たる物資を費すは不心得の甚しきものなり。故に昔より神官僧侶の多くは無科の衣食にまで賤しめらる。今は耶蘇教徒の類も同一視せられつつあり。これ宗教の如何によらず、その神に仕ふる者は、皆己れを救ひ、延いて他に及ぼさんとするものなれば、皆自己のためなり。然るに宗教家はそれを思はず

して喜捨寄附を乞ひ、布施を强ひ、托鉢をなして、他人の粒粒辛苦の結果を掠奪せんとす。剪燈新話を讀みしに、その中に面白き話あり。現世にて徒坐徒食せる上に、破戒の行爲多かりし僧尼を地獄に拉し來りて、牛の皮や馬の皮を着せ、それを再び現世に牛や馬となつて生れしめ、前世の埋め合せに人間のために力を致さすと云ふ挿話なるが、現代の宗教家の中には、二度も三度も牛馬となして現世に生れしめて、贖罪をなさしむる價値のある者も多きやうに思はる。ただ一燈園の人人は、便所の掃除をなして、悅んで喜捨する者あれば、はじめてその禮を受けて生活すと云ふ。思ふにこれは舊式の勞働報酬なり。若し悅んで喜捨する者なければ、背に腹は代へられず、他に迷惑をかけざるべからず。どうせ日日の物資い必要なることなれば、價を定めて、園中徒坐徒手者の無いやうに規則正しく勞働して正當の報酬を得、以て明日の計をなすべし。今や不景氣の世の中、一燈園に往けば、口だけは大丈夫なりと思ふ不心得者にひよいひよいと轉げ込まれてもたまるまじ。

○

昨年の文壇に面白き現象は、創作の名を假りて仲間の惡口を云ひあらしたことなるが、これを金を出して讀まされたる第三者は好い面の皮なり。されど文人相排擠する古より然りと云ふ文何ある程なれば、文士は古から同業を排斥して一人天狗になるものと相場が定まりをると聞けば、憤慨する者もなかるべし。吾輩の先輩に戯號を鈍木斷歡と云へる古き新聞記者あり。ある夜、吾輩と盃を共にしながら、談、文士の嫉妬のことに及ぶや、文士は矢張り人氣の中心になる者なれば、我も我もとその中心たらんと競ふ結果、かかることになるべし。文士同志が嫉妬しあふばかりでなく、新聞記者も文士を嫉妬する者なり。吾輩の新聞記者時代は尾崎紅葉の全盛時代にて、吾輩も紅葉に對して一種の嫉妬を感じたる者なり。そは吾輩等も大新聞の記者として、妻子にも近隣にも、知人にも後輩にも大得意なりしも、談一たび筆のことに及べば、紅葉及び硯友社同人の小說の話ばかりにして、同じく筆を持つ職業ながらすこしも自分の噂をされざるより、業をにやして、文士のことと云へば針小棒大に書きたるものなり。彼の伊藤白蓮事件なども、その筆法なりと云へり。吾輩この話を聞きて同じく筆を持つ身の罪業をあさましと思へり。

○

竹馬の友。級友。同職友。同僚友。而して硯友と稱する友人。管鮑の交りなる知己に至りては、尤もすくなし。中にも同職友たる文士間、畫家間、彫刻家間には、殊んど知己の交あ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろを聞かず。ただ除外例と見るべきは、年齢と利害の隔絶して兩者相扶翼することなき者はやや知己の容をなすも、これさへ曉天の星の如し。この頃、吾輩の所へちよいちよい原稿を持ち來りて、雜誌へ掲載してくれと云ふ者あり。吾輩は文學者にあらざれば、文學的の原稿は一切紹介せぬことになしをれば、彼の人に依頼しては如何にと、時めける文人の名を指さすに、中には彼の人は友人ですが、やはり私が出ることを好まないでせう、紹介をしてくれやうと云ひませんなどと云ふ者ありて、吾輩の如き背人時時考へさせらるることあり。

その他友人に店友なる者あり。これは商店にて顔を合せて知合になりたるものなるが、これは故和田垣博士の云はれたることなり。昔吾輩日本橋の出版書肆に行きてつまらぬ編輯をなしをる際、博士もその書肆の知合とて時時顔を合はせしが、その内に酒食を共にするやうになりしより、何時しか店友の名を以て呼ばるるやうになりたり。

店友の他に杯友あり。これは酒徒にあらざればその情味の判らざるものなるが、現代に於て知己らしき知己の交りをなすものは、この杯友に限ると云ひても誇張にあらざるなり。世に一樹の蔭一河の流と云ふことあり。小さな料理屋やバーなどにて一杯の酒を交換したる者にても、酒の德の致す所、忽ち傾蓋の友となる者あり。尤も鈴木博士の非武術の酒を飲むの徒は論外なり。

いろいろの友人の中にて、皆が望み求むる者は、金をくれ、別莊に呼んでくれ、御馳走をしてくれ、自動車に乘せてくれる益友なるが、かへりの自動車に乘せてくれて、カフエーの一杯位は飲ませてくれる位の者はありても、そんな益友はとんとなきやうなり。吾輩も今年は、大酒を愼み、機心を去り、嫉妬を抑へ、他人の惡口云ふことをやめて、その益友を捜さんかな。

爐邊夜話

相馬御風

雜草の美

先日私は良寛和尚の遺跡巡杖中の或篤家と、さびしい木枯の音を聞きながら、半日一夜を心ゆくばかり語りくらした。その人は何ものよりも雜草と村童とに心を寄せてゐた。そして

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何とかして雜草の美を出來るだけ深く、出來るだけ豐かに、出來るだけ細かに味つて見たい。そしてそれを心ゆくまで表現して見たい。」と云ふことを繰り返し云つてゐた。

「宗達や光琳なども雜草を描いてゐる。しかしあの人たちのは、それを鳥や花の取り合せとして描いてゐるのである。自分のはさうではない。雜草そのものを描いて見たいのである。」こんな事もその人は熱心に話してゐた。

その話には私もひどく同感であつた。雜草の美に對する愛着は、私もかうした邊土に住むことになつて以來、一層深く感じて來たのであつた。

　ことさらに取りのこし置くわが庭の雜草に降る春の雨はも

既に六七年前にこんな歌さへ詠まずにゐられなかつたほど、それほど深く私は雜草と云ふものに心を寄せて來た。

　町なかのぬけ道にさへ秋は咲く犬蓼の花みぞ蕎麥の花

かうして町なかのぬけ道の下水端に咲いてゐる見るかげもない秋の花にさへ私は目をとめずには居られなかつた。

雜草の美！私はすつかりその畫家の心もちに同ずることが出來たのであつた。尤もかう云つたからとて、私は敢て雜草のみが美しさを持つてゐると云ふのではない。と云つて又名のある花と同じく雜草にも美はあると云ふやうなことを今更らしく云ふのでもない。そこのところがなか〱微妙な味はひの存するところである。

私は嘗て芭蕉の

　よく見れば薺花さく垣根かな

と云ふ一句に深い思を寄せ、其見るかげもない雜草の小さな白い花に對してまで天地の生命の現れを感じた芭蕉の心境を讃嘆してゐた井泉水氏の文章を讀んで感動させられた事があつた。しかし、總じて古來の俳句に、多くありさうで案外乏しいのは雜草を詠じた句である。無論歌に比べると俳句の方は、遙に題材に於て豐富であるが、それでもまだ私たちにはもの足らない。一茶などにはもつと〱多く先人の見捨てて來た雜草の句があつてもよさゝうに思はれるが、どうしたものか案外に乏しい。

そこへ行くと歌人でありながら、門の垣根のおばこや田の畔の豆にまで深い思ひを寄せてゐた大隈言道は、懷かしむべき人であつたやうに思はれる。

　朝夕に踏ひしがれしわが門の垣根のおばこ實になりにけり

　世の中は門田のくろになる豆の我ながらみの行方しられず

　卑しくてよきに交れるひえの實は田をかる〱も悲しとや見ぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

花もなく實もなき庭の木賊原ただいやましに生ゆるのみして
己が身を玉とつゝめるほほづきも秋はかれがれに成にける哉
山松のもとさへゆるる嵐にもうらやすげなるかげの冬草
はきだめの隅の下なる芋すらゝ子は親にこそつきてありけれ
つくづくと見れば面白し我園のひともじのみの一つ一つに

雑草にとりあつめて草原として眺めてもよい。一つ一つにとりいでゝ眺め味うても趣が深い。春にもいゝ。夏にも面白い。秋には更にいゝ。冬にあつてさへも心を惹かれる。花があつてもなくてもいゝ。實があつてもなくてもいゝ。名なんか知つてゐない方が却ておもしろい。

畑や庭の雑草は、むしり取らなくてはならぬ。むしり取らずには居られぬが故に、一層あはれが深い。私は草むしりをしながらも、折々思ひがけない花や葉の美しさに驚かされることがある。一つ一つに「よく見れば」いづれにも驚くべき美がある。

『徒然草』の著者

久しぶりで――全く久しぶりである――『徒然草』を讀んで見た。しかもそれは全く偶然にであつた。是非見たいと思つた或書物をさがす爲めに書架のあちらこちらを見てゐたうちに、私の手は殆んど無意識に差向き用のない其の本を抜き取つたのであつた。しかも、やはり無意識にどこと云ふこともなくそれを披いたのであつた。

そしてやはり何の氣もなしに、私の眼がそれへ向くと、そこにはこんな事が書かれてあつたのである。

「雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと、何ともいはざりし返事に、この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程の、ひがひがしからむ人の、仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすがへすも口惜しき御心なりといひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりのことも忘れがたし。」

「なるほど！」――かう私の心はまづ肯いた。そしてその話を今一度頭の中で繰り返して見た。

「雪の降つた景色のおもしろかつた或朝、或人の許へ用事あつて手紙をやつた。ところが、その手紙の中には雪のことを少しも書かなかつたので、先方ではその返事に『この雪はどうですと一筆書くことすらしないやうな、そんな不風流な人の云ふ事なんか聞入れてたまるものか、どうも情ない心もちの人だ。』と云ふやうな事を書いてよこした。いかにもそれは面白い事であつた。その人はもう此世に居ないので、こんな事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まで忘れ難く思ひ出される。」

「なるほどこれは痛快だ！」――私の心は重ねてから背いた。そして其の次の瞬間には、私の心はすつかりその昔の本に惹きつけられてゐた。「これを機會に一つ久し振に此の本を讀み直して見よう」――私はつひにそんな氣にさへなつた。

そのすぐ次の段の「九月二十日の頃ある人にさそはれ奉りて……」なども私の心に豫期しない潤ひを與へた。第三十五段の

「手のわろき人のはゞからず書きちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。」

などもひどく私の心を撲つた。

こんな風にして私は更に第一頁から讀み始めて、つひに最後の頁まで一氣に讀みとほした。そして今更のやうに私はそのきびきびと齒ぎれのいゝ文章と、その中に盛られた兼好その人の一家の人生觀に、全く豫期しなかつた感動を與へられたのであつた。

『徒然草』一卷は兼好自らが一卷に纒めるつもりで書いたものでもなく、又彼自らの手で斯くの如く纒め編んだものでもなくして、彼が見たり聞いたり感じたりしたことを草庵生活のつれ〴〵に書きつけて置いたのが、草庵の壁などに貼られて殘つてゐたのを、曾て彼に召仕はれてゐた少年が形見として所持してゐた草稿などと共に、兼好の歿後に知人が一書に編成したものであるとは、史家の一樣に云ふところである。更に或史家はこんな事を云つてゐる。

「全篇は長短の文二百四十餘段から成つてゐるが、或は儒者の口吻をまねて道徳上の訓戒をのべるかとおもへば、公事有職の事を記し、或は佛者の説を祖述して世の無常を説くかと見ると、和歌を論じ、男女の愛のしほらしさをいふ。すなはち一定した主義も主張もなく彼自身の通曉するかぎり神儒老莊佛の道でも、和歌でも、有職故實でも、戀愛でも、何でもかでもとりとめもなくやたらに書きつけるのである。それで前にいうたことゝ後にいふたことゝに矛盾の説も見える。……子どもの無いのを望むかと思ふと、子供の愛情の結構なことを説いてゐる。戀の趣あることをいふかと見ると、色慾のおそるべく、愼むべきことを戒めてゐる。その外、酒の害をのべたとおもふと、すぐそのあとで酒の徳を説く。かやうにその説くところに、矛盾のあるのが一寸と不思議におもはれるが、法師の身分で子どもの愛情を説いたり、戀の趣を説いたりするのが更にをかしい。そこで兼好の性行論が起る。」

そして或史家は其故を以て兼好を雜駁な人であつたと云ひ、或史家はその故を以て彼を單なる趣味の人に過ぎないと云ひ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或史家は彼を以て當時の新思想であつた佛敎的厭世主義と儒思想である情緒主義との矛盾を一身に籠めた人でありそこが彼の性行の面白い點であると云ひ、更に又ある史家はさやうな矛盾の存する如く見えるのは彼の上つ皮であつて根柢は矢張り厭世主義を以て一貫してゐると云つてゐるとの事である。

けれども今私が通讀して感じたところは、そのいづれでもなかつた。例へば第六段

「わが身のやんごと無からんにも、まして、數ならざらんにも、子といふもの、無くてありなん。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みなぞう絶えんことを願ひたまへり。染殿の大臣も子孫おはせぬぞ、よく侍る、末のおくれ給へるは、わろきことなり、とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の、御墓を、かねてきつかせたまひける時も、こゝを切れ、かしこを斷て、子孫あらせじと思ふなりと、侍りけるとかや」

とあるのと、第百四十二段

「心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。あるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて、御子はおはすやと、問ひしに、一人ももち侍らずと、答へしかば、さては、もののあはれは知り給はじ。情なき御心にぞ、ものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれと、言ひたりし、然もありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に、慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親の恩は、思ひ知らるれ。」

とあるのと、その二つの言説の間に矛盾ありと見るのは、見る人の心からである。「世の中にはかう云ふ人もある、又かう云ふ人もある、かうもあらう、あゝもあらう。」と云ふだけで兼好自身はいづれをも「かうあらねばならぬ」と主張はしてゐないのである。即ち兼好によつて書かれた矛盾は世の中の矛盾であつて兼好自身の矛盾ではなかつた。

兼好は決してさばく人ではなかつた。「これか」「あれか」と云ふ疑問から、彼はもう超越してゐた。その證據には前に引用した「ある雪のおもしろう降りたる朝」の一段に於て、それが彼自身の經驗であつたらしいにも拘らず、彼は手紙をやつた自分と返事をよこした先方とのいづれに對しても何等の批判をも加へてはしなかつた。そして僅に「今は亡き人なればかばかりのことも忘れ難し。」と云ふ一句を以て兩者の矛盾を矛盾のまゝに純化してゐるに過ぎないのであつた。更に第三十二段の

「九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで、月見ありきしこと侍りしに、思しいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ、しめやかに打薫りて、しのびたるけはひ、いと物哀れなり。よきほどにて、出でたまひぬれど、なほ、こと様の優におぼえて、物のかくれより、しばし見ゐたるに、妻戸を今少し推しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうのことは、ただ、朝夕の心づかひによるべし。その人、程なく失せにけりと聞き侍りし。」

と云ふ人情の味はひの極めて深い一條をしるすに當つても、兼好自らはやはり人生の矛盾を矛盾のまゝに攝取することを忘れなかつた。いとまを告げて出て行つた人の既に遠くへ去つた後までも妻戸すこし明けて見送りながら、空行く月の影をながめていつまでも〲立ちつくしてゐる人の情の美しさ――それに對してすら一方に「客人が歸るとすぐに室内へかけ込んだりしたらどんなにか殘念であらうに、まあ此人の此の心がけの美しいことは」と感嘆したり、「かやうなことはたゞ朝夕の心づかひによるのであらう」と賞讃したりしてゐる彼でありながら、しかも他方に於てはそのやうな美しい情愛を持つた人にしてなほ「程なく失せにけり」と云ふ傷ましい現實をさながらに思ひ合はさずに居れない彼であつた。

要するに常住を求めてやまぬ人心と、無常迅速の現實と――此の矛盾こそ、常に彼の觀じつゝあつた人生の風光であつた。しかもその矛盾に對する彼の態度は、決して偏にさばく人のそれではなかつた。さながらに觀じ、さながらに味ひ、さながらに樂しむ――それが彼の究竟の心境に外ならなかつた。矛盾に居て、矛盾ならず、執著にゐて執著に囚はれざる朗らかな味はひの世界――それが彼の究竟の世界ではなかつたか。

彼はかう云つた。

「あだし野の露、きゆる時なく、鳥部野の烟、立去らでのみ、住みはつるならひならば、いかに物の哀もなからん。世は定めなきこそ、いみじけれ。

命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かげろふの、夕を待ち、夏の蟬の、春秋を知らぬもあるぞかし。つく〲と、一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。」

更に彼はかうも云つた。

「傳へ聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。如何なるをか智といふべき。可、不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。」

○

「ある人法然上人に『念佛の時、ねぶりにおかされて、行をおこたり侍ること、いかゞして、このさはりをやめて侍らん』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、申しければ、『目のさめたらんほど、念佛したまへ』と答へられける、いと尊かりけり。又、『往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり』と、いはれけり、これも尊し。又『疑ひながらも念佛すれば往生す』ともいはれけり。これもまた尊し。」

○

「花はさかりに、月はくまなきのみ見るものかは、雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。」

このやうに彼は果敢なさそのものを樂しみ、矛盾さながらを樂しみ、無常さながらを樂しむことの出來た人であつた。『徒然草』を通して見たる彼が一見何等の主義定見がなく、知るかぎりの事は神儒佛老莊の學は勿論、歌でも、有職故實でも、戀愛でも、武藝でも、何と云ふことなしに矛盾をもかまはず無暗に書き散らした散漫雜駁の人のやうに見えるのも、寧ろ彼の何ものにもこだはらないで遊び得たほがらかな心の姿を示すものではなかつたらうか。「文字の法師、暗證の禪師、たがひに量りて、おのれに如かずと思へる共にあたらず」と彼みづからも說破してゐる如く、彼自らはつひに一處に固定し了する人ではなかつた。彼は要するに觀念に徹した人ではなくして、味に徹した人であつた。

四十二歳にして始めて出家した彼は、佛門の修行に於ても到底謂ふところの大德の境地に到らうとするやうなことは不可能であることを、自らも充分に知つてゐたであらう。否、むしろさうした心の向け方は、彼自身の嫌つたところであつたらう。さうかと云つて、彼はかの長明法師の如く斷ち難い現世の絆を強ひて斷ち、努めて枯木寒巖の境地に辛うじて心の安慰を得やうとするやうな、消極的な厭世家でもなかつた。隨て長明の「住まずして誰か閑居のたのしびを知らむ」と云ふやうな誇りをも彼は持たなかつた代りに、「草の庵を愛するも科とす、閑寂に著するも障なるべし」と云ふやうた苦しみも、また「おのづから都に出ては乞食となるを恥づ」と云ふやうな煩ひも彼にはなかつた。それほど彼はのびやかであつた。それほど彼の天地は廣かつたのである。

彼はよくさまざまた浮世の味をも解してゐた。しかも彼は決して謂ふところの生臭坊主ではなかつた。何ものゝ味をも味はふことの出來た彼は、しかしながら何ものゝ味にも囚はれたい彼であつた。いかなる境地にあつても、彼の心は常に白雲の如く閑であつた。彼は一面から見ればたしかに厭世家であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

而も他面から見れば彼は正しく凡てのものに遊ぶことの出來る樂天家であつた。要するに彼は理に徹した人ではなくして、味に生きた人であつた、嚴密な意味での僧ではなくして、人生の味に生きた一個の風雅人であつた。佛門の弟子としての彼を想ひやつて見ても、彼は決して僧した人ではなくして、味はつた人であつたやうにしか思はれない。眞俗二諦の間の一種微妙な中道に、彼は生きつゞけたのであつた。

誰か兼好を以て名僧と呼び、善知識と呼び、大德に擬し、聖僧と稱するものがあらうぞ。彼は決して古來の名僧の列に加はるべき人ではなかつた。彼と席を同じうすべき人は、斷じてその種の人ではなくして、他に立派な先達がある。雪舟然り、利休然り、芭蕉然り、良寛然り、愚庵然り――而してそれらの仲間にあつて、彼は正に玄關番を勤め、時には賄ひの役をも勤むべき最適者であるやうにさへ思はれるのである。

「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云ことなし。おもふ處月にあらずと云ことなし。」

かう芭蕉が說破した、其の風雅の道こそ、同じく兼好の辿り入らうとした道ではなかつたらうか。

「山は靜にして性をやしなひ、水は動いて情をやしなふ。靜動二つの間にして棲を得るものあり。」

と芭蕉が仲間の一人を賛した――その靜動二つの間こそ、同じく兼好の得やうと求めた境地ではなかつたらうか。

「よろづの事は、頼むべからず、愚なる人は、深くものをたのむ故に、恨み怒ることあり。……(中畧)……身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければ、さはらず。前後遠ければ、ふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ゐること少しきにして、きびしき時は、物に逆ひ爭ひてやぶる。寛くして柔なる時は一毛も損せず。」

かう彼は云つてゐる。そして更に

「人は、天地の靈なり。天地は、かぎるところなし、人の性、何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒、これに障らずして、物のためにわづらはされず。」

とまで說きすゝめてゐる。

此の何ものをも頼まずして、而も何ものをも樂しむことの出來る寛く柔かな心、天地の如く寛大にして窮らざる心、それが彼の求めた最後の心境であつたらう。よろづのものを「よそながら見ること」の出來ぬ人を憐れんだ彼は、又何につけても「物をのみ見んとする」人をも憐れみ、何事につけても「わりなく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見んとする人」即ち無理やりに見ようとする人をも憐れんだ。そこにもおぼろげながら彼の人生觀照の態度を窺ふことが出來る。

彼はおそらく極めて寛やかな柔らかな心と纖細な官能との持主であつたであらう。しかも何事にもこだはることのなかつた彼は、おそらく如何なる人の友ともなり、如何なる人をも友とすることの出來た人であつたらう。往々彼を以てすね者と見、皮肉屋と見るやうな人のあるのは、私たちにはどうしてもわからない。少なくとも『徒然草』を通して想像した彼には、寸毫の皮肉も、意地惡さも見出すことは出來ない。彼は斷じて白眼にして世を睨むやうな人ではなかつたと信ずる。

たゞ私たちの彼に惜むところは、氣品の高さを缺いて居た點である。又寛やかさ柔かさはありながら、靜けさと潤ひとに於て缺くるところある點である。彼はよく人生の味に徹した。しかし、その底に横はる靜けさを味ふことが出來なかつた。閑を味うて寂に徹しなかつた。彼は又何ものをもよく味はう事が出來た。しかし、同時に何ものをもしみじみ味ふことが出來なかつた。そこがどうしても私たちをして頭を下げさす事の出來ない彼の弱點であるやうに思はれてならない　そしてそこが西行、芭蕉、良寛などゝ彼との異るところでもある。

『文學に現はれたる我が國民思想の研究』の著者が『徒然草』の著者を評した言葉の中に次の如き一節がある。

「一體兼好は世すて人になるには餘りに人間味に富んでゐたのである。此の點は西行と同じであるが、其の違ふところは西行は眞に出家の境地に入つて、そこで人間をなつかしみ、兼好は(法師の形になつた後も)常に心を世間に置いてそこから出家をなつかしがつてゐるところにある。「すめばまたうき世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」といふのも、やはりそれがためであつて、到るところを修業の天地とし、何事に對しても美しさを發見する西行にはこんな心持はなかつた。人間味に富んでゐるのは甚だ結構であるが、兼好は西行のやうに世間味をすてずしてそれに執着してゐた。……要するに兼好は初から眞に世に背くべき人では無く、其の出家はたゞ「世すて人」と云ふ境界が趣味の上から興味をひいたからであらう。」

これには大體に於て私たちも同感である。たゞ兼好を以て世間味をすてずして之れに執着してゐたと云ふ觀察は、そのまゝ受け入れがたい。いかにも彼はよく世間の味をも味ふことの出來た人であつた。しかし、それに執着してゐたとは考へられない。執着する人にはよく味ふことが出來ない、執着はこだわる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことである、沒入することである、囚へられることである。私たちは兼好を以てこだはつて居た人、沒入してゐた人、囚へられてゐた人とは思ふことは出來ない。囚はれずして味ひ、こだはらずして樂しみ、沒入せずして遊ぶ――そこに兼好の獨特の境界があつたのではなからうか。而してそこへ到るべき一種の修養に、彼は心を寄せてゐたのではなからうか。即ちそれは趣味門の修養とも名づくべきものであつた。それの價値批判は別として、此の趣味門の修養を暗示してゐる一點に於て、私たちは『徒然草』一卷に特殊の意義を求めてもいゝと思ふものである。

『徒然草』によつて暗示されてゐる一種の趣味的修養――これは前にも述べた如く、後世芭蕉によつて高調された風雅の道と一味相通ずるところがないであらうか。「西行の和歌に於ける宗祇の連歌における、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其の貫通するものは一なり。」と芭蕉の道破したその風雅の道――私は敢て兼好みづからもその奥を極め得たと云ふのではない。しかし、それらの人々の會した一堂に於て、少なくとも玄關番をつとめ賄役をつとめ得る程度のところまで彼は到達して居なかつたであらうか。評者は兼好の趣味を以て實生活から遊離したものであると論じ、「現實の生活から自然に生じた趣味でない趣味は特殊の修養を要し、從つてまた矯飾に陷り易い」ことを說き、兼好に此の矯飾ともいはゞいふべき修養を尚ぶ姿の見える事を述べてゐる。いかにも私たちにも『徒然草』に現れた兼好その人の趣味が、多分に讀書によつて養はれたものであることを認める。しかし、いかにそれが讀書の感化によつて養はれたものであつたとしても、既にそれが彼の內的生活の要求となつてゐる以上、必ずしもそれを彼の實生活と緣のない借り物の矯飾とのみ解することは出來ない。私たちが兼好に對して慊らないところは、彼がさうした趣味の人であつたと云ふ點にはなくして、むしろ彼がさうした趣味の門に入りながら、その趣味門の修養を徹底させることの出來なかつた事にある。

兼好の出家はたゞ「世すて人」といふ境界が趣味の上から興味をひたいからであらうと云ふ論者の說にも、私たちは同感である。しかし、それだから彼の生活は結局一種の遊戲生活に終らざるを得なかつたのだとは、私たちには斷定しがたい。私たちはそれに對しても同じく兼好の趣味生活の不徹底を惜しむ心が先に立つのである。芭蕉を評して彼は趣味の門よりして趣味の太源に道交した人であると云つた人があるが、その意味に於て兼好は趣味の門に入りながらつひにその太源に到入することの出來なかつた人である。彼が趣味生活の修養を云ふ時、それが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ともすると矯飾らしく見える傾のあるのは、その修養が芭蕉のそれの如く利休のそれの如く徹底してゐなかつたからである。

要するに兼好の不徹底は、彼れが趣味の人であつたが爲めでなくして、むしろ趣味の修養に徹し得なかつたが爲めである。趣味に生きて、趣味の太源に生きなかつたが爲めである。閑に入つて、寂に到ることが出來なかつたが爲めである。彼の纎細な趣味性を以て味うた自然と人生のこまやかな情趣には、今なほ滅びない表現を得て居る。しかも、そこに味はれる「物の哀れ」の底に、嚴肅なる一味の寂が缺けてゐる。この寂の一味を缺いてゐるばかりに、彼はつひにその道の達人たちの列に入ることは出來なかつた。「寂は風雅の體なり」とは蕉門の信條であつた。兼好は風雅の道に入りながら、つひに此の「體」を得ることが出來なかつたのである。

「兼好と頓阿と平生歌を詠みしに、景色の歌は頓阿まさりしかど、まことの佛心無常を詠みしは兼好にしくものあるべからず」(崑玉集)とまで云はれたところから考へると、その當時に於ける佛道修行者としても、彼は相當に世間から敬意を拂はれてゐたことはたしかである。しかも、彼は敢て一個の遁僧として高く自ら持し、背きて獨行ひ澄ますべく、あまりに豐かなる趣味性を惠まれてゐた。けれどもその豐かなる趣味ゆゑに、彼を以て偏に世間味に執着してゐた人と見るのは、當つてゐない。むしろ其の纎細な趣味性ゆゑにこそ、彼は普通の佛者の味ふことの出來ない物の哀れ、自然と人生とのわびしく靜かな味はひをも深く味はふことが出來たのではなかつたか。

「花はさかりに、月はくまなきのみ見るものかは」の一段の如き、「世は定めなきこそいみじけれ」と云ひ「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし」と云ふ如き、「神佛にも人のまうでぬ日、夜まゐりたるよし」と云ふ如き、「秋の月はかぎりなくめでたきものなり、いつとても月はかくこそあれとて思ひわかざらん人はむげに心憂かるべきことなり」と云ふ如き、どうしてこれが世間味に執着してゐる人の味はひ得るところであらう。たゞ惜むらくは彼はつひに西行の如く芭蕉の如く此の一味の底に徹することが出來なかつたのである。

子供のうた

此の頃童謠と云ふものが、到るところで盛に行はれてゐるが、さう云ふ作者の明らかに知れてゐるのでなくて、いつ誰が歌ひ出したかわからずに子供達の間にうたはれてゐる謠のうちにも、なか〱捨てがたく忘れ難いものの多いことは今更云ふまでもない事である。旅中、殊にしぐれなどに街上にうたふ子供の唄

を聞くことは、たまらなくあはれ深いものである。

私は嘗て富山の町の或る旅館の二階の窓から、夕ぐれの街上に大勢の子供が集つてこんな歌をうたつてゐるのを聞いて、ひどく旅愁をそゝられたことがあつた。

高山屋、お講
お講にまゐらつしやれや
今はや　御坊はんな出やはるぞ
はよらとはよらと
まゐらつしやれや

これを子供たちはとある家の前で二三回繰り返しうたうたかと思ふと、皆一緒に驅け出して行つて少し離れた他の家の前でうたふ。さうして次ぎ〳〵に同じ事をふれ廻るのであつた。つまり「高山屋と云ふ家に今夜お講即ちお說教がある、そのお說敎を聞きに來てください、今もう坊さんが講座へ出るところだ、はやくはやく行つてください」と云ふ意味の觸れ言葉なのである。それを子供たちはいつしか謠にしてしまつて、一味の哀愁を帶びたやうな調子で合唱してゐるのである。それを聞きながら私はこんな事を思つた。

「子供と云ふものは妙なものだ。かうして用事の口上をさへ、そのまゝではつまらないものと見えて、いつとなしに謠にしてしまつて、面白がつてその務めを果して歩いてゐる。かうして何事も樂しまなければ滿足しないのだ。」

私の町の子供たちの間にも、私たちの幼い頃にはなかつた歌が一つ此頃盛にうたはれてゐる。それは雷の鳴る時に雁木下などに集つてうたふのである。その歌は

雷さん、
雷さん、
信州の方へ
行きやれ、
行きやれ。

と云ふのである。「信州の方へ行きやれ」は少々自分勝手に聞えるが、それにしても面白い事をやり出したものである。要するに彼等は雷が怖いのである。怖いから彼等は何とかしてその恐怖から脱れようとしてこんな歌をうたひ出したのである。しかも、彼等の其の恐怖から脱したい切なる念願を、かくの如く一篇の歌にして、しかも極めて元氣のいゝ快活な節でそれを合唱することによつて、彼は單に其の恐怖から脱れるばかりでなく、寧ろ反對に大なる愉快を感じてゐるのである。即ち恐怖を脱れようとする消極的な企てが、その爲めに却て積極的な愉快な遊びとなつたのである。子供の生活の貴さはそこにある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

天の音樂

一茶の『おらが春』の中にこんな事が書いてある。私の好きな文章の一つである。

「正月元日の夜の丑刻よりはじまりて、打つゞき八日目々々々に天に音樂あるといふ事、誰言ふともなく言ひ觸らして、いつ〳〵の夜、そんじよそこにて、しかと聞きしといふ人もあり。また吹く風のあとなし事とけなす者もあり。其の曉東西南北にぱつと弘がりぬ。つらつら思ふに、全く有りと信じ難く、又ひたすら無しとかたつけ難し。天地不思議のなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞ひしためしなきにあらず、今此の天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優して樂しむならめ、それを聞き得ざるは、其の身の罪のほどに因るべし。何にまれ悪しからぬ取沙汰なりと、三月十九日夕過ぎより、誰れ彼れ我庵につどひて、おのおの息をこらして、今や〳〵と待つうち、夜はしら〳〵明けて、窓の梅の木に一聲あり。

今の世も鳥は法華經啼きにけり

いかにもそれは味の深い經驗であつたらうと微笑せずにはゐられぬ。

これとは少し趣は異つてゐるが、私にもそれに一寸似た經驗がある。それは私たちの幼い頃、たしかな日は忘れたが何でも毎年八月の幾日かの夜、龍宮から御燈明が黒姫山の神様へ捧げられると云ふ事が、このあたりの一般の人の迷信となつてゐた。その晩には龍宮からの使が海の果から現れて、空の上を通つて黒姫山の頂まで行く。その赤い燈明がありありと見える。かう云ふので、私達は毎年その晩に濱へ出てそれを拜む爲めに夜を更かしたものであつた。

けれども、どうしたものか、私たちは一度もそれらしいものを見たことがなかつた。見たことはなかつたが、私たちは決してその眞實を疑はなかつた。單にその眞實を疑はなかつたばかりでなく、その夜は何となくいつもと氣持が違つてゐた。日頃そんなに氣をとめて見なかつた星の美しさが、不思議とその晩には感じられた。海岸の神秘にも私たちはその事のおかげで心を寄せた。少年時代の夢の世界が、その爲めにどんなに豐富にされたかわからない。

そんな迷信も今日では全くなくなつてしまつた。但しそれがいゝ事であるか、悪い事であるか、私たちには俄に判斷する事が出來ない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反古あさり

一定の研究目的を立てゝのそれは無論であるが、たゞ漫然と古い反古をあさつて見ることも、時にとりての大きな樂しみの一つとなるものである。

私は此頃土藏の隅に垢まみれになつてゐた反古葛籠を整理した際、その中に明治五年に發行された「北湊新聞」と云ふのゝあつたのに、とりわけ心を惹かれた。半紙十枚綴の雜誌體のものである。表紙には官許北湊新聞第三號、明治壬申四月、定價三錢としるされてあるのを始めとして、同第四號、第五號と三冊だけあつた。北湊は新潟を指すので、發行所は新潟縣活版所である。私はこれまで明治五年頃既に新潟に新聞のあつたことは少しも知らなかつた。明治五年と云へば東京で郵便報知新聞の創刊された年である。おそらく其の頃これだけ形の調うた地方新聞は全國に幾つもなかつたであらう。

兎に角好奇心の動くまゝに私はその頁を繰つて見た。第三號の最初の頁には新潟市の人口調査の事が書かれてあつた。

「當港ハ戊辰以來日ヲ追テ開化シ人々競フテ廢地ヲ開墾シ家居ヲ營ミ隨テ人口モ增加ス三月中檢査ノ人口左ノ如シ

人口三萬千三百八十七人

内男一萬三千九百三十九人

女一萬七千四百四十八人」

ところが、その翌月發行の第四號にその補遺として「當港藝妓の員數五百人餘同賣婦凡千五百人餘」と云ふ調査が發表されてゐる。當時の新潟が女の總數一萬七千四百四十八人のうち二千人餘が藝娼妓であつたとは、流石は昔から色の港と云はれて來たゞけあると、驚歎せざるを得なかつた。

第三號にはなほ次のやうな滑稽な記事もあつた。

「〇政府ヨリ衆民ノ乘馬ヲ御許シノ後ハ借馬モ出來里正ハ勿論市中ノ者往々馬ニノル此頃ニ到リテハ最モ盛ナリ或人曰カク乘馬ノ盛ナルハ人民ノ不幸ト云ヘシ我人ノ馬ニノルヲ見ルニ多クハ管内ノ里正御用ニ出向キシ者或ハ市中ノ子弟遊興ノ餘リニスギズ右等ノ者馬ニノル毎ニ二三或ハ五六ノ邊ニハ必スシモ落馬ス只落馬スルノミナラズ下部ニ疵傷ヲ受ケ鼻ニ疵ヲ蒙ムルサレモ猶馬ニノルヲヤメザレバ一家ノ生産ヲノリツブスニ到ルベシ然レバ馬ニノルニハ夫々法度アリテ輕卒ニナラヌ者也モシ無法ニノレバ終ニハ身モ家モ共ニ落馬スルナリトアル老婆心ノ人評論セリ」

こんな事が眞面目に論議されてゐたと云ふことは、今日から見るとあまり馬鹿々々しくも思はれるのであるが、しかし今日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の農村にもこれとよく似た事實のあることを思ふと、さう笑つてばかり居れないやうな氣もするのである。今日の農村に於て到るところに最も目に立つ新現象の一つとして、自轉車流行と云ふ事を第一に數へることの出來る事實が卽ちそれである、五十年前の田舍では猫も杓子も馬に乘ることが流行した。五十年後の今日の田舍では、權も八も自轉車に乘る事が流行してゐる。しかも五十年前の新聞に「モシ無法ニ乘レバ終ニハ身モ家モ共ニ落馬スルナリ」と慨嘆されたと同じやうに、今日の農村でも「あすこの何某は自轉車一臺で家を潰した」とか「そこの何某は自轉車から落ちて足を折つた」とか云ふやうな噂を頻繁に聞かされてゐる。「自轉車一臺で身代を潰す」と云ふと妙に聞こえるが、實は自轉車に乘ることをおぼえたお蔭で町通ひがたやすく出來、町通ひがたやすく出來るやうになつたお蔭にいろいろな遊びもたやすく出來るやうになり、その結果つひに「家をも潰す」事になると云ふわけである。つまり五十年前の馬が、五十年後になつて自轉車に變つたまでのことで、その間何等人心の推移の認むべきもの丶ないのは妙である。

なほこんな記事もある。

「客有リ船頭ヲヤトヒ川アソビヲナス互ニ酒ヲ傾ケ雜談笑語最モ高聲ナリ川筋見張番所ニテ咎メケレバ船頭上陸シテ謝スレモ番人許諾セズ時ニ醉客鴨一羽ヲ携ヘ舟ヨリ上リ傍ニ置キ船頭ト共ニ謝ス番人忽チ恕セリ醉客船頭ト共ニ歡ビ鴨ヲ携ヘテ舟ニ乘リ悠然トシテ去ヲ見タリトアル人イヘリ」

これも今日なほいたるところにある圖である。

更にこんな記事もある。

「皇國人ハ雷同ヲ免ル能ハズ西洋人ニ接シ益アル所長ズル所ハ勿論學ブベシ且器械兵製其他百般ノ工藝皆精妙ニ到ラザルナシ眞ニ學ブベシ今人徒ラニ其皮相ヲ學ビ其骨髓ヲ學バズ只冠服言語風姿ノミヲ學ブト雖モ何ゾ實益アラムヤ且ツ彼國ニ行フテ利ナルアリ我國ニ行フテ不利ナルアリ固ヨリ風土人情異ナレバ一樣ナラズ我思フニ當今西洋ノ英傑我國ニ來リ政務ヲ爲サバ彼國ノ政ヲ以テセズ必ズ其風土人情ヲ詳カニシ機ニ應ジテ爲サム然ルニ皇國ノ人我固有ノ美ヲ擇バズ容シク彼ノ鼻息ノミヲ仰ヒデ西洋々々ト云ハ不見識ノ至リ也ト或人論セリ」

これも少しも今日と異つたところがない。

ところが可笑しいのは一方にかう云ふ記事を掲げて置きながら、同じその號の中に次の如き記事が堂々と併せ掲げてあることである。

「當港モ頃日ハ頗ル開化スト雖モ自然ノ弊風ニテ猶依然タル

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ハ人家ノ戸口ニ小便ツボヲ置クト二階先ニ古コモ古スダレ或ハ衣服ノ洗タク物等ノアルトナリ願クハ右等ノ風習ヲ一洗シタシ開港場ノ見苦シキハ外國人ニ對シ恥ル所ナリ」

しかし、これも今日と何の異るところがない。

○

ついでだからな特色のある記事二三を抄錄して置くことにする。

○村上管内岩質村農民由五郎ナル者極メテ貧窮ニテ糊口ノ策ナク自身ノ妻ヲ同村太郎右衛門方エ下女ニ致シ置キ候處右太郎右衛門悴某ト密通ノ由風聞アリケレハ由五郎大ニ怒リ四月十九日夜己レカ妻ノ寢處ヘ入リ引捕ヘ屋根切鋏ヲ以テ口脇並ニ咽喉ヲ挾ミ切セシニ直チニ絶命ニ及ブ夫ヨリ太郎右衛門悴ヲ厨刀ニテ咽ヲツキケレドモ薄手ナレバ治療モ行屆ク由同二十日妻ノ死骸ヲ取收メノタメ近親共集リ候處由五郎如何ト思ヘケン便所ニヲイテ腹ヲ突キ死セシ由檢使下リ取調べ候處全ク密通ノ事無之趣ナリト風聞セリ

記者曰ク凡ソ人タルモノタトヒ小事ト雖𪜈輕忽ニスベカラズ況ンヤ大事ヲヤ且ツ世上ニハ必ズ浮說流言アルナリ苟モ是レヲ信ジテ其事實ヲ問ハザレバ大事ヲ誤ル事往々アリ一時ノ浮說ヲ信ジテ人倫ノ大ナルヲ傷リ剩サヘ二人ノ性命ヲ損害ス嗟呼由五郎ノ愚モ亦甚シト謂フ可シ

○アル日二三ノ客集リ御布告書ヲ讀ミ神社佛閣女人結界ノ場所自今登山勝手タルベシノ文ニ到リ一人曰ク神佛問テコタヘズ靈山ニハ往古ヨリ必ズ天狗ナド唱ヘ候者種々ノ奇怪ヲナスナレバ今免シヲ得レバトテ誰カ先進シテノボルモノアランヤ一人曰ク君ノ言然リサリナガラ世風日々新タナレバ天狗モ固陋ヲ去リ開化セシナラント一坐大ニ笑フ

○割野村清作ナル者是迄數度他家エ緣付候處皆離婚ニナリタリ一日清作如何ト思ヘケン己レガ家ノ名跡ヲ奪ハント惡念ヲ生ジ昨未年四月十五日夜其兄ヲ鎌ニテ咽喉ヲ切リ殺シ他ヨリ豪盜ノ入テナセシ風體ニ致シ居候ヘ𪜈天網ヲ免ル能ハズ露見ニ及ビ捕縛セラレシ處本月十日刑罰相極マリ梟首申付ラレタリ

記者曰凡ソ人タル者ハ一天地ヲ備ヘ尊敬愛恤ノ心ナキハ非ズ然レ𪜈瑣小ノ利一箇ノ私念ヨリ政府ノ典刑ヲ犯シ人倫ノ大道ヲ傷ル彼ノ清作ナル者今日文明ノ世ニ生ジ自ラ奮起シテ事業ヲナスニ志ヲ立ズ已レガ兄ノ家督ヲ奪ハントシテ竟ニ梟首セラル、ニ到ル俗間ニハ兄弟ノ利ヲ爭ソフ者往々アリ恐レザルベケンヤ愼マザルベケンヤ

○村上出張廳管内岩船郡荷荷村農太郎八藤平利三郎六郎右衛

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

門ナルモノ首謀ニテ村内若連中ト唱ヘ戸主タリモ四十以下ノモノ皆連中ニ列シ頗ル威權ヲ奮ヒ同農榮藏並同人親類八右衛門勘二等ニ無謂儀ヲ言掛ケ財物ヲ掠メ取リ候風聞アリケレバ同廳ニ於テ召捕ヘ白洲エ引出シ糺問ニ及ビ候節右四名ノモノ紙ニ包ミシ物ヲ出シ噬ミ居ルヲ見テ當直官吏怪ミ何物ナルヤヲ問フ彼ノ四名戰慄低頭漸ク言ヲ發シテ曰ク節分ノ豆也ト猶其故ヲ問フ曰ク是ヲ噬ムトキハ膽ヲ强クシ官ヲ恐ルヽコトナシ依テ銘ニ懷中シ銘々カミ居ルトノ陳述セリ實ニ僻土荒陬ノ小民其罪惡ムベシ其愚ハ憐ムベシ今日都下開港場ノ民情ト霄壤ノ違ヒアリ畢竟教化ノ未タ到ラサルナレバ地方官吏此際ニ於テ開化ニ進歩スル樣深ク注意シ先教後刑ノ處置アリタキコトナリ

○先日出火ノ節（これは明治五年四月晦日に於ける新潟大火の記事の最後の一節である）湊町小杉喜右衛門借屋小島ノセナル者兼テ儲畜セル楮幣八十圓戸棚ニ差アル處急火ノ事故イソガハシク懷中シ其他ヲ問ハズ加勢ノ者何等ヲ持運ブヲトヘハ曰ク我既ニ大切ノ物ヲ懷中セリ其餘ノ家具ハ可然持運ビ與候樣申シノコシ親族ノ方ヘカケ行キ候ヘバ親族ノ者家財ハ如何ト問ヘバ曰ク我大切ノ物ヲ懷中セリ家具ハ加勢ノ人ニマカスト親族ノモノ曰ク然ラバ其大切ノ物ヲアヅカラン此非常ニ紛失セバ詮ナシト云フノセ然リトテ懷中ヨリ出セバ楮幣ニ非ズシテ若狹屋製ノ半襟ナリコハ如何ント云ヘド家ハ燒失セリ只茫然ノ體ナリト風聞アリ」

一々の記事の最後に「記者曰ク」と改まつて論評を加へてゐるところなどは最も面白い。しかも、その記者の論評そのものがいかにもよく其當時の常識の一面を代表してゐるのは、一層深く興味をそゝるものがある。最後に採錄した記事に至つては、正に通俗的な喜劇の好材料であると云つてよい。

○

なほ今一つ左の如き振つた牛乳賣弘めの廣告のあつたのが際立つて目についた。

○今般當港白山浦三獻ニ於テ牛乳ヲ賣弘メ候間望ミノ御方ハ御入來可被下候牛乳ノ功能並ニ定價左ニ申上候以上

佐州相川病院牧牛社出張所

牛乳効能

血液ヲ増シ精神ヲ調ヘ枯渇虛損ノ皮膚ヲ滑澤シ苛痒ヲサリ胸中ノ鬱熱ヲ除キテ肺病勞咳呼吸促迫等ノ君藥タリ咯血ヲ潤補シ下痢ヲ内托シテ終ニ是ヲトヾメ老人又ハ痼癖ニテ腸液乾燥シ大便ノ秘結スルヲ調順シ能ク是ヲ通利セシム凝氣ヲ追フテ外表ニ發スルノ能アリ又虛弱ニモトヅク經久難治ノ瘰癧ニハ生

肉ノ妙機ヲ助ク中風癲癇解憂心勞スル人常用シテ能順氣ノ功ヲ奏ス總テ滋養補給ノ缺込ニ起因スル諸症ニ神驗アル事其ノ蹟勝テ數ヘ難タシ。

なほ面白い記事が少なからずあつたが、これ位にして置く。

かうした事を見るにつけても、今から更に五十年後に於て、現在私達の眞面目に讀んでゐる新聞記事の如きも、どんな風な感じて讀まれる事やらと云ふやうな事をも考へずには居られない。無論それは新聞記事に限つたことではないが。

○

なほその折整理した反古葛籠の中に、「風聞話錄(丙)」と表紙にしるされた古帳面が一冊あつた。これは先年私が或る宿屋の主人から「これは昔どこかの客人が置き忘れて行かれたものだと云ふのですが何かの御參考にもなりましたら」と云ふことで貰つて來て置いたものであつた。筆者は「勃𡈽窠主人」とばかりで、その如何なる人であるかは少しも解らなかつた。何でも文政七申年六月から同八酉年八月頃までの間に見聞した事を、何と云ふこととなしに無暗と書き列ねたものである。

開卷第一頁に書いてあるのは、左の如き狂詩であつた。

新規通用一朱金。　居レ下何知論二上心一。
藝者裁試客人細。　出家貰悟懷方吝。
大風取レ釣鰻飯價。　堅勤爲レ禮按腹針。
紺布猿桃拂レ勤者。　懷中搜盡揮レ聾尊。

右題一朱金

から云つたやうな當時流行したらしい狂詩、落首の類はその他にも幾つとなくしるされてあつたが、その中でいくらか私などにも面白く感じられたのは「題勤番壯士」と題された左の一篇のみであつた。

今春出國初勤番。平日不忘君恩深。身纏子織木綿羽。腰帶短刀有京柄。常言戰場討死事。身誇節劍免許話。軍書讀盡貯胸中。甲越陣法不入氣。角力番附少々好。芝居看板曾不知。亦言御國殺生咄。旗元弓術不足取。長屋小窓終見飽。遙懷故鄉妻子情。蘚散思立金龍山。金龍山中美人多。前茶香泉楊枝店。楊弓渡戲竹細工。人言假宅細見許。密窺格子暖簾透。生涯奇談一屆間。一屆二屆又三屆。五明雅言漸々覺。八齊金波皆知音。口識流水隅田川。日是廿齊最中月。綺綿頭巾卷首長。龍紋羽織挿腰短。文晁摺描見胴裏。田園卿書殿中扇。古渡更紗烟草入。新吹南鐐通用過。初知東都繁榮地。當時囊中白無丸。差替大小飛入藏。拜領紋服渡他人。當番賴合亦見合。積氣頭痛二日醉。一年物成半月盡。百日說法屁一發。

何よりも面白いのはその頃盛に來たらしい居續その他の異國船

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

についてのさま〴〵の聞書である。その一例をあげると、

一文政七申年五月二十八日

イギリス人渡來書付

水戸殿家老中山備前守領分常陸國多賀郡大津濱え傳馬船二艘人數十二人乘組上陸いたし候間水戸殿並中山備前守より江戸表より御屆相成候間御代官馬場善吉天文方高橋作右衛門手附安藤左內吉雄忠次郎其外御普請方役人衆差添彼地へ被遣候

イギリス人行狀

一烟草を喰ひ又日本人の如く火を附て烟を吸ひ吞み都て燃氣のものを喰はず生大根ねぎをくらひ酒は日本茶碗樣のものにて一ぱいづゝ吞て干鰯(ほしか)を好み喰ふ飯を喰ふに箸を持ずして腰よりさじを出してすくひ喰ふ也雞家猪(ぶた)をこのみ喰ふ思ひの外少喰也飯鉢一つへ大勢集りてさじにてすくひ喰ふ也膝を折らず辭令等の禮儀は知らずと見へて食事に望んで我がちに喰ふ唯殊樣なるは其親方の喰はじめるを待ばかりなり小便をしても決して手を洗ふ事をなさず雪隱の出入又は外出にも沓をぬぐ事なく日本人よりも何れも鼻高く目の色白し髮毛のびず其色赤し八物至て大きく殊の外臭き事云ばかりなし親方は羅紗の衣服を着し其外の者共は紋羽樣の衣服を着し七十二人何れも年齢二十才より四十歳位に見へ候者共ばかりなり右の內異龠人一人宛交り居候

イギリス人認候文字(文字器)

ワン(一)チウ(二)ツレイ(三)フアウ(四)ハイ(五)セキ(六)セヒン(七)アイ、(八)ナイス(九)テン(十)

青染塗傳馬船チヤン諸乘組五人何れも親方

五人名前

ケレス。キヨホウ。ソトニシ。テウロウ。フシラウ。

鼠色塗傳馬船乘組チヤン諸七人乘組但し內一人親方外六人は水主と相見へ候

キイシツ。ケンヒサン。コリメツ。ケンヒス。ナソル。フラタ。フララ。

元船長サ凡六十六間余巾二十五間餘

右の者書通を以て私共儀はイキリス國の者共にて國は廣しといへども米穀すくなく甚困窮仕候何卒船中の珍器と米穀を替被下度との願也江戸表御出役馬場善吉殿返答には米穀を外國へ遣候事我國の大禁也强て願ふにおいては弩炮を以て船を碎候也早々日本の地界を離れ去るべしと申渡退去過日中山備前守殿役人衆彼者共を召出され先刻其方共へ御目代より仰渡候通り都て五穀を交易する事此國にては大に禁しある也早々歸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

船出帆致すべし乍去遠路を渡海來候故此所の領主中山備前守殿憐愍を以て左の通被下置候也ゆめ／＼此後日本の地界へ來るべからずと嚴重申渡

一酒一樽。一雞二十羽。一枇杷一籠。一大根(但五本詰)二十把。一薩摩芋五貫目。一梅干七升。

右之通中山備前守殿より被下置請取申候イキリス人去ル六月十日常陸國大津濱より歸船出帆致候由

同十三日馬場善吉殿承寫申候

なほ此の事については、更に他の人よりの聞書をなが／＼と書いてある。それにはイギリス人と書かずに唐人と書き、船の事を唐船と書いてある。しかも彼等の行状については、こんな事をさへしるしてゐる。

「唐人共の寢すがたを見屆候處犬のやうに人の股へ首を入れて寢るもあり足を〇〇して寢るもあり見苦敷次第に相見候。言語は何れも早口にて尻際なしに〇〇〇とんと相分不申候」「濱へ莚を敷指圖致候處承知不致候ニ付濱近き家を借食物あたへ候處何れも米の飯は餘り好不申樣白米一升二合五勺の飯を十二人にて五合飯程餘し候肉食樣を好候振に相見申候乍去其不行儀成る事誠に犬の如くに御座候先座敷中へ飯をこぼし踏散し口にたばこをくわへかみしめて唾を座敷中へ吐き大便にまゐり候てもはだし足にて參り其足も洗はず手も洗はず食事など致候むさき事言語に難盡候……」

なほその聞書の中にも、所謂唐人語のいくらかゞ記されてゐる。

一(ハン)。二(テフ)。三(フレイ)。四(フョウ)。五(バイ)。六(セキ)。七(セヒン)。八(アイ)。九(ナイタ)。十(ニン)。烟筒(バイ)。開(カンツ)。竹(コンボン)。豆(カナハシ)。耳(イタル)。聽聞(ヒイカ)。筆(ワリイス)。目(アイス)。乳(テイ)。椅(コソム)。脇指(シヤウリ)。鏡(ロフケンウイス)。話(ランフ)。首(フラス)。茶碗(アウフ)。箱(リンタン)。毛(ヌキトイシ)。臍(アイホウ)。炭(イラネンカ)。陰(ホレツカ)。繩(コフリ)。

就中一、二をテウ、ハンと聞いたなどは最もおもしろく感じられる。

なほ此の「風聞語錄」の中には外船漂着又は渡來の記事が幾つもあるところを見ると、此の筆者ばかりでなく其の頃の人々の好奇心を惹いた最も顯著な事件が其事にあつた事が明らかに知ることが出來る。此の手錄の筆者が何人であるかは知るよしもないが、それが越後の片田舍の宿屋に置き忘れられ、百年餘も經つてからかうして私の好奇心をよろこばす材料となつてゐる

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

――そんな事を考へると全く不思議な感にうたれもするのである。

○

更に私は同じ反古葛籠の中から、澁谷秋守と云ふ此の土地の昔の國學者に宛てた城戸千楯の店からの書翰一通をさがし出した。城戸千楯は京都の國學者で、書林を業としてゐた人である。その手紙にはその當時に於ける諸大家の短冊の相場が書かれてゐる。その點が特に私の興味を惹いたわけである。短冊の直段付の個所だけ抄錄して置かう。

直段付

一　本居懷紙　代金一兩前後
一　同　短冊　代金一歩前後
一　蘆庵　同　代金二朱前後
　　但し壹歩位ノモノモ在候
一　眞淵短冊　代金一兩程
一　契沖　同　代金一兩程
一　千蔭　代金凡拾匁
一　春海　代金凡拾匁

右之通御座候得ともかづ〳〵類御座候へば若年出來老年出來見事出來等にても直段高下御座候へば大體相場を申上げ候尚又御入用のもの御座候なれば何ほどと申候事くわしく可申上候凡その所は右の通りに御座候眞淵契沖杯は拂底に御座候得は兼て御仰置無之候ては手に入不申候何れも性合は御受合申上候萬一あしく思召候はゞ其直段にて受取可申候此段は御安心置可被下候只今持合居候蘆庵不居翁懷紙御座候へども御使り承り候迄賣拂申候哉難計御座候乍去歌は申上候

春興といふことを　宣長
にしきたす花の盛の春山にながき日遊びくらしつるかな
(此品昨日外へ遣し申候)

住吉にて松を見て　蘆庵
ことのはのかゝれとぞおもふおのかしゝすかたかはれる
浦の松はら
(絹表具かけ物)

其外歌入半切物も御座候其流行に御座候へは僞物多く正筆拂底に御座候儘尚御勘考の上金子御添御注文なされ可被下候右申上度如此御座候　以上

四月十五日　城戸　市右衛門みせ

主計様

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「流行に御座候得ば偽物多く正筆払底」は昔も今も同じことと微笑を禁じ得なかつた。

○

くだらない事だと云つてしまへばそれまでだが、しかし時にとつてかうした反古あさりもなかく興味の深いものである。わけて私達のやうな一年の三分の一以上も雪にとぢこめられて暮す寒國の者には、こんな事でも非常に大きな慰楽なのである。

芭蕉、良寛その他

○

許六に向つて芭蕉が自分の俳諧と其角の俳諧との相違を説いた言葉に「予が風閑寂を好でほそし、晋子が風伊達を好で細し。此細き所予が流なり」と云ふがある。「細き所予が流なり」の一語の味はまことに深遠である。彼は又「俳諧の底をぬく」と云ふことを云ひ、「底のぬけたるものは新古の差別なし」とも云つてゐる。これも亦幽玄の言葉である。

○

一時は芭蕉の弟子になつて後に捨てられた路通と云ふのは、もと乞食であつたと云ふことである

「路通はいづれの所の人なることを知らず。若かりし頃放逸のあまり既に人の軒の下に臥たりしを、翁近江行脚の時、道の側にものいひ、不圖風流の談に及ぶ。幼きより好みし腰折なればとて、一首の歌を扇に書て翁に呈す。昔もいやしからずして

露と見るうき世を旅のままならばいづこも草のまくらならまし

翁感じて曰、我いまだ君家につかへし時、洛の季吟の歌枕をたゝき敷嶋の道にいさなはれしに、今は俳諧のみじかきに遊んで生涯のたのしひとす、汝我に從て來るべしと、師弟のあはれひ深く、其より路通の名をば與へられける」

その事のあつたのは貞享年代のことでもあつたらうか。しかるにそれから數年後の元祿四年（沼波氏編芭蕉全集による）二月十八日に曲水に宛てた芭蕉の手紙の中にこんな事が書かれてゐる。

「路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事推量いたし候其志三年以前より見え來たる事に候へば驚にいたらず候とても西行能因の眞似はなるまじく候へば平生の人にて候常の人が常の事をなすに何の不審か可有御座哉拙者においては不通仕まじく候俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候半はむかしの乞食よりまさり可申候」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おもふに路通は芭蕉に救ひ上げらて後剃髪して佛門に入つたのであらう。それが更に大阪で還俗したらしい。それを又弟子たちの中に何かと批難するものがあつたのであらう。然るに之れに對する芭蕉の態度はこれほどまでに寛大で、これほどまでに冷靜で、これほどまでに無私である。私はこの手紙を讀む度に、かの『奥の細道』の中の越後市振の關で一夜宿を同じうした京まゐりの旅に行く一人の遊女から同伴を頼まれた折の芭蕉の言葉を、思ひ合はさずにはゐられないのである。「不便のことには侍れども、われ〳〵は處々にてとゞまる方おほし。只人のゆくにまかせてゆくべし。神明の加護必つゝがなかるべし。」――何と云ふ厳肅な、貴い言葉であつたらう。しかも、一方にさう云ひ放ちながらも、なほ他方においては「……と云捨てゝ出つゝ哀さしばらくやまざりけり」とその日の日記の端に書き添へずにはゐられなかつた彼であつた。

さうした彼は死の間際に、かの哀れな路通の事を思ひ出した。その事を叙した「花屋日記」の一節は、全く涙なしには讀むことが出來ない。

「伊賀の遺書は手づから認めたまひ外に京江戸美濃尾張もれざる様に遺言し終りたまふに始終は門人中にて筆記す。次第に腰細り痰喘にて□□□給ひけれど次郎兵衛湯にて口を潤しまゐらせけり。稍あつて去來に向ひたまひ先頃賀永阿闍梨より路通が事を仰有り其後汝が丈草乙州等に送りし消息路通とは聞捨てず併少し恐み憚事ありて其外の餘所にはなし侍りぬ。彼が數年の薪水の勞努々忘れ置かず、我なき跡にはおよそに見捨たまはず風流交り給へ、此事たのみ置はべる　諸國にも傳へ給はれかしと言ひ終り給ひて餘言なく合掌正しく觀音經ときこへてかすかに聞へ息のかよひも遠くなり申の刻過きて埋火の暖まりのさむる如く次郎兵衛が抱きまゐらせたるによりかゝりて寢入給ひぬとおもふ程に正念にして終に属纊につき給ひけり。」

芭蕉が此の最後の遺言が、路傍の乞食の群から拾ひ上げて育てた哀れな弟子に關してゐた事、しかもその弟子は師恩を裏切つてとくに彼から去らさせられた者であつた事――此の一事は芭蕉と云ふ人を想ふ上に、私には底到外にすることの出來ぬ大事である。かうした人間愛の尊さの前には、何者か頭を上げ得ようぞ。

○

芭蕉の所謂「細み」を持つた句の適例として路通の「鳥どもゝ寢入て居るか余吾の湖」の一句を擧げ得ることもおもしろい。芭蕉は此の句を評して「此句ほそみあり」と云つたとの事でも

る。路通に對しては芭蕉は特殊の可愛さを感じて居たにちがひない。

○

芭蕉の出家の原因について二說がある。一は主君の死に對する哀傷を以てそれとなし、他はさま〴〵な戀愛關係にそれを見出さうとしてゐる。その點では兼好も甚だよく似てゐる。即ち一は彼が殊の外の恩寵を蒙つた後宇多天皇の崩御の悲しみが彼の出家の原因であると云ひ、他は伊賀守橘成忠の女小辨に對する失戀がそれであると云ふ。

果してそのいづれが眞實であつたかは、今日私たちの到底明らかにし難いところであるが、それにしても彼の出家の原因についての失戀說が、つひに江戶時代の艶文學にまで絕好の材料として取扱はれるに至つた事は、彼の爲めに誠に氣の毒に堪へないことである。例の其磧、自笑の合作に『兼好法師一代記』といふのがある。

その中では出家前の兼好は、すつかり江戶時代の色男扱ひにされてゐる。ある貴き家の姬君との戀のいきさつ、吉田と云ふ遊女との關係、それらを種として起り來るさま〴〵の突拍子な事件、人殺しやら仇討やら奇怪きはまる因果話やら、さま〴〵あつてどゝのつまりが兼好の出家となるのであるが、出家後に於てさへ彼は高師直の爲めに塩冶判官の妻へ送る艶書の代筆までさせられてゐるほどに、徹頭徹尾彼は作者の玩具にされてゐる。しかも、到るところで『徒然草』の文章が引き出されて、自由自在に作者の諧謔の道具に使はれてゐるのである。『あだしのゝ露きゆる時なく』のあの一段の如きすら、巧に作者によつて茶化し了せられてゐる。

「あだし野の露きゆる時なく。鳥部山の煙立さらでのみ。住みはつるならひならば。いかに物のあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。命ある物を見るに。人ばかり久しきはなし。かげろふの夕をまち。夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。つく〴〵と一年をくらす程だにも。こよなふのどけしや。あかずおしと思はゞ。千歲を過すとも一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に見にくきすがたを待ちえて。けいせいの年のよつたと。犬張子のはげたとは。役に立ぬものと。末々あかれて何かはせん。命長ければ恥多し。」

一方に芭蕉が風雅の道の神の如くに崇められてゐた時代にあつて、何百年も前の兼好が今更らしく引き出されてこのやうに戯作者の玩具となつてゐたと云ふ事は、彼の爲めにはあまりになさけない事である。あれほど西行や宗祇を慕うてゐた芭蕉が兼好については何事をも語らなかつたらしい事も彼の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爲めには惜しむべき事である。

○

芭蕉が此の世に遺した最後の句『旅に病て夢は枯野をかけ廻る』は、死の前月淸水浮瀨の茶店で彼が自ら「所思」と題した『此道やゆく人なしに秋の暮』の一句と共に、人生の限りなき寂寞を千古に傳へる尊い表現である。

ところで此の二句とも、同時に一句づゝ類作があつたとは、興味深い事である。卽ち『此の道や……』の句には

　人聲やこの道かへる秋の暮

があり、『旅に病て……』には

　□□□□□なほかけ廻る夢心

があり、いづれに於ても芭蕉は弟子に向つて「いづれをか」と訊ね、弟子たちの意見に從つてそれぞれの一を捨てたと云はれてゐる。私たちはかうして同時に出來た二つの句の一を採り一を棄て去つた芭蕉の心もちを尊くおもふと同時に、そのいづれをも生かして並べ味ふことによつても、深く動かされる何ものかがあるやうに思はれる。

　人聲や此の道かへる秋の暮

　此道や行く人なしに秋の暮

かうしてならべて見ると、別趣の味がしみじみと感じられる。どちらの句が先に出來たかを考へて見るのも意味深いことだ。

　旅に病て夢は枯野をかけ廻る

　□□□□□枯野をめぐる夢心

前の場合とはいさゝか異つてゐるが、これにも亦別趣の味がある。

『旅に病て』の句を弟子たちに示した後で芭蕉は云つた。「はた生死の轉變を前におきながら發句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠めて年もやゝ半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちに今の身の上に覺え侍るなり。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみ思ふは」と。「此後はたゞ生前の俳諧をわすれんとのみ思ふ」の一語に至つて、私たちは肅然として襟を正さずには居られぬのである。尊くも亦悲痛な言葉ではないか。

○

芭蕉を「秋の詩人」と呼んだ人がある。いかにも秋と云ふ感じが、芭蕉にはふさはしいやうに思はれる。彼れの此世を去つたのが秋であり、しかもその場所が旅の宿りであつたのも、彼にはいかにもふさはしい。「秋」と「旅」、おそらく此の二つの言葉ほど芭蕉と云ふ人にふさはしい言葉は少ないであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それに比べると、良寛は正に春の感じである。そして彼の示寂が正月であつたのもふさはしい。

あづさ弓春のちまたに子供等と毬つく法師いまあらなくに

どうも良寛には春がつきまとうて感じられる。

芭蕉の行狀に關するさまざまの記錄を讀んで見ると、いかに彼が人々の間に肅然とした氣分をもたらしたかゞ察しられる。あたゝかな愛を心の底に持つてゐながら、芭蕉は行住坐臥常に秋のしめやかさを以て終始してゐた。彼の前では人々はくつろぎの代りに、いつも肅然たる尊さを感じたらしい。

それに比べると、良寛はいたるところに春風の如きあたゝかさとやはらぎとを漂はせた。彼は常に春のごとく朗らかであつた。人々は彼の前でいかなる場合に於てもくつろぎを感じた。彼に對する時、人々の心は常にあたゝめられ、やはらげられた。彼はいたるところで、あらゆる人に、幼な兒の笑顏の如き姿を以て對した。いたるところで路上の子供等の遊び仲間となる事の出來た彼は、泣く人を見れば共に泣き、笑ふ人をあれば共に笑ふことが出來た。しかも、たゞ獨草庵裡に孤坐しつゝあつた時の彼は、「山かげの岩間をつたふ苔水」のそれの如き寂しさと、淸さとに充ちてゐた。

かたみとてなにかのこさむ春は花夏ほとゝぎす秋はもみぢ

栗

これが彼の最後の歌であつた。彼はもう自然そのものであつた。

蕉芭も尊い。良寛も尊い。

○

冬ごもり、春さり來れば飯乞ふと、草の庵を立ち出でゝ、里にいゆけば玉桙の、みちのちまたに子どもらが、今は春べと手まりつく、ひふみよいむな、汝がつけばあは歌ひ、あがつけば汝はうたひ、つきてうたひて霞立つ長き春日をくらしつるかも。

かすみ立つながき春日を子どもらと手まりつきつゝけふもくらしつ

かうした折の良寛が、やはり私たちに最もなつかしく感じられる。要するに私たちにとりては良寛と云ふ人の感じは、正に春風の感じである。彼と最も親しかつた解良榮重の手記にも「師余が家に信宿日を重ぬ。上下自ら和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖數日のうち人おのづから和す。師と語る事一たびすれば胸襟淸きを覺ゆ。」とある如く、彼がいたるところに春風の如き和氣をもたらした風姿を想像する事は、私たちにとりてもたまらなくうれしくありがたい事である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、それと共に私たちはあの雪の深い山中の草庵裡に、永い〳〵冬の間をたゞ獨寂然と暮してゐた良寛その人の姿をも、しみじみとした心でなつかしまずには居られない。

夜もすがら草のいほりにわれをれば杉の葉しぬきあられふるなり

世をそむく苔の衣はいとせまし柴をたきつつ夜をあかしてむ

いまよりはつぎて白ゆきつもらましみちふみわけてたれかとふべき

白ゆきの日ことにふればわが宿はたづぬる人のあとさへぞなき

くつなくて里へも出ですなりにけりおぼしめしませ山すみの身を

みゆきふる片山かげのゆふぐれはこころさへにぞきえぬべらなる

いひこふと里にもいでずなりにけりきのふもけふも雪のふれれば

山かげのまきのいたやに音せねどゆきのふる夜はさむくこそあれ

このゆふべいはまの瀧つ音せぬはたかねのみゆきふりつもるらし

來る年も來る年も、彼は一年の三分の一以上はかうした寂寥のうちに暮さなくてはならなかつた。その永い孤獨生活裡に、彼はいかに深く生そのものゝ寂味を味はつたことであらう。しかも、その深い〳〵寂寥の底に、彼はまた如何に切に人間のなつかしさを感じたことであつたらう。

み山べに冬ごもりする老の身を誰かとはまし君ならなくに

たまさかに來ませる君にさよあらしいたくな吹きそ來ませる君に

たにの蔭みねのあらしをいとはずばかさねて來ませ杉のかげ道

これは一とせ冬ごもりをしてゐる彼を訪ねて行つた阿部定珍と云ふ友の一人に送つた歌であるが、此の素朴な言葉のうちに何と云ふあたゝかな純眞な愛の心がこめられてゐることであらう。

あつさ弓春になりなば草の庵をとくとひてまし逢ひたきものを

これは彼の弟子貞心尼に送つた歌であるが、こゝに至つてはもう彼の人間愛慕の純情はその極點に達してゐる。

かくの如く世を捨て世にそむきながらも、決して枯木寒巖の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

境界に墮することなく、白眼にして世を睨たやうな心を寸毫も持つに至らなかつた點に、良寛の獨自の面目がある。冬の寂寥の底に居て、春風の如き和氣を養ひ得た――そこに良寛の比類なき尊さがある。

春夜對雪懷友人

春宵夜將半。殊覺寒侵肌。地爐孰添炭。
淨瓶手慵移。徐々整衣裳。幗々推柴扉。
千岩同一色。萬徑絶人行。傍竹鶯有響。
占梅欲尋春。寥々孤興發。與孰慰平生。
所思在天末。援翰聊馳情。愧非陽春調。
謾汚高人聽。

この「愧非陽春調」の一句が、殊に私たちの心を惹くのである。

○

或人の描いた芭蕉像に賛を需められた時、良寛は直に左の一句を書いた。

あら池や蛙とび込む音もなし

彼は又他の芭蕉像に「脱落心身無人委、千古秋風夕陽斜」とも書いた。更に

是翁以前無此翁、　是翁以後無此翁、
芭蕉翁々々々、　使人千古仰此翁、

とも書いた。

良寛も芭蕉と同じく西行を慕うてゐた。彼は西行の

わびぬれどわが庵なれば歸るなり心やすきをおもひでにして

と云ふ歌を好んで口ずさんでゐた。彼は行脚の途中西行の墓に詣でゝ

手折りこし花の色香はうすくともあはれみたまへ心ばかりは

と云ふ一首の歌をも手向けた。

○

信濃で發行されてゐる「美穗」と云ふ雜誌で嶋崎藤村氏の父君正樹翁の歌の多くを讀んで、私は一種の驚きを覺えた。正樹翁はもうとくの昔に物故した人だ。藤村氏の父君にこれほど秀れた歌人のあつた事は、今まで全く知らなかつた。

川の瀬になびく玉藻を手にまかむ春の若葉のなびく玉藻をほとゝぎす木傳ひ來つつ鳴くまでに園生の若葉しげりあひにけり

軒の池の氷はり裂く音すなり曉さむき耳にこたへて

殘されし雪を消しながら春の日に山下背く萌え初めにけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若草は明日かも萌えむ春雨の音を靜けく聞きあかしつつ

野のへには雪ぞのこれる川の瀬のなびく玉藻に春をこそ知れ

秋風の霧吹きはらふ山のはにかがやきいでし朝日子の影

雲さわぐ此のあかつきのこがらしにもみぢしぐれて冬はきにけり

月をだにもらさぬ雲のおぼほしく獨かもあらむ長きこの夜を(贈答)

秋風をうちなげきつつひとりゐて幾夜まちでし月の影ぞも(連夜待戀)

いづれもその格調の高さに於てすぐれてゐる。格調の高さは心のけだかさである。人としての正樹翁の高潔な風格がこれらの歌によつても窺はれる。

やよ春樹よみ書きかぞへいそしみて心すなほにもの學びせよ

これは翁の愛子春樹氏卽ち少年時代の藤村氏に與へられたものである。「心すなほに物學びせよ」の短かい言葉のうちに限りない親の愛がこめられてゐる。

萬葉を宗として而もいたづらに摸倣に隨せず、素朴な姿と高い調べとを以て、獨自の秀でた歌の多くを遺した此の隱れた歌人を知り得たことは近頃のよろこびの一つであつた。しかもその人が島崎藤村氏の父君であると云ふ事に、一層深い興味を與へられたのであつた。

○

良寛の次弟に山本由之と云ふ歌人があつた。良寛出家の後をうけて家職を襲ひ里正と祠官とを兼ねてゐたが、後年彼も亦家を出て晩年には兄と同じく薙髮した。巣守、雲浦、又は無花果苑とも號した。その當時にあつては良寛は單に一個の隱聖として人々から敬慕されてゐたが、由之は國學者として又歌學者として多くの人々から師事されてゐた。今日保存されてゐる由之の歌文は、實に驚くべく多くある。手蹟も亦甚だ見事である。

それにも拘らず今日に於て彼の名聲は辛うじて良寛の弟であつたと云ふ故を以て傳へられてゐるのみで、彼の歌も文も亦皆も、殆んど人心を動かすほどの力を持つてゐない。彼は極めて友愛に篤く、生前良寛とは殊に繁く往來してゐた。しかも、彼の歌にさへも聊かも良寛の影響が認められない。これは更に驚くべき事實である。

私は最近越後三條の加藤家に保存されてゐた由之の日記一冊を借覽することを得た。それは文政三年十月五日、卽ち四年にあまる越前三國に於ける滯在の最後の日に初まつて、文政五年八月七日出羽の旅中とある家の歌會に臨んだ記事を以て終つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐる。その間に彼は一旦歸國したのであるが、そこそこにして再び出羽へと放浪の足を向けたのであつた。此の日記はさまざまの點で興味の多い資料ではあるが、就中私の心を惹いたのは左の一節であつた。それは文政四年六月十六日出羽の旅中に於ける彼の述懐である。

「夕つかたあつさもたへねば、端居してつほ前栽をながめ出してつれ〴〵と思へば、浮たる身にもあるかな。此年頃は所さだめず去年越前にあるかとすれば今年は又出羽にさすらふ。靜なる山住をもせで、かく世にまじらふは、學もなく智もなき身ながらも、詮は名をむさぼる心のえすてかたきなるべし。これをたとへば手の長きをたのむましらがはかりなき月をとらむとかまふるに似たり。もし千々にひとつも取得たればとて死らせなん後は何のやくかあらんなどおもひくしたる折しも、正木の梁と雞冠木の枝に白糸はへ渡しつゝ、おのが身のほどにも似ぬ巧なる蜘のいとなみを見るにも、あへなき世の行さまをおもひて

　夕くれにすかくる蜘のおこなひも風ふかぬまのたのみなりけり」

これを讀んだ時、私は思はず「これだ、これだ」と叫ばずにはゐられなかつた。全くこゝが良寛との最も大きな相違である。あれほどまで親んでゐた山之に、良寛その人の影響の聊かも見られないのは、決して偶然ではない――私はつくづくその事を考へさせられたのであつた。

山之の他にも良寛の周圍には多くの歌人が集つてゐた。しかし、良寛ひとりはそれらの人々とは何等の交渉もなしに、獨で知らん顏をして自分だけの歌をよんでゐた。默つて自分ひとりの道を歩みつゞけた人はやはり強い。

○

桃山の愚庵和尚の遺稿が、近く尺牘その他の增補を得て再版されると云ふ事である。愚庵もやはり獨で默つて自分だけの歌をよみつゞけた人であつた。

私は最近妙な因縁から愚庵の遺墨を一枚或る人から送られた。それには『至道』の二字が書かれてある。愚庵を偲ぶにはふさはしい文字である。

○

『寸陰を惜む人なし』と云ふ『徒然草』の中の一語が、鋭く私の心を打つた。兼好はこの寸陰と云ふ事をつまらなく解釋して「一錢輕しといへどもこれを重ぬれば貧しき人を富める人となす」とか、「刹那おぼえずといへどもこれをはこびて止まされば命を終ふる期忽に到る」とか云つてゐるが、そんな風に『寸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

陰』を徒らに時間的にのみ、分量的にのみ考へないで、其の『寸陰を惜む人なし』の語を味へないものであらうか。それでなければ『遠く日月を惜むべからず、たゞ今の一念、空しく過ぐることを惜しむべし』の深遠な意味も消えてしまふわけである。

「寸陰を惜む」のは「今の一念の空しく過ぐること」を惜むのである。それは「少年老い易く、學成り難し」などの意味からではない。たゞひたすらに「今の一念」を惜むのである。寸陰そのものを惜むのである。

『寸陰を惜む人なし』の一語、何たる鋭さを以て私をうつことぞ。

○

荒涼とした冬枯の野に、畑の麥だけが青々としてゐた。それもやがて眞白な雪に蔽はれてしまつた。麥ばかりではない、深く積つた雪の底には、冬も枯れない草が幾種類もある。草は皆春萠えて冬枯れるものだとのみ考へるのは、型にはまつた人間の觀察である。秋に萠えて夏に枯れる草もある。夏萠えて夏枯れる草もある。荒涼たる冬枯の野にも、求めればみづみづしい若草がある。百花爛熳たる春の野にも、さがせば枯れ行く小草がある。

自然はたゞ默つて一切を懷いてゐる。

中華傳信録

小杉未醒

一　神仙爐

「ちやうそんすうる」、と云ふ、チト酸い味の酒は、其の長閑な醉の裡に、李朝の五百年、高麗朝のその昔までもの、遠々しい情想を含めて居ると人は云ふ。琉球の古酒の如く、伊太利の葡萄酒の如く、支那の老酒の如くば、行旅の酒徒をして、此國にして此の酒ありと、思ひ當り味ひ得る邊あらうも知れぬ、兄と兄の友人とが、私と私の友人との 夜の汽車で奉天に向ふのを送る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とて、京城の泥峴街に程近い朝鮮料理に卓を圍んで坐した、卓上の神仙爐の中に、グツグツと煮ゆるいろ〳〵の物の味や、「きみちい」と云ふ雜多なものを漬け込んだ香の物は、まことに此の「ちやうそんすうる」に出合つた下物である、銀の盃に「ちやうそんすうる」を含んで、近頃暖かい小春の夕方のほろ醉ひに、私はかけ離れた李朝高麗朝に思ひを遣らずとも、十七八年の前、まだ京城には露國黨と日本黨とがあつて、來らんとする大殺の開幕前の、物騷がしさを傍觀して居た頃の、年少の自身を思ひ起せば心が動く。面白かつた事、恐ろしかつた事、憐れだつた事、青年の新報記者であつた私に、如何に目を睜り耳を欹てしめたものが多かつたであらう、それ等についての私の感想は、まことになまなまとした、つまらぬ好奇心のみであつたにせよ、それ等を與じそれらを悲しんだ、若い了見が戀しくもある、歸らぬ青春を、足をつまだてゝ顧みる心のよるべなさ、「しばらく見ぬうちに、お前も年を取つた、途で逢つては、解らないかも知れぬ」、と先刻兄の家で、老母が云つた、老母は我等の兄弟に、丈夫な健康を添えて産んでくれたが、人の顔ばせをして老いしむる、苦勞性をも加えて置いたか、兄も大分老けて見へる。さて其の兄と、今朝程は洗劍亭に行つて見て來た、洗劍亭は、北門の外にあつて、岩に架し流れに臨んで建てゝある、そこはくの傳說などもあつたか、其處を少し下つて、正川の普渡閣、水際の大岩に、坐像の觀音を浮彫りした、觀音の顔の大いさ三尺餘り、岩の上に屋を作つて、一方は岩に接し三方に石の柱を立てゝある、浮彫りの上に彩色して、佛のおん肌を眞白に塗り、唇を紅に、衣裳を朱に黄に青に塗つた、まだ時は經ぬであらうが、近頃水が出たか、下半身は洗はれて、彩色が次第に薄くなり、どうやら水中より唯今出現されたやうにも拜まれる、原の彫り手が巧かつた故か、彩色も惡俗に陷らず、あたりは禿山で秋の日はかんかんと照り亘り、人一人も見えず、岩の下、溪の間に、處々わずかの黄葉が、金色に光る。菩薩の眞白な顔、眞赤な唇が鮮やかに、艶容は谷一ぱいに輝いて居た。それをフト今思ひ出したのは、向ひの室の朝鮮人の客に呼ばれたか、廊下を通りたがら振り向いた妓生の顔が、餘りに眞白であり、唇が餘りに赤く見えた故である。地體朝鮮の女は美しい、朝鮮の女の衣裳は、好き外形と、好き實用向きとを具へて居る、それ故に彼等のボーズは、外氣中にあつて殊に、內地の室內向のみの衣服着けたる女を壓し得る、日本の人々は思ひ切つて、男は支那服となり、女は朝鮮服とならぬものか、昔彼等から敎はつた如く、今再び敎えらるゝを恥とせぬが、大國の雅量であらうも知れぬ、事ある每に、尖りたる肩と貧しき腰に、夜會のドレスを引つかけて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出る、東京の高官巨族の奥さんと嬢さんとを、氣の毒にも思ひやられる。次第に夜となり、窓からは、城中の電燈が、空に映じて明るく見へる、そのかみは、此邊に來れば必ず、きぬたの音がカロコロカラコロと響く、うす暗い汚ない茅家のみであつた、總じて釜山から京城へ來る道々の田舍も、田畠多くなり樹も多くなり、昔に比べて富裕の趣が見得らるゝ、或は心に反感を抱くものがある、懷古の心は誰人にも存する、內地の人の尖り易き心を矯めるがいゝ、事大の癖を改めるがいゝ、事大の癖が弱少を侮る。それはさて置く、汽車の時間もまぢかになり、「ちようそんすうる」も程よく廻つた、神仙爐の中の物も、大分に荒れて來た、忽然として南相瓚君が唄ひ出す、何やら分らぬ、何を唄ひましたと問へば、「これはあなた方を送る詩です、內地語で、渭城の朝雨輕塵を浥ほす、客舍青々柳色新なり、君にすゝむ更につくせ一杯の酒、西陽關を出でなば故人なからん、と云ひます」、朝鮮の吟詩は面白い節である、モ一つ何かと所望して見ると、

白頭山石磨刀盡
豆滿江水飲馬無
男兒二十未平國
後世誰稱大丈夫

南怡將軍と云ふは、李朝の中頃の英雄であつた、若くして大功を顯はしたが、人に忌まれて、未平國を、未得國と字を替えて讒されて刑死した、と南君が又話してくれた、如何にも二十時代のさわやかな元氣でなくば、出來さうもない詩のやうである、やがて人々と街に出て、停車場をさして行く、先刻、兄の家を去る時に、「達者で行きな、わしも年だから、モウ會へるやら會へぬやら知れない」と云つて、いつまでも玄關に坐つて見送つて居た、老母の姿が目に浮んでチト氣が滅入つた、「ちやうそんすうる」の醉は、寢臺車中に横になつて後尙、私の心をひとへに回想にのみ導く、二十未平國　後世誰稱大丈夫か、二十の頃は誰人にあつてもなつかしい。」

二信　大單調

汽車は奉天を朝立ちして西を指す、右を見ても左を見ても、漠々茫々たる遼左の平原である、乾泥を重ね積んで四壁を作し、上に高粱を並べて更に乾泥を塗つた、穴居から發達の第一步目とも云ふべき、簡單至極なる民家か、ボツリボツリと車窓の目に入る、或は楊樹の黃ばんだ陰に、小さな酒店あり、屋前に粗末な卓と几とあつて、藍色の衣したる人々が、茶のみ酒のみして居るも見へる、茶と酒とは先づ何處にもある、所謂文化の都市

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人から見て、他に何の娯み何の興味がその日その日を制限し行[illegible]ゝかも知れぬ、多くは此の土の草木と、餘り差はぬ運命に安住して、感情と思考とを、チトばかりづゝ費やして、生きて後死んで行くであらう、それも幸ひであるに相違ない、或は此の大單調に飽きの來る魂もあるか、それ等の者共が、モツト急性な變化を求めて轉じて草賊ともなるであらう、安住あれば乃ち止む、野心の制し難きものは、學問政治藝術、それらに向ふべき門戸を見出しがたい時に、黨を作つて或は十人の長となり、百人千人の長ともなり、其處に自己の司配慾を滿たし得るであらう、司配慾は或場合一種の創作慾でもあらう、事なき時の遊牧の群、事ある時の馬賊の一團、那珂博士著、元の太祖の眞俤を讀んだ事があるが、元の太祖も張作霖も、パプチャプも、同種にして大小あるものであらう、等しく此の大單調の生んだ變形兒であらう。「パプチャプは豪い男でした、部下に罪あれば罰せずば措かぬ、或は罪の重きものを斬るに、泣いて其の罪を悲しんだ、それ故に部下は、自ら乞ふて頸を延べたもんでした」、昨日奉天で會食した、A君は斯う云つてパプチャプを賞めて居た、A君は又、南の革命から北の宗社黨へ、十年も連續する危いゲームの間に出入して、今は溫良な紳士となつて、納まつて居る漢子であるが、平原の單調がパプチャプを産んだ如く、日本の細かに區切りのついた制度から、はみ出された浪人人種の尤物に相違ない、その柔和な顏と巨きな身軀とを見れば私は又此の異鄕の高粱畠に骨を埋めた、友人のKを憶ひ起さゞるを得ない、Kも亦此のやうな立派な風采と縱橫の客氣とを以てして、はみ出されの浪人であつた、砲彈の破片で肩から肺を貫かれて、一人の友人が遺言を求めた時に、紅爐上一點の雪と云ひ放つた、いのちの際の芝居氣を、チト妙ならず思つたが、他の一人の友人の、後日の話には、末期に臨んで、頻りに目を携帶のトランクに注した、引受けたと云つた時に、安心して死んだ、ひそかに開いて見ると、故鄕の愛人に送るべき艷情と見えたくさぐさがあつた、それを國許へ訪れて行つて渡した、新聞で疾く知つたものと見えて、愛人は髮を切つて居たと云ふ、それでK自身も面白くなり話も人間らしくなつた、ともかく、此の平原には、此のやうなエピソードは、いくばくも作られ、いくばくも忘れられて居る事であらう、さて何で死ぬのも一生、遂にはすべて忘却の裡にある、思ひやうに寄つては、「一點の雪」で、すましてあきらめて居り得れば、或はそれでも惡しくはない。氣のむいた處に新たな流れを作り、倦いては又他の方向に移え、その度毎に砂礫を擴げて居るやうな、わがまゝな遼河を渡つてしばらくして、地勢は少し變じて、處々に小丘の起

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伏を見出だす、滿帮子と云ふは、目立つて大きな驛であつた、其處から乘つた一人の日本人が、われわれの食堂車の卓子に來て、「つかん事を伺ひますが、奉天の方で、女が一人紛失した、と云ふ噂をお聞きではありませんか」と云ひ出した、藪から棒の話である、どう云ふ次第で、女が紛失しましたかと訊ねると、昨日滿帮子の驛の中に、一人の日本の狂女を見出だした、沙汰を受けて行つて見たが、何處から來たものやら分らぬ、全くあらぬ事をのみ云つて居て、身元の參考になる何物をも持つて居ない、勿論七人の居留民の內、一人も心當りがない、よんどころなく宅へ引取つて置いたが、處分法をば錦縣の領事分館へ相談に行く處だと云ふ、其の錦縣にやゝ近くなり、夕日は漸く見え出した大行の群山の上に輝き、雁陣長く空を行き、塔が見え、城廓が現はれ、城廓の下に柳黄ばみ、水流れ、やゝ今迄の單調に飽いた目を慰める、狂女は、領事分館で何と處分したものか、狂女を紛失せしめて、心配して居る家族は何處に居るか、或は、ひそかに厄介拂ひの舌を吐かれる程の境地に、置かれて今迄あつたのであらうか、汽車は走る、我等の心も走る、狂女の同情も亦何時までゝ我等の心の中を占めて居られない。

三信 韓世昌

「孫悟空棒をとられてすべをなみ、幕に入るとて嘆きして行く」、と記しつけてある、又ある、「八戒は愚ものかなつくねんと、舞臺の上に立ちたるばかり」、是れだけでは一向要領を得ない、天津の廣和樓と云ふ、芝居小屋で、崑曲と云ふ派の芝居を見て、その番組の紙にかきつけた、獨り合點の歌である、悟空になつた役者は、郝振基であつたか、見事に棒を使つて踊つた、外題は收紅孩、どんちやんと恐ろしい鳴り物の中に、三藏法師は攫はれて消えた、八戒ものそのそと幕の中に這入つてしまつた、藍色の服をきた男が、ヒョイと出て來て、手を一つ揮ると、掌の裡より一團の鬼火を燃やす、また揮る、また燃える、グルリと廻りて、三つ四つ燃やして引込んだ、日本ならば仕掛けがあるべきであらう、そんな手數をかけない、見物は、藍服の男は見ぬ事にして、鬼火だけを見て、それが妖怪の出現する、物淒い前觸れである事を承認すればいゝ、處へ紅孩童子が短槍を構えて出て來た、眞紅の衣裳、光り輝く頭の飾り胸飾り、頰を赤く塗つて、正面に立つて唄ふ、どんちやんの鳴り物は止んで洞簫と胡笛とが唄と合して響く、多分、我は牛魔王の嫡子、紅孩童子、久しく相待つた唐僧を捕へ得たに依つて、父親を呼んで彼の純陽の肉を共に賞味せう、悟空なんぞは何でもない、と云ふやうな意味を唄つて居ると推察する、極めて細く高い聲

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が三條の絃を扱いで響く、崑曲は、見るよりは聞くものとさへ云ふ、又、旦と稱する處の女形になるには、先づ第一に音聲の天分を吟味すると云ふ、定めし聞き馴れた者の耳には、彼れの聲は清亮として銀鈴の如くにも、ありがたきうるはしき肉聲であるに相違ない、これは我等の味ひ得る處ではない、私は彼れの美しさに驚く、なかんずく彼れの兩眼の强き美しき光りに恍惚となる、名は韓世昌、今支那に於て、彼の梅蘭芳と人氣を互角に爭つて居る、梅蘭芳は二簧劇に據つて居る、それは新出來の劇派で、韓世昌の崑曲こそは、劇の正統、元曲を彷彿せしむるに是を措いて他にない、然う云つて、我等を客寓せしめて居る處の、毛記洋行の主が紹介してくれた。かゝる處に悟空が飛んで出る、棒を水車の如く、鉾と相撃つて、カツチカツチと鳴つて、太鼓と銅鑼とチヤルメラと、いろ〳〵の烈しい樂器が雜つて、一拍子外したら、どちらか怪我をせぬかと思はるゝ程に、鋭い立廻りをも見せた、それにからんで、異類異形の小化物、さまざまに顔を隈取つたのが、或はだんびらを持ち、或は半裸となつて、走りかゝつては舞臺を蹴つて、觔斗返りをする、次々にとんぼを切る、鬼火が燃える、悟空は力及ばず、棒をとられて逃げた、美しき妖少年が勝ちに乘じ武をかゞやかし、眞紅の裳を翻へして、かつ唄ひかつ舞ふ姿の面白さから、私の天津生活は、支那芝居に大半を費す事になつてしまつた、晝は、毛記洋行の階上で、主の書架から劇についての書籍を亂抽する、主の書架には、古書癖の人の垂涎に價ひすべき、古版の珍籍が少からず並んで居る、「今夜もまた行くのか」、と同行の友人が笑ふほど、夜になれば廣和樓の棧敷に陣を張る。天津には日本人が五千人も居る、日本の藝妓が百人も居る、僚友の二人が、それらの中の尤物を見せるとて、一席の宴を催した、また或人が、我等を支那の妓樓に導いて行つた、南方の蘇州の美妓は、琵琶に合せて唄つてから、クルリと廻つて手帛をかむ、それに啞然として舌を捲いて、遂ひ彼等の艶色を忘却してしまつた、日本の美女も支那の手弱女も、男が女の姿する彼のはんしいちやんの活き活きとした、美しさの十が一にも及ばなかつた、然様に思はしむるだけの、藝の巧さでもあらうと思ふ、紅孩童子は、しかしながら若衆役である、武生の仕事で旦の持前ではない、世昌は旦である、旦にして生に粉するのを反串と號するさうである、持前の旦のうまさを、次々に私は見物した、釵釧記では、彼は旦中の貼となつて、老旦の上手な婆さんと、一場の對話ばかりの難いものをやつて見せた、彼れの技巧は、此の邊に於て大に見るべきであつたらうと思ふ。刺虎と云ふ外題、明の宮女費貞娥が、明の公主と詐はつて、賊の將軍に婚禮の夜、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

匕首を揮つて國仇を報ふ筋である、思ふまゝに粧ひ得た此の宮嬪か、酒に醉ひたる老賊を、色に醉はすとて、背向く時に悲しみ怒り、相向ふ時に媚びて笑ふ、笑ふ時の美しさはまことに姿態横生して、見物は老賊と共に此の艶冶に醉はざるを得ない、支那芝居の舞臺の汚なさは、日本の如何なる田舍の芝居小屋にも見られぬであらう、囃し方は、太鼓銅鑼の組と、洞簫明笛の組と、各々舞臺の一端にあらはに坐を占めて、手があいたものは、勝手に几を離れ、恣まゝに茶を飲んで居る、背景の蔭からは、次に出て來る役者が、半身を出して見物を眺めて居る、土間の客も騒がしい、熱湯で絞つたタヲルは、土間をすじかひに又は直線に、客の頭の上を飛んで、出方の手から手へキヤッチボールの如く交換されて居る、日本の芝居好きなる友人の一人は、一夜にして此の亂雜から支那の芝居をうきものにしてしまつたゝさて其中で芝居の筋は進行する、虎將軍は帳臺に醉倒した、頭の飾り胸飾りを脫して、錦の衣裳を脫ぐ、下からは黑と白とのみの、仕女の服が出る、引かへた簡素な色彩が、舞臺の容氣をがらりと替える、懷中から匕首を出して、帳臺中の鼾息を聞く、其のすさまじく燃える二つの眼に、舞臺の汚さも騒がしさも、タヲルの流星も、何も彼も消えて、二つの眼だけが廣和樓中千百の注意を集めてしまふ、いや、ちと賞めすぎたかも知れぬ、宿に歸つて頻りに感に入つて說き誇ると、前の友人から、「日本の芝居を善く見てない者に限つて、隣りの糂粏を喜がるものさ」、と一本の突きを入れられた、ともかく、韓世昌と梅蘭芳と覇を爭ふて居るにしても、其れ等はまだ若い、目今の支那の劇壇は、丁度老宿寂莫の時である、日本に於て、團菊歿後の頃と相似て居る、と家の主は話す、家の主は高橋氏、彼れはいと古き天津の實業家であると共に、又一箇の支那學者である、彼れは世昌の肉聲を聞くべく、私は世昌の目に醉ふべく、倶に我等の棧敷を笛吹き其の眞上に取つて坐つた、棧敷の高さは八九尺ほどある、張黑が怒つて此の棧敷に飛びついた事があるさうだ、と一人の連れが話した、張黑は武生として名高かつたが、前身は盜人であつた、所謂樑を走り軒に躍る修練から、立廻りの見事さには及ぶものがなかつた、其張黑に恨みを含むものがあつて、芝居の最中に棧敷から彼れの暗黑な半世を罵つた、馬賊上りの將軍もある此國の面白さは、盜人にして俳優となつて居る事既に、彼れ自身の不思議な芝居である、罵られた張黑にとつては、腹に据えかねた事もあらう、一跳して棧敷に取り付いた、其時の仲間の爲めに、彼れは足の關節を痛めて、其の後芝居には出られなくなつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四信　梅獅

「天津は北支那屈指の南畫家が居ます、昨日人伝てに話して置いた、向ふでも會つて見たいと云ふ、所藏の書畫も見せたいと云ふ、行つて見ませんか、案内しやう」斯う云つて誘ふのは、二十年前日露戦争の從軍仲間であつた遠山青年、今の遠山重役である、他郷舊友に會へば、先づお互に老けた老けたを云ひ合つて、次に子供の數を比べ、終りに亡友の話が出る、それで果てゝ別るれば濟む、專門が違つて居れば、話の種も然樣に多い譯には行かぬが、此の重役は別に一層の親切を剩し得て、私の爲にみやげを一つでも殖やしてやらうと心掛けて呉れるのである、そこで次の日になつて、二人の友人と共に連れられて行つて見た、南畫家は、馬佳瀏と云ふ、家に蒼梧の老木あるが故に、或は馬家桐翁とも云ふ、年は六十ばかりと見るが、多病と覺ぼしく、頽然たる小さな老人である、その蒼梧の木は、門を入つた中庭にあり、木の前に棚を設けて、葡萄の蔓が、色を染めた葉と青い大きな房と共に垂れて居た、二つほど、丸い穴のあいた、小さな門を越して、餘り乾淨でない奥の家の戸口に、その馬老爺を呼出す、コチラは帽子を脱いで頭を下げる、アチラは手を組み合せて上げ下げする、妙な出合であるけれども、人の好さゝうな笑ひ顔を見れば、我等も亦ほゝ笑まざるを得ない、今の時支那を旅して、尤も快からぬものは、支那の軍人である、日本の軍閥は近頃評判を落して居るが、支那の軍閥の殺伐な險惡な氣風に比べて、いかばかり近づき易いであらう、次には支那の都市に在る勞働者に、半獸的なる慾念と卑しい厚顔とを見出す、是等が專ら行旅の樂しみを冷却し減殺する、さて又佳き温き心と快き表情とに、存外多く都市の中流者と田舍の農家とに於て觸れる事がある、時には旅人の用心を構へすぎて、却つてうら恥かしいほどの好意にさへも、逢着する三千年來の舊文明の國である、支那人と云へば利に走つて情を忘るゝ者のみの如くに、思ひ做して居るは、淺見にもあり不徳ともならう、茲に、馬老人の笑顔を見て居ても相語り得ず、たゞ笑顔を見て居ても、全く血筋の通つた親類の老者に對する如き安定を得る、かゝる安定を私は一年間の歐洲行旅の間には經驗しなかつた、私が支那的なるが爲かも知れぬ、或は又大きな黄東洋白西洋の區別の所以かも知れぬ。老人は我等の前に數多くの軸物と卷物と、畫帖とを展べた、古木高間の圖、筆者は明人文徴明、蓋し徴明の傑作である、二尺に一尺五寸ほど、老幹倒立の間に、三四人の人あり、黄と代赭との色調を、黒く塗つた岩が緊めて居る、我等が聲を揚げて嘆賞すると、老人の小さな顔が綻びらけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

になつて笑ふ、或は老人の手倣たる、吳歷の模本などが出る、吳歷は晩年耶蘇教に入つて、終る處を知らずとなつて居る、是を仙化し去りたるが如くにも傳へる、然樣に今も云つて居ますかと、訊ねて見る、全く晩年以後の事は詳傳を得ませんと云ふ、黃易(清の乾隆時代)の秋景山水、湯貽汾(同前)の觀瀑圖、などが心を惹いた、叔美の墨梅はチト怪しいかとも評する、大きな畫帖が最後に出た、細線の渴筆で、質朴と覺ぼしきを寫して居る、少しく濃淡を用ゐて多く筆を重ねず、幽渺の趣の裡に一脈の凄氣が通ふ、是は我等の目を驚かした、清朝康熙の世の人、河南の出と云つたが、三人の兄弟で、梅清梅庚梅翀皆畫を好くした、末の弟が最も上手で、即ち此の畫帖の筆者である、號は鹿墅、所作が少かつから、日本には傳らない、今日の觀賞は此の帖に盡きました、よくよく御禮を云つて下さいと、遠山君を煩すと、老人も思ふ壺と云ふやうな喜びを湛へて、我等を送り出して吳れた。丁度晝飯時で、一軒の支那料理の樓上に登り、紹興の老酒の盃を擧げて、糟蛋の不思議な味ひを舌の尖に玩ぶ、梅翀、彼れは清朝畫壇に優れた位置を占めねばならぬ大家である、たとへ、清朝第一と云ふべくば、尚數多くの鑑賞を經ねばならぬにしても、少くも他の某々の清朝大家を以てして、彼れを奈何ともなし得ぬ處の、彼れ獨自の境地を十分に開いて居る名家である、近年交通と印刷との開明の爲めに、我等のやうな怠け者も、外國の名作と名家とに、殆んど洩れなく通じて居る筈ながら、またトンと氣のつかぬ埋れた寶の如きに出合ふ事もあり得るか、モット細かにモット多く、彼れ梅翀を知つて見たいものである。

石佛古寺

丘信

支那の奇談の書などに、落第の秀才が、都から歸るとて旅費のない場合、或は普通の旅客にして村に客棧なき場合、屢々古寺或は古廟に止宿する、もちろん彼等の旅行は、貧富いづれにもせよ、寢具は必ず携帶して居るから、酷く寒い時でない限り、雨露をさへ凌ぎ得れば、一夜の眠は必ず客棧に限らでもいゝけれども、又此の支那の寺廟と云ふものが、建てゝからは建て放しで、修繕をする習慣のない爲めに、大抵は荒れ切つて居る、支那奇談の怪物は、是に於て半夜に人を脅やかす、初めて石佛古寺にたどりついて、寺の僧から指示された我等の客殿の、荒廢のありさまは私をして直ぐ此の怪談を想ひ起さしめた、鐘樓の下、山門の中、たゞ廣く薄暗い部屋の、二方に床を取つて、中央に敷瓦、天井張りつけの紙は、破れて垂れて、煤けた眞黑な屋根裏は、鬼の顏でも覗きさうな穴を見せ、掃除の屆かぬ四隅

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からは、恐ろしい蝎でも尾を上げて現はれさうに思はれる、我等に先んずる事一時間にして到着した、京大の學者の一行は、別棟のもう一つの客殿に居る、一昨年此處に來て喜んで此の千餘年の石佛の傑作の眞價を見出した、木村太田の二君は、そのもう一つの方の客殿に居たと云ふ、我等のよりは若干増しだと云ふが、大きな差ひはあるまい、よくも此處にその二旬近い日を送つたものだと敬服せざるを得ない。北京を北に去る事日本里にして百餘里、我等の道は古の燕山を過ぎて、古の雲中の地に入つたのである、汽車の線路は、尚北に走つて、歸化城にまで延びる、歸化城附近の沙漠の中に、京大の一行は湖水と茂樹との蜃氣樓を見て來たと話して居た、古の雲中卽ち今の山西、沙漠とは云はれぬけれども、大同の曠野は、少しばかりの草も畠のものも枯れて、滿地たゞ黄土色をなして居た、人の家は、乾泥の屋根乾泥の壁、土と少しも變らぬ故に、太田君は其の紀行文に、素燒の村なる形容を用ゐた、同行の近藤君は、砥の粉の山水だと云つた、其の砥の粉の色調の中に、彼等の質素な藍色のみの服裝を見出す時、快晴の日に照らされて、藍色は高價な群青の顔料の如き美しさに輝いて見える。驢に騎り、或はばねなき二輪車に乘り、大同府を離れて、雲崗河の岸を遡る、やゝ久うして正面の斷崗に、遙かに寺の屋根と無數の岩窟とを見遣る、亡國の荒凉と、遺墟の敗頽との感じが人を迎へる、木らしい木と云へば、川の岸に二抱ひほどの柳が、三本黄ばんで居たばかりである、まことにうらさびしい到着であつた、けれども、是を昔にかへして想望すれば、北魏が今の大同府に都を定めた、勃興の氣世を蓋ふの勢ひであつたらう、僧曇曜は一代の道德にして、又百世の藝術家であつた、王の命を承けて、彼の崗の沙岩をば彼れの畫布とし油土とし、思ひのまゝの構圖を以て、大きな藝術を作る、何十の助手、何百の工人は、彼れの心のまゝに、指を使ふが如く働いたであらう、紅紫青黄いろいろな塗料に、金泥を加えて、如來も菩薩も極樂現前の莊嚴を了る、大同府の貴人も宮女も、雲崗の佛參りが、一種の年中行事の行樂となつて、美しい行列が、今の此の荒れ果てた河添えの道を連續した事であらう、道中も目を喜ばす風景であつて、柳の木が三本ほどしか無かつたわけではあるまい、然樣に思ひめぐらしつゝ、寺の本堂の三階の欄干に倚つて眺める、つい目の下の庫裡からは、我等が連れて來た大同の宿屋の、東華棧の厨夫が早手廻しする、夕飯の炊ぎの煙が揚がる、本堂は半ば岩壁に入つて、其の暗い大岩窟には、いくばくの大佛小佛が群居して居る、岩壁は東へも西へも續いて、各々石窟あり、各々佛を住ましめて居る、山西通志の謂ふ所を見れば、「靈巖寺ハ城西武州塞ニ在リ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

後魏高宗ノ時僧曇曜帝ニ白シテ石壁ヲ鑿ツテ窟五所ヲ開キ各佛像一ヲ鐫ル高キ者七十尺次ナル者六十尺雕飾奇偉一世ニ冠絶ス」とある、七十尺の佛は、本堂の下層に臺座を見、二層に胴を見、三層に顔を見る、佛に比べて小さな寺は、無論後代の建築である。寺の下に、雲崗の里落がある、乾泥の屋根を、崩れかけた城壁や、石佛の壁面にかけ渡して、人間の住宅と云ふよりは、汚ない一種の動物の巣のやうになつて、四五十の家庭を作つて居る、木村君の文中に、此の小さな村に大同美人系を見く處の、世にも可愛いゝ處女を見たとあつた、村の前を雲崗河が流れて居る、沙礫の平面をわがまゝに曲り折れて、空を映して光つて見える、時に流れを亂して一騎或は二騎の行人を見る、物音の聞えぬ遠さに、人や獸の動くを見るは寂びしい心地のものである、河の向ひは、黄土色の波濤の如き緩傾斜の山の起き伏し、天際に引く處の、其の怠惰な輪廓の線を、時に斷かすものは、古の烽火信號の跡だと云ふ、小さな四角な矢倉である。夕暮れとなる、寺の山門の直下に、村の宿屋の廣場が見える、廣場の正面に、家人と旅客の室とがある、兩側に馬小屋が續く、南船北馬と云ふ通り、北地の行旅は、騎乘なしでは歩かれぬ、馬の數は客の數より多いであらう、或は驢馬が鳴く、驢馬の聲は此の山河の寂寥を一つに總めて、氣味が惡るいぞ寂しいぞと訴ふる聲と思はれる、寺の僧は二分心の石油ランプを我等の室に置いた、次第に四周から迫まつて來る暗さに、二分心の光明はたよりなく見える、寒さも增す、寒さは太陽の入るを待ちかねたやうに襲ひかゝる、床の下の坎に石炭を入れしめて、二本の蠟燭をともし連ねる、厨夫と僧とが、次々に晩餐のどんぶりと皿とを運んで來る、見受ける處、言葉少なに箸を動かす近藤君の胸の中には、湯嶋新花町の若き細君が描き出され、吉田君の眼の中には、渡邊町の主人の小さな娘達のおもかげが浮んで居さうでもある、私かに、私は二人の友人ほどに疲れて居らぬ、旅愁は多く疲勞から來る、そもそも、古來支那詩人の作には、旅中思郷の作調が甚だ多い、支那人に限つて思郷病に罹り易いではなく、支那の旅は古も今も、不便疲勞不愉快に加えて、常に多少の危險をさへ作つて居る、日本の旅は保養を意味するから、旅の歌は樂んで居る、支那の旅は多くの場合餘儀なき跋渉である故に、心から人を動かす詩を作る事にもなるであらう。かくて夜も更ける、寢やうとて扉の外に出て用を足す、乾燥し切つた空氣は、夜の空を黒く黒く深きものに見せる、星辰の影人に近づいて、日本に在りて見られぬ美しい輝きの星夜を現じ出だす、風が少し動いて、鐘樓の屋根に落ち殘つて居る風鐸の音が、暗中にリインとかすかに響く、耳をすませば、遙かに本堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の方に當つても、之に應ずる音がする、丁度いと小さく遠き星を、一つ見付けて、見直すひまに見失ふやうに、モ一度聞かうと耳を澄ますと、たゞ一面のくらやみばかり、何も聞えず、聞えずなつた後の靜けさ。

・

日本の旅の寢起きには枕をそばだてゝ、今日の天氣をうかゞふ、雨と聞けばウンザリする、北支那の秋に到つては、版で捺したやうに、昨日も天氣今日も天氣、いつでも日は輝いて居る、客殿と相對した一棟は、村の小學校になつて居て、朝は早くから子供の讀書の聲が聞える、時には本堂の前に行列して、唱歌を合唱して廻り歩く、日本の小學で聞く節もある、吉田君は朝飯を了ると、蠟と石膏とを携へて、石窟に入つてマスクを取る、本堂の大佛の前方左右に在る、如意輪に似たるポーズの佛像は、その大いさ等身に少し増して、半伽して右手輕く頰を支え、にこやかに笑みを含んで居る、一昨年の夏木村君が、僧人を憚りつゝ、ナイフを揮つて、此の像の顏を破つた、後世修繕の醜悪な泥の厚皮が、どさりと除れると、即ち今見る美しい慈悲の微笑が現はれたのである、木村君のナイフは千年前の僧曇曜の爲めに、佛の顏の泥を拂つて、埋もれ汚された美術の寶を世に出だしたのであらう、是をマスクに取つたものを、手にして見ると、餘り大味過ぎて奇妙な幻滅を感じた、斯う云ふ筈ではなかつたと口惜しくも思ふ、又思ひ返へせば、彼の像は横からのみ定まつた光を受け、仰いでのみ望まれて彫られてあつた、其處に要するだけの技術が費してある、手に取り膝にのせて見る爲には作られて居なかつたのである。更に吉田君は、西窟に其の工事を移して行く、西窟は村のすぐ上に當つて、或る窟の如きは、村舍の物置に充てられ、蓮臺前の參拜口は、鍵をした板扉に隔たり、蓮臺下の空地には驢馬がから臼の廻りを環歩して、粉をひいても居る、佛は肩まで麥桿に漬けられて、昔の香烟の匂ひのかはりに、家畜と穀物との臭いを漂はす。西窟の中央にある、露佛の御姿こそは、世にも希れな大藝術の貴さを示すものである、數十尺の坐像の、膝は砂石に埋れつゝも、胸から上は風化缺損の度極めて少なく、降準の鼻、厚くして緊れる唇、唇の兩端の凹みに、肉感を含む愛嬌をたゝへ、切れの長い眼に、智惠聰明の光りを持つ、丸く盛り上つた肩の構え、張つて豐かな胸の肉、すべて彼の奈良の大佛などに見る如き、不透明の具足圓滿ならず、或はもろもろの煩惱脱離し悉したる天竺の佛ならず、甲冑を纒はば大將軍になり、衣冠を召さば王者となる、北魏の人の憧憬たる人間界の大の丈夫相である。かくの如き偉大なる美は、前の世にも多くは作られず、後の世も容易くは作り得ぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であらう、今迄の千餘年を活きて居られた如く、是からの千年も活きておはせと拜み祈りたく思はれる。吉田君は手頃なマスクの佛首を探して、崩れた土壁を攀ぢる、土壁の向ふは直ちに、例の民家の土の屋根で小さな窩中に見出した、等身に近い佛の頭に、蠟型の仕事を始むるに、屋根の上にアルコールの泥爐を燃やし、バケツを運び石膏を溶く、屋根の下から少年の顔が出て、仰ぎ見て口鋭に物を言ひかける、十ばかりの銅錢を、其の口ふたぎに、屋根の上から下へ手渡した。それほど低く小さな家と雖も、猥りに他國の人の足をして、頭の上を蹈ましむるは愉快では無かつたであらう、其處で取り得たマスクの型は、普通人の頭より、やゝ小さく、それ故に技巧も行亘つて、手中に置いて玩味しても、曇曜一流の北魏藝術の氣高き美しさが、しみじみと忍ばれる、是を以て全般を考ふるに、大は七十尺の大本尊より六十尺、五十尺、二十尺、乃至は等身、少年程の大きさ、八寸七寸の半肉彫りの天女に到るまで、無數の佛達は十町ほどの長さ、百尺以上の高さの斷崖に、處せく造られてあり、各々の佛の姿は、悉く大丈夫であり、賢才であり、貴女であり美婦であり、悉く人間らしく、悉く人間最上の美を具へて居られたからは、此處に詣る者は、誰人か現世に在りて淨土に遊ぶ驚きと悅びとを感ぜぬものがあつたらうか、極樂は程遠し、遠き西方の極樂を待たずとも、此處に如實逼眞、いや、實であり眞であり過ぐる程の、九品淨土法界の莊嚴もろもろの如來菩薩天人諸神を、ありありと拜み得たいにしへの法悅を、思ひ遣るだにありがたく羨やましさに耐えない、今は、次々に施された、無用の修繕に依つて、大方は淺ましき泥彩色に見る影もな



き悪俗の人形となり、修繕の屆かぬ處は、風化し易き沙岩の性質故に、眉目と云はず、蓮臺と云はず、石柱も石塔も甚だしき剝落頽廢をなして、通り一遍の見物には、落寞として物寂びしくまた無氣味な感情をさへ帶びて見える、修繕の到らず、風化を避け得た處にのみ、わずかに過去の面影を留めた、曇曜と云ふ和尚は、しかしながら此の大曼陀羅を打ち立つるに、冷寂たる佛者の心をのみ心とせず、多量の肉體美と歡樂の放射を容認した、其處に人の魂を惹いて已まぬ魅力があつて存する、一窟の入口の兩壁に遺る多面の天女の如きは、豐滿たる半裸の軀を、ほしいまゝに躍動せしめて、脚は跳ねんとし、手は舞はんとし、妖艶な下ぶくれの六つの首は、各々唇を開いて笑つて居る、笑ひ聲が今にも響き亘るやうに笑つて居る、吉田君は又、或る窟中に於て、限りなく彫り重ねられた、小さな天人像の間に、全裸にして陽具をさへ持つた、可愛き印度樣のポーズを見出したと話して居た、いかに此の淨土が、枯淡の石佛境にはあらで、奔放なる藝術樂土であり得たらう。さてかくの如く、詠嘆禮讃にのみ耽つてもかぎりを知らぬ、そこで崖をめぐつて崖の上に出る、本堂も村も川も、一望のパノラマとなつて、うねうね山の彼方には大同の曠野も遙かに眺められる、西を見れば是亦一帶の高原となり、間近に崩れ殘つた城廓の長い壁が立つて居る、或は山西通志にある、武州塞の址かも知れぬ、野は耕されて畠となつて居ながら、人は見えず、小さな磚塔が、ポツリポツリと三つほど立つて居る、秋の日の餘りに晶らかなるも寂びしさを増すものである。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

六信 東華棧漫錄

大同府北門の外、又一壁あり、或は北魏の時の舊壁かとも云ふ、門に題して玄冬門とある、地は四千尺に近い北地の高原、まことに玄冬の寒威の烈しさが思はれる、我等は此の玄冬門外の、車站の近くにある、東華棧と云ふ宿屋に於て、石佛古寺行の準備をもし、寺から歸つてもまた、此處に泊つて汽車の開通を待つ、京綏線路一帶の從業員が、忽然として同盟罷工をなした、日本ならば、宿屋にべんべんとして居ても又面白い事もあり、或はガタ馬車を貸して指す方に向つても宜しい、此の山西の片いなかに在つて受くる處の、客棧生活の無聊も耐へがたく、さて馬に騎りばねなし車に乘つて、遙かに二日路を隔つる、大原府に作つて別の線路を見出すべくは、更に或る準備と勇氣とを要する、當面の迷惑は、圓銀の不足の惧れである、天津の紙幣は山西に通ぜず、重い面倒な銀貨は、あらかじめ時日を計つて用意されてあるから、然樣に長逗留を支えるわけには行かぬ、どうしたものかと屈托する、隣りの客房には、京大の學者の一行が居る、此の人々も屈托、屈托の泣き寢入りの夜あけ近く、車站の方にあたつて、汽笛の聲がする、それに驚いて跳ね起きて、宿の者を走らせて見たが、まだ開通したのではないと云ふ、朝となつて、氣がついて見ると隣りの人々が見えぬ、しばらくして一人歸つて來て、今から軍用列車が出る、それに便乘の談判をして、我々四人は許可された、急ぐ急ぐ、三十分しかないと云ふ、こちらも狼狽てゝ、我々はどうだらうと聞く、談判して御覧なさい、許可されるかも知れぬと云ふ、二人は殘つて荷を始末して　私が通譯を連れて驛長室に驅け込む、其處で冷然と斷はられる、然樣な事を約束した覺えはないと云ふ、話して居る間にも、私と通譯との間拔けた促迫の態度と、悠々とした驛長と士官との物腰が、よく比較される、なる程、支那人は外交談判の雄者であると首肯かれる、せん方なく車站を出れば、軍用列車がそのトタンに發車する、四人組が、馬車に荷を滿載して來た、驛の人々は、面倒と見て時間を繰り上げて出してしまつたものと見える、又向ふから二人の友人が、荷馬車と共に走つて來るのが見える。

大井川の川留めのやうな、汽車を待つて暮すつれづれには、大同府にも天津の如く、支那劇でもあつてくれゝばいゝにと呟く、天津の友の話では、山西地方は、大いなる劇園に必ず舞臺あり是を外臺と號して、祭祀の日には地方地方の役者が出て芝居をする、きまつて居る番組の外に、土地の[illegible]などが、今の出し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やうでは、御好みの慕をさしかへても見せる、かゝる時に、へうきんな金持ちが、よく關王廟と云ふ外題を望む、關羽三郎と云ふ秀才が、落托して乞食となり、關帝廟に宿つて居る、昔契りを結んだ名妓が、參詣に來て、思はぬ逢瀬に驚く、それまではさて宜いが、へうきん者が望む處は、二人の舊情火の如くになつて　敢て關帝の神前を憚からず、痴質の歡樂を恣まゝにする演技にある、好々(ホーホー)、好々(ホーホー)、と見物は大喜びをして見て居ると云ふ、日本のいなかの、鎭守の祭りの、假面を着けた惡ふざけの一番などに、相似た氣散じな趣きであらうと思ふ、そんなものでも今あらば、我等も亦、ホーホー、ホーホーと叫んで、朴質な此邊の百姓と共に、大笑を共にするを厭ふまい。

十三旦(しいさんたん)と云つたのは、劇壇の老宿で、引退して張家口に棲んで居た、友人が通り合はした時、折よく土地の祭りの日で、土地の馴染甲斐に、十三旦が舞臺に立つた、昔北京で鳴らした時分から、其の名人振りを知つて居たが、年七十に餘つて、旦中の華麗たる、花旦に扮するを見た、年を何處へ落したかと思はるゝ程に、聲も姿も宛として十七八の處女であつたと云ふ。

芝居の起りを、天津の友人の書架で、心覺えに書き拔いた中に、「北齊の蘭陵王、長恭才武而して面美なり、常に假面をつけて敵に對す、嘗て周師を金墉城下に擊つ、勇三軍に冠たり、齊人之れを壯とし」そこで蘭陵王入陣の曲を作つたとある、是は前にも聞いた事がある、芝居の起りとばかりも云ひ得まいとは思ふが、美男故に敵に侮られるのを慮んで、面を被たのが面白く感じられる、別に踏搖娘と云ふのが、隋末に河內に醜い夫があつて酒飲みであつた、醉つて歸れば妻を打つ、妻は美婦で歌が巧みであつたで、踏搖之辭を作つた、河朔其の曲を演ず、とあつた、今でもそこらに有り得さうな話である、宋の時宮中に小兒隊女弟子隊があつて、宮裡の宴會に踏舞し、文臣をして詞を上らしむ、例の蘇東坡にも其の作があると云ふ、民間に於ても亦舞詞がある、それ等を讀めば、農桑の雜事が味はれてあつて、甚だ和樂平安の感を持つ。

秦樓女あり字は羅敷、二十未だ滿たず十五餘り、金鐶腕を約し籠を携え去る、枝を攀ぢ葉を折る城の南隅、使君の春思飛絮の如し、五馬徘徊す芳草の路、東風鬢を吹く侵す可らず、日晩れぬ蠶飢ゆ歸り去らんと欲す、

去歲長江に泛んで、九江の宿屋に居た、時春の日に堤邊の柳の絮が、チラリチラリと飛んで、或は窓に入り、或は衣袖に附く、それを思ひ出して、此の使君の春思飛絮の如しを名句だと感ず

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、

石城の女子名は莫愁、家は住す石城の西渡頭、翠を拾ひ毎に尋ぬ芳草の路、蓮を採り晴に過ぐ白蘋の洲、五陵の豪客青樓の上、醉倒今宵清唱を待つ、風高く天濶く白浪飛ぶ、急に艇子を催して双槳を搖かす、

南京城下に莫愁湖と云ふがある、莫愁女も古から名高い鄙の美人であつたと見える、使君とか、五陵の豪客とか、當世紳士らしいのが目をつける、雛妓も莫愁も、西施や楊貴妃になるのは嫌ひだと見えて、サツサと籠をかつぎ、棹を揮つて歸り去る處が面白い、是等の舞は、さぞ單純な長閑なものであつたらうと思ふ、彼の韓世昌の如きを以て、是を舞はしめ歌はしめて見たいものである。

それ迄は一曲一事を叙してのみ居る、曲を合せて首尾一貫するに到つたのは、宋の趙徳麟と云ふ男の、蝶戀花を以て始めとすと云はれる、張生と崔娘との艶事を十數節に分つた、元曲大成の開祖をなすものである、と私は書き拔いて見たが、短かい時間に拾ひ讀みをして、支那劇の通人顏をするのも如何なものである、只此の超徳麟といふ男が、蘇東坡が潁州の守であつた時の、屬官をして居たと云ふ事にフト好奇心を催す、詩人の役人の下には、亦かゝる風流漢が從つて居るものかと。

大同府は美人系であると云ふ、昔北邊の武士共に、歸思を忘れしめやうとて、美人を選んでは大同に送つた、それ等の爲めだと人は說く、今以て府中に教坊あり、古格を守つて奇妙な風習も存して居る筈だと、後に聞いた、汽車どめの窮屈に、然樣な面白い處でも見得るならば格別、あたりは茫寥たる平野で、風景の寫生を作りに行くあてもない、毎日大風が吹いて、乾き切つた細砂が、霧の如く烟の如く、濛々として城市を蔽ひ、遠地の山もおぼろにかすみ、讀んで居る　の上にも、少しの間に埃が積もり、咽喉を痛めては含嗽藥ばかりに親んで居る、其の風塵の間を城中に入つて、上華嚴寺を訪れて見た、大きな寺で開基も古いと聞いたが、京大の今西博士は、たしか元代の拓本を鐵の燈籠から取つて居たと覺えて居る、大雄寶殿は、支那にも希れな大建築で、いろ／＼の泥塑が數多く並んで居る、それよりも驚かるゝは、正面と兩側との壁に、極彩色もて寫された淨土らしい壁畫である、間口を步數で計るに、約三十間はあつたらう、此の如き大壁畫は珍らしい、たゞ畫の出來は、乾隆重修の際の筆と見えて、餘り上等なものではなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東華樓、門を入れば敷石したる一面の廣場、廣場を圍んで四邊に房室をめぐらす、門の左右が帳場と客房、右邊が一段高き上等の客房、左邊は使用人の部屋、その裏に厩がある、正面も客房、角に小門あつて、家族の室が續く、其の小門の中を覗くと、京大の組の岩井大毎記者が、寫眞の三脚を立てゝ居る、レンズの向ふには、當家の息子と娘婦とが、他處行きを着て並んで坐る、嫁さんは恥かしさうに、息子は嬉しさうに見える、此家は親爺も人の好さうに、お袋も温和に見受ける、嫁さんは苦勞なしに、平和な生涯を送る事であらう、その息子が、夜になつて、岩井君達の部屋に來て、胡弓を彈いて居た、其側で白玉堂と云ふ番頭が、唄をうたふ、唄も胡弓も拙くはないらしく聞かれる、此の白玉堂は一昨年、木村太田の二君に連れられて、方喜と云ふ厨夫と共に、雪崗石佛寺二週餘日の供をした事、二君の紀行にある、東京を立つ時に木村君から、矢張り彼の二人を連れて行つた方がよからう、と注意されて居た、此の宿に着いた時に、白玉堂を先づ呼び出して、二君の事を言へば善く覺えて居る、二君の石佛寺の著書にある、彼れの肖像なども既に見て居た、方喜はどうしたかと聞くと、あれは昨年死にました、と答へた、間接の知り人ながら、怪しく心が動く、是を木村君に知らせやうならば、彼れも亦一種の感慨を受けるであらう、無常の風は何處をも吹く。

七信　微塵

南口の飯店に、夜もすがら風の聲をきいた、あくる朝早く、三つの轎子を連ね、通譯の青年は驢に騎り、十三陵を指して出かける頃は、いつのまにか風息み、靜かな黎明をなして居た、路は、涸れた河床を渉り、刈り跡の畠を横切る、いづくをも路となすが故に、路らしい道は少ない、左は大行の山、その山裾のなだれの、緩い傾斜を行くので、右は次第に低く次第に平らに遠く、渤海の岸まで續く處の、直隷の平原を望み得る、其の野の彼方が東に當つて、ほのぼのと白んで來るが、山にも野にも靄が立つて、殘夢月遠き旅の思ひをなす、やがて村に入る、農家の扉も開き、畠には早出の男も立つ、雞が鳴く、小鳥が楊樹白陽樹の梢に囀へづる、家畜でも呼ぶ聲か、林の影に女と覺しく、ブーア、ブーア、と云ふやうな聲が、しばらくの間同じ遠さに響く、轎子を舁く四人の男の足音が、それ等いろいろの物の響きの基調をなして、或る大きな單純な合奏樂の間を行くやうな感じをなすのも、まだホントに醒めきらぬ、うつゝ心の爲かも知れぬ、一二里も來たかと思ふ頃、かなり高くなつた日が、顏を出した、白けて月のやうに、光明のない朝日である、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隨分深い潮である、と初めは思つて居たが、段々考へて見ると、それは水蒸氣などの作用ではなく、全く昨夜の吹きつゞいた風の爲めに、乾燥しきつた細沙が浮動して居るのであつた、浮動して空中に在つて、容易に地上に歸らぬ程、粒の細かい埃である、朝日の色の白いのもその結果であらう、やゝ久しうして大理石の牌樓、又久うして大紅門、石人石馬石駄の類は、更に久しく步いてから、道の兩側に行列して居る、是等の序歡あつて、又しばらくの間當の陵墓が視界に入らぬ、いかに地面の廣い國柄とて、チト氣が長すぎると始めは可笑しく思つた、小高い川の岸の崖の上に出ると、丁度日が高くなり照り亘つて、一面の平地を圍む三方の小山の出入りの間に、十三陵の内八九陵の森影、それをめぐつて隱見する紅壁、壁の正中に聳ゆる樓門などが、半ば日光を受け、半ば細砂微塵の霞に入つて、漂渺として遠く右に左に見え出だした、是れあるかな、此の大構えの美しい自然と建築との組合はせの總門として、彼の長々とした今迄の道筋の道具立ては必要であつたのである。此の平地は、他の地方の例に外れて、楊柳樹のみが木立ちをなさず、陵墓に老栢あるは去る事ながら、村にも野にも果樹が多く植えてあつた、永樂帝の廟前では、かしわの木の紅葉が、松と栢とに照映し、若し我等に暇多くして、此の十三陵をかゝる靜日に、ゆつたりと巡見しやうなら、又別に一陵一陵の形勢の變化をも味ひ得るであらう、午後二時發の北京行に乘り損じてはかなはぬと轎子を急がす、黃色の甍、朱塗りの建築、それを緘する紅塗りの壁、壁の間の穹隆、いろいろの木のもみぢ、次第に又微塵の霞にかくれ行く、黃甍と紅壁とは、王家に限られたる禁色である、つまり支那人の色彩觀の、大まかな手强さを示すものである。歸途は大紅門を左に見て、山裾を近く通る、太平莊と云ふあたりは、一面の柿の林で、今恰かも其の柿の實の盛りをなし、或は一村一面に丹色の輝く蓆を張つたやうにも見え、又其實を收め集めた處は、熟柿の山を作つて居る、實は、へたに近く自然の切れ込みあつて、二つ重ねて潰したやうな形をなす、天津北京あたりで舌皷打つたのは、此邊から出るのが多きを占めると聞いた、柿の林を近く行くと、一本の樹の上毎に一人の人あつて、竿を手にして實を摘んで落して居る、其の下に亦一人の人あつて、二本の棒の間に白布を延べたるを手にして、落つる柿を受けて居る、人毎に皆白布なるは、上なる人の的に見易さ爲でもあらうが、我等の轎子の、南口驛に近づくに從つて、柿の籠を荷にした驢馬共と頻りに相前後する、午少し過ぎてもまだ、大行の山は例の微塵の霞を脫せず、朧々として其の險はしい鋭い輪廓を、夢の如くに淡く見せて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

燕京漫錄

八信

北京の武英殿に、數を知らず並んで居る古玩、周の鼎と云ひ宋の硯と云ふ、それ等を玩味する前には、先づそれ等の眞贋について、鑑定の目を睜らねばなるまい、家に餘財あり、仕事に閑のある人にして始めて當り得る、私共の領分ではない、去つて文華殿に古畫を見る、多くは淸朝の時、宮廷に献納したる作共である、臣何某と落款あるもの、悉くそれであらう、大抵は眼中に殘らない、宋元の諸作に、かねてより耳に熟せる畫人の名を見出す、首肯かれぬものが復た亦少くない、燕文貴は、私の敬服する一人であつた、其の長卷がある、厭ふべき定型のみで出來て居た、倪雲林と、黃鶴山樵とが三點づゝあつた、いづれも二點は受取れなかつた、一點の倪雲林は、思ふに眞蹟であり得やう、淑淨寥廓たる山水が、彼れの平常をそのまゝに現はして居る、近づき難き高調。他の一點の黃鶴山樵こそは、山水畫の神品絶作であつた、山樵の筆として、今迄に眼を經たものは、多くは彼の胸毛に似たる細筆が、或る時はうるさくも感ぜられた、此の癖の甚だしきに到つたものは、彼れの不出來の作と云ふよりは、寧ろ役人の贋造と見ていゝと思ふ、然樣に思ひ得たのは、此處の一點を見たるが爲である、一尺ほどの幅、四尺ほどの長さ、秋景の山水、長松と小亭と、二人の坐客と、岩壁と水とを以て、其處に欣求すべき淨土、到り易からざる神の國が組立てられてあつた、いや、それでも云ひ足らぬ、風景そのものが既に神であり、山水直ちに如來の法體である、と云つた方がよからうか、極めて崇嚴で極めて寂靜、そんな景色があるかと疑ふものは、そんな自然を感じ得ず、感じても信じ得ざる者である、此の一圖の前に立つて顧みれば、從來過眼の諸家の山水は、實に一掃して地に空しきの思ひを抱く、元時四家の頃は、支那の繪畫史の東晋より淸末に到る處の、長き線中の最高の隆起であり、四家は正に其の峰の絶頂に住み居たか、とも考へられる、さて又西洋に於ては、風景畫の獨立は、近々百年以來の話である、歐人の風景に就ての感受が、東洋人に比べて幼稚であつた故であらう、其割には風景畫家の數も多くを出したが、山樵の一作に依つて、私は歐洲の風景畫の價値を見得たやうに思ふ、餘りに可能範圍の廣い、彼の油繪具とカンバスとの風景は、將來遂に能く此の山樵の一作を凌駕し得るに到るであらうか。

西太后は其の海軍費を、横まに萬壽山の離宮に傾けて、林泉宮觀を一新したと云ふ、その爲か、彼の離宮は、著るしく滿人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の氣風を帶びて居る、文化風流の事は、滿人は漢人の敵ではない、北京の宮掖の苑池、私は僅かに其の北海を見たのみであるが、それには滿人の風を多く止めず、明人の規模の優雅を見る、それ故に北海の風光は、萬壽山に勝る事數等である、支那の帝家の大量な風雅は、わづかに此の苑林の間に彷彿しやうかと思ふ、然樣に思ひつゝ、私は暮れ行く秋の日を惜んで、心忙はしく長橋を渡り、短橋の石の欄に倚り、敗荷の池を見、大いなる楊柳の葉の黄ばみて落つるを眺め、佛塔より遠く中海南海の渺茫に眸を離つた、まことに建築と庭苑との、好く折り合つた一美術たるを失はない、此處に若干の頹廢の痕あるが、更に味ひを滑らかにして居るのであらうか、いや、是が王朝全盛の時であらうなら、又格別の着色をなしたであらう、或は彼の大いなる池の上には、畫舫も泛ぶであらう、彼の宮殿の裡からに、音樂も響くであらう、磨きなしたる石橋乃至掃き淸められたる敷瓦の上には、五色參差たる宮人の姿を見出すであらう、大建築と大庭苑とは、一種の綜諧である、必ず時代の大きな潮流の間に、巨きな一人の心に生じた計畫の下でなくば成り立つまい、廢帝制以後の支那には、此の種の製作物は當然跡を絶つべきであらう、支那の驚くべき特殊な藝術の爲には、私は徑勝派を磨きたくもなる。

八大處廻りと號して、北京の西に連る山共の間にある、寺々の蕭散古雅なる風光を見て歩く事は、京の東山めぐりの如き、快き散策であるに相違ない、萬壽山から、此の西山に向ふ途中に、私は名高い天下第一泉を、頤和園の中に見た、その少し手前に、敗廟の門前に、二頭の石獅子の、並びに大きな石を睨いて居るのを見出した、此の型は蓋し珍らしい、靜和園は、小なる萬壽山である、小なるだけに幽寂の趣が多い、園頭の岡に塔がある、此の塔はかなり遠方からも望まれる、岡の盡くる麓に、天下第一の泉は湧いて居る、泉の味は、滑らかではあつたが生ぬるかつた、支那人は味感の鋭敏なる人種であるが、從つて水の吟味も複雜になつて居る、此のなまぬるく滑らかな水の味も、それ等の通人には天下一の妙味を持つて居るか、乃至は時移り水脈變じて、昔の寒冽を失つたのか。

中古から發達した、支那の道教といふものゝ內容、私には確かな輪廓を持つて印象されて居ない、不死の仙術を習つたり、吐納の法を行つたりする外に、玄のまた玄なる老君の正教を、今も傳へて居るものか、モツト典雅な廟利を、現世的の具合賭を商ふものか、北京外城の白雲觀に私は這入つて行く、夕方

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の御勤めを此處でもなすと見えて、結髮長袖の道士が、本殿に集まつて、教文を合唱し木魚と太鼓を叩いて居る、各々高い卓に肱ついて、膝を敷瓦の上に立てゝゐる、始めは憚かつて裡面に入らなかつた、手のあいた道士が、ニコニコ笑つて私を招くのに安心して、奥の方の泥塑の本尊の前まで行つて見る、木魚と太鼓は次第に急調になり、非常に陽氣になつて、たゞ聞いて居ても、思はず足踏みし、踊り出す心地になる、振り返つて見れば、若干の道士は、暗い本殿の中に、くすんだ服裝をして、平氣で教文を唱えて居る、どうも木魚の調子と合はぬ、合はぬ處に何物か我等の氣付かぬ味ひがあるに相違ないと思ふ、奥庭の方へ廻つて見る、寺男のやうな爺が、叮嚀に案内して呉れる、建築も庭の作りも、貴族的であつて、枯淡な老荘の氣風ではなかつた、舞臺があつて、年に一度は、北京の老若遊觀群衆の日もあると云ふ、めぐつて元の本殿の前に出る、おつとめも終つたか、二三人の道士が、石階の前で遊んで居る、中に一人、可愛いゝ美しい青年の道士が立つ、結髮の爲めに、女性的の嬌致をさへも帶びて見える、同行の友人が寫眞を撮ると云へば、喜んでレンズの前に立つ、フイルムを剝いで落した紙片を、二三人で空に透して眺めて居たのは、それに影像があると思つたか、門前に待たした馬車に乘る時に、一人の老道士が、杖を曳いて歸つて來た、蒼顏白髯、莞爾たる微笑、始めて道德經と逍遥遊とを連想し得る老人を見得たと思つた。

九信　揚州一日

鎭江から揚州へ渡る乘合船は、九時に乘り込んで、十時に到つて漸く汽笛を鳴らし、大江を斜めに横切る、乘合の雜踏喧噪は、朝の市場をそのまゝ船にして出たやうで、恐れをなして船室の中に踞みつゝ、窓の外に垂れて居る上乘りの支那人共の足の間から、僅に目を放つて、下流に甘露寺と焦山の島を望み、上流に金山寺の塔を見る、獨り一艘の小船を占めて、此の景に對しやうならば、さだめし氣も潤く心も暢びる處の、天下の絕勝であらうと思ひやる、船は瓜州から運河に入る、汚ないをやぢが、忽然と船室の扉口に現はれて、段に腰かけて、何か早口に物を言ひ出した、一句切り每に、乘合ひが笑つて居る、落語家であらう、落語が了ると、胡弓を持つた男が現はれて、小さな帳面に記した曲目を、客に選ばせて、彈き且つ唄ひ出す、落語家は帽子を出して銅錢を求め、胡弓彈きは、胡弓の胴を倒さにして、その竹筒の中へ銅錢を入れしめる、各々錢を手受せぬ處に、乞食にはあらぬ格式があるのですと、案内の男は云つた、運河は幾曲折して、淮南の平蕪の間を行く、やゝしばらくして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白い塔が右岸に立つ、あれが揚州ですと云ふ、運河が曲りくねる爲に、塔は右岸から、左岸にも移つて見え、更に右岸に當る時、揚州の城下に着いた、腰纏十萬、揚州に遊ぶを以て昔人行樂の標的となす、城内に入つて見れば、ひどく狹まい往來に、小さな家が犇と建て並び、たゞ汚なく忙がしげで、何處にそのかみの地上極樂の跡があるかと疑はれる、歡樂は、好める女の目二つと、一徳利の酒とのみの間にさへも、善く人を溺らしむるものであるから、狹まい街を俥で通り拔けた位の旅客には、それ等の詮議の權利はないであらう、やゝ寂びしい町はづれに到つて、俥を下り、巾九尺程の、藻草と野菜の屑との浮ぶ、小さき堀に一艘の遊船を雇つた、遊船には二脚の木椅子と、一脚の藤椅子とがある、堀の兩側は木立、木立の陰に人家あり、人家の背戶に女共が物洗ひ、家鴨が泳いで居る、正面に城壁が現はれた、城壁の下に水門が開かれてある、此處で一艘の遊船に若干銅錢の税を取ると云ふ、水門を出ると、やゝ廣い水面、此の水は蓋し城壁をめぐつて濠をなし、或は運河の水と接しても居るか、長柳兩岸に茂つて、處々に迫り持ち橋あり、しばらくして城壁と離れて、水面はますます廣くなり、時に芝草を被つた島を見る、島には崩れた大湖石や、礎石の如きものも殘つて居る、その芝草の上にいろいろの木を樹たせ、其の大湖石をしなよく起し、其の礎石の上に赤い柱白い壁の亭を置く、と心の中で想望すれば、まさに水郷の大庭園、貴人豪客の遊玩の花やかさをも忍び得るであらう、北風がつめたく水を渡り、水の上には枯芦の間に我等の船ばかり、茶も酒も忘れて來た、わびしい寒い揚州の遊びである、左に折れて五亭橋をくゞる、此の橋ばかりは古のおもかげを保つて、眞中に一棟四隅に四棟の亭あり屋根は相接し、簷牙高く競ひ立ち、橋の石疊みは、亭と等しく出入して、串の字の平面をなし、下部に各々水門を容けてある、何となく宇治の鳳凰堂に通ふ連想がある、あの堂を小さくして、下に複雜な石橋を附けた如くにもある、是を過ぎて行くこと久うして、前方左右の山上に寺あり、寺の間松多き處に水路は谷まる、船を捨てゝ左なる寺に登る、即ち平山堂である、紅葉散り蔦這ひかゝり、既に七分の廢頽を帶びて居る、せめて水筒に酒があつたら、と餘り酒のまぬ近藤君が呟くほど、寒寂蕭散たる客殿に、つめたい行厨を解いて遲くなつた晝飯を喰ふ。

我等の三人と案内者とは、人力車を連ねて運河の岸を南する晝の程曇つて居た空は、夕方晴れて、一しきり落日の暖かい光を浴びた、農家には麥打場の上に子供達が遊んで居る、唄つても居る、或は仔豚を追つても居る、運河の岸には、曳き船の人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、前こゞみになつて行く、大船は五六人、小船は一二人、トロトロと半ば睡つて、フト眼を開くと、堤の上に一人の男が躍り上つて叫んで居る、大いに憤つた形である、何かで見たやうなポーズである、あるある、水滸傳の原本の挿畫の中に、美髯公朱同が、黑旋風の爲めに、預かつた主公の子供を添はれて、怒り哮つて居た、あの圖にスツクリの形ちである、六尺にも近い巨軀、半白の關羽髯、腕を揮つて天を指し地を指して地團駄を踏んで居る、俥は近づく、下なる運河にその美髯公の怒つた對手が居る、船の上に立つ老婆がそれで、美髯公は其の船を曳いて來た、曳き綱が、老婆の誤ちででも切れたらう、水中に落ちて居た、支那人は會話にゼスチアを用ふる事、或は西洋人よりも多いかと思ふ、さるにても此の曳き船の老人は、綱一本に梁山泊の豪傑が命懸けの怒りの如き怒りを表はす、それも面白いが、それにも負けずに罵り返す老婆の表情も見ものである、支那の下級民は實に騷がしい、綱一本にも茶碗一個にも、叫喚大叫喚を行ふ、彼の吳佩孚の爲めに、張作霖の兵が破られた時などは、いかばかりにぎやかな逃走であつたらうかと思ひ遣られる、かゝる間に日は落ちて、指す方の楊子江岸は中々に遠い、三時の歸り船に乘らずとも、人力車でも日ある内には江岸まで行ける、と計畫したのは失敗であつた、全く暮れて月は遲い宵暗みとなる、狹まい堤の上を、無提灯の車走は危いから車を下りる、車で揉まれた吉田君の、病みあがりの腹が痛む、言葉少なに薄暗な堤の上を步く。

サンパンは我等を乘せて、二人の船夫に動かされつゝ、大江の上に浮ぶ、一本の蠟燭は、くたびれた人々の、物言はぬ顏を照らして寂びしい、しかしながらしあはせと我等は此のサンパンに有り付いた、暗い運河の堤上を、飽きる程あるいて、漸く瓜州にたどりつきはしたものゝ、さて此の夜を冒して船を江上に出すと云ふ者が容易には見當らなかつた、瓜州の水路は運河に沿ふて細長く、暗く貧しげに立ち續く、石敷きの凸凹の街路から、折々横丁を左へ切れて、運河の岸に泊して居る船共の、小さな燈光の下に人をいくたび呼んで見たか、其の内に案内者とも相失してしまつた、彼れもチト焦燥れて居た、我等もチト腹を立て居たらう、四辻の、割合に人多く燈火の明らかなる處に、三人で佇んで小一時間を過ごす、露店の煮賣り屋には脂臭き湯氣立ち、角の酒屋には、船夫共が醉ひ唄つて居る、胡弓を彈いて流して來る者、たゞ何となく逍遙する老人、いろいろの物の臭ひ物の響き、北に大平原を控え、南大江に瀕した、すゐぶんと單調な此地方に在つては、此の漁市の一席の夜も亦、船頭衆

の好き娛み場所であるにちがひない、此の近處の客棧の上客ともなつて、退屈な夜をうしろ手組んで、彼等の醉ひに交り、彼等の笑を共にするほどならでは、實は眞個の支那は了解し得ぬであらう、そこまでの氣力はない、何處を驅けめぐつたか、ズボンから靴へかけて、泥だらけになつて來た案内者が、船が出來ましたと告げた時に、一息ついて安心したほどの我等は、暗い路次を斷き勝ちに案内者の背後について急ぐ、どうして船が見付かつたか、此の鎭江楊州間の汽船は、臺灣人なにがしが、支那人と合辨で經營して居る、臺灣人も今では日本人です、今夜は泊つて行きなさい、明日サンパンで送りませう、とたずねて行つた案内者をすゝめたさうな、泊れぬものならば、どこそこに船頭の宿がある、中には賃金に依つて江を渡す者もあるだらう、と敎えてくれた、行つて見ると、船頭共の宿では、博奕の最中であつた、まことに彼等が、働くは博奕をせん爲めであり、美食は性慾の永續の爲めだとさへ云ふ、其の博奕の丁が半になつてばかり、元も子も無くした男でもあるか、敢て五兩の銀の故に我等を送つて江を渡すと申し出たのである、と云ふ、二人の船頭の櫓の音は、暗い江上に心細く消えて行く、苫の間から首を出すと、天地眞黑な中に、星の光りのみが鋭く輝く、やゝ目が馴れると、まんまんたる江水のほの白いのが、盛り上つたやうに、船を圍んで涨つて見える、思ひ返せば、彼の臺灣人が好意を受けて、瓜州一夜の客となるのも面白かつたらうか、たやすく得難き機會によつて、私人の家庭を見得たであらう、又、此の夜船の櫓の音と共に、楊子江を渡るのも、豫めは企て得ぬ事である、成るがまゝに身を持つて行くのが旅の興である、何物をも消化するやうに、感受の能力が健かでさへあれば。

十信　金山長風

四つの轎子を連ねて、我等と案内者とは、鎭江の城外に出る、汽車路――上海へ行く――を越せば草山、草山の間々に畠がある、草山はのたりのたりと、高くなり低くなり、夜來吹き出した風に、枯草も草紅葉もなびいては起き上る、畠をすぎ山を分けて、行くと一里ばかりにして、山は三面を塞ぎ、中に小さな平野を開き、風も强く當らず、一二十戸の農家樹立ちの間に見え、まこと隱棲清談の高士でも出て來さうな處に路は盡きた、竹林禪寺は此處に在る、門前に竹の籬して、中に菜園あり、數人の僧と寺男とが、菜を拔き又は洗つて居る、めぐりは竹藪、或時は鹿も來る、又或時は虎も出ると云ふ、虎はチト困るが、斯う云ふ土地に靜處したいと、私さへもフト思ひ浮ぶから、昔の人、疎懶放逸の文人などは、もちろん現世の樂土詩境ともな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つかしんだであらう、寺は大きな寺で、山に倚り、次第に高く層々と造り立てゝあつた、住僧は何も知らぬ、開基の年號さへも知つては居ない、法あるが爲めの蘭若であつたらうが、今は寺あるが爲めの僧、寺あるが爲めの衣食の僧となつて居るか、それはともかく、此の寺の四境の靜寂幽閑さは、歸り去る轎子の上からも、いく度も首を回らさゞるを得なかつた、後の鎭江に遊ぶ人の爲めに、私は晩春初夏の此の、竹林寺の風光を想望してひたすら是をすゝめたく思ふ、搖々として四つの轎子は風の中を行く、やがて甘露寺、昔は嶋であつたらうか、大いなる岩塊の上に、寺全體が栽つて居る、下は大江、ますます吹きつのる風に、岸を打つ浪のしぶきは、高さ十尺にも餘る、焦山の嶋の渡船はおろか、滿江の中一艘の行舟も見出し得ない、石段をめぐり登る、大きな門小さな門、長い廻廊高い亭、いくつにも路は曲り、幾重にも壁は折れ、思はぬ處に房室があり、ふと又樓閣に行きあたる、長江の宏濶な眺めはそのいづれからも望まるゝべく窓してある、支那人の建築の結構のたくみに驚歎さるを得ない、同時に寺と云ふよりも、俗者の逸樂の別墅のやうにも感じなされる、聞いて見ると、此處は信心者の參詣の寺よりも、より多く鎭江紳士の飲宴博奕の場に用ひられると云ふ、それで呑み込めた、さてまた轎子に乘つて宿へ歸る、宿は今年始めて鎭江に店を開いた、日本旅館である、此の爲めに支那巡遊の日本人は、今後此のあたりの旅を心安くなし得るであらう、ひるめしを喰つて、夕方の汽車の時までの暇を、ひとり金山寺に行つて見る、町を出はづれて兩側に蘆の八九尺も高い中を、石敷きの道が通つて居る、金山こそは昔の嶋たるに疑ひないから、そのかみの河床の名殘りに、此の蘆共は茂つて居るであらう、天下第一泉は此處にもあつて、江に近い濕地の中に疊石をめぐらして、長江の濁水の湛えられた中から、モクリモクリと湧泉の頭が出る、北京の西山にも第一泉、江南にも第一泉、日本には日本第一の大家が何人も居る、敢て珍らしい例でもないであらう、歩をめぐらして寺へ行く、寺は甘露寺よりも大に、地は甘露寺よりもいさゝか小さいから、一塊の大石をすべての礎石とした建築とも云へる、本堂の明り障子を案内者に氣付けられて見れば、紙を張る部に貝殻を張つてあつた、貝の形は、霞が浦にある、大いさ六七寸にも及ぶたん貝と云ふに似て居る、一つの建物から、他の一つの建物へは、必ず急な石段を登り降る、庫裏へ廻つて見れば、大學の講堂ほどもある廣い室に一ぱいに食卓が並べられ、正面に木牌が懸つて、當思來處、と大書してある、食飯を大事にせよと云ふ心でもあるか、五尺もある鋼の釜が、いくつもいくつも並び、それを炊ぐ料にか、刈り取ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れた處の棟が、大きな農家の草屋根でも葺けさうに重ねてある、その中にヒョツコリと出て來た一人の老僧を、彼れは此寺の大和尙だと案内者が示す、富裕な寺を支持するに適當な、質素な綿衣を着けて、大衆を御して誤りなき、堅固な面相を健やかげな肩の上に据えて居る、此の和尙の先祖と、問答して負けて、東坡居士が白玉帶を取られた、それを賴んで見せて貰ひませうか、と案内者が云ふ、そんな事よりも 頂上の塔に行つて見やうと石段を登り盡す、普通支那の塔は、石を重ねて築くが故に、年經れば設けたる段も崩れて登り得なくなる、此の塔は木製の七層で、塔心の巨柱をめぐりつゝ螺旋して段を作り、一層ごとに窓を開いてある、千里の目を極めんとすれば、更に一層の樓に上れ、と云ふ詩句の通りに、ひたすらに登り登つて、七層の上に立つ、風は日の傾くと共に、いよいよ吹きつのつて、風の一息ごとに塔は少しづつ傾き動くから、どうやら非常に高い處に、吊り下げられて居るやうにも感ずる、其の風に、地平線が烟つて、空と地と朦朧となつた中に、幅廣く流れて現はれる處の、長江の上流の方より、吹き來つて、また同じく朦朧となつた、東の方の地平線へ紛れこんで行く、長江の下流へ向つて、水と共に吹いて行く、萬里の長風とは、是れを云はずして何をか云ひ得やう、さて又楊子江の水の夥しさは、見ても見ても限りない平地を、ほしいまゝに廻りくねつて、さしもに高い塔上から望んでも、乾地の廣さよりは、水面の方が廣くも思はれる、それを一面に波が立つて、空の色を映さず、絕えず兩岸を崩し崩しては己れの身内に混え來つた、土壤の黃色を、頑固に示して居る、抵抗すべからざる力、默して常に行なつて居る大きな魂が、ドツシリと其處に橫はつて居る、もちろん此の大平野も小山も嶋も、此の水の爲に出來たらう、城廓とか寺院とか人間とか云ふやうな、小さなエトセトラは、すべて此の水に依つて造られ、水によつて亡ぶるより外はない、塔の欄干に掴まつて居る日本の一旅客などは、此のまゝ此の長風に持つて行かれ、消し飛んでしまつても、一向に何等の痕跡だも止めまい、それで差支えないと、思ふほどに此の驚心の風光に心を奪はれて、身の毛もよ立つて尙欄干を放れ得ない。(完)

近世名匠傳

村松梢風

柴田是眞

一

或る時、頼山陽を訪れた無名の若い畫工があつた。素性を訊いて見ると、柴田順藏といふ者で、江戸の鈴木南嶺の弟子だが、近頃師南嶺の紹介を以て京都へ來て岡本豊彦について畫を學んでゐるのだと云つた。遊歴の詩人や畫工の訪問を受ける事は山陽に取つては實に珍らしくない事柄ではあつたが、其の順藏といふ若者の顏を見ると、眼光が鋭くて、其の謙遜つた態度や物言ひの中にも、何處か人に下らぬやうな氣骨の閃めいて見えるのが一寸山陽の興味を惹いた。

「何の爲めに己の處へ遣つて來たのだ？」

「只、お目に掛つて見度いと思つたからでございます」

「左うか、それも良い。併し、會つて見たらどんな氣持がする？」

「別段變つた氣持も致しません。先生も矢張り同じ人間だといふ事が分りましただけでございます」

「はゝゝゝ。それはまだお前の眼が低いからだ。お前は富士山へ登つたことがあるか？登つてゐては富士山の高さと雖も判らないぞ。遠く離れて觀て初めて山の高さが知れるのだ。お前なども今は左うして何氣なく己を觀てゐるのだが、後年になつて今の事を思ひ出して見ろ、山陽に會つて置いて良かつたと思ふ時節が來るから」

若者は默つて山陽の氣焔を聽いてゐた。そして歸つたが、其の後も折り〱遣つて來た。

香川景樹も屢々同じ若者の訪問を受けた。若者には國學の素養などがあるわけではなかつたが、人の談を聽く事だけは熱心だつた。

豊彦は、或る日の柴田順藏といふ門弟に向つて言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「人の噂に依ると、お前はいろ〳〵の人物を訪問して歩くさうだな？併し、絵かきがそんなに職業違ひの人に會つて見てどうする了簡なのだ？」

「どうしやうと思ふ譯でもございませんが、江戸を發つ前に南嶺先生が仰しやつたことには、貴様は世間へ出たら、見られる丈のものを見て、聞かれる丈のものを聞いて置け、藝の修業をする者は乞食のやうに胸へ袋を掛けてゐて、何でも彼でも取り込める丈取り込んで置くがよい、何時かはそれが役に立つ時が來るから——と申されました。それで私は暇のある時には努めて高名のお方をお訪ねして、お談しを伺つて來ることに致して居るのでございます」と順藏は答へたのだつた。

そんな風だから順藏は至極眞面目だつた。勿論絵の修業については師匠の豐彦さへ駭く程の熱心だつたので、腕はぐん〳〵上つていつた。彼はいろんな特色を有つてゐる多くの畫家の門を叩いては、畫論を聴いて見たり、其の人の秘藏してゐる粉本等を見せて貰つたりもした。さういふ交際を求める爲めには折り〳〵は相手を誘つて茶屋小屋のやうな處へも行つて、御馳走位はしなければならなかつた。けれども彼は、必要以外の場合に自分から左ういふ處へ足を踏み入れるといふやうなことは曾て無かつた。酒も好きだつたが、獨りでは決して飲まなかつた。

順藏は、四條木屋町の或る女隱居の住居の一室を借りて自炊生活をしながら、一心不亂に絵の修業に没頭してゐるのだつた。其の女隱居といふのは五十幾つ位の、一寸苦勞人上りといつたやうな開けた人だつたので、廿四や五の遊び盛りといふ年頃の順藏が、餘り生眞面目に勉強ばかりしてゐるのを見て、或る時冷かし半分に、

「あんたはんはほんまに感心なお方どすなあ、お若いのによく家へばかり來やはること、しかしなあ、昔から京女いふて、京都は好え女子のある處だつせ、あんたはんも偶にはおや茶遊なと買うて見なはらぬかいな」

負け嫌ひの順藏は、畫筆を握つた儘振り向きもせずフ、ンといつたやうな顔をして、

「女なざあ、江戸へ歸れあ柳橋にあるんだからね」

けれどもさう云つた拍子に彼は不圖戀しい故郷の事を思ひ出した。柳橋とは眼と鼻の間の兩國橋町の自分の生れた家には、懐かしい父母が悴の腕を磨いて歸つて來る日を待つて居るのだ——。順藏の父親といふのは市五郎と云つて、橋町の宮大工與長兵衛の長男だつたが、自分の家は弟が相續して彼は同じ町内の煙草入職柴田清七といふ人の處へ養子に行つて其家の娘と夫婦になつた、中へ生れたのが幼名亀太郎と云つた順藏であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

順藏は十一歳で古滿寛哉の許へ入門して蒔繪を習ひ、十六歳の時から鈴木南嶺に師事して繪畫を學び始めた。南嶺は順藏の前途に多大の望を囑してゐたので、天保元年、順藏が廿四歳の春を迎へた時、自身から勸めて岡本豐彥に宛てた依賴の手紙を持たせて、京都へ遊學せしめたのであつた。

東福寺の寺中三聖寺の寶物に、十六幅の羅漢の畫像があつた。宋の李龍眠の傑作であつた。此の畫は古來非常に有名な物で、雪舟でも探入でも皆是れを寫したといふほどで、畫工の中では知らぬ者の無い代表的の佛畫であつた。順藏も曾て江戶の師匠の處で其の模本だけは見てあつたが、まだ一度も眞物には接しないので、或る時某の紹介を以て寺を訪ね、其の有名な十六羅漢を觀せて貰ふことになつた。愈其の畫を觀ると順藏は驚歎してしまつた、それは彼が未だ嘗て想像も及ばなかつた程の傑作であつた。一幅、一幅と觀るに從つて、彼は偉大な藝術家の魂に摶たれるばかりで物も云へなかつた。順藏は唯溜息を吐き〳〵した。

側らで此の躰を見てゐた住持が云つた。

「どうでございますな？」

「和尚樣、實に驚きました、私は今が今迄您んな立派な繪が世の中に在らうとは考へて居りませんでした。和尚樣、此の上のお願ひには、何卒私に此の繪を寫させて頂き度うございます、御許し下されば御恩は終生忘れは致しません」

「それは寺の規則としては堅く禁じられてゐるのだが、併し、わしも永く此の寺に居るが、お前さん程熱心に此の繪を見て行つた人は無い。でわしも、お前さんの熱心に感心したから、特別の扱ひで許してあげませう。が、永いこと掛つては困る、明日から三日間だけ、當寺へ來て寫して行きなさるがよい」

順藏は飛立つやうに喜んだ。そして翌日から未明に起きて三聖寺へ通つた。三日間に彼は其の內の三幅だけを模寫することが出來た。

二

天保三年の春も過ぎてから、順藏はまる二年餘を經て故鄕の土を踏んだ。最早京都に留まつて居る要は無いと考へたのだつた。丁度其の前に或る人に誘はれて長崎迄遊歷して來るつもりで京都を發つて、先づ四國を見やうと金比羅行の船に乘つた處が、船中で發病した爲めに其の儘京都へ引歸し、暫く養生して元の體になつたのを幸、もう西國行は斷念して、師の豐彥をはじめ人々に暇を告げて關東に向つて出發したのだつた。親思ひの順藏は兩親の無事な顏を見た時には嬉し淚が零れた。絕え

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て久しい江戸の風物に接した事も喩へやうのない欣びであつた。併し彼は行李も解かずに恩師南嶺を訪ねた。南嶺は、順蔵の畫技が、其の二年の間に驚くべき進歩を遂げてゐるのを見た。彼は順蔵の爲めに名字を撰んで、名は是眞、字は儃然、令哉と號せしめた。是眞の名は、資性正純玲瓏玉の如くなるより出で、儃然は莊子の所謂儃々然不趨より來り、令哉の號は、嶺の偏字と蒔繪の師寛哉の一字とを取つたのである。

柴田是眞の名が世間に廣またのは、それから數年の後、王子稻荷の社殿が新造された時、其の額堂に鬼女の圖の額を掲げたのが始まりであつた。それは大さ五尺位の額だが、彼の渡邊綱の伯母に化けて來た鬼女が斬られた腕を取り返して空中高く飛び去る圖で、筆力無類、畫面の外に凄氣迸り、振り仰いで見た人悉く慄然として立ち竦んだ。

是眞は、京都から歸つた年、楠町から上平右衛門町に居を移した。其處は、神田川を隔てゝ柳原と相對する、市中としては勝景の地だつた。對岸の土手の上には二た抱えもある柳が立つてゐた。其處で一號を對柳居と稱した。

是眞は畫事に於て早く名を成したけれども、其の志す處は寧ろ蒔繪にあつた。彼が畫を學んだのは蒔繪の大成を期する爲めに外ならなかつた。當時の蒔繪界では、幕府の御細工所を預る幸阿彌家を除いては、古滿一派に名匠が多かつた。是眞の師古滿寛哉をはじめ、古滿巨柳、坂内本雄等が就中名があつた。本雄は湛齋と號して狂歌もよんだ。

天保七年二月是眞は京都に向つて再遊を試みた。舊師岡本豐彥や同門の友鹽川文麟などと久し振りで會つた。又是眞は香川景樹を訪ねて　蒔繪に對する自身の抱負を語つた。景樹は大いにそれに贊成して、「蒔繪の研究を志すならば奈良の古美術を探らなければ不可ない」と云つて、直ぐ様彼を奈良の人穗井田兵助に紹介して呉れた。穗井田兵助は忠友と稱し、著書も數部あつて、頗る篤學の好事家であつた。忠友は是眞を遇すること極めて懇切で、自分で作れ歩いて諸寺の寶什を巡覽せしめ、又自身の珍藏してゐる古書圖を模寫することを許して呉れたりした。是眞は大に得る處があつた。一旦京都へ戻ると、豐彥の紹介に依つて元興寺塔中に安置せる日光佛月光佛の二體を模寫した。同年十月江戸に歸つた。

兩國廣小路の横丁に小さな扇を賣る店があつた。或る日是眞が其の前を通ると、店頭に肉筆で浮世繪を描いた扇が掛つてゐるのが眼に付いたので立ち寄つて見ると、落款は無名の人の名前だが繪は頗る上手かつた。是眞は武者繪の扇を一枚買つて歸つた。其の次に又其處を通ると、矢張り同じ繪師の描いた扇が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

掛つてゐるので、又一本買つて歸つた。三度目に行つて又買ふと、扇屋のはふでも顏をおぼえてしまつて、

「あなたは大變此の人の繪がお氣に入つたと見えますね」と云つた。

「さうですよ、失禮だが此の扇の繪を描いた人は、お前さんとこあ りの扇の繪を描く繪師ではないからね」

「へえー、あなたは大層詳しいやうだが、矢つ張り畫工さんですか？」

「左樣、私も畫工の端くれだ」

「さうですか、ぢやあ今度お序での節にあなたも扇を一本畫いて下さいませんか、たんとはお禮も上げられませんが」

「宜ろしい、何、禮なぞは要らない」

主人の背後の方で向うむきになつてセツセと扇の繪を描いてゐる男があつたが、チラとこちらを振り向いた時是眞と顏を見合せた。

二三日經つてから是眞は扇の繪を二三本描いて、自分で持つて行つて置い來てた。

其の扇屋の店で賃仕事の扇の繪を描いてゐた畫工は、一勇齋國芳であつた。國芳は最初歌川豐國に就いて浮世繪を學び、水滸傳の圖に艶筆を揮つた時分から名聲を博してゐたが、家が非常に貧しくて衣食にも窮する有樣だつたので、廣小路の扇屋の畫工となつて匿名で扇の繪を描いてゐたのであつた。國芳は是眞が描いて持つて來た扇の繪を見るに及んで自身の遠く及ばぬことを悟つて恥ぢ入つた。

それから間もなく國芳は是眞の家を訪ねた。是眞は疾うからあの扇の繪が國芳の筆であることを悟つてゐた。そして今訪ねて來た國芳の顏を見ると、いつぞや扇屋で彼を見合つた其の人と同一人だつたので今更氣の毒な思ひをしたが、態と知らない振りで初對面の挨拶をした。すると國芳は自分から總ての事情を打ち明けて話した。其の後で、

「本日伺つたのは外の事でもございません。是非共私を先生の門下に加へて頂き度く、お願ひに上つた次第でございます」

と云つた。

是眞は駭いて、

「飛んでもないお話です。あなたのやうな高名な畫家を門人に致すなどと、私にはそんな資格も力もございません、左樣な事は平にお斷り致します」

「何卒左う仰しやらずにお聞濟みに預り度う存じます、豫々先生の御雷名は承はつて居りましたが、先日の扇面の畫を拜見して實に駭き入りました。私の師と仰ぐべき人は先生より外には

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ございません、何卒私を門下にお加へ下さいませ」

「何と仰しやつても不可ません」

けれども國芳は肯じなかつた。弟子にして與れると言はれない内は其處を動かないと云つた。到頭最後に是眞の方が根負けがして、國芳の願ひを容れることになつた。是眞は國芳に一字を贈つて井草眞仙と號せしめた。

三

是眞の師は、初め岡山派の南嶺に學び、後に四條派の豐彦に師事したけれども、彼の非凡の畫才は、自ら師法を蟬脱して、別に一新機軸を出してゐる。併し、彼の最も特技とする處は蒔繪であつた。

或る時幕府の用達町人松本兵四郎といふ者が遣つて來て、脇差の鞘に試み度いと思ふから、昔の青海塗といふ蒔繪を研究して見て貰ひ度いと是眞に言つた。それは元祿年間に青海勘七といふ蒔繪師が研究自得したところの塗り方であつたが、勘七は其の法を深く秘して子孫にさへも傳へなかつたので、其の儘絕えてしまつてゐるのであつた。是眞は即座に承知して、必ず青海塗を完成して見やうと松本に誓つた。其の後是眞は高弟池田泰眞を助手として專ら其の研究に從事した。彼は夫れが爲めに非常な苦心をした。數十回の試驗を行つて失敗した。が、最後に、それは始めた時からでは數年を經過して、漸く其の秘法を探り當てゝ遂に青海塗を完成することが出來たのだつた。

すべての天才がさうであるが如く、是眞は非常に創意に富んでゐた。青海塗の外にも、青銅塗　四分一塗等の新機軸を出した。割り貝といふ螺鈿も彼の工夫に基く物であつた。割り貝は鎌倉明月院の什物になつてゐる椅に施してあるのを見て人が知つてゐるばかりで、古來其の秘傳は絕えてゐたのを、是眞が新たに發明したのだつた。青海塗でも、青銅塗でも、或ひは四分一塗にしたところが、何れも金銀を用ゐる蒔繪ではなかつた。金銀は尊くて得難い物だ、其の貴重な金銀を用ゐなければ立派な蒔繪が出來ないといふのでは、美術品を多くの人の愉みに供することは出來ない。材料に貴重な物を使用はずして、それで立派な蒔繪を作り上げる處に是眞の誇りがあつた。そこで彼は好んで色漆を用ゐたのである。

「金銀を澤山塗り付けると人が其の目方で價を付けるやうになる、それは蒔繪師の大きな恥辱だ」と彼は云つた。

是眞は何でも物を粗末にする事を最も嫌つた。人が捨てゝしまふやうな物を何でも拾ひ上げてそれを何にか工夫して作つた漆といふ物は風に觸れると直ぐカサ〳〵して小さな破片に固ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるものだが、其の涙の留つた分だけは最早廢物と見なされて誰でも取つて捨てゝゐるのを、是眞は其の儘器物の底に塗り附けて見た。すると案の定堅牢で而も其のザラ／＼した處に一種の雅致のある塗が出來上つた。

彼が青年の頃京都で屢ゝ賴山陽を訪問した時、山陽の座右には一箇の箱が置いてあつて、彼は其の中へ紙片でも絲屑のやうな物でも何でも拋り込んで置いた。そして、家人や門弟などが何か一寸した物を包んだり結へたりするやうな場合には、山陽は其の箱の中から間に合ひさうなのを出しては遣るのだつた。

「山陽程の豪放な人でも、一方ではさういふ物を粗末にしない心掛けをもつてゐるのだ」彼は後年迄よく其の話をして門弟を戒めた。

圓山應擧も物を粗末にすることが嫌ひな人だつた。應擧は、生臙脂の綿を捨てずによく繪の具を洗ひ落して仕舞つて置いた。其の綿が溜り溜つて、應擧が六十幾つの時それを自身の羽織に入れた。

漆繪といふ物も是眞の試みの一つであつた。それ迄は誰も漆で紙や絹の上に繪を描いた者は無かつた。

安政元年の三月頃のことだつた。或る日、淺草の海禪寺に寄寓してゐる僧で橋本素詝といふ者があつて一寸繪も描くところから時々對柳居へ顔を見せる人物が、突然遣つて來て言ふことには、京都の三聖寺で、庫裡修繕の資金を作る爲めに　寶を賣却することになつたが、其の中に例の十六羅漢もあるといふ話だから、買つて置いてはどうかと云ふのだつた。是眞は駭いた。

「橋本さんそれは本當の話ですか」

「私も念を押して聞いて見たのです、が、確かな話だと云ひますので、大急ぎで先生にお報せ申さうと思つて來たのです」

是眞は先年住持に許して貰つて模寫して來た三幅の羅漢でさへ、今に大切にして持つてゐるのだつた。若し橋本の話が事實なら、どんな工面をしてもあの十六羅漢だけは自分の手に入れなければならないと決心した。で即日京都へ書面を出して賣否を尋ねると、折り返しに三聖寺から返書があつて　二百五十兩に買ひ手があれば賣ると云つて來た。是眞は取敢ず買受の事を書面で申し込んで置いて金の調達に掛つた。けれども、二百五十兩は彼に取つては大金過ぎた。其の上、丁度其の時分は、母が沒すると間も無く妻に死なれたりして不幸續きの後だつたので、赤貧洗ふが如き有樣だつた。で、先づ一番に秘藏の書畫類を全部賣り拂つた。が、無論そんな事では足りる筈が無いので、先代から持つてゐた檜物町と數寄屋町の地所を京橋のぬり彦といふ醬油屋へ賣つた。がまだ不足なので、今度は藏の中にある日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ほしい道具は殘らず持ち出して賣り拂つた。それでもまだ金が足りなかつた。が其の不足の分は十六羅漢を抵當に入れる契約で金貸から金を借りることになつた。

「そんなにまでして買はなくてもよいではないか。それに寺の什物を買ふと祟るなぞとも云ふから」と親類の者などは擧つて諫めた。

「ほかの物ならとにかく、是ればかりは諦めるわけにいかない。寺の物だらうが、私の買ふのは寺からではない、藝の上から買ふのだから祟りなぞある筈は無い」と云つて是眞はどうしても承き入れなかつた。

三聖寺の方では、役僧が其の畫幅を携へて出府して、駒込勝林院に宿泊してゐた。是眞は金貸から不足の金額を調達して、殘金二百五十兩と別に寄附金として金一枚、即ち七兩二分を役僧に渡して、漸くの事で畫幅を自分の物にすることが出來た。それは翌年二月の事であつた。此の佛畫は、中幅釋迦左右十八將天の三幅と、羅漢十六幅と、併せて十九幅から成つてゐた。是眞の欣びは譬へんものも無かつた。同年八月九日彼は傳通院で羅漢講式を修めた。

李龍眠の十六羅漢の評判は江戸中に喧傳された。是眞の家では、それを觀せて呉れと云つて來る者の應接に遑が無い程だつた。

或る日薩州家の侍が二名で對柳居へやつて來て

「其所許が先般購はれたといふ李龍眠の十六羅漢の評判が君侯のお耳に入つて、是非共それを當家へ讓り受け度いと仰せられる。就いては代金二百五十兩の外に御菓子料として一千兩其所許へ進呈致すによつて、何卒お聞き入れが願ひ度い」と云つた。

「眞平御免蒙ります。あれは私が苦心に苦心をして漸く手に入れた品でございますから、千兩が二千兩でもお賣り申すわけには參りませぬ」

是眞はにべもなく斷つて歸した。すると重ねて使者が來て「それでは殿樣がせめて御覽になりたいと云はれるから一日だけ借用致し度い」と言つた。是眞はそれも斷つたが、結局、

「それでは私が御屋敷迄持つて行つて、御覽になつたら直ぐに持つて歸ると云ふ事と、それから御覽になつても決して賣れの讓れのといふ事は仰しやらない事、此の二つを御承知でございましたら、お目に掛けるだけはお目に掛けませう」

と是眞が言ふと、夫れでも宜しいといふことになつた。是眞は門人池田泰眞と二人で、神田川から船に積んで三田の薩州邸迄持參した。そして歸る時にはいろ／＼のお土産を貰つて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の中に塗り骨の烏籠などもあつたが、是眞の眼で見ると價値の無い物だつたので直ぐに人に遣つてしまつた。

「賣れ」といふことは決して云はない約束だつたけれど、島津公は觀たら餘計欲しくなつたので、今度は幕府の繪所狩野勝川院法印をして是眞に交渉せしめたのだつたが、是眞は飽く迄頑張つてゐて承かなかつた。

李龍眠の十六羅漢は其の後久しく柴田家の所藏になつてゐたが、明治卅八九年の頃、仔細あつて亞米利加へ籍を轉じてしまつた。

四

蒔繪では光琳以後の名人であつたが、繪畫に於ても、當時僅かに是眞と角逐なし得る者は河鍋曉齋あるのみだつた。曉齋は名は陳之、剃髮して洞郁と云つた。初めは狂齋と號し、また惺々如空と稱した。通稱は周三郎、下總古河の生れだが、幼小より江戸に出で初め歌川派の浮世繪を學び、後に狩野洞白を師とし、狩野派の骨法に通曉し筆力頗る遒勁であつた。彼は更に鳥羽僧正に私淑して、飄逸簡狂の筆を揮ひ、また廣く古今の名家の筆蹟を模し、自家の才を以て調和して一家をなした。性質は磊落粗狂、酒を飲めば必ず亂暴を働いた。明治三年不忍辨天境内の酒亭で書畫會の催しがあつた時、醉に乘じて筆を揮つたのが、或る顯官を誹毀するものと認められて、席上から捕縛されるといふ難に遇つた。四箇月で免されて獄を出たが、其の後は謹愼して、從來狂齋と稱したのを曉齋と改めた。

是眞は、曉齋とは全く性情が相容れなかつた。賴山陽や香川景樹の影響を多分にもつてゐた是眞は、身を持すること至つて謹嚴で、殊に大義名分を重んじる風があつた。また彼は非常に親孝行であつた。對柳居の住居を改築する時、座敷の方は大概新材を用ゐたが、神田川に臨んだ一室の欄干だけは古物を用ゐて改めなかつたので或人が頻りに怪しんで其の故を尋ねると、其の欄干は亡くなつたら母が朝に晩に心を入れて拭いた物で謂はゞ母の形見とも云ふべき澤が殘つてゐるのだから用に足りる間は改めるに忍びないのだと答へた。また母が常々「畫家は品位を落しては不可ない」と云つて、衣服は、冬は黑羽二重の紋付、夏だと絽の紋付、それで帶は萌黄色の獻上博多を締めさせた。是眞は常に其の服裝ばかりで、終身これを改めたことはなかつた。酒を飲んでも亂に陷るやうな事は決して無かつた。醉つた時に話す話題は藝の事に限られてゐた。

「お前達は、己の言ふことを酒の上の話だと思つて聽いては不可ない。己は醉つて氣持の好い時だから、大切な藝の話をする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のだ」悴達や門人に向つて是眞はよくさう言つた。

河鍋曉齋の不始末を聞いた時、是眞は溜息をついて側に居た者に言つた。

「あの男の繪だけは取り處があるから、一度會つて遣らうと思つてゐながら、つい機會が無くて今日迄延びてゐたのだが、そんな行ひの人間とは知らなかつた。もう生涯會ふ必要はない」

曉齋が放免されて家に歸つた後、或人がそれを聞き傳へて、百方周旋して兩者を會はせやうとして見たが、是眞は頑として應じなかつた。そんなことも知らずに、佃島住吉神社の祠官某といふ人が是眞の處へ行つて、

「私は當代の大家に一幅宛畫いて貰つて、對幅を作り度いと思ひますから、是非先生に一幅揮毫が願ひ度い」と云つた。

「片方は何方が畫かれるのです？」

「河鍋曉齋先生にお願ひして、其の方は既に出來上つて居ります」

すると是眞は眞紅な顏をして、

「不肖乍ら柴田是眞は、天下の罪人と筆を列ねる事は御免を蒙る」恁う云つて是眞は席を起つてしまつた。

是眞は藝人が好きだつた。いろ／＼な藝人を集めて藝の話を聞く事を無上の愉みとしてゐた。對柳居へは樣々の藝人が常に出入した。役者では五代目菊五郎、相撲取では横綱境川、大関の朝日嶽などが殊に最負を受けた。三遊亭圓朝も非常に懇意にして出入した。其の他當時一流の藝人と云はれる人々は對柳居へ出入しなければ恥のやうにしてゐた。文人で最も親交のあつたのは河竹默阿彌と、山々亭有人であつた。默阿彌の娘に島といふがあつて、幼少から繪が好きだつた。是眞について繪を學び度いと云ふので、父が其の事を賴むと、是眞は最初のうちは頑として應じず、「女は成長して後良緣を求めて良夫に事へ、家事を掌る事を務とすべきである」と云つて承かなかつたが、島女は飽く迄も切願して止まなかつたので、是眞も遂に其の熱心に動かされて門下の一人に加へた。島女は良師を得て刻苦精勵して怠らなかつたので、著しく其の技が進歩して、皇居の御杉戸の揮毫を仰せ付けられるまでになつたが、不幸にして廿餘の妙齡を以つて夭折してしまつた。

山々亭有人は本名は條野傳兵衛、後に採菊山人の名で小説も書いた。假名垣魯文と併稱された文人で、やまと新聞及び日々新聞の社長をした。或る時有人は「僕は頗る良い書生を得た」と云つて、書生の自慢をしてゐたが、時には其の書生を對柳居などへも伴れて來ることがあつた。其の書生は後の櫻痴居士、福地源一郎であつた。鏑木清方は、採菊山人の[illegible]の子である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

是眞は五代目菊五郎の芝居をよく觀に行つた。芝居を看るには棧敷は鶉と極まつてゐて、升を十位ぶつ通しに取つて、門人やら何やら有り丈の人間を引き連れて行つて看た。五郎は別けて贔負だつたので、彼の爲めに「茨木」の額を又一枚畫いて淺草觀音へ奉納した。

芝居小屋へ行つても、平常と同じ様にきちんと座つてゐて、膝を崩すやうなことは無かつた。

「藝を觀るのに胡坐を掻いて觀るといふ法があるものか」彼は門弟等には嚴ましく左う言つた。

酒席でも矢張り左うであつた。盃の置き所と雖も必ず一定の場所に極つてゐた。「恁うして一つ所へ置けば膳の上をよごす様なことはない」と云つた。他人が藝を演つてる時は畏つて觀てゐた。或る時清元喜久壽太夫が、他人の藝半ばに雜談をしたゝめにひどく叱責された。唯、相撲取だけは處構はず胡坐御免だつた。けれども是れも、大關の朝日嶽が、或る時酒を飲み乍ら足の指をいぢつてゐるのを見出されて「不作法だ」と云つてお目玉を頂戴した。

相撲はよく負け角力を贔負にして茶屋へ招んで祝儀を與へた。

「負けた相撲が遺恨も殘さず、にこ／＼笑つて、便々とした腹をさすり乍ら花道を戻つて行く、あの氣持が自分は好きなのだ」と是眞は人に云つた。

五

或る時、對柳居の一室に座して、對岸の土手を指差し乍ら、是眞は門弟に向つて言つた。

「お前達あの土手の草を見るがよい。土手の上に生へてゐる草は根を張ることは自由だけれども、其の丈は數寸に過ぎない。反對に石垣に生へる草は根は十分に張れないにも係はらず丈は一尺以上に伸びてゐる。人間もあの通りだ。何業でも、生ひ立ちが樂だと、何時か安逸に馴れて終りが艱難になる。お前達も、人間にならうと思はば石垣の草になつて、根を張ることに苦勞しなければ不可ない」

是眞は門人を取ることを餘り喜ばなかつた。入門を乞ふ者があると、必ずそれに對へて言ふ言葉は、

「私は人に教へる程の技倆はありません、だから死ぬ迄自身の修業に勉める覺悟です」

彼は謙遜な態度を以てさう云つて斷つた。併し、一旦承諾して弟子にした以上は、自身の事を忘れてよく弟子の面倒を見た。門下生に對する態度も禮儀を守つてゐた。そして平常彼等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と同じ物を食べ、決して自分獨り美食をするやうなことは無かつた。旅行をする時とか、芝居相撲等を看に行く時とかには、必ず門人をも全部連れて出掛けた。

安政二年十月二日の夜であつた。家人は既に寢てしまつて、門人の池田泰眞獨り是眞と對き合つて二階で仕事をしてゐた。すると突然大地震が來た。泰眞は驚いて階下へ降りやうと思つたが、其の時は燈火が消え、震動が劇しくてどうすることもできなかつた。すると是眞は暗がりの中で泰眞の手を執つて言つた。

「泰眞、落ち付いてゐろ。師弟は親子も同じだ、死なば諸共だ」

池田泰眞は天保六年十一歳で是眞の門に入つて、研習年を積んで其の蘊奥を極めた。蒔繪の技に於て斯門第一の妙手と稱され、恩師の沒後帝室技藝員に擧げられた。

神田金澤町の旅館松野某の長男に庄次郎といふ少年があつたが、繼母の爲めに虐待されるのが憫れだつたので、是眞は其の兩親に賴んで庄次郎を自分の門人にして手許へ引き取り、蒔繪を教へた。庄次郎は其の恩に感じて日夜精勵して怠らなかつたので、技倆は年一年と進んでいつた。或る時庄次郎は群蝶蒔繪の印籠を製作した。是眞がそれを見ると大層佳い出來だつた。

「うむ……是れは佳く出來た」是眞は暫く手に取つて眺めてゐたが「庄次郎、是れは一つ丸利へ持つてつて賣つて見ろ」

庄次郎は初めて師匠から褒められた上に、自分の作品を金にして來いと云はれたので、大喜びで出掛けた。丸利は日本橋の袋物商で、河內山宗俊が珊瑚の根締をゆすつたと、云ひ傳へになつてゐる店で、部下の通人粹士を專ら顧客とする老舖であつた。だから其所へ出入するのは江戶でも一流の職人ばかりだつた。庄次郎は丸利へ行つて其の印籠を見せた。すると先方でも大變其の出來ばえを褒めて吳れた。そこで値段の交涉になつたが、すると庄次郎は案外な氣持になつた。彼自身の考へでは安くも二歩には買つて吳れるだらうと思つてゐたところが、聞いて見ると、精々一朱位にしか引取れないと云ふのだつた。

「一朱は餘りひどうございます」

「いや、それあネ、同じ此の印籠でも、お前さんの師匠の名前が入れてあつたら一兩二歩でも二兩でも引き取るんだが、どれ程作が佳くても、商賣物となると名前が肝心だからね」

庄次郎は失望したが腹も立つので到頭賣らずに持つて歸つてしまつた。そして其の事を師匠に話すと、是眞は笑つて、

「左うか。賣らなくても良い〳〵、丸利で買つて吳れなかつたのはお前の爲めには却つて幸せだつた。お前はまだ修業中の身だ、それが若し高價に賣れでもすると、利の事ばかり考へて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

技をおろそかにするやうになりかねなかつた。今後は何を拵へるにも賣る事は考へずに遣ろ。あゝ危ない事だつた」

庄次郎は默然として師の訓戒を聽いてゐた。彼の心からは丸利で受けた屈辱も腹立ちの念も消えてしまつて、技の修業に精進しやうといふ勇猛心だけが勃然として頭を上げてゐた。

「有難うございます、よく解りました」

庄次郎は恁う云つて師の前に頭を下げた。そして二階に上るが否や、鉈を揮つて其の印籠をこな〳〵に打ち碎いてしまつた。其のこな〳〵の破片を見ると、彼は自身の淺間しい慾念が打ち碎かれて飛び散るのを見てゐるやうな氣持がした。

庄次郎の技は益進歩した。是眞は庄次郎に己が一字を與へて、應眞と名乘らせた。然るに、不幸にして中途に病を得、前途多忙の身を以て應眞は師の家で死んだ。是眞は我子を亡つたやうに歎いて、厚く葬儀を營んだ。

六

是眞が最も大切にして秘藏してゐる物に、光琳の硯箱があつた。蓬平の圖で、精巧無類の逸品であつた、それは彼が蒔繪の師古滿寛哉から讓られた硯箱であつた。だから一面に於ては恩師の形見とも云ふべき品であるから、彼としては特に大事にしてゐたのも尤もなことであつた。

寛哉が沒した後、其の弟に文哉といふ人があつた。此の人も矢張蒔繪師で相當の腕だつた。けれども文哉は兎角病身なところへ、何や彼や不幸續きで、後には餘程生活にも窮するやうな狀態になつてゐた。是眞は其の境遇に同情して折り〳〵助けてやつてゐた。すると或る頃のこと、暫く文哉が顏を見せないので是眞は私かに心配してゐたところが、或る人が來ての話しで文哉が病氣で寢てゐて大變困つてゐる塩梅だ、といふことを聞いた。是眞は何とかして文哉を救つて遣り度いと思つたが、生憎自分にも纏つた金は無い。其の時彼がふと考へ付いたのはかの光琳の硯箱の事であつた。

「あれは自分に取つては實に何にも替へ難い品だ、併し、師匠から貰つた品物だから、其の人の弟が今日難儀をしてゐるとして見れば、あの硯箱を賣つて金にして、それで救つて遣つたら地下の師匠も喜ぶだらう」

是眞はさう考へて硯箱を賣ることに決心した處へ、丁度山々蓉有人が來合せたので其の事を話すと、有人も大いに是眞の考へに贊成して、

「それは結構な話だ、それでは私が硯箱を何處かへ賣り込んであげやう」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふはなしになつて、有人は其の硯箱を金座の辻某の處へ持つて行つて廿五兩で買つて貰つた。其の金を是眞の處へ持つてくると、是眞は大層喜び、有人には二歩の禮をして、早速其の金を文哉の許へ持たせて遣ることになつたが、「病人を喜ばせるやうになりたけ澤山に見せて遣り度い」といふので、廿五兩を全部天保錢に兩替へをして持たせてやつた。使ひに立つた門弟の者は、今戸八幡神社の附近に住つて病の床に臥してゐる文哉の家へ行つて、病人の枕許へ天保錢を山のやうに積み上げて歸つた。

當時の畫家は誰彼なく書畫會といふ事をして、百方人を使つて奔走せしめ、少しでも餘計金を集める事を以て殆んどみえのやうにしてゐた。が、是眞だけは嘗て一度も書畫會を開かなかつた。處が、たつた一度だけそれをしなければならない羽目になつた。それはかういふ譯からだつた。

或年の暮の事で、幕府御細工所の用達町人の鈴木某といふ者と外に二人、三人で是眞の處へ遣つて來て云ふことには、我々の使つてゐる職工數十名の工銀が歲末の今日迄下附されないので、彼等の難義を見るに忍びないから、一時他から借金をして一同の手間を支拂つて遣り度いと思つて、京橋南傳馬町の漆器商岩見某の處へ金二百兩の借用を申し込んだ。すると岩見の返事は、是眞先生が口入れをするなら用立てやう、でなければ斷るといふ挨拶である。どうか多數の職人の助かることだから一つ岩見に談して貰ひ度い、といふのであつた。

「それはお氣の毒なことだ、何、私が口添へをするだけで大數の職人が助かるといふのなら、それ位の事は引受けて致しませう」

是眞は直ぐ樣岩見の處へ行つて三人に金を貸して遣つて貰度いと云つて賴むと、

「あなたが連署をするなら、百でも二百でもお貸し申しませう」

と岩見が答へたので、是眞は岩見が自分を信じて呉れることを喜んで、三名の外に彼が連署して首尾よく金を借り出すことが出來た。すると、年が改つて、期限が來たけれども三名の者が返金をしないので、岩見からは嚴しく是眞の處へ催促を差し向けて來た。是眞は迷惑して三人を呼んで其の不都合を詰つたところが、三人の者は唯々延期を乞ふばかりで一向要領を得ない。是眞は非常に立腹した。

「私はあんた方に欺されたのだ。宜しい、さういふわけならあの金は私の方から岩見へ返濟します。其の代りもうあんた方には二度と會はないから、決して私の家へ足踏みをして下さるな

三人は只々詫するばかりで歸つた。其の後で是眞は考へて見たが、怒りにまかせてあゝは云つたやうなものの、自分としても餘裕の金などはちつとも無い、算段をすると云つた處で、二百兩は愚か其の半分の金も六つかしい。彼も流石に當惑してしまれた。其處へ或人が來て其の話を聞くと、

「そ、では一つ思ひ切つて書畫會をおやりになつては如何です？先生は是れ迄一度もなさらないことだし、二百兩位の金を集めることは造作も無いでせう」と云つて勸めた。

是眞は書畫會ぐらひ厭な事は無かつた。けれども全くそれ以外には金を調達する方法がないので、仕方無しに催すことになつた。種々の準備をして、自身も諸方へ奔走した。すると、愈開會といふ五六日前になつて、鈴木等三人の者が突然是眞の家へやつて來た。けれども是眞は憤つてゐるので來意も尋ねずに三人を追ひ歸してしまつた。三人は金を調達して來たのだつた。そこで直ぐ其の足で岩見へ行つて二百兩の金を返濟しった岩見は豫て預つてゐたところの證文を是眞の處へ持たして寄越した。それで初めて是眞は三人が金を持つて來たのであつたことを知つたが、岩見が順序を履まず三名の辨金を受けたのは不都合だと云つて抗議を持ち込むと同時に、「もう書畫會をする必要は無い」と云つて、世話人にあてゝ取消しを申し込んだ、世話人達に驚いた。もう何から何まで準備もしてあるし、廣告もしちまつてある。それを今更中止されては我々の立ち場が無いと云つて樣々に是眞を慰めて、兎も角會だけは無事に催されたのだつた。

七

或る時彫刻家島村俊明が、他の人の紹介を以て對柳居を訪問して來た。俊明は當時高村光雲、石川光明と並んで彫刻界の三傑と稱され、象牙彫に於ては古今獨歩の名人であつた。殊に當時は新進氣鋭で、當る可らざる快男子として聞えてゐた。是眞は大いに喜んで彼を迎へ、美酒佳肴を饗して好遇至らざるなき有樣だつた。主客共に旺んに飲んだ。醉ふと是眞はいつになく氣焔を上げた。

「酒は灘の生一本、肴は江戸前です。見よ、島村先生、清樹水流に臨んで春柳に對す、何と先生、貴君でも、此の景に接して此の樣な美酒佳肴を口にすることは、先づ滅多には無いでせう。何卒、滿を引いて、十分に召し上つて下さい」

といふ調子で頻りに酒を勸め乍ら、氣焔萬丈當る可らざるの躰たらくなので、流石の俊明も啞然としてしまつた。軈て是眞は起つて厠へ行つた。俊明は此の機逸す可らずといふので、家内

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の者にだけ挨拶をして歸らうと倉皇として起つて玄關へ行くと是眞は何時の間にか衣服を更めて其處へ出てゐた。そして俊明に向つて平伏叩頭して、酩酊の餘り無禮をした罪を謝し

「何卒お閑もあらば是非又お遊びにおいで下さい、謹んで藝術のお説を承りませう。それが何より私には樂みなのですから」

と、酒間に於ける態度とは打つて變つて鄭寧な挨拶なので、俊明は再び度膽を拔かれ、煙に卷かれ乍ら門外に出た。が、少し歩いてゐるうちに俊明はハタと悟る處があつた。是眞の諧の變化測り知るべからざる所以を彼は發見したのだつた。彼は思はず手を打つて感嘆の聲を發した。爾來俊明は益是眞を尊敬して、交りを深くしたのであつた。

是眞は、午前中は蒔繪の仕事をして、午後は南向の部屋で繪を描いた。いかな日でもそれを缺かすといふことはなく、生涯修業を怠らなかつた。八十を過ぎてからでも、生姜などを寫生してゐた。十世川柳前島和橋が、或る日午頃に是眞の宅へ行くと、不相變セツセと蒔繪をやつてゐたので、和橋が少し冷かし口調で「いつもごさかんですネ」と云ふと、是眞は言下に「否え、私は左官ではありません、蒔繪師です」と答へた。

三遊亭圓朝が、或る日のこと其の仕事場へぶらつとやつて來ると、是眞はふと思ひ出した事があつたので、

「圓朝さん、疾うからお前さんに話して上げやうと思つてゐた事だが、お前さんに一つ、人情噺のたねを教へて上げやうかね」と云つた。

「是非伺ひ度いものですね、一體どんなお話ですか？」

「是れあ實際あつた事なんだがね、つい其處の佐久間町に以前あつた鹽原屋といふ家の話をお前さん知つてるかい？」

「否え存じませんよ」

「さうかい、ぢやお話して上げやう」

是眞は仕事を止めて話し出した。それは野州鹽原から出て來て神田佐久間町に店を構へて、江戸でも屈指の豪商になつた鹽原太助の經歷から始つて、それに纏はる不思議な因緣咄があり、さしもの豪家も二代目の時になつて一門殘らず死に絶えて跡方も無く滅びてしまふまでの顛末を話したのだつた。先代太助の時分の事は直接には知らなかつたが、二代目の鹽原屋が滅びる當時の有様は、家が近くにあるだけに是眞は詳しく見聞してゐたのだつた。

「どうだな、噺になりさうかね？」

「なりますなあ、いやどうも實に面白い話です、早速工夫して見ませう、どうも有難う存じました。では御免下さい」と圓朝は歸り掛けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まあいいではないか、緩り遊んでおいで」
「いいえ、また伺ひます」
好箇の材料を得たので圓朝は嬉しまぎれに直ぐ様飛び出して歸つてしまつた。其の後間も無く圓朝は自身で鹽原へ行つて調べて來たりして 彼の傑作の一である「鹽原太助」を作り上げたのであつた。

昔への名人上手と云はれる人に往々さういふ人があつたが如く、是眞は金錢にかけては極めて淡泊であつた。繪の揮毫を依賴して來る者は大概最初に謝禮を持つて來る。けれども是眞は其の奉書紙に包んで水引を掛けてある謝禮の金は、成りたけ繪が出來上る迄は開かぬことにしてゐた。が、藝人などが來ると乾度祝儀を與へるのだが合憎金が無い、すると其の奉書包に手が附くのだつた。

日本橋の袋物商丸屋利兵衛は大層是眞に愛されてゐた。或る時も御機嫌伺ひに行くと、歸りがけに「丸屋さん、一寸お待ち」と云つて、例の水引を掛けた謝儀を取り出してそれを又紙に包んで是眞は與へた。丸利が家へ歸つて明けて見ると法外に澤山の金がはいつてゐたので驚いてしまつた。又其の次に行くと、歸りがけに「丸屋さん一寸お待ち」と云ふ。「困つた事だ、又金を呉れるのかしら」と丸利が内心弱つてゐると、是眞は矢張何かを紙に包んで呉れるので、仕方無しに貰つて家へ歸つて明けて見ると、今度は最中がはいつてゐた。

八

日本の美術工藝品が外國の博覽會へ出品されたのは、明治六年の墺太利大博覽會の出品を以て嚆矢とする。是眞は其の時「富士田子の浦」の圖を現はした蒔繪の額を出品した。それは大さ、高さ四尺五寸横六尺五寸あつた。蒔繪の額として是れ程大きな物は前後に比類が無いのである。

明治十七年の繪畫共進會の時、是眞は、蟬丸が琵琶を彈じてゐる圖を畫いて出品した。彼は其の前々年の明治十五年九月初めて第一回繪畫共進會が開かれた時から、審査官を命ぜられてゐるのだつた。すると或る友人が其の蟬丸の繪を觀て來て、一日對柳居を訪問して、恁う言つて批評した。

「今度の貴君の出品を見ると、博雅の三位は頗る申し分のない出來だが、蟬丸が口を開いて歌を謳つてゐる點に至つては私には理解が出來ない。傳はる處に依ると、博雅の三位の偷み聽した琵琶の曲は、玄象啄木といふことになつてゐる、然るに、是れは樂曲であつて歌曲ではない。貴下のお考へは如何ですか」

是眞は此の批評を聽いて大いに喜んだ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いや實に良い事を教へて下すつた。貴下の批評を聽かずにゐると、私は何時迄も自分の無識を覺る機會が無かつたでせう。實は今朝もある處で審査員の幸野楳嶺と會つた處が、楳嶺は私の出品畫を激賞してゐたのです。萬一銀賞でも與へられるやうな事があると審査員までが哂はれる處でした、あゝ危險々々」

是眞は即刻使を遣つて其の出品畫は審査に附しないやうにと云つて申し込んだ。

鹽川文麟は岡本豐彦の門人で、是眞とは同門と云ひ殊に親しい間柄であつた。或る年是眞が京都に遊んだ折、一日文麟と會して加茂川べりの旗亭で飲んだ。其の時文麟が、新緑の中から清水八阪の塔が浮き出して見える東山一帶の景を指差しながら、

「是眞先生、あんたはいつも江戸の自慢ばかりするが、此の景色を御覽、是れ程の眺めは江戸にもあるまい」と云つた。

すると是眞は言下に答へた。

「いかにも是れ程の景色は江戸では見られない。だが、是れ程の景色を朝夕眺め乍ら繪筆を執つてゐるにしては、京都の繪かきは繪が描過ぎるのはどうした譯だらう」

文麟は閉口して二の句が繼げなかつた。鹽川文麟は、幸野楳嶺、竹内栖鳳等の師である。

是眞が文麟等と豐彦の許で繪を學んでゐた時の事であつた。一日豐彦は門弟達に向つて斯ういふ談をしたことがあつた。

「餘程前の事だが、光格天皇様が「有徳者に五萬歳」といふ御題を、出しになつて、『是れをば、其の意味で無く、言葉の上だけで繪にして見よ』といふ仰せだつた。其の時禁裏繪所は申すに及ばず、京中の繪師にも御沙汰があつて種々工風を求められたが、つひに叡慮に副ふ程の名案も誰も浮かばなかつたので、到頭それきり御沙汰止みになつてしまつた」

此の御題の話を後年になつてから是眞は思ひ出して畫いた。彼の工風した圖は、五ツの瓢簞を重ねて、それを總角の紐でくくつてある、其の紐の端を一匹の蟹が鋏を以て挾んで、力を入れて引つ張ると、紐がする〱と解け掛けてゐる圖である。即ち、瓢は萬年であるから「解くは蟹、お萬歳」といふのである。

此の繪は可成り評判になつた。すると深川の船橋屋といふ菓子屋の主が、其の圖を應用して菓子を製造した。そして褒められる積りで立派な折へ入れて是眞の處へ持參した處が、是眞は以ての外の氣色で「勿體無くも帝の御題を口に入れて食べてしまふ菓子に拵らへるなぞとは怪しからん事だ」と云つて、折も受け取らずに歸してしまつた。

是眞は頗る多能で、彫刻をも能くし、俳諧は小原梅休調を攻

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

として、一生を通じて秀吟が頗る多い。又茶は時習軒宗意について、裏千皆傳を受けた。彼が初めて茶に志したのは、曾て淺草本願寺の囑に應じ、寺へ行つて襖に揮毫をなすべく除ろに構圖を練つてゐると、折柄一人の小姓が出て抹茶を薦めた。其の頃彼は少しも茶事に心得が無かつたゝめにどうしてよいか判らなくて思はず冷汗を流した。すると、折角描いてゐた構圖が纏らなくなつて、繪が描けなくなつてしまつた。彼は蒼遑として辭して門を出で、直ぐ其の足で淺草觀世音の境内に庵を構へてゐた時習軒宗意を訪ねて、即日入門したのであつた。

明治廿三年初めて帝室技藝員を置かれた時には、是眞は特に抽んでて最初の員に選ばれた。其の前からも皇室の御用は度々仰付けられてゐた。「柴田是眞」の名は單に國内のみでなく海外にまで識られてゐた。子弟一門悉く繁榮して、而も稀な長壽を保ち、悠々として老後を送つた是眞の一生は、幸であつたと云はなければならない。

其の日も彼は平常と少しも變つたことはなく、例の神田川に臨んだ一室で繪筆を握つてゐたが、午後四時頃になると「少し氣分が不快い」と云つて床を取らせ寢たが、病勢俄かに革つて其の夜の十時頃には最早此の世の人ではなかつた。それは明治廿四年七月十三日の夜であつた。享年八十五、遺骸は今戸稱福寺に葬り、法名は「弘道院釋是眞居士」と謚された。

追記

柴田是眞に三男一女があつた。令哉、眞哉、降眞、及びせい女の四人である、令哉、眞哉の二氏は先年既に物故し、今は末弟降眞氏あるのみである。降眞氏は母方の性を冒して梅澤を名乘る。現に府下下澁谷豊澤の地に住し、故翁の遺業を繼いで専ら蒔繪の技に從事して、夙に漆工美術に於ける有數の權威者として識られてゐる。私は最近某氏の紹介を得て降眞先生と相識るに至つた。先生は其の專門の長技を除いても、資性閑雅敦厚の君子人であつて、是れ又頗る先考の衣鉢を傳へてゐる。一日私は其の豊澤の寓居を訪れ、近世風流傳述作の企を語つて、是眞翁の正傳と逸話を需めた處が、即座に快諾を得て、特に私の爲めに忙中の時間を割いて、懇ろに故翁の事蹟を語られた。其の上私は同家に傳はるところの數種の參考書類をも借覽を乞ふて持ち歸つた。夫れ等の材料に依つて、私はこの「柴田是眞」の一篇を草したのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

島村俊明

一

維新前迄、淺草茅町に住つてゐて、代々昔から續いてゐる宮彫師があつた。其の家の祖先は左甚五郎から出てゐると云はれてゐたが、兎に角、彫り物元祖の家柄で、何時も大勢の弟子を置き盛大に家業を營んでゐた。

安政前後は、當主を文治郎と云つて、職業上の名乘りは島村俊凖と稱へるのだつた。此の文治郎といふ人は、元來は四谷鹽町の生れで先代俊正通稱留五郎と云つた人の弟子だつたが、腕の良い所から、先々代俊矩といふ人の娘を妻に持つて、後に師匠の跡目を受けて島村家を相續したのだつた。

文治郎の妻はたけといふ名前だつた。夫婦の間には男の子が二人出來た。總領は八五郎、次男を唐四郎と云つた。唐四郎が生れたのは安政二年十月で、丁度大地震のあつた時から間も無くだつた。十月二日の夜の地震が最初で、其の後廿日ばかりといふものは一日も熄まず地震があつた。其の騒ぎの中で唐四郎は生れたのだつた。

併し何事もなく月日が經つて、次男の唐四郎は五歳になつた。

或る日のこと、父親の文治郎は少し體の加減が惡かつたので仕事場へも行かずに、寢轉んで草双紙などを讀んでゐた。すると餘程前に唐四郎が二階へ上つて行つたきり頑張り降りて來ない。丁度其處へ女房のおたけが臺所の方から來たので、

「おたけ、唐四郎がな、さつき二階へ行つたきり降りて來ないから、一寸見て遣んな」と云ふと、

「あゝ、あの子はねえ、此の頃繪を畫く事を覺えたんですよ。毎日あゝして二階へ上つては、繪ばかり畫いてゐるんですよ」

とおたけは笑ひ乍ら云つた。

「へえー、そいつは知らなかつたな。それでは、坊主がどんな繪を畫いてやがるか、一つ行つて見て來て遣らう」

文治郎は草双紙にも讀み倦いたところだつたので、一寸好奇心を唆られて、成りたけ足音を立てないやうにしてそツと二階へ上つて行つた。見ると、北向きの小部屋で、唐四郎が向うむきになつて頻りに何かやつてゐる。

「唐四郎、そんな處で何をしてゐる？」

唐四郎はこつちを見て、急いで繪筆を隱し乍ら

「何んにもしてゐないよ」

「嘘をつけ、繪を畫いてゐたらう」父親はさう云つて側へ行つて「何の繪を畫いたんだ？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「曾我兄弟の討入りを畫いたんだよ」

「曾我兄弟の討入りだ？」文治郎は笑ひ乍ら「どれ、お父ちゃんに一寸見せな」

唐四郎は、叱られないと見ると安心して、それまで背後へ隱してゐた繪を出して父親に見せた。文治郎は、其の繪を手に取つて見て驚いた。それは繪本でも見て畫いたものには違ひないが、圖取りと云ひ、筆の使ひ方、着色の具合まで、幼稚な中に自ら一種の骨法が備つてゐて、到底子供の畫いた繪とは思はれない。

「是れはお前が一人で畫いたのか？」

「あゝ、さうなんだよ、坊が一人で畫いたんだ」唐四郎は自慢さうな顏をして答へた。

文治郎は、繪を手にした儘思はず我が子の顏を見詰めた。先祖代々からの尊い藝の血統が、この幼い子の體にまで繼がつてゐるのだと思ふと、彼は何とも云へない有難いやうな、歎びの感にうたれるのだつた。

唐四郎は、世間の子供と同じやうに凧を上げたり獨樂を廻したりしないではなかつたが、併し遊んで歸つて來ると直ぐ二階へ上つて繪を畫くのだつた。兩親はそれを放任して置いた。

其の翌年の事だつた。淺草榊町の大六天の祭禮が來た。茅町附近は大六天の氏子なので、祭の餘程前から町内の若者達や子供達は大の騒ぎで其の仕度に掛つてゐた。毎年の慣例で町内の揃ひの祭の着物が出來た。島村の家でも、門人や子供の揃衣をめい〳〵に誂へてあつたので、それが出來て届けて來た。一同はその反物を見たばかりでもう樂しい祭の日が來たやうに浮き立つのであつたが、唐四郎一人は何んと思つたか詰まらなさうな顏をして、

「坊はこんな衣物着ることは厭だよ」と云ふのだつた。

「何？何故厭なんだ？」

「だつてこんな衣物着たつて詰らないや、お父ちゃん、坊には白い衣物を拵へておくれよ」

「白い衣物な？　莫迦を云へ、葬ひぢやあるまいし、白い衣物なんか着られるものか」

「いゝんだよ、白い衣物がいゝんだよ、それを拵へて呉れなきやお祭に出ないや」

唐四郎はさう云つて駄々をこね始めた。言ひ出すときかない剛情な子だつた。父親の文治郎も職業柄一寸變つた人物だつた。

「仕樣のない坊主だな、仕方が無い、氣の濟むやうに、白の眞岡木綿でも、買つて仕立てゝ遣れ」

父親がさういふので、母親は仕方なく白の眞岡木綿を買つて來て子供の衣物を仕立てゝ遣つた。すると唐四郎は大喜びで直

ぐにそれを持つて二階へ行つた。が、稍暫らく經つと二階から「お父ちやん、坊の衣物が出來たから見に來ておくんな」と呼ぶ。

「あのチビめ、又何か造りあがつたんだな」

それでも父親はのそり／＼二階へ上つて行つて見た。見ると唐四郎は先刻仕立たばかりの衣物を廣げて置いて、其の側に繪筆を持つて立つてゐた。其の衣物には、墨繪の雲龍がいつぱいに畫かれてゐた。筆勢と云ひ墨色と云ひ、到底子供の畫いた繪とは思はれなかつた。父親は「あッ」と云つた儘言葉が出なかつた。

彫物師の小倅の、雲龍の祭の衣裳の話は大評判になつて、餘所の町内からも態々それを觀る爲めに遣つて來るのだつた。

二

文治郎は、其の子を繪師にしやうと考へてゐた。幸ひ次男のことではあり、それに當時としては、彫物師ではどれ程の名人になつたところが結局職人で了らなければならなかつたが、畫師のはふだとさうでなく、隨分出世も出來るし、一段地位の高いものになつてゐたので、彼は悴の唐四郎をば是非繪師に仕立てやうと思つてゐたのであつた。併しまだ何分幼いので繪の師匠に附けて遣るといふまでのこともしなかつた。

唐四郎は、手習の師匠の處へ通ふやうになつた。そして手習ひから家へ歸つて來ると、二階で繪を畫いてゐた。が、七八つ位になると、子守をさせられるやうになつた。それが爲めに、好きな繪を畫くことが出來なくなつた。

「彫り物をしやうかな」と唐四郎は考へた。彫り物なれば子守をしながらでも出來るからと思つたのであつた。

唐四郎は仕事場から密りと鑿を一挺と手ごろの木ぎれを持ち出して來て、近くのお寺へ遊びに行つた。そして赤ん坊を日當りの緣側へ卸して置いて、さて何を彫らうかと考へた。

其處らには誰も人は居なかつた。緣の前には大根が吊して干してあつた。ふと、唐四郎の眼に這入つたのは障子の際で圓くなつて寢てゐる猫の姿であつた。

「うん、あの猫を彫つて遣らう」

唐四郎は一挺の鑿でコツ／＼とやり始めた。平常みんなのする仕事を見てゐるので略々見當は付くのだつた。赤ん坊はいゝ鹽梅にスヤ／＼と睡つてゐた。可成り永いことかゝつて、漸う猫の形を刻み上げた。彼は初めて彫り物をしたので嬉しくて溜らなかつた。繪とは異つて實物に近い感じを一層多く持つてゐることが、特に彼を喜ばせたのだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の時赤ん坊が眼を醒まして泣き出したので、唐四郎は今彫つたばかりの猫を見せながら

「そら、ニヤアニヤを御覽、ニヤアニヤが食ひ付くよ」なぞと頻りに赤ん坊をだましてゐた。

「誰だい、そんな處に居るのは？」恁う云つて和尚樣が座敷の障子を明けて出て來た。

「おや、文治郎さん處の息子さんだね。よくお守をして感心な事だ」

和尚はにこ／＼笑ひ乍ら立つて眺めてゐたが、赤ん坊がおもちやにしてゐる二寸位の木彫りの猫に目を付けると

「おや／＼、面白い玩具を持つてるね。どれ、一寸お見せ、うん是れば中々よく彫つてある。誰が彫つたのかな？」

「あたいが今彫つたのさ」

「え！お前が彫つた？　はゝゝゝ、それは嘘だらう、幾らお前が彫物師の息子さんでも、なか／＼子供に恁んな物は出來るものではないからの」

と和尚は信用しなかつた。さう云はれると唐四郎は子供心にも少し癪に障つて來た。

「だつてあたいが彫つたんだもの。そら、あの猫を見てねえ、此處で彫つたんだよ」と唐四郎は、向うに蹲踞つてゐる斑猫と足許に散らばつてゐる白い木屑とを指差して見せ乍ら云つた。

和尚は初めてそれに氣が付くと喫驚したやうな顔をした。

「成る程、是れあ確かにお前が彫つたに違ひない。お前は乾度末には日本に名を擧げる名人になるだらう」和尚は其の時さも感に堪へぬやうな口調でさう云ふのであつた。

それ以來唐四郎は彫物にすつかり興味を有つてしまつて、白木ぎれを懷ろに入れてはお寺だの社の境内へ行つて、子守をしながら何か刻んだ。段々上手になるのが面白くて溜らなかつた。

或る時兩國橋を渡つて回向院迄遊びに行つて、子供を其處へ卸して不相變獨りでコツコツやつてゐた。小さい子はチヨコチヨコ歩くので、鷄だの鳩だのを相手に勝手に遊んでゐた。

唐四郎は一生懸命で鍾馗樣を彫つてゐた。それはもう今日で三日も掛つてゐる彫物で、八分通りは出來上つてゐた。

「今日中に仕上げて遣らう」

彼はそれが出來上つた時の自身の歡びを想像しながら、セツセと鑿を動かしてゐた。

と、何氣なく顏を上げて、其處らを見ると、小さい子の姿が何處へ行つたか見えなくなつてしまつた。唐四郎は喫驚して、鑿と鍾馗樣を其の場に抛り出したまんま、境内をあつちこつち

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と驅け廻つて探して歩いたが、何處にも子供はゐなかつた。今度は門前へ驅け出して見たが、其の邊にもゐなかつた。唐四郎は蒼くなつた。

「人拐ひに拐はれて行つたのかも知れない」さう考へると唐四郎は胸が潰れてしまひさうな氣持がした。

唐四郎は泣き乍ら我家へ歸つて來た。家内の者は、泣いてゐる唐四郎の口から、小さい子が迷子になつた事を聞くと仰天して、直樣父親の文次郎始め弟子達も一緒になつて回向院を差して驅け出した。が、幸ひ迷子は回向院から一丁餘り先の方で人に救はれて、恙無く飴などしやぶらせられてゐたのだつた。

唐四郎を繪師にしやうといふ最初の父親の計劃は狂つてしまつた。文治郎は流石に我が子の天才に着眼したので、彫師にならせることのはふは斷念して、唐四郎が十歲位の時から仕事場へ入れて本式に彫刻を仕込み始めた。唐四郎の進歩は見る人で驚かぬ者は無かつた。十四五歲の頃には、父の文治郎でも、同業の誰彼でも所詮及ばぬ位の手腕になつた。

「左甚五郎の再生だ」なぞとよく仲間うちでは噂をするのだつた。

文治郎は、總領の八五郎をば他家へ養子に遣つて、次男唐四郎に自分の跡を繼がせることにした。唐四郎は、島村家十代目を相續して、俊明と名乘つた。

三

島村家の系圖といふものがある、極めて後代に作られたもので、眞僞はどの程度まで保證して宜いか判らぬが、其の中には多少考古的興味を存する事實も含まれて居るから、それに依つて少しく考證を加へて見やう。系圖に依ると、初代は俊元と稱し、萬治寛文頃の人となつてゐる。俊元は、村井小重郎正俊の門人である。正俊は、元祖甚五郎俊勝の末裔で、寛永頃の人、初め江戸に住み、後京都へ赴いて彼地で歿してゐる。正俊は、東叡山寛永寺及び東照宮の作事を勤めたとなつてゐる。此の正俊から、島村家の元祖俊元に傳へられた扇面の由來書といふものの寫しを見たから、參考の爲めに掲げて見やう。

左り家扇面由來之記

村井小右衛門悴俊男小重郎正俊去ぬる寛永の年上野諸堂御宮建立のをり御普請場へ大久保樣御見分のをり御彫物には伯父小重郎へ御尋の儀有之候得ば先祖はひだ國出生の由甚五郎と申足利公方樣御繁盛のみぎり金閣寺及び銀閣寺御建立の御用相勤候其の有り京師鳳山虛空藏堂へ立願致し御用無事相勤御褒にあずかり候由先祖甚五郎儀事の外左りきゝの由にて人々左りきゝの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

甚五郎とも又はひだの甚五郎とも申され候由代々公方様及禁裡様御用相勤候由子孫信兵衛信右衛門信五郎等と申者信濃並に常陸加島社御造營の右り京師より下り子孫御府内に居住仕候私にて御彫物大工八代相續仕來申候人々左の付某と申來候元祖俊勝がたま者にや御當家御建立本寺の彫物御用仰付下候事難有次第と申上候處大久保殿御彫物御覽被下御襃の御言葉賜り御所持の白扇に左の文字壹字御書被下今後江戸彫工の元祖と申可く仰付下され候右の白扇頂戴仕候得ば右扇子は子孫に相傳可くと伯父京師へ出立の右り自分に讓被下候右白扇は表具に仕立候處其後寛永十九年七月廿八日同所今出川寺町に於て死去致し候に付萬治元年伯父小重郎十七回忌の年御府内大火の際燒失致し候事殘念の事致し候と一同くやみ候哉も右白扇表具致し文字を寫し扇面形樣に彫候物殘り候得ば子孫かならず大切に致す樣心掛べし

萬治二年巳亥正月七日

島村八郎左衛門俊元　記之

右に因て見ると、通常講談などで、左り甚五郎が寛永寺の龍を彫り、龍が不忍池の水を呑みに出たなどとやつてゐるのは、小重郎正俊の事と錯綜してゐるのであるらしい。甚五郎はそれよりも遙かに上代の人物だといふことになる。

島村家の元祖八郎左衛門俊元は、金龍山淺草寺家根上の力士及び五重塔其の他諸々の彫物をしたとなつてゐる。二代目圓哲は俊元の子で、通稱八郎右衛門、後に藤八入道圓哲と號し、諸國を經歴し、常州雨引山安養院山門の龍、成田山新勝寺三重塔の十六羅漢、芝山内仁王尊三門の彫刻等を始めとして、江戸及諸國に其の作を殘したところの古今の名匠だつたといふことになつてゐる。此の外では、六代目俊規といふ人が、悴の俊矩と二人で甲州身延山諸堂の彫刻をしたといふことが傳へられてゐる。

兎に角島村家は、非常に古くから續いてゐる彫刻の家柄だつた。其の一門流派の人々が諸國に分布されて、多くの作を後世に傳へてゐることだけは明かである。唐四郎の俊明は、かういふ傳統を受けて生れて來たのだつた。

俊明が十五六歳の頃から、父親の俊武はぶら／＼病ひで、後にはどつと床につき切りになつてしまつた。丁度其の時分は維新前の混沌時代なので、世間一般不景氣でもあつたが、繪畫や彫刻などは殊更世の中に行はれなかつた。島村の家も世間の例に漏れず餘程前から家業不振で、日増しに生計が困難に陷つて行く矢先へ主が煩ひ付いたのであるから、其の難澁は一倍ひどかつた。弟子も段々減らして今では一人二人しか殘らなくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俊明は父親の病氣平癒を祈つて、いかな日でも缺かさず深川の不動尊へ詣つて水垢離を取つた。さうして仕事の合間々々には病床の父を看護するのだつた。僅かに殘つてゐる弟子に小野寺俊秦といふ者があつた。俊秦は非常に師匠思ひであつた。彼は窮境に陷つた師匠を見捨てるに忍びなくつて最後迄殘つてゐた。彼も若師匠の俊明と共に不動尊へ水垢離を取りに行くのだつた。

俊明、俊秦の二人は、晝は宮彫の仕事をして、夜業には盆を造つた。そしてそれを俊秦が淺草に夜店を出して賣つた。師匠の俊準は酒が好きだつた。病氣になつてからも、僅かの酒でも飲むことを無上の樂にしてゐた。俊秦は、毎晩の賣り溜めの中から師匠に酒を買つて來る事を、決して忘れたことは無かつた。

丁度其の頃回向院の本堂の改築があつた。すると欄間の彫物を誰に頼まうといふことになつたが、江戸で彫物の家と云へば茅町の島村が頭梁なので、そこで世話人が島村の家へ遣つて來て見ると、肝心の大師匠は永らくの病氣で床について居り、まだ小僧同様の息子と弟子が一人位でこつ／＼とやつてゐる有様なのですつかり當てが外れてしまつた。が其儘默つて歸られもしないので、やつて來た用件だけを話した後で、

「併し、肝心の親方がそんな具合では、お頼み申した處で仕方がありますまいから」と云ふと、息子の俊明は即座に、

「御世話人様、どうか其の仕事は私に仰せ付けが願ひ度う存じます」

「それはどうも少々困りますな。何しろ今度の普請は江戸中の評判にもなつてゐることだし、末代に殘る仕事だから、先づ當今一と云つて二と下らぬ名人にお頼みしたいと思つて斯うしてお宅の親方を頼みに來たやうな譯だから、失禮乍ら齢のいかぬお前さんにお任せ申すわけにはまゐりませんよ」

「妙な事を仰しやるぢやありませんか、私では其の仕事が出來ないと仰しやるんでございますか？」

「いや、何も一概にさう云ふ次第ではないが、併し、お前さんは齢はお幾つです？」

「十六歳でございます」

「十六やそこいらのお前さんが、是れだけの大仕事を引き受けて、人に笑はれないやうな仕事を爲了せるといふお考へですかね？」

「無論の事です。私も今では親父が隱居して家を相續致して居ります。誠に生意氣千萬な事を申し上げて恐れ入りますが、私がお引受け致す以上には、日本中の彫物師なら、何方に見られても笑はれないだけの物は彫つてお目に掛ける覺悟でござい

ます」

「成る程、宜く分りました。若いにも似ず、なか／＼お前さんはいい氣性だ。それでは、兎に角一度歸つて、他の世話人衆とも一應相談の上で又改めて御挨拶に出ることにしませう」

恁う云つて來た人は歸つた。其處で世話人が集まつて相談を開いたが、何れも江戸つ子のことであるから「面白い、一つ遣らして見やうぢやないか」といふことになつて、愈々回向院の欄間といふ大仕事が、當年僅か十六歳の島村俊明の手に落ちることになつた。

それからといふものは、俊明は其の仕事にばかり沒頭した。勿論職人をも使ふのだが、就中例の俊泰が、一期の浮沈とばかり片腕になつて働くのだつた。其の年の秋になつて欄間は完成した。それは十六羅漢の圖であつた。其の彫物は非常な評判になつた。江戸中の人々は、態々回向院迄欄間を見物に出掛けるのだつた。彫刻師島村俊明の名は一時に高くなつた。

四

明治維新は社會の各方面に大きな變化を及ぼしてゐるが、彫刻界の如きも、多大の影響を受けたのだつた。其の根本の原因は、外國貿易の開始であつた。外國の商人が盛に入り込んでは日本の美術品を買ひ占めた。我國の古美術品は、其の數年の間に數知れず國外に向つて流出してしまつたのである。其の當時外國の好事家に依つて最も珍重された日本の彫刻は象牙彫であつた。そこで、それ迄餘り行はれなかつた象牙彫刻といふことが一代の趨勢となつて現はれて來た。

象牙彫刻といふものは、其の以前は殆んど根付ぐらゐに限られてゐたのが、段々大きな物を彫るやうになつて來た。根付といふものは、根付師と云つて、あれだけで專門の仕事になつてゐたもので、多くは幕府の御家人の内職であつた。懷玉齋、三輪質實、馬山、出目、等は就中有名な根付師であるが、御家人だけに見識が高くて、出來上つた品物を風呂敷へ入れて持つて來るやうなことは無い。大抵袂か何かへ入れて、突袖をしながら、「許せ」と云つた調子て、出入のお店の暖簾を潜つて這入つて來る。自然値付けも、作者自身の極め方題だつたといふことである。

兎に角、其の根付に濫觴を發してゐる象牙彫刻が、一般彫刻界に與へた大きな影響は、日本の彫刻史に一時期を劃する顯著な事實たつたのであつた。島村俊明も、象牙彫刻に着眼した先覺者の一人だつた。と同時に、時世の變化に伴はれて、藝術家としての強い自覺を促されるやうになつたことも、必然的の、大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きな進歩を遂げる動機となつたのであつた。是れより以後、俊明は日本の美術界の表面へ乘出して旺んに活躍したのである。

島村俊明の象牙彫はまことに天下一品であつた。一體象牙は割れ易い物であるから、誰でも小刀で少しづつ彫つて行くのが普通であつたが、俊明の彫り方は全く木彫と同じ行き方で、ぶつ付けに鑿で叩いて彫るといふ亂暴な遣り方であつた。象牙材を用ゐ、而も木彫と同一の味はひを現はさうと試みて、美事に成功したのが俊明であつた。又象牙といふ物には髓が通つてゐる。其の髓が彫刻の外面に現はれると、全體としての美觀を傷けることが無いではなかつた。處が、俊明の作に限つては、決して其の髓が邪魔をしてゐない。何とかして、其の缺所が隱されてゐるのだつた。其の一例を舉げて見ると、或る時戸山長藏から頼まれて、八寸餘の象牙で力士の像を彫つた。俊明は芝居は好きだつたが相撲は嫌ひで看に行つたことはなかつたが、此の時ばかりは本場所へ幾日も續けて通つて、十分に相撲取の骨格や動作を研究した上で、仕事に掛つた。出來上つて見ると、實に無類の佳作なので戸山は大いに喜んだ。が、よく〱觀たところが何處にも髓が無い。戸山は不思議に思つて、

「此の彫刻には髓がありませんね、併し、いくら貴下が上手でも、真逆象牙の髓を無くしてしまふといふことは能きさうもなく思はれるが、これは一體どうしたのです？」と訊いて見た。

すると俊明は笑ひ乍ら、

「よく御覽なさい。頭と尻にあるから」

と云ふので猶念を入れて調べて見ると、頭の髷の中と、一つは臀部の割れ目の中に隱してあつたので、戸山は今更乍ら俊明の非凡の技倆に驚いたといふことであつた、戸山長藏は、當時の彫工美術界に貢獻の多かつた、銀座の象牙商である。

俊明は、彫刻に於ても寫生の必要を覺つた、當時の新人であつた。併し、其の時分には、モデルといふものは勿論無かつた。彼は絶えずあらゆる物を毛筆で寫生して置いて、それを彫刻に應用した、だから現在の人の眼から觀ればそれは完全な寫生とは言ひ難いものであるけれども、初めて寫意から寫生に入つた初期の作品として、其の傾向特色を著しく發揮してゐるのである。

彼は最も美人の像を得意とした。そこで或る人から象牙で「花魁を彫つて貰ひ度い」といふ依頼を受けた。すると彼は例の寫生主義から、每晩角海老へ通つて、十分に花魁を寫生した揚句に漸う彫刻が出來上つたなぞといふ逸話も、當時の美術界の噂ばなしの一つになつた。

俊明は仕事が非常に速かつた。着手する前こそ苦心の時間を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

永く促したけれども、鑿を執つたとなると、忽ち出來上つてしまふのであつた。同じ時代に並び稱された石川光明などと比べても、優に十倍位は速かつた。所謂神速であつた。或る時木彫りの羅漢を頼まれて、其の荒彫りに着手したが、丁度其の時一人の門弟が向うへ砥面を直しに行つて、直して歸つて來た時には、既に其の荒彫りが出來上つてゐた。それは、普通の人間だと、どうでも四日間位は掛る仕事なのであつた。

五

明治十二年、龍池會といふ美術家の團體が生れた。其の會員は當代一流の美術家を網羅してゐた。島村俊明は其の發起人の一名であつた。龍池會は、後の美術協會の前身であつた。

矢張り其の時分のこと、彫刻家のみで集まつて批評を交換しやうではないか、と例の石山長藏等が斡旋をして、其の第一回の集りを不忍辨天の旗亭で催した。其の時俊明も是非來て呉れと云はれて、木彫の觀音を持參して其の席へ臨んだ。各人の作に就いて、各種の批評が出た。愈俊明の觀音の番になつた。と旭玉山が、つら〱其の觀音を眺めてゐた後で恁う云つて批評した。

「どうも此の觀音は肩が怒つてゐる。それは確かに缺點だ。全體觀音は慈悲勇猛の二つを具現されたものだが、恁う肩が張つてゐては慈悲の相が乏しくなる」

俊明は平常非常に快活な男で、自分も滅多に腹を立てるといふことはないが、人をも憤らせないといふ江戸つ子肌のさつぱりした氣性だつた。會合などへ出ても、大きな聲で勢よく喋つて、顏ぢう口にして高笑ひをするといふ風で、極く陽氣なので彼の顏が見えないと「今日は何だか淋しいと思つたら島村が來てゐない」と云はれるくらゐだつた。ずんぐりした圓つこい體で、色が白くて、頭の大きな、其の容子には自然の愛嬌があつた。隨分口は惡かつたけれども、彼に惡る口を云はれても、腹を立てることは出來なかつた。其の代り、自分も怒らないのだつた。其の俊明が、今日はどうしたものか、玉山の批評を聞くと同時にさつと顏中に血を上せて、非常な立腹だつた。

「いや、何んでも宜しい、私は、私の好みで觀音を作つたのだから」

と云つて、即座に觀音を風呂敷に包み込んで、席を蹴つて歸つてしまつた。後で一同は呆氣にとられてしまつた。「何だいあの男は、批評をされたつて憤つて、自分の好みだなんて言ひ出した日には、批評は成り立たないではないか、あんな解らない男とは思はなかつた」などと惡く言ふ者もあつた。併し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山に肝いり役のことでもあり打捨つても置けないから、態と二三日經つてから様子を見に行つたところが、俊明先生ケロリとした顔をしてゐる。おまけに例の觀音がちやんと床の間に置いてある。見ると、肩の怒りがすつかり取れて大變良い觀音になつてゐる。戸山は可笑しさを耐え乍ら、

「はあー。到頭肩を遣りましたね」

「何、格別遣りやあしないさ」

「でも、大變格好が直りましたぜ」

「うむ、一寸遣つたのさ」

此の批評會は、後の彫工會の前身となつたのであつた。

高村光雲、石川光明、島村俊明の三人を、當時世間では彫刻界の三傑と稱へてゐた。石川光明は、俊明と同じく牙彫、木彫兩方とも遣つた。が、高村光雲一人は決して象牙を彫らなかつた。

或る時、それは年末の廿五日といふ日だつた――俊明は、高村光雲を訪問した。すると光雲が、自慢して持つてゐる松本喜三郎作の生人形を出して見せた。それは岩井半四郎の似顔で、左右の手が動くやうになつてゐて、顏と云ひ姿と云ひ其の細工は實に佳く出來てゐた。

「どうも是れはいい、實に無類だ」

恁う云つて俊明は口を極めて激賞してゐたが、軈て光雲に向つて其の人形を自分に讓つて呉れないかと言ひ出した。

「それは困る、此の人形は私が漸う手に入れた物だから」

「さうでもありませうが、其處を是非一つ承いて頂き度いのです、俊明一生のお頼みですから、讓つて下さい」

「何と云はれてもそれだけは困る、私も、それは何にも替へ難く思つてるんだから」

俊明は口を酸くして頼んで見たが、光雲はいつかな承き入れない。俊明も仕方がないので歸つたが、どう考へても斷念て溜らない、人形の姿や顏が眼の前にチラ付いてゐて離れない。

「よし、己は一つ自分であの通りの人形を拵らへて見せる」

恁う思ひ立つともう一刻も凝としては居られない。早速紙を出して下圖を作り始めた。到頭其の晩は徹夜して下圖を書き上げた。翌朝は早速門弟を使に遣つて大きな桐材を買つて來させて、高さ四尺六寸といふ、ほゞ實物大の裸體像の彫刻に取り掛つた。年末であるから、多少は用事のある人も來るけれども、一切顧みない。晝夜兼行で、人形の製作に沒頭してゐた。

大晦日の日になつて、其の人形は漸う出來上つた。矢張り左右の手も動く仕掛けに拵へた。唯、生人形では玉眼を入れるけれども、是れは彫刻のことであるから眼は入れずに置いた。髮も、生人形のやうに毛を植えないで、彫にして元祿髷に拵へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偕形が出來たから今度は塗りをしなければならないが、自分の考だけでは不安なので、懇意な仲の横山といふ人形師と同じく人形師の山本福松の兩名に即刻來て貰つて、二人と相談して其の日から始めて元日一杯に塗り上げた。處がどうも、塗つて見ると、生人形じみて俗になつて不可ない。そこで、湯を沸かさせて、一旦塗つたやつをすつかり洗ひ落してしまつた。そして今度は繪畫の着色法で遣つて見やうといふので、つい近所に住んでゐる荒木寛畝の處へ相談に行くと「それは面白い、私が行つて見て上げやう」といつて、寛畝が一緒に遣つて來て呉れたので、相談しながら種々工風して塗つて見た。すると非常に高尚で藝術的な物になつた。一月七日といふ日に塗り上げてしまつた。其の晩は門人やら親しい友達やらを集めてお祝ひの宴を張つた。

今度は衣裝であつた。是れは白羽二重を買つて來て、自身で元祿模樣をそれに描いて仕立てに遣つた。下着、襦袢、腰卷まで夏冬二た通りの衣裝がすつかり揃つたのは其の月の廿日であつた。

其の人形は、まことに無類の傑作であつた。來て見た人は其の精巧さに驚かずにはゐなかつた。勿論俊明自身の歡びは非常だつた。朝に晩に彼は人形を眺めてうつとりとしてゐた。三度々々の食事にも人形の前へ膳をすゑた。そして自身の晩酌の時には、膳の側へ人形を立たせて置いて、それを眺め乍ら手酌でチビリ〳〵遣つてゐた。

「まるで京人形の甚五郎だね、あれが動き出すと面白いんだが」弟子達はそんなことを云つては面白がつてゐた。

以前永らく島村家に女中奉公をしてゐて、今では息子の家へ歸つてゐる女があつた。彼女はもう五十位の年配で、片眼の女だつたが氣立てが正直で忠實だつたので、島村家に居る時分には主人夫婦から大變愛されてゐた。でいまだに折り〳〵御機嫌伺ひなどに遣つて來るのだつた。

或る日も丁度其の近邊迄用達しに來た序でに一寸寄つて行くつもりで、島村家へ遣つて來た。勝手口の方から「御免なさい」と云つて這入つて見たが返事が無い。

「おや〳〵、皆さんお留守かしら」

仕事場の方ではお弟子達が仕事をしてゐるやうだつたが、彼女はそつちの方には用が無いので行つて見やうとも思はなかつた。

「其のうちには誰か歸つて來るだらう、折角來たことだから少し待つてゝ見やう」

彼女はさう考へて、もと〳〵遠慮の無い家だから其の儘ずん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〳〵たり込んで茶の間へ行つて座り込んでゐた。すると何やら二階の方から話し聲のやうなものが聞える。

「二階にどなたかゐらつしやるやうだ、一寸上つて見て來やう」

彼女は足音を立てぬやうにそツと二階へ上つて行つた。そして階子段の上の方から首をさしのばして何氣なく奧の座敷の方を覗いて見ると驚いた。座敷では、旦那様が、若い綺麗な女と二人で好い御氣嫌でお酒を飲んでゐた。彼女は喫驚仰天して、目つかつては一大事と、慌てゝ階下へ降りて來て其の儘家へ歸つてしまつた。

其の翌日彼女は態々島村家へ遣つて來て、俊明の妻のます子に向つて意味あり氣に、

「御新造様、貴女御油斷なすつては不可ませんですよ」と云つた。

「何？婆あや、油斷するなツて？」

「矢つ張り御存じ無いんですね、貴女様は少し無頓着過ぎますね、だから旦那様があんた踏み付けた眞似をなさるんです」

「ごあの旦那様がどうかなすつたの？」

「どうかした位の俊しいはなしぢやあございません。實は恁うなんでございます、貴女お驚き遊ばしては不可ませんですよ」

と婆あやは昨日の顛末を殘らず話して「といふわけなんでございます、相手は多分藝者か何かのやうでしたが、現に御貴女居られるぢやあございませんか、晝日中女をお宅へ引つ張り込んだりなすつてさ」

ます子は思はず吹き出してしまつた、

「あの女の事なの？あれなら何時も家にゐるんだけど、あれは大丈夫な女なんだよ」

「まあ貴女様は何んて人が好いんでせう、いくら大丈夫だなんて云ひましてもね、男つてものは、それは〳〵性が惡いんですから」

「それでもあの女だけは大丈夫なわけがあるの、其の證據を見せて上げるから一寸來て御覧」

ます子は婆あやを二階へ連れてつて「此の女だらう？」と云つて例の人形の前へ立たせた。岩井半四郎の人形は濃艶な無心の表情をして二人の方を見てゐた。婆あやは片つぽきりの眼をパチクリさせた。

此の人形は、其の年五月の美術協會の共進會に出品された。

六

俊明は非常に早起きで、毎朝四時には必ず起きた。そして仕

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事場へ這入つて一としきり仕事をした後で、散歩に出て、一廻りして歸つて來てから自分で弟子達を呼び起した。晝間は彫刻の仕事をして、夜分には必ず繪を畫いた。畫も晩年は非常に進歩して、屢々賞を取つたり宮内省の御買上げになつたりした。

彼の繪は大體獨學であつたが、唯、荒木寛畝にだけは屢々相談したらしかつた。寛畝と俊明は非常に親しかつた。それは俊明が茅町から轉々して、淺草左衞門町へ越して來た時、寛畝とは僅か塀一重隔てゝ住つてゐたので、其の時分から特に懇意になつたのだつた。寛畝は其の頃はまだ非常に窮してゐた。寛畝ばかりではなく、狩野芳崖でも、橋本雅邦でも、同じ事だつた。或年の正月寛畝は隣家の俊明の處へ年賀に來た。丁度俊明が不在だつたので妻女が出て座敷へ招じたが、寛畝はブル／＼顫へてゐる。

「先生お寒いんですか」とます子が訊くと、

「いやどうも實に寒い」といふ答へ。

取敢えず酒を出したが、まだ顫へてゐる。するとます子は寛畝に向つて

「先生、羽織をお脱ぎなさい、それから、袴も、着物も――」

と云つて側へ來て無理に寛畝を裸にしてしまつた。ます子は寛畝の脊中へ眞綿をどつさり脊負はせて其の上から着物を着せて遣つた。

「先生、少しは暖かくなつたでせう？」

「いや是れはどうも暖かだ」

寛畝は喜んで年始廻りに出掛けるのだつた。

荒木寛畝は、花鳥を描いては、當時匹儔する者を見なかつた。殊に孔雀の圖に妙を得てゐた。寛畝の孔雀は、蓋し空前絶後のものであらう。島村俊明は、寛畝に其の最も得意とする孔雀を畫かせて、五十圓の謝禮を贈つた。寛畝は非常に喜んだ。明治十年第一回内國博覧會が開かれた時、寛畝は俊明から孔雀の繪を借りて來て出品した。其の繪は非常な評判になり、優賞を得た。寛畝はそれから賣り出した。彼は其の頃は既に五十の坂を越えてゐた。其の繪はつひに或外人に懇望されて一萬圓で賣れることになつた。寛畝は俊明に對しては恃りとして別に一幅孔雀を描いて贈つた。後年寛畝は自身の窮乏時代を回顧して、俊明の妻女に眞綿を脊負はされた話をして、

「餘りぶしつけに遣られるので一寸變な氣持はしたが、併し、何しろ暖くなつたので氣持がよくて、腹を立てることはできなかつた。いさといふ時になると、禮儀などはどうでもいい、眞心だけが骨身にこたへて忘れられないものだ」と言つた。

ます子は、左衞門橋の際に古くからある井筒屋といふ船宿の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

娘だつた。俊明に嫁した當時は島村家も窮乏のどん底にあつたが、彼女は其の中にあつてよく内助の功を擧げたのだつた。夫が名を成して後は、大勢の門弟達の世話を一人で見て呉れるので、門人は皆眞の母のやうに彼女を慕つてゐた。夫婦の間も非常に仲が睦しかつた。女の兒ばかり四人できた。其の四番目の子が生れて間も無い頃、ます子はふと煩ひついて、明治廿四年といふ年に歿してしまつた。

俊明の歎きは一方ではなかつた。彼は一時は殆んど喪心したやうになつてしまつた。それに乳呑子があるので、困難もひとしほだつた。彼は其の兒の世話を自分でしながら、仕事も手に付かず、明け暮れ亡き妻の佛事供養ばかりしてゐた。夜も寢ずに赤ん坊を抱いて佛壇の前に座つて經をよんでゐた。

ある晩も俊明はさうして經を讀んでゐた。夜は次第に更けて丑滿頃になつた。俊明は疲勞が重なつてゐるので急に睡たくなつて、思はずトロ〳〵と少しばかりまどろんだ。やがてふッと氣が付いて經を讀み始めると、佛壇の中から「チーン」と微かに鈴の鳴る音がした。

「おやッ」と思つて耳を澄まして聞いてゐたが、鈴の音はそれきり聞こえなかつた。燈明の灯は物悲しげにトボ〳〵と燃えてゐた。

其の翌晩も、夜半頃に彼が睡つて、眼を醒まして經を誦し始めると、佛壇の内の鈴が「チーン」と鳴つた。翌翌晩も、又其の次の晩も、同じ様な時刻に、鈴が鳴るのであつた。俊明は、自分が斯うして佛事供養をしてゐるのを、妻は佛壇の内から見てゐるのだと思つた。幽靈でもよいからもう一度ます子に會ひ度いと思つた。

「眞夜なかになると、ます子が鈴を鳴らすんだよ」俊明は、門人なぞに向つて、嬉しさうにさう云ふのだつた。

併し間も無く、それは夜半に鼠が燈明の油を舐めに來て、逃げて行く拍子に尻尾で鈴を鳴らしたのだといふ事がわかつた。

俊明の父俊唯は明治五年に歿したが、其の昔若い俊明を助けて師匠に孝養を盡したかの小野寺俊秀も、五年遲れて明治十年に、まだ四十に滿たぬ齡で此の世を去つたのだつた。俊明は、俊秀の佛事をも懇ろに勤めてゐた。

七

或る處から俊明は應擧の幽靈の幅を買ひ込んだ。其の幽靈は欄干の側にすーつと立つてゐる圖であつたが、別段恐い顏はして居らず、それで一道の凄氣が漲つてゐるといふ幽靈としては面白い圖だつた。表裝は時代の襲き表裝で、ボロ〳〵になつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐた。それを買ひ込むと、俊明は早速友人の竹内久一の處へ使を遣つて、「今晩幽靈を御覽に入れるからおいで下さい」と云つて遣つた。久一は其の晩遣つて來た。すると俊明は其の幅を床に懸け、側らへ行燈を置いて、久一と二人で蚊帳の中へ這入つて、酒を飲み乍ら幽靈の繪を眺めた。

　神田川の袋物商澤田の處に是眞の四枚折屛風があつた。圖は元祿美人で、是眞一代を通じて誇るべき傑作の一だつた。が、四枚折といふ屛風は世間で嫌ふので餘り賣れ口はよくなかつた併し作者の是眞に聞いて見ると、「いや、あれは繪の中で女が二枚折をひろげてゐるから六枚になるのだ」と云つてゐた。其の是眞の屛風を俊明は豫々見て欲しいと思つてゐた。處へ澤田が遣つて來て頻りに象牙の彫刻を頼んだ。が俊明はなか〳〵其の依頼を承かなかつた。最後に澤田も弱つてしまつて、「一體どうしたら作つて頂けるでせうか？」と云つた。すると俊明は思ひ切つて「君の持つてゐる是眞の屛風と交換だつたらうんと力作してあげるんだが」と答へた。澤田は一も二もなく承諾した。間もなく彫刻と屛風とが交換された。澤田が承知したのは當然だつた。何故かといへば、當時其の屛風の價格は百圓位に過ぎなかつたが、俊明の彫刻のはふは三百圓の市價を有つてゐるのだつた。俊明は生涯其の屛風を秘藏してゐたが、死ぬ前に遺言をして、彼の歿後にそれを石川光明に贈つた。光明も愛藏措く能はさるものとしてゐたが、不幸にして火災の爲めに燒いてしまつた。

　美術學校が創設されると、高村光雲と石川光明の兩人は其の教授に任ぜられたが、島村俊明一人は野に留まつてゐた。彼をも教授に推薦するからと云つて來る人は幾らもあつたが、「己は教員なんて窮屈な事は大嫌ひだ」と云つてにべもなく斷つてしまふのだつた。

　或る時出入の本屋が來て「本場へ大變海老が發生して幾らでも釣れるさうですから、釣りにお出掛けになつてはどうです」と云つて勸めた。俊明は直ぐに乘氣になつて「では早速釣りに行かう」といふので其の翌日門人を全部伴れて本場へ出掛けた。處がどうしたわけだか半日やつてゐたが海老一匹も釣れない。到頭斷念して歸ることになつたが、其の時師の俊明は、河岸にソロ〳〵這つてゐる赤い小蟹を見るとふと思ひ付いて門人に向つて、

「おい〳〵、皆で此の蟹を捕へて呉れ、此奴を庭へ放すと乾度面白い。繪の材料になるだらう」

　と言ひ付けた。一同は蟹を澤山捕へてそれを持つて、歸途に冬木辨天の蕎麥屋へ寄つた。其處は芭蕉の「古池や」の句の古蹟

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。それから家へ歸つて蟹を庭へ放した。

翌朝起きて見ると蟹は一匹も其處にゐなかつた。直ぐ側の神田川へ皆這ひ込んでしまつたのだつた。

「昨日多木で思ひ出した事だが」と師匠は弟子達に向つて、蛙を放して見たら面白いだらう、町なかで「コト／＼、コト／＼」と蛙の鳴くのを聽いたら、田舍の景色が偲ばれるに違ひ無いと言ひ出した。

で其の日は蛙捕りに出掛けた。淺草田圃の邊りで終日蛙を捕つて、めい／＼袋へ入れた。すると日が暮れかけて來て、彼方へ吉原の燈火がぽーつと輝き始めた。

「どうだみんな、吉原へ行つて見るか？」

師匠はさう言つた。一同は蛙の袋を持つて吉原へ出掛けた。ある樓へ登つて藝者をよんで大騷ぎを始めた。遊びが面白ので一同は蛙の事は忘れてゐた。すると何時の間にか袋の口が綻んだものと見えて、殘らずの蛙が袋の中から這ひ出して、座敷中をピヨン／＼と飛び始めた。

或る時、高村光雲、島村俊明、石川光明、戸山長藏、金田兼次郎の五人が揃つて相州の藤澤へ行つた。藤澤には、彫刻界の先輩旭玉山が隱遁生活をしてゐた。玉山は、第一回の博覽會に松本順の依賴で作つた骸骨の彫刻を出して世間を驚かせ、名譽賞（一等賞）を授けられた。其の授與式の式場へは、天皇陛下が出御になつて、一人／＼の受賞者に對して、御親から賞狀を下賜されるのであつた。其の時、全國の出品者の中から第一番に名を呼ばれて御前へ出たのが玉山であつた。それ程名譽の彫刻家でありながら、彼は世に不平を懷いて、藤澤へ隱遁したのだつた。五人の者が揃つて遣つて來たのは、玉山を説得して中央へ引き出さうといふ目的であつた。

宿へ着いたが遲かつたので、玉山との會見は明日といふことにして五人は宿屋で飮み始めたが、其のうちに戸山か金田が、

「宿屋で飮んでゐても面白くない、一つ後學の爲めに藤澤の宿場へ遊びに行つて見やうではないか」と言ひ出した。

島村俊明が直ぐにそれに贊成した。「さあ出掛けやう」と云つた處が、高村石川の兩名は反對した。「我れ／＼はそんな處へは行かない」と言ひ張つた。そこであとの三人だけで行くことになつた。三人は宿場へ行つて莫迦騷ぎをやらかしたが、其の後で、

「どうも我れ／＼は恁うして愉快に遊んでゐるが、宿屋に殘つて神妙にしてゐる二人の事を考へると氣の毒でいけない、さぞ二人が淋しがつてゐるだらうから、夜の明けぬうちに歸つて遣らうではないか」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふ相談になつて、三人は眞夜半頃に宿屋へ歸つて來た。そして座敷へはひつて見ると、豈計らんや、神妙に寢てゐると思つた二人の夜具は藻抜けの殼だつたのである。

玉山は、五人の說得をも聞き入れずして、更に遠く走つて京都へ去つてしまつた。

八

いつの事だかはつきりとは判らないが、とに角餘程前の事に違ひない。或る時兩國の井生村樓に書畫會があつて、俊明も賴まれて出て席畫を描いてゐた。其の時、俊明の隣りに座つてゐたのは池田琴峯だつた。が、どちらも互ひの顏を能く識らなかつた。處が、琴峯の前へは頻りに畫の依賴者が來て扇面だの色紙だの置いて行くが、俊明の處へはちつとも人が遣つて來ない。頰を撫でたり、腕拱みをしたりして、頻りに待つてゐたが誰れも來ない。隣りの繪かきを見ると、さも忙しさうに、そして面白さうに、セツセと繪筆を動かしてゐる。俊明は羨ましくしてかなはない。そこで、思ひ切つてヒョイと手を出して、隣りの扇面を一本失敬して、知らん顏をしてそれへ畫き始めた。琴峯はそれをチロリと見たが、是れも知らん顏をして畫いてゐる。ぢきに俊明は扇面を描いてしまつたが、依然として彼の處へは人が持つて來ない。そこで又隣りへ手を伸ばして色紙か何かを失敬して遣り始めた。すると琴峯は、今度は少し怖い眼付をしてジロリと横眼で睨んだ。が、俊明は忽ちそれも畫き了へたので、又もや隣りへ手を出し掛けると、琴峯は持つてゐた扇子で其の手をピシリと打つた。

「コラ、何んで人の手を打つ？」

「知れた事だ、先刻から默つて見てゐればいい氣になつて、人の賴まれてゐる物を、鼠でも引くやうに斷りも無く運んで行くとは怪しからん男だ」

「何が怪しからん、君が餘り忙しさうだから氣の毒に思つて、同席の誼みを以てすけて遣つたのだ。それを禮も云はずに、いきなり人の手を打つとは貴公こそ怪しからん男だ」

「おや、此奴不埒な事を云ふ奴だ」

「貴樣こそ不埒だ」

双方起ち上つて大喧嘩が始まり掛けたので、邊りの人が驚いて二人を引き分けて「まアまア」と其の場を鎭めた。そこで二人は再び席についたが、俊明の方は不相變手持不沙汰だ。すると琴峯は何と思つたか

「君、閑なら一枚畫かないか？」と云つた。

「や、有難い、畫かして呉れ玉へ」俊明は直ぐ樣手を出して、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

琴峯の前にあるのを取つて書き始めた。

「君は餘つ程變な男だな」

「貴公も可笑しな男だな」

と俊明は眞面目な顔をして答へた。琴峯は到頭可笑しくなつて笑ひ出してしまつた。二人はそれで仲直りが出來た。

俊明と琴峰はそれ以來極くの仲善しになつて、俊明が死ぬ迄往復を絶たなかつた。

九

廿八九年頃のこと俊明は盆栽に凝り出した。盆景も自作して見たりした。或る日團子坂の某園から小さな石の地藏を買つて來て、自分で盆景を作つて其の中へ立たせて見た。すると、何んとも云へない寂しみをもつた作が出來上つた。

或る人から檜材でチヤボを彫つて呉れといふ依賴を受けた。高村光雲も石川光明もチヤボが得意だつた。殊に光雲のチヤボと云へば無類だつた。が俊明はそれ迄一度もチヤボを彫つた經驗が無かつた。だから初めて彫るにしても友人の作と比較された時に笑れないだけの物を作り度いと思ふので餘程苦心してゐた。すると其の仕事をしてゐる最中に背中へ癰が出來た。可成り痛んだが、灸をすゑたり按摩を取つたりしながら、仕事を續けてゐた。

其處へ或る日出入の米屋がやつて來て、俊明が彫り掛けてゐるチヤボを眺めてゐた後で、

「先生、チヤボの蹴爪がそんなに曲つてゐちやあ不可ませんな。もつと眞つ直にしなくつちや」と云つた。

「さうかな？　だが此頃チヤボを見たんだが、皆蹴爪がこんな風に曲つてゐたよ」

すると米屋は笑ひ乍ら、

「それは駄チヤボだからです。上等のチヤボと云ふにはもつと蹴爪が眞直ぐに出てゐる奴でなくちやあ駄目なんです」と云つて敎へて呉れた。

背中の癰が急にはれ上つて來て手療治はおぼつかなくなつてきたので、外科の醫者に來て診て貰ふと、醫者は、「切開手術をしなくては不可ない」と云つた。直ぐ樣手術をした。醫者は容態を按じてゐたが、當人は一向平氣で、一日二日經つと又もや仕事場へ這入り始めた。背中へ繃帶をした儘でセツセとやつてゐる處へ石川光明が見舞ひに遣つて來た。

「何だい仕事をしてゐるのか、世間では君の事を大變重態のやうに云つて評判してゐるのだが、大層な勢ぢやないか」

「此の通りチヤボを引き受けちやつたもんだから、仕上げな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いちちは氣懸りでね。何もう僅かなんだ、鳥冠と脚だけ仕上げればいいんだから」

「そんな事を云つたつて、鷄のむづかしい處は鳥冠と脚だけのものだあね」と光明は笑つて云つた。

が、雄を仕上げ、雌を八部通り仕上げた時、病勢が俄かに革まつて來た。もう鑿は取れなかつた。そして、明治廿九年十二月十四日といふ日に俊明は死んだ。葬儀は神式で行はれ、遺骸は天王寺墓地に埋葬された。未完成の儘で終つた遺作のチヤボは、高村光雲が後を受けて雌を仕上げ、それに雛を付けて彫つた。

追記

駒込林町の私の住まつてゐる家の直ぐの北隣には、彫刻の大家吉田芳明先生が居られる。私はつい近頃同じ町内の前住所から現在の處へ移つたのである。併し隣家に住まつてゐても、引つ越して來た晩に私の家内が先方の玄關迄行つて挨拶をして來たほかには、其の後幾日經つても何の交際も始まらなかつた。處が、私が近世の名匠の傳を書いて見やうといふ案を胸中に藏してゐた頃、ふと或る機會で「吉田芳明先生は故島村俊明の門下で、其の令室は俊明の愛娘である」といふことを聞いた爲めに、急に島村俊明を書いて見たくなつて、一夜突然隣家を訪問して、芳明先生にお目に掛つた。そして私の考へを話すと、悉く贊成された。それから數日の後、同じく島村門下の大槻清光先生も態々吉田家へ來られて、主人と共々私に向つて恩師の事を話された。私は主に其の談話のうちから材料を取つて此の一篇を書き上げたのである。だから、大體に於て此の傳記は正確なものと云ひ得る。けれども、それは此の中の記述の全部が正確であるといふ意味では勿論ない。材料は材料であるが、それを文章として表現する時には、筆者自身の思想と觀察とを用ゐなければならない。然らずんば無意味である。が、同時に、一方ではそれがために事實から遠ざかる場合が無いとは云へない。又、二家から與へられた材料以外に私自身が曾て他から聞いてゐた話なども混つてゐる。若し此の記述中に甚だしき誤謬を傳へるやうなことがあるとしたならば、それは全部私の責任である。前篇「柴田是眞」の場合も同一である。材料を提供して下すつた前記の方々に對して謝意を表すると同時に、私自身の責任をも明かにするために、敢て以上の斷りを附記する次第である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

還暦を迎ふる一新聞記者の回顧

蘇峯學人

瀧田君足下只今御寄示の原稿を一讀した。順序もなく、次第もなく、何が何やら話した當人にさへ殆ど分らない。今更ら訂正せんには大斧鉞を加へねばならぬ。故に單に文句や、語辭の一二を修補するに止めて措く。

大正十一年十一月廿八日午後四時湘南野史亭に於て

過去一夢の如し

予は吾親晩年の子だ。物心ついてから予が一生懸命に考へたことは、只、一刻も早く父の跡を紹ぐものになりたいといふ事であつた。父も足らぬは此兒の齢といひ、予も足らぬは儂が齢と思ひ。せめて、他人が一つ齢を加る際に、予は二つなり三つなり重ねて取りたいと思つてゐた。されば、幼年よりの習慣で、年を取ることは寧ろ愉快であつて、本來、年齢の重荷などを感ずる暇はなかつた。然るに父も逝き、母も逝き、何時の間にやら已に還暦となつた。過去を顧れば眞に一夢の如しだ。今、過去について少しく語るのは、また是れ、夢中夢を說くの類であらう。

平凡生活

今更ら鹿爪らしく云ふではないが、凡そ世の中に二種の處世方法がある。甲は時と共に、機會と共に、順應し、推移して行くのである。乙は我が豫め定めたる目的に向つて、少くとも我が定めたる方法によりて、之に達せんと試むるものである。クロムウエルとか太閤とか、あらゆる偉人豪傑は寧ろ甲種に屬するものであらう。それと同時に、多數の平凡生活者も亦或は然らんかと思ふ。予は幸か不幸か、乙種の處世法を取つて來た。而して今尚之を悔ゐざるものである。今少しく具體的にいへば、予は初めから新聞記者たらんことを心掛けたものである。而して新聞記者となり、今尚ほ新聞記者である。孔子の所謂仁を求

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めて仁を得たりまた、何をか怨やんで、予は何等不平もなく不滿もない。餅を喰はんとするものが餅を喰ひ、酒を飲まんとするものが酒を飲んだと同樣だ。別段誇るほどの事でもないが、何等悔む事もない。世の中には所謂"might(マイト) have(ヘブ) been(ビン)"即ちこうしたらばこうなつたであらうなど〻、恰かも釣り落した鯉の詮議や、打ち損じた鶴の評定やで、彼れ是れ云ふ人もある。然し予は別に好機を捉へた事もなく、又好機を逸した事もない。切言すれば、予の一生には何等機會なるものはなかつた。自ら顧みてその平凡なるに驚くのみである。

一貫したる反抗的精神

また世の中には流れに順つて下る者と、流れに逆つて溯る者とがある。常に多數黨に屬するものと、常に少數黨に屬するものとがある。また事大主義者と非事大主義者とがある。また順應的精神の濃厚なるものと、反抗的精神の稀薄ならざるものとがある。予は自ら顧るに前者に屬せずして寧ろ後者に屬して居る。予の一生を一貫したる精神は、甚だ殺風景なる申分ではあるが、正直の所、反抗的精神だ。時により、處により反抗、の對象は異つてゐるが、精神夫れ自身は一貫してゐる。吾父は決して世の所謂雷同者でもなく、事大主義者でもなかつたが、また予の如く自ら好んで少數黨のチヤムピオンたることを好むが如き物好きでもなかつた。予として父を褒めるは些か憚りあるが、第三者の地位に立つて見ても、吾父は中庸を得たる、溫厚篤實の君子に庶幾かつた。予は吾父の事を考へる毎に自ら深く父に及ばない事を恥づる。されど持つて來た性分であれば致し方はない。予は强いて此の性癖を矯める必要を感じなかつた。今も尙ほ感じない。單に損得から打算すれば、予は一生の間此れが爲めに、多大の損をしたであらう。然しこれは予にとつては何でもない。損をしても、得をしても、予は予の心の滿足する所に向つて行いたのであつた。

熊本に於ける幼時の生活

吾家は田舍の郷士であつた。父が維新の際、熊本に召し出さる〻に際し、一家熊本に移轉した。當時封建の餘習は尙盛んで、城下の士族などは頗る威張つてゐた。予の反抗的精神は先づこの威張る士族の青年少年に向つて發揮した。彼等は予を田舍漢として予の田舍訛りを冷笑した。予は喋舌る事は本來飯よりも好きであつたが、其爲めに熊本言葉を十二分に會得するまでは殆ど彼等に向つて口を開かなかつた。之が八歲から九歲までの事。

予は熊本市街の西部である島崎(シマサキ)なる兼坂止水先生に托せられ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その家塾にあつた。かくて熊本洋學校に入つたのが明治五六年の頃と思ふ。然るに幾もなく年齢少きといふ理由にて退學せしめられた。その實は英學の上達の見込がないと云ふ事であつたらしい。予は之が非常に癪に障り、一生英書は手にせまいと誇へ、いよ／＼漢籍に勉強した。然し吾父は予に懇々論す所があつて、明治八年に再び洋學校に入つた。申すまでもなく、洋學校は熊本に於ける俊秀の淵藪であつた。かくて幾もなく耶蘇教の騒ぎが起つた。予は傳統的の實學黨だ。實學黨とは、横井小楠の一派だ。實學黨の血の最も濃やかなものだ。然しながら、予は子供ながらも實學黨に慊らなかつた。當時熊本の政權は吾父の執(とも)及び吾父等の仲間にあつた。山田、大田黒、嘉悦、林、徳富、倉園などゝいふは、その錚々たるものであつた。徳富は吾父で、倉園は吾妻の父だ。山田は予に於ては血縁こそないが、殆んど第二の父とも云ふべき父の親友だ。而じて予が母の姉なる竹崎順子の夫なる竹崎茶堂先生が教育家として熊本を風靡してゐた。然し予は實學黨の態度は何やら煮え切らぬやうに思へて、歯痒く感じた。彼等が毎に予が家に集つて評議するのを、子供ながら片耳に聴いて、その因循に驚いた程であつた。竹崎先生の大學の講義は、天下一品の評判で、屢々講筵に列したが、何やら先生が無學らしく思へて興味を感じなかつた。此際熊本洋學校で、米國の砲大兵尉で、教師として招聘せられたるゼンスが耶蘇教を以て學校の優秀の生徒を薫育した。其結果が所謂有名なる花岡山の連盟であつた。予は何等猶豫する所なく、之に加入した。素より耶蘇教の有難き事が分つたのでもなく、また中心耶蘇教を信じたのでもなく、只此運動が月並的實學派の舊套を破つて、革新の氣分を漲らしたからである。予は洋學校に居る中に、直接ゼンス夫人に何等教を受けなかつた。予が同窓の先輩連中若くは同輩の中には、ゼンスから多大の感化を受けたものがあつたが、予は善き感化も、惡しき感化も、感化其物を一切受けなかつた。而じて花岡山の連盟なども、予に於ては上に述べたる以外何等の深き意味がなかつた。かくて予は洋學校の閉校する以前明治九年の夏、十四歳で東京に上つた。

新聞記者たらんとする最初の希望

予が新聞記者たらんとする希望は、當時に於ても已に其兆候があつた。熊本洋學校の側に活版舍があつた。之は本来洋學校の書籍を出版すべく藩廳で購入したものであつたが、廢藩置縣の爲めに其活版機械は活版舍に拂下け、そこから當初は半紙綴りにて「白川新聞」と云ふを出し、後には一枚刷りの「熊本新聞」を發刊した。それの記者は後に水電記念で有名であつた湯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地丈雄、また後には予の忘年の友となつた境野熊藏等の諸君が書いてゐた。予は此新聞に多大の興味を有つて居り、また東京から父等が購讀しつゝある「東京日々新聞」などを最も熱心に精讀し、當時主なる世界の出來事であつた露土戰爭の事なども「日々新聞」の上にて其約略を心得てゐた。

東京より京都へ脱走

東京に着してから、予は予が從兄である横井時雄氏と神田裏猿樂町の、之も予等の從兄である藤島正健氏の邸に寄宿してゐた、横井氏は開成學校に、予は英語學校に通學してゐた。云ふ迄もなく、開成學校が今日の東京帝國大學の原で、英語學校が第一高等學校の原である。兩校共に神田一ツ橋外、今の商科大學の向ひに隣り合せにあつた。若し予が順當に此學校を出でたならば、予は當然法學士か文學士の末班に列したであらう。處が予は官立學校が氣に喰はぬから、頻りに京都にある金森通倫氏に手紙を遣つて、同志社の事を聞き合せた。之は當時新島襄なる人が同志社なる學校を開いてゐて、花岡山連其他耶蘇教の一派は悉く熊本から之に赴いたことを承知して居るからであつた。申す迄もなく、予は耶蘇教が慕はしいといふではなかつた。只東京の官立學校が氣に喰はんからであつた。かくていよ〳〵志を定めて京都に赴くこととした。之を熊本なる父に相談すれば、固より反對することが分つてゐた。また予が同宿してゐる横井氏に告げても、贊否何れとも保證がつかなかつた。故に一日腹痛と云つて横井氏を出してやり、その後、手荷物を纏め、豫て預け置きたる三十圓を藤島夫人より――夫人は佐々木信綱夫人の母で、今尚ほ佐々木氏に同居してゐる――何かの理由をつけて受取り、其まゝ俥に乘つて、新大橋の傍らにゐる吾父の弟である叔父江口高廉を訪ひ、いよ〳〵京都に赴く旨を告げた。然るに叔父は以ての外とて予を叱り、決して相成らぬといひ、それから話がだん〳〵長くなつて、蕎麥でも喰つて行けといつたから、予は蕎麥の馳走になり、叔父の言に承服するともいはず、承服せぬともいはず、其まゝ俥を新橋停車場に向け、漸く横濱まで落ちのびた。

予の同志社生活

予の同志社生活は語れば長くなる。然しただ極めて本題に必要なる點丈けを話して置く。予が同志社に到着した夜、デヴィス氏の邸にて集會があつた。デヴィス氏は恐らくは新島先生以上の同志社に於ける有力家であつた。其家は御所御苑内に於ける柳原伯の邸であつた。同夜予は如何なる事を喋舌つたか記憶

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せぬが、兎に角起つて何事か感ずる所を述べた。恐らくは其演説が新島先生の心を惹いたであらう。其の翌晩、先生から案内せられ、其宅に赴いた。之が予と新島先生との關係の初まりである。如何なる事を先生と語つたか覺えてはゐないが、兎に角紀州ネルのシャッツと薩摩芋で拵へた羊羹らしきもの幾片を惠まれた事丈けを覺えて居る。而して先生は當時から已に不眠症に罹つて居られたやうだ。其の時分、何か米國の慈善事業に、寄付すべく、教會で募金があつた。予は九州では戰爭最中であるのに、之を後にして彼を先にするは不可だと云ふて、反對した。而して九州戰亂後の弔慰金に、大枚五十錢を寄付した。五十錢とて笑ふ勿れ、これは當時予としては最大の犧牲を拂ふたのであつた。予の反抗的精神は同志社に於て最も刺戟せられた。第一は同志社は日本語では同志社といふが、亞米利加ではアメリカンボールドのトレーニング・スクールと唱へて、丸で米國の學校だ。男の教師、女の教師、老ひたる教師、若き教師、悉く西洋人だ。彼等は別に威張ると云ふ譯ではないが、脇から觀て居れば癪に障らぬ事もない。殊に是等の西洋人にゴマ、摺るゴマの蠅共が少くないのは尚更ら不愉快である。日本の大祭日に國旗を掲げるでもなく、休むでもなく、之に反して土曜日曜は二日丸休み、夏の休みは六月の十日頃から九月の十日頃にも亘り、而して食堂の委員なども米國人であれば、日本人の食性などには頓着なく、勝手次第に取り決め、一として肝癪の種でないものはない。予は神風黨の横行する熊本では最も洋癖家であつたが、同志社に來ては餘儀なく攘夷家となつた。或時宣教師の某夫人が予の室を見舞うた。予は彼等から見舞はるゝことを好まず、且つ無躾に、人の勉強してゐる室に入り込むなどは無禮であると思うて、向ふから天氣の挨拶をしても何といふても、石の如く默つて答へなかつた。そこで某夫人は其事を新島先生に訴へたさうだが、先生は、他日人に向つて、德富さんも近頃は攘夷家になつたやうだといふたといふ事を聽いた。第二は當時の同志社其物は傳道師養成の學校であつたからして、傳道師とならざるものは、謂はゞ同志社本來の目的に副はぬものであつた。而して吾等の上級生にはバイブルクラスと唱へて、一切同志社の勢力は其級で握つてゐた。即ち現在の小崎、宮川、金森、海老名、横井及び故人となつた前朝鮮銀行總裁市原氏の如きは其錚々たるものであつた。彼等は同志社に於ける有力階級であつて、謂はゞローマのパトリシアンの如きものであつた。此二つが少からず予の反抗的精神を刺戟した。予は同志社にゐて、未だ曾て牧師とか傳道師とかになるといふた事もなければ、思ふた事もない、予の目的は益々明白となつて來た。予

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は自ら學者となる事も望まなかつた。政治家となる事も望まなかつた。況んや世の所謂文士おやだ。横井小楠の詩に「吾輩從來非文士。動輙意氣論成辯」と云ふ句は予が常に愛誦する所であつた。然し能ふべくんば予は政治家と學者の中間を歩いて見たい。これは卽ちジュアナリスト、新聞記者といふが卽ち予の本分であると思うた。斯く思うたのは明治十年卽ち十年の戰爭中である。

新聞記者たるの決心愈々固し

十年の戰爭は予に取つて非常なる印象を與へた。當時明治天皇は京都に在した。木戸、大久保、伊藤其他の文武の人は何れも此方面に在つた。木戸は病床の上にて「西鄕もう大抵にして置かんか」と獨語して戰爭中に京都で逝いた。福地君が戰時通信やら、末松君が「山縣公に代つて西鄕隆盛に與ふるの書」や、斯くて福地君が一新聞記者の身を以て京都の行在所に出て、明治天皇の御前に於て戰場の實況を奏上する事やら、一として予を刺戟せぬものはなかつた。正直にいへば、予もせめて福地ほどの新聞記者になつて見たいと思うたのである。新聞記者となるには新聞紙を讀むに若くなしと思うて、予は其日〳〵の新聞のみでなく、當時京都の博物館樓上に古新聞の推積しあるを發見し、毎日同志社から殆んど日常の學課を廢して、それを讀みに出かけ、讀んで足らず、主もなる論說は之を筆寫した。今手元には保存してゐないが游樂の罫紙に蠅頭の文字もて之を寫したものが數卷あつた。斯くて一度ならず二度ならず之を讀み、暗記した。今日でも尙若干記憶してゐる。之と同時に予は福澤氏の著述をも讀んだ。凡そ福澤氏の著述なるものは、大小に拘らず讀んだ。明治九年予の東京にゐる中、福澤翁が「家庭叢談」なるものを發刊し、之を藥研堀の報知社にて賣り捌くや、予は神田裏猿樂町から態々炎天に足駄を履いて其の第一號を購ひに赴いた事がある。然し何れかと云へば予は寧ろ福地氏の文に醉喜したのである。同志社在學中新聞記者としての予に利益を與へたと思ふのは、漢學の先生に、村上作夫といふ人があつた。之は文學博士村上直治郎君の叔父であつて、此人の文章軌範、鳩翁道話、天下才子必讀書などの講義は實に予に向つて新天地を拓いた心地がした。また浮田和民君が福澤の文や曲亭馬琴の文を愛讀せられてゐた事が予にとつては少からざる影響を與へた。また故山崎爲德氏が所藏の八家文などは屢々之を借讀した。また氏からして初めてカーライルなどの名を聞いた。同志社の空氣と予とは殆んど沒交渉であつた。予は同志社にゐたが、予の心は只一日も早く新聞記者となりたいと云ふ事であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そこで明治十二年其事を新島先生に話し、——今日でいへば煩悶病であらうが、當時は煩悶などといふ言葉もなく、只事實煩悶してゐた計りで、ぶら／＼遊んでゐるよりもと——新島先生の紹介を得て神戸に赴き、七一雜報の編輯を手傳ふことになつた。七一雜報とは七日に一度出す雜誌で、當時に於いては殆んど唯一の基督教雜誌であつた。其の雜誌は今村謙吉の名によつて出版せられたが、其實は宣教師O・H・ギュリーキ氏の主管であつた。故に予は端なくギュリーキ氏の手元に働かねばならぬ事となつた。如何に予が速かに神戸を去つたかは、同志社を去る時に撮つた送別の寫眞が未だ出來上らざる前に予の身は再び同志社の食堂に在つた事で分る。友人共は或る朝、予が食堂で飯を食ひつゝあるを見て、ヂロ／＼予の顏をのぞき込み、狸か狐が德富に化けて來たのではないかと、疑つた程であつた。今から思へば誠に赤面の至りであるが、紹介を忝くしたる新島先生には何等の釋明もせず、神戸を飛び出し再び京都に復つて來た。其理由は西洋人の下で働く事が面白くないからであつた。然し予が新聞癖はいよ／＼嵩じて、密かに當時關西に於ける有力なる新聞である「大阪日報」に投書をした。もとより匿名であれば誰も氣づくものもなかつたが、たま／＼それが掲載されたを見た時には、予は獨り欣然として、鬼の頭でも取つた思ひをした。

同志社を去る

それから明治十三年にはいよ／＼予が同志社卒業の年であつて、卒業證書を握る數月前頃から騷ぎが起り、或は騷ぎを起すといふた方が適當かも知れん、終に同年五月同志社を去ることになつた。而して同志社を去る以前には新島先生とも些か諒解を得た積りであつたが、いよ／＼去るについて旅費が缺乏するから旅費の借用を先生に申し込んだ時には流行の先生も、德富の顏は千枚も張つてあるかと云つたといふ事であつた。申し添へて置くが、此旅費といふのは予の旅費ではなかつた。實は予の同志の者を引張つて行くに不足したから、これを先生から借りる積りであつた。先生が立腹したのも當然だ。いよ／＼出立といふ事になつて、同志社附近の予の下宿から多くの友人に送られ、新島先生の宅まで別れを告げに到つたが、未練なる先生は尚此の最後の場に於て我等を引留めんとした。そこで先生の宅で思はず時間を取り、三條の橋に至れば已に甚頃となつた。ここで予等の同志であつて、先生の爲めに引留められたる新島公義氏等と會食をした。いよ／＼勘定となつたが、公義氏が僕が拂ひませうといふた。いや僕が拂はうと予がいふたれば、それ

には及ばん、實は叔父が君等の立つ時に密かに予を呼び、段々時刻も後れたから、晝飯でも馳走してやれというて予に金を渡したのだというた。予は今に始めぬ事であるが、流石に先生は先生丈けあると思うて、密かに予が平常先生として尊敬してゐた事が間違でなかつたと思うた。寧ろ再び頭を廻らして同志社に歸らうかと思はぬでもなかつたが、イヤ折角こゝまで踏み出したれば東京でキット物になつて見せるといふ決心で、重き足を強いて向ふに張り出し、其夜は草津に宿つた。

新島先生の人物

話し元に戻る。予は同志社に在學中、まだ一回も新島先生其人に對して不平を抱いた事はなかつた。正直にいへば、予は新島先生に於て先生らしき先生を見出したのであつた。先生は政治とか經濟とか云ふ點よりも寧ろ科學とか數學とか機械學とか云ふ方に長じて居られた。然し何れかと云へば先生は頭の人でなく心の人であつた。先生は山をも動かす信仰を有つて居り、石をも泣かせる情熱を有つて居つた。人間であれば何人も缺點がある、先生は決して缺點なしとはいはぬが、實に日本男兒の立派なる標本であつた。予は自ら先生の如き人に會うたのを幸福とするものである。予は自ら先生を尋ねて京都に赴いた事を予の一生涯の運命に於て最も幸福の一と信じてゐる。

上京して福地氏を訪ふ

東京に着いた時には意氣已に富士山を吞む位であつた。取り敢えず下谷練塀町に友人と同居して、豫て目標にした福地源一郎氏に面會せんと心掛けた。予の量見では、末松謙澄氏が書生の身で一躍日々新聞の社說記者となつたといふ事であれば、予も入社する位は一遍福地氏に面會すれば易々たることであらうと思うた。當時は固より人に面會するに紹介狀などといふ事の必要あるを知らなかつた。名札さへあれば澤山と思うた。日報社に行いた。當時の日報社は銀座通りで惠比壽屋といふ大いなる呉服屋の跡を引受けたもので、田舍者の膽玉を奪ふ位宏壯なるものであつた。一方には日報社といふ懸札があり、一方には太政官記事印行御用といふ懸札があつた。予は受付に名札を差出したが、てんで相手にされなかつた。去つて福地氏の邸宅下谷池ノ端茅町を訪うた。こゝでも要領を得なかつた。彼れ此れ日報社と福地氏の宅を訪問した事が十回以上であつた。十回までは記憶してゐたが、その後は忘れた。いふまでもなく、電車もなければ何にもない。二本の膝栗毛で、明治十三年の五月から六七月にかけて驅け廻つたのである。せめて當人に面會が出來

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んならば、其容貌風采でも見ようと思ひ、當時福地氏が東京府會議長であつたから、そこへ出かけた。當時の府廳は今の内幸町の勸業銀行の向ふ側であつた。予は面のあたり福地氏を見て失望した。その樣子が何やら落語家(はなしか)めいてゐた。堂々たる國士的の風采ではなかつた。

熊本に歸る

當時麻布三ノ橋に學農社を開いてゐる津田仙と云ふ人がゐた。此人は新島先生と懇意であり、予が父も面識であるから此人を訪ねて見た。都合次第では福地氏への紹介でもして貰はうかと思ふたのである。その時予は初めて友人から夏羽織を借つて着たやうに覺えて居る。餘り無作法なる風で面會謝絕されては困ると思うたからであつたかも知れぬ。處が案の如く津田氏は其羽織はお前さんの物かと訊かれた、正直に事實を答へた。それからこゝまで歩いて來たかと云ふたから勿論と答へた。津田翁は若い者は歩かねばいけぬなどといふて、福地氏に紹介する位は何でもないが、それよりも今少し勉强した方がよいではないかと云ふたやうに記憶して居る。津田氏の言で悟つたと云ふではないが、予は兎も角、考ふる所があつたからして、熊本藩出身で、帆足萬里の高足である岡松先生の塾に入つた。當時先生の塾には中江篤介などといふ人が居て、洋學者間には漢學者として先生は有名であつた。併し予は學問する積りで塾に入つたのではなく、下宿する積りでゐたのである。さうして當時予が叔父江口高廉――明治九年予が東京脫走の際、予が京都に赴くを止め、予に旅費を御馳走したる叔父――が芝の山内で「内外交際新志」といふ雜誌を刊行してゐた。之は今日の「外交時報」といふやうな種類のもので、專ら外交に關する記事を編纂し、それに短き論文を加へたものであつた。予は岡松塾から時々其の編輯に手傳に赴き、或は外國電報の翻譯をなし、或は短評を書いた。固より翻譯などするは予の柄ではなかつたが、併しやる丈けはやつて見る積りでやつたのだ。かくて予はいろいろ考へたが、他人に依つて身を立つるよりも、自分自ら立つ方が早途でもあり、捷徑(ちかみち)でもあり、又正しき道でもある。それには今一層勉强するが肝腎だと思うた。東京にゐて東奔西走するよりも、寧ろ國に歸つた方がよからうと考へた。恰も、父の執山田翁は、事を以て東京に上つて來た。予は翁に向つて志を語り、翁から旅費を借用し、また予の父に向つては翁から先容の手紙を出して貰ひ、いよいよ歸國に決したのが明治十二年十月であつた。

それから明治十九年十二月家を擧げて東京に移るまでは予が

新聞記者としての準備時代であつた。

新聞記者準備時代

予は熊本に歸るや否や、吾父と相談して、大江義塾なるものを起した。之は同志社にゐて其の教育法が慊らなかつたから、予が思ふ通りの教育法を實行して見ようと考へたのであつた。處が實際やつて見ればなか〳〵思ふやうには行かなかつた。然し大江義塾が他人を教育したる効果如何は暫く措き、自ら予を教育するには頗る有効であつた。予の熊本に在る間はなか〳〵多事であつた。一方には私立學校の教師でもあり經營者でもあつた。また當時熊本に於ける相愛社連中と提携して盛んに政談演説もした。また「東肥新報」の發刊に際して社説も書き論説も書き、或は傳記とか或は評論とか、外國文の飜譯をもした。また「開化の手引」といふ極めて平易なる雜誌をも拵へて、平民的に政治の思想を鼓吹せんと企てた。「東肥新報」が廢刊して後は「熊本新聞」に長き論説を投書した事もあつた。偶には東京大阪の新聞雜誌にも投書した。そのために東京の毎週新報と云ふ基督教の雜誌は、永き發行停止を喰ふたことがあつた。當時予の如何なる方面に勉強したかといふ事は、今こゝに明治十四年二月自ら筆記したものがある。それには「學問の目的」と題し、「第一史學、第二文章學、第三經濟學、右の通りに相定め候也一切無用の讀書を禁ず、詩歌は性情を養ふものなれば時々披見して可なり、新聞は時勢を達觀するの具なれば時々讀むべし」と記してある。之が予の當時の學問の方針であつた。予は此間に於て米國から注文して愛讀したる"Nation"と云ふ週刊雜誌及び田口鼎軒氏の「東京經濟雜誌」、中江兆民氏の「政理叢談」矢野文雄氏の「經國美談」等を默過することが能はぬ。此等は田舍の書生である予に少からざる刺戟を與へた。

中江兆民の事

而して中江兆民氏との交際は最も予に刺戟を與へた一だ。予は兆民氏とは多くの點に於て兩極を代表して居る。然し氏によつて得る所は少くなかつた。氏は實に惡戲の親玉であつた。明治十五年氏は尚青山南町の墓地附近に堂々たる邸宅を構へて居た。當時東京はコレラ流行の最中であつた。予が熊本から上京して、氏を訪うた時、氏は何氣なく「德富さん、コレラヨケの藥を上げませう」というて或る液體を予に飲ませた。予は固より其通りに信じてそれを飲み干した。やがて見る間に予の頭はひつくり返るやうになつた。その後の事は一切知らぬ。予が人心地ついた時には已に午後四時頃であつて、中江氏の鐵のベツ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ドの上に横つてゐたのであつた。いふまでもなく予にブランデーを振る舞うたのであつた。然し其代償として予はヂッケンスの英國史とロックのヒューマンアンダースタンヂングを與へられた。中江氏は佛學者であつたが、如何なる故か此等の英書を有つてゐた。併し予は哲學に興味がなかつたから、ロックは友人の元良勇次郎君に送つた。

板垣伯と政論の武者修業

予と中江君とは合乘俥で青山から遙に高輪の後藤伯邸に寄宿したる板垣伯を訪うた事もあつた。中江君は嘗て予の事を明治の司馬仲達文明の王莽など丶書いて「國民之友」に投書した事があつたが、餘り個人的に渉つてゐたから其原稿を預り置いた。今も尚手元にあるであらうと思ふ。予は微力ではあつたが、中江君に對しては及ばずながら最善を竭した積りである。君の手紙は澤山持てゐたが、今も若干ある。予は明治十五年夏には板垣伯が自由黨の總理として刺客に逢ふたから、伯を訪問すべく熊本から出かけて、伯が傷を養生すべく箱根蘆の湯に湯治するや、予も追つかけて之を訪ひ一週間ばかり同宿した事があつた。其時分から板垣伯との交際は初つた。然し予は何れの政黨にも屬することを好まなかつた。予は自個の氣分として何れの宗派にも、政黨にも、政社にも屬するを欲しなかつた。世の中に予程我儘の者はあるまい。人の強いて己れに仝じきを求めないが、予を枉げて人と仝じくすることも欲しない。いはゞ頂天立地、我れ自ら我が思ふ所をなすより外に仕方がない。之が予が一生の本領である。かるが故に多くの友人は有つて居るが、所謂仲間となつて永久的に仕事をした事はない。それは本來予自ら好まざるが爲めである。故に予は當時板垣伯に向つて「あなたの議論には感服するが、あなたの黨員となるといふことは御免を蒙る」というて居た。かくて予は明治十七年に土佐に赴き、十九年にまた土佐に赴いた。之は政論家としての武者修業ともいふべきものであつた。

準備成つていよ〳〵上京す

予が熊本に於ける生涯は必しも圓滿ではなかつた。平坦ではなかつた。大江義塾は眇たる學校であつたが、佐々友房氏等によつて作られたる濟々黌の連中からして少からざる迫害を受けた。毎夜石を投げらる丶位は殆んど通常であつた。嘗て佐々君と交驩して後、君が襲藏したる故井上梧陰先生の書簡集を見たが、其中の一卷には屢々予及び大江義塾に言及して、彼も亦一種の人物だ、餘り手荒くするなといふやうな事が書いてあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたやうに覺えて居る。予は熊本にゐる中に若干の著作をした。其中には「明治二十三年後政治家の資格を論ず」とか、或は「自由道徳及び儒教主義」とか、或は「第十九世紀日本の青年、及び其教育」とかいふものがある。また「官民調和論」などといふものもあつた。此等は何れも二百部とか三百部とか印刷して懇意のものや、其他に配附した。然るに「第十九世紀日本の青年及び其教育」は殊に評判となつて、全文「東京經濟雜誌」に連載せられた。其時は予は大江逸と題して居たから、田口氏の如きは大江逸と德富とは仝人であるか別人であるかに惑うたといふ事だ。意外であつたのは、井上梧陰先生が之を一讀して特に有賀長雄氏に批評を書き込ましめ、頻りに識者の間に推賞したといふ事だ。そこで明治十九年予が「將來之日本」の原稿を携へて東京に來た時分には、或社會には予の名は若干知れて、別に紹介なくして予の爲めに諸名士の門戸は開かれた。「將來之日本」は予に於て寧ろ會心の作であつて、予は之を態々携へて土佐に赴き、板垣伯に示した。處が板垣伯は之を一讀したかせぬかは知らぬが、別段相手にもしなかつた。それから東京に携へて田口卯吉氏に示して、いよ〳〵自費にて經濟雜誌社から出版することゝした。即ち損をすれば予が責任を受くるといふ事である。一冊五十錢の定價で、それを三十五錢で經濟雜誌社に卸した。それから出版費を控除したる殘餘が、予の收入となつた。併し予の志は已に決して居た。世間が「將來之日本」を受くるにせよ受けぬにせよ、予は最早や熊本に止つてゐる必要は無い。熊本に還つたのは新聞記者となる素養を作る爲めであつた。已に十分とはいかぬが、最早や素養を發揮する時節が來た。この儘熊本に居ては只村夫子となるばかりである。一生田舍角力を取つてゐたとて何の役にも立たぬ。それで予は上國の形勢を觀察旁々明治十九年の夏「將來之日本」の原稿を携へ、土佐を經由して東京に出かけたのである。予は其時多くの人々に面會した。大隈侯にも會うた。陸奥伯にも會うた。あらゆる名士にも會うた。そこでいよ〳〵國に歸り、吾父、吾母とも協議をし、其同意を得て大江義塾を閉鎖し、東京に出かけたのは明治十九年十二月の上旬であつた。予が歸鄕中に「將來之日本」は發行されて、少からず世間の評判を博した。そこで予は東京に全家を携へ來つて別に方向に惑ふことはなかつた。當時大阪の或る新聞社にて予を招聘すべく新島先生の紹介もて來た人があつた。また東京の或る有力なる新聞でも予を招かんとしたるのもあつた。然し予は兎ても他の政黨に加入する能はざる如く、他の教會に加入する能はざる如く、他の新聞社にも招聘せらるゝ事能はなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そは欲しなかつたといふより、予に於ては全く不可能である。世の中に不器用なものも多いが、予程人と協同一致して仕事をする能力の缺乏したものはない。予は自ら稱して天地の一閑人といふが、之は謗でもなく、謙遜でもなく、實際其通りである。斯くて明治廿年二月に「國民之友」一號を發行した。「國民之友」を成功せしめたるに至つたのは、半ばその經營の事務を執つた湯淺治郎君の功といはねばなるまい。湯淺君は印刷から用紙から廣告の樣式から、あらゆる方面に其力を傾倒した。斯くて話は長足の進歩をするが、明治廿三年「國民新聞」の發行となつた。

「國民新聞」の發行

「國民新聞」の發行は偶然でもなく、卒然でもなく、予に於ては三年計畫は愚か、十年計畫とも、若くはその以上ともいうてよからう。予は當初から自ら新聞紙を發行せんと期して居た。「國民之友」は畢竟其の豫習であつた。而して「國民新聞」には少くとも一新生面を開く積りであつた。第一は事實を綿密に報道することだ。肖像を掲載することも其一だ。第二は事實を報ずるのみでなく、意見をも報ずることだ。即ちニュースペーパーばかりでなく、併せてヴイウスペーパーとすることだ。

それにはインターヴイユー（對話）が第一着だ。又議論の範圍を單純なる政治法律に限らず、經濟、宗教、文學、藝術、其他あらゆる社會人事の問題に普及せしむることだ。要するに新聞其物をして社會の生活と一致合體せしむることである。此の方針を以て予は「國民新聞」を發行した。其爲めに當時最も進歩したる繪畫家である久保田米僊氏を京都から聘し、氏に向つて最上俸給を拂つた。最上俸給といふても一ケ月百圓位であつたと思ふ。それは明治廿二年の冬予は京都に赴き、久保田氏と契約をしたのであつた。扨、新聞を造るについて先だつものは資金であつたが「國民新聞」が僅か六千圓の資金で成立つたといふ事は嘘のやうな事實である。千圓は湯淺氏の手から上州原市の半田氏より借り受けた。後の五千圓は熊本の予の友人であつた藤崎氏から借り受くることゝなつたが、證人が必要と云ふ事で、遂に新島先生を煩はすことにした。話轉じて新島先生は予が同志社を去つたに拘らず、予に向つて恒に多大の好意を傾けられた。予も不肖ながら其萬分の一に酬ふべく先生の晩年には及ぶ限りの心力を竭した。其事は同志社大學の歷史に說くべきであつて、今姑く措くが、明治二十三年正月廿一日の夜、いよ〱「國民新聞」發行の披露會を芝山内の三緣亭に催すことになり、種々の趣向を凝らし、各方面の人々を案內して、予はいよ〱

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

亭主振りを發揮すべく、フロックコートを着込んで日吉町の附近なる床屋に赴いてゐた。然るにそこに電報が屆けられた。それを見れば先生危篤といふ事である、そこで予は髯を剃るか剃らぬに、披露會をも、お客をも一切湯淺君に一任し、取るものも取り敢えず大急ぎで大磯へ飛んで行つた。それから三日フロツクコートのまゝで遂に先生の遺言狀を書かねばならず、死水を取らねばならぬ事となつたのである。其結果として第一の打撃は資金で、予は熊本の友人に電報を打つて、御身が新島先生の證人であるが爲めに予に用立てた金は今金庫に其儘保管してゐる。返金せよと云へば返金する。然し此際新聞發行には、資金が必要だ。御賢考を願ひたいというてやつた。彼も潔く承知したから早速之を以て初めたのであつた。有り儘に白狀する。予は新聞記者としての素養は不肖ながら略ぼ具備してゐたと思ふ。併し經營者としての素養は全く無かつた。實は經營の方面は殆んど閑却してゐたのであつた。然るに幾もなく湯淺君は同志社の會計事務に當るべく京都に去つた。之は予にとつて容易ならぬ打撃であつた。いはゞ子を産み落してやがて女房に去られたやうなものであつた。併し當惑したのは予が從來自ら經營の事に不用意であつた過ちである。困るのは不用意の懲罰というてもよろしい。予は是に於ていよ／＼賴むものは我であるといふ事を會得した。固より人見君、渡邊君、草野君其他の諸君が湯淺君の跡を繼いで經營の任に當りくれた事は予は多しとする所である。且つ素養というても記者たるの素養で、編輯者たるの素養は福田和五郎君に於て見出したのだ。予は豫め此爲めに君を「京都日報」に派出して其編輯長として十分の習練を積ましめてゐた。故に編輯事務は何等の差障りなく行はれた。

「國民新聞」は「國民之友」ほどの驚異を世の中に與へなかつた。併しながら少くとも當時の新聞界に一個の新機軸を出したに相違はなかつた。

予と各元老との關係

新聞の歴史は語れば長くなるから、姑らく他日に讓り、予一身についていへば「國民之友」の時代に、之も新島先生を介して井上侯から洋行を勸められた。予が元老と相知つたのは井上侯が最初である。明治十三年同志社を出て東京にウロついてゐた頃、靈南坂の工部卿の官舍に侯を訪うた事がある。それが最初で、明治二十年の初期に、井上侯が自治黨なるものを組織せらるゝ評判のあつた時も、予は引張られた事がある。その爲めに今の關直彦君や予は、當時の所謂政治小說の材料となつた事もある。併し予は他人の力で洋行するなどといふ事は好まし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くないから、新島先生を通じて之を斷つた。予は松方公とは父以來の緣故で親しく出入した。予が父は維新前から公を知つて居る。又予が從兄の藤島正健は長く大藏省にあつて印刷局の次長やら、銀行局長を勤め、公の門下生であつた。而じて予が先輩山田翁も亦政見の異同に拘はらず公と相識の間柄であつた。故に松方公とは政治以外の交際で、初めから今日まで何等渝る所はなかつた。今日も尙ほ公に向ては、父執として滿腔の敬愛を捧げてゐる。大隈侯とは一通りの面識であつたが、新島先生の同志社運動に侯が關係して以來屢々交際の機會を得た。陸奥伯とは明治十九年初めて面會したが、併し德富の姓は伯には初耳ではなかつた。伯は維新前長崎に書生をして居た時、予が叔父の家にも來り、また予が家にも寓してゐた事があつた。其話は伯自ら予に語つたのであるが、吾父及び予の姉等もよく伊達小次郎と稱し、或は錦戸太郎と稱したる伯を記憶して居る。そこで予と陸奥伯との關係は尋常一樣ではなかつた。伯は「國民之友」には和歌山縣下の一平民と題して投書した事もある。また伯が米國公使からして第一山縣內閣の農商務大臣となる際などには、予も屢々其消息を聞いた事もある。「國民新聞」の紙上に鹿鳴館の舞踏の繪を出さんとして伯を煩はし、米僊氏の爲めに其招待狀を贏ち得た事もある。明治二十五年選擧干涉の際には伯は干涉の首領品川內相と差し向ひの反對者の隨一であつたらしい。其時分には屢々「國民新聞」に政治上の種を取つたことがある。與へられたことがある。松方內閣の瓦解して第二伊藤內閣の出來せんとする際は、陸奥伯は帝國ホテルに出張して屢々電話にて予を招いたことがある。民黨、吏黨といふ言葉は中江兆民の製造だといふが、武斷派文治派といふ言葉は當時陸奥伯によつて製造されたか、さなくば伯のヒントによつて出で來つたものであらうと思ふ。當時伯はランダラフ、チヤーチールに私淑したやうであつて、其演說集をポケツトの中から出したり入れたりしてゐた。予と山縣公とは公が第一伊藤內閣の內務大臣として山下町官舍にゐた際に面會した。後藤伯とは明治十九年頃初めて面會した。爾來偶々相逢うたが如何なるものか「國民之友」と後藤伯とは順緣よりも逆緣であつた。新聞でも同樣であつた。伯が大同團結を唱へてこれを踏み段として入閣した際の如きは頗る猛烈に攻擊した。伯は中江兆民に向つて、德富といふ奴は赤裸にして曹操を罵つた、禰衡の如き男だというたといつたそうだ。併し予は新島先生の依賴で、伯の高輪邸に同志社の寄附金を募りに行つたら、予に三百圓を手渡しせられたことを記憶して居る。大山公には頗る好意に與つた。洋行する際などには多くの添書を與へられた。西鄉侯とも一通り

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知つてゐた。樺山伯とは其下に參事官となつた緣故もあつた。高島子とは最後まで最も懇親であつた。序ながら是等の人々との交際をこゝに掲げて置く。

日清戰爭と予

いふまでもなく明治廿七八年の役は、日本の歷史にも、「國民新聞」の歷史にも、また個人として新聞記者たる予の歷史にも多大の關係がある。其大いなる事は歷史に讓つて、極めて小なることを語るが、其前に一言する必要がある。予は東京の文壇に於て、一方には頑迷なる保守黨、他方には藩閥政府を對象として奮闘した。藩閥政府といふ中には、武斷派もあつたが、また伊藤公一派の文治的官僚派もあつた。然るに、一方には條約改正の問題が盛んになり、他方には支那との關係が緊張し來るに際して、予の對象は更らに外國に轉じて來た。而して日本の國權を恢復するの要は、追從口說でなくして、寧ろ力であるといふ事を會得した。其の意味に於て、大隈侯が外相として所謂條約勵行を施し、條約を法文通りに勵行し、外人に多大の當惑を與へ、彼等をして自ら進んで條約改正の止むべからざるを感得せしむるに至らしめんとしたる方法に少からず共鳴した。予が條約勵行派に與し、六派連合に投じたのは、如上の理由からだ。かゝる場合に於て、東學黨の亂は起つた。予は率先して開戰論を主張した。

川上大將と予

此場合に於て一言するは、予と故川上大將との關係である。桂、川上といへば、明治廿年代の新聞記者は陸軍の花形役者として知らぬものはなかつた。桂が陸軍の次官で、川上が參謀次長で、いはゞ日本の陸軍は二人で切り廻してゐたのだ。然るに議會開設後、桂は陸軍省を去つて名古屋の師團長となつたが、川上は依然として參謀本部に據つてゐた。予が川上氏と相知つたのは多分明治廿六年頃であつたと思ふ。彼は軍人に珍らしく腰の低い男であつた。肌觸りのよき男であつた。一見舊の如しとは彼の事だ。彼は如何なる場合でも面會謝絕などと云ふことをしなかつた。話は單簡でも頗る要領を得てゐた。予は元來軍人などは譯の分らぬものと思ふてゐたが、また川上に就ても、其反對者から隨分惡口を聞いてゐたが、會つて見て、日本の陸軍の脈はこゝにありと感づいた。それから彼とは何事についてもよく話合をした。彼はよく予に言つた。德富君には何一つ不足はないが、困つたものは例の平民主義だ。之れさへ止めて貰へば誠に結構であると云つた。彼は薩摩の生地に獨逸の鍍金をし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た男で、遂に平民主義の言論は分らなかつた。併し其考へ方も、其態度も、彼は自ら知らず覺えざる中に平民的であつた。

　日清戰爭についてはいろ〳〵の面白き話があるが、いかに彼が苦心をしたかといふ事についてこゝに少しく語るであらう。之は固より彼の口から予の耳に入つた話であるから間違ひはあるまい。實をいへば、日清戰爭は老人が始めたのではない、若者が始めたのだ。内地では川上、北京では小村、それに巧く活機を捉へた所の陸奥などが、巧みに伊藤山縣などの大頭を操つて行つたらしく思ふ。出兵の當時、いろ〳〵議論があつたが、思ふ所は言にあらはるゝで、川上は「かゝる問題は老耄共の分る事ではない」と公言した。處が上席に据つたる山縣がいかで之を聞き逃がすべき。「老耄とは誰の事か。分らぬといへば列席する必要もあるまい」とて座を蹴立てゝ歸らんとした。處が川上がとんで行つて山縣の袖を取り、「いかにも失言は重々謝りますが、こゝは國家の一大事であるから、何とか機嫌をとり直して復席して頂きたい」と謝罪をして、漸く元の席につれ戻つたといふ事である。また代理公使として北京にある小村及び駐在武官からの電報は、首相たる伊藤には選擇をして見せたものだ。開戰に都合のよささうなものは見せたが、少し都合の面白くないものは隠してゐた。處が或る日、至尊から徳大寺侍從長を以て伊藤公に斯く〳〵の電報は如何に思ふといふ御下問があつた。然るに伊藤公は未だそれを知らなかつたのだ。そこで段々詮議の上に内閣で大問題を惹き起し、殆んど伊藤公の進退問題となりかゝつたのである。處が機敏なる陸奥は、飛んで川上の所に到り、實は只今斯く〳〵の問題で詮議最中である。定めて君の手元に古き電報があるであらうから、それを一綴めにして伊藤公がまだ其邸に歸らない前に、早く副官にでも持ち込ましておけ、さうして實は副官の手落ちで甚だ相濟まんといふて謝罪したらよからうといふ智恵を授けた。其爲めに其の問題はともかくも無事に濟んだ。之は單に一つの出來事であるが、かかる類は定めて多くあつたであらう。また小村もなか〳〵の男で、北京から川上と照應して頻りに開戰の手筈を定めつゝ、表面はいかにも平和黨たることを裝うてゐた。そこで當時英國の公使オコンナー氏は、談判破裂していよ〳〵小村の引き揚げ歸國する時には、小村の手を握つて、折角の御盡力でもとう〳〵其甲斐がなく、破裂したとは誠に笑止千萬であると泣いて別れを告げたといふことである。之も予が小村侯其人から親しく聞いた話であつた。いづれにしても若い者の元氣が盛んであつたが、彼等よりより若き我等の元氣は尚更らであつた。打ち明けていへば明治廿七年頃までには「國民新聞」は若干の貯金をし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐた。印刷器械を購ふ爲めに、また社業を擴張する爲めに、若干の準備もあつた。併し一度戰爭となるや、國家あつての新聞で、國家と存亡を共にするは此時であると考へたから、予は殆んど最後の一錢までも使用するを遲疑しなかつた。福澤翁は開戰の初め軍費として献金せられたが、予は軍事上の通信に金錢を費すは献金も同じ事であると考へ、其積りで多くの通信員を派遣し、予自らも廣島に出張して、自ら通信を指揮してゐた。予の新聞記者としての四十餘年間に於て此時期程愉快な事はなかつた。今も其時の事を思へば、青春の血が湧く心地がする。

三國干渉と遼東還附

話は飛んで予等は大本營の進轉と共に、威海丸に乘つて旅順に赴いた。予は直ちに遼東半島の旅行を始めた。それは已に馬關條約がほゞ成立し、遼東半島はいよ／＼帝國の領土となる事が確定したからだ。予は旅順から營口、海城、蓋平等と遍歴し、再び旅順に還つて聞けば、いよ／＼三國干渉の爲めに遼東還附といふ事だ。之を聞いた時の予の失望は恐らくわが戀人を他に奪はれたる失望よりも甚しかつたであらう。予は直ちに考へた。此土は是非早晩露國に向つて一戰を試むべきである。また還附したる伊藤内閣は早晩必ず顛覆すべきである。此二つの決心を行つて一切を放擲し、直ちに歸途についた。其時には何にも土産といふものはない、只旅順の埠頭から砂利や小石をハンケチに包んで、之が日本領土の一部であると考へて、それを鞄に入れて歸つたのであつた。即ち之からは予の對象は對露問題であつた。いかなる事があつても露國に向つて一度は日本の志を伸べねばならぬと觀念した。それと同時に遼東を還附するが如き伊藤内閣はかゝる目的を行ふに最も不都合なる内閣であるから、屹度之を倒すべきものであると決心した。

松隈内閣成立の肝煎

予には戰爭以前から已に一個の考案があつた。それは伊藤に對抗するには大隈より外にない。併し大隈では通用せない所が多い。故に松方大隈の聯合を以て當るより外はないといふ事であつた。予は本來大隈侯の崇拜者ではなかつた。併し大隈侯が條約改正失脚以來、政府が大隈侯の樞密顧問官を奪ひ、侯に向つて男らしくなき干渉を試み、甚しきは其糧道さへ斷たんとするを聞いて密かに憤慨した。義侠心といふ譯ではないが、かくまで虐めるなら此方でも大隈を援けて是非一度遣らせて見たい。外國人を怖がらぬ政治家は日本では大隈だ。此人が外務大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

臣になれば、自然自主的外交も行はるる譯だと思ふた。其爲めに松方公の三田邸と大隈侯の早稲田邸の間を往來した事は頻繁であつた。曾て伊藤公が予にいはれた事がある。松方が戰時中大藏大臣として意見書を出したものに『何を以て輿論の法廷に見えんや』といふ文句があつた。之は普通の役人の書く文章ではない、必ず德富が書いたに相違はあるまいと論議したが、果して君が書いたゞらうといはれた事がある。實は松方公が伊藤內閣に居られるのは、松方大隈の聯合內閣を希望するものにとつては、極めて遺憾の事であつた。然るに事は思ふ通りに運んで、松方公は伊藤內閣を去り、明治廿九年五月、予が世界漫遊の際には京都にて大隈松方の會見が行はれた。予は之を見ていよ〱日本を去つた。予は予が一個年間世界を漫遊して歸つた後に、此聯合內閣が成り立つべきものであると考へてゐた。處が明治廿九年の八月、予が倫敦に着して間もなく、下宿屋でタイムスを見たら、伊藤內閣辭職の電報が載つてゐる。そこで予は同行者を日本公使館に遣り、其事實を確かめさせたが要領を得ない。かくて歐羅巴大陸旅行の途に上つたが、ベルンに於て第二松方內閣出で來り、大隈侯が外務大臣となつたといふ事を知つた。而して予は恰も掌中の珠を失うた如く多大の失望をしたのである。それは予の觀る所では機が未だ熟してゐなかつた。いはゞ此內閣は月足らずの子である。其成長の程が覺束ない。多年の苦心も、今は水泡に歸した。寧ろ此際には悠々と歐羅巴を廻り、また倫敦に滯在し、出來得べくんば其渦中に遠ざかつてゐた方が最善の方法であらうと考へた。處が明治卅年の二月頃から、予は倫敦で重病に取り憑かれ、殆んど九死一生といふ場合であつた。實際同行の深井君が、親切に看病して呉れたから助かつたのであらう。生命あつての物種で、予も自ら生きるか死ぬるかさへ分別がつかなかつた。處が日本からは屢々歸朝を促すの電報が來、予が病も亦追々全快したから五月の初め米國經由で、歸途についた。倫敦を去る時分までは非常な衰弱にて、漸く深井君の肩に手をかけて步行した位で、とても此身體では活動社會に入る譯には參るまい。先づ逗子にでも退隱して殘年を送るの外はあるまいと觀念した。處が太西洋を渡つた時には人並の元氣となり、太平洋を渡つて六月の末日本に歸着した時には最早舊時のやうに恢復してゐた。いふまでもなく予が歸つた當時、已に松方內閣の運命は封ぜられてゐた。大隈侯を首領とするの進步黨分子と、樺山高島子を首領とするの薩派——其下には今日の政友會の分子も若干あつた——とは、互に兩立せぬ姿であつた。予はかゝる渦中に投ずるは智者の事ではないといふ事を萬々承知してゐた。併し一個の男子としてわが面目

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を思へば、この狀態を見て、回避すべきでないと決心した。何り譯に云ふが、予は喜んで役人となつたのではない。役人となる事を光榮としたのではない。併し從來の行き掛りもあり、また歐羅巴から考へて來た事もあり、勢止むを得ず役人となつたのである。一言すれば新聞記者として最も自由の手腕を振ふ爲めに役人となつたのである。固より役所の仕事をする爲めになつたのではない。併し内輪の樣子を見て見れば、こゝにも騷動、かしこにも騷動 殆んど手のつけやうがない。自火やら、放火やら、火の手は、處々に騰つて來た。而じて遂に進歩黨の大崩れとなり。大隈侯の辭職となつて、殆んど予の友人共は皆政府を去つた。予一身の爲めからいへば、御多分に洩れず辭職したが一番の得策であつた。併し予は初めから損をする積りで役人となつて、得をする積りでなつたのではない。已になつた以上は最後まで戰ふのは予の義務である。況んや問題は地租の增徴であつて、地租增徴は軍備の增加で、軍備の增加が對露問題解決の前提である。予は地租を增徴して軍備を增加し、軍備を增加して露國に對抗し得る力を備ふるが第一の急務といはんよりも、唯一の急務と考へた。大隈侯も當初は、此れに同意せられた樣であつた。併し世の中にかゝる問題に理解のあるものはなく、予が踏み止まつたのを見て、一概に予を變節漢といふた。恐らくは是れ予が多年頓々拍子に、快馬長鞭得意の地を占めた反動も、手傳つたのであらう。云はゞ予も今や年貢の收め時が來たのだ。古へ柳子厚の境遇も 或は此の邊ではあるまい乎と思ふた。予も本來人に樣々の惡口を浴せかけたから、他から惡口される位は予に於ては何でもなかつた。併しながら予が松方内閣に入つた事、及び踏み止まつた事は予一身にとつては、損得から打算すれば、少くとも十年位は損をしたであらう。即ち爾後十年間は德富の頭には必ず變節漢などといふ文字が冠せられてゐたからだ。併し予一身としては明治卅年の春ほどわが良心にとつて滿足した年はなかつた。予が守歲の詩に、何來天樂徹宵響、松韵湖聲兩不レ知と云ふ句がある。此れは予が心の活描だ、決して負惜みではなかつた。予は之から再び生れ返つて更らにイの一番から遣り直さねばなるまいと心私かに決心したのである。

勝海舟先生と予

此間に於て一言するは勝海舟先生と予が父との事だ。予が父は極めてよく予の心事を諒解して、世間が何といはうと予の進退には最も贊成をした。勝海舟先生は又予にとつては新島先生以外の恩師といふべき一人であつて、予は屢々先生より教を受

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けた。予は先生の令嬢内田夫人の借家に吾父と共に洋行以前東京の過半を過した。即ち家は勝海舟先生の邸内である。いはゞ我等も間接に先生の店子の一人であつた。善にあれ悪にあれ、よく先生を頼りとした。予が大病の時などは吾父は醫者の藥よりも先生の教の方が効能があるであらうといふて、わざ〱其事を先生に願ひ、病氣を癒す藥の代りに文句を書いて頂いた事がある。予は不幸にして西郷、大久保、木戸若くは岩倉等の維新の所謂元勳に接するを得なかつたが、幸ひに海舟先生の教を承ずることを得た。南洲翁は先生に會うて、其人物は測り知るべからず、佐久間象山などの及ぶ所でないと書いて居らるゝが、兎に角海舟翁は、日本が幕末より明治にかけて産出したる一個の偉人でなければ、偉人中の一個であるに相違はあるまい。先生は實に人間學の大博士であつて、家康の相談相手であつた本多佐渡守なども恐らくは先生ほどではなかつたらうと思ふ。予等は父子共に先生から教を受けてゐた。總ての人の門戸が予に向つて閉された時にも、先生の門戸丈けは常に開かれてゐた。先生の予の父に與へられた絶句がある。鶴髮古稀叟、終始唯謹恭、膝下有之子、卓然一蘇峯と。又た「君弱冠以二才學一著二世一矣。夙有二麒麟兒之目一。他日得三大展二驥足一、其所二造詣一不レ可レ測也。」との言もあつた。爾來碌々成す所なく、先生の期待を裏切つたのは、今更ら慚愧に堪えん次第であるが、兎にも角にも先生の知遇を忝ふする事を得たのは予にとつて一の幸福といはねばならぬ。

對露開戰の覺悟

之から後の事は多く語る必要はない。兎にも角にも明治十九年以來卅年まで殆んど何等の蹉きなき所の予にとつては第二松方内閣の沒落は、大いなる痛手であつたに相違はない。殊に其痛手は精神的よりも寧ろ物質的の痛手であつた。かくて明治卅一年の半ばには板垣大隈兩首領の握手となつて、所謂憲政黨なるものが成立した。其時には予の殆んど總ての友人、又松方內閣の最後まで予と共に踏み止まつた友人さへも皆悉く之に響應した。併し頑固一徹なる予は兩首領の態度に慊らず思ふて之に與しなかつた。天下皆之を非として、力行して惑はざるものが少しといふ言があるが、予は自ら信ずる所によつて惑はなかつたのである。予が友人の宗像政氏なども吾社の副社長阿部充家氏に向つて「德富君も今少しく論鋒を和げてはいかゞ」などといふて間接に忠告を試みた程であつた。併し予の目的は外ではない、日本が亞細亞に强國として立つには露西亞と對立する丈けの力を養はなければならぬ。最後に於ては一戰を辭せざる丈

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けの覺悟がなくてはならぬ。之が當時予の政治的信條であつた。いはゞ予の反抗的精神は、今や藩閥もなく、政黨もなく、專ら露西亞に向つたのである。從つて露西亞と同腹であつた獨逸に對して同樣である事はいふまでもない。曾て予が前獨逸皇帝の事を火事場泥棒と書いた爲めに少なからざる問題を惹き起した事もあつたほどだ。

予は伊藤公と地租問題について初めて相見た。伊藤公の事は豫てよく聞いてゐた。それも其筈だ。伊藤公の懷中刀ともいふべき井上梧陰先生は予が同鄉の先輩であつて、議論は常にしたが、冥々の中には、後進たる予に向つて少なからざる好意を表してゐた。從つて伊藤公には直接面會こそせぬがよく知つてゐた。併し予は伊藤公を評論して侮辱罪に問はれた事があるほどで（予自らではないが）隨分公とは逆緣が多かつた。然るに公は第二松方內閣の後を受けて地租增稅の案を提出することゝなつた。云はゞ松方案の踏襲だ。予が主義として、之に贊成するは當然だ。かゝる緣故にて予は伊藤公と相知り、互に顏を見て見れば、思ふたほどでもなく、漸次伊藤公とも親しくなつて來た。井上侯は從來の懇意であればいふまでもない。從つて政友會の組織の當座は予も些か伊藤公の爲めに、一臂の手傳をした。併し予自ら黨人たらんとするが如き志は毫頭なかつた。予は飽くまでも新聞記者として一生を終始する決心でゐた。かくて大隈板垣內閣が潰れ、第二の山縣內閣が出來た時には予も初めて我が志を行ふに足る內閣が出來たと思ふた。山縣內閣に次いでまた伊藤內閣が出來た。伊藤內閣に次いで桂內閣が出來た。かくして予と桂公との關係が初つた。

桂公と予

予は桂公とは從來から知つてゐた。廿七八年戰役の時に、蓋平に於て予は某聯隊長と喧嘩をした。寔に小兒らしき事であるが、予が旅行して蓋平に到り、聯隊本部に彼を訪うたが、彼は鬪排に夢中になつて、予に面會を肯んぜなかつた。そこで予は抗議を申込んだが、彼は却つてそれを怒つたのである。予は癪に障つたから、師團長である桂公を訪うて之を訴へて、而して一夜種々の問題を話した。當時予は桂公に於て、始めて市民將軍を見出した。爾後大隈板垣內閣の末路に於ては、屢々陸軍大臣としての桂公を訪問し、いろ〳〵の政治種を得た事がある。併し桂內閣の出來た時には、予も世人と同樣、緞帳芝居以上ではあるまいと高を括つてゐた。然るに松方侯の紹介で、桂公から求めて來たから會見をしたのである。予は松方內閣の時に深入りして少なからざる手疵を負うたから、自分が役人とな

るは勿論、役人と接觸するは好ましからぬと考へて、成るべく深入りせぬやうにしてゐた。また桂公の缺點は從來耳にタコの出來る程聞いてゐたから、自ら進んで彼と親しくするといふやうな量見はなかつた。昔の人の歌に『一度來い二度來い三度淀川のこひぞ積りて淵となりぬる』といふ事があつて、追々面會して行く毎に隨分話せる男と思ひ、ついにそれとはなしに桂公の爲めに、最も予にとつて有益なる、殆んど予が一生中、尤も油の乘りたる十年の歳月を消磨したのであつた。此間の事は新聞の歴史よりも政治の歴史に屬することで、而かも其歴史は語るべき歴史でないからして、今こゝに之を封じて置くが、兎も角も予が明治卅年に一念を起したる對露問題は卅七八年の役で解決した。予にとつては之ほど愉快な事はなく、予が桂公の爲めに十年の精血を絞つた效果も此一事で盡く酬え得たといふても差支あるまい。

予が新聞記者として最も痛快に感ずるのは明治卅八年九月五日の燒打であつた。此燒打は今尚予にとつて頗る痛快である。予は殺されても遺憾はなかつた。燒打位は物の數かはである。予は固よりポーツマウスの條約を最上とは思はない。併し戰さを始めてからの予の問題は、如何にして戰さを終るかといふでのあつた。ナポレオンでも太閤でも、其失敗は戰さの終局を取り違ひたからであつた。されば兎にも角にも名譽ある平和を贏ち得たのは、戰爭の終局として假令理想ほどではなかつたにせよ、滿足せねばならぬと思ふた。遼東還附の如く、一度條約を締結したものを、また他國の干渉によつてヒツクリ返さるゝなどといふ不面目の事はなく、互に折衝して、讓るべきを讓り、取るべきを取つたのであるからして、其上を得る能はずとするも、それは日本現在の國力としては忍ばねばならぬと思ふたのである。予は卅八年の燒打には何等の遺憾もなかつた。また世間が之に反對して燒打をしたのも無理ではないと思ふた。我が日本國民に、此位の元氣はあつてほしいと思ふた。併し大正二年二月十日の燒打に到つては、予は只當時の桂内閣の捲き添へに逢うたものと思ふて、誠に不愉快千萬に感じた。今も尚しかく感じて居る。本來予は當時の桂内閣の成立には、中心から贊成ではなかつた。

福地・福澤兩氏の回顧

予は福地氏とは文章以外に何等個人的關係はなかつたが、氏が或事件の爲めに、一時、悲境に陷つて跡を社會から潜めて居られた際、漸く氏の有り家を突き止め、氏を築地の僑居に訪ひ、遂に氏を慫慂して「幕府衰亡論」を「國民之友」誌上に掲ぐる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事とした。其時福地氏は、一枚一弗（圓の事）でなければ書かぬと云ふた。其一枚と云ふは十行廿字であつた。當時の原稿料としては其が破天荒であつたかも知れん。併し予は欣然として之に應じた。今日から考へて見れば、氏の作は一生を通じて澤山あるやうだが、若し必傳の作を求めば恐らくは此の「幕府衰亡論」であらう。予は福地氏の作としても之が第一等であると思ふが、同時代に於けるすべての作の中でも尚傑出したる一であると思ふ。之は福地氏の智識、經驗、同情、文藻、四つのものが旨く調和して出來たものである。其立論も自ら公平穩健である。或は些か上辷りした觀察ではないかといふ非難もあるが、併し其のヒネクレず、何處までも紳士的態度である所に福地氏の本色がある。中江兆民君が、櫻痴氏の文を評して、恰も五紋附の羽織に袴を穿き、扇子を握つて白足袋をはき、ソロ〳〵と推し出したやうだといふたやうに記憶して居るが、蓋し適評であらう。予は兎も角も此の「幕府衰亡論」を福地氏に書かしめたることを以て、私かに自分の手柄と信じ、且つ些か福地氏に酬ゆる所があつたと喜んで居る。

明治三十三年の末から四年の初め頃かと覺ゆ。福澤翁は曾て勝、榎本二氏の出處進退に釋然たらざるものあつて「瘠我慢の說」なるものを書き、それを兩氏に示されたることがあつたそうだが、久しく其れを筐中に藏して居たに拘らず、何を感じられたか、其れを當時公にせられた。勝先生は福翁から返事を求められたに際し「行藏は己れに在り、是非は人に在り、御高見忝く承り置く」といふやうな挨拶であつた。流石に先生だと思つた。然し後進の予としては既に世間に公にせられた以上、それを看過する譯には行かなかつたから、自ら揣らず、「瘠我慢の說を讀む」といふ題にて、予の所見を陳じた。自ら僭して海舟翁に代りて陳じたといふではない。併し翁の意志を忖度すればまさに斯くの如くあるべしと思ふたのであつた。處が其論文は意外にも反響があつた。之に對して更に福澤翁の駁論が出で來つた。翁が自ら筆を執つたか、口授せられたか、或は他人に代筆せしめられたか、それは予が知る所でないが、兎に角翁の駁論なるものが出で來つた。やがて間もなく翁は逝かれた。翁は一度腦溢血に罹られたが、それが若干快くなつて、その間に書きの「瘠我慢の說」が發表されたのであつたが、右に對する予の駁論に答られたる間もなく再び其病に罹つて逝かれたのである。

そこで右の予に對する駁論は、翁の絶筆でなければ、少くともそれに近いものであつたらう。予は今尚予の說を是なりと信じて居る。即ち勝伯が、恭順論を複唱せられたのは、日本國家の

爲めに却つて患なるものと信じて居る。さなくば今日の日本は、或は外國の干渉を惹起したかも知れんと信じて居る。當時に於ては慷慨悲憤の主戰論よりも穩當着實の恭順論を主張する方が大智、大略、大膽、大勇を要したと信じてゐる。一身上の安危からしても、海舟翁の如き立場に立つ方がより危險であつたと信じてゐる。故に福翁の論は、世の愛國に口を藉つて、一身の利達を貪ふ者を戒むるに足る藥石ではあるが、之を直ちに海舟翁に當て嵌むべきものではないと信じて居る。そは兎も角も、予が新聞記者たらんとする雛ッ子の時代に於て予を啓發したる福翁が、最後に於て駁論を惠まれた事は予にとつては光榮といふの外はあるまい。予は生前に福翁とは沒交涉であつたが、翁の長逝に際しては直ちに翁の靈前に向つて一瓣の香を捧げた。

高島子爵と予

予の交遊中、最も不幸なる一人は恐らくは高島將軍であらう。此人は生前毀譽相半ばし、或は蠻勇黨の巨魁とか、非立憲政治家とか、いろ〳〵の面白からぬ評判を受けた。併し多くの薩人中に於て、君は一種の好男子であつた。稅所篤翁は老西鄕の面影は僅かに高島に於て之を見るというてゐたさうだ。河島醇氏は何人にも頭を下げなかつたが、友人としては山本伯、先輩としては西鄕從道と高島子に傾倒してゐたやうだ。予は明治三十年の春、第二松方內閣沒落後は勝海舟翁の家に遊ぶか、さもなければ高島子の所に半日を暮らし、馬鹿噺をして欝を散じてゐた。予が高島子と相知つたのは日淸戰役前であつた。不佞予も高島子を蠻勇一點張りの男でなければ野心滿々たる大山師と考へてゐた。曾て友人が予の事を將軍に話した時に、「德富といふ奴は猿見たやうな奴だらう」といふたといふ事である。併し偶然一見したが、互に終生の交情が成立した。予が明治二十九年洋行する時などは、銀座裏通りの予の下宿屋まで馬車を乘りつけて來たり、途中の持藥やら鞄なども送られた。此鞄は將軍が一度世界を漫遊して歸つて、再び予が世界を漫遊し來つて三たび大西操山の洋行に伴うた。今は行衞が分らぬが、高島子から予を經、大西博士に至るまで三回の洋行をして、三人の主人に使へたものである。鞄としては奇しき運命を有つたものといふべきであらう。高島子は決して利慾の人ではなかつた。只政治家となるには、金持となる必要があると考へて（中江兆民翁の如きも亦同樣であつたが）遂に鑛山事業に手を出した。然るに所謂士族の（新華族の）商法で、其爲めに頸も廻らぬまでになつた。予は曾て予が一友人の外國に在るものから、學校の調達を依賴せられ、故兒島惟謙氏と相圖り、兎も角も高島子に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

相談すべく、紀尾井町の邸に出かけた。兩人應接間にて待つてゐたが、其内部の模様を見るに、何やら苦しさうに直覺せられた。そこで兒島翁と相語つて云ふには、こゝの親爺にいへば否とはいふまい。然しどう考へても氣の毒だ。何とか別に工夫をせようと遂に兩人申し合せて其話を持ち出さずに歸つたことがあつた。高島子の晩年には及ばずながら予も何とか平昔の好誼に酬いたいと思うて、些か骨折つた事があつたが、何事も微力で思ふやうに參らなかつた。但予に對する「國民新聞」紙上の弔詞は予が心から子に手向けたものであつた。高島子は英雄ではなかつたが、其の出來損ひであつた。出來損ひながらも何處やら英雄らしき薫りがした。詰り若い時から、頭を叩くものがなく、我儘勝手に增長したからであらう。それに比ぶれば、川上子は十二分の訓練、修養を經て來た人で、如何なる場合に於ても成功者たる資格があつた。仕事の上の相談相手としては川上子は誠に有用の器であつたが、人間としての面白味は寧ろ高島子に多かつた。予は今でも此の未成品といふよりも出來損ひの英雄の破片とでもいふべき高島子を憶ふのである。

西園寺公と予

予が西園寺公と相知つたのは明治十九年の夏で、未だ「將來之日本」を出版せない前であつた。予は初めて公を高輪の伊藤公邸に訪うた。其邸は今は岩崎男の邸となつて居るが、當時西園寺公は伊藤公の邸に居候をして居られたやうだ。當時の公は實に白面好顏風采瀟洒であつた。頭髮は眞中から分けられて、一本の髮毛さへも亂れてゐなかつた。實に古人の所謂翩々たる濁世の佳公子であつた。而じて其談論風發、實に予を傾聽せしめた。予は初對面に滅多に人には感心せぬが、此若き華族さんは只物にてないと思うた。當今の言葉でいへば全く公に魅せられた。爾來公から幾多の厚誼を荷うた。また、公に向つていろ〳〵の面倒を持ち込んだ事もあつた。併しながら中年以後は、予の政局に於ける立場は、動もすれば公と同じきを得なかつた。其爲めに往々、國民新聞の筆法は、個人的ではないが、政治的に非難攻擊の鋒尖を向けた事もあつた。併し今から考へて見れば、予が一介の書生として東京に來た時に、何等の緣故もなきに公から好意を忝くしたのは、今以て知己の感がある。何とかして酬いんとするが、不幸にして未だ其機會を得ぬ。予は曾て西園寺公を評して、公には英語で三つの I（イン）がある。第一はインテリゼント（聰明）である。第二はインドーレント（無精）である。第三はインデフエレント（無頓着）であるといふたことがある。併し之は今から考ふれば、多少修正するの必要

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

があるやうだ。第一は勿論である。公如き圓満の人は絶無とはいはぬが、當代比類少からう。無精といふていゝか、我儘といふていゝか、之も其通りであらう。併し無頓着ではない。無頓着のやうに見ゆるが、公は公の流儀でなか〳〵頓着してゐる。伊藤公が初めから公に目をかけて、其の衣鉢を相續せしめんとしたのは驚き入つた眼識といはねばならん。併し何やら公は英國のロズベリー卿を聯想せしむる所がある。公が如何なる人物であつたかといふ事は、公が或る程度に於て山縣公の苦手であつた事で想像がつく。

伊藤公と予

予と伊藤公との關係は既記の通りであるが、晩年は隨分親密なる交誼を辱うした。併し予は相變らず伊藤公の政治の批評家であつた。公が朝鮮の統監であつた時、予は忌憚なく公の朝鮮に於ける政策を論評した。當時恰も公は帝國ホテルに在つた。或日秘書官の古谷君が「國民新聞社」に遣つて來て、「至急伊藤公が逢ひたいと云ふから來て呉れ」といつた。予は「只今用事中だから追つて行かう」と答へたが、古谷は「それではいかぬ。是非連れて來いといはれたから、自分の面目を全うする爲めに枉げて同道して貰ひたい」といふた。予も感づいたのである。案の如く伊藤公の室に入れば、公は已に四分の三以上もあけてゐた。其液體が何であつたかは、酒に沒交渉の予は注意しなかつたが、所謂獨酌滿引して居られた。而じて例の調子で眞向から「君は何故に予が朝鮮政策を妨害するか」などと何やら餘程癇に觸つたやうでいはれた。半ば酒が手傳うてゐたに相違はない。而じて「君は誰の言ふ事も聽かぬ、併し親の云ふ事丈けは聽くといふ話だから、君の親爺さんにいひつくるからよいか」といはれた。予も玆に到つて何となく面白味を感じた。それから諄々と予のいふべき事をいひ、公のいはんと欲する所を撼き、やがて別れる時には公は丸で別人のやうであつた。予は伊藤公と接觸するには先づ其反對者として始つたのである。それで公の缺點、弱點は未だ公を見ゝる時から百も千も承知してゐた。併し公と接見するに至つて、相見る事の遲かつたのを悔いた。公は明治時代の一大經世家である。政治家などといふのは公に對して失禮であらう。人は其弱點を以て世に繋がるといふが、公に一種の稚氣があつたのは、公に接觸するものにとつては一種の愛嬌であつて、端なく其人間味が曝露したものと見らるる。公が巴爾賓の厄に罹りたる最後の旅程に上らるゝ際には、當時の首相桂公は、國際新聞協會の連中を陪賓として、首相官邸に晩餐會を催した。大隈侯の如きは、滅多に沿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けた事なき燕尾服をわざ〲新調して着けて來たといはれた。列席者は桂、伊藤、大隈、小村、其他内外新聞記者等であつたが、予は久し振りに伊藤、大隈の兩雄がテーブルを隔てゝの舌戰を見た。凡そ世の中に面白き角力はあるが、テーブルの上に於ける伊藤大隈の太刀打ちほど面白いものはなかつた。桂公は伊藤公の爲めに祝盃を擧げられたが、何人も大隈侯の爲めに祝盃を擧ぐるものがなかつたから、伊藤公は特に起つて、大隈侯の爲めに祝盃を擧げられた。思ふに之が兩雄の最後の別れであつたらう。伊藤公は餘程滿足されたと見えて、外人の客の歸り去つた後までも居殘り、予は我同業記者の望みに任せて、メニューの裏に少からざる公の署名若くは揮毫を求めた。中には使ひ古るした手巾を出してさへも請めたものがあつたが、伊藤公は之は困るといふて頸を振られたけれども、予が斷つて折角の事だからといふたから、いよ〲書く氣になられた。扨て何を書からかといはれるから、「豪氣堂々橫大空の詩は如何でせうか」といふたら、「あれは少壯の作だから面白くない」といはれ「それなら滿目江山帶夕暉の詩は如何でせう」といつたら早速それを書かれた。今から思へば何となく讖をなしてゐるやうだ。其後いよ〲伊藤公の出立せらるゝ際には、大磯まで出掛けて送つたが、何やら心殘りがあるやうに覺えて、更に國府津まで見送つて別れた。之が最後の別れであつた。

大隈侯と予

予は第二松方内閣沒落後、大隈侯とは殆んど十個年も交通を中絶してゐた。大隈侯は寛大の人だから別に何とも思ふてゐなかつたであらうが、予は正直にいへば、大隈侯に對して不平があつた。それは松方内閣の沒落後、予は大隈侯に一書を與へ、「予も思ふ丈けの事をして、いよ〲閑散の身となつた。之からは此機會を利用して讀書講學大いに修養する積りである。尙時々御示教を仰ぎたい」といふ意味であつた。之は全く予の誠心誠意から出た言で、政論の異同に拘らず、從來の情誼を考へて、かく我が心事を告げたのである。然るに此手紙の意味が頗る曲解せられて或新聞に掲げられた。今から考へて見れば、例の明けつ放しの大隈侯であるから、「德富が斯う云ふ事をいふてやつた。彼も餘程弱つて居るだらう」位の話をせられたのであらう。それを聞いた新聞記者が勝手に尾鰭をつけて曲解したのであらうとも思はれぬ事はない。併し予はそれ以來大隈侯と不通であつた。併し十年も經つて尙不通であるといふ事は、如何にも遺憾であつたから、或る招待の日に出かけて行つた。而して園内を歩いて居る中に、ヒヨツコリ出逢ふたのが故大浦子爵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であつた事とは珍らしい」と此方からいへば、向ふからも「之は珍しい」といふた。兎に角互に意外であつたに相違はない。大浦子も「こゝは滅多に來る處ではないが、今日は兎も角もやつて來た」といふた。予も亦同樣の答をした。爾來幾もなく侯とは舊交を恢復した。素より第二大隈內閣の當時は、相變らず猛烈なる批評を加へた事はあつたが、政治上の事は政治上の事として、晩年に及んでは、殆んど當初の如く親密になつた。而じて、敎育問題、歷史問題、文明問題などについては、其趣味が共通したから、屢々同じ演壇に立つた事があつた。詳かにいへば、吾社の催し每には大隈侯の臨席を乞うた。而じて如何なる場合も吾社の乞ふ所に向つて殆んど否といはれた事はなかつた。予は大隈侯の病床に向つて、侯が愛せられる所の蘭を贈つた。之が侯に對する所謂一片の芳心であつた。侯についての評論は今茲に試むるまでもなく、實に侯が去つて以來、世の中が如何に淋しくなつたかを思へば、侯の一身が如何に社會の多くの場面を賑はしたかゞ分る。

山縣公と予

予の最も幸福とする一は、山縣公を親しく知り得た事である。予は不幸にして維新の三傑を知らぬが、山縣公は少くとも當代に於て超群絕倫の一人であらう。公は予が公を德川家康に比したのを不平として、「己れは家康ほどの知者ではない」と其秘書官入江君に語られたといふ事が、入江君の近著に見えてゐる。併し其近著を讀めば、公に親炙したる入江君も寧ろ予の評に裏書をして居るやうだ。公は人間として最も複雜の機關であり、且つ最も精巧の機關であり、而じて加ふるに堅牢の機關であつたらしい。公は最後まで新しき人であつた。家康は七十五で逝いたが、年齡からいへば、公は更に十年を加へてゐた。公は「國民新聞」の多年の愛讀者であつた。小田原に居られる時分、特に神奈川版と東京市內版とをとつて居られた程であつた。公の傳記は已に編輯に着手せられてゐるから、定めし立派なものが出來るであらうが、予は公の生前に、公よりしてあらゆる公に關する公文書を授け見せしめられたから、他日「近世日本國民史」が明治の時代に進む時には、必ず之に憑據する所多からうと信じてゐる。

桂公と予

桂公についてはこゝに云ふ必要はないが、只公の傳記が予によつて完成せられたのは、予が公に對する最後の義務を些か盡したやうに思ふ。併し公の傳記が極めて短かき歲月と、極めて僅

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少なる經費とによつて出來たのは、一は予が補助者諸君の勞でなるが、最も多しとすべきは故桂公爵夫人が、あらゆる公爵に關する書類を無條件に開放して予に示されたる結果といはねばならぬ。兎も角も如何なる缺點があるにしろ、桂公爵傳は今後明治大正の政史を編するものの見逃し能はぬ一であらう。予は大正六年支那に赴いたが、當時の首相段祺瑞氏に向つて、御身は果斷猛決の人として評判せらるゝから今少しは桂公の圓滿包容主義をも參考せられたらばよからうというて「桂公傳」を送つたが、段祺瑞氏よりは有名なる「三希堂法帖」を返禮として送つて來た。之は或は鰕で鯛を釣つたかも知れん。併し桂公は伊藤山縣に次ぐ政治家であつたことは間違はない。公は晩年全く平民主義化していよ〳〵草鞋を著けて行脚する決心であつた。其志が遂げずして、其儘逝かれたのは甚だ遺憾といはねばならぬ。

井上梧陰先生と予

予は我が同鄉の先輩であつた井上梧陰先生とは、本來同鄉といふ以外に何等の關係もなかつた。學統の行き掛りよりすれば、寧ろ互ひに反對黨であつた。併し、予が未だ東京に出で來らさる以前から、予の文章を見て盛んに吹聽せられたやうだ。或

は元田先生に向つて、或は伊藤公、山縣公、松方公等に向つて。予の從兄藤島正健なども井上先生から予の事を聞いて、初めて予が何物たるを知つたといふ事であつた。處が井上先生は議論家であつて、面會する每に議論を鬪はしめた。予は此人は學者でもあり、論客でもあるが、到底刀筆の吏たるを免がれぬと思うてゐた。然し、それは予が管見であつて、先生は決して刀筆の吏ではなかつた。其功業の一半は緣の下の力持で分らぬが、伊藤公はいふまでもなく、岩倉公に最も信用せられ、又文敎の如きは森子が文部大臣たる際は固より、自ら文相となつた以來、其冥々の裡に貢獻せられた所のものは多大であつた。予は先生の如きものを模範的官人と認むるのである。曾て先生が或る國家の問題について進退を決せんとした事がある。其時に予は私かに先生を訪うて云うた。河童は水の中に居つてこそ河童だ。水を離れた河童は何でもない。先生は明治政府の中にあればこそ先生だ。今更ら民間に下つたとて恐らくは思ふ程の仕事も出來まい。寧ろ此際は思ひ止まられた方がよからうと。有體にいへば予の立場からは寧ろ先生に辭職を勸告すべきである。然るに予の告ぐる所は其逆であつたから、當時先生は、予が故らにかゝる議論を擔ぎ出して先生を試みるのではなからうかと思うたらしい。が、他日先生はいうた。實はちよつとさう思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はんでもなかつたが、親切に斷く自分に忠告して呉れたのは君と志水小一郎丈けであつた。斯くて先生が死に垂んとする時には、予に死後之を公けにせよというて其手稿にかゝる財政論を與へられた。斯くて其遺書には棺側につく一人に加へられてゐた。予は先生の生前には議論の方が多くて互に心事を打ち明けて語る事が少かつたから、先生の厚誼を感ずる事が左程でもなかつたが、先生逝いて後、寧ろ予が先生を知る事の淺かつたのを悔ゐて、今尙隨時谷中瑞輪寺の先生の墓に參つてゐる。而じて之と偶然にも相對したる墓が吾父の友で、予が最も敬愛したる山田武甫翁である。翁は予の知り得る限に於て人格者の一人であつた。予が明治十三年熊本に歸つて以來、十九年東京に出づるまで、また翁が代議士として東京に出で、明治二十六年の初めに、病を押して彈劾的上奏案の決議に加はるべく議場に赴き、やがて倒れたるまで、翁は實に予にとつては二つなき先輩であり、翁も亦年齢の相違に拘らず、予を友人視して何事も予と諮つた。翁の如きは何等赫々たる功名なきも、所謂古人の智名もなく勇功もなき、賢者であつた。故に予は翁の墓を訪ふ時には井上先生の墓にも禮し、井上先生の墓を訪ふ時には翁の墓にも禮してゐる。

また予が大江義塾時代中、予の落寞を慰めたものは有徳先生であつた。予も熊本に歸つた當には、自分ながら予が文章が如何なる程度まで發達せるかを知らなかつた。然し一稿成る每に之を先生に示せば推賞措かず、先生から油をかけられ、不知不覺いよ〳〵勉强するに到つた。予をして新聞記者として今日あらしめたのは先生の奬勵提撕に負ふ所が少くない。

栗原・草野の二君

餘談は頗る長きに亘つたが、予は我が同社の二亡友、栗原君と草野君とを思はざるを得ぬ。此兩人は性格殆んど正反對であつて、栗原君はずぼらの隊長、草野君は几帳面の親玉であつたが、各其長所に於て予の缺點を補ひ、予の事業を援けた事は少くない。栗原君は最も脫線的の男であつたが、併し其中に犯すべからざる節操があり、又機智があり、勇氣があつた。草野君は緊密で、勉强家で、わが分限內の事は一歩も人に藉さず、又一分も忽かにする所なかつた。栗原といへば圓滑其物であつた。難を排し、紛を解く手腕は他人の追隨を許さなかつた。如何なる面倒の事も葛藤も一度君の手を觸るれば無雜作に解決した。草野君は信用其物であつた。君の溫厚朴質なる容貌を見れば何人も君を信用しないものはなかつた。かゝる友人等が如何に新聞記者としての予の仕事を補助したかは予が言葉の盡す限

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りでない。其他にもそれ〴〵予を助けた人は澤山ゐるが、何れも現存の人であるから、今日に之を擧ぐる事をわざと差控へて置く。素より忘れてゐるのではない。

予の最後の反抗的精神の對照は白閥退治

自分が今日最も頭の中にあることは、白閥退治である。白閥退治といつて西洋人に向つて戰さをするといふではない。然し歐米人士が世界を我物顏に振る舞ひ、勝手次第の事をなし、自分達は一切の規律節制の外に超越して、他の人種に向つてのみ縄墨の見を以て彼れ是れ面倒を云ふのは、如何にも不都合であり、不合理であり、不公平であると思ふ。予は子供の時に熊本の士族閥に對し反抗し、青年にして同志社の宣教師閥に對して反抗し、壯年にして藩閥に反抗し、支那閥、露西亞閥に對して反抗した如く、六十の今日に至つて尚此白閥に對して反抗することを禁じ得ない。率直に語れば反抗其物が予の精神であり又生命である。之が失墜せらるる時には、最早や予は此世に生存せぬものである。生存しても生存の價値なきものである。かく常に對手を求めて一生を暮して來た事は、心を太虚に遊ばしめて、從容自適したる吾父淇水翁に比すれば誠に慚愧の至りに堪へぬ。自ら考へて予は到底吾父に及ばぬと思ふが、然し强いて之を改めやうとすれば、予が生命までも失ふ時であるから、而じて予は毫も之を惡事であると思はぬからして、予自身としては之が予の最善と思ふからして、予は及ぶべき丈け世界の爲め、一大平等的運動を起さんと期待しつゝある。眇たる予の言論が何程の功能を爲すか知らぬけれども、予としては世界の各人種間、各民族の間に、少くとも平等の原則を實行せしめたく思ふ。而じて我が日本國民が亞細亞に於ける先覺者として自ら奮うて其急先鋒たらんことを期待してゐる。然るに此の日本國民が白閥の先棒となつて他の人種を叩きつけて廻るが如きは實に不埒千萬と思ふ。故に予は所謂强者と稱する白閥者流に向つては帝國主義を徹底せんと思うてゐるが、少くとも我が日本よりも一歩二歩後れたる人種に向つては之を扶掖し、之を援助し、共に立ち共に歩くといふ方針で行くべきものと確信してゐる。之が予の信仰である。

生れ落ちたる撫園兒

予は生れ落て以來、一家に於て特別待遇を享けた。多くの女子の後に生れたる最初の男子であれば、左もある可き筈だ。今更ら思ひ廻らせば、父母の恩を感ぜずにはゐられない。顧ひに父母の教育は嚴重であり、緊切であつた爲め、驕兒たる不幸を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

免れたが。併し予には特別の事が、普通の事に考られ、家庭の温室に成長したる結果、遂ひに人情の機微に通ずる機會を失ふた。されば山路愛山君の如きは、恒に其の夫人に向て、徳富さんは蒲團の上に成人したのである、彼人には世間の事が諒解せらるゝ筈がないと語つてゐた由だ。

予は山路君が評した程の唐變木ではないが、他の家庭はいざ知らず、予が家庭は、生れて今日に至る迄、六十年來、予に取りては、全く樂園であり、又た樂園であつた。社會的には不幸もあれば、不平もあつたが、家庭的には何等の不幸もなければ、不平もない。予は未だ生れて以來、兩親に對して、不平を感じたことはなかつた。兩親は予が一を望めば、十を與へた、十を望めば、百を與へた。

親の子孝行

予は親孝行といふ能はざるも、兩親は全く子孝行であつた。兩親は予を單に自からの私有物とせず、祖先より供託せられたる吾家傳家の寶物として取扱ふた。此に不平があれば、罰があたる。併し此れが爲めに、予は殆んど人情盲となつた。自から不平なき爲めに、他の不平にも頓著しなかつた、自から不幸なき爲めに、他の不幸にも共鳴しなかつた。予は自から決して同情心の薄弱なる漢とは思はない。併し餘りに順調、滿足、圓滿なる家庭の裡に成長した爲め、他に對して思ひ遣りの出て來る可き端緒を見出さぬのだ。而して小兒から一躍して大人となつたから、遂ひに青春のローマンスなるものも、殆んど一切皆無であつた。随て他人の是等の境遇には、如何に同情せんとしても、薩張り同情する所以が分らない。

人間學と人情學

一言すれば予は苦勞性でもなく、又た苦勞人でもない。此れは新聞社の社長として、恐らくは少からざる缺點であらう。予は人間學を多年研究したつもりであるが、然も人情學は、予に取りては封書だ。六十年の今日迄、世間と接觸して得たる事は、人情の新發見だ。世間では尋常茶飯の事が、予に取りては全く新發見だ。それ程予は人情に迂濶である。此れは前の半生を、父母の寵兒として過し、後の半生を、平和なる家庭の主人として過したからだ。

公的生涯と私的生涯

予の生涯は、戰闘的精神で一貫するが、此れは公的生涯に限つてゐる。私的生涯は、安樂であり、平和であり、呑氣であ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。予は未だ嘗て家庭的の心配なるものを體驗した事はない。況んや家庭的戰鬪をやだ。家は富まなかつたが、——否な事實を語れば、田舍では比較的富家であつて、父が國事に奔走の結果、貧乏となつたが——然も學費は思ふ通りに支給せられた。富貴の甘味も喫せざる代りに、貧乏の苦味も喫せず。父の在せし時は父と妻とが、家務に當り、父の沒したる後は、吾妻專ら之に任じ、予は六十年の今日迄、未だ一度も家計簿を見た事もなく、算盤を手にした事もなく、吾妻より小遣を貰うて、用事を辨する迄だ。一家の主人と云ふが、其實は一家の大なる居候だ。世間で能く内助の功と云ふが、予が全心全力を傾けて、新聞記者として、何等の顧著なく思ふ通りに行動するの自由は、吾妻の賜だ。吾妻は父が予に代りて撰んで呉れたものなれば、又た吾父の賜だ。今更ら吾妻の頌德表を書くではないが、吾妻は文字通りに、否な文字以上に、内助の功を奏してゐる。

一種の泣蟲

予は決して理智一遍の漢ではない。實は性來餘りに情熱が激しいから、せめて理智一遍の漢たらんと、自から努力してゐるのだ。冷酷とか無情とか云ふ事は、予には到底行ふ能はざる事だ。山路愛山君は、蘇峯氏は、其の窮境に陷つた際にも、餘りに我慢が強いから、世間が同情せんとするも、同情心が注がれ難い。世間は君を憐むには、餘りに戰鬪的精神が多いと云ふた。此れも幾分か眞理であらう。予は他人より憐れるを、寧ろ侮辱と感ずる程だ。併し予は本來弱蟲であり、又た泣蟲だ。予は吾母の勇氣の、せめて十分一程もあれかしと、自から祈つてゐる。予は子供の時から、中心にメランコリ(悲哀)の鬼が潜んでゐる。時に何やら心細うなりて、泣たくなることが、屢々あつた。同志社在學中などは、半ば此の鬼の捕虜となつた程だ。此鬼に心●をかき廻はされては、たまらないと思ふから、十重にも、二十重にも、此鬼が跳梁せぬ樣、鐵鎖にて縛つてゐる。併し六十歳の今日でも、尚ほ此鬼は活てゐる。予は決して徹上徹下の樂天者ではない。太陽は我心を隈なく照らすが、尚ほ其の恩光の達せぬ場所が殘つてゐる。

前不レ見二古人一。後不レ見二來者一。念二天地之悠々一。獨愴然而涕下。

と云ふ詩は、宛も吾心の奧底を道破したものだ。予は現今でも、觀瀾亭の欄干に凭りて、夕陽が相模灘に入り、富士山が漸く暮雲に包まれて隱れんとするを眺め、何とも名狀し難き氣持が中心より湧き、涙が自然に吾が臆を濕すを覺へざることが、屢々ある。併し斯る場合には、予は忽ち氣を取り直し、やがて戰鬪的精神で、之を打ち盡せて了ふのだ。

半輪者

予は全人間でなく、恐らくは半人間であらう。予は片輪者であらう。併し予を片輪者としたのは、予一個の責任と云はんよりも、予が父母の子孝行の結果だ。予の一生には、世間で云ふ戀愛などと云ふ一件に、接觸しなかつた。予は天成の木強漢ではないが、遂いに其の機會を與へられなかつたからだ。故に他人の生きるとか、死するとか云ふて騒ぎ廻る戀愛のいきさつなどには、如何に同情せんとするも、予には其の同情心が出て來ない。小說抔も、讀んで面白く無いことも無いが、さりとて寢食を忘れて讀みたくはない。それよりも予の心を動かすものは、天下國家の大事件だ。若し予に戀愛に對する同情心が湧く時節が到來するならば、そは予が再び人間に生れ代りて來た後であらう。予が大なる文學者となる能はざる所以も、或は若干此の缺點に因するかも知れぬ。

併し如上枚擧した通り、予には家庭の境遇上、人間としての多くの缺點があり、予の教養にも、不足があり、到底片輪者たるを免れぬが、然も予は此の片輪者たるを怍ぢず、片輪者たるを悔いず、此の片輪者たるに滿足してゐる。而して此れも其の大部分は、予が父母の恩である。而して其他は吾妻の予に與へたる三十年間の獻身的奉仕の結果である。繰り返して云へば、予をして頂天立地、自由、獨立なる新聞記者たらしめたのは、吾妻の賜だ。

桂公沒後の予

話頭前に旋る。予は日露戰爭以後に於ていろ／＼自ら感ずる所があつた。何時まで政治家の手傳をしたとて盡くる期はない。椽の下の力持も大抵にしてやめた方がよからうと思ふた。而じて予の天職である所の醇乎として醇なるヂュアナリストの仕事を一層熱心にやつた方が予の爲めにも國の爲めにも利益であらうと考へた。それは明治卅九年支那旅行後最も其考へを切にした。そこで取り敢えず支那から歸つた即日に「國民新聞」の紙面に大改革を施して、從來少數者を相手としたものを多數者を相手とすることゝした。予は支那を旅行して初めてナムバース（數）なる觀念を具體化した。而じてそれを實現したのが即ち「國民新聞」の紙面の變化であつた。併し一度ならず、二度の燒打は賽の河原の塔を積む如く、從つて積めば從つて倒されて少なからざる打擊を受けた。併し世の中には何物も自信力と奮鬪力とに打ち勝つものはない。故に予は失敗に遇ふ毎にイの一番からやり初める意見でやりかゝつた。而じて賴ひにわが

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社中の同志者の協贊を以て其目的を達することを得た。予が最後の努力は桂公を平民主義化することであつた。桂公の同志會創立については予も少からず助力した。之は一は當時の所謂現在の政黨に對しての予が反抗的精神が手傳つたのであらう。政黨に對するには政黨を以てするが最も手近な方策であるといふ事は何人も考ふる所で、當時隨分天狗となつてゐた桂公もついに必然の結論まで押し詰められて來た。

明治天皇の崩御と近世日本國民史の發念

併し有り體にいへば明治四十五年 明治天皇の崩御は日本國民のすべてに多大の影響を與へた如く、其中の一人である予にも非常なる影響を與へられ、是非不肖ながら予は 天皇を中心としての明治時代の歴史を書いて見たいといふ考を切にした。幾もなく桂公も死んだ。桂公の逝かれたのは正直にいへば予にとつては、一方に於て少からざる悲歎であつたと同時に、他方には予に於てセンス・オブ・レリーフであつた。即ち何となく重き荷を卸した心地がした。桂公が存在すれば、予は公を勸めて政黨化した行き掛りからして、否でも應でも公の政治運動に力を藉さねばならぬ。併し公が已に逝いた後は最早や相手はない。此上は今更ら新しき仲間を求むる必要もない。天は恰も予に再び頂天立地不覊獨立なる天地の一閑人としての仕事をなすべき自由を與へたのである。之を十分に消受するのが予の天職であると考へた。之が即ち予の現在の境遇だ。

二十個年の損失

要するに松方内閣に關係して十年の損をなし、桂内閣に關係して十年の損をなし、初めの十年は、世間の惡評妄評で損をなし、後の十年は自分の勉强努力で損をなし、兎に角長くもなき一生に廿年丈けは損をして居る。されば何とか之を死ぬるまでには取戻して見たいといふが今日の予が精一杯の考だ。故に予は世間一切の事を謝絶して、只予が目的とする所に全力を注いで居る。諺に「母は居らねど子は肥える」といふ事がある。予は新聞記者たるの素養を作つて新聞記者となつたが、經營者たる所の素養を作るに暇あらずして經營者となつた。經營者とはなつたが、實は經營をしない經營者である。予は寧ろ我が「國民新聞」の今日あるを不思議といふのである。予の如き一生算盤を握つた事もないものが社長として、最近三十年、多くの新聞が起つたり倒れたり、看板を替へたり持主を替へたりする間に、兎も角も依然として存立して居り、不肖ながら日本の論壇に一座を占むることを得たのは何たる不思議であらう。併

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し不思議は不思議だが、事實は事實だ。予は今も尚新聞記者ではあるが經營者ではない。又經營者としての抱負もなければ自信力もない。併し記者として我が主義主張を貫徹するに於ては若干經營の工夫を要する。故に予も自から其道の功者とは思はぬが、我が社中の同志者と相談して、予相應の仕事はしてゐる積りだ。

予等が明治二十三年「國民新聞」を發刊したる當時は何人も新聞の經營などといふ事を考ふるものはなかつた。固より其時から多少の人はあつた。現に明治廿二三年頃、陸奥伯は其邸に予及び村山龍平氏を招きて、君等は日本一の記者であり、日本一の經營者であるから、互に相知つて置くがよからうと紹介された事がある。其當時村山君は二人曳の俥で予が榎坂の宅を訪ひ、是非共「朝日新聞」の社説を書いて貰ひたいといはれた事もあつた。「時事新報」などは其時から已に福澤翁は廣告の效能を認めて居られたやうであつた。併し一般には新聞といふものは作りさへすれば自然に賣れて行くものといふやうな考へであつた。今日の資本主義が新聞を支配して來た時代に對照すれば、如何にも今昔の感に堪えぬ。併し日本は廣くある。いかに資本主義が新聞界を席捲したといふても、資本主義でない新聞の存立を許さないといふが如き事はあるまい。予は「國民新聞」が少くとも予の精力の存在する限りに於ては、依然として當初の目的を貫徹して行くことを得るものと信じてゐる。其後の事は神でなければ知ることは能はぬ。

予に最も感化を與へた人々と予の今後の抱負

予の一生を通觀して見れば、最も予に感化を與へたものは何といふても吾父である。其次は吾母である。父母の次には何人であるか、確かにはいひ得ぬが、新島先生、勝海舟翁の如き、其他山田翁、行德翁等の如きもそれであらうと信ずる。而して予が一生の間予をして最も平民的の習慣を好むべく教へたのは予が最初の先生即ち兼坂止水先生である。先生は予が八九才より十一二才までの間、あらゆる勞働を予に課した。草をとること、薪を擔ぐ事、風呂の水を汲む事、米を踏む事、約一里もある市場からいろ／＼の買物をしてそれを擔がしむる事、或は毎晩先生が寢酒を呑む時に德利を提つて其前に幾時間でも座つて居る事、或は先生が一里乃至二里の熊本に夜話に出かける時には、提灯を持つて玄關に幾時間でも睡むさを堪えて其歸りを待つて、先生に伴うて歸る事、凡そあらゆる勞働悉く先生から課せられた。故に予は今日に於ても如何なる場合に身を處して何等不自由を感じない。先生は予を全く土百姓の小倅と同樣に取扱うた

からして、今日までもそれが沁々予の躰に沁みて居る。予の一生の得として之ほど仕合はない。併し此れも吾が父母が、予の爲に、強いて予を先生に托したのであつた。されば此れも詮じ來れば、父母の恩に他ならぬ。予は今五十年を隔てゝ逗子に自炊生活をして居るが、恰も予が十才未滿の時、熊本城の西なる島崎の先生の塾にあつて自炊した事を憶ひ出さずしては居られない。予の年齢は六十であるが、過去の損を差し引けば先づ四十と認めねばならぬ。少くとも他人よりも二十年間は長生するか、左なくば同じ時間ならば二十年間丈けは特別に勉强するか、何れとも此の損失を取り返す必要があると思ふ。今は折角其心持で日々「近世日本國民史」を書いて居る。之も月並的の歴史家の歴史ではない。矢張り新聞記者としての歴史である。過去の事を書くも現在の事を書くも、新聞記者の立場は少しも變りはない。併し予は舊聞記者であると同時に今尙新聞記者である。恐らくは死ぬるまで新聞記者であらう。新聞記者は予の天職である。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國民的新競技 野球・庭球對立觀

團體的競技と個人的競技

橋戸信

（一）

現今我國の運動界に於て、最も多くのフワンを吸集するものは、野球競技を以て、唯一に推さねばならない、又今後に於ても、他に優れたる新遊戯の現出しない限りは、野球の全盛期は限りなく連續する事であらう。併し野球競技が、一般的になつたのは、比較的最近の事であつて、之を過去十數年の昔に比較すると、實に隔世の感に耐へないものがある。

今にその壯烈を喧傳されて居る早慶試合の最後の幕は、明治卅九年の秋、三田運動場に於ける、早大方の勝利を以て切つて落されたのであるが、その頃は、現今の如く入場料を徴集せさりしにも拘はらず、三田の運動場は、立錐の地無しと迄に多數のフワンを集め得なかつた、人數にして漸く四五千位のものであつたと思はれる。然るに今秋行はれたる三田對稲門の第二回戰は、相當な入場料を取るにも拘はらず、切符の賣高は、實に一萬五千を超過して居る、其他招待券やら、無料で亂入した者を加ふる時は、優に一萬七八千を突破したると思はれる。野球の民衆化が、如何に迅速に、且つその範圍を擴大しつゝあるかは、この一事を以て證明する事が出來る。

（二）

野球のフワンが日一日とその數を增して行くと同時に、殆んどこれと雁行的に、世の歡迎を受けつゝあるものは、テニス競技である。熊谷、三神、清水、柏尾などの諸大家が、世界の檜舞臺に於て妙技を發揮し、この小さい日本にも、かゝる優れたる運動家の存在する事を知らしめたる事實は、長夜の安眠を貪りつゝあつた我が庭球界に對して、正しく醒覺の警鐘を亂打し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たるものであつた。之に依りて先づ慶應は起ち、數年後れて各專門學校も悉く硬球を使用するに至つた結果として、今では福田、安部、川妻、太田、原田、鳥羽などの麒麟兒を産み、畏くも攝政宮殿下には、トロフイーを下し置かれて、斯道の奬勵に御留意遊ばさるゝに至つたのである。其他朝吹常吉氏を會長とし、鎌田芳雄氏を專仕常務の職に當らしめる日本庭球協會の事業も、着々として緒に就いて居るから、我國に於ける斯界の前途は、實に洋々として海の如きものがある。

（三）

さて斯の如く共に自然的發達を遂げつゝある兩競技は、今後如何なる對立を爲して、進行するものであらうかと云ふに、私見を以てすれば、これ等の二者は、相互に何等の矛盾、衝突を感ぜずして兼行する事、丁度水の油に於けるが如く、相方相容れないながらも、水は油を乘せ、油は水に從つて流れ、至極滑らかに銘々の進路を取るに相違無いと信ぜられる。併し物の存在するには、其處に何等かの理由が無くてはならぬ、野庭兩競技の共に歡迎せらるゝ所以も、又大に研究しなければならぬ點である。

（四）

競技の性質上からこれ等の兩者を觀るに、野球は現代が要求しつゝある、最も完備せる團體競技の一である。野球選手九人は倦く迄も協力一致、時としては自己を犧牲にして戰友を生かし、時としては自己の信念やら、感情を放擲して、全チームの爲めに盡し、主將の命令に對しては、絶對服從の義務を勵行せねばならない、而も守備の位置に立つや、投手、捕手、内野手、外野手と云つた樣に、悉く分業的に位置を固めて、各自の責任を盡さんとこれ努める。例へば野球競技は、九人の樂手が奏するオーケストラである。その中に一人下手な者があつたりコンダクターの指揮棒に從はぬ者があると、全體の調子が悉く破壞されて了ふのである、故に他人と融和する事の出來ない自我心の强い人や、所謂社會的意識の缺乏せる人などは、如何に優秀なる技倆の所有者であつても、一流の選手として謳歌される事は、全く不可能の事である。

これは私の實驗談であるが、私は幼少の頃から、陰鬱で强情で、さうして可なり捻くれた男であつて、他人を統御するが如き立派な才能も德望も全くゼロの人物であつた。所が青山學院在學中野球選手となつて主將の大任を受け、引續いて早大野球

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

部を建設するに至つて、競技から受くる感化力と、主將としての位置から、自然に受入れる教訓とは、私を何時迄も強情我慢の捻くれ者にして置かなかつた。されど持つて生れた性向の閃きは隨所にその鋒先を露はして、可なり多くの敵を作つたものであるが、併しながら野球を手にせざりし當時の自分をふり返つて見ると、其處には非常なる溝渠のある事を認めぬ譯には行かなかつた。

此に於て野球競技は、現代の社會が要求しつゝある協力一致の精神から出發して、之を行ふ者、之を見る者、之を理解する者の差別なく、隨時隨所に、その精神を宣傳しつゝあるものであると云ふ事が出來る。

（五）

庭球は之に反して何處迄も個人的の競技である。尤も單試合と復試合との二があつて、單試合は、その名の示す如く個人と個人との爭ひであるが、複試合に至ると、二人の味方が、二人の敵に對抗するのであるから、多少團體的の色彩が無いとも云はれないが、庭球競技の最も興味を惹き、又選手の實力を遺憾なく發揮するものは、復試合ではなくて、一騎打ちの單試合に限られる樣である。米國に於て庭球選手の階級を定めるのに、フワースト・テン或はセカンド・テン以下サード、フォースと云つた調子に、先づ第一流の十人、第二流の十人乃至第三、第四流と漸次階段を下して、十人宛の選手を階級づける事實に徴しても、テニスは畢竟するに個人的の競技であると思ふ。

複試合に於ても、敵となり味方となるべき二人は、稍や團體的結合力を必要とするのであるが、これが二人以上に及ぶや否は頗る疑問である。數年前迄、軟球が庭球界を支配して居た頃は、大概五組乃至七組を相互から出して、最後に勝殘る組を有する方が、勝利を得ると云ふ組織で、無論試合は悉く復試合であつた。故に勝つた組は、最後迄奮闘する責任を有して居るが、敗れた組はサツサと引上げて、歸つても差支は無かつた位である。現に私などは早大の野球選手であつたにも拘はらず、庭球の方に頭數が足らぬと云ふので、押川清君と二人臨時に雇はれて高等師範へ行つた事がある。所が折惡しく先方の大將組たる坂野、室月と云ふ素敵もない組と顔が合つて、散々に叩き付けられたと云ふ苦い經驗を持つてゐる。私共は負けると直ぐ早稻田へ引かへして、野球の練習に取かゝつたが、畢竟するに庭球の團體的精神とも云ふべきものは、此の如き範圍を出でさるものであつて、競技本來の性質から云へば、何處迄も單獨本位の競技であらねばならぬ。

（六）

此の如く野球は倶く迄も團體競技として生命を持續し、庭球は一直線に個人的競技としての分野を作つて居るから、その性質に於ても、趣味に於ても、根本から相違する點があるので、兩者は今後と雖も、相互に畑を異にしたフワンを吸集し、一方趣味を別にした選手を多く作り上げながら、數多き崇拜者に擁護されつゝ、運動界を潤歩して行く事と信ぜられる。

されど吾人は更に進んで、これ等個人的競技と、團體的競技の分岐點を指摘し、畢竟人間は單純から複雜へ—單獨から社會へ—個人的競技から團體的競技に赴くべき可能性を有するものである事を論ずるのは、決して無用の事でないと思ふ。

（七）

スポートの起原は、人類原始時代の日常生活その物である事は、今日に於て動かし難き議論である。即ち原始時代の人類は、石や槍を投げ、或は弓矢を使用して鳥獸魚類等を捕え、又は物陰に隱れて、餌物の近寄るを待ち、之を撲殺して日用の物資を充たしたものである。吾人の祖先が、數千萬年の昔に行ひつゝあつたこれ等の日常生活は、總て彼等の子孫には、本能となつて現はれて來た、「遊戲的本能」と近代の心理學者の命名したのは即ちこれである。子供が誰れに教へられたと云ふ事なしに、石を投げ、棒を振廻はし、隱れん坊などをして遊び樂しむのは、彼等が遠い祖先から受繼いで來た本能の閃影に過ぎないのである。吾人が長じてから喜んで各種の競技を嗜なみ、又は競技見物に非常な悅樂を感ずるのは、全くゲームの裡に、吾人の本能とシツクリ合致する或物が現出されるからなのである。

（八）

スポートは既にその起原が個人々々の日常生活その物であつた爲め、昔の時代に行はれたる競技は、悉く個人的のものであつた。最近『團體的競技の心理』と云ふ論文を書いて、劍橋大學の博士號を得たるビーネー博士は、國民性と競技とは、實に密接の關係を有するものである事を論じ、希臘の例を引いて次の如く述べて居る。

希臘の競技が、悉く悶拔けて個人的なる事は、實に興味深い事である。此國の競技には、現今の文明國が要求しつゝあるが如き、協力一致の精神を皷吹したものを見出す事が出來ない。これ即ち希臘人が作り上げた社會の反映に外ならないので、彼等は莫大なる敎育機關や體育の設備を完成して、專

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心身心の鍛練に盡力したものであるが、其の設備を運用して行く背後には、無數の異國人や奴隷共の、生々しい血液の滴るのを認めなかつた。換言すれば、彼等は單に希臘の文明を作り上げると云ふ自己本位の前には、何物をも顧みる餘裕が無かつたのである。現今の世界は、正に之と反對のものを要求して居る。吾人の理想とする所のものは眞のデモクラシーであらねばならぬ。卽ち一個人若しくは一國人の發展にあらずして『人類全體の向上』これこそ近代文明の求むるものである。從つて現代人の歡迎するゲームは、この精神を具備化したものであつて、同時に希臘のオリムピヤが、理想とするが如き、完全なる體質を築きたるものであらねばならぬ、云々。

之を以て觀れば、競技は實に社會の鏡である。個人思想の跋扈した時代に、個人的競技が歡迎せられ、協力一致の精神を要求する現代の社會には、個人的のものが漸次勢力を失つて、團體的競技にその座席を讓るに至るは、蓋し自然の趨勢である。

（九）

ビーネー博士に從へば、人類が青年期に達すると共に、社會意識の益す發達するに連れて、異性を愛し、友を求め、進んでは同盟を作り、倶樂部の如きものを形成して自己が崇拜する統治者の監督を望む樣になる。此の如き情緒の發露は、軈て團體的競技を歡迎する意志となつて、漸次その强烈さを増して行くものである。尙博士は、人類が生れてから青年期に達する迄を四期に分ちて、年齡に應じて希望する遊戲慾の分劃を左の如く述べて居る。

第一期（イ）（生れてから三歲迄）「實驗の時代」であつて、物を掴み、蹴り、引掻く時代から、漸次物を落しては拾ひ上げ、砂に穴を堀りなどして遊ぶ。絕對的に個人的で、仲間と遊ぶ事を喜ばない。

同期（ロ）（三歲より七歲迄）「模倣の時代」である。個人的な事は前と變りはない。

第二期（七歲より九歲迄）「別けて個人的の時代」であつて、球を持つて遊ぶ事を喜び、蟲類などを好んで追廻はす。隱れん坊などもこの時代にはよくやるものである。自我意識の發達が頗る目立つて見受けられる。

第三期（九歲より十二歲迄）「競爭時代」で稍や相手欲しやの時代である。對抗的遊戲を好む。

第四期（十二歲より十七歲迄）「團體的競爭を欲する時代」である。この時代には、前の時代に現はしたる對抗性に富め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る個人的傾向を漸次押かくす樣になつて、除々として團體的精神の芽が萠え出て來るのを認める。英雄を崇拜するのも、この時代の特長である。

以上はビーネー博士が、幾多の實驗から、英國兒童の心理狀態を研究したる結果であるが、大體に於て我國の兒童にも適應し得る樣に思はれる。殊に兒童が長ずるに及んで、漸次個人的氣分を脫ぎ捨て、團體的精神の衣を纏はんとする經過は、宛がら人類の原始時代から、今日の文明時代に到達する社會の縮圖を見るが樣で頗る興味が深い。又その欲する遊戯が、社會個人を通じて、個人的のものより、團體的のものに推移する經路が、如何にも自然である樣に見受けられる。

（十）

私は一二年この方、蓄音器に非常に興味を覺え、日本のレコードは申すに及ばず、泰西名家の物も數多く集めて見た。日本物の中には、家庭で鳴らすのが何となく辱かしい樣な卑俗なものや、低級な戀愛を歌つた三千歳、明烏、蘭蝶の類は別問題として、四君子、三保の松、新曲浦島の樣な上品なものもあるが、之れ等を數回聞く中には、何となく單調で、物足らぬ感を抱く樣になつた。西洋ものに於てもさうであつた。カルーソー、ウイリヤム、ジヨンソン、マクコーマツクなど、誠に立派な音聲で、唯聞いた許りで胸が下る樣であるが、段々聞き馴れて來ると、獨唱よりもこれ等壯重なる男性音に、フワラー、グルツク、カルチなどのソプラノを巧みに綜合したるオペラに興味が惹かれて來る。それが暫らく經つと、四部合唱から六部合唱が好きになり、喧囂の中に一種の階調音を認めて恍惚の境に入る樣になつた。オーケストラでも、樂器の方面でも、同樣な希望が際限もなく、私の貧弱なる音樂慾をそゝつたものである。先日來朝せる相對性原理の開山アインシュタイン博士が、日本の音樂を聞いて、原始的である、と批評したさうであるが、この一語は大に味ふべきものであると思ふ。

運動競技に對する趣味も、恐らくこの種の音樂慾と共通な點がありはしないか。單純なるゲーム程、同樣な事を何回となく繰返すが故に、之を見物する立場から云ふと興味が少ないもので、それが複雜になればなる程、多くの趣味が雜然として沸いて來る譯である。野球競技が、他の個人的競技に比して、とても比較とならぬ程多數のフワンを吸集するのは、全くこの心理に外ならぬのである。

（十一）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兎に角野球競技は、現代のゲーム中で、可なり面白く、且つよく出來て居る競技である事は、動かし難き事實である。而もその試合を行ふ人々は、之を精神的にしては、知らず〳〵の裡に、協同一致の精神を涵養し、之を物質的にしては、球を投げ、打ち、且つ走るなどあらゆる種類の筋肉運動をしなければならぬ。劇を綜合藝術とするならば、野球は實に完備せる綜合運動と云ふ事が出來る。

されど私はこれ等の理由によりて、必ずしも野球萬能を唱えんとする者ではない。何となれば吾人が運動を行ふ場合には、勢ひ四圍の狀況を考慮の裡に入れねばならない。即ち血氣正に旺盛の青年に取つては、テニス競技は稍や女性的で、物足らぬ憾はあるが、稍や老境に入れる人々や、女性又は體質の餘り烈しい運動に適せざる青年男子に取りては、これ程恰好なよい運動は、他に見出す事が出來ない。又野球競技を行ひ得る程十分の廣さを有せざる場所にありて、或は短時間にリフレッシユメントを得んと欲する多忙の人に取りて、テニス競技の存在は、實に天賴の福音と云はねばならぬ。

されば私の結論は恁うである。野球には野球の特長あり、テニスにはテニスのよい所が多い。而も兩者は競技の性質上、行き方を異にして居るから、假令優劣はありとするも、一方が盛んになるが爲めに、一方が亡びて了ふと云つた調子のものでは決して無いと思ふ。健全なる國民を作り上げる上に於て、吾人はあらゆる機會を利用して、これ等兩者を共に奬勵し、共に推擧することを怠つてはならぬのである。

野球庭球は共に、國民的遊技たらんとしつゝあり

横井春野

▼野球は、云ふ迄もなく、米國の國技である。米國が、未だ英國の植民地であつた時代に、ワン、オールド、キヤットと云ふ遊戲があつた。この遊戲は、アブナー、ダブルデー氏の考案に依つて、種々改良せられ、一八三九年に至つて、野球技が生まれたのである。

時恰かも我が天保十年、所謂大御所時代の天下太平の夢破れんとする時代の一轉期に當つてゐた。野球競技の規則の基礎が定まつたのは、一八六四年であつて、夫れより、十年たつて、

一八七三年、明治六年に、野球技は、太平洋をこえて、我が日本に輸入せられた。

野球技は、明治六年に輸入せられて以來、明治三十八年に、早稻田大學野球部が、米國遠征の壯圖を決行する迄三十有餘年の間、我が國に於ける野球技の進歩は、遲々たるものであつた、野球技に、趣味を持つものは、一部の學生に限られ、學生以外の者は、野球技の如何なるものであるかをも知らないと云ふ狀況であつた。

▼明治三十八年の早大の米國遠征!!　夫れは當時の人々には、青天の霹靂と響いたのであつた。此遠征はやがて、我が球界に、一大刺戟を與へ、野球技は、科學的に研究せらるゝに至つた、米國遠征より歸朝せる早大の橋戸主將は、最新野球術の一書を著した、この著書と早大選手の地方コーチにより、科學的の野球は、恐ろしい速力で、全國に、擴がつた。

早大の米國遠征が、動機となり、早慶兩大學は、數回米國遠征を企てた、明治大學も一回米國遠征を企てた、米國からも、大學チームが屢々我國へ來征する。米國からも職業野球團の來訪することも既に三回に及んだ、かくして、日米兩國の野球交遊は、密接になつた、野球交遊が、日米親善の上に齎した効果は、頗る大なるものがあつた。

▼今や、我が野球技の發達は、米國に比して、遜色を見ない程度に至つた。早稻田、慶應、明治の三大學、三田、稻門大每の三チームは、米國の第一流の大學チームに比して、優るとも劣らぬ程度に達した、云ふ迄もなく、米國には、職業野球團がある、アメリカン、ナショナル兩リーグより組織せらるゝ大リーグ、其下に、Aクラスから、Dクラスに至る澤山の小リーグがあり、各リーグのクラブに屬する選手は、野球を以て衣食してゐるのである。其他半職業（セミプロフェショナル）のチームは、數へ切れぬ程ある、米國の大學チームは、職業選手に比すれば、遙かにく技倆が劣つてゐる。我が國の、代表チームが、米國大學チームの一流チームにひとしいと云ふことは、我が代表チームの技術が、米國職業野球團選手に及ばないことを物語るものであるが、彼れは、職業チーム、我は、非職業即ち素人（アメーチア）のチームであるからして、夫れは致し方ない。

技術其ものに於ては、米國の職業團チームに及ばないにせよ、野球技の理論（セオリー）に於いては、決して彼れに劣らないのである、早大遠征後僅かに、十五年の短日月に、かく異常なる發達を見たことは、米國人の驚嘆する所である。

大學チームを中心とする、我が野球技は、先ず頂上に達したものと見なければならぬ。職業野球團が、幾つもく組織せら

れるに非ればﾞ、現在以上に、技術の進歩は、容易にのぞまれない。芝浦運動協會に、職業野球團が、組織せられたが、之れが立派に職業野球團の目的を達する迄には、猶前途遼遠である、

以上略述した如く、我國現在に於ける野球技の實力は大學チームを中心とする球界としては、殆んど頂上に達したのである。

技術の進歩に伴つて、野球技の普及したことも、驚く可き現象である。早慶戰が、滿天下の青年の熱血を沸騰せしめた、明治三十八九年の頃野球試合場を回顧してみるに、見物の殆んど全部は、學生であつて、學生ならざる見物人は、殆んど月夜に、星をさぐるが如く、寥々たるものであつた。婦人の見物人の如きは、夢にも之を見ることが出來なかつた。

早大遠征歸朝後、學生以外のもので、野球チームを組織して經營するものも生じたが、夫れは、早稲田、慶應附近の者に限られて、一般に「野球は學生の見るもの、學生のなす可きもの」と見られてゐたのである。

然るに、十五年後の現在は如何、野球技は、學生の專有物ではない、會社員も、職人も、活辯も、職業の差別なく、年齢の差別なく、野球を樂しんでゐる。男子のみならず、女子の間にも、野球チームが組織せられるに至つた、名古屋、水戸、仙臺の高等女學校には、堂々と野球部が組織せられた、高松、濱松などには、藝妓の野球チームが組織せられた、高松では、縣會議員對藝妓チームの試合が、行はれたと云ふ樣な報導さへ受けとると云ふ狀況である、總ゆるものに對して、頑迷なりと云はれてゐた、軍隊へ迄野球熱は、侵入し、各兵營内に於ては、休日毎に、野球試合が行はれると云ふ有樣になつた。隨つて、野球試合場のスタンドを占有するものは、社會各階級の人々であつて、昔、スタンドを占有した學生は、今では、見物人中の、小部分を占むるのみとなつた。

▼現在、野球技は、我がナショナルゲームとなつたのである。古來、相撲技は、我國のナショナルゲームと云はれたが、今やナショナルゲームたるの地位を、外國傳來の野球技に奪はれんとしてゐる。恰かも、外國傳來の佛教が、日本固有の神道なるものを壓倒した如くに。

芝浦職業野球團選手、法政及び立教大學の選手は、昨年の夏滿鮮遠征に出かけた、芝浦の職業野球團選手が、大連に滯在中、東京大相撲の栃木、大錦一行が、大連で興行してゐた、野球團がくるや、相撲の見物人は、著しく減少した、「夫れは、相撲も見たいが、相撲のハネル迄相撲場にゐると、野球試合の見物が出來なくなる。野球試合見物には、かへられぬから、相撲の方は、御免蒙らふと云ふ」のが原因であつた、相撲興行人は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

非常に狼狽し、野球試合が始まる迄に、相撲をハネル事にして僅かに、人氣をつないだと云ふことだ、特別の角狂は、別として、一般の人は、「相撲と野球を同時に見なければならぬ場合には、相撲を捨てゝ、野球を見ると云ふ傾向になつてゐる。

東京大阪兩協會の力士は、夫れ〱野球チームを組織してゐる、力士が、地方巡業をしてみると、土地に依つては、力士野球團に人氣は、集るが、本職の相撲の方には、藤張人氣がつかないと云ふことが多くあるさうだ、先年、シカゴ大學野球團が來朝した時、たま〱國技館の夏場所と衝突した、夫れが爲め、例年になく、國技館への客足は、鈍ぶつたことがあつた。

以上は、一例をあげたに過ぎないが、野球技が、相撲の地位を奪つて、我が國民的遊技(ゲーム)たらんとしつゝあることは、疑ふの餘地がない。

近き將來に於いて、設備の完全なるグランドも出來るであらふ。職業野球團も、現在の日本運動會のもの以外に、幾つも出來るであらふ、國民は、階級の差別なく、年齢の別なく、野球技に親しみ、或時は、球を手にし、或る時は、試合の見物に、いそしむに至るであらふ。

▼野球技は、今や、國民的遊技たらんとしつゝある、芝浦に於ける三田稻門戰へは、一萬五千のフアンが押しかける。庭球は之れ程の人氣はない。けれ共、普及と云ふ點に於いては、決して野球に劣りはしない、

野球は、練習に、廣大なグランドを要する、狭い場所では、練習はもとより、キヤツチボールさへも出來ない。之れに反して、庭球は、コートさへあれば出來る、コートは、野球に比すれば極めて狭い空き地で間に合ふ、日本は、山國である、山間僻地へ出かけては、廣いグラントは、到底えられない、けれ共、庭球コートを作る位の土地を得ることは差して難くはない。私は信州、飛彈の山深く、旅行した時、四方山又山でかこまれた山村の小學校に、庭球コートがあり、村の青年達が、ラケツトを握つてゐるのを見て、庭球術の普及の大なるに驚いた、山國信州は、運動王國である、昔から、野球の盛んな所で、山又山の中に小學校のグランドで、少年、青年がボールを投げ、バツトを握つてゐるのを見て、感嘆した私は、ボールを練習する場所を作る餘地のない山村に於いて、テニスコートを見て、非常に愉快に感じた。私は、旅行が、好きで、最近に、北陸、關西、奥羽の各地方を歩いた、私のみた所では、庭球は、野球以上に普及してゐる。夫れは、地形上、野球グランドを作ることの出來ない所でも、庭球コートは、作ることが出來るからである。

▼我國は、久しく、軟球を使用した、早大、慶應、商大(當時

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は高商）高師の四大雄鎭の爭覇戰は、明治三十八年から、四十二年の庭球界の花であつた。三十八九年頃には、關西の庭球は、關東の庭球の足元へも追つつかぬ狀況であつた。早大庭球部の第一回關西遠征當時、關西諸校は、早大の鋭鋒に蹂躪せられたのであつた、其後關西の諸校の實力も、大いに向上し、關東に匹敵するに至つた。

云ふ迄もなく、軟球は、日本式庭球であつて、世界と云ふ舞臺には、通用しなかつた、慶應は、日本の諸學校に先んじて、硬球に入つたが、他の諸校は、之れに追隨しなかつた、軟球に覇權を握つてゐた早大は、一部先輩の忠告もしりぞけて、軟球を固持してゐた。

けれ共、運動競技は、日々に國際的になつて來た、我が庭球界のみが、世界の大勢に逆行することは、許されない、德川三代家光が、寛永年間に、鎖國令を發布した時、家光は、「將來開國の時來ることを」豫期しなかつた、德川幕府は、專制政治のあらゆる威權を活用して、鎖國を維持せんとした、けれ共、嘉永六年、北米合衆國水師提督ペリー、一度び我が浦賀を訪ずるゝや、鎖國策は、終ひに、破られた、これと同じく、我が庭球界が、軟球を固持して、庭球界の鎖國を維持せんとしても、夫れは、不可能であつた、終ひに、大正十年の秋、早大、商大、商師は、一齊に、硬球を採用することになつた、之れが、動機となつて、關東關西をとはず、苟も、大學、專門學校の庭球部は「硬球を採用せざる可らず」と云ふので、硬球に、かはつた。

庭球術が、野球以上に普及してゐるに關らず、野球に比して其人氣に於いて著しく劣る一因は、我が庭球界が永く、軟球に固持したにある。

我が庭球界が、永く軟球に固持した結果、對外試合を行ふの機會が無かつた、狹い國內で、蝸牛の角の爭ひをしてゐた爲めに、庭球は普及したが、庭球熱は、向上しなかつたのであつた、諸大學の對校野球試合が、入場料を徵集して、其費用を以て、不完全ながらもグランドの設備を改善しつゝ來たりしにも關らず、庭球は、猶其域に達しなかつた。

清水、熊谷、柏尾三選手が、世界の庭球舞臺に活躍し、特に清水、熊谷二選手は、デヴィスカップ戰に、米國に肉薄したと云ふことは、日本庭球界を世界に認めしたのである、けれ共、我庭球界は、全體として、硬球に入つた月日が淺いので、之を諸列强に比すれば、猶不及の感を深くせざるをえない

▼野球に於いて、米國の大リーグのチームを擊破することは、到底及びもつかぬことである。然るに、庭球に於いては、世界の選手權を我國に、獲得すること決して難事ではない、熊谷、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

清水兩選手の活躍は、近き將來に於いて、デヴイスカツプを日本の手中に收めるの難からざるを證してゐる。現在、諸大學には、前途有爲の選手が多い、之れらの選手諸君が、孜々として技を磨くの時、庭球選手權は、日本帝國の掌中に入るであらふ。

之を要するに、今後の我が運動界は、野球と庭球が其中心となるであらふ、近來著しく勃興して來た陸上競技、或ひは、ア式ラ式の蹴球も、益々盛んになるであらふが、國民的遊技(ゲーム)の中心は、野球と庭球が占めるであらふ、庭球は、普及の程度に於て野球に優つてゐるが、所謂人氣は、野球に及ばない、けれ共我が硬球選手の技術進み、對外試合を頻繁に行ふに至らば、庭球技の人氣も必らずや沸騰するであらふ。

古今五千年の青史を通觀するに、「よく仕事を勵み、よく運動する國民を有する國家は」必らず强大となる、由來、現代日本國民は、運動競技に冷淡である、これ吾人の國家將來の爲め、最も憂うる所である。

我が國民が、日増に運動競技を理解してきたこと……國民の多くの者が、野球、庭球の如き近代的遊技(ゲーム)に、熱心になつて來たことは、吾人の最も欣喜する所である。

野球界・庭球界の十人男

一運動記者

野球界の十人男

日本野球界に活躍してゐる大選手は可成に澤山ある、其中から、十人を拉し來つて、寸評を加へることは、困難な仕事である。記者は、最近雜誌野球界が、讀者から募集した「全日本チームの組織」を參考とし、いさゝか愚見を以て之れに參酌を加へ、現代球界の十人男を左の如く決定した。

(大毎)小野選手、(大毎)森選手、(スター)加藤選手、(慶應)桐原選手、(慶應)山岡選手、(早大)田中選手、(早大)久保田選手、(早大)谷口選手、(明大)梅田選手、(法政)疋田選手

(1) 大毎小野投手

先き頃來朝した全米野球團選手フレツド・ホフマン氏は、(日

本一の投手は誰れか」との記者の問ひに對して、「小野と谷口の兩君共に日本一と云ふにふさはしい」と答へた、小野投手は、鎌倉師範在學中既に非凡の技を認められ、慶應大學の選手となつてから、「天下一の名譽」を得た。

小野君のスピードボールと、得意のドロップカーヴと、正確なるコントロールは、日本球界の一偉觀である、加ふるに、駈け引の巧妙なる又と得難き「力と術」を兼ね備へた好投手である。よしや、相手が必死になつていなかつたにせよ、世界一の大選手を向ふに廻して、其打撃を封じた芝浦の健鬪は、日本球界の誇りであつた。

投手の壽命には、自ら限りがある。とは云へ、小野君は、校門を辭してから、一年一年と、其物凄さを增して來た、之れも一奇蹟と云ふてよい、圓熟せる小野君の技は、猶永く、續くことであらふ。

小野君の打撃は、正確ではないが、當れば、大きいのが飛ぶ。時折りホームランを飛ばして、膽つ玉の小さいフアンを喜ばしてゐる。

(2) 大每の森選手

慶應時代から、小野サンの女房役は、森秀雄君である、小野君は、大膽不敵、小事に拘泥しない人で、大西鄕を聯想せしめないではおかぬ人格の所有者である、之れに反して、森君は、在學時代に家庭教師をして、學資を得てゐた苦勞人丈けあつて、細い所迄氣のつく人である、小野君と森君!! 好配偶である、兩君の氣合は、シツクリとあつて、サインなくとも、間違ふことはない位である。

森君は、捕球も正確だし、肩もいゝ、何しろ投手をやつて、鐵腕を唄はれた人丈けに、二壘へ彈丸のやうな速球を投げて、相手の膽を奪ふ。其上、捕手として、最も大切な元氣が充實してゐる、嘗て、エインスミスは、

「森サンは、良い捕手です、アメリカへいつても、必らず野球の商賣人になれます」

と評した、早大出身の久慈君と共に、日本を代表する捕手である。

森君の打撃は、小野君と同じタイプで、ムラはあるが、大きいのが飛ぶ。

(3) スター加藤遊撃手

スター軍の加藤遊撃手は、五尺二寸の小男昔の九郎判官もかくやと思はるゝ、キビ／＼したプレイヤーである、其昔、横

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

商主將時代既に、名遊撃として唄はれた、早大入學早々、遊撃の難關を承り、日本球界の人氣を背負つた感があつた、今ヤスター軍の主將として、昔にかはらぬキビ〳〵したプレイを演んじて、ファンを喜ばしてゐる、加藤君の守備は、其範圍の廣大なることに於いて、餘人の追隨を許さない。

打撃も、シュアで、ピンチに際しては、必ず打つ、そこに、敵膽を寒からしめる或ものがひそんでゐるのである、現慶應の高須主將も、ピンチに強い打者で、ピンチをのがしたことは、殆んどないと云はれてゐる、加藤君のプレイは、花やか、高須君のプレイは、地味であるが、ピンチに強い點はよく似てゐる。

(4) 慶應桐原遊撃手

桐原君は、加藤君と同じく、身體は小さい、けれ共、守備は鮮かである、安打性の難球をやす〳〵と料して、一壘へ白線をひいたやうな球を投げた時の痛快味は、例へやうがない。

桐原君は、天才的プレイヤーである。餘人が、如何に、練習をつんでも、桐原君の眞似は出來ない。

守備はよし、打撃はよし、走壘はよし、所謂三拍子揃つた好選手である。全米職業團遊撃手レーバン博士は、

「米國一流のカレッヂチームを見わたしても桐原君丈けのプレイヤーは、見當らない」と記者に語つた。

桐原君は、人格の非常に優れた人で、數千の塾生から、兄弟のやうに親しまれてゐる。

(5) 慶應山岡中堅手

山岡君は、早大の田中君と共に、日本を代表する名中堅手である、田中君は、身體が大きい丈けに、莊重の感をいだかしめるが、君のプレイは、迅速にして正確である。山岡君は、身體が肥つてゐない丈けに、君の迅速なモーションは、一際目につく。

君が、中堅を守る時、あの廣い中堅の野に、一寸の隙がないやうに見える、前に強し、後ろに強し、左右に強し、一點の否を見出せない。紐育サンの運動記者オニール君が、

「あれ丈けの技倆があれば、米國職業團に加入出來ます」

と評したのも、決して、お世辭ではない、打撃もよし、走壘もよし、野球選手として、申分がない。

(6) 早大田中中堅手

「ベーブ田中」の名は、遠く北米の野球王國に迄鳴り轟いてゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る「ベーブ」一のいはれは、彼が、尋常人の企て及ばざるホームランヒットを、屢飛ばすからである。ホームランヒットは、アメリカでは珍らしくない、一九二一年に、アメリカの大リーグでは、一シーズンに約千百本弱のホームランが出てゐる、けれ共、日本ではホームランは珍らしい、ベーブ田中君は、去年三十回足らずの試合に出て、十本のホームランを飛ばした、ホームラン率に於いては、ホーンスビイに比して、少しも遜色はない、恐らく我球界に於いて、當分の間は、二世ベーブ田中は出ないであらふ。

ベーブ田中は、昨秋五割二分四厘と云ふ恐る可き打撃率を得た、これ、ベーブ田中の打撃が、圓熟の境に入つたことを證するものである。

打撃の田中君は、守備に於いても、天下の名人である、あの巨軀を輕々と扱つて、難飛球を料なしてゆく技倆は、拔群である、走壘も又巧みである、思ふに、ベーブ田中は、日本球界史上に、特筆大書せらる可き人であると信じて疑はぬ。

(7) 早大久保田遊撃手

全米野球團選手チョージ、ケリー氏は、久保田君の守備と打撃を大いに賞賛し、最後に、

「久保田君は、巨人軍(ジャイアント)の名選手バンクロフトにソツクリである。バンクロフトは、久保田君より、身體が今一廻り丈け大きい丈けです」

と附け加へた。

久保田君は、天才的のプレイヤーではない、多年努力に努力の結果今日の地位をえたのであつて、桐原君とは、出發點を異にしてゐる、けれ共、其守備の巧妙と鮮かなる點に於いては、兩君の間に甲乙はつけ難い。

久保田君の守備は、徹頭徹尾、堅實である、球の扱ひは、堂に入つてゐる、打撃も、頗るシュアであり、暫々大ものを飛ばす、走壘も巧みである。

一時、

「早大の久保田は、卒業後アメリカへ出かけて、職業野球團へ加入するさうだ」

との風説が、ひろまつたのも、君の技術が卓絶してゐればこそである。

(8) 早大谷口投手

大正九年の秋、投手難の早大へ彗星的に出現し、對明治決勝戰へ出て、ワンヒット、シャツトアウトの好成績をあげ、一躍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其名を天下に謳はるゝに至つた球界の幸運兒は、早大否日本球界の至寶谷口投手である。

谷口投手は、野球の天才である、然れ共、體力に於ては、小野投手に及ばない、賢明なる、谷口は、自己の體力を知るが故に、常に新工夫をこらして、強敵の打撃を封じてゐる、人並すぐれたスピードボールのみを武器とはしない、或ひは、スローボールに得意のインカーブ、インドロップに千變萬化、野球道の秘術を活用してゐる。

谷口君が、昨秋三田稻門第一回戰に、新發明の逆ボディースキングを用ゐて、三田軍の打撃を封じたことは、天下衆知の事實である、然るに、三田軍は、之をボークなりと主張し、其極谷口高濱問題を惹起し、谷口君は、其犠牲となり、安部部長より謹愼を命ぜられた、かゝる大事件を惹起した、逆ボディースキングも、全米野球團の來朝に依つて、ボークではないと決した、谷口君は、絶えず、新工夫をして、敵の打撃を封ずる偉大なる投手である、打撃は、大ものは打たぬが、シューアである、相手にとつては、薄氣味のわるい打者である。

球界の至寶谷口君は、早大米國遠征中、兵役の手續に誤りありし爲め、なつかしき早大野球部をさつて、兵隊にゆくことになつた、手續の誤りのため、此不幸を見たことは、同情に堪えない。

(9) 明大梅田捕手

全米野球團ホフマン捕手は、「早慶明三大學選手中、捕手としては、梅田が第一である」と評した、守備の堅實と、強肩とは、梅田君の特徴であるが、吾人をして云はしむれば、投球に、猶幾多の研究を要すると思ふ。

ホフマン氏が評した如く、渡邊投手は、未製品である、荒削りである、奔馬である、アレ狂ふ渡邊の剛球をあれ丈けに科してゆくのは、梅田君ならではと思はれる。

打撃は、正確であり、しかも、猛烈である、明大で、一番打撃の凄い人は、梅田君である。

(10) 法政疋田一壘手

法政軍の主將疋田一壘手は、守備の巧いこと天下一品である、如何なる惡球も、易々と、處理してゆく技倆は、早慶明法立五大學随一である。

打撃も決して惡くない、恐ろしい打者であるが、惜しむらくは、比較的に、缺點が多い、近來缺點を覺えられた爲めに、打

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

擊の本領を發揮することが出來ない、左利打者は、左利投手に弱いとは云へ、谷口投手に對すると、手も足も出ない、これは、打法に缺陷があるからである。

疋田君は、學校の成績がよい、常に優等の成績をえてゐる、卒業後は、法大の留學生として歐米へ派遣せられることになつてゐるさうだ。

庭球界の十人男

日本庭球界の代表選手は、云ふ迄もなく、熊谷、清水、柏尾の三選手である、今庭球界十人男を執筆するに當り、この三選手は、師範役として、寸評を加へず、現在日本庭球界に活躍し、互ひに鎬をけずつてゐる選手の中から、十人を選ぶことにした。

(1) ポプラ俱樂部の福田選手

福田選手は、早大庭球部黄金時代(軟球)の大將で、福田の名は、其頃から、全國に鳴り響いてゐた、熊谷君と共に、世界的庭球選手として其名を謳はるゝ清水君は、高商選手時代に、福田君の爲めに、散々に負かされてゐたのである。

福田君は、生つ粹の早稻田つ兒で、早稻田中學時代既に、庭球界の麒麟兒と謳はれてゐた、生まれつきテニスマンの素質を備へてゐた。

福田選手のやり方は、萬事天才的で、氣持よいものであつた、軟球界に於ける天才福田は、硬球となつてからも、相かはらず天才であつた、始めは、試合振りに熱が足りないとか、踏張りが足りないとか云はれてゐたが、さう云ふ缺點は、昨春以來認められなくなり、今や全く圓熟の境に入つた、昨春、日本軍を薙ぎ倒した加軍ベイツ主將を敗つて以來、押しも押されもせぬ日本第一の大選手となつた、昨秋、全日本選手權試合で、シングル選手權を得たのは、君の技倆として當然であつた、ダブルに於ては、相棒の狹野君の技倆が不足してゐるので、選手權はえられなかつたが、君と同等な技倆をもつ相棒をうれば、ダブルの選手權も、恐らく君に歸するであらう、熊谷、清水、柏尾の三選手を除けば、君は、押しも押されもせぬ日本一の大選手である。

(2) 早稻田の安部選手

昨秋全日本選手權試合で、ダブルの選手權を得たのは、安部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

君と川妻君であつた、安部君は、本邦球界の恩人安部磯雄氏の長男で、早稲田中學の出身である、安部君は、決して、福田君の如く天才肌の人ではない、安部君の今日あるは、全く努力と研究の賜である、安部君の球は、物凄い、物凄いと云ふのは、球の強きをのみ意味するのではない、強球を以て巧みに敵の虚をつく所に、安部君の凄みがあるのである。

安部君は、まだ年が若い。けれ共、君の球が、圓熟の境に入るも近き將來であらふ。熊谷第二世たるの人は、蓋し、安部君ではあるまいか。

安部君は、所謂「艱難人を玉になす」の格言を實際に證據立てた人である、聞くならく、君の母君は、君が試合に出場するの日、「我子の武運長久」を人しれず神に祈つてゐられると云ふことだ。

(3) 早稲田の川妻選手

安部選手の女房役は、川妻君である、川妻君は安部君に對して、好女房役である、安部君のやり方は、天才的ではない。一球々々悉く努力の結晶である、之れに對する川妻君は、小手先きが器用である、如何にも天才的のやり方である。安部君が、得意の緩急巧みなる駈け引きで、敵を九死に陥れるとき、敵にトヾメを刺すのは、川妻君である、現在ダブルに於いては、安部川妻組に双向ひうるものはない。

兩君とも、まだ年が若い、時に、試合に、アガルことがある、これは、年若き人に向つて、咎めることは出來ない、技の圓熟と共に此缺陷のなくなることは、云はずして明かである。

(4) 高師の太田選手

世界的庭球選手熊谷君が、「太田君が、一年熱心に練習すれば、デヴイスカツプの候補者たらん」と評したとは、有名な話である、太田君は、硬球に入つた年限は、淺いのだが、其技には、大家の風がある。

太田君の試合には、熱がある、粘り強い、ころんでも、たゞは起きないぞと云ふやり方である、太田君のやり方を、角技に例へれば、二世梅ケ谷である、アセラズ悠々と、敵とわたり合ひ、虚をみて之れに乘ずると云ふやり方は、諸藝に於ける大家の風がある、然れ共、未だ々々太田君には、若い所がある、夫れは、「力、術に及ばず」と云ふ點である。

(5) 高師の古賀選手

太田君の女房役は、古賀君である、太田古賀組は、台覧試合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於いて、熊谷、木村組に對して、一セット算つた豪の者である、一時、ダブルに於いて日本一と稱せられたが、昨春安部川妻組に敗れて以來、昨秋も、其成績は、吾人の期待にそむいた、夫れは、この組が、弱くなつたと云ふ意味ではない、吾人は、この組が昨秋働いた夫れよりも以上の活躍を望んだからであつた、かくは、評するものゝ、兩君の氣合は、シツクリとしてゐる、今後兩君の奮鬪に依つては、安部川妻組との、覇權爭ひは、庭球兒の熱血をそゝることであらう。

(6) 慶應の原田選手

原田選手は、庭球選手として天才である、しかも、硬球界に於ける故參者である、大正十年秋のオールジヤパンの選手權試合に於いては、傍若無人、群雄を薙で切つた武者振りは、いとも鮮かであつた、力に於いて、術に於いて、一點否とする所ない大選手であつた。

日本一の原田も、昨秋高師の太田に、六—三、三—六、六—〇で破られた、原田は、あらゆる秘術を盡して、太田の强襲を防いだが及ばなかつた、好事魔多し、庭球界の麒麟兒は、この頃に、學業を怠り、よからぬ巷にさまよつたのであつた、夫れが爲め、身體に耐久力なく、折角の技術も、之を活すことが出來なかつたのであつた、原田君不振の原因は、全く茲に存したのである、けれ共、原田君とて、いつ迄も、かゝる境遇にはゐない、今や全く、前非を悔いたと云ふことである、來る春には、捲土重來、鬼神原田の腕前を大いに發揮することであらふ、好漢須らく、自重を望む。

原田君の相棒、木村選手も、前途有爲の大選手である、君が最も當らなかつたのは、去春であつた、けれ共、如何なる大選手にも、不振の時はある。木村君の活躍も是からである、原田君と共に、捲土重來の勢いは、物凄いことであらふ。

(7) 商大の平田選手

北川主將を送りし、商大の主將に平田君が、推されたのは、去年の春であつた、平田君のやり方は、堅實豪放であるが、しかも、未だ、若しの誇りを免れない、とは云へ、平田の着實味と、高商流の堅實の戰法とは、敵膽を寒からしめないではおかない。

平田君は、ダブルに於いては、新進の花武者松田君と組んでゐる、松田君は、若年ながら、前に出でゝは、スマツシングを得意とし、後にありては、よく守るの天晴れの强者である、平田、松田組も、將來頗る有望である、現在通りに、猛練習をつゞ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けてゆけば、デヴィスカップ争奪戰の候補者たる又難くはない。

(8) 神戸高商鳥羽選手

「原田、鳥羽、太田」の三選手は、カレッヂに於ける庭球選手として、シングルに於いては、向ふ所敵なしと、云はれた、鳥羽君は、今春、北米カリフオルニヤ大學庭球軍主將とわたり合ひ、奮戰奮鬪つひに、其首級をあげた、當日鳥羽君が、一寸もくるはぬコントロール、敵の虚をつく、矢つぎ早の攻勢策戰とは、いとも鮮かであつた、昨秋全日本選手權試合に於いて、高師の太田君に、敗れたのは所謂時の運なかりしが故であつて、この一戰に敗れたりとて、鳥羽君太田君より弱しとは云ふことは出來ないのである、熊谷君が云はれた如く、鳥羽君は、新日本庭球界の大立物である。

(9) 關西學院吉田選手

關西學院の吉田、小林組も、新日本庭球界の花形である、關西庭球界のシングル代表者は、鳥羽選手であることに何人も異論はない如く、ダブルの代表者は、吉田小林兩君の組である。

吉田小林兩君は、去秋の東西對抗庭球戰に於いて、關東の安部川妻組に、四―六、六―三、六―三、十一―九で敗れたが、其奮戰は、決して、代表選手として、恥かしくなかつた。勝敗は兵家の常、兩虎戰へば、必らずそこに勝敗がある、負けしもの必らずしも劣れるに非ず、吾人は、吉田、小林組の將來に大なる望みを囑してゐる。

(10) 京大の四角選手

四角選手は、鳥羽君と共に、關西庭球界のシングル代表者である、鳥羽君は、學校の選手、四角君は、京都大學庭球部の重鎭で、堂々たる選手である、鳥羽君のやり方は、飽く迄積極的である、如何なる堅壘も、突破しなければならぬと云ふ勢いがある、力士で云へば太刀光である、四角君は、萬事を打算して、安全の道をたどろうとするやり方をとつてゐるので、戰法が、餘まりに消極的であると云ふ誹りも受けないではない、けれ共、四角君は、老巧である、正確なるコントロールと、得意のネバリとは、相手をいやがらせること夥しい、四角君も、軟球時代既に其名を謳はれた人であるが、硬球に入つてからは、まだ其日は淺い、君の技の圓熟する時は、恐るべきの敵である、君も、元來天才肌の人ではない、努力に努力を以てして、今日の地位を得たのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

野球の強味と庭球の強味

針重敬喜

新しい運動競技が輸入されて、それが幾分か日本化されて我我の間に行はれると云ふ時代は過ぎ去つて、學問や藝術に國境が無いと同じやうに運動競技も國際的となつて、日本特獨のものが次第に廢れて行くやうな傾向のある事は、善悪は別として止むを得ない次第だと思ひます。

　其中にあつて明治年間に輸入せられたもので、現在最も廣く行はれて居るのは野球と庭球とであります、最近にトラツクやフヰールドの競技やフツトボール、ゴルフと云ふやうな種類のものも非常に盛んに行はれるやうになつては來ましたが、トラツク、フヰールドを除いては未だ普く行はれると云ふ譯には行きません、所が野球と庭球とに至つては我が國に傳はつてからの年代が長い爲めでもありませうが、津々浦々まで殆んど行はれない所は無いのであります。一寸した廣場でも偖は往來でもキヤツチボールをやつて居ます。コートを仕切れる位の廣さの所では何所でもラケツトを振つて居る者を見受けます。此勢で行きますれば何所迄隆盛になつて行くか解りません。

　一體運動は人間の慾望の中の一だと私は信じて居ます、斯うせなければならんと教へられてすべきものではありません、自然の衝動によつて起る所のものであります、食慾や性慾と何等の相違もない人間本來の慾求であります、從來我國に行はれて來ました柔道、劍道、相撲、其他云はば武藝十八般と云ふやうはなもの身體を鍛錬する事の外護身、攻撃、更に自己修養の方法として傳はつて來たのでありますが、其根本に於ては人間本來の慾求から起つたものに相違ないのです、それが長い間に其根本が忘れられて單に心身鍛錬の方法としか考へられなくなつたのであります、勿論之等の事も必要ではあり且又重大なる事柄ではありますが、其根本を忘れて只運動を一の道具として取扱つて行く事は間違つて居ると思ひます。

　つまり私は斯う云ふ事を云ひたいのです、運動と云ふものは前にも云つた通り自然の衝動から起るものであるから、最初から目的とか方法とか云ふやうなもの丶存する理由はない、柔劍道が好い、ボキシングは悪い、と云ふやうな事は後から勝手に人が善悪を定めやうとした事である。從つて體力を養成するのが目的だとか、或は精神の修養が目的であるとか云ふ事は更に便

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宜的に付け加へられたものに過ぎないものであります。併しさう云つたとて實際是れを行ふ場合には種類によつては善惡の差別も起きて來るでせうし、結果としては心身を健全にするとか、忍耐力を養ふとか、種々な効果があるには相違なく、又之れを豫想し求めても差支ないのでありますが、運動は初めから單に心身修養の道具に過ぎないと解釋するのは根本を忘れたものであると思ひます。

斯う觀て來ますと心身鍛錬と云ふ事は第二でありまして、人間本來の欲求を滿足させる事が第一であります、是れが即ち運動の眞目的だと信じます、此意味からしまして修養にならぬものがいけないとか、武士道を解せぬ舶來ものはいけないとか、今はもう其麼古い事を云ふ人も無いでせうが、さう云ふ主張は捨てなければならなくなります、自然の欲求ですから、自分の好きなものをやれば好い譯になります、即ち舊來さうで無ければならぬ如く高唱せられた修養本位の運動、修養が根本目的とされた運動よりは、興味本位の運動が自然であり當然であると考へます、それは我々が詩や音樂や繪畫を愛好すると同一な意味になるのであります、但興味本位と申しましても夫れを行ふ事によつて獲る所の利益は、在來の修養づくめの運動法と何等の差違も無い程度、或はそれ以上の効果を收め得るものであります。

大分横道に外れたやうですが、斯う云ふ意味から勃興して來たのが野球や庭球であります、日本在來のものは決して興味が無い譯ではありませんが、聊か片苦しいやうで面白味が少いのであります、運動をやるにしても亦夫れが隆盛になるにも此興味が無いと、あるとでは非常な相違を生じます、例へば運動の一方法として鐵啞鈴が盛んに唱導された時代がありました、一定時間毎日あれを振つて運動する、所が毎日〳〵只一人でやる鐵啞鈴の千篇一律さには如何に忍耐力の強い人でも飽きて來る、之れは興味が伴はないからであります、それから徒手體操であります、私達は小學校であれをやりましたが、チツとも面白く無いので只體操の時間だから止むを得ずやると云ふ丈けで義務的にやつて居るやうなものです、之れも面白味が無いからであります、斯う云ふ種類のものは段々に廢れて行くのは當然の事であります。

次に運は動自分が實際にやつても面白く、又觀て居ても面白い、斯う云ふのが隆盛になつて行くのであります、此點では野球や庭球は殊に優れた所を有つて居ります、實際に運動をやると云ふ事は全く自然の欲求を滿たし、人間を完全にする事ではありますが、種々な狀態種々な事情からして總ての人が洩れな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く運動をする迄には至らない、つまり欲求を滿足させられないで居ります、所が運動を觀る事によつて運動をしたと同じやうな境地に自分を置く事が出來ます、運動を實際やらなくとも選手のプレーを見て選手になつたやうな氣持になり、一勝一敗戰の跡に力瘤を入れる、さう云ふ心持に導く事が即ち運動の尊い所であります、此境地に觀て居る人を導き得る運動之れが又其運動の隆盛になつて行く重大なる理由になります。此點から云つて野球や庭球は最も進歩したる運動に屬するのであります。

やつても面白い、見ても面白い、只夫れ丈けの事、興味中心の運動であるから野球や庭球は只それ丈けの效果しか無いかと云ふに決してさうではありません、道學先生が教室で教へる倫理や修身以上に立派な人間を造ります、在來の柔劍道なども決して悪い運動ではなく、心身の修養に非常な効果がありますが野庭球とても決して之れに劣らないのであります、身體を强健にする事は今更此に説明する必要もありませんが、精神修養の方面から見ましても偉大なる効果を生じます。

例へて見ますとテニスに於て、一定の規則によつて働かなければなりませんから、之れは一國の法律に從ふのと同じです、サーヴをやりますには敵の陣形を見て其虚を突きます、之れは社會の狀態を視察して進むべき道を見出す事になります。前進して敵の打撃に備ふる時は非常なる注意力と敏捷とが必要です、敵の鐵砲のやうなスマッシに對しては勇氣あれ沈着であれと教へます。ストロークをする時は最も大膽でなければいけません、忍耐力が無ければ長時間の大激戰を續ける事は出來ません、審判の宣告には絶對に服從せなければなりませんが、イン、アウトに關し審判者に判然しなかつた場合、自分にとつてはよし不利であつても自らノー、ライトを主張せなければなりません、之れは正義を教へます、其他一球一打總てが精神の實地教訓になります、二人が一組となつて戰ふ時は、更に共同一致、一心同體、激勵、謙讓、庇護、さう云ふやうな團體的精神を養ふに最も適當したものであります。其他一々此に掲げる事が出來ない程澤山な教訓を與へます、私達は十數年間の學生生活を送つて來たものでありますが、それに依て得たる教訓よりは數年間の選手生活によつて獲たる所のものが、どれ程多いか解りません、現在の學校は形式を整へさせますが內容を充實する事を忘れて居ます、運動は其內容を充たし人間を造つてくれます。

斯う申したからとて弊害が無いと云ふのではありません、種々な弊害も起つて來ませう、併し弊害があつたからとて全部を惡く云ふのは當りません、それを除去すれば好いでせう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偖此立派な運動、野球、庭球を並べて見ますと、各其特徴がありますが、大體から見ますと、野球の方が遙かに團體的であります、庭球の方はダブルもありまして團體的で無い事はありませんがシングルに重きを置く事から申せば個人的と云ふ事も出來ます。野球は廣いグランドに多數の人が活動するので豪壯な氣に滿たされますが、庭球は定められたコートに二人若くは四人が活動するのですから柔かな感が浮びます。

私は前に、やつても見ても面白い運動と申しましたが、野球も庭球も共にやつても見ても面白いゲームに違ありませんが、中でも野球の方はやつても面白い事は勿論ですが、見て居ても非常に面白いのであります、庭球の方は見るよりは或はやる方が面白いではないかと思ひます。野球の本場米國に野球を職業とするチームのある事は此見て面白いと云ふ事を證據立てるものです、我が國の相撲なども共通りでありまして、やつても面白いのですが見て居ても面白い、相撲の始まりは決して之れを職業としたのでは無かつたのですが、段々に面白いから之れを見せようと云ふ譯で今の力士のやうものが現はれて來たのであります、それと同じやうに野球もやつても面白いが見た方も面白いので、觀衆本位の商賣人も出來て來たのだと思ひます。庭球には之れがありません、世界到る所に行はれて居りますが、庭球の商賣人、やつて見せる觀衆本位のものはありません、之れ即ち庭球はやる方が面白い爲めではないかと思ひます。

此點から見まして現在野球は隨分各方面に行はれて居り、又それは何時迄も持續して行く可きものには相違なく、又それ以上に發展して行く可きものではありますが、今後見る運動として更に非常な場面を展開して行くだろうと思ひます、現に二三の之れを職業とし、半職業として居るチームも現はれて來たのでありますが、私は恰も米國に於けるそれの如く此方面に進んで行くものと思ひます、諸學校のチームや各團體のチームそれは相當の發達もし又隆盛にもなつて行くでせうがプロフエツシヨナルチームの出現と共發達とによつて更に日本の野球界に一轉機を來たすものと信じて居ります。

庭球の方は何うかと云ふに之れは何所迄もやる運動として或は家庭的に或は團體的に一層廣く行はれて行くものと思ひます、そして野球が多くの觀客を集めそれによつて運動をやらない人にも其境地に進ましめるのに對して庭球は何所迄も實際やると云ふ點で押し進んで行きます。野球の強味はやる事以外に多くの觀客を集め得る事にあり、庭球の強味は年齢や男女の差別がなやり得る所にあります。野球だとて年齢に關係が無いやうですが、壯年或は老年になつてボールを握る事は仲々困難で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ありません、例外は無い事はありませんが實際に於てさう老年迄やる譯には行かないやうであります、然るに庭球は、何時迄もやれます、現に我々のポプラ倶樂部などでは此頃はあまりやりませんが、滿谷國四郎老を始めとして小杉未醒氏や藤井浩祐氏、少し若い方では南薰造氏や金山平三氏なんと云ふ相當の年輩の人達が盛んにやつて居ります、之れは私達の倶樂部ばかりではなく各方面に見らるゝ所であります、之れは庭球としての非常な强味であります。

それから女子の運動としての庭球ですが、之れは遙に野球より優勢な地位にあります、米國などには勿論女子で野球をやる者もあり又女子の職業野球團もあるとか聞き及びましたが、中には男子も混つて居つて或る試合の際に被つて居つた鬘(かつら)を落して大失態を演じたなどと云ふ馬鹿氣た事もある位ですが、女子の運動としての野球は甚振はないものであります、日本に於ても女學校などで行つて居る所もあるやうですが、庭球が女子に行はれて居るのとは比較になりません、此現象は何時迄も續いて行く可きもので庭球としては非常なる强味であります。

是れを國際的に見ましても、野球はまだ／＼米國などの敵ではありません、大學同窓のチームでしたら相當の成績、或は勝味があるかも知れませんが、世界的の大選手を向ふに廻しては今の所到底勝味がないのであります、今後我が國の職業野球團が進歩して或は次第に彼等の力量に匹敵するやうになるかも知れませんが、之れは日本人の體格からして改めて行かなければならぬ問題ではないかと思ひます。一方庭球でも勿論體格の相違から日本人は確に不利な立場にはありますが、野球のやうにそれ程體格と云ふものに關係しません、持久力と云ふ點に於て優つて居れば體格の劣つて居る位は補充する事が出來ます、此點で庭球は國際的にも肩を並べて行けます、現在熊谷君や清水君などは彼等一流の選手と並んで一歩も讓らないのであります。

庭球の爲めに

福田雅之助

新しい時代を造るには新しい活動が必要である。活動そのものは其時代の社會的象徴である如く運動もその時代相を形造る處の人間の力强い心の發動である。殺伐の時代は殺伐の遊戯が喜こんで社會から歡迎される如くレフインされた社會には極め

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て上品なる遊戲がその時代の人心を收攬する。新しい日本も舊き着物を脫ぎ捨てゝ全ゆる方面に於て新にして且つ吾々の事情に適するものゝ採用に向ひつゝある今日極めて活氣なき遊戲を捨てゝ西洋の戶外運動の殷盛を齎した事はこれ現代の人間が如何にそれ等の方面に心を用ひその運動によりて精神上の慰安を求めつゝあるかが解るのである。古い日本と言ひませうか今日までに至る日本の全てのものが因循にして退嬰的でありし事は爭はれぬ事實である。然し新日本は因循なる舊弊を努めて葬り去つて新しい生き／＼とした open air を切望して居ると云ふ事は今後の日本に取つて心から喜こばしい事であつて又望ましい事であらねばならぬ。

戶外運動の現今に於ける勃興は必ずや今後の日本に肉體的に精神的に偉大なる効果を齎す事を信じて疑はざるものである。

現代日本に於ける運動として社會一般から興味深く非常に歡迎されて居る處のものとして野球と庭球とがある。野球は極めて舊い歷史を有して居り米本土より屢々技倆優秀なるプロフエシヨナルテームの來朝があり日本からも度々米國に遠征してその技を磨き現今日本に於て社會的に絕大なる勢力を有して居る事は他のスポーツの追從を許さぬ處であると思ふ。

翻つて庭球は如何なる理由か恐らく日本に此運動が輸入された時には多分硬球なりしと思ふに如何なる事情に據るかこれが軟球に變つて日本に於ける獨特のテニスとして獨り象牙の塔に閉ぢ籠つて長い年月を經過してしまふたのである。然るに最近に於て庭球の趣味が滔々として現日本の津々浦々まで普及して行つた事は如何なる事由に據るかと云へば時代の要求は勿論であるとしてそれは熊谷淸水の兩先覺者が世界に伍して堂々としてデヴイスカツプ戰に參加して日本の名譽を世界に雄辯に語つて如何に小軀を有する日本人と雖も如斯汝等と競爭し得ると云ふ意氣を示し少なくとも世界人に對し驚異せしめし事が非常に庭球の盛大を來した一原因である事を熟々思ふ。

庭球に於て軟球時代が相當の年月を費して今日に到つたと云ふ事は庭球界に取つてそれは決して徒爾でなかつた事を思ひ今後と雖も或年月を限つて軟球の練習は硬球に入る有力なる基礎を造り得るものと信じて全然軟球の廢止を主唱するものでないとは云へ結局は硬球に入りて世界的のテニスとする事が必要である事を痛感するものである。

野球は現日本に於て如斯殷盛を來した事は他の運動の比肩し得ざる處であるが、終にそのクライマツクスに達して居るのではないかと思ふ觀がある。技倆その他科學的方面に關し未だ／＼前途を有し居り、今後益々進步發達し得る可能性を充分有

し居るとしても、日本人の現在の體力を以つてしては果して米人と對等にゲームをやり得ると云ふ事は極めて疑はしい事である思とふ。吾國野球の今後米人に對抗し行かんとするには、それは技倆及科學的方法の研究に非ずして、只單にフイジイカルの問題を他にしてこれを他に求め得ないと思ふ。此問題を解決し得て始めて日本の野球が、米國の野球に對して覇を爭ひ得べき一導の燭光を認め得べき事を信ずるものである。

　反之庭球はと見れば軟球は長い間の勢力を以つて社會的に認められて居るけれど硬球としては早春の嫩芽が今將に霜を破つて地上に表はれた觀がある。その若芽の中での最初に地上に生れ出でた大なるものが熊谷清水の兩氏である。然るが故に庭球の前途は洋々たるものである。何故なら將に產聲を胸一杯張り揚げたばかりであると共に、熊谷清水兩氏に據つて裏書をして居らるゝが故に。

　全てのものが世界的となり、世界を凌駕せんと冀望して居るに當り、第一位たらずとも全ての事に於て世界から劣れるものと見做されて居る日本が、堂々として庭球に於て世界に伍して行く事が出來る丈でも歡喜と誇りとを感ずる事頗なり。

　果してテニスは世界と對抗し得るかとの問に對して吾々は現今にても yes と答へ得る自信を有して居る。庭球は比較的に身體の問題よりも、寧ろ技術と頭腦との問題にある樣に思はれるが故に、庭球は手先の器用な日本人として一番その性質に適して居ると信ずるものである。數年の努力と苦心とに據り、熊谷清水の兩氏は正にデヴイスカツプ獲得に今一歩と云ふ處までに達したのである。今後數年にして熊谷清水兩氏の先蹤に次ぐ人、或は熊谷清水兩氏を凌ぎ得る程度の人物の輩出を期待し得る事は當然であるが故に、庭球は他の運動に比して世界的に競爭し得る可能性の最も大なる事を思ふものである。

　日本の外交の拙劣を世界に示し得たよりもより以上にデヴイスカツプ戰に參加した熊谷清水兩氏の活動が世界的に日本を紹介し、日本に對して驚嘆の目を見張らし得た事を思へば、運動の奬勵も國際的に有力なる武器として强ち無意義ならざるを思ふ

　野球は剛放である。庭球は微妙である。一は勇壯であり、一は輕快である。數千坪を有するグラウンドに一打嚠然として飛ぶ球の快味は到底テニスに於ては味ふ事の出來ない痛快事であり勇々しい喜に胸が躍る程である。廣いグラウンドに熱汗を流し土に汚れて馳驅するナインの活動は勇壯そのものである。それ故假令野球の智識を缺く人が見ても恍惚たり得るのである。

　庭球は輕妙である。全て純白をユニフオームとする程に上品であり紳士的である。庭球は微細な點に興味がある故にラケツ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

トを握つた事ある人、テニスに關し相當の知識を有する人が始めてテニスの快味を解し得ると思ふ。野球は何も知らなくて只見物する丈にても面白味が湧くけれど、テニスは只見物した丈にては仲々その妙味を掬し得ないと思ふのである。

野球は庭球に比してその範圍も狹く且つ庭球よりも生命が短かい事を愚考する自分の寡聞のせかい世界に於て米國を除いて野球の勢力を有する國のなき事である。野球は廣いグラウンドを要し競技は結局勝負と云ふ事にある點に於て野球も試合する事に一層の興味を感ずるが故に兩ナインを必要とし都合十八人の人數を最少限として得て始めてゲームが行はれ得るが故にその點に於て不便を感ずる事が大である。而してテームウオークに測り知れざる興味がある故に力の平均を缺いたる場合は頗る面白からざるテームの編成となり面白からざる結果を來す。野球は何處までも男性の運動であると思ふ。野球が庭球に比して身體の活動の激しい點に於てその生命の短き事は事實である。

庭球は一般的に殆んど終生的である。庭球は世界各國に於てその競技を採用されて居り且つ男女老弱共に等しくその快味に均霑し得る事がその一般的特性を有して居るのである。

而して又テニスは至極簡單二人集ればテニスとしての眞の競技をenjoyする事に於てその上土地の使用も野球のグラウンドに比して頗る便宜なるが故に是等の點に關して今後の勢力は野球を凌ぎ得る事はあり得べき事であると信ず。野球の妙諦はテームウオークに盡きると云ふとも過言でないと思ふ。ナインが獨りのキヤプテンの命令と指揮とに活動する事は複雜の中から或力強い單純を求めて居るのである。自己が思ふまゝの動作に出で樣とする場合にもテームウオークと云ふものに束縛を感ぜさせられて、自己の意に滿たざる動作に出づる場合がある。是等の場合は團體としての必要なる活動にして、これなくてはテームウオークが成り立つて行かぬのである。野球は殊に審判に於て束縛を感ずる事が甚だしく、或時の試合の勝負は審判に據ると申しても可なる場合があるが、反之庭球の審判は殆んどゲームを支配する事の野球のそれの如きでない事は頗る心地よき事である。これは全然競技そのものゝ性質からして止むを得ない事なのである。

庭球は個人人格の發露である。シングルスに於てその妙味を發揮し得るのである。(實際テニスに於て特にシングルスはダブルスよりも尊重されて居る)。獨りと獨りとが戰ふ故に、非常に單純の樣に見へて仲々複雜なのである。競技の終局の面白味は一騎打にある樣に感ずる。シングルスに於けるプレヤーのプレーは自己そのまゝの活動であつて、自分を他にして何等の束縛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もなく自由の天地に馳け廻り得る言ひ知れない心地好さが存して居る。思ふ存分自己を發表し得るが故にテニスプレーはその人の心の閃きである。

庭球に於てはポイント〳〵が重大なる意義を有して居り、頗る微細なる技術とヘツトウオークとを要するが故に、その心理的現象の激しい變化は明瞭にそれを推察し得るし、且つ一マツチを通じて幾度かその變化に襲はれる事などを觀察し得ると興味の湧いて來る事は必然である。

テニスに於てはボールが瞬間〳〵に自己を危地に陷れ樣と相手方から常にし向けられて居るが故に、實際に於て一瞬の隙もなく常に警戒と攻撃とのチャンスを握る爲めに微妙なるヘツドウオークを必要とする。

野球は前述せる如くテームウオークに重大なる意義を有するが故に、その精神上に及ぼす影響も亦個人の協力と云ふ事に關し、頗る尊い精神を形造る事と思ふ。個々人が集つて一のテームをなし、その心が結合したものがテームの精神なのである。そがテームの眞價なのである。然ればそのテームの活動如何はそのテームを組織する處の個人の心的傾向を赤裸々に發揮して居ると云ふても良いのである。自己の瑣々たる事情を顧慮せず自らそれを犧牲にして一致協力以つて共同の目的を達せずんば止まずと云ふ團結心を知らず〳〵の裡に經驗しその質を段々成長さして行く。そこにテームとして尊い務がある。立派なる個人、圓滿なる人格者より成れるテームは從つて立派であり圓滿である

これは野球としての特徴であるが、翻つて此特點のみを誇大して餘りに個性の發揮を束縛する憾なきや。眞のテームウオークの最善は何等の暗示何等の指導なく、各人がキヤプテンでありそして自己の是と信ずる處を發揮した時に、そこに整然として一致した心が生ずる處にテームウオークの眞價が存して居る樣に思はれるのである。

之れに對して庭球は徹底的に自由であり個性の發露である樣に信ずる。何等自己以外に束縛するものもなく、只自己のヘツドの命ずるまゝにプレーする自由を有するが故に、獨創的技術及活動の發達進歩は極めて廣い範圍を有する。されど一面に於て至極個人的の性質を醸成する弊に導かれ易い事は事實である。

野球は放膽粗暴といふ性質を養ひ易く極めて物事を大まかに取扱ふ事なきや。庭球は餘りにその技術が輕妙を要するが故に、極めて神經質になり易く恬淡を缺く事なきや。勇壯の運動に必然細慮の伴ふべき事を要し、微妙なる庭球に於て大度量を要すべき事は火を見るよりも明かである。

要之、野球は野球としての特長を有し、庭球は庭球としての

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妙味を有して居るが故に、一以つて他に代り得ると云ふ事は絕體的にあり得べき事はなく望ましき事でないと思ふ。

宇宙に不必要なる物一もなく、その不必要とする場合はその物ゝ眞價を握り得ない凡人の、明なき憾がある。櫻はその絢爛を、菊はその淸楚を、菫は其可憐を以つて四季折々の自然の美をなせるが如く、野球には野球の尊い使命があり、庭球には庭球としての要諦があり價値があるが故に、各々が其美をなして運動の眞隨とする處、即精神的方面と肉體的方面に貢獻し得れば、其使命は各々足り得べきであつて、決して他を陷入れて自己のみ好餌を貪る事が望ましき事でない事を痛切に感ずる物である。

各個人の進み行く人生の行路が、極めて多岐多様でありとしても、結局は人生の目的は最善への向上であると同じく、運動に於ても野球のみならず庭球の獨り舞臺は望ましくなく、種々の競技が凝つて運動の美しい實を結び得て窮局の尊い目的を達し得ればそれで良いのである。

自己が興味を感じ、是と信ずる道を辿る者が、自己の道を主張する事は理であると共に、許し得べき事であると信ずる。各々は各々の信ずる道を他を排謗し拆斥せざる限りに於て主張する事は當然の事であると思ふ。

故に自分は自分の親しむ道としての庭球を主張し、その普及を冀ふものである。（一九二二、一二、四、寒雨降る更夜）

近時の野球界所感

三宅大輔

近年我國に於て戶外の運動が盛んになつた事は實に非常なものだ。殊に一二年前からは驚く可き勢で旺盛になつた。然し自分の云ふ旺盛の意味は技倆の進步を意味するのではない、一般に普及して戶外運動に參加する人員が增加した意味なのだ。或點に於ては粗製濫造とでも云ふのか、數は增したが技倆實質は數年前よりも下落したように見える點がないでもない。野球も戶外運動の一として最も旺盛になつた物の一つだ。極く最近までは野球は學生間の專有物の感があつたが、近頃では如何なる交通の激しい都會の小さな空地でも、又如何なる交通不便の片田舍でも、野球をやつて居ない所はないようになつてしまつた。こふ云ふ風に追々盛んになる事は最もよろこばしい事と思ふが、然し盛んになるにつれて吾々は新たに考へねばならない事が出來て來ると思ふ。即ち一つの物が盛んになればそれに伴ふ缺點

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がどうしても今迄よりは人目について來る事になる。それ故一方に於て盛んになる事を喜こんで居るものは、他方に於て其缺點を如何にして少なくして行けるかを研究する義務があると思ふ。殊に吾國の野球界の如き過渡期にあるものは尙更それが必要ではあるまいか。

然らば如何にして此の缺點を少なくして行くかと云ふと各自色々の主張もあるだらう、又理想もあるだらうが、自分は目下吾國に最も必要な急務は野球界の問題を裁斷する公平な最高機關を造る事だと云ひたい。目下吾國の野球界は群雄割據の時代である。

種々の問題が起る度每に各自が各自の意見を主張する、そして只それ丈けなのだ、最後の判決がないのだ、數日を過ぎれば有耶無耶に終つてしまうのだ、それ故或問題が起つた場合に今迄殆んど解決せられずに其まゝになつてしまう場合が多いのだ、それでは缺點を少なくする事が出來ないばかりでなく反つて缺點が多くなりはしないかと思はれる。

そこで最高機關を如何にして作るかと云ふ具體的の問題を定めるには、野球界を一人で切り廻す事の出來る人物を撰ぶか、又は各有力者が團結して最高の機關として恥かしくない結團を造るより外に道がない、前者は目下の處理想としては好いが實際には出來ない事だから後者を撰ぶより外はない。

自分は數年前から此事は主張して居るが具體的に未だ出來ないのは甚だ遺憾に思ふ、大正十二年の新年と共に野球界が爲さなければならない、最大急務だと思ふ、此機關が出來ない限りは前述の如く今後の日本の野球界は關係する人員に於ては旺盛になつても實質に於ては漸時心細いものになつて行くだらうと思ふ。

玆で自分に昨年起つた野球界の一二の問題を論じさしてもらいたい。

第一は早大の谷口君が使用した逆ボデースイングの問題だ、同君のボデースウイングがボークであるか否かを當時大分やかましく論じられた。自分は其時にボークであるか否かは最高機關のない日本では其時に審判官である芦田君に任せるより外に仕方がない。自分としてはボークであると思ふ、然し審判官が認めてボークでないと云ふなら勝手に使用してもかまわない、投ぜられた球其物は今迄と同じで只投球動作其物が變つている丈け故實際上相手方がそう云ふ投球動作も時々はやる事を覺悟さへして居れば何んでもない問題になつてしまうから、要するにボークであるや否やの机上の問題に過ぎなくて實際の問題としては大した難問題とは思はないと論じた、幸に其後米國の職業

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

團が來朝して此問題に對して頗ぶる簡單に（殆んど理由なしに）『ボークではない』と云ふ解決を與へてくれた、自分は此解決に滿足してもい〻と思ふ、たとへ何等の理由なしに簡單に『ボークでない』と云つたにしても彼等の言を此問題に對しては權威あるものと見てい〻と思ふからだ、然し彼等も自分と同じ樣に『其投球方法は未だ米國でも見た事はない、不自然な動作で而かも大した効力はないから使用する人が少ないのだ』と云つている、其爲めか谷口君はボークでないと云はれてから後反つて一度も使はないようだ。

此問題は幸に米國の職業野球團が來朝したからよかつたがもし彼等が來朝しなかつたらどうだらう。最高機關のない吾が國では來年も再び此問題の爲めに不愉快な思ひをしなければならないと思ふ、そしてボークでないと云はれて反つて使はなくなつた谷口君が未解決で居れば反つて意地になつて多く使つたかも知れない、然し職業野球團の來朝があつて幸だつたが之れは偶然の出來事で而も問題がルール上の問題であつたから彼等の言を權威あるものとして解決がついたがもしそれがルール以外の問題だつたらたとへ職業野球團が來朝しても明らかな解決を與へ得べきものとは思へない。

例へば谷口君の謹愼問題の如きがそれである、（例へば谷口君許りを出してお氣の毒だが惡意がある譯ではない最近の問題だから例に引いた丈けだ）谷口君を早大野球部が謹愼せしめた事も野球界に最高機關がない缺點を明らかに表したものだ。自分に云はせれば谷口君は良いとも惡いともつかずに謹愼させられたように思はれる。三田對稻門第二回戰に谷口君が三田の高濱君に故意に死球さしたのなら勿論謹愼又は除名をさせる十分の理由となるであらう、然しもしも谷口君が只一時エキサイトしてベンチへ移つた丈けでは謹愼せしむる程の惡事とは思はれない。早大先輩諸君がなだめてもそれでも先輩諸君の言を入れなかつたと云ふなら兎も角も一度エキサイトしてベンチへ歸つたが直ぐ先輩諸君の言を入れて再びプレーをしたのだから一時のエキサイトを除名とか謹愼と云ふ程問題にするのはあまりに氣の毒だと云はねばならない。或は其他に内部の事情があるのかも知れないが要するに發表された理由はベンチへ一時歸つたのが重な原因のようだ、而も其謹愼を命じたのは三田對稻門の仕合には第三者である早大野球部なのだ、そして當の稻門の人達は反つて早大野球部の處置をあまり過酷でないようにとなだめている立場になつている、之れでは谷口君も謹愼を命ぜられても變に見當違ひのような氣がしてお氣の毒である、谷口君とし仕ては合に負けて家に歸つて親父からしかられた時のような感

すじがるだらうと思ふ、尤も他に事情があれば兎も角だが、自分は他に事情があるかどうかは知らない只表面丈けの感じなのだ、こんな場合に公平な裁斷を下す機關があつて何所がどう惡いから野球界の最高機關が如何に處理すると云ふ事が出來たら前例のような事件ばかりでなく凡て圓滿な解決が出來て後に不愉快を殘す心配がなくなる事だらう、こんな事はルール上の問題ではないからたとへ米國の職業野球團が來ても何んの解決を下す事は出來ないのである、どうしても日本には日本にさうした機關がなくてはならないのだ。

其他各學校やクラブが仕合の日程を定める場合、入場料の問題の場合、又は不謹愼な觀覽者を取締る場合或は又不明な野球報告者を教育する場合等凡ての問題は此機關を一つ作る事によつて非常な利益があるだらうと思ふ。

大正十一年は野球界にとつて豐年と云つても良い米國職業野球團が來朝した事丈けでも十分の收獲があつた、彼等が時々來朝してくれる丈けでも日本の野球界はどれ丈け幸福か知れない、單り野球選手ばかりでなく、野球を見る人、野球を報する人をも必ず進歩さしてくれるに違ひない。

彼等の技術計りでなく彼等の人格彼等の平生の生活を十分見る機會を與へてくれたなら日本人に野球とはどんなものかと云ふ事をもつとよくわからしてくれるだらうと思ふ、そうすれば日本の選手は勿論の事野球を報ずる人も見當違いの報道を堂々と書き立てるは自分でも恥かしくあるし從つて一般の人々ももう少し公平に高尙に野球の仕合を見て樂しめるようになるだらうと信じてゐる、あまり昨年の事ばかり書き連ねて今年の野球界に對する希望を書かなかつたが、本年も昨年に比して野球界はもつと面白いだらうしもつと盛んであらうと思ふ、又そうありたいと望んで居る。

今春は早々極東オリンピックが日本で開かれるそうだから野球界も他の運動界と共に賑ふ事だらう。

今春早々野球界の問題となる事はオリンピックに日本を代表して出場する野球チームを如何にして撰ぶ可きかと云ふ事だ。

前回の極東オリンピックが上海で行はれた時に神戸のダイヤモンド倶樂が日本で優勝して自分も其一人として上海へ行つた、其時につく〴〵野球チームとして日本を代表して出るのは單に一チームが優勝したからと云つてそれを代表チームとして出場せしめるのは不可だと云ふ事を考へさせられた、何人も知る通り野球のチームは數人の共同技術であるから一チームが優勝したからと云つて其チームの各員一人一人が日本を代表する資格のある人だとは云へない場合がある。其チームの中には日

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本を代表する價値のない人が交つている場合が多いのだ、只其チームに屬する爲めに代表者の一員となる事になる、それ故チームは日本で優勝しても其各員は日本の選拔者ではない事になるのだ、而も日本の代表チームである以上其チームが負ければ日本が負けた事になる譯だ、こんな事で負けるのは甚だ遺憾だと思ふ、それ故自分の一案として各チームが優勝を爭つて優勝チームが定められたら其優勝チームに人撰の權利を與へて、オリンピツクに出場して他國の選手と仕合をする場合には優勝チームが其不足を十分に補ふように日本中の各チームの優秀選手を引き拔かして來たならば之れが實際の日本を代表し得るチームとなるだらうと思ふ。又第二案としては公平な最高機關を設けて之れが十分研究の上に各チームから優秀者を引き拔いて一つのチームを作り此チームを日本の代表チームとする事が出來れば……そして其チームを指揮する信頼し得る指導者を得られたなら……立派な代表チームが出來るだらうと思ふ。

第一案第二案何れにしても日本の代表者としてはずかしくないチームが出來るが實際に具體化するには第二案は理想に近いがなか／＼困難が伴ふ事だらう、自分は目下の日本野球界の狀態では第一案が最良の方法だと考へて居る。

本年の野球界は種々忙がしい事が起るだらう又協議して考へねばならない事も數多あるだらう、然し新年に際して自分が先づ第一に希望して止まないのは公平なる最高機關を作る事だ、之れが出來ない內は今年の野球界も亦前年同樣烏合の集團に過ぎない、野球を志す人員が增へる許りが進歩ではない、內容を精練させなければ駄目だ、それ故最高機關を先づ作る事を切望する、否自分の新年に於ける野球界への希望は第一がそれだ、新年ばかりではない自分は此の機關が出來るまで常に此の希望を主張して止まない。(終り)

野球は觀衆本位・庭球はプレーヤー本位

熊谷一彌

野球と庭球とは共に海外より輸入された戸外運動であり、双方共に球を中心としての競技である點に於て共通性を有して居る。野球は米國の國技として生れ漸時に海外殊に東洋方面に普及し、庭球は英國に於て完成せられて今や世界の到る處、文明人の居住地には必ずテニスコートの存在を見るのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の二大戸外運動競技は明治年間に相前後して我國に輸入せられ、幾多の盛衰の期を經乍ら次第に成育し遂に今日の隆盛を見るに至つたのである。

然るに此二種の競技が今日に到つた徑路に就ては各々其の競技獨特の長所を發揮し之を基として發達した跡がある。而して世間一般が之に對して興味を持ち、競技者自身もプレー其物を樂む事より推して之を比較研究するに當り

一、觀衆の側より

二、競技者の側より

と區別する方が分り易い。

第一觀衆の側より

先づ一般觀衆の側より論ずれば最初に眼に映ずるのは競技場面の廣狹である。野球に於ては內野外野の廣さ及び周圍の地面を合算すれば實に數千坪を要する。數千坪を要すると云ふ意味は數千坪なければ活動の範圍を妨げられる虞有りと云ふ事になる。之に反して庭球のコートは區劃の外の餘裕を充分に取つても約二百坪で足りるのである。斯る場面の大小の相異より來る結果は野球の競技は如何にも萬事に大規摸に且つ多人數で行ふので變化に富み之を一度了解すると面白くて見ずには居られない程になる。一方庭球に於ては場面が狹い爲めに技術も隨つて小さく唯見ては變化に乏しい爲め見物には引立つて見えない。

元來競技の目的の一としては勝敗を爭ふ事である。勝敗を爭ふ以上は單に平凡に決定するのでは面白くない。互に多少の危險を犯して爭ふので其裡に痛快味があるのである、此意味に於て戰爭は人生最大の興味有る競技と云ひ得る。野球は庭球に比して危險性をより多く帶びると同時に痛快味も遙かに優れて居る。猛烈なるスライデングや矢の如き飛ぶ球に對しては多少の危險を含み從つて之に累せられる事も往々ある丈けに見て居ては痛快なものである。庭球には殆ど此點に欠けて居る。又場面の關保で例へば柵越のホームランと猛烈なスマッシングと比べても痛快は痛快でも其間に大小の區別は在る。

次に技術上に聯關して野球は一般に庭球に比して派手である。所謂水際立つたプレーは野球の方が多いのである。之には野球に職業團の存在があがつて力ある職業團は野球競技による收入に衣食して居る。競技に依つて衣食する事になれば收入の基礎たる觀覽者を度外視する事が出來ない。卽ち觀覽者の喝采を博する樣な派手な方法に依つて人氣の集中に傾くは當然である。之を米國の例に取つて見るのに米國に現存する野球職業團は一部の人士によりて幾多の非難を耳にするのにも拘らず、人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣の中心は依然として之より去らないと云ふのは一方に非難さる可き事由があるけれども一般に興味を感ずる事が大なる爲めに非難の點が隱されて其勢は益々盛大となつて居る狀況である。即ち見物人は之を實地にプレーして經驗すると否とを問はず大體の規則を一通り覺えたら見物して居ても熱狂的の興味を喚起する事が出來る。野球の中心たる職業團が斯く觀衆の興味中心主義に傾く結果は全般に此風潮を及す事は明かである。此點は野球技の發達普及に及ぼす一大特點であると思ふ。

一方庭球に於ては之と趣きを異にする。庭球には野球の如く職業者はない。プレヤーは凡てアマチュアー（素人）であるが故に衣食する爲めにプレーして居る者は皆無である。故に仕合に臨んでも單に自己のベストを盡して勝敗を爭ふ他は眼中に何物もない。況や觀覽者の如きには一顧の注意をも拂ふ必要は更にない結果各技倆は必要以外のものは捨てられて眞率となり派手な點も少くなる。その理由で單に規則のみ了解した位では觀衆には興味は比較的に薄いと云はなければならない。但し其道に入つて之を味へば眞面目なプレーの裡に多くの妙所を見出す事が出來るけれどもそれは局限された人々に制限される結果は此特點としての野球には及ばない。要之觀衆の側より見て野球は庭球に比して一般の興味を有するのである。

第二競技者の側より

前述の如く野球は廣く庭球は狹い場所で行はれる競技である爲めに庭球のコートは野球に比べて容易に何處へでも造り得る。世が文明となり人口稠密の度を增すに隨つて地價は昂騰し數千坪の地面を獲るは容易でない。故に野球競技を行ふにも先づ一般的には場所を定むる事を考慮しなければならない。庭球は比較的に容易であるから何人も此點に心配は少い。

次に野球にせよ庭球にせよ競技たる以上は終局の目的の一としてチーム或は個人（庭球）の對抗競技たる可きものである。野球に於ては敵味方を合せて最少限度拾八人を要する。此人數に一人欠けても正式の仕合は不可能である、換言すれば拾八人揃へなければ仕合は出來ないと云ふ事になるのである。職業團ならばいさ知らず一般より云へば澤山の仕合の度毎に必ずレギユラーのメムバーを揃へる事は學校チームを除いては困難ではあるまいか。乃ち仕合の興味は正式の人數の不足によつて幾分の減少を來すものであれば此點に苦心を要する。然るに庭球に在りてはシングルは一人宛、ダブルは二人宛の人數さへあれば充分に競技し得られるものである。此點に就ても野球に比べて有利な地位に在るものである。

野球は其競技を完了するには少くとも二時間以上を要するの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が通例である。（フリーパツチング、オームアツプ等を加へ）。此の時間以内では充分緊張したゲームは先づ出來ない。之に反して庭球では一セツトを二十分として三セツトのゲームでは四十分内外で充分に出來る。斯かる時間の長短によりてゲームが能不能の結果を來す事はプレヤー自身に取つては時に依り尠からぬ影響を及ぼすものであらねばならぬ。

尚此の外にプレヤー各自の興味に就ても庭球の方は活動する機會が頗る多い。乃ち球を受け打つ場合は全仕合を通じて絶えず起つて來るに反し野球では特殊の人たる投手捕手壘手を除いた他の人は仕合の始めから終り迄に球に接する折とては四回乃至六回のバンチングと僅かに數個の飛球に接するのみで活動する場合は少い。戸外競技の要素の一が活動である以上は活動は不活動に勝る事万々である。

今迄述べた事に依つて之を約言すれば觀衆の側より考察して野球は適に面白いゲームであり、プレヤーの側より見て庭球は手輕に出來て且つ面白いゲームであると云ふ事に一致する。現に米國に於て見てもプレヤーの數より云へば庭球の方が優つて居るにも拘らず、野球の大試合の入場者の數は之を庭球に比較して實に數倍を凌駕する狀態であるので知れる。

恐らく此傾向は我國に於ても將來此勢で進み各々其特色を發揮して進む可き道を辿るであらうと思はれる。國土狹少にして丘陵に富む我島帝國は未だ食糧自給國の範圍を脱しない。斯る國に數千坪の平坦な土地を至る處に求むるは實際上經濟上に困難である。故に今後に於ても今日より多くのグランドを求むるのは無理である。此結果として今後野球の發展は一般觀衆の興味の中心物となつて普及し遂には我國技の稱ある角力に代る時代が來るかも知れない。

庭球は相當な土地さへあつたら假令狹少でも充分にコートは造れる爲め我國に於ても今後共に實際上に發達の餘地が充分に在る。近來朝野の間に運動の必要なる事も次第に認識せられ運動に依つてのみ健康體を維持せられる事が判明した以上は我國民は何等かの運動に依つて體力の増進を計らねばならぬ。然るに之には物質的時間的に幾多の制限があり、此制限に比較的接觸しない庭球は將來に於ける我國運動競技の中心として多數のプレヤーを産み津々浦々迄も普及して野球と共に實際上の運動技として發達するに違ひない。特に庭球は他の競技が唯青年の在學時代のみの獨占物たる感あるに獨り人の一生を通じて老年に至る迄コートに立つて競技し得る結果は一層其の感を深くするのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隆々たるテニスの將來

安部民雄

私は將來テニスがどんな風に盛んになるか、又如何なる特徴を有して居るか一つの實例を以て示さうと思ふ。

夏に我々が輕井澤のパブリック、コートを見に行つたとして見る。スタンドを挾んで五ツヾつテニス、コートが金網に取圍まれて並んで居る。其處では、青年は勿論、老人、婦人、子供に至る迄嬉々としてテニスをして居る。ラケツトにボールの當り兼ねる樣な下手な人も、上手も、地位あるものも、ないものも此のスポートの前には老若、男女、地位、人種を超越して只愉快にこれを樂しむのである。親子でやつて居るもの、夫婦が二組でミクスト、ダブルをやつたり、跛の老人が子供を相手にしたり、上手な者が火花を散らして戰つて居ると、スタンドに憩ふて居る人々は其のゲームを見て拍手を送つて居るなど、ほんとに樂しさうである。八月の始めにトーナメントが行はれる。上手も下手も、殊に驚いたのは跛の老人迄が出場した事がある。其の種類は男、女のシングル、ダブル及ミクスト、ダブルで場合に依つては以上のものが下手な者の爲めにA、B二組に分けられるか、又はハンディキャップの附けられる組が出來る。それであるから下手な者も上手な者と同じ樣に皆此のトーナメントを樂しむ事が出來るのである。又十四才以下の子供も大人と同じ樣にトーナメントをやる。扨此樣に皆が十分愉快に樂しむ事の出來る此のスポートは經濟的方面から云つても非常に安い。二月をフル、シーズンとして八圓拂ふ丈けで、十のコートを維持して、其上ボールを支給するのである。實際輕井澤レヂデントに取つてテニスは生活の一部であり、而かも非常に重要な地位を占めて居るものである。運動も此樣なものになつたら理想的ではあるまいか。輕井澤に於ける此の現象は輕井澤のみに見られる特殊な現象とは思へぬ。テニスが此の樣な老若、男女を超越した傾向があるからではないだらうか。輕井澤に於ても六、七年前迄は、テニス、コートに於ける日本人の數は十人足らずであつた。然るに最近では外人と相半ばする位のメンバーが居て十才位から四十代に至る人々を網羅して居るのである。殊に婦人もトーナメントに迄出場するに至つたのである。此の事實からしても將來テニスが此の樣な狀態で盛んになると推測出來る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實際テニスはあらゆる人々に依つて樂しめるものである。體の弱い人にはいくらでも優しい運動となる事が出來又野球など到底及ばない様な猛烈なものともなるのである。又僅かな土地しか要さないと云ふ事もテニスの將來を盛ならしむるものである。ピアノが家具の一つとして見られる様に、庭園の設計にも必ずテニス、コートがはいつて居ると云ふ外國の事實でも分る。尙テニスの將來が必ず隆盛にならねばならぬ事實がある。それは現在テニスが他の運動に比して婦人間に最も盛んに行はれて居る事である、關西に於ては可成以前から女子の庭球大會などが開らかれて居たが、最近關東に於ても漸く盛大となり大正十一年度の庭球界は女子選手權大會に依つて掉尾の活躍がなされた程である。婦人のテニスに對する理解はやがて來る可き將來に如何程大いなる結果を齎らすであらう。子供に接する機會の多い又直接に種々の交渉の多い母親が運動に理解のあると云ふ事は其の運動を發達せしむるに如何ばかりの力があるか言を俟たぬ。

稍々もすると男子に專有され又女子が近づかんとしても近づき難い運動に比して、テニスが非常に多くの婦人によつてなされて來た事は確かにテニスの隆々たる將來を我々に思はせるのである。

野球庭球の比較研究

安部磯雄

近來野球と庭球とが益々盛になつて來たことは體育界の爲めに大いに喜ぶべき現象であると同時に、一面に於て此二つの競技が將來日本に於ける運動競技として孰れが適當であるか、換言すればどちらの競技が將來日本に於て普及するかといふ事や、引いては此兩者の優劣と云ふ事などに就いて人々に考へさせるやうになつて來た。

私は先づおほまかに此兩者の優劣といふ事に就いていふならば、それは我々の之れを見る標準に依つて異るものだと思ふ。其標準とは何であるかといふに、第一に普及性と云ふ點から云へば、將來此兩者の中、孰れが餘計に擴がるであらうか、第二に體育として見た時にどちらが優つて居るか、第三に、娛樂として見た時には兩者の優劣は如何であるか、更に娛樂として見る時には、自ら競技を行ふ場合と、單に見物人として之れに對する時との二つに分けて、その孰れが興味があるか、と云ふ事などを指すのである。私は今之等の標準から野球と庭球の特色及

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

び優劣に就いて考へて見たい。

第一の普及性といふ事から考へると、之れはどうしても野球よりも庭球の方が優つて居ると斷言して差支ない。言葉を換へて云へば兩者孰れがより廣く行はれるやうになるか。野球をやる人の數が庭球をやる人の數に比して如何であるかと云ふに、將來は庭球をやる人の數の方が遙かに多いと思ふ。其理由は、第一に經濟的の點から觀察すれば、野球をやる土地は比較的に廣い面積を要する。少くとも二千五百坪乃至五千坪近くの土地が必要である。然るに今庭球をやるとなると野球のグラウンドの中に六つや八つのコートを作ることが出來る。此土地の問題は野球と庭球の流行の消長に大なる關係があるので、庭球に於て比較的狹い土地で間に合ふと云ふ事が庭球が廣く行はれる所以である。田舍に於てもさうであるが、都會では中等程度の學校で野球のグラウンドを有つてゐる所は少ない。然るにテニスコートの一つや二つを有することは之等の學校でも格別困難としない。將來庭球が廣く行はれると云ひ得る第二の理由は、野球に於ては九人の人間が居ないと練習が出來ないと云ふ事と、試合の時には十八人の人數が揃はないと競技が行はれぬのに反して、庭球に於ては二の人數で濟むといふ事である。二人集まれば簡單に競技がやれるので、九人、十八人の多數の人數を揃へなければ出來ない不便な野球よりも、其性質の上から手輕に行はれる庭球の方が將來盛んになるべきものと見てよいと思ふ。第三の理由は遊戯其物の性質から見た場合である。野球は其性質として競技が荒つぽくて婦人に適せぬから、將來に於ては、米國のやうに、絕對に婦人の野球團が出來ぬとは云はぬが、其實現は何んと云つても未だ〳〵難しい話である。然るに庭球は婦人でも男と同じやうにやる事が出來るから、將來運動熱が益々盛になつて多數の婦人が此競技を行ふやうになる事を豫想すると、野球はどうしても其數の上に於て庭球に及ばないと云ふ事になる。今日世界の狀態は明かに此事實を證する。野球はアメリカ本國に於て最も隆盛で、アメリカを除いて最も熱心に野球競技の行はれるのは日本であり、他の諸國に至つては未だ問題にするには足らない。之れに反して庭球はヨーロッパ諸國、アメリカ、及びオーストレリヤ、支那にも流行し、其普及性と云ふ點から云へば野球は到底庭球に及ばない。」

第二、體育の點から云ふと野球と庭球の優劣を比較する事は非常に困難であつて、恐く此兩者の間には優劣がないと見た方がよいのではないかと思ふ。身體の完全なる發達といふ點から見れば野球も庭球も共に缺點がある。野球に於ても庭球に於てもどちらも、右か左か、一方の手を餘計に使ふ。其の點から云へ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば、左右の手の發達が同じやうに行かないと云ふ缺點は、強ひて云へば庭球の方が野球よりもひどいやうに思はれる。其他の點に於ては兩者の體育としての價値に變りはない。素人考へによると野球は運動が激烈で、庭球はそれほど過激でないから體質に依つては、餘り身體の強くない人は庭球をやつて、野球はやらぬ方がよいと考へるかも知れぬが、それは必しも當つて居ない。若し試合をするとなると庭球は耐久力を多く要する。身體の弱い人は無論野球も庭球も出來ぬが、相當の健康の人であるならば、野球は比較的競技の間に體を休める事が出來るから差支へないけれども、庭球に於てはそれが少いので、耐久力といふ點から云へば庭球の方が野球に於けるよりもより強い體力を要する。或意味から云へば殊に硬球の試合などに於ては、後になると耐久力の強い者が勝ちを占めるとも云へる。野球の試合に於てはピッチャーは別であるが、他の選手は試合の間に隨分精神は使ふけれども身體は左程に働かせない。之れ等の諸點を綜合するに此兩者に於ける體育上の優劣は先づないものと見て差支へない。

第三に娛樂として見たる場合は如何。之れは前に云つた通り野球や庭球をやる人々自らが實際にどういふ風に感じるかと云ふ事と、見物人の立場から見た時との二つの場合に分けられる。競技を實際に行ふ人の立場から考へた時には此兩競技を娛樂として見る時その優劣を定める事はまた極めて困難である。之れは一人の人が二つの競技をやつて見ないと何れとも定めかねる譯であるが、假令一人が兩方をやつて見たとしても甲と乙とでは其見方に於て一致しまい。或人は庭球は試合の際のみでなく練習の場合に於ても面白いが野球に於ては練習は左程でもないと云ふ。これも果してどういふものであるか、兩方の競技に對する經驗もなく、又人から聞いても分らないから明かな判斷は出來ないけれども、見物人の立場から云ふならば議論はないやうである。即ち野球の興味は遙かに庭球よりも大であると云へる。何故さうであるかと云ふ事に就いて私は二つの理由を擧げる事が出來る。其の第一の理由は野球の競技に於ては人數が多いから變化が多い。九人が一緒になつて働くから、其處に分業があつて、而も九人の間に連絡がとれ、所謂チームワークが行はれて、それが見る人には何とも云はれぬ味がある。然るに庭球に於てはさうでない。二人が試合をする。ダブルと云つて双方二人宛、都合四人で戰ふのもあるが、今日の庭球界の有樣を見ると復試合は單試合に比して重く見られて居ない。矢張庭球の眞髓は單試合に在る。庭球の選手の優劣を定める場合には其一人々々に就いて定める事が出來る。野球はテイームとし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ての優劣は定められるが選手の個人的優劣を定める事は絶對にとは云はぬがかなり難かしい。一言にして云へば庭球は一騎打ちであり、野球は團體的競技である。團體的競技である點に於て多くの變化が味はれ、變化ある所に單純な庭球に於けるよりも、より多くの複雜な興味が見出される。次に又野球の庭球よりも興味のある點は、前者が後者よりも男性的であるといふ事である。男性的であるから其處に危險が伴ふ。庭球に於て怪我をする事は殆んど稀であるが、野球に於ては競技中に負傷したり、甚しきに至つては死ぬやうな場合もないではない。畢竟人生は危險の伴ふ所に大なる興味が存するので、野球の如く勇壯洒潑であると同時に幾分危險性を伴ふ競技により多く人々の興味が惹かれる。此二つの理由を以ても興味の上に於ける優劣は定められるが、猶現在に於ては野球の方が庭球よりも多數の見物人を有して居る事實が一層明かに之れを證する。日本に於ける第一流の野球の試合に於ては、入場料を徴集しても猶且つ少くも其見物人は千人、多きは一萬を超へる事が常である、庭球の試合に於ては入場料はとらなくとも集る見物人は野球の試合に於ける入場者の五分の一乃至十分の一位である。要するに興味中心といふ點から云へば野球は現在に於て庭球よりも優つて居る事は爭はれない。

最後に此競技の特色及び優劣に就いてもう一言繰り返すならば、國際的の立場から云へば、野球は未だ外國に對して覇權を握る事は不可能であるが、庭球は世界的競技として將來日本は覇權を獲得する可能性を有つて居る。此點に於て今後日本に於て庭球が注意される大なる原因があると思ふ。兎に角此野球と庭球とが共に戸外（アウトドア）の遊戯として、一方は興味に於て優り、他方は普及性に於て勝れて居ると云ふ相違はあるが、今後我國に於て益々盛んに行はれるやうになる事は大に喜ぶべき現象であると思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

想華

伊太利遊記

アルプを越えつゝ

柳澤健

……レマンの湖を後にした汽車は何時とはなく粗く險しい風景のなかにはいつて行く。もうアルプの山地にかゝつたのである。

シオンの町といふのはかうした山地のなかに廢れた古城とともに寂しく横はつてゐるところだ。今まで自分たちの乘つてゐる車を牽いて來た機關車は、こゝで電車に代へられる。險しい連峯が立ちふさがるやうに行手を限つてゐるのである。風はやゝ冷たく車窓のなかに吹きはいつて來た。空は曇りがちではあつたが、所々に碧い眼のやうな優しい色が覗いてゐた。それはもうわが『伊太利の空』にほかならないのであつた。

シオンの町を出た汽車は、谿間に沿ふて流れる清らかな川と並んで次第々々に高く登つてゆく。その左右に聳え立つてゐる山々は、ある時には險しい岩のみから成つてゐるときもあり、またある時には生え繁つた杉の密樹のみから成つてゐる時もあつた。然しその何れの山も、その頂を見上げると、そこには眞白な雪の燦きと灰色の雲の動きとがあつた！

かうした山の麓には何れも葡萄の樹を植ゑてゐるのだつた。燒けたやうな粗々しい砂礫の土地の上に、兩手でつかめ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る位の小さな樹が僅かな緑の葉を付けてゐるのを見るのは痛々しいとともに勇ましい感じをも誘ひ起させられる。その感じは此樹の上にばかりではなくそれを作る人のうへにもまた馳せて行くのだつた。その人たちは、この粗貧な畑のあちこちに木作りの粗末な建物を立てて住つてゐた。その建物の木許りで出來てゐること、その窓取や屋根の具合、わけて屋根の庇が長く出てゐる様子などは、日本の山地などで見るものと左して異つてゐるところがなかつた。薄い煙がその建物の屋根にまつはてゐるのも、自分たちに遠い故郷の姿を想ひ出させないでは措かなかつた。かうして、粗い貧しい風景も、旅人の心には感じに充ちた方をつゝんでゐるのであつた。……

葡萄畑が盡きてしまつて、ほんの石許りの山地に來ても、矢張り、あちこちに人家が散ばつてゐた。所々には廢れた城の跡らしい赭土色の壁や、崩れ落ちてゐる石の橋などが見えたりした。『あんな所にも人生がある！』――と、自分は旅に出てよく味ふ感じをまたしてもこゝで繰り返さずにはゐられないのであつた。それとともに、かうした城や橋や人家やがまだ廢れなかつた古い昔のことを、――言ふまでもなく自分の足や馬の背やでこの山を越さねばならかつた古い昔のことを、――ハンニバルの大軍の越えて來た當時のことを、ナポレオンの大軍の越えた當時のことを、さてはラブレーが、スタンダールが、ゲエテが、スタール夫人が越えて來た當時のことを、今更に感慨深く想ひ浮べぬわけには行かなかつた。自分は幻を眼のまへに見るやうに一度にそれ等の古い『物語』を、それ等の形をとゞめない城や橋やの上に見たのであつた。

それにしても、かうした風に車中に安座して古い『物語』を易々と讀みながら苦もなくアルプの嶮嶺を越え得られる今日の自分を幸なものとして欣んでいゝのであらうか？　ふとその思ひに打たれた自分の胸に、曾て讀んだことのある十九世紀のはじめの佛蘭西の詩人アルフレッド・ド・ヴィニィが長篇の詩『牧人の家』(ラ・メエソン・ド・ベルヂエ)の一節が、泛ぶともなく泛んで來た。その詩の意(こころ)は、『小徑に添ふて小やかな歩を運ぶ詩人にとつては、鐵道といふものは絶對的に急を要する場合のほかは許されないものである。たとへば、親しい友が自分に救ひを求めてゐるとき、祖國(パトリー)が我々に防禦をば求めてゐるとき、さては科學上の集會に招かれてゐるとき、または死の床にある母上がわれを呼んでゐるとき、――これ等をほか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にしてはゆめ機關車なぞにたよつてはならないのである………旅にある詩人はあらゆる事象のうへにその長き眼尖をば、流れ注ぐ大河のごとくに注ぎ込みながら、そのあらゆるものを顫へる心もて問ひ質ぬることをしなければならない。そして首傾けつゝ、歩みては立ち停り、立ち停りてはまた歩み出すといふやうにしなければならない……」——かう言ふのである。實に旅をもて心の夢の上をさ迷ふ一つの方法であるとのみ解いて行かうとする詩人にとつては、この鐵路のうへを慌しく馳驅し行く機關車といふものはたゞに動揺と雜沓とを心の上に持ち來すほかには他に與へるところのないものであると言つて宜しいのであらう。自分も亦心と眼とをもて自然のなかをおもむろに歩き行かうとする熱望に於ては左してヴィニィにも劣らうとも思はぬけれど、限りある月日と限りなきノスタルヂアの念との間にあつてどうしてその詩の意のまゝに『首傾けつゝ歩みては立ち停り、立ち停りてはまた歩み出す』旅を旅することが能きやう！

あゝ、それにしても、もうあの嶺一つさへ越せば、もう伊太利だ、伊太利の空だ、ロムバルヂアの野だ！　といふ喜びに溢れた聲とともに幾日かのアルプの嶮しい旅をふりかへつて不覺溜息をもらしてゐる古い世の旅人の姿を心のなかに描き出すと、矢張りかうして車窓に凭れたまゝ事無く數時間のうちにはその伊太利の土地に着いてしまう自分たちをば仕合せな世に生れた者であるとなすことは能きないのであつた。…………

滑らかな溪流はまだ下を流れてゐる。奇麗な白い砂がその流れを透いて涼しく眼にうつる。素足でこの流れを歩いて見たいといふやうな望みが、——わけて靴を日夜足から離し得ない歐羅巴の生活を續けて來た自分たちの心をば、強く刺すのであつた。その流れに釣をしてゐる男。その流に沿ふた白い道をとぼとぼ歩いて行く男。その道の兩側にずつと並んで微風にかゞやいてゐる白楊樹の並木。

サンプロンの大隧道。起工してからそれが竣るまでに六年も費やしたといふ、長さが七里に近い大隧道——それを汽車が通り拔けると、いよ〳〵伊太利の土地にはいる。その最初の停車場のイゼルレを車窓から眺めると、そこゝに佇

立してゐる茶褐色の服を着け大きな帽子を眼深かにかぶつてゐた兵士たち、泥にまみれた勞働服を身にまとふて險いし眼尖でこつちを見てゐる人足たち、古風な廢れた建物の數々、それから、板の上や街燈の上に書かれた伊太利文字――もう疑のない伊太利がそこに現はれて來た。自分は、心のなかで微笑みながら、やゝ胸を張つて車窓の外の空氣を深く吸つて見た。あのシトロンやオランジユの花の香かぐはしいといふ伊太利の空氣を。然しながら求めるそのかぐはしい香の代りに自分の鼻に來たところのものは、埃を含んだ熱つぽい土の匂ひと草の蒸れとであつた。ミニヨンの優しい唄のなかに描き出された輝はしい伊太利の空氣でなくて、むしろ、(自分がしばしば巴里の樂堂で聽く機會を持つた)樂人シヤルパンチエの騷がしい樂曲「伊太利の印象(アンプレツシオン・ダイタリ)」のなかに描き出された人馬のひゞきの夥しい埃の多い伊太利の空氣であつた。然し自分は依然として心の微笑みを消さなかつた。よし伊太利の空氣が果樹の花の匂ひに充ちてゐるにせよ、さては、埃の色と臭とに充ちてゐるにせよ、それが眞實の伊太利であるならば、それだけで自分の心は滿足する。自分は想像の華の創り出した伊太利を確かめやうとして遣つて來たのではなくて、眞實の伊太利を見にと遣つて來たのだから。――

イゼルレの停車場を出るとその次に來るのはやゝ耳に馴染のドモドツソラの停車場である。この邊に來ると、もうアルプの山地とも離れたといふ感じを起させる。廣やかな野がゆるやかに展つてゐる。――ロンバルジアの野のつゞきだ。うしろの方には雪を頂いた山々が重り合つて、そこを越へて來た自分たちに懷かしい眼くばせをしてゐるやうに見える。あゝいよ〳〵アルプを越えた!――何とはなしに輕い溜息さへもれるのであつた。

トーチエの清らかな流れを見ながら汽車の馳けゆく道は刻々と低くなつて行く。展望はます〳〵擴がつてゆき、後方の雪山はいよ〳〵遠ざかつて行く。

うと〳〵するともなしに暫く眼を閉ぢてゐた自分は、隣席のO氏から急に呼び起されて眼を開くと、――ほう、それこそ眼の覺めるやうに爽やかで美くしい景色が車窓に映つてゐた。大湖(ラゴ・マジョーレ)である。碧玉のやうに透むだ青い水、その水を圍む繁樹の數々、その濃い綠りの樹葉のあちこちに點綴する花、その花に充ちた森のなかに夢のやうに優しく埋もつてゐる綺麗な別墅(ヴイラ)の數々、そして、水のなかの小島、白楊、ヨツト、白鳥、……今まで粗い巖から成つてゐる風景のみに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親しんでゐた眼は、忽如と現はれたこの麗はしい湖水のために眩い眩惑さへも感じるほどであつた。爽やかな緑とかぐはしいの花匂ひを交へた微風とが車室のなかにも感じられた。イゼルレで味ふことのできなかつた『ミニオンの伊太利』がそこにあつた！　自分はふたゝび心のなかで微笑みながら、イゼルレの湊に充ち熱に充ちた空氣が伊太利であるのに間違ひがないとゝもに、この『香橙花咲く邦、はた黄金の果實と鮮やかなる薔薇との邦』の空氣もまた伊太利であるのに間違ひのないことを肯かずにはゐられないのであつた。

大湖の彼方杳かにアルプの雪峯がはろばろと見渡された。薄曇の日和のなかに黄昏が何時しか迫つて來てゐることゝて山谷一帶の色合が薄鈍いろの煙のやうに靠けかゝつてゐるのであつたが、そのなかに山頂の雪だけが折から射して來た夕陽の光をうけて、恰度薔薇の花瓣をそこに置いたやうに、鮮やかに燦いてゐるのであつた。その美事な光の花瓣のうへにはそれ〴〵に雲の影が半ば燦き半ば曇つて棚曳いてゐた。その姿と色合とは、たゞちに自分たちに、今までいろ〳〵の美術館なぞで見馴れてゐたこの國の名畫のなかの風景の一部をば想ひ出させるのであつた。それ等の畫を見る毎に、何時も感じてゐたところの一種の様式の臭味、――その臭味と思はれてゐたものが、實はこの國に於ては寫生とも稱す可きほどに現實なものに他ならぬのを今更に悟ることが能きた氣がしたのであつた。（この後も自分は新らしく風景を見たり人の顏や姿やを見たりする度に、どれほど、さうした古畫のことを想ひ出すのを常としたことであらう。あのボツテイチエリの描いてゐるわざとらしきまでに特色のある容貌、――それも自分は何度となく街を通り過ぎる女たちの上に見ることが能きた。『あ、ボツテイチエリが通る！』――こんなことを口にして同行のＯ氏から笑はれたことも尠くなかつたのであつた。矢張りその國まで行つて見ねば、――』。旅に出ると起りがちのかうした思がまたしても心のなかに湧くのであつた。その思はまた自分の心を運んで、かの詩人ゲエテのうへに、――おそらくアルプを越えるあらゆる旅人の胸にやどり得べきかの『伊太利旅行』の著者ゲエテのうへにと、持ち行くのであつた。

徹頭徹尾レアリストの型を失はなかつたゲエテが、世にも稀なる偉大豐富なる想像力の持主であつたにもかゝはらず居ながらにして名所を知らうとする空想をば限なく侮蔑してゐたことは、彼が心友シーラーに答へた手簡の一節

に明瞭に現はれてゐる。シーラーはゲエテに書くに、近く刊行せられたるルヴアイヤンの著書『中央阿弗利加遊記』のなかに、好箇の叙事詩の題材と目すべき美くしきエピソードの數多くあることを以てして、暗にゲエテがそれを題材として作詩するにいたらんことを奬めてゐる。それに對して、ゲエテは實に斯う答へてゐる。——

『旅行記といふものが、(殊に君が予に指示して與れた旅行記には)數多くの美くしい叙事詩的題材を含んでゐるといふことは、全然君の云ふ通りである。然しながら予はかゝる題材を用ゐやうとはつゆ思はない、といふ譯は予自身そこに描かれたる邦や地方やを見て居らぬからである。予は、詩人なるものはこの種の著作に於て題材と個人的に同化すべきことが缺く可からざる要件であることを確信する。旅行に關する講釋は決して經驗と代り得べきものではない。……若し『オデイシイ』がわれ〳〵、即ち中央歐羅巴の住民であるわれわれを魅する所がありとするならば、それは單純に道徳的の關係に過ぎない。何故とならばわれ等の想像力はその叙述の部分をば充分に理會することをなし得ないからである。然るに予がナポリ若くはシチリアにあつてこれ等の邦々を描きたるその詩篇をば讀んだときには、その詩篇全部が何といふ燦ゆき光輝につゝまれて予の心に現はれてあつたことか!……予は君に告げる、それ以來『オデイシイ』は予にとつて最早一箇の詩篇ではなくなつてしまつた、予は實に自然それ自身をそのなかに見たのであつた』

ゲエテのこの言葉は實に正しい。彼が伊太利の土地で『オデイシイ』を讀むでそれが伊太利の自然そのものであることを深く感じたと同じやうに、自分もまた巴里の明るく煙つた空の下でサマンを讀みドビュッシイを聽いて什麼にそれがそこの自然と離れ得ないものであることをば感じたことであつたらう。また西班牙を旅してヴエラスケスやゴヤやグレコやを見てまたそれがそこの邦の氣紛れ(カプリス)と明暗とに富んだ自然と全く放ち得ないことをば什麼に強く感じたことであつたらう。自分は、藝術がその生れ出た自然に對する關係はそこに生ふる樹や草やとすこしの差異もないことを事實に於て信じなければならなかつた。あのアルプの夕陽にかゞやいてゐる雪頂のうへにたゞよふ雲翳の一抹、——もうそれにさへラフアエルやチチアノの畫の後景がありありと見られるのではないか。ゲエテの言葉はまつたく正しかつた……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雪のうへにかゞやいてゐた夕陽のいろは何時しかに薄れて行く。白いいろが一きわ清く寂しく薄暮の空に浮き出てくる。

それを眺めてゐる自分の胸には、その山の彼方に當つてゐるサン・モリッツの侘しい村の姿が仄かに泛んできた。その村に一生を送つた畫家のセガンチニ。この人の畫に描き出されたあのうなだれた人とうなだれた牛とは、今もなほあのまゝの姿にこの薄れゆく日の光のなかを悲しげに歩いてゐはせぬであらうか。數ケ月まへに伯林の畫廊で見た彼の『故郷への道』の上に、それとなく感ぜられたうなだれた馬の頸についてゐる寂しい鈴の音と微かな晩鐘のひゞきとが、山をみつめてゐる自分の心のなかに幻のやうに傳はつて來さへもした。

……何時か日はすつかり落ちた。汽車はロンバルジアの平原をひたすらに南へ南へとミラノの町指して走つて行く。

ミラノの町

――スタンダールとリユイニ――

ミラノには大伽藍（イル・ドウオモ）がある。羅馬の聖（サン）ペドロ、西班牙のセヴイラの本寺（カテドラル）に次いで、歐羅巴にあるものゝうちその大さと美くしさの點に於て第三番目に數へられてゐる壯嚴華麗を極めた寺院である。それから、レオナルド・ダ・ヴインチの筆になる有名なる食堂（チエナ）（『最後の晩餐』と稱せらるるもの）の畫が聖（サンタ）マリア・デ・グラチエといふ寺院に隣つて保存されてゐる。それから、同じく世人の熟知してゐるラファエルの名畫『處女の結婚』がブレラの美術館といふのに收められてゐる。それからまた、世界的と言つてもいいほどにその名が擴まつてゐるスカラ座といふ古く美くしい歌劇場もこの町の中心にある。――

自分は、晝はこの伽藍やヴインチやラファエルやの美くしい建築と畫との巡禮に暮し、夜はまた名だたるスカラ座で

ロシニの歌劇でも聴いて過すことを、この町に着かぬまへから楽しい豫定として豫め目論んでゐたのであつた。

そのスカラ座のまへを自分が通りかゝつたのは、ミラノに着いた日の翌くる朝のことであつた。大伽藍を眺めてからボテツチエリの畫を收めてゐるといふポルヂ・ペツゾリの美術館へと足を向けてゐた時に、不圖古風で壯麗な美に充ちてゐる大建築が廣場(ピアツァ)に面して聳立してゐるそのまへにと出たのであつた。テアトロ・デルラ・スカラとある黄金文字が忽ち眼から心へと落ちて來た。

然しながらその建物は扉も窓もすつかり閉め切つてあつた、それ許りではなく、壁の落ちた箇所や硝子の破れてゐた箇所さへ尠くはないのであつた。自分はそれが目下閉鎖されてゐることをすぐに感じた。道を通る人に尋ねると、それは戰爭當時から引續いて今なほ開場せられてゐないとのことであつた。戰爭が終つてから三年も經つた今日なほかうした有樣にあるといふことは、一面この伊太利が戰爭で享けた傷の如何に深かつたかをも物語るものであつた。徒らに藝文の花をのみ探ねてこの伊太利に旅して來た身ではないけれども、名にし負ふスカラ座のこの佗しい姿を伊太利の旅の第一日目に見たといふことは自分の心を憂鬱にするに充分であつた。「太陽」の帝國、世界の女王、藝文の搖籃と稱ばれた伊太利、その伊太利のなかでも特に美くしく華やかなものに歌はれてゐるこのミラノの町、——そこから先づ旅人が得たところのものはかうした佗しさであつたとは……！

然しながら、この閉ぢこめた荒廢と沈默の建物から却つて自分は華やかに打ち開けられた場所では聽くことが能きない古く美しい唄聲のしのびやかに洩れるのをありありと聽くことが能きたのであつた。その古く美しい唄聲とは、このミラノの町を訪ねる旅人の心のなかに必ず泛ぶべき『ミラノの人』スタンダール——即ちかの忽破翁の麾下の龍騎將校アンリ・ベエルがこのスカラ座に於ける耽美の生活の古い物語が即ちそれであつた。——

『赤と黒(ルージュ・エ・ノワル)』の作者スタンダールが佛蘭西人であることは言ふまでもない。然しながら彼が伊太利、殊にこのミラノの町に對する愛の熱さは、彼をして『ミラノの人(ミラネエゼ)』と自らを稱ぶをためらはせないほどであつた。(巴里のモンマルトルの墓地を訪ねた人は、伊太利語でかう書かれてゐる大きな大理石の墓標を見るであらう。——『アリゴ・ベエレ。ミラノ

の人。彼は、チマローザ、モツアルト、及び沙翁（シエクスピア）を讃めたゝへたると等しき心もて、生き、書き、愛したり』これこそ彼スタンダールの墓碑であるのだ。）彼はこのミラノを目して『伊太利のあらゆる都市のうちにて最も美くしく最も快活なるもの』とさへなした。が、この言葉は皮肉な批評家の口を俟つまでもなく、ミラノの町それ自身の叙述ではなくて、實はミラノの町に於ける彼自身の生活の告白であつたことは言ふまでもないことであつた。而してその生活こそ他ならぬ今眼前に佗びしげに聳立してゐるスカラ座のなかの一隅で營まれたものであつたのである。

ミラノに於ける彼の生活を一語で盡すならば、戀と藝術と社交との生活であつた。そうした生活の屈竟の棲家として彼はこの華やかな歌劇場のなかの一つの棧敷を選んだ。彼はそれを借りてそこに居つたのだ。彼は夜になると二つの蠟燭をそこに點してよく物を書いた。部屋のなかの熱い空氣、こゝかしこの私語（ささやき）、露はな肌、白粉と寶石との彼は、『伊太歡語、さては音樂の韻律、――このなかにあつて彼のペンは走つたのであつた。その棧敷のなかに姿が見えぬ時には利の最も美くしい聲（ベル・ヴオア・ド・リタリイ）』の持主である歌劇女優ヘレナ・ヴイガノの許にあつて時を過すのを常としてゐたのであつた。それとも彼の所謂マダム・ペエ――即ち愛人ラ・ピイトラグリュア夫人の許で……

彼が『チヤイルド・ハロルド』の著者と顏を合はしたのも實に此スカラ座のなかに於てであつた。バイロン卿を初めて見た時に彼は先づ卿の眼の美しく表情に充ちてゐるのに強く胸を打れたと述べてゐる。其翌くる日に彼は卿と食事を俱にした。二人の交情はたちまち濃くなつて行つた。やがて毎夜の様に腕を組み合ひながらスカラ座の廊下を漫歩する若い二人の――ドン・ジヤンの姿を人々は見たのであつた。スタンダールはバイロン卿のせがむにまかせて、よく忽破翁（ナポレオン）に關する數々の憶出を、わけて露西亞退却の悲しくも慘しかつた憶出を、この廊下を歩きながらに語りつゞけたのであつた。

聲無く佇むスカラ座の廢れた建物は、今や自分のために見果てぬ白日の美くしき夢をそれからそれへと編んでゆく――

――思へばスタンダールのミラノに於ける生活は蕩兒ドン・ジヤンが耽美の生活にも較べ得るものであつた。然しながらこの甘美に華やかなる生活も彼を永くは捉へ得ず再び彼をして羅馬にフイレンツエにさては巴里に徨しき旅の日を送らしめるにいたつたといふことは彼が必しもドン・ジヤンの徒と等しくはないことを語らうとしてゐるのである。まこと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に彼は、一箇の生活の型に甘んずるにしては餘りに『人間的』の禀性を持つてゐたのであつた。彼は、徹頭徹尾『型』の人間ではなかつた、――むしろあらゆる型を綜めたる人間であつた。スカラ座の棧敷のなかにフエヌロンやモンテスキユを論じさてはかの『戀愛論（ロラムール）』の美くしき頁を書いた彼は、また實に燦ゆき龍騎將校の正裝を身に着けて雪の露西亞の野を奈破翁とともに馳驅した彼でもあつた。戀愛のなかに彼の最上の歡びを味ひ得るとして日一日としてアヴアンチユールなしでは過し得なかつたやうな彼は、やがてまた佛蘭西の領事としてアドリアチツクの蒼洋にのぞむチヴイタ・ヴエツキアの町に格勵外交事務に當つた彼でもあつた。實に彼はあらゆる傾向、あらゆる才能、あらゆる趣味、――そしてあらゆる善と惡と長所と缺所とをそのまゝに一身のなかに綜めてゐた人間であつた。現代佛蘭西の文壇の伊太利通とも言はるるガブリエル・フオール氏が曾てある所で書いてゐたやうに、彼の多事多樣なる生活を知らずともその著作を讀んだのみでもその際に得る感じはまた實に彼が『一箇の人間（オンノンム）』であるといふことであるとなしてゐるのは、この意味に於て正しい批評と言はなければならない。全く彼は文學者の型でも軍人の型でも官吏の型でもはたドン・ジヤンの型でもなかつた、さては夢想家の型といふのでもなく、實踐家の型といふのでもなかつた、善の型でもない代りに惡人の型でもなかつた、しかもそれでゐて最も優れたる才能と趣味とを享けた地上の一人であつたのだ、――それこそは一箇のすぐれたる『人間』の像であると言ふほかに名付け得べき言葉が何處にあらうか…………

彼の生涯、彼の制作を通じて見られる此『人間らしさ』こそは、また、わが現代に於て最も稀にしか見るを得ないもの、日とともに益々稀になり行くものではなかつたか？　人々は已れを見つめるまへに先づ隣人の上を眺め樣とする、隣人と異らさらんが爲めにのみ心を勞し思を遣るのを知つて、眞の自己の純眞なる發意の持つ力强さと美くしさとを感じやうとはして居ない。彼等は何よりも『社會』を怖れる。その爲めには彼等は甘んじて『自己』を售らうとする。――『人格』そのものを售らうとする。『型』や『職業』や『黨與』や『流派』やが、『人間らしさ』に代らうとする。

かうした時代にあつてスタンダールの生涯と制作を思ひ遣れば一層意味深く貴いものゝやうに考へられる。そこにつゝまれてゐるところのものは來るべき新らしき世界への轉機の明かな原動であるやうにも感じられる。われ／＼の求め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

尋ねて踏み行くべき徑であるやうに感じられる。——

スカラ座から暫らく行くとボルヂ・ペツゾリの美術館(ムセオ)といふのに出る。そこを訪ねる第一の大きな樂みはわがボッテイチエリの作品を見るためだと言つてよかつた。それが、やがて美術館内を一巡して外に出たときには、自分の胸のなかには何よりもリユイニの作品が、——十五世紀から十六世紀の始めに亘りこのロンバルヂアの壁畫家(フレスカンテ)として美しい作品の數々を殘したベルナルヂイノ・リユイニの作品が、強く深く殘つてゐるのを感じるのだつた。曾て倫敦の大英博物館のなかで、巴里のルーヴルのなかで、さては伯林の帝室美術館のなかで、多くの名畫にはさまれてこのリユイニの作品を見たときにはさほどに強く心を惹かれることもなかつたのが、このミラノの小さな美術館のなかで『聖(サンタ)カタリナの結婚』や『十字架上の基督』やさては『聖(サン)ジエローム』やの幾つかの作品を眺めたときには、思はず快い溜息の洩れ出るのを禁めることが能きなかつた。ロンバルヂアの野に植ゑられた果樹の枝に匂やかに色づいてゐる果實!——自分はそんなことすらも思つて、その軟らかな艶はしい色調を飽かず眺めたのであつた。

リユイニの作品は、この少さなボルヂ・ペツゾリの美術館にある許りではない。アムブラジアナの美術館といふのにも可なりあるし、第一ブレラの美術館(こゝはミラノ最大の美術館といふ許りではなく、歐洲各國を通じても大きい方になつてゐる)のなかにもずゐ分と多く收められてゐるのである。リユイニ巡禮の旅人は、彼の生れた土地であり且身を終つた土地であるところの湖畔の小村サロンノを訪ねてそこにある數多い壁畫を見なければならないと言はれてゐるけれども、このミノラの町にある作品だけを訪ねて歩いてもこの畫家の持つ世界の優しさ美くしさのあらましは知ることが能きる氣がする。わけて心急ぐ旅を續けなければならぬ自分には、如何にリユイニが眼を心を悅ばすとは言へこのミラノにある作品だけで滿足しなければならなかつたのは言ふまでもないことであつた……

リユイニの作品は卒然と眺めると實によくレオナルド・ダ・ヴインチの作品を想ひ起させるものがある。殊にレオナルドの『ジヨコンダ』や『聖(サンタ)アンナ』やの叡智微妙を極めてゐる女人の面輪のごとは、リユイニの『サロメ』の面輪の上に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も若い『救世主』の面輪の上にもはた『聖母』の面輪の上にも明らかに映つてゐると言つてよかつた。晴れて朗かでありながら靜かで深い影を失はず、優しく婀やかな夢にひたりながら爽やかで涼しい風に吹き充ちてゐるその構圖と筆觸とは、このロンバルヂアの畫家にもこのトスカナの畫家にも等しく見らるゝところのものであつた。

然しながら、この最初の印象は、續いて起る長い熟視の爲めに容易に消え去るべきものである。リユイニとレオナルドとは外貌の類似にかゝはらずその底を流れてゐる本質に到つては實に東と西との差があると言はねばならない。即ちリユイニの藝術は飽まで甘美なる色調に煙らされたる『夢』であり、これに反して、レオルドの藝術は長き冥想と細心なる彫琢とから生み出だされたる『叡智』である。リユイニはレオナルドのやうに、己れの魂の奥深くをみつめ、その神秘なる心の世界をば色彩によつてこの世に表現せんことを望むといふやうな考から畫を描いたといふことは殆んどなかつたと言つていい。彼は、たゞ己れの技術(メチエ)に歡びと誇りとを感じ、たゞ己れの樂しみをのみ樂しみとして、制作に耽つてゐた。若しレオナルドを人生派と名付くるならば、彼は明らかに藝術のための藝術を念ふ人々の群のなかの一人であつた。近代の佛蘭西畫壇にその人を求めるならば、彼こそは明かにルノアルであり、はた、ピユヴイ・ド・シヤヴアンヌであつた。(シヤヤヴアンヌがリユイニの作品から影響を受けてゐることは人々が知る如くである)

かゝる稟性の下に制作を續けてゐたリユイニにその作品の中に描かれたる人物に深き表情と性格の現はれて居らぬことを難じ、若くはその人物の群の配列がやゝみにくき混雜に陷り又はその風景(ペルスペクチーヴ)が常に誤りを伴ふてゐることを責めやうとするのは明かに焦點を間違へた批評の類であることを知らなければならない。彼の藝術は實にその色合軟かなる快き諧調(トン)の美にある、香氣に充ちたる情趣とその音樂とにある。――再び言ふのを許されるならば、ロンバルヂアの野に匂やかに香を吐く果實の美しさにある。

あゝ、それにしても、あらゆる畫のうへに構圖の確實と觀念の表現とのみを求めるに急がしくて、その畫全部のうへに香煙のごとく匂ふ仄かなる香氣に心をとめる人の如何に乏しい現代が、われ等のまへに立ちふさがつて居ることか！作爲に苦澁せる畫家のみ深く持て囃され、快き笑ひのなかに唄歌ふ畫家の低く蔑まれる現代が、如何に厚くわれ等の周

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

園を取り卷いて居ることか！

リユイニよ。卿もまたわれ等の待ちのぞむ新らしき世界をば喚びさます使徒の一人であつた……

ブレラの美術館の裏手にあたつて聖ロレンツオの寺院がある。ミラノでは最も古い寺であり、その圓屋頂の形はレオナルドのいたく愛していたところのものであるといふ。それを暫らく眺めてから水に添ふた靜かな通りを歩いて行くとやがて程もなく青々とした公園に出る。

水の噴き出てゐる池のまへに置かれた腰掛のうへでしばらく休憩する。あたりには茶色の天鵞絨の着物をつけ白い靴下を膝の上まであらはした金髮の少女が幾人となく遊び戯れてゐた。その姿は、——殊にその伶悧らしい美くしい面輪は、たちまち自分に今しがた見て來たリユイニの作品のなかの數々の女性の面輪をば思ひ出させるのであつた。薔薇の花の垣を後景にした淑やかな『聖母』の面輪が、金髮を波うたせた眼の大きい女性のやうな若い『救世主』の面輪が、悲しみのなかにも艶やかな媚容を忘れてゐない『十字架上の基督』のなかのマグダリアのマリアの面輪が、さては貴女の戀に惱むがごとき『聖カタリナの結婚』のなかのカタリナの面輪が、そこにこゝに存在してゐるのをば感じないわけには行かなかつた。あゝ、リユイニの時代から四百數十年を經た今日、なほその美くしき姿相はこの地上にかくも美事に生き續けてゐるのであつた。自分は、漠としてはゐながらに湧き立つやうな愛着の念をこの恒久豐麗なる『自然』に對して抱かずにはゐられなかつた……

日はかゞやかしかつた。アルプの彼方の國のことを想ひ遣ると、流石に太陽に近い所に來たことが感じられた。明るい箇所は眩ゆいほどに明るかつたが、その蔭はそれとは反對に强い暗さにつゝまれてゐた。巴里の公園なぞで見られる一帶が優しく煙つてゐて明暗が定かならぬといふやうな氣配を持つ代りに、こゝでは總てがはつきりとした明暗に分れてゐた。空なぞを見ても、雲の形が鋭く刻まれて矜すやうな光を帶びてゐるのであつた。

……公園を出てしばらく歩いてゐるうちに、空の樣子が急に變つて來た。雷の音がする。閃光がきらめく。そして、

烈しい雨が追つて來た。

久し振りで自分は日本での天氣を見るやうな氣がした。佛蘭西あたりでは見られないやうな天氣の荒い變化が、この伊太利にはあつた。そしてそれはまたわが故鄕の國の持つ天氣でもあつた……

『光と熱こそは完成なれ！』――かう言つたサン・ベルナルドの箴言が不意に自分の頭に泛んだ。それは伊太利人の心の箴言として吐かれた言葉ではあつたが、自分はそれをこの國の自然のうへにも用ひられるやうな氣がした。

雨が止んで、再び『光と熱』の焰が流れて來た……

ヴエローナ

――『ロミオとジユリエツト』の町――

汽車がロンバルヂアの平坦な曠野を出はづれて間もなくひろびろとした湖水の側を通る。伊太利全土を通じて最も大きい湖水と言はるゝラゴ・ディ・ガルダであつて、遠く墺太利との國境になつてゐるチロール地方の雪の融けて、こゝに流れ入るのであるといふ。車窓から眺めると近い岸の丘や野には、シトロンの綠樹が生え繁つてゐる。森には小鳥が囀きしきつてゐる。紅や黃や白やの草花が細かい模樣のやうに地上にこぼれ咲いてゐる……

ヴエローナの町も、かうした水に富んだ起伏の多い地方の一部に橫つてゐるのである。

O氏と自分とがミラノを立つてこの町に着いたのは四月の廿日の午後の四時半頃であつた。

シエクスピアの戲曲で誰一人知らない人もない『ロミオとジユリエツト』の情話のあつた町、――たゞその古く美くしい物語（ロマンス）に心惹さるゝまゝにこの町に思ひ出の一夜を過さうとして下車したわれ等ではあつたが、馬車がやがて半ば壞れた古い石門をくぐつて石道の上を轣轆たる音をひゞかせながら次第々々に町のなかにはいつて行くとともに、展開してゆく町の姿を眺めてゐたわれ等の眼は、知らず知らずに驚ろきと悅びとのために輝き出して來ずにはゐられなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。それは、われ等がアルプの北から來てはじめて見た伊太利の都會のミラノ、——しかもスタンダールの『最も清らかで最も快活な町』であるとまで爲したミラノ、——と較べて見ると、杳かに杳かに伊太利固有の誘惑をそたへてわれ等の心を古い懷かしい夢のなかに率き行くに足る町であつたからだ。まつたくわれ等は、ミラノの町が餘りにも現代の『歐羅巴』であつたのに輕い失望をすら感ぜずにはゐられなかつたのであつた。スタンダールがあゝもその町を愛したといふのは彼の否認した言葉があるにも拘はらず、やはり戀人のマダム・ペエやヘレナ・ヴイカノやがその町のなかに住んでゐたといふ事實に歸さなければならないことを今更らしくむきに思つたほど、ミラの町の外貌は、今まで自分が佛蘭西や英吉利や獨逸やで絕えず見馴れた町と較べて大した差がなかつた。自分の心はやゝ寂しかつた。胸に描いてゐた『伊太利』の夢が急に薄るゝ思ひまでしたのだつた。

それが、思ひもかけずにこのヴエローナの町で、失はれかゝつた自分の『伊太利』の夢を取り戾すことが能きたのであつた。見よ、あたりの建物を、敷石の道を歩いてゐる男を女を子供を、大道の眞中の市場を、そこに並べられた野菜を果實を肉を玩具を……それは一つとして伊太利特有の色と匂とを帶びてゐぬものはなかつたと言つてよかつた。近代的な歐羅巴化の澎湃たる波もこのさゝやかな町のみは取り殘したかのごとくであつた、況んやジャヅの樂の音やタクシーの機笛の音に到つてはこのなかに、容易に求め得べくもなかつた。自分たちは正しく『伊太利』のハート、——キャあブレット家とモンタギユー家の時代とは行かずとも、尠くもその時代の匂ひだけは仄かながら感じ得やう古い『伊太利』の眞中に在ることを知つたのであつた!

アデイジエの河にのぞんだ聖・レンツオとよばれるホテルに投ずる。何といふ廣々とした玄關、そして廊下、そして部屋。それは、自分たちに遠い日本の廢れた驛路にある大きな侘しい宿屋のことを思ひ出させるのだつた。われ等のほかには殆んど客らしいものゝ姿も見えなかつたことも、一層その廢滅の感じを深くするのであつた。

四月も末に近かつたのであつたが、かうした人氣のないホテルのなかの廣々した部屋では、薄寒さと侘びしさとが犇々と心にも皮膚にも感じられた。自分たちは女中をよんで、日が暮れる頃には煖爐に薪を燃してくれるやうにと言ひつ

けてから、再び町のなかへと出掛けたのである。

狭い通りの兩側に立ち並ぶ古風な美くしい建物は、その都度自分たちの足を停めずには措かなかつた。その建方。その建物の壁上に描かれた色彩もおぼろになり果ててゐる壁畫。窓の具合。――そうした窓から美くしい面輪を露はしてゐるブロンドの髪に薔薇の大輪な花をつけた少女。四辻に出ると、自分たちの眼はその四方に牽かれる。何れもの通りがそれぞれに古い廢れかゝつた美くしさと盤はしさの姿と色とをもつて自分たちを手招ぎしてゐる。

ある茶店（カフェ）の前を通つた。咽喉の乾いてゐた自分たちは、一寸ためらつたのちこの薄暗い小さな建物のなかにはいつた。肥つた眼の美くしいお孃さん（シュョリーナ）の運んで吳れた苦い（にが）あくのつよい珈琲を唇にしてゐると、思ひがけなく今まで隅の方に密語してゐる二人の男が自分たちの卓子の前まへまで遣つて來た。そして自分たちに理解できない伊太利語で何やら話しかけた。

薄暗い小汚ないかうした茶店のなかで、遠慮もなく話し掛けやうとしてゐるこの二人の男に對して最初のほどは自分たちが薄氣味惡い感じを起したのは無理もないことと言つてよかつた。然しながら、やがて覺束ない佛蘭西語でその一人の男が話し出すのを聽いてゐるうちに、そしてまた、薄暗がりに馴れた眼で二人の無作法ながらに人の善さそうな顏が判りはじめたときに、自分たちの不安は直ちに去つてしまつた。二人はわれ〳〵日本人が珍らしくて話しかけて來たのに過ぎないのであつたから。――

『自分たちは日本人を見たのははじめてだ』とも言つた。『伊太利は日本に對して大なる同情（サンパチ）を持つてゐる』とも言つた。それから、O氏の黒く擴げた襟飾（ラヴアート）を指しながら『あなたはアルチストだといふことを先刻からちやんと見てゐる、それで判る』などとも言つた、そして頻りに『ホクサイ、ホクサイ、すてきです（スプランディト）！』とも言つた。思はない土地で思はない男から我邦の北齋の名をきくのは、自分たちに深い感動を與へた。今更に藝術の持つ力の强さと廣さとを思はぬわけには行かなかつた。

三十分近くもたどたどしい言葉での會話がつゞいた。こつちから遣つた名刺に印刷された日本文字を見ながら『あゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何といふありがたいスーヴニールでせう！』と他意なく悦こんでゐる二人と、それぞれ固い握手を交はしてから、自分たちはこの茶店（カフエ）を出たのであつた。

ピアツア・エルベといふのがこのヴエローナの町の中心になつてゐる。餘り廣くもない廣場（ピアツア）だけれども、その眞中に賑やかに展げられてゐる露店の群や、その周圍に立ち並んでゐる古風な飾りに富んだ建物やは、道行く旅人の心を奪はずには措かぬまでに、如何にも伊太利らしい情趣に溢れたものであつた。夥しい行人の服裝や帽子やも、古い伊太利の畫なぞでよく見馴れたものが多かつた。古風ながらに賑かで快活なその廣場の眺めは、そゞろにまたシヤルパンチエの名曲『伊太利の印象（アンプレシオン・ディタリ）』のなかのやゝ騒々しい『驢馬にて（ア・ミュール）』のゲエな樂節を自分の心に思ひ泛べさせるのであつた……

このピアツア・エルベから東にさした通りを暫く行くと、——いよ／＼かの『ロミオとジユリエツト』のロマンスの夢の破片が現れる。カザ・デイ・ジユリエツテ、——『ジユリエツトの家』と言はれてゐる古い建物が、その通りの左側に立つてゐるのである。

あゝ、ヴエローナ。この數文字は、いままで如何に幾多の多感な人々の胸に悲しくも美くしい戀物語を想ひ出させることとなつてゐたか！ 實に伊太利の字を耳にし眼にする毎に自分の胸にたちまち泛べられる名はと言へば、このヴエローナと、かのパウロとフランチエスカの悲しき情話の町リミニとであると言つてもよかつた。あゝ、そのヴエローナの町が、今まざ／＼と自分のまへに樂欲と死との滅びざる物語の立像を現はさうとしてゐるのではないか！ 自分の胸は流石に靜かではゐられなかつた。

——が、夢見る者の兎もすれば味はせられる幻滅の悲しき運命がそこにもまた待つてゐた！名も床しい『ジユリエツトの家（カザ）』といふのは、實に狹隘な電車道を擁して立つてゐる八百屋やら雜貨店やらのなかに立ち交つた一軒の古い無雜作な建物ではなかつたか—— 立ち停つてその建物をゆつくり眺めやうとすると、あはたゞしいベルを鳴して電車が通り過ぎる。鞭を鳴して馬車が通る、汚ない姿の子供が珍らしさうにわれ等の周圍に集つてくる……

これが、かのキヤピユレツト家の邸宅なのか？ 四月の匂はしい夜に夜鶯の啼く音をきゝながら窓のなかと下とで二

人の美しい戀人が語り合つたといふ邸宅がこれなのか？『……あゝあれ頰を掌へもたせてゐる！　おゝ、あの頰に觸れやう爲めに、あの手袋になりたいものじや……』とロミオが凝視めて口走つてゐるあのジユリエツトの凭りかゝつた窓といふのはあの埃だらけのゆがんだ窓なのか？　シエクスピアの物語りもさることながら、自分が巴里にあつて屢々聽くことを得てこの演劇にもました深い美くしさがあるとまで思つた佛蘭西樂壇の鬼才エクトル・ベルリオスの樂曲『ロメオとジユリエツト』のなかの靜かな陰影と色合につゝまれた『戀の場』は、あゝ、この電車の響きに搖れ動いてゐる薄暗い内庭であつたのか？

自分は苦笑をあり〱と顏にまで浮べながらこの場所を立ち去らぬわけには行かなかつた。

この町には、ほかに、ロミオとジユリエツトの墓所がある。『ヴエローナに墓は多けれども、ジユリエツトとその騎士ロミウスの墓に、優るべきは他にあらず』と古くから歌にも歌はれてゐる通りだ。ジユリエツトの家を苦笑とともに立ち去つた自分たちではあつたけれど、折角この町へそのためのみに來てこの墓所を見ることなしで去るといふことは、氣が濟まなかつた。相似た幻滅の來ることをおそれながらも自分たちは矢張りその墓所への道を訊ねずにはゐられなかつた。

こつちの言葉の不充分なためかその墓所の所在がなか〱に判らなかつた。右の方の通りだと言ふ人があるかと思ふとその次には左の方の通りだなぞと平氣に言ふ人があつた。町の端れの古い圓舞場のほとりを二度までもぐる〱と周つてしまつた。

何時か夕陽も薄れかけてきた。漸くのことで自分たちは場末に似た感じのする廢れた町の一角にその墓所の墓守の家を見出すことが能きた。二階にゐた墓守のマダムが鍵を手にしながら、その場所へと自分たちを導いて行く、――

人家の裏になつてゐる空地を横つてその墓所があつた。石の圍ひがしてあつて、なかは綺麗〱に掃き淸められてゐた。水盤のやうな感じのする四角な缺けた石がその場所の眞中に置いてあつて、その上を新らしい石の屋舍が被ふてゐた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それは、言までもなく、ロミオとジユリエツトの屍の横はつてゐる箇所に他ならなかつた。あたりには樹木が多かつた、ふと見るとその樹木の下にはまざ〳〵と新らしいシエクスピアの像が置かれてあつた。樹木の間からは仄かに月が浮び出てゐた。何處からともなく町のどよめきに交つて寺の鐘が爽やかにひゞいて來た……

墓守のマダムが繪葉書やらペン臺やらを買はせやうといろ〳〵と話しかけるのを耳にしながら、この淡い月のいろと折からの晩禱の鐘の音のなかを僅かに懷古の心を遣ることが能きた。眼をつむつてその墓石に惶しい、——然し心からの一揖を與へてから、自分は外へ出た。

ヴイア・パルロネと記してある靜かな通りは、消えはてぬ夕陽の光と仄かな月の光との軟らかく煙つたなかに聲もなく續いてゐる。水が現はれる、と大理石でつくられた橋が架してある。それを自分たちは歩み行きながら先程所謂カザ・デイ・ジユリエツテを見て脆くも毀(こぼ)し去られてしまつたロマンスの『夢』が、ふたゝび胸のなかに創り上げられて行くのを感じるのであつた。おゝ、そう言へば、その仄かな微光をすら避けるやうにして、薄暗い物蔭で密語してゐる男女の姿が（男の方は大方兵士であつた。兵營がすぐ近くにあつた。）いくつか眼に付く。新らしいロミオとジユリエツトと、——自分は不覺微笑した。

……何時しかまた圓舞場(アレナ)のまへにと出た。まん圓な月が市廳(ミユニシピオ)の建物の上からこの廢れた巨きな圓舞場(アレナ)を照してゐた。もう晩餐の時間であつた。その程近くにあつた明るい料理屋(リストランテ)の卓子に凭りかゝり、フラスカツチだといふ赤葡萄酒で唇を濕しながらマカロニを切つてゐると、圓舞場(アレナ)越しに月影がちら〳〵と卓子の皿のうへまでも燦やいてくる。地方の古い唄ででもあらうか、緩やかな甘い韻律をひゞかせながら、店のまへを歌聲高らかに吟じながら通る三々五々の陽氣な人たちのうへにも明るい月の光は隈なく搖れ動いてゐる。ピアツア・エルベの方角からは、澄んだ鐘の音が水のやうに流れて來た……

料理屋のまへの通りは、月光の明るみの增すにつれて人の出も增して來るのだつた。ギーターの音やマンドリンの音やもあちこちに聽えた。若い女の笑ふ聲、子供の叫ぶ聲が、その間を縫ふやうにして賑やかにひゞき渡つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そうした通りから一寸離れると、アデイジエの河の岸になる。自分たちの宿の聖ロレンツオの窓の燈火がすぐその水に映つてゐる。水からは優しい潮の音が聽えてきた。賑やかな通りの物音は最早消えてしまつて、こゝにあるものはたゞこの水の音ばかりであつた。河の對岸には一帶の山影が月光のなかに浮び出してゐた。ガルダの湖をめぐる山脈ででもあつたらうか。いくつかの燈火がその淡い山影のなかを目くばせするやうにちらめいてゐた。

そこはかとなくリラの匂ひが漂つて來た。あゝ夢のやうに仄かなリラの匂ひ。自分は今更らしくこの月がリラのかほる四月の月であることを想ひ出した。そして、また夜鶯の啼く月であることを、――ロミオとジユリエツトとが左の瞳に見入りながらにその夜鶯の啼く音をきいた月であることを想ひ出した。それよりも、この土地が實にそのヴエローナであることを、一しほ強く想ひ遣つたのであつた。――

宿へ戻ると、部屋には薪が快い音を立てながら燃えてゐた。自分は安樂椅子にふかぐ\と身を沈め、足を暖爐にゆつくりと伸ばして眼をつむつた。快い疲れが軟かい酒の醉のやうに身體を廻るのが感じられた。フラスカツチの輕い醉までが微かにそれに交つてゐた、アデイジエの水のひゞきと仄かなリラの匂ひまでが、薄い煙のまとはるやうにそれにまとはりついてゐた。何時しか自分はうと／＼としはじめた。優しい優しいベルリオスの「戀の場」の音樂が、深い彼方から夢のなかの蠱はしさもて流れてきた……

水の都ヴエネチア

ヴエネチアの停車場の改札口を出るとすぐ眼のまへに――恰度タクシーか馬車か、それとも俥でも並んでゐるやうに――ゴンドラが數限りもなく並んで客を待つてゐる。自分たちは、客待ちのそのゴンドラの一つに身を入れてこれから行かうとするホテルの名を言ふと、艫に立つてゐた年老つた船頭は笑を浮べながら「はい、はい、貴方」と言ふ言葉とと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もに櫓に手をかくるや否や船は靜かに陸を離れた。日は落ちかゝつて水の面はそろ〱昏かつた。

靜かな水路の兩側に聳えてゐる建物からは燈影が仄かに水上に落ちて來た。空は月の光を浴びて薄い銀いろに燦いてゐるのも、水の上に映つてゐた。その物優しい薄明りのなかを自分たちの乘つたゴンドラは柔らかな櫓の音をひゞかせながら滑つて行くのだつた。

水路は細く狹いうへに、彼處此處と紆つてゐるので、曲り角に來る毎に船頭は高い聲でむかふから來るかも知れぬ船に豫め警告を與へるのだつた。思ひもかけぬ曲り角から別のゴンドラが現はれて來ることがある。「おゝい」といふやうな聲を殘して、そのゴンドラは櫓の音をさせながら何處ともなく薄明りの水上に消えて行つてしまふ。——

高い石橋の下をくゞり、古風な寺院のまへを通り拔けて、ゴンドラはやがて大水路(グラン・カナル)のなかにはいつた。月が一面に水上を浸してあだかも黃金色の燦ゆい流れを見るやうであつた。圓頂(ドーム)を持つた大きな美しい寺院が——それは、聖(サンタ)マリアデルラ・サルーテの寺院であることをあとで知つた——水を隔てて彼方海に近く聳えてゐた。此方の岸には燈影まばゆい大きな建物が櫛比して聳えてゐた。——そのなかの一つが自分たちの行かうとしてゐるオテル・ユーロープであつた。

月の夜のヴエネチア！　この誂へ向きとも言へる情景を偶然見ることが能きた自分たちの旅の幸福を感謝したい氣持に充たされながら、空を水を月を燈影を眺め入つてゐるうちに、ゴンドラはそのホテルの大理石でできてゐる石段に靜かに着いた……（四月廿一日）

晩餐をすましてからバルコンのうへに出て見ると、月に煌いた大水路(グラン・カナル)の眺めは言葉もないほどである。對岸の聖(サンタ)マリアの寺院は煌きわたる空の月と照りかへす水の燦きとを受けて白晝の夢に泛ぶ面影のやうに美くしい。その彼方に薄青く煙つてゐるアドリアチツクの蒼洋のなかには、寶石をこぼしたやうな細かな燈影が顫へて見える。近くの水上に眼をうつすと、微かな灯を舳先に點してゐるゴンドラがいくつとなく影のやうに燦やく水の面を通り過ぎる。ギーターを鳴らしながら滑り行くゴンドラがある。船唄あはれにひゞかせながら滑り行くゴンドラがある。たゞ櫓の音をつゝましく

刻みながら滑り行くゴンドラがある。……岸に近く、『ゴンドラ！　ゴンドラ！　シニョール！』と聲高に叫んでゐるのは、月に浮れて水上に游ばうとする人たちを誘ふ船頭たちである。

自分たちもその聲に誘はれるともなく誘はれて、バルコンから水の絶えず洗つてゐる大理石の方へと降りて行つたのであつた——（廿一日）

ヴエネチアの心臟であるピアッツア・サン・マルコの眺め。午前九時。雲翳無き碧空にかゝる四月の太陽と、その下に燦きわたれるアドリアチツクの蒼波との照り返しをうけて、廣場（ピアッツア）は鏡のやうにきらきらしてゐる。見る眼眩ゆいその黄色をその上にも煌かせやうとして、サン・マルコの寺院が燦たる金欄のよそほひを凝して廣場の正面に聳立してゐる。あゝ、その光と色と！　ヴエネチア派の繪畫の『秘密』がこゝにあつた……！

そのサン・マルコの寺院をめざして先づ自分たちの足は廣場を横ぎる。一面に敷かれた眞白な花崗岩と大理石との石疊のうへを彼方此方と動いてゐる小鳩の姿は、さながらに雪のうへの烏のやうに鮮やかである。羽に觸るゝまでに近く足を運んでも飛立つことはしないで、却つて後から附いてさへ來る。手に持つた黒いパラソルをわざと振り廻して穏かなその小鳩を飛び立たせて喜こんでゐるのは、そろつて眼鏡をかけ怒り肩をしてゐる英吉利婦人の群だ。それを腹立たしさうに眺めてゐるヴエネチアの金髪の子供。——

廣場の右手にひときは高く天を指して建つてゐる四角な尖塔は、——言ふまでもなくカムパニーレ（鐘樓）である。サン・マルコの絢爛多彩な建築に附屬するカムパニーレとしては、その形姿もその色彩も極めて簡素であると言つていい。『カムパニーレのごとく美はし！』——これは、かのフイレンツエのイル・ドウオーモのカムパニーレに對して與へられた言葉だ。自分は四五日のうちに見られるその美くしいカムパニーレのことを想ひ遣りながら、寂しく黒ずんだこの高い塔を暫らくの間仰いでゐた。

カムパニーレの影を出ると、廣場の右手はたゞちに大水路（グランカナル）の水へと續く。ピアッツエツタである。ゴンドラがそこに蝟

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

集してゐて、自分だちの姿を見るとともに『ゴンドラ！　シニョール！』の聲がたちまちひゞいて來た。

サン・マルコの寺院とこの大水路(グランカナル)との間に建てられてゐる一見奇異な樣式から成つた大建築は、パラツツオ・ドウカーレ、――卽ちドージの宮殿であつた。ヴエネチア共和國の華やかな歷史が殘し、最も大きなモニユマンであつた。さてはかのジョン・ラスキンがその著『ヴエニスの石』に於いて『……千四百廿四年、ルネツサンスがこのドージの宮殿のために打ち下したる最初の槌こそは、實にヴエニスに於ける所謂ヴエニス派の建築に對する弔鐘に他ならなかつた』となしてこれを初期ルネツサンスの最も注意すべき代表作品とさへ見做してゐる重要な建築でもあつた。――

自分たちの足は何時しかサン・マルコの入口の石を踏んでゐた。

あゝ、サン・マルコ。自分は、この華麗無比なビザンチン式の建築の美くしさに就いて今更らしくこゝに書き記すことは氣が咎める。何百といふ本で、――否恐らく何千といふ本でそれは飽かずに書き記されて來たのだ。(さう言へば、あゝ、このヴエネチア自身だつて同じことだ。更に、伊太利自身だつて同じことだ。)あれほど几帳面であり、またあれほど獨創の見方を書き記すのに遠慮なかつたゲエテの『伊太利遊記』でさへも、「旣に多く物語られもし、旣に多く書かれもし」てゐるからとてこのサン・マルコの美については殆んど載せてゐる所がないと言つていい。自分もまた、彼に做はう。そしてこゝには手許にある例の『ベデツカー』から、數行を借りてきて、自分だけの記憶を鮮かにして置くに止めやう。――

『聖僧(サン)聖マルコの骨を埋めたりと傳へらるるサン・マルコ寺は紀元八百卅年の建立にかゝれど、火災に逢ひて燒失したるを以て九百七十六年に再建、更に第十一世紀の中頃迄をビザンチン式に修復したり、地繪圖(グラウンド・プラン)（奥行八十三ヤード半正面間口五十六ヤード四分の三）は五個の圓頂(ドーム)を有する希臘式の十字形より成れり、十字形の正面を成す屋舍(アーム)は列柱を以て側面を飾れり。而して寺院の內外は五百を超ゆる大理石の柱（重に東邦風(オリエンタル)のものなり）及びモザイツク（重に第十世紀より第十六世紀に亘れるものなり）を以て被はれたり。前面(ファサード)（第十五世紀）に附加せるゴシツクは見る者の心に幻想的の美を增さしむ、主たる入口の上部には、コンスタンチノープルより渡來せし四個の古き青銅の馬を並べたり。註。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

――内部は頗る感銘を與ふ。輪廓の美及び裝飾の華麗は倶にストライキングなり。云々……」

――サン・マルコを出てから自分たちはドージの宮殿を外から眺めつゝ、ピアツエツタの小廣場を横ぎつて水の近くまで行つて見る。どつしりとした王冠のやうに壯嚴で華麗な姿をしたサンタ・マリア・デルラ・サルーテの寺院が、黄金粉を撒き散した燦ゆい水路をへだてて蒼穹にほがらかに聳立してゐる。チ、アノの立派な畫が何枚か収められてゐるといふ寺院だ。――如何にもそんなことまでが適はしいことのやうに思はれるほど、明るく鮮やけきまた強く靜けき感じに充ちた姿態であると言つてよかつた。

サンタ・マリアの寺院の立つてゐる尖岬から更に離れて、水のなかに孤り殘されてゐる小さな島にもまた風姿の懐かしい古寺院が陽の光と海靑色とに染まつたまゝ聳えてゐるのが見える。サン・ジョルジオ・マジョーレの寺院だ。――見惚れてゐる自分たちをそうした寺院の立つてゐる陸まで渡さうとして、ゴンドラの船頭たちが煩ましいまでに勸めるのを後にして、再びまへのピアツツアまで逍つて來た。

自分たちの足がカムパニーレのかつきりした影の落ちてゐる敷石の上を踏むか踏まないかに、突然頭のうへに當つて鳴りひゞく鐘の音におどかされた。立ち停つてその音の方を仰ぐと――まぎれもなくその朗らかな鐘の音は、サン・マルコの寺院の左手に建つてゐる大きな店舗の建物（それには通路（パッサージュ）が附いてゐて、賑やかな町がそのうしろの方にずつと續いてゐた）のうへに飾られた時計臺（オロロッジオ）からひゞいて來るのであつた。鬼の姿をした奇怪な二つの銅像の手に握られた打棒で左右から大きな靑銅の鐘が叩かれるのであつた。その強く澄んだ音が三つ四つと數へられるうちに、忽ち、自分たちの直ぐ頭のうへに當つてゐるカムパニーレの上にある鐘が美くしい音で鳴りはじめた。と同時にこれに釣られたやうに方々の寺々の鐘の音が高く低く強く優しく樂しげに寂しげにいろいろの音色となつてひゞきはじめた。飽までも晴れ亘つた光りの空のなかをこの數多い鐘の音がそれぞれの音色で鳴りわたる美くしさは！自分はわざわざこの水の都に來たうへで讀まうものと巴里で購ひ求め旅の鞄に入れて來た、詩人アンリ・ド・レニエの近著『ヴエネチア草紙（エスキス・ヴェニシアンヌ）』のなかの一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

節を覺えず思ひ出したのであつた。――

『……われは御身に謝す、ヴェニーズの微妙じきもろもろの鐘よ、青銅と黄金と晶玉との鐘よ、その鐘の音の數々の鐘樓の高きより日毎日毎海の空氣のなかにひゞき渡り、驗れたる『カムピ』のうへへと降り、狹き『カルリ』の曲り角にて歇ひ、さては『リイ』の隅にて木魂せしを、われ幾度か耳にしけむ。おゝ、御身ヴェニーズの鐘よ、サン・マルコとラ・サリュートとの鐘よ、フラリとサン・ジオヴァンニ・エ・パオロとの鐘よ、ジェズュアチとサン・セバスチアノとの鐘よ、さてはサン・ジオルジオ・マジョーレとラ・ジューデッカの鐘、入江なる小島の鐘よ。……』

鐘の音の美くしき合唱は止むだ。――が、眼路杳かなる蒼穹のかなたに、さては白鷗飛び交ふアドリアチックの澳のかなたに、その鐘の音は何時までも何時までも消えずにたゞよい行くのをそれとなく眼で見ることさへ能きる心地がするのであつた。(廿二日)

鬼の姿の時計臺の下の通路を通り抜けると、狹い紆つた――それでゐて人通りの賑やかな通りとなる。兩側には繪葉書だとか銅細工や鐵細工だとか皮物だとかさてはレースだとか、所謂ヴェネチア土産を並べた店が櫛比してゐる。通りが狹いので恰かも勸工場の屋内でも歩いてゐるやうな氣を起させられる。

かうした店飾りの通りを過ぎると、稍人通りもまばらになる。小さな水路、大きな水路がそれからそれへとこの狹い紆つた通りを送り迎へする。ピアッア・サン・マルコから見た大水路は眩ゆいほどに明るく燦かしかつたが、かうした小さな水路は日中でも蒼白な女の面輪のやうに寂しく澱んでゐて、たゞ空の濃い碧色を懶さうに映してゐるだけであつた。そのうへをゴンドラが鈍い櫓の音を立てながら通つて行く。水の壁が落ちて積石が露はに出てゐる古い建物の窓から顏を出してぼんやりとその蒼白い水の面を凝視めてゐる女なぞもあつた。水際の石段に降りて來て大きなメロンをぼちやぼちや洗つてゐる女なぞもあつた。

通りは、まるで迷路を思はせる、右するかと思へば左し、稍廣い通りへ出たかと思へば幅一間もない狹い通りにかは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。東も西も皆目見當がつかなくなつた時分に、今度は思け掛けなく大水路(グラン・カナル)をまへにした水際の通りへ出た。眼のまへの石橋を地圖で探すと、ポンテ・デイ・リアルトーとなつてゐる。自分たちが行かうとしてゐた博物館(ムゼオ・チウイコ)もこれから餘り遠いことではなかつた。——

その博物館までの細い狹い糺々した汚ない通りは何といふことであつたらう！　それは、たとへ白晝でも連れがなければ安堵して通れぬほどの凄さであつたと言つていい。まるで死骸のやうな古い廢れた建物、そこに住つてゐる貧しい人々、辛ふじて二人が肩を並べて通れるほどの通り、それから、その所々を蛇のやうにうねつてゐる灰藍色のとろんと澱んだ水路。自分は、そゞろに怪奇な冒險小說の筋をさへ頭のなかで拵へ上げやうとしたほどであつた。あゝこれがヴエネアのドン・ジヤンとも言ふべき嬌兒アルルカンの情話を生むだ町なのであらうか！　ヴネエチアは、——尠くともヴエネチア人のヴエネチアはかうして死んでしまつてゐるのだ。——（廿二日）

旅に出てホテルの食堂で晩餐を認めるほど趣のないものはない。それがヴエネチアであつてもさては羅馬であつてもわれ〳〵が巴里のレストランなどの卓子の上で見るメニユと殆んど違はないのだから。——

晩餐の時間になつたので、自分たちは、何處か水路に添ふたさゝやかなリストランテでもこの土地らしい食物を擇つて見やうと當てもなく町のなかに出て行つたのであつた。未だ明るかつた。が、宵らしい人出が狹い通りをそれからそれへと埋めてゐた。燈火も何時しか窓のなかに燦きはじめてゐた。

自分たちは先ほど遣つて來たポンテ・デイ・リアルトーの橋からは遙か下に當つてゐるポンテ・デイ・フエロの橋の袂まで來た。大水路(グラン・カナル)の水は暮れかゝる空の柔らかな色彩を映したまゝしつとりと落付いた色合に融け込んでゐる。ゴンドラやヴアポレツト(小汽船)やが通るたびに、瑪瑙の切斷面のやうな美くしい波紋がすぐ自分たちの足許までひた〳〵と擴がつてきた。橋を渡りながら水路(カナル)の下手の方を眺めると、おゝ、サン・マルコのカムパニーレが涼しく澄んだ東方の空をうしろに落ちゆく陽の光をうけて、不思議な幻のなかの塔かなぞのやうに艶はしい姿で聳えてゐるのだつた。——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

橋を渡り切つた所に、アカッデミア・デイ・ベルレ・アルテイ（美術學校）の建物が立つてゐる。チチアノとかヴェロネーゼとかベリニとかの所謂ヴェネチア派の人たちの畫が收めてあるところだ。その建物のすぐ近くにさゝやかなリストランテがあるのを見出して自分たちはこゝで晩餐を攝ることにした。

ヴェネチアとは言ひ條この邊は町の中心から外れて、殊更に夕暮らしい寂しい廢れた感じに充ち充ちた所だ。ベデッカの赤い本を手に肩を怒らして歩く英吉利のレデイも、もうこの邊には見當らなかつた。リストランテのなかも自分たち二人を除いては隅にあつて珈琲を傍にしてゐる土地の學生らしい二人のものたちだけであつた。そう言へば、美術學校のまへに地位してゐるこのリストランテは、さうした學生のために出來たものと言つてもよかりさうに思はれた。自分たちは晝間の賑やかな有様を、――小さなチチアノでありヴェロネーゼであるさうした美術學生たちの若々しい眼光と會話と笑聲とを、そこの卓子の上や壁の上やにありありと見ることが能きるやうな氣までしたのであつた。――

自分たちのまへに先づ並んだのはマカロニと鯖の燒いたもの、それにいつもながらのフラスカチイとは違つて土地の酒と覺しいバルベラの赤い瓶。マカロニは如何にも田舍じみた調理だつたが、鯖の匂ひと味とは鮮やかだつた。それは言ふまでもなくアドリアチックの魚だ。その海の爽やかな匂ひがそのまゝに卓上の皿のうへにあつた！　柔かにしまつたその肉を肉叉（フォーク）でつゝきながら、自分はそゞろにアドリアチックの海にまつはるいろ〳〵な物語りを、――わけてかのダヌンチオが若くして書いた數々の短かい小説や詩やのなかにあゝも巧みに描かき出されたるこの蒼洋の物語りをそれからそれへと思ひ泛べないわけには行かなかつた。彼は、ヴェネチアと同じ海續きのペスカラ（それは、何人も知るかのフランチエスカとパウロとの哀話を持つてゐるリミニの町と同じ海べりでもあつた！）に生れて、そこで幼年期と少年期とを送つた。從つて彼の詩集『早春（プリモヴェレ）』やその數々の短篇やのなかには、つねに『アドリアチックの潮の匂ひ』が、（矢張りこの海岸を飾り立ててゐる）無花果や葡萄や桃や梨子や杏實や檸檬やオランジユや林檎やのあらゆる果實の匂ひと色とともに深くも滲み込んでゐて、讀むものの心の上に言葉に言ひがたき爽やかさ麗はしさを持ち來らせると言つてよかつた。自分も遠く日本にある日、さうした彼の作品を讀むでは、見も知らぬアドリアチックの蒼洋とその匂はし

き岸のことを幾度はるばると思ひ遣つたことであらう。……自分の連想は果てもなかつた。が、何時か珈琲のソッスが眼ふたりを除いては客も他になくなつた靜けさのなかに、のまへに運ばれたのに氣が付いた。

勘定をすましてこの取り殘されたやうに寂しいリストランテをふたりは出た。

外はもうすつかり薄明の柔しい搖曳のなかにあつた。陽の光は微かに殘つてゐたが空は水のやうな涼しい色にあふれてゐた。『月は何の邊(ど)にあるか知ら?』——かう言ひ合ひながらこの涼しい空を仰ぐと、間近くの寺院の圓頂(ドーム)のほとりが仄かに明るい。二三歩足を進めると、果して月の影が薄い雲の翳(かげ)を帶びて現はれてきた。——

夜ともなり切らぬ朧ろげな黄昏のなかを、まるで幻のなかを迷ひ行くやうな心持でそれからそれへと足を運んで行く。狹い、——辛ふじて通れるほどの細い通りを通り拔けると、不意に寺院のまへの廣場なぞに出たりする。その寺院の古風な重々しげな正面(ファサード)が、何とも言へぬ幽暗な魅力を帶びて薄暗のなかに浮び出てゐる、聖壇の蠟燭の影がはるか奧の方で搖れてゐる。その廣場から通りはまた極めて細い紆つた徑となる、兩側の家がかぶさるやうに立ち並んでゐる。その小徑を辿つて行くと、今度は不意に兩側の家が開けて足が一段と高い所に登りかける。——水路(カナル)の石橋である。下の方に水が聲もなく靜かに澱んでゐる、ゴンドラも眠つてゐるやうにじつと身動きをしない……

——ふたりがふたゝびピアツア・サン・マルコの盛り場に引き返した頃には、すつかり夜となつてまん圓い月がカムパニーレの塔の横にかゞやいてゐた。大水路(グラン・カナル)からかけて海の澳はその月の光を受けて一面砂金を撒き散したやうに燦々としてゐた。方々の寺院の鐘がまたゆるやかに鳴りはじめた……　（廿二日）

サン・マルコの廣場からアルセナレまでゴンドラで行つて見やう。——かういふ氣を起したのも、詩人レニエの『ヴエネチア草紙』の卷頭に置いてある詩の句をそれとなく旅舍の窓に凭つて讀むだからであつた。それはかうした句であつた。——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

數多き大小の水路(カナル)なる
藍いろ青いろ灰いろの水のうへにて
われらヴェニーズを走りめぐれり、
かのサン・マルクよりラルスナルまで。

午後一時すぎ。空はあくまで晴れて、朗らかな陽のいろが水のうへに躍つてゐる。

ゴンドラは、レニエの詩句にある通りの『藍いろと青いろと灰いろ』に融け合つた軟らかな色合の水のうへをゆらりゆらりと進んで行く。ドージの宮殿が美くしい模様か何ぞのやうに搖めく水のあなたに横はつてゐる。その傍のカムパニーレの頂きの鐘は、燦やく日の光のなかに融け込んでしまつたやうに仄かに見えるだけになつた。右手に見えてゐたサンタ・マリア・デルラ・サルーテの寺院も、さてはサン・ジオルジオ・マジオーレの寺院も何時か後の方に小さく微けく見えるだけになつた。水路は最早入江(ラグーナ)に續く邊に來たのである。波もゆらゆら空もゆらゆら、ゴンドラはこの醉ひ痴れたる色と光のなかを櫓の音眠げに滑り行くのであつた。——

小さな水路(カナル)に添ふてしばらくゴンドラは進む。岸に立つて自分たちを眺める子供たちの姿に、兎もすると美術館(ムセオ)で見た古い畫面のなかの形態を見出すことがある。さては水面に向いた小窓に凭りかゝつてゐる若い女の顏にも。——

アルセナーレ（海軍造船所）そのものは唯空しく水の動いてゐる大きな溝渠に過ぎないが、そのまへに置かれた四つの石の獅子は眼を悦ばした。いづれも希臘の雅典から持ち運ばれたものであつて、秀れた形と力とに充ちたものと言つてよかつた。O氏は早速鉛筆と紙とを取り出した。……

こゝを出てから地圖を手賴りにして入江(ラグーナ)と大水路(グラン・カナル)とに臨んでゐるジャルディノ・プブリチ（公園）の方へと足を向ける。それはヴェネチアの町の建つてゐる陸岬の一番尖端に當つてゐる所だ。伊太利全土を通じて最も花やかな海水浴場だと言はれてゐるリドーの長い島影が入江(ラグーナ)の碧い水をへだててすぐ眼のまへに見える所だ。鮮やかな綠りがいろ／＼の花を點綴して地面を柔かに飾つてゐる所だ。アドリアチックの潮の匂ひが、その綠りと花との匂ひに入り交つて、旅人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の急ぎがちな心を優しく撫でてくれる所だ。

誰かも言つたやうに、ヴエネチアはたゞに大理石と水との都であるばかりではなく、また庭園の都でもあつた。パラツオ・ダリオの庭園、パラツオ・ヴエニエルの庭園、ヴエンドラミノの庭園、ジユーデツカの庭園……あゝ、悉くそれを擧げて行かうとすれば果てがない。何れもそれ等は美くしい芝生と柱廊と薔薇の花と噴泉とを持つてゐる計りではなく、そこには常にアドリアチツクの潮の匂ひが、さては入江(ラグーナ)や水路(カナル)の水の燦きがあるのだつた、夜になると、水に映る燈影がしのびやかに庭園の樹の間に匂ひ、ゴンドラの艪の音とギーターの柔しい韻(ひゞき)とが海からの微風とともに夢のごとくに流れ寄るのだつた。優しく脆い憂愁(メランコリー)の思ひに充ちてゐるその情趣は、――言はゞヴエネチアの娘の美くしい眼尖を、人の心のなかに想ひ泛ばせると言つてもよかつた。……

ヴアツポレツト(小汽船)が遣つて來た。自分たちは町のなかへと引き返すためにそれに乘つた。(廿二日)

ムセオ・チヴイコのまへから渡船で大水路(グランカナール)を横ぎらうとしたときのことであつた。異様に装はれたるゴンドラが水路を下手の方へと漕いで行く。それは葬ひの船であつた。棺と覺しいものの上には隙間もないほどにいろ〳〵の花が撒き散らされてゐた。そしてその箱の前後には黄金いろに鍍金したふたりの小兒の天使が腰をかけてゐる。漕手もまた黄金いろのモールに燦いてゐる衣裳を身に纏つて、靜かに靜かに艪を動かしてゐるのだつた……

水上の葬ひ。あゝ、おそらく結婚の花やかな列もまたかうしてこの水のうへを動き行くことであらう。(廿三日)

日曜日だ。空はまた限りもなく碧い。

鐘が鳴りはじめた。日曜日の朝の彌撒を告げる鐘のこととて、常にもまして美くしく朗らかにひゞき渡る。

あゝ、ヴエネチアの鐘の音。水の都の朝晝夕にひゞいて止まないその鐘の音の麗はしさは、今更何の言葉をもつて喩へ得やう。あのロダンが『あの鐘の音をきゝに自分はまた羅馬へ行つて見たいと思ふ』と言つた言葉は、未だ羅馬を見な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い現在の自分にとつてはそゞろに未知な土地を戀しくさせる魅はしい響を持つた言葉であることには違ひがなかつた。がその羅馬を見る日も恐らくこのヴェネチアの鐘の音にましてそこの鐘の音が一きは美はしからうとは、今の自分には想像能きないことであつた。

鐘の音の鳴り止まぬなかを、自分たちはこれからヴェネチアの町を去つて畫聖ジオットの作品のあるパドーヴァに向はうが爲の仕度に取りかゝつた。『あの鐘の音をきゝに自分はまたヴェネチアへ行つて見たいと思ふ』——そうした溜息を屹度洩すに相違ない明日の自分を、今からありありと判るやうな氣がしながら。——（廿四日）

知識と熱情の町パドーヴァ

パドーヴァの町はヴェネチアとヴェローナとの恰度中頃に位してゐて、ボローニヤ、フイレンツェ、羅馬へと向ふ道の分岐點に當つてゐる。十三世紀のはじめに設けられたといふ名の高い大學の置かれてある町、謙讓な心の持ち主であつたジオットが描いた基督一代記や『德』『不德』やの數多い美くしい壁畫のあるマドンナ・デル・アレーナといふ寺院の建つてゐる町、科學者のやうに細かく正しい眼を持つたドナテルロの作つた銅像のあるサン・アントニオの寺院の聳えてゐる町、そしてまたバツキリオーネの優しい河が町と丘の裾を浸して緩やかに流れてゐ、墺太利との國境になつてゐるチロールの山地から涼しい風が絶えず屋根のうへの燦いた空のなかに吹き充ちてゐる町。——それがこのパドーヴァの町であつた。

汽車がパドーヴァの停車場に着くとともに自分たちは馳けるやうにして客待ちの馬車に身を托し、ジオットの壁畫のある寺にと急がした。日曜日のこととてそこの寺は二時には門を閉じてしまうと旅行案内に書いてあつた。その時間までにはもう二十分位しかなかつた。が幸ひにその寺、——マドンナ・デル・アレーナは停車場よりさほど遠くはなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

パッキリオーネの河の流れに程近いジャルディノ・プブリコの爽やかな緑りの匂ふてゐるところに簡素なその建物は聳えてゐた。

ジオットは言ふまでもなくルネツサンス前の畫家で、この旺んなる時期の齎らせた烈しく燦ゆい精神には觸れることがなかつたのである。從つて彼の作品のなかには、「言はゞ人性それ自身の無盡の活力及び創造力」（ペエターの「ザ・ルネツサンス」中の言葉）を感じるといふわけには行かないのは、止むを得ぬこととは言ふものの、既にルネツサンスの作品の數々を見てゐる自分たちにとつては物足らぬ念の起るのを禁めることは能きなかつた。然しそれにも拘はらず、そこには自分たちの心を深く深く牽き寄せるものがあつた。その力は一見靜かであり優しくはあるが、しかもその牽引はあくまで靭やかで強く、容易にそれから脱れることが能きないのを人に感じさせるのであつた。

それは、明かにジオットその人の持つてゐる豐かに惠まれた稟才と溫かな感性と、——更にそのうへに築かれてゐる謙讓靜和なる愛の世界の爲めにほかならなかつた。彼は「不德」でさへもこの優しく溫かい愛をもつてつゝんだ。況んや神の基督の、「德」の榮光は、一點の雲翳も淺波も彼の心に喚び起すことなしに、全心の上に溢ひこぼれたのであつた。彼は全身全心をあげてこの榮光の聖壇のまへに讚嘆と感謝との絨毯を敷き擴げた。何といふ清純、何といふ無垢、そして何といふ穏やかで溢るるやうな欣びと滿足！　それがすべて彼の作品のなかにあつた。——

彼の作品は更にアツシジで見られる。その日を樂しみにして、自分たちは番人の「もう時間ですから——」と督促する聲に促されて外に出たのであつた。

……マドンナ・デル・アレーナの寺院とは反對の側の町端れにあるサン・アントニオの寺院、それから町の中央に近いイル・ドゥオーモ、そうした寺々を見るために地圖を擴げたり、道行く人に尋ねたりしながら通りを歩いて行つた。それは靜かな明るい通りが多かつた。建物も淸楚な近代風な形態をしたものが多かつた。ヴエローナの町の姿がまだ中世の夢から拔けでてゐないことを感じさせたのと較べると、この町の姿はまつたく新らしい時代に生きてゐることを示してゐたと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言つてよかつた。千二百二十二年の遠い昔にパドーヴァの大學が建てられたといふことは、此町の持つ過去に對する大きな衿りである許りではなくて、そうした懷かしい傳統に飾られた大學をいまに持ち續けてゐるといふことは、また、この町の現在と未來とに對する大きな衿りと希望とででもなければならなかつた。今眼に見るこの町の姿の明るさと爽やかさとは、實にこの大學といふ涼しい泉から町のうへにと流れ行く淸らかな水のひゞきではなかつたか。自分は、過ぐる二月あの獨逸のハイデルベルヒの町の側を流れ行くネツカーの河畔に立つたときに似た思ひを、この町を流るるバツキリオーネの河畔に立つても得ることが能きた。それは、かゞやかしい知識の町、理想と希望との町、靑春と美との町――そうした町の持つ淸く明るい笑の橫顏にほかならなかつた！

イル・ドウオーモの圓頂がいろいろな建物の屋根越しに見え初めた時であつた、靜かな通りから通りへと充ちてゐる穩やかな情趣をば樂しみながら步いてゐた自分たちを不意に驚かすやうに、烈しい樂隊の音と合唱の聲とが程近い町のなかから湧き起つたのは。人々の馳けて行くのに誘はれて自分たちも足を早めてその町の方へと急いで行つて見ると――今し樂隊を先頭に立てた夥しい學生の群が手を振り胸を張つて勇ましい歌を口にしながら通り行くところであつた。大學の學生、中學の生徒、それに加へて未だ稚けない小學校の生徒さへも加はつてゐた。その町の建物の窓々にはそれぞれに伊太利の國旗の三色旗が下げてあつた。そして何れも男や女やがその窓から激しい拍手を起つてゐるのであつた。行列はなかなかに盡きなかつた。が、その若々しい行列のなかに漲つてゐる熱情は、言はゞ焰のやうに町のなかを、窓による人々を吹いてゐることが感じられた。合唱の聲はますます高く強くなり、それにつれて、窓の拍手は烈しい歡呼の聲さへも交へるやうになつて來たのだつた。――

自分は、この盛んなる行列は實に國旗祭を機緣にしたフアスチスチのためのデモンストレーションであることを知つた。そう言へば町のあちこちに數多く貼り付けられてゐた紙の上の『ヴイヴア・リタリア』（伊太利萬歲）『ヴイヴア・ダヌンチオ』（ダヌンチオ萬歲）とある言葉も、はじめてよく理解することが能きた。『ヴイヴア・ベニト・ムツソリニ』（ベニト・ムツソリニ萬歲）とあるのは、あのフアチスチの運動を率ゐてゐる人の名ではなかつたらうか。――

ダヌンチオの聲名の高いことを今更らしく知つたことは、初めてこのパドーヴアの町へ來てからではなかつた、この貼紙を見てからではなかつた。然しながらそれをこゝに書くことは止さう。さては、フアスチスチの運動、――『青年よ！　青年よ！　おゝ美の青春よ！』といふ歌を口にしながら、戰時の伊太利のあらゆる都市を通じて『戰ひの伊太利』の光榮の爲めに人心を鼓舞して歩いたといふフアスチスチの運動の最初の人たちのことを、その現在を、その將來を、その功罪を、こゝで書き行くことも止さう。たゞこゝでは、この熱情に燃ゆる若々しい行列によつて喚び起された自分の心の感銘だけを書き記すことにしやう。

伊太利人の熱情に就いて書かれた文は實に世に多い。太陽と熱情との國、――それが伊太利を指す言葉であることは言ふまでもない。それほどにこの國の空と地とに立ち罩めてゐる熱と光とはこの國を旅する人々の好んで口にし筆にする所だ。否、親しくその土地を旅せずともこの國の持つ歴史の數々の場面を遠くから思ひ遣るだけでも、人々は同樣な感動に打たれるのを禁めることが能きまい。かのケーザルの事業、かのアントニオとブルータスの逸事、かのオーガスタスの、さてはネロンの行績、アッシジの聖フランチエスコの献身、それよりも焰のごとく熾んだつたルネッサンスの沸騰、さては近世の伊太利統一運動の烈しい國民的覺醒、または最近に起つたかのフユーメの占領、――あゝ、それは一つとして『情熱』の言葉の意味を説き明す秘符に役立たないものがあらうか。伊太利の全歴史、それはまさしく『情熱』そのものの歴史ではなかつたであらうか。

伊太利人の情熱に就いて書かれた數多くのもののうちからいま自分は『コリンヌ』を思ひ出す、十九世紀の佛蘭西文壇をば生み出した』とまで言はれてゐるド・スタール夫人のこの小説ほど伊太利人の心臓のなかに燃えさかる火焰をば如實に描き出してゐるものは多くはないであらう。殊に、女主人公(ヒロイン)コリンヌが羅馬のカピトールに立ち琴(リール)を片手に、群がる群集の熱狂のなかに『伊太利讃歌』を吟朗するの一節は、讀む者の胸にも熱き焰の息吹を感じさせずに措かぬと言つていい。それは、情熱(パツシオン)の炎々たる焰のなかに燒かれたる美と青春と天才の讃歌であり、太陽の放つ燦光と灼熱とに對する戀歌であつた。そしてそれこそは『伊太利』の心臓の色と熱そのものに他ならなかつた……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然るにこのカビトールに立つた美女コリンヌの烈しく美くしい讃歌の炎に煽り立てられて大波のごとく蕩揺してゐる群集のなかに、たゞひとり、この興奮、この熱狂をば、たゞ訝かしとして冷やかに眺めてゐる男のことを、ド・スタール夫人は描き出してゐる。その男の名はオスワアド。――言ふまでもなくそれは『英吉利人』であつた。

が、オスワアドが英吉利人の典型をば如實に現はしてゐるか如何か、これは今の自分にとつてはどうでもいいことだ。それよりもこの一節をふたゝび心のなかに讀み來つて自分は不覺わが日本人の上に思ひ當る。あゝ、そのオスワアドは英吉利人と言ふよりもむしろ日本人ではなかつたか。――

自分は、日本人を目して『伊太利人や佛蘭西人やに似て』熱し易い國民であるとなす類の言葉を今まで幾度となく聽かされた。感情のために動く國民、情熱に馳られ易き國民、――かうした言葉を幾度となく聽かされた。自分の頭は何時の間にかそれ等の言葉をさまで訝かしとせずして受け容れてゐたのだつた。

然るに自分の足が歐羅巴の土地を踏むやうになつて幾日ともならぬうちに、かうした言葉が實に何等の眞實をも含んだものではないといふことを、自分は今更のやうに知つた。佛蘭西を見、獨逸を見、英吉利を見、更に伊太利を見るにいたつて、自分のその感想はますます確められて來た。殊に『伊太利人や佛蘭西人やに似て』熱し易い國民であると日本人を目するに到つては、その伊太利人、佛蘭西人の名譽の爲めにプロテストを敢にすべき義務をさへこの身に感じるのであつた。

あゝ日本人の熱情！　それは何といふ空しい綺語に過ぎぬことか。自分がいま、現代の日本人に見るところは、冷淡と無關心、勘定高さと小才、微温と自嘲、他人への嫉妬と侮蔑、――すべて『情熱』なるものとは對蹠して立てる心性のあらはれに過ぎない。彼等には焦燥はある、興奮はある、喧騒はある、然しながら、彼等をその心まで揺れ動かす情熱の炎にいたつては、自分は容易に見ることを得ない。彼等の顔がアイヴオリー・マスクであるならば、彼等の心もまたその硬質のマスクでなくて何であらう。彼等の心は熱情の點火と燃燒とに對しては最も不敏感を極め、細かき利益の計算に於ては最も敏感なる觸覺を有してゐるのではないか。佛蘭西人の所謂グー・ド・リスク（危險の興味）にいたつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、彼等の用愼深き心性の永久に許さざる所である。彼等には、世に『安全』にまして心を悅ばしめるものは一もないのである。——

その『無表情』の國から自分ははるばるとこゝ情熱と太陽との國へ來たのだ。自分は又かうした若々しい人たちの行列とそれを見送つてゐる人たちを見るに付けても今更らしく深き溜息とともに遠い自分たちの國のことを思ひ遣らずにはゐられなかつた……

——方々歩いてから漸く今夜の宿にきめたオテル・ド・コルソーに落付いたのはもう日も西に傾きかけてゞあつた。先程の行列に加はつてゐた學生の群はそのホテルの階下の食堂やカツフエやに溢れて、ビールや葡萄酒やの杯を合せながら、おそらく『青年よ！　青年よ！　おゝ美の青春よ！』とあるフアスチスチの歌であらう、歌聲朗らかに合せてゐるのであつた。その騷ぎを外にして、彼方にはバツキリオーネの河が美くしい色合をたゝえて靜かに流れてゐる。それに架した橋のうへには人の徂徠もすくなくない。右手の方を見ると、重り合つた屋根越しに、寺院の塔が見えて鐘の音か今しそこから鳴りひびいてゐる。更にその塔の彼方には水色の山脈が涼しげに延びてゐる。左手を見ると、バツキリオーネの流れを越えて、あのジオットの遺骸を收めた寺院の庭つゞきのジャルディノ・プブリコが見える。古い城壁が河のなかまで突き出てゐる。噴水が緑りのなかに燦いてゐる。赤い着物や青い着物の子供たちが夕日の光のなかに動いてゐる……

O氏は早速カンヴスを擴げはじめた。——

フィレンツェの春

……ボローニアの古都を離れた汽車はしばらくの間エミリアの平野を快げに進む。然し間もなくその風景は一變する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樹木に乏しい、こゞしい岩の露出した山間の風景が、それからそれへと連續して現はれる。隧道がうるさいまでにわれ等を送迎する。隧道の合間合間に車窓に映つて來るものは、大方は退屈な石の風景に過ぎないけれども、時折は、涼しい溪流と奇怪な山上の古城とをもつてその退屈さを忘れさせて呉れる。時には、思ひがけなく緑りの平野が、山と山との間に展がつて見えることもある。――

　そうした山地の粗い風景が盡きると、一帶のひろびろした野が現はれる。その野こそトスカナの平野だ。わがフイレンツエの町の横つてゐる所だ。そして、かの『血と歡樂と死と』を書いたモーリス・バレスの言葉を借りるならば『ジオツトの俯けるつつましさと、ギルランダジヨの沈靜なる形態と、ロレンツオ・デイ・クレデイの精確・雅致・均整とを、觀るものの心の上に感じさせずには措かないフローランスの地形(オリゾン)』と言はれてゐる所だ。ミケランジエロとダンテとサヴオナロラとボツテツチエリと、――それ等の勇ましく煩はしい息が立ち罩めてゐた野と山だ。

　左手の車窓に遠く映る靜かな山容は、言ふまでもなくアペニンの山々である、優しげなかに強い線の力を見せてゐるその山容は、車窓に近く展がるこの豐麗な平野と樂しげに手を引き合つてゐるかのやうに見える。そして、眞晝時の鮮やかな日の光を顔中一面に浴ひで、髞高な嬉笑を洩してゐるかのやうにも見える、森がある。丘がある。赤い屋根の別墅(ヴイラ)がある。水がある。そしていろいろの花がその間を隈なく點綴してゐる。あゝ、トスカナの平野の春！　自分は、車窓から首を延ばしながら、匂やかに頬に觸れて行く微風に交る花瓣を――かのボテツチエリの花瓣のいくつかをさへ親しく眼に見て行くのであつた。――

　汽車は停つた。フイレンツエのスタヂオーネ・チエントラーレ(中央停車場)である。ベルチエルリといふアルノ河に臨んでゐるといふホテルに馬車をいそがせる。

　中央停車場からアルノ河畔のホテルまでの十分とはかゝらぬ短かい距離も、旅人の眼にこのフイレンツエの町の獨自な横顔(プロフイル)をのぞかせるには充分であつた。

花の都フイレンツエの名はそ、れを耳にするあらゆる人々の心のなかに實に優婉典雅なる面影を喚び起させると言つていい。自分もまたその町の姿を思ひ浮べるのに、優しく靜かなるものの面影を以てしたひとりであるに洩れなかつた。それが、石道のうへを轣轆と馳けり行く馬車の窓から初めてこの町の姿をつくづくと眺め遣つた時には、かうしたかねてからの想像が實に何等の根據をも持たぬものであつたとに氣が付いた。それは、優婉典雅なる姿ではなくて、むしろ堅硬沈靜を以て稱ばれてもいいほどの重く深い感じに充ちた姿であつた。裸かな石、その大きな角度、その深い溝、高い窓のない前面、厚い木か若くは大きな鐵でできてゐる扉、——自分たちの見てゐるフイレンツエの町は、さうした建物からなつてゐた！

この嚴しい姿は、ヴエネチアの明るく華やかな通りを見て來た自分たちにとつてわけて强く感じられたのであつた。自分はあのヴエネチアのピアツツア・サン・マルコや大水路に面した通りやで感じ得たやうな嬉しげな『笑ひ』は、もうこの町の何處からも到底見出すことが能きまいと思はれたほどに、その邊は冷たい無感覺な靜寂の『石』の感じに充ちみちてゐるのであつた。『笑ひ』の眼ではなくて、むしろ『脅かし』の眼が、そこにはあつた。優しく甘美なフイレンツエではなくて、それは明らかに、寒く嚴しいフイレンツエであつた！

馬車のなかで得たこの最初の印象は、其後自分がフイレンツエの町を去る日まで、些かも自分に拔かなかつたと言つてよかつた。殊に自分はこの町の持つてゐるパラツツオ（宮殿）の數々を見るにいたつて、その感じは更に重加して來るのを覺えた。パラツツオ・ヴエツキオは言ふを俟たず、パラツツオ・プレトリオやパラツツオ・ピツチやパラツツオ・デルアルテ・デルラ・ラナや、パラツツオ・ストロツツイや、パラツツオ・リツカルデイや、すべてこれ等の古く宏壯なる建築は一として仰ぎ見る者の心のうへに冷酷沈靜なる影を投げないものはないと言つてよかつた。それは華やかなるパラツツオといふよりも、固く心を鎖す城砦であると言つた方が適はしいほどであつた。單にそれ許りではない、新らしく建てられた殆んど全ての建築も、この傳統に默々と從つたまゝ設計され工事されたのを見る。店舗やカツフエのごときに到つても、自分たちが他の歐羅巴の都市で見るが如き廣やかなる飾窓や入口を有するものは、殆んどこれを認むるに難い

と言つても差支へはなかつた。從つてフィレンツェの町の夜の暗さは、初めての旅人のほしいまゝなる夜のそゞろ歩きをば引きとめるに充分であつた。——

自分は、石道のうへの車輪の激動を感じながら、ひそかに『優しき』フィレンツェに對する久しき夢のいま脆くも消え失せたのを寂しく思はないわけには行かなかつた。しかしながら、眼のあたり見た此冷たき石の町の姿こそ、まことのフィレンツェの『秘密』のこもるところ、——恐らくかのダンテを生みミケランジエロを生みさてはサヴオナロラ生むだトスカノの民族の剛直にして沈痛なる精神のあらはれとして解かるべきもの、さては、均しくダンテのフィレンツェ追放の歴史にサヴオナロラ焚殺の歴史に、、また、かのマキアヴェリが『君主論』の一書に讀まるるが如く、中世紀より引續いてのこの町の人々の間の烈しき勢力葛藤は、遂にかくのごとき堅硬なる城砦の家居をもておのがじし生活せしむるを得ざらしめたものとして解かるべきもの、同時にまた、この外皮の厚さと硬さとは、恰かもかの柘榴の實のごとくに内部の驕奢華麗なる生活をば更に花やかにつゝまんとするもの、而してその內部にこそ所謂フィレンツェの文化と『社交』との生活が生れ育ち榮えたるものとしてそれぞれに解かるべきものではないであらうか、といふやうな微かな啓發の欣びをも自分の心は感じ來つたのである。

不圖氣が付くと馬車は石でかこまれたやうな通りから出外れやうとしてゐた。明るい光が急に窓のなかからはいつて來た。見ると、ほう！　灰藍色をした豐かな水の流れが眼のまへにあつた。言ふまでもなくアルノの流れだ。

自分は乘り出すやうにして小さな窓から頭を出してその淀やかな流れを眺め入つた。……

ウフィツチ畫廊にて。

ルネツサンスの光の洪水。それは何といふすさまじさだ。何といふ豐かさだ、勢よさだ。自分は半ば茫然としてこの澎湃たる『精神』の洪水のなかに立ち盡してしまつた。

希臘の文明が人間の歴史のなかの最も美しい頁であることに些かの間違ひがないと等しく、このフィレンツェを中

心とした伊太利のルネッサンスの文明もまた、人間の歴史のある限りは決して滅び得ない光彩に充ちみちた美くしい頁であると言はなければならない。人間が如何に暗く鬱せき生活の底に沈湎しゐる時であつても、若しこの類稀な歴史の一頁を繙げて見るならば、不覺明るい希望と深い歡喜の念の湧き出るのを抑へることが能きないであらう。それは實に人性のめざましき飛躍と發揚、――あらゆる闇を打ち敗つて燦き出だす太陽の力と美とを、人性もまた確に有するとなす信條の再生に他ならない。あゝ、ルネッサンスに現はれたるこの『奇蹟』こそは、實に人性が永遠に奏でてゐる凱歌そのものの象徴ではないであらうか。

殊に、この古きルネッサンスの歴史を眺め渡した眼尖を、今日の伊太利のうへに事新らしく移して見ることは興味が深い。

多くの人々が今日の伊太利を目して當時の旺んな羅馬帝國の面影を偲び得るとなす者のないことは言ふまでもあるまい。恐く今日の伊太利は拉丁諸國と稱せらるるもののなかにあつても、その第一位をば占め得ないほどに、その持つ諸々の力のうへにかなりな衰へを見せてゐる。從つて、彼女を目するに徒らに巡遊者の國、古美術の國、さては移民の國と倣して、最早列强と比肩するに足る國力の緊張伸展をば再び見難しとする論者は決して尠くはないのである。

自分もまたこの國の有する地位、地形、地質――わけて近代國家の發展の上には缺かす可からざる鐵・石炭の、この國には極めて乏しいこと等を考へ來つて、是等の論者の口にする所の必しも謬れるにあらざることを思はざるを得ない一人である。然しながら、かゝる土地の性質・環境の不利にも拘はらず、人間の『精神』はその不利を超えて敢然と躍進することがあり得る。殊に、新らしき社會・國家の生活が若しわれ等の翹望するがごとき段階にやがて達し得るものとしたならば、その國家の隆昌と否とは決して鐵・石炭等によつて決定せられずして、實に人間の『精神』によつてのみ決定せらるると信じなければならぬのではなからうか。

自分はかゝる意味に於て、今日『暗黒なる中世紀』を經驗しつゝありとも目せらるる伊太利の上に、再びめざましきルネッサンスの到來を豫期するといふことは必しも根據なき樂觀として一蹴すべきものではないことを信じる。今日の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伊太利の惱みの深ければ深いほど、多ければ多いほど（實に今日の彼女の惱の深さよ！　多さよ！）自分は、彼女の上にルネツサンスの燦めき洪水の襲來する日の近附きをます〳〵鮮やかに感じることが能きる氣がする。

あゝ、何れにもせよ、ルネツサンスの歴史こそは、永遠に人生の慰めであり、希望であり、感激でなければならない！

ウフイツチ畫廊のボツテイチエリ。

この畫廊に並べられた無數の畫面がそれぞれ自分にとつて忘れ得ない感動と嘆賞の種となつたなかに、わけても自分の心をば深く捉へたものは實にこのフイレンツエ生れの畫家の手になつた作品の數々であつた。『春（ラ・プリマヴエラ）』や『ヴエヌスの誕生』やの大幅の畫面、『博士禮讃』『讃仰する者（ア・カルミニア）』『聖母の戴冠』『ラ・フオルテツツア』『聖母受胎』『ジユデイツタ』『雲上の聖母』『聖母と小兒と天使と』『薔薇の林にある聖母』『聖（セン）アゴスチノ』其他なほ十指に餘る夥しい作品がそこに惜し氣もなく、と言つてもいいほどに並べられてゐるのであつたが、このめざましく豐かな陶醉のなかで、自分は恰かも出口を失つてしまつた林のなかの獸か何ぞのやうに、見て行つてはまた引返しそうした際限のない愛着のなかにその一室を抱きすぐるぐると彷徨したのであつた。連れのＯ氏ともこの室までは一緒に來て、それからとう〳〵はぐれてしまつたほどに自分はこの室に長い時を踏み止つたのであつた。

ボツテイチエリが藝術家としてミケルランジエロにラツフアエロにさてはレオナルドに比肩し得るとは無論自分は考へない。彼はその藝才に於て遂に第一流の畫家の地位を占め得ないといふとは、遺憾ながらこれを認めぬわけには行かない。然し、それにも拘はらず、――第二流の作家の域を脱し得ないことが明かであるにも拘はらず、彼の作品がかうも深く自分の心を牽くといふのは果して如何なる爲めであらう。

伊太利の藝文の深奥なる研究家として今日佛蘭西翰林院の榮譽ある會員の一人となつてゐるエミール・ジユバール氏は今から十數年前に『サンドロ・ボツテイチエリ』と題した秀れたる著書のなかで、此畫家の抱いてゐた異教の幻影（ヴイジヨン）、神

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

祕の幻影、東邦の幻影に就き最も光彩に富んだ解說をば公にしてゐる。まことに彼は、ルネツサンスの他の使徒たちが希臘精神の洗禮を受けるにとゞまつて更にそれ以外に出やうともしなかつたなかにあつて、（無意識のなかに）その希臘を超えて更にその東方、奇異なるオリアンの邦々の色と光とを求めてはるばるとその手を伸ばしてゐたことが感じられる。『春』の怪しき美は言ふを俟たず、その基督と聖母とを題材にせる夥しき宗教畫のなかに於てもわれわれが先づ目を惹かるるものは、かの絢爛華麗を極めた東方の衣裳につゝまれたる異邦の美である。彼の夢は、明澄なる希臘の空よりも、むしろ明暗彩錯せる東邦の空にあつた。（彼が羅馬のシステイナ會堂の壁畫を描き終つてからフイレンツエに歸つてのちは程なく新らしいルネツサンスの精神運動に興味を持たなくなり、ふたゝび中世紀時代の暗く固い信仰生活のなかに沈潜するやうになつてしまつたといふことは、彼が到底希臘の空の下には安んじて棲み得ない人であつたことを示す例證になることと思はれる。）

この東邦の幻影が、ルネツサンスの數多い秀れた作家の作品のなかにあつて異様な美くしさをもて燦いてゐるために自分の心が（自分もまた深く東邦の夢を趁ふ一人であることを自白しなければならないが）自然とこのボツテイチエリの作品の上に惹き寄せらるるに到つたのであらうか。

自分はそのことを決して否定しやうとはしない。然しながら、かゝる東邦の神祕的なる雰圍氣を外にして、尙且自分の胸を强く搖するものがある。自分は、それを『春』の女性の顏に、『マニフイカツトのマドンナ』の聖母の顏に、『ヴエヌスの誕生』のヴエヌスの顏に、『ジュディッタ』のジユヂイツタの顏に、言はゞ結晶して端的な姿で現はれてゐるのを感じる。その顏の持つ優しみと悲しみと、――自分の胸を何よりも强く搖すぶつてゐるのは、實にこの優しみと悲しみとに他ならぬのであつた。

ボツテイツチエリの作品に現はれてゐるこの優しみと悲しみとの融け合ひみだれ合つた世界の姿にも增して世に懷かしくも美くしいものは多くはあるまいとまで自分には思はれる。物語りと感情との魅力に、線と色彩との魅力をまじへた『詩的畫家』といふ點で、かのウオーター・ペエターはこの作者の特色を言ひ並べやうとしてゐるけれど、むし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろ自分には、たゞその感情こそ如何なる點にも先んじて彼の爲めにまづ數へねばならない所であるやうに思はれる。物語りの畫家はルネッサンスを通じて彼以外いくらも擧げることが能きやう。線と色彩との畫家もまた彼以外いくらも擧げることが能きやう。然しながら彼ほど純一なる感情のもとに人間の寂しき存在がつゝむ優しみと悲しみとの世界を如實に描き出した畫家はルネッサンスを通じて遂になかつたと言はなければならない。彼の人格には、ミケランジエロのごとき大きさはない、またレオナルドのごとき深さはない。またラファエロのごとき燦かしさはない。まつたく是等の巨星は孰れも觀る者をして高く仰ぎ見るの思ひあらしめる。さては深淵を俯瞰するの思いあらしめる。ボテイツチエリにいたつては、かくのごとき廣大・深祕・眩耀の人格のなきかはりに、實に觀る者をして親しみ愛くしませる最も人間的なる感情に充ちみちてゐる。その純眞なる感情の流れは、數百年を隔てたる今日、なほ作者の心より觀る者の心へとたゞちにひびき高く流れ出すのである。かくのごとく心に親しむべき畫家を、自分は、ルネッサンスの時代を離れても多く見ることを得ないとまで思ふ。………

ピアッツァ・ミケランジエロの高丘から見た夕暮のアルノ河とフイレンツエの町との展望は忘れがたい。モーリス・バレスが言つてるやうに、それはまつたく『シモネッタの媚容を持つた、ボテイッチエリそつくり』の感じにあふれた風景であつた。自分は、暫らくこの和やかな展望をほしいまゝにしてから、傍に待たしてある馬車に身を乘せてこの丘から下りはじめた。

馬車の御者は無論自分の國の言葉以外には通じてなかつた。自分は自分でまたこゝの國の言葉は殆んど知る所がなかつた。然しながら、鞭を鳴らす手を止めては後方を向いて御者が頻りと話し出す言葉のなかには、朧ろげながらに悟り得るものがないでもなかつた。そうしたなかの一つであつた、明日朝の九時からサンタ・クローチエの寺院のまへの廣場で、詩聖ダンテの七百年祭の第一日目の祭典が催される、といふ意外な喜こばしい知らせを聽き取ることが能きたのは……

恰度この日の午前自分は本寺に近いダンテ通りとある靜かな通りに古い『ダンテの家』を訪ねて、今更らしくこの

偉大なる天才の跡を偲んだのであつた（然しながら、それは、ダンテの家とは言つてゐるものの、當時の建物は古く火災で燒失してしまひ、たゞ壁だけがそのまゝに殘つてゐるのであると言ふ。現在その建物は、印刷職工のための學校になつてゐる。）

その祭典が明朝そこの廣場で行はれるといふサンタ・クローチェの寺院もまた、先刻親しく訪ねに行つた場所の一つだつた。『おそらく歐羅巴のなかに於て最も盛んなる死者の集合所』とまで言はれてゐるその寺院は、まことに、旅人の眼を驚きをもて輝かさずには措かなかつた。そこには、あの天文學者のガリレオの墓がある。『君主論』の一書に依つて知らぬ人もない權謀の人マキアヴエリの墓がある。『デカメロン』の樂しき物語りの作者ボカチオの墓がある。さてはその名譽の爲めにと築き飾られてゐるダンテの、ミケランジエロの、レオナルドの、ロシニの、ケルビニの墓碑がある。『最初そこに訪ね入る時、何人も光榮の愛すべきことをば感ずるならむも、やがては、生者寂滅の空しき念に打たれざるはなかるべし』とアルフイエリが言つてゐるのもまた、この寺院のなかの數多い墓のまへだつた。

このサンタ・クローチェの寺院を背景とした廣場の眞中には、大きなダンテの像が立つてゐる。その像をまへにして明日、賑やかなる祭典が行はるるわけである。折もよくこのフイレンツエの町にあつて、こゝに生を享けた詩聖の生誕七百年の祭典をば眼の當り見ることが能きる自分の身の幸福は、言葉にも盡しがたかつた。それを告げ知らせた馬車の御者までが訝かし氣に此方を見返へるほどに、自分は喜びの聲を聲高く洩したのであつた……

四月廿七日。窓掛を拂つて窓の外を眺めると、あの古い橋ポンテ・ヴエツキオ越しのうららかな朝の日は今しアルノ河の豊かな灰藍色のうへに一杯あふれ漲つてゐる。空はあくまでも碧く燦ゆかつた。

ホテルを出てアルノ河に添ふた明るい通りをサンタ・クローチェの寺院に向けて歩いて行く。何の家も何の家も窓から三色旗を垂れ下げてゐる。言はずとも知れた今日のダンテの祭を祝ふためだ。同じ寺院へと向ふ人たちも、通りにあふれてゐる。數多い寺々の鐘の音もしきりにひゞき渡つてゐる。――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目指す寺院に近附くにつれて人出は益々增して來た。その辻々には兵士のやうに身を固めた巡査が立つてその混雜を整理してゐた。それを見ただけでも、この日の祭典の賑やかさが想ひ遣られるのであつた。

サンタ・クローチエの廣場に着くと、もうその廣い土地は一杯の人の群で埋められてゐた。そうした夥しい人の群の肩越しに、あのダンテの銅像が、花環と旗旌と棕櫚とに飾り立てられながら、燦ゆい朝の日を浴びて悠然と屹立してゐるのが眺められた。故郷フイレンツエを追はれて東方ラヴエンナ市の一隅に僅かに流離の身を支へて、ひたすらにアルノ河畔の故郷に向けて思慕の念と痛憤の情とを遣つてゐたダンテ。然かも遂にそのアルノを見るの念慮の叶はざるうちに空しく異郷の土となつてしまつたダンテ。あゝそのダンテが、今や、彼を追放せる人々の子孫の手により彼が生前遂に再び踏むを得ざりしフイレンツエの町の中央に於てかくも飾られ、稱(たゝ)へられ、祝はれんとしつゝある。今更めきしことながら、深き感慨のなかにこの銅像を眺めないわけには行かなかつた。……

廣場をかこむ家々の窓には何れも三色旗や黄色なる大旗やを垂れてゐた。その窓に凭りかゝる人、さては露臺(バルコン)に寄り集ふ人のなかには、一かゝへもあるほどの百合の花、リラの花、薔薇の花の花束を手にしてゐるのもすくなくはなかつた。祭に集へる人々の上に撒き散らさうといふのでもあらうか。「花の都」とよばれてゐるフイレンツエ――自分は、いまその名を眼で見てゐるのではなかつたか。

祭場になつてゐる銅像の前の一定の土地だけを殘して、廣場一帶はもう身動きのならぬほどに人が込み合つてゐる。そのなかを、「インノ・ア・ダンテ！インノ・ア・ダンテ！」と高く怒鳴りながら、詩聖を讃へた詩篇を印刷したものをば賣つて歩く男がある。朝とは言ひながら光と熱の強い、如何にも南歐らしい太陽に照されて乾き氣味になつた各自の咽喉をば濡はさうとして「香橙(アランシィ)！　香橙(アランシィ)！」と、みづみづしい果實を籠にして賣り歩く女もある。さまざまの草花を兩手にかゝへて行く花賣りの娘もある。

突如、遙かの方に當つて樂隊の音がひゞきはじめた。背伸びをしてそちらの方をと眺め遣るといまし一團の學生が旗旗を立て樂隊を先導にして、この祭場へと遣つて來る所であつた。が、それは學生の團體ばかりではなかつた。それを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

先登として、それからそれへと際限のないまでに夥しい團體が繰り込んで來た。町の青年會と言ふのもあらう、商工業者の團體といふのもあらう、學校敎師の團體と言ふのもあらう。恐らくフイレンツエの町のあらゆる團體（更にダンテに關係のあるフイレンツエ以外の土地からの團體さへも）がこゝに集つて來たのだつた。そのなかでもわけて目を惹いたのは　少女の一團であつた。いづれも兩手に花をかゝへて（言ふまでもなくそれは詩聖の銅像のまへに飾らうといふのだ）笑みかはしながら遣つて來る稚けなく愛らしいこの群のなかには、折柄の樂隊の音に、われ知らず手を振り足を動かして踊りながらに歩いて行く子もあつた。自分は思はず、十四歳のベアトリーチエの面影をそのなかに描き出さうとさへしたのだつた。――

銅像のまへの相當廣い祭場も、かうした夥しい團體を容れたので最早一寸の容地もないやうに見えた。もう今はいくら爪立ちして眺めやうとしても、十重二十重に重り合つてゐる人の群を越して銅像の下のほとりに行はれてゐる祭典を見遣るといふことは所詮能きぬこととして諦める他はなかつた。たゞ銅像のまへに花環を次々と高く積み上げられて行くのが遙に眺められた。その都度に喚聲は爽やかな樂隊の音につれて湧き上つた。手に手に草花がうち振られた。と、やがて少年少女たちの朗らかに歌ひ出す唱歌の聲がその一隅から起つた。――

此旺んなる光景を眺めてゐた自分の眼は何時か熱く濡れて行くのを感じた。自分は若しこれが凱旋將軍を迎へての擧式であるか、若くは功績を遂げて歸朝する政治家を迎へての擧式であつたとしたならば、格別に不思議とはせぬであらう。それは何れの國に於ても、――たとへ冷靜鈍重を以て稱せらるる英吉利人の國に於てすらも、格別のこともなく容易に目睹し得るであらうから。然しながら、七百年の古昔世にありし一人の詩人の爲めに、たゞ『デイヴイナ・コメデイア』一卷を生み出したる人の天才そのものの爲めのみに、想像と感情と思想との美くしき天賦そのものをば讃へんとの爲めのみに、かくも旺んなる熱情の饗宴を張らんとする國は、あゝ、この南歐拉丁の國を他にして何處にあるであらう！　自分の身體は感動の爲めに顫へさへもするのだつた。……

この日一日フィレンツエの町は隅々までもダンテ祭らしい賑はひの行き渡らぬ所とては無かつたと言つてよかつた。旗と花とはあらゆる窓にあつた。學生たちの歌ふ歌の聲はあらゆる通りにあつた。殊に、自分にとつて忘れられぬのはピアッツア・シギョリに向いたあるカッフエにあふれてゐる大學生の群であつた。そのなかには美くしい女學生の姿さへ數多く交つてゐた。それ等がビールや珈琲の杯を手にしながら、かゞやく陽の光りを片頰に受けつゝ、聲高くダンテの讃歌を歌唱してゐるその有様は、火のごとき『青春』の焰そのものの姿と言つてもよかつた。

……夜更けるまで、アルノ河畔の旅舍の自分の枕許には、ポンテ・ヴエッキオの橋上でも渡つて行くらしい若々しい歌聲が絶えず傳はつて來た。自分は思ふともなしにまたしても生れた國のことを頭に泛べた。溜息は自然と洩れて出た——

死せる町ピサ

ダンテ祭の翌くる日の朝であつた、ピサの町とその遺蹟とを見やうとしてO氏と俱にフィレンツエの停車場を發つたのは。

朝のうちに曇つてゐた空は、汽車のすゝむのに連れて燦ゆい陽の光を洩すやうになつた。その光を浴びてゐる緩やかな平野——それは言ふまでもなくトスカナの平野だ——は、遠い山脈にかこまれて、その胸のなかには、丘や森や赤い屋根の建物や、さては豐かな灰藍色の流れや——それも言ふまでもなくアルノの河だ——を抱きこむで、樂しげにひろびろと展がつてゐる。自分はふとロンバルヂアの平野を、ヴエネチアの平野を、さてはエミリアの平野を、頭のなかに思ひ泛べた。それ等の平野と較べると、このトスカナの平野は、何といふ優しさと力と、——そして更にある氣高さま

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも持つてゐることであらう。自分は今更のごとくにこのトスカナから萌え出でた藝術のうへに刻み込まれてゐるこの自然の跡をば、思ひ合はせないわけには行かなかつた。——

やがて汽車はトスカナの平野から、狹い山地のなかにはいつて行く。アルノ河の溪谷である。美くしい水の煌めきは絶えず車窓の外にあつた。が、その山地も間もなく盡きて、こゝにいよいよピサの町が横つてゐる平野が展ける。菜の花が、日本の春を思はせるやうに、この平野のあちこちに咲いてゐた。

ピサの町に着いた。『ピサの斜塔』のある處、カムポ・サントのある處、ガリレオの育つた處、畫匠ピサノの生を享けた處、——さては程近いイル・ゴムボーの海岸ではかの英吉利の詩人シエリが水死した所……昔から耳にしてゐたその懷かしい名の町に、自分たちの足は附いたのであつた。

が、それにしても、何といふ寂しい空しい感じに充ちた町の姿であらう。停車場の前から電車に乘つてイル・ドウオーモの方へ赴かうとしてゐる自分たちは、車窓から町を見遣つては、それが棄てられたまゝに廢つて行つてしまつたやうな町であることをしみじみと感じないではゐられなかつた。人口も二十萬がほどあるといふけれど、その人たちは何處かに靜かな寂しい眠りを眠つてゐるとしか思はれなかつた。況んや、往時フイレンツエの町と覇を爭つて烈しく血を流し合つてゐたといふやうな壯んな勇ましい時代の面影は、最早や如何なるもののうへにも認めることが能きなかつた。すべては沈默と空虚とのなかにあつた。荒涼と廢滅との空氣が、あらゆるもののうへにあつた。町のなかを貫流してゐるアルノ河の水上を眺めても、舟一つ動いてゐるのではなかつた。たゞ陽の光だけが、この無言の水と町とのうへに明るく降り灑いでゐるのみだつた。それは却つてこの廢滅の感じを一しほ深く感じさせるのに過ぎないやうなものであつた。——

自分たちを乘せて來た電車は、やがて終點に當つてゐるイル・ドウオーモのまへに來て停つた。と、自分たちは、たちまち廣壯華麗なる本寺と、その右手のカムパニーレ（これが斜塔だ！）と、その左手の洗禮（バプティステロ）堂との三つの建物が屹然と聳立してゐるまへの草原のなかにと投げ出されたのであつた。如何にも田舍じみた、空寂な無言の廢市を眺め盡して來た自分たちの眼が、思ひ掛けなくこの大きく豐麗なる建築のまへに行き當つたときには、その建築がまるで夢の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかに現はれた美くしい幻の城のやうにも思はれたのであつた。しばらくは、歩き出すのも忘れて遠くからこの美くしい大きな建物を眺め入つたのである。

然しながら、氣が付いて周圍を見廻はして見ると、これはまた何といふ寂しい風景であつたらう。樹木も植えずに棄てられたる草原、それを遠くから圍んでゐるみすぼらしい民家、――眼に入るものはたゞさうしたものではなかつたか。そこには人影すらも稀れであつた。白い埃の街道を行き交ふ黒衣の婦人の二三人と、草原に遊んでゐる五六人の子供と、――その子供の聲のみが空しくこのがらんとした野原にひびき渡つてゐるのであつた。

『死せる町（シテ・モルタ）！』

自分はO氏を顧みて、さう口に出した。

グレコ・ロマンの美くしい様式から成つてゐる本寺（イル・ドオーモ）の內部を仔細に眺めてから、自分たちはその西に聳えてゐる洗禮堂（バッティステロ）に這入るまへに、その背後に聳えてゐるカムポ・サントの外觀簡素な長い建物のなかを見ることにした。カムポ・サントと言ふのは伊太利語で墓所を意味する。然しながらこのピサのカムポ・サントは、それを造るが爲めに五十の船を艤裝してわざわざ遠く土を東方のジュルサレムの聖地から持ち運んだと言はれてゐ、また、その工事が完成するまでには實に二百年に亘る長年月を費やしたとも言はれてゐる。加へてそこにベノッツオ・ゴッツオリの美くしい壁畫が展げられてゐるがために、カムポ・サントと言へばすぐにピサのこの場所を思ひ出させられるほど、美術巡遊の人々の間には知れ亘つてゐる墓所もになつてゐる。

外觀簡素で地味なこの建物も、一歩入口から內部に足を踏み入れるとともに、たちまち一面の美くしい古壁畫の色と光とが眼前に展開する。眼と心とはこの喩へやうもない艶はしい色合に充ちた『花園』のために緊乎と捉へられてしまふ。碧い大理石の美くしい柱列、眞白な大理石の墓棺、さては古代の壺が、この色艶やかな花園をば靜かな姿で取りまいてゐる。――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

壁畫の大部分は前記したやうに畫僧フラ・アンジエリコの弟子ベノッツオ・ゴッツオリの手になつてゐる。ピイトロ・デイ・ブッティオ・ドルヴエトの描いた『創世』『アベルの死』『術の始め』といふやうな作品に續いて、この畫家の『ノアの洪水』『バベルの塔』『ロトの女』『ソドムの破壞』等舊約聖書のなかの物語りを題材とした二十に餘る作品が『時』の持つ柔らかな力のために却つて美くしく傷められてそれからそれへと並んでゐるのである。それを一枚一枚と靜かに見て行く。自分たちのほかには、誰ひとりこのカムポ・サントのなかに佇んでゐるものとてはなかつた。眞晝の太陽は、中庭に繁つてゐる鮮やかな緑色の樹と柔らかな芝生と、そこに咲き亂れてゐる種々の草花とのうへに、音もなくその明るい光を浴びせてゐる。あゝこの明るさと靜けさと寂しさと、――このなかを一枚一枚眺めて行くベノッツオの壁畫の持つ美くしさは一しほに胸に泌み入るものがあつた。

ベノッツオは十五世紀のはじめにフイレンツエで生れた人だ。この人の作品を自分がはじめて見たのは英吉利を旅したときに倫敦はナショナル・ギャラリーに於て見たのにはじまる。その折にはさして深く感銘させられるほどではなかつた。ミラノのブレラ美術館で見た小さな截片の畫もまた自分を特別に深く惹くには到らなかつた。それが、フイレンツエのパラッツオ・リカルデイの會堂（カツペラ）のなかにある三つの大きな壁畫を見たときから、急にこの畫家に對する愛の湧き出るのを感じるに到つた。それがいまこのカムポ・サントの大作を眺めるに及んで（それはまつたく大作と呼ばれてもいい。彼はこれを描くために實に十六年といふ長い間を費やしたといふ！）彼の作品に對する自分の深い讃嘆は確定してしまつたと言つてよかつた。

彼の作品が最初容易に人を牽き付けるのは何と言つてもこの色彩の美くしさだと言つていい。全く彼はこの快い感覺の稟性を、その師であるフラ・アンジエリコから明かに讓り受けてゐる。然しながら、彼はその師のやうに單に色彩の甘美な世界のなかに溺れてしまふ人ではなかつた。彼には、その色彩の諧調を超えて更に重要なものが存してゐた。それが、彼をしてルネッサンスの數多い作家のなかにあつて尚且他に類例なきユニークな作家たらしめたものであつた。その重要なものとは、即ち彼の眞實性を言ふに他ならないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼の作品に現はれてゐるこの眞實性は、これを他のルネッサンスの作家のなかに求めても、容易に得難いものであることを自分は感じる。彼ほど率直に事物を見、その個性を捉へ、その精神に徹し、やがて何等の氣取りも衒氣もなくそのまゝにそれを畫面に現はし得た作家は、到底他にこれを求め得ないと思ふ。『ザ・ルネッサンス』の著者ペエターは、ボッティチエリを稱んで物語(ストーリー)の畫家としてゐるけれど、自分の見る所では、このベノッツオにまして秀れた物語(ストーイリ)の畫家が他にあらうとは到底信じられない。彼の持つ現實性、彼の持つ單純性、彼の持つ人間性、――これこそ、彼を何よりも物語りの畫家に適はしいものにする。ボッティチエリを空の幻(ヴィジオン)想の詩人であるとしたならば、ベノッツオは土臭き史實の叙事詩人でなければならない。笑ひと苦しみと、涙と怒と、活氣と衰耗との『人間』の歴史をば、彼位鋭く感じ彼位正しく描き出してゐるものを、人は容易に見るを得まい。まことに彼は、かゝる『人間』の一員として畫面の人物と同じく倶に笑ひ苦しみ泣き怒つて來た一人であつたのだ。――かのスタンダールが、特にこの作家をば同時代の作家中より拔いて讚美の聲を献げ、『そのあらゆる作品は驚くべき眞實味(ヴェリテ)をもつて描かれてゐる』となしてゐるのは、實に正しい、スタンダールの人とその作品とにある眞實味が、――人間らしさが、このベノッツオのなかにもまざまざとある！

洗禮堂(バッティステロ)のなかも見た。カムパニーレ――斜塔のうへにも登つて見た。その塔の上から遙かの海と山をも見た。町に引返さう、そしてリストランテを見付けて晝餐を攝らう、……かう言ひながら自分たちは、寂しい草原のなかに聳えてゐる四つの建物――本寺、洗禮堂、斜塔、及びカムポ・サント――の方に心殘りの一揖を與へたまゝ、ふたゝび『死せる町』のなかへと足を向けたのであつた。……

雑記

(一) 日比谷から鶴見へ

吉村冬彦

夏の或朝築地迄用があつて電車で出掛けた。日比谷で乘換へる時に時計を見ると、未だ少し豫定の時刻より早過ぎたから、一寸公園へは入つて見た。秋草などのある廣場へ出て見ると、カンナや朝貌が咲きそろつて綺麗だつた。いつもとはちがつて其時は人影といふものが殆んど見えなくて、唯片隅のベンチに印半纒の男が一人ねそべつて居るだけであつた。木立の向ふにはいろ〱の色彩をした建築がまともに朝の光を浴びて華やかに輝いて居た。

こんなに人出の少ないのは時刻のせいだらうが、此れなら、いつか其内にスケッチでも描きに來るといゝといふ氣がした。

四五日たつてから、或朝奮發して早起をして、電車が通ひ始めると繪具箱を提げて出かけた。何年ぶりかで久し振りに割引電車の赤い切符を手にした時に、それが自分の健康の回復を意味するシムボルのやうな氣がした。御堀端にかゝつた時に、桃色の曙光に染められた千代田城の櫓の白壁を見てもそんな氣がした。

日比谷で下りて公園の入口を見やつた時に、此れはいけないと思つた。ねくたれた寢衣を着流したやうな人の行列がぞろ〱あの狹い入口を流れ込んで居た。草花のある廣場へは入つて見るといよ〱失望しなければならなかつた。齒磨揚枝をくわへた人、犬をひつぱつて居る人、寫眞機をあちらこちらに持ち廻つて勝手に苦しんで居る人、それ等の人の觀察を享樂して居るらしい人、さういふ人達で此の美しい朝の廣場はすつかり占領されて居た。眞中の芝生に鶴が一羽

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歩いて居るのを小さな黒犬が一疋吠へついて居た。

最も呑氣さうに見えるべき筈の此等の人達が今日の私の眼には妙にもの〳〵しい行列のやうに見えた。大劇場のプロムナードを練り歩く人の群のやうな氣がした。そして世の中に「閑な人」程恐ろしいものはないといふ氣がした。自分が矢張其の一人である事などは忘れてしまつて。

裏の方の芝地へ廻つて見ても同様であつた。裁判所だか海軍省だかの煉瓦を背景にした、まだ短夜の眠りのさめ切らぬやうな柳の梢に強い畫趣の誘惑を感じたので、餘程思ひ切つて畫架を立てやうかと思つて居ると、もう其處らを歩いて居る人が意地悪く此方へ足を向け始めるやうな氣がする。ゴーゴルか誰かの小品で讀んだ、パンの中から出た鼻の捨場所を捜してうろついて歩いて居る男の心持を想出した。

あきらめて東京驛から鶴見行の切符を買つた。此の電車の乗客は僅であつたが、其中で一人、可也の老人で寝衣のやうなものを着て風呂敷包をさげたのが、乗つたと思ふともうすぐに有樂町で下りた。此れはどういふ譯だか私には不思議に思はれた。事によると此人は東京驛員で昨夜當直をしたのが今朝有樂町邊の宿へ歸つて行くのではないかといふ假説をこしらへて見た。さう云へば新橋で下りる人も可也あつた。此れもどういふ人達が見當が付かない。

汚ないなりをした眼のしよぼ〳〵した干からびた婆さんと、其孫かとも見える廿歳位の、大きな風呂敷包の荷をさげた、手拭浴衣の褞袍を着た男が乗つて居た。話の様子で察して見ると、誰か此老婆の身近い人が、川崎邊の病院にでもはひつて居て、それが危篤にでも迫つて居るらしい。間に合ふかどうかを氣にして居るのを、男がいろ〳〵に力をつけて慰めてゞも居るらしかつた。かういふ老婆を見ると、如何にも弱々しく見える一方では、又永い間世の中のあらゆる辛苦に錬へ上げられて、自分などがとても脚下にもよりつかれない程強い健氣な處があるやうに思はれて來る。そしてそれが氣の毒なといふよりは寧ろ羨ましいやうな氣のする時がないでもない。

鶴見で下りたものゝ多くのあてなしであつた。うしろの丘へでも上つたら何處かものになるだらうと思つて、いゝ加減に坂道を求めて登つて行つた。風が少しもなくて、薄い朝霧を透して横から照り付ける日光には帽子の縁は役に立たぬも

のである。坂を上りつめると廣い新開道があつた。少しあるくと道は突然中斷されて、深い堀割が道と直角に丘の胴中を切り拔いて居た。向ふに見える大きな寺が多分總持寺といふのだらう。

松林の中に屋根だけ文化式の赤瓦の小さな家の群があつた。そこらにおむつが干したりしてあるが、それでも何處かオルガンの音が聞こえて居た。

未だ見た事のない總持寺の境内へは入つて見た。左の岡の中腹に妙な紀念碑のやうなものがいくつも立つて居るのが、どういふ意味だか分らない。分らないが非常に變な氣持を與へるものである。

暑くなつたから門内の池の傍のベンチで休んだ。ベンチに大きな大保錢の形がくつゝけてある。此れは所謂大保錢主義と稱する主義の宣傳の爲に此處に寄附されたものらしい。

繪でも描くやうな心持がさつぱりなくなつてしまつたので、總持寺見物のつもりで奥へはひつて行つた。花崗石の敷石を贅澤に張りつめたゆるい傾斜を上りつめると、突きあたりに擂鉢のやうな池の岸に出た。其處に新聞縱覽所といふ札のかゝつた妙な家がある。一方には自動車道といふ大きな立札もある。其處に立つて境内を見渡した時に私は甞て經驗した事のない奇妙な感じに襲はれた。

つい近頃友人のうちでケムプエルが日本の事を書いた書物の插繪を見た中に、京都の清水か何處かの景と稱するものがあつた。其の繪の景色には、普通日本人の頭にある京都といふものは少しも出て居なくて、例へばチベツトかトルキスタンあたりの何處かにありさうな、荒涼な、陰慘な、そして乾き切つた土地の高みの一角に、「屋根のある棺桶」とでも云ひたいやうな建物がぽつ／＼並んで居る。そして矢張り干からびた木伊乃のやうな人物が點在して居る。何と云つていゝか分らないが、妙にきら／＼明くて居てそれで陰氣なおどろ／＼しい景色である。dismal, weird、何かしらそんな言葉でもつと適切な形容詞がありさうで思ひ出せない。

總持寺の尨大な建築や紀念碑を見廻した時に私を襲つた感じが、どういふものか此のケムプエルの插繪の感じと非常によく似て居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

擂鉢形の凹地の底に淀んだ池も私には可也グルーミーなものに見えた。池の中島にほうけ立つた草もさうであつた。汀から岸の頂迄斜に渡した、コンクリートの細長い建造物も何の目的とも私には分らないだけに更にさういふ感じを助長した。

ずつと裏の松林の斜面を登つて行くと、思ひがけなく道路に出た。其處に名高い花月園といふものゝ入口があつた。どんなにか美しい筈のこんもりした溪間に、ゴタ／＼と妙な家のこけら葺の屋根が窮屈さうに押しあつて居るのを見下して、成程かうした處かと思つた。

西の方へ少し行くと、はじめて自然の野があつて畑には農夫が働いて居た。しかし一方を見ると、大きなペンキ塗の天狗の姿が崖の上に聳えて居るのに少からず脅かされた。

歸りの電車はノルマルに込んで居た。並んで立つて居た若い會社員風の二人連が話して居るのを、聞くともなく聞いて居ると、毎朝同じ時刻に乘る人がみんなそれ／＼乘り込む車の位置に自らきまりがあると見えて、同じ顏が同じ處にいつでも寄り合ふやうだと云つて居た。さうかも知れない。併し同じ顏を見た時の印象が、見なかつた時の印象を掩蔽してさう思はせるのかも知れない。

品川から上野行は嘘のやうに空いて居た。向側に小間物でも行商するらしい中年女が乘つて、大きな荷物にもたれて斷へず居眠りをして居た。浴衣の膝頭に指頭大の穴があいたのを丹念に繕つたのが眼についた。汚れた白足袋の拇指の破れも同じ物語を語つて居た。

相場師か請負師とでもいつたやうな男が二人、云ひ合せたやうに同じ服裝をして、同じ折かばんを膝の上に立てたり倒したりしながら大きな聲で話して居た。四萬圓とか、一萬坪とか、青島とか、横須賀とかいふ言葉が聞えた時に私の頭にはどういふものかさつき見た總持寺の幻影が又蘇つて來た。

兵隊が二三人鐵砲を持つてはひつて來た。銃口にはめた眞鍮の蓋のやうなものを注意して見て居る内に、自分が中學生のとき、エムビール銃に鉛玉を込めて射的をやつた事を想ひ出した。單純に射的をやる道具として見た時に鐵砲は氣持

のいゝものである。併し此れが人を殺す爲の道具だと思つて見ると、白晝此れを電車の中に持ち込んで、誰も咎める人のないのみならず、何の注意すらも牽かないのが不思議なやうにも思はれた。

結局繪は一枚も描かないで疲れ切つて歸つて來たのであつた。しかしケムブエルの插繪の中にある日本を思ひがけない處で見付け出したゞけは此日の拾ひ物であつた。

（二）雅樂

友人の紹介によつて、始めて雅樂の演奏といふものを見聞する機會を得た。

それは美しい秋晴の日であつたが、丁度招魂社の祭禮か何かの當日で、牛込見附のあたりも人出が多く、何となしにうらゝかに賑はつて居た。會場の入口には自動車や人力が群がつて、西洋人や、立派な服裝をした人達が流れ込んで居た。玄關から狹い廊下をくゞつて案内された坐席は舞臺の眞正面であつた。知つて居る人の顏が其處らのあちこちに見えた。

獨立な屋根をもつた舞臺の三方を廻廊の樣な聽衆觀客席が取り圍んで、それと舞臺との間に溝渠の樣な白洲が、此れも矢張り客席になつて居る。廻廊の席と白洲の席との間に昔は可也劃然な階級の區別がたつた者であらうと思はれた。自分の案内されたのは恐らく昔ならば殿上人の席かも知れない。さう云へば一番前列の椅子は悉く西洋人が占めて居て、其中の一人の婦人の大きな帽子が、私の席から見ると舞臺の約三分の一位は蔽ふのであつた。此れは世界中でいつも問題になる事であるが、殊にあゝいふ窮屈な場所では斷る事にした方が、第一其婦人の人柄の爲に却てよくはないかと思はれる。

一段高くなつて居る舞臺は正方形であるらしい。四隅の柱をめぐつて廣い椽側のやうなものがある。舞臺の奧に奏樂者の席のあるのは能樂の場合も同樣であるが、正面に立てた屏風は、あれが方式かもしれないが私の眼には餘り渾然とした感じを與へない。寧ろ借りて來たやうな氣のするものである。

烏帽子直垂とでも云つたやうな服裝をした樂人達が色々の樂器をもつて出て來て、あぐらをかいて居ならんだ。昔明治音樂界などの演奏會で見覺へのある樂人達の顏を認める事が出來たが、服裝が餘りにちがつて居るので不思議な氣が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するのであつた。
始めに管絃の演奏があつた。「春鶯囀」といふ大曲の一部だといふ「入破」、次が「胡飲酒」、三番目が朗詠の一つだといふ「新豊」、第四が漢の高祖の作だといふ「武徳樂」であつた。
始めての私には此等の曲の旋律や和聲がみんな殆んど同じもの丶やうに聞えた。物に滲み入るやうな笙の音、空へ舞ひ上るやうな篳篥の音、訴へるやうな横笛の音が、互に入り亂れ追ひ驅け合ひながら、ゆるやかな水の流れ、靜かな雲の歩みのやうにつゞいて行く。其の背景の前に時たま現はれる鳥影か何ぞのやうに、琴や琵琶の絃音が投げ込まれる。そして花片の散り落ちるやうに、又漏刻の時を刻むやうに羯鼓の音が點々を打つて行くのである。
此處が聞き處つかまへ處と思はれるやうな曲折は素人の私には分らない。併し其處には確に樂の中から流れ出て地と空と人の胸とに滲透する或る雰圍氣のやうなものがある。此の雰圍氣は今の文化的日本の中では容易に見出されないもので、唯古い／＼昔の物語でも讀む時に、僅に其の匂だけを嗅ぐ事の出來るものである。
始め西洋音樂でも聞くやうな積りで、稍緊張した心持で聽いて居る内に、いつとなしに此の不思議な雰圍氣に包込みまれて、珍らしくのんびりした心持になつた。メロディなどはどうでもよかつた。唯春の日永の殿上の欄にもたれて花散る庭でも眺めてゐるやうな陶然とした心持になつた。
凡ての音樂がさうであるか、どうか、私には分らない。併し、どうも此の管絃樂といふものは、客觀的分析的或は批評的に聽くべきものではなくて、唯此の音の醸し出す雰圍氣の中に無意識に沒入すべきもの丶やうな氣がする。さうする事によつて此音樂が本當の意味をもつやうな氣がする。
此れが雰圍氣である以上、それに一度沒入してしまへば、もう自覺的にそれを聞いて居なくてもい丶。此雰圍氣の中で私は食事をし、書物をよみ、又六かしい數學の問題を考へる事すら可能なやうな氣がする。
レオナルド・ダ・ヴィンチが畫を描く時に隣室で音樂を奏でさせたといふ話があるが、此れも勿論唯音樂の雰圍氣だけを要求したものに相違ない。彼は恐ろしく多面的な忙がしい頭腦をもつて居た人である。時としては彼の神經は千筋に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分裂して、其の凡ての末端がいら立つて、とても落着いた心持になれなかつたのではあるまいか。さういふ時に彼は音樂の醸し出す天上界の雰圍氣に包まれて、それで始めて心の集中を得たのではあるまいか。

此れは唯何の典據のない私だけの臆測である。併しそれはいづれにしても、今の苛立たしい世の中を今少し落着けて、人の心を今少し純な集中に導く爲には、此のやうな音樂も存外有効ではないだらうか。

此んな事を考へるともなく考へながら、私の心はいつか遠い吾々の祖先の世に遊んで居た。

朗詠の歌の詞は『新豐の酒の色は鸚鵡盃の中に清冷たり、長樂の歌の聲は鳳凰管の裏に幽咽す』といふのださうであるが、聞いて居ても中々さうは聞きとれない程にゆつくり音を引延ばし搖曳させて唱ふ。そして其聲が實際幽咽するとでもいふのか、何處か奥深い御殿のずつと奥の方から遥に響いて來るやうな籠つた聲である。此れは歌ふ人が口を餘り十分に開かず、脣もそんなに動かさずに、口の中で歌つて居るせいかも知れない、始めの獨唱のときは、どの人が歌つて居るか、一寸見ては分らないやうであつた。

此れも恐らく多くの現代人には餘りに消極的な唱歌のやうに思はれるかも知れない。若しさうであれば、それだけ却つて必要な解毒劑かも知れない。

管絃のプログラムが終ると、暫くの休憩の後に舞樂が始まつた。

一番目は「賀殿」といふのであつた。同じ衣裳をつけた舞人が四人出て、同じやうな舞をまふのであるが、此れも丁度管絃樂と全く同じやうに矢張一種の雰圍氣を醸出する「運動の音樂」であるやうに思はれた。外の各種の舞踊に表はれるやうな動的エネルギーの表出はなくて、凡てが靜的な線と形の律動であるやうに思はれた。

二番目の「地久」といふのは、矢張四人で舞ふのだが、此の舞の舞人の着けて居る假面の顔が餘程妙なものである。一寸惠比壽に似たやうな處もあるが、鼻が烏天狗の嘴のやうに尖つて突出て居る。柿の熟したやうな色をした其顔が、さも〳〵喜びに堪へないといつたやうに、心の笑みを絞り出した表情をして居る。此れが生きて居る人の本當の顔ならば、恐らく一分間或は三十秒間も其儘に持續する事は困難だらうと思はれる表情を何時迄も持續して舞ふのである。此

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れは舞樂に限らない事であらうが、此れだけの事でも其處に一種の空氣が出てくる。尤も不思議な事に、假面の顏といふものは、永く見て居ると、それが色々に動き變るやうな錯覺を生じるものだが、此の場合でも矢張それがある。音樂と運動の律動につれて、此の笑顏にも一種の律動的變化を感じる事が出來る。

柿色の顏と萠黄色の衣裳の配合も特殊な感じを與へる。頭に冠つた鳥冠の額に、前立のやうに着けた鳥の頭部のやうなものも不思議な感じを高めた。私は此の面の顏の表情に、何處か西洋畫で見るパンの神のそれに共通なものがあるやうな氣がしてならなかつた。

三番目は「蘇莫者」といふのである。何と讀むのか、プログラムに假名付けがないから分らない。說明書によると此曲は元と天竺の樂で、舞は本朝で作つたとのことである。蘇莫者の事は六波羅密經に詳しく書いてある。聖德太子が四十三歲の時に信貴山で洞簫を吹いて居たら、山神が感に堪へなくなつて出現して舞ふた、其姿によつて此舞を作つて伶人に舞はしめたとある。

始めに、多分聖德太子を代表してゐるらしい衣冠の人が出て來て、舞臺の横に立つて笛を吹く。しばらくすると山神が出て來て舞ひ始める。おどろな灰褐色の髮の下に眞黑な小粒な顏がのぞいてゐる。色が餘りに黑いのと距離が遠いのとで、顏の表情などは遺憾ながら分らない。片手に何か短い棒のやうなものを固く握つて居るが、此れも何であるか分らなかつた。併し私にはそれはどうでもよい。面白いのは其の運動である。頭の上で近付けた兩手を急速に左右に離して空中に圓を描くやうな運動、何かものを跨ぎ越えるやうな運動、何ものかに狙ひ寄るやうな運動、さういふやうな不思議な運動が幾遍となく繰り返される。

前の二種の舞が如何にもゆるやかな、のんびりしたものであつたのに反して、此の蘇莫者には何處かもう少し迫つた感情のやうなものが出て居る。それは畢竟運動の速度、從つてエネルギーの差から起るものかも知れないが、そればかりでなく、此の舞人の擧動自身に何かしら或る感情の逼迫を暗示するものがあるのかも知れない。それがどういふ感情であるかと問はれると私にも分らないが、併し例へば或る神性と同時に或る狂暴性を具へた半神半獸的のビーイングの獣

尊の表現だと思つて見ると、さう思へない事はない。

私は遠い神代の我大八洲の國々の山や森が、かういふ神秘的なビーイングによつて棲はれて居たと想像して見た。さうして自分が其等のビーイングの正統な子孫であると考へて見た。さう思ふ事によつて此の國土に對する自分の愛着の感情は增しても減りはしないやうな氣がする。

最後に「長慶子」といふ曲を奏した。慶祝の意を表はしたもので、參會の諸員退出の時に此を奏すと說明書にあつたが、その爲か、奏樂中にがた〳〵席を立つ人が續々出て來た。

近頃にない舒びやかな心持になつて門を出たら、長閑な小春の日影がもう可也西に傾いて居た。

(二)　ノーベル・プライズ

或夜いつものやうに仕事をして居ると電話がかゝつて來た。某新聞社からだといふ。何事かと思つて出て見ると、國際電報によつて昨年度と今年度のノーベル賞金の受賞者の名前の報知が屆いた、其一人はアインシュタインで、もう一人はコーペンハーゲンのニールス・ボールといふ人ださうだが、此のボールといふ人は一體どんな人でどういふ仕事をした人かといふのである。私はなるべく簡單に自分の知つてる要點だけを話して電話を切つた。そしてやりかけた仕事にとりかゝると又電話がかゝつた。今度は別の新聞社から同じ事の問合せであつた。ボールをまちがへてボール〳〵と云つて居るのが氣になるので、それだけは訂正しておいた。

ボールの理論の始めて發表されたのは一九一三年であつたから、もう丁度一と昔前の事である。其說はすぐに我邦の專門家の間にも傳へられ、考究され、紹介され、應用もされて居た。今日物理學に興味をもつ人でボールの名前と其の仕事の一般を知らない人は恐らく一人もない筈である。

處が此れ程專門家の目には顯著な人物の名前が「世間」といふものゝ人名簿には今日といふ今日迄何處にもかいてなかつた。それがノーベル賞の光環を頂いて突然天から降つて來た天使のやうに今「世間」の面前に立つて居る。十年前

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に出現した新星の光が今漸く地球に屆いたやうなものである。

それ程に科學者の世界は世間を離れて居る。併し其おかげで學者は心靜に落着いて各自の研究に沒頭して居られるのかも知れない。

近頃彼地でボールに會つて歸つて來た友人の話によると、此の未だ若い學者は、何處か近い田舍に小さな別莊のやうなものを有つて居て、暇のある毎に其處へ行く、さうして平和な周圍と新鮮な空氣の中に想を練りペンを使ふ、どうかすると芝生の上に寢轉がつて他所目にはぼんやり雲を眺めて居るさうである。さういふ時に彼の頭には色々の獨創的な考の胚子が浮んで來るのらしい。彼はさういふ考(イデー)を書き止めておいては、それを丁寧に保存し整理しては追究して行くさうである。如何にも此人にふさはしいやり方だと思ふ。過去の仕事のカタログを製したりするよりは、寧ろ未來の仕事の種子の整理に骨を折つて居るらしいのが、常に進取的な此人の面目をよく表はして居て面白いと思ふ。

此のやうにしてこそ、彼のやうな學者は本當の仕事といふものが出來るのではあるまいか。實に羨ましい境遇だと思はねばならない。

日本に限らず何處でも一體に學者といふものは世間から尊重されないものだと云ふ說がある。此の尊重といふ文字の意味が問題になる。

昔は兎に角今日では我邦ですらも科學といふものゝ功利的價値は、理解されたといふより寧ろ無理解に世間で唱導されて居る。其當然の結果として科學者はさういふ意味で尊重されて居る。從つて科學者は自分の研究以外の事で常に忙がしい想をするやうに餘儀なくされる。

科學者としては、世間に對する自分の義務として、出來得る限りは、世間からの要求に應じなければならないと考へる人は、寧ろ多數であらう。さう考へる以上は、場合によつては自分の大事な研究時間を隨分思切つて割いても世間の要求に應じる爲に忙がしい想をし、從つてそれだけの心のエネルギーを餘計に消磨させなければならない。

此れは止むを得ない事かも知れない。そして私はさういふ學者の犧牲的精神に尊敬を拂ふ事を忘れないつもりである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併し學者と此れに對する世間とから全く飛び離れた第三者の位置に立つて見ると、此れは世間といふものが本當に學者を尊重し學術の進歩を期圖する方法ではないやうな氣がする。場合によつては寧ろ學者を濫用し科學の進歩を妨げるやうな結果になる事がないとは限らないやうに思ふ。此れは餘程愼重に考へて見なければならない可也大事な問題である。

學者の中にも科學の應用に興味を有ち、其方面に特別の天賦を具へて居る人がある。又一方では純理的の興味から原理や事實の探究にのみ耽る人もある。中には兩方面を併せて豐富に有つて居る多能な人もないではない。

ボールの如きは寧ろ此の第二のタイプの學者であるやうに思はれる。從つて世間からうるさく取りすがられ驅使される事なしに、そつとして構はないでおいて貰ふ事に最大の幸福を感ずるたちの人ではなからうかと想像される。かういふ型の學者があるとすれば、これを世間が本當に尊重するつもりなら、矢張はたから構はないで自由に芝生に寢轉がつて雲を眺めさせて置く方が一番いいだらうと思ふ。

さう云へばアインシュタインなども本來は矢張さういふ型の學者のやうに私には思はれる。處が幸か不幸か彼れも數年前から世間の眼の前に押し出された。その爲に人のよく知る通り恐ろしく忙がしいからだになつてしまつた。尤も彼自身はそれを自分の樂しい義務のやうに考へて居るかのやうに見える。そして少しの厭な顏もしないで誰でもの要求を滿足される爲に忙殺されて居るやうに見える。此れは美しい事である。

併し純粹に科學の進歩といふ事だけを第一義とする立場からいふと此れは少しアインシュタインに氣の毒なやうな氣もする。もう少し心とからだの安息を與へて、思ひのまゝに彼の欲する仕事に沒頭させた方が、却つて本當に此の稀有な偉人を尊重する所以でもあり、同時に世界人類の眞の利益を圖る所以にもなりはしまいか。此れも考へものである。

今度のノーベル・プライズの爲に不意打をくらつた世間が例のやうに無遠慮に無作法に彼のボールの靜な別墅を襲撃して、カメラを向けたり、書齋の敷物をマグネシウムの灰で汚したり、美しい芝生を踏み荒したりして、假令一時なりとも此の有爲な頭の安靜をかき亂すやうな事がありはしないかといふやうな氣がする。そんな事がありさうである。そし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てさうあつては困ると思ふ。併し當人は存外平氣で笑つて居るかも知れない。

若し誰れかゞカントを引ぱり出して寄席の高座から彼のクリテイクを演じさせたとしたらどうであつたらう。それは少しも可笑しくはないかも知れない、非常に結構な事ではあらうが、併しそれがカントに氣の毒なやうな氣のするだけは確である。

私は唯何といふ理窟なしにポールの内面生活を想像して羨ましく又ゆかしく思つて居た。そして其のやうな生活が何時迄も妨げられずに平靜に續いて行つて、其の行末永い途上に美しい研究の花や實を齎す事を期望して居る。

時論

法學博士　吉野作造

我國勞働組合の對政治思想の近況

○我國の勞働階級が「政治」に對して如何なる考を有し又そが如何に變化しつゝあるやは、勞働問題の考察に取り、又いづれ近く普通選擧制の實施を見るべしと豫定してその將來の政治的發展如何を考察する者に取り、極めて重要なる一論點であると考へる。我國の勞働運動は、歐洲大戰に伴ふ世界思潮の激動に促されて、この四五年來飛躍的進步を遂げ、從て「政治」に關する思想なり態度なりに於ても極めて顯著なる變轉を示して居る。僕は今我國勞働運動の前衞たる主なる勞働組合の對政治思想に關し、玆に最近趨勢の大要を述べて讀者の參考に供しようと思ふ。

○

我國勞働組合の對政治思想といへば、言ふまでもなく第一に彼等の「普通選擧制」に對する態度を着眼せねばならぬ。そもそも我國勞働組合は、はじめ普選問題に對しては決して冷淡ではなかつた。否頗る熱心に之を要求した時代もある。大正九年初春の政治季節の頃は、即ち東京大阪を中心として關東關西の諸勞働團體が各威容を盛にして普選運動に狂奔した時で、謂はば對普選熱情の最高潮期と云つていゝ。併し乍ら之を一轉期として其の以後は段々に普選熱の冷却を現はして來た。所謂普選反對派なるものが漸く頭を擡げ始めて來たのである。同年十月大阪に開ける友愛會第九週年大會に於ては、普選贊成の關西派は其の反對の關東派と可なり激烈に論爭した様であつた。議論決せず遂に秘密會を開くに至つたが、結局のところ普選派の旗色は頗る振はなかつたと聞いて居る。其後普選反對の氣勢は關西方面の勞働者間にも浸潤し、大正十年三月の大阪に於ける友愛會關西同盟會大會では、關西同盟會は普選運動を爲さずとの決議を四票の差で通過するに至つた。只併し乍ら關西側は、斯く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

普選熱に冷めつゝも、猶多少の未練を之に繋けて居たと見へ、全然關東派に屈服するを欲しなかつた。或は行掛りといふこともあつたのかも知れぬ。孰れにしても大正十年十月東京に開かれたる日本勞働總同盟（友愛會の改稱）第十年大會に於ては、關西派は關東派の提議に反對して遂に之を不成立に了らしめたのであつた。その關東派の提議といふのは、組合の主張の中から「普通選擧」の四字を抹殺し之に代るに新に「全國的總同盟罷業」の一項を加へんといふのであつた。

關西側の普選に對する微溫的執着は併し決して永くは續かなかつた。普選反對が當時勞働階級間に於ける大勢と云ふべくんば、やがて關西派もこの大勢に押されたのである。遂に大正十一年四月の決議を見ることになつた。卽ち大阪に於て開かれたる勞働總同盟關西勞働同盟大會は次の二項を決議したのである。

（一）勞働團體として普選運動を爲すは效少くして却て害あるものと認む。

（二）されば我が關西勞働同盟會は爾後普選運動を爲さず。

更に同年十月大阪に開かれたる勞働總同盟第十一年大會では、滿場一致を以て關東側提案の宣言・綱領・主張の變更を可決した。而して其の新たる主張に於ては、「普通選擧」の一項は削除され、別に「經濟行動の全國的協同」が加へられた。後者の全國的總同盟罷業を意味するものたるは言を待たない。

斯くして我國最大の勞働組合たる勞働總同盟は、全員一致の決議を以て惜氣もなく普選要望を棄蹴し去つたのである。

○

我國勞働組合の中で最も早くから普選反對を標榜し且つ最も强硬に之が貫徹に努力して來たものゝ代表的なのは印刷工組合信友會であらう。彼は旣に大正八年頃から熱心に之を唱へ來つたのである。之に反し飽くまで普選を要望し終始忠實なる普選派を以て自ら任じ又人も許して居るのは、向上會や小石川勞働會の樣な官業勞働組合を第一とし、賀川豐彦君を中心とする日本農民組合等之に次ぐ。農村青年の間に今日普選熱が廣く且つ深く昂まりつゝあるは注目すべき現象であらう。

○

勞働階級間に於ける這般の近況を取つて、普選は未だ國民多數の眞實の要求に非ずと爲し、以て普選尙早論の根據たらしめんとする者があると聞く。普選の實施に結局どれ丈の價値を認むべきやは別個の議論だが、僕達は普選熱冷却の本當の原因を究め、勞働者階級の對政治思想の眞相をまともに理解しておくことが必要だと思ふ。僕達の解する所に依れば、之には少くと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も三つの重要な原因がある。一は我國現下の政界の極度の腐敗、二に勞働運動に對する官憲の無理解なる取締で、三はサンヂカリズム及ボルセヴィズムの思想的影響である。之等が主に働いてもと相當の執着を有つて居つた普選熱を段々冷却せしめたものと思ふのである。

第一に我國當今の政界の腐敗墮落就中議會の醜態などが、勞働階級をして如何に強烈に現代の政治を呪はしむるに至つたかは、何人も決して之を想像するに難くなからう。年毎に益々甚しくなる議會の醜陋は、さらでだに性急なる勞働階級をして、議會政治そのものまでをも否認せしめずば熄まない。少くとも議會はブルジョア諸政客の政權爭奪の演技場で、無産階級の利害とは全然沒交渉なものだといふ様な考は、今日既に勞働階級通有の觀念となつてしまつた。我々の利福の伸張を議會に恃むは幻想だ、我々は丸で違つた別個の手段を考へねばならぬといふが、正に今日の彼等の主張ではないか。

第二に官憲の勞働運動に加ふる不當の高壓的取締は如何にして勞働階級の政治思想を險惡ならしめたかといふに、高壓的取締の結果、凡ゆる勞働運動は慘敗の憂き目を見、爲に彼等をして官憲を敵とし政府を憎み遂に一般の支配階級を憎惡せしむるに至るからである。政治に在て最も尊重すべきは諧調的精神である。諧調的精神は、自家の要望を著しき不便なしに發表し又相當の程度に傾聽せらるゝ事情の下に於てのみ、生長するものだ。然るに勞働運動に於ける不當の抑壓は、勞働者を驅りて憤激措く所を知らざらしめ、遂に徹頭徹尾鬪爭的精神に燃えしめる。斯くして彼等が政治的手段を弊履の如く捨つるに至るのは怪むに足りない。

終にサンヂカリズムの思想的影響を見るに、之が我國勞働運動の畑に植ゑ付けられ始めたのは、凡そ大正八年頃からとみてよからう。之には大杉榮氏一派の表裏兩面の活動を見逃すことは出來まい。大杉氏の此方面に於ける勢力は何時頃から勞働階級間に植ゑ付けられたか僕は能く知らないが、同氏は餘程早くから一種の無政府主義的思想の所有者であることは疑を容れない。而して歐洲大戰後、世界が一般に軍國的國家主義を痛烈に排斥するといふ新機運に促され、例へば森戸辰男君の如き所謂官場の知識階級間にも一種の無政府主義讃美者の輩出するに乘じ、大杉氏一派の活動は頓に潑溂たる生氣を表面に露出する様になつた。其處へ丁度勞働運動に對する官憲の不當な抑壓が來る。之に憤慨して痛恨骨に徹する底の熱血漢は、偶々自家不滿の代辯者を大杉氏一派の言説に求めて又は見出して、遂に知らず識らず一團の勢力にかたまることになる。而してこの一派の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勢力は分革的には今日仍ほ決して稱するに足らぬと思ふが、思想的には可なり注目するに値するものとなつて居るのである。

以上の如き理由よりして、我國の勞働組合の中堅分子は少くとも一時サンヂカリズム的思想の風靡する所となつた。政治はブルジョアの仕事だ。勞働階級に取つては經濟的手段だけで澤山だ。政治運動に參加するのは勞働者の恥辱だといふ樣なのが彼等の不拔の確信となつたのであつた。

○

以上は最近までの形勢であつた。然るに極めて昨今に至り此の形勢はまた大に動搖し始めて居る。即ちサンヂカリズム的傾向より再び政治的手段への復歸とみるべき傾向が現はれて居ると思はるゝのである。

僕は茲に大正十一年九月十五日發行の勞働者新聞（日本勞働總同盟關西同盟會機關）より、中村義明といふ人の「無產階級政治運動としての對露非干涉運動」なる論文の一節を引用しよう。

……ＣＧＴはアミアン憲章に於て「政治的中立」を宣明した。日本の勞働階級は先年來普選運動の白熱化するに對して政治運動——議會運動——を否定し、純經濟運動——直接行動——のみを持て進むことを正當と敎へられた。されど其は政治運動を極く狹義に解釋し、政治運動則ち議會運動と曲解せるが爲であつて議會運動より廣きより高き意味の政治運動の否定でなかつたことは勿論である。

勞働組合が社會革命の到達に於ける萬能に非ずして、其の爲には革命的無產階級の政黨と協力しなければならないことを知る我等は、政治運動——議會政策を超越した更により高き意味での——が勞働組合運動の革命的使命を完からしむるに必要なることを否定するものではない。

今日日本の無產階級は勞農ロシア對資本主義日本の國際問題に對する自己の意思を表示し、且自ら其の解決方法を提示せんが爲に、全無產階級協同の運動を起して居る。對露非干涉運動——それは正に政治運動である。たとへ其目的達成の爲に總同盟罷業をする樣なことがあつても、其は資本主義日本政府の政治に對する抗議であり容喙である。故に我等は今明白なる認識を以て、政治運動を、しかも夫は少數左翼派のみに止らず勞働階級の急進保守凡てを包容し無產階級の協同策戰を以て對露非干涉運動を起して居るのである……

右の論文は用語に多少不明の點はあるが、要するに我國の勞働運動が漸くサンヂカリズムから離れて再び政治——彼等のいはゆる廣き意味に於ける政治——に還らんとする新傾向を語る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものとして、極めて注目すべきものと思ふ。大正十一年九月大阪に開かれた勞働組合總聯合創立大會の決裂の如きも亦明白に勞働階級間に於ける這般の新傾向を表現せるものと謂はねばならぬ。

勞働組合の中でも、小さい團體で、あまり鬪爭的經驗を有たないものは、兎角理論的興味に蹈躇し、無政府主義・サンヂカリズムの信者たることを喜ぶといふ氣味があるが、大きな組合で、多年の實際的經驗に富むものは、自然集團の統制・規律・訓練を重んじ、常に實證的に行動の方策を建てんと骨折つて居る樣だ。是れ彼等が最近佛蘭西のCGTの宣言や綱領に對する興味を減じて漸次勞農露西亞の實際政策に多大の感興を寄せる樣になつた所以である。孰れにしても、サンヂカリズムの實際的缺陷と勞農ロシアの實驗的效果とは、我國勞働運動の方向決定の上に多大の影響を與へて居る。但し我國の勞働運動が斯くして再び政治に還らんとするとは云つても、在來の議會政治を賴りにすることの萬々なかるべきは疑を容れない。何となれば在來の議會政治の勞働階級の要求を滿足し得ざる狀況に在るは、今に於て毫も變る所はないからである。

然らば我國の勞働階級は今後その政治的活動を如何なる形式に於て表はすだらうか。之が我々の最も注目すべき所であり又我國に取つて亦最も重要の關係ある所である。彼等は今や結束統制の必要を自覺して居る。團體的行動として秩序ある活動の上に目的の達成を期して居る。只其團體的結束と統制的協同とをば、個々の問題に就ての一時的聯結の主義の上に置くか、根本的精神の全般的且恒久的共感の主義の上に置くか、之等は今の處未だ明白でないが、何れ遠からず解決を迫らるゝ問題である。斯くして勞働階級の政治運動の開展は、社會文化の根本問題に根を挿し込んで來る。之等の點は讀者と共に今後の發展に觀やう。

之を要するに我國勞働階級の對政治的態度は、之を三種に分つことが出來る。一は安價なる議會萬能主義者で、二は輕佻なる議會政治否認派である。併し之等は今日の勞働運動の本流を作るものではない。今日の勞働運動の大勢は漸く政治的手段に依て無產階級獨裁の目的を達せんとするに在る樣だ。此種の人々の間にも具體的の方法はといへば色々の考があらうが、要するに彼等が議會をどう利用するか又は議會をどう改めんとするかゞ觀察の要點だ。勞働運動が再び政治に接觸して來たといふ丈けでは、まだ海のものとも山のものともきまらないが、とにかく斯かる新傾向を示して來ただけでも、我々に取つては實に興味深い研究問題の提示に當るのである。若し夫れ將來の發展

に就ては、更に其都度研究報告を怠らぬであらう。

我國勞働運動の將來

○

前項の一小篇は、我國勞働運動の將來について幾分眞面目なる考察を讀者に促すに足ると信ずるが、其後更に佐野學君の論文を讀んで思索を新にするの機會を與へられた。稿を改めて勞働運動の將來を論ずる所以である。

佐野君は、所謂無產階級の有力なる鬪士として世に認められ、又學殖識見に於て同輩友人間に頗る重きをなして居る人である。氏が其の主宰する「大衆」の最近號に發表せる論文中の次の一節は、或意味に於て甚だ注目に値するものである。曰く「……我々無產階級解放運動の可能は、今日先づ無產階級の團結(或は組合)を第一の要件とするものである。……已に團結(或は組合)を要件とし團體的行動を必要とする以上、その團體的行動(或は組合運動)の中樞機關たるべき政治が、何よりも必要なるものとなるのである。今無產階級が政治(ブルジョア政治ではない)を不必要とすべき理由は何處にも見出されない。否、無產階級が政治を否定すればする程、その團結力は鈍りその解放の運動は言葉だけのものとなり無能力となつて、益々敵の政治に依つて窮地に押し込められて仕舞ふだけである。そして今日無產階級の解放運動をして斯かる窮地に押し込めつゝあるものは、大部分かのアナーキズムに立脚する現實否定的な獨善逃避的なセンチメンタルな藝術運動の御蔭である……」と。

措辭に多少不明の點がないではないが、言ふ心はよく分る。いづれにしても、無產階級運動の有力なる一部の人々が斯く無政府主義的自由論者に對つて堂々と挑戰し始めたことは、輕々に看過すべからざる現象であると思ふ。

無政府主義の思想の中に極めて尊い或るものを含んで居ることは言ふまでもない。我々が人類の本質に自己を高めて絕對的自由の樂境に入り得んことは、固より切に冀ふ所だけれども、それは無限の努力に依て目指さるべき理想境であつて、不完全な現實の自己としては直に這般の自由を要求すべき資格はない。吾人の實際の生活に於て、一種の外的統制は到底必要である。只この外的統制を如何にして合理的ならしむべきやに關しては政治的制度の問題として色々の說があり、外的統制機關の宜しきを得ざるより、悲むべき政府對民衆の反感といふやうなことが起る。併し統制其ものを不要とする理由に至ては、現實の人間を完全無缺と見ざる限り、何の點からも見出されない。故に夫

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の無政府主義的自由運動の如きは、どの點から云つても現實の生活經驗に根底せざる輕佻なる蠢動たるを免れないのである。

社會思想の混亂期に於て、無產階級の解放運動が、官憲や資本家側の高壓に憤激するの餘り、一時その倚るべき主義を誤ることあるは、勢の已むべからざるものとして聊か恕せねばならぬ事情があると思ふ。けれども今や彼等は其の迷妄より醒めて、玆に堅實なる團體的行動の上に新なる步武を踏み直さんとする。これは遲れたるに似たりと雖も亦賀すべき事柄ではないか。只彼等は今後何處にその團體結束の根據を置かんとするのか。之がまた大切の問題だ。たゞ河を渡るといふ共同の目的のために吳越同舟するが如く、其時々々の事業を共にするといふ點だけに一時的の結合を見るに甘ずるか。更に進んでまた河を渡つて後の積極的活動に就いても事を共にし得る丈の信任を相互の人格に見出して永久の結束を爲すが如く、不變の人格的基礎に共感の要素を求めて無離の精神的結合にまで進まんとするか。彼等の團體的行動が將來の文化建設に占め得べき地位如何の問題は實に繫りて玆に在ると考へる。

とにかく無產階級の解放運動は、從來の誤りより目醒めて、又は從來氣附かざりし重要立脚地を探し當て、今や玆に運動促進の一轉機を劃せんとして居る。吾人は切に其の健實なる發展を望んで熄まない。

○

先年北越に旅しての歸り、碓氷峠に俄の故障が起つて夜の二時頃途中で降されたことがあつた。乘客は幸に男ばかりで餘り多勢ではなかつた。徒步で次の驛に辿り着き、仲間の中より一人の紳士を代表者に擧げて驛長に談判せしめ、臨時汽車を高崎まで出さんことを求めしめた。一時間ばかりの後いよ〳〵臨時車が出る事になつたが、何時の間にや代表者はかき消す如く見えず、混雜の際とて他の乘客はどうしていゝのやら分らず、大に困つたのであつた。夫れで僕が多少周旋して二輛の貨物車の燈明も何もないのに乘るのだといふ事が分つて、やつと皆の狼狽をさめてやつた。さうした奔走をしてゐる中に分つたのであるが、例の紳士は實は驛長の好意を獨占し、車掌などゝ一緖にこつそり比較的氣持のいゝ椅子に收まつて、自分を推した一般乘客に裏切つたのであつた。折角骨折つて呉れた人だ。一つだけ椅子がありますと云はるれば、無論あなたにと皆いふに疑がないが、旨いものがあるとて夫を獨占したいばつかりに、多勢の委囑をフイにするとは、さて〳〵さもしい人だと思つたことであつた。

併しよく考へて見ると、斯んな種の人は今日到る處に案外多

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いのである。勞働運動に於ける從來の一つの困難もこの點に在つたと聞いて居る。

先達の裏切り。自己の名聞の爲の無益の暗鬪。何れにしても全體の利福を自分の利福と感ずる眞劍さの缺乏は、今日勞働運動に從事する者の深く反省すべき所であらう。甚しきに至ては目前の利慾に迷うて相手方の買收に應ずるものもあるとやら。現に僕達も屢々資本家連の會合に於て、頭株二三名をどうかすれば勞働運動を切りくづすことは譯もないなどゝ豪語するのを聞くことがある。まさか露骨な買收の相談に應ずるものはさうあるまいが、併し誘惑の魔手は決して斯んな拙い形に於てのみ來るのではない。

我々がその團體運動に於て誰か代辯者を立てやうとなら其の抱持するイズムよりも、其の操守する人格に恃め。イズムは變り得る。人格はさう容易に變るものではない。人格の根底に結び連ることの外に何處に本當の團結の力は生るゝか。

○

團體運動に於て一番大事なことは、如何にして團體の意思を作るかの問題である。團體の各構成員が、一致して或る問題の遂行を希望し、而して其目的の達成の爲に同じ樣な狀態に在る他の團體と協力すると云ふ風に――例へばブルジョア對抗の陣容を堅ならしむる爲め最近のフロント・ムーヴメントの樣に――最初から綜合意思の方向の決まつて居る場合は問題はない。たゞ斯の場合は、そのきまつた個別的目的の達成の爲の一時的結合であつて、其の到達の上は其の團結の繼續すべき理由も消滅し又其の繼續を期待しても居ない。今日無産階級の間に目醒めて來た團體行動の必要は、斯かる種類のものでないことは言を待たない。團體構成の各員が自己の運命を悉く托するに足る樣な恒久的團體を望んで居るのである。而して團體としての本當の力は、實に斯種の結合よりのみ起るものである。されば此種の結合に到る樣な何等かの動因がないと、一時的結合による運動の如きは遂に殆んど無力になるを常とし、又この一時的運動から、若し少しでも見ばえのする樣な効果が生れたとすれば其は必ず識らず〱の間に恒久的結合を促す樣な種が蒔かれた時であるともいへる。要するに我々は、目標の何であれ、團體行動に依て或る仕事を爲さうとするなら、必ず之を全人格を打ち込んで悔ざる底の力ある團體とすることを心掛けねばならぬと思ふのである。

この點から觀て、從來の勞働組合運動は果して誤る所なかりしや否や。

勞働運動をして恒に人格的結合の運動たらしむる爲に最も注

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意しなければならぬのは、前にも云つた樣に、團體意思構成の問題である。團體の意思は、團體員の意志の總和乃至機械的綜合であらねばならぬとする個人主義的又は自由主義的見解は、現に在るが儘を神聖視するてふ俗見に捉へられたるものであつて、夫の「自分の事は自分自身が一番能く知つて居る」といふ謬見と共に、嚴に之を排斥せねばならぬ。我々は不完全な人間である。自分の爲すべきことを自分自ら知らぬ場合が多い。病氣になれば醫者の指圖を必要とするが如く、自分の當に爲すべきこと、否、自分の爾あらねばならぬ立場は、却て優秀なる第三者に諮るを要することがある。優秀なる第三者に諮るといふは、取も直さず彼の人格を通して自己の當にあるべき地步を見出すことである。手短にいへばヨりよき己れに向上することに外ならぬ。然るが故に、優秀なる第三者に諮ることは、團體意思の正しい發見法になるのである。勞働運動に於ける所謂智識階級の必要と使命とは實に玆に在る。現に智識階級と稱するものが眞に恃むに足るや否やは別問題だ。が漫然として智識階級と絕對的沒交涉の態度を執るのが勞働運動の正徑だと考へるのは、之こそ寧ろ甚しき邪徑であると謂はねばならぬ。

併し最近我國の勞働運動指導の地位に立つた所謂智識階級が——その純智識階級の出たると勞働階級の出たるとを問はず——果して能く其本來の必要に應じ、又果してよく其本來の使命を完うしたりしやは大に疑なきを得ぬ。彼等に眞劍味の足りなかつたと云ふ譏は爭はれまい。眞に勞働階級の爲に謀るの誠意の外、猶幾多不純の動機に惱まれて居なかつたかと問ふたら、果して幾人かよく良心の確信に誓つて言下に否と答へ得るだらうか。至誠を天に委して成敗を眼中に置かず、事成れば功を人に歸し、事成らざれば退いて世の侮りを一身に引受くる底の襟度あらば、我國の勞働運動は、も少し何とか發展した筈だと思はるゝ。勞働運動はビジネスではないのだ。

勞働運動指導者のやゝ良いところにしても、なほ彼等には若干謙遜の德を缺く所なかつたらうか。勞働運動は宣傳とは違ふ。活きた人間の眞劍の要求だ。この人間的要求に先づ耳傾けるを怠つて、先づ自己の意見を主張し、甚しきはこの抽象的意見を强制し、之で勞働者の要求を規律しやうと云ふ者もある。病を醫するの術は醫者でなくば分らぬが、何處が痛いかは本人を措いては分りやうがない。本人を差し措いて、お前の病氣は胃にある、胃が痛いと思へと强制するのは亂暴だ。先達と立てられる人に動もすると此の傲慢の弊がある。之が實に勞働運動に智識階級排斥の聲を起らしめた所以で、智識階級そのものにも責任はあるのだ。だからと云て、全然智識階級を無みするの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、勞働運動に取つて、心なき智識階級にあやまらるゝよりも大なる禍であることは言ふまでもない。

勞働運動は智識階級を棄てゝはいかない。併し彼に恃むと同時に彼を監督するの勞を怠つてもならぬ。又智識階級は、勞働運動に於ける使命の大なるに感激すると共に、常に彼等の眞要求に動さるゝを甘じなければならぬ。而して其間に巧なる有機的關係を恒在せしむるは、實は單純なる制度の問題だけではない。之にたづさはる者の間にもつと深き人生の共通體驗が必要だ。之等のことはまた別の論題として讀者と共に考へて見たい。

小題小言三則

○

最後までロイド・ジョルヂの味方であつたオースチン・チェムバレンが總選擧後の政界の分野に於て、一部の人の豫期に反し再び保守黨の議席に就いたことは、僕の解する所に依れば、英國政黨の傳統的精神に忠實な眞に尊敬すべき紳士的進退だと思ふ。

あれ程ロイド・ジョルヂの肩を持て聯立主義の爲に奮鬪した以上、保守黨を脱するのは當然だといふ。是れは我國論壇の殆んど一致の見解であつた。少くとも聯立主義の爲に最後まで戰つたといふ公人的責任よりしても、其の聯立主義の正面の敵であつた保守黨に平然として籍を留めて置く道理はないと云ふ。是れも我國論壇の一致の見解であつた。然るにも拘らずチェムバレンは全然これと違つた行動に出でた。彼をして我國に生れしめば、彼は正に變節漢として痛烈なる非難を蒙つたに相違ない。

併し乍ら、英國の政黨はもと政治上の主義や政見に依つて分れた團體ではない。斯く云ふことが少しく語弊ありと云ふなら、主義政見の異同を唯一の又は主要なる標準として分れた團體でないと云つて毫も誤りがなからう。是れ英國の政黨が大陸諸國の政黨と大に趣を異にする所である。然らば何が政黨的分野を區劃する主要の根本要素となつて居るか。曰く、人格の合活動の根基たる信念即ち是れだと。之は同國政治の歷史を見れば分ることだ。而して同國の政黨が大體に於て二大政黨對立の形勢を維持して來たことも茲處に根底するは言ふを待たない。

斯くして英國の政黨は、人生に對する信念に基く人格的結合だといふ點に傳統的特色があるのだ。其抱持する政見に自ら一定の方向あるは、信念の同一から來る自然の結果にして、政見が同一なるが故に政治的結合を爲したのではない。故に平素は現はれないが、イザとなると信念第一・政見第二といふが即ち英國政界の傳統的精神として有力に働くのである。人格的結合たるが故に、政見の異同だけでは容易に結合離脱の原因とはなり難い。

斯くいへばとて僕は、チェムバレンが依然保守黨に留つたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が正しいと窮屈に主張するのではない。脱黨したからといつて必しも之を悪いとはいへぬ。僕はたゞ彼があれ程反對した手前もあるに拘らず、依然保守黨に留り、而かも人も我も之を格別怪まないといふ點に、一つの面白味を感得せざるを得ないのである。留るも脱するも、其の正否の判定は動機の如何に拘る。意見は違つても人間を信ずる以上は姑く隱忍して事を共にするといふは、亦一段と高い境地ではないか。

用があるときは馬鹿に持ち上げる。思ふ通りにならなくなると散々に罵り散らす。用ならなくなつた者も、説行はれざれば直に席を蹴て今度は先きの同僚を罵り返す。淺薄な目的の達成を唯一の標的とするビジネスなら夫れでいゝ。活きた人間の向上發展を目的とする團體に斯事あるは、根本的に間違つた事だ。イズムに依て離合集散する所に本當の創造力は湧いて來ない。人格的信任の上に我々の團體生活を基礎づけべきであると覺る以上、自他共に反對の立場に寛大な雅量を示すべきだ。少し位の意見の相違で事を共にし難い位なら、始めからそんな者を仲間にせぬがいゝ。輕々しく入り輕々しく排斥するは、一見主義に潔癖なるが如くにして、實は人間的性情の本當の活躍を畸形ならしむるものである。

○

此頃民間に多數の示威運動に依て或目的を達せんとするの風がはやる。何か御上のする事に氣に喰はぬことがあると、有象無象をかり集め旗押し立てゝ役所に押しかくる。之で目的が達せらるゝ樣では本當に困つたものだ。

斯う云ふ風潮の中に在て僕等の官憲に切望する所は、勢に屈せず何處までも理に遵て事を捌かんことである。理に倚て捌きさへすれば、無用の運動もやがて無くなるに相違ない。

併し今日の官憲は常に理に倚て行動して居るか。

僕の曾て遭遇した一例を語らう。僕等の或る仲間が或る一事を官憲に求めた。而して僕等の要求に理のあることは官憲も亦認めて居た所であつた。やがて官憲の解決が僕等の豫想と反對になつたことが分つた。驚いて之を官憲に詰ると其の答は斯うだ。君等の方は其後一向運動しない。其の反對の主張の方は盛に運動して來るので遂に之にきめたと。官憲の自信なきにも驚くが、兎に角今の世の中は、自分の主張が道理に協つて居るからとて一度位物を述べただけで安心して居れぬことは、之れでも分る。自ら運動の必要になつて來る所以である。

尤も運動に依て目的の達成をはかることが、一から十まで悪いとは限らぬ。當局者は萬遍なく各方面の要求を見てやつて、常に適當の施設を爲すべき職責を有するものでありながら、事實完全に眼の通らないことが稀でない。時としては頓と見殘されたる部分があると云ふ樣な場合も起る。之等は其の當事者の運動に由て始めて問題の存在に注意を惹起さるゝのである。最近の例としては、議院に於ける速記者の給與の問題を擧げることが出來やう。我々も學校に勤めて居て、自分達の俸給のことは常に苦慮しながら小使などの給與のことになると、頓と失念

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して居るといふことが多い。此意味に於て時々當事者の間に運動の起るのは、各方面の圓滿なる調和的發達の爲に必要なことだとも考へらるる。

たゞ運動が起つたからとて一も二もなく之に屈するのは宜しくない。判斷の標準は常に道理に在るべきだ。多數の運動に對しても、其の立つる所の旗幟に道理ありや否やを能く見分けねばならぬ。

所謂現代的解決法の中に多數決といふことがある。多數の一致する所に道理ありといふのである。多數決の倫理的意義に付ては僕に別に説があるが、要するに、吾人が多數の意見に服するは、其の多數が洗練されたる又省察を重ねたる多數人格の集りたる場合に限る。所謂レフレクチーヴ・マジョリチーたる點に價値ありとするのである。夫を誤解して、只數さへ集めれば成せると爲し、一人の私意を貫く目的の爲に有象無象を集めるのでは、其無意義なること累々たる石塊と何の擇ぶ所はない。

僕は無暗に多數で威さうとする運動家の襲擊に辟易するが、又之に對して儼乎たる道理の裁斷を押しつけ得ぬ官憲を腑甲斐なく思ふ。されぱとて多數の運動を徹頭徹尾排斥せんとするはまた羹に懲りて膾を吹くの類と謂はねばならぬ。

〇

近來友人よりの寄贈にかゝる新著の數々今や可なり机上にうづ高くなつて來た。既刊書の續刊と見るべきものを除き、右の中の重なるものを擇び、他の僕がわざ／＼購つて讀んだものと併せて簡單に紹介しておかうと思ふ。

僕の專門に屬する政治の部門に於ては三つの飜譯を擧げて置きたい。蠟山政道君の「政治學」はシテール・ゾムロの小著の譯。高橋誠吾君の「科學的政治學」は現に東京市政調査會の顧問として來朝中のビアード博士の譯、風間徹二君の「ニヒリズム研究」はアルナンドの譯。孰れも正しい平明な譯だと思ふ。「ニヒリズム研究」は此種の文獻の乏しい我が學界に於て慥に歡迎さるゝの價値あるべく、「科學的政治學」は科學的なる冠詞を添へた意味を十分説明し得る程の清澹なものではないが、現代政治學上の諸問題を洩なく簡明に示して呉れた點に敬意を表すべきであらう。「政治學」は譯者の序文にもある如く、戰爭前の政治學的研究の成果の總勘定を手短かに說いて呉れた點を多とすべきも、併し其中に將來の斯學の趨向を暗示するものもないではない。以上三書共に政治に志ある人々に薦めたい。

今日の政治を國際關係の方面より理解するに、船尾榮太郎作の「歐米新聞界の秘事」と澤田謙君の「國際政治の革命」との二書は亦頗る有益な參考書だと思ふ。着眼の見識に至ては人各々其觀る所を一にせざるべきは已むを得ないが、一々正確なる事實に據り、又一々適確なる見聞に基いて、何處までも實際に立脚すべく努めた多大の勞は、何人も認むる所であらう。一見すら／＼と書いた樣に見へて可なり勞苦を積まれたことゝ察せらるゝ。夫れ丈け僕は特に此の二書の著者に感謝せずには居れない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今日我々國民に取つて最も重大の關係ある小作問題や食糧問題やに付て横田英夫君の「小作問題研究」と上山滿之進君の「國民生活の安危」との二書を見たのは我々の最も喜ぶ所である。之等の問題については僕は實は全くの門外漢だ。けれども時節柄一ト通之を解せざる可らずと爲して先年いろ／＼本や論文を集めて讀んだことがある。多くは十分要領を得るに苦んだが、獨り上山氏の二三の論文だけが實によく分つたのであつた。其後注意して同氏の論文は其公にせらるゝ毎に之を讀んだ。之に依て啓發せられたること少くない。同氏の立論が正しいか否かは姑く別問題として、食糧問題小作問題の何たるかを理解さして呉れた點に於て、僕は常に同氏に感謝して居る。横田氏の小作問題の研究家たるは今始めて聞く所ではない。僕は同君の著に於て從來得る所尠くなかつたが、其近著「小作問題研究」に於て大に其の學理的檢討の丁寧にして綿密なるに敬服したのである。小作問題の現代的意義より小作料の性質に論及し、更に本邦小作料の決定標準の實際問題にまで亘つて居る。門外漢の僕にも十分納得が往つた。外に良書は幾らもあらうが、僕自身の經驗に於て、僕は以上の二書に於て遺憾なく必要なる智識を與へられたことを明言するに躊躇しない。

新進好學の士の述作として特に推奬したい本が三つある。竹内謙二君の「富國論」、之はアダム・スミスの名著の譯だ。既に二冊を公にしたが、もう一冊で終るのであらう。明治初年にも譯されたことがあるが固より極めて不完全なものだ。最近この種古典的名著の飜譯が流行するやうだが、中には隨分無責任なのもある。竹内君の此譯はとにかく非常に眞面目な努力の結果に成つたものたるは僕の敢て保證する所である。新明正道君の「社會學序說」と赤松克麿君の「社會革命史論」とは、獨創の研究といふべき程のものではなからうが、一は以て社會國家に對する當今の代表的少壯學者の識見を窺ふべく、一は以て眞摯にして熱情に富める思想家の現代社會運動に對する抱負を想像することが出來る。此の意味に於て僕は此の二書を讀むことに依て種々新に考へさせられたことが多かつた。之等のことはいづれ他日の機會に於て論じて見たいと思つてゐる。

比較的に世の注目から遠かりて而かも我々の看過し能はざるものに「柏井全集」がある。柏井園氏は基督教界に於て最も優れたる學者として其道の人には十二分に推されて居つた。温情玉の如き人格より發する文藻に於ても聽くべきもの頗る多いが學者としての蘊蓄に至ては恐らく當代第一と謂つてよからう。不幸年甚だ高からずして他界せられたが、その全集の公刊を見るは、氏を識つて居る人々から觀れば當然のことだ。氏の作物は決して基督教界のみの鑑賞に値すべきものではないと思ふ。僕はかねて同氏に敬服するも、同氏とは相識の間柄ではない。玆に同氏の全集を吹聽するは決して私情に出づるのではないのである。第一卷には基督傳に關する三編の作物が載つて居るが、編輯者の努力により速に全部の完成を見んことを望んでやまない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も一つ違つた意味に於て世人の注意を喚起したいのは有馬頼寧君の「蛙の聲」である。有馬君は大名華族の嫡男として生れ、一見何不自由なき結構な身分の人だ。併し名門に生れたのが幸か不幸か、有馬君の如きは惜に之れが爲に我々平民の知らざる苦勞に惱むの人だと思ふ。僕は常に此點に於て同氏の境遇に同情を寄せて居るものである。現今華族社會の普通の狀態の下に在て、眞に目覺めたる人間として人間らしい生活を營むことは頗る困難のことだ。人間らしい生活に徹せんとして其の與へられたる地位を弊履の如く棄てることは、難しと雖も爲し得ないことはない。併し其地位に留りて而かも人間らしい生活に終始せんことは頗るの難事と謂はねばならぬ。其處には名利に執着するとの非難がある。其處には僞善瞞着の罵聲が投げらるゝ。有馬君が人間的義務心に燃へて爲す所のあらゆる事業が世の冷評熱罵の的となるとき、能くも之に堪へ忍ぶ其勇氣に僕は驚嘆せずには居れないのである。僕ひそかに思ふ。有馬君は遂に華族の衣を脫ぐ氣にはならぬだらうかと。之を脫ぐのも一つの途だ。が、脫がないからとて地位に未練があると責める譯にも往かぬ。餘人なら知らず、有馬君にして若し永く其地位に留りて而かも今日の氣魄を以て邁進せん乎、そは君が、例へば武者小路君が日向に隱遁して爲さんとする所を、白日東都の玉樓に在て爲さんとするものにして、其の眞人間たらんとするの惱みと努力とに於ては、其間に徑庭がないと考へる。マルクス・オウレリアスは云つた。人は心掛けの仕樣に依ては宮殿に於ても眞人間になり得ると。有馬君にもしこの使命を感ぜらるゝあらば、同君の一進一退は少くとも今日の日本に於て頗る重要の意義あるものと謂はねばならぬ。斯く考へて「蛙の聲」一冊を讀む。君が人間たらんとして如何に深痛の努力を爲しつゝあるかを知り得ることの外、たほ色々の意味に於て我々を教ふる所頗る多いものがある。斯くして僕は、この書に夫れ自身の價値の外に猶一つの社會的價値を認めざるを得ぬのである。

吾人の研究慾をそゝりつゝ同時にまた趣味慾を滿足せしめた點に於て、外骨君の「私刑類纂」を推奬しておきたい。外骨君は變つた物識りとして知られて居る。先きには名著「筆禍史」あり、最近「奇態流行史」を公にするかと思へば「半男女考」だの「猥褻風俗史」だのを續刊して、論題の着想概ね人の意表に出づる。徒らに奇を衒ふに似たりと雖も、常人の思ひ及ばざる境地に研究の辣手を觸るゝ點に於て君も亦當代得易からざる學者と謂ふべきだ。私刑といへばリンチを思ひ浮べるが、考へて見れば同じ樣な事は古今東西を通して普ねく行はれたことだらう。本書は主として日本の古書に依り、私刑の類例を蒐集綜類し、間々海外の例をも加へてある。何の研究に役立つと云ふ本ではないが、必ず何かに役立つ本である。無用の用といふ批評は外骨君の凡ての著書にあてはまると思ふ。讀んで面白いばかりではない。必ず何かの役に立つ本として、又外の人には企て及ばざる種類の本として、必ず藏書家の備ふべきものだらうと信ずる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

整腸消化劑ビオフェルミン

ピオフェルミンは本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして整腸と消化の兩作用を兼有し、諸般の腸疾患の治療並豫防に對し賞用せらる。

ピオフェルミンに對する知名醫家の實驗報告二百有餘に達し殊に小兒の消化不良、綠便、下痢に應用し卓効あり。

粉末及錠劑あり、全國有名藥店に販賣す

製造元 神戸市二番町 株式會社神戸衛生實驗所

發賣元
武田長兵衛商店
大阪市東區道修町

痔疾新藥ボラギノール

醫學士六車勇先生が實驗推奬せられたる痔疾治療劑にして殊に痔核、脱肛、肛門裂創、痔出血等に對し比較的短時日に之を治癒せしむ。

軟膏並坐藥の二種あり。使用法頗る簡單にして單に本劑軟膏の塗布又は本劑坐藥の挿入のみにて足るを以て日常坐臥に應用せらる。全國知名藥店に販賣す

【包裝】軟膏二十五瓦入（金貳圓四拾錢）坐藥十ヶ入（金壹圓貳拾錢）三十ヶ入（金参圓貳拾錢）

發賣元
武田長兵衛商店
大阪市東區道修町

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロツト」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロツト」を口より放して今度は紙煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が総立ちになつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度諸方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロツト」を壁に投げつけてお歸り下さいまし‥‥」

特徴 外見少も總煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の伸展期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロツト味（百日分）金貳圓
カロツト具（永久使用 銀模樣入）金五拾錢
同 象牙サツク入 金壹圓五拾錢

一組

送料（內地十八錢 海外四十五錢）
引替送料（內地卅五錢 海外五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

電話丸の內一九一七 振替東京五二九壹壹

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文學博士　吉田東伍先生著

縮刷　大日本地名辭書

本書は現代日本の學界に於ける最も偉大なる天才的頭腦と超人的精力が前後十六年間に集積した永世不磨の一大金字塔である。單に印刷製本に對する物質上の努力のみを以てしても、正續七卷細字三段組四六倍判全六千二百餘頁といふ我國文獻ありて以來の最大著作を完成することそれ自身が、既に出版界に於ける近代の一大奇蹟といはねばならぬ。曩に明治四十四年始めて本書全部の完成を發表するや、當時の讀書界は期せずしてその購買的能力を本書に集中し、重版又重版増刷又増刷、數年を出でずして遂に原版の大部分は磨滅して全く用を爲さなくなつた。隨て絶版のまゝ久しく放棄せられて、空しく古本市價の際限なく奔騰するに任せた。しかも今や一般文化の向上、地理歷史の知識と趣味の國民化と共に、教養ある家庭の書架は勿論、各種學校、銀行、會社、官衙、その他各種の公共團體に於て、各方面の文化を代表する基礎的著述を必備する風の年々旺盛に赴かんとする時に方り、本書の如き國寶的出版物を永く一部人士の秘藏に任すことは素より出版者の本意でない。併し原版はいかに修理するもはや絶對重版の基がない。そこで前年來百方苦心の結果、多大の費用を投じて本文全部を寫眞縮版となし、四六判二倍大の原書約半分の容積菊判に收め、三年を經て今度漸く發行することが出來た次第である。縮版は初刷の原書より縮寫して一點一劃を崩さず、今日の印刷術の極限を盡した驚くべき精巧なるものであるが、これとて無限の需用に對していつまで重版に耐へ得るか疑問である。最も早く豫約申込によつて最も新しい刷本を手にせらるることは、賢明な購讀の方法であると信ずる。

內容見本贈呈

（菊判寫眞西版廿五字三十一行三段洋裝背革天金製）總紙數六千二百頁



全七卷定價　金六拾圓

送料

首卷廿三錢（第四種書留）

一―六卷（書留各冊小包）

各冊廿七錢

臺灣、樺太、鮮、滿、支各冊書留小包五十五錢

發行所　東京神田　振替東京五〇一番　**富山房**　電話神田三〇一四　賣捌　全國書店

卑猥なる廣告の申込みは謝絶　中央公論社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Violet Ray High Frequancy
Radiorayor
權威ある紫光線電波療器
電波療器 ラヂオレーヤー
本器は二十世紀の大發明品で實に近世科學界の驚異である
日常の輕微なる疾患より醫藥の効なき難治の重疾をも快癒する
（金參拾五圓）
ラヂオレーヤーの不可思議なる靈癒力は日常の輕微なる疾患より醫師の見放した幾多の難症をも容易に快癒するの偉力がある、本器は米國の偉人エヂソン氏の發明に係り、強力なる電波を發生すると共に紫光線とオゾーンとを同時に人體に導入して、新陳代謝を旺盛にし、血行を良くし營養を増進する、本器を一度應用すれば激甚なる疼痛も忘るゝ事を得、肺、肋膜、胃腸等の内臟の機能を調整し、神經衰弱、不眠、頭痛等の神經系疾患を快癒し、其他病氣と名のつくものに對しては悉く驚くべき奏効がある。從來の藥物療法に慊らざる人は速かに本療法を試みられよ、必ず豫期以上の効果が得られるであらう。貴下は即時はがき一枚を投じて注文書を發せられよ。
（說明書は下方の要求券を切取り封筒に入れ三錢切手貼付投函されたし）
電波應用最新
ラヂオレーヤー
Free Book Coupon
說明書要求券
左記へ說明書御送附を乞ふ
住所
姓名
（中央公論）
ラヂオレーヤー東洋一手賣元
ラヂオレーヤー商會本店
東京本郷春木町一ノ三〇（本郷座横）
電話小石川特六二四番
振替口座東京五二四七番
卸小賣部 東京本郷一ノ九
電話小石川五八三二番
販賣部 東京京橋際
電話京橋六二六八番
說明書錄代進呈
難病を快癒す

最新刊

文學博士 山岸光宣氏著

藝術と藝術家

四六判特製函入 紙數四三五頁 高雅なる新裝幀 定價金參圓八拾錢 送料金拾八錢

東京日本橋・大傳馬町
内田老鶴圃
電話浪花一三三五
振替一二一四六

獨逸は今や新文化産出のために陣痛の中に呻吟してゐる彼女は首尾よく玲瓏玉の如き嬰兒を産み落すか難産のために母子共に死滅するだらうかこの謎語の解決に惱むものは本書に一道の光明を認むるに相違ない恐らく藝術ほど國民精神を鮮明に反映するものはない本書に收められた十篇の論文は皆この意味に於て草されたものである著者はゲーテの「フアウスト」を綜合的な獨逸文化の象徴と見その無比なる包容性の點からシエークスピアと獨逸文學の關係を觀察し獨逸國民に豐富なる浪漫的情緒の詩人としてのノヷアーリスを論じその冥想的傾向の表現としてヘツベルの劇を論じまた現代に於ける浪漫主義の復活としてヴエーデキントを論じてゐるその他最近世界文壇に新領土を開拓した表現主義を評論して最後に藝術上から社會階級闘爭の調停を企てたラインハルトの民衆劇場を紹介してゐる從て本書は獨逸文學の變遷を知らしめると同時に藝術對社會の問題にも解決を與へるものである敢て各位の一讀を俟つ!!

▲内容目次◆◆ゲーテの「フアウスト」◆シエークスピアと獨逸文學◆ノヷアーリス◆運命悲劇論◆ハインリッヒ・フオン・クライスト◆ヘツベルの「ユーデイット」についての考察◆劇作家としてのアドルフ・ウイルブラント◆フランク・ウエーデキント◆獨逸劇壇の新傾向（表現主義）◆ラインハルトの民衆劇場▲畫目次◆◆ラウフ作ゲーテ記念像摸型◆フアウストの死（第二部第五幕宮城内中庭の場◆テイルラ・デユリエのユーデイットとパウル・ウエーゲネルのホロフエルネス◆ウエーデキント夫婦の「檢閲」◆「一つの時代」◆ラインハルト演出の「エデイプス王」

舞臺藝術

演劇の理論と實際

カアル・ハアゲマン氏著
文學士 新關良三譯

四六判上製美本函入 紙數五百餘頁 定價金五圓 送料金拾八錢

映畫劇と演劇

警視廳高等檢閲係長
文部省社會教育調査委員
橘高廣氏著

高雅なる裝幀
四六判上製函入 紙數三五〇頁 定價貳圓八拾錢 送料拾貳錢

政治も宗教も法律も學藝も民衆化を叫ばれつゝある現代に於て娛樂は民衆化運動それ自身の權化として又民衆化した藝術として實に現今の問題の先頭に立つものであるしかも民衆娛樂の中最も一般的代表的で社會政策上最も重要な位置を占めるものは演劇と活動寫眞とでなければならぬ本書は民衆娛樂問題研究の先驅者であり原理並に實際に於ても斯界の最高權威たる著者が所謂「赤煉瓦」の建物裡に在て絶ず調査研究しつゝある收穫中より最新の材料による興味ある研究の記錄を發表したものである廣く現今の問題を解し長く民衆の社會に活き深く藝術の趣味に徹せんとする人々の精讀を俟つ!!

主要目次

◆映畫劇の女◆映畫劇に現れたる兩性問題◆活動寫眞と社會生活◆映畫政策時代◆社會事業と活動寫眞◆映畫の破壞力と建設力◆教育映畫の考察◆檢閲から鑑賞の自由へ◆映畫檢閲と犯罪◆數學的に見た演戲趣味◆觀客心理と演劇◆演劇檢閲官と舞臺監督者◆觀世物の側面觀◆ミセモノのサイコロヂー◆民衆娛樂の五大系◆民衆娛樂の三階段◆都市計畫と娛樂機關◆興行場及興行取締規則◆活動寫眞に關する參考書目

活動寫眞の原理及應用

文學士 權田保之助著

第三版出來 菊判上製 定價貳圓五拾錢 送料拾八錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



賀正

大正十二年元旦

松坂屋いとう呉服店

（東京・上野）

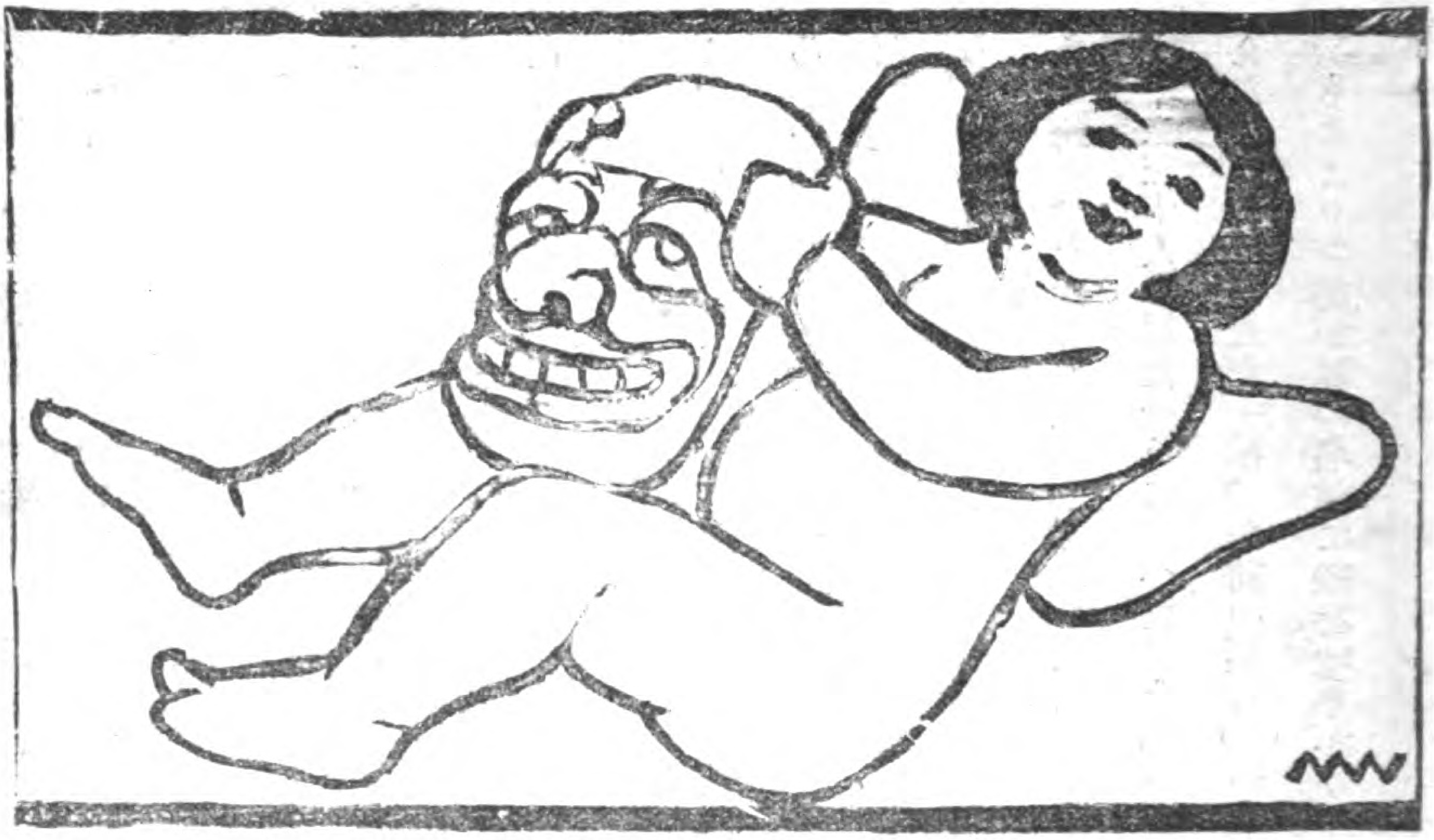
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論第卅八年新年號創作

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



アヹ・マリア

谷崎潤一郎

一

私の可愛らしい早百合子よ、もしさう云つて惡いなら私の過去の可愛らしい早百合子よ——

此の間は大へん失敬してしまつた、お前は怒つてゐるかも知れない、「ほんたうにイヤな老いぼれ犬だよ！　いつ迄もいつ迄も人の踵の跡ばかりクンクン嗅ぎつけて來やがつて！」と、お前が陽氣な女優部屋の一と隅に、……でなければあの賑やかな、淺草の仲店よりも銀座通りよりも賑やかな、明るい廊下の曲り角に花電車が停まるやうなけばけばしい一と塊りの陣を作つて、あのお轉婆な連中を相手にわざと仰山なしかめ面をして見せながら、私の名前にペツペツと唾を吐きかけてゐる樣子が、今私にはハツキリ見えるやうな氣がする。お前はあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の時みんなの前で私の事を「伯父さん」だの「お爺ちやん」だのと呼んだりした。

「伯父さん、此の間クリーニングにやつといた私のシユミーがまだ二三枚殘つてる筈だから、洗濯が出來たら屆けて頂戴、但し持つて來てなんかくれなくつてもいゝのよ、小包みにして送つてさへくれれば――よくつて？ おぢいちやん」

などとお前が云ふのに對して、私はただ意氣地なく「うん、うん」と答へるぎりだつた。するとお前の仲間たちが手をたたいて可笑がるので、お前はますます得意だつた。「此の伯父さんのは此れは變態性慾なのよ、それでこんなに老碌して馬鹿になつてしまつたのよ、ねえ伯父さん」とお前は云つた。私はあの時自分の顏が、――此の色の青黑い、皺だらけな、正に「お爺ちやん」に違ひない汚い顏が、ぽうッと赧くなるのを感じた。そして赧くなりながらどつと云ふ多勢の笑ひ聲を聽き、お前をはじめズラリと居ならんだ女優たちの紅い脣と白い齒の列とが、きやつきやつと笑ふ度毎にガチヤガチヤ入り亂れて搖らめくのを見た。まるで花咲爺が一度に花を咲かせたやうにきらびやかだつた。みんないろいろに肩から上を搖す振つてパタパタと手を打つたのが、涙に滲んだ私の眼には萬華鏡を覗くやうにきれいに見えた。ほんたうに、私はあの時ニヤニヤ笑つてゐたやうだつたが、眼には涙がうるんでゐたのだ。――事に依るとお前たちもそれに氣が付いて、それであんなに笑つたのかね？ 一體私と云ふものがどうしてそんなに可笑しいのかね？――あの瞬間、わたしは氣が遠くなつたので誰がゐたのか覺えてゐないが、涙の中に映つた顏は實際よりも非常に澤山――二三十人も居たやうに思へた。それらがちやうど霧を透して虛空にふはふは浮いてゐる幾つもの白い花のやうに見えた。その中でただ一輪、お前の顏らしい花だけが朦朧と今も瞳に殘つてゐる。

もとよりお前が私の名前に唾を吐きかけ、私を嘲弄するのは自由だ。お前は定めし、私がすごすごと樂屋を出て、青白いアーク燈の明りの下をよろめきながら暗い往來へ消えて行つてしまつてから、今も云つたやうにさんざ私をこき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おろして例のお得意のしかめツ面をしたことだらう。か、成るべくなら私はお前があの「三人の王女」の二幕目の舞臺姿――あれは何と云ふ役だつたかね？　私は役の名を忘れてしまつたがお前はたしか第一の王女の侍女になつて、金色のちぢれ毛の鬘を被つて肩と腕とが露はになつた希臘風の裾の短かい衣裳を着て居たやうだつたね、――私はお前があの姿のままで、幕が下りてから舞臺裏を廊下の方へ戻つて來た時に、そのしかめツ面をしてくれることをお前の爲めに望んで已まない。なぜと云つてお前のしかめツ面を此の上もなく美しく見せるのには、あの扮裝をした時が一番いいやうに思はれるから。あの鬘とあの衣裳とはほんたうにお前によく似合つた。あの金色の、ふつくらとちぢれてふくらんだ髮の毛の中にあるお前の顔は無類だつた、まるで柔かい綿に包まれた白珊瑚の珠のやうに。――出來ることなら私はいつまでもあの珠をあの綿の中に包んで、可愛い桐の箱にでもしまつて置きたい！――私は正直に云ふけれどもお前の額と鼻の線とは餘りキチンと刻まれてゐて、ふだんは少し堅過ぎる憾みがある。それがあのふうわりした綿と髮との後光に輪廓づけられた時の、その神々しさはどんなだつたと思ふ。お前がいくら威張つたつて、恐らくそれはお前自身には分らないことだ。(その點で私はお前より幸福なのだ。)私はその時のお前の額の眉の間に、いつもお前がしかめツ面をする時に作る通りのクツキリした八の字を置いて、冴えた大きな眼の球に意地の悪さうな曇りを入れて、それから例の唇の右の端を「へ」の字なりに下の方へ歪めて見る。あゝ、さうしたらそのしかめツ面がどんなによくお前に似合ふか、お前と云ふものの中にある神々しさと邪悪の美の凡べてがどんなに充分に其處に出て來るか、もう一度云ふがお前自身には分りツこあるまい。お前は笑ふ時よりも意地の悪い表情や、苦々しい表情をする時の方が十倍も二十倍も美しい女なのだ、少くとも私に取つてはさうだつたのだ。私はお前の死顔が見たい。……お前が苦しい病氣で死ぬか、誰かに首を縊められて殺されでもしたなら、その死顔はきつと美しいに違ひない。……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかし私は、あの晩お前にあれほど馬鹿にされたにも拘らず、兎にも角にもお前のお蔭であの劇場の花やかな樂屋生活を、久しぶりで見ることが出來たのを感謝してゐる。おまけにあゝ云ふ蒸し暑い夏の晩で、女優たちがみんな涼しさうな浴衣がけに細帶一つのなまめかしい姿だつたのが、私を少からず喜ばしたと云ふ事實を――私はこゝでお前に白狀しなければなるまい。「いや、舞臺稽古と云ふ奴はいつもこんな風にだらだらとだらしのないのが普通なんでね、濟む時分には大概夜が明けてしまふんだよ」と、あの晩ぱつたりと廊下で作者のKに出遇つたら、彼は得意さうに私の肩を叩いて云つた。「だが此れが冬でなくつて幸ひです、(と、殊にですと云ふ言葉に通人らしい勿體をつけて)それに舊俳優の舞臺稽古なんぞと來た日にや全く以て辛いけれど、夏の女優劇にちよつと浮き浮きしていゝもんだよ。まあ賑かなお通夜でもしてゐるやうな心持ちでね、睡けざましがあるだけでもいゝさ。」――Kは暫く命はなかつた間に見違へるほどでつぷりと太つて、たつた今朝湯から上つたやうな赤味走つた大きな體を黑つぽい絣の上布に包んで、紺の袴を穿いてゐた。その態度には輕い反感を抱かせられたやうなものの、しかしKの云つた言葉には私は全く贊成する。お前も知つて居る通り、私は今まで脚本と云ふものに就いては死んだ夏目さんと同じ考へを持つてゐた。つまり、どんなに巧く演出されたにしたところが、巧ければ巧いほど馬鹿らしいうそが眼立つやうな氣がするので、脚本ばかりは一度も書く氣にはなれなかつた、が、若しもあゝ云ふ女優たちのうちから自分の好きな人々を擇んで、思ひ通りの役を振ることが出來るのだとすれば、成る程戲曲を書くことは決して詰まらない仕事ではない。私があの晩、あの樂屋の廊下や舞臺裏や二階や三階の階段の手すりや、そんな所にぞろぞろと連れ立ちながらさざめいてゐるお前の仲間たちを眺めながら、ふと考へたのはその事だつた。――私はあの時、ほんたうにいろいろと奇妙な事を考へてゐたのだ。――此の女たちと私とは今偶然にも同じ屋根の下に、同じ壁の囲ひの中に、五六尺の距離を隔てて立つてゐる。私は此の女たちの顏や、手

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

足や、髮の色つやや、五本の指の一つ一つの恰好や、踵の肉の圓さ加減や、脛の長さや、胴の細さや、襟足のしなやかさや、それらのものをこつそりと一人一人に就いて調べる。そして此の女たちがまだ子供だつた時分のことや、彼等が生れた土地のことを想像し、彼等の可愛い唇に乳首をふくませ、柔かい臀をそつと兩手で抱きかゝへてその暖い懷に入れた母親やばあやのことを想像する。恐らくこの女たちはみんな私より二十年以上は若いであらう、が、矢張り私と同じやうにそれぞれの母の胎内から生れて來た人間であり、一度はたしかに赤ん坊だつた時代がある。それがこんなに美しく、すんなりとした體に伸びて、眞白なすべッこい肌と靈妙な魂とを一つづつ持つて、さうして此處に斯くの如く生き、傍にしよんぼりと立つてゐる私がどんなにその爲めに惱殺されて居るかも知らずに、平氣でぺちやくちやとしやべり合つたり、しやべりながらそのしなしなした姿に波を打たせたり、輕く手を上げて髮の後れ毛を撫で上げたり――して居る。それを思ふと、私は彼等の母親やばあやよりもつと熱心に、その不思議さと有難さとを造化の神に感謝したくなる。――

「まあおふくろさん、あなたの生んだお兒さんが僅か二十年かそこらの間に、あんな綺麗な生き生きとした娘になつたのを見てお上げなさい。あれは人形ぢやあないんですよ、あれは生きてゐる一人の女なんですよ。」

と、若しも彼女たちの母親が居たなら、私はさう云つてその手を握ることだらう。

「ねえおふくろさん、あのぷよぷよした、薄氣味の惡い肉の塊りに過ぎなかつた赤ん坊が、こんな素敵な生き物になつたのは誰のお蔭だと思ひます？　それはあなたの力ぢやあない。あの赤ん坊の肉の中にそれだけの芽があつたんです。あの塊りが自分で自分の伸びる方向を作りながら、一年一年にこんなに美しく、こんなに見事な背丈になつてくれたんです。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さうして母親が感激のあまり嬉し涙に咽んだら、私も一緒に涙を流すことだらう、

假りに私が一つの戯曲を書くとする。私はここにぴちぴちと跳び廻つてゐる群れの中から、自分の好きな女を選り取り、彼等にその劇を演じさせる。その女たちは大正何年の何月何日の初日の夕から、二十日間なり二十五日間なり興行が續けられつつある間、毎晩毎晩、午後の何時から何時までフット・ライトの前に立つて、私の空想が生み出したところの人間になり、私の書いた臺辭を云ひ、私がそこに注ぎ込んだ感情を味はひ、私が幻に描きつつある女の通りのしなを作る。――その舞臺の上にあつて、手を擧げ、膝を曲げ、肩を怒らし、身をそばだてつつ泣いたり笑つたりして居る者等は、その女優たちは最早や一個の獨立した、私と對等の地位にある人間ではない。彼等はその魂と肉體とを捧げて、私の作つた詩の旋律の中を流れる。そこにあるものは私の空想の世界であり、そこに動いてゐる者等は私の腦髓の周圍をめぐる走馬燈の幻影である。そして一層愉快なことには、その二十日なり二十五日なりの間、私が何處で何をして居ようと、或る一定の時間が來ればいつもそれらの幻影は必ずぐるぐると此の劇場の舞臺の上を廻つて居る。――ちやうど私の頭の中にある妄想が、全く私と關係なく、寢て居る時でも起きて居る時でも常に不思議な夢を描くのと同じやうに。――私はそれを考へると戯曲と云ふものが書きたくなる。此處に居る此の女たちをさう云ふ風に扱ふことが出來るとすれば、實際それは面白い仕事だ。此の女たちの一生から見れば一箇月に充たない期間だけれども、その間だけ彼等は私の劇の世界を生活する。それはほんたうに、一つの果敢ない幻の世界に過ぎないのだが、でもその世界が他の日常の世界に比べて、より果敢ないとは誰が云へよう。幻だと云へば孰方も幻ではないか、束の間だと云へば孰方も束の間ではないか、美しい方がまだいくらかは優しなくらゐだ。そして私は此れから十年も二十年も過ぎて、此の女たちが恰も今の私のやうな老いぼれの身になつた時分を想像する。彼等は遠い昔の月日を回想し、自分を生んだ母親

の事や、自分に乳首をふくませたばあやの事を憶ふであらう。鏡に向つて眼の周りに寄る皺を數へ、髪の毛に置く霜の色を眺めながら、若かつた時代の美しい記憶を次ぎから次ぎへと拾ひ上げて、それらの散つた花びらの一つ一つに深いためいきを送るであらう。その時になつて大正何年の何月何日から何月何日までの私の劇中の生活が、彼女の爲めにその美しい記憶の一つであり、散つた花びらの一とひらである事を私は望む。そして私は、秋風に落ちる木の葉のやうに力なく、こつそりと洩らされる微かな彼女のためいきを感じ、彼女と共にその過ぎ去つた幻影に涙をそそぐ。いや、事に依ると私はもうその時分には、彼女の母親やばあやと一緒に土の下に居るであらう、そして彼等と手を執り合つて彼女の爲めに泣いて居るであらう。

「おふくろさん」

と、私はその時に云ふのである。

「私もあなたやばあやさんと同じやうに、あのお兒さんとは切つても切れない御縁があつた譯なんですね。あなたがたはあのお兒さんを膝の上に抱き上げていろいろのおもちやで遊ばして上げた。私もあのお兒さんが若い時分に夢の國土へ連れて行つて、矢張り面白いおもちやを持たして遊ばして上げたのです。」

——ほんたうに、戯曲家の興味はただそこにある。私はただそれだけの理由の故に戯曲が書きたい。それは私と此の女たちとが此の世のみをに跡を曳いて行く幾筋もの命の緒を、その一點で永久に絡み着かせる一つの結び玉ではないか。その仕事自身が一つの運命ではないか。

私はあの晩、あの樂屋をうろつきながらそんなことを考へたのだ。「ふん！　生意氣なことを云ふもんぢやない、あなた見たいなお爺ちやんが戯曲なんか書いたつて、誰が相手にすると思ふの？　それを私たちがやれると思ふの？」お前

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はきつとさう云つて笑ふだらうが、しかしまあ安心するがいい。いくら私が自惚したつてまさか本氣でそんな事を考へてゐた譯でもない。私はただ、さう云ふ妄想に耽つたけだだ、——そしてそれだけでもう充分に滿足なのだ。なぜと云つて、私の戲曲があの劇場でやつて貰へる筈もなし、また貰へたにしたところで私の好きな女優たちが、——お前だのA子だのS子だのと云ふ若い美しい娘たちがあんな詰まらない端役を振られるくらゐなら、私は寧ろ妄想の中に舞臺を作つて、お前たちに出來るだけいい役を與へて、獨りでこつそりとその芝居を樂しんで居よう。ねえ、ほんたうにさうぢやないか、あの晩のあの「三人の王女」の舞臺は、あれは一體どう云ふ譯だ？　一體誰があんな役の振り方をしたのだ？　あのB子だのD子だのE子だのと云ふ、お前たちよりは十も歳上の婆さん連を三人の王女にさせて、お前たちに侍女の役をあてがふなんて、そんな權利が誰にあるのだ？　お前やA子やS子たちこそ、ただその儘で舞臺へ出ればあの脚本の「と書き」が註文してゐる通りの、「若い美しい」三人の王女ではないか。その役廻りは誰が割り振つた譯でもなく、お前たちが生れる時にちやんと神から授かつて來たのだ。それを勝手に取り換へる權利は人間にはありやしないのだ。

私は餘り腹が立つたのでついその事を口に出したら、Kは大いに私を輕蔑したらしかつた。

「君、そんな事を云つたつてそりや無理だよ、」

と、Kは云つた。何でもKに云はせるとお前たちは藝が未熟だから駄目なんださうだ。矢張り古株の女たちの方が技巧があるし、それだけに芝居が大きくなる？——大きくなると云ふ意味はどんな事だか分らないが、純寫實風の社會劇ならば知らんこと、あの芝居では先づ第一に三人の王女の若々しさがなければならない、そしてそこから溢れ出る詩の美しさがなければならない。一體あの古株の女たち——三十を越した大年增の女優たちの、藝と云ふのは何だらうか？　あの氣味の惡い作り聲とイヤに舞臺馴れた器用さと體のこなしが、あれが藝と云ふものだらうか？　あんなものがお前

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たちの肉體の持つほんたうの若々しさより、より眞實に見えるのだらうか？　あんなものよりかお前たちがその所謂未熟の藝で、オドオドしながら舞臺に現れて、そしてたまにはちよつとしたシクジリぐらゐしてくれた方が、どんなに可愛らしく、どんなに品があつて王女らしいか知れやしない！　だからやつぱり芝居と云ふものにはうそがあるのだ。「それに若い女優たちぢやあ連中の切符が賣れないからね」と、Kはそんな事も云つた。ああ、舞臺の上の藝術の國にもそんなせち辛い浮世の波が寄せるのかと思ふと、そしてその爲めにお前たちがあの縮緬皺の寄つた王女に侍づき、美が醜の前にお辭儀をし、青春が老衰の前に膝を屈め、純眞が虚僞に對して項を垂れるのかと思ふと、私は虐げられた「若さ」の爲めに涙がこぼれる。それでは芝居は現實よりも猶汚い。……………

だが、まあこんなよまひ言をさういつ迄もくどくどと書くのは止しにしよう。お前はとうに退屈してあくびをしてゐる頃だらう、「まだ繰り言が始まつたよ、もう好い加減にしたらいいのに！」お前は例のしかめツ面をして、意地の悪さうな大きな眼玉を一杯に開いて、眼尻の角から斜ツかけに私を睨める（まあ何と云ふ可愛い顔だ！）私は此處に居てハツキリそれを見る事が出來る。だから決して——負け惜しみを云ふ譯ではないが、——何もそんなに嫌はれてまでお前の所へ會ひには行くまい。行かない證據に、今洗濯屋から届いたシユミーズを小包みにして送つて上げる。小包みの方はたしかだけれども、此の手紙は送るかどうかまだ決心がつかずに居る。送つたところでどうせ讀んでもくれないだらうが、しかし兎に角獨りぼつちで物を云ふよりお前と云ふものを頭に置いて、それに話をしかける方がいくらか心が慰められる。そんなつもりで私は時々手紙を書くのだ。

では今日は此れで左様なら、——私の健康状態は例に依つて例の如くだが、でも思つたほど惡くはない。人間と云ふものは、女に捨てられたぐらゐでは容易に死なないものだと見える。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事に依ると近いうちに何處かへ引越すかも知れない、お前と一緒に住んでゐた此の家に居るのは堪へ難いし、もう東京もイヤになつたから、――正直を云へば日本の女がイヤになつたから、――横濱あたりの西洋人街へ越して見ようかとも思つてゐる。それも結局妄想で終つてしまふかも知れないのだが、…………

二

けふは一日雨が降つてゐる。…………

私は部屋の片隅のモロツコ皮のソオフアにねころんで、雜草の打ちけぶる庭の面へ絶えず降りそそぐ雨を見て居る。

……ほんたうに、今年の暑さは恐ろしかつたが、此の雨でいくらか涼しくなるのだらうか？

庭とは云ふものの、それもやはり此の家と同樣、――そして此處に住んでゐる私と同樣、――誰も手入れをする者がないので廢園のやうに荒れてゐる。その庭と此の部屋との間には、庇の深い、五六人の一家族がテーブルを圍んで茶を飮むことが出來るくらゐな廣いヹランダがあるのだけれど、床板が腐つてところどころにぽつこり穴が落ち込んでゐるので夜など迂濶に歩くことは出來ない。私はしかし、時々その床の上の一番丈夫さうな場所を擇んで、そこへ籐椅子を持ち出して簡單な朝の食事を取る。すると、よくそんな時にふいと私の足の下で奇妙な呻り聲がするので、「おや」と思つて板の破れ目からそつと床下を覗いて見ると、暗い中に五六匹の犬が集まつて背中をぶるぶる顫はせてゐる。大方此の近所の犬どもであらうが、いくら犬でもさすが此の頃の暑さには炎天を驅け廻る元氣もないのだ。そして朝から此の床下の涼しい蔭へ這入り込んではハツハツと溜息をついてゐるのだ。私は喰ひかけのトーストをぼろぼろに碎いて、板の隙間から彼等の上へ投げ落してやつたりする。…………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ペンキが剝げて、柵の木がバラバラに拔けかかつて、綱のやうに絡んだヹランダの手すりには、藤の蔓がまばらに絡みつきながら隣りの家のコック部屋の屋根の方へまで伸びてゐる。その痩せこけた蔓を見ると私はいつも手長猿を思ひ出す。そして、もう八月の半ばだと云ふのに、いまだに蔓の先の方には赤兒の掌のやうに開く小ひさく渦を卷いた新芽が着いてゐるのである。夏の初めに生へたのが日あたりが惡くて育たないのか、それとも夏が終るまでは斯うして始終芽をふくものなのか、いづれにしても其青白い葉の色つやは、若々しいと云ふよりは血色の惡い病人の萎びた指の感じがする。以前此の家に住んでゐた人は餘程藤が好きだつたと見えて、庭のはづれの崖のふちにも藤棚がある。私はをりをり、ぺんぺん草や猫ぢやらしや其の他いろいろの名も知れない雜草がぼうぼうと生ひ茂つてゐる間を分け、どうかすればギザギザのある草葉に足を擦りむきながら、その崖のふちへ行つてヹランダの方を振り返つて見る。伸び放題に伸びた草は、私のせいぐらゐの高さになつて、そこから見ると家の軒までとどいてゐる。隣りのコック部屋に添うた生垣の側には、もう幾度か雨風に打たれたらしい紫陽花の花が二つ三つ、——それがどんなに庭園の趣を助けてゐるかはお前にだつて分るだらう、——その外此の庭にあるものと云つては小ひさな山茶花の一と株と、手すりの下に植わつてゐる五六本のつつじと、昔花壇があつたらしい圓い芝生の輪の中に四つ目に編んだ竹細工があつて、それに枯れかかつた朝顏が絡んでゐるばかり。その朝顏は今この家に住んでゐる女主人のミセス・Wが植ゑたものか、でなければ若い方のニーナがやつた仕事であらう。あの女たちも此の土地に居る多くの露西亞人と同樣にひどい貧乏に苦められて、かけ取りには攻められるし、アマさんには逃げられるし、臺所の用事から靴研きまでも自分たちでやつて居ながら、花を植ゑたりするところはさすがにやはり女である。そして天氣のいい時にはその竹細工の傍に、クリームを塗り換へた踵の高い女の白靴が乾されて居たりすることもある。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から書いて來るといかにも殺風景な庭のやうにも思へるけれど、お前がそこで想像するほど、それほど殺風景でもないのだ。今も云ふやうに此の庭は崖の上にあつて、昔西洋人が此の山に街を開いた時分から生へてゐたらしい大木が、五六本も崖の中途に高く聳えてゐて、それらの網の目のやうに入り組んだ枝葉が一日庭の雜草の上にさまざまな蔭を作つてゐる。お前は知つてゐるかどうか、西洋の古い油繪――コローの風景畫や何かによくあるだらう、――こんもりとした大木が繪の前方に傘のやうな枝をひろげ、その枝の下から遙かに明るい遠景が見え、地平線が見え、小ひさな丘や村落が見え、その間を縫ふ川だの路だのが見えたりする、あれとちやうど同じやうに、此の庭の雜草の上に蒼々と垂れかかつた樹木の間からは、ずつと山の下の方の元町通りの人家の屋根が見え、グランド・ホテルの赤い煉瓦が見え、波止場や商船やクレーンなどが見えたりする。夜になれば海岸に沿うた港の街に灯が點ぜられる。南京玉を繫いだやうに無數の灯影がうねうねと波打つて、遠く羽田か鶴見の邊かと思はれる――そんな方までもつゞいてゐる。星のやうだと云ひたいところだが、それは星よりもずつと綺麗だ。空氣の加減で絶えずちらちらと動搖する。見てゐる間に近くなつたり遠くなつたりする。ヹランダに立つてぢつと視つめると、つい鼻の先の大木の枝葉の間に鏤められてゐるやうにも思はれ、黑いレースを張つた中に數限りもないルビーが縫ひ込まれ、それがぎらぎらと光つてでも居るやう、……そして私の、もう取り返す術もない過去の夜な夜なの美しい思ひ出のやう、……私はその灯のちらちら動くのが、涙のせゐではないかと思つてそつと睫毛に手を觸れて見る。そして靜かにヹランダを離れて、ためいきをつきながら寢室に這入る。

兎に角私は横濱が好きになつた、純然たる西洋流の生活も惡くはない。嘗て京都や奈良で逗つたホテルの生活を想ひ出す。部屋はそれらのホテルのほど淸潔ではなく、壁紙は破れ、床はぶくぶく鳴つてゐるが、天井の高い、二十疊はた

しかに敷ける大きな室を二た間も借りてゐるのだから、目下の私にはこれで充分だ。それに家具なども古びては居るがガッシリした、重みのあるものが一と通り揃へてあるので、私は一と間を寢室に使ひ、一と間を書齋に使つてゐる。書齋の方に大理石で圍つた、立派なファイア・プレースがあるのが何よりうれしい。冬になつたらそれに赤々と火を燃やして、ガラス戸を叩く木枯らしの音をききながら夜おそくまで讀書するのだ。……ああ、私はほんたうに妄想ばかり描いて居る！

「ミスタ・エモリ！お前は何の職業を持つてゐるんだね？」

此の間ニーナが部屋へやつて來てそんな事を私にきいた。成る程あの女たちの眼から見れば、此のえたいの分らぬ四十恰好の一人の日本人を、不思議に思つたことであらう。

「私かい？——私は何の職業もない、ただ時々かうして徒ら書きをしてゐる、詩を書いたり物語を書いたり、——」

「それぢやお前は詩人でさうして小說家だね」

とニーナが云つた。そして始めてえたいが分つたと云ふやうに頻りに頷いて、「お前の本は日本でどのくらゐ賣れるか」の、「ローヤルテイーは何割ぐらゐ取れるか」の、いろんな事を聞いた揚句に、「お前はきつと、エ、ロット、オブ、マネーを作つただらう」とさう云つて笑つた。

「いいや金なんか儲かりやしない。私の本も以前は少しばかり賣れたんだけれど、もう此の頃ぢや時勢おくれで世間が相手にしてくれない。だがまあ外に仕方がないから書いてゐるんだ、……書かないぢやあ喰つて行かれないから、……」

「でも日本人はさうして喰つて行けるからいい。私たちのやうな外國人の藝術家は………」

さう云つてニーナは眉を曇らせる。

「……日本に居るとほんとに生活に困つてしまふ。それにまあ此の國の物價の高い事と云つたら！」

そしてチョッチョッと舌打ちをして、仕方がないから近いうちに上海へ行くつもりだと云ふ。いつ行くのだと云へば今年の秋のつもりだけれど冬になるかも知れないと云ふ。きつと彼女は行きたいには行きたいのだが、金がないので動けないのだ。

「お前とミセス・Wとはどう云ふ關係なのだ」と聞いても、彼女はハッキリした事を云はない。「あの人と私とはペトログラードに居た時分からの友達だ」と云ふだけである。そして「自分は露西亞人だがあの人は伊太利人だ」と云ふ。何でも二人は一二年前にシベリアから來て、ほかの二三人の露西亞人と共同して此の家を借りたものらしい。それが今では二人きりになり、がらんとした廢屋のやうな中に私と三人で住んでゐるのだ。

「私たちが上海へ行つたら、お前が此の家を全部借りたらいいだらう。近所は靜かだし、廣い部屋が六つもあるし、古びては居るが設備は萬事整つてゐるし、お前のやうな詩人が住むには持つて來いの家ぢやないか。そして家賃はたつた八十圓だよ！　若し此の家が新しかつたら二百圓の値打ちはたしかにあるのに！」

ミセス・Wとニーナとはいつも私にさう云つてすすめる。

「ほんたうにさうしてくれたらいい。八十圓でこんな家へ這入らうツたつて、決して外にあるもんぢやない。ミスタ・エモリ！　八十圓と云ふことを考へて御覧。その外にはただ此處に附いてゐる家具を買ひさへすればいいのよ。」

「それぢや此の家具はお前たちの物なのかね？」

「ええさう、此れは私たちが前に住んでゐたミスタ・Lから買つたものなの。お前が住むなら何から何まですつかり入れて、千圓で讓つて上げるんだけれど。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の女たちはその千圓で上海へ行く氣なのだらう、だが、お前は此の話をきいて笑つてはいけない、――「いくら西洋人にしたつてあんまり間抜け過ぎるぢやないか。千圓の金があなたに出來ると思ふのか知ら？」――お前はきつとさう云ふだらうが、彼等が私を買ひ被るのにも強ち無理でない譯があるのだ。なぜと云つて、此の頃橫濱では一般に西洋人よりも日本人の方が景氣がいい。此の山手にある多くの西洋館なども、もとはみんな西洋人が建てたのだけれど、今では次第に日本人の手に渡りつつある。（そして日本人の手に渡ると一遍に家賃を上げてしまふ。）戰爭前には獨逸人が立派な家作を澤山持つてゐた、それが戰爭後日本政府に沒收されて競賣に附せられたりして、拂ひ下げを受けたのは大概日本人か支那人なのだ。現に私の住んでゐる此の家なども手入れをすればいくらでも高く貸せるのに、かうして立ち腐れにしてあるのには理由がある。何でも近所の車夫に聞いたところでは、家主と云ふのは直き此の傍に住んでゐるAと云ふ英吉利人で、事業に失敗した爲めに自分の邸と此の家作とは疾うに抵當に這入つてゐる。それで手入れをするのも馬鹿々々しいし、たとへさうして家賃を引き上げたにしたところが、とてもそんな僅かな金では負債の利息を拂ふのにも足りないのだと云ふ。しかしそれでも古くから居着いてゐる連中はまだいいのだが、みじめなのは戰爭後にシベリアあたりから流れて來た人々だ。此の間も山下町のカフエ・タハラヤへコーヒーを飮みに行つたら、ボーイが一人の令孃風の客に向つて注意をしてゐる「お孃さん、どうか寫眞器をそんな所へお置きにならないで下さい。つい二三日前にも寫眞器を盜まれた方があるんです。どうも此の頃は露西亞人のすりが多いので油斷がなりませんよ。」――全く彼等はそれほど困つてゐるのだと見える。だから日本人の方が何處へ行つても羽振がいい、西洋人に對しても我れ我れの方が信用がある。日本人にもたまには私のやうな例外があると云ふことは、彼等には分らないのだ。ミセス・Wやニーナから見れば、苟くも詩人でさうして小說家であるところの、相當の年配の一人の日本人が、いくら素寒貧だと云つても千圓

ぐらゐの金に困る筈はあるまいと、多分さう思つてゐるのだらう。

「そりや安いことは安いけれど、此の家は私には大き過ぎる。私は獨りぼつちだからね。」

その話が出る度每に、買ひ被られた可笑しさを堪へながら、私はさう云ふ返辭をすることに決めてゐる。

貧乏はしてゐるけれども、此の女たちはなかなか元氣はいい。朝は二人とも早くから起きる。そして私が眼をさますと、直ぐにミセス・Wが箒木を持つて這入つて來て、太つた體を鵞鳥のやうによちよちさせながら、しかしさツさと部屋の掃除をしてくれる。ベツドの褥を直してくれたり、ウオツシユ・スタンドの水を換へたり、花瓶の花を生け直したり、デスクやテーブルや本箱を雜巾で拭いてくれたり、西洋人にそんな事をさせるのが何となく氣の毒なので、アイム、ベリー、ソオリーだと云ふと、「なにそんな事は少しもない、アマが居ないから私が代りにして上げるのだ、人間は働くのが當り前だ」と、子供に敎へるやうなことを云ふ。「アマはどうしたのか」と云へば、「おふくろが病氣で宿へ歸つた、だがもう直きに歸つて來る」と云ふ。その實給金をやらないので逃げられたのに違ひないのだ。朝飯と午後のお茶だけは拵へて貰ふ約束なので、掃除が濟むと間もなく紅茶を入れてくれる。「お茶が欲しければいつでも云ふがいい、どんな時でも」と、彼女はさう云つてほんたうにまめまめしくよく働く。どうかすると働きながら大きな聲で歌を唄ふ。そのソプラノの聲をきくと「又近いうちに音樂會があるんだな」と、私は獨り心に頷く。彼女は時々音樂會を開いたり、聲樂の敎授に出かけたりして、それでどうやら生活を支へてゐるのだが、ゆつくり聲の練習をする暇がないので、音樂會の日が迫ると、臺所でガチヤガチヤと皿やコツプを洗ひながら、幾度も幾度も同じ節を繰り返しては唄つてゐる。(たまにはドゥロウイング・ルームに籠つて、オルガンを鳴らしながら稽古をするけれど、そんなことはめつたにない。そのオルガンもオクターヴが三つか四つぐらゐしかない、ベビー・オルガンに毛の生へたやうなものなのだ。ピアノは疾うに質

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つてしまつた！）そして一日に二度や三度は、身ぎれいなアフタヌン・ドレスに着換へて、寝間着姿でゐる時よりはたしかに十も若く見えるレディーになつて、何處かへ出かけたかと思ふと直きに歸つて來る。多分出教授にでも行くのであらう、が、「大變仕事があるやうだね」と云ふと、「いや仕事なんかそんなにない、ビジネス、バッドだ」とさう云つて顏をしかめる。ニーナも一緒に出て行く時は、此の廣い家の中に私は獨りぼつちになる。

「ミスタ・エモリ！　私たちは今からちよつと出かけるが、お前も外へ出るやうだつたら、お前の部屋だけをよく氣を附けて戸締まりしておくれ。ほかの部屋の戸はすつかり締めて置いたからね。」

そして、「日本人はいい人間が多いけれど、中には泥坊だつてゐない事はない。用心するに越した事はないからね」と、笑ひながら念を押して彼女は出て行く。歸りにはよく花を土産に持つて來てくれる。

彼女とニーナとがどう云ふ關係にあるのかは、未だに私には分らない。臺所で水仕事などをしながら、忙しい時には彼女はをりをり大きな聲で「ニーナ！」と呼んで、何かの手傳ひを頼んだりしてゐる。が、ニーナはふだん勝手口の細々した用事などは、あまりしないでもいい事になつてゐるらしい。ニーナはまだ歳が若いのだし、それに恐らくそんな仕事をするのにはしなやか過ぎる指を持つてゐるのだらうし、それを察して年上のミセスの方が獨りで働いてやつてゐるのか、さうだとすれば二人の間には美しい情愛があるやうでもある。しかしニーナは内で働かない代り、外では金を儲けて來ると云ふ風でもない。出教授でも音樂會でも彼女はミセス・Wの友達として、――どうかすればミセスの娘かなんぞのやうに花やかに着飾つてしやならしやならと喰つ着いて行くが、實はほんの手助けをするくらゐらしく、内でも外でも始終せツせと稼いでゐるのはミセスの方ばかりである。「ほんとに何と云ふ暑さだらう、今日は一日頭痛がして仕様がない」とか、「リヨウマチで膝が痛んで困る」とか、ぶつぶつ愚痴をこぼしながらそれでも機嫌よく働いてゐる樣子を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見ると、あの歳になつて知らぬ他國で苦勞をするなんて、日本の女ならどんなに心細がるだらうと、私でさへも同情しないでは居られないのに、ニーナは格別氣の毒だとも思はないのか、臺所などへは影も見せずに、小ざつぱりしたなりをして奥の部屋に收まつてゐる。けれど二人は仲違ひをしてゐると云ふ譯でもなく、ミセスの方でも「ニーナ、ニーナ」と賴りにしてゐる所を見ると、西洋では若い美しい女は遊び、老いた汚い女は働くのが、當り前になつてゐるのだらうか。或はニーナには立派な旦那でも附いてゐて、その方の金でミセスの生活を助けてゐると云ふやうな事情があるのか？　それであんな風に威張つてゐるのか？　だがそれならばニーナは何を苦しんでこんな古ぼけた家に居るだらう、もつと氣の利いた家に這入つて、コツクやアマの二三人ぐらゐは使へさうなものではないか。いくら横濱の露西亞人が不景氣だと云つても、若くて器量のいい女は大概どうにか身の振り方をつけてゐる。困つてゐる連中に此れはと思ふ美人などはめつたにない。恐らくニーナも、今の若さにあんなにぴいぴいしてゐるやうではその賣れ殘りの一人であらう、目ぼしい旦那を捕まへるほどの腕はないのに違ひなく、男があつたにしたところがきつとその男も貧乏な同國人か何かであらう。

出て行く時は大抵一緒に出かけるが、歸りにはよく別々に戻つて來る。ニーナの方が先に歸つて來ることもあり、後になつてもそんなに遲くなる時はなく、一と晩でも家を明けるとか、十時過ぎまで獨りで出歩いて居たりすることは一度もない。まだうす明るい宵の口などに私が留守番をしてゐると、門の中の植ゑ込みの間を誰かがちらりと這入つて來るらしいけはひがして、輕い靴の音が聞える。「おや、歸つて來たな」私はさう思つて書齋の窓からこつそりと外を眺める。レースの帷の垂れてゐるガラス戸の向うに、薄紅い薔薇色の服を着た一點の姿が見えて、玄關の方へだらだらと下り坂になつた砂礫の道を、椎の實のやうな可愛い靴の爪先でしいとしいと踏みしめながらニーナが獨りで歸つて來る。

あんなにきやしやでよく歩けると思へるやうなほつそりした脚をすいすいと運んで、勢よく正面の階段を上つて、入口の扉をコトコトと叩く。(そんな時にはそこはいつでも鍵がかかつてゐるのだから。)

「お歸り」

と云つて、私は廊下へ出て扉をあけてやる。

「ミセス・Wはどうしたんだね?」

「あの人は私と一緒ぢやあなかつた、用事があつて餘所へ廻つた、」

「そしてお前は何處へ行つたの?」

「私?――――!」

さう云つて彼女はニツコリ笑つて、

「今日は本牧の海岸で今までさんざ泳いで來たの、彼處にお友達が住んでゐるもんだから好紀達も行つてゐるの、わたし泳ぎが大好きなのよ。」

「そりやあ面白かつたらうね」――云ひながら私は、私の顏より一二寸高い所に笑つてゐる彼女の瞳を、はつきりとは見られないやうな心持ちで見上げる。せいが高いのに大きな帽子を被つてゐるので、向日葵の花のやうなものが私の上に蔽さつて來るやう、――その唇は私の額の直ぐ上の方で息をしてゐる!――「ちつとも惡い女ぢやあない」と私はその時に思ふのである。すつきりとした體つきの、固くムツチリ肉を盛り上げた肩から襟へかけての肌は、若い女の夏の肌だ」とそれだけ云へば充分である。そしてその兩側にしなやかに垂れてゐる腕、腕と腕との間に挾まつて薔薇色の服の下からせツせと呼吸をしてゐる胸、――小柄な私はそこに立ち塞がつてゐるその胸の中へ吸ひ込まれてでも行くやう

に感じて、自分の貧弱さがしみじみと悲しくなつて、人種と云ふものの餘りな相違に不思議な恐れをさへも覺えながら、鼻をついて來る香水の匂を避けるやうに後退りする。……ああ、その相違が身の丈だけの相違ならいいのだけれど、……私の顔が彼女の肩のところにあると云ふだけの事ならいいのだけれど、……あの白い肌の中にある白い心は、此の褐色な肌の中にある褐色な心の戀からは、とても及ばぬ高い所にあるのではないだらうか？……

私は今、雨の降るのを眺めながらそんな事を考へてゐる。雨は相變らずびしよびしよと降る。庭の紫陽花はもう殆んど散り失せてしまつた。

では又近いうちお知らせしよう。心からお前の健康を祈る。

三

私が到底此の家のあとを引き受けないことが分つたので、門の前には貸家札が貼られた。"House to Let, 6 rooms, furnitures can be sold separately."―そんな文句が出されてからもう五六日になるのだが、一度亞米利加の若い紳士が二三人づれで見に來たばかりで、それきり一人もやつて來ない。その亞米利加人等が來た時のこと、ミセスとニーナとは下へも置かぬやうにして、「ミスタ・エモリ、エキス　キユース　ミー」と云つてちやうど私が書き物をしてゐた書齋の中へ這入つて來て、二た間つづきのその室を見せ、階下や階上の部屋部屋を隈なく案内し、臺所や、バス・ルームや別棟になつてゐるコツクやアマの日本間などへも連れて行つて、それから食堂でお茶の御馳走をしたりしながら長い間しやべくつてゐた。

「あの亞米利加人はきつと此の家を借りるだらう。――お前が借りないもんだからとうとうあの人たちに借りられてし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まふよ。」

客が歸つてからミセスはいつになく嬉しさうにそんな事を云つたりした。

「それぢや借りる事にきまつたのかね？」

「まだ極まつたと云ふ譯ぢやない、明日中に返事をするつて歸つたけれど、大變氣に入つたやうだつたからきつと借りるだらうと思ふの。」

「ええさう、きつとあの人たちは借りるわ。」

と、ニーナも傍から口を添へて、何となくソハソハしてゐる樣子だつた。

「さうなると私は此處を引揚げなけりやならないが、――お前たちも上海へ行つてしまふんだらうね？」

「ええ、多分來月は行けるかも知れない。上海へ行けば知つてる人も多勢居るし、いいビジネスが見附かるだらうから、……」

その夕方、ミセスとニーナとがおめかしをして出て行つてから、晩の八時頃に晝間見た亞米利加人の若い方のが一人でやつて來た。玄關の戶がしまつてゐるので、腐つたヹランダの床の上をみしみしと踏みながら明け放された書齋の入口の方へ廻つて、机に凭つてゐる私を見ると慇懃に帽子を取つて一禮した。

「ミセス・Wは御在宅でせうか？」

室内の明りを浴びながら庭の闇を後ろにして閾際に立つたその男は、晝間に見たよりもずつと若い、ほんの二十一二の青年で、恐らくは近頃日本へ來たばかりの、まだ世馴れない子供のやうな所のある、亞米利加人にしてはおつとりした品のいい人柄だつた。「留守だ」と云ふと、ちよつとモヂモヂして「それではあなたから傳へて頂けるでせうか」と云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて、何かぺらぺらと流暢に語り出す言葉が、私にはよく分らなかつたが、――ニーナやミセスの變則な英語なら分るんだが、さう云ふ本式の奴になるとさつぱり見當が附かないもんだから、――要するに此の家は大分傷んでゐる所があるし、その他いろいろ不便な點があることをくどくどと並べて、折角だが借りる譯には行かないからと、その事情を述べるのであるらしかつた。「よろしい、傳へて置きませう」と云ふと、

「サンキュー、ベリ、マッチ」

と、又お辭儀をして歸つて行つた。

「何? あの亞米利加の若いゼントルマンが來たつて? そしてお前に何と云つたの?」

その晩も、ニーナが獨りで先に戻つて來たのだつた。

「何と云つたか、私にはあの人の英語がはつきり聞き取れなかつたけれど、でも借りるのは止めると云つて居たらしかつた。」

ニーナはハタの見る眼も氣の毒なほどしよげ返つて、「ふん」と微かに鼻の先で返辭をして、ためいきをしながら横を向いだ。そしてそれなり一と言も云はずに、きまりが悪いのか逃げるやうに自分の部屋へ這入つてしまつた。

出來るものならどうかして千圓の金を拵へてやりたい、私は餘りいぢらしいのでさう思ふ事が屢々ある。たつた千圓ばかりの金! だが今の私にどうしてそれほどの餘裕があらう。月々大した贅澤もせず、かうして自分獨りの口を凌いで行くのがやつとの事で、又怠け者の私の性分では、それ以上の事をしたくもない、そんな腑がひない了見だからお前に捨てられたんだらうが、金が欲しさに面倒な思ひをして、ロクでもない詩や小説を書くくらゐなら、懐ろ手をして妄想に耽つてゐる方がずつと幸福だ。衰弱し切つた此の體では外に向つて何を求める元氣もなく、全く近頃の私と云ふも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のは、目がな一日取り止めのない妄想を喰つて生きてゐる。私はただその妄想の中で、感謝に充ちた、さも嬉しさうなニーナの笑ひ顔を見る。

「ミスタ・エモリ！　ほんたうに有り難うよ、まあほんたうにお前は何と云ふ親切な、……」

さう云つたニーナの睫毛にはすずしい涙が光つてゐる。私と彼女とは書斎のソオファにぴつたり並んで腰をかける。彼女はこの間の薔薇色の服を纏つて、膝の上には今私から受取つた千圓の紙幣が載つてゐる。……

「いいや、そんなに禮を云はんでもいい。」

と、私が云ふ。

「その金で以てお前はお前の望み通り上海へ行くがいい、……私たちはもう別れなけりやならないんだね。」

「さう、ほんたうに私上海へ行ける！」と、ニーナの胸はその嬉しさで一杯で、私の沈んだ顔つきや聲の調子には氣が付くよしもない。それが私を一層遣る瀬ない心にさせる。

「彼方へ行つたら直ぐにアドレスを知らせるから、お前も時々手紙をおくれ。日本を離れてしまつたつてお前のやうないい日本人のことは忘れやしないよ、ねえ、ミスタ・エモリ！　私たちは此から後も始終友達で居ようぢやないか。」

「私もそれを望んでは居るが、……手紙のやり取りをすると云つても、私はこの後何處に住むかも分らないし、……」

「だつて、お前はこの家を借りるんぢやないか？」、

さう云つたとき、ニーナは始めて私の異様な言葉の端々に疑ひを抱く。彼女の大きな眼の中に怪い不安と當惑の陰がさして來る。その碧色の瞳のうるみは、曇つた空の下にある海の色を想ひ出させるであらう。その海の色と同じやうに茫漠とした、底の知れない悲しみを私に感じさせるであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いいや、私が金を出したのは此の家を借りる爲めぢやないのだ。私はただ……お前の爲めにして上げたのだ。」

「ああ、お前の親切は一生忘れない、……」

ニーナはさう云つて、ちらりと私の顏を見て、――その顏の中にある何物かを恐れるやうに直ぐ下を向く。そしてちよつとした沈默の後に、强ひて慰めるやうな調子でつづける。

「ミスタ・エモリ！　私はお前に又會ふことを望んでゐるよ。ねえ、きつと會へるに違ひないよ。私だつていつ又日本へやつて來るかも分らないし、お前も都合が好かつたら是非上海へ遊びにおいで、お前は支那が好きだつて云つたぢやないか。」

「ああ好きだとも！　支那へ行つて暮らせるだけの金があるなら私は疾うに行つてるだらうよ。私はお前たちが羨しくてならない。日本人は日本の國の中でだけしきや暮らせないのだ、亞米利加へ行つても支那へ行つても嫌はれるのだ、そして職業が見つからないのだ。よつぽど金のある人間か、勇氣があつて體の達者な男ででもなけりや、……」

「そんな事がある譯はない、それは商人や何かの事だよ、お前は旅をしながらでも詩や小說を作つたりして、それを賣ることが出來るぢやないの。」

「さう、……それはさうに違ひない、若しも私がえらい詩人であるならば。」

その最後の一句は深い嘆息の中から出される。ニーナはそれが謙遜でも皮肉でもなく、今此處に居る此の哀れな一日本人――私の心からのなげきの聲であるのを感じる。そして云ふべき言葉も知らずに再び伏し目がちになる。

「私はお前に恩を着せる譯ではないが、正直のところ此れだけの金を作るのがやつとの仕事だ。それもお前の爲めでなかつたら、恐らく出來はしなかつただらう。私はお前のその美しい白い體が、何處へ行つても茶色の顏と茶色の家とが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うようよして居るうす汚い日本の街に、斯うして次第にくすぶつて行くのを見るに堪へられなかつたのだ。お前もぐずぐずして居ればあのミセス・Wと同じ境涯に落ちてしまふ。いつの間にかそのしなやかな手だの足だのにぶくぶくした脂が溜つて、不恰好なお婆さんになつて、揚句の果ては茶色の肌の人間と交つて茶色の國の土の下に、その白い體を埋めなければならなくなる。私はそれを見ることが悲しいのだ。お前の爲めといふよりはお前の『白い肌』の爲めに！」

私は覺えずニーナの手を執る、そして私は戰慄する、――今までついぞ彼女と握手する機會はあつても、此の骨張つた醜い指であの眞つ白な手の甲に茶色のしみを附けることの恥かしさに、まだ一遍も觸つたことはなかつたのだ。

「ニーナよ！　お前は早く旅立つがいい。上海へでも亞米利加へでもお前の故郷の露西亞へでも、お前の仲間の美しい人魚が多勢居る土地へ引き移つて、出來るだけ愉快に暮らすがいい。お前は今が幸福なのだ。若い時は長くはないのだ。それはほんたうにあつけないほど早く過ぎ去る！　私は私の經驗からよく知つてゐる！　そして自分の『若い時』の思ひ出の爲めにでも、お前を幸福にしてやりたい。お前がこの後何處かの遠い國へ行つて、何處かの見知らぬ可愛い男と戀を樂しむ時があつたら、どうかその時『あの日本人は今頃何處に居るだらう』と、ただそれだけを思つてくれ。ただそれだけでもお前の記憶の中にある私がほんたうの私だと思つてくれ。私はお前の頭の中に、金色の髮に温められて白い皮膚にくるまつて生きてゐるのだ。此處にあるものは既に私の影に過ぎない。……」

私はそれらの一言一句が、自分が今迄に作つたところの最も美しい詩であるのを感じ、それが齎らす情緒に醉はされて涙ぐみつつニーナの膝へうつ俯しになる。……私の顏は薔薇色のうすい羽二重の裲を透して　圓々と隆い腿と腿との間へ落ちる。つるつると絹地の坂を滑つて落ちる。彼女はそれが落ちまいとするかのやうに膝と膝とをぴつたりすぼ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めて、身をすくめつつ後ろの方へ微かに脚を退いて行くのが、……ぺつとりとした羽二重に衣擦れの音も立てずに、私の顔の重みの下で油の中をもくもく物がずれて行くやうに感ぜられる。……そしてその瞬間、柔かだつたその腿の間みは、今空高く飛び立たうとして翼を引きしめた小鳥の腹のやうに、ぴんと張り切つてぶるぶるとふるへる。……

私の妄想は此れだけでは止まない、もつと深くもつと細々と進んで行く。が、此れから後の場面に就いては常に不思議にも全く異つた二つの光景が、代る代る私の心に浮かんで來る。

「ニーナ！　さあ！　お前は私に構はずに彼方へおいで！　私は此處に獨りで居たいのだ、獨りでいつ迄も泣いてゐたいのだ。」

ニーナは何も云はないで、返辭の代りにほつと重荷をおろしたやうなためいきを洩らす。——そのためいきが私に取つてどんなにむごいものであるかを、彼女は知つて居るだらうか？——そして忍びやかに椅子を立ち上りながら、兩手の間に私の顔をしつかりと挾んで、それを膝からおろさうとする。私は私の頰の上に、彼女のしなやかな掌の肉を、——白い五本の肢を生やした二匹の大蜘蛛が這ふやうに感ずる。彼女は立ち上つて、鹿の蹄の音よりも輕い小さな靴の踵の音を床に落して、部屋を出て行く、私は獨りで物に打ちのめされたやうにソオフアに俯しながら、うす暗いその片隅でしくしくと泣きつづける。……

此の妄想にはツルゲネエフの小説に似た甘さがある。私の荒んだ心には斯う云ふ甘さも一種の慰めになるのだから、此の妄想だつて決して捨てたものではない。時に依つては私は此れで滿足するのだ。が、どうかすれば甘さのうちに一滴の苦味が欲しくないこともない。——それはほんのちよつぴりでもいい、甘い中に云ふに云はれぬ苦みを持つたシユニツツレルの程度なら猶更いい。——その時わたしの妄想は他の一つの形をとり、ニーナは全く別の女として私に映ず

る。お前は面倒でももう一度私の妄想を溯つて、さつきの揣摩の所まで立ち返つてくれねばならない。――

……そしてその瞬間、柔かだつたその腿の圍みは、今空高く飛び立たうとして翼を引きしめた小鳥の腿のやうに、ぴんと張り切つてぶるぶるとふるへる。……私は折角掌中に這入つた臆病なその小鳥を、逃がすまいとするかのやうに兩手で強く抱きかかへる。

「ニーナ！ 私の願をきいておくれ。……けふ一日だけ私のものになつておくれ、明日上海へ行くのでもいい、けふ一日だけ、……」私は夢中でニーナの双手を捉へながら、ゴムの葉のやうにつやつやしい手の甲へ私の熱い唇を觸れる。

「ねえニーナ！ けふ一日だけ、……決して此の事は誰にも云はない、……私は私の持つてゐる凡べての物を金に換へてお前に上げよう、……まだ二百圓や三百圓はきつと上げられる、……」

ニーナは默つて居る、が、私の唇の下にある掌の肉はぐんなりと伸びて軟かになり、そこに懶い無抵抗が感ぜられる。私は顔を上げて彼女を見る。彼女は眼を閉ぢて居る、兩方の腕をぐつたりと膝に垂らして、やゝ仰向けに倒れるやうにソオフアに凭れて、薔薇色の布に包まつた、魂のない、一塊のなめらかな白い像がそこにあるのだと云ふやうな工合に。……彼女は自分の唇の近くへ私のそれが迫るのを感ずる。深い睡に落ちてゐたやうな彼女の顔が、或る呪はしい夢魔に襲はれて眉をしかめる。私の兩手は知らず識らず彼女の背中へ廻されて、肩のホツクを外さうとする。十本の茶色の指が、わななきながら眞つ白な肌の裏地を冒しにかかる。……

それから二三日の日が夢のやうに過ぎ去る、私に取つては美しい夢であり、彼女に取つては重苦しい夢である二三日の日が。……そして秋晴れのさやかにすがすがしい或る日の朝、――さう、もうその時は秋になつて居なければならない、――彼女はミセス・Wと共に幾行李かの荷物を纏めて、港の埠頭へ自働車を驅る。私は私の原稿、版權、書籍、本

箱、家財道具、多くもあらぬがらくた物の一切を賣り拂つた三百圓を懷ろにして、見送りがてら波止場へ出かける。

「おゝ、ミスタ・エモリ！ よく來てくれたね。」

と、ミセス・Wがデツキに立つて手招きする。彼女と並んで欄杆に倚つてゐるニーナの笑顏が眼にとまる。白いふらんすちりめんのブラウズの上に紺のコートとスカートを着て 眞紅の羅紗の帽子を被つた旅のいでたちが、まあほんたうに小ざつぱりして、何と可愛く見えることか。私は急いでブリツヂを渡り、人ごみを分けて二人に近よる。そして三人はお互ひに行く末の幸福と健康を祈り、愉快に別れの一と時を過す。……私は彼女たちと連れ立つて二人のキヤビンへ行つて見る。トランクや、シユウツケースや、バスケツトや、狹い所へ持ち込まれたそれらの荷物を棚の上や寢臺の下へ工合よく整理してやる。「あれを彼方へやつておくれ、さう、さう、……そして此れを此の下へ入れて、……」と、ニーナは自分も手傳つて始終活潑にせはしなく立ち働く。「ああ、此れでいくらか廣くなつた。サンキユウ、フオフ、ユア、トラブル！」私はひよいとニーナの眼を見る、ほんの一瞬間、搜るやうに碧いまなざしの中を見入る、が、そこには無邪氣な少女のやうにいそいそとした喜びが溢れてゐるばかり、きのふの惡夢は忘れ去られて跡かたもない。「神戶で一と晩、長崎で一と晩、その明くる日は上海へ着くのよ。」彼女は寢臺に腰をおろして一と休みする。「お前は船に弱くはないかね？ 此の寢臺でよく寢られるかね？」「ああ寢られるとも！船醉ひなんかしたことはない。」私はもう一度、彼女の衣服の下にある手だの足だのを心に描く。そのなよやかな體と美しい睡りとを、五日の間靜かに安らかに搖す振つて行く大洋の波を羨む。「さあ、もう出帆に間もないんだよ、三人でお茶でも飮まうぢやないか。」と、ミセス・Wが二人を促してサロンへ出かける。見送る人々と旅立つ人々で埋まつてゐる花やかな廣間の隅のテーブルに着いて、暫くの間たわいのない歡談を交へる。やがて出帆のベルが鳴る、音樂隊の奏樂が始まる、「左様なら」と、私は立ち上る。見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

送られる二人は見送る私をブリッヂの所まで送つて來る。私とニーナとは云ひ合はせたやうに殊更少し早足になる。太つちよのミセス・Wは雜沓に遮られて後ろの方へ隔たつてしまふ。ニーナはちよつとあたりを見廻し、ポケットの中へ挿し込まれた私の手もとを默つて見つめる。私は手早く紙幣の束を取り出して彼女に渡す。

「おそくなつて濟まなかつた、やつと今朝出來たもんだから。……」

「有り難う、」と、彼女は嬉しさうに云ふ。"After all, it was a good bargin!" 彼女の鮮やかしい笑顏の中にその言葉がありありと讀まれる。

そして私はとぼとぼと波止場を出て、さて何處へ歸るつもりなのか？ 山手の家には既にきのふまで使つて居た寢臺も椅子も机もなく、懷にはもう一錢の金もない。私は終日横濱の街をうろつき歩く。たまたま途上でニーナのやうな若い西洋の女に遇へば、私の心は遠く八重の汐路を分けて、彼女の船を追つて行く。人はどんなに落ちぶれても生きてゐるうちは戀に似た物が心の底にあるのだと見える。金があるなら私は汽車で神戸へ行つて、今一度彼女に會ひたいとも思ふ。さうだ、會はうと思へばまだもう二度は確かに會へる、神戸でも追ひ着けるし、長崎でも、……私は更に停車場まで行つて見る。そして急行列車の時間表や賃金表を調べたり、待合室の壁に懸かつた地圖の上にある線路を指で辿つたり、そんな事をして日が暮れる迄の數時間が空しく過ぎる。やがてぐつたり疲れ切つて私はベンチに腰をおろす、――さうだ、もう今夜からは宿なしなんだと思ひながら、――

此の二つの筋書のうちで孰方が私にふさはしいだらうか？そんな事をお前に聞いたつて「私の知つた事ぢやないわよ、」と云ふかも知れない。「まあ馬鹿々々しい、そんな妄想の話なんか孰方だつていいぢやないの。」――お前がさう云ふなら成る程それもさうだとして置かう。實際私にだつて孰方でもいい事なんだが、しかし斯うして生きて行くにはせめ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てそんな妄想をでも眞しやかに取り扱つて見なけりやならない。それを孰方でもいいと云ふなら、全體私と云ふものが生きて居ようと居なからうと孰方でもいいと云ふ事になる。――實際それもその通りかも知れないんだが、――

四

ゆうべ私はニーナを誘つてゲイティー座へ活動寫眞を見に行つた。ゲイティー座と云ふのはお前も知つてゐるだらう、いつぞや亞米利加の何とか云ふヴァライエティーの一座が來た時にお前と一緒に見に行つたことのある、ユニオン・チャーチの向う側の淋しい街の角にあるあの古めかしい小屋なのだ。はるばる東洋の此の開港地へやつて來て生活を營んでゐる外國人の娛樂のために、ずつと以前に造られたものなんだが、今では何となく時代のついた建物になつて、此の間の地震の時など外圍ひの煉瓦にひびが入つたとか、家が歪んだとか云ふ噂が立つたくらゐだつた。そしてその後破損の箇所を修繕したりして、此の頃では毎週火曜日と金曜日に活動寫眞をやつてゐる。いつも晚の八時から始まつて、ちよつとした一二卷物に五六卷のフィーチュア物を一つ出すだけで、十一時頃にはおしまひになる。觀客は殆んど西洋人が重だから、音樂ばかりで說明はつかない。先には大活の寫眞を出してゐたやうだつたが、此の間日本にパラマウントの支社が出來てからそことと提携したらしく、近頃出すものはみんなパラマウントの映畫ばかりだ。さう云つたらお前はきつと「あらいいわねえ!」と云やしないかね? お前はビーブ・ダニエルが好きだつたね、ベティー・コムソンや、グロリア・スワンソンがお氣に入りだつたつけね、――さう、私もお前と同樣にあの女優たちが最負なのだ。それからあの、衣裳と道具に出來るだけの贅を盡して派手な映畫を作る事の好きな監督のセシル・ド・ミル、――あの連中はみんなパラマウントに居る。そして此の頃のあの會社は、日本に支社を出したばかりで廣告の爲めでもあるだらう

が、なかなかきれいな優秀な繪を送つて來る。私が行つた晩の出し物は「ア・フェイアス・オブ・アナトール」だつた。監督はセシル・ド・ミル、俳優はウォレース・リード、グロリア・スワンソン、それにビーブ・ダニエルも出て居る。

その晩、實は私は、ミセス・Wが午後から鎌倉の或る日本人の別莊へ呼ばれて、二た晩ばかり留守になることを四五日前に聞いてゐたので、夜になつたら一つニーナを活動寫眞へでも誘つて見ようと、内々樂しみにしてゐたのだつた。「何がそんなに樂しみなの？ 活動寫眞へつれて行つてどうする積りなの？ お金もない癖に！」――さう云はれると恥かしいが、別にどうする積りだつたと云ふのぢやない。今の私が女に對して妄想の外に實行出來る事と云つたら、活動寫眞を一緒に見物するくらゐが落ちなんだから、ほんのたわいのない事だけれどそれでも私には樂しみなのだ。――斯う書いて來ると、私は以前お前と一緒によく見に行つた帝國館やキネマ倶樂部や金春館の時分の事を想ひ出す。私の隣に腰かけてゐたお前の姿とあの時分に見た映畫の中のさまざまな光景、――森や、山や、野や、川や、美しい市街や、立派な室内や、その中に動く女優や男優や、それらのものが記憶の中で全く一つの世界に融け込み、あの女優どもの一人々々がみんなお前のお友達であつたり、あの森や野がお前と二人で遊び廻つた場所であつたり、あの室内の帳のかげのクッションの上に、お前の据わつた皺の痕が殘つてゐたり、……何だかそんなやうな氣がしてならない。私はいつもさう思つてゐる、映畫と云ふものは人間が機械の力で作るやうになつた精巧な夢だと。人は最初に酒を作り、音樂を作り、詩を作り、そして最後に夢を作ることに成功したのだ。その機械が出來るまでは我々はただめいめいが、自分一人の夢を持つに過ぎなかつた。それが今では、その機械のおかげで多勢が一つ所に集まつて一つの夢を持つことが出來る。そこにあるものは此の世のものの影に過ぎず、さてその無數の影どもはそのまま見る人の頭に巣喰つて、そこで再び他のいろいろな影どもと交錯し、妄想の中で又新たなる夢を育む。何處までが映畫の中の夢であり、何處までが自分自身の夢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であるやら、その境界は遂にボンヤリして分らなくなつてしまふ。私の記憶の國に於いてはお前もビーブ・ダニエルもグロリア・スワンソンも私自身も、みんな一つ映畫の中に生きて動いてゐる。お前はカレン・ランディスと腕を組み合つて、ハリウツドの町通りの或る並木路を歩いて行く。二人はとあるパン屋の横丁を右へ廻る。――ああ、あの曲り角のパン屋の店を何の縁で私は見たのであつたか、どうしてそれを覺えてゐるのか？――パン屋の店からひよいと私が顔を出して二人を見送る。――お前と私とがあるホテルの食堂にゐる、隣りのテーブルヘタルマツヂの姉妹が三人ぞろぞろ連れ立つてやつて來る。「おお早百合さん、暫くでしたね、」とノーマが云ふ。コンスタンスとナタリーとが私の方を振り返つてニツコリする。……

私が映畫を見に行くのは美しい夢を買ひに行くのだ。そこへ女を連れて行くのは、その女をもその夢の中へ織り込んで見たいからだ。……

ところでお前はあの「アナトール」の寫眞を見たことがあるかね？　あれはシュニツツレルの原作からヒントを得たと斷つてあるが、故意か穿き違へか、何處を搜してもシュニツツレルらしい所は微塵もないのがお慰みだ。成程アナトールだのマツクスだのと云ふ同じ名前の人物は出て來る、が、それが悉く快活なるヤンキーの青年で、のんきで、贅澤で、金があつて、年が年中芝居へ行つたり旅行をしたり大宴會を催したり、美しい女房を可愛がりながらその合間には女優を追つかけたり田舍娘に惚れて見たり、そして最後は「めでたしめでたし」で夫婦仲直りに終るんだから、何の事はない「亞米利加紳士榮華物語」の卷なのだ。「だから亞米利加人は頭が惡い、彼奴等には藝術は分らない」なんて、――しかし、そんな事を云ふのは云ふ方が野暮ぢやないかね。私に云はせればそこが亞米利加人の痛快なところだ。憂欝な墺太利のアナートルが一と度び大西洋を越えると忽ちやんちやんなお坊つちやんになる。シュニツツレルでござれデューマで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どされパルザックでどされ、何でも彼でも滅茶滅茶に自分たちの氣に入るやうに直してしまふ。あれをシュニッツレルの原作だと思ふからこそ腹も立つけれど、亞米利加人が金に飽かして出來るだけ多くの美女を集め、出來るだけ仰山な、——殆んど突飛と云つてもいい程素晴らしい衣裳や道具を使つて、思ふ三昧贅澤な遊びをして、それを寫眞に取つたのがあの美しい夢となつてわれわれの前にあるのだと思へば、もう夢としてそれ以上のものはなからうではないか。私はあれらの映畫を見ると、つくづく亞米利加と云ふ國は現代の羅馬帝國だと思ふ。その國民は今や有頂天になつて歡樂の限りを盡してゐる。そしてあれらの眼の眩むやうな絢爛なフィルムは、その帝國の富の力が作り出す偉大な夢だ。

………わたしとニーナとは後ろの方の椅子に並んで腰かけてゐる。私の前には大勢の客の頭が暗い中にもくもく重なり合つてゐる。淺草あたりの常設館だと可なり騷々しいのだが、此處の觀客は非常に靜かだ。重なり合つた幾つもの頭が墓場のやうにひつそりしてゐる。それらの黑い墓石の間にレディーたちの圓く肉を盛り上げた露はな肩が、夜目にも青白くまぼろしの丘のやうにも見える。私の鼻は彼女たちの肌の匂とも香水のそれとも分らぬほのかな甘い薫りを感ずる。もうその時に私は半ば夢を見てゐる。…………私は何處か、遠い陰府(よみ)の國に來て、死滅の谷をさ迷つてゐるのではないか。自分の周圍にあるものは無數の過去の人影と青白い幽靈ばかりだ。……と、その時一つの明るい生き物が、私の頭の上を掠めて鋭く強く燃えながら走る。そして突きあたりの闇に打つかつて人魂のやうにゆらゆらと炎を上げる。ああ、あの炎だけが生きてゐるのだ、私はさう思つて一心にそれを見つめる。炎は次第に光を整へ、そこに何尺四方かのカツキリとした「白晝」を作る。白晝の中にパラマウントのマークが出て來る。次いで美しい青年のアナトールが現はれる。

「ああ、あれはウォレース・リードだね、」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、ニーナが低い聲でささやく。

「うむ、………」

と、私はかすかに、空想の緒を切るまいとして上の空で答へる。が、一瞬間、矢張りその緒はぷつりと斷たれる。それはニーナの罪でもあるがウォレース・リードの罪でもある。さう、あの役者はウォレース・リードだ。今亞米利加のスクリーン界で賣れ兒の二枚目、男のヴンパイアと云はれるウォレース・リードだ。だがあの男の顏の感じには何處か私の空想とそぐはない所がある。まどろみかけた私の夢を破らうとするものがある。「少し眼尻の下つてゐるのが氣になるな。」と私は思ふ。それに眼つきにも口元にも何だかイケスカナイ所がある。色男なのは差支へないがあんな俗惡な色男はいけない。いくら亞米利加のアナトールでも上品でなくつちや困る。同じ二枚目でもルドルフ・ヴレンチノだつたらばよかつたらうに。」――アナトールは妻の化粧の出來上るのを待つてゐる。彼女の化粧はなかなか手間が取れるらしい。待ちかねた彼は妻のブウドワアルを覗いて「早くしないか」と催促する。ブウドワアルが現はれる、ロング・ショットで向うに一人の女が跪いて居る。が、それはアナトールの妻ではない、黑地の服にエプロンを着けた召し使ひである。彼女の横に衝立があつて、その衝立の陰から出てゐる白い柔かいうねうねしたものを、召し使ひは膝の上に載せながら、兩手で研いてゐるのである。………白い柔かいうねうねしたものは彼女の手の中で頻りに動く。蛇のやうに、鰻のやうに、體に波を打たせて動く。それは女のはだかの足なのだ。アナトールの妻が、衝立の陰で足の爪を研かしてゐるのだ。

あゝ、あの足、………あの足には覺えがある。…………と、私は思ふ。あれはグロリア・スワンソンの足だ。さう、私は前にもあの足を見たことがある、或る海水浴場のホテルで。……さう、それはいつぞや電氣館でやつた「何故妻を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

換へるか?」の寫眞だつた。……彼女はそのホテルの中庭にあるコンクリートで造られた四角な水浴池のほとりに居た。明るい夏の午後のことで、池のまはりを派手ないろいろの海水着を着た大勢の男女が通つて行つた。彼女は一と際花やかな、例のド・ミルの物好きな趣味をよく現はしたけばけばしい海水服を纏つて、同じやうにけばけばしいパラソルで顔を隠して何かの上に腰かけてゐた。人が居ると云ふよりはまるで大きな薔薇の花が一輪咲いてゐるやうに見えた。そこへそのホテルに泊り合はせた彼女の以前の夫がやつて來る。トーマス・ミーアンがその役をしてゐる。彼は立ち止まつて、嘗ては自分の妻であつたその薔薇の花を、輕い驚きの眼を以て今更のやうに振り返つて見る。彼女は見られまいとして意地惡くもパラソルを男の方へさし向ける、が、いくら體をちぢめてもパラソルの下からこぼれ出るなまめかしい足の形は隠すべくもない。男は僅かにその足を眺めただけだが、もうそれだけで未練の情が湧いて來る。男の洩らす溜息と共に彼女の足の大映しが出る。……私はその時あの足を見たのだ、トーマス・ミーアンと一緒に見たのだ。今あの召使ひが膝の上に載せて居るあの足を。……そして再び、ここでもその足の大映しが出る。「ド・ミルは女の足を映すのが好きなんだな」と私は思ふ。私と趣味を同じうして居るド・ミルが一層好きになる。召使ひは爪を研ぎ終つて今度は絹の靴下を穿かせる。衝立の蔭からその美しい足の持ち主が顔を現はす。いつもの通り額の上に垂れ下げてゐる飴のやうにねつとり光つた柔かい髪、やや東洋的な感じを以て横に細長く切れた眸（まなじり）、そしてそれ故に猶更どんよりと夢見るやうに思はれる潤んだ瞳、……さうだ、あのグロリア・スワンソンだ、……

妻に飽き足らぬアナートルは紐育の夜の燈火にあこがれて目ぼしい女を漁りに行く。彼を載せた自動車は暗い所から吸はれるやうに賑やかな街の灯影を慕つて行く。カフエエの前を通る、料理屋の前を通る、寄席や劇場の前を通る、……萬朶のイルミネエションが倒しまに映つてガラスのやうにつやつやと光つた路面を滑かに走る。"Cabaret de……"

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何とかと記した酒場のやうな劇場のやうな入口の前で自働車が停まる。中へ這入ると舞臺がそのまま食堂となり踊り場となり酒場となつてゐる。そこに居るものは賣春婦も貴夫人も紳士も女優も踊り子も區別はない。みな一樣に恥を忘れて杯を擧げて舞ひ狂ふもの、一つの杯に二つの唇を吸ひ寄せるもの、嫉妬に燃えて倒れ伏すもの、テーブルに凭れて媚びを賣るもの、ただ燕尾服と白い人魚との入り亂れた一つの交響樂のやう、……アナトールが或る踊り子と話をしてゐる、後ろの方では舞臺で踊りが始まつてゐる、一つの背景が舞臺一面を扇子のやうに横に疊まれて、その向うに黑い天鵞絨の帷を垂らした夜の背景が現はれる。暗い中に一人の女の裸體の彫像が聳えてゐる、ブリユウトーンの調色の加減で全身が燐のやうに青白く、猫の毛のやうにかがやいて見える。大理石？　石膏？　それとも實はさう見せて體中を眞つ白に塗つた生きた女？――　彫像は礎石の上に橫向きに据わつて、片手を宙にさし出してゐる。眞つ暗な空から金粉のやうな細かなものが、電氣仕掛けでキラキラと閃めきながらその手の上に落ちて來る。……

「何と云ふ綺麗な繪だらう、ワンダフリー　ビユウティフル！」

ほつと息をして、ニーナがかすかに身じろぎをしながら口のうちで云ふ。

「さうだ、夢よりも美しい」と、私は心の中で答へる。――アナトールはその踊り子と戀に落ちる、私たちは彼と彼女とを或る一軒の家で見出す、彼女はそこに閉はれて夜な夜なアナトールとの逢瀨を樂しむ、が、夢よりも美しい彼等の戀は夢よりも果敢なく消えてしまふ。女はありし日の花やかな生活を忍んで、前の情夫から卷き上げた數々の寶石を取り出して見る。簞笥の中から天鵞絨の小筐が澤山に出される。筐の裡には白襦子の天地の間に挾まつた眩いものがぎらぎらと光の綾を呼吸してゐる。……昔の女友達や情夫が訪ねて來る。アナトールとの喧嘩が始まる。彼は怒つて部屋中の家具を滅茶滅茶に叩き壞す。……

……アナトールの戀の相手は次ぎから次ぎへ變つて行く。私の頭上を彗星のやうに尾を曳いて走る映寫機の光芒の中から、相手の女が代る代る跳り出て來る。そして最後に、フイルムの卷物の奥深くに秘められてゐたビーブ・ダニエルが「誘惑の魔の女王」として孔雀のやうな歩みを運ぶ。彼女は一人の女優となつて或る劇場の舞臺裏に居たのだ、亞米利加隨一の男のヴンパイアはそこで最も物凄い女のヴンパイアに出で遇ふのだ。彼女の姿が現れた瞬間、私は私の頭上を走る映寫機の光芒が俄かに太さと明るさとを増して、一道の幅の廣い火の柱となつたのを感ずる。なぜなら彼女の全身は雪のやうに白く透き徹つて居るからだ。衣裳も顔も手も足も凡べてが眞つ白で、それを射徹す強い光線がスクリーンの面へ銀のやうに燃え上るのだ。私は振り返つて傍のニーナを見た、と、ニーナの顔がその銀色の反射を受けて闇に浮き出て居るではないか。ビーブ・ダニエルの白い體は白日が降るやうに降つて來たのだ。あゝニーナ！　お前の姿は今あの亞米利加のヴンパイアの肌の光明に包まれてゐる！　彼女の白い靈魂がお前の上に照り渡つてゐる！……

ふいと、その時一つの考へが私の胸の中に浮かぶ。今此のスクリーンの上で銀蛇のやうに燃えてゐるもの、あの白日の源を成す一人の女は、ビーブ・ダニエルと呼ばれる亞米利加の若い女優ではないか。私は彼女が嘗てはハロルド・ロイドと共に飛び廻つて、輕い喜劇を作つてゐたのを知つてゐる。そして恐らく彼女の日常生活も、あれらの喜劇と大差のない明るい快活なものであらうと想像する、が、彼女の影が此處に銀色の光を放つて動いてゐる瞬間、影の向うにある本體の彼女は今何處に居て何をして居るだらう？　あの眼は何を見て居るだらう？　あの唇は何を語り、あの足は何處の土の上を蹈んで居るだらう？――すると、私の空想は此の地つづきの遠い果てにある彼女の許へ飛んで行き、彼女の家の扉を叩き、微風のやうに彼女の部屋の窓かけを上げる。地球の反對の側にあるその國では、もう今頃は夜が明けてゐる。彼女の住んでゐる常住の春の國たる南の地方では、空が青々と晴れ渡り、爽やかな朝の太陽がカツキリとバンガロ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ウの軒にさし込み、庭の緑の樹々の間を小鳥が楽しげに囀つてゐる。寝坊な彼女はその小鳥の聲を夢うつつの境に聞きながら、まだすやすやと溫かい寢床の中に眠つてゐる。私の心はこつそりと彼女の閨へ忍び込んで、その安らかな寢顏をうかがひ、柔かな胸の息を感じ、長い睫毛のおののきを眺める。「おお、お前がビーブ・ダニエルだね、」と、その時私の心は云ふ、「お前は今、朝の光につつまれて此處に靜かに眠つてゐる、だがたつた今お前の影は遠い夜の國へ渡つてゐるのだ。そこではお前のその白い體が一つの靈魂のやうに照つてゐるのだ。私はお前の戀人を羨むまい、なぜなら私はお前の肌にこそ觸れないけれども、その夜の國でお前の肌から放たれる眩い光に接吻する！」

アナトールと彼女の戀が暫くつづく。……しかし私は正直のところ此れから後の話の筋がどんなであつたか覺えてゐないのだ。覺えようともしなかつたのだ。いつもいろいろの妄想を起す私の頭は、そこに現はれる彼女の幻を追つてゐるうちに、知らず識らず話の筋とは關係のない自分勝手なさまざまな夢を作り上げる。そして今でも私の記憶に殘つてゐるものは、その場その場の世にもなまめかしい彼女のしぐさの一つ一つ、ぱつちりとした愛くるしい眼つき、媚びを含んだ口もとの微笑、「男たらし」の名に背かない淫蕩らしい手足のしな、監督のセシル・ド・ミルがいやが上にも意匠を凝らした、眼を驚かす服裝の美々しさ、――それらのものが全く前後の脈絡もなく、一つ一つ永遠の美の形を以て私の心に封じ込まれてゐるばかりだ。或る場面では彼女の體は幾筋もの寶石の粒で飾られてゐた。その姿は今でも私に、無數の泡が吸ひ着いた海中の白珊瑚の枝を連想させる。或る場面では彼女は章魚の衣裳を着てゐた。長い十本の腕のある衣が肩から垂れてしなやかな手足に絡まり、その凄じい怪物に抱かれた彼女の胴體は、翅をひろげた蛾の腹のやうに喘ぎつつかがやいてゐた。そしてここでも、物好きなド・ミルは彼女の足を大映しにした。彼女は甘へるやうにアナトールの膝に腰かけ、片手で男の首をかかへつつ靴を穿かして貰ふのである。……その時その足はつい二三尺の近さに迫つて、私の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

顏を踏むやうにさへ覺えた。私はグロリア・スワンソンのそれと同じく前に度び度び見たことのある彼女の足を、うすい靴下の絹の上から再び見た。……

あゝ、こんな事をいつ迄書いたつて切りはないのだと私は思ふ。又パラウマントの映畫ではないが此れこそ「戀人の樂園」に過ぎない。だが、私の過去の可愛らしい早百合子よ、私は今、ひとり夕ぐれの窓に凭つてゆうべのそれらの幻を一つ一つ、こつそりと頭の中から取り出して考へてゐるのだ。私の眼はぼんやりとたそがれの庭に群がる蚊柱を見てゐる。……

まあ何と云ふ暑い晩だらう。ニーナは何處へ行つたのか、三時頃に出かけたきり歸つて來ない。

五

その後は御無沙汰してしまつたね、新聞で見るとお前たちの劇團は此の間から旅興行に出かけたやうだね。お前は今何處に居る？　信州？　越後？　それとももう青森を打つて北海道の方へ乘り込んだ時分かね？　若し此の手紙を出すとすれば何處へ宛てて出したらいいのか、札幌の△△座へでも出して見ようか、——

あれから半月ばかりの間、妙にごた〳〵して氣持ちが落ち着かなかつたので、私はハガキ一本も書く氣にはなれなかつた。今日は久し振りで机に向つて見るのだが、しかし、今かうして此れを書いてゐる部屋は、あの山手の家の部屋ではない。實は彼處を引き拂つてから今日で一週間になるのだ。どうせ私の事だから引つ越しをすると云つたつて造作はないんだが、そんなこんなでつい御無沙汰してしまつたのだ。

今度の住居も先のところからさう遠くない山の上にある。此の近所で訊ねれば直ぐに分る大きなアパートメント・ハ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ウスだ。煉瓦造りの、三階の建物が二た棟になつてゐる家で、前の方に相當に廣い空地がある。そこは西南の側が高い崖なので、天氣さへ好ければ根岸から本牧の方の海が一と眼に見渡される。私はよく、まだ先の家に居る時分に、夕方になると此の近所を散歩したものだが、鐵の門の中にあるその空地ではいつも子供たちが自轉車などを乘り廻して遊んでゐた。それは大概そのアパートメントに泊つてゐる外國人の子供たちなのである。夏のせゐでもあるだらうが、みんな素肌にたつた一枚の裾の短かい服を着て、膝頭の上の方まで飛び出てゐるのに靴下も穿かないで、はだかの脛をむき出しにした儘、ひどいのになると下駄を穿いてゐるのさへあつた。その服と云ふのも極く粗末な縮みか何かの、ピンクかダリーンの派手な色の褪めかゝつた奴で、髪をバラバラに振り亂した女の兒などがバンドを締めてそれを着た恰好を遠くから見ると、とんと繪に畫いた寒山拾得の形だつた。そしてその中には十六七かと思はれる年頃の娘なども交つて居た。彼等はいづれも營養不良のせゐでもあらうか、痩せて血色が惡くて、顏の輪廓や骨格から判斷すると歐洲種に違ひないが、皮膚の色が黒ずんでゐる上に、腕だの脚だのに疥癬のやうな紅い細かな吹き出物があつたりして、日に燒けたのか、垢でよごれてゐるのか、それとも有色人種との合の子なのか、何にしてもみすぼらしい哀れな樣子は、活動寫眞や小説にあるジプシイだの漂流の民だのを連想させた。「きつと此の子供たちの家族も西伯利亞あたりから逃げて來たのぢやないだらうか。」と、私はよくさう思ひ思ひした。露西亞人でもないやうだけれど、戰爭以來あの地方に流れ込んでゐた歐洲の片田舍の國々の人々、波蘭士とか、チエツクとか、バルカン半島の諸國とか、そんな所の、まあ火事で燒け出されたと同然な不幸な種族であるらしかつた。遊びながらわいわいしやべつてゐる言葉を聞くと、勿論英語でもないし、佛蘭西語でも獨逸語でもなささうだつた。私は屢々門の前に立ち止まつて、その子供等の遊んでゐるのを物好きな眼で眺めたりしたが、殊に私の注意を惹いたのは前にも云つた年頃の娘たちである。その中に一人、まだやつと十

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五ぐらゐの、低能兒かと思はれる女の子がゐて、それがいつも乞食のやうに入口の石段に腰をかけて、菓子などをたべながら、ぼんやり表を見てゐるのが一と入私には哀れだつた。歳の割りにはせいが高いのに、多分二三年も前から一つ物を着てゐるのだらう。十二三の子供が着さうな、つんつるてんの靑いちぢみの服の上に革のバンドをしめて例の素足に下駄をはいて、その子が一番不潔らしい貧しいなりをしてゐるのである。のつぽな體に不釣合な服の加減で腕だの脛だの肩先だのの瘦せた工合が傷々しく人目を引き、皮膚の色も外の子供よりは一層蒼色がかつてゐた。髪はと云へば褐色にちぢれた一と房の毛を、――その毛は割りに長かつたが、――リボンも結ばず、束ねもせずに、お河童さんのやうに垂らして、ぼうぼうと肩の上へ波を打たせてゐる。――何もその娘がどうのと云ふ譯ではないが、その空地のそんな光景が氣に入つたので、若しあの家を引き移るやうな場合があつたら此處へ來て見ようと、私はその當時から考へてゐたのである。

初めて此の家へ部屋借りの交渉にやつて來たとき、「三階の角でよろしければあいて居ります」と云ふ話だつた。そして門番は私をその部屋へ案内してくれた。――例の娘はその時も入口のところで菓子を喰べてゐた。――外から見ても相當に大きな建物だつたが、内部は可なりゆつくりしてゐて、天井も高いし廊下の幅も廣いし、梯子段などは三越や白木のそれのやうな、堂々とした、兩側に手すりのついた、二階へ行くのに中途で一つ折れ曲つた式の奴で、私は三階へ登り詰めるのに息を切らしたくらゐだつた。が、三階と云ふと體裁がいいけれど、實はもうそこはスレートを張つた屋根裏にあるので、日が近いせいか非常に暑い。ちやうど廊下の行き止まりの所に向ひ合つた部屋が二つあつて、左側の方だけがあいてゐるらしく、右側の室で何か甲高い耳馴れない發音が聞えたかと思ふと、突然そのドーアがばたんと開いて、中から金髪をもぢやもぢやに振り亂した、四十恰好の寢間着姿の女が首を出した。而もその寢間着と云ふのが眞つ赤な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

羽二重で、房の下つた長い附け紐を前の方にだらりと垂らして、はだかの足に桃色の繻子の上履を突つかけ、顏にはこてこてと厚化粧をしてゐる。西洋の女のそんな風に取り亂した形は、得て氣ちがひか化け物じみて見えるものだが、何しろ眞つ晝間のことなので私はちよつと度膽を拔かれた。夫婦喧嘩でもして亭主に擲られたのじやないか、さう思つて部屋の中を覗きかけると、女はまだ何かしら罵りつゞけながら、極まりが惡さうに慌てて又ぱたんと締めてしまつた。兎に角大分變つた人種が泊つてゐる所には違ひなかつた。

で、私が今かうして此れを書いてゐる場所は、その廊下の反對の側にある部屋なのである。屋根裏ではあるが天井も窓も充分に高いし、ここにも立派なファイア・プレースがあるし、大きさから云つたら田舍の小學校の教室ぐらゐはありさうで、馬鹿げて廣過ぎるほどなのだ。若し此の部屋に四方の壁を塞ぐだけの家具さへあつたら、きつと見違へるほど堂々たるものになるのだらうが　神田あたりの下宿屋にでもありさうな貧弱なデスクと、そいつと似たり寄つたりの椅子だのテーブルだの寢臺だのと云ふものが、ガランとした中に置いてあるのだから、それらの全體が一層ちつぽけに哀れに見えて、部屋の中に居ると云ふやうな感じがない。まるで往來のまん中に起き伏ししてでも居るやうな氣がする。何でも前に住んでゐた人が此のがらくたを部屋代のかたに殘して行つたんださうだけれど、値段にしたら恐らく三文にもならないだらう。外の物はまあどうやら使へるとしても、寢臺には一番閉口する。マトレスが破れてところどころに藁が飛び出して居て、縞目も分らないくらゐ汚れてゐるのは始めから覺悟の前だつたが、それには南京虫が何十匹となくたかつて居るのだ。私は蚊の方には割り合ひに平氣で、此處は三階のてつぺんだから風通しさへよくして置けば蚊はさら來ないし、アンティ・モスキートーでも塗つて寢れば蚊帳を吊らないでも凌いで行ける。が、南京虫には全く弱らせられてしまふ。今考へると、あの空地に遊んでゐた子供たちの疥癬のやうな紅い細かい吹き出物は、あれはきつと南京虫に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

喰はれた痕なのだ。私も此の寢臺へ寢るやうになつてから、あれと同じ紅いぶつぶつが大分體中へ出來始めた。それにもう一つ困る事は、スプリングが弛んでゐて、ちやうど背中にあたる部分がぼこんと深く凹んでゐるのだ。毎朝眼をさます度びに背骨から腰の周りが妙に痛い、どうも不思議でならなかつたが、此の頃になつてやつと原因が明かになつた。一段低く穴のやうに凹んだ所へ、背中と臀とがイヤでも應でも落ち込んでしまふので、私はいつも、體を蝦のやうに二つに折つて寢てゐたのである。さう氣がついてから私は寢る時に加減をして、成るべくその穴の中へ落ち込まないやうに體をいろいろにずらして見るのだが、やはりどうしても落ち込んでしまふ。ベットの表面が凹みの方へ向つて谷のやうに坂になつてゐるのだから、結局私の體は、寢てゐる間に自然とその摺り鉢の底へはまり込む譯である。おかげでどんなに暑くつても寢返りを打つとか、寢臺の外へ落つこちるやうな心配はない代りに、窮屈な姿勢を取つて居るので始終不愉快な夢ばかり見る。そして明くる日一日、體の節々がズキズキと痛い。斯うなつて來るとベットの善し惡しも大いに心持ちに影響する。一體西洋のベットは日本の寢床に比べるとずつと寢心地がいい筈のものだけれど、こんな特別な奴になると地べたに寢るよりも始末が惡い。その後私は工夫を重ねて、マトレスと蒲團の間に古雜誌だの新聞紙だのを突つ込んで、出來るだけその穴を埋めることに成功した。今でも毎日古雜誌と新聞紙の位置を取り換へて、少しでも寢工合をよくする事に苦心して居る。だんだんと研究の結果、まあそのうちには差支へのない程度に改良されるだらうと思つてゐる。

要するに此のアパートメントは中流階級の人々が、此れだけの部屋へ相當な家具を据ゑ付けて小綺麗に住まはうと云ふのには至極適當な場所なのだ。どの部屋にも必ず專用の湯殿と臺所と便所があつて、瓦斯も水道も來てゐる。食堂、寢室、居間と、中には三つぐらゐ續いた貸し間もあるのだから、五六人の家族でも住んで住めないことはない。ちよつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と此れだけに完備したアパートメントは東京あたりにはなささうに思ふ。今住んでゐる連中も大概子供のある夫婦者で、獨り者はまあ私だけだらう。午過ぎになると私の部屋へは西日が強くさし込むので、私は一日屋根裏の暑さと戰ひながら、その往來のやうな所へ椅子を据ゑて　自炊生活をつづけてゐる。パンと牛乳だけは毎日配達してくれるので、三日や四日はそれで我慢をすることもあるし、どうかすれば運動がてら支那町の方へ買ひ出しに行つて、臺所の瓦斯焜爐で簡單な煮物ぐらゐはやる。そして何より有り難いのは專用の湯殿のある事だ。此の三階のてつぺんから山の下にある日本人町の湯屋へ行くのは大變な面倒だが、此れがあるので全く助かる。湯殿と云つても狹いトタン張りの流しに、瀬戸の剝げ落ちた、赤く錆びた西洋のタツブが据ゑてあるだけだけれど、私は三日に一遍ぐらゐは風呂を沸かすことにしてゐる。億劫な時には水風呂に漬かる。たつた獨りで、三階の窓の外を行く白い雲を眺めながら、悠々とタツブの底に足を伸ばしてゐる氣持ちは一種特別だ。ただ殘念なのは赤錆が湯に融け込んで變な色になる事だ。此れで此の水が透き徹つてさへゐたら申分はない、恐らく箱根の溫泉へでも行つてるやうな氣になるだらう。……

「それはさうと、一體ニーナと云ふ女はどうしたのよ？　もう上海へ行つてしまつたの？」

さうだ、お前はさう云つて聞くかも知れない、あの女の事に就いてはあれきり何も云はなかつたからね、――實は私はもう何もニーナの事を云ひたくないのだ、云へばお前に笑はれるだらうし、又笑はれても仕方がない、――自分でも自分の馬鹿らしい事は分つてゐるのだ。どうせ私の役廻りはいつも道化役に極まつてゐる、女にかけては年が年中三枚目だ。と、さう云つたらお前も大概察しがついて、聞かないうちから私のしよげた顏つきを見て吹き出すだらう、――お前のクスクス笑ふ聲がちやんと私には聞えて居るよ。――だから猶更何も云ひたくない、「萬事お前の推量に任せる。」と、まあさう云つて置きたいところだが、毎度の事で別に珍しくもないのだから極まりの惡いのを我慢して打

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち明けてしまへば、あのニーナと云ふ女には男があつたのだ。勿論それだからどうと云つて、私が彼女に不服を云ふ筋は少しもない。ないからますます馬鹿々々しい話なんだが、一と口に云へば私が獨り相撲を取つたと云ふ事になるのだ。

ニーナは毎日午後になるとおめかしをして何處かへ出て行つた、――それが今考へると、男の所へ通つてゐたのだ。それを氣が付かずに居るなんて全く迂濶なやうだけれども、何しろその男と云ふのが一度も影を見せないんだし、私としてはついあの女を自分の妄想に都合のいいやうに考へたかつたもんだから、いつの間にか獨り者だらうと思はせられてゐた譯なのだ。のみならず、あのゲーテイー座へ行つてから以後私は度び度びニーナと一緒に散歩にも出たし、話をする機會もあつたのに、彼女は一遍もそんな素振りを見せなかつた。尤も自分に男があると云ふ事を、私が改まつて尋ねでもしたら知らないこと、何も殊更云ひふらす必要はないかも知れない。しかしそれにしてもけぶりぐらゐは見えてもよささうなものだつた。或は見えてたにも拘らず、私の方の眼が盲んでゐたのかも知れない。――と、此處まで書いて來ると、もう少し極まりの惡い所まで白狀しなければならなくなつたが、實のところ、私はあの以後ニーナの爲めには可なりこまこました犠牲を拂つた。それは決して彼女の方から強ひたのではない、私が進んでさう云ふお勤めをやらせて貰ふやうに望んだのは事實だ、「やらせてくれと云ふのならそれは誠に有り難い、篤志な事だ、ではやつて貰ひませう。」さう云ふのが彼女の態度であつたし、それでも私には愉快だつた。一例を擧げると私は時々、彼女の汚れた白靴が廊下などへ置いてあると、先づ自分の靴を研いて、そのついでのやうにして彼女の靴へもクリームを塗つてやつた。彼女は最初は「そんな事をするには及ばない、お前に濟まない。」と云つた。二度目には「ほんとうに氣の毒だ、有り難う」と云つた。三度目にはただ「有り難う」になつた。そしてしまひには私がせつせと研いてゐる間、用もないのに自分は部屋へ閉ぢ籠つて知らない顔でゐるやうになつた。わざと私の眼につく場所へ汚れた靴が置いてあることもあつた。「ミ

スタ・エモリ！私は今日は忙しいからちよつと研いて置いておくれ、」と、彼女の方から云ひつけるやうにさへなつた。その外毎日のやうに催促にやつて來る食料品屋、自働車屋、洋服屋、小間物屋などの借金取りに、居留守を喰はせて私が代りに云ひ譯をすること。三度に一度は立て換へること。一緒に散歩に出て飯を喰ふこと。活動寫眞を見ること。それらの勘定は私が拂ひながらやゝともすると彼女からも第三者からもガイドなみに扱はれること。――まあそんなやうな細かな事だが、凡べてが靴研きと同じ呼吸で、始めは此方からしてやつてゐるうちに、彼女の方でも結局便利だものだからだんだん圖に乘つていい氣になる、私を使ふのが當り前だと思ふやうになる。私は私で大いにそれを光榮として云ひ付けられれば何でもいそいそと用足しをする。たまに原稿料が這入るのを樂しみにして、それを大事に取つて置いて彼女の笑顔を買ふ爲めに提供する。私は自分の生活費にまで事を缺いて、ナケナシの小づかひを全部その方へ注ぎ込んでゐた。次ぎの週の何曜日に活動へ行くとか支那料理を喰ふとか云ふやうな約束をすると、五圓や十圓はどうしてもいるので、ヒド工面をしてもその日までに金を作つた。

それではそれの報酬として彼女から何を得たかと云へば、今も云ふ通りただ彼女の笑顔を得ただけ、彼女と一緒に物を見、物を食ふ愉快を得ただけ、それ以上の事は私は始めからあきらめてゐた。そんな資格のない事は分つてゐたから、何も望みはしなかつた。ではそれでいい譯ぢやないか、不服を云ふところはないぢやないか、――さう云はれれば成る程さうだと云ふやうな氣もする。つまり今日ではナケナシの小づかひを提供するにも相手が居なくなつたので、それが淋しいのに過ぎないかも知れない。で、ちやうど今から一週間ほど前の事だつたが、或る日の夕方彼女は一人の露國の將校と連れ立つて歸つて來た。そして家に居たミセス・Wと二人で何か機嫌よく笑ひ話をしたりして、ヹランダで暫く涼んでゐた。尤も、その將校はその時普通の背廣服を着てゐたので、太つた立派な男だとは思つたが、私が彼を帝政時代

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の武官だと知つたのは、彼が歸つてから後のことなのである。

「あの人はジェネラル・セミョノフの友達なんだよ、そして陸軍少將なのだよ、私は近いうちにあの人と一緒に上海へ行くのよ。」

と、ニーナはその晩ふいとそんな事を云つた。

「それぢやミセス・Wは？」

「彼女も一緒に、」

明くる日になると又その將校がやつて來た。四十恰格の、非常に快活なあいそのいい男で、ヹランダで私に會ふと直ぐニツコリして手をさし出した。

「私はあなたにお目に懸るのを喜びます、あなたの噂は始終ニーナから聞いてゐました。あなたは大さうあれに親切にして下さるさうで、——」

その男がそんな事を云ふ間、ニーナは傍に立つてにやにや笑つてゐた。

一時間ばかり私は彼等と話してゐたが、それで萬事が明かになつた。二人の馴れ馴れしい素振りでもつてその間柄を讀むのには充分だつた。その將校は本牧の方に住んでゐて、ニーナはいつも會ひに行つてゐたのである。だが、一體私に分らない事はニーナは私を翻弄してゐたのか、或ひは正直な人の好い女で、一圖に私の親切を信じてゐたのか、何分相手が西洋の女でもあり、片言交りの英語で話をするのだから、その邊の心持ちが甚だ明瞭を缺いてゐる。此れはその後近所の車夫が勘定を貰ひに來た時に聞いた事だが、「此處の若いお孃さんに旦那がある」と云ふことは、彼女自身も隱しては居ず、出入りの商人もみんな知つてゐたらしかつた。現にその將校は今年の春まで此の家の二階に同棲してゐて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏の間だけ、涼しい本牧の海岸に日本の家を借りて移つたのだと云ふ。だから彼女も私がそれを知らない筈はないと思つてゐたかも知れない。知つてゐながら親切にする、馬鹿な男だが別に損にもならないから、まあ好い加減に相手になつて置いてやらう――さう云ふ腹で居たのだとすると、ひどくづうづうしい女のやうにも見えて來る。いくら彼女だつて、私の心の中に純粋な親切だけでない何物かがあると云ふ事は、まさか感じない筈はなからう。しかし「男の親切なんて要するにみんなさうなんだから、それを出來るだけ利用するのが若い女の特權なのだ。それは當り前の事だ。」と云はれれば、たしかにそれもその通りで、彼女はづうづうしいのでも何でもない。そしてその後も相變らずニコニコして私と話をするのである。

「あの陸軍少將は今どうして暮らしてるんだね？　何か職業があるのかね？」

「今はなんにも職業がない、だから貧乏で困つてゐるけれど、もう直き戰爭が始まればお金が儲かるんだつて。」

「もう直き戰爭が？――何處で始まるんだらう？」

「西伯利亞で。……ジエネラル・セミヨノフが又近いうちにボリシエヰキと戰爭をするんだつて。」

「だが、戰爭でお金が儲かるつて云ふのはどう云ふ譯かね？」

「どう云ふ譯だか知らないけれどさう云つて居たつけ。それであの人はその方の用事があるので上海へ行くのよ。」

そんな話があつてから二三日立つて、彼女たちはあの家を引き拂ひ、私はここへ移轉することになつてしまつた。いつ何日の船で立つとか、それまで何處に泊つてゐるとか、ニーナは私に聞かれると一々數へてはくれたけれども、引越しの日の彼女の素振りは何だか妙に冷淡だつた。「もうこれつきりやつて來られては困る」と云ふ風をありあり見せてゐるやうに思へた。家具をオークションに出すとか云ふので、例の將校も手傳ひに來て、何くれと指圖してゐた。その時

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は知つたことだが、ニーナの寢室にあつた箪笥の中には、その男の冬の衣類が二つ三つしまつてあつた。彼もその日かぎり本牧の家を引き拂つて、彼女と一緒になるらしかつた。

私はそれきりニーナには會はないのである。多分今頃は三人とも上海へ行つてゐるのだらう。……私が馬鹿を見た話はざつと以上の如くなのだ。欺されたのではないかも知れぬが、やはり欺されたやうな氣がして、――それも非常に巧妙に、うまうまとやられたやうな氣がして、すつかり力拔けがしてしまつた。

私は又獨りぼつちになつた。もう何をする元氣もない。おまけに此の間ぢうの無理算段の借金が祟つて、當分の間ただで原稿を書かなけりやならない。又恐ろしい貧乏が見舞つて來る、泣きッ面に蜂だ。お前はたんと笑ふがいいが、私の身になつたら決して笑ひ事ぢやないのだ。

人は食ふや食はずでも生きて行かれないことはないが、心に憧れの的を持たずには生きられない。一體まあ、此れからどうしたらいゝのだらう。……

六

私は三階の窓に凭れて外を見てゐる。窓の向うには、狹い空地を隔ててアパートメントの他の一と棟が聳えてゐる。暑いのでみんな窓が明け放されてゐるもんだから、――暑いと云へばもう九月になつたのに土用のうちとちつとも變らない、全く例年にない事だね、――一階や二階に住んでゐる哀れな外國人の生活のさまが覗はれて、見てゐるとなかなか面白い。室内の樣子は薄暗いのでよく分らないが、どの部屋も私の部屋と同樣に殺風景で、目ぼしい家具などは置いてないやうだ。晝間は大低、男は何處かへ出かけて行つて、上さんだの娘だのが留守番をしてゐる。その女たちが明るい窓の所に腰かけて、靴下の穴をつくろつたり、毛絲を編んだり、着物に剝ぎをあてたりしてゐるのが見える。一階の

東側の角から三番目の窓にゐる太つた上さんが、毎日午後になるとオールド・ローズの毛絲の編み物をやつてゐる。始めはそれが何になるのだか分らなかつたが、だんだんと襟が出來、胴が出來、袖が出來て、オーヴースエーターの形になつて行く。上さんはそれを兩手で摘まみ上げて眺めて見たり、胸のまはりへあてて見たりしてゐる。暑いと云つてもいつ急に寒くなるかも知れないので、もうそろそろ秋の支度をしてゐるのだらう。私にはその上さんの顏は見えない、束ねた茶色の髮の毛と、圓々と肥えた肩から背中の肉づきが、三階の窓から見つぶされるばかりである。彼女の頭の上の二階の四番目の窓の中には年老いた夫婦と娘が二人住んでゐる。いつも夕方の六時ごろに親子四人がテーブルを圍んで食事をしてゐるのが見える。テーブルの上には貧しい食物がならんでゐる。四半斤のふらんすパンが二つ宛と、まん中に置かれた一と皿の料理と、ジヤムの罎と、一と壺の水、――時とすればパイのやうな菓子だけで濟ましてゐることもある。親子四人が順々に大きなパイの皿を廻して、その一と片を自分の皿へナイフで切り取つてゐる手つきが見える。二人の娘は奥の方に腰かけてゐるので、わづかにその手つきと、兩方の腕と、頸飾りの珠數が垂れてゐる胸のあたりだけしか見えない。が、なまじ顏が見えないだけにその若々しい肌の色は一と入なまめかしく、しなやかな白い指がパンをちぎつてゐる樣子などが妙に傷々しく感ぜられる。私は例の低能兒の娘の事を思ひ出してその邊の部屋を搜して見たが、ここから見える窓の中には彼女は住んでゐなかつた。多分反對の側の方の三階にでも居るのであらう。きのふ始めて、私は彼女に空地の隅で話しかけて見たけれど、彼女は全く英語も日本語も知らなかつた、ただ私の顏を見上げて眼もとで笑ふばかりだつた。

さうだ、さう云へばゆうべは不思議な音樂を聞いた。晩の九時ごろに寢臺に寢そべつてぼんやりしてゐると、窓の下の方で耳馴れない樂器の音につれて女のうたふ聲が聞える。唄の文句は何處の國のものであるとも分らなかつたがその

メロデイーには一種の甘い哀調をふくんで、懶いやうな、悲しいやうな、非常に美しい聲をもつてうたふのである。私は暫くぢつと寢そべつて聞いてゐた、が、唄はなかなか止みさうもなく、やがて今度は陽氣な速い節に變つて、チョキ、チョキ、チョキ、チョキ、と、誰か男の聲らしいのが傍で拍子を取るのである。同時にガヤガヤと五六人の人々の話し聲が聞える。私は立ち上つて窓の外へ首を出した、と、おもての空地には鮮やかな月かげがさし、その青白い光の中に群衆が黑く輪をゑがいてゐる。輪のまん中に、そのチョキ、チョキ、チョキ、チョキ、と云ふ拍子につれて、一人の女が腰を振りながら奇妙な踊りをおどつてゐる。唄をうたつてゐる女は、傍の椅子に腰かけた二人のうちの一人であるらしく、うたひながら他の一人の方と一緒に樂器を奏でてゐるのである。踊る女の手つきや足つきが地上にくつきりと影を映して、上から見おろすと、その影の動く方が踊りよりもよく分つた。

「あ、あの布哇の土人ぢやないかな、」

私は直ぐとさう思つた、そして急いで三階から降りて行つた。

果してそれは布哇の土人たちであつた。上野の平和博覽會へ出て、萬國街でフラフラダンスをやつてゐた一と組、――彼等もやはり私の窓の向う側の二階の部屋に泊つてゐた。夏の間は每日ここから東京へ通つたのださうだが、もう博覽會も濟んでしまつたのに、何か計畫でもあると見えてまだ此の土地に居るのである。二人ながら眼の大きい、でつぷりと太つた夫婦に、十四五になる瘦形の背の高い娘がゐて、私が三階の寢臺で聞いたあの美しい聲の持ち主はその兒だつた。母親の踊りに合はせて父親が例の「チョキ、チョキ」を云ひながらギターを奏でてゐる側で、娘はユカレレを彈きながら唄をうたつてゐるのである。が、それを取り卷いた群集の興味は、何よりもフラフラダンスをやつてゐる母親の腰の周りに注がれてゐた。「あれあれ、あんなにぐるぐる廻る！　何と云ふ不思議な腰だらう！」人々はいろいろの國の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言葉でガヤガヤとそんな事を云ふらしかつた。群集は刻々に殖え、後から來た者は前を掻き分けて伸び上つたり、椅子を運んで來てその上に立つたりした。娘の唄は暫くつゞいた。私は前にも、三階の日本人が彈いたユカレレのひびきを耳にしたことがあるけれども、しかしこんなに美しい音色を聞いたことはない。何と云つても布哇の樂器を布哇の女が彈くのである。その娘の指の先からはじき出される絃の餘韻は、ヴイオリンの複雜なのには比すべくもないが、マンドリンのやうに徒らに纖巧なものとも違ふ。女性的な優しみのある中に太い方の絃を鳴らす時は何處か日本の太棹に似た潤ほひをもつてふるへるのである。父親はそのユカレレの高音に合はせて、ギターで低音の伴奏をつゞけた。ハワイアン・ギターと云ふものは日本の琴のやうにして爪で彈くのだと聞いてゐたのに、彼のは普通のギターだと見えて矢張り指さきではじくのであつた。踊りの身振りから察すると、何か淫靡なものであるらしく思はれるのだが、その唄の節には南國的な、明るく晴れ渡つた疲れたやうな氣分の底に、一種のやるせない悲しい心持ちが酌み取られた。それは或はその娘の透き徹るやうな聲のせゐであつたかも知れない。私は彼女が土人にしては美しい顏の持ち主であるのを知つてゐたけれど、彼女の聲を聞いたのは全くその晩が始めてだつた。蓄音器で聞くメルバや、フアーラーや、ガリ・クルチや、さう云ふ立派なソプラノうたひの聲も見事ではあるものの、此の土人の娘の聲はあのやうに甲高くはなく、あれを小鳥の囀りだとすれば此れは草葉の蟲の音であらう、高い音の所へ來ても喉を一杯に絞らないでりんりんとした涼しい張りのある中に何處か力拔けのしたやうな、だらけたやうな哀愁を帶びてゐるのである。やがて父親もふいと惹き入れられたやうに聲を上げて二部合唱をやり始めた。

"Honi kaua, wiki wiki"

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Sweet brown maiden said to me
As she gave me language lessons
On the beach at Waikiki.

"Honi kaua, wiki wiki"
She then said and smiled in glee
But she would not translate for me
On the beach at Waikiki.

"Honi kaua, wiki wiki"
She repeated playfully;
Oh those lips were so inviting
On the beach at Waikiki.

"Honi kaua, wiki wiki"
She was surely teasing me,
So I caught that maid and kissed her

On the beach at Waikiki.

"Honi kaua, wiki wiki
You have learned it perfectly;
Don't forget what I have taught you,"
Said the maid at Waikiki.

「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ」と私が布哇のワイキキの濱で彼女に土語を教はつたときその鳶色の肌をした可愛い娘が私に云つた。「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ」と彼女はさう云つて笑ふばかりでどう云ふ意味やら教へなかつた。「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ」彼女は面白さうに繰り返した、その時は私を誘ふやうに思へた。「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ」彼女は私にふざけてゐるのだ、そこで私は娘を掴まへて接吻した。「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ、お前はすつかりその味を覚えたんだよ、私が教へて上げた事を忘れちやいけないよ、」と、そのワイキキの娘が云つた。——唄の文句はさつと斯う云ふ事なんださうだが、私は後にその娘と懇意になつてから教へて貰つたので、勿論その時は何の事やら分らなかつた。ただ耳についたのはところどころに必ず出て來る「ホニ　カウア　ウイキ　ウイキ」と云ふ不思議な言葉と、「ワイキキ」と云ふ地名だつた。そして母親のフラフラダンスは各節の冒頭にあるその「ウイキ　ウイキ」が唄はれると同時に、大きな臀を左の方へぐるぐると捻り始め、ちやうどねぢをねぢ込むやうにだんだん體をちぢめて行つて、やがて一杯にちぢめてしまふと今度は逆に捻り返して、「オン　ザ　ビーチ　アツト　ワイキキ」と、右の方へ廻

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しながらぴんと體を眞つ直ぐに立てる。その臀のもくもくした動き工合は滑稽と云ふよりも薄氣味が惡いくらゐで、誰も笑ふものはなかつた。おまけに腰の周りには廻轉を一層大きく見せるために、恰も日本の腰簑のやうなものを纏つてゐるのだつた。踊りが濟むと又三人で唄か始まる。次ぎには娘が踊りをやる。いつの間に持ち出したのか其處には小ひさなテーブルがあつて、あひ間あひ間に夫婦はそれへ凭りかゝりながらビールを飲む。

「此の連中はきつと景氣がいいんだな、それでこんなに浮かれてるんだな。」

私はふいとさう思つたが、後で娘の話を聞くとその推測は中つてゐた。博覽會は非常な失敗に終つたけれど、萬國街の興行だけは圖に中つたので此の連中の懷ろへも多分の金が這入つたのださうな。そして彼等はまだ當分は日本にゐて近日興行師につれられて靜岡から京都の方へ行くのだと云ふ。實際、その晩そこに集まつたみすぼらしい各國の人々のうちで、ただ此の三人の土人だけが幸福さうに見えたのである。

だが、私がこんな事を書いて送るとお前は大方さう思ふだらう。「横濱と云ふ所はほんとに面白い所ぢやないの。東京に居たらとてもそんな光景は見られやしないのに、それぢやあなたは淋しいことなんかありやしないわ。」――さうだ、若しも私に繪や小説をかく才能があつたら、きつと此の中にいい材料が澤山ころがつてゐるのだらう。が、生憎と今の私には、小説どころかほんの五六行の短かい詩形さへ思ふやうに纏まらないのだ。もう少しでも頭の努力を要する事はひどく億劫になつてしまつた。まあこんな時には暇つぶしに手紙でも書くより仕方がない。目下のところでは手紙が私の唯一の藝術だ。下手糞な詩を作る爲めに疲れた腦味噌を搾るよりか、第一此の方が氣樂でいい。此の中にだつて讀む人が讀んでくれたら、多分詩のやうなものが幾らかはあるだらうからね。――

七

私は此の頃、はげしい神經衰弱になつた。

もちろん以前からだつて多少その氣があつたんだけれど、近頃は特に甚しい。此の間も獨りで風呂に這入つてゐたら、何だか眼の前に猫が居るやうな氣がした。暫くの間、私は湯殿に猫が居るのを別に不思議とも感じなかつたらしく「ははあ、猫だな」と思ひながら平氣で體を洗つてゐた。それからどうしたはづみだつたかふいと氣が付いて、「おや」と思つてあたりを見廻したが、そんな所に猫なぞが居る筈はない。だんだん考へると、流しに流れてゐたシャボンの泡のかたまりが眼に映つて、それが恰も猫のやうな幻覺を起させたのだ。これはほんの一例だけで昨今の私には珍しい事でも何でもない。殆んど始終こんなことばかり繰り返してゐる。

しかし、神は此の世に益のないものを何一つとして拵へない、神經衰弱も手持ち不沙汰な人間に取つてはいい暇つぶしだ。シャボンの泡が猫になつて、猫が美しい女になつて、その女の顔がお前やニーナになつて、……と云ふ風な事でもなくつちや實際淋しくつてやりきれない。お蔭で私の妄想はますます病的になる。明けても暮れても、散歩する時でも飯を喰ふ時でも私の頭は全く現實と關係のない事ばかり考へてゐる。尤も、「飯を喰ふ時でも」とは云つたが、實は此の頃三度の食事を滿足にすることはあんまりない。私はいよいよ貧乏のどんづまりへ來た。此れでももとは此のアパートメントの中にまだ私よりひどい連中が居たのだけれど、もう近頃ではあの乞食のやうな子供の親たちと大して違はなくなつた。きのふもその小供たちの一人がやつて來て、お金を十錢くれろと云つてせびるんだが、生憎私の蟇口には五錢しかなかつた。「私もお前と同じやうに貧乏なんだよ、だから此れだけで勘忍しておくれ。」私はその五錢白銅を彼の掌にのせてやりながら、そう云ふより外はなかつた。不潔の點でも今では此の子供たちを笑へたものぢやない。何しろ石炭屋に拂ひをしないもんだから燃料がすつかり切れてしまつて、あの猫の幻覺を見てから此方もう此れで十日になるの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にその間にたつた一遍しか湯に這入らない。

但し、その一遍にはちよつとした譯はれがあるのだ。と云ふのは、つい五六日前のこと、或る午過ぎに例の空地で子供たちを相手に遊んでゐると、日本の歳で七つになるワシリーと云ふ男の兒がゐて、それがあんまり垢だらけで臭いもんだから、

「お前はお湯へ這入つたことがないのかね？」

と、私は聞いて見たのだつた。

「ああ、もう一と月ぐらゐ這入らない。」

と、その兒が云つた。日本語がよく分る兒で、私は時々菓子などをやつたりしたことがあるのである。

「そんなに這入らないぢや病氣になるよ、私が風呂を沸かして上げるから、一緒にお這入り。」

「ああ這入るよ、入れておくれ。」

と、ワシリーは直ぐ承知した。子供と云ふものは湯に這入るのをいやがるものだが、いくら子供でもそんなに體の臭いのが氣持ちが悪かつたのであらう。さう思ふと何だか非常にいぢらしい氣がした。彼は私のあとへついて三階の部屋へ上つて來て、私がなけなけしの石炭を掻き集めつつ漸くのことで湯を沸かす間、持つてゐたゴム毬を天井へ投げつけたりして遊んでゐた。

「さあワシリー、お湯が沸いたよ。」

と云ふと、彼は大人しくゴム毬を捨てて湯殿へやつて來た。それから私はシャツ一枚になつて、ワシリーの着物を脱がしてやつた。

はだかにして見ると、體ぢうを南京蟲に喰はれてはゐたけれど、着物で隱れてゐた部分は手だの足だのと違つて異樣に白かつた。ぷりぷりした肉づきのいい兒で、西洋の子供の體つきも日本の子供と同じやうに、肋骨のあたりは割り合ひに痩せてゐて腹の方がふくれ上つてゐる。その腹のふくれたてつぺんが一番肌が白く、まるで牛乳のやうな色なのである。それへ南京蟲のあとがピンク色にプツプツ脹れて珠數のやうにつながつてゐるのが、いたいたしくも美しいやうに思へた。こんなに色が白いのだから垢などはたまつて居ないかも知れない、よごれてゐたのは着物だけかも知れない、と、私はさう思つたので試しに皮膚をこすつて見ると、矢張り垢が隨分出る。まつしろな肌の何處からしみ出して來るのだか、鼠の糞のやうな奴がぼろぼろによぢれ落ちて、それの落ちたあとは膏藥でも剝がしたやうに一層白くなる。

「まあ大變な垢ぢやないか。私がきれいに洗つてやるからぢつとしてゐるんだぜ。」

ワシリーは「あゝ」と云つただけで私の云ふなり次第になつた。私は彼の體をかかへて、タツブの中へうつ向きにねかせて、最初に頭へシヤボンを塗つた。石炭が足りないので湯はなまぬるい水のやうなものだつたけれど、彼にはその加減がちやうどよかつたらしく、いかにも好い心持ちさうに伸び伸びとしてゐた。私は片手で樂々と彼の全身を湯の中へ浮かせた。

「そうら、一番先に頭を洗ふんだぞ。少しつめたいが我慢をするんだ。――」

私は水道の栓をひねつて、冷水を彼の頭から注ぎかけた。と云ふのは、何分湯が赤銹で濁つてゐるので、その泥のやうな色をした中へ、彼の柔かくうづを卷いた金色の髮の毛をひたし込むのが惜しいやうに思はれたのである。水に濡れた毛は一層つややかに光りながら、ぺつたりと、ややおでこの彼の額へまつはり着いた。その毛の先から眼だの鼻だの口の中だのへぽたぽた滴れて來る水を、彼は兩手で拂ひながらふツふツと切なさうな息を吐いた。だ、それでもいやだ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは云はないで、大人しく洗はせてゐるのだつた。

私は彼の肩や背中を洗つてやりながら考へたんだが、一體、西洋人がシヤボンと云ふものを發明したのは、日本人が糠袋を使ふのと同じやうに自然な事だね。あの白い泡の立つものが白い肌の上を雪のやうにとろけて流れて行くさまは、見ただけでもすがすがしい氣がする。泡の色と肌の色とに何とも云へない親しみがあり、美しい調和がある。泡は肌に融け込むのを喜び、肌は泡に融かされるのを喜んでゐる。そこへ行くと日本人はさうは行かない。とても此れだけの調和が取れない。どうかすると泡だらけの體が一層醜惡に見えたりする。黄色い肌の人間にはやつぱり黄色い糠の方がいいのかも知れない。……

「どうだね、好い心持ちかね、」

と云ふと、泡だらけになつたワシリーは「うん」と云つてうなづいて見せた。そしてその泡でつるつるすべりながら、タツブの端へやつと兩手でつかまつて二本の脚をパチヤパチヤやらせた。私は脛だの踝だのを洗つてやつてゐるうちに、……それはどう云ふはずみだつたか、……ふいとお前の足の形とその手ざはりとを想ひ出した。お前の足は私の掌よりほんの少しばかり大きかつたね、此の兒の足はちやうど私の掌の上へ乘つかる程の大きさなのだ。が、それはただお前の足をそのまま小さくしたのだつた。さう云つてもいいくらゐにそれはお前のに似てゐたのだ。此の兒の柔かい踵の肉。若い蕨の芽のやうな可愛らしい趾。踝のところで感じられるほつそりとした關節の骨の手ざはり。甲が高く盛り上つて中趾の先が船のやうに長く尖つてゐる形。……今此の足を見るにつけてもお前の足がまるで子供のそれのやうにきやしやだつた事が想ひ出される。……私は覺えずその足を二つの掌の中に握つた。握りつぶす程しつかりと握つた。若しワシリーが變な顏をしなかつたら、多分それを抱きかかへて頰擦りをしたであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私とワシリーとが再び三階から降りて行くと、空地には多勢の子供たちが待ち構へてゐた。

「ワシリー！　どうだつたい？　お湯へ入れて貰つたのかい？」

と、十三四になる兒が露西亞語でそんなことを云ふらしかつた。そしてワシリーの傍へ寄つてちよつと髑のにほひをかいでみて、「何だい！　まだ臭いや！」とでも云つたのであらう、外の子供もみんな一々にほひをかいでは鼻をひくひくやらせながらゲラゲラ笑つた。

「臭いのは着物が臭いんだよ、體にはもう垢なんか附いちやゐないよ、ねえワシリー、」

私はさう云つて、ワシリーの着物の袖をまくり上げて二の腕の肌を出して見せた。それはまだ湯氣をふくんでぽつぽつと櫻色にほてつてゐた。

「これ御覧、こんなに綺麗になつたぢやないか。うそだと思ふなら頭のにほひをかいで御覧。」

子供たちは又ワシリーの傍へ寄つて、その髮の毛の中へ、――だんだん濕り氣をはじくと共に再びうづを卷きかけた一と塊りの綿のやうなものの中へ、てんでに鼻を持つて行つた。と、ワシリーはそれらの子供をうるささうに拂ひのけながらパタパタと表の方へ駈けて行つたが、ちやうど出口の鐵の門のところにいつも門番が使つてゐる椅子があつて、それへ彼の姉になる少女が、――今迄云ふのを忘れたがそのワシリーの姉と云ふのは跛足だつた。――杖を鐵柵に寄せかけて休んでゐた。彼女は私の方を見てちらりと碧い眼の中で笑つて、ワシリーの首を膝の上に抱きながら、わざと鼻をふんふんやらして幾度も幾度もにほひをかいで見たり、痩せた青白い指さきでその柔かい髮の毛を優しくいぢくつてやつたりした。

「まあ、ほんとにきれいになつたことねえ！　もうちつとも臭くはないよ。」

その姉娘はさう云つて弟を慰めてゐるやうに思へた。そして私の方を向いて、聴き取りにくい發音ではあつたが、「有り難う」と日本語で云つた。

その出來事があつてから以後私は風呂へ這入らないのだ。今朝もワシリーをつかまへて「又お湯へ入れてやらうね」とは云つたけれども、有りつたけの石炭をあの時使つてしまつたので、今度と云つてもいつの事やら、あてになつた話ぢやない。暑い時分だと水風呂でもよかつたんだが、もう此の頃では大分陽氣が寒くなつたし、萬一風でも引かせたらそれこそ困る。が、私はあれ以來すつかりワシリーが好きになつた。あの兒の姿を見ると、そのきたない着物の下にある白いぶりぶりしたものが……あの肉塊が非常に可愛らしいもののやうに眼の前に浮かんで來る。そしてどうかしてあの兒を風呂へ入れてやりたいと、しきりにそんな事が思はれてならない。それにつけても私はあの因業な石炭屋が憎らしくつて仕様がないのだ。「月末までにはきつと拂ふから持つて來てくれ」と頼んでみたが、近所の部屋迄は始終ついでがある癖に、決して私の所へは置いて行つてくれないのだ。

話は違ふが、人間は何かしら自分の好愛する物を拵へなければ承知しないんだと見えるね。どんなに自分の身の周りが貧弱であり、どんなに空疎な境遇にゐても、矢張り何かしらその中に好きな物が出來て來る。眼に觸れるものに一つとして美に値ひする對象がなくなつてしまつても、それでも無理にでも見附け出す。見附け出さずには生きてゐられない。それは孤獨であればあるほど、淋しければ淋しいほど、猶さうなる。その對象は必ずしも人でなくてもいい、犬でも猫でも、時とすれば石ころでも棒きれでもいい。――と云ふ意味は、勿論人間には自然界の美を愛する心持ちはあるけれど、私の云ふのはそれではないのだ。「愛する」と云ふよりは寧ろ一種のえこひいきな感情で妙にその物が好きになる、少し大袈裟に云へば拜物教的の――フェティシズムに似た心持ちでその物に對し、それを他の何物にも優して貴く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

感じ、時とすれば自分自身をその奴隷として恰も神に對するやうにそれを崇拜する。——此れは人間には誰にでも多少あることに違ひないのだが、……それとも私ひとりだらうか？

私は、——今斯うして此の事を書いて來ると、——私がまだやつと物心のついた時分、六つか七つの幼い時分のことを想ひ出す。なぜなら私にはもうその頃から何かしら或る一つの「好きな物」があつたからだ。もちろん「好きな物」は始終いろいろに變つた、それは人間であることもあり他の物體であることもあつた、そしてその變りやうも可なり激しかつたやうだけれども、兎に角自分の崇拜する物を常に一つは必ず持つてゐた。それに關するおぼろげな記憶を出來るだけ古く溯つて行くと、私はいつも私の生れた家、——神田の錦町のとある横丁にあつた家の奥の、薄暗い土藏の側の板の間で遊んでゐた自分の姿を眼前に浮かべる。私はその時多分五つか六つぐらゐの子供であつた。そして、泥で造つた小ひさな角力の人形を持つて遊んでゐた。一つは白く、一つは赤く塗つてある人形で、それらの二つを板の間にならべ、拳骨で床をとんとんと叩くと、二つが次第に寄つて來て互ひに衝突し、孰方かがコロリと倒されて負けになるのである。私は最初、赤い方の人形が好きだつた、なぜなら、單純な子供の考へとして、色のなま白い角力取りよりは赤い顏をしてゐる方がズツと强さうに見えた筈だから。——私はひそかに赤い方をえこひいきした。どうかして赤い方ばかりを勝たしてやりたかつた。拳骨で床を叩くのをいろいろに加減して、成るべく白い方が倒れるやうな位置に於いて衝突さした。私の工夫は圖に中つて大概の場合は赤が勝ちになる、すると私は恰も自分が憎い敵にでも打ち勝つたやうな喜びを覺える。憎い敵、——さうだ、私は非常に白を憎んだ。赤が好きであると同時に白が憎くてたまらなかつた。たまたま私のえこひいきな努力がやりそこなつて赤が倒されたりすると、私は心から赤の敗北の爲めに悲しみ、私の計略の裏を搔いた白の狡猾さに腹を立てた。實際、その白や赤の人形がまるで人間の心を持つたもののやうに思へたので

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。

しかし、子供の時分から移り氣だつた私の感情は常にふとした出來事の爲めに變つて行つた。いつの頃からか私はそれらの人形に對して、全く今迄とは逆な好惡を抱くやうになつたのである。いや、恐らく私は今迄よりも幾層倍の熱度を以て、それだけ白をひいきにし、赤を憎むやうになつた。その變り方はごく突然に、何の理由もなく來たもののやうに覺えてゐるが、或はその時分母につれられて見に行つた八犬傳の芝居の中の、對牛樓の舞臺の連想がそこに働いてゐたのかも知れない。私はその舞臺で女に變裝した一人の色の白い美少年が、赤い顏をした强さうな館(やかた)の主(あるじ)を斬り殺すところを見たのである。それ以來、――さう、多分それ以來だつたであらう、私は白い人形の方にあらゆる美徳を與へたのであつた。見かけは弱さうに思はれる白の方が、單に赤よりも强いばかりでなく、凡べての點で赤に優つてゐなければならない。優雅、武勇、智慧、品格、――私はそれらの象徵として白い方を見、赤い方をその反對の醜惡なものの塊りとして見た。勿論その角力の人形は二つとも同じ形をした物なので、ただ色だけを赤と白とに塗り分けてあるのだつたが、私はそれだけの相違では滿足しなかつた。似たやうな顏つきや體つきの中からほんの微細な相違をでも搜し出して、一方を完全な美の現れのやうに、他の一方をそれの全く反對のやうに想像し、そして遂にはそれが實際さう見えるやうになつたのである。私は今迄無殘な負けを取つてゐた白の名譽を雪ぐ爲めに、いかに熱心に彼の味方をし、いかにえこひいきな手段を以て彼に勝を與へたであらう。「赤！　赤の馬鹿やい！」と、私はほんたうに口に出してまで罵つた。「白はお前なんかよりずつと强いんだ、今迄お前に負けてゐたのは油斷をさせる爲めだつたんだ、だのにお前はいい氣になつて散々白をいぢめやがつたな。――見ろ！　白が本氣になれば一遍も勝てやしないぢやないか、態見ろやい！」そして、まだそれだけでは濟まされなかつた。赤が倒れると、その腹の上に白を乘せて、そこをぐんぐんと踏み躙らせた。或る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時は赤の鼻づらを床に擦りつけて、白の前でピョコピョコお辭儀さしたりした。そんな時、私はいつも自分が赤になつた氣持ちで、「白さん、どうぞ御免なさい、後生ですから命だけは助けて下さい、もう決して威張つたりなんかしませんからあなたの家來にして下さい。」と、さも弱さうな泣き聲を出して云ふのである。赤はそれ以來全く白に征服されてしまつたのだが、しかし私は猶いろいろな眞似をしてその上にも白を強く美しく、赤を醜く弱くしなければ承知しなかつた。赤は到底白にかなはないと知つて、うはべだけは降參してゐる、が、卑怯にも白の油斷を覘つて不意に彼を倒さうとする。と、それでも白の方が強くて忽ちあべこべに打ち倒され、脚の下に組み敷かれてギュウギュウ云はされる。「もう今度こそ本當に降參しました、勘忍して下さい、勘忍して下さい」と、意氣地なしの赤はぼろぼろと涙をこぼす。勘忍して貰ふとその當座は大人しくしてゐて、又そんな事を何度でもやる。けれどどうしても赤は絶對に白に勝てない。どんな卑劣な不意討ちをやつても結局白に負かされてしまふ。しまひには白から重い刑罰を受けて鼻の頭をチョン切られる。私はナイフを持つて來て赤い人形の鼻の先をゴリゴリと削つた。それから繪具でその全身をどす黑く染め、白の方を一層眞つ白に塗つたりした。かうして二つの人形の間には誰が見ても甚しい差異が生ずるやうになり、私は白を此の世の中の何物にも優る貴いものとして崇拜した。……

かう云ふ經驗は、よしやそれが私のやうな極端な程度でないとしても、子供の時分に誰しも一度味はふことがありはしないか？　私はどんなにその白い人形のおかげで、幼い頃の孤獨な月日を慰めただらう。ほんとに臆病で神經質な子供だつた私は、まだその時分は友達もなし兄弟もなかつたので、その白い人形を自分の唯一の味方とも思ひ、時とすれば自分をそれの忠實な奴僕であるかのやうにも感じ、ひたすらそれをえこひいきする喜びに溺れ、それ以外の凡べての物を輕蔑する。それの爲めなら、自分はもとより外の者をどんなに苦め虐げてもいいとさへ思ふ。だんだん成長するに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したがひいつかしらそれらの人形は捨てられてしまつて、もつと生意氣ないろいろな玩具で遊ぶやうにはなつたけれども、要するに私にはいつも一つの「白」があつた。めんこの面に描いてある武將の肖像、草双紙の中にある侍や俠客や烈女の姿、——それらのものが代る代る私の頑是ない頭の中で、いかに美しい憧れの的となつたであらうか。私にはそれが實在の人間であらうと、物語の中の人物であらうと、又は全く人の形をして居なからうと、それを愛する心持ちに變りはなかつた。或る時は五匹の南京鼠を買つて來て、その中の一匹を「白」として貴み、外の四匹をその奴隸にし、やがては私自身をもその奴隸の數に加へた。夜になつて、布團の中へもぐり込むと、私は屢々夢の中で「白」の鼠に侍いてゐる自分を見た。「何だい、お前は人間の癖に私の家來になつたのかい。」と、その白い鼠が云ふ。「へい、へい、私は、人間ではございますが、何でも御用をいたしますからあなたのお側に置いて下さいまし。私を人間だと思はないで、外の家來たちと同じに扱つて下さいまし。」——私はその夢の中で自分が卑しい人間に生れたことを、——白い美しい王様のある鼠の國に生れなかつたのを悔やみさへした。鼠にも飽きると庭に這つてゐる蟻を集めた。そして蟻の王の爲めに立派な巣を造り、砂糖の塊りを貢物とし、それを横取りしようとする不忠な蟻どもを片つ端から捻り殺して、それらの屍骸を王に献じた。だが、未だに覺えてゐる中で一番奇抜なのは、或る人間の足だけを崇拜したことがあつた。それはその頃十三四だつた鈴吉と云ふ店の子僧の足なのである。不思議なことに私は全く鈴吉とは關係なく、ただ彼の足だけを好んだ。どうしてあれがあんなにも好きになつたのか知らん？——が、その理由は自分にも分らなかつた。何でも鈴吉が店の琉球疊の上に畏まつて据わつてゐた時に、その臀の下に重ねられてゐた黄色い足の裏が、ふいと私の注意を惹いたのが始まりだつたと記憶してゐる。而も私は、最初のうちはその足を見せられるのが何となく不氣味に感ぜられて、「なぜ人間にはあんな不作法な足なんてものがあるんだらうなあ。」と、よくさう思ひ思ひした。「せめて足袋でも穿いてゐたら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いいのに」と、ひそかにその足を憎んだくらゐだつたのだが、厭だ厭だと思つてゐるうちにいつの間にやらひよいと好きになつたのであつた。それからと云ふもの、私は異樣の執着を以て間がな隙がな鈴吉の足に氣を止めるやうになり、その十本の趾の恰好をも悉く暗んじ、それらの一本一本が孰れも貴い神體であるかのやうに敬ひ慕つた。斷つて置くが鈴吉の足は決して特に美しい足でも何でもなかつた。普通の小僧のと同じやうに皮膚に黑いひゞの這入つたむくんだ汚い足だつたにも拘らず、それが私にはさう見えたのである。ここでも私は夢の中でその足を立派な神殿に安置し、その前に跪いて禮拜した。——鈴吉を禮拜するのでなく、ただ足だけを禮拜したのである。

さうだ、一度私は、——たしか小學校の尋常一年の時だつたと思ふが、或る日先生から牛若丸の話を聞いて、五條の橋で笛を吹いてゐる繪姿を見せられてから、その美しい可愛い英雄を慕つて已まないことがあつた。夢の中で私は常に牛若丸の側にゐて、或る時は自分が彼に忠義をつくす奧州の金賣り吉次であつたり、靜御前であつたり、佐藤忠信であつたり、さうかと思ふと彼に手向つて結局降參させられる辨慶であつたり、鞍馬山の天狗であつたり、熊坂長範であつたりする。此の牛若丸崇拜の時代は可なり長くつづいたやうに覺えてゐる。私はいつも、その頃の友達の中で自分の一番好きな子供を心ひそかに牛若丸になぞらへてゐた。そして辨慶だの、天狗だの、靜御前だのの役廻りにもそれぞれ友達の誰彼をあてがひ、自分もその中の一と役を持つて、遠い昔の源平時代に生きてゐる有樣を空想した。「ああ、自分はなぜ明治の世の中なんぞに生れたんだらう。あの△ちやんがほうたうの牛若丸で、自分が金賣りの吉次であつたら、——そして美しい源氏の若君のお供をしてはるばる奧州の果てまでも旅をする事が出來るのであつたら、——まあ、その樂しさはどんなだつたか知れないだらうに!」と、悔やんでも悔やみがひのない事だとは思ひながら、私はそれを考へつめると遣るせない悲しみが胸一杯に湧き上るやうになつて、自分の運命の拙さをかこつ淚さへが、知らず識らずうるんで

來るのだつた。一年生から二年生になり、三年生になり、交友の範圍が殖えるに從つて、私はいかに多くの少年を代る代る「牛若丸」に擬したであらう。かうして私の好きな友達は始終變つては行つたけれども、そこには絶えず一人の「牛若丸」があつた。すると或る時、多分私が十歳の春の頃だつただらう、小川町の或る貸席で近所の娘たちの踊りのおさらひがあつた晩に、母につれられて行つた私はそこで圖らずも「五條橋」の踊を見たのである。牛若丸になつた少女は私よりも二つか三つ歳上の、鎌倉河岸の油屋の娘で、何處そこの學校の何年生で、踊りが大へんうまいのだと云ふ評判だつた。私は子供心にも人々が云ひ囃すそれらの話を、鋭い神經を以て一つ殘らず聞いて歸つた。なぜなら私は、自分と共に今の世の中に生きてゐるほんたうの牛若丸を、彼女に於いて見出したのであるから。――そしてその後長く、長く、その油屋の店先に折々現れる彼女の姿が、私の切なるあこがれの的となつたことは云ふ迄もあるまい。

「ではその娘があなたの初戀の人なのね?」

お前は大方さう云ふだらう。しかし私はさうは思はない。若しも私に初戀と云ふものがあるのだとしたら、それはやつぱり一番始めの「白」にあるのだ。「白」が或る時は南京鼠になつたり、蟻になつたり、草双紙の繪姿になつたり、鈴吉の足になつたり、牛若丸になつたり、その牛若丸が又いろいろな人間になつたりしたけれども、結局それらは「白」の一時の變形に過ぎない。私は始終それらを透してその後ろにある「白」を慕つた。「白」の內容は絶えず移つて行く。嘗てはお前が「白」だつた事があり、ニーナもビーヴ・ダニエルも「白」だつた事があり、今ではワシリーのぷよぷよした肉塊が「白」になつてゐる。だから私には初戀と云ふものはないことになる。私はやうやう物心のついた始めから、――あの錦町の家の土藏の前で角力の人形を弄んだ時代から。今もなほ同じ心持ちでただ一つの「白」にあこがれるばかりである。そんなら一體「白」と云ふのは何を指すのか? あの角力の人形の事を云ふのか? さう開かれるとちよい

と返答に困る譯だが、正直のところ私は、「此れが白だ」と云つてハツキリ其の物を指摘することが出來ない。「白」の正體は私自身にもよく摑めない。だが少くとも斯う云ふ事は云へると思ふ、――私の「白」を崇拜する感情は、あの人形を知る以前から、恐らく私が生れた時から、たしかに心の中にあつた。そして最初に、あの人形をたまたまそれの現れとして溺愛したのぢやないだらうか?――どうも私にはそんな氣がする。つまり「白」と云ふのは私の生命が永久に焦れ慕つて已まないところの、或る一つの完全な美の標的、――まあ、强ひて名づければさうでも云ふより外はなからうそこでその正體は容易に摑めないものだからして、猶更それが摑みたくなる。どうかしてその姿を眼の前に見、手を以て觸れて見たいと願ふ結果、その思ひの切なる餘りいろいろな物が「白」に見えたのだ。尤も「白」に見えたとは云つても矢張りそれらの物の中に幾分か「白」の本質があつたには違ひない。本質と云つて悪ければ、一つの本體から投げるところのさまざまな影ででもあつたであらう。たとへそれが卑しい鈴吉の足であつても、又は貧しい一匹の蟻であつても。……

お前はいつぞや私のことを浮氣者だと云つたつけね、少しきれいな女を見ると直ぐに惚れる、こんな惚れつぽい男はないつて。――成る程それはたしかにさうだ。私の戀人はもう今迄に何人あつたか知れないくらゐだ。お前の前にはK子があつたし、その前にはF子があつたし、そしてその前にも、勘定したら數へきれない程あるだらう。さう、私はいつの間にか多くの女の中にばかり「白」を見出すやうになつた。成人するにしたがつて私の「白」は「女」と全く同一になつた。が、私がお前たちを愛した氣持ちは矢張り人形や南京鼠を愛した氣持ちと變りはない。「いやそれは違ふ。女に對しては性慾が働いてゐた筈だ。」と云ふのかね? しかし、そんなら一體性慾とは何かね? それもやつぱり無窮に「白」にあこがれる氣持ちではないか。他人は知らず、少くとも私に取つてはさうだと云へる。私は性慾と云ふものを

安つぽい一時の衝動だとは思ひたくない。若し問題を無理にでも性慾で説明しようとするなら、大方私には子供の時代から、自分では意識しなかつたけれども性慾の作用があつたのだらう。そして人形や南京鼠の中に「白」を見出すと同時に、おぼろげながら「女」を見出してゐたのだらう。ああ「女」!――それは私が生れた時から今日が日まで片時も止まず私を導いて來たところの、――いや恐らくは最後の息を引き取る日まで導いて行くであらうところの、たつた一つの光なのだ。ちやうど私と云ふものが闇にただよふ船のやうに、まだ西東も分らなかつた幼い頃から、いつもその船の舳に立つて行く手の海を照らしてくれた一點の空の星なのだ。昔私は一塊の土で造つた人形や、牛若丸の繪姿を種に子供の智慧でさまざまな筋書を仕組み、取り止めもない妄想に耽つて日を暮らした。そして今では?――やつぱり私はいろいろの女を材料にして物語を編み、同じやうな妄想に浸つてゐるではないか。それを外にして私の詩もなく藝術もないではないか。「白」――「女」――彼女は私の肉體の母たるばかりではない。私の生活、私の思想、私の意念、私の持つてゐる凡べてのものの母ではないか。

今や私にはもう一度幼年時代が歸つて來たのだ。再び私は友達もなく兄弟もない孤獨な境涯に置かれてゐる。子供の時分にはいくら淋しくても兩親と云ふものがあつたのだが、もうそんなものもなくなつてしまつた。あるものはただリシリーのぶよぶよした肉塊ばかり、――そして、嘗て人形の白い土塊をいぢくつた私は、ちやうどあの時のやうにして今ではその少年の白い肉塊をいぢくつてゐる。……

私は今、手紙のつづきを書かうとして久し振りでペンを執り上げる、が、此れから書かうとする部分と前の部分との

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間には、二た月以上も時が立つてゐることをお前に斷つて置かねばならない。私があの「白」の話を書いた時分はたつた獨りでうすら寒い秋の夜ふけの机に凭つてゐたのだけれど、今夜は私は孤獨ではない。私の傍には一人の少女がゐるのである。そして煖爐には石炭の火が赤く燃えてゐる。私は此れを書きながらも折々こつそりと顏を擡げて、その火のほとりに腰かけてゐる少女の姿を見るであらう。私のところからはちやうど彼女の横向きいさまが窺はれる。彼女は今何も云はない、……默つて、さつき私が貸してやつた佛蘭西語の古雜誌を讀んでゐる、或はその中の挿畫を眺めてゐるのでもあらう。私が何か一と言云へば此方を向いてニツコリ笑ふに違ひないが、……私は彼女の、あの特有な、不思議に憂鬱な感じのする微笑を見たくないこともないが、……しかしまあ今は止さう。そしてあれきりになつてゐた手紙のあとをつづけるとしよう。だがそれにしても此處から見える彼女の頸すぢは非常にうつくしい。その頸すぢのうへに、ついさつきまでは毛絲の肩かけを纏つてゐたのに、すつかり温まつたと見えて今ではそれを膝の上にまるめてゐるので、細つこい頸の周りに絡まつてゐる紅い色をした南京玉の頸飾りが、眞つ白な肌の面に際立つて照り映えてゐる。私の机の眞上にある電燈の灯さきが、ひろい部屋の中をはすに横ぎつて、つややかなうなじの皮膚へまるで水でも流れるやうに落ちてゐるのだが、しかし明りはそれだけではない。煖爐のほのほがゆらめく度びに、私の方からはその横顏が閃光を背負つてゐるやうに見える。そして、黒くさへ思はれる眞紅の南京玉が赤く透き徹つてほのほと共にきらきらする。その頸飾りは私が始めて彼女と言葉を交へた時にも、やはり今のやうにあの頸の上にからまつてゐたのだ……私があの、湯から上つたワシリーと一緒に空地へ降りて、鐵の門の傍にゐる彼女に氣がついた最初の時にも、……

彼女は全くあの時と變つてゐない、着物もあのときの通りである。今でも同じ古い紺セルの手頸のところまで袖の附いた服を纏つて、黑いエナメルで塗つてある革のバンドをしめてゐる。その傍には杖も置いてある。多分彼女は此の杖

と、此の着物と、此の南京玉の飾りと、そして毛絲の肩かけの外には何も持つてゐないのであらう。「ペトログラードにゐた時分にはいろいろな物を持つてゐたけれど、そこを追ひ出されてハルビンへ行つたり、北京へ行つたり日本へやつて來たりするうちにみんななくしてしまつたのよ」と、此の間彼女は云つた。だがそんな物は何一つなくつてもいい。ひよつとすると、かう云ふみすぼらしい姿の方が却て彼女には似合ふかも知れない。うすいそばかすのある顔、金色ではあるが病み上げのやうに量の少い髮の毛、發育のおそい子供のやうな小柄な體つき、痩せた兩肩、不具な片脚、決して器量のすぐれた娘とは云へないのだけれど、その大きな碧い眼の中にある深い憂欝が、――さう、あれが私を惹きつけるのだ。かうやつて見ると日本人の白い眼よりは碧い眼の方がずつと悲しい。そこには何か異人種の私には測り知られぬ哀れさがある。そしてその眼がほんのり笑みを浮かべるときは、まるで涙をたたへたやうなうるみを帶びて、一層哀れさを増すのである。それは不具者に共通な日蔭者の表情なのか、それとも氣の毒な境遇のせゐでさうなつたのか、――さう云へば彼女の性質も恐ろしく陰氣なやうに感ぜられる。普通の西洋人の娘とちがつて、あまり多くの口數を利かない。體が不自由だからでもあらうが、いつも大人しくちつとしてゐる。たまたま私が聲をかければ、大概な時は答への代りにただ微笑する。が、一度私は、彼女がうつくしいやさしい聲でうたふのをきいた。それは此の間、Kが東京からやつて來た晩のことで、Kはその日横濱の或る音樂會に出演したので、ヴイオリンを携へてゐた。「何か唄をうたへるだらう、伴奏するから是非やつて御覽」と、しきりにKにすすめられて、彼女はやつと唄つたのである。昔お前がよくうたつたグノーのアヱ・マリアのうた、――私はあの羅甸語のうたの言葉を暗記するほど聞き馴れたものだが、それを彼女もうたつて聞かせた。彼女の聲はお前のそれよりは或は量が乏しかつたかも知れない。けれど少くともあのうただけは、快活なお前がうたふよりも彼女の方が適してゐる。私は聞いてゐるうちに涙がこぼれた、ほんたうに悲しい好い歌だと思つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。「サンタ、マリア」と、痩せた體ぢうの聲をしぼつて唄ふ時の寧ろ苦しさうな彼女の顏が、その珊瑚色の大きな瞳が、何だかマリアのそれのやうに有難く思へた。

私はここで、再び幼年時代のことを少しばかり書かねばならない。と云ふのは、此の前「白」の話をした時につい書き洩らしてしまつたのだが、あの時分、ちやうど私が六つか七つぐらゐの頃、前に云つた土藏の側に私の祖父の隱居所があつて、その部屋の中にマリアの像が置いてあつた。もうその時分祖父は亡くなつたあとだつたので、そこには誰も住む人がなく、ガランとして、晝ひなかもうす暗くなつてゐて、その床の間の奥に、引き伸ばしにした祖父の寫眞と、マリアの像とが、金色のぴかぴかした額ぶちに收められて、壁によせて立てかけてあつたのだつた。なぜこんなことを書くのかと云ふと、私は今、この哀れな跛足の娘――ソフィアの顏を見るにつけても、あのマリアの像が想ひ出されてならないからである。あの頃の私は、もちろんその像がマリアであると云ふことも、マリアが何であるのかも知らなかつた。祖父が亡くなる少し前から耶蘇を信じるやうになつて、死んだ時には佛蘭西人の牧師が來、屍骸の唇に接吻したと云ふやうなことも、それを私が聞いたのはずつと後だつたくらゐだつた。が、當時私は、一種の云ひ知れぬ畏れと讃嘆とを以て、その人氣（ひとけ）のない部屋の中にある聖母の姿を仰いだことを記憶してゐる。その姿の前にゐると、何か子供には理解出來ない無限に美しい哀しいもの、――永遠と云ふやうなものがおぼろげながら感ぜられて、とても長くはそれを仰いでゐられないやうなぼんやりした畏れに打たれた。私がその像を「白」の中に加へなかつた唯一の理由は、多分その畏れであつただらう。罰が中りはしないかとでも思つたのだらう。いや、實を云ふと、自分では意識しない心のずつと奥の方では、私はその像こそほんたうの「白」であることを、――牛若丸や、南京鼠や、鈴吉の足よりも遥かに貴い「白」の本體であることを、――知つてゐたのだ。知つてゐたからこそその德を汚すのを恐れたのだ。今になつて考へると、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それはたしかにさうだと思へる。子供の時分に強く心を動かした物象はたとへその折は深い省察を拂ふことゝなく打ち過ぎてしまつても、長く長く大人になつた後までも胸に留まる。そしていつかは再びそのものを想ひ起して、亡くなつた親や過ぎ去つた月日を慕ふやうに、それの姿に戀ひこがれる。私が此の夏横濱へ引き移つて、朝夕西洋の女の顔を見るやうになつてから、幼い頃のマリアの像がいつか私の記憶の底に甦つてゐたであらうことを、誰が否定することが出來よう。ニーナや、ビーヴ・ダニエルや、グロリア・スワンソンや、――私はその女たちの目鼻立ちに一つ一つマリアの俤を仄かに感じ今も昔と同じやうな畏れを以て、及びも付かぬ高さにあるものを仰ぐやうに眺めてゐたのだ。そしてその氣持ちは ――私は正直に白狀するが、ソフィアを知るやうになつてから猶更強く溢れて來たのだ。

なぜ此の不具の貧しい娘が、そんなにお前に貴く見えるのか？――さう聞かれても私は云ふべき言葉を知らない。「不具ではあるが私に取つては完全な姿だ」と、さう答へるより外はあるまい。「だがそれにしても、お前はマリアを崇めるやうに彼女を崇めてゐると云へるか？ お前は彼女の白い肉塊を愛するだけの事ではないか？」――が、此の二つの感情は私の胸では一つなのだ。少くともソフィアの姿に向ふときは不思議にもさうなるのだ。

私の過去の可愛らしい早百合子よ！ お前はソフィアの跛足の脚がどんな形をしてゐると思ふか？ 私は嘗てワシリーにしてやつたやうに彼女の爲めに、風呂を沸かして毎日その足を洗つてやる。――それが此の頃の私の日課だ。その跛足の足こそは私に殘された最後の寶だ。それは傷ましく曲りくねつてはゐるけれども、私の眼には此の上もなく美しく見える、その一とひらの肉のために命を捨ててもいいと思ふほど！ ……

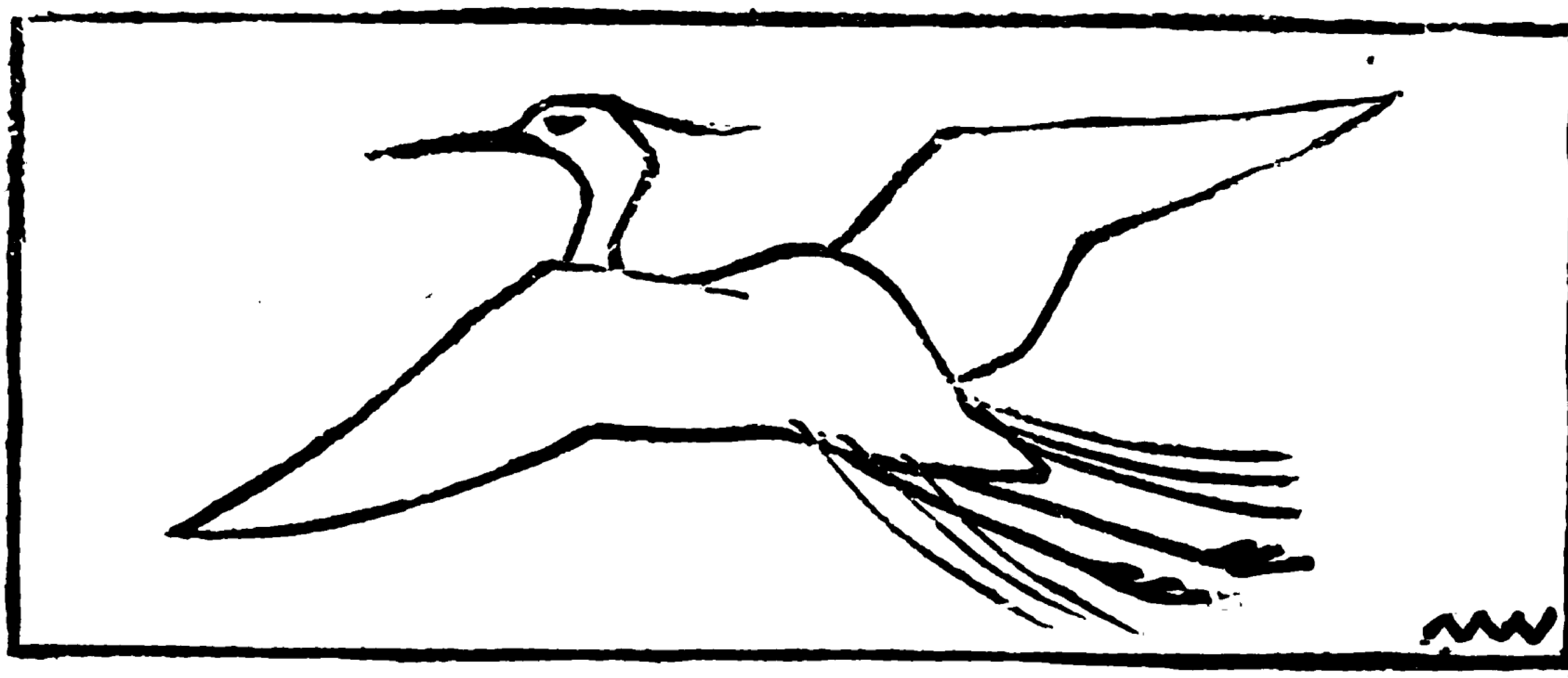
彼女は毎晩、夜おそくなつてから親たちの部屋へ歸つて行く。時には母親が迎へに來る。いつもニコニコと私に禮を云つて行く樣子を見ると、親たちはまだ何事も知らないでゐるのか、知つてそれを願つてゐるのか、ソフィアに聞いて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も分らないと云ふ。……が、彼女は今讀みかけの雜誌を伏せ、毛絲のショールを肩に纏ひ、杖を取り寄せて立たうとしてゐる。私はここで一と先づペンを擱かねばならない。そして彼女の腕を扶けて、長い幾つもの階段を降つて、部屋まで送り屆けねばならない。

私の過去の可愛らしい早百合子よ、若し横濱へ來るやうな折があつたら、是非一度私の部屋を訪ねておくれ。彼女がうたふアヹ・マリアを聞いておくれ。そして私の今の幸福を喜んでくれるがいい。では、……ソフィアはもう立ち上つた。「お休みなさい」と彼女は云ふ。「お休みなさい、」ソフィアもお前も。……

（大正十一年十一月稿）



野ざらし

豊島與志雄

一

「奇體な名前もあるものですなあ……慾張つた名前ぢやあありませんか。」

電車が坂路のカーヴを通り過ぎて、車輪の軋り呻く響きが一寸靜まつた途端に、さういふ言葉がはつきりと聞えた。兩腕を胸に組んで寒さうに――實際夕方から急に冷々としてきた晩だつた――肩をすぼめてゐた佐伯昌作は、取留めもない夢想の中からふと眼を擧げて見ると、印半纏を着た老人の日燒した顔が、髭を剃り込んだ頤をつき出し加減にして、彼の横から斜上の方を指し示してゐた。其處には、車掌と運轉手と二つ並んだ名札の一つに、木和田五重五郎といふ名前が讀まれた。

「私はこれで日本六十餘州を歩き廻つたですが、かういふ名前に出逢つたなあ初めてゞさあ。ゴジューゴロー……何とか讀み方があるんでせうが……慾張つた名前ですな。私に七十になりますがね……」

そのいやに固執した「慾張つた」のすぐ後へ、七十といふ年齢が突拍子もなく飛出したので昌作は知らず識らず笑顔をした。

「八十八といふ名前もあるぢやないか。」

「そいつあ世間にいくらもありまさあ、ヤソハチといふんでね。」

「もつと上にゆくと、八百八といふのがあるよ。」

「へえ？八百八……。」

「そら、伊豫の松山の八百八狸つて有名な奴さ。」

「へえー、なるほど……。」

日本六十餘州を跨にかけたといふその老人は、たゞ口先だけで感心しながら、分つたのか分らないのか何れとも知れない顔付で、なほ木和田五重五郎の名札を眺めてゐた。向ふ側にずらりと並んでる無關心な男女の顔の二三に、薄らとした微笑が浮んだ。

「何とか讀み方がありませうね。まさかゴジユーゴローぢやあ……ちよいと通用しぬくかあねえかな。」と云つて老人は首を振つた。「何せえ慾張つた名前ですな。」

日焦けのした顔の皮膚がいやに厚ぼつたくて、醉つてるのか白面なのか見當がつかなかつた。昌作はぼんやりその顔を見つめた。と俄に、ぎいーとブレーキが利いて電車が止つた。入口に先刻から素知らぬ風で向ふ向きに立つてゐた車掌が、大聲に停留場の名を呼んだ。昌作は急な停車にのめりかけた腰をそのまゝに立ち上つて、「失敬、」と口の中で云ひ捨てながら、慌てゝ電車から降りた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——さうしたことが、いつもなら佐伯昌作の愉快な氣分を唆る筈なのに、今は却つて、寂寥と云はうか焦燥と云はうか、兎に角或る漠然たる憂鬱を齎したのである　九州の炭坑のことゝ橋本澤子のことゝが、同じ重さで天秤の兩方にぶら下つてゐた。一寸した心の持ちやうで、その何れかゞぴんとはね飛されることは分つてゐた。それが恐ろしかつた。自分の心の持ちやうによつてゞはなく、どうにもならない實際上の事柄によつて、何れかに勝利を得させたかつた。

先づ九州の炭坑から……そして次に橋本澤子。

さういふ決心が、「木和田五重五郎」のことで妙に沈み込みがちになるのを、彼は強ひて引立てゝ、片山禎輔の家へ行つてみた。けれど、玄關から勝手馴れた茶の間へ通るうちに、重苦しい憂鬱がすつかり心を鎖してくるのを、彼ははつきり感じた。

「やあ、どうしたい？」

彼の姿を見ると、片山禎輔はいつもの定り文句を機械的に口から出して、長火鉢に伏せてゐた少し酒氣のある顔を擧げた。それから一寸眉根を曇らせた。昌作は默つて長火鉢の横手に坐つたが、禎輔が何か苛立つてること、先刻から苦しい思ひに沈んでゐたこと、宛も何かの中に落込んで出口を求めやうとでもしてるらしいこと、などを漠然と感じた。そしてそれが、不思議にもこの自分昌作に關係してることのやうな氣がした。彼は次の言葉を待つた。がその言葉は、彼の豫期しない方面に飛んでいつた。

「君は富士の裾野を旅したことがあるかい？」

「ありません。」と昌作はぼんやり答へた。

「僕は富士の裾野を旅してる所を夢に見たよ。そして實際に行つてみたくなつた。富士の……幾つだつたかね……五

湖、七湖、八湖……あの幾つかの湖水めぐりつて奴ね、素敵だよ、君。鈴をつけた馬に乘つて、尾花の野原をしやんしやん〳〵とやるんだ。……河口湖つてのがあるだらう。その湖畔のホテルに大層な美人が居てね、或る西洋人と……多分フランス人と、夢のやうな而も熱烈な戀に落ちた、なんてローマンスもあるさうだよ。山上の湖水と……餘り山上でもないが、海岸に比ぶれば土地はよほど高いんだらう、まあ山上の湖水と云へば云へないこともないね。……あゝ、さうだ、君は、山上の湖水なんかにどうして鰻がゐるか知つてるかい？ 鰻つて奴は、必ず海に卵を産んで、その卵から孵つたのが、川を溯つて內地……と云つちやあ變だが、海に遠い山間の溪流へまでやつて來るんだよ。それが、出口も入口もない山上の湖水にまで、どうして來ると思ふ？ 知らないだらう？ そいつが面白いんだ。何とか云ふ學者の說に依ると、鰻の小さい奴が、まあ幼蟲だね、それが水鳥の足にくつついて山上の湖水まで運ばれるんださうだ。面白いぢやないか。」

聲に曇りはなかつたけれど、その調子は變に空疎で氣が籠つてゐなかつた。と云つて、人を馬鹿にしてるのでもないらしかつた。昌作は何故ともなく氣壓される氣がして、たゞぢつと待つてゐた。禎輔の心が今そんな所にある筈ではなかつた。九州の炭坑に行くか否かの昌作の返答こそ、今晩の問題であるべき筈だつた。昌作はいつもの禎輔の調子から して、顏を見るなりすぐに問題へ觸れられること〻豫期してゐた。所が何といふ他愛もない話だつたらう！ 或は高壓的に返答を引出すのを遠慮して、つまらないことに話を外らしながら、昌作の方から切り出すのを待つつもりかも知れない、まさか、先日まであんなに急きこんでゐたのを忘れたのではあるまい、など〻昌作は考へてみた。けれど禎輔の話は、案外深みへはいつていつた。

「い〻天氣ぢやないか、この頃は。こんなだと實際旅に出たくなるね。こないだ僕は久しぶりで郊外に出てみたよ。……

然し。何と云つてもう秋の終りだね。いくら晴々とした日の光でも、云ふに云はれぬ悲愴な冷かさがある。

　野ざらしを心に風のしむ身かな

この句を僕は口の中で繰返し／＼歩いたものだ。」

突然、殆んど瞬間的に、心をつき刺すやうな眼付をぢろりとまともに受けたのを、昌作は感じた。喫驚して顔を擧げると、禎輔は押つ被せて尋ねかけた。

「君は飽のとろゝつてものを知つてるかい？」

昌作は知らないといふ顔色をした。

「君のお父さんや僕の親父などが、日本一の旨い料理だと云つて話してきかしたものだ。僕はまだ食つたことはないがね。東海道の何とかいふ邊鄙な驛にあるさうだ。取り立ての鮑をね、いきなり殼をはいで、岩のやうに堅くなつた生身の肉を、大根研子でおろして、とろゝにしたものださうだ。……殘酷ぢやないか、君。生身を大根研子でおろされる時の感じは、どんなだらうね。それから、榮螺の壺燒だつて……。」

さうなると、もう一種の述懐ではなくて、何か他意ありさうな攻撃的な語調だつた。昌作は返辭に迷つて、相手の顔をぼんやり見守つた。顴骨の張つた四角な顏、わりに小さな眼と低い頑丈な鼻、短く刈り込んだ口髯、顏全體が何處となく間のびしてゐながら、その間のびのしたなかに、強い意力と冷い皮肉とを湛へてゐた。眉の外れに小さな黒子があつた。昌作の視線は次第にその黒子に集つてきた。その時、殆ど敵意に近い感情が禎輔の顏に漂つた。何かどしりとした言葉が落ちかゝつて來さうなのを、昌作は感じた。

けれど、丁度その時、奥の室から達子が出て來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いらつしやい。」

下宿の心持ち厚い受口から出る、多少切口上めいた語尾のはつきりした言葉で、彼女は昌作を迎へておいて、其處に坐つた。そのために室の中の空氣が一變した。禎輔の顏は俄に無關心な表情になつた。宛も、覗き出しかけた彼の心が再び奥深く引込んだかのやうだつた。妻の前に於ける彼のさういふ態度の變化が、一寸昌作を驚かした。元來禎輔は、深い問題を論じ合つてる熱心な際にも、妻の達子が其處に出て來ると、俄にくつろいだ態度を取る癖があつた。妻をいたわるのか或は妻の手前を繕らうのか、または、妻を輕蔑してか或は恐れてか、何れともそれは分らないが、兎に角俄に、餘悠のある何喰はぬ態度をするのだつた。その無意識的な癖を昌作は嫌だとは思はなかつた。然しその晩の禎輔の態度は、單なるさういふ癖ばかりではないらしかつた。何かしら意識的な努力の跡が仄見えた。昌作は一寸心を打たれざるを得なかつた。それと共に、今迄禎輔と對坐中、自分が殆んど一言も口を利かなかつたといふことが、ふいに頭に浮んだ。禎輔ばかり口を利いて昌作が無言でゐるといふやうなことは、昌作が少し伸ひすぎて餘分の金を貰ひに來るやうな時にでも――(そんな時禎輔は別に小言も云はずに金を出してやつた)――今迄に餘りないことだつた。昌作は變に落付かない心地になつた。然し達子は彼に長く猶豫を與へなかつた。いつもの卒直さで尋ねかけてきた。

「佐伯さん、どうしたの、九州へ行くことにきめて? それとも行かないの?」

昌作は初めその問題を豫期してゐたものゝ、一度禎輔からあらぬ方へ心を引張られた後なので、咄嗟に思ふことが云へなかつた。

「私いろ〳〵考へてみたけれど、やはり行つた方がよくはなくつて?」と達子は構はず云ひ進んだ。「炭坑と云へば一寸つらいやうだけれど、何も坑の中へはいつて仕事をするのぢやなし、普通の事務員だと云ふから、却つてそんな所で働い

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た方が面白かないでせうか。月給だつて初めから百五十圓貰へば、云ひ分ないでせう。そんなよい條件はなか〳〵探したつてあるものですか。坑主の時枝さんが、昔片山のお父さんに世話になつたとかで、片山が無理に賴んだ上のことですから、きつと出來るだけの……破格の待遇に違ひないわよ。手紙にもさう書いてあつたわ、ねえ、あなた。」彼女は顧輔の方をちらと見やつて、また昌作の方へ向き返つた。「そりや東京を離れるのは嫌でせうけれど、一時九州の炭坑なんて思ひもよらない處へ行つてみるのも、却つて生活を新たにするのによいかも知れないわ。あなたはいつも、生活を新たにするつて、口癖のやうに云つてたぢやないの。」

「えゝ、そりやあさういふ氣持は常にありますが……。」と昌作は漸く口を開いた。「兎に角、生活を新たにするには、それだけの……軸が、心棒が、必要なんです。それを探し廻つてるんです。所が生活を立て直すだけの心棒なんてものは……。」

「冗談じやないわよ。」と達子は彼を遮つた。「今はそんな議論の場合ぢやあないわ。九州へ行くか行かないかの問題ぢやありませんか。行くのが却つてその心棒とかになりはしないかと、私は云つたゞけよ。……でどうするの、行つて、それとも行かないの？」

「さうですね……どうしたもんでせう？」

「あら、あなたはまだ決めてゐないのね。でも今晩、行くか行かないかの返事をする約束ぢやなかつたの！」

「そのつもりでしたが、もつと詳しく聞いてからでないと……。」

「聞くつて、どんなことを？　もうちやんと分つてるぢやありませんか。」

勿論大概のことは分つてゐた。片山の知人の時枝といふ坑主が、片山の賴みで、佐伯昌作を事務員に使つてみようと

いふことになり、而も百五十圓といふ破格の月給をくれて、なほ本人の手腕によつては追々引立てゝやるとのことだつた。その炭坑は北九州でも可なり大きい方のもので、他に事務員も澤山居るから、初めは見習傍々遊んでゐてもよいといふ、寛大すぎる條件までついてゐた。然しさういふ餘りに結構な事柄こそ、却つて昌作を躊躇せしめたのである。

「然し私には、餘りよい條件だから却つて、變な氣がするんです。」

「それは炭坑のことですもの、」と逹子は譯なく云つてのけた、「百五十圓やそこいら出して一人の人を遊ばしといたつて何でもないんでせう。それに、時枝さんの方では、片山からの頼みだから、片山のお父さんへの恩返しつて氣持もあるのでせうから。」

「一體、九州の直方つて、どんな土地でせう？」

「そりやあ君、山があつて、そして朱欒といふ大きな味柑が出來る處さ。」と突然禎輔は冗談のやうに云つた。「僕も一度あの朱欒のなつてる所を見たい氣がするね。いつか時枝君が送つてくれたのなんか素敵だつたよ。綿を堅めたやうな眞白な厚い皮の中から、薄紫の實が飛び出してくるんだからね。たしか君も食べたらう？」

「えゝ、あいつは旨かつたですね。」

「僕はね、あの種を少し庭の隅に蒔いたものさ。所が折角芽を出すと、女中が草と一緒に引つこ抜いちまつたんだ。」

「そんなことはどうだつていゝぢやありませんか。」と逹子は急に苛立つてきた。「行くとか行かないとか、一應の返事を時枝さんへ出しておかなければならないと、あなたはあんなに氣を揉んでゐらしたぢやありませんか。向ふで好意から取計つて下さるのを、餘り長く放つておいては、ほんとに濟みませんわ。……佐伯さんだつてあんまり我儘よ。今晩どちらかの返事をすると約束しておいて、まだ元のまゝのあやふやな氣持なんですもの。そんなことぢや、いつになつても

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きまりつこないわよ。私いろ〳〵考へた上で、屹度あなたが行らつしやるものだと思つたものだから、もうお餞別の品まで考へといたのよ。繻絆や襯衣や足袋や……そんなものまで、かうしてあゝしてと考へといたのよ。それなのに……。私もう知らないから、勝手になさるがいゝわ。」

「そんなことを云つたつて、」と禎輔が引取つて云つた、「佐伯君にもいろ〳〵都合があるだらうし、さう急に決心がつくものかね。」

昌作は、此度は自分が何とか云はなければならない場合だと感じたが、一寸言葉が見出せなかつた。彼の心には再び、何とも知れぬ惑はしいものが被さつてきた。實際先達てから、行くか否かの返事だけなりと時枝へ出しておかなければならないと、しきりに昌作へ決心を强いたのは、そして、その晩までに返事をすると昌作へ約束さしたのは、禎輔自身だつた。所が今急き込んでるのは達子だけで、禎輔自身はどうでもよいといふ投げやりの態度を取つてるのだつた。その投げやりの態度の底に何かゞあるのを、昌作は不安に感じた。殊にこれまで、また今後とも恐らく、自分の親戚として且つ保護者として、そして寛大な眞面目な人格者として、禎輔を尊敬してゐたゞけに、昌作は猶更それを不安に感じた。

「私は今一寸氣持に引掛つてることがありますから、」と昌作は突然云つた、「それが片附くまで……もう四五日、待つて頂けませんでせうか。」

「あゝゆつくり考へるがいゝよ。今ぢやあ何でもないが、九州へ行くと云へば昔では……。」

何故かそこで禎輔がぷつりと言葉を途切らした。然し昌作はその皮肉な語氣からして、流刑人の行く處だといふやうな意味合ひを感じた。そして慌てゝ辯解し初めた。

「いゝえ、九州だからどうのかうのと云ふんぢやありません。たゞ自分の氣持に引掛つてることがありますので、それを

……。」

「まあどうでもいゝさ。」と禎輔は上から押被せた。「誰にでもいろんな引掛りはあるものだよ。ゆつくり考へ給ひ。時枝君の方へはいゝやうに云つとくから。」

そして彼は一變して急に眞面目な眼色で、昌作の顏をぢつと見つめた。昌作は眼を外らして次の言葉を待つた。然し禎輔は何とも云はなかつた。ふいに立上つて柱時計を眺めた。

「もう八時だ。僕は一寸急な用があるから出掛かけるよ。ゆつくりしていき給ひ。ぢきに歸るから。」

「何處へ行らつしやるの？」と達子が驚いたやうに彼を見上げた。

「會社の用で上田君に逢ふことになつてるのを忘れてゐた。なに一寸逢ひさへすればいゝんだ。」

そして彼は羽織だけを着換へて、無雜作に出かけていつた。玄關で一瞬間立止つて、何やら考へてるらしかつたが、そのまゝ默つて表へ出た。

昌作は達子の後について茶の間へ戻つたが、何だか急に薄ら寒い氣持になつた。その彼の顏に、達子はぢつと眼を据ゑながら云つた。

「どうしたの、ぼんやりして？　そして變な顏をして？」

「片山さんは私に怒つてらつしやるんぢやないでせうか？」

「なぜ？」

達子は眼を丸くした。

「何だかいつもと樣子が違つてるやうぢやありませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうして？」

達子の丸い眼には卒直な澄んだ輝きがあつた

「さうでなけりや……」と昌作は漸く落付いて云つた、「……喧嘩でもなすつたんですか。」

「まあ！」達子はもう我慢出來ないといふ風に早口で云ひ進んだ。「あなたの方が今日はどうかしてるのよ。いやにひねくれて、夫婦喧嘩をしたかなんて、そんなことを聞く人があるものですか。そりあ片山だつて、あなたが餘りあやふやだから、少しは厭氣がさすでせうよ。けれど怒つてなんかゐませんわ。また喧嘩なんかもしはしませんわ。」

「いえ私はそんな……。云ひ方が悪かつたら御免下さい。たゞ何だか片山さんの様子が、いつもと違つてるやうだつたものですから……。」

「誰にだつて心配なことがある時もあるものよ。」と達子は心を和らげて云つた。「會社の方に何かごたごたがあつて、それに頭を使ひすぎなすつてるらしいのよ。夜中に眼を覺したり、朝早く起き上つたりなさることが、時々あるものですから、私も少し心配になつて聞いてみると、いくらか神經衰弱らしいと云つて、自分を憐れむやうに微笑んでゐなさるのでせう。自分で微笑みを洩らしてる間は、神經衰弱なんて大したことぢやないわよ。……けれど、兎も角さういふ際ですから、あなたも餘り氣をもませないやうに、早くどうにか片をつけたらいゝぢやありませんか。」

達子が自分を急き立てゝるのはその故だなと、昌作はふと考へついた。けれど、禎輔のさうした様子の方へ、彼の心は多く惹かされた。禎輔が夜中に眼を覺したり、ふいに朝早く起き上つたりすることが、會社の何かの事件のためではなくて、他に深い原因があるらしいのを、直覺的に彼は感じた。そして我知らず尋ねてみた。

「その他に片山さんの様子に變つたことはありませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まあ！……全くあなたの方が今日は變よ。一寸何か云へば、すぐ片山を狂人扱ひにして！」

達子からぢつと見られてる顏を、昌作は伏せてしまつた。心が苦しくなつてきた。默つて居れなかつた。

「でもあなたは、片山さんがそんなに苦しんでゐらつしやるのに、平氣で落付いてゐられるのですか。」

「あなたはなほ變よ！……私達のことをあなたはよく知つてるぢやありませんか。片山はどんな苦しいことがあつても、その苦しみが過ぎ去るまでは決して人に云はない性質なんでせう。私初めはそれを嫌だと思つたけれど、馴れてみると、その方がいゝやうですわ。なぜつて、考へてもごらんなさい、片山がつまらないことに苦しんでる時――苦しみなんて大抵つまらないことが多いものよ――私まで一緒に苦しんでごらんなさい、家の中はどうなるでせう？　二人で陰氣な顏ばかりつき合してたら、堪らないぢやありませんか。苦しみを二重にするばかりですわ。片山も私もそのことをよく知つてゐるのです。それで片山は、自分に苦しいことがあつても、私には何とも云ひませんし、私はまた、出來るだけ晴々とした顏をして、片山の苦しみを和らげてやるんですのよ。でも萬一の場合になつたら、片山の苦しみが餘り大きくなりすぎたら、私にだつて、その苦しみの半分を背負うだけの覺悟は、ちやんとついてゐますよ。片山もそれはよく知つてゐます。そして私達は互に信賴してるわけですよ。」

さういふ二人の生活の調子を、昌作は知らないではなかつた。然しそれは、今彼の心に變な暗い影を投じてるものとは、全く無關係な事柄だつた。そして彼は、その暗い影について、その影を投じてくる禎輔のことについて、どう云ひ現はしてよいか、もどかしい思ひのうちに沈默してゐた。達子も暫く默つてゐたが、やがてまた彼を當の問題に引出しかゝつた。

「ねえ佐伯さん、もうあなたもいゝ加減眞面目になつて、自分で生活を立てるやうになさいな。それには、此度のこと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は丁度よい機會ぢやありませんか。こんなよい就職口は、また探さうたつてありはしないわよ。それは九州なんかに行くのは嫌でせうけれど、それかつて、東京に居てどうするつもりなの。私こんなことを云ふのは嫌だけゝど、あなたのお母さんが亡くなられる時、片山のお父さんに預けておかれた財産だつて、もうとつくに無くなつてるぢやないの。片山はあゝいふ人ですから、あなたの月々の費用なんか默つて出してゐますが、そして私が、もう佐伯さんも自分で働いて食べるやうに意見してあげた方がいゝつて云ふと、佐伯君も人に意見される年頃でもあるまいし、何か考へがあるんだらうなどゝ、却つてあなたを庇つてはゐますが、それをいゝことにして、いつまでものらくらしてゐては、あなたもあんまり冥利につきはしなくつて？ 私今度は否でも應でも、あなたは暫く九州に行つて辛棒なさるが本當だと、心から信じきつてるのよ。片山があんなに骨折つてくれたのをそのまゝにしておいて、一體あなたはどうするつもりなの？」

「いえ私は、九州行きを斷るつもりぢやないんです。たゞ……どうして片山さんが私を九州なんかに……。」

昌作はしまひまで云ひきれなかつた。逹子の眼に突然嚴しい光りが現はれたのだつた。そして昌作は、自分の云はうとしてることが、相手にどう響くかを感じた。逹子が腹を立てるのは當然だつた。それは全く忘恩の言葉だつた。然し彼に云はせると、これまであんなに寛大と溫情とを以て自分を遇してくれた禎輔が、遠い九州の炭坑なんかに自分を追ひやらうとすることこそ、最も不可解なのであつた。どうせ就職口を探してくれるのなら、東京もしくは何處かに奔走してくれさうなものだつた。九州の炭坑とは、全く夢にも思ひがけないことだつた。それとも、さういふ處でなければ昌作の生活が眞面目になりはしないといふのなら……それまでのことだけれど。然しそれならそれと、なぜ禎輔は明かに云つてくれなかつたのだらう。信念も方向もないぐうたらな生活を送つてる昌作にとつては、九州の炭坑と云へば、全く流刑に等しいと感ぜられるのだつた。そのことを、明敏な禎輔が見落す筈はなかつた。「追つ拂はうとしてるのだ！」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

としか昌作には思はれなかつた。そしてそれが、今迄凡てを許してくれてゐた禎輔であるだけに、昌作には不可解に思へるのだつた。本當の心からのことを聞きたい、その上で忍ぶべきなら忍んで九州へ行きたい、といふのが彼の希望の凡てだつた。

達子はふいに叫んだ。

「あなたはそんなに心まで曲つたんですか！」

率直な達子に對しては、昌作は何とも返辭のしやうがなかつた。

「私あなたをそんな人だとは思はなかつた。」と達子は云ひ續けた。「私達があなたのためを思つてやつてることを、あなたは、厄介拂ひをする氣で九州なんかへ追ひやるのだと思つてるのでせう。いえさうですわ。あなたには人の好意なんてものは分らないんです。……これでも私達は、あなたの唯一の味方と思つてゐたんですよ。あなたが珈琲（カフェー）に入りびつたり、道樂をしたり、ぐずぐず日を送つたりしてゐるのを、そして牛込の伯父さんにまで見放されたのを……それを私達は、始終好意の眼で見てきてあげたつもりですわ。そしてあなたが自分で云つてたやうに、いつかはあなたの生活が立て直るに違ひないと、ほんとに信じてゐたんですわ。それで片山は東京で方々就職口を内々尋ねて……働くことによつてしか生活はよくならない、佐伯君にとつては仕事を見出すことが第一だ、と片山は云つてるのです。私もさう思つてゐます。で、東京にいゝ口がないので、少し遠いけれど、九州の時枝さんに賴んで上げたのではありませんか。それをあなたは、考へるに事を缺いて、追つ拂ふなんて……！」

昌作は默つて頭を垂れてゐた。達子の叱責が落ちかゝつてくるに隨つて、眼の中が熱くなつてきた。達子の言葉が途切れてから、暫くその續きを待つた後に、少し聲を震はせながら云つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私が悪かつたんです。私は心からあなた方二人に感謝してゐます。けれどたゞ、片山さんが何もかも、心の底まで、すつかりのことを云つて下さらないやうな氣がしたんです。それは私の僻みだつたんでせう。……もう何にも申しません。行きませう、九州の炭坑へ。そしてうんと働いてみます。全く私には、仕事を見出すことが第一の……。」

その時、殆んど突然に、いつも遠くを見つめてるやうな橋本澤子の眼が、彼の頭にぽかりと浮んだ、瞬間に彼は、或る大きなものに抱きすくめられたやうにも、または行手を塞がれたやうにも感じた。先が云ひ續けられなかつた。

彼の表情の變化に、達子は眼を見張つた

「佐伯さん、あなた何か……？」と彼女はやがて云つた。

「えゝ、あるんです。」と昌作は吐き出すやうにして云ひ出した。「私を引き留めてるものがあるんです。實は私は何にも云はないで、すぐにも承諾して九州へ行きたかつたんです。仰言る通り、どの點から考へても、私は九州へ行つた方がいゝんです。第一自分で自分に倦き〳〵してゐます。今迄のやうに目的のない生活は、いくら私にでも、さう長く續けられるものではありません。初め片山さんからそのお話を聞きました時、私は何だか新らしい生活が自分の前途に開けて來さうな氣がしました。所が、行つてみやうと思つた瞬間に、急に堪らない淋しさに襲はれたのです。自分でどうにも出來ない淋しさなんです。その時まで私は自分でも知らずにゐましたが、私の心は或るものに囚へられてゐました。その或るものが、私にとつては太陽の光でした。いえ、前から……前からぢやありません。その時からです。東京を離れて九州へ行かうと思つた瞬間からです。そして自分で自分に口實を拵へるために、片山さんの氣持に、あなた方の氣持に、いろんな疑ひを挾んでみたのです。さうです、私は行くのが本當だと知つてゐながら、行かずに濟むやうな口實が欲しかつたのです。いやそればかりぢやありません。九州といふのが餘り思ひがけない土地だつたものですから、淋し

さの餘りに、或るものに縋りついたのかも知れません。九州と聞いて實際島流しにでも逢つたやうな氣がして、闇の中へでもはいつて行くやうな氣がして、そのために光が欲しくなつたのかも知れません。いゝえ、それよりも寧ろ、前からその光を受けてゐたのが、突然はつきりしてきたのかも知れません。……と云ふよりやはり……。」

云ひかけて彼は急に口を噤んで、暫く室の隅を見つめた。それから一變して、半ば皮肉な半ば自嘲的な調子になつた。

「もう止しませう。そんな詮議立てをしても無益ですから。どつちだつて同じことです。兎に角私は今、率直に云へば、或る女に心を惹かされてゐるんです。その氣持の上の引掛りが取れるまで、もう四五日、返事を待つて下さいませんか。」

「ぢやあ、あなたはやつぱり……。」と達子は叫んだ。

が昌作は、云つてしまつてから、非常に不快な氣持になつた。何故だか自分にも分らなかつた。もう何にも云ひたくなかつた。

「それならさうと、初めから仰言ればいゝのに。」と達子は云ひ續けてゐた。「私も或はそんなことではないかと薄々感じてはゐたけれど、あなたがあんまり白を切つてるものだから、ついいぢめてもみたくなつたのよ。ごらんなさいな、あなたは隱さうたつて隱しきれるものぢやないわ。……で、どんな人なの、その方つていふのは？ ねえ、すつかり云つてごらんなさいな。出來ることなら、何とかしてあげますから。片山に云つて惡ければ、云ひはしませんから。え、一體どういふ風になつてるの？」

昌作は彼女の言葉をよく聞いてゐなかつた。何だか自分自身を輕蔑したい、といふだけではまだ足りない氣持だつた。

二人は可なり長い間默つてゐた。そして昌作は突然云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何れあなたには詳しくお話する時が屹度來るやうな氣がします。もう四五日待つて下さい。何もかもそれまでに片をつけますから。」

そして彼はぶつきら棒に立上つた。まだ何か云ひたさうにしてる達子から無理に身をもぎ離すやうにして、表へ出て行つた。玄關の薄暗い所で、聲を低めて云つた

「片山さんには暫く内密にしておいて下さいませんか。」

「えゝ、その方がよければ、云はないでおきませう。……あの、佐伯さん、私がもし電話でお呼びしたら、すぐに來て下さいよ、屹度ね！」

昌作は何故ともなくほろりと涙を落したのだつた。そして、達子の最後の言葉は彼の耳に殘らなかつた。

二

霧の深い晩だつた。佐伯昌作は何かに追ひ立てられるやうに、柳容堂の二階の喫茶店へ急いだ。

運命と云つたやうなものがぢり／＼と迫つてくるのを、彼は感じたのだつた。そして、達子へ對して四五日の後にと誓つたのは、寧ろ自ら自分の心へ對してだつた。九州の炭坑へ行くべきなのが本當であると、彼ははつきり知つてゐた。片山禎輔の樣子に暗い疑惑が生じたにもせよ、そんなことを考慮に入れるのは、自分が餘りに卑怯なからだと思ひたかつた。何にも云はないで、默つて忍んで行かう！……然しその後から、橋本澤子のことが同じ強さで浮んできた。九州へ行くといふ意志が強くなればなるほど、同じ程度に澤子へ對する愛着が強くなつていつた。九州へなんか行かないでもよいといふ氣になれば、澤子なんかどうでもよいといふ氣になつた。昌作はさういふ自分の心を、どうしていゝ

か分らなかつた。九州の炭坑のことを思ふと、眞暗な氣がした。澤子のことを思ふと、華やかしい氣がした。さういふ闇の暗さと光の明るさとが、同時に、全く正比例して强くなつたり弱くなつたりした。そして、澤子を連れて九州へ行くことは、到底望み得られなかつた。

「兎も角も俺は決心をきめなけりやならないのだ！」

昌作は殆んど絶望的にさう呟いて、淸楚とも云へるほど上品な趣味で化粧品類が並べてある店の方を、ちらりと見やりながら、柳容堂の薄暗い階段を上つて行つた。明るいわりに心持ち狹い二階の室に出ると、彼は俄に眼を伏せて、壁際の小さな圓卓に行つて坐つた。

薄汚れのした古いペーパーの洋酒瓶が兩側にずらりと並んで、眞中に大きな鏡のついてる帳場戸棚の向ふから、きりつと襟を合した澤子の姿が現はれた。彼女は昌作の方をぢつと見定めて、眞面目な顔の表情を少しもくずさずに、眼で一寸會釋をしながら、彼の方へ近寄つて來た。彼は眩しいやうな氣持になつた。瞬間に、さうした餘りに初心な自分の心を、自ら恥しくもまた意外にも感じて、右手で額の毛を撫で上げながら、恐ろしく口早に云つた。

「菓子と珈琲とコニャックとをくれ給ひ。」

それから袂を探つて、煙草に火をつけながら、卓子の上に顔を伏せた。

その時彼は初めて、何故に此處に來たかを自ら惑つた。九州へ行くか行かないかについて、心に喰ひ込んでる彼女に片をつける、それが彼の求めてる重な事柄だつた。それには、暫く澤子から離れて自分の内心を見守るのが當然の方法なのを、却つて反對に、澤子の許へ來てしまつたのである。澤子の許へ來て、何の片をつけるといふのか？　昌作は九州行きを考へてみた時から初めて、澤子の存在が自分にとつて光であるやうに感じたゞけで、外面的に云へば、一人は屢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々顔を合して親しい心持になつてゐるといふ以外に、何等の交渉もない間柄だつたのである。二人の心がぴたりと觸れ合ふ話を交へたこともあるけれど、それもたゞ友人といふ位の範圍を出でなかつた。

「俺は今になつて、初めて戀をでもするやうに、女性といふものを知らない初心者でゞもあるやうに、澤子に戀をしたのであらうか？」

或はさうかも知れなかつた。然し、いくら自分を卑下して考へても、單にそればかりではなかつた。では一體何か？

……その雲を摑むやうな疑問をくり返してるうちに、昌作は深い寂寥の中へ落ち込んだ。

珈琲と菓子とを持つて來、次にコニャックの杯を持つて來た澤子が、彼の上から囁くやうに云つた。

「あとで一寸お話したいことがあるから、待つてゝ頂戴。」

昌作が顏を擧げて、その意味を讀み取らうとすると、彼女は澄ました顏で、さつさと帳場戸棚の向ふへ引込んでしまつた。その入口の所に、も一人の女中――顏に雀斑のある年増の春子――が、壁に半身を寄せかけて佇みながら、室の中をぼんやり眺めてゐた。昌作は慌てゝ眼を外らして、やはり室の中を眺めた。

曇り硝子に漉される電氣の光りがいやにたゞ白くて、白い卓子の並んだ室の中は薄ら寒かつた。往來に面した窓際に、若い五六人の一團の客がゐた。昌作が見るともなく眼をやると、その中に見覺えのある顏が一つあつた。それがしきりにこちらを見てるので、昌作はまた卓子の上に屈み込んで、珈琲とコニャックとを、ちやんぽんに嘗めるやうに啜つた。

彼等は美術のことを論じ合つてゐた。何かの展覽會に關することらしかつた。然し昌作は別に興味も覺えないで、自分一人の思ひに沈み込みながら、途切れ／＼に聞えてくる單語を、上の空に聞き流してゐた。そのうちに、彼は我知らず耳を欹てた。彼等の聲が俄に低くなつたのにふと氣を引かれて、隱れたる天才だのモデルだの好惡の群像だのといふ語を、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぼんやり聞いてるうちに、宮原といふ名前が耳に留つたのである。その時表を電車が通つて、次の言葉は聞えなかつたが、電車の響きが靜まると、わりにはつきりと、想像も手傳つて、彼等の會話が聞き取られた。

A――「好きな部類にはいるんだと、僕は思ふね。」

B――「僕は嫌いな方にはいるんだと思ふよ。」

C――「なあに、兩方さ。右のプロッィルが好きな方面、左のプロフィルが嫌いな方面、つてことになるに違ひないよ。惚れてはゐるが意地もあるつてわけさ。」

M――「僕には一體あの事件がよく分らないよ。細君を追ん出してまでおいて、どうしてS子と一緒にならなかつたんだらう?」

C――「そりやあ君、戀のいきさつなんか凡人には解せないさ。」

N――「兎に角一風變つた女だね。好惡の群像なんてでたらめだらうが、繪を習つてるといふのは本當なのか。」

C――「本當さ。松本氏の畫塾といふことまでつきとめたんだ。好惡の群像だつて今に實現するよ。何しろこんな所にゐて、そして客に對して、好惡の態度をあんなに露骨に示すんだからね。畫家になりきつたら、好惡の群像くらゐ譯はないさ。君達の顔だつてその中に入れられるかも知れないぜ。」

A――「そんなら、君子危きに近寄らずだ。もう行かうよ。」

C――「體のいゝことを云つて、實は一つの危きに近寄りたいんだらう。」

それから話は外の方に外れて、彼等の間だけに通用する符牒の多い事柄にはいり込んだので、その聲はまた高くなつたが、昌作にはよく分らなかつた。けれど昌作にとつてはそんなことはどうでも構はなかつた。彼の頭は聞き取つた事

柄の方にばかり向いてゐた。澤子が繪を習つてるといふことを、彼は曾て夢にも知らなかつた。それかと云つて、宮原の話やなんかを考へ合せると、それは確かに澤子のことに違ひなかつた。澤子が繪を習つてるのを今迄自分に隱してゐたといふことが、重く彼の胸にのしかゝつてきた。固より、澤子の以前の生活やその智力などを考へてみれば、彼女がこの喫茶店の女中になつたのには、何か他に理由があるに違ひないとは、昌作にも推察されないではなかつた。然し彼がそのことに話を向けようとすると、彼女はいつも言葉を外らしてしまつた。しまひには彼も諦めて、彼女から云ひ出すまで待つことにしてゐた。所が今偶然、彼女が繪を習つてるのを知つたのである。それが、彼女自身の口からではなくて、偶然によつてゞあるのが、昌作には不滿だつた。その不滿から、徐々に、絶望に似た憂苦がにじみ出してきた。

向ふの連中が、春子に勘定を拂つて出て行つた後、昌作も立ち上らうとした。其處へふいに澤子が出て來た。その顏を見て昌作は、彼女の先刻の言葉を思ひ出した。彼は沈んだ聲で云つた。

「僕に話があるつて、どんなことだい?」

「もういゝのよ。」と澤子は落付いた調子で答へた。「先刻はお話するつもりだつたけれど、よく考へてみると、自分でも分らなくなつたから。」

昌作は彼女の顏をしげ〳〵と見つめた。

「私ね、思つてることを口に出したり書いたりしようとすると、何だかはつきりしなくつて、よく云へないわ。」

「そりや誰だつてさうだらう。」

「さうかしら?」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

澤子は卓子の横手に坐つた。昌作は彼女の繪畫のことを云つてみようと思つたが、云つた後で自分が益々陰鬱になりさうなのを感じた。それほどこだはつてるのが我ながら不思議だつた。彼はコニャックの杯をあけて、それをも一杯求めた。

どろりとした強烈な液體の杯を昌作の前に差出して、澤子は斜横の方に腰を下しながら、ふいに云ひだした。

「あなたどちらにきめて？」

「え？」

「そら、九州の炭坑とかのこと。」

昌作は默つて唇をかんだ。

「まだきまらないの？」

「そんなに容易くきめられるものかね。」

「だつて、つまりは分つてるぢやないの。」

「何が？」

「私ね、あなたが結局行らつしやりはしないと思ふわ。行かう〳〵と思つてるうちに、やはり行かずじまひになるに違ひないわ。」

昌作が默つてるので、彼女は暫くしてつけ加へた

「さうぢやないこと？」

「さうかも知れないが……。」昌作は急に苛立つた氣持を覺えて、何かに反抗してみたくなつた。「行くかも知れないよ。

いや、行くのが本當なんだ。僕はぐうたらだけれど、忘恩者にはなりたくない。片山さんには非常に世話になつてるんだ。年齢はさう違はないけれど、僕の第二の親とも云つてい丶位なんだ。中學二年の時に母を亡くして全く一人ぼつちになつてからは、あらゆる面倒をみて貰つたんだからね。盛岡で、學校はしくぢるし、女に……豚のやうな女に引つか丶つて、どうにも身動きが取れないでゐる時、片山さんはわざ〱盛岡までやつて來て、僕を救ひ出してくれたのだ。母が亡くなる時に片山さんのお父さんに預けてゐた財產だつて……勿論それは財產といふほどのものぢやない、五六千圓に過ぎないんだが、それも、僕の病氣の時や、あの豚の女と手を切る時や、長い間の學費なんかに、もうずつと前から無くなつてしまつてる。それを、何とも云はないで、片山さんは今でも每月僕に生活費の不足を出してくれてるんだ。そして僕のために非常に奔走して、僕には勿體ないほどのあの九州の口を探してくれたのだ。いくら僕が恩知らずだつて、はつきりした理由もないのに、斷れるものか。」

　云つてるうちに彼は捨鉢な氣持になつたのだつた。前に話したことはあるけれど、此處に持ち出さずともい丶豚の女のことまで云ひ出して、自ら自分を鞭打ちたかつたのである。彼はなほ云ひ續けた。

「それは片山さんだつて、好意が……親のやうな好意があるなら、僕を九州まで追ひやらずともい丶さ。然し僕はもう片山さんの心をあれこれと詮議立てしたくはない。何もかも默つて受けようよ。僕のやうな者には、全く見ず知らずの新しい世界にでもはいらなけりや、生活が立て直りはしないんだからね。仕事を見付け出してやることが、僕を救ふ途ださうだ。さうかも知れない。仕事さへあれば、朝から晩まで馬車馬のやうに追ひ立てられさへすれば、それで僕の生活が立て直るんだらうよ。他のものは何にも……。」

　昌作は今にも自分が泣き出しさうになつてるのを感じた。と一方に、自嘲の念が湧いてきた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「下らない！」

さう云ひすてゝ、彼は椅子の上に輕く身體を振りながら　チョコレートの菓子とコニャックの杯とを両手に取つて、一方をかぢり一方を啜つた。

澤子はその樣子を、喫驚したやうな眼で眺めた。

「あなた、何に怒つてるの？」

「怒つてなんかゐやしない。……もし怒つてるとしたら、自分自身に怒つてるんだらうよ。」

「つまんないぢやないの。」

何がつまらないか昌作には一寸分らなかつた。が、それがぴたりと胸にきた。

「さうさ、全くつまらないよ。君なんかには分らない味さ。……畫家なんて呑氣だからね。」

「え？」

「君は畫家になるつもりだつていふぢやないか。」

「私が！……」そして彼女は遠くを見るやうな眼付をした。「あなた、それをどうして知つたの？」

「先刻ちらと聞いたよ。」

「あ、あの嫌な人達？……どうして分つたんでせう？」

「君が此處に來る客の顔をみんな描いて　それを好きな者と嫌いな者とに分けて、好惡の群像とかを拵へるつもりだつて、云つてゐたよ。」

澤子はそれには何とも答へなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうして分つたんでせう？　不思議ねえ。私誰にも知らせないやうにしてたんだけれど。」
「別に隱す必要はないぢやないか。」
「だつて、うるさいんですもの。私雜誌記者なんかしてたんでせう……婦人雜誌ぢやあるけれど……それがこんな所へはいつたものだから、いろんなことを云はれて困るのよ、あなたは知らないけれど、文壇てそりやうるさいもんなのよ。」
「人が何と云はうと構はないさ。」
「だけど……。」
　彼女は急に押し默つてしまつた。その默り方が如何にも執拗だつたので、昌作は突き放されたやうな氣がして、反撥的に默り込んだ。
「私ね、」と長くたつてから澤子は云ひ出した、「實は宮原さんと誓つたことがあるの。これから眞面目に勉强するつて。そして何を勉强したらいゝかさん〲迷つた上で、畫家になりたいと心をきめたのよ。そしてこんな所にはいり込んだのよ。記者と違つて、こゝだと午前中はすつかり隙だし、普通の珈琲店よりいくらかいゝでせう。どうせ國を逃げ出してきて、自分で働かなけりやならないから、これ位のこと仕方ないわ。そして私こつそり、松本さんのアトリエに通つてるのよ。……誰にも分らないやうにするつもりだつたけれど、どうして分つたんでせう？……あなただからお話したのよ。誰にも默つてゝ頂戴、ねえ。」
　昌作には、そんなことを何故に彼女がひし隱しにしてるのか、合點がゆかなかつた。然し別に尋ねてみる氣も起らなかつた。たゞ宮原のことだけが少し氣にかゝつた。宮原と彼女との關係をも少しはつきり知りたかつた。それをどういふ風に云ひ出したらよいか迷つてるうちに、澤子はしみ〲とした調子で云ひ出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あなた毎日何にもしないで暮してるつて、本當?」

昌作はたゞ眉をちらと動かしただけだつた。

「何にもしないで暮せるものかしら?ほんとに何にもすることがなくて、そしてほんとに何にもしないで、……。」

「暮せるさ。」と昌作は突然我に返つたやうに饒舌り出した。「時間なんかぢきにたつちまうものだよ。朝眼がさめると、床の中で新聞をゆつくり讀む――これがなか／＼大變なんだ、半分眠つて半分覺めて讀むんだから、蟻の這ふやうなものさね。普通の者には出來ない藝當だ。それから、十時頃に起き上る。髯を剃つたり髮を解かしたりしてるうちに、時間くらゐわけなくたつてしまう。十一時頃、朝晝兼用の食事をして、新聞をまた隅々まで眼を通したり、ぼんやり空想に――空想といふ奴は、時間つぶしに一番いゝんだ。……夢想と云つた方がいゝかも知れない。眼を覺しながら、時には眼をつぶつて、夢をみるんだからね。日向に蹲つてる猫のやうなものさ。すぐに二時三時にはなる。それから、机の上を片附けたり、何をしようかと考へたり、讀みもしない書物を開いたり、火鉢の火をいぢくつたり、……下らないこま／＼したことが無數にあるんだ。そして四時か五時頃になる。さうなると、夕食の時間を待つばかりだ。君なんかには分るまいが、待つといふことが、單に食事を待つんでもいゝ、結構な時間つぶしなんだ。夕食を濟すと、外を歩きたくなつて散歩に出る。用も當もなしに歩き廻つてると、疲れることもないし、時間のたつのも覺えない。それに電車に乘つたりなんかして、空い、電車を幾臺も待つたりなんかして、家に歸る時分には、もう寢る時間になつてるといふ始末なんだ。……何にもすることがなくて、まるで猫のやうなものさ。下宿に大きな三毛猫が居るんだがね、僕が家に居ると、いつも僕の室にばかりやつて來るよ。僕の室の前に來て、にやごう、にやごう……と二聲三聲鳴くんだ。返辭がないと、すご／＼と歸つて行くさうだ。僕が居る時には、いつまでも立去らない。障子を開けてやると、ごろにゃん、ご

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろにやん、と挨拶をするのさ。ごろにやん、ごろにやん……。」それを昌作は可笑しな調子で云つた。「かういふ風に二三度口の中でくり返してみ給ひ。自分も猫になつたやうな氣がしてくるから。……僕の生活も猫と同じさ。室の中で猫と二人でぢつとしてる。猫の眼が細くなつてくると、僕も夢想のなかでうつとりとする。猫の眼が急に大きくなると、僕もはつと自分に返へる。全く猫の生活だね。」

「だつて、あなたは……。」

「仕事もしてると云ふんだらう。陸軍の方の翻譯をしたり、時には詩や雜文を綴てつみたりね。然しそんなのは仕事ぢやないよ。仕事といふのは、それで自分の生活が統一されるものゝことなんだ。僕の生活にはまるで統一がない。陸軍の方の獨立家屋なんていふ變な翻譯や、死にかゝつた病人の脈搏みたいな韻律(リズム)の詩や、不健全な讀書や、芝居や球突や、それから、多くは猫の生活、そんなのが、仕事と云へるものかね。……僕は自分でも自分に倦き／＼してるんだ。こんな生活を長く續けてると、どんな憂鬱と倦怠とが押つ被さつてくるか、君には想像もつくまい。ロシアの小説によく、退屈でたまらないといふ人物が出て來るね。けれどあんなのはまだいゝよ。退屈にせよ憂鬱にせよ、世紀的の偉大さと深さとがあるからね。所が僕のは何もかも薄つぺらなのだ。ふやけてるんだ。九州の炭坑へでも追ひやられたら……光を失つて闇の中へでもはいつたら……。」

昌作は口を噤んだ。ふと無意識に出て來た言葉から衝動(ショック)を受けて、眼前の澤子に對する情熱が高まつてくるのを感じた。胸の中に苦しい震えが起つた。

澤子は靜な調子で云つた。

「あなたには炭坑よりも農場なんかの方がいゝと、私思つてるわ。盛岡の農林學校に中途までいらしたでせう。その方

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がよほど自然よ。農場で仕事をしながら、昆虫でも研究なさるのは、いゝ生活ぢやないでせうか。そら、いつかお話なすつたでせう、昆虫のことばかり書いてるフランスの何とか云ふ人の書物が……。」

「ファーブルの昆虫記だらう。」と昌作は心が他處にあるやうに非常にゆつくりした調子で云つた。「あんなものはもう嫌だよ。あの世界は大部分爭闘の世界だ。僕はもつと他のものがほしい。鬪ひではなくつて……。」

「では、詩人は?」

「詩人!」

昌作は何故となく喫驚した。

「私あなたの詩を覺えてるわ。」

「僕の詩だつて?」

「いつか醉つ拂つていらした時、私に書いて下すつたぢやないの。淋しければつていふ題の……。」

「知らないよ。」と昌作はぶつきら棒に云つた。覺えてるやうでもあれば、覺えてゐないやうでもあつたが、何だか心の傷にでも觸られるやうな氣がしたのである。

「ぢやあ云つてみませうか。初めの方は覺えてゐないけれど、最後のところだけちゆうに知つてゝよ。

吾が心いとも淋しければ
靜けきに散る木の葉
あはれ日影の凹地へ
表か?……裏か?……

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昨日知れぬ幸を占ふことなかれ。

分つて？」

昌作は思ひ出した。それはまだ九州行きの問題が起らない前、或る晩すつかり醉つ拂つて、ふと澤子の許へ立寄つた時、急に堪らない淋しさを覺えて、その頃作つたばかりの詩を一つ、分り易いやうに紙にまで書いて、云つてきかしたものだつた。その三聯から成る詩の、最後の一聯だつた。そのことが、非常に遠く薄れてる記憶の中から、今ぽかりと目近に浮上つてきた。昌作は顏が赤くなるのを覺えた。……けれど、何だか一寸腑に落ちない所があつた。

昌作は澤子にも一度その詩句を繰返へさした。澤子は低い澄んだ聲で繰返してから、彼の顏をぢつと眺めた。

「一寸變でせう。

「あゝ。おかしいな！」

澤子はおどけたやうなまた皮肉なやうな口附をした。

「私ね、少うし言葉を變へたのよ、一日中考へて。御免なさい。いけなくなつたかしら？　でも、どうしてもうまくいかないのよ。一番終りの句ね、あなたのには、明日をも知れぬ幸を占ふ、とあつたけれど……。」

「さうだ、明日をも知れぬ幸を占ふ、だつた。……も一度君のを云つてくれない？　初めから。」

澤子は自分自身に聞かせるかのやうに、細い聲でゆつくり誦した。

吾が心いとも淋しければ
靜けきに散る木の葉
あはれ日影の凹地へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

表か？……裏か？……

明日知れぬ幸を占ふことなかれ。

明日知れぬ幸を占ふことなかれ！　その感じが昌作の胸にぴたりときた。彼は次第に頭を垂れた。深い〳〵所へ落ちて行く心地だつた。それを彼は無理に引きもぎつて、頭を擧げた。澤子はちらと眼を外らしたまゝ動かなかつた。その顔を昌作は、初めて見るもののやうに見守つた。廣い額が白々とした面積を展べてゐて柔かな頬の線が下細りに細つてる顔の輪廓だつた。薄い髭が生へてゐさうな感じのする少し脹れ上つた唇を、歪み加減にきつと結んで、やゝ頑丈な鼻の筋が、剃刀を當てたことのない眉の間までよく通り、多少尻下りに見えるその眉の下に、遠くを見つめるやうな眼付をする澄んだ眼が光つてゐた。今も丁度彼女はさういふ眼付をしてゐた。それがかすかに揺いで、ふと二つ三つ瞬きをしたかと思ふまに、彼女はいきなり兩の手でハンカチを顔に押し當てゝ、そばめてる肩を震はした。

餘りに突然のことに、昌作は惘然とした。そして次の瞬間には、もう我を抑へることが出來なかつた。とぎれ〳〵に云ひ出した。

「泣かないでくれよ。僕は苦しいんだ。實は……僕に必要なのは、仕事でもない、九州の炭坑でもない、或る一つの………、さうだ、九州へ行くのが、暗闇の中へでもはいるやうな氣がするのは……。」

昌作が言葉に迷つてる時、澤子は急に顔のハンカチを取去つて、彼の方をぢつと眺めた。その表情を見て、昌作は凡てを封じられた氣がした。彼女の顔は、眼に涙を含みながら、冴え返つてるとも云へるほど冷たくそして端正だつた。彼女は靜かな聲で云つた。

「佐伯さん、あなた宮原さんにお逢ひなさらない？私紹介してあげるから。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昌作は咄嗟に返辭が出來なかつた。餘りに意外なことだつた。

「逢つてごらんなさい。屹度いゝわ。」

殘酷な遊戯だ！　といふ考へがちらと昌作の頭を掠めた。けれど、率直な純な光に輝いてる彼女の眼を見た時、信念……とも云へるやうな或る眞直な心強さを、胸一杯に覺えた。彼は答へた。

「逢つてみよう。」

「さう、屹度ね。二三日うちに、四五日うちに、午後……晩……晩がいゝわね。向ふからいらつしやることはないけれど、用があるつてお呼びすれば、屹度來て下さるわ。」

澤子は如何にも嬉しさうに、顔も聲の調子も晴々としてゐた。昌作はそれに反して、深い悲しみに襲はれた。しつこく默り込んで、顔を伏せて、身動き一つしたくなかつた。いつまでもさうしてゐたかつた。澤子も云ふことが無くなつたかのやうに默つてゐた。

けれど昌作は、やがて立上らなければならなかつた。階段に亂れた足音がして、三人連れの客が現はれた。

「おい、珈琲の熱いのを飮ましてくれよ。」

澤子はつと立ち上つてその方を振向いたが、すぐに掛時計を仰ぎ見た。

「もう遲いぢやありませんか。」

「なあに、十時半にはまだ十五分あらあね。君は僕に、一晩に三十枚書き飛ばしたことがあつたらう。因果應報つてやつさ。」

奥から春子が出て來たのと、澤子は何やら眼で相談し合つた。春子が何か云ふまに　客達はもう向ふの卓子に坐つて

ゐた。

昌作はそれらの樣子をぼんやり見てゐた。澤子と彼等との挨拶ぬきの馴々しい調子に、一寸不快の念を覺えた。それから、彼等のうちの一人が、何事によらず自分の見聞をそのまゝ小說に綴る有名な流行作家であることを、見覺えのあるその顏で認めて、可なり嫌な氣がした。彼は澤子がやつて來るとすぐに立上つた。澤子は聲を低めて云つた。

「二三日か一週間か後にね。私電話をかけるから。それまで外に出ないで待つてゝ下さいよ。」

昌作は首肯いた。

三

昌作は奇蹟をでも待つやうな氣で、宮原俊彥に逢ふのを待つた。それは全く思ひもかけないことだつた。昌作が聞き知つてる所に依れば、宮原俊彥は、澤子との戀のいきさつによつて、二人の子供まである細君と別れ、而も澤子と一緒にならずに、今では單なる友人として交際してると云ふ、謎のやうな人物だつた。さういふ俊彥に、澤子へ戀してる昌作が、澤子の紹介によつて逢ふといふことは、何としても意外だつた。然し昌作は、自分自身をもてあつかつて、半ば自棄的な氣持に在つた。何か事變つたものがあれば、尋常でないものがあれば、それへすぐに縋りついてゆき易かつた。と云つてもそれは、好奇心からではなかつた。否彼には好奇心は最も缺けてゐた。たゞ何かしら、心に或る驚異を與へてくれるもの、情意を或る方向へ向けさしてくれるもの、云ひ換へれば、一定の視點を與へてくれるもの、それを欲しがつてゐたのである。そして彼は、變な風に落ちかゝつてきた宮原俊彥に逢ふ機會を、奇蹟をでも待つやうな氣で待ちわびた。宮原俊彥に逢ふことが、もしかしたら、澤子が云ふやうに、自分のためにいゝかも知れない。少くとも、澤子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の以前の（？）……戀人に逢ふことは、途方にくれてゐる自分に何物かを與へてくれるかも知れない……。

昌作は出來る限り家の中に閉ぢ籠つた。宮原俊彦に逢ふまでは、誰にも逢ふまいと心をきめた。片山夫妻へは四五日の猶豫を約束してゐたけれど、どうせ今までぐず〱してゐた以上は、もし二三日後れたとて構うものかと思つた。二三日か一週間外に出ないで待つてゐてくれ、といふ澤子の馬鹿げた命令を思ひ出して、昌作は半ば泣くやうな微笑を浮べながら、その命令を守り初めた。そして彼の所謂、猫と一緒の「猫の生活」が、幾日か續いた。

それほどの寒さでもないのに、八疊の眞中に炬燵を拵へて、顔の所までもぐり込んだ。胸に抱いてる猫の喉を鳴らす聲が低くなつてくると、彼の意識もぼやけてきた。夢をでもみるやうな氣で室の中を眺めた。窓の下の机や本箱のあたりに、彼の生活の斷片が雜居してゐた。友人の世話で引受けてる陸軍省の安價な飜譯……徒らに書き散らしてる詩や雜文の原稿……盛岡で私淑してゐたフランス人の牧師から貰つた聖書……ファーブルやダーウィンなどの著書……重にロシアの小説の飜譯書……和裝の古ぼけた平家物語……それからいろんなこま〱したもの。昌作はそれらをぼんやり眺めたが、いつしか眼が茫としてきて、うと〱としかけた。何かに慴えたやうにはつと眼を開いては、またうと〱とした。午後の二時頃から、椽側の障子に日が射してきた。炬燵の中からむく〱と猫が起き出して、一寸鼻の先を掛布團の端から覗かしたが、いきなり室の眞中に這ひ出して、手足を踏ん張り背中を圓くして、大きな欠伸をした。昌作も何といふことなしに起き上つた。炬燵の溫氣に重苦しい頭痛がしてゐた。何か重大なことをでも忘れたやうに、眉根を寄せて一寸考へ込んだ。それからはつと飛び上つた。淋しければといふ詩のことを思ひ出した。けれど、机の前に行つて本箱の抽出の原稿に手を觸れる時分には、深い憂鬱が彼の心を領してゐた。……昨日知れぬ幸を占ふことなかれ……

……澤子がなほした詩句を口の中で繰返しながら、詩稿を一つ〱眺めてみた。三文の價値もない自分の殘骸がごろ〱

轉つてる氣がした。胸では泣きたいやうな氣持になりながら、顔には自嘲的な皮肉な微笑が漂つた。彼は詩稿をごたごたに抽出にしまつて、讀みつくした新聞をまた取上げた。打ちかけの碁譜がついてゐた。目の數を辿りながら讀んでいつた。終りまでくると、碁盤を引寄せて譜面通りに石を並べ、その先を一人でやつてみた。一寸した心の持ちやうで、白が勝つたり黒が勝つたりした。そんなことを何度もやり直した。炬燵の上に飛び上つて、顔を洗つたり足の爪の間をかぢつたりしてゐた猫は、此度は其處に蹲つて、兩の前足を行儀よく揃へて曲げた上に顋をのせ、碁盤の白と黒との石が入り亂れて一つづゝ殖えてゆくのを、珍らしさうに、而も退屈しのぎといつた風に、ぼんやり眺めてゐた。うつとりした瞳の光が靜に〱消えてゆくのを、少し強く石の音が響く毎に、またはつと大きく見開いた。その様子を昌作は振返つて眺めた。猫も彼の顔を無心に見上げた。彼は碁盤を押しやり、炬燵の中に足を投げ出し、火鉢の縁と膝頭とに兩肱をつき、掌で顋を支へながら、暮れかゝつてゆく黄色い日脚を、障子の硝子越しに眺めた猫はぶるつと一つ身を震はし、彼の膝の上にのつそり這ひ込んで、ゐずまいを直しながら、前足の間に首を挾み圓くなつて眠つた。虎斑のその横腹が呼吸の度に靜に波打つてるのを、昌作は暫く見てゐたが、やがてまた顔を上げて、障子の硝子から外に眼をやりながら底に力無い苛立ちを含んだ陰鬱な夢想に、長い間浸り込んだ。

けれど夜になると、その夢想の底の苛立ちが表面に現はれてきて、昌作を自分の室に落付かせなかつた。何か思ひもかけないことが今にも起りさうだつた。澤子から今にも電話がかゝつて來さうだつた。その、今にも……今にも……といふ思ひが、彼の凡てを搖り動かした。その上彼の室は、この旅館兼下宿の、下宿の部と旅館の部との間に挾つてゐて、一時滯在の田舍客の粗暴な足音が、夜になると共に煩く聞えてきた。

十分か二十分ばかりの間ぢつと我慢した後、昌作は急に立上つた。彼が食事の時にいつも與へることにしてゐた煉乳の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

溶かしたのを、室の隅でぴちや〳〵舐め終つた猫が、なほ物欲しさうに鼻をうごめかしてるのを、彼はいきなり胸に抱き上げて、慌しい眼付で室の中をぐるりと見廻してから、それでもゆつくりした足取りで出て行つた。帳場の室に猫を押しやり、話しかける主婦さんの言葉には碌々返辭もせずに、自分の用だけを頼んで――柳容堂からと云つて電話がかゝつたら、つないだまゝ知らしてしほい、他の電話や訪客には一切、不在だと答へてほしい――と頼んで、二軒置いた隣りの撞球場へ行つた。球をついてるうちにも、始終何かゞ氣にかゝつたけれど、別に仕方もなかつたので、つまらないゲームに時間をつぶして、夜更けてから下宿に歸つた。歸ると先づ何よりも、電話の有無を女中に尋ねて、それから冷い心で自分の室にはいつた。

四日目の午後から晩へかけて、片山からといふ電話が三四度かゝつた。一度は女中が撞球場までやつて來て、昌作の意向を聞いた。探したけれど分らないと云つてくれ、と昌作は答へた。凡ては宮原俊彦に逢つてから！ といふことが、いつしか彼の頭の中に深く根を張つてゐた。逢つて何になるかは問題でなかつた。たゞ一生懸命に待つてるために、昌作は知らず識らずそれに囚はれてゐたのである。其他のこと一切は、憂鬱で臆劫だつた。

そして偶然にも、丁度その晩八時頃、柳容堂からの電話を女中が知らして來た時、昌作は突棒を置いてゲーム半ばに立上つた。午後から風と共に雨が降り出してゐた。昌作は傘を手に握つたまゝ、雨の中を飛んで歸つた。電話口に立つと覺えのある澤子の聲だつた。

「あなた佐伯さん？……ちやあ、すぐに來て下さいよ。今ね……いらしてるから。他に誰もゐないわ。すぐにね。」

「今すぐ出かけるよ。……そして……。」

昌作が何か云はうとするのを待たないで、澤子は「すぐにね」を繰返して電話を切つてしまつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昌作は自分の室に戻つて、一寸身仕度をして出かけた。大した風でもなさゝうだつたが、雨は横降りに降つてゐた。油ぎつた泥濘が街燈の光を受けて、宛も銀泥をのしたやうにどろりとした重さで、人影の少い街路に一面に平らに湛へてる上を、入れ亂れた冷い雨脚が、さつ〳〵と横さまに刷いてゐた。昌作は傘の下に肩をすぼめて、膝から下は外套の裾で雨を防いだ。電車に乘つても、背筋から足先へかけて冷々とした。

途中で一度電車を乘り換へ、柳容堂の明るい店先へ近づくに從つて、昌作は自分の地位を變挺に感じ初めた。この四五日の間あれほど一生懸命に待つてゐて、そして今雨の降る中を、宛も戀人でゞもあるやうに夢中になつて逢ひに行くその當の宮原俊彦が、一體自分にとつて何だらう？　そして自分は彼にとつて何だらう？　二人は逢つてどうしようといふのか？　而も澤子の面前で……。泣いてよいか笑つてよいか形體の知れない感情が、昌作の胸の中一杯になつた。

それでも彼は行かなければならなかつた。

柳容堂の二階へ通ずる階段に足をふみかけた時、昌作は殆んど無意識的に顧みて、爪革に泥のはねかゝつてる古い足駄が一足、片隅に小さく脱ぎ捨てゝあるのを見定めた。それから階段を、一段々々數へるやうにして上つて行つた。

二階に上つて、第一に彼の眼に止つたものは、室の兩側の壁にしつらへてある可なり贅澤な煖爐の、一方のに赤々と火が焚かれてることだつた。その煖爐の前の卓子に、長い頭髪を房々と縮らした一人の男と澤子とが、向ひ合つて坐つてゐた。

昌作の姿を見ると、澤子はすぐに立上つて、二三歩近寄つてきたが、其處にぴたりと立止つて、サロンの女主人公といつた風な會釋をした。それから彼を煖爐の方へ導いて、殆んど二人へ向つて云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「先生よ。」

その先生といふ言葉が、昌作の耳に異様に響いた。がそれよりも變なのは、初めて見る宮原俊彦の顏に、彼は何だか見覺えがあるやうな氣がした。頰骨の少し秀でた、頰のしまつた、髯のない、色艶の惡い顏、痩せた細い首、そして、縮れた髮が影を落してる額の下から、近眼鏡の奧から、大きな眼が輝いてゐた。何處といふことはないが、直にその眼に、昌作は古い見覺えがあるやうな氣がした。

もぢ〳〵してるうちに、澤子が横手の椅子に腰を下してしまつたので、昌作は仕方なしに、一つ不自然なお辭儀をしておいて、俊彦と向ひ合つて坐つた。

「宮原です。」と俊彦は云つた。「どうぞよろしく……。君のことは澤子さんから聞いてはゐましたが……。」

いきなり君と呼ばれたことゝ、澤子さんといふ言葉とが、また昌作を變な氣持にさした。

「私もお名前は伺つてをりました……。」

昌作はさう鸚鵡返しに答へてから、へまな挨拶をしたといふ氣まずさのてれ隱しに、濡れた冷たい足袋の足先を煖爐の火にかざした。

「そんなに降つてるの？」と澤子が云つた。

「雨はさうひどくないが、横降りなんだから……。」

「さう。御免なさい。」と彼女は雨の責任が自分にあるかのやうな口を利いた。「その代り何か温まるものを持つてきてあげるわ。」

昌作がいつもあつらへる珈琲とコニャクとを取りに、澤子が立つて行つた時、俊彦は落付いた調子で云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「澤子さんの氣まぐれにも困るですね。是非やつて來て君に逢へつて、殆んど命令的な手紙を寄來すんですからね。こんな天氣に濟みませんでした。けれど、僕は何だか、君も御承知でせうが、他に大勢客が居さうな時には、一寸來難いもんですからね。それでわざ〳〵、雨の降る寒い晩なんかを選んだのです。」

別に云ひ遁るのでもないらしい自然な聲で、眞正面を向いたまゝさう云はれて、昌作は一寸返辭に迷つた。けれど、非常にいゝ印象を受けた。やゝあつてふいに云つた。

「私も、他に客の居ない方がいゝんです。あなたにお目にかゝるのを、非常に待つてゐました。」

俊彦はそれを聞き流したゞけで、煖爐の火に眼を落した。

二人はそのまゝ默つてゐた。暫くして澤子は、珈琲を二つとコニャックを一杯持つて來て、珈琲の一つを俊彦の前へ差出したが、別に何とも云はなかつた。昌作は眼を擧げて、彼女の樣子がいつもと違つてること、何か變に氣持をこぢらしてることを、見て取つた。それが彼の心を暗くした。沈默が長引くほど苦しくなつてきた。その沈默を破るべき言葉を探し求めたが、なか〳〵見つからなかつた。すると、不意に澤子が云ひ出した。

「佐伯さん、あなた九州行きはどうして?」

昌作は答へる前に、俊彦の顏をちらと見た。俊彦はまぢろぎもせずに煖爐の火を見つめてゐた。

「まだあのまゝさ。」と昌作は答へた。

そして俄に彼の心に、或る何物へとも知れない憤懣の念が湧き上つてきた。片山からの電話を三四度も素氣なく放りつぱなしにしたことが、何か取り返しのつかない失體のやうに頭を掠めた。宮原俊彦に逢つて何をするつもりだつたのか?「澤子の氣まぐれ」からこれまで愚圖々々引つ張られて來た自分自身が、なさけなく怨めしかつた。澤子に戀してをれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばこそ……！　そして澤子は、この樣を知りつゝどうするつもりなのか？
　昌作が次第に首を垂れて考へ込んでるうちに、澤子は俊彥の方へ話しかけてゐた。
「先生、私松本さんの所で、やはりお弟子の小林さんて方と、議論をしましたのよ。」
「何の？」と俊彥は顏を擧げた。
「いつか先生が手紙に書いて下すつたでせう、初めのうちは、出來るだけ自己を畫面に出しきるがよい、腕が進んでくるに從つて、次第に自己が畫面から消えて、偉い作品が出來るものだつて。私がさう云ふと、小林さんはまるで反對の意見なんでせう。初めは自己を畫面に出してはいけない、腕が進んでくるに從つて、本當の自己が畫面に現はれてきて、立派な作品が出來るものですつて。それでさん〴〵議論をしても、とう〳〵分らずじまひですから、しまひには松本さんの所へ持ちこみましたのよ。
「すると？」
「何とも仰言らないで、たゞ笑つていらしたわ。好きなやうにやるがいゝだらうつて。屹度御自分にもお分りにならないんでせう。」
「うまく輕蔑されたもんですね。」
「あら、誰が？」
「あなた達がさ。あなた達のその議論は、第一自己といふものゝ見方が違つてるから、いつまで論じたつてはてしがつきませんよ。」
「さう。どうしてゞせう？」

「どうしてだか、僕にもお分りにならないんでせうよ。……そんなことより澤子さん、僕に繪を一枚くれる約束ぢやなかつたですか。」

「あら、先生に差上げるやうなもの、まだ出來やしませんわ。」

昌作は突然口を出した。

「澤ちやんの群像つて話をお聞きになりましたか。」

その聲が、昌作自身でも一寸喫驚したくらゐ大きかつたが、俊彦は別に大して氣を惹かれもしないらしく、たゞ眼付だけで尋ねかけてきた。それを澤子は引取つて云つた。

「あら、そんなでたらめなことを先生の前で……。嘘よ、嘘よ。」そして彼女は何かに苛立つたかのやうに云ひ續けた。

「私記者なんかしたものだから、こゝに居てもいろんなことを人に云はれて、ほんとに嫌になつてしまうわ。誰にも顔を合せないで、一人つきりでゐられる仕事はないものかしら？　一日自分一人で默つてゐて、勝手なことばかり考へ込んでをられたら……。あなたなんか、ほんとに羨ましいわ。何にもしないで猫のやうな生活だなんて！　私もう何もかも放り出したくなることがあつてよ。田舎へ歸つちまはうかなんて考へることがあるのよ。何をするのも、人からぢつと見られたり、餘計な邪推をされたりして……私そんな珍らしい人間でせうか？　どこか、誰からも離れてしまつた所へ、自分一人きりの所へ、逃げて行つてしまひたいわ。井戸の中みたいな所へ……。深い井戸を見るとね、あの底へ飛び込んだら、自分一人きりになつて、靜かで、ほんとにいゝだらうと思ふことがあるわ。」

昌作はそれを、澤子の言葉としては可なり意外に感じた。彼女はいつも、何にも仕事がないといふ昌作を不思議がつてゐたではないか。彼は彼女の顔を見守つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そして、井戸の底に水がなかつたらなほいゝでせうがね。」と俊彦は云つた。でもその調子は別に皮肉でもなかつた。
「先生も隨分よ。私水のある井戸のことなんか云つてやしませんわ。」
「ぢやあ、初めから水のない井戸のことですか。」
「えゝ。」
「でもね、逃げ出す方に捨鉢になるのは卑怯ですよ。戰ふ方に捨鉢にならなくちやあ……。」
その言葉に、昌作は一寸心を惹かれて、ぢつと俊彦の眼を見やつた。俊彦はちらりと見返してから云つた。
「君は何にもすることがないんですつて？いゝですね。」
「佐伯さんは、」と澤子が云つた「何にもすることがなくて困るんですつて。」
「することがなくて困るといふのは、なほいゝですね。僕も贊成しますね。」
昌作は先刻から、俊彦の言葉に妙に皮肉があることを、氣付いてゐた。けれどそれは單に言葉の上だけのもので、彼自身の心持は少しも皮肉ではなく、却つて卒直で眞面目であることをも、よく氣付いてゐた。それで今、彼の言葉に對して苛立たしい不滿を覺えた。つゝかゝつてゆきたくなつた。
「私は實際困つてるんです。」と昌作は云つてのけた。「自分には何だか生活がないやうな氣がして、始終憂鬱な退屈な心持になつてきます。晴々とした空が私にはないんです。」
「では何か仕事を見付けたらいゝでせう。」
「見付けたいんですが、それがなか〳〵……。」
「然し君は、一體何をするつもりですか。」

突然の、そして自分でもよく考へたことのない、きつぱりした問だつたので、昌作は一寸面喰つた。俊彦はその顔をぢろ〳〵見ながら、自分自身でも考へ〳〵云ふかのやうに、ゆつくり云ひ續けた。

「仕事を見付けるといふことも大切でせうが、それよりも、何をするかといふ、その何かを見出すのが、更に大切ではないでせうか。誰にでも、何でもやれるものではないでせう。先づ何をやるか、それからきめておいて、云はゞ生活の方向をきめておいて、それから、初めて仕事を探すべきでせう。さうでないと、どんな仕事がやつて來ても、取捨選擇に迷ふばかりで、手が出せやしませんからね。」

「然し私には、何をやつてよいか、それをきめる力が自分にないんです。

「そりやあ勿論誰にだつて、自分が何をやるべきかは、なか〳〵分るものではないでせうけれど、ぼんやりした生活の方向といつたやうなものは、誰にでもあるものですよ。」

「ですが……その方向を支持してくれる力が第一に……。」

「力なんて、」と突然澤子が言葉を挿んだ「氣の持ちやうぢやありませんかしら?」

「氣の持ちやうか、または心の向け方か、そんなものかも知れませんね。」

がその時、不思議にも、深い沈默が俄に落ちかゝつてきた。三人共云ひ合したやうに、ぴたりと口を噤んでしまつた。何故だか誰にも分らなかつた。各自に自分々々の思ひに沈み込んで、そして妙に精神を緊張さしてゐた。昌作はそれをはつきり感じた。澤子は遠くを見つめるやうな眼付を、卓子の白い大理石の面に落してゐた。俊彦はしまつた頰の筋肉をなほ引緊めて、煖爐の火に見入つてゐた。昌作は眼を伏せて腕を組んだ。顏をそむけて心で互に見つめ合つてるがやうだつた。三人の狀態がこのまゝでは困難であること――それでゐて妙に落付き拂つてること――一寸何かの動きがあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れば平衡が破れさうなこと——そして今にも何か變な工合になりさうなこと、それがまざ〳〵と感ぜられた。昌作は苦しくなつてきた。動いてはいけないいけないと思ひながら、我知らず立上つて室の中を歩き出した。涙がこぼれ落ちさうな氣がした。窓の所に歩み寄ると、硝子に小さな雨滴がたまつてゐて、街燈の光りにきら〳〵輝いてゐた。雨は止んだらしく、澄みきつて光つてる冷い空氣が、寂しい街路に一杯湛へてゐた。おかしなことには、いつまで待つても電車が通らなかつた。昌作は次第に顔を窓に近寄せていつた。息のために硝子がぼーつと曇つてきた。

「佐伯さん！」

呼ばれたので振返ると、澤子が下り加減の眉尻をなほ下げて、眼をまん圓くして、彼を招いてゐた。彼は戻つていつた。

「あなた今日は、ちつともお酒をあがらないのね。」

「なに、やるよ。」

「君は澤山いけるんですか。」と俊彦が尋ねた。

「それほどでもありません。」

「うそよ。私度々あなたの醉つてる所を見たわ。」

「酒に弱いから醉ふんだよ。……そしてあなたは。」

「僕は泥坊の方で、いくら飲んでも醉はないんです。その代り、時によると非常に善良になつて、すぐに醉つ拂ふんです。」

「先生は醉うと眠つておしまいなさるんでせう。」

「澤ちやんを一度醉つ拂はしてみたいもんだな。」

「さう。」と俊彦が愉快さうに叫んだ。「そいつは面白いですね。」

「大丈夫ですよ。私も泥坊になるから。」

そんな他愛もない話が順々に續いていつた。一瞬前の緊張した氣持は、いつしか何處かへ飛び去つてしまつてゐた。年來の友であるやうな親しみが、落付いたやさしい親しみが、三人を包んでゐた。昌作はふと、自分がどうしてから俄に安易な氣分になつたか、自ら怪しんでみた。そして、そのことがまた彼の心に甘へてきた。

けれど、さういふ會話は長く續かなかつた。派手なネクタイに金剛石(ダイヤ)入りのピンを光らしてる會社員風の男が一人、音もなく階段から現はれてきて、煖爐の方をぢろ〳〵眺めながら、暫く躊躇した後、向ふの隅の卓子に腰を下して、しきりにこちらを窺ひ初めた。それを一番に不快がりだしたのは、俊彦らしかつた。彼は次第に言葉少なになり、はては上半身を煖爐の方へねぢ向けてしまつた。洋服の男は、出て行つた春子と懇意な者らしく、暫く冗談口を利いてゐた。その聲が馬鹿に低くて、昌作達の方へは聞き取れなかつた。それから男は、一人で珈琲をなめながら、また執拗に昌作達の方を窺ひ初めた。今度は昌作までが不快を覺えた。男の方に背を向けてる澤子一人が、ぽつり〳〵口を利いてゐたけれど、やがて彼女も默り込んでしまつた。それからすぐに、彼女が最も不機嫌になつてきたらしかつた。卓子の上に兩肱を置いて、石のやうに固くなつて動かなかつた。

やがて俊彦はふいに向き返つた。

「少し外を歩きませんか。」

「さうですね……。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昌作は語尾を濁しておいて、何氣なく澤子の顏に眼をやつた。澤子は一寸眉根を動かしたきりで、やはりちつとしてゐた。その間に彼彥はもう立上つてゐた。そして彼が勘定を求めると、澤子は突然大きな聲で――向ふの男にも聞えるやうな聲で――云つた。

「今日のは宜しいんですわ。」

彼女は唇の端を糸切齒の先でかみしめてきつとなつた。そして、彼彥はつゝ立ち昌作と澤子とは坐つたまゝで、一瞬間待つた。昌作は何とかこの場を繕ろはねばならない氣がした。

「澤ちやん一人殘して可哀さうね。」、彼は囁くやうに云つた。

澤子は眼を擧げて、昌作と彼彥とを同時に見た。その顏が今にも泣き出しさうなのを、昌作は深く頭に刻み込まれた。

「何れまた三人で話をしませう。」

彼彥はさう云ひ捨てゝ、帽子掛の方へ步き出した。昌作も引きずられるやうに後へ續いた。階段の上から澤子が見送つてゐた。

外に出ると、彼彥は突然云つた。

「僕はあの男に見覺えがあるんです。いつか、四五人一緒にやつてきて、隣りの卓子で、僕にあてこすりを云つたので……。」

昌作には、彼彥がそれほど憤慨してるのを怪しむ餘悠も、またその言葉に返辭をする餘悠もなかつた。泣き出しさうになつてゐた澤子の顏と、後で恐らく泣いてるかも知れない彼女の姿と、それから、彼彥に離れ得ないで犬のやうにくつついてゆく自分の憐れな姿とが、彼の頭に一杯になつてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空はどんより黝ずんでゐたが、雨はもう霽れてゐた。屋根も並木も街路も、それから人通りさへ、凡てのものが雨に洗はれて、空氣の澄んだ寂然とした通りを、少し氣恥しいほどの高い泥足駄で、二人はゆつくり歩いて行つた。俊彦は暫くたつてから、こんなことを云ひ出した。

「僕は何だか、運命といつたものが信じられる氣がしますよ。運命と云つても、人間自身の力でどうにもならない、所謂生れながら定まつた宿命ではありません。自分の心と一緒に動く或る大きな力です。何か或る方向へ心を向けると、それと一緒に、同じ方向へ、運命が動き出すやうに思へるのです。自分の信念の流れと運命の流れとが、一つになるといつた氣持です。それを思ふと、非常に僕は心強くなります。神の意志とでも、自然の反應とでも、人によつていろんな名前をつけるでせうが、僕に云はすれば、天の交感ですね、その天の交感を、自分が荷つてるといふことが、はつきり感ぜられるやうです。そして僕は、此度は反對に、その天の交感で……運命の動きで、自分の考への正しいかどうかを見定めたいんです。心を或る方向へ向ける時、その向け方が本當のものである時には、屹度運命の同じ動きが感ぜられますし、向け方が間違つてる時には、それが少しも感ぜられないんです。正しいかどうかを問ふんぢやなくて、本當か嘘かを問ふんです。そして、さういふ本當の心の方向へ進んでゆけば、結果はどうでも、常に悔いがないと僕は信じてゐます。……君はさうは思ひませんか。」そして五六歩して、昌作の答へを待たないで、彼は俄に苛立つた聲で云ひ續けた。「勿論、先刻あすこから逃げ出した意向には、運命の動きなんか伴はなかつたし、それかつて、悔いも伴ひはしませんが……。」

昌作は我知らず微笑を洩らした

「けれどその反對に、あすこに殘るとしましたら、その意向にもやはり、どちらも伴はないではないでせうか。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さうです。腹を立てちや駄目ですね。」

俊彦はぢつと昌作の方を顧みて、五六歩すた〳〵足を早めた。それからまた足をゆるめながら云つた。

「君は……僕は今晩澤子さんから聞いたんですが、九州の炭坑とかへ行かうか行くまいかと、迷つてるさうですね。」

「えゝ。」

「そいつはどちらなんです？」

「どちらつて？……」

「行く方と行かない方と、どちらに運命の動きが感じられますか。」

昌作は答へに迷つた。

「どちらにも感ぜられないんぢやないですか。」

「えゝ。どちらにも、感ぜれらるやうでもありますし、また感ぜられないやうにも……。」

「それぢやあ、それも結局、柳容堂の二階に殘つてるかどうかと、同じものですね。そして君も腹を立てゝるといふ結論になるわけですね。」

昌作は冷いものを眞正面からぶつかけられた心地がした。そして、凡てを一瞬間に失つた心地がした。默つて答をかんだ。それを知つてか知らずにか、俊彦は他のことを云ひ出した。

「腹を立てるのは止しませう。……僕はね、これも運命の動きと同じ感じですが、初對面の人に對して、自分の友になれる人となれない人とを、はつきり感ずることがよくあるんです。君に對して僕は、失禮ですが、親しい友になれさうな氣がするんです。何處かで一杯やりませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「えゝ。」と昌作は殆んど無意識的に答へた。

俊彦は帯の間から、小さな銀側時計を引出して眺めた。昌作は何とはなしに、こんな場合に彼が時計を持つてるのが、不自然な氣がした。

「もう遲いから駄目ですね。」そして俊彦は暫く考へてゐた。「穢い家でも構ひませんか、その代り酒は上等ですが。」

「どこでも構ひません。」と昌作は答へた。何もかもなるやうになれといふ心になつてゐた。

電車通りを暫く行つて、それから横町へ曲つて、次に路次へ曲り込むと、みよしといふ小意氣な行燈の出てる、細い籬の小さな家があつた。狭い板の間に、大きい粗末な木の卓子が三つ並んでゐて、銚子や皿の物を並べた膳を前に、洋服や和服の數人の客が散在してゐた。側の疊敷の、長火鉢の前に坐つてゐる、黒繻子の襟の着物にお召の前掛をしめた、四十恰好のお上さんに、俊彦はいきなり言葉をかけた。

「遲くなつてから濟みませんが、二階の室を貸して貰へませんか。」

「まあ、宮原さん。」とお上さんは云つた。「ほんとにお久振りでしたこと。……えゝ、散らかつてますけれど、どうぞ。今片附けますから。」

狭苦しい梯子段を上りきつた所に、四疊半の室が一方に開いてゐた。室の中は散らかつてる所か、殆んど何にもなくてがらんとしてゐた。後からお上さんがやつて來て、足の頑丈な餉臺や、火鉢や、坐布團を並べながら、俊彦と二三の人の噂を話していつた。暫くすると、からすみ、このわた、鹽、湯豆腐、鮪のぶつ切り、など誂への料理が、錫の銚子を添へて持つて來られた。天井と疊が煤けて古ぼけてるわりに、障子の紙だけが眞白だつた。

「どうです、どうせ裏途なんですけれど、柳容堂の二階とは隨分感じが違ひますね。」

さう云ふ俊彦の顔を、昌作はぼんやり見守つた。彼の眼に俊彦は、柳容堂の時とは全く別人のやうに寫つた。

「私は何だか、變な氣がしてきさうです。」

俊彦は默つて杯を取上げた。昌作も默つてその通りにした。可なり更けたらしい靜かな晚だつた。膝頭から寒さがぞく〳〵傳はつてきた。二人共しつこく默り込んで、杯の數を重ねた。俊彦は突然肩を震はした。

「全く變な氣がしてきさうな晚ですね。」

餘り長い間を置いてだつたので、昌作はびつくりして、彼の眼を見入つた。その時、古い見覺えがあるやうな眼付をまた見出して、はつと心を打たれた。俊彦はその眼付を、膝のあたりに落して云つた。

「僕は打明けて云つてしまひませう。實は、君をどうしてくれようかと迷つてゐたんです。どうしてくれようかつて……つまり、君の味方になるか敵になるかといふことです。初め僕はあすこで、非常に素直な氣持で君に逢へて嬉しかつたんです。所が、あの嫌な男がやつて來た時、ふと、その一寸前の氣分が、君が窓の所へ立つて行つた時の變挺な氣分です……君にも分るでせう……あの氣分が妙にこぢれて戻つて來たんです。僕があの男に腹を立てたのも、そのためです。」

それから僕は、運命の動きなんてものを持出して、君が深く惱んでゐる九州行きに結びつけて、一寸惡戲をやつてみたのです。その上君をこんな所へ引張つてきて、僕は全く自分でどうかしてゐました。けれど、あの運命に對する信念と、人に對する最初の印象とは、僕の本當の考へです。云はゞ自分の信條で君をいぢめてみたやうなものです。」

俊彦は深く眉根をしかめて、ぢつと考へ込んだ。昌作は初めて彼の心へ本當に觸れた氣がした。凡てのことがぼんやり分りかけてきた。俊彦が今でもなほ、澤子を愛してゐること、その愛に自ら惱んでゐること、などが分つてきた。

やゝあつて、俊彦はふいに顔を擧げた。眼が輝いて、いやに眞劍な様子だつた。昌作も自づと襟を正すやうな心地に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつた。

「君は澤子さんをどう思ひます？」

昌作は息をつめて、返辭が出來なかつた。俊彦はそれでも平靜な調子で云つた。

「僕にはあの女のことが、どうもはつきり分りません。何處か少し足りない所があるか、それとも何處か非凡な所があるか、そのどちらかでせうね。」

「さうですね。」と昌作は漸く答へた。「そして、考へ方が、突然意外なものに飛んでゆくので、私は喫驚するやうなことがあります。」

「そんな所がありますね。……それから、君は澤子さんを、處女だと思ひますか。」

昌作は大抵のことは豫期してゐたけれど、それはまた餘りに意外な言葉だつた。それに對する自分の考へをまとめるよりも、相手の氣持を測りかねて、默つてゐた。

「え、君はどう思ひます？　本當の所は……。」

「さうですね、私は……。」そして昌作は自分でも不思議なほどの努力で云つた。「まだ處女だと思つてゐます。」

俊彦は深く息をついた。

「君がさう信じてるんでしたら、僕達の物語をお話しませう。なぜなら、澤子さんを處女だと信じてる人にしか、この話は理解出來ないやうな氣がするんですから。……僕はまだこんなことを、誰にも話したことはありませんし、今後も恐らくないでせうが、君にだけは、妙に話したくなつたんです。たゞ、誓つて、君の胸の中だけにしまつといて下さいよ。」

目作はそれを暫つた。俊彦は話しだした。そして初めから、二人共不思議に心が沈んできて、暗い憂鬱な氣分に閉されたのだつた。勿論俊彦の話は、その內容が理知的なにも拘らず、非常に早口になつたり、一語々々言葉を探すやうにゆるくなつたり、前後入り亂れたり、間を飛び越して先へ進んだりして、可なり亂雜なものだつたが、その大要は次の通りである。

四――宮原俊彦の話

今から二年半ばかり前のことでした。たしか夏の……初めだつたと思ひます。その暑い午後に、團扇を使つてたから、たしか夏の……初めだつたと思ひます。婦人雜誌記者の肩書を刷り込んだ小さな名刺を、女中が僕の書齋へ持つて來ました。僕はその橋本澤子といふ行書の字體をぼんやり眺めながら、客を通さしました。そして、派手な服裝をした若い女――何故かその時僕は、記者にしては餘りに若すぎると感じたのです、そんな理屈はないんですがね――その若い記者が、遠慮なく坐布團の上に坐つてお辭儀をした時、僕も一寸會釋をしながら「初めて……」と挨拶したものです。すると、彼女は頓狂な顏をして、僕をぢつと見てるぢやありませんか。僕は變な氣がして、「何です？」といふ氣味合ひを見せたのです。

「だつて、先生にはもう二三度お目にかゝつたことがありますもの。」

さう云つた彼女の顏を僕は見守りながら、その廣い額と下細りの顏の輪廓と尻下りの眉の形とで、前に逢つたことを思ひ出したのです。それは間接の友人の中西の所でした。その頃僕の友人達の間に、花骨牌が可なり流行つてゐて、僕も時々仲間に引張り込まれたものです。それが大抵中西の家で行はれた――といふのは、中西の細君が、新らしい婦人運動やなんかに關係してゐて、まあハイカラな現代の新婦人で、男の連中と遊ぶのが好きだつた――と云つちや變です

が、兎に角社交的な開けた性質なんですね。それで、友人と二人くらゐで、外で晩飯を食つて、話がなくなつて退屈でもしてくると、自然中西の家へ僕まで引張つてゆかれて、主人夫妻と一緒に花をやるといつた工合です。僕もさういふ風にして、何度か中西の家へ行つたものです。すると或る時、中西の細君が、「人數がも少し多い方が面白い、」と云つて、階下から女學生らしい女を呼んできました。それが澤子だつたんです。勿論僕はその時、彼女に紹介されもしなければ、彼女の名前を覺えもしなかつたですが——と云つて、「今度は澤子さんの番よ、」などゝ云ふ言葉を耳にしたには違ひないんですが、それが頭にも殘らないほど、彼女の態度は……存在は、控え目で、そして遊びにも興なさゝうだつたのです。そんなことで、二三度彼女に逢つたわけですが、そのうちに僕は自然忙しくもなるし、花にも興味を持たなくなるし、元々中西とは、花骨牌の席でゞもなければ、殆んど逢ふこともないくらゐの間柄だつたものですから、いつしか連中から遠退いて、從つて、澤子に逢ふことも無くなつたし、彼女の存在をも忘れてしまつたのです。

所が、それから半年か……さうですね、一年とたゝないうちに、彼女は雜誌記者として、ふいに僕の前に現はれたのです。

「さう〳〵、中西さんの所でお目にかゝりましたね。だか、雜誌記者たあ隨分變つたものですね。」

といふやうな挨拶をして、それとなく、彼女の身の上を知つてみたいといふ好奇心が、僕のうちに萠しました。けれど彼女は、當り障りのないことをてきぱきした言葉で述べながら——そのくせ、自分自身に關することについては妙に曖昧な言葉尻を濁しながら、僕の言葉をあらぬ方へ外らしてしまふんです。非常に明敏な頭を持ちながら、自分自身のことについてはまるで渾沌としてる……といつた印象を僕は受けました。

それから、來訪の用件に移ると、實は雜誌社にはいつたばかりでまるで見當がつかないが、最初の原稿として何か面

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白いものを取つて皆をあつて云はしてみたいから、神話に關する先生の原稿を是非頂きたい、と云ふのです。僕が神話の研究者であることを、何處かで聞いてゐたとみえます。僕は承知するつもりで期日を聞きますと、一週間以内に是非と云ふぢやありませんか。而もその一週間は、僕は學校の方の答案調べやなんかでとても隙がありません。

「それぢやお話して下さいませんかしら　私書きますから。」

いつ？　と尋ねると、只今と云ふんです。

僕は苦笑しながら、兎に角話を初めました。フーシェンが山へ行つて、恐ろしい姿のものを見て、石を摑んで投げつけると、その石が岩に當つて火花を發し、その火が廣い野原中に擴つた、それがペルシヤの拜火教のそも〳〵の火である、といふやうなことや、印度の火神アグニーは、枯木の材中に生命を得て來て、生れ出るや否や、自分の親である木材を食ひ盡さうとする、などゝいふやうな、神話の起原と自然現象との分り易い關係の話を、少しばかり話してやりました。彼女は談話筆記は初めてだと云ひながら、わりにすら〳〵と書き取つてゐましたが、一寸つかへると、僕が先へ話し進めるのをそのまゝにして、一言の斷りもしないで、ぢつと僕の顔を見てるぢやありませんか。まるで女學校の生徒が、先生の講義を筆記してるといつた恰好です。僕は苦笑しながら、その引つかゝつてる所からまた話し直してやる外はなかつたのです。

用が濟むと、彼女はさつさと歸つて行きました。その後で僕は、彼女が團扇を手にしようともしなかつたことゝ、暑いのに着物の襟をきちんと合してたことゝ、而も額には汗を少しにぢましてたことゝを、何故ともなく思ひ出したものです。

僕がどうしてその日のことをこんなに詳しく覺えてるかは、自分でも不思議なくらゐです。彼女が歸つた後で、僕は

非常に啃々とした氣持になつて、初めからのことを一々思ひ浮べてみた、そのせいかも知れません。が、こんなに細かく話してゝは、いつまでたつても話が終りさうにありませんから、これから大急ぎでやつつけませう。その上、其後のことは僕の記憶の中でも、頗るぼんやりしてゐてこんぐらかつてゐるんです。

澤子が僕の談話を取つていつてから、可なりたつて、その雜誌社から雜誌を送つてきました。讀んでみると、僕の話した事柄が、可なり要領よくそして伸びやかな筆致で書いてありました。これなら上乘だと僕は思ひました。すると、丁度その翌日です。澤子が雜誌と原稿料とを持つて飛び込んで來たものです。

「先生のお影で、私すつかり名譽回復をしましたわ。」

何が名譽回復だか僕には分りませんでしたが、彼女の喜んでるのが僕にも嬉しい氣がしました。雜誌は社から既に一部送つて來てると云ふと、でもこれは私から差上げるのだと云つて、置いてゆきました。原稿料はあなたが書いたんだからあなたのものだと云ふと、そんな機械的な仕事の報酬は社から貰つてると云つて、それも置いてゆきました。

「私これからちよい〳〵先生の所へ參りますわ。どんなお忙しいことがあつても、屹度引受けて下さいますわね。さうでないと、私ほんとに困るんですもの。」

そんな一人合點のことを云つて、彼女は歸つてゆきました。それが却つて僕の心に甘へたことを、僕は否み得ません。

それから彼女は、殆んど每月僕の所へやつて來て、僕の談話を筆記してゆき、次に自分自身で、雜誌と原稿料とを屆けてきました。各國の神話の面白さうな部分々々の話は、婦人雜誌には可なり受けたものと見えます。彼女はいつも喜んでゐました。それに彼女自身、國の女學校に居る時ギリシャ神話を大變愛讀したとかで、僕の話に頗る興味を持つて

くれました。長く話し込んでゆくことさへありました。そして僕の方では、月々同じものが一冊づつたまつてゆく雜誌を、嬉しい氣持で眺めたものです。

さういふ風にして、僕達の間には、記者と執筆者といふ普通の關係以外に、友達……と云つちやちと當りませんが、さう云つた親しい馴々しい打解けた氣分が、次第に深くなつてきたのです。そして僕は彼女の時折の斷片的な言葉をよせ集めて、彼女の身の上をほゞ知りました。

彼女の家は、富山でも――越中の富山です――相當の家柄だつたのが、次第に衰微してきて、彼女が女學校を卒業する頃には、可なり悲境に陷つたらしいのです。そして、或る伯父の策畧から、彼女は金錢結婚の犧牲にされさうな破目になつて、母親の默許を得た上で、東京へ逃げ出してきたのです。勿論その間の事情は、僕にもよく分りはしません。が兎に角、彼女は東京に逃げ出してきて、前からいくらか名前を聞きかぢつてる――といふのは、彼女はまあ云はゞ文學少女の一人だつたのです――名前を聞きかぢつてる中西夫人の許へ、身を寄せたわけです。その頃僕は彼女と二三度花骨牌の仲間になつたのです。そして中西の家でどういふことがあつたか、或は恐らく何事もなかつたのかも知れませんが、彼女は其處に居るのが嫌になつて、と云つた所で、國から仕送りを受けて勉强するといふ譯にもゆかず、女中奉公も氣が利かず、仕方なしに、何とか傳手を求めて、雜誌社にはいつたやうな始末です。けれど、中西の家だつて雜誌社だつて、結局は彼女に適した場所ではありません。彼女はどんな所に置いても大丈夫であると共に――どんなことをしても純な心を失ふ恐れがないと共に、また同じ程度に、どんな所にもあてはまらない――安住し得ない性質を持つてゐます。空中にでも放り出しとくがいゝやうな女です。君はさうは思ひませんか？

所で……どこまで話しましたかね……さう、僕と澤子と可なり打解けた間柄になつた。すると、半年もたつてからで

したか……さうです、年が改つてからです。松のうちに一度やつて來て、殆んど一日遊んでいつてから——後で僕は思ひ出したんですが、その半日以上もの間、彼女は殆んど僕の書齋で神話の書物をいぢくつてるきりで、子供や妻を相手にしようともしなかつたのです、勿論彼女は僕の家庭に親しんではゐなかつたのですが——それから後は、やつて來ることが急に少くなりました。その代りに、度々手紙をくれるやうになりました。後になつてから僕は、その一日のうちに、僕と彼女との間に、どういふ話が交はされたか、またどういふことが起つたか、いろ／＼考へてみましたが、よく思ひ出しません。たゞ彼女が、ペルセウスとアンドロメダといふライトンの繪の寫眞版を、いつまでもぢつと眺めてゐたことが、變に頭に殘つてゐます。そんなつまらない繪を何で眺めてるのかと、不思議に思つたからでせう。

　彼女の手紙にはいろんなことが書いてありました。忙しくてお伺ひ出來ないのが悲しい、といつも前置をしてから、次に、日常生活の些細なこと——誰の所へ行つてどういふ目に逢つた、社でどんな話が出た、宿のお上さんがこれ／＼の親切をつくしてくれた、雪が降つて故郷のことを思ひ出す、泥濘の中に何々を取落して困つた、今日はかういふ悲しい氣持や嬉しい氣持になつてる……などゝ、まるで、一日の勞働を終へて晩飯の時に、兄弟にでも話しかけるやうな調子のものでした。そして僕は、彼女がそんな事柄を書きながら、或る一種の慰安を得てることを、はつきり感じました。で僕からも、自分の日常生活の斷片を書き送りました。それがやはり、僕にとつても一種の慰安でした。時によると、精神上の事柄を書き合つて、互に力づけ合ふやうなことさへありました。そして僕は、二人が東京市内に住んでゐて何時でも逢へる身なのに、屢々手紙を往復してるといふ不自然な狀態には、少しも自ら氣付かなかつたのです。たゞ、彼女と逢つてみると——もう彼女は原稿なんかも手紙で頼んできて、滅多にやつて來なかつたですが、それでも二月に一度くらゐはやつて來ました——そして逢つてみると、手紙のことはお互に口に出せないのを、はつきり感じま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

した。何でもないことを書き合つてたつもりでも、或は何でもない些細な事柄ばかり書き合つてたゝめか、それが二人の心を變に結びつけてしまつて、面と向つては何だか氣恥しい心地がしたものです。馬鹿げてると云へばそれまでゞすが、實は、其處から凡てのことが起つてきたのです。

梅雨の頃……六月の初め、僕の妻は肺炎にかゝりました。病院にはいるのを嫌がるものですから、家に臥かして看護婦をつけました。そして僕も出來るだけは看護したつもりです。その僕の看護については、妻は何とも云はなかつたですが、子供達に對して――二つと五つとの女の兒です――それに對して、僕が母親の代りをも務めてくれる所か、非常に冷淡だつたと、後になつて彼女は不平を云ひました。或はさうだつたかも知れません。何しろ僕は、士官學校と明治大學とに教師をしてゐましたし、その方だけでも可なり忙しい上に、神話の研究といふ大きな仕事があつたものですから、さう〳〵病人や小供達ばかりに構つてもゐられなかつたのです。がそれはまあ兎も角として、妻の病の經過は案外良好で、六月の末にはもう醫藥も取らないでよいほどになりました。僕もほつと安心しました。けれど、病後の容態――精神上の狀態が、餘りよくありませんでした。變に神經質にヒステリックになつて、つまらないことにも腹を立てたり鬱ぎ込んだりする外に、輕い神經痛を身體の方々に感ずるのです。肺炎のために神經がひどい打擊を受けて、それがなか〳〵癒らなかつたのでせう。

それで、七月の半ばから、子供を連れて保養旁々、妻は房州の邊鄙な海岸へ行くことになりました。僕の身分で贅澤なことは云つて居られませんから、百姓家の狹い離室を借りたのです。僕は士官學校がなほ休暇にならないものですから――休暇は八月になつて二週間ばかりあるきりです――東京に殘つてゐました。そして、久しぶりに妻や子供と離れて、がらんとした家の中に寢そべつてると、何とも云へぬ暢々とした氣持になつたものです。女中が一切の用は足してく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れるし、煩はしい心使ひは更にいらないし、避暑に行くよりよつぽど氣樂でいゝと思ひました。八月になつて士官學校が休暇の折にも、僕は房州へ一度も行きませんでした――それを妻は後で僕に責めたのですが……。

妻や子供達の不在中に、僕は澤子の來訪を知らず識らず待つてゐたのです。二人でのんびりと他愛もない話に耽りたいと思つたのです。勿論妻が居たとて、別に僕は澤子へ對して疚しい心を懷いてるのではなかつたのですから、妻の手前を憚る必要はない筈でしたが、それでも何となく氣兼ねがされたのです。妻に氣兼ねをするからには、疚しくないとは云へ、やはり何かゞ其處にあつたのでせうね。實際の所、妻が房州へ行つてから、僕と澤子との手紙の往復は、ずつと數多くなりました。月に一回か二回だつたのが、二三回になつたと覺えてゐます。けれど、澤子は妻の不在中一度も訪ねて來てくれませんでした。僕も明かに來てくれとは云つてやれなかつたのです。或る時の彼女の手紙に、「お伺ひしたいのですけれど、それをぢつと押へてることを、御許し下さいませうか、」といふ文句があつたのを、僕は謎をでも解くやうな氣持で、何度も心の中でくり返してみたことを、はつきり覺えてゐます。

八月の末になつて、妻と子供達とは歸つて來ました。その潮燒けのした顏を見て、僕は他人をでも見るやうな氣で、ぢつと見守つてやつたものです。そして妻の身體は、前よりもずつと丈夫さうになつてゐましたが、神經は前より一層いけなくなつてゐました――少くとも僕はさう感じました。それは確かに僕の僻みばかりでもなかつたのでせう。……僕は間違つたのです。温泉か山かにでもやればよかつたのを、反對に海へやつたゝめに、彼女の神經は落付く所か、却つて苛立つたに違ひありません。

妻が歸つて來て間もなく、澤子がふいにやつて來ました。その時僕は變にうろたへたものです。子供を相手に繪本の話をしてやつてる所でしたが、女中が彼女の名刺を取次ぐと、僕はいきなり玄關へ出て行つて、どうぞお上りなさい、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云つて、それからまたふいに子供達の所へ戻つてきて、初めの慌て方を取返しでもするやうな氣で、話の續きを終りまでしてやつて、それからゆつくりと、意識的にゆつくりと、二階の書齋へ上つていつたものです。我ながら滑稽でした。けれどそれが妙に眞劍だつたのです。坐についても、煙草をふかしたり、眼鏡を拭いたり、机の上の書物を片付けたりして、變に落付かないのを、更にまた自ら苛立つてるといふ心地なんです。さういふ僕の様子を、澤子はぢつと見てゐましたが、やがてこんなことを云つたのです。

「奥様は御丈夫におなりなさいまして？」

僕は答へました。

「えゝすつかり丈夫に……眞黒になつてゐます。」

それが不思議なことには、何だかかう遠い無關係な女のことをでも話してるやうな調子に、僕の心へは響いたのです。それから突然、澤子の眼は悲しい色を浮べました。それで初めて凡てがはつきりしてきました——凡てがと云つて、何の凡てだかは自分にも分りませんが、兎に角、自分の心が家庭といふものから離れて宙に浮いてる、といつたやうなことなんです。

澤子は、神話の話や雜誌の話などを少し持出しましたが、ともすると僕達は沈默に陷りがちでした。實際長い間默つてることもありました——口を利くこともないといつた風に、或は、口を利くのが恐ろしいといつた風に……。そして彼女はやがて歸つてゆきました。

それを僕は玄關まで送つていつて、それからまた二階の書齋へ上つたのですが、何かゞ氣になつて、また階下へ下りてきたものです。すると、妻がいきなりかう云ひました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まあ、嬉しさうにそは〳〵してゐらつしやること！」

妻の皮肉な眼付とその言葉とが、僕の胸を鋭くつき刺したのは勿論のことです。

そして僕はいつとはなしに、ぼんやり書齋に引籠つて、妻のことなんかは頭の隅つこに放り出して、澤子の若々しい面影を眼の前に描き出してる自分自身を、屢々見出すやうになりました。

僕は妻を愛してゐたのでせうか？　妻は僕を愛してゐたのでせうか？　……勿論僕達二人は、普通の意味では愛し合つてゐました。けれど、何かゞ、本當の切實な生活感が、深い所に潜んでるもの――それは後で申しませう――それに對する自覺が、缺けてゐたのです。

僕と妻とは、結婚當初から可なりよく融和して、凡そ夫婦といふものが愛し合ふ位の程度には愛し合ひました。僕は大して深酒ものまず、道樂もせず、一種の學究者でして、生活が華かでない代りに、至つて眞面目だつたのです。妻は所謂良妻賢母といつた型(タイプ)の女で、几帳面に家事を整へてくれました。で僕達はまあ幸福な家庭を造つたわけです。所が、お互に性格の底まで觸れ合ふくらゐに馴れ親しみ、それから次には、夫婦の鎹(かすがひ)と世間に云はれてる子供が出來、生活が複雜になつてくるに從つて、妙な工合になつてきたのです。妻の生活の中心は子供となり、僕の生活の中心は自分の勉強となつて、而もその兩方が、まるで別々の世界かの觀を呈したものです。妻は子供を偶像として押立て、僕は自分の仕事を偶像として押立て、そして互に領分爭ひみたいな調子になつてきたのです。

現代の婦人の生活は、結婚して子供が出來ると共に、自分の生活であることを止めて全く奉仕の生活となります。子供に奉仕するのです。凡てのことは子供を中心に割り出されます。良人の仕事なんかはどうでもいゝのです。良人はたゞ、子供の立派な生育に必要なだけの金と地位とを得てさへくれゝば、それで充分なんです。――それから第二に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼女の精神的進歩はぴたりと止つてしまひます。否却つて精神的に退歩してきます。善良なる保姆、これが彼女の理想となります。——第三に、彼女は良人を十重二十重に縛り上げて、自分の從順な奴隷にしようとします。献身的な奉仕的な愛を要求します。

所が、男の方から云へば、それらの凡てが間違つたものに見えます。勿論、自分自身に見切りをつけて、子供の生長にのみ望みを屬するといつたやうな、隱退的な心境にはいつた者は別ですが、さうでない者、まだ自分自身を第一に置いて考へてる者は、妻のさういふ態度が心外なものに思はれます。第一に、妻が眞向に押立てゝる偶像——子供——に對して、一種の反抗心を起します。第二に、精神的に退歩してゆく妻を、愚劣な女だと輕蔑します。第三に、自分を身動き出來ないようにとする妻へ反抗して、あくまでも自由でありたいと希ひます。——而も一方に、彼は第一義的な自分の仕事といふものを持つてゐます。そして、その仕事に理解のあるやさしい女性の魂を必要とします。さういふ女性の魂を缺いた彼の生活は、如何に落寞たるものでせう? 所謂悟道徹底した者でもなければ、その落寞さに堪へ得ません。大低の者は、淋しい魂の彷徨者となります。

結婚に次で來る幻滅(ヂスイリユージヨン)——それが男の大なる躓きです。この躓きを無事に通り越す者は幸です。

然しこんな議論はもう止しませう。それは理屈では分らないことです。一々切り離して眺めれば全く無意味なやうな、日常の些細な事柄が、積りに積つてくる——その全體の重量を背に荷つた人でなければ、分るものではありません。……君は、豐島與志雄氏の理想の女といふ小說を讀んだことがありますか。何なら讀んでごらんなさい。この間(かん)の消息が可なり詳しく、執拗すぎると思はれる位の筆つきで書かれてゐますから。

で、要するに、その頃僕の心は、可なり妻から離れて、或るやさしい魂を求めてゐたことだけは、君にもお分りでせ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

う。

さういふ心で僕は妻を眺めてみて——今迄よく見なかつたものを初めてしみ〴〵と眺める、といつた風な心地で眺めてみて、喫驚したのです。何といふ老衰でせう！　髪の毛は薄くなつて、おまけに黒い艶がなくなつてゐます。昔はくつきりとした富士額だつたその生え際が、一本々々毛の數を數へられるほどになつてゐます。額全體がとげ〴〵と骨張つてゐて、眼の縁や口の隅に無數の小皺が寄つてゐます。或る時彼女が庭に立つて、眞正面から朝日の光を受けてるのを見た時、僕はまるで別人をでも見るやうな氣がしました。晝間の明るい光の中に出てはいけない！　さう僕は咄嗟に感じたのです。……けれど、それらのことや、少し背を屈み加減にして肩を怒らしてることや、長火鉢の隅にかぢりついてる時が多くなつたことや、なか〴〵腰を立てない無精な癖がついたことや、怒りつぽい苛立たしい氣分になつたとや、手足の筋肉がこち〴〵に硬ばつてきたことや……そんな無數の事柄は、肺炎の衰弱から原因してると一歩讓つて考へても、どうにも我慢の出來ないのは、彼女の全體——身體と精神との全體に、一種の冷かな威嚴を帶びてきたことです。僕と意見が合はうが合ふまいが、そんなことに頓着なく自分の意見を主張し、家の中を冷然と監視し、その言葉附から擧動から態度に至るまで、少しの餘裕もない嚴肅さを示してるのです。やさしみとかゆとりとか濡ひとか柔かみとかいつたやうなものは、つゆほども見えないのです。一體彼女は表情の少い至極善良な——この善良といふことは、鈍重といふことゝ一歩の差ではないでせうか——その善良な女だつたのですが、それが、僕の氣付かぬまに、冷かな威嚴の城へまで變化して——向上してきたわけです。

さういふ妻を見出した僕が、いくら自ら抑へても、澤子の方へ心惹かれていつたのは、當然ではないでせうか。殊に、澤子をよく知つてゐる君には、僕が澤子へ惹きつけられていつたことは、よくお分りでせう。そして僕は、益々妻

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へ對しては冷淡になつてゆきました。

それになほいけないのは……これは一寸話しにくいことですが……僕の性慾が可なり弱かつた——友人等にそれとなく聞き合して比較してみると、非常に弱かつたといふことです。生理的の缺陷があるとは自分で思つてはしませんが、兎に角僕は並外れて性慾が弱いやうです。所が、夫婦生活には、この性慾といふことが可なり重大な條件らしいのです。大抵の女は、性慾の飽滿を與へらるれば、それで自分は愛せられてるのだと思ふものです。

所で……かういふ風に停滯してゐては仕末に終へませんから、物語だけをぐんぐん進めませう。

妻は僕と澤子との間を、ひそかに窺ひすましてゐたらしいです。澤子から手紙が來ると、「あなたの戀人から……、」などゝ云ひ出したものです。「手紙よりも、ぢかに逢つてゐらつしやい、許してあげますから、」などゝ云ひ出したものです。「馬鹿！」と僕は一言ではねつけましたが、彼女の眼付がいやに眞劍になつてるのを感じました。

そのうちに、馬鹿げたことが起つたのです。僕達はごく稀に、繪畫展覽會や音樂會などへ行くことがありました。そして……十一月でしたか——丁度昨年の今頃です——僕は何の氣もなく或る音樂會の切符を、妻と二人分だけ前以て買ひました。考へてみると、妻が肺炎になつてから後、二人で出歩くのはそれが初めてだつたのです。その前日から丁度、道子——長女の道子が、感冒の樣子で少し熱を出してゐました。然し大したことでもなさゝうだし、折角切符まで買つてあるのだからといふので、女中によく道子のことを云ひ含めて、僕達は出かけたのです。音樂會は、ピアノとヴァイオリンとで、演奏者の顏も相當によく揃つてゐて、可なり成功の方でした。

その歸り途です。寒い風が輕く吹いて、月が輝つてゐました。濠に沿つた寂しい道を、僕達は少し歩きました。晴着をつけお化粧をしてる妻と並んで歩くのが、僕には變に珍らしく不思議だつたのです。暫く默つて歩いてゐましたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妻は急に怯へたやうな聲で、「道子はどうしてるでせう？」と云つたものです。その時、僕の心のうちに、非常な變動が起りました。何かしらもや〳〵としたものが消えてしまつて、凡てがまざ〳〵と浮んできたといふ感じです。自分が如何に勝手なことをしてゐたか、彼女を如何に苦しめてゐたか、彼女と自分とが如何に遠く離れてしまつたか、といふやうなことを、しみ〴〵と感じたのです。僕の胸は涙ぐましい思ひで一杯になりました。僕は低い聲で、自分自身に云つてきかせるかのやうに云ひました。

「節子、何もかも許してくれ。僕がみんな惡かつたのだ。僕はどんなにお前を苦しめたらう！そしてまた、どんなに自分自身を苦しめたらう！　僕の心は誤つた方向へ迷つてたのだ。今僕には何もかもはつきり分つた。僕はお前を本當に愛してる。あの……澤子さんと交際するのがお前につらいなら、僕はこれから斷然交際を止してしまはう。それが本當なのだ。もう往き來もしなければ、手紙も出すまい。僕はそれを誓ふ。誓つて絶交してみせる。ねえ、これで何もかも許してくれ。節子、二人だけの途を進まうぢやないか。」

妻は泣いてゐました。僕も涙ぐんでゐました。そして、何かに感謝したい心で一杯になつてゐました。

僕は後で考へてみて、どうしてその時さう感傷的な心地になつたのか、自分でも不思議なくらゐです。實際、それから家に歸つてきて、すや〳〵と眠つてる道子を見出して、ほつと安心した氣持で妻と顔を見合した時、僕は自分でも變に氣恥しかつたのです。とは云へ、その感傷的な心地のうちにこそ、僕の本當の魂があつたのかも知れません。

けれどもそのことから、事情は急に險惡となつたのです。宛もさうなるのが運命でゞもあるやうに、一歩々々破綻へ押し進んでいつたのです。そして僕自身は、餘りにうつかりしてゐました。

僕は妻へ誓ひはしたものゝ、どうしても澤子のことを忘れる――心の外へ追ひ出すことが出來なかつたのです。その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上、妻と僕との間は、また以前通りの冷たいものになつてしまつたのです。あの音樂會の晩は、云はゞ燃えつきる蠟燭の最後の焰みたいなものでした。そのために却つて、僕達の間は一層陰鬱になつたのです。そして僕はそれを元へ引戻さうとは努めずに、澤子の面影へばかり心を向けたのです。

僕は妻へ內密で手紙を書きました。勿論內容は何でもないことばかりを選んだのですが、度數は前より多くなりました。澤子からも年內に一度手紙が來ました。一度は自身で訪ねてきました。そして、神話の原稿も可なり續いたから、正月號から暫く休むといふ社の意向だと、濟まなさゝうに僕へ告げました。僕が妙に默り込んでるので、暫くして歸つて行きました。

「神話の原稿も當分いらないさうだから、これで澤子さんとの交渉も絕えるわけだよ。」

そんな白々しいことを、いくらかてれ隱しの氣味もあつて、僕は妻へ云つたものです。妻は僕の方をぢろりと見て、

「さうですか。」と冷淡に云つたゞけでした。

それから正月になつて、僕は手紙を書いてる現場を妻から押へられたのです。霙交りの風が物凄く荒れてる夜でした。風の音に聞入りながら澤子のことを考へてると、何とも云へない悲愴な氣持になつて、こま〳〵と而も要所を外した文句で手紙を書き初めました。その時妻がふいに僕を襲つたのです。恐らく彼女は蟲が知らしたとでもいふのでせう。いつもは子供を口實に早くから寢てしまつて、夜遲く僕の書齋へやつて來るなどゝいふことは、殆んどなかつたものです。所がその晩に限つて、嵐の音に乘じて夜更けに僕を襲つた――さういふ風に僕は感じたのです。襖の開く氣配に振返つてみると、何かを狙ひすますやうな眼付で、足音も立てずに僕の方へ寄つて來るぢやありませんか。僕は吃驚して……或る神秘的な恐怖を感じて、いきなり立上つたものです。その僕の樣子がまた、彼女には異樣に思はれたに違ひありま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せん。彼女は一瞬のうちに凡てを悟つたらしいのです。いきなり書きかけの手紙を掴んで、これは何です？　と問いたのです。僕はどうすることも出來ませんでした。

それから、痛ましい場面が起りました。妻は口惜し泣きに泣きながら、僕へがむしやらにつゝかゝつてきました。わざ／＼年賀狀まで出しておいてすぐに……と云ふんです。實は、僕は澤子へ年賀の葉書を書いて、これだけはいゝだらうと妻へ見せたのでした。つまらない技巧を弄したものです。それから、妻は僕の手紙の文句を一々切り離して、例へば、「この荒涼たる冬のやうに私の心も淋しい……春の柔かな息吹きを待ち望んでゐます……ともすると生活が嫌になります……理解ある友情が人生に於ての慰安です……」などゝいふ言葉――前後の文派にうまく包み込まれてはゐるが、僕の切ない心が影から覗いてるやうな言葉、それだけを一々取上げて、僕を責め立てるんです。次には、音樂會の歸りに自分から誘つておいて！　……あれも私を瞞着するためのお芝居だつたのでせう、と云ふんです――その點に彼女は最も力を入れてゐました。それから、始終隱れて逢つたり文をやりとりしてゐらしたに違ひない、などゝ……。其他、僕は一々覺えてはしません。彼女は恐ろしく興奮してゐましたし、僕も非常に興奮してゐました。そして、いきなり立つた彼女の前に、僕は何といふ醜い卑屈な態度を取つたことでせう。反抗の心がむら／＼と起つてくるのを强ひて押へつけて、ありもしない涙まで搾り出して、彼女の前に奴隷のやうに哀願したのです。今後の行ひで證を立てると誓つたのです。

其場はそれきりに終りましたが、僕はそのために、何とか片をつけなければならない事情にさし迫つたのを、はつきり感じました。そして、片をつけるためと稱しながら、とんでもない途へ進んでいつたのです。

僕は妻の目を偸んで、澤子へ長い手紙を書きました。――私はあなたへ一切を告白しなければならない、といふのを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冒頭にして、いつとはなしに彼女を愛してゐたこと、彼女の面影が自分の心に深く刻みつけられてゐること、その彼女は、遠くを見つめるやうな澄み切つた眼でいつも自分を見つめてゐて、理解のあるやさしい心で自分を包んでくれる、晴々とした自由な純潔な少女――この少女といふのが大切なんです――少女であること、そして、自分は妻と二人の子供までである身でありながら、不自然だとは知りながら、そして妻を愛してゐながら、どうしても彼女の面影を拂ひのけ得ないこと、などを長々と書きました。次に、妻との間が氣まづくなつてゐることを少し書きました。それから、けれど自分は今長い苦しみの後に、或る晴々とした所へ出られた、危險の恐れなしにあなたと交際し得られる自信がついてゐる、やがては妻の心も解けて、あなたのお友達になるかも知れないと思ふ、といふやうなことを書き、但し當分のうちだけは、訪問を止してほしい、そして士官學校宛に手紙を頂きたい、と述べておいて、けれども私の告白があなたに不快ならば、あなたに苦しみをかけるならば、このまゝお別れするか否かは、あなたの自由だ、と手紙を結んだものです。

實際僕は、他愛もないことを空想してゐたのです。自分の愛を葬つてしまつて、彼女と普通の交際を續け、やがては妻をも加へて、三人で親しい友達になる、といふのです。そして、士官學校では手紙を自宅へ廻送しないで取つて置いてくれるものですから、そちらへ手紙を貰ふことにしたのです。……それから、僕の心持のうちには、自繩自縛する氣もあつたでせうし、凡てを彼女の手中に托して捨鉢になる氣もあつたでせうし、其他何だか自分にも分りはしません。

やがて彼女から返事が來ました。――私は先生をなつかしいやさしい方として、兄のやうに、叔父のやうに、……いえやはり先生といつた氣持で、おしたいしてゐたのですが、それが、自分の不注意から、奧樣の御心を害つたのを、しみ〴〵と恥ぢられ悔いられてなりません。お許し下さいませ。これから御交際を續けるかどうかについては、隨分考へ

ましたけれど、先生も危険がないと仰言いますし、私の方も危險なんか感じられませんから、やはりお交りしても差支へないだらうと存じます。奥様を僞ることは悲しいけれど、やはりこれまで通り、先生として親しまして下さいませ。

……と云つた要領の手紙でした。

僕はそれを讀んで、一種の不滿を覺えました。何故かは分りませんが、恐らく僕は、彼女が僕の手紙を讀んで、實は私もあなたを戀してゐました、もう苦しさに堪へきれません、と云つたやうな返事をくれることゝ、心の奥で待つてゐたのでせう。馬鹿げてゐます。が兎に角、彼女の返事によつて、僕は急に前途が開けてきたやうな氣になりました。空想が實際となつて現はれるかも知れないと思ひました。そして僕は二度ばかり彼女へ、輝かしいとか晴れやかとか光明とかいふ文字をやたらに使つた、若々しい手紙を書いたものです。

所が、或る晩、妻はまた僕の書齋へ押寄せてきたのです。彼女の様子で、僕はたゞごとでないと直樣察しました。果して彼女は、甚落付きに落付き拂つた態度で、僕へ肉迫してきました。

「あなたにこの字がお讀めになりまして?」

さう云ひながら彼女は、一枚の新らしい吸取紙を差出してゐます。それを見ると、僕は息がつまりさうな氣がしました。澤子様といふ僕の文字があり〱と現はれてたのです。

呪はれたる吸取紙哉です。吸取紙からいろんな秘密が曝露することは、西洋の小説なんかにはよくありますね。レ・ミゼラブルにも吸取紙が重大な役目をしてる所がありましたね。實際秘密な手紙を書く折には、ペンでなしに毛筆に限ります。慌てゝる餘りに、吸取紙へまでは氣がつきませんからね。而も日本の手紙のやうに、宛名を最後に書く場合には、その名前が一番吸取紙に殘り易いものです。おまけに封筒までついてる始末です。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私こんなに踏みつけにされて、そして捨てられるまで待つよりは、自分から出て行つてしまひます。」
もう云つたきり、妻は石のやうに默り込んでしまひました。僕はもうすつかり狼狽して、哀願や威嚇や誓ひやを、自分で何を云つてるかも分らないでくり返しました。僕の言葉が終ると、彼女は冷かに云ひました。
「美事に誓ひをお立てなさいましたわね。」
その時僕はかつとなつたものです。突然調子を變へて云つてやりました。
「ぢやあどうしようと云ふんだ? こんなに云つても分らなけりや、勝手にするがいゝさ。たゞ一言云つておくが、變なことでもやつたら、もう二度と取返しはつかないから、さう思つてるがいゝ。」
「私にも考へがあります。」
それだけの言葉を交はしてから、僕達はほんとに石のやうに默り込んでしまつたのです。僕はもう萬事が終つたといふ氣がしました。
然しその時、僕はまだ分別を失ひはしませんでした。いろんなことを正しく……さうです、正しく考へ廻したのです。妻は僕を愛してゐたのです。僕は結婚してからも何回か、つい友人に誘はれて、待合なんかへ泊つてきたこともありますが、そんな時妻は、輕い嫉妬をしたきりで、大した抗議も持出しませんでした。然し此度は、彼女は僕の心を他の女に奪はれたのです。僕の肉體上の過失は許し得ても、僕の心が他へ奪はれることを許し得ない彼女の氣持に、僕は理解が持てました。その上僕と澤子とのことは、病後のヒステリックな彼女の精神へ、殆んど燒印のやうに刻み込まれてきてゐたのです。僕は可なり激しい自責の念を覺えました。長年僕の影になつて苦勞してきた彼女、まだ幼い二人の子供、輝かしい前途を持ち得る澤子、それから自分の地位や身分……そんな下らないことまで考へて、僕はもうちつと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して居れなかつたのです。前にお話したやうな妻へ對する不滿なんかは、忘れてしまつたのです。その時の僕の心は、恐らく最もヒューメンだつたに違ひありません。

妻がなほ家の中にぢつとしてるのを見て、僕はその間に一切の片をつけたいと思ひました。澤子とも別れて自分一人の生活を守つてゆかう！ さう決心しました。そして澤子と別れるために、僕はまた馬鹿な眞似をしたのです。せずにはゐられなかつたのです。

僕はその翌朝、澤子へ簡單な手紙を速達で出しました。——明後日午後一時に、東京驛でお待ちしてる。半日ゆつくり郊外でも歩きながらお話したい。けれど、あなたの氣持によつては、來るとも來ないとも自由にしてほしい。……と云つたやうな、まるで不良青年でも書きさうな手紙です。

僕には澤子が必ずやつて來るとの直覺がありました。その日は學校をも休んでしまつて、十一時半頃から東京驛へ行つて、待合所の片隅に蹲つたものです。そして彼女へ何と話したものか、何處へ行つたものか、そんなことを考へてゐました。そのうちに、僕は何だか眠くなつてきました。それほど僕の精神は弱りきつてぼんやりしてゐたのです。

一時よりは二十分ばかり前に澤子はやつて來ました。僕は夢から覺めたやうにして、彼女の絹の肩掛の藤色の地へ黒い線で薔薇の花の輪廓だけが浮出さしてあるのを、珍らしさうに眺めました。すると「先生、どこかへ參りませう」と彼女の方から促したのです。その眼を見て僕は、彼女が事情を察してることを、何か決心してることを、瞬時に讀み取つたのです。

初め僕は、大森邊かまたはずつと遠く鎌倉や逗子あたりへ行くつもりだつたですが、その方面には澤子の知つてゐさうな文士がいくらも居るらしいのを思ひ出して、急に方向を變へて、電車で吉祥寺まで行きました。そして井ノ頭公園

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは反對の方へ、田圃道を當もなく歩き出したのです。

不思議なことには、妻に關する言葉は一言も僕達の口へ上らなかつたのです。全く忘れはてたかのやうでした。それから僕の告白の手紙についても同樣でした。僕達は全く無關係な取留めもない事柄を、ぽつり〳〵話したものです。どんなことだつたか覺えてゐませんが、たゞ、氣象學では雲を十種に區別してるけれど、僕にはその二三種きり見分けきれない、といふ事や、水蒸氣が空中で凝結して雨になるまでの經路が、專門家にもまだはつきり分つてゐないさうだ、といふやうなことを、僕は彼女へ話したのを覺えてゐます。といふのは、北の空から薄い雲が徐々に擴がりかけてゐたからです。また彼女の方では、壁の中から爺さんと婆さんとが杖ついて出てくるといふ啄木の歌を讀んで、童話を書きたくなつたといふことを、僕に話したのを覺えてゐます。

さういふ風に、何といふこともなく歩いてるうちに――三月の末のわりに日脚の暖い日でした――僕は次第に或る焦燥……といふほどでもないが、何かから落付かない氣分になりました。彼女もしきりに、洋傘を右や左へ持ちかへてゐましたが、ふいに云ひ出したのです。

「先生、私もつと遠くへ行つてみたい氣がしますの、一度も行つたことのない遠くへ……。」

それだつたのです、僕が何かをしきりに求めながら、それが自分でも分らずにぢれてゐた、その何かは、そのことだつたのです。僕は嬉しくて飛び上りました。ほんとに愉快な浮々した……そしてどこかぼんやりした氣持になりました。

僕達は吉祥寺驛へ引返し、可なり長く待たされてから汽車に乗り、立川まで行きました。汽車の中には、氣の早い觀櫻客らしいのが少し眼につきました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立川へ行くと、案外に早く日脚が傾いて、もう夕食の時刻になつてゐました。季節外れではありましたけれど、川の岸にある小さな家へはいつて、有り合せのものでよろしければといふその夕食を取ることにしました。そして、ひつそりした二階の隅つこの室に通つて、すぐ眼の下の川を眺めました。河原の中を僅かな水がうねり流れてるのを見て、「これが多摩川ですの……小さいんですのね、」と云ふ澤子の言葉に、僕はすつかり氣がのびやかになつたものです。そして夢をでも見てるやうな心地になつたのです。現實かしら？　夢かしら？　さう考へてるうちに、妻のことも家のことも、東京のことも、遠くへぼやけて消えてゆきました。世界のはてへでも來たといふ氣持です。

それから、夕食をしたゝめて、ぼんやりして、雨が少し降り出して、雨の音を樂しく聞きながら、ぽつり／＼話をしたり、顔を見合つて他愛もなく微笑んだりして、女中がお泊りですかつて聞きに來たのへ、平氣で首肯いて、別々の床へはいつて、安らかに眠つてしまつたのです。

かう簡單に云つてしまうと、君はそれが本當でないやうに思はれるでせう。然し實際にその通りだつたのです。僕はかう思ひます、妻子のある相當年配の男が戀をする場合には、その戀は極めて肉的な淫蕩的なものであるか、或は極めて精神的な清淨なものであるか、そのどちらかだと。そして僕のは、全く後者だつたのです。その上僕の眼には、澤子がごく無邪氣な少女のやうに映じてゐたのです。前に云つたやうに、ごく晴れやかな清らかな娘だつたのです。僕はその晩彼女と對坐してゐながら、どうして自分はこんな若い娘に戀したのかと、幾度自ら怪しんだことでせう。そしてその時の僕の氣持は、戀ではなくて、可愛いくてたまらないといつたやうな、そして親しいしみ／＼とした愛だつたのです。彼女の方でも、全く信頼しきつた、何一つ濁りや距てのない、清らかな澄みきつた眼で、僕をぢつと見てゐたのです。僕達は何もかもうち忘れて、うつとり微笑まずにはゐられませんでした。戀と云ふには、餘りに親しすぎるなつか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しい感情だつたのです。

それは、一時の幻だつたのでせうか？

翌朝、起き上つて、前日來のことがはつきり頭に返つてきた時、妙に顔を見合はせられない氣持で相並んで、曇り空の下の河原の景色を眺めた時、深い底知れぬ悲しみが胸を鎖してきて、僕は手摺につかまつたまゝ、ほろ〳〵と涙をこぼしたのです。澤子もしめやかに泣き出してゐました。暫く泣いてゐてから、彼女はふと顔を擧げて、「先生……」と云ひました。僕もすぐに、「澤子さん……」と答へました。そして二人は、初めて唇を許し合つたのです。

その後の僕の氣持は、君の推察に任せませう。僕達は恐ろしい罪をでも犯したものゝやうに、慌だしくその家を飛び出して、急いで東京へ歸つて來ました。その時僕の眼前の彼女は、もう淸い無邪氣な少女ではなかつたのです。自由な潑剌とした若々しい一人前の女、として彼女は僕の眼に映じました。そして東京へ近づくに從つて、僕は妻のことを、自分を束縛してる醜い重苦しい肉塊のやうに感じ出したのです。一方が若い香ばしい女性を象徴してるとすれば、一方は老衰しひねくれ惡臭を立てゝる女性を象徴してゐたのです。……澤子はきつと口を結び眼を空に定めて、端正と云へるほどの顔付で、ぢつと僕の横に坐つてゐました。飯田町驛で汽車から下りて、云ひ合はしたやうに右左へ別れる時、僕達は許し合つた眼付をちらと交はしてから、まるで他人のやうなお辭儀をし合つたものです。

僕は眞直に家へ歸りました。再び雨が落ちてきさうな陰鬱な空合でした。僕の心は捨鉢になつてゐました。玄關から大跨に飛び込んで、「昨夜は遲くなつて三浦君の家へ泊つてきた。」と怒鳴るやうに妻へ云つたものです。妻は何とも答へませんでしたが、何かをその瞬間に直覺したらしく、ぢつと僕の顔を見つめました。その眼が一切の決算を求めてる、といふやうに僕は感じました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、それが最後でした。

翌日僕は士官學校で、澤子の手紙を手にしました。——先生、もう致し方ございませんわ。私は先生を愛してをります。とたゞその三行だけの、名前も宛名もない中身でした。僕はその文句を、幾度口の中でくり返したことでせう。

それから三日目に、妻は僕の不在中に出て行つたきり、二人の子供まで置きざりにして、もう歸つて來ませんでした。

僕は氣がつかずにゐましたが、妻はあの音樂會の晩以來、或はもつと前から、蛇のやうな執拗さで、僕のあらゆることを探索してゐたらしいのです。後で分つたのですが、僕がでたらめに口へ上せた三浦の家へも、果して僕がその晩泊つたかどうかを聞き合したのです。それからまた、僕は澤子からの手紙を本箱の抽出のいろんなノートの下にしまつて、抽出の鍵は鴨居の上の額縁の後ろに隠しておいたものです。所が、彼女が出て行つた翌日の晩、ふとその抽出をあけてみると、澤子からの手紙がみなずた／＼に引裂いてあつたのです。最後の三行の手紙も勿論でした。

この手紙を引裂いたといふ仕打が、沈みかけてゐた僕の心を一時に激怒さしたのです。それから、暫くたつて後、彼女の代理としてやつて來たその叔父とかに當る男が、いやに人を輕蔑した口調で、更に僕を怒らしたのです。そのうちに僕は、變に皮肉な落付いた氣持になりました。さうなつた時は、もう彼女とは別れるの外はないと胸の底まで感じてゐました。それからのことはお話するにも及ばないでせう。いろんな嫌な交渉があつて、結局僕は正式に妻と別れてしまひました。思へば不運な女です。彼女には何の咎もなかつたのですから。けれど僕に云はすれば、彼女も何とか他に取るべき態度が——勿論初めのうちに、あつたらうと思はれます。

妻とはもう別れるの外はないと徹底的に感じだすと共に、一方に僕は、全く反對のことを感じだしたのです。三歳と

六歳との二人の女の兒の面倒を、女中と共にみてやつてるうちに、僕は、その時になつて初めて、僕のこれまでの生活は、僕一人の生活ではなかつたこと、僕と妻と二人の生活だつたこと、僕と妻と二人で築き上げてきた生活だつたこと、それが巖のやうに嚴として永久に存在すること、……などをひしと感じたのです。あゝ、それをも少し早く感じてゐましたら……！　然しもうどうにも出來ませんでした。その生活はぷつりと中斷されたのです。そして僕は、僕達のさういふ生活の上へ、僕と澤子との生活をつぎ合せることが、僕にとつて如何なるものであるかを、そして子供達……さうです、子供達にとつて如何なるものであるかを、どしりと胸に感じたのです。僕は何も、再婚だとか繼母だとか、さういふことを云つてるのではありません。それも勿論ありますが、それよりももつと重大なこと……何と云つたらいゝでせうか……この生活の接木といふこと、一方に節子が生きてゐるのに、そして僕達の――僕と節子とです――僕達の生活が生々しい截斷面を示してゐるのに、それへ他のものをつぎ合はせるといふこと、それが許さるべきかどうかを、僕は泣きながら魂のどん底まで感じたのです。

僕はもう理屈を云ひますまい。このことは實感しなければ分らないことです。……さう、僕は此處へ來る途中で、運命の動き――運命の共鳴、といふやうなことを云ひましたね。平たく云へばあれです。節子と再び一緒になることにも、澤子と一緒になることにも、どちらにも僕は自分の運命の共鳴を感じなかつたのです。僕は一人で子供達と共に暮してゆかうと決心しました。そして、母を失つた子供達が、多少神經衰弱……もしくは神經過敏らしくなつてるのを見て、また、その未來を考へてみて、僕はどんなに悲痛な氣がしましたでせう！　然し致し方もありません。

僕は澤子に逢つて、自分の心をぢかに話しました。彼女は泣きました。そして僕の心を理解してくれたらしいのです。それから長い苦しみの後に、僕達は只今のやうな平靜な友情の域へぬけ出したのです。澤子が他に戀を得て、その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人と結婚でもするまでは、僕は彼女の親しい友人として、彼女と交際を續けるでせう。君は……人は、僕を卑怯だと思ふかも知れません。然し卑怯だか勇敢だかは、外的な事柄できめられるものではありません。と云つて僕は、勇者にも怯者にもなりたいのではありません。たゞ、僕の所謂天は――僕自身の天は、澄みきつてゐると共に變に憂鬱です。

五

宮原俊彦の話は、佐伯昌作に、大きな打撃――と云ふより寧ろ、大きな刺戟を與へた。昌作はその晩、何かに魅せられたやうな心地で、たゞ機械的に下宿へ歸つていつて、冷たい布團を頭から被つて寢てしまつたが、翌朝七時頃に眼を覺して起き上つた。そんなに早く起き上ることは、彼としては全く近頃にないことだつた。起き上つて、珍らしく溫い朝飯を食つて、さて何をしていゝか分らないで、火鉢にかぢりついて煙草を吸ひ初めた時、急にはつきりと前晩のことが見えてきた。――俊彦は話し終つてから、何かを恐れるもののやうに默り込んだのだつた。長い話の後に突然落ちかゝつてきたその深い沈默が、一種の威壓を以て迫つてきて、昌作も口が利けなかつた。それから俊彦はふいに眼を醒かして、「子供達が待つてるに違ひない、」と云ひながら立上つた。昌作も後に從つた。俊彦は非常に重大な急用でも控へてるかのやうに、馬鹿々々しく歸りを急いでゐた。足早に電車道をつき切つて、タクシーのある所まで行つてそれに乘つた。昌作も途中まで同乘した。二人は別れる時碌々挨拶も交はさなかつた。夜は更けてゐた。

それらのことを眼前に思ひ浮べながら、彼はぢつとしてをれない心地になつて、表に飛び出した。雨後の空と空氣と日

の光とが、冷たく冴えてゐた。彼は帽子の縁を目深く引下げ外套の襟を立てゝ、當もなく歩き出した。歩きながら考へた。

然し彼の考へは、長く一つの事柄にこだはつてるかと思ふと、それと全く縁遠い事柄へ飛んでいつたりして、少しもまとまりのないものだつた。がそのうちで、幾度も戻つてきて彼を深く揺り動かす事柄が一つあつた。

彼は宮原俊彦の話を、可なり自然にはつきりと受け容れることが出來たが、その終りの方、澤子と一緒になれないといふ所が、どうもよく分らなかつた。生活の接木などゝいふ變な言葉を俊彦は用ゐたが、そんな深い重大なことではなく、何かごく平凡な――常識的な事柄が、彼を支配したのであつて、それへ無理に理屈をつけたもののやうに、昌作には思へるのだつた。そしてその平凡な常識的な事柄がまた、昌作には、自分の想像もつかないことであるやうな氣がした。非常に平凡で非常に曖昧だつた。而も一方には、その平凡な曖昧なものゝ上に、俊彦自身が云つたやうに、彼の運命が重くのしかゝつてるらしかつた。――そしてそのことが、昌作を或る暗い所へ引きずり込んでいつた。彼は何だか形體の知れない壁にぶつかつたやうで、息苦しさまで覺えた。「つきぬけなければならない、つきぬけることが必要だ。」さう彼は心で叫んだ。それと共に、澤子に對する愛情が激しく高まつてきた。彼にとつては、宮原俊彦こそ、澤子へ縋りつかうとする自分を距てる毒虫のやうに思へた。――けれど、不思議にも、宮原俊彦に對するさういふ反感は、晝間の明るい光の中でこそしつかりしてゐるが、夜にでもなつて、何か一寸した變化でもあれば、すぐに音もなく消え去つてしまつて、全く反對のものになりさうなことを、昌作は心の奥の方で感じたのである。――昌作はどうしても落付けなかつた。何とかしなければならなかつたが、それが分らなかつた。

彼は考へ込みながら、ぶらり〳〵歩いた。そのうちに何もかも投げ出したい氣持になつて、わりに呑氣になつた。空腹を覺えたので、見當り次第の家で一寸晝食を取つて、それから、全く知らない碁會所へはいり込んで、日當りの惡い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がらんとした瞬間で、主人と手合せをやつた。それにも倦いて、四時頃表へ出で、またぼんやり歩き出した。そしてふと彼は足を止めた。晩秋の淋しい光が、くつきりとした軒並の影で、斜め上から街路を蔽ひつくしてゐた。彼は急いで下宿に歸つてみた。昨日の今日だから、或は澤子から手紙なり電話なり來てるかも知れないと、突然そんな氣がしたのである。

下宿で彼を待ち受けてゐたのは、澤子からの便りではなくて、片山からの電話だつた。朝から二度ばかりかゝつてきたと女中が云つた。

昌作は約束の四五日が今日でつきることを思ひ出した。然し彼にとつては、その四五日が如何に長い時日だつたらう。彼は遠い昔のことをでも思ひ出すやうに、五日前の片山夫妻との約束を考へた。そして、九州へ行かないことにいつしか決定してる自分の心に氣付いて、自ら喫驚した。自然に決定されたのだ、といふ氣がした。

「何とでもその場合に應じて斷つてやれ。」

さう捨鉢に心をきめて、彼は片山の家へ行つてみた。今から行けば丁度夕飯時分で、夫妻といつものやうに會食するといふことが、今は一寸氣にかゝつたけれど、構ふものかとまた思ひ返した。

禎輔は不在で達子一人だつた。昌作は何故ともなく安堵の思ひをした。達子は彼の姿を見て、待ちきれないでゐたといふ樣子を示した。

「佐伯さん、一體どうしたの？　あんなに電話をかけたのに……。昨日も今日も五六回の上もかけたんですよ。するといつも、居ない、居ないつて、まるで鐵砲玉みたいに、何處へあなたが行つたか分らないんでせう。私ほんとに氣を揉んだのよ。變に自棄にでもなつて、何處かで醉ひつぶれでもしてるのぢやないかと、そりやあ心配したんですよ。……で

も、宿酔のやうでもないやうね。一體どうしたんです？　電話をかけたらすぐに來て下さいつて、あんなに賴んどいたのに……。」

　黑目の小さな輝いた眼がなほちら／＼光つて、受口の下唇をなほ一層つき出してるその顏を、昌作は不思議さうに見守つた。

「あなたも御存じぢやありませんか、私は此頃はわりに謹直になつて、酒なんか餘り飮まないやうになりました。たゞ、一寸用が出來たものですから、その方に馳けずり廻つてゐたんです。」

「でも昨日はあんなに雨が降つたのに、その中を……？」

「雨くらゐ平氣ですよ。」

「嘘仰言い、懶惰なあなたが！　……それぢやあ、やはりあのことで？」

　昌作は自分の心が憂鬱になつてくるのを覺えた。達子が澤子のことを云つてるのだとは分つたが、それを今話したくなかつた。そして言葉を外らした。

「何か僕に急な御用でも出來たんですか。」

　達子は眼を見張つた。

「急な用ですつて？　……あなたはもう忘れたの？　……四五日のうちに返事をするつて約束したぢやありませんか。あれから今日で幾日になると思つて？　丁度五日目ですよ。まあ、馬鹿々々しい！　當のあなたが平氣でゐるのに、私達だけで心配して……。あなたくらゐ張合ひのない人はないわ。片山はね、あなたがあんまり心をきめかねてるのを見て、何か屹度他に心配事があるに違ひない、と云ふんでせう。私あなたの言葉もあつたけれど、實はかうらしいつて、あな

たが話した戀のことを打明けたんですよ。すると片山は長く考へてゐましたつけ。そして、さういふことなら、その方はお前が引受けて、まとまるものならまとめてやるがいゝ、何も九州へ行くことが是非必要と云ふのぢやないから、他に東京で就職口を僕が探してやらうと、さう云ふんですよ。それから、一體佐伯君が戀してるつていふその女は、どういふ種類の女かつて、しつゝこく聞かれたものですから、私、よく分らないけれど、お友達の妹さんかなんか、そんな風な、ハイカラな女學生風の令孃らしいと、さう云つてしまつたんですが、……どう？ さうぢやなくつて？」

「女學生風の令孃だなんて、どうしてそんなことに……。」

「なりますとも。だつてあなたは、その女が自分にとつては、光明だとか太陽だとか、そんなことをくり返し云つてたでせう。あなたのやうに、玄人の女をよく知つてる人で……さうぢやありませんか、盛岡のことだつて、またその後のことだつて、考へてごらんなさいな……さういふ人で、相手が藝者だの……珈琲店の女だのゝ場合に、それが私にとつては光明だの太陽だのと、そんなことを云ふものですか。そんなことを云ふからには、相手は若いハイカラな……令孃といふにきまつてるわ。ね、當つたでせう。……何もそんなに喫驚しなくつたつていゝわよ。」

然し昌作が呆氣にとられたのは、彼女のいつもの早急な一人合點からとはいひながら、女學生なんかは大嫌いだと平素彼が云つてた言葉を忘れてしまつて、どこかのハイカラな女學生風の令孃だと勝手にきめてる、そのことに就てだつた。そしてそのことから、彼の氣分は妙に沈んできて、たゞ自分一人の心を守りたいといふ氣になつた。

「ねえ、もうかうなつたら仕方ないから、何もかも仰言いよ。……何處の何といふ人？ 私出來るだけのことはしてあげるわ。」

「もう暫く何にも聞かないでおいて下さい。」と昌作は眼を伏せたまゝ云つた。「私はまだ何にも云ひたくないんです。あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なたの仰言るやうな、そんな普通の戀ぢやないんです。戀……といつていゝかどうかも分りません。何だかかう……私自身が駄目になつてしまひさうなんです。いろんなことがごた〳〵してゐて、とんでもないことになりさうです。……私はもう少し考へてみます。考へさして下さい。私の心が……事情がはつきりしてきたら、すつかりお話します。是非お力をかりなければならなくなるかも知れません。けれど、今は、今の所は、自分一人だけのことにしておきたいんです。……馬鹿げた結果になるかも知れません。下らないつまらないことになるかも知れません。……まるで分らないんです。はつきりしてからお話します。」

「だつて私、何だか心配で……。」

「私一人だけのことなんです。私一人だけのことが、どうしてそんなに……。」

「心配になりますとも！」と達子はふいに大きな聲を出した。「私あなたのことなら、何でも氣にかゝるんだから、さう思つてゐらつしやいよ。お前はどうしてさう佐伯君を贔負にするかつて、片山もよく云ふんですが、えゝ、贔負にしますとも！　あなたのことなら何でもかでも氣にかゝつて、一生懸命になつてみせますよ。私あなたを弟のやうな氣がしてるから……私にも片山にも弟なんかないから、あなたを弟と思つてるから、氣を揉むのは當り前ですよ。」

昌作には、何で彼女が腹を立てゝるのか譯が分らなかつた。けれど何故となく、非常に濟まないといふ氣がした。彼女を怒らしたのを、非常に大きな罪のやうに感じた。彼は突然涙ぐみながら云つた。

「濟みません。僕が悪かつたんです。」

「悪いとか悪くないとかいふことではありません……。」さう云つておいて達子は、長く――昌作が待ちきれなく思つたほど長く、默つてゐた。そして靜に云ひ續けた。「實際私は氣を揉んだんですよ。四五日とあなたが約束したでせう、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して一方に、さういふ女の人があるでせう、そしてそのまゝ音沙汰なしですもの、あなたがどんなにか苦しんでるだらうと思つて、自分のことのやうに心配したのよ。それに、片山はあゝ云ふし、そのことも早くあなたに傳へたいと思つて、昨日から幾度電話をかけたでせう。片山はまた片山で、何だかあなたに逢ふことを非常に急いでゐたんです。東京にいゝ口があるのかも知れませんよ。私には何とも云はないで、たゞ話があると云ふきりですが……。さう／＼、あなたがゐらしたら、會社の方へ電話をかけてくれつて云つてゐました。一寸待つてゐらつしやい、今かけてみますから。」

達子が立上つて電話をかける間、昌作は變な氣持でぼんやり待つてゐた。ハイカラな女學生風の令孃だの、九州へは行かないでもよいだの、弟だの、禎輔から急な話があるだの、そんないろんなことが、まるで見當違ひの世界へはいり込んだ感じを彼に起さした。そして、電話口から戻つて來た達子の言葉は、更に意外な感じを彼に起さした。

「あの、あなたにすぐ武藏亭へ來て貰ひたいんですつて。片山はあすこで二三人の人と會食することになつてゐて、今出かける所だと云つてゐます。けれど、食事をするだけだから、そして、何だか嫌な人達だから、あなたが來て下されば、逃げ出すのによい口實になるから、なるべく早く來て來さいつて。……丁度いゝぢやありませんか。うんと御馳走さしておやりなさいよ。武藏亭、御存じでせう。片山の會社のすぐ近くの西洋料理屋。……私も一緒に行きたいけれど、お前が來ちやあ都合が惡いつて、人を馬鹿にしてるわ。」

達子が平氣でさう云ふのを見て、昌作はまた一寸變な氣がした。彼の頭に、その瞬間に、或る漠然とした疑惑が生じたのだつた。禎輔の胸の中に何かゞあるのではないかしら? 昌作は先日の禎輔の樣子を思ひ出した。

暫く考へてから彼は、達子の言葉に從つて、兎も角も武藏亭へ行つてみようと決心した。何かを得らるればそれでよいし、得られなければ上等の洋酒でも澤山飲んでやれ、とそんな氣になつた。そして、今からではまだ早いと達子が云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふのを、下宿に一寸寄つて行くからと斷つて、慌しく離し去つた。

彼が立上ると、達子は後から送つて來ながら云つた。

「後で、明日にでも、どんな話だつたか、私に聞かして下さいよ。私一寸氣になることがあるから。」

昌作は振返つた。然し彼女は先を云ひ續けてゐた。

「でも、何でもないことかも知れないわ。案外いゝ話かも知れないわ。……それから、その女の人のことね、氣持がきまつたら聞かして下さいよ。その方は私の受持だから。……私がうまくまとめてあげますから、ほんとに、心配しないでもよござんすよ。」

昌作は外に出て、急に、何だか達子へ云ひ落したことがあるやうな氣がした。といつて、それが何であるかは自分でも分らなかつた。考へてもをれなかつた。禎輔の話といふのがしきりに氣にかゝつた。

けれど、實際達子が云つたやうに、すぐに行つては食事中だと氣がついて、途中で電車を下りて少しぶらついてから、まだ早いかも知れないとは思ひながらも、待ちきれないで武藏亭へはいつて行つた。

片山の名前を告げると、彼はすぐにボーイに案内されて、二階の奥まつた室へ通された。そして一目で、自分の疑惑が事實であることを見て取つた。

一方が隣室との仕切戸になつてゐて、三方白壁の、天井が非常に高く思へる、狹い室だつた。天井から下つてる電燈の大きな笠と、壁に懸つてる一枚の風景畫との外には、殆んど裝飾らしいものは一つもなく、眞中に長方形の卓子が一つ、椅子が三四脚、そして小さな瓦斯煖爐の兩側に、二つの長椅子が八の字形に並べてあつた。その一方に、外套と帽子とを放り出して、背廣姿の片山禎輔が、先刻からぽつねんと待ちくたびれて、そして何か考へに沈んでゐたといふ風

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、腰掛けてゐたのである。――昌作は初め、禎輔が他の客と會食中なのでこの室に待たせられること〻思つたが、一歩足を踏み入れて禎輔の姿を認めるや否や、はつと思つた警戒の念から、それらのことを一目に見て取つた。

禎輔は先程からの沈思からまだ醒めないかのやうに、顔の筋肉一つ動かさないで、それでも落付いた聲で、彼に云つた。

「遲かつたね。すぐに來るやうにと云つたんだが……。」

昌作は一寸どぎまぎした。

「でも、あなたは他の客と會食なさるといふお話でしたから、時間をはかつて來たんです。もうお濟みになりましたか。」

「うむ……。」と禎輔は曖昧な答へをした。「君は食事は？」

「濟みました。」

うつかりさう遠慮深い答へをしたのに、昌作は自ら一寸面喰つた形になつて、急いで一方の長椅子に腰を下した。

「ぢやあ、何處かへ酒でも飲みに行かうか。どうだい？　君のあそび振りも一寸見たい氣がするね。」

昌作は不快な氣がした。揶揄されてるのだと思つた。彼が先にちよい〳〵あそんだのは、禎輔等のそれと違つて――禎輔が會社の方の交際でそんな場所に時々足を踏み入れてゐることを昌作は知らないではなかつた――それと違つて、比べものにならないほど安つぽい所でだつた。而も彼は近來、そんな所からさつぱり足を拔いてしまつてゐたのである。

「いやに變な顔をするぢやないか。」禎輔は云つた。「酒を飲むのだつて仕事をするのだつて、結局は同じことだらう

よ。どちらも生きてる働きなんだからね。……だがまあいゝさ。それなら、此家に上等の葡萄酒があるから、そいつでも飲まうよ。」

禎輔はボーイを呼んで、料理を二三品と、フランスから來たあの上等のを瓶のまゝ二本ばかり持つて來いと命じた。そして、それが來るまで彼はやたらに金口を吹かして、昌作にもすゝめた。昌作もやはり默つてその煙草を吹かしながら、向ふから話し出されるのを待つた。が禎輔の言葉は、彼が全く豫期しない方面のことだつた。

「僕はね、」と禎輔は葡萄酒の杯を擧げながら云ひ出した。「芭蕉の句集をこないだから讀み出してみたのだが、僕のやうな門外漢にもなか〳〵面白いよ、そして、ふと馬鹿なことを思ひついて、こゝろといふ字があるものだけをより出してみたのさ。何でも十四五句あつたやうだ。みんなは覺えてゐないが……實際さう胸にぴんと響くのは少いやうだね。

魚鳥のこゝろは知らず年のくれ
七夕のあはぬこゝろや雨中天
葉にそむく椿や花のよそごゝろ
椎のはなの心にも似よ木曾の旅
住つかぬ旅のこゝろや置火燵
もろ〳〵の心柳にまかすべし
野ざらしを心に風のしむ身かな

その他まだ澤山あつたがね、そのうちで僕の心を惹いたのが二つあるよ。

この二つのうちで、君、文學的に云つてどちらが傑れてるのかね。君は僕よりもこんなことには明るいのだらう……。」

昌作は、禎輔が先日持出した何のことを思ひ出した。

「あなたの云はれるのは、文學的價値ではなくて、思想的價値のことでせう？」

「さう、思想的價値、先づそんなものだね。……僕は野ざらしをの方が先達てまでは好きだつたものさ。所が其後もろもろの方が好きになつたよ。そして、君を……また自分を、餘り苦しめたくなくなつたのだ。」

昌作は驚いて禎輔の顏を見つめた。が禎輔は、ぢつと葡萄酒の瓶の方に眼を注いで、何度も杯を重ねた。

「君、この葡萄酒は旨いだらう。こいつを一人で一本ばかりやつつけると、愉快な氣持になつて踊り出したくなるよ。君ももつとやらないか。」

「え〻。」と昌作は答へておいて、機會を遁すまいとあせつた。「それで……そのことで……私は九州へ行かなくてもよくなつたのですか。何だか私にはさつぱり分りませんけれど、奥さんが……。」

「あ〻、達子は君に何と云つて居た？」

「九州へ行かないでもい〻し、それに……あなたが私に急なお話があるとかで……。」

「それだけ？」

禎輔の眼付が急に鋭くなつたのを昌作は感じた。彼は何にも隱せない氣がした。

「それから、私の……女のことについて。」

「君はその女のことをすつかり達子に話したのか。」

「いえ、その方のことは私が引受けてやると奥さんは云はれたんですけれど、まだ私の方の氣持がはつきりしないものですから、詳しくは話しません。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それだけ、逵子が君に云つたことは？」

「えゝ。」

「逵子は君が何處かの令嬢に戀(ラヴ)したんだと云つてたよ。」

「令嬢ぢやないんです。」

「でも若い女なんだらう？」

「えゝ。」

禎輔はまたそれきり默り込んでしまつた。昌作は不安な豫感に驅られて、苛ら〳〵してきた。

「急なお話つて、どんなことですか。」

「君は、僕がなぜ九州なんかへ君を追ひやるのかと疑つたね。」

禎輔は急に額を曇らせながら、ゆつくりした調子で云つた。昌作は吃驚した。そして急いで辯解しようとした。その言葉を禎輔は遮つた。

「君が疑ふのは道理(もつとも)だよ。そして、實は、君がその疑ひを逵子へ洩らしたゝめに、僕は可なり安心したのだ。うち明けて云へば、僕は逵子に暗示を與へて、君の心を探つてみたのさ。すると、逵子がうまくその使命を果したといふわけだよ。」

昌作にはその謎のやうな言葉の意味が更に分らなかつた。禎輔はまた云つた。

「君が逵子へ向つて、片山さんはなぜ私を九州なんかへ追ひ拂はれるのでせう、と云つたことゝ、それから、君に若い戀人(ラヴァー)があるといふことゝで、僕は自分が馬鹿げたことに惱んでるのを知つたのだ。そして、いろ〳〵考へてみて、一層

君に何もかもうち明けて、さつぱりしたいといふ氣になつたのだ。……これだけ云へば、君にも大凡は分るだらう？」

然し昌作には更に分らなかつた。彼は何か意外なことが落ちかゝつてくるのを感じて、息をつめて待ち受けた。

「ぢやあ、君は知らなかつたのか。」と禎輔は低い鋭い聲で云つた。「さうでなけりや、忘れてしまつたのだ。……いや知つてた筈だ。」

「何をです？」

「僕と君のお母さんとのことを。」

「あなたと母とのこと？」

禎輔は彼の眼の中をぢつと見入つた。

「僕と君のお母さんとの關係さ。」

「關係つて……。」

その時昌作は、今迄嘗て感じたことのない一種妙な氣持を覺えたのである。頭の中にぽーつと光がさして、すぐに消えた。そのために、もや〳〵とした遠い昔の記憶の中に、見覺えのあるやうなまたないやうな一つの事柄が、眼を据ゑても殆んど見分けられないくらゐの仄かさで、浮出してきて、それが一寸した心の持ちやうで、現はれたり消えたりした。夢の中でみて今迄忘れてゐたことが、突然ぼんやりと氣にかゝつてくる、さういつた心地だつた。勿論、一つの場面も一つの象も彼の記憶に殘つてはしなかつた。けれど、それを何だかよく知つてゐたやうでもあつた。知つてゐながら忘れてゐたやうでもあつた。或は初めから知らないのを今突然想像したやうでもあつた。——彼は見えないものを背伸びして強ひて見ようとするかのやうに、ぢつと自分の記憶の地平線の彼方に眼を定めたが……ふいに、さうした自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自身に氣がついて、顏が眞赤になつた。

「君はあの頃もう十一二歳になつてたから、普通なら當然察するわけだが、頗る洒潑で無頓着で、今とはまるで正反對の性質らしかつたから、或はぼんやり感じたゞけで通りすぎたのかも知れないが……。」

そこまで云ひかけた時禎輔は、昌作が眞赤になつてるのを初めて氣付いたらしく、突然言葉を途切らしてぢつと彼の顏を見つめた。そして急き込んで云つた。

「君は知つてたぢやないか！」

昌作は宛も自分自身に向つて云ふかのやうに、低い聲で呟いた。

「昔から感じてたことを、今知つたやうです。」

「昔から感じてたことを今知つた……。」さう禎輔は彼の言葉を繰返しておいて、俄に皮肉な調子になつた。「なるほど、さうかも知れない。君のお母さんは利口だつたからね、そして僕も利口だつたのさ。そして君はうつかりしてたものだ。」

昌作はもう堪へ難い氣持になつてゐた。彼は哀願するやうな眼付を、ぢつと禎輔の顏に注いでゐた。それを見て禎輔は、非常な努力をでもするものゝやうに、肩をぐつと引緊めて、それから落付いた調子で云つた。

「許してくれ給ひ。僕はこんな風に云ふ筈ぢやなかつたのだが……。僕は君が非常に素直な心持でゐることを知つてゐる。そして僕も實は素直に話したいのだ。」そして暫く默つた後に彼はまた續けた。「僕が高等學校の時だ。君の家が、君とお母さんと二人きりで淋しいものだから、僕は君の家に寄宿してゐたね。あの時、僕は君のお母さんを姉のやうに慕つたし、君のお母さんは僕を弟のやうに可愛がつてくれた。そして僕達は極めてロマンチックな愛に落ちたのだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

僕は小說家でないから、それを詳しく說明出來ないが、君にも大體は分るだらう。そんな風だから、普通さういふ關係にありがちな、淫蕩的なことなんかは、少しもなかつたのだ。君がはつきり氣付かなかつたのも、恐らくそのせいだらう。だが君も知つてる通り、僕がこちらの高等學校を出ると、わざ〳〵京都の大學へ行つてしまつたのは、實はそのことを罪惡だと意識したからだつた。然し僕は君のお母さんに對しては、今でも淸い愛慕の念を持つてゐる、姉と母と戀人とを一緒にしたやうな氣持で……。え、君はなぜ泣くんだい？」

昌作は禎輔の言葉をよく聞いてゐなかつた。たゞ何故ともなく胸が迫つて來て、いつしか眼から淚がこぼれ落ちたのだつた。彼は禎輔に注意されて初めて我に返つたかのやうに、そして自分自身を恥ぢるかのやうに、葡萄酒の杯の方へ手を差伸した。

禎輔は彼の樣子を暫く見守つてゐたが、やがてふいに立上つて室の中を步きだした。そして卓子のまはりを一巡してきてから、また元の所へ腰掛けて、何か嫌なものをでも吐き出すやうに、口早に話し初めた。

「僕は君に要點だけを一息に云つてしまふことにしよう。判斷は君に任せるよ。……君が盛岡であんなことになつて、東京に歸つてきてからものらくらしてるのを見て、僕達は影で可なり心配したものなんだ。なぜつて、僕達は間接に君の保護者みたいな地位に立つてるのだからね。そして君の心を察して、初めは何とも云はないで放つておいたが、もうかれこれ二年にもなるのに、君がまだぼんやりしてるものだから、達子が眞先に氣を揉み初めたのだ。そして君自身も、今に生活をよくしてみせると、口でも云ひ、心でも願つてゐたらう。それに僕は、君に一番いけないのは仕事がないからだと思つたのだ。何も僕は、君に月々補助してる僅かな金錢なんかを、かれこれ云ふのではない。このことは君も知つてゐてくれるね。……そこで、僕は君のために東京で少々就職口を探してみたが、僕の會社の社長にも相談して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みたが、どうも思ふやうな地位がないものだから、何の氣もなく……全く何の氣もなくなんだ、九州の時枝君のことを思ひついて、手紙で聞き合してみると、案外いゝ返事なんだらう。で僕もつい乘氣になつて、本式に交渉して、あれだけの有利な條件を得たわけなんだ。時枝君の方では、古い話だが、僕の父の世話になつたことがあつて、その恩返しつて心もあるに違ひない。所が、この九州の炭坑といふことが……偶然そんなことになつたのだが、その偶然がいけなかつたのだ。九州の炭坑と聞いて、君が逡巡してるうちに、そして僕から云はすれば、九州へ行くくらゐ何でもないし、非常に有利な條件ではあるしするから、君にいろ〳〵說き勸めてるうちに、ふと、僕は自分の氣持に疑惑を持ち初めた。君を九州へ追ひ拂はうとしてるのぢやないか？　とね。」

禎輔は葡萄酒の杯を手に取りながら、暫く考へてゐた。

「僕自身にも何だかはつきり分らないが……前後ごた〳〵してゐて、要領よく話せないが……要するにかうなんだ。その時になつて、頭の隅から、君のお母さんと僕とのことが、ふいに飛び出して來たのさ。そして僕は、一寸自分でも恥しくて云ひづらいが、達子と君とのことを……疑つたのでは決してないが、君のお母さんと僕とのことが一方にあるものだから、今に僕が死んだら、達子と君とが同じやうなことになりはすまいかと、いや、僕が生きてゐるうちにも、そんなことになりはすまいかと、現になりかゝつてるのではあるまいかと、馬鹿々々しく氣になり出したものさ。君は丁度、僕が君のお母さんに馴れ親しんでたやうに、達子に馴れ親しんでゐるのだからね。」

昌作は驚いて飛び上つた。それを禎輔は制して、また云ひ續けた。

「まあ終りまで默つて聞き給へ。……そこで、一口に云へば、僕は君と達子との間を嫉妬したのさ。僕が嫉妬をするたんて、柄にもないと君は思ふだらう。全く柄にもないことなんだ。然しその時僕の頭の中では、僕と君のお母さんとのこ

と、君と達子とのことゝが、ごつちやになつてしまつてゐた。それに、君が九州行きをいやに逡巡してるものだから、或は達子に心を寄せてるからではあるまいかと、變に氣を廻してしまつたのだ。それを肯定する考へと、それを否定する考へとが、僕の頭の中では爭つたものだ。そしてまた一方には、僕は嫉妬の餘り君を九州へ追ひ拂はうとしてるのだと、自分で思ひ込んでしまつたのさ。そしてまた、それを自分で責め立てたのだ。君を追ひ拂はなければいけないといふ考へと、そんなことをしてはいけないといふ考へとが、頭の中で爭つたものだ。から別々に云つてしまへば何でもないが、そんないろんなことが、それにまだ他のことも加はつて、一緒にごつた返して、僕の頭はめちや／＼になつてしまつた。全く神經衰弱だね。神經衰弱にでもならなければ、こんなことを考へやしない。……それでも僕は、自分を取失ひはしなかつた。そして達子のあの卒直な快活さも、僕には力となつた。それからいろんなことがあつて、結局僕は達子を使つて君の心を探偵してみたのだ。そして、片山さんはなぜ私を九州なんかへ追ひやるのだらうかと、君が達子へ聞いたことゝ、君が他に若い女を持つてるといふことゝが、僕にとつては光明だつたのだ。なぜつて、君がもし達子へ心を寄せてるのなら、自分で氣が咎めて、達子へ向つてそんなことを聞けるものではない。若い女の方のことは、云はないでも分りきつた話だ。……それから僕は、次第に考へを變へてきて、君を九州なんかへやらない方がよいと思つたのだ。君を九州へやることは、君自身を苦しめるばかりでなく、僕をも苦しめることになるからね。然し、是非とも君が行きたいと云ふなら別だが……君は行きたくはないんだらう？」

「行かないつもりでしたが、然し……。」と昌作は口籠つた。

「然しだけ餘計だよ。そんなことは打棄つてしまうさ。……がまあ、今晩はゆつくり話をしよう。そして、このことは達子には内緒にしといてくれ給ひ。彼女の心を苦しめたくないからね。」そして禎輔は何かを恐れるものゝやうに室の中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見廻した。「もつと飲まうぢやないか。どし〳〵やり給ひ。」

然し昌作は、云はれるまでもなく、先程からしきりに杯を手にしてゐた。禎輔の話をきいてるうちに、頭の中が變にこんぐらかつてきて、判斷力を失ひさうな氣がしたのである。

「人間の頭つて可笑しなものだ。」と禎輔は半ば皮肉な半ば苛立つた調子で云ひ出した。「思ひもかけない時に、思ひもかけない古いことが飛び出してきて、それがしつこく絡みつくのだからね。然し考へてみると、僕は昔の自分の罪から罰せられたやうなものさ。さうだ、その罪の罰なんだ。そして、君がお母さんの子だといふことがいけなかつたのだ。全く別の男なら、いくら達子と親しくしやうと、僕はあんな馬鹿げた考へを起しはしない。然し君は、君のお母さんの子だ。それがいけないのだ。」

昌作はその言葉を胸の眞中に受けた。今にも何か恐ろしい氣持になりさうだつた。然し彼はそれをぢつと抑へて、唇を嚙みしめた。すると、禎輔は突然荒々しい聲で云つた。

「君は怒らないのか。……怒つてみ給ひ。怒るのが當然だ。」

昌作は身を震はした。侮辱……といふだけでは足りない或る大きな打擊を、禎輔の全體から受けたのである。そして、自分が今にも何を仕出かすか分らない恐れを感じた。彼はぢつと、煖爐の瓦斯の火に眼を落して煙草を手にしてる禎輔の顏を、次にその眉の外れの小さな黑子を見つめた。その時、禎輔は吸ひさしの煙草を床に放りつけて、眼を擧げた。その眼が一杯涙ぐんでゐた。昌作は息をつめた。

「佐伯君。」と禎輔は云つた。「僕が何で君にこんな話をしたか、その譯を云はう。普通なら、この話は僕達三人に惡い影響を與へさうだ。三人の間に或る氣まづい垣根を拵へさうだ。然しそんなことは、僕と君とさへしつかりしてゐれば、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何でもないことだ。或は却つてゐゝ結果になるかも知れない。達子は少しも知らないんだからね。それで僕は、思ひ切つて君に打明けることにしたのだ。自分の心をさつぱりさしたい氣もあつた。然し實は、人間の心に……魂に、過去のことが思ひもかけない時にどんな影響を與へてくるか、それを君に知らしたかつたのだ。あの盛岡の女の事件みたいな、單なる肉體上の事柄ぢやない。もつと深い心の上の問題だ。それを僕は君のために、あの……。」

禎輔は云ひかけたまゝ、變に考へ込んでその先を續けなかつた。昌作は或る不安な豫感に慴えて、立上つて歩き出した。禎輔の調子が落付いてるだけに、それが猶更不安だつた。その上昌作は、もう可なり醉つてゐた。自分でも何だか分らない種々の幻が、頭の奥に入り亂れてゐた。それが歩毎にゆら〳〵揺めくのを、不思議さうに見守つてゐた。するうちに、彼はふと立止つた。禎輔の樣子が急に變つたのを感じたのである。禎輔はきつぱりした調子で云つた。

「僕は君のことを考へたのだ。あの柳容堂の澤子と君とのことを。」

昌作は殆んど自分の耳を信じかねた。

「君が戀してるといふのはあの女のことだらう？」

「えゝ。」と昌作は口と眼とをうち開いたまゝ機械的な答へをした。

「僕がそれを知つてるといふのが、君には不思議に思へるかも知れないが、實はごく平凡なことなんだ。少し注意してをれば、何でも分るものさ。會社の男で、君の顏を知つてる者がゐてね……君の方でも知つてるかも知れないが、名前は預つておかう。その男から僕は、柳容堂の二階へ君が度々行くといふことを、聞いてゐたのだ。そして、達子から君に戀人があるといふことを聞いた時、何故かそれを思ひ出して、實はすぐに彼處へ内々探りに行つたものさ。すると果してさうなんだ。……僕はこれで、秘密探偵の手先くらゐはやれる自信があるね。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それから彼は突然、非常に眞面目な表情になつた。

「僕の頭にあの女のことが引掛つてたといふのには理由がある。あの女が彼處に出だして間もなく、今年の梅雨の前頃だつたらう、會社の或る若い男が――これも名前は預つておかう――あの女に夢中になつたものさ。僕も二三度引張つて行かれたが、あの女には確かに、プラトニックな戀の相手には適してるらしいエクセントリックな所があるね。……そのうち二人の關係は可なり進んだらしく、一緒に物を食ひに歩いたこともあるさうだ。所が可笑しいぢやないか、愈々の場合になつて、あの女はその男をぽんとはねつけたものさ。何でも、私はやはり……、」そして禎輔は、其處につゝ立てる昌作の顔をぢつと見つめた「やはり宮原さんを愛してゐます、といふやうなことでね。」

昌作は立つてをれなくなつて、長椅子の上に倒れるやうに腰を下した。

「このことを君はどう思ふ？……僕は宮原といふ男とあの女との關係をよくは知らない。君はもうよく知つてるだらうが……何でも宮原といふ男は、子供のある妻君を追ん出してまでおいて、そのくせあの女と一緒にはならずに、而も往き來を續けてるといふぢやないか。二人の間には、常人には分らないよほど深い何かの關係があるものだと、僕は思ふよ。それからまた一方に、あの澤子といふ女は、胸の奥底は非常にしつかりしてゐながら、精神的に……或は無自覺的に、可なり淫蕩な……といふのが惡ければ、遊戯心の強い女だと、僕は思ふのだ。僕の會社の男が引つかゝつたのもそこだ。……それで、僕は君のために心配したのさ。君の方で次第に深入りしていつて、最後に、私はやはり宮原さんを愛してゐます、とやられたらどうする？……或はまたうまく君達と一緒になつたとした所で、あの女の心に宮原のことがいつ引つかゝつて來ないものでもない。手近な例はこの僕自身だ。頭の隅に放り込んで殆んど忘れてゐた遠い昔のことが、ごく僅かな機會に、全く何でもない場合に、ふいに僕を囚へてしまつたぢやないか。ましてあの女と宮原とは、僕みたいな昔

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い昔のことでもないし、そんななまやさしい關係でもない。心の奥まで、魂の底まで、深く根を下してる何かゞあると、僕は思ふのだ。……このことさへ君が分つてくれゝば、他のことはどうでもいゝ。僕と君のお母さんとの話なんかも、嘘だつたとしてもいゝさ。たゞ僕は君に、盛岡の二の舞をやつてくれるなと、老婆心かも知れないが、切に願ひたいのだ。こんど變なことになつたら、君の生活はもう二度と立て直ることはないだらう、といふ氣が僕にはするのだ。」

昌作は咽び泣きが胸元へこみ上げてくるのを覺えた。身體中が震えた。そして叫んだ。

「さうです。此度躓いたら、私の生活はもう立て直りはしません。まるで暗闇です。何にも私を支持してくれるものはないのです。私はどうしていゝか分らなくなります。……此度躓いたら、もう何もかも駄目です。私自身は駄目になつてしまうんです。もう立上ることが出來ないかも知れません。もう今迄のやうなぐうたらな生活を續けることも出來ないし、働くことも出來ないかも知れません。全くめちやくちやになりさうです、此度躓いたら……。」

然し彼の心は別なことを感じてゐた。それは「此度躓いたら」ではなくて、「澤子を失つたら」であつた。彼はその時、澤子こそ自分の生活を照らしてくれる光であることを、ひしと感じたのだつた。生活を立て直すには、仕事を見出すことが第一であると禎輔は云つたが、また、何をやるかといふ方向を見出すことが第一であると俊彦は云つたが、それよりも實は、澤子こそ最も必要であることを、彼は感じたのだつた。澤子を失つたら、凡てが暗闇のうちに沒し去るといふことを、感じたのだつた。——そして彼は突然涙に咽んで云つた。

「考へてみます。……よく考へてみます。」

禎輔は一寸肩を聳かした。昌作の言葉とその心との距りを少し氣付き初めたかのやうに、彼の顔をぢつと見つめた。がその時昌作は、自分の心を曝すのが堪へ難くなつて、咄嗟に、殆んど滑稽なくらゐ突然に、卓子の方へ向き直りなが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら云つた。

「少し腹が空きましたから……。實は食事をしてゐなかつたのです。」

禎輔は呆氣にとられてぼんやり眼を見張つたが、やがて機械的に立上つて云つた。

「つまらない嘘を云つたものだね。……だが、僕も實は碌に食事をしなかつたのだ。」

彼は冷たくなつた料理を退けて、新らしく料理を註文した。勿論葡萄酒も更に一瓶持つて來さした。二人は變に默り込んで食事をした。食ふよりも飲む方が多かつた。

「君、今晩は醉つ拂つて構はないから、澤山やり給ひ。」

そんなことを云ひながら禎輔は、急に昌作の眼の中を覗き込んだ。

「然し、思切つて戀をするのもいゝかも知れない。戀は若い者の特權だと誰かが云つてゐた。……だが、あの女のことは、なるべく早く達子へすつかり打明け給ひ。早く打明けなければいけないよ。」

何故？と問ひ返さうと昌作は思つたが、口を開かない前にその思ひが消えてしまつた。彼は早く一人きりになりたかつた。一人きりになつて考へたかつた。何を考へていゝか分らなかつたが、頭の中に雜多な幻影が立ち罩めて、それが醉のために、非常に眼まぐるしく回轉して、自分を驅り立てるがやうだつた。彼はむやみと葡萄酒を飲んだ。熱つた額に瓦斯煖爐の火がかつときた。そして頭が痲痺していつた。本當に醉つてしまつた。禎輔も可なり醉つてゐた。話は當面の事柄を離れて、一般的な問題に及んでいつた。その問題で二人は論じ合つた。――昌作の頭には、自分が次のやうなことを云つた、といふ記憶しか殘らなかつた。

――自分は盛岡で、フランス人の牧師に一年ばかり私淑してゐた。そしてその牧師から、自分が本當にクリスチャン

にはなれないといふことを、明に指摘せられた。「イエス彼に曰ひけるは主たる爾の神を試むべからずと錄されたり。」けれども自分には、神を試みてからでなければ神を信じられなかつた。「誠に實に爾曹に告げん一粒の麥もし地に落ちて死なずば唯一つにて存らんもし死なば多くの實を結ぶべし。」けれど、自分は、自分自身のことしか考へてゐなかつた。「爾曹もし瞽ならば罪なかるべし然れど今われら見ゆと言ひしに因りて爾曹の罪は存れり。」けれど自分は、さういふ罪を負つたパリサイ人になら甘んじてなりたかつた。そして今でも甘んじてなりたいと思つてゐる。……自分は人生の落伍者であり、人生に對する信念を失つてはゐるが、實はその信念を衷心から得たい。そしてそれを得ることは、先づ自分自身に對する信念を得てからでなければ、出來ないやうに思はれる。自分自身をつゝ立たせることが第一である……。

六

昌作は、夜中に、唸り聲を出して眼を開いた、そしてまたうと〳〵とした。そんなことを何度か繰返した。朝の九時頃にまた、自分の唸り聲にはつと我に返ると、此度は本當に眼を覺してしまつた。

何のために唸り聲を出したか、それは彼自身にも分らなかつた。或る切端つまつた息苦しい考へ――どういふ考へだかは彼も覺えてゐない――のためだつたか、或は葡萄酒の醉のためだつたか、否恐らく兩方だつたらう。頭の中がひどくこんぐらかつて、そして腦の表皮が石のやうに堅くなつて、そして恐ろしく頭痛がしてゐた。

彼は仕方なしに、顏を顰めて起き上つた。冷い水を頭にぶつかけておいて、かたばかりの朝食の箸を取り、丁寧に髯を剃り、乾いた頭髮へ丁寧に櫛を入れ、それから、やつて來た猫を膝に抱きながら、炬燵の中に坐つて、ぼんやり考へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

込んだ。室の中の空氣が妙に底寒くて、戸外には薄く霧がかけてゐた。

彼は或る計劃を立てるつもりだつた、もしくは、或る解決の途を定めるつもりだつた。——濃霧の中にでも鎖されたやうな自分自身を彼は感じた。九州行きの問題も、自然立消えのやうでゐて、實はまだ宙に浮いてゐた。片山禎輔の告白によつて、片山夫妻と自分との間に、新たな引掛りが出來てきさうだつた。宮原俊彦に對しても、このまゝでは濟みさうにない何かゞ殘つてゐた。そして澤子！彼女一人が、それらのものゝ中に半身を沒しながらも、俊彦との關係や禎輔の批評などを引きずりながらも、なほ高く光り輝いてゐるやうに、彼の眼には映ずるのだつた。そして、その澤子を得るには、どうしたらよいかを彼は考へた。愼重にやらなければいけない、とさう思つた。不思議にも、この愼重といふことが、今の場合彼には非常に大事だつた。もし輕卒なことをしたら、高く輝いてゐる澤子までが、いろんなごた〳〵したものゝ中に沈み込んでしまひさうだつた。さうしたら、自分自身がどうなるか分らない氣がした。どんなことがあつても、澤子だけは高く自分の標的として掲げておきたかつた。——さういふ彼の氣持を强めたのは、一つは亡き母のことだつた。彼は母に對して、一種敬虔な思慕の念を懷いてゐた。そして母と禎輔との關係については、別に憤慨の念は覺えなかつた。それを彼ははつきり考へたことはなかつたが、前から知つてるやうでもありまた知らないやうでもあつた。が何れにしても、それは遠い昔のことだつた。けれども彼は、今突然はつきりしてきたその事柄から、深い絕望に似た憂鬱と寂寥とを覺えた。母のことではなく、自分自身のことが、堪へ難いほど悲しく淋しかつた。澤子、お前だけはいつまでも僕のために輝いてゐてくれ！そして彼は涙と焦燥とを同時に感じた。——然し、愼重にしなければならなかつた。といつて、愚圖々々してもおれなかつた。彼はいろんな方法を考へた。片山達子に凡てを打明けてみやうか？……宮原俊彦にぶつかつていつてみやうか？……片山禎輔の力をかりることにしやうか？……澤子の前に身を投げ出し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てみやうか？……片山夫妻のどちらかを宮原俊彦に逢はしてみやうか？……其他種々？――然しどれもこれも、たゞ事柄を複雑にするばかりで、何の役にも立ちさうになかつた。一寸何かゞ齟齬すれば、凡てががら〳〵に壊れ去りさうだつた。一層ぶち壊してしまつたら？……然しその後で……？

立てるつもりの計劃が少しも立たなかつたのは、彼の受動的な無氣力な性質のせいでもあつたが、更になほ頭痛のせいだつた。二三日來の心の激動と前夜の馴れぬ葡萄酒の宿醉とのために、頭が恐ろしく硬ばつて痛んで、何一つはつきりと考へることが出來なかつた。頭腦の機關全體が調子を狂はして、ぱつたり止つて動かない部分と眩るしく回轉する部分とがあつた。それで彼は、前述のやうなことを、秩序立てゝ考へたのではなくて、一緒くたにまた斷片的に考へたのだつた。凡てが夢のやうであると共に、部分々々が生のまゝ浮き上つて入亂れてゐた。

膝の上に眠つてしまつた猫を投り出して、それが、伸びをして欠伸をして、沒表情な顔で振返つて、またのつそり炬燵の上に這ひ上つてくるのを、彼はぼんやり見守りながら、いつまでも考へ込んだ。頭痛のために晝食もよく喉へ通らなかつた。戸外の霧がはれて、薄い西日が障子にさしてきてからも、彼はなほ身を動かさなかつた。

二時頃、柳容堂から電話がかゝつてきた。それでも彼の心はまだ夢想から醒めきらなかつた。ぼんやり電話口に立つと、澤子の聲がした。

「あなた佐伯さん？……私澤子よ。……何してゐらつしやるの？」

「何にもしてゐない。」

「ぢやあ、一寸來て下さらない？話があるから。今すぐに。」

「今すぐ？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「えゝ。晩は他に客があるとお話が出來ないから、今すぐ。お待ちしてゝよくつて?」

昌作は一寸考へてみた。がその時、彼は急に頭が澄み切つて、我知らず飛び上つた。澤子の許へ驅けつけてゆくといふ一筋の途が、はつきり見えてきた。彼は怒鳴るやうにして云つた。

「すぐに行くよ。」

そして澤子の返辭をも待たないで、彼は電話室から飛出して、大急ぎで出かけていつた。

けれど、柳容堂へ行くまでのうちに、譯の分らない恐れが彼の心のうちに萠した。何かに驅り立てられてるやうな自分自身を恐れたのか、或はこの大事な時にひどく頭がぼんやりしてるのを恐れたのか、或は一切を失ふかも知れないことを恐れたのか、或は一切を得るかも知れないことを恐れたのか、或は取り返しのつかないことになりはしないかを恐れたのか、何れとも分らなかつたが、多分それらの凡てだつたらう。戀してる女の所へ行くといふやうな喜びは、少しも感じられなかつた。そして彼は非常に陰慘な氣持になり、次には捨鉢な氣持になり、それから、何でも期待し得る胎を据えた而も暗い氣持になつた。

彼を迎へた澤子は、何か氣懸りなことがあるらしい妙に沈んだ樣子だつた。

「あれから何をしてゐらして?」と彼女は尋ねた。

「いろんなことがあつたよ。」と答へて昌作は俄に云ひ直した。「が何にもしないで、ぼんやりしてゐた。例によつて猫の生活さ。」

「さう。ずつと家にゐらしたの。私あなたが昨日にでも來て下さるかと思つて、待つてたけれど、來て下さらないから、今日電話をかけたのよ。まあ……あなたは變な眞蒼な顏をしてるわ。」

昌作はふいに拳で額を叩いた。

「少し頭痛がするだけだよ。感冒をひいたのかも知れない。……強い酒を飲ましてくれないか？いろんなのを二四杯。ごつちやにやるんだ。感冒の神を追つ拂ふんだから。」

「そんなことをして大丈夫？」

心配さうに覗き込む彼女を無理に促して、彼はいろんな色の酒を三四杯持つて來させ、煖爐の火を焚いて貰ひ、その前に肩をそばめて蹲つた。澤子も彼の横手に腰を下した。

「あなたは本當に家にぼんやりしてゐらしたの？」と彼女はまた尋ねた。

「さうさ。」

「あれからどんなことをお話なすつたの、宮原さんと？」

「あゝ、あの晩？」そして彼は澤子の顏をちらと見やつた。「宮原さんの述懷を聞いたよ。」

「述懷つて？」

「君と宮原さんとの物語さ。」

澤子は少しも驚かなかつた。

「それから？」

「すぐに歸つて寢たよ。」

「いえ、その外に……。」

「何にも話しはしなかつた。もう遲かつたし、宮原さんの話が馬鹿に長かつたからね。そんなに話が出來るものか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ぢやあほんとにそれきり？」

「可笑しいな。何がそんなに氣にかゝるんだい。宮原さんには君が僕を紹介したんぢやないか。」

「でも、何か……むつかしい話をして、それであなたが苦しんでなさりはしないかと、たゞそんな氣が私したものだから……」

「そりやあ、苦しんだかも知れないさ。」と不機嫌に云ひかけて、昌作はついむきになつた。「ほんとに苦しんだよ。いくら考へても分らないからね。」

「何が？」

「何がつて、僕にも分らないよ。何もかも分らなくなつてしまつた。何もかも駄目なんだ。もうどうなつたつていゝさ。」

そしてまだ云ひ續けようとしてゐるうちに、誠實とも云へるほどの澤子の眼付に彼はぶつかつた。變に氣が挫けて、先が續けられなかつた。そして暫く默つてた後に、馬鹿々々しい――その實眞劍な――一つのことが頭に引つかゝつてきた。彼は云つた。

「僕はいくら考へても分らない。話を聞いても分らない、まるで謎みたいな氣がするが……實際僕には謎のやうに思へるのだ。」

「どんな謎？」

「宮原さんと君との關係さ。」

「あらいやよ、關係だなんて。たゞのお友達……先生と……お弟子といつたやうな間ぢやありませんか。」

「今ぢやないよ。あの時……宮原さんが奥さんと別れた時に……。」

「だつて、宮原さんには二人もお子さんがおありなすつたでせう。」

「それだけの理由で？」

「えゝ、たゞそれだけよ。」

が彼女はその時ふいに、耳まで眞赤になつた。昌作は驚いてその顏を見つめた。けれど次の瞬間には、彼女はまた元の清澄な平靜さに返つてゐた。彼は恥しくなつた。そして泣きたいやうな氣持になつた。

「もうそんな話は止さう。」と彼は呟いた。

「えゝ、何か面白い話をしませうよ。……さう、私春子さんを呼んでくるは。私ね、あの人に何もかも話すことにしてるの。あの人と宮原さんが、私の一番親しいお友達よ。……そりやあ氣の毒なほんとにいゝ人なのよ。」

さう云ひながら彼女は立上つた。昌作はぼんやりその後姿を見送つた。極めて善良らしくはあるがまた可なり鈍感らしい春子と、どうして澤子がさう親しくしてるのか、昌作には不思議な氣がした。二人は全く似つかはしくなかつた。同じ家に二人きりで働いてるといふことゝ、春子が殆んど一人でその喫茶部全體の責任を負はせられてるといふこととだけでは、二人が親密になる理由とはならなかつた。強ひて云へば、表面何處か呑氣な樂天的な所だけが相近じてゐたけれど、それも春子のはその善良さから來たものらしいのに、澤子のはその理知から來たものらしかつた。――昌作は、やがて奥から澤子と一緒に出て來た春子の、一寸見では年配の分らない、薄く雀斑のある、にこ〳〵した顏を、不思議さうに見守つた。

「佐伯さん、お感冒ですつて？」

眼の緣で微笑しながら春子はそんなことを云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「えゝ、少し。」

「それぢや、お酒よりも、大根おろしに熱いお湯をかけて飲むと、ぢきに癒りますよ。」

昌作が默つてるので、浮子が横から口を出した。

「ほんとかしら？」

「えゝほんとですよ。寢しなにお茶碗一杯飲んでおくと、翌朝はけろりとしてゝよ。」

「あなた飲んだことがあつて？」

「えゝ。感冒をひくといつも飲むんですの。でも、利くことも利かないこともあつて……それは何かの加減でせうよ。」

さう云つて春子は、眼の隅に小皺を寄せて、如何にも氣の善さゝうに笑つた。

「ぢやあ何にもならないわ。私葡萄酒をお燗して飲むといゝつて聞いたけれど、それと同じことだわ。」

それから二人の話は、宛も暫く振りで逢つた間柄かのやうに、天氣のことや、風のことや、頭の禿のことや、紅葉のことなど、平凡な事柄の上を飛び廻つた。昌作は自分自身を何處かに置き忘れたやうな氣持で、默り込んでぼんやり聞き流してゐたが、二人の滑かな會話がいつしか心のうちに沁み込んで、しみ〴〵とした薄ら明るい夢心地になつた。そして强烈な洋酒の杯をちびり〳〵なめてゐるうちに、心の底に、薄ら明りのなかに、或る影像が浮き上つてきた。その意外な不思議な幻想に自ら氣付いたら、彼は喫驚して飛び上つたかも知れないが、然しその時その幻想は、彼の氣持にとつては如何にも自然なものだつた。

——彼は、最後の病氣をする少し前の母の姿を思ひ浮べた。狹い額に少し曇りがあつて、束髮の毛並が妙に薄く見えるけれど、ふつくらした皮膚のこまやかな頰や、少し齒並の惡い眞白な上齒が、いつも濡ひのありさうな唇からちら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〳〵覗いてる所や、柔かにくゝれてる二重顎や、厚みと重みとのある胸部などは、三十四五歳の年配とは思へないほど若々しかつた――と共に、三十四五歳の豊滿な肉體を示してゐた。彼女はいつも非常に無口で、そして大變やさしかつた。ぢつと落付いてゐて、愁はしげに――でも陰氣でないくらいの程度に、何かを思ひ沈んでゐた。そのくせ女中や他人なんかに對しては、極めててきぱきしてゐて、型で押すように用件を片附けていつた。家の中を綺麗に掃除することが好きで、朝晩は必ず佛壇に線香を焚いた。そして長い間その前に坐つてゐた。ごく小さな佛壇には、さゝやかな佛具と共に、古い位牌が三つ四つ並んでる中に、少し前方に、新らしい粗末なのが一つあつた。彼はその位牌の文字が氣になつて、ぢつと覗き込んだが、どうしても分らなかつた。そちのうに、何處からだかぽーつと光がさしてきて、文字が仄かに見えてきた。木和田五重五郎と誌してあつた。彼はその名前に見覺えがあるやうな氣がしたが、どうしてもはつきり思ひ出せなかつた。母は悲しい眼付をして、なほぢつと坐つてゐた。黄色つぽい薄ら明りがその全身を包んでゐた。けれど、今にも次第に暗くなつてきさうだつた。眼に見えるやうにぢり〳〵と秋の日脚が傾いていつた。冷々とした風が少し吹いて、さら〳〵と草の葉のそよぐ音がした。木和田五重五郎の位牌が、野中の十字架のやうに思はれた。雜草の中に一つぽつりと、灰白色の圓いものが見えた。野晒しの髑髏だつた。その上を冷い風が掠めていつた。彼は堪らなく淋しい氣持になつて、知らず識らず口の中で繰返した。――野ざらしを心に風のしむ身かな――。それをいくら止めようとしても、やはり機械的に繰返されるのだつた。一生懸命に止めようと努力すると、氣が遠くなつて野原の眞中に倒れた。胸がまるで空洞になつて、風がさつ〳〵と吹き過ぎた。自分の魂が髑髏のやうになつて、胸の中に……野の中に轉つてゐた。晩秋の日はずん〳〵傾いていつた。大きな影が道に落ちてきた。風が止んで非常に静かになつた。彼は立ち上つてまた歩きだした。胸がどき〳〵して、頭がかつと熱つてゐた。眼が眩むやうだつた。細目に見開いてみると、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すぐ前を厚い白壁が遮つてゐた。長年の風雨に曝されて、薄黒い汚點が這ひ廻つてる、汚い剝げかゝつた壁だつた。その上を夕暮の影が蔽つてゐた。影の此方に四角な窓硝子があつて、ぼんやり人影が寫つてゐた。それが堪らなく淋しかつた。彼は眼を外らした。表に面した窓から、小さな銀杏の並木の梢が見えてゐて、散り殘つた黄色い葉が五六枚、街路の物音に震えてゐた。

彼が氣がついてみると、澤子と春子とは、先程から話を途切らして、彼の顔をぢつと見てたらしかつた。彼は何だか顔が擧げられなくて、首垂れながら大く溜息をついた。

「熱でもおありなさるんぢやないの？」と春子が云つた。

彼は無意識に手を額へやつてみた。額が熱くなつて汗ばんでるのを感じた。

「なに、煖爐の火氣を少し受けすぎたんだらう。何でもないよ。」

「でも變に苦しさうなお顔でしたよ。」

「へえ……實は一寸夢をみたものだから。」

「夢？」

「と云つて悪ければ……いややはり夢だよ。」

「おかしいですわね、眼をあいてゝ夢をみるなんて。」

「白日夢つてね。」

「あら……ひどいわ。人が本氣で心配してるのに冗談なんか云つて。」

然し彼は、まだ先刻の幻想から本當には醒めきれないでゐた。春子と言葉を遣り取りしてるのまでが、何だか變に上

の室だつた。けれど、彼はその時ぴたりと口を噤んでしまつた。澤子の鋭い眼付に出逢つたのだつた。彼女の眼には、彼が今迄嘗つて見たことのないほどの鋭い現實的な——彼には何故となく現實的と感じられた——色が浮んでゐた。

「餘りこんな强いお酒を飮むからよ。」と彼女は云つた。「お水を持つてきてあげませうか。」

昌作は彼女の眼を見返して、彼女がごまかしを云つてることをはつきり感じた。うつかり返辭が出來ない氣がした。

澤子は彼の顏をぢつと見てゐたが、やがて突然叫んだ。

「やつぱりさうよ。あなたは何かを苦しんでゐらしたに違ひないわ。宮原さんの仰言つた通りよ。」

「宮原さん……。」と昌作は云つた。

「えゝ、宮原さんはあなたが苦しんでゐらつしやるかも知れないつて……。」

彼女は云ひさして唇をかんだ。そして暫く空を見つめてゐたが、ふいに立上つた。

「私あなたにお見せするは。」

彼女が奥に引込んで行く姿と昌作の顏とを、春子は不思議さうに見比べてゐたが、ふいに奥深い笑みを眼の底に漂はした。

「大丈夫ですよ。心配なさらなくても……。」

そんなことを云ひ捨てゝ、彼女は奥へ立つていつた。

澤子はなかなか出て來なかつた。昌作は待ちあぐんで苛ら〲してると、漸く澤子はやつて來た。そして一枚の葉書を彼へ差出した。

「今朝、宮原さんから來たのよ。讀んでごらんなさい。」

昌作は受取つて讀んだ。

御手紙拜見。またそんなむちやなことを云つたつて駄目ですよ。もう少し待たなくては。それから、佐伯君とは快く話が出來て、僕も嬉しい氣がします。たゞ、變な工合になつて、誰にも話さなかつたことを、僕達の昔のことを、すつかり話してしまひましたが、後で考へると、少し早すぎたやうに思はれます。佐伯君のうちには、まだあなたが本當に知つてゐないものがあるやうです。或は、後で何か苦しんでゐるかも知れません。逢つたら慰めて上げて下さい。何れまた。

昌作はそれを二度繰返して讀んだ。眼の中に熱い涙がにぢんでくると同時に、また反對に、呪はしい憤りが湧き上つてきた。彼は葉書の表までよく見調べてから云つた。

「君はこれを、僕に見せるために、わざ〳〵持つて來たの?」

その泣くやうなまた詰問するやうな調子に、澤子は一寸眼を見張つたが、靜に答へた。

「いゝえ。お午前に受取つたんだけれど、何だかよく分らないから、なほ讀みながら考へようと思つて、持つて來たのよ。」

昌作はなほ云ひ進んだ。

「君は一體僕を宮原さんに逢はして、どうするつもりだつたんだい?」

澤子は暫く默つてゐたが、もう我慢出來ないかのやうに云ひ出した。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あなたそんな風に取つたの？私、そんな氣持ちやちつともなかつたのよ。……あんまりひどいわ。私あなたのことをいろ〳〵考へてみたの。考へると何だか悲しくなつて……」そして彼女は眼を濡ました、「自分でもなぜだか分らないけれど、たゞ變に悲しくなつて……こんな風に云つたからつて怒らないで頂戴……どうしたらいゝかといろ〳〵考へて、そしてふと宮原さんのことを思ひついたのよ。宮原さんは、そりやしつかりした眞面目な方なんですもの。私どれくらゐ力をつけて貰つてるか分らないわ。よくめちやを云ふつて叱られるけれど、叱られて初めて、自分が輕卒だつたことに氣がつくのよ。私何だか、あの方はいつも深いことばかり考へてゐらして、一目で心の底まで見拔いておしまひなさるやうな氣がするの。そして大きい力を持つてゐらつしやるやうな氣がするの。さうちやないかしら？私一人そんな氣がするのかしら？……いゝえ、確かにさうよ。それで私、あなたも宮原さんにお逢ひなすつたら、屹度いゝだらうと思つたの。そして私達三人でお友達になる……さう考へると非常に嬉しくつて、もう一日も待つてをれなかつたの。私宮原さんにいつも、無鐵砲で一人勝手だと云はれるけれど、自分ではよく考へてるつもりなのよ。私ほんとに悲しかつたんですもの……いろんなことを考へて。それが、三人でお友達になつたら、みんなよくなるやうな氣がしたの。それをあなたは……。」

彼女は一杯涙ぐんでゐた。それが宛も小娘みたいだつた。昌作は心のやり場に迷つた。迷つてるうちに、いつしか自分も涙ぐんでしまつた。

「だつて、三人で友達になつてどうするんだらう？」

「私それが嬉しいわ。」

「然し三人の友達といふのは……一寸何かゞあればすぐ壞れ易いものだよ。……君達だつて、宮原さん夫婦と君と、

いたちやないか。」
「あれは私達が惡いのよ。」
「惡いつて？」
「だつて私達は……一寸でも……愛し合ふ氣になつたんですもの。愛し合ふ氣になつたのが惡いのよ。」
「愛し合ふ氣になつたのが？」
「えゝ。」
不思議なことには、眼に涙をためて右の會話をしてる間、澤子は勿論昌作までが、まるで十五六歳の子供のやうな心地になつてゐたのである。所が、ふと言葉が途切れて、互に顏を見合つた時、あたりの空氣が一變した。昌作はそれをはつきり感じた。自分の眼付が情熱に燃え立つてくるのを覺えた。澤子は少し身を退いて、薄い毳のありさうな脹れた唇を歪み加減に引結んで、下齒の先できつと噛みしめてゐた。
昌作は堪へ難い氣持になつた。顏が赤くなつた。眼を外らして首垂れると、ひどく頭痛を感じ出した。眼の前が眞暗になりさうだつた。ふら〳〵と立上つて、室の中を少し歩いた。
「火に當りすぎたせいか、ひどく頭痛がするから、此處で少し休ましてくれ給へ。」
さう云つて彼は、向ふの隅の卓子に行つて坐つた。そして、澤子が持つて來てくれた外套を着て、その襟を立て帽子を目深に被つて、暮れてしまつた戸外の闇と明るい電燈の光とを、重苦しい眼でちらと見やつてから、卓子の上に組んだ兩の前腕に頭をもたせた。凡てが駄目だ！といふ氣がした。澤子が暫く傍につゝ立つてゐたのを、それからやがて、彼女が水を持つてきてくれたのを、彼は夢のやうに感じながら、暗い絶望の底に沈んでゆく自分自身を見守つてゐた。

——そして實は、昌作はその時嫌な醉ひ方をしてゐた。頭にまるで彈力がなくなつて、腦の表皮だけが堅く張りきつて、薄いセルロイドの膜かなんぞのやうに、ぴーん／＼と音を立てゝ痛んでゐた。それが半ばは彼の暗い絶望を助長してゐた。

けれどその絶望の底まで達すると、彼の心はわりに落付いた。窓硝子にちら／＼する街路の光や、その硝子越しに聞ゆる電車の響きなどは、いつしか彼を夢のうちにでもあるやうな心地になした。彼はうつとりと——而も何處か苛ら／＼と思ひに沈んだ。自分が此處にかうしてつゝ伏してることが、遠い記憶の中にあるやうだつた。それを見守つてるうちに、疲勞と醉ひと頭痛——遠い大きな頭痛とに壓倒されていつた。一切のことが茫と霞んでいつた。そして彼はぐつすり——殆んど安眠と云つてもよいほどに、眠つてしまつたのである。

幾時間かたつた……。

遠い所で、調子のよい澄んだ聲と、少し濁りのある調子外れの聲とが、一緒に歌をうたつてゐる。——

山田のなーかの一本足の案山子
天氣のよいのに蓑笠つけて
朝から晩までたーだ立ち通ち
歩けなーいのか山田の案山子

………………

歌が止むと、何かに遮られたやうな低い話がする。

——駄目よあなたは、調子つ外れだから。

──えゝ、私は何をやつても調子外れだけれど……だつて、かゞちなんて云へやしないわ。

──三つと六つのお子さんだから、さう云はなくちやいけないわ。

──六つでまだ片言を仰言るの？

──えゝまだ。いつぽんあち、かゞち、なのよ。それに、宮原さんまで片言で一緒に歌つてゐらつしやるから、そりや可笑しいのよ。

昌作は、宮原といふ言葉に注意を惹かれるはづみに、はつと眼を覺した。上半身を起して振向くと、向ふの煖爐の側に、珈琲碗や菓子皿が幾つも取散らされたまゝの卓子に、澤子と恭子とが坐つてゐた。二人は昌作が起上つたのを見て、ぷつりと話を止めてしまつた。それがまた、何か云つてならないことを云つたといふ樣子だつた。昌作はぞつと寒けを感じた──その沈默と一種妙な探り合ひの氣配とから。彼は深く眉根を寄せたが、それを押し隱すやうに伸びをして、默つて煖爐の方へ立つていつた。

「ほんとによく眠つていらしたわね。」と恭子が云つた。

「えゝ、たべ醉つてね……。」

その言葉に彼は自ら不快になつた。卓子の上の皿類を見廻しながら云つた。

「僕の知つた人が來やしなかつたのかい？」

「さあ……いゝえ誰も。幾人もいらしたけれど、滅多に見ない人達ばかり……ねえ。」と彼女は澤子の方を見た。

「えゝ。」と澤子は首肯いた。

「そんなに澤山客があつたの？」

「澤山といふほどぢやないけれど……今もね、お兄さん連れの方がいらしたんですよ。」そして澤子は慌てたやうにつけ加へた。「ご氣分は？……少しはよくおなりなすつて？」

「えゝ、ぐつすりねたものだから……。」

その時彼は時計を仰いで喫驚した。九時近くを指してゐた。

二人が皿類を取片付けて奥へはいつて行つた間、昌作はぢつと煖爐の前に屈み込んだ。それは、或る家では最も客が込むけれど、或る家では妙に客足が途絶えることのある、一寸合間の時間だつた。そして柳容堂の二階は、後の部類に屬してゐて、今が丁度さういふ時間に在つた。昌作はそれをよく知つてゐた。やがていろんな――恐らく自分の見覺ある――客がやつて來て、自分は此處から歸つて行かなければならない、と彼は感じた。もしくはぢつと我慢してゐて、澤子の歸りを待つ……然し彼はどんなことがあつても、さういふ卑しいことをしたくなかつた。それはたゞ澤子から輕蔑される――また自分で自分を輕蔑する――ばかりのことだとはつきり感じた。今だ！といふ氣がした。

何が今だかは、彼にもはつきりしてゐなかつたが、彼はその日の初めから、變に調子の狂つてる自分自身を、頭痛のせいも手傳つて、どうにかしなければ堪へられなかつた。一方は暗い淵で一方は明るい天だ、といふ氣がした。その中間に立つてる力が、もう無くなりかけてゐた。心がめちやくちやになりさうだつた。――そして彼の決心を更に強めたのは、先刻夢のやうに聞いた歌だつた。その歌が變な風に頭へ絡みついてきて、靜かながらんとした白い室の中で、自分の運命を豫言する不吉な惡夢のやうな形になつた。

長くたつて――と彼は感じたが、實は暫くたつて、澤子が奥から出て來た時、彼はすぐその方へ振向いた。澤子はぢつと彼の顏を見て、其處に立止つた。瞬間に彼は、殆んど閃めきのやうに、宮原俊彦の言葉を思ひ出した――僕の天は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

澄み切つてゐると共に變に憂鬱です。それが、全く澤子の立姿そのまゝだつた。彼は唇をかみしめながら、彼女の白々とした廣い額を眺めた。

「澤ちやん、僕は君に話があるんだが……。」

と彼は云つた。

「なあに？」

落付いた聲で答へて彼女は寄つて來た。

どう云ひ出していゝか迷つてゐるうちに、彼の頭へ、別な――もつと重大な事柄が引つかゝつてきた。彼は口籠りながら云つた。

「僕は眞面目に、眞劍に聞くんだが……それが僕に必要なんだよ……はつきり分ることが……本當のことを云つてくれない？君と宮原さんと、どうして結婚しなかつたかといふ譯を。」

澤子は彼の眞劍な語氣に打たれたかのやうに、顏を伏せて暫く默つてゐたが、やがてきつぱり云つた。

「宮原さんに二人もお子さんがあるから。」

「それは先刻聞いたが、それだけのことで？」

澤子はまた暫く默つてゐたが、ふいに椅子へ腰を下して、ゆつくり云ひ出した。

「えゝ、それだけよ。他に何にもありやしないわ。宮原さんはかう仰言つたの、私には二人も子供がある、私の生活はもう固まつてしまつてる、けれど、あなたは若い、自由な廣い生涯が前に開けてゐる、そのあなたを、私の固まつてる生活の中に入れるには忍びない、忍びないだけぢやなくて、出來ないのだ……そして……まだあつたけれど、私よく覺

えてゐない。」彼女の言葉は次第に早くなつていつた。「えゝ、さうよ、まだいろんなことを仰言つたけれど……私はもう固まつた生活を守つてゆけるとか、あなたは一つの型の中にはいるのは嘘だとか……そんなことを……私よく覺えてゐないけれど、それを私、幾日も考へ通したのよ。そして宮原さんの仰言ることが本當だと感じたの。理窟ぢや分らないけれど、たゞさう胸の底に感じたの。そしてどんなに泣いたか知れないわ。私本當は、宮原さんを愛してたの。宮原さんも私を愛して下すつたの。愛してるから一緒になれないんだつて……。私が泣くと、澤山泣く方がいゝつて……。それで私、泣いて泣いて泣いてやつたわ。自分でどうしていゝか分らないんですもの。そして構ふことはないから捨鉢になつたのよ。自由に飛び廻つてやれつて氣になつて。けれど、宮原さんがゐらつしやることは、私にとつては力だつたわ。私一生懸命に勉强するつもりになつたのよ。」

「それぢややはり、心から愛してゐたんだね。」

「えゝ、心から愛してゐたわ。宮原さんも心から私を愛して下すつたの。」

「では結婚するのが本當だつたんだ。結婚したからつて、君が全く縛られるわけぢやないんだから。」

「縛られやしないけれど、私は、もつと自由にしてゐなけりやいけないんですつて。大きな二人の子供の世話なんか私には出來やしないんですつて……。私の世界は宮原さんの世界と違ふんですつて……。だから、愛し合ふだけで充分だつたのよ。」

「そのうちに年を取つてしまうぢやないか。」

「えゝ、年を取つてしまうわ。それまでの間のつもりだつたわ。」

「年を取つてからは?」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「年を取つてからは……持續するつもりだつたのよ。それが本當だわ。もつともつと、いろんなことをしてから、勉強をしてから、そして世の中に……何だかよく分らないけれど、私が落付いてから……とさう思つたのよ。」

その時、二人は突然口を噤んでしまつた。そして驚いたやうに眼を見合つた。はつきりしてきた。過去として話してゐたことが、實は現在のことだつたのである。昌作は彼女の眼の中にそれを明かに讀み取つた。彼女は顏の色を變へた。物に慴えたやうになつて、冷いと云へるほどにぢつと動かなかつた。そしてふいに、卓子の上につゝ伏して身體中を震はした。

昌作は息をつめてゐたが、ほつと吐息をすると共に、一時にあらゆる氣分が弛んでしまつた。彼は云つた。

「君は僕の心を知つてゐたぢやないか。」

聞えたのか聞えないのか、やはり肩を震はしてばかりゐる彼女の姿を、彼はぢつと見やりながら、一語々々に力をいれて、出來るだけ簡單にといふ氣持で云ひ續けた。

「僕の心を知つてゐて、それで……。然し僕は君を咎めはしない。君はそれほど眞直なんだから。……けれど、少くとも僕のことを誤解しないでくれ給へ。あの……何とか云ふ會社員……僕は片山さんから聞いたのだ……あんなあやふやなんぢやなかつたのだ。僕には君が必要だつたのだ。九州行きの問題が起つてから……その後で……氣付いたんだが、僕に必要なのは、仕事でも、また、何をやるかつていふ方針でも、そんなものぢやなかつた。君ばかりだつた。僕は自分の生活を立て直す心棒に、君が必要だつた。こんなのは、本當の愛し方ぢやないかも知れないが、然し、君がなければ、僕の世界は眞暗になつてしまうのだつた。友達……そんなではない……君の全部がほしかつたのだ。君は愛する氣になるのが恐いと云つたけれど、愛せずにはゐられなかつたのだ。然しもう……。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は終りまで云へなかつた。彼にとつては、もう凡てが言葉通りに……であつたといふ感じだつた。まだ何かを待ち望んではゐたけれど、それは全く空想に過ぎないことを、彼自らもよく知つてゐた。……すると突然、澤子は顏を擧げた。

「私にも分つてゐたけれど……他に仕樣がなかつたんですもの……宮原さんが……もし宮原さんがなかつたら、どうなるか自分にもよくは……。」

彼女は息苦しさうに顏を歪めてゐた。

「宮原さんがなかつたら……。」と昌作は繰返した。

「自分でも分らないの。」

その時、彼女の引歪めた顏と、白々とした冷い額と、遠くを見つめた惑はしい眼付とを、昌作は絶望の氣持で見ながら、頭の中に怪しい閃めきが起つた。宮原が居なかつたら！……彼は自分で駭いて飛び上つた。澤子も何かに喫驚したやうに立上つた。そして彼を恐ろしい勢で見つめた。彼は眼がくら／＼としてきて、また椅子に身を落した。

そのまゝ二人は默り込んでしまつた。やがて澤子も腰を下して、煖爐の火に見入つた。その冷い彫刻のやうな顏を火先がちら／＼輝らしてるのを、昌作はぢろりと見やつただけで、再び視線を火の方へ落した。

そして二人は、默り込んだまゝ、夜通しでも動かなかつたかも知れない。けれど、それから十四五分たつた頃、階段に二三の人の足音がした。昌作は自分でも不思議なほど喫驚して、狼狽して、俄に立上つて、卓子の上にある外套と帽子とを取つた。そして、勘定を拂ふのさへ忘れて逃げ出した。

澤子は機械的に立上つて、其處に釘付にされたやうになつて、彼の後ろから云つた。

「佐伯さん、また明日にでも來て下さらない？私、まだ云ふことがあるから。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「來るよ。」

さう彼は答へたが、自分にも言葉の意味が分つてゐなかつた。そして彼は階段の上部で、三人の客の側を、顔をそむけて馳けるやうに通りぬけた。

薄く霧がかけてゐて、それでゐながら妙に空氣が透き通つたやうに思へる、靜かな寒い晩だつた。昌作は夢遊病者のやうに、長い間歩き廻つた。彼は薄暗い通りを選んで歩いた。人に出逢ふと、何かを恐れるもの丶やうに顏を外向けた。古道具屋などの店先に、古い刄物類があるのを見ると、一寸立止つたが、またすた〳〵と歩き出した。そして、初め彼は宮原俊彥の家と反對の方へ行くつもりだつたが、途々もさうするつもりだつたが、いつのまにか俊彥の家のある町まで來てしまつた。

實は、彼が澤子と向ひ合つて、「宮原さんがゐなかつたら……」といふ件の會話を交はして、彼女の惑はしい眼付を見た瞬間、彼の頭はまるで夢の中でのやうに迅速な働きをしたのだつた。最初に、もう到底澤子は自分のものではない、如何なる事情の變化があらうとも、彼女の心は自分の有にはならない、といふことを彼は知つた。次に、自分の生活が暗闇になつて、もう何にも據り所がなく、再び立て直ることがない、といふことを彼は感じた。次に、もし宮原俊彥さへ居なかつたら……！といふことと——彼女の「ない」といふ言葉を「存在しない」といふ言葉に變へた意味、それが、暗い絶望の底から、一條の怪しい光となつて、彼の頭にさしてきた。そしてこの第三のことが、彼の胸深くに根を張つたのだつた。それがまた偶然の事情によつて助けられた。彼はこれまで宮原俊彥の住所を知らなかつた。所がその晩、澤子へ宛てた葉書を表までもよく見調べてるうちに、其處に書かれてる町名——番地は誌してなかつた——が、いつしか彼の頭に殘つたとみへて、後でぽかりと記憶に浮んできたのだつた。——然し彼は、別に殺意……もしくは敵意を、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はつきり懐いたのではなかつた。一方には、却つて反對に、絶望に陷つた瞬間、彼は或る廣々とした――眞暗ではあるが廣々とした――境地へ、自分が突然投げ出されたのを感じた。眞暗ではあるが、暗いなりに靜まり返つて落付いてゐた。默り込んで焜爐の火を見てた時、彼はさういふ自分自身を見守つてゐたのだつた。――以上の二つのことが、彼を力強く支配してゐた。彼は宮原俊彦の住んでる町と反對の方向へ行くつもりでありながら、知らず識らずその町へ來てしまつたのである。

來てしまつて、その町名を眼にとめると、彼は惘々たやうに立止つた。一切のことが――前述のやうなことが、初めて彼の頭にはつきり映つた。その瞬間に、云ひやうのない感情が彼の胸から湧き上つた。宮原俊彦に對して、今迄の敵意と同じ強さで、情愛……思慕に等しい友情が、高まつてきた。その同じ強さの敵意と友情とが、不思議にも二つながら、彼を俊彦の家へ引張つてゆかうとした。俊彦の家を探しあてゝ、その胸を刺すかもしくはその前に跪くか、何れかに彼を引きずり落さうとした。然し彼は何故か、それを非常に恐れた。行つてはいけないと自ら叫んだ。……彼は足を踏み出すことも、足を返すことも、二つながら爲し得なかつた。

宛も何かに憑かれたかのやうに、彼は暫く惘然と佇んでゐたが、やがてふら／＼と前へ進みだした。そして數十歩行くと、眼の前が眞暗になつた。堪へ難い頭痛がして、額がかつと熱つて、胸が高く動悸して、足に力がなかつた。彼は立つてをれなくて、其處に屈んだ。傍の高い物に半身をもたせてるうちに、氣が遠くなるのを覺えた……。

それは約二十分ばかりの間だつたが、昌作は非常に長い時間だつたやうに感じた。氣がついてみると、四五人の人影が四五歩先に立つて見てゐた。自分は通りの少し引込んだ所にある黒塗の埃箱にもたれてゐた。締りのしてあるらしい裏口の戸と、傍の竹垣の上から覗いてる篠竹の粗らな葉とが、彼の眼にとまつた。彼は喫驚して立上つた。一寸見當を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

定めておいて歩き出した。後ろの四五人の人影が何か囁き合つてるらしい氣配がした。彼は振向いて、まるで影繪のやうなその人影をちらと見た。それが妙に彼の心を廣々と――そして切なくさした。彼はふと口の中で歌ひだした。

山田のなーかの一本足の案山子

…………………

それから先がどうしても思ひ出せなかつた。無性に悲しくなつた。明るい通りまで走り出して、少し行つて、俥に乘つた。處を聞かれると、半ば無意識的に片山夫妻の住所を告げてしまつた。――自分は一思ひに九州の炭坑へ行つてしまはう、眞暗な坑のなかへ。自分にとつては働くことだけが必要なのだ！――さう彼は心のうちで叫んだ。そして、それは根の淺い氣持で、一寸事情が變化すればすぐ崩壞しさうなことを、彼は感じたけれど、また一方に、それが自分にとつては本當の一筋の途であることをも、彼は感じた。

彼は後の方の感じを壞すまいと、ぢつと胸に懷いて、何ともいへない眞暗な而も底深い氣持になつた。そして、首垂れながら涙を落した。

片山夫妻は幸にまだ起きてゐた。彼がはいつて來た姿を、頭から足先までぢろ〳〵見廻した。

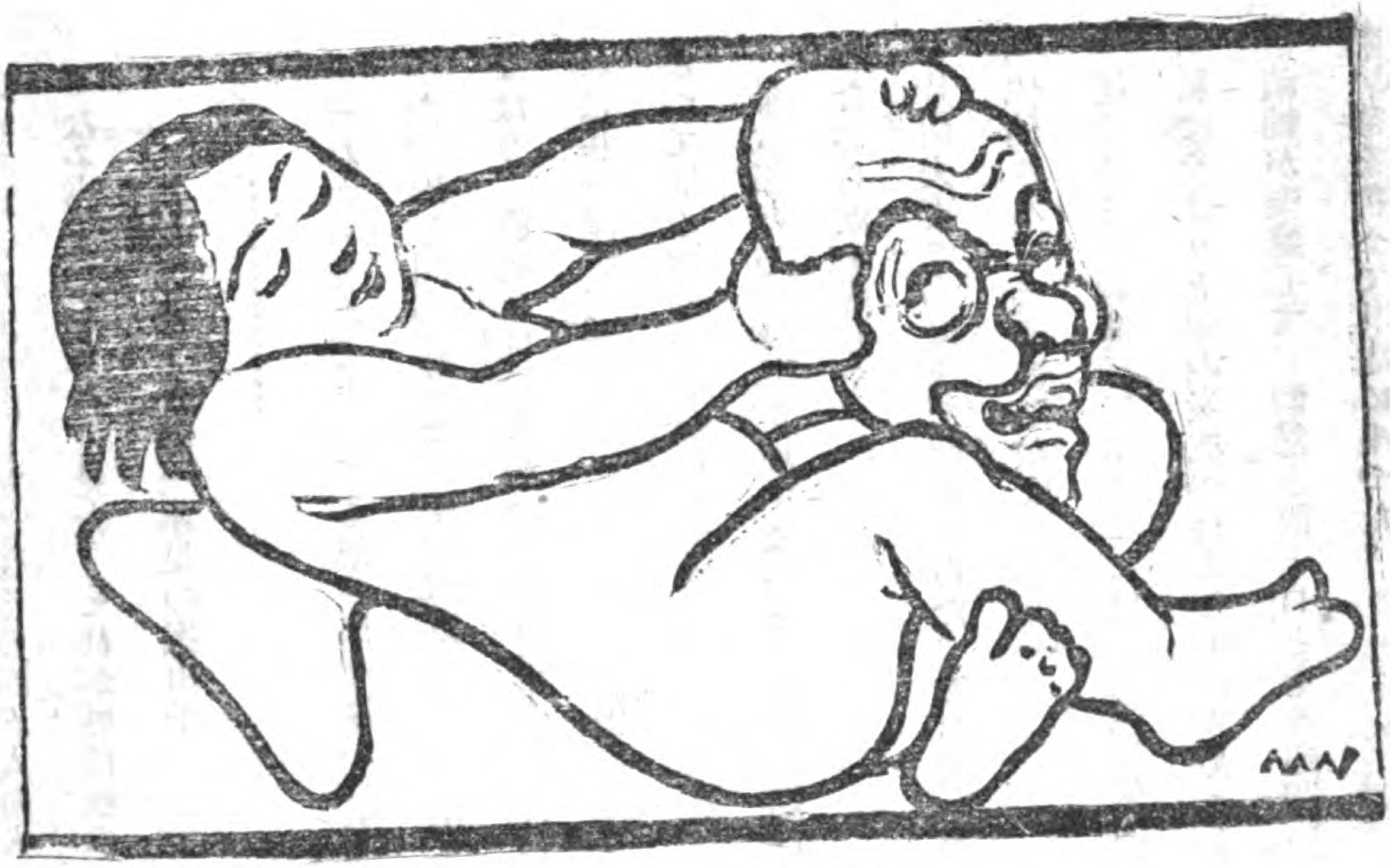
「佐伯さん、まああなたは……！」

逹子にさう云はれて初めて、自分が眞蒼な顏をして泥に汚れてることを、彼は知つた。そして、つゝ立つたまゝ云つた。

「私はやはり九州の炭坑へ行くことにきめました。坑の中へはいつてゞも働きます。」

禎輔が喫驚して、惘然と眼と口とをうち開いたのに、昌作は氣付かなかつた。彼は不覺にもまた涙をこぼしながら、熱い額を押へて其處に坐つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



ムス武遺聞

里見弴

明治十年の交、大阪を中心に近畿を横行せる盜賊、通稱ムス武事、瀧山武五郎なる者あり。ムスは「娘師」の略、土藏破り專門の謂なり。一度目をつけたる「娘」は、必ずこれを侵さざるなく、人心恟々たり。徒輩、名人と稱して畏敬す。贓物のこなし亦甚巧妙にして、犯跡を檢するに由なく、警網恢々として疎、常にこの大魚を逸す。

武五郎、性溫良、恬淡なり。喧嘩口論を好まず、時に家人の目覺むるありて、忽居直ると雖、未嘗て生命を絶ちしことなし。謂ふ所の「三道樂」のうち、酒は深く嗜まず、婦女子を愛すれども溺れ易くして、藍微塵仕立の色事師たるの風なし。唯博奕に至つ

ては、淫して度を踰え、危を冒して獲る所あれば、則身を盆莫座の前に運ぶ。而も天運概彼に利あらず、入神の技を揮つて贏し來る巨額、一夕にして失ひ盡すこと屢なれども悔ゐず。されば、一世に並なき「娘師」も、赤貧を嘆ぜざるの日は稀にして、蓄財の念慮の如き、寸毫もあるなし。

齡三十有餘、一日盆の上の間違より、武五郎激怒、單身拔刀して豪家を襲ふ。情景、小さん得意の「猫久」に類するものか。

却説疾風迅雷一過すれば、室內、斫倒さるゝもの、襖、障子、家具。鼠一匹の死傷あるなし。而も我意を遂げ、面目恐擧る。一劍客、狼藉の跡を見て曰らく、假令戸障子と雖、切口の鮮なる斯の如きは、凡手のよく能ふ所にあらず、と、三嘆これを久しうす。

既にして盛名を傳聞し、乾兒たらんと願ふ者、日々踵を亞ぐ。武五郎、遂に博徒の親分となり、本業「娘師」を廢するに至る。土藏の胴ッ腹を貫き、禁斷の錠をおろしたる圖の繪馬、今猶大阪府下の社頭に存するあらば、當時武五郎が奉納にかゝるものたるや、蓋保し難し。

後年、武五郎親分、書生芝居の太夫元となり、道頓堀旭座に據る。大兵肥滿、金齒、金指輪、縞柄あらき八端の着附、無地一樂の羽織を紐長に着なし、白縮緬、大巾と怪まるゝ兵兒帶には、太く逞しき金鎖、七子兩蓋の大時計、臘虎の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

襟つけたるトンビ、齒の高きのめりに白鹿革の鼻緒太しく結ひ、天井の角張りたる山高帽を阿彌陀に頂き、音高き鐵輪の人力車上に反り返る、想見すべし、風丰堂々として四圍を壓するを。誰か以て昔日名うての片尻切とせんや。然り而して、賭場に於ける彼に至つては、依然吳下の舊阿蒙たり。芝居一日の上りは、卽一勝一敗忘我の資たるのみ。爲に時々役者の給金にも窮し、その都度、堂島の相場師、何某に泣つく。

武五郎、一日繁忙、二體あるも尙足さるを想ふ時、堂島の某家より、直に來邸せよとの急使至る。平常の眷顧に報ぜんとして、乃萬事を放擲し、蒼惶伺候す。主人、困惑の色を浮べ、逡巡これを久しうして猶口を開かず。妻女に依つて要旨の說かるべきを言ひ、面をそむく。後房に至れば、妻女等しく周章煩擾して他を語り、さらに要を得ず。武五郎の曰、如何ほどの難事たりとも、身命を睹して必ず貴家の憂を除かん、顧慮する所なく下命せられよ、と。妻女、まづ乞ふに立腹せざらんことを以し、再三開口せんとすれども得ず。復主人に轉嫁して委を匿す。既にして主人の遲澁して語るを聞けば、至急入用の重要書類、土藏に在り、而も鍵を紛失す、願はくば、特技を以つてこの急場を救へ、と。易々たるのみ。答へんとして武五郎、遽に口を蓋す、とんだ權太ぞと、主人の面上纔て生色あり。

權太翁、乃木綿針を手にして錠に伏し、肅々二十餘分時、牢固たる扉、八文字に開く。夫妻大に悅び、思はずその技を賞す。武五郎苦笑一番、時を費すこと斯の如くんば、焉ぞ業たるを得ん。噫、吾老たり矣、と。

天滿座經營中、博奕の大敗に因を發して、武五郎遂にぼしやる。爾後杳として聞く所なしと雖、恐らくは因果小僧の親父野晒小兵衛の如く、一念發起、唱名三昧に入れるや必せり。

然るに、武五郎が一女の、夙に家を捨て、放縱不羈の生を送り來りし者、和歌山に校書たり。病患窮乏相携えて至る。

如何なる報の齎すところたりしかは詳かならざれども、幼時鍾愛措かざりし女の病篤きを知るや、陋巷の佛爺、老軀を驅つて急行し、慰撫これ努む。實に二十年ぶりの邂逅なり。而も、良醫、藥餌に代ふべき資なし。拱手して、憔悴枯槁日に甚しきを見るに堪へず、舊知の間に奔走して、幾何金を調達し來らんことを期し、乃歸阪の汽車に搭ず。車中、焦慮熟考、相反復すと雖、他人の快諾期すべからず、遂に老軀に鞭つとせんも勞銀また知るべきのみ。往年一擲の賭錢あらば則足るを想ひ、悵恨轉深うして、窓外の春光ために愁々たり。

偶同房の村翁等、花時都市遊適の樂を說くあり。言外、囊中敢て乏しからざるを覺えしむ。武五郎、瞑目合掌して念佛申すと雖、膨然たる財布、來つて眼底に彷彿するを如何せん。往時の鬼心、徐々に醒め來る。

港町驛頭の混雜に紛れ、武五郎遂に村翁の懷中を探る。往年の大賊、素より攫徒を劣む、素人、施すに術なく、且老來手足の敏捷を缺けり。忽發見せられ、密偵の逮捕する所となる。

時に武五郎、昂然として捕繩を斥けて曰、老ひ枯れたりと雖、難波のムス武なり、天網の下る逸きに過ぐ、俎上の鯉魚安ぞ目打錐を要せん、と。警吏を從へ、自若として警察の門を潛る。

老人の掏摸、既に奇なり、而も衆人環視の驛頭に、啖呵たんかを切り、豫審廷に臨んでは三十年前の罪科を誇唱す、新聞紙、爭つて特種記事を掲げずして止まんや。爲に地の遠近を問はず、報恩に浴せる乾兒、新派俳優、劇場關係者等の知る所となり、日々差入山積す。武五郎、義捐の財あれば直に和歌山なる女のもとに致す。投藥その効むなしからずして、後全く癒ゆ。

然れども、父子再會の緣なく、獄にあること月餘、明治四十五年五月下旬、朽木の倒るゝが如くに大往生を遂ぐ。享年六十二歳なり。

武五郎、常に戯に人に語つて曰、吾巨萬の財を盜むと雖、悉博奕のために掠め去られ、一物も餘すなし、差引、出入なしとせんか、この上若獄に下らばそれだけの損なり、と。言外、心中自悠々の天地あるを洩す。然して正に生を終らんとするに際し、驟て月餘縲紲の身となる。而も、その故を以て一女の危急を救ふを得たり。地下の武五郎、再差引勘定の算盤を手にせんか、蓋、指頭前額を輕打し、莞爾として破顔一笑するものあらんか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



亡夫の情人

正宗白鳥

（一）

吉村英吉の母の友子は、市ヶ谷見附外の婦人科病院の待合室で、自分の順番の來るのをいゝ加減待ちくたびれて、廊下に立つたり、窓の外の人通りを見たりしてゐたが、ふと、部屋の片隅に行儀正しく坐つてゐる新來の患者に目がつくと、身震ひするほどに驚いた。先方ではまだ氣がつかないやうであつたが、どうせしまひまで避通すことは出來ないのだから、此方から進んで氣輕に口を利いた方がいゝと決心して、努めて平氣な顔して微笑を浮べて、その側へ寄つて行つた。

「オヤ、思掛けないところで」と、相手の女は懐つこさうに云つてさして動じないで「その後は御無沙汰ばかりいたしまして」と、恭しく挨拶した。

「病院へは今日はじめていらしつたの？」

「えゝ。どこもさう惡かあ御座いませんのですけど」

「あなたのお住居はたしかこの御近所でしたね」

「いゝえ、あれから二度も引越しをいたしました。只今は築土八幡の裏手にゐますのです。英吉さんには先日の晩神楽坂でお目に掛つた時に寄つて頂いたので御座いますが、暫く御無沙汰してゐましたうちに、英吉さんは大變御立派におなんなさいましたわね。私お見違へいたしましたよ」

「……あれは丈ばかり伸びても、身體はいつも弱う御座んしてね」

友子は事もなげにさう云つて調子を合はせたが、英吉がこの女に會つてゐることをはじめて聞いたので、頭がくら〱して胸が波打つて、此處にぢつとしてはゐられなくなつた。診察を受けないで直ぐに家へ歸らうかとさへ思つたが、幸ひに自分の順番が來たので、不斷通りに醫師の手當てを受けて、その女には目禮しただけで、急いで病院を出た。早く英吉に會つて彼れの無考へを詰つて、將來をも堅く戒めて置かなければならぬと意氣込んで、梅雨晴れの暑さをも忘れて、セカ〱と歩いた。が、中野行の電車に腰をおろして、稍々心が落着くにつれて、英吉の不心得を憤るよりも、あの女――菊代――の陰險な心柄が憎みをもつて思出された。「英吉を騙して無理に連れて行つたに違ひない。圖々しい女だから、また何かの係合ひをつけようと企んでゐるのかも知れない。あの女の身内には性のよくない奴がゐて、いつも惡知慧をつけてゐるらしいんだから」

友子は暫く記憶に薄らいでゐた菊代の顏を目の前に浮べてゐると、亡夫在世の時の事、ことにその臨終前後の事が久振りにあり〱と、今見てゐるやうに思出された。

「おれはどうしても死にたくない。世界の人間がみんな死んでもおれと英吉とだけが生きてゐればいゝのだ。おれは金も入らん、居が潰れてもかまはん。英吉と二人で乞食してもいゝからもつと生きてたい。……そつちに居るのはあの醫者

だらう。あの醫者には診て貰はない。東京中のいゝ醫者をみんな呼んで來い。おれの生命を助ける醫者を呼んで來い。おれはどうしても死にたくない」と、夫の信造は神經を焦立たせて、一日一夜叫んで泣いた。平生は強さうな事を云つてゐて、道も法も辨へないことをしてゐたくせに、何て意氣地のない往生際の惡い人だらうと、その時友子は心配と憐憫とで頭が亂されてゐた間にも、ふと、夫を侮蔑するやうな氣持がしたのであつたが、その氣持は病人の過敏な神經に勘付かれた。

「お前も菊代も勝手にしろ。おれはどうしても死にたくない、英吉と二人で乞食してもいゝからもつと生きてたい」と、ともすると泣聲を出してゐたうちに、病氣は脳を冒したのか、無感無覺の痴呆になつて、英吉の顔さへも見辨られないやうになつてしまつた。

夫が突然に患つて突然に死んだあとは、大風が通過ぎたあとのやうであつた。可成りな財産を殘してくれたので、母子二人の生活に苦しむ恐れはなくなつて、友子はこれから靜かに世が楽めるやうな氣がした。菊代には相當な手切金をやつて奇麗サツパリと片がついた。恨んだり嫉んだり爭つたりしたことも、遠い昔の夢と消えて、奇麗に片がついたあとでは自分ながら張合ひ拔けがして、「人一人死ねばかうも世が變るものか」と、不思議に思はれた。

でも、一年の歳月は過ぎてゐながら、菊代が元のやうに若い美しい顔してゐるのを目のあたりに見ると　消えてしまつてゐる昔の夢が生々しく友子の心に動いて、憎惡の牙齒は尖つて來た。

「これから毎日あの女に會はなければならぬやうだと、あの病院へは通つて行かれない。今度は根氣よくつゞけてやうやくよくなりかけたところを中途で止すのは殘念だけれど爲方がない。當分のうち自分で養生することにしよう。……菊代は身持の惡い女だから、誰れかから惡い病氣を受けてあゝいふ病院へ通ふやうになつたのであらうが、私の病氣も

さういふ風にあの女などに邪推されちや溜らない」

友子は二年の間、英吉の成長をのみ樂みにして、知人に蔭口を利かれるやうことは微塵もなくつて過して來たので、假りにも惡い噂を立てられることを極端に恐れてゐた。そして、英吉を父親に似ない高潔な男に仕立上げようと絶えず心を配つてゐた。」

彼女は電車を下りると、英吉に約束した買物を忘れて來たのに氣づいて、申譯に家の近所で駄菓子を買つて歸つた。が、今日は一日家にぢつとしてゐると云つてゐた英吉は、友人に誘はれて外へ出てゐたので、友子はガツカリした。いつもと違つて英吉に話したいことが胸一杯溜つてゐるのにと、よく〳〵運の惡い日である今日を呪つた。

「不斷家へいらつしやる方ぢやなかつたの？　どんな顏してゐらしつて？」と、下女にくどく訊糺したが、下女の答へは要領を得なかつた。

友子は汗ばんだ身體を拭つて、二三ぷく煙草を吸ひながら、英吉の行先を氣遣つてゐたが、どうしたはずみか、今日は六月二十八日で彼女自身の誕生日であることが心に浮んだ。近年自分の誕生日など思出したこともなかつたのに、自然と思出されたのは何かの因緣だらうから、心祝ひに何かおいしいものを拵えようか知らと、御馳走の獻立を工夫してゐたが、四十度目の誕生日をかうして無事に迎へるまでは、隨分人に知られない苦勞をしたものだと、われとわが身の辛抱強かつたことに感心された。獨身になつてからも、をり〳〵は病院通ひをしなければならぬやうな病氣の根を植えつけられたのも、自分の愚かな辛抱の結果だつたと思ふと、世間體ばかり氣にして何事につけても舊弊な女の道を持出して、無理剛情に娘の辛抱を強いた實家の兩親が恨めしかつた。

「でも、みんな濟んだことなのだ。兩親も死んだのだし、夫も死んだのだし、恨みの持つて行きどころはないのだ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

友子はいくら考へたつて役に立たない過去の思ひを振拂つて、今日の誕生日の晩餐には、實家の弟の子供をでも招いて、一晩を賑かに過さうかと、下女に向つてその企てを話したりしてゐたが、さうしてゐる間にも、ともすると菊代の顔が目の前に浮んでならなかつた。たつた一つの目障りになつた。心の蟠まりになつた。

一時過ぎまでも午飯を食べないで待ちあぐんでゐるところへ英吉はやうやく歸つて來た。冴えない顔して、

「沼田が夏季休暇の間東京で語學を習うつてやつて來たんです。あの男の話を聞いてゐたつて面白くないから、明治神宮の方へ散歩に連れて行つて、蕎麥を奢つてやつて、代々木の停車場で別れて來ました。また家へ一緒に來いと云へば來たのだけど、一日遊んで行かれちや、僕の方で煩さくつてならないから」と、無斷で外出した言譯をした。

「沼田さんなら、一晩くらゐお泊めしたつていゝぢやないかね。私も久振りで田舍の話でも聞き　かつたのに。お前も子供の時分のお友だちには、もつと親切に附合つてお上げな」

「だから學校のことや學問の方法を詳しく教へてやりましたよ。田舍に長くゐると神經が遲鈍になるから、沼田の考へてることなんか、僕から見ると、まるで成つて居らんやうに思はれるけれど、彼奴の身體の丈夫なことだけは羨ましいな。何でもよく喰ひますよ。都會生活をしてる者は、時々は田舍のいゝ空氣を吸つて來なければいけないんですね」

「此處なら田舍も同樣ぢやないの。私はゴミ／＼した市街の病院から家へ歸つて來ると、頭がスーツとするやうだよ」

「なに、今はこの邊は市中も同樣だから駄目さ。僕は去年はどこへも行かなかつたのだから、この夏は一月ばかりでも田舍へ行つて來たいと思ひますよ。いゝでせう。去年の冬のやうに始終風邪を引いてゐちや困るから、今年は海水浴をやつて皮膚を强くしときたいんですがね」

「お友だちで一緒に行かうつて人があるのかい」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「僕は成べく一人で行きたいんです。連れがあると騒々しくつていけないから」

「身體をよくするためになら海水浴もい〻だらうが、一人で出掛けるつていふ譯には行くまいよ。……それは差迫つたことぢやないから、そのうちゆつくり考へて極めることにして、お前に聞きたいことがあるんだがね」友子は英吉の顔を正面に見てゐると、この一人子が母の掟もいやがつてゐることをする筈はないやうに思はれたが、「お前は先日琴平町の女（菊代のこと）に途中で會やしなかつたのかい」と訊ねた。

すると英吉は顔を稍々紅くした。母の眼の底から凄い光が放たれてゐるやうに彼れは思ひながら、「ちよつと會ひました。お母さんはどうしてそれを知つてゐるんです？」

「本當にあの女にお會ひだつたのかい。……それをなぜ私に隱して置いたのだらうね」

「……お母さんがいやに思ひなさるだらうと思つて」

「私の心持がお前に分つてゐるのなら、なぜあの女の家へまで誘はれて行つたのです？。私やお前がどれほど菊代のためには苦められたか、それを考へたなら、道で會つても口一つ利ける譯のものぢやないよ。それに、わざ〳〵あれの家へ隨いて行くなんて、お前の量見が私には分らない」

友子の聲は例になく險しかつた。心に疚しいところのある英吉は、卒直な返事は出來なかつたので、默つて母に叱られてゐた。友子は將來を堅く戒めて、菊代の人となりを口を極めて罵つてゐたが、側へ寄つても身の汚れになるやうに罵りながらも、彼女の昨今の生活の樣子を知りたかつたので、

「あの女は今何をして暮らしてゐるらしいの？。琴平から築土へ移つたつてことだが、他所の主婦になつてゐるやうだつたの？、相變らず母親と一緒に住んでゐるのかい」と、言葉を和らげて訊ねた。

「僕はちよつと寄つたゞけで、よく解らなかつたけど、家では商賣も何もしてゐないやうです。一月ほど前までは他所へ出てゐたのだけど、この頃は少し加減が惡くつて家にばかりゐると云つてゐました。家は二室か三室の小さな家で、僕の行つた時には誰れもゐませんでしたよ」

「表札には何といふ名が書いてあつて？」

「表札なんか氣がつかなかつた」

「他所へ緣付いてゐるのか、獨身でゐるのか、家の中の樣子を見れば、お前にでも分るだらうね。……それで、あの女は、お前にどんな話をしかけたい？。私の事もいろ〳〵訊ねたらうね」

「さあ、どうだつたか知らん。僕は何を聞いたか覺えてゐませんよ」と、英吉は煩さうに云つて、「お母さん、もうその話は止しませう。あなたゞつてそんな話は嫌ひなんでせう」

「でも、あんな性質の惡い女は、こちらで油斷してると、どんな係合ひをつけるかも知れないからね。……お金にさへなりや、義理も人情も構はない人間なんだから恐しいさ。お父さんが急病で亡くなつた時に、あの女のしたことがどんなだつたか、お前だつて薄々は知つておいでだらう。しやあ〳〵した顏して私だちの家へやつて來て、弔慰に來てる大勢の人にいやな思ひをさせて、お葬式の時にも、お父さんの一生の不身持の證人見たいにお墓まで隨いて來た上に、七七の逮夜も濟まないうちに、あの人相の惡い叔父を代理に寄越してお父さんの書付を出して お金をせびつたのぢやないか。あの書付だつて、お父さんの自筆にはちがひなかつたけれど、お父さんが醉拂つてた時にでもあの女が媚てゝ無理に書かせたのに極めてゐるのさ。あんな病氣で急に亡くならうとは誰れしも思つてやしなかつたけれど、菊代はまさかの時の用意に、早くからちやんと書付なぞ取つてゐたのだから呆れつちまふ。慾の深いことつたらありやしない。お

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

父さんを墮落させた女は二人や三人ぢやないのだけれど、菊代のやうな薄情な慾一點張りの女は他にはなかつたのさよ。今だつてどこかの男をたぶらかして、甘い汁を吸はうとしてるのだらうよ。人間らしい正面の道の踏んで行ける女ぢやないのさ。……お父さんがもつと生きとつて御覧な。菊代の飮ませる毒がもつと〳〵ひどく利いて、家はめちや〳〵にされて私たちはどんなみじめな目に會はされるか知れなかつたのだよ」

友子はわが子の前で鬱憤の一端を洩らしたが、英吉はたゞ聞きづらい思ひをするばかりで、母の云ふところに同感は寄せられなかつた。たとへ酒色に溺れてゐたにしても、臨終の間際まで自分を愛してゐてくれた父親を恨む氣にはなれなかつたし、あの菊代といふ女をも先日からは母と心を一つにして憎む氣にはなれなくなつてゐた。むしろ、事々に干渉して、絶えず付纒ふやうにする母親を厭はしく思ふ氣持がこの頃はしだした。他所で面白く遊んでゐる時でも、食事時が來ると、自分が歸るまでは、いくら時刻が過ぎても、母が箸を採らないで待つてゐる樣が思はれて、興が削がれた。「これからは僕にかまはないで先きへ食べで下さい」と頼むと、よしよしと口では云ひながら、一度もそれを實行する母ではなかつた。

友子は今朝からの不快な思ひをいくらか晴らしたあとで、誕生日祝ひの話を持出したが、英吉は氣乘りのしない返事をした。

（二）

父親ははじめから子供を實業家として仕立上げることに極めてゐて、英吉も將來は高等商業か××大學の理材科へでも入るつもりでゐたのだが、父親の亡くなる時分から、彼れは學問の方針について迷ひだした。自分の天分は、父親と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はちがつてゐて、實業には適しないやうに思はれだした。父親をはじめ、その知人や部下の所謂實業家達の日常の言語動作生活振りが彼れには次第に快く思はれなくなつた、では、實業を棄てゝどういふ方面に向つて進んだらいゝかと考へても、自分の天分や趣味に適應したものが思浮ばなかつた。同年輩の友人の多くは、それ〴〵に自己批判の目が開いてゐて、たとへ境遇上氣儘に學校を撰ぶことが出來ないにしても、自分々々の志望は胸に抱いてゐるのに、英吉には今年二十にもなつてゐながら、その志望がまだなかつた。父親の束縛からは離れてゐるし、學資は豊かなのだから、自分の望みのまゝに好きな學問が出來るといふ、朋輩に羨まれる身分でありながら、この頃まだ將來の方針についてアヤフヤな氣持でゐた。が、學校を止める譯には行かないので、とに角少年時代からの豫定通りに、この九月から××大學の理財科へ入るやうに道を採つてゐた。

去年の夏には、友人に誘はれて日本アルプスの登山を企ててゐたのに母親の强硬な反對によつて果されなかつた。この春には、單獨で一週間ばかり未知の京阪地方へ旅行しようと計劃してゐたのだが、それも「是非行きたいのなら、私も一しよに行かう」と、母親に云はれたので、詰らなくなつて止してしまつた。今度企てゝゐる海邊行きも母親と一しよであつたなら、煩くつていけないのだが、どうせそんなことになるのだらうと、彼れは豫期してゐた。一人の妹は幼い時に死んで、外には弟も妹もないのだし、父親は家の中に居ついてゐることは稀れであつたから、母親一人を遊び相手にし話相手にして育つて來たので、彼れと母親とは、普通の母と子との間よりも親しみが深いので、しかもこの頃は背丈の伸びた彼れは、年齢よりも若く見える母親と一緒に旅へ出た時など、姉弟として見られることがあつたが、さういふことを彼れはいやがるやうになつてゐた。そして、自分にも姉や妹があればいゝ。美しい姉や妹があつて、一しよに市街を散歩したり、一しよに旅行をしたりするやうだつたら、どんなにか樂しいだらうと、屢々空想することがあつ

た。美しい姉に甘えて見たかつた。可愛らしい妹に、「兄さん……」と甘えた口で呼ばれて、飛びつかれたり抱きつかれたりしたかつた。

英吉は休暇になつて、家でゴロ〳〵してゐる間に、近年ともすると覺えるやうになつた家の中の淋しさを感じて、兄弟姉妹のある友人を羨んだりしてゐたが、さうしてゐるうちに、菊代の顏形が、實の姉か何かであるやうに、親しみをもつて思出された。菊代の家と吉村家とは昔多少の緣故があつたので、英吉は幼い時にも菊代の顏は見覺えてゐたのだが、父親との關合ひがついてからも、英吉は時々母に秘密で菊代の所へ遊びに行つたことがあつた。母が云つてゐるやうな惡人とは思はれなかつたし、たとへ父を墮落させる惡人だと憎んでゐた時でも、其處へ行くと何となく面白い氣持がするので、誘はれると、知らず〳〵立寄つたことがあつた。好きな物を御馳走されるのもよかつたが、それよりも、外では聞けないやうな世間話を聞かされるのが悅しかつた。

先日は父の死後はじめて菊代に會つたので、母に對してよくないと思ひ〳〵、彼女の心からの勸めを退けかねて、後に隨いて行つたのであつたが、あの時は、いつまでも二人差向ひで話をしてゐたかつた。以前よりももつと懷つこい、無遠慮な口を利かれるので、女に馴れない英吉も氣が置けなかつた。

「お母さんによろしく」と歸り際に、菊代は云つて、「此方へお出掛けなすつた時には、是非寄つて下さいね」と、格子戶の外までも見送つて出て云つたばかりでなく、英吉が坂を下りかけてふと振返ると、菊代はまだ戶口に立つて此方を見てゐて微笑して會釋した。

英吉は母親の小言を聞いてからは、なほ更菊代に會ひたくなかつた。また母親に知れるといけないが、母親の病院通ひは一時中止になつたのだから、秘密の訪問を嗅出される氣遣ひはあるまいと、小さかしく高をくゝつた。そして、待

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生のためと云つて毎日一度は缺かしたことのない散歩に出た時や、友人を訪問した時には、屢々足を築土の方へ向けたが思切つて菊代の家の閾を跨ぐこともなし得なかつた。

そのうち避暑の話は進んで、海水浴を望んでゐる子息にも、痼疾のために溫泉浴を望んでゐる於刹にも、どちらにも都合のいゝ土地を撰びたいと、友子は先きに立つて、親戚や知人に訊合はせた。伊豆山とか熱海とかの近所の海岸の溫泉場の樣子を聞いてゐるうちに、ある人が、能登の和倉溫泉は流痳質斯や婦人病に特効があつて、足腰(こし)の自由の利かない病人で、その溫泉に一月(つき)ばかり浸つてゐたゝめに殆んど全癒して、人手(ひとで)を借らないで歩けるやうになつた不思議な經驗を見たことがあると、まこ〻しやかに話すのを聞くと、自分だちも、途中の名所を見物しがてら、さういふ遠い所の溫泉へでも出掛けようかといふ氣になつた。舅姑の生きてゐた頃にも夫(をつと)が世に在つた間にも、しみ〴〵旅行や湯治をしたことのなかつた友子は、今のうちに――英吉がまだ妻を娶らず、自分もまだ老朽(らうきう)ちぬうちに――親子二人連れでユッタリした旅をしようかと思ひついた。夫(をつと)の死後は、活動寫眞や音樂會や芝居などへ時々出掛けたり、多摩川市川あたりまでは、英吉や親類の子供などを連れてをり〳〵遊びに行つたりしてゐたが、まだ思切つて旅行らしい旅行をしたことはなかつたのであつた。菊代のやうに一生勝手な眞似をして面白く暮さうとする女もあるのに、自分のやうに浮世のさま〴〵な面白さを味ひ知らないで過すのは、人間として割に合はないやうに友子は感じて、

「私も一つ元氣を出して、洋行でもする氣になつて、和倉溫泉とかへ出掛けようかい。そして歸りには、一生の話の種に上方(かみがた)見物をして來たいものだ。この歳になつて、まだ一度も京大阪を見たことがないなんつて、當節では私のやうな女も少いだらうよ」と、上(うは)ついた口調で英吉に云ふと、英吉の方で却つて、

「京都見物も暑い時分ぢや面白かないだらうけれど」と云つて、氣乘りがしなかつたが、愚圖々々してゐるうちに、こ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の夏もまた東京で過すやうになつても詰らないから、母親の企てに同意して、旅行の準備に取掛つた。

出立は七月十日と極められた。その前日、英吉は北陸畿內地方の地誌、その他二三の旅行用の品物を買調へるために朝早く涼しいうちに家を出て、神樂坂へ行つて、用を足したあとで、先日菊代に出會つたところを、夢見るやうな氣持で見廻はしてゐたが、すると、ふと、

「吉村」と、後から呼掛けられた。顧みると、同窓の新井が側へ寄つて來た。

「さつきから其處に突立つて、キヨロ／＼物を見てゐたぢやないか。人を待つてゐたのかい」

「さうぢやない」英吉は極りの惡い思ひをした。

二人は旅行の話などしながら坂を下りてゐたが、そこへ病院歸りの菊代は、藥瓶を提げて向うからやつて來た。彼女も英吉も同時に氣づいて、互ひに微笑を浮べた。近づくと、

「どちらへ？」と云つて、菊代は英吉の友人にかまはないで、親しげに話をしかけた。旅行の事を聞くと、さも羨ましさうにして、

「ぢや當分お目に掛れませんわね。私先日から一度お宅へお伺ひしたいと思つてゐましたのですよ。しみ／＼お話したいことがあるのですけど、今日私の家へ寄つて下さらない？」

「えゝ、ちよつとくらゐ寄つてもいゝです」英吉は面羞げに答へた。

「是非どうぞ。……お待ちしてゐますわ」

菊代は別れ際に新井の方へも目で會釋して行過ぎた。

「あの人はどういふ人だい」と新井に訊かれると、英吉は答へに躊躇した。自分の家とあの女との關係を新井などが知

つてゐる筈はないのだけれど、何となく後見たい思ひがされた。

「美人だなあ。僕はあのくらゐな美人を見たことないよ」と、新井は聲を立てて云つて、無遠慮な目をして振返つた。

坂の下まで來ると、「ぢや、時々繪葉書でも寄越してくれろよ」と云つて、新井は電車に乘つたが、英吉は二三臺の電車が通過ぎるのをボンヤリ見送つてから、再び足を轉じて坂を上つた。そして、あちらこちらと無駄道を歩いたあとで築土の方へ向つた。いつの間にか空が曇つてゐたので、暑さもいくらか凌ぎよかつた。

「英吉さんがいらしつてよ」と、戸口に近寄つた彼れを早くも見つけた菊代は、母親に向つて云つて、玄關へ顏を出して「よく寄つて下すつたわね。さあ〳〵どうぞ」と手を執らぬばかりにして、英吉を上へ誘つた。歸つたばかりでまだ身體を拭はないでゐる菊代の汗臭いやうな匂ひが、英吉の鼻を掠めた。菊代が衣服を着替えてゐる間に、母親が金盥に水を汲んで來て呉れたので、英吉は衣服を脱いで縁側で顏を洗ひ身體を拭つてゐたが、そこへ洗ひの利いた湯上り浴衣が持出された。

「お召替えなさいましな。そちらは乾かして置きませう」と云つて、母親は肩の張つた首の長い英吉の身體の樣子を見詰めながら、「お父樣によく似てゐらつしやいますこと」と、さも感じたやうに云つて、浴衣を後から着せて、身の丈も彼れと亡父と同じくらゐなのをひそかに感じてゐた。この浴衣は以前英吉の父が着馴れてゐたのであつた。

英吉は少しの間母親から話を仕掛けられたが、亡父の事に話が觸れるたびに、何となく居づらい思ひがされた。

「御命日にはお墓詣りはしてゐるので御座いますが、二年三年は直ぐで御座いますわね。お亡くなりになつたと承つた時は夢見たいで本當とは思はれませんでしたよ。あんまり御酒を召上つたせいなのでせうか知ら。あなた樣も御酒はお好きでいらつしやるのですか」などと云つて、母親は故人が時々暴飲した時の樣子を話して、自分ひとりで追懷の興に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

耽つたりしてゐた。

やがて母親が座を立つと、入れちがつて菊代が意氣な浴衣に着替えて入つて來たが、英吉はこの女に對しては、外の知らない女に對した時のやうな擽つたい思ひはしなかつた。姉か叔母か何かに會つてゐるやうであつた。

「あなたは病氣なんですか」と訊ねると、

「私の病院通ひは半分は遊びなのです。お母さんはもうよくおなんなすつたの?。この頃は病院へいらつしやらないやうぢやありませんか」と菊代は訊返した。

「なぜだか急に中止したのです。薬だけはあの病院へ下女に取りに行かせてるんですけど」

「私にお會ひになるのがおいやなのかも知れませんね。でも、あなたは私の所へでもよく來て下すつたわね」

「あなたは此處で何をして暮してゐるんです?。お母さんと二人きりなんですか」

「あなたのお母さんは變に思つてゐらつしやるんでせう。……でも、私はあなたのお父様やあなたのお名前に障るやうなことは決していたしませんから、御安心なすつて下さいね。お父さんから頂いたお金は一錢たりとも無駄に遣つてやしません。あのお金を資本にして何か氣の利いた商賣でもはじめて、母子二人は奇麗に世を過さうと思つてゐるのですよ。……お母さんにさう仰有つて下さいな」と、菊代はふと、英吉が母親の指圖で此方の様子を探りに來たのではないかと疑つて、嚴い目をして生眞面目な口調で云つたが、それは瞬間の疑ひとして通過ぎて、彼女の顏は直ぐに和らいだ。

「明日旅へお立ちになるといふ今日、あなたにお目に掛かれたのは、お父さんのお引合はせ見たいに私には思はれますのよ。……私を信用して下さらなきや、申上げたつて仕方がないのですけど、英吉さんは私を出鱈目ばかり云ふ不實な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女とは思つてゐらつしやらないでせう」

英吉は先日のやうにたゞ面白く遊んで行きたかつたのに、菊代が亡父を引合ひに出したりしていやに勿體ぶつた口を利くので、興を殺がれながら、據ろなく自分も大人らしく、

「僕に用事があるんですか」と云つて、心持居住ひを直した。

「私を信じて下さればあなたにだけお話しときたいことなの。そのつもりでよく聞いて下さいね」と、云つて、菊代はまだ口外することを躊躇してゐるやうな思はせぶりを見せて、「實はかうなんですよ。……お父さんは急にお亡くなりになつたので、御遺言をなさる暇もなかつたのでせうけど、私はいろ〳〵承つてゐることがあるんです。あなたは吉村家の一粒種だからつて、何かにつけてあなたのお話は出てゐましたが、そのうちに御縁談のことも話してゐらしつたの。私どものやうなものでも御相談相手になすつて、まだ急ぐことぢやないが、いゝ候補者があつたら今から見つけといてくれなんてよく仰有つてゐたのです。だつて英吉さんはまだお二十にもおなりなさらないのに、お嫁さん騒ぎはあんまり早過ぎるぢやありませんかと、私どもが笑つて申上げると、だからせいてる譯ぢやないと仰有りながら、お父様はやはり氣にしてゐらつしやいましたよ。さういふとも、あんなに早くお亡くなりになる前兆だつたのかも知れませんね。それで、御病氣におなんなすつた時から一月足らず前のことでしたが、かういふ立派なお嫁様ならいゝ、外から縁談の口が掛からないうちに、今からでもちやんと約束を取極めたいと、大變乘氣におなんなすつて、頭に火がついたやうに私どもを急立てて、先方の腹を探つて來いと仰有つたことが御座いますの。幸ひいゝ質縁がありましたから、間もなく當つて見ると、先方の御兩親は、さういふお家と縁組みが出來れば願つてもないことだつて大變お喜びになりましたのよ。このいゝおたよりをお父様にお傳へしようと思つてる矢先に、あゝいふことになつて、この世ではお父様にはお目に掛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れなくなつたので、私どもガツカリいたしました。ところが、先日あなたにお目に掛つた後間もなく、そのお孃さんのお兩親に賴まれたと云つて、あるお人が訪ねていらして、いつかのお話はどうだらう、吉村さんへお訊きして吳れと仰有るんです。二年も前のことでそれつきりになつてゐたのだし、私どもは今は吉村さんと御交際は絕えてゐるのだからお取持をすることは六ケ敷いと一應はお斷りしたのですが、先方では大變殘念がつてゐらつしやるんですの。お孃さんは今年十八におなんなすつて、女學校は御卒業になつて、これからまだ上の學校へお入りになるんださうです。今のうちに緣談が極つたら、先樣の御職業に適當したやうな學問なり稽古事なり、充分になすつて、二年三年後に結婚の式を擧げたいと云つてゐらつしやるんです。そのお孃樣は御容色も氣質も申分がないんですよ。私どもが御緣談の仲立をするのは出過ぎたことですから、差扣へてゐたのですけれど、いかにもいゝ御緣だと思はれますし、第一お父樣があんなにお心に掛けてゐらしつたものを、知らん顏してゐちや申譯がないと、先日からたび／＼母に話して居りましたの。……ですから、今日あなたが來て下すつたのが、私にはどんなに悅しいか知れませんのよ。佛樣のお引合せにちがひないと思はれますわ」

菊代の話振りは明晰であつた。英吉は寸分の疑ひをも起さなかつたが、事があまりに突然なので極りが惡さうにしてドギマギしながら、

「僕は結婚など考へたこともないんです。お母さんもそんな話はしたことがありませんよ」

「今のお話は多分、お父樣がお母さんのお耳へ入れてゐなかつたらうと思はれますの。ですから、私どもが申上げてもお母さんは御信用なさらないかも知れませんよ。いゝ御緣なんですけれどね。斯してお目に掛つてあなたの御樣子を伺つてると、あのお孃樣とあなたとなら、またとない一對のいゝ御夫婦のやうに思はれてなりませんのよ。若しもこのお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

話が纏まるやうだつたら、お父様があの世でどれほどお喜びになるか分りませんわ」

菊代に見詰められるのが、英吉には眩しかつた。英吉は自分の妻として相應しいといはれる娘の姿を空想してゐたが、空想の娘は、目の前にゐる菊代の目や鼻や唇によつてつくり上げられた。

「一度そのお孃さんをあなたにお目に掛けたいのですけれど、明日御出立になるのぢやちよつと困りましたね」菊代はさう云つて考へてゐたが、やがて次の室を顧みて、「ねえお母さん。谷さんにお願ひしたら、あの方のお宅へ佐野さんのお孃さんを呼んで頂けやしなくつて?、今日に今日といふのでは少し六ケ敷いでせうけれど、何とかいゝ口實を設けて、さうして頂く譯には行かないでせうか。電話を掛けてちよつと聞いて見て下さいな」と云つてから座を立つて、母親の側へ寄つて何かしら囁き合つた。

英吉は未知の娘を見させられることになりさうなのを、不思議に思つて、そんなことをしてもいゝのか知らんと、多少の恐れをも感じてゐた。

「僕は午餐時分までには歸らなきやならんのですよ。遲くなると、お母さんが心配していけないんです」と云ふと、菊代は、

「お母さんはあなたお一人を手頼りにしてゐらつしやるんでせうから、無理はありませんわ。……あなたはお小い時分からお母さん贔負でいらしつたのね。今でもお母さんの仰有ることは、何でもおとなしく聞いてゐらつしやるんでせう」と、揶揄ふやうに皮肉に云つたが、英吉は卒直に、

「あんまり干渉されるので、僕もこの頃は煩くなつてるんです。旅行だつて自分一人で出掛けるといゝのだけれど、さういふ譯に行かないのだから困つちまふ」とこぼした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「なぜでせう?。お母さんとでも、お友だちとでも、御一しよにいらしつた方が旅行は面白いぢやありませんか。……私なぞをり〳〵旅へ出たいと思つても、容易にいゝ連れが見つからないので滅多に出掛けられないんですわ。この前あなたがいらしつた時にも、あなたをお誘ひして、日返りか一晩泊りくらゐな旅でもして見たいと思ひましたの。でも、道連れはいやだつて仰有るのなら、そんなこと出來やしませんわね」

「干渉されなきや連れがあつてもいゝんです」

英吉は今度の北陸旅行にも、連れが菊代であつたら面白いだらうと思ふとゝもに、母親と一しよの旅について興味が一層失はれた。そして、彼れがさう思つてゐることを菊代も勘付いたが、すると彼女の心の底にかねて蛇のやうに蟠つてゐたある一念が、鎌首を持上げてピク〳〵と動いた。

「あなたは海水浴がお好きなの。海はよ御座すわね。廣々として、活氣があつて、私はこんな弱さうな身體をしてゐても、二三丁は泳げますのよ。一夏鎌倉で一生懸命稽古したことがあるんですからね」

「僕も二三年つゞけて海岸へやつてくれゝば泳ぎくらゐ出來ないことないのだけど、行かせてくれないから駄目です」

暫く海水浴のことなど無邪氣な話をしてゐる間にも、菊代の一念はいき〳〵と動いてゐた。……英吉の母親の友子から英吉を奪つてやることが、何にもまして腹癒せになりさうに思はれてゐた。英吉の父親の信造がもつと生きてゐてくれさへすれば、友子などを押退けてしまつて、信造をすつかり菊代自身のものにしてしまつて、うまく行けば吉村家へ乘込むことも出來たであらうし、少く見つもつても小奇麗な家の一軒くらゐ新築して貰つて、物見遊山の費用や、時節々々に好きな衣類を調へる金に不自由しないくらゐな身分になれたであらうのに、千や二千の目腐れ金で——しかもいやな手數をかけたり惡人あつかひされたりしてやうやく手に入れて——諦めなければならぬ破目になつたのは口惜しかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。それに、慾得からばかりではなくつて、自分の方が、あの腹の冷い情愛の薄い友子よりも、眞心から信造を愛してゐたのだと思ふと、なほ口惜しかつた。表向きはどうであらうとも、本當は、信造は「私一人のものだつたに」死目にも會はして貰へなかつた上に、世間の同情も友子の方へのみ向けられてゐたのが忌々しかつた。

「佐野さんの二番目のお孃さんは秋子さんと仰有るの。秋子さんへは方々から縁談が持込まれるらしいんですけれど、御當人は外へはちつとも氣が向かないんですつて」と、菊代は秋子を褒立てた上におまけをもつけて英吉を唆かした。

英吉は結婚は兎に角として、さういふ女には會つて見たくなつた。自分を思つてゐる女があると聞いただけでも、彼れの胸は躍いた。

「御會になつてあなたのお氣に召すやうだつたら、お互ひに氣心の分るやうに御交際なすつたらいゝでせう。先方は當世風でよく譯の分つたお家なんですからね」

「しかし僕の母はさういふことを好まないでせうね」

「それはどうにでもなりますさ。私どもはこの縁談のことならあなたのお父さんによく頼まれてゐるんですから、いくらでもお力になりますわ。お父さんは大變あなたを可愛がつてゐらしつたんですもの。お父さんの望んでゐらしつた縁談を纏めるためには、私どんなことしてもいゝと思つてゐますのよ」

さういふ女と自由に交際が出來るやうなら、旅行などしないで、暑中を東京で過してもいゝやうにさへ思はれだした。が、電話を掛けて來た母親の話によると、今日のうちに秋子に出會ふことは望まれなかつた。二三日中に日を極めて秋子を招きたいといふ先方の意向を、母親は菊代に傳へて、「谷さんの奥さんの御返事の樣子では大變喜んでゐなさるやうだよ」と言添へた。菊代は迅速に自分の企ての運ばないのをもどかしく思ひながら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「英吉さんはどうしても旅行を延ばしなさる譯には行かないんですか。せめて一日か二日でも。……何とかしてお母さんを說きつけることあなたには出來ないの？」と、少し嵩にかゝつて云つた。

英吉はこの場合、出來ないとは云ひたくなかつたので、「旅行は延ばされないことはないんです」と云つたが、氣になるので、「僕には今のところいゝ口實がないから困つちまふ」と屈托を顏に現はした。

「あなたが決心なされば、そんなこと何でもないぢやないの。私が附いてゐれば大丈夫ですよ」と、菊代は氣輕に笑つた。そして、英吉のために旅行延期の口實をいろ〳〵と考へた。

午餐には、神樂坂の洋食屋からうまい料理がドッサリ取寄せられた。英吉は菊代とちやぶ臺を挾んで、二人で食事を採つたが、いつの間にか空模樣が變つて、壯快な驟雨の音がしだして、風も涼しくなつた。彼れは歸宅の遲れる言譯の立つのをひそかに喜びながら、雨脚のます〳〵激しくなるのを見てゐた。

（三）

英吉は今まで母親の干涉を煩がつて、自分の所行を隱すことはあつても、母親に對して積極的に虛言を吐いたことはなかつた。が、その日はしら〴〵しい虛言を云つた。途中で友人に會つてその下宿へ誘はれて行つて、學校の話などして思はず時を過して、それから、友人と一しよに自分だちの崇拜してゐる××博士を訪ねて行つたので、一日を有益に過したやうに云拵えた。そして、博士は專門の學問に關する新しい研究の結果を、明日から四五日續けて、門下生に講義することになつてゐるので、自分もかういふいゝ機會を取逃してはならないと思つて、聽講生の仲間に入れて貰ふやうに願つて、その許可を得たと、まことしやかに云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だから、二三日でも旅行を延したいんですよ。××博士の講義はかういふ時でゞもなければ、聽かうたつて聽けないんですからね」

「さういふことなら、五日でも十日でも延したらいゝだらう」

友子は失望したが、わが子の學問の邪魔をしてはならぬと諦めて、今夜から留守番として泊りに來る男へも延期を通知したり、旅行鞄へ入れてゐる衣服をも取出したりした。英吉はさすがに氣が咎めて、頻りに母親の歡心を買ふやうな口を利いた。晩餐後には母親に隨いて下町へ散歩に出掛けた。

友子も久振りで夏の夜の銀座など歩いてゐると、自分が知らず〳〵老人くさくなつてゐることが顧みられた。英吉の望みで資生堂へ入つてアイスクリームやソーダ水を飲んでゐると、若い夫婦や相當の年輩の男女がいく組も來てゐるのに目がついたが、途中で通りすがりに見るのとはちがつて、同じ家の中で一しよになつてゐるうちに、若い男や中年の男などが、連れの女を大事に取扱つたり女の方で連れの男に甘えたりしてゐるのを見ると、彼女は烈しい反感を覺えた。

「旅行もいゝが、今夜のやうに涼しいと、東京の夏もいゝなあ」と、英吉が周圍を見てひとり言のやうに云ふと、友子は、

「私はこのくらゐ歩いても身體が疲れていけない」と云つて、早く電車に乘らうとした。家を出掛けた時よりも歸つた時の方が心が淋しかつた。

「この頃はどこへ行つても日本髷に結つてる女は滅多に見られなくなつたよ」と、今さら感じたやうに云ふと、

「だけど、お母さんくらゐな年齡で、女優髷とか耳かくしとか結つちや可笑しいでせうね。老人は老人らしく髮でも何でも日本風しにといた方がいゝんでせう」と、英吉は冷かすやうに云つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子は不機嫌な顏して默つてゐた。英吉や身内の者の目に觸れさへしなければ、自分も資生堂などで敎へてくれるといふ流行の髮結振りでも習覺えて、衣類持物も今風に若作りにして、人中へ出て見たかつた。資力が乏しい譯ではないし、肉體だつて身を入れてかまつたなら、まだ老婆さんになつてゐる譯ではないのだものと思ふと、一人子の英吉さへ今夜は目障りになつた。

英吉はこの頃になく元氣づいてゐた。寢床に就いたあとで、銀座あたりで自分の注意を惹いた若い女の一人を秋子に見立てゝあこがれたりしてゐたが、夜半の夢、曉の醒際の快い夢現の境に入つて來た女は、菊代の姿であつた。ナイフやフォークを使つてゐる白い手が夢の中でも浮んで來たが、それは資生堂でよく見た女の手ではなくつて、藥士の家でよく見た菊代の手であつた。彼れは醒めたあとでは自分の不所存を自分で咎めたが、枕元へ投出した自分の手に觸つて見ると、それが菊代の手に觸つてゐるやうな感じがした。鼻に觸れる部屋の中の匂ひが――不斷嗅ぎ馴れてゐる臭氣であるのに――菊代の五體から發散する匂ひのやうに感ぜられた。秘密の見合ひの日が極り次第に知らせてくれる約束がしてあるので、若しも今朝知らせが來てはゐないかと、當てにして、起きると直ぐに郵便箱を搜したが、新井の端書が一枚入つてゐたゞけであつた。そんなに早く通知のある筈はないに極つてゐるのに、當ての外れた氣がした。

いゝ加減な時刻を見計つて、英吉は制服を着けて、書物やノートブックを抱へて、母親の手前、××博士の許へ通ふやうに見せかけて家を出た。そして、日比谷や芝の公園をブラついたり、自分の家の近所の釣堀で遊んだりして時を過した。

二三日さうして暮してゐるうちに、菊代からの手紙が來た。封筒には約束通りに男名前が記されてあつた。女文字の秘密の手紙を生れてはじめて受取つた英吉は、內容は簡單な用事だけであるにも關はらず、艶書でも貰つたやうな氣で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幾度も讀返したあとで、本箱の奧へ大切にしまひ込んだ。そして定められた時刻を待つて、暑さを冒して家を出た。

この時友子はふと、二三日來の英吉の擧動のあたりまへでないのに氣づいた。「暑いのに御苦勞だね」と云つて、不斷のやうに玄關に立つて彼れを見送つたが、あとで、腑に落ちないことがいくつもあるやな氣がした。……戸外から歸つて來ると、さも他人の所爲でゞもあるやうに暑さをこぼすのを例としてゐた彼れが、この二三日はそんな不平を洩らさなくなつたのも變であるし、暑さに疲れて横になつてゐる時にも、平生のやうに聢つゞけてはゐないで、ともすると跳起きては庭へ下りて、高い聲で西洋の唄見たいなものを叫んだりするのも變であつた。……ことに、今日は彼れが頻りに時計を氣にして、ネヂを掛けたり隣りの時計に合せたりしてゐたのが、友子には變でならなかつた。で「私に隱してゐることがあるのぢやないか」と、疑ふとゝもに、一刻も早く訊糺さなければ安心が出來なくなつた……ジリ〳〵庭を焦がしてゐる眞晝間の光を見てゐると、彼女の目はくらみさうであつたが、彼女の心の中もジリ〳〵してゐた。

英吉は先日と同じやうに汗みどろになつて築土の家へ行つたが、上へ上ると直ぐに、先日と同じ浴衣に着替えさせられた。菊代の姉だといふ一度も見たことのない痩せつぽちの、色の蒼白い、感じの惡い女が來てゐて、何もかも知つてゐるやうに馴々しく話を仕掛けた。

「あゝ云つてゐらしつても、旅へお立ちになつたのぢやないかと、案じてゐましたのよ。お母さんがよく御承知なすつたわね」

先日から眞劍に氣遣つてゐた菊代は喜ばしげに云つた。自分の企みは大丈夫成就しさうに思はれた。

「時間はまだ早いんだから涼しくなつてから出掛けませう。こんなに暑くつちや外へ出らりやしませんよ」

菊代はさう云つて、英吉にはかまはないで、姉を相手に取留めのない話をしてゐたが、やがて姉の手を借りて髮を結

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひにかゝつた。顏を洗つてお化粧をするにも非常に手間がかゝつた。英吉は時間の過ぎるをひとりでもどかしく思つてゐたが、身仕度をすまして出て來た菊代の姿を見ると、睡つたかつた目も醒めるやうであつた。白粉のあとは見えぬやうで髮はサツパリした束髮で、衣服も紺絣で、これを上布といふのか、ケバ〱しいものではなくつて、指環も白い玉の入つたのを一つ嵌めてゐるばかりであるのにかゝはらず、いつもより水際立つて艶麗に見られた。

「お待遠樣」と云つて、菊代は英吉を促して家を出たが、彼女の姉も仲間に加はつた。

「改まつた見合つていふのぢやないんだから、あなたがちよつとお孃さんの顏を御覽になつたら、直ぐにお暇することにしませう。お孃さんの方ではなんにも御存じないんですよ」と、菊代は途中で云つた。

飯田町の谷の家へ着くと、姉は先きへ入つて、家族の者と打合はせをしてから、二人を座敷へ通した。英吉はここの家の樣子が、父親在世の間住んでゐた芝の本宅のやうなのに追懷の思ひを寄せながら、あたりを見てゐたが、床の間の掛物の繪が昔自分の家にあつた狩野某の支那の山水に酷似してゐるのが不思議に思はれた。

やがて此家の主婦と思はれる老女が出て來て挨拶したが、「この方が吉村さんの御子息さんでゐらつしやるんですか」と云つて、しげ〱英吉の顏を見て、菊代に向つて故人の噂などした。

「佐野さんでも二三日うちに皆さんお揃ひで修善寺へいらしやるんですつてね。その前に一度お遊びにいらつしやいつてお招きしたのですけど、秋子さんはこの頃出嫌ひになつてゐなさるから、若しも來て下さらなければどうしようかと、氣が氣でなかつたんですよ」と、老女は小際で有難味をつけて云つて、若い女だちの話聲のしてゐる次の室へ二人の注意を向けさせた。そして、英吉を導いて、彼方此方と家の中を見せるやうな體にして、次の室へも連れて行つた。谷の娘二人と秋子とは、哲學の用語など使つて六ケしい議論をしてゐたところなので、未知の青年の侵入に極りの惡い思ひをして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

僅かに口を噤んで互ひに取澄した顔した。英吉も極りの悪い顔してちよつと挨拶した。

「此處を子供だちの勉强部屋にしてゐますのです」と説明して、老女は其處を通拔けて、次手に二階へも案内したが、二階の主人の居間を覗見した英吉は、そこの床の間の掛物の觀瀑の繪もたしかに見覺えのあるやうな氣がした。元の座敷へ戻つて來ると、

「よく御覽なすつて？」と二人の女は左右から訊ねた。菊代は自分の勝負をここで判斷しようとして、英吉の顔を見詰めた。

「えゝ……」英吉は無關心な顔して云つた。

「秋子さんはお美しいでせう」

「えゝ……」

英吉には、三人の若い娘が顔立は違つてゐても、優劣があるやうには思はれなかつた。そして、可成り美しいそれ等の女が自分の妹であつて、賑かにかういふ家に住んでゐたら幸福だらうと思つたが、秋子とても、あるひは外の二人のどれとでも、結婚したいといふやうな考へは毛頭起らなかつた。

秋子が學校の成績がいゝとか性質も順良であるとか、老女は問はず語りをしてゐたが、英吉の様子があくまでも無關心で、多少でも心を動かしてゐる風を見せないので、菊代は不安を感じた。

程なく主人が歸るだらうからもつと遊んで行けと、老女が頻りに引留めるのを退けて、菊代は英吉を促して暇を告げた。そして、外へ出ると慌だゞしく、

「あなたは秋子さんがお氣に入らないの？」と咎めるやうに訊ねた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もつとよく考へて見なければ……」

「それは今直ぐに極めらりやしないでせうけれど、あのくらゐの方なら奥さんにしてもいゝとお思ひにならない？」

「でも僕は結婚はまだ早いんですもの」

人に骨を折らせといて何といふ返事の爲方であらうと、菊代は呆れたが、これつきりで濟ませては自分の企らみの甲斐もなく、英吉を自分の方へ引寄せる機會はまたと得られなくなると危まれたので、谷の娘をも引合に出して、どんなのが彼れの氣に入るかと、根氣よく訊ねながら、夕暮の町を、雜沓してゐる飯田町の停留所へ向つて歩んだ。そこで話が切れて右と左へ別れたなら、信造死後の二年目で手がゝりの出來た吉川家との縁の糸も再び切れてしまふかも知れないのが遮二無二惜く思はれたので、晩餐を共にしてでも話を續けようとした。英吉もこれで別れるのは物足らなかつたので喜んで應じた。

築土の家で食事をするのは興が乏しいからと云つて、菊代は、時々信造とも行つたことのある鳥屋へ英吉を誘つて、自分の好みの部屋を撰んで入つたが、そこへ入ると、二三年前の事が目に映つて來たので、暫く英吉をそつちのけにして、自分だけの感傷的な思ひに耽つた。

「あなたがいくらそんな柔しいことを云つてゐらつしやつても駄目よ。洪水が出て、私も奥樣も水に流されてゐたなら、あなたは乾度奥樣の方を先きへ助けなさるに極めてるわ。さう思ふと、私いゝ氣になつてあなたの仰有ることを信じちやゐられないの」と信造に向つてむづかつたことが思出された。

信造が菊代の氣休めに、一杯機嫌で、彼女の一生の生活を保證する契約書見たいな者を書いて印形を捺して渡したのを彼女は何の氣なしに受取つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だけど、やはり奥さんが私に勝つたのだ。奥さんといふ人聞きのいゝ名前を持つてゐたゞけで私に勝つたのだ。かういふ子息を持つてゐるだけでも、あの女は私に勝つてゐるのだ」

菊代は目を上げて、友子にも信造にも似てゐる英吉の顔を熟視しながら、

「私今詰らないことを考へてゐたのよ」と、夢から醒めたやうに口を利いた。英吉の好みをも訊ねて料理を誂えてから

「あの女中さんはちよつと可愛い顔してゐるわね」と、口先だけで云つて、「私だちを何と思つてるでせう。姉弟とでも思つてるか知ら」

さういふ言葉が英吉には色つぽく聞えた。女中も自分だちを姉弟とは思つてやしまいが、それでは何と思つてゐるだらうかと想像すると、胸がわく〳〵した。

「秋子さんがお氣に入らないやうだと、あなたはよつぽどの美容好みでゐらつしやるのね」と、菊代は揶揄ふやうに云つた。

「僕は女の事なんぞ知らないんです。だから秋子の容色がいゝのだか悪いのだか批評することは出來ないんです。僕はお母さんの外には、女といふ者は平生どんなことを考へてゐるのか、まるつきり知らないんですよ。僕にも從妹はあるんだが、そいつはまだ子供で、問題になりませんからね」英吉もやうやく自由に口を利きだした。

「どの女だつて特別な事考へてやしないのよ。あなたのやうな學問のある男の方の考へてゐらつしやるやうなえらい事は大抵の女は考へてやしないでせう。だからあなた方は女を畏れなさらなくつてもいゝんですよ。なに女なんぞと、かう思つてゐらつしやればいゝの。……さう思つてゐて、女を遊び相手にしてゐればいゝのよ。……私決してあなたに悪い遊びはお教へするのぢやないんですけれどね。女だつて突合つて見れば、あなたが思つてゐらつしやるよりも面白いも

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のなのよ。學問に凝つてゐる間々の保養にと思つて、お氣に入つた女の方と交際して御覧なさい。今まであなたが御存じなかつた面白いことに氣がつきますよ。……秋子さんは學問はおありなさるし、あなたのお話相手にはいゝぢやありませんか。御交際なすつた上でお氣に入らないところがあつたら、結婚なさらなきやいゝぢやありませんか。私がいつでも御相談相手になつて、あなたの御損にならないやうにしますわ。……秋子さんは今日はおめかしゝてゐなかつたけれど、木地が美しいぢやありませんか。額の生際がよくつて鼻筋がよく通つて、あの肌目がこまくつて頬の艶のいゝのをあなたは何とも感じなさらなかつたの?。坐つてゐたから何だけど、立つた時にはスラリとしてそりや姿がいゝのよ。……秋お父さんは秋子さんの歩いてゐるところを御覧なすつて、あれなら英吉の嫁にしても耻しくないと仰有つたの。子さんを見て何とも感じないなんて、あなたは本當の女嫌ひでいらつしやるのか知ら」

「僕だつてそんなものぢやないですよ」

「そんなものぢやないつて、女嫌ひぢやないと仰有るの?。……では、あなたが思つてらつしやる方がどこかにあるんですね」

「そんな者は決して無い……」英吉はぎこちない口を利いた。相手にそんな風に揶揄はれるのを嫌つて不機嫌な顔した。

「不思議ねえ。……でも、あなたはいろんな女の方に思はれてゐらつしやるには違ひない。御自分では氣がつかないのね。私の知つてる若い學生で、あなたなどとは人柄でも顔立でも、比べものにならないのに、いろんな女を手懐けて遊びものにして自慢してる人があるのよ。ひとりで色男ぶつてゐて、その忌味なことつたら鼻持もならないんだけど、でも、御當人は面白い思ひをしてるんだから、それだけはなんにも知らない人よりは得な譯ね。英吉さんはさう思ひなさらなくつて?　秋子さんのやうな美しい方に思はれてもいやだつて仰有るの?」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「僕は經驗がないから分りませんね」
英吉は一時不機嫌だつた顏を綻ばせた。先つきから未知の面白い世界へ誘はれてゐる氣持になつてゐたのだが、菊代が頻りに口にする秋子の影はちつとも彼れの目に迫つて來ないで、菊代自身の全身が次第に彼れの心を壓するのであつた。
そこへ料理が運ばれたので、二人は話を外へ轉じて箸を執つたが、英吉は腹は空いてゐても食物の味ひは殆んど感じられなかつた。
「ゆつくり召上れ。お急ぎになるの？　お母さんが待つてゐらつしやるから」菊代は英吉の慌たゞしい食ひ振りを見て笑つた。
「家へ歸つたつて面白かないからなあ」英吉は歎息した。
「今日の事はお母さんには秘密なんでせう」
「無論さうです。僕はあくまでも秘密にしとくのだけど、あなたが知らせちや駄目ですよ。最初あなたの家へ寄つたことをお母さんに聞かれた時にや返事に困つちやつた」
「私が悪かつたんですよ。勘忍して頂戴ね。今度は秘密事は一切口へ出さないわ」
指切りしてもいゝと、菊代は細い指を曲げて笑ひ〳〵英吉の指に引掛けたが、英吉がそんなことらくゐで指先を震はせて顏を紅らめるのを、今時の青年に似合はない初心なことゝ思ふとゝもに、ふと變な氣持がして、彼女自身も胸騷ぎをさせた。……「この人は私を思つてるのだ。私をどうかしたいと思つてるのだ」と菊代は稍々呆れたが、面には現はさなかつた。

食事が濟むと、「これから直ぐお歸りになるのでせう」と訊くと、
「歸らなにやならんでせうね」と、英吉は力のない返事をした。
「旅行なさるのなら當分お目に掛れませんわね。あちらへいらしつたら、時々繪葉書を送つて下さいな」
「僕は旅行は止めるかも知れなせんよ」
「どうして？……」
「詰らないから」英吉はさも詰らなさうに云つた。そして、相手の思惑を氣にしながら、「あなたのお家へ時々遊びに行つてもいゝでせうか」
「よ御座んすとも、是非來て頂くやうに私からもお願ひしたいんですよ」
菊代は相手の胸の中を一點の疑ひもなく見破りながら、ふとしてこの上の進んだことを英吉が口走つて、事が面倒になるのを恐れた。とに角今日はこのまゝにソツとして置いて別れることにして、其處を立つた。そして、町の左右から耳目に觸れるものについて、取留めのない口を利きながら時を紛らせて、坂下まで來ると、英吉を否應なしに電車に乘せて、ホツと息を吐いた。
「初めからさうであつたのに、氣がつかなかつたのは迂濶だつた」と、菊代は獨笑ひを浮べた。自分で骨を折らなくつてもあの子息が此方へ近寄つて來て離れなくなるのは、友子を叩付けて鬱憤を晴らすためにも、當然自分の手に入る筈だつた吉村家の財産を掻寄せるためにも、この上もない都合のいゝことなので、信造の死後二年間、詰らない男子に引掛つてゐたあとの自分の身にも、再び幸運の芽が吹出る譯なのだが、信造と自分との仲を思出すと、英吉と戀に落る氣にはなれなかつた。上べだけうまいことを云つて弄ぶのもいやな氣持がした。「あの人はまだ女つてものを全く知らないらしい

のに、のつけから私といふ女に惚れようなんて、大それた……」と、世間知らずのお坊ちやんの無法さに呆れた。

考へ事に心を取られてボンヤリした顔して家の閾を跨ぐと、

「どうだつたい」と、母親は心配さうに訊ねた。

「駄目々々。お話にもならないの」と、菊代はだるさうに應へた。

「秋子さんがお氣に入らないのかねえ」

菊代は默つて、風通しのいゝ縁側へ寄つて暫く物思ひに耽つてゐた。

彼女は、時としては、藝者上りのやうにも、料理屋か待合の女中のやうにも、知らない人の目に見られることがあつたが、それは信造の俗な好みでそんな風にさせられたので、可成り資産のある家に生れて一度は相當な家へ縁付いたこともあるのであつた。早く夫に死なれて實家へ歸つてゐると、間もなく父親が重患に罹つて一年近くも惱んだ揚句に亡くなるといふやうな有様で、彼女の再縁の話も容易に起らないでゐるところへ、父親とは多少の知合ひで、病中にもいろ〳〵世話をしてくれた信造に熱烈な思ひをかけられて、ついに妻子のある彼れに身を任せることになつたのであつた。惡いと知りながらさうなつたのだが、二人の關係が濃くなるにつれて、菊代は自分が早晩吉村家の正當の妻にならなければ承知出來なくつて、絶えず信造を惱ましてゐた。女としての全心を燃やして友子を咀つたこともあつた。

信造に愛されてゐた數年の間に浸込んだ贅澤と遊惰の習慣は、彼れの死後にも拔けきらなくつて、彼女は身體に巣くつてゐる病毒に惱まされながら、知らず〳〵自墮落な道を通つて來た。

「目元があの人にそつくりな英吉さんに目をつけられてゐると思ふと氣味が惡い。まだおとなくしてゐるけれど、氣象だつてお父さんに似てゐるのかも知れない」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

菊代は、一度女を見込んだら手に入れなければ承知しないと云はれてゐた信造の事を思出してゐると、此方を見入つてゐた英吉の柔しい目元も薄氣味惡くなつて身震ひされた。

（四）

菊代はまだ病院通ひを續けてゐた。英吉は旅行はそつちのけにして、××博士の講義傍聽を口實にして毎日外出をしてゐたが、友人を訪問するでもなく、盛り場へ出掛けるのでもなく、時々行つてゐた近所の釣堀へも近寄らないで、たゞ近郊か公園の涼しい木蔭に憩うて、自分の空想に耽つて時を過すだけであつた。その樣子のあたりまへでないのに早くから勘付た友子は、いろ〳〵な疑ひを掛けて訊糺したが、當人が何事もないと斷言して、煩く聽かれるのをいやがつて、稍々もすると刄向つて來るので、爲方なしに見過すやうになつてゐた。

しかし、彼等の責め切らない日はさう長くは續かなかつた。……些細な事から英吉の隱し事も綻びた。それは土用に入つて二三日後の丑の日の晩であつた。例年のやうに鰻を取つて食べたあとで、母子はその日の事件を種に話をしてゐたが、話は土用乾の事に及んだ。

「私は吉村家へ來てから、避暑らしい避暑をしたことはないし、兩國の川開きさへ見たことがないのだよ。夏と云へば丑の日に乾度鰻を食べたことゝ、毎年蟲乾をしたことゝが目立つて思出されるくらゐなのさ。今年やうやく思立つた旅行も、どうなることやら分りやしないしね」

母にさう云はれると、英吉は耳が痛かつたので、

「土用干と云へばお母さん、家に狩野探幽とか何とかゞ書いた支那の山水の掛物があつて、子供の時分に見たことがあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る筈なのだが、あれはどうしたのでせう」

「あの掛物は家にはありませんよ。あれは大變な名畫だつてね。お前はあれを覺えておいでなのかい」

「えゝ。他所であれによく似た繪を見たんです。それに養老の瀑か何かを書いた涼しさうな瀑の繪も、以前家にあつたのと同じやうなのを他所で見たんですよ。お父さんが賣つたのですかね」

「他所で見たつて何處で見たの？」

友子がふと氣色ばんで訊ねると、英吉は餘計なおしやべりしたことを後悔した。嘘は云へなかつたので、「いつだつたか、飯田町の谷といふ人の家で見ました」

「谷さんの家だつて」と、友子の顏は嶮しくなつた。「お前はどういふ譯であんな家へお出でだつたい」

「……友人に誘はれて寄つたのです」英吉はさう云ふより外爲方がなかつた。

「お前はお母さんを騙さうとするんだね。誰れに智慧をつけられて、一人の親を騙す氣になつたのです。谷といふ人は菊代の腹違ひの姉の匹偶の知合ひで、以前は貧乏だつたのが、四五年前に株で儲けて家を新築したつてことを、私は人に聞いて知つてゐるのだよ。お前の見たつていふ掛物は私の家にあつた掛物にちがひなのさ。あの掛物はお父さんが菊代の家へ持つて行つたのだから、あの女がお父さんが亡くなつたあとで、姉か誰れかの周旋で賣りつけたに極つてる。あの繪を菊代から取返すことを私はすつかり忘れてゐたのだが、あの女もひどいことする女だ。それをまたお前が菊代の姉にでも連れられて、谷の家へ見に行つたのだね。先日からお前の樣子がどうも變だ〳〵と思つてゐたら、お前は恥も知らないで、あの後もたび〳〵菊代の家へ行つてゐたのだらう。スツカリ白狀しなさい。いゝ加減な言譯したつて、お母さんもゝう誤魔化さりやしないよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

容易ならぬ母親の憤りを、英吉は巧みになだめる術は知らなかつたので、事實のあらましを打明けて、「僕がお母さんに秘密にしといたのは惡かつたのです」と頭を垂れて詫びた。が、友子の怒りは一層烈しくなつた。火照つた頬に涙が流れた。

「菊代の云ふことはみんな嘘です。お父さんもお前の結婚の事を一二度話してゐなすつたことはあつたけれど、佐野といふ人の娘のことなんぞ私は一言も聞いた覺えはないよ。お前をそんなエタイの知れない娘に引合せてお前を誘惑させて、自分だちで甘い汁を吸はうと、谷といふ人までも仲間に入れてあの女が惡企みをしたのに違ひないのさ。そんな見え透いた企み事にいゝ氣になつて乘つたお前の量見が私には分らないよ。第一、結婚といふ大切な話を私に秘密にするつてことがあるものか。お前は私を何と思つてゐるのだい。一人の親を踏付けにしてよく平氣でゐられたものだ。……そんなことされて私は默つちやゐないよ。菊代にもさう云つてやるよ。谷の家へもさう云つてやるよ。さう云ふ縁談は私が不承知だから絕對にお斷りするつて……」

「お母さんがわざ／＼斷らなくたつて、僕に結婚する意志がないんだから、それでいゝぢやありませんか。僕は谷さんの家へは遊びに行つたつもりなんですよ」

「いゝえ、お前はあの女に惡智慧をつけられて、私を馬鹿にするやうになつてるのだ。お父さんが早く死んだためにあの女の當てが外れたから、今度はお前を手懷けて吉村家を潰さうと企んでるのがお前には分らないのかい。今日にでも私が死なうものなら、お前はあの人たちにいゝやうに操られて、吉村家は滅茶々々にされてしまふのに極つてゐる。あの女が生きてるうちは私が一日も安心して寢られなくなつたのが、お前には察しもつかないのかい」

二年前に奇麗に片付いたと思はれてゐた怨靈が、父のかはりに子の上へやつて來て爪を立てゝゐると思ふと、友子は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐても立つてもゐられない樣に興奮した。英吉は母親の狂人じみた怒り方を見るにも聞くにも堪へられなくて、側を離れて自分の部屋へ入つた。亡父と母とがをり〳〵爭つてゐた有樣をまざ〳〵と眼前に見てゐるやうな氣がして淺間しく思はれたが、第一に彼れの氣に掛つたのは、母に知らさないと堅く約束した緣談を自分の口から洩らしたことだつた。母が邪推を廻して菊代に對して無法な言ひがゝりをつけて、自分が菊代に恨まれるのが氣遣はれた。

「あの時分も、お父さんが惡いばかりぢやなかつたのだ、お母さんの方がもつと惡かつたのだ」と、彼れは今になつてはじめて亡父に同情して母親を疎んじたくなつた。父親の死について母親の冷淡だつたことも思出された。

やがて母も子も寢床に就いたが、どちらも眠つかれなかつた。英吉は一度消した電氣をまた點けて、腹匍ひになつて雜誌を讀みだした。

「お母さんは分らずやだ。あの女が僕を籠絡してこの家を橫領しようたつて、僕はお母さんから小使錢を貰ふだけで、家の財産がいくらあるかさへ知らないのぢやないか。あの女は僕に對して好意を持つてゐるのだから、お母さんと一しよになつて憎めつたつてそうは行かない」

こんな風に腹の中で母親の不條理を憤つて菊代のために辯護してゐると、先日うち獨りで萎れてゐた間とはちがつて毒々しい元氣がついた。母親に對抗しても菊代の味方になつてやりたくなつた。

ふと見ると、今まで足音がしなかつたのに、母親が枕許近く來てゐたので、英吉は化物にでも襲はれたやうにビックりした。母親の顏は蒼褪めて棘々しくなつてゐた。

「なぜいつまでも起きてゐるんだね」と云つて、友子は枕許に坐つた。

「どうしても眠れないから」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「餘計な心配して神經をつかつちやいけないよ。お前があんなに望んで、私も折角思立つたのだから、明日にも旅行に出ることにしようぢやないか。旅へ出たら氣が變つていゝだらうよ」

「そりや行つてもいゝです。東京にゐても暑いばかりで面白いことはないのだから」

「だから、早く旅行に出てゐればよかつたのに」

友子は英吉が快く同意してくれたのを、せめてもの手頼りにして、先つきからの胸の苦しみをいくらか鎭めた。さうでもなかつたら、憎みと不安な思ひに苛まれて、一夜のうちに根も力も盡きてしまひさうで、われながら恐ろしくなつたのであつた。

「僕も寢るからお母さんも早くお休みなさいよ」と、英吉は口では柔しく云つて、見てゐるにも悩ましい母親から離れようとして、立つて電氣を消しかけたが、友子は、

「ちよつと消さないでおいでな。お前に一言聞いときたいことがあるから。……一體あの女は何をして口過ぎをしてゐるやうだつたい。貧乏さうにしてゐたの？。二度も三度も行つたのなら、お前にも分るだらうに」と、訊ねた。

この前もだが、また煩く訊ねようとするのかと、英吉はいとはしく思ひながら、「そんなに氣になるなら、お母さんが自分で行つて見たらいゝでせう」と卒氣なく云つて目をつぶつた。

友子はここで英吉の機嫌を害ねたあとの苦しさを豫想して、根掘り葉掘り訊きたいのを我慢して自分の寢室へ戻つた。

あくる朝起きてからも、母は子の神經にさはることを氣遣ひ、子は母の神經にさはることを氣遣つて、互ひに言葉をも愼んでゐたが、相手に對する注意の目は互ひに鋭くなつてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ちや、××に來て貰つて、今夜夜行でゞも立つことにしようかね」と云つて、友子は留守番を頼んでゐる男を自分で呼びに行かうとしたが、はじめ旅行を企てた時のやうな晴々した氣持は最早感じてゐなかつた。

「ちや、僕も××先生へさう云つて來なきやならない」

英吉は旅行について母ほどの興味をさへ寄せてゐなかつた。

(五)

母子一しよに電車の停留所まで來て、正午までにはどちらも家へ歸ることを約して、別れるとゝもに、英吉は縛られてゐた繩を斷たれたやうな氣がした。先日うちのやうな躊躇も遠慮も感じないで、目差すところへ一心になつて進んだ。一夜のうちに彼れと彼れの心の中の菊代とは、一層親しみが増してゐたのであつた。

彼れは暑さにめげずに道を急いで、胸を踊らせて築土の家の格子戸を開けた。が、出て來たのは菊代の母親であつた。

「まだ東京にゐらしつたんですか。……菊代は今日も病院へまゐりましたが、ほどなく歸つてまゐりませう。まあお上んなさいまし」と、母親の氣抜けのしたお座成りの挨拶に、英吉は拍子抜けがした。

「ちや、友人の家へ寄つて、もつと立つてから來ませう」

彼れはそこを出て神樂坂の方へ向つたが、友人の家へなど訪ねて行たくはなかつた。今菊代に會はないで旅行でもしたなら、菊代は外へ行つてしまつて、これつきりの緣になつてしまひさうに危まれた。外へ行つてしまはなくても、嫉妬深い母親に妨げられて、二人の仲が遮られてしまひさうなのが氣遣はれた。で、彼れは、先つきとはちがつてノロ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〳〵と歩いて、濠端を傳つて、市ケ谷見付の病院の方へ、知らず〳〵足を向けた。
「あの女も母も、なぜかういふ病院へ通ふのだらう」と、彼れは病院の門前に立つて看板を見たり、出入りの婦人患者を見たりしてゐた。自動車から埃を浴びせられ、撒水車から水をかけられるのをも感じないで、茫然としてそこらを行きつ戻りつしてゐると、暫くして彼女の姿が、先日よりも窶れて元氣のなさゝうな顔して、そこへ現はれた。
知らず〳〵英吉の方へ近づいて來て、ふと氣づいた菊代は、怖い物を見たやうに、思はず足を留めたが、强いて微笑を洩らして、
「お母さんのお藥を取りにでもいらしつたの？」と、腹の中ではそう思つてゐないことを云つた。
「さうぢやないです」と、英吉は否定したが、次の言葉は素直に口から出なかつた。
「先日の事はお考へなすつて？」
菊代は今日は外へ廻る筈だつたので、簡單に話を濟ませて別れようとしてゐた。
「先日の事と云つて何です？」
「あなたは無責任な方ね。谷さんからどちらかの返事を聞かせてくれつて、たび〳〵問合はせがあるので、私は困つてゐるんですわ」
「あの事ですか」英吉は、あの事なら考へてもゐなかつたのにと云はうとして、相手の顔を見たが、眞晝のキラ〳〵した光で鮮明に浮出されてゐる汗ばんだ女の五體から湧出る臭ひに蒸されて、女の美醜も自分の旅行の是非も忘れはてたやうになつて、「僕はお母さんの信用を無くしちやつたから駄目です。僕はあなたに誘惑されてると極められてるんだけれど、だけど、僕は何と思はれても構はないと決心をしてゐるんです。お母さんはあなたに對しても酷いことを云つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來るかも知れないけど、取合はないやうにして下さい」

「お母さんが怒つてゐらつしやるの？。どうしてでせう」菊代は空々しい口を利いて、「その譯を是非承りたいのですけど、私今日は外せない用事があつて下谷の方へ行かなきやならないから、近日ゆつくり承ることにしますわ」と、わざと事もなげに云つて行きかけた。

「今夜無理に旅行に連れて行かれるんだから、當分あなたに會へないんですよ」英吉は情けなささうに云つた。

二人の立話は、通りがゝりの人に怪しみの目で見られた。菊代は、大通りで炎天に照らされて、こんな話を續けるには及ばない。（英吉は確實に自分の懐中へ入つてゐるのに）と思つて、

「旅行はお延しなさいな。是非お出掛けにならなきやいけないのなら、早く歸つてらつしやればいいわ。名所々々の繪葉書を送つて頂くのを樂みにして待つてゐますわ」と云つて行掛けた。

英吉は疎々しくされるのを、案外にも思ひ悲しくも思ひながら、側へ隨いて菊代の歩く方へ歩いた。

「僕も上野の方へ行つてもいゝんです」と云つて、彼女の乘らうとする電車に乘つた。空いた席へ二人は擦れ／＼に腰を掛けた。菊代は信造によく似てゐる細そりした横顔をチラ／＼見てゐると、前世からの惡因緣に囚へられてゐるやうで、落ち行く先が恐ろしくなつたが、英吉が昨夜ふとしたことから、見合の一件を母親に嗅出された話をするのを聞いてゐると、惡因緣の恐ろしさも忘れて、友子の生命にしてゐる一人子を、廻りくどいことしないで、わが手で完全に奪つて、友子に鼻をあかせてやらうと、何にもまさつた興味に誘はれた。

「この暑さに遠方へ用足しに行くでもないわ。私家へ歸つてよ。あなたもいらしつて下さいね」

「えゝ、行きます」

英吉は勢ひづいて立上つた。電車を乘替えて神樂坂で下りてからの二人の話は、思ひと思ひが互ひの胸に通つてゐる戀人同士の話のやうであつた。

「また旅行はいやだつて云つちや、お母さんに怪まれるから、少しの間でも行つていらつしやるといゝのよ。私は逃げかくれしないから大丈夫ですよ。あなたが私の云ふ通りにして注意してゐらつしやれば、お母さんには知れないやうにして、いつまでも末永く私の家へ遊びにいらつしやれるの。私はかうと決心したら決して迷はないから、あなたは疑はないでゐらつしやい。私、世間で何と云はれようと自分で思込んだことなら火の中へでも水の中へでも飛込む氣でゐるんですからね。だけどこと更慌てなくつてもいゝわ。あなたは私を信じてゐなされば、世間の人や女なぞを怖がらなくつてもいゝんです。女つてものは若くつても歳を取つてゐても、愚かなものなのよ」

菊代がこの時女と云つたのは、友子一人を念頭に置いてゐたのであつた。

「私の母だつて、私が獨身で氣儘にしてゐるのを氣にして、しよつちう愚痴つぽいことを云つていけないの。だけど、私には母などの知らない私だけの世の中があるんですからね。傍の者に知れないいゝ事が私にだつてあるのよ。今日も成べくなら、母に見られないところであなたとお話したいと思つてるの」

「そりや離れもゐない所がいゝさ。あなたのお母さんのゐる所では僕だつて窮屈だから」

「先日の鳥屋なんかいけないわね。あなたは東京で、涼しくつて、二人きりで落着いてお話の出來るところ御存じ?」

「そんな所は僕は知らないな。あなたは知つてるでせう」

「私だつて知らないわ」

菊代は暑さに疲れたので、一先づ足休めに、手近なカツフエーへ寄つて、ソーダ水を飲んで、英吉をいゝ加減にあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しらつてゐたが、ふと下つ腹に疼痛を感じだした。一二年をり〳〵惱まされてゐた發作的な疼みも、病院通ひしだしてから、殆んど忘れたやうになつて、病氣の根も絶えてゐたと喜んでゐたのに、「こんなことぢや駄目、私の一生はやはり駄目」と、身體の疼みよりも、心の疼みを激しく感じた。顏色が蒼くなつて、妖艶な匂ひが失せて、目鼻の人相がまるで變つたやうになつた。英吉も驚いて蒼くなつた。

「靜かに寢てゐれば癒るんです。俥を呼んで下さいな。私直ぐに家へ歸りますから」と、食卓の上に顏を伏せて齒を喰ひしばつてゐる菊代の苦しげな聲を聞くと、英吉は給仕に賴んで急いで俥を呼ばせたが、居ても立つてもゐられなかつた。急變でも起りはしないかと、屢々女の顏を覗いた。やがて、彼女を抱きかゝへるやうにして俥に乘せて、自分は俥のあとから隨いて樂土へ行つた。自分の所爲ぢやないと思ひながら、自分の責任のやうな氣もして、出迎へた母親に對しても氣がひけた。そして、菊代が母親に介抱されて寢床に横たはるのをも、突立つたまゝ見てゐた。

「もう御心配なさらなくつてもいゝの。飛んだ御厄介を掛けて濟みませんでした」と、菊代は薄目を開けて云つたが、苦しいうちにも、このまゝで英吉を歸したくはなかつた。母親が湯を沸してゐる間に、菊代は英吉の手を借りて、茶箪笥の上に置かれてあつた藥を飮んで、「も少しの間そちらで休んでゐて下さいね」と賴んだ。

英吉は素直に差圖を受けて、次の室へ入つてぢつとしてゐたが、菊代の呻き聲がをり〳〵聞えて來るので、心の中が陰鬱になつてしまつた。邪魔にならないやうに成べく呼吸をも遠慮してゐたが、ぢつとしてゐるのに堪へられなくなると、忍び足で病人の樣子を見に行つた。亂れた髮や投出された腕や、うるさゝうに押ひらいた寢卷の間から露れる肌を見ぬ振りして見てゐた。

一時間あまりもさうしてゐた。彼れは母と歸宅を約束した時刻が來たのを見て氣に掛けだしたが、病人を振切つて歸

ることも出來なかつた。

「醫者に診て貰はなくつてもいゝんですか」といつまでも默つてはゐられなかつたので訊ねると、菊代は淋しい笑ひを洩らして手招きして側へ呼んだ。

「もう大變よくなつたのよ」と、甘えたやうな口を利いて、「あなたのお母さんはこんなことはないの？」

「時々蒼い顏をして寢ることはあつても、さう疼むやうぢやないんです」

「それはお仕合せね。こんな苦勞しないで濟むんですかね」

菊代は自分一人の受ける苦痛を咀つて、眉を顰めて口を噤んだが、やがて、枕許に坐つて、同情の思ひを顏に現はしてゐる英吉の手を執つて、「御覽なさい、私は汗でビツショリよ。冷汗なの。氣持の惡いつたらない」

冷汗だか暑さの汗だか、額も首も腕もビツショリ濡れてゐた。英吉は女の汗ばんだ身體を見ることの許可を得たやうな氣で、遠慮なく見てゐた。

「氣持が惡いでせうね」と云ふと、菊代はしみ〲した口調で、

「平生は忘れてゐても、疼みだした時には、何の因果で、私ばかりこんな思ひをするのかと口惜しくなるんです。溫泉へでも行つて氣永に養生したらと思ふこともあるんですけど、私はそんなことの出來るお金は持つてゐないのだから駄目なの。……今日はあなたにいやな思ひをおさせするつもりぢやなかつたのに、あなたも飛んだ災難にお會ひになつたやうなものね。勘忍して下さいね」

「僕は關はないさ。……」

「病氣の起つた時はそりや心細いものよ。今日はあなたがゐて下すつたから、私どんなに力になつたか知れないの」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

傍にゐた母親は、二人の變に睦まじさうな様子を苦々しく思ひながら、「持病はもう收まつたやうですから、安心してお歸んなすつてもよろしいんですよ。今までお引留めして御迷惑だつたでせう」と云つて、自分が病人の枕許に坐つて、露骨に二人の間を遮つた。

「ぢや、お暇しませう」と、英吉は立上つた。」

「今夜夜行でお出掛けになるの？　早く歸つていらつしやい」

菊代は殘惜しさうに見詰めて會釋した。そして、玄關まで見送つて出た母親が、枕許へ戻つて來ると、

「お母さんはやきもち燒きね」と母親が何か云ひさうなのを察して、先きくぐりして云つた。

「何をお云ひだい。お前こそ呆れるぢやないか。英吉さんと御懇意にしてどうしようと云ふのだい。あの人も變ぢやないか、お前に會ひに病院まで出掛けるなんて」母親は澁い顏して忌はしさうに云つた。

「お母さんは知らん顏して見てゐればいゝのよ」

「さうは行かないよ。今度こそお前も地道な考へを持たなきやならない時が來てるんぢやないかね。……それに、人もあらうに、吉村さんの子息さんなぞを、しげ／＼家へ寄付けたりなんぞしちや、外聞が惡いぢやないかね」

「また先日のやうな御意見がはじまるかも知れないけど、今日の私は、お母さんの地道な考へを御尤もとは思はないから、そのつもりでいらつしやい」と、菊代は口輕に云つたが、怖い者の大きな手で引つかまへられて暗い所へ押込められるやうな思ひに惱まされて、「身を堅めて地道な生活をするつてことが、私の仕合はせにもなんにもならないんですよ。こんなに病院へ通つて養生をしたつても、私の身體が元のやうにならないことが、今日はよく分つたの。私の身體はあたりまへの女のやうにならないのよ。私には子供を一人も半分も生める望みはなくなつてるんぢやないの。英吉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さんを見てると、あゝいふ立派な人間を生む力が私にだつてあつたのにと、自分で自分が詰らないものに思はれて爲樣がないの。お母さんはこんな我儘な馬鹿な女の子でも、子供を一人持つてるから私の氣持が分らないのよ」

「子供があるもないも、さづかり物だから爲樣がないぢやないかね。今日にかぎつてそんなことを苦にやむなんて、お前もどうかしてるよ」

「吉村さんは私の望みは何でも聞いてくれる人だつたけれど、英吉さんのやうな立派な子を、私には生せてくれなかつたのね。その上誰れの子をも一生生ませないやうに、私の身體をしちやつたのぢやないの。それから見ると吉村の奥さんは仕合せね。あゝいふ立派な子供があつて、財産があつて、世間の人にはよく云はれて。……私がそれを平氣で見てゐられるとお母さんは思つてるんですか」

「それもこれも私だちの運が惡かつたのさ。私のことを愚痴つぽいと、不斷云つてるくせに、今日はお前の方が餘程愚痴つぽいよ。二年も三年も過去つた昔のことを思出して、癇の虫をあばれさせたつてはじまらないぢやないか。それよりも充分に養生をして、先日の姉さんの話を本氣でよく考へて見るのが、何よりも大事なことなんだよ。それにつけても英吉さんのやうな若い人と一緒に遊び歩くのはよくないだらうよ。今までの事は爲方がないけど、これからは氣をつけなきや損だよ。人間はいつまでも若くてゐられりやしないからね」

「さうでせうかね」菊代は寢返りして大きく息を吐いて、怯みかける心に自分で力をつけて、「ねえお母さん。平生はお母さんの御意見を聞くと、煩いと思つて口では逆らつてゐても、仰有るとはあたりまへで、御尤もだと腹の中では思はないぢやなかつたんですけれどね。今日は丁度その反對なのよ。口先で逆らふ氣にはなれないけど、お腹の中で御尤もとは思はれないのよ。お母さんがいくら一生懸命で私の身を案じてくれたつても、私の病氣の苦しいこと惡るしいこと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、お母さんに分らないと同じやうに、私の氣持も分りやしないの。馬鹿な奴だ不都合な女だと人に云はれたつて、私は私の思ひ通りにする外ないわ。さうでもしなければ、私は何を力に生きてゐられるんでせう。こんなヤクザな身體になつて。……』

「思ひ通りと云つて何をしようと思つてるの?。外の事なら兎に角、英吉さんを家へ寄せることだけは思留つておくれな。私のお願ひだよ。いゝかい」

「えゝ。……それはたつて寄せるなと云はれゝば寄せやしませんさ。……だけど、英吉さんが思ひがけなく私に馴付いて來たのは、六ケ敷云つて見れば、天道樣のお導きのやうにも思はれるのよ。夢にも思はなかつたことなんですからね。私が英吉さんと仲よくしたつても、お母さんはいやな方へ氣をまはさないやうにして下さいね」

菊代は輕い疼みを感じてゐたので、母親と話を續けるのが懶くなつて目を瞑つた。温泉でなくつても、たゞの湯にでも入つて、ベタ〱した汗を流して、サツパリした浴衣に着替えたなら、さぞ氣持が淸々するだらうと思ふにつけても、子息を連れた友子の温泉行が、菊代自身には得られない幸福として羨ましかつた。そして友子が英吉のやうな實子を日常側に置いてゐることが、今の菊代の目には、堪へがたい目ざはりになつた。出來ることなら、棺桶の中へでも地獄の底へでも信造をたづねて行つて、「英吉のやうな子を生ませてくれなかつた上に、未來永劫子を生む力を自分から奪取つた」恨みを云つて、彼れを責め苛まなければ腹が癒へない氣がした。信造がこの世にゐた間に、思切り、我儘を云つたり無理を云つたりして困らせたことはあつたのだが、肝心な恨みを言忘れた自分の迂濶さを、彼女は今になつてやうやく思出してゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（六）

吉村母子は途中二三泊を重ねて和倉温泉に着いた。沿道の景色や、汽車の中や土地々々の風俗人事は、友子の耳目を喜ばせたゞけでなく、縮こまつてゐた彼女の心を開かせた。彼女は知らない人に親しげに話をしかけたり、人の話にも快く調子を合はせた。

温泉宿の海に面した眺めのいゝ部屋に落着くと、「私もかういふ所に五日でも六日でも遊んでゐられるのは有難いと思はなければならないね」と云つて、友子は英吉が旅行を思ひついたことを邪氣なく褒めたり、資産を殘してくれた亡夫に感謝したりした。が、旅へ出てからは眠りづらいと云つて、稍々もすると氣無性にしてゐた英吉は、目的地の和倉に着いた後でも、絶えず沈み勝ちであつた。母に何か云はれても生返事をして、滅多に部屋の中には落着いてゐないで、日盛りにでも外へ出歩いた。持つて來た書物を讀まうともしないし、友人へ繪葉書を出さうともしなかつた。

さうして四五日過ぎた。宿には客が立込んでゐて、開けつ放しの部屋々々の樣子は外からもよく見られた。藝者を連れて來てゐるものもあるし、新婚の男女も來てゐた。二階の廣間では大勢が夜中過ぎまでも騷ぎ通した。友子には温泉宿の賑はひが珍らしくて、隣室の中年の夫婦とも口を利くやうになつて、「それはお氣樂で御座いますね」と云はれると、「何時まで遊んでゐませうとも、何處へまゐりませうとも、苦情を云ふものは御座いませんですから」などと、浮々した口調で云つて、子息の自慢をもして、自分で幸福人に成り了せた氣になつてゐた。そして、東京にゐる時とはちがつて、一人子の一擧一動に絶えず目を離さないでゐた平生の習慣から外れて、温泉場の空氣を自分一人でうか〳〵と樂んでゐるやうな時があつた。湯上りのたびに丹念にお化粧をした。新鮮の魚はうまかつたし、鹽分の濃い温泉は胃にも女

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の病氣にもよく利きさうに思はれた。絶えず吹いて來る汐風に眞夏の暑さも忘れられた。
「いつそ外へは廻らないで、一月ばかりこゝにゐることにしようか」と、英吉に言ふと、英吉は、
「お母さんはなぜこんな所が好きなんです。お母さんも、ノラクラして暮らすのが面白いんですね」と皮肉を云つた。爲樣事なしに旅へ出て來た彼れは、母がこの頃いゝ氣になつてハシヤイでゐるのを見たり、ある男が母の事を色つぽい女だと噂してゐるのをふと耳に入れたりするたびに、苦々しく思つてゐたのであつた。
友子は聞きづらかつた。のび〳〵してゐた身體をも急に引締めて、「私はノラクラなんかしてやしないよ。なぜそんないやな口を利くのだい」
「だつて僕にはさう見えるんですもの。神田の商人だつていふ下等な人なんかを此處へ呼んだりして、詰らない話をして、何が面白いんでせう」
英吉は階下の七番にゐる商人とよりも、隣室の中年の夫婦と母が交際するのを一層嫌つてゐたが、話聲が隣室へ洩れるのを氣遣つて、そちらを名指さなかつたのであつた。しかし、商人を差した非難は友子の痛いところへ觸れた。
「あの方は東京のお話をしようつて、一度お湯の歸りにお寄りになつたゞけぢやないの。……お前も分りもしないくせに人樣の事を下等だの何のと、出過ぎた口を利くものぢやないよ」と、照れかくしに怖い目をしてたしなめた。
「だけど、僕にはさう思はれるんですからね。全體溫泉へ來たら、靜かに養生をして勉强をしようと思つてゐたのに、こんなことぢや駄目だ」
「それを私の所爲だとお云ひなのかい」
「さうぢやないだらうけど……」英吉は望まない旅へ出てゐるのを母親の所爲にしてじり〳〵してゐた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お前は私には構はないで、勉强でも養生でもしたらいゝだらう。御自分が惡いんぢやないかね」

「僕はお母さんに構はなくつてもいゝから、お母さんもこの後僕のすることには構はないやうにして下さい」

英吉の語調は隣室へ聞えるほどに烈しかつた。友子は中年の夫婦の思惑を氣にしながら、「構はないでくれつて?。……さうかい。お前は私から逃げようと思つてお出でなのかい。菊代やあの女の姉にたぶらかされて、素性も知れない女を押付けられたのだらう。東京を立つ日にもお前の樣子が變でならなかつたがさういふ譯だつたのだね」

「お母さんは勝手な難癖を人につけるんだから可笑しいや」

英吉はせゝら笑つたが、母親を侮蔑したやうな笑ひは、何十年わが子として寵愛して來た英吉の笑ひとして輕く見のがすことが、友子には出來なかつた。

「お前はあの女を眞人間と思つてゐるのかい」

聲は潜めてゐたが、菊代や亡父に對してくど〳〵と言立てる母親の惡口は英吉には長年聞飽きてゐることなので、同じ事を繰返す人間の痴呆を感じさゝれるだけであつた。で、感應のない顔して、

「さういふ話は此處まで來て聞かされなくつてもいゝんですね。此處は食物がうまいと云つても、三度々々鯛を食べさゝれちや飽いつちまふ」

「贅澤をお云ひでないよ」

友子はあたりに氣兼ねをして、荒立つた話は止したが、それからは廊下や庭先で同宿の客と世間話をするにも、英吉の思惑が氣になつて、今までのやうに心の帶をゆるめてさま〴〵なお喋りをすることは出來なくなつた。七番の商人に浴室の前で行會つても、打解けた口を利くのに躊躇された。母は子に子は母に監視されてゐるやうな氣持で時を過して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐた。さうしてゐると、あたりの賑はひや浴客の顔は影が薄いやうになつて、亡父亡夫の面影や菊代の今の顔昔の顔が母子の側に影法師の如く隨添つてゐるやうに、お互の目に見られだした。

(七)

やうやく二週間足らずの日を過して、母子は和倉を立つことにした。歸りには東海道を廻つたが、どこへも寄らないで夜の急行で乘通した。そのために溫泉の効能もフイになつたやうに、友子は疲れて、持病の惱みをさへ感じだした。なま中避暑旅行をして來たゝめに、東京の暑さが以前にもまして堪へがたくなつた。で、二三の親類や知人へ土產物を贈つたゞけで、旅行話をする力もなく、二三日は寢床に就いて暮してゐたが、英吉が東京へ歸ると俄かに元氣づいてゐるのが、彼女の目にはよく分つた。それをとやかう云つても、英吉の方で素直に受けてくれないので、彼女は所置に迷つた。

「英吉もお父さんに似て來た」と、わが子の顔までも急に亡夫によく似てきたやうに思ひながら歎息したが、英吉はさう云はれるのが何よりもいやだつた。

「少し早過ぎるけれど、お前に結婚する氣があるのなら、叔父さんとも相談して、相當な相手を搜すことにしてもいゝと、私は思ふよ。母親一人だから間違ひが出來たと云はれちや、私は今まで長い間辛抱して來た甲斐がないからね」

と、友子はわが子が亡夫のやうに放埒になるのを恐れて、讓步したつもりで云つたが、英吉は笑つて相手にしなかつた。

彼女は寢床を離れるやうになると、持病を診て貰ひかたぐ〵、菊代に會へたら、英吉が隱してゐるらしい事の眞相を探らうと思立つて、ある朝病院へ出掛けた。待合室に入つて待つてゐる間、つとめて胸を鎭めて冷靜にしてゐたが、新

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た急患者が入つて來るたびにドギマギした。自分の順番が來て診察を受けたあと、歸り際にも待合室を覗いたが、菊代にはついに會へなかつた。

會はない方がよかつたかも知れない。あんな女を相手にして、人中で耻を掻かされでもしたら大變だつたと思ひながら病院を出たが、そのまゝ自分の家へ歸るのは物足らなかつた。……英吉の事ばかりではない、菊代がどんな家に住んでゐるか、どんな生活をしてゐるか、先日から知りたくつて溜らなかつたので、今日のやうな日にこそ、水手に外からでも彼女の家の様子を見ようとして、思切つて築土の方へ向つた。さうすると、暑さも疲れも忘れられて、彼女の羸弱い身體にもこの頃になく元氣が出た。

かねて英吉に訊いてゐるので家の在所は略々分つてゐたが、酒屋の御用聞に行合つたので、その所を詳く訊ねた上に立入つたことをも訊ねた。

「あしこはお二人きりのやうですよ。主婦に旦那があるつて噂は聞きません」と、御用聞は答へた。

友子は菊代の親子のどちらかに見つかるのを氣遣つて、緊張した氣持で御用聞の指差した方へ進んだが、幾年か前の冬の夜に、半狂亂になつて夫の隠れ家を襲つた時のことが、ふと思出された。

「この家か知ら」と、そつと近づいて表札を見ようとすると、家の中から男の聲が聞えて來た。「あの女が獨身で奇麗に暮してゐる筈はない」と、かねての推察は當つてゐると獨り極めにして、相手の男はどんな男だか、一目でも見ようとして、泥溝板の上に立つて簾越しに覗くと、英吉の姿が、しかもだらしのない彼れのふるまひが、幻のやうに友子の目に映つた。亡夫の狂態を見た時にも増した戰慄を覺えた友子は、思はずよろめいて格子に打突かつたが　あまりの恐ろしさに夢中になつて駈出した。

「どなた？」菊代は聲を掛けて、「誰れか來たようね」と呟いて、玄關へ出た。腑に落ちないので格子戸を開けて外を見たが、眩しい光の中をスタ〳〵と歩いてゐる怪しい物の正體を彼女は見あやまらなかつた。そして、見えなくなつてからも暫く見送つてゐた。

「あなた吃驚しちやいけないことよ」と、元の座へ戻つてから憐れむやうに、「そこへお母さんが來てゐたのよ」と云つた。

「あなたのお母さんが歸つて來たんですか」英吉は顏を紅らめて云つた。

「あなたのお母さん」

さう云つた菊代の聲を聞くと同時に、英吉は跳起きて部屋の中をウロ〳〵した。菊代は若い心を亂してゐる英吉の擧動を注視しながら、友子の心の苦しみを想像してゐたが、二年以來の自分の鬱憤を小氣味よく晴らしたやうな快さは感ぜられなかつた。

「心配したつて爲樣がないぢやないの。……まあ此處へお坐はんなさい」と叱るやうに云つて、「あなたこれからお家へお歸りになつて？」

「僕はもう家へは歸れませんよ」

「なぜです？。……そんなに氣の小さいことぢや駄目よ。あなたは歳はお若いし身體は御丈夫だし、これから面白いことはいくらもあるんですよ。……私はかうしてあなたと御懇意にしてると、十年も前のやうな氣持になつて、あなたのやうな方が懐しくなつて愛想を盡かされても附纏つてゐたいやうな氣になるんですけど、本當は駄目なの。私は女の廢れ物なんですからね。あなたからお母さんにさう仰有つて下さい。菊代はお母さんの大切な者を二人も三人も横取りし

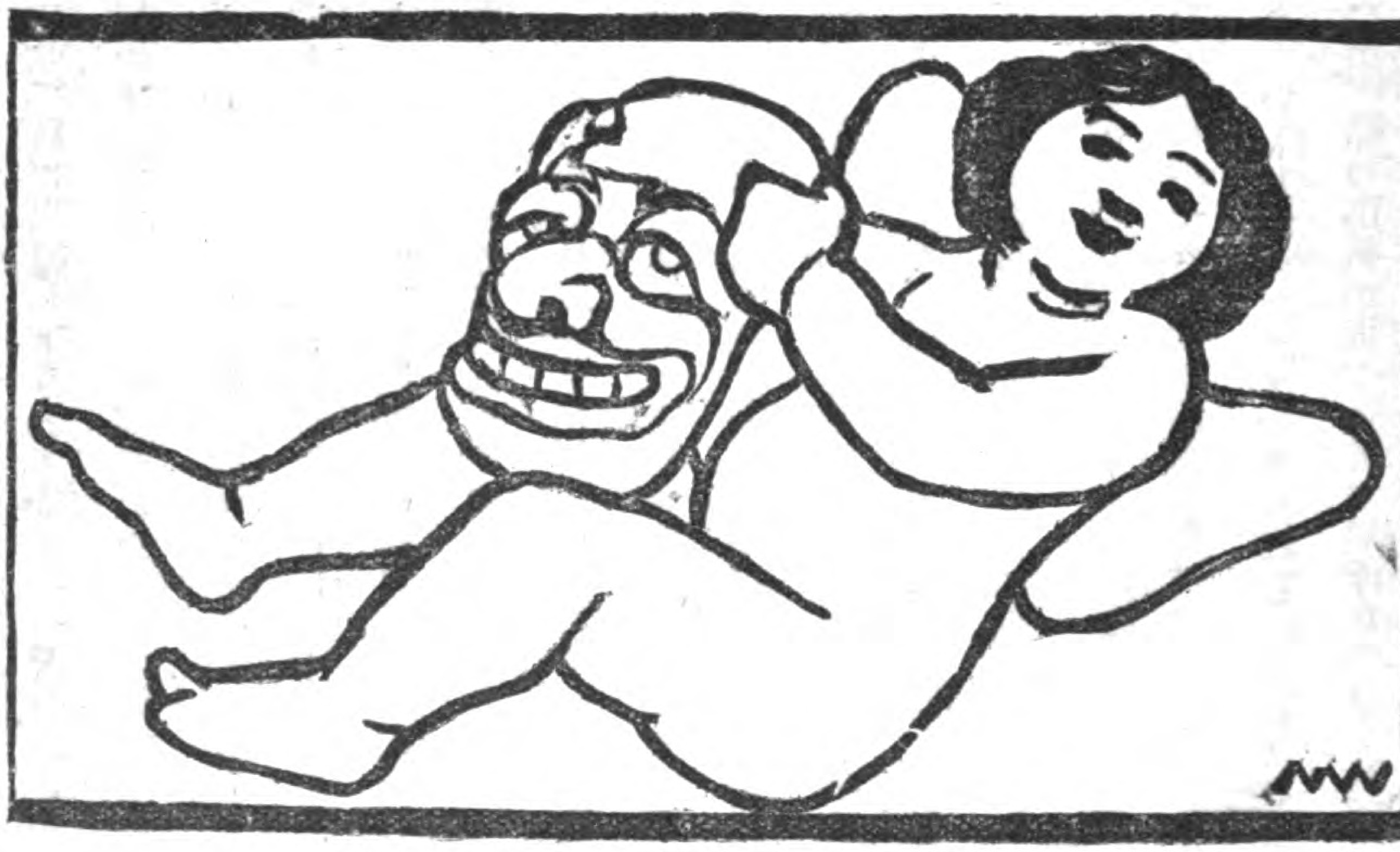
て見たつて、どうしたつてこの先幸福(しあはせ)にやなれないんだから、そんなに憎まないやうにして下さいつて」

「……だつて、お母さんは、僕があなたの家へ寄つたといふだけで、狂人(きちがひ)みたいになつて怒つてたのだから、今日(けふ)は僕を許しやしませんよ」

「ぢや叔父さんにでも頼んでお詫びをしてお貰ひなさいな。これから決してあんな女の所へは行かないつて」

菊代が事もなげに云ふのが、母親の憤りにもまして英吉には悲しくつて、兩眼に涙を一杯溜めて彼女を見詰めた。見詰められてゐる菊代は、ふと身震ひした。かつて感じなかつた悔悟の念が彼女の胸を衝いた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



僞軍國美談

菊池寛

今年の四月、私が郷里へ歸りましたとき、私の從兄――生來の怠け者で、何一つ生業はないのですが、たゞ少し繪心があるので、大阪へ出てペンキの看板繪などを描いてゐたことがあり、大阪の心齋橋筋の何處とかにある「胃活」の看板は、あの子が描いたのだから、大阪へ行つたら見てくれとか云つて、從兄の母が、私に自慢さうに話したことがありました。――その從兄が、私に話した話なのです。今年四十一か二で、日露戰爭には、現役か豫備かで出てゐるのです。從兄の自慢話と云へば、大抵日露戰爭の話丈ですが、そのくせあまり手柄はしなかつたと見え、從軍章と勳八等白色何とか云ふ勳章より外持つてゐません。以下從兄の話です。

× × × ×

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「先頃、「一太郎やあい」と云ふ話が、新聞に出てゐたでせう。讃岐の多度津か、何處かで、御用船が出征軍人を一杯乘せて將に出帆しようとすると、一人のお婆さんが馳けつけて來たが、船が動きかけてゐるので、何うともすることが出來ず、仕方なく「一太郎やあい！一太郎が居るなら、鐵砲を上げろ」と怒鳴つたので、一太郎が鐵砲を上げると、お婆さんが「家の事は心配しないで、お國のために盡して來い」と叫んだと云ふ話ですが、私はあの話を讀んで、つひ自分でも、それと大變よく似た事件に逢つたのを思ひ出したのです。私は、若い時は大阪に居たものですから、兵隊の檢査も大阪で濟ませて第四師團の第×聯隊に入營したものです。だから、愈々動員令が下つて出征となつたときには、神戸から御用船に乘つたものです。

神戸の棧橋は聯隊區が近いものですから、家族の見送りで、大變な騷ぎでした。最初軍隊では、棧橋へは混雜を怖れて絕對に見送り人を入れない豫定だつたのですが、いざとなると見送り人の必死な熱情に動かされて、到頭棧橋は人で埋まつてしまひました。親しい女房子供親兄弟に見送られると、あんな時却つて未練が起るもので、見送り人のある兵士達は、みんなわく〳〵氣が狂つたように、興奮してゐました。

風來坊で誰も見送り人のない私は、割合呑氣で鼎の煮えくり返るやうな混雜を傍觀してゐました。船が將に動かうとする少し前からは、家族達は盛に聲をかけてゐました。

「兼吉よ！身體に氣を付けろ」とか「源二郎よ！家のことは氣にかけるな！」とか、紋切型の言葉を云つてゐるのですが、之れが一々悲壯な感情で裏付けられてゐるので、聽いてゐる者の肺腑を貫かずにはゐないのです。傍觀者である私も、いゝ加減センチメンタルになつてしまいました。私も見送り人のある兵士達と同じやうに、欄干に寄つてゐましたが、船の出帆が近づいて、周圍が熱狂すればするほど、自分一人除け者にされてゐる淋びしさが、胸にひし〳〵と徹

へて來るのです。やつぱり一人でも二人でも見送り人があつて、「やあい！」とか、「おい！」とか、呼び交して居る方が、どれほど氣が紛ぎれるか分らないと思ひ出したのです。私は、ペンキ屋の主人が、神戸まで送つてやらうと云ふ申出しを、變な空威張から、拒絶したことを、後悔しました。私は、右と左の熱狂する兵士達に、身體を、揉まれながらそれでもやつぱり人並に、欄干に寄り添つて立つてゐたのです。その時に、私はふと一人の老婆を見付けたのです。もう、六十を越してゐると見え、群衆の波の中から、時々背延びするのが、彼女の精一杯の努力らしいのです。そして、背延びする度に、何か一生懸命に怒鳴つてゐるらしいのですが、それが周圍の騷擾に消されて、ちつとも船の方へは聞えて來ないのです。私は、他の兵士に比ぶれば、冷靜であつた故もあり、また老婆の顏の小さいところなどが、私が郷里に殘してゐたその時六十二三になつた老母に、そつくりなものですから、その老婆が人事ならず、何だか痛々しくて、氣になつて來たのです。その上、老婆の顏の表情や非常に焦せつてうろ〳〵してゐる容子などを見ると、どうも、その見送りに來た子なり――或は孫かも知れません――を、まだ見付けてゐないらしいのです。私は、老婆に對する同情から、何うかしてその當人を、見付けさせてやりたいと思つたものですから、革くさい兵士の集群の中を、搔き別けながら、老婆に一番近い舷側へ行つたのです。其處からは、老婆は目の下にゐました。が舷側は、可なり高かつたから、さしわたし六七間は、あつたでせう。其處で、私は老婆が何と叫んでゐるのか、一生懸命に耳を欹てゝゐたのです。

周圍は、もう湧き返るやうな騷音でした。彼處や此處で、唱へる萬歳！々々！の叫びが、ドヽと波のやうに、寄せて來たかと、思ふと忽ちそれが、棧橋一杯にうづまく大音聲となつて、沸騰するのでした。さうした、騷音の中に、老婆の叫び聲を聽くのは、並大抵の事ぢやなかつたのです。が、やつと、この老婆が叫んでゐることが分つたのです。

「山崎正太郎は、居らんかのう。山崎正太郎は居らんかのう。」

と、一生懸命に叫んでゐるのです。私は、中隊の古兵でしたから、中隊の人名は、大抵知つてゐたのです、山崎新吉と云ふ初年兵はゐましたが、正太郎と云ふ男は、ゐないのです。私は、畢竟それは外の中隊の者に違ないと思つてたのです。私の中隊は、一番船尾に乘つてゐたものですから、他の中隊ならば、お婆さんは茲でいくら叫んでゐても、仕樣がないのです。私は、後甲板の他中隊の所へ行つて、山崎正太郎をどれ丈探して來てやりたかつたか分らないのです。が「見送りの人に應酬するのはいゝが、中隊の位置を離れてはいけない」と云ふのは、中隊長からの嚴命だつたのです。私は仕方なく一生懸命な聲を振りしぼつて叫んだのです。

「お婆さん。山崎正太郎は、この中隊には居らんぞ。もつと、彼方へ行つて探すと、えゝぞ!」

たとひ、お婆さんが彼方へ行つて、探す氣になつても、この老體で、この群衆で、身動きすることさへも、出來まいと思ひながら、私としては、さう叫ぶより外に仕樣がなかつたのです。

處が、悲しいことに、老婆には、私の叫んだことが聞えないらしいのです。やつぱり、前と同じやうに、「山崎正太郎は居らんか。おつ母が、來て居るぞ! 正太郎は、居らんかのう。」

今は、もう悲鳴に近い聲を擧げて、叫んでゐるのです。

私は、一しきり湧き起つた萬歳の聲が、少し靜まつたのを見計つて、もう一度一生懸命に叫びました。

「お婆さん! 山崎正太郎は、茲に居らんさかえ、彼方へ行け。彼方へ行つて、探すとえゝぞ!」

が私の懸命の叫び聲も、周圍の熱狂してゐるもろ〳〵の叫び聲に消されるのと、もう一つはお婆さんが、耳が遠いと見え、お婆さんの耳には少しも屆かないらしいのです。

やつぱり「正太郎は居らんかのう。正太郎は居らんかのう。」と、叫びつゞけてゐるのです。私は、中隊長に事情を具

申して、船首に居る中隊へ、山崎正太郎を探しに行かうと、決心して、小隊長の所在を、探し始めた時でした。烈しい雜音を、押し靜めるやうにからん〳〵と云ふ出帆を知らせる鐘が、鳴りひゞいたのです。それを聞くと、私は、山崎正太郎を探すことを斷念せずにはゐられませんでした。私は、一寸絶望に似た心持をいだいて、私の絶望などよりは、百倍も千倍も大きい老婆の絶望をぢつと、眺めてゐる外はなかつたのです。

老眼にも、船の動き出さうとする氣勢が分つたと見え、老婆の狼狽は、傍の見る目もあはれでした。かすれた聲を振りしぼつて、彼女は最後の悲鳴を擧げたのです。

「正太郎は、居らんかのう！おつ母が來てゐるぞ。わしはな、目が不自由で、お前の顏が、見えんさかいなあ！もし居たらな、鐵砲を差し上げて呉れな！おつ母は、一目でもお前の姿を見たいからなあ！！」

それは、もう叫び聲と云ふよりも、泣き聲です。熱狂してゐる見送り人や、兵士達は誰一人、この老婆の悲鳴に耳を借すものはないのです。たゞその聲は私一人の腹の底まで、劈た丈です。が、慰めようもなく、もう今では、盡力のしやうもない私は、默つてその悲鳴を聽いてゐる外はなかつたのです。

その裡に、ザツ〳〵とゆるやかに廻轉する、推進機の音が聞えたかと思ふと、七千何百噸とか云ふ巨大な船體は、一寸二寸づゝ、靜かに棧橋を離れ始めたのです。

最後の萬歳が、嵐のやうに起りました。が、愛子を發見しない裡に、船に出て行かれようとする老婆の苦悶は、今頂點に達したのです。「正太郎よう！正太郎よう！其處に居るのなら、鐵砲をさし上げてくれ！」

老婆は狂ふやうに叫びつゞけてゐるのです。私の耳には大きい萬歳の聲は、聞えずに、老婆のかすれた叫び聲丈が、斫るやうに腹へ徹へて來るのです。その中に、船と棧橋とは見る〳〵三間ばかり離れてしまひました。老婆の最後の苦

間は正視するのに堪えませんでした。私は堪まらなくなつて老婆から、目をそらしたのです。その時に、ふと私の目が、甲板の船室の板壁に、ズラリと立て並べられて居る多くの銃に行つたのです。悪魔に憑かれたのか、神に憑かれたのか、私は身を翻すといきなり兵士達の中を突進して、誰の銃だか分らない一挺の銃を取つて夢中で元の場所へ帰ると、それを思切り高くさし上げたのです。

老婆の顔が、サツと輝いたやうに思ひました。彼女は、痩せた両手を差し上げて、氣狂のやうに振り廻しました。何か、一生懸命に叫んでゐるやうでした。が、船が、もうずつーと離れてしまつたため、老母の叫び聲は「日本帝國萬歳」の聲に呑まれてちつとも聞えませんでした。

× × × × × ×

私の話と云ふのは、これ丈なのです。私は、何だかいゝことをしたやうに思ひ、また大變な嘘を吐いたやうに氣がとがめたものですから、その事は誰にも、云はずに默つてゐたのですが、つひこの頃新聞で、同じやうな話を讀んだものですから、もう殆んど忘れかけてゐた事を思ひ出したのです。もつとも、彼方は、教科書にも載るやうな立派な軍國美談で、私の話は教訓どころか嘘を吐いた話で、あまり大聲では話せませんのです。

尤もその後で、本人の山崎正太郎と云ふ男を探して見ますと、私の思つた通り、同じ大隊の他の中隊にゐたのです。私は、本人に會つて私の止むを得なかつた事情を話し、その人のお母さんをあざむいた罪を謝さうと思つてゐましたが、短い航海の船中で、何だかゴタ〳〵してゐて、その機會がなく、戰地へ着いてからと思つてゐると、本人は戰地へ着くと間もなく、遼陽近くの戰場で、戰死してしまつたのです。

本人が死んだために、私のやつた嘘が永久に分らなくなつた故か、老人を嘘にでも欣ばすことが、出來たと云ふ者が

何處かにあるせいでせうか。今では、その事件を考へ出しても、決して惡い氣持はしないのです。惡い氣持がしないばかりではなく、私の一生涯の中では一番手柄であつたような氣さへ時々するのです。

秀吉と曾呂利

武者小路實篤

秀吉
淀君
曾呂利、其他

（廣間、築庭見へる）

秀吉。一萬五千人と三萬六千人よせるといく人になるかね。

淀君。五萬一千人です。

秀吉。それから七千人ひくといく人になる。

淀君。四萬四千人。

秀吉。四萬四千人か一日六合飯を食ふといくら米がいるかね。

淀君。二十六萬四千合ですから二百六十四石になります。

秀吉。まちがいないね。

淀君。まちがいありません。しかしそんなことは誰かに任せればいゝことでしよ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秀吉。一寸覺えておく方がいゝことがあるのだ。
淀君。もうそれでおしまいですか。
秀吉。いやまだある。三十八に四十五よせてそれに二十八よせたらいくつになる。
淀君。百十一になります。
秀吉。うん感心にまちがはないた。
淀君。あたりまへですわ。
秀吉。おれにわからないと思つて出鱈目云つてゐるのかと思つたのだ。それなら三に一つをたしたらいくつになる。
淀君。五つです。
秀吉。三に一つだよ。
淀君。えゝ、五つ。
秀吉。そんなら一に一たしたら。
淀君。三つ。
秀吉。馬鹿！
淀君。あなたにそのまちがいがおはかりになるの。
秀吉。生意氣云ふと打つぞ。(打つ眞似をする)
淀君。打てば逃げますわ。(立ち上り逃げる)
秀吉。さつきから出鱈目云つてゐたのだらう。

淀君。えゝ、出鱈目よ。
秀吉。その手は喰はないぞ。お前は近頃生意氣になつたな。
淀君。あなたは近頃、又浮氣ものになりましたね
秀吉。嘘つけ。
淀君。私が知らないと思つてゐるの。
秀吉。俺だつて知つてゐるぞ。
淀君。あなたはやきもちやきね。
秀吉。その點だけはお前には叶はないよ。
淀君。算術はどうですかね。字をかくこと、和歌をよむことはどうですかね。
秀吉。それから馬鹿な點でも俺は叶はなかつたね。
淀君。どうですかね。
秀吉。お前はもつと俺をこわがらなければいけないぞ。
淀君。處が怖くないのですから仕方がありませんわ。怖くなる薬でも、あなたのお氣に入りの曾呂利にさう云つて捜さしたらいゝでしよ。
秀吉。あいつ自身も少しはのんでもいゝからな。
淀君。だけど皆はなぜあんなにあなたが怖いのでせう。
秀吉。皆は利口だからさ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淀君。それでは私達は馬鹿だからお氣に入るのね。

秀吉。さうさ。俺だつてたまには馬鹿になりたいからな。

淀君。たまですつて。聞いてあきれますわ。

秀吉。なまいき云ふと、手打ちにするぞ。

淀君。よろしいわ。私之でうけて見ますわ。

秀吉、それならうけて見ろ。（刀をぬく）

淀君。（刀かけの刀をぬき竹光なのにおどろく）之はどうしたの。

秀吉。あはゝゝ。それは曾呂利の奴をだましてやらうと思つてつくらしたのだ。曾呂利の奴がその刀をしきりとほしがつてゐたから中味をすりかへておいてやつたのだ。今日曾呂利に褒美にやらうと思つてゐるのだ。

淀君。それは面白いわ。それで何の褒美にやるの。

秀吉。俺の行脚するのをとめた褒美だ。

淀君。それなら行脚しなくなつたのは曾呂利にとめられたからで、私がやきもちをやめて上げたからではないの。

秀吉。それだつてお前がやきもちをやくのをやめたから行脚をやめたとは皆には云へないからな。曾呂利をつかつて、俺の行脚をやめたことを皆に知らせてやらうと思つてゐるのだ。

淀君。どう云ふ風に曾呂利をつかうの。

秀吉。それは俺も知らない。今に曾呂利がやつて來たら相談しやうと思つてゐるのだ。

淀君。皆さぞ安心するだらう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秀吉。三成の他はな。
淀君。三成だつて隨分心配してゐましたわ、
秀吉。昨日の晩まではな。
淀君。へんなことをおつしやるのね
秀吉。お前は昨晩、なにをしてゐたか俺はのこらず人に見さしておいたぞ。(間)まあおどろかなくつていゝよ。俺は自分の女の秘密を他の奴に知らせてよろこぶ程の馬鹿ぢやないからな。
淀君。私、昨晩はおとなしく一人でゐましたから、調べていたゞいた方がなほよかつた位いですわ。
秀吉。お前は俺を誰だと思つてゐるのだね。
淀君。あなたは本當におかしいのね
秀吉。もつとこびろ、こびろ。
淀君。誰か來ましたわ。
秀吉。曾呂利の奴だ。あてられると困るので足音をたてゝやがる。しやくにさわるからあてゝやれ。
(曾呂利襖をあける)
秀吉。一寸まつてくれ。いやなに、かまわない。今日は又いやに靜かに足音をさせずに來たな。泥棒猫のやうな奴だな。
曾呂利。そろり、そろりと參りました。いゝ處を拜見いたしたいと思ひましてな。ありがたう御座いました。
秀吉。どうだ皆は俺が行脚をすると思つて心配してゐるかね。
曾呂利。えゝ、非常な心配をしてゐます。今日あすにあなたがいよ〳〵御出かけになると云つて心配して、皆、眞青な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

顔をしてゐます。福島、加藤、なぞと云ふわからずやどもはもうすつかりしよげて私が今一寸逢つた時も、どうにかしておとめしてくれと皆、私をおがむやうにしてゐました。

秀吉。それでお前は何と云つた。

曾呂利。私が太閤さんでも、こんなわからずやと、やきもちやき、一寸之は失禮、女の方とちがつて男の方はどうもやきもちやきで困る。いくら私が太閤さんでも、世の中がいやになるより仕方がない。私は之から一緒におともさして戴くわけになつてゐるので、こんなうれしいことはないと思つてゐると申してやりました。

秀吉。そうしたらどうした。

曾呂利。皆怒り出しました。ですが私にはあなたがついてゐるから、平氣です。之から太閤さんによばれてゐるのだから、なぐりたい人は今なぐつて下さい。太閤さんから御褒美があるでせうからと、申しましたら皆、ゲンコのやり場がなくつて困つてゐました。皆さん、そんなに太閤さんが大事なら、太閤さんの處へ行つて、私達はもうお互に仲よくしますから、そして御心配はかけませんから、どうか御氣樂にゐて下さいとさうおそろいでお出かけになつたらいゝでせう。と云つてやりましたら、之から皆で御願ひに出かける處だが、お前もたのむから骨折つてくれと云ふ御話でした。それで私は御一緒に旅行してあるくのをたのしみにしてゐるのだから、中々たゞでは御相談にのれないと云ひましたら、皆さんがいろ〳〵のものを見せて、之をやるから仲間になつてくれとおつしやるので、それまでおつしやるなら、皆さんでやつて見て、駄目でしたら、私がやつて見ることにしませうと云つておきました。ですから皆が云つてもお聞きになつては困ります。私が出るまで。

秀吉。よし、よし。だが、お前はうまいことを云はたくつては駄目だよ。いくらお前の云ふことがきゝたくつても、あ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んまり馬鹿なことを云はれると、俺が感心するわけにはゆかないからな。

曾呂利。その點は御安心下さい。あつと云はしてお目にかけます。しかしうまくいつたら、その刀を頂戴したいもので。

秀吉。この刀か、之は中々やれないぞ。之をほしいと云つてゐる奴はいくらでもゐるのだから貴様にやると皆が、うらむからな。

曾呂利。いや大丈夫です。私がうまいことをやつてお目にかけます。

秀吉。お前はこの刀をとることを誰かにたのまれてゐるのだらう。そしてもらつたらすぐ賣らうと思つてゐるのだらう。

曾呂利。まあそんな所です。

秀吉。誰と約束したのだ。

曾呂利。まだ約束はしません。一番たかく買ふ人に賣るつもりです。

秀吉。誰れが一番高く買ふと思ふ。

曾呂利。まあ、利口でない人が高く買ふでせう。

秀吉。俺に買はさうと思つてゐるのだらう。

曾呂利。あなたはけちですからね。

秀吉。利家か。それともあのお前のすきな家康か。

曾呂利。あなたのお好きな家康になら、たゞでも上げてよろしいが、あの男はあなたよりなほけちでせうな。

秀吉。いくらけちでもたゞならもらうだらう。

曾呂利。一たいあなたは下さるのですか、下さらないのですか、どうせ下さらないものを、かれこれ云つても、云ふだ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

け損んですからな。

秀吉。お前がうまいことを云つて、即座に俺が思ひとゞまることが出來たら、やつてもいゝ。

曾呂利。よろしい。それでは載けなかつたら、あなたを行脚させるやうにしむけますよ。家康なんかはあなたが行脚するのを内々のぞんでゐますよ。あいつの顏を見ると胸がわるくなりますね。あの馬鹿なくせに利口面して、お人よしの顏をしてすましてゐるのを見ると、生きてゐるのが、なさけなくなりますよ。あれが世間に君子人として通用できる顏なのですからな。世間に丁度いゝ顏のあれが代表だと思ふと、人間に愛想がつかしたくなります。

秀吉。それだつて、利用の道もあるよ。おまいでもつかい道があるからな。世界は廣大なものだよ。

曾呂利。それであなたが一番利口で通用するのですから世界は廣大なものですね。

秀吉。その上、淀が一番美人で通用し、お前が一番頓智のある人間で通用するからと云ひたいのだらう。だが日本だけが世界ぢやないからな。支那には少しは話せる奴も居るだらうよ。

曾呂利。何しろ遁世して行脚をしたいと云はないと、自分の意志が通らない男子が一番利口ものなのですからね。

秀吉。冗談もいゝ加減にしろ。それにおべつかつかつかつて生てゐるものもある。

曾呂利。玩具にするには張合がありますからね。

秀吉。どつちが玩具なのだ。

曾呂利。兩方でせう。ね、淀君様。

淀君。私は知らないよ。あまり失禮な事を云ふと。

秀吉。怒るなよ。曾呂利は人間だと思ふと腹がたつ。

淀君。それならなんだと思へばいゝのです。
秀吉。人間の言葉をしやべるチンだと思へばいゝ。
淀君。まあ。私もそれなら之からさう思ひませう。さう云へばチンに何處か似てゐますわね。
曾呂利。猿に似てゐるのと、チンに似てゐるのとどつちが名譽でせうね。
秀吉。曾呂利、皆が待つてゐるだらう。
曾呂利。あんな連中は待しておく方がよう御座います。
秀吉。それなら俺はいよ〳〵明日たつことにしたと皆につたへてくれ。
曾呂利。畏まりました。
秀吉。お前はうまくやつてくれないといけないぞ。俺はもう、行脚する氣はもうまるでなくなつたのだからな。
曾呂利。前からおありにはならなかつたのでせう。
秀吉。いや、一寸行かうかとも思つてゐた。
曾呂利。まあ、お二人の御機嫌がなほつたのはありがたいことです。それなら皆をつれて來ますからね。
秀吉。三成もよべ。
曾呂利。畏まりました。（退場）
淀君。曾呂利ていやな奴ですわね。
秀吉。あいつは馬鹿ぢやない。
淀君。あんな圖々しい奴を見たことはありませんわ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秀吉。あれで人はいゝのだ。
淀君。さう云へば何處かあなたに似てゐますわね。
秀吉。人のいゝ所が似てゐるのだらう。
淀君。ずるい處が似てゐるのですわ。
秀吉。俺も日本中で、一寸なつて見たいと云ふ男は曾呂利位なものだ。
淀君。まあいやですわ。
秀吉。だが日本一の俺を玩具にするのはわるくないからな。
淀君。あなたは曾呂利の玩具になつてゐるの。
秀吉。俺がお前の玩具になつてゐるやうなものだ。お前は俺の玩具で、俺はお前の玩具だ。
淀君。私はあなたの妻ではないのね。
秀吉。名前なんかなんだつていゝが、不貞なお前を妻だとは思つてゐないよ。
淀君。不貞ですつて。
秀吉。お前が知らなければ、物知りの三成に聞いたら知つてゐるだらう。だが俺以外の子供を生んだらお前の首はとんでゆくぞ。
淀君。私以外に子供をつくつたら、あなたの首もとんでゆきますよ。
秀吉。そしたら又行脚をするさ。
淀君。もうそのおどしにはのりませんよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秀吉。曾呂利の奴、餘計なことを云ひやがつた。

淀君。曾呂利は、あの刀をほしいと云ひましたね。あなたの方が少しお人わるね。

秀吉。處があいつはもう感づいてゐる。

淀君。どうして。

秀吉。お前がうれしさうな顏してゐたから。

淀君。大丈夫よ。

秀吉。まあ、見てゐるがいゝ。誰が一番馬鹿だか。俺はちやんと知つてゐる。

淀君。誰？

秀吉。今に見てゐろ。大勢利口でない、可愛いゝ奴がやつてくるから。

淀君。あんまり可愛いくもないわ。

秀吉。お前は福島が、大すきだつたね。

淀君。あんな男は大嫌ひ。

秀吉。それなら加藤清正か。

淀君。あの男も大嫌ひ。

秀吉。向ふでも好いてはゐまいよ。

淀君。あんな男達に好かれてはたまりませんわ。だが家康と來たら一番嫌ひ。

秀吉。さう嫌ふなよ。あの男は、あれで馬鹿ではない。俺の力をよく知つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淀君。あなたはお人よしだから、家康におだてられてよろこんでゐるのですわ。

秀吉。俺は家康はどんな男かちやんと知つてゐるよ。あいつは大名育ちで、見かけはおつとりしてゐるが、俺から面白い處をなくしてひからびさしたやうな、實利一點ばりの面白くない男だよ。感情なんか爪のあか程も持つてゐないが、世間ではあんな方が通用するのだ。世間に通用するためだけに生てゐる男だから、がつ〳〵してゐるが、便利な處がある。

淀君。大勢やつて來ましたわ。

秀吉。面白いぞ。曾呂利の奴、なんて云ひやがるかな。俺の豫期してゐるより利口なことの云へる奴はあいつ一人だからな。

淀君。どうせ私は、馬鹿ですわね。

秀吉。やきもちをやかなければ、お前は一番利口ものだ。

淀君。そして浮は氣さへなさらなければ、あなたは一番利口ものですわね。

秀吉。うるさい連中がやつて來た。お前は默つてゐろよ。

淀君。どうせ私は碌なことは云ひませんからね。

秀吉。さうだよ。お前の言葉の無意味で、毒のないことを知つてゐる奴は、さう多くはないからな。

淀君。馬鹿が多くつて困りますね。

秀吉。そしてお前もその變り種の一人だから困るよ

淀君。何とでもおつしやいまし。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（小姓登場）

小姓。加藤清正、福島正則、石田三成、その他三四人の方がお目にかゝりたいと申してゐます。
秀吉。曾呂利も入つてゐるか。
小姓。えゝ、おります。
秀吉。通すのはいゝが、俺に忠告することだけはやめてほしいとさう云つてくれ、俺の決心はかへないからつて。
小姓。はい。
淀君。嘘つきね。あなたは。
秀吉。嘘から誠も出るものだからな。
淀君。正直な人は可哀さうですわ。
秀吉。お前も可哀さうと云ふ言葉を知つてゐるのか。
淀君。あなたが知つてゐる位は私も知つてゐますわ。

（六七人登場。平伏する）

秀吉。おそろいに、おいとまごひに來たのか、御苦勞、御苦勞。俺の留守の間のことはよろしくたのむぞ。
清正。畏れ入りますが、今度のことは思ひとゞまつて戴くわけにはゆきませんか。
秀吉。お前たちに云はれて思ひとゞまる位いなら、俺だつてもうとつくに思ひとゞまつてゐる。俺の方がお前たちよりは考へてゐるから、そのことなら聞きたくない。他に話がなければ今日は少し明日の用意があるから、歸つてもらはう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三成。どうぞそんなことをおつしやらないで、私達にわるい處があれば、いくらでもなほすやうにいたしますから。
秀吉。お前達は出來るだけのことをしてゐてくれるのだから、俺はこの上、お前達に何にも望むことはない。
清正。今、あなたに、遁世されては天下はどうなるか、わかりません。
秀吉。そんなことは俺の方が考へてゐるから安心するがいゝ。
正則。どうしても思ひとゞまつて戴くわけにゆかないのですか。
秀吉。ゆかないね。
正則。こんなに申しましても。（わつと泣き出す）
（皆さけずに泣く）
秀吉。三成、お前は目に唾をつけるのをもつとうまくやらないといけないぞ。曾呂利お前はなにしに其處にぼんやりすわつてゐるのだ。早く歸つて出かける用意をしろ。
曾呂利。御許し下さい。私は出立の用意をしやうと思ひまして、いそいで家へ行かうと思ひましたら、急に弟から聞いた話を思ひ出したので、急に旅だつのがいやになつて、おことわりに上つたのです。
秀吉。臆病ものめ。それなら三成お前と一緒に行かう。
三成。どうぞ思ひとゞまつて戴きたう御さいます。今、あなたがおいでにならなくつては又天下は亂れてしまいます。私達はどうしていゝかわからなくなります。
秀吉。それなら清正、お前と一緒に行かう。
清正。私もそれはお斷りいたします。どんなことがありましても、お思ひとゞまつて戴かないと困ります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秀吉。わからない奴許りだな。それなら且元貴様は一緒に來てくれるだらう。
且元。私達は自殺してゞもお思ひとゞまつて戴く決心で參りました。
秀吉。本當か。
清正。はい。もしどうあつても、この天下をお見せてになつて、行脚をなさらうとお思ひになるなら、私達一同は、死をもつておとめいたさうと思つてまいりました。
秀吉。面白い、こゝで皆、自殺してもらはう。俺も云ひ出したことはあとにひくのは嫌いだ。
淀君。どうかそんなことをおつしやらずに。
秀吉。默つてゐろ。死ぬなぞとおどかされて、あとにさがる俺ぢやない。早く皆自殺して見せてくれ。貴樣達も名の知れてゐる男だから今更生命が惜しいとは云ふまいな。
清正。元より私達がいくらお願いいたしましてもおきゝ入れ下さらなければ、この場で私達は自殺してお目にかけます。
秀吉。それは面白い。早く自殺して見せてくれ。
清正。畏まりました。
三成。自殺の用意をして參りませんでしたから一寸用意をして參ります間、御猶豫を願ひます。
秀吉。馬鹿！　死ぬのに用意なんかいらない。そのもつて來た、短刀で腹さへ切つて見せたらいゝのだ。早く用意をしろ。三成お前からさきに腹を切つて見せてくれ。
淀君。さうおせきにならないでもいゝでは御座いませんか。
秀吉。默つてゐろ。おーい、皆出て來い面白いものを見せてやるから。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（腰元達出て來て並ぶ）

正則。（三成に）介添は俺がして上げる。早く腹を切りなさい。

秀吉。正則、お前も三成と一緒に腹を切れ。

正則。はつ。三成、それなら俺が腹の切り方を教へてやるから俺の眞似をしろ。

且元。私もどうか、一緒に死なして下さい。

秀吉。お前が云ひ出したのだから一緒に死ぬといゝ。

且元。ありがたう御座います。

秀吉。清正！　お前は三成の首を切る役をしろ。それから嘉明は正則の首を切つてやれ。それから行長は且元の首を切れ。

三人。はつ。（皆用意にかゝる）

秀吉。それから曾呂利。お前も一緒に自殺をしろ。

曾呂利。どういたしまして、私は他人様が自殺するのを拜見するのは至つて好きで御座いますが、自分が死ぬのは至つて嫌ひで御座います。どうもこゝにゐらつしやる方々のやうに、自殺するのが好きな病には一ぺんもかゝつたことが御座いません。そればかりはどうぞお許し下さい。

秀吉。許すわけにはゆかない。俺はお前の自殺するのが見たいのだ。そのかはり介添は淀君にさせてやる。少し切り方がまづいかも知れないが、なるべく死なゝいやうに首をはねるやうにさせるから。安心するがいゝ。俺もお前達皆が死んでくれるので、この世に思ひおくことはない。おかげで之から愉快に安心して方々旅行して歩ける。風流を友に

して浮世を忘れることが出來る。

曾呂利。（急に笑ふ）はつ、はつ、はつ。

秀吉。曾呂利、氣でもちがつたのか。

曾呂利。いや、つい殿下があまり、いつもにお似にならずに、馬鹿なことをおつしやるので、ついお可笑しくなりまして、失禮いたしました。

秀吉。失禮は許してやるから、早く自殺しろ。

曾呂利。畏まりました。（泣き出す眞似をする）

淀君。（そつと）あなた、本當に皆をお殺しになるつもりなの。

秀吉。うん。急に殺して見たくなつた。

淀君。冗談なんでせう。

秀吉。うん。冗談だらう。皆、首が切れてしまうまで冗談にしておこう。

淀君。本當のことをおつしやつて下さい。

秀吉。何をだ。

淀君。本當にお殺しになるつもり。

秀吉。どうだかね。そんなことはお前なんか口ださなくつていゝ。早く曾呂利の首を切る用意をしろ。

淀君。私にはそんなことは出來ません。もう皆、そんな自殺の狂言なんかやめて早くお歸り。

淸正。之は淀君樣のお言葉とは思へません。私達は自殺の狂言なんかはいたしません。私達は本當に死んでお目にかけ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ます。

淀君。それだつて、殿下だつてあとで後悔なさることはわかつてゐるよ。

清正。その御後悔こそ、私達がのぞんでおるのです。

（段々皆用意が出來てくる）

曾呂利。（一層大きな聲で泣く）わあ、わあ、わあ。

秀吉。曾呂利の馬鹿、何て云ふ聲を出すのだ。そんなに死にたくないのか。

曾呂利。（けろりとして）私は自分が死ぬのが悲しくつて泣いたのでは御座いません。又こゝにゐる方々が死ぬのがなさけなくつて泣いたのではないのです。こゝにゐらつしやる方々は人を殺すことは屁とも思つてゐない方です。ですから自分の頭も三つや四つ切られたつてお困りにはならないだらうと思ひます。又常々私を輕蔑なさつて、畜生のやうにおあつかいになつてゐる方々ですから寧ろ何か理由がつけば、死なして上げたい方許りです。しかしあなたはちがいます。あなたは、私はなんだか自分の子供か、孫のやうに思へて、あなたのお生命が大事で大事で仕方がないのです。そしてこゝにゐる方たちもあなたのことを本當に思つてゐて下さる點だけで、いつも私は之等の方を尊敬し、又愛しておりました。

秀吉。それはそれでいゝとしてなぜ泣いたのだ。

曾呂利。殿下の玉顔を拜見しておりました處、殿下は近い内に私の爺があつた天狗のやうな目にお逢ひになることが、お人のよろしい御人相にあらはれておりますのがはつ切りわかりましたら、急に自分の死ぬことを忘れて、殿下が御可哀さうになつて、涙がとゞめ兼ねず、聲を忍ぶことが出來ず、ついに殿下の御耳にたつしましたやうなありさまで。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

正則。三成、さあ一緒に仲よくめいめいどに參りませうかな、もう用意はやう御座いますかな。

三成。もうすぐ出來ます。

曾呂利。皆さん、一寸待つて下さい。私も云ふだけのことを云つたら、お作しますから、どうか私の用意の出來るまで待つて下さい。性急の正則樣。少し待つて下さい。

秀吉。正則、待つてやれ。

正則。はつ。

秀吉。お前の弟が天狗に逢つたつて本當か。お前に弟があつたのか、ちつとも知らなかつた。

曾呂利。御耳に入れても仕方が御ざいませんでしたから、御知らせしませんでした。尤も妹がありましたら、私に似て器量よしに違ひありませんから、御耳に入れないでよさうと思ひましても、御耳に入りましたこと丶存じますが。

秀吉。餘計なことは云ふな。天狗に逢つてどうしたのだ、嘘つくとゆるさんぞ。

曾呂利。どうせ死ぬのですから、ゆるして戴かないでも結構ですが、嘘は申しません。私の弟はそれは私に似て賢い、勇氣のある。古今未曾有の男で身の丈は殿下よりは五寸程低く、頭のまわりは殿下の三倍もあり、智慧におきましてはこの曾呂利よりも賢い位ですから、殿下よりは五倍以上賢こく、太つてゐることはだるまの如く、見るから甘味さうな男で御座いました。

秀吉。甘味さうな男と云ふのはどう云ふ男なのだ。

曾呂利。肉の出來が、喰べたらうまさうに出來てゐまして、私が見てもよだれが出さうですから、天狗が見たらなほ喰べたくなるだらうと思ふやうな身體つきで御座いました。

秀吉。へんな身體つきの奴だな。

曾呂利。それで山を一人で歩いてゐたのを天狗に見つけられたのです。ですから助かりやうがないのです。天狗はよだれを三千丈程たらしまして、弟は瀧かと思つたさうですが、まあ、少し大げさと見ましても、あのお庭のかけひ位いのよだれは垂したらうと思はれます。天狗の身の丈は見あげる許り、鼻の高さは三尺六寸八分、口の大きさは徑一尺、耳の大きさは見おとしたさうで御座いますが、大方普通の人よりは小さくはないだらうとの話で御座います。

淀君。目の大きさはどの位いあつたの。

曾呂利。目の大きさは淀君様が團子をおあがりになる時の御口より、三まり半大きかつたさうで、眼光のするどさは、殿下のお怒りになる時にさも似たり。

秀吉。馬鹿云ふな。

曾呂利。その聲は殿下が三軍を叱咤される時に劣らず、弟をつかまへて申しますには。たんとお前はうまさうな身體をしてゐる男ではないか、俺はまだお前程うまさうな人間を見たことはない。お前に逢へたことは俺が三千年前から望んでゐて未だ曾つて滿されたことのないよろこびだ。その頭の骨を嚙みくだく時は、どんなに氣持がいゝだらう。又その目玉は鯛の目玉より百倍も甘からう。よく來てくれた感謝すると申したさうです。

秀吉。馬鹿、馬鹿だな、貴様は。

曾呂利。其處で弟は、前にも申した通りの英雄で御座いましたから腰はぬかしはしませんでした。たゞ腰の方が、地面にすわりたがつたさうで、もう立つのがいやだと申したさうです。そして身體中から勇氣がほとばりだして汗となり、身ぶるいとなり、そしてどうぞ食ふのは助けてくれと申したさうです。お笑ひになつてはいけません。私の弟は大へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ん正直もので、食はれたくないのに食はれても平氣だと云ふ顔の出來ない男で御座います。自分の頭が嚙みくだかれるのを名譽と思ふよりは、情けないと思ふ男で御座いまして、死ぬのは何よりも嫌ひな男で御座いました。死んだら生られない、可愛いゝ女房の顔も子供の顔も見へない、さぞ女房子も泣くだらう。泣かしたくないと云ふ至つて正直な男で、死んではおいしい御飯も戴けないと云ふことをよく知つてゐる賢い男で御座います。

淀君。それからどうしたの。喰はれたの。

曾呂利。中々どういたしまして、弟は利口もので御座います。しかしあんまり早く話してしまうと、それだけ早く切腹しなければなりません切腹もお芝居でするならいくらでもしてお目にかけますが、本當にするのはあまり好きでないので、なるべく遲い方が結構なのですから、それに私の話がすめば正則さまはまあいゝとしても、三成さままでおなくなりにならなければならないのですから、なるべく御ゆつくりおきゝを願ひます。えゝと何處まで話しましたか知らん。弟はもう天狗には逢ひましたのですね。それともまだ一人で山を歩いてゐましたか知らん。

秀吉。天狗に喰はれる處だ。さつさと話してしまへ。

曾呂利。さうでした。思ひ出しました。天狗は中々弟が許してくれなぞと云つたからつて同情するやうなお人よしではありません。早く食いたいので、よだれが益々出る許り。「俺に食はれるのを名譽とは思はないのか、ありがたいとは思はないのか、俺に食はれるためにお前はそんなに大きくなつたのぢやないか、食つてやるから、ありがたく思へ。それでこそお前は生き甲斐があつたと云ふものだ。よろこべ、よろこべ。どう、こんなうれしいことはないだらう。泣いてゐるな。そんなにありがたがつて泣かないでいゝ。嬉しなきをあんまりされると水氣がなくなつてまづくなる。お前の心は感心だが、俺もすきで食つてやるのだから、さうありがたがらないでもいゝ」。どうもあんまり齒のい 天

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狗なので弟もおどろいてしまつたさうですが、いくらおどろいても食はれるのが本當では弟もなさけないので、どうしたらいゝだらう。其處で弟は、私のことを思ひ出してくれたさうです。私なら妻子はゐませんし、親兄弟は、一日も早く死ぬことを望んでゐる。俺のかわりに兄貴を食はしたら、萬事好都合、こんなにうまい話は又とあらうかと思つたさうです。どうも親切な弟もあればあるもので、それで、弟が云ふのに、私が食はれるのは實にありがたいことですが、それではあまり勿體なすぎます。私ももう少し修業がつみまして、あなたのおなかに入つてもいゝだけの立派な人間になりましたら、それは私も遠慮せずに入りますが、今の私のやうな修業の足りないものではおなかに入れて戴いても、失禮になる許りです。幸ひ私の兄は私とちがつて修業も私よりはずつと上等で、その上、天狗樣に食はれる修業も私よりつんでもう免許皆傳を許されております。どうか私のかはりに今度は兄をめし上つて下さい。兄の頭は一種特別な味をもつてゐることは、私が生命にかけて保證いたします。と申したさうですが、天狗は、兄もいづれ食ふことにするが、お前を許すわけにはゆかない。お前の修業のたりないのは知つてゐるが、いくら修業したつて味にはちがいない。反つて齡をとるとまづくなる。このくらいが丁度いゝのだと云つて、弟の頬をつまんで見たさうです。いよ〳〵弟の生命はあぶなくなつて來まして、之からどうなりますか、一寸一服さして戴いてから申し上げます。

秀吉。たばこをのましてやれ。

曾呂利。ありがたう御ざいます。お酒も一杯戴きたいのですが、いけませんか知らん。

秀吉。のましてやつてもいゝ。

曾呂利。私だけでは皆に氣の毒ですから皆にも飲まして上げて下さい。

秀吉。飲ましてやつてもいゝ。皆に酒をもつて來い。

履元。はい。（立つ用意をする皆のむ）

曾呂利。（いく杯ものむ）殿下、殿下もおのみ下さい。もう之れが今世のお別れですから。しかし一ケ月もたゝない内に又あの世で殿下一杯やりませう。尤も殿下は地獄で、私が極楽ですと一寸困りますな。しかし私も、生れて一ぺん位い本當のことを云ひましたから 地獄にやられるかも知れません。さうしたらまたちきお目にかゝれますね。ながくつて一月辛抱ですね。

秀吉。俺はそんなに早くは死んではやらないよ。

曾呂利。處が弟は急にかう云ふことを思ひついたのです。どうも之はこのまゝでは食はれるにきまつてゐる。なぜ天狗に自分が食はれ、なぜ鳥や兎は俺に食はれるのだらう。之は天狗が俺よりも大きくつて力が强いからだ。天狗だつて俺より弱かつたら俺の方が食つてやれるのだが、どうも殘念なことだ。其處で弟はあの家康や、家康にくついてゐる、何とか云ふ男がありましたな、あの男のやうな謀りごとを思ひついたのです。之は天狗をおだてるに限る。其處で弟は天狗さま、天狗さま、お鼻の高くつて赤い誠にお偉い天狗様、私は子供の時から、世界に天狗様程、偉いものはない。あの方は自由自在に身を變じることが出來る。大概のものは大きければ大き切りで、小さくなりたくもなれず、小さければ大きくはなれない。實にいくぢのない、不自由な、なさけないものだ。處が天狗さまになると、無極に大きくもなれ、小さくもなれる、實に不思議な偉い方だと聞いております。本當ですか知らん。私にはさう云ふことは信じられないのですが。すると天狗は、大得意になつて、元より俺は、大きくも小さくもなれる。と云つたのです。其處で弟はしかしいくらあなたが偉くつても今すぐなれると云ふわけにはゆかないでせうと云つたら、天狗はから〳〵と笑つて、そんなことが出來ないでどうして天狗になれるものかと云つたのです。それで弟はそんなら一つ拜見させて戴

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けますか。拜見出來れば私は本當にあなたを崇拜し、あなたに食はれあなたの肉になることを無上の光榮と思ふことが出來るでせうと申したのです。それなら一つ見せてやらう。大きくなつて見せやうか、小さくなつて見せやうか。弟は大きくなつて下さいと云つたのださうです。すると、めきめき、めきと大きくなつたさうで、あすこに見へる山よりも三寸程頭がたかくなつたさうです。弟も之はおどろいたと思つて、感心し切つて見とれてゐましたら、又めきめき、めきと小さくなつて、元の天狗にもどり。どうだ。驚いたらうと申したさうです。弟は感心し切つて、本當に本當に本當にあなたは偉い、實に偉い、こんなに偉いとは思はなかつた。世界はあなたのものだ、あなたに敵はない、あなたがそんなに偉い方とは思はなかつた。實に偉い方だ。おつたまげる程偉い方だ。實に偉い方だ。おつたまげてしまつた。(首をふりながら)實に偉い、實におつたまげた、實に偉い、實におつたまげた、實に[illegible]し。

(皆笑ふ)

秀吉。馬鹿だな、貴樣は、もう澤山だ。

曾呂利。其處で弟が申しますのに、しかしいくらあなたでも小さくはなれないでせう。なれないでどうする。私のこの手のひらにのれるやうになれますか。なれないでどうする。天狗は弟の手のひらを廣げさしてぽんととんだかと思ふと、五寸位いの天狗さまの人形のやうなものが、弟の手のひらにのつたさうです。どうだと天狗は弟の手のひらで云つたさうです。弟は、實に感心しましたがもつと小さくなれませんか。なれないでどうする。さり天狗は云つて段々小さくなつてゆく、それを感心して見るふりして顏を近づけて行つてそのすきをねらつて、いきなりぱくりつと弟は天狗の首をかみ切つて、あはつはつ、あはつはつ、あはつはつと笑つたさうです。それから、その話をきいた人々は皆申しました。なんと云ふ馬鹿な天狗なんだらう。なんと云ふ馬鹿な天狗なんだらう。あはつは、あはつはと笑つた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と申します。

秀吉。(立ち上り)曾呂利! お前の忠告を感謝するぞ、お前の話をきいて俺は行脚をするのを思ひとゞまつた。お前の云ふ通りだ。皆もう死ぬのはやめろ。そして仲よくしろ、俺はもうこゝにがんばつて、俺の力限り天下のために働くぞ、皆のもの、安心してよろこべよろこべ。曾呂利、褒美にこの刀をやるぞ。

曾呂利。(後にとびすさり、平伏し)ありがたう御座りました。(刀をおしいたゞく。そして一寸重さをはかる)

秀吉。清正、正則達、さつきの俺の言葉を氣にかけずにゆるしてくれ、お前達の忠義の程、一生、忘れずに思ひ出してはよろこぶだらう。

清正達。(平伏し)ありがたう御座ります

秀吉。さあ、皆、酒をのめ、皆に酒をついでやれ。

腰元達。はつ。

曾呂利。殿下、私はこの刀をいたゞきましても、私には勿體なすぎます。この場でどなたかにお賣りしてもよろしゆう御座いますか。いかゞで御座います。

秀吉。それは又一だんと面白いだらう。立つて賣れ、賣れ。皆もなるべく高くかつてやれ。

曾呂利。さあ皆さん、この刀はいくらで買つてくれます。一分でも高い方にお賣りいたします。殿下の前ですから中をお目にかけることが出來ないのは殘念で御座います。

正則。中は見ないでもわかつてゐる。五百兩なら買ふ。

曾呂利。五百兩は少し可哀さうです。

秀吉。八百兩で買つてやらう。
清正。千兩なら戴きます。
嘉明。千二百兩なら戴きます。
曾呂利。もう上はありませんか。
三成。二千兩なら戴きます。
行長。二千三百兩。
正則。二千五百兩。
三成。三千兩。
（淀君、三成に贔屓するがわからない、秀吉、曾呂利はこれを面白がる）
曾呂利。もう他にありませんければ、三成様に買つて戴きます。
正則。三千二百兩。
淀君。曾呂利それで賣つてはしまい。
秀吉。三千三百兩。
三成。三千五百兩。
秀吉。三成に賣れ。
曾呂利。はつ。
秀吉。三成。お前はとくしたぞ。曾呂利、お前はこの刀はいくらだら買ふかな。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

曾呂利。この刀の價値は外許りで内味は空ですから十兩を一文としても、私はこの刀は買はふとは思ひません。殿下はいかゞですか。

秀吉。この刀がお前の手になくて、他の人の手にあつたら、五兩でも買ひたくないな。曾呂利、苦しゆうない。―をぬいて見せてやれ。

曾呂利。はつ。（ぬいて見ながら）名刀はちがつたもので御座いますね。皆樣よく御らん下さい。

（正則始め皆どつと笑ふ、三成苦笑、曾呂利うやうやしく三成にわたす。）

秀吉。三成、だが命とかへつこなら安いものだ大事にしまつておけ。

三成。はい。（平伏する）幕、（一二、一二、三）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



厭世奇譚

宇野浩二

英吉利の倫敦から北に五十哩ばかり離れたところの、W――鐵道支線に、ヒツプカートといふ、大抵の旅客には見過ごされてしまふやうな、小さな停車場がある。もつとも、この邊はつい此間までは麥畑の中を唯四本のレールが素通りしてゐただけであつたが、最近、この地方に散在する牧場が次第に發展して行つて、隣の驛のオースグイエーだけでは不便になつたので、去年からこゝに停車場が設けられたのである。停車場の附近には、驛員の舍宅が一二軒と、牧場專門の運送店が三四軒と、その運送店の一軒が經營してゐる、一寸した支度所のやうなものが一軒と、唯それ切りであつた。見渡したところ、麥畑と、それを限つてゐる、波のやうな緩い傾斜を持つた小山の連續と、それから縣の境をなしてゐる稍々遠くの山脈との、單調な、何處か大陸に見るやうな景色であつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汽車がこの停車場に止まる毎に、牧場からの、或ひは牧場への、何か彼か貨物の出入はあるやうだつたが、旅客の乘り降りするものは至つて稀であつた。恐らくこゝで乘り降りする旅客は悉く驛長の顏を知つてゐたらうし、驛長の方でも亦それ等の旅客の顏は大抵見知り越しであつたに違ひない。

千九百——年の五月の或る晴れた午後、ところが、一人の見馴れない男が、倫敦からの下り列車で、この停車場に下りたといふ事が起つた。それは見馴れないばかりでなく、一見して、この邊では珍しい異人種の外國人であることが分つた。彼は改札口のところで驛員に切符を渡しながら、甚だ巧みでない英吉利語で、ミーヤ・ジムの牧場へ行く道程に就いて尋ねた。

「ミーヤ・ジムの牧場なら、」と言つて、彼の全體の身長に、頭を一つ足した程の背の高い驛員が、停車場の眞向ひに見える、丁度一臺の貨物自働車の止まつてゐた家を指さして、「あそこがミーヤ・ジムの運送事務所ですから、あそこで聞きなさい。」と教へた。

小男の外國人は驛員に一寸頭を下げて、物憶さうな足取で、教へられた方に歩いて行つた。その青黃いろい顏色といひ、汚れた着物といひ、そして變に膝を屈めて歩く恰好といひ、どうやら身體の具合も惡さうだな、と思ひながら、背の高い驛員は彼の姿が貨物自働車の向う側に隱れるまで、迂散さうな目附で見送つてゐた。

自働車の蔭に廻つて見ると、教へられた事務所の入口が開け放しになつてゐたので、一と目で家の中を見ることが出來たが、そこで訪問者は暫く面喰つたやうに立止まつた。それは明るい日に曝されて來た目が、一瞬間見たところでは、彼には家の中が眞暗に見えて　部屋の半分以上に石油罐のやうなものが一ぱい積まれてある外は、一寸人かげらしいものを認めることが出來なかつたからである。彼はふと彼の直ぐ近くに積んである罐の一つの、隅の方に貼つてある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤いレッテルに「Pure milk」と、それから「M. J. Co.」とあるのを讀んで、何といふ譯もなく一寸安心したやうな思をした。そして次の瞬間に、正面の奥に帳場のやうなものがあつて、一人の青年が机に向つて何か書き物をしてゐるのを認めた。それは青年の顏は見えなかつたが、彼の髮を綺麗に分けた青年らしい頭が、此方を向いてゐるので分つた。

「御免なさい、」と言つて、外國人は二三歩内に這入つて行つた時に、その帳場の右手の方は、入口からだと壁の蔭に隱れて見えなかつたが、土間にぢかに卓子が据ゑてあつて、その傍に二人の勞働者が無言で煙草を吹かしてゐたのを見出した。見えない右手の方に窓か戸口かゞあると見えて、丁度舞臺でのやうに、側面から稍々明るい光線が彼等に射しかゝつてゐた。

そこで、書き物をしてゐた青年も、二人の勞働者も一緒に、顏を上げて、不思議さうに這入つて來た異人を見守つた。

「私はミーヤ・ジムの牧場へ行きたいのですが……」と異人はぎこちない英吉利語で言つた。「その道を教へて下さいませんか？」

彼はその風采から、態度からが、人々に浮浪人とか、乞食とか、何かさういふ警戒を要するものゝやうな印象を與へた。

「こゝはミーヤ・ジムの事務所ですが、」と帳場の青年が言つた。「御用なら……」と彼は何か言ひつゞけようとして「まあ、こちらへお這入りなさい、そしてお掛けなさい。」

言ひながら、青年も椅子から立上つて、帳場のところから、腰の邊までの高さの、それの出入口の扉を開けて出て來て、右手の勞働者たちの坐つてゐた卓子の方へ客を案内した。その間、二人の勞働者たちは、時々その見知らぬ外國人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の方に目を配るだけで、彼等同志は矢張り無言で煙草を吹かしてゐた。

果してその右手の方には開け放した入口があつて、その入口寄りのところで、青年と異人とは、疵だらけの粗末な卓子の端に、向ひ合つて腰かけた。

「私は倫敦から紹介狀をもらつて來てゐるんですが、」異人は言つた。

「あゝ、分りました、」と青年は相手の言葉をもどかしさうに引取つて、「ぢやあ、あなたは、あの、Mr.Takagawaに會ひに來られたんですか？」

「Mr. Takagewa?」と客は聞き咎めるやうに、斯う言ひ返して、「それは私の同國の人ですか？……タカガワ……？タカガワ……タカガワ・モトキチ……」と彼は頻りに考へ考へ、半分獨言のやうに斯う繰返してゐたが「その人の名前はMotokichi Takagawa といふのではありませんか？」

「えゝ、あなたの言はれる通りです、」と青年は言つて、「だが、あなたはその人に會ひに來られたんぢやないんですか？」

「いゝえ、」と客は未だ何か考へつゞけてゐた樣子であつたが、答へて言ふには、「いゝえ、私はミーヤ・ジムに紹介されて來たんです、倫敦のミーヤ・カロックから。――彼の牧場まではどの位遠いのですか？

「四哩半です、」と青年は答へた、そして何か心に思ひついたやうに、「が、斯ういふ風にあなたはしませんか。といふのは、今から一時間半したら、上りの貨物列車がこの停車場に着きます、それに私たちは少しばかり積み込みの仕事を持つてゐます。けれど、それが濟んだら、私は歸ります、あの表の自働車に乘つて。その時まで待つて、あなたは一緒に行くことを望みませんか？」

「有難う。それは私も望むところです、」と客の異人は答へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やがて、ミーヤ・ジムの會社の、貨物自働車が事務所の前を離れたのは、彼れ此れ五時を過ぎた頃であつた。それには、先程まで事務所の土間に置いてあつたブリキ罐が、それ等は恐く空のものだつたと見えて、一ぱい積み込まれた。帳場に坐つてゐた青年がそれを運轉した。例の客の異人は彼の傍に並んで腰をかけた。外に、相變らずパイプを口から離さない、先の勞働者の一人が同乘者として乘り込んだ。彼は、運轉臺の青年が、前の方に掛けられる席があるからと言ふのも聞かないで、車の後部の、ブリキ罐の間に後向きになつて腰をかけた。自働車は出發した。道がいゝのと、上手に積み込んであるのとで、車が走るに連れても、思つた程荷物の罐は音を立てなかつた

「あなたはカロック氏のところから來られたんでしたね？」と青年は把手に手を掛けて、向うを向いたまゝで、隣の客に聞いた。「では、やつぱり聯盟會の會員ですか？」

「さうです、」と客は大儀さうに答へた。

「僕自身を紹介さしてもらひます、」と青年はそこで打解けた樣子で言つた。「僕も同じ會員です、セシル・トーリイと言ひます。ジムさんの會社の、あの今の事務所の方の書記をしてゐるのです。どうぞ宜しく。」

「御同樣に、」異人は言つた。「私の名はイクタロー・ハタです。」

「あなたは何處か御病氣のやうに見受けられますが……？」とセシル青年は聞いた

「えゝ、少しばかり、」と外國人は答へた

「あなたの國の人には體の惡い人が多いやうに思はれますが、さうではありませんか？」とセシルは道が少し傾斜にさ

し掛つたので、把手の右手に附いてゐる、何かの機械をぐつと抑えながら、「あなたの國の人たちにはこの英吉利の氣候が合はないんですかね。Mr.Takagawa も此頃は餘程惡いらしいですよ。」

「Mr.Takagawa」とその時ハタは初めて目が醒めたやうに、力のこもつた聲で言つた。「そのモトキチ・カタガワは幾歳位の人ですか?」

「五十歳に近いと聞いてゐます。やつぱり聯盟會の、而も古い會員です。さうさう、あなたは彼を知らないのでしたね?」

「いゝえ、そのモトキチ・タカガワなら、多分よく知つてゐます。然し會つたことは未だありませんが……」

「お差支へなければ、どうしてあなたがミーヤ・ジムに會ひに行かれるのか、聞かしてくれませんか?」

「ミーヤ・ジムのところで、働いて食ふことを世話してもらふ爲です、」とハタは再び氣の拔けたやうな聲で言つた。彼は何か外のことを考へてゐたやうに見えた。「倫敦の氣候は私には敵です。私がもう半年あそこにゐたら倫敦は恐らく私の命を奪つたでせう。……」彼は斯う言ひながら目を上げて、稍々西に傾いた日を浴びた、何處までも續いてゐるやうに見える麥畑と、そして波のやうに果てなく連續してゐる小山との、唯一色に眞靑な景色を眺めた。成熟し切つた麥の香が、自働車の切つて行く生溫い風に混つて、息苦しいほどに感じられた。彼は稍々センチメンタルな調子で言つた。

「實に淸々した、いゝ氣持ですね。私はもう長い間こんな景色を見せませんでした。」

セシル・トーリイは自働車の前の硝子板に、周圍の景色と光線との具合で、時々自分の顔と並んで映つて見えるところの、陰氣な外國人の顔を盗むやうに見ない譯に行かなかつた。元々黄いろくて靑黑い色のその顔は、五月の麥畑の綠色を反映して、どうかすると幽靈のやうに物凄く見えることがあつた。が、少しづゝ見馴れて來ると共に、初め三十歳

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とも四十歳とも見當のつかなかつたそれが、或ひはどうかすると近寄り難く見えたそれが、案外にも彼自身とそれ程變りない、二十五六歳の青年であるらしいことを發見した。彼は次第に親みを感じ出した。

「私には、」と彼は言つた。「あなた方、東洋の人々は一體に冥想的な、詩人肌に見える點で共通したところがあるやうに思はれます。みんな聖者のやうな風があります。その代り、私たちの國民のやうに、實行的な勇氣に於いて乏しいやうに思はれます。モトキチ・タカガワさんがさうです。ミーヤ・ジムとモトキチ・タカガワはいゝ對稱です。」

「モトキチ・タカガワもあなたの所謂東洋流の人ですか？」とハタは言つた。「私の聞いて知つてゐるモトキチ・タカガワは何方(どつち)かといふと、情熱的な實行家だつたやうに覺えてゐますが。彼は私たちの國での、最初の熱烈な實行家でした。」

……不思議だな、」とそこで彼は首を傾げながら、最後の言葉を自國語で、獨言のやうに呟いた。

その邊から段々上りや下りの道が多くなつて、左右の小山の爲に眼界が狹くなつて來た。そして麥の代りに牧場のにほひが人々を襲つた。

「この邊からずつとジムの牧場です、」と青年が言つた。

「さうですか、」と外國人は言つたが、彼は前の方のぢつと一所に目を据ゑたまゝで、然しその目には唯そこらの青い景色がぼーッと映つてゐるだけらしく、彼は一心に何かの考へ事に熱中してゐる樣子であつた。「不思議だな。……そんな事があり得るだらうか、」と彼は再び斯う彼の國語で獨言ちてから、「私たちの國では、今からもう十年も前にモトキチ・タカガワといふ人は死んだものと信ぜられてゐます。彼は絞首臺で死んだ筈です、二十何人の同志と一緒にです。それは記錄にも殘つてゐます。彼の本國にゐる家族の人たちも——私は彼の家族の人たちとはよく知つてゐます、——彼が生きてゐるとは信じてゐません。然し、先程から、あなたの口からモトキチ・タカガワの名前を聞いて、私にふと思ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出された事があります、それは私が未だ國にゐた時、私たちの同志ではない或男から、モトキチ・タカガワといふ人が英吉利にゐるといふ話を聞いたことがあるのです。が、それを聞いた誰も、私もその一人ですが、本當にしたものはありません。人々は皆それは人違ひだらうと言ひました。私はその事を彼の家族の人たちに話しましたところが、彼等も矢張りそんな事はあり得ないと言つてました。……彼はいつ頃からこゝへ來てゐるのですか？」

「私は確には知りません、」と青年は答へた。「三年前に私がこゝへ來た時には、彼はもうゐました。何でも四五年もつとも前に來たのだと聞いて居ります。その前には佛蘭西にゐたといふやうな話も聞きました。私が知つてからの彼はずつと病身でした。彼は僧侶のやうに沈黙で、そして無口です。けれども彼は神を信じてゐません。彼は始終學者のやうに机に向つて何か書いてゐるのを見かけます。然し、彼はもうそんなに長くこの地上にはゐないでせう。」

「そんなに悪いんですか？」異人は顔色を曇らして聞いた。

青年はそれに答へる代りに、「おゝ。もう着きました。彼處です、あれがミーヤ・ジムの牧場事務所で、そして彼の家族及び私たちの住所にもなつてゐる家なのです、」と前方に見える、可成り大きな、然し粗末な木造の建物を指さして言つた。

青年革命家のイクタロー・ハタがミーヤ・ジムの牧場事務所の二階で、モトキチ・タカガワの病床を見舞つたのは、その日の晩の八時頃であつた。

モトキチ・タカガワの居間であり病室であるところの部屋は、主人のミーヤ・ジム始め、この建物の中に住居してゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る人たちのそれが悉くさうであるやうに、二階の屋根裏部屋の一つであつた。向つて右の隅に附いてゐる扉を開けて這入ると、部屋の中の左手の隅に寝臺があつて、中程の所に一箇の小型卓子と數箇の椅子があつた。ところが、變つてゐるのは、部屋の奥の左右兩側が、丁度角を延ばしたやうに半間ばかり突出てゐて、端にその幅一ぱいの窓が附いてゐることである。だから、正面の中央は、兩側の窓の位置よりぐツと部屋の中に食ひ込んでゐて、そこには一面の鏡が嵌めてあつて、前が簡單な化粧臺になつてゐた。そして、これはこの家中の二階のどの部屋にも悉く共通した作りらしかつた、つまり田舍の旅館などの、屋根裏部屋によく見る建て方に違ひないのである。

イクタロー・ハタがセシル青年に案内されて、この部屋に這入つて行つた時、病人である部屋の主人公は、その左手の突出た窓の近くに腕椅子を持出して、その中に埋もれるやうに寄り掛つて、硝子越しに外の景色を眺めてゐた。月の晩であつた。部屋の中にはもう一人、看護の役を勤めてゐる、ミーヤ・ジムの娘の、十七歳になるマガラ・ジムが、中央の卓子のところで、青い布切の笠の掛つた臺電燈の下で、頻りに編物の針を動かしてゐた。彼女はその時戸の外に叩の音を聞いたが、編物の手を休めることなしに、

「お這入り、」と不注意な聲で應じた。彼女は晩飯の時に、父のミーヤから新來の客として、タカガワの同國人の青年を紹介されたことも、その青年が晩にタカガワを尋ねると言つたことも、すつかり忘れてゐたのであつた。彼女は毎晩の例の通り、セシル青年が遊びに來たのだらうと思つてゐた。が、却つて、その客の事を人傳てに聞いてゐたタカガワの方が、それを覺えてゐた。だから、腕椅子に埋もれて外の景色を見てゐた彼は、戸の外の叩を聞くと、犬のやうに素早くその方に頭を振り向けた。彼はそこで、マガラの「お這入り」と言つた答と共に、這入つて來たセシル・トーリイ青年の背後に、久しく見なかつた彼の同國人の姿を認めたのである。その時、マガラも這入つて來た珍しい客を認めて、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

急いで編物を手から離して立上つた。
「先生、皆さんに何處に坐つていたゞきませう?」と彼女は少女らしく首を傾けて、タカガワに聞いた。
「失禮だけど、」とタカガワは病人らしい低い聲で、「この私の傍に來てもらひませうか、今夜はいゝ月夜だから。」
「Mr.Ikutarô Hataです、」とセシル・トーリイはタカガワの傍に歩いて來て、連れて來た客を紹介した。そして又客の方に向つて、「Mr.Motokichi Takagawa です。」
紹介された人たちは默つてお辭儀を交した。暫くしてから、
「私は先生の以前お書きになつたものゝ、實に愛讀者でした、」と客の青年ハタは自分の國の言葉で言つた。「先生はあの『赤い花』や、『自由への道』やをお書きになつた、あのモトキチ・タカガワ先生なのでせう?」
「さうです、」とタカガワは極り惡さうに目を反らして、同じ國の言葉で答へた。
「私は、私は先生がこの世に生きて居られるとは夢にも思ひませんでした、」と青年は次第に情熱的な力のこもつた聲で言つた。「私も、又私の向志の人たちも、まさか先生がこんな遠い國の片田舍でゞも、生きて居られようとは……。」
彼等の傍に坐つてゐたトーリイ青年は、彼等が何か頻りに彼等の國の言葉で、而も如何にも熱心に話し始めたので、妙に自分が除外されたやうな氣がして氣まづくなつたのと、更に、それよりも彼等がさうして話し始めたのを機會に、彼は戀人であるマガラが、客たちの爲に茶の用意をしに行つたのを待ち受ける爲に、自分の席から立上つて、今し方まで彼女が坐つてゐた卓子の前の椅子の所へ歩いて行つた。彼はそこに腰かけて、彼女の殘して行つた編物を弄り始めた。
「さうですか、」とタカガワは冷淡な調子でハタ青年に答へてゐた。「然し、大した變りはありません。それに、明日はも

うこの世にゐなくなるかも知れないのですから。」

「どうしてそんな事を……？」とハタは言つたが、一寸後の言葉をつゞけ兼ねた。暫くしてから又、「私は本國にゐました時分から、いえ、ずつと前、初めて先生の『赤い花』を拜見した時から、私は先生を崇拜に近い氣持で尊敬してゐたものです、又あなた方のあの事件に就いても、出來るだけ骨折つて、いろ〳〵と讀んだり聞いたりしたつもりですが、それにつけても私の先生を尊敬する氣持は募るばかりでした。だから、私はその後も、先生の『自由への道』や『共存生活』を幾度讀み返したか知れません。そして今、思ひがけなく、實際、思ひがけなく、こんな所で先生にお目にかゝつて、私の喜びと驚きとは口に言へません。今日晝、こゝへ來る道で、セシル、トーリイから初めて先生のお名前を聞いた時には、未だ半信半疑でした。……」

タカガワはハタのそれ等の言葉の間中、何故か苦り切つた顏をして、窓の外の月光に照らされた道路と、林と、林の蔭にその端の方の見える牧場と、緩い傾斜を置いてゐるその邊一體の草原とに、無心の目を放つてゐた。その樣子はなるべくハタの言葉を耳に入れないと努力してゐるやうにも見えた。ハタもそれに氣が附かないではなかつたが、彼はそれは病人が病苦に堪へてゐる表情だらうと思つた。

その時、入口の扉が開いて、マガラが茶の盆を持つて這入つて來た。彼女は先づ窓際の二人にそれを勸めて、それから卓子の傍に戻つて來て、その上にセシルと自分との分を並べて置いた。彼等も亦彼等の國の言葉で何か話し始めた。

「どうして何にも答へて下さらないんですか？」とハタは多少苛々した調子でタカガワに言つてゐた。「身體の具合がお惡いんですか？……それとも、あなたは今言つたあのタカガワ先生ではないのですか？」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いゝえ、私はそのタカガワです、」と病人は物惓さうに答へた。「だが、どうかお願ひだから、そんな私を崇拜するとか、尊敬するとかいふ事は言はないでくれ給へ、どうかお願ひだから……」

「ぢやあ、僕は何と言つたらいゝのです？ 僕は自分の本當の心持を言つてゐるのです、」とハタ青年は如何にも不滿さうに言つて、ぢつと相手の瘠せ衰へた横顏を見守つた。が、暫くすると、彼は又急に言葉の調子を柔らげて、「それにしても、先生、あなたはどうして敎育臺からお逃れになつたのですか？ そして、それから先生はどんな風に暮して居られたのですか？ 今のやうに病氣になられる迄のその後にです。」

が、答はなかつた。稍々暫くして、息を呑んで答を期待してゐた青年の目に、タカガワは何か言ひ出しさうに口元を動かして見えた。が、それは言葉の爲ではなくて、咳の發作のせゐであつた。彼の青い顏が緊張して血が上つて赤くなつて見えたのは、多分彼が一所懸命に咳をこらへようとしてゐたからに違ひなかつた。

「先生、」と又暫くしてハタは病氣に苦められてゐる相手を憐むやうに、或ひは又勵ますやうに言ふには、「先生、あなた方の仕事はつまり早過ぎたんです、然し、決して無駄にはならなかつ　と僕は思ひます。御覽なさい、世界の形勢は一日一日と私たちの理想に近づいて行くではありませんか？ それは世界中で最も頑冥保守を以て聞えてゐる私たちの國でさへ、先生、あなた方が十年二十年前に播いて置かれた種が、此頃になつて彼方にも此方にも、麥のやうにすくすくと芽を吹いて、延びて來たのを見ても分ります。」

「Mr. Takagwa」とその時まで、離れた卓子のところで、セシル青年と何か小聲で話し會つてゐたマガラが、突然此方に向つて聲をかけた。「あなた方のお話の間、私たち一寸その邊を散歩して來てもいゝでせうか？」

「どうぞ、」とタカガワは寂しい笑顏を向けながら答へた。「まだその位の間は生きてゐられるでせうから。」

二人の青年男女は、低い木柵を廻らした中央に立つてゐる、形ばかりの背の低い石の門を出て、足の向くまゝに街道を左の方へ歩いて行つた。その邊は地質の白いところなので、折から月かげを浴びて、街道はお伽話の道のやうに白く輝いて見えた。彼等の歩いて行く街道から左手に見える建物の、二階の南の一番端の部屋がMr.Takagawaの占めてゐるそれであつた。その部屋の角の窓を下から見上げると、人間の頭の影法師が一つ、それは多分主人のタカガワのであるに違ひないそれが、丁度窓敷居の上に載せられてゐるやうに眺められた。多分、その頭は此方を向いてゐるやうに見えたので、左側を歩いてゐたマガラ孃が、セシル青年と組んでゐた手を解いて、

「ハロー！」と叫びながら窓の方に向つて手を振つた。

窓の方からは答の代りに、今迄のと外に又一つの頭、それは多分客の青年の頭が增えて、二つの頭が此方を覗いた。が、直に他の頭は窓框の內に隱れてしまつたので、街道の散步者等は再び手を組んで步き進んだ。

「あなたはあの東洋の青年をどんな風に考へますか？」とセシルはマガラに言つた。

「どんな風に？……つて、別に、」とマガラは冷淡に、「私、しかし餘り好きにはなれませんでした。第一、背が低くて、目ばかりぎろ〳〵してゐて……私、あゝいふ沈欝な人を好きません。」

「僕も多少さういふ印象を得たのですが、」とセシル青年は言つた。「しかし、Mr.Takagawaだつて、さう言へば、隨分沈欝ではありませんか？」

「だけど、私は忠ふわ、」とマガラは言つた。「Mr.Takagawaはずつと立派ですもの。あの人はあゝいふ未開な國の人と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しては、珍しく立派な風采を持つてゐます。多分彼は若い頃には美しい男だつたらうと私は思ひます。學問といふものは、人に品位を附けるものに違ひありません。私は自分の教へてもらつた先生だから賞める譯ぢやないけど、同じやうに沈靜は沈靜でも、あの若い人なぞと比べと、Mr.Takagawa は何處か聖人のやうな、氣高いところがありますもの……」

「マガラ、あなたはあの人をいつでも餘り賞め過ぎます、」とセシル青年は心配さうに言つた。「だけど、僕は思ひます、あの人には熱がありません、革命家として、何より大切な熱に缺けてゐます。」

「えゝ、それやないわ、」とマガラは言つた。「あの人はもう今では革命家ぢやないんですもの。あの人は自分でもさう言つてゐます。だから、近頃はあの人はなるべくさういふ話を避けるやうにしてゐます。」

「何故でせう？」とセシルは非難するやうに言つた。「ぢやあ、何の話をするのです、あなたが始終あゝして看病の爲に傍に居られる時に？」

「何の話もしませんわ、」とマガラは答へた。「あの人はいつも詩人のやうに、默つて何か考へてゐるやうに見えます、詩人か又は哲學者のやうに。」

「おゝ、マガラ、あなたはあの人に好意を持ち過ぎます、」とセルシは迷惑さうに言つた。

「えゝ、さうかも知れないわ。さう、好意……」とマガラは考へ考へ言つた。「好意といふよりは敬慕と言つた方がいゝかも知れません。敬慕と言つてしまふなら、若しかすると、戀と言つた方がもつと適當かも知れません、然し、それはプラトン的よ、プラトン的よ。……」

そこで青年は沈默した。道は少しづゝ上りになつて行つて、見ると、右にも左にも牧場らしい光景が展開して來た。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それと共に、牧場の臭が鼻をつくやうに強く感じらて來た。あたりが餘り靜かなので、時々起る乳牛の鳴き聲が、猛獸のそれのやうに物凄く聞きなされた。一と所、どうしたのか、牧舍の扉が開け放しになつてゐるので、低い木柵に圍まれた牧場の中に、大きな牛が彼方此方と、月の光を受けて、黑い塊のやうに、草の上に橫たはつてゐるところがあつた。然し、どの牛も直傍の街道を歩いてゐる男女の足音に注意しなかつた。

「C——舍の裏から森の方へ出て歸りませうか？」と暫くしてセシルが言つた。

「えゝ、さうしませう。」とマガラが答へた。

そして、彼等はとある牧場の柵に沿うて、街道から右手に、細い小徑の方へと這入つて行つた。

「此間から聞かう聞かうと思つてゐて、その機會がなかつたのですが、」とセシル青年はやうやうの思で口をきつたのらしく、それでも尙おづ〱しながら、言ひにくさうな調子で言ふには、「あの、あの、噂は本當ですか、マガラ？」

「なアに……あの噂ツて？」

「あなが倫敦のジョン、カロツク——ミーヤ・カロツクの息子の——ジョンと婚約が成立つたといふのは、あれは本當ですか？」

「えゝ、本當ですわ、」と女は男を息詰まるやうな思をさせた程、はつきりした、躊躇のない調子で答へた。「多分、結婚は秋になるだらうと思ひます。明日——多分明日、倫敦に行つてゐる母が歸つて來たら、はつきりした事が定るでせう。」

セシルは實際驚きの爲に、身體中の血行が止まつたやうな氣がした。彼はどうして自分の足を今迄通り前に運んでゐるかをさへ意識しなかつた。無論、何の言葉も口から出なかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「セルシ、どうしてあなたはそんなに身體を震はせるの？」とマガラは彼と組合せてゐる腕に力をこめて、「私がジョン・カロックと結婚するといふのが、そんなにあなたの意外なのですか？」

「マガラ？」とやつとしてから、セシルは吃りながら言つた。「……そんなら、僕たちの戀はどうなるのです？」

「それは、セシル、戀と結婚とは別々のものぢやあないの？」

「ぢやあ、あなたの結婚と共に、僕等の戀愛は消滅してしまふのですか？」

「それは私にも分りません、」とマガラは言つた。彼女の冷靜な言葉は、セシルに彼女が今夜何か惡魔に憑かれてゐるのではないか、と屢々疑はした程であつた。彼女はつゞけた。「だけど、これだけのことは言へるかと思ひます。といふのは、その時まで、あなたとの戀が續いてゐてもゐなくても、又それがいつ迄も續かうとも、いつか消えてしまふにしても、兎に角、定められた時に私がジョンと結婚するといふことに變りは起りません。戀愛は心でするもので、結婚は頭でするものだと私は思つてゐます。」

「僕はあなたの言ふ事が分りません、」とセシルは苦しさうに言つた。「だが、僕に分つたことは、あなたが結婚の相手には僕のやうな無名な百姓の子でなしに、有名なミーヤ・カロックの子をお選びになつたといふ事です。その代り、それは××聯盟會長、博士ミーヤ・カロックの子でなくても、陸軍大將何の某卿の子と置き換へてもいゝといふことです。マガラ、あなたはお父さんの子に似合はない、貴族主義者ですな。」

「さうかも知れません、セシル。然し、もうそんな話は止さうぢやありませんか？」とマガラは男と組んでゐる手に、話とはまるで何の關係もないやうに、再びぐつと力をこめて、「兎に角、今私たちは戀し合つてゐるといふことは事實なんですもの。……セシル、本當に今夜はいゝ晩ですわね。もうこんな理屈ぽい話は止さうぢやないの？ ほら、夜鶯が

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鳴いてゐますわ。」

實際、その時彼等はいつか牧場の柵に沿うてゐる路も過ぎて、森の陰になつてゐる小路を通つてゐたのであるが、噎せ返るやうな青葉の香のする森の彼方で、夜鶯の歌ふ聲が聞えてゐた。その森といふのは、あのモトキチ・タカガワの窓からその一部の見えるところのそれなのである。彼等は次第に家の方へ近づいてゐたのであつた。

然し、森の夜鶯の聲はモトキチ・タカガワの部屋迄は聞えて來なかつた。が、五月の夜の月光に照らされた森と、草原と、丘と、白い路との景色は、畫といふよりももつとの畫であつた。タカガワはその景色を夢見るやうな目付で眺めながら、

「ハタ君、濟まないけど、窓を開けてくれませんか、少し息苦しいやうだから、」と言つた。

「お身體に惡くはありませんか？」とハタは窓の所へ立つて行きながら言つた。

「なアに、もうそんな事に心を遣ふ必要もない狀態なんだから、」とタカガワは寂しい笑顏をして言つた。それから、先から、暫く途切れてゐた話のつゞきらしく、「……だから、君、」と彼は始めた。「だから、君、僕をどうかこのまゝ靜かに墓にやつてくれ給へ。君は以前から僕を尊敬してくれてゐたといふ、つまり僕の青年時代の少しばかりの著述を見てさう言つてくれるのだらうが、今の僕はそんな言葉を聞くと、穴があつたら這入つてしまひたいやうな氣がするんだ。僕は何の謙遜でも遠慮でもなく言ふのだが、僕はそんな尊敬に値する人間ぢやない。君が讀んでくれた昔の僕の著書などは、あれは唯若い血が歌ふ唱歌のやうなものなんだ。そして、僕といふものゝ本當の生活は、あんなものには十分の一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も百分の一も書いてありはしない。君は僕が、絞首臺で死んだ筈の僕が、どうして免れてこんな所に來るやうになつたか、それを聞かしてくれと言ふが、恐らくそれから後の僕の生活――といふよりは、その以前、つまり君の讀んでくれた本に書いてある時分より以後の僕の生活を、僕が今こゝで君にありのまゝに話したなら、若い君は、このまゝにしておいても、明日一ぱい保つか保たないか分らないこの僕の命を、それどころかもう一分間したら息を引取るといふ時にでも、自然の死に死なしてくれる寛容を失つて、即刻この場で僕を毆り殺してしまふかも知れない、つまり厭惡の情に興奮してだよ、そして僕の死骸を靴で踏みにじつても、まだ君の腹が治まらないかも知れない、それ程唾棄すべきものなんだよ。

「いや、君が今何と辯解しても、或ひは誓つてくれても、それは無駄だ、屹度さういふ結果になるに定つてゐるんだから。然し、僕もこれ迄一通りでない色々な目に遭つて來た人間だ、今更卑怯なことを言ふ譯ではない、大抵の苦勞や艱難や憂き目やは、笑つて忍ぶだけの修養を積んで來たつもりだ、だが、さういふ人間の最後の望みだ、せめて死ぬ時だけ靜かに死なしてくれ給へ、といふ最後の望みだけはかなへさしてくれ給へ。その代り、先に話したやうに、あれは僕が前後六七年もかゝつて、ぽつり〳〵と書いて來たもので、僕の以前の本を愛讀してくれたといふ君の好意に對して、僕はあの原稿を君にさし上げる光榮を有する。あの中には、文章も拙いし、殊に病氣の爲に十分に書かうと思ふことも盡せてゐないが、兎に角、僕の後半生の、或ひは一生の事件が、事件よりも何よりも僕の心の歴史が、どうにか斯うにか書き綴られてあるつもりだ。……だが、今も言ふ通り、どうか、それも三日、否二日、それとも二十四時間以上ではないのだから、僕の生きてゐる間は屹度讀むことを遠慮してくれ給へ。どうか僕の今のこの靜かな氣持を擾き亂さないでくれ給へ、引いては、僕が死ぬ迄、僕に對する君の氣持をも亂さないでゐてほしい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「實際、今僕の氣持は靜かといふ以上に靜かだ。僕のやうな境遇を經て、僕のやうな病氣に罹つて、僕のやうに死んで行く者に與へられた、これは最後の贈物に違ひない。僕は今何の心配も心殘りもない。あゝ、この一瞬間は、過去五十年の惡戰苦鬪に報いられた、僕の生涯のうちで最も幸福な頂點の時のやうな氣がする。確にこれは五十年の惡戰苦鬪と差引が出來ると思へる程、實に靜かな、平らかな氣持だな。ハタ君、今、僕には死は決して苦しいものでも、或ひは厭惡すべきものでもないと心から思へる、そして厭惡すべきものは生だよ、僕の今の氣持は、さあ、何と言つていいか、眠る一寸前のやうな氣持だね、然し、死ぬことは眠ることより遙かにいゝのは定つてゐるからね。何故つて、君、死んだら、明日はもうないんだからね。ハ、、、」と彼は最後に空虛な笑ひ聲で結んだ。

「……」然し青年は笑ひも答へもしなかつた。もつとも、彼はもう先から色々と言ひ疲れた後らしかつた。

「靜かだらう、君、」とタカガワは一分間程の沈默の後に、又言つた、然しその聲はもう可成り息苦しさうに見えた。「この家もジム夫人がゐると、ピアノの音が聞えたり、笑ひ聲が響いたり、多少は騷がしいんだがね。彼女は何でもマガラ孃の結婚の用事や何かで、昨日から倫敦へ行つてるんだ。もつとも、さうでなくても、始終留守にしてゐるがね。彼女がゐない晩は、もう八時過ぎると家中が大抵寢てしまふものだから、いつもこんな風に靜かなんだよ。……ほら、君、聞えるだらう、遠くの方で、微かに……ほら、あれが夜鶯だ。君は初めてだらう?」

「えゝ、」と青年は答へたが、彼はまだ何か外の考へ事に心をとられてゐるらしく、實際は夜鶯の聲は聞かなかつたやうだつた。

二人は無言で、長い間窓の外の、彼等のとは全く別の、他所の世界のやうに見える景色を眺めてゐた。それは全くこの二人にとつては、例へば壁に畫いてある繪か何かのやうに、見ることの外に觸れることも住むことも許されない、何

の關係もない、全然他人の世界のやうに思はれた。草原も、丘も、白い路も、そして森も、悉く限ない月かげを浴びて、丁度又それはこの二人との間に窓の硝子に依つて隔てられてゐるところの、海の底の國か、夢の國かのやうに見做された。

その時、二人の目に、彼方の森の影から、草原を横切つて此方に向つて來るところの、二人の男女の影姿が映つたのである。それは言ふ迄もなくセシルとマガラに違ひなかつた。

「君、窓を閉めませうか？」とタカガワが言つた。「僕は少し苦しくなつて來た。失敬して寢床に這入る。」

「えゝ、閉めませう、」と言つて、ハタは立つて行つて、勢よく窓の扉を下ろした。

その晩、タカガワに「お休み」を言つて、自分のに當てられた部屋の寢床に這入つてからも、若いイクタロー・ハタは容易に眠られなかつた。彼は二十四歳のその晩に、初めて人生がその正體の一部を彼に現はしたやうな氣がした。彼が本國にゐられなくなつて、亡命したのは一年前の事であつた。彼はその時の少し前まで學生生活をしてゐた。彼は兄弟の中の三番目で、當時或私立大學の文科に這入つてゐたのである。純文學をやる筈であつた彼が、いつ頃から、どういふ動機から、次第に社會問題に興味を持つやうになつたか、そしてそれが終に實行運動にまで身を入れるやうになつたか、それはもう彼自身でさへ今は記憶の外のものになつてしまつた。が何にしても、彼のやうな、文學に志す青年によく見る、情熱的な傾向の性質の者に、青年時代の或時期の考へ方が、ふとした動機から一つの方向をとつて、それがつい深入りして、そのまゝ彼の生涯を打込むやうなことになるのは、決して不思議ではないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それは彼の同時代の或青年の間に、一種の流行の思想でもあつた。折柄、歐洲に大戰爭が始まつたり、露西亞に花々しい革命が起つたり、獨逸の國情が急激に變つたり、次第に彼等の考へようとする方向に變つて行く世界の形勢を見てゐると、彼等、青年たちの血は何かなしに沸き立つた。自由を、自由を！と彼等は叫んだ。さうだ、自由だ、そして自由でさへあれば、どんな自由でもよかつたのである、そして自由を束縛するものと言へば、悉く排斥すべきものであつたのだ。自由といふ言葉の爲めには、動物園の猛獸を檻から町へ放つことさへ肯定された。反對に、自由を束縛することと言へば、汽車の機關士が、毎日一定の時刻に汽車を運轉しなければならぬといふことさへ、彼等はそれを蹂み躙れと叫んだ。が、實際、一つの革命を起す爲には、さういふ一見愚かしい、極端に見えることとさへも、必要なことには違ひないのである。

わがイクタロー・ハタもさういふ過激な青年の一人であつた。が、彼も亦彼の同志の青年たちと同じやうに、未だどんな、これといふ纒つた一つの仕事を計畫してゐた譯ではなかつた。唯、何かなしに、我々は起たなければならない、と叫んでゐた。そして唯、何かなしに、彼等の思想を壓迫しようとする權力に對しては、反抗しなければならない、と思つてゐた。その内に、學校の方で一年一年と延ばしてあつた徴兵檢査を、どうしても受けなければならぬ日が來たのである。無論、彼のやうな餘り丈夫でない身體の持主は、それを受けても多分免ぜられるだらうとは、彼も覺悟してゐたのであるが、それにしても彼にはそれが權力に强制されて受けなければならぬといふことが、どうしても我慢が出來なかつたのであつた。そして、それが彼が外國へ行つてしまはうと考へた、原因の一つになつたことは確かであつた。

ところが、それの今一つの、そして最も重要な原因となつたのは、多くの青年の場合に有り勝な、失戀事件であつ

た。彼は本國での學生生活の最後の何年間かを、或素人下宿で送つた。その家の主人の寡婦の娘が、即ち彼の戀愛の相手であつた。彼女の名はキクコと言つて、當時十八歳であつた。彼が彼女を戀したのと、彼女の身分を知つたのとは殆ど同時であつた。即ち彼女の十何年前に死んだ父の名が、モトキチ・タカガワであつた。彼はその寡婦や娘のキクコを知る前から、モトキチ・タカガワの崇拜者であつた。何故と言つて、タカガワは彼の愛讀書であるところの、當時既に發賣を禁止されてゐた小説『赤い花』や、論集『自由への道』や『共存生活』などの著者であつた。多分、彼を文學から方向を轉じさせたのは、それ等の書物が最もあづかつて力あつたものに違ひない。その著者は即ち今から十何年前にその國で起つたところの、未曾有の陰謀事件で、實際的に最も活躍した人として、それに關係した十何人かの同志と一緒に、斷頭臺で死んだ筈であつた。

だから、偶然に彼がそのモトキチ・タカガワの未亡人の家に下宿したことを知つた時は、どんなに子供らしい喜に燃たか知れなかつた。それに、タカガワ未亡人は又彼に幻滅な感じさせない程の、美貌の持主でもあつた。而も彼がその後戀に陷ちたところの彼女の娘――即ち死んだ革命家の忘れ形見の娘キクコも亦、母に似て美しい容貌を持つてゐたことは、彼に更に生き甲斐を感じさせた。彼のやうな青年にとつて、崇拜する先輩の忘れ形見といふ名前だけでも、その娘に戀することが十分出來たに違ひないのに、その上彼女が美人であつたといふことは、彼を一時は何事も忘れさせる程有頂天にしたのも無理ではなかつた。然し、さういふ甘い月日は半年と續かなかつたのである。

寡婦である彼女の母親が時々彼にこんなことを言つた「どんな意味のある運動でも、どんな必要な革命でも、私は自然の時期といふものがあると思ひます、不自然に、無理なことをしてやつて、決して成功することはありません。ハタさん、私たちはさういふ自然の時が來るまで待たなければなりません。それ迄はやつぱり學生は勉強をし、會社員は會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社に勤め、商人は商賣を勵むのが本當ぢやないでせうか？」

「いゝえ、僕にはそんな生温いことを考へてゐられません。自然の時、——そんなものは永久に來ることはありません。」とハタは言つた。

「然し、ハタさん、あなたにはお國にはちやんとした御兩親も、御兄弟もおありになるんですし、それや私にはもう隨分言ふに言はれぬ經驗があるものですから、それで言ふんですが、主義に殉じようといふ當の男は申分なく滿足でせうけれど、その犠牲になる家族の者は堪りませんよ。……」そして未亡人はその美しい顏に美しい微笑を浮べて、次第に不機嫌な顏になつて來る青年を宥めるやうに、「今だつてもハタさんにはあゝして喧ましい刑事が附いてゐるんですもの。オホヽヽ。」

ハタ青年は所謂水をさゝれるやうな厭な思をして、斯ういふ彼女の忠告を、なるべく耳に入れないやうにして聞いてゐた。が、その時はまだ、あゝ言ふ事件の渦卷に這入つて、死刑になつた夫を持つた女として、つい斯ういふ氣持になるのだらう位に思つて我慢することが出來た。そして何よりも戀が彼を一切のものに盲目にしてゐた。けれどもその後だん〲彼女のさういふ忠告が露骨な形をとつて、而もその度數が多くなつて來た。やがて、彼女はもう彼に何にも言はなくなつた。そして到頭最後の日が來たのである。

その頃、妙にキクコを彼に近づけないやうにしてゐることに、ハタは氣が附いてひどく憂鬱になつてゐたところが、或晩、それは多分キクコが外出した留守であつた、母親が彼の部屋に這入つて來て、キクコを今度或大きな藥種屋に嫁にやることにした、といふやうな話をした。無論、彼女はそれまで彼と娘とが戀仲であることを知つてもゐたし、又暗に認めてもゐたのである。それを何にも知らぬやうな顏をして、彼に暗に思ひ切らせる爲のやうに、そんな話をしかけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのである。相手の藥種屋といふのも彼は知つてゐた。それは彼等の思想に同情を持つてゐて、而も金持で、屢々彼等の仕事に寄附したりするので有名な男であつた。然し彼は三四年前に妻に死に別れた位で、可成りの年輩で、恐らくキクコより二十歳以上年上に違ひなかつた。そしてそれは娘自身も自發的にその方を望んでゐるのか、或ひは母親が强制的に彼女を說得したのか、それさへ彼に確める餘地が與へられなかつた。

　さうなると、彼はこれ迄は死んだタカガワを崇拜する心持と、そして又キクコとの戀愛の氣分とから、打消し打消しゝて來たところの、寡婦のいろ〳〵の不快や不廉な仕打を一度に思出した。美貌と化粧とで年よりはずつと若く見える彼女が、一度ならず彼に色情的な——その當時はそれを彼は心の中で否定してゐたが、今は確にさうに違ひないと思へるところの——誘惑の仕草をしたことも思ひ出した。これ迄の彼女が彼に見せた好意は、彼その者にではなく、その實家が裕福なブルジョアであるところの彼にであつた事をも、彼ははつきりと意識した。

　その後、彼は幾度その復讐として、色々の極端な方法を計畫したか知れなかつた。が、結局、その內何一つをも實行しないで過ぎた。折柄徵兵檢査の問題が起つて來たのである。彼は或日不意に思立つて、彼に反いた母親と娘との家を無斷で飛出して、それから一ケ月近くの間、色々と姿を變へて尾行の刑事の目を晦ましながら、友達の家から家へと放浪した。その放浪生活が行き詰まりになつた時、彼は露西亞へ行かうと決心した。今は靑年が戀愛などの爲に心を惱ましてゐる時ではない、と彼は自分と自分に叫んだ、が、心の中はもつと支離滅裂であつた。そして彼は到頭旅行免狀なしに、探偵小說にあるやうな冒險を犯しながら、目的の露西亞には這入れなかつた代りに、流れ流れて歐羅巴に來て、佛蘭西に一ケ月餘りゐた後に、英吉利に渡つて來たのである。だが、倫敦に着いてから、元々そんなに健康でなかつた彼は、折柄冬と霧との何ケ月かのそこでの勞働生活で、すつかり身體をこわしてしまつた。彼が今斯うして世話になつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐたミーヤ・カロックからの紹介狀に依つて、ジムの牧場をさして來たのは、當分空氣のいゝ所で、身體に餘り過激でない勞働をして、健康を回復しようといふ目的を持つてゞあつた。——

彼は心が益々興奮して、夜が更けると共に目が冴えるばかりであつた。彼は馴れない枕の上で目を開けたり閉ぢたりした。氣がつくと、いつの間にか寢床と反對の側にある衣服戸棚の横側にまで、烟つたやうな色の月かげが射し込んでゐた。考へて見ると、彼が今迄この人生で經驗して來たところのものは、學校と、警察と、役所と、思想と、書物と、そして失戀と、それが全部であつた。そして、それ等のものは、實際、彼が今日まで考へて來たやうに意志と劍とを以て戰ひさへすれば、勝つか或ひは負けるか、兎に角どちらかに片の附くものに違ひなかつた。だから、今日、二十四歳のこの日まで、イクタロー・ハタが通つて來た人生は、たとへそれがどんなに嶮しい山道だつたとしても、それは要するに彼が大凡その地圖を調べ、その行程を豫定し、その難易の程を豫期して掛つたものと言ふことが出來た、それは謂はゞ彼の方から働きかけて行つた對照に過ぎなかつた。そこには不思議といふものは一つもなかつた。——

今、十數年前に斷頭臺で死んだ筈の、而もそれは彼が少年の頃から私淑してゐた先輩である、モトキチ・ハタが生きて、現に彼の一つおいて隣の部屋で瀕死の床に横たはつてゐる事は、それを彼は目のあたり自分の目で見て來たのであるが、斯うして一人になつて考へて見ると、中々信じられなかつた、信じられないが、又信じない譯に行かなかつた。彼の目に、彼の聖者のやうに落着いた、然し何處か罪の悩ましさに堪へられないやうにも見える沈鬱な姿が、刻みつけられたやうに消えなかつた。彼は一體どういふ事をして來たといふのだらう？ その彼の經歴を打明けられたら、たとへ一分間後に彼が死ぬことが分つてゐても、人は足蹴にしても殺したいと思ふ程憎むに違ひないといふやうな、さういふ彼の經歴といふのはどういふのであらう？と思ふと、若いハタの心は好奇心に燃えた。然し、彼はその秘密の鍵を

托されてゐるのである、唯、それを彼の乞ふまゝに、彼の言葉を重んじて、彼の死ぬ時まで握つてゐるのである、と思ふと、彼は武者震ひを感じた。――

なる程、森の繁みの方からであらうか、微かに鳥の啼く聲が聞えて來る、あれが夜鶯といふものであらうか。枕から頭を上げると、燈火の消してある窓から部屋の中に愈よ深く、月かげが活動寫眞の夜景のやうな色に射してゐる。すると若いイクタロー・ハタは、ふと故國に見捨てゝ來た、不實な戀人のことが感傷的な氣持で思ひ起された。その戀人が、今彼の一つ置いた隣の部屋で、瀕死の床に横たはつてゐる人の娘であることは、間違ひのないことでありながら、而もやつぱり本當のやうにはどうしても考へられなかつた。それは彼が未だ國にゐる時分の間こそ、自分の戀人が死んだ革命家の、モトキチ・タカガワの娘であると、信じるも信じないもない、さう聞いてゐた。が、そのタカガワがこんな遠く離れた異國で、生きてゐるのを知つて、現に彼と言葉さへ交した今になつて見ると、そのタカガワと十餘年前に死んだと傳へられたタカガワと同じタカガワであることは確められても、あの娘とこの病人とが父と子であるといふことは、そこで彼等同志が、「お父さん」とか、「娘よ」とか言つて、手でも取合つてゐる場面を見ない限り、信じられない氣がするのである。

彼は無論その娘に就いては、今夜タカガワに會つた時、話し出す機會も持たなかつたし、又話すことが躊躇されもしたので、何にも言はなかつた。ましてその娘が、そしてその母が、如何に腐つたブルジョア的な戀を持つてゐるかといふ事、自分がこんな外國を放浪するやうになつた最も主な原因が彼女等にあるといふ事などは、今夜は兎に角、これから後どんな機會があつても、話すべきだらうか、話さない方がいゝだらうか? 若し、彼が本國で彼等と近附きであつたといふことを話したら、當然そこ迄話さないではゐられないだらう。……が、何にしても、その晩はそれに就いて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は一言も言はなかつたのである。然し、今その思出は、彼にとつてこの五月の夜のやうに惱ましかつた。彼は眠られないまゝに、二度ばかり便所に通(かよ)つた。

便所は二階を横斷してゐる廊下を境にして、ハタの部屋からすると、家の反對に面した側の左手の隅にあつた。見るともなしに、その窓から見た眺望は、氣持の感傷的になつてゐた若いハタを、場所柄をも忘れて、長い間そこに立止まらした。それは今迄表側の景色にだけ馴れてゐた者にとつては、正に思ひがけない眺望に違ひなかつた。その家の裏手は、その邊に起伏してゐる幾つかの小山の中でも、一番高みにあるものゝ端になつてゐたので、それは大した崖とか、山の頂上とかいふ程の場所ではなかつたが、直日の前に大きな傾斜を打つて波形に搖れてゐる、幾つかの小山の彼方に、廣がつてゐるところの、シヤカシギーアの盆地が、今しも月光の下に、一目に見渡されるのである。所々に箱庭の假物のやうに見える牧場や、稀に人家や、廣々とした麥畑や、道路や、それから盆地を圍んでゐる穏かな形をした國境の山脈や、それ等が青とも、緑とも、紫とも、水色ともつかぬ、悉く殆ど一色で畫かれた畫のやうに見えるのである。馴れない景色だから、彼には分らないが、多分その中のどの點かには、彼が昨日下りて來た停車場も、指呼することが出來るのであらう。

ふと、ハタは目を窓の下に落した時、そこの僅ばかりの庭にこしらへてある花壇の周圍の、三つ四つ捨てられてあるベンチの一つに、一箇の人影を認めてはツとした。最初、彼は何といふことなく惡い者を見たやうな氣がして、鼠のやうに恐縮して首を縮めたが、好奇心が再び彼を窓から覗かした。無論、そんな夜更ではあるが、それが泥棒とか何とかいふ怪しい者とは、彼には初めから思はれなかつた。次の瞬間、彼はそれがこの家での彼の一番馴染であるところの、セシル・トーリイの外の者ではないことを認めた。だが、彼にはセシルが何の爲に、こんな夜更に、一人で庭のベンチ

に腰をかけて、溜息を吐いてゐる(?)と見えるか、それは分りやうもなかつた。然し、その姿を見てゐると、彼自身も亦、セシルのやうにこの家や庭やに住み馴れてゐたら、セシルのやうに今夜あたりはあの花壇の傍のベンチに腰かけて、セシルのやうに溜息を吐くに違ひないと思ふと、どうやら、セシルが何をそんなに悩んでゐるかゞ分るやうな氣がして來た。

然し、いつ迄もそんな所にゐてそんな窓から人の秘密らしい姿を見てゐることに氣が咎めて來たので、ハタは成るべくそツと音を立てないやうに便所を出て、自分の部屋に歸つて行つた。彼はそれから部屋に歸つて、漸く一時間ばかりうと〳〵と眠つたと思つた。すると、本國にゐる時分の夢を見た。夢の中にはタカガワ夫人や、娘のキクコや、それからタカガワも、トーリイも、マガラも、ジムも出て來たやうに思ふ。が、それはどういふ所で、どんな事が起つた夢だか、醒めた時までは多少ぼんやりと覺えてゐたが、直に忘れてしまつた。

さて、目が醒めた時、彼は又便所に行きたくなつたので、そつと廊下への扉を開いた。すると、思ひがけなく、彼の部屋の筋向うのセシルの部屋から、セシルが出て來たのと、廊下越しにばつたり顔を合はしたのである。何方も、暫くの間、極り惡さうに默つてゐた。

「早いですな。それとも、眠れないんですか?」と先づセシルの方から聲をかけた。

「えゝ、變つた寢床に這入ると、いつも斯うなんです、」とハタは答へた。「殊に此頃は身體の惡いせゐもあるでせうが、不眠症で困つてゐるのです。あなたもさうなんですか?」

「………」セシルはそれには答へないで、「便所に入らつしやるんでせう? どうぞお先へ。………そして、どうです、間もなく夜が明けるでせうから、何ならそれ迄僕の部屋へ話しに來ませんか?」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「有難う。私も望むところです。」

セシル・トーリィの部屋も亦、向きこそ違つてゐたが、作りはタカガワのと同じであつた。二人の青年はそこの出張つた窓の一つの傍に椅子を持つて行つて、それが窓の幅さだけしかない狭いところなので、窮屈さうに二つの椅子を並べて、窓の外に向つて二羽の小鳥のやうに並んで腰かけた。さうして、まるで水の底のやうな、青い五月の夜の景色を眺めてゐると、二人はもうずつと前からの古い友達であるやうな氣がして來た。

「君はずつと起きてゐたんですか？」とハタが外の景色に目をやつたまゝで尋ねた。

「えゝ、」とトーリイは何か外の考へ事に夢中になつてゐるやうな聲で答へた。

その時、ハタは昨夜、タカガワの部屋からこんな風にして外を眺めてゐた時、セシルがマガラと手を組みながら、森の方から歩いて來たことを思出した。さうだ、この男は今戀の思に惱んでゐるんだな、と思つた。さう思ふと、彼は自分がこんな遠い見知らぬ國に來てゐることも、或ひは自分がそんな他依りない境遇にあることも忘れて、相手の青年が如何にも組し易い、彼から見るとずつと幼稚な人間のやうな氣がしたので、

「僕は、」と相變らずぎこちない英語でだが、多分に兄のやうな口調で言つた。「僕は君が何か心に煩悶を持つて居られるやうに想像しますが……」

「君の想像の通りです、」とセシルは正直な調子で答へた。そして暫く沈默してゐた後、やがて思ひ切つたやうに、「君は戀をしたことがありますか？……そして若し君が君の抱いてゐる主義と戀とい板挾みになつたと想像したら、君はどうしますか、さういふ場合？」

「無論、僕は戀を捨てます、」とハタは言つた。が、彼は心の中で、自分よりこの男の方がずつと正直だと思つて、内

心甚だ極りの惡さを感じた。若し自分が本國で、キクコとの戀が順調に進んでゐたら、と彼は考へて赤面しない譯に行かなかつたのである。

「僕は君を羨ましく思ひます、」とセシルは言つた。「僕は本當の話をしますが、僕は今戀をしてゐるのです、而も、その僕の戀の相手は不信な女なのです。それでゐて、僕はその不信なものが思ひ切れないのです。ハタ君、僕を笑はないで下さい。」

その時分から、少しづゝ東の空の色が變つて來た。

「おゝ、もう夜が明けて來ました。僕は思はずつまらないことを白狀しました、」とセシルは言つた。「どうぞ、君、僕を笑はないで下さい。」

「いゝえ……」とハタは言つた。彼も、この昨日會つたばかりの異國の青年の、センチメンタルな然し正直な告白を聞いてゐるうちに、段々身につまされて來て、いつその事自分の煩悶をも相手に正直に打明けたくなつて來た。打明けてこの青年と一緒に泣きたい氣持にさへなつて來た。

が、その時、向うの部屋から廊下を驅けて來る慌しい足音が起つた。足音は彼等の部屋の前に止まつて、續いてコツ〳〵と激しい叩の音に變つた。「お這入り」と中から聲をかける迄もなく、

「セシル、セシル！　早く起きて來て下さい、」と戸の外でマガラの叫ぶ聲がした。「Mr. Takagawa の容態がいけません！」

中の二人の青年は彈かれたやうに立上つた。

さて、問題のモトキチ・タカガワの生前の遺稿を開ける時が來たのであるが、それは曾て『赤い花』や『自由への道』の著者として、當時彼の本國の評壇でも相當にその文名をうたはれた彼が、たとへ病中にとは言ひながら、前後七年の年月の間にぽつり〳〵と認めたといふ、彼の所謂生涯の事件が、「事件は兎も角、彼の命懸けの煩悶が書き綴つてある。」といふ程のものであるから、今それをハタ青年と共に慌しく讀む譯には行かないのみならず、限りある時間では、その梗概をさへ傳へることが出來るかどうかを、私は危ぶむものである。然し又、彼が誰であるか、どうして既に故國の斷頭臺 死んだ筈の彼が、斯ういふ異郷の空で十年も生き延びてゐたか、その間に彼がどういふ心の歴史を經て來たか、といふ話は、これは是非ともこの小説の重要な事件として、どんなに簡單ながらにでも、その彼の遺稿に依つて、傳へなければならぬ義務を、私は讀者に負うことを感じるものである。

××事件で、私は一年四ケ月の獄中生活を送つた。當時、私は未だ二十四歳の青年であつた。あの事件に關係した者は、當時の本國の同志の殆ど總體だつたと言つても、間違ひではない、けれども、實際に法に咎められたものは十四人であつた。そしてその十四人の中で、私がその主なる罪を一人で背負つて立つた譯であつた。それは、私としては、自分の信ずる主義に對しての、私の最初の貢献のつもりではあつたが、而もみんなの中での多分一番の年少者であつた私が、彼等の罪を被つて立つたといふことは、私に恰も昔の士が、その初陣に一番槍の功名をした程の、晴れがましさを覺えさせた。十四人の中で、私を除いた他の最も罪の重かつた者で、漸く六ケ月の禁錮に過ぎなかつた。他は悉く二ケ月

或ひは一ヶ月の類であつた。そして、私だけが一年四ヶ月の禁錮に處せられたのである。

當時、私に一人の妻があつた。妻といつても、所謂内縁の者に違ひなかつたが、私たちは既に何年越しかの戀仲でもあつたのだ。私たちは同じ郷里のもので、年は二歳違ひであつた。今、私はこゝでどうして私たちが最初知り合ひになつたか、どうして私たちが戀を語り合つたか、どうして頑冥な郷里の人々の中で、私たちが互ひに勵まし合つたか、そして人生の第一歩を私たちが互に手を取り合つて、夢と空想とに胸を膨らませながら突進したかを叙述することは止めよう、それは私の今は昔の恥づべき著述『赤い花』の中に、然し當時の未だ汚れない、純な一本氣を持つて、小說的の筆法でだが、書いておいたから。

私が入獄した時は、彼女と同棲して未だ半年と經たない日のことであつた。一年半の間、彼女と別れて暮さねばならなかつたといふ事は、何と言つても、それは私の最も苦痛事に違ひなかつた。だが、それは何とも仕様のない事であつた。主義の前には、どんなに愛する者をでも、親でも、子でも、妻でも、無論、捨てなければならない、――私は詩人のやうに彼女の戀しさの思が募つて來ると、自分の抱いてゐる主義に奉ずる思に、一心不亂に油をそゝぎかけては、その炎で一切の女々しい感情に打ち克たうと努めた。私の留守の間、彼女は同志の人々からの補助で、さしたる不自由もなしに暮してゐると知らして來た。私は安心して一年半の獄中生活を送ることが出來た。私は獄中生活がどんなに辛いかとか、絶えず彼女の身の上を心配してゐるとか、一切さういふ弱さうな事は手紙に書かなかつた。が、彼女からの手紙は、それは無論親展といふ譯には行かないのであるから、普通の妻が離れてゐる夫に送るものゝやうな優しい文句ではなかつたが、それでも字と字、行と行との間には、如何にも女らしい情のこもつたものであつた。私はそれを讀む毎に、どんな辛い日でも、この世の生き甲斐を感じた。そして年季の明けるのを待つ兵隊のやうに、獄を出る日を指折り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

數へた。獄を出て、私は一年半振りで彼女に會ふ日のことを想像した。そして又主義の爲に戰ふ日のことを想像した。空想は益々發展して、この自分の入れられてゐる監獄の部屋が、いつの日か有名なモトキチ・タカガワが彼の最初の獄中生活を送つた紀念の部屋として、公開の一隅にでも移されて、やがては國民の感謝の目に曝されるであらう日の事まで想像した。

出獄の日の朝は、先輩Y——氏を初め、二十人餘りの同志の人々が、監獄の門まで迎へに來てくれた、その中に一年半の間、誰よりも最も熱心に今日の日を待ちもうけてゐてくれた筈の、私の妻もまじつてゐたのは言ふ迄もない。彼女は如何にも社會主義者の妻らしい、落着いた態度で、涙を目に溜めるとか、俯向いて聲を呑むとか、さういふ女らしい振を少しも見せないで、低いが力のこもつた聲で、私の傍に來て、

「御無事で、よく歸つて入らつしやいました。」と言つた。

私の方が却つてそれに對して感情が興奮して來て、目を下に落して答へた位だつた。

彼女は私の留守の一年半の間に、出來るだけ勉強したと言つた。現に、獨乙語などは私よりずつと上達してゐた。私が監獄に這入る前までは、ついその日その日の小遣に困つたりしては、一冊の本も私たちの本箱には落着いてゐたかつたのに、私が歸つて來て驚いたことは、本箱に本が一ぱい詰まつてゐたことであつた。それ等の大部分はY——氏その他二三の人たちに借りたものではあつたが、一部分は彼女が買つたものである、と彼女は誇らしさうに言つた。若い妻が夫の留守中に、彼の信奉する主義の爲に、そんなに勉強してくれてゐたといふことは、自分が勉強した程にも、彼にとつては喜びであつた。私の妻に對する愛情は更に二倍にも三倍にも增した。

ところが、その幸福が三ケ月と私に續かなかつた事が起つたのである。それは、何といふ私の驚きにまで！　私が氣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がついた時は、彼女は姙娠六ケ月の身體であつたのだ。私は初めそれを容易に信じることが出來なかつた。「どうしたんだ、變に腹が脹れてゐるぢやないか！　姙娠してるやうだな、」と私は、その實際を知る前には、二三度こんな事を半分冗談の口調で言つた位である。「えゝ、」と彼女は答へた。が、それ以上何にも言はなかつた。私も何にも聞かなかつた。まさか私はそれを姙娠だと想像することが出來なかつたのである。さういふ間も、後になつて知つたところに依ると、彼女は彼女の手で盡せる限りのあらゆる方法で、その生れて來るものを妨碍しようと試みたらしかつた。現に、私がそんな冗談のやうな質問の言葉を言ふやうになつてからも、彼女は未だ何とかそれを處分するつもりでゐたらしいのである。あゝ、女といふものの最も憎むべく、そして最も恐るべき特質は、どんな惡事をでも、どんな隱し事をでも、それを人の前で顏色一つ變へずにやり了せることである。つまり、彼女等は、どんな卑少な男でもが持つてゐるところの善惡といふものの、或ひは道德といふものの、どんな觀念をも生れながらに持つてゐないといふ事である。

それでも私は尙彼女を全然絕望して見離すことが出來なかつた。或晩、私たちは刑事の尾行を避ける爲に、家の中をそのまゝにして、表の閉りもしないで、そつと裏口から散歩に出た。私たちの家は當時、N——區の場末にあつた。多分秋の初の頃であつた。私たちの家の裏木戸を出ると、その邊の長家と長家とが背中合せになつてゐる間に、半間ほどの路次があつて、それが蜂の巣のやうに縱横に通じてゐる。私たちは刑事の目に附くことを恐れて、わざと彼方此方と曲り曲りして、やがてとある大通に出たが、そこを又直に横切つて、出來るだけ細い道を選んで、それから一二町行つたところで、廣い水田のつゞいてゐる田舍道に出た。その邊は北の方は何處までも打開けた平野で、晴れた晩のことだつたから、地平に近い空に、大熊星が筋斗打つたやうな恰好に、傾きかゝつてゐるのが見られた。

「あんまり步いたら身體に惡いだらうが、少し我慢してくれ、」と私は然しそんなに皮肉な意味でなしに斯う言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼女は點頭いたやうであつたが、言葉では返事をしなかつた。

その日の夕方、私は彼女から初めて姙娠のことを聞いたのであるが、その晩の散歩で、私は改めて、彼女が私の留守中に、私たちの同志の中での先輩であるY――氏に依つて、姙娠したことを確かめたのであつた。

私は、彼女が同じさういふ不義をするなら、せめてそんな私の同志で、而も私の尊敬してゐる先輩を相手にしないで、いつその事、町の役者とでも、或ひは遊冶郎とでもしてくれた方がよかつた、と怨みに思つたが、それも後の愚痴に過ぎなかつた。然し、私はそれも悪い夢でも見たつもりで忍ばうと思つた。彼女も今後は決してさういふ罪を犯さないから、と涙を流しながら、許してくれと私に乞うた。私はどんな機會から、どんな風にして、彼等がさういふ關係を結んだか、といふやうな事は、聞けば尙自分の氣持の亂れることを恐れて、强ひて聞かなかつた。考へて見ると、私といふ人間は情熱的である傍ら、人一倍の弱蟲で、臆病者に違ひないのだ。私がその時、事を表立てゝ、畢竟自分を苦しめ、Y――氏や私の妻やを混亂に陥れ、且つは同志の人々を騒がせることを遠慮したのも、實は人を許すといふ氣持よりは、自分の氣持を亂すことを恐れた爲だつたと言ふ方が本當に近かつた。だが、その時は、私は大きな度量の人間になつたつもりで、彼女を許した氣でゐたのである。

それから又一ケ月ほど後のことであつた。或晩、友達のムツオ・オハラが遊びに來た。オハラは私と年も餘り違はない關係から、同志の中では私の最も親しい友達であつた、そんな譯で、彼は三日に上げず私の家に遊びに來てゐたから、彼が來たのは何の珍しい出來事ではないのであるが、特にその晩のことを私がこゝに書くのは、次のやうな事が起つたのである。

もつとも、その時彼は珍しく私のところへ一週間ばかり無沙汰にしてゐたのと、私も丁度退屈してゐた時だつたので、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私たちは不斷よりも一層喜んで彼を迎へた。が、その晩に限つて、いつも快活な男である彼が、妙に屈托があるやうに沈み込んでゐるので、

「どうしたんだ、何か心配事があるのか?」と私が聞いた位だつた。

「いや、」と彼は何故か極り惡さうに斯う言つたまゝで、後に何の說明も加へなかつた。が、それからも、妙に口をもぐもぐさして、何か言ひたさうにして躊躇してゐるのが、私の注意を引かない譯に行かなかつた。すると、到頭、彼が言ふには、

「タカガワ君、少し話があるんだが、君、散步に出ながら、聞いてくれないか?」

考へて見ると、それは私の妻が臺所の方に何かの用事で立つて行つた時に、低い聲で言はれたことを、私は後になつて思ひ當つたのである。

「うむ、出てもいゝよ、」と私は應じた。

そして、さういふ場合の私たちの約束のやうになつてゐた通り、それは私と妻とがいつか彼女の姙娠に就いての苦い話を交した時に出て行つた通りに、裏口から拔け路に依つて郊外の方へと步いて行つた。やつぱり晴れた晚であつた。丁度一ケ月前に私は妻とこんな風にして步いたことを思出した。が、何といふ因緣であつたらう、その晩、私たちの間に、やはり妻の姙娠に就いての話が出たのである。私は然しまさかさういふ話が出ようとは豫期しなかつたのである。だが、その晩、久しぶりで會つたにも拘らず、彼がいつになく鬱いでゐて、而も頻りに何か言ひたさうにして中々言ひ出し兼ねてゐる樣子が、私に一種の不吉な豫感を與へたことは事實であつた。だから、次第に私はそれが彼自身だけのことではなく、私の身の上にも何か穩かでない言葉を、彼が胸に持つて惱んでゐるのに違ひないと感じられて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「タカガワ君、僕は君に何と詫びていゝか、その言葉が見付からないのだ、」と到頭彼は切り出した。その時、私たちは田圃に沿うた道を歩いてゐた。

「何だい、突然僕に詫まるなんて？」と私は詫びるといふ相手の言葉で、幾分氣が輕くなつたのを覺えて、ほツとした氣持で斯う聞いた。

「僕は君に毆り殺されても決して怨みに思はない、」とオハラの言葉は、私とは反對に、次第に芝居的に興奮して行つた。が、私はやつぱりそれと一緒に興奮することなしに、多少相手をあしらふやうな調子で應じた。

「大變な事になつたね。一體どうしたと言ふんだい？」

「事實、大變な事なんだ、」とオハラは重苦しい調子でつゞけた。「それで、僕は君の許しを乞うてゐるんだ。心から後悔してゐるんだ。然し、君の氣持で、どうしても許すことが出來ないと思つたら、どうか君の思ふ存分に僕をしてくれ給へ。僕は甘んじて君の前に僕の身體を投げ出す。」

その時。私たちの道はA――侯爵家の持地の傍を通つてゐた。といふのは、右側はずつと今迄通りの水田の續きであつたが、左側は土手に依つて一段高くなつた侯爵家の地面が起つてゐた。オハラはそこで突然わツといふやうな、低いが重苦しい呻き聲と共に、役者のやうにその左側の土手の上に身體を投げ出した。

「どうしたんだ、君。」と私は未だその晩の彼の言ふ事爲す事が、餘り芝居氣たつぷりであるやうな氣がして、どうも眞面目な氣持で對することが出來なかつたので、「何が何だか僕にはちつとも分らないぢやないか？」と投げやりな調子で言つて、仕方がないので、私も彼の俯伏せに寢轉がつてゐる傍に腰を下した。丁度土手の傾斜がさうするのにいゝ具合になつてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「君は何も彼も知つてゐて、それで默つてゐるんではないか？」と彼は苦しさうな聲で言つた。「君、どうか遠慮なく僕を攻めてくれ給へ。」

「僕には君の言ふ事がちつとも分らないよ。いつもい君にも似合はないではないか　許すも許さないも、僕には何を許すのか、何の事だかさつぱり分らない、オハラ君、どうせ話すことなら、早くはつきり話してくれ給へ、」と私は言つた。そして、彼が容易に話し出さない間を、私は默つて天を見てゐた。ひどく空の彼方で稻妻の光る晩であつた。

「タカガワ君、タカガワ君、」と彼は到頭言つた。「許してくれ給へ。僕は君の細君の今度生れて來る子の父親なんだ。僕はもう君が彼女からそれを聞いてゐるかと思つて見たり、未だ聞かないのかと思つて見たり、君に會ふ每に君が何にも言はないので、僕はどんなに苦んだか知れない。君は本當に未だ細君から何にも聞いてゐなかつたのか？」

私のその時の驚きは口には言へない。私は默つて、頻りに空の彼方に光つてゐる稻妻を見てゐた。私はその晩ほど、私たちが每日無心でその土の上を踏んで生きてゐるところの、この世界が不思議なものに思へたことはなかつた。私は恐らく何にも考へる能力を失つたのかも知れない、唯ぽかんとして、言ふべき言葉を知らなかつた。

その晩、私が途でオハラに別れて、一人で家へ歸つて來ると、

「おや、お一人？」と妻は私の顏色を窺ひ窺ひ、然し一向落着き拂つた樣子で尋ねた。「大變お顏色が惡いやうですが、どうかなすつたんですか？」

だが、彼女が今夜のことを察してゐない筈はないのである。私は一人で歸る途々心の中で、私が家に這入ると共に、許してくれ、と言つて、私の足下に泣きくづれる彼女を想像して來た。それが何といふ白々しさだらう。おゝ、惡鬼よこの女を連れて行け、と私は心に叫びながら、殆ど彼女に向つて手を振り上げさうになつた。

「どうなすつたの？　お顔色が眞青ですわ、」と彼女は倘も落着いた態度で、然し心配さうに言つた。その樣子を見ると、彼女はやつぱりまさかオハラがそんな事を打明けたとは想像しないのかな、とも思つた。

「うむ、何でもないよ。少し氣分が惡いんだ。直寢よう、」と私は言つた。

私は寢床に這入つてからも、幾度決心して、今夜のことを彼女に詰問しようと、半分起ち上つたか知れなかつた。然し、こんなに自分の心持が氣狂のやうに亂れてゐる時に、それをするのはよくないと思ひ返した。翌日もさうであつた、その上、もうこの事は自分の胸の中にだけに收めて、永久に彼女に何にも聞かないでおかうかとさへ考へた。が、ふと彼女の最早や目に立つて大きくなつてゐる腹を見ると、その中にあるものがY——氏のでなく、親友のオハラのであつたかと思ふと、私の頭はむら／＼と狂ひさうになつた。私はそれがオハラのであるよりは、未だそんなに屢々顔を合はすことのないY——氏のであつた方が、と思つた。

それから三日目だつたかに、私が我慢し切れなくなつて彼女にその事を尋ねた時、彼女は初めて泣きながら、

「濟みません、濟みません、」と言つた。

「ちやあ、Y——さんは嘘なのか唯だだしに使つただけなのか？」

「濟みません、濟みません、」と彼女は泣きながら言つた。

どうして初めからオハラの事を打明けないで、そんな何の關係もない先輩のY——氏の名を使つたかといふ、淺墓な女心に就いては、私はくどく詰問する必要を認めなかつた。然し、彼女はやがて涙を收めて、私が餘り聞きもしなかつたのに、オハラとは唯の二度しかさういふ秘密な出會ひをしたことがないとか、又オハラはあゝいふ正直な男だから、その後は二人切りで會つた時も、タカガワに濟まないと言ひ言ひしては、後悔してゐたし、彼女も無論後悔してゐたの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、決して罪を重ねなかつたといふやうな事を、ぽつり〱と話した。だが、どうして二人が初めての罪を犯したかといふ話には少しも觸れなかつた。彼女の方から仕掛けたのか、オハラの方から誘惑したのか。だが、私はそれを質すことは何だか恐しいやうな氣がして、それに就いては聞くことをしなかつた。が、私の心の中で、彼女の方からか、彼の方からか、といふ問題に、その時ばかりでなく、その後も屢々考へて惱まされた。然し、大體に於いて、さういふ事を女の方から持掛ける例といふものは滅多にない、といふ考で私は氣を安めてゐた。

私たちは又今迄のやうに暮した。だが、それ等のことがあつてからは、私の人生がどんなに陰鬱な雲で蔽はれるやうになつたかは言ふ迄もない。それでゐて、私も妻もなるべく快活に快活にと心がけるやうにして暮した。だが、幾ら快活を裝はうとしても、私たちの不幸の源であるところの、彼女の腹は次第にその存在を誇大にして來るのを防ぐことは出來なかつた。それでも、未だそのまゝに何にも起らないで過ぎたならば、多分今頃私は自分の子でない子の父となつて、私も老い私の妻も老い、私たちは私たちの國民の先祖がさうであつたやうに、七分の諦めと三分の慰めとに、一日も早く佛陀の國に招かれる事を待ちながら、秋の日のやうな寂しい日を送つてゐたかも知れない。

妻の姙娠が九ケ月目の或日であつた。その時まで何の變つた事もなく生れて來る子供の着物の用意か何かをしてゐた彼女が、突然襲はれたやうに腹の苦痛を訴へ出した。それは少し治まつたかと思ふと、直に逆戻りするやうな病狀で、醫者に見せないでは到底安心出來ない容態に見えたので、その晩、私は使をカミサワ醫師のところへ走らした。この醫師も亦私たちの同志の一人であつた、私たちは病氣の度毎に彼の世話になつてゐた。で、彼は直に見舞つてくれた。彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の診斷では、多分心配することはないだらうが、若しかすると早產するかも知れない、何にしても十分な用意のない家庭に置いておくよりは、病院に入れた方が安心だらうとのことであつた。さういふ中にも、妻は頻りに苦痛を訴へるので、應急の注射などをしてもらつて、さし當り何處の病院に入れるといふにしても色々都合があるので、寢臺俥を雇つて、カミサワ氏のところに預かつてもらふ事にした。

さて、彼女がカミサワ醫院に入院してから三日目の晩のことであつた、晝間から吹き頻つてゐた風が夕方になつて急に止んだかと思ふと、その季節には珍しい大雨が降り出した。朝のうち一寸見舞つた時の樣子では、彼女の容態は大變落着いてゐたので、私は雨に僻易して、一晩病院行を無性することにした。私は激しい雨の音を聞きながら、私の書齋でもあり、客間でもあり、そして又妻の部屋でもあるところの、奥の八疊の間で、火鉢を抱いて何かの小說本を讀んでゐた。妙に頭の落着かない晩で、現に小說の前にはクロポトキンの本を讀んでゐたのだつたが、餘り頭に這入らないので氣持を變へるつもりで、小說を讀み出したのである。その小說が又ひどく退屈な、面白くないものであつた。私はそれを讀みながら、いつとなしに讀んでゐなかつた、そして唯ぶら〳〵と頭を散步さしてゐた。

その晩のことを私は惡魔の晩と名づける。實際、若しこの世の人々を神が見張りしてゐるやうに、惡魔も亦人々を見張りしてゐるとしたならば、否、私の考では我々を神が見守つてゐることはそれは唯人間の勝手な甘い空想に過ぎないが、惡魔が人を狙つてゐるといふことは確にあり得ると思ふ。その晚、私はいつの間にか讀みかけてゐた小說本を机の上に置いて、何か譯の分らない妄想にでも取憑かれたやうに、頭をぶら〳〵散步さしてゐた時、ふと何とも言へぬ不快な氣分に襲はれて首を縮めた。若し何も知らない人がその時の私の樣子を何處かゝら見てゐたならば、彼は恐らく私がその家の人間ではなく、何處かから泥坊に這入つて來たものだらう、と想像したに違ひない。つまり、その刹那、惡鬼

が私の頭に何か惡い息を吹きかけたに違ひないのである。私は首を縮めて、泥坊のやうな目附をして、それは實際突然そんな考に襲はれたのであるが、といふのは、私は今夜留守中の妻の秘密を探つてやらうと思ひついたのである。

　私の妻に秘密があるかないか、私はその時まで實際そんな事を考へたことがないと斷言してもいゝ。何故と言つて、秘密どころか、私は彼女が私の入獄中に、私の親友と不義をして、目下その種を宿して、その爲に入院してゐるのを知つてゐるではないか。それ以上私に何を知りたい事があるだらう。私はそれを知つた日以來、成るべく態度には出さないやうに心掛けてはゐたが、然し一日として、折に觸れ時につけて、その事を考へて煩悶しなかつた日はなかつた。この上に何の秘密であらう？　ところが、それにも拘らず、さういふ理屈は一切拔きにして、私はふとそんな氣になつたのである。そして、私は縮めてゐた首をそろ〳〵延ばして、ぼろ〳〵の簞笥や、小さな小簞笥や、それから本箱や、押入や、色々なものがごた〳〵と並んでゐる部屋の中を見廻した。押入の中には行李が三箇あるし、まだその中に色んなごた〳〵した箱の類もある、簞笥の上には針箱もある、その外鏡臺、化粧道具を入れた箱、何、何と私は頭の中に並べて見た、そして立上つた。

　然し、私は何を探すのだか夢中であつた。而も可成り血眼になつて何かを探し出す爲に、本箱の蓋を開けて本の頁をパラ〳〵と開きながら振つて見たり、針箱の引出しを片つ端から拔いて見たり、行李の蓋を取つて、中から着物の類を古着屋のやうにつまみ出して見たり、氣狂のやうになつて調べ始めた。然し、本箱には本が、針箱には絲や鋏が、そして鏡臺には髮の道具が、それ〳〵あるべき所にあるべきものがある切りだつた。然し、私は尙夢中で、子供が玩具箱を掻き亂すやうに、手當り次第に色んなものを引出した。が、そのうちに段々自分で自分のしてゐることの目的が、今迄意識の底にあつたものが、次第に浮き上つて來るやうに、分つて來た。私は何か書いたものを探してゐたのだ。私はふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、箪笥の引出しの中から背負上げを取り出した。そして私は、それを豫期してゐたのか、豫期してゐなかつたのか、忽ち身體が一本の棒になつたと感じた程の驚きに迫、その中から見出したのである。何を？　一束の手紙の反古を！

私は今時の而も一廉の、新思想を持つてゐる筈の女が、斯ういふ事になると、昔のあり來りの女と少しも變らない、斯ういふものを斯ういふ所へ收つておくといふ皮肉さをも、笑止さをも忘れて、その手紙の束を震へる手に掴んだ瞬間、私の目の前に、それはもうその後二三度も會つてゐたし、無論許してもゐたつもりだつたところの、ムツオ・オハラの姿が立ちはだかるやうに現れた。私はその最初の一通を取上げて、中味を讀む前に差出人の名前を調べた、彼の癖である、變に細長い書體の文字で、ムツオ・オハラと認めてある見馴れた文字を想像しながら。だが、それを、實は取上げた瞬間に、私ははツとして、これはオハラの筆蹟ぢやないぞ！　と心の中で叫んだ。私は一層震へる手と、動悸する胸を制しながら、おゝ、それが矢張りＹ――氏からのであることを發見した。けれども、私は次に彼からのが、そんな背負ひ上げの中に入れるやうな種類の手紙ではないだらうといふ事を信じようとした。が、私はその中味を讀むことが何とも言へぬ恐ろしくなつて來た。然し私は到頭勇氣を出して讀んだ、そしてそれが紛れもない戀の手紙であることを確めなければならなかつた。それは何でも極めて簡單な内容で、何日の何時頃何處其處で待つてゐるから來てくれないか、餘はお目にかゝつた上で、といふやうなものであつた。私は貪るやうに第二の手紙を取上げて見た、無論、それもＹ――氏からのであつた。私にして見ると、それでも未だ先のは怪しい會見を意味するものではないと考へたかつた。だが、第二の手紙は斷然私に都合のいゝ考をさせる餘地を殘させなかつた、といふのは、それは明らかに何處かの待合から、俥屋か何かに托して誘ひ出す手紙であつた。俥を上げたいのだが、それでは人目につくことを恐れて、わざと遠慮した、といふやうな斷り書きがあつて、その代り彼のゐる待合の所在を示した、略圖のやうなものが書き添えてあつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。

斯ういふ事がありながら、どうして彼女は私にあんな嘘を吐いたのだらう、と私は一瞬間考へた。が、次の瞬間、それよりも、何故にオハラがあんな嘘を私に告白したのだらう、と私は不審に思つた。若しかすると、彼は彼女に頼まれたのか知ら？　然し、それにしても、それにしても……と私の頭の中は熱湯のやうに沸き返つた。そして私は夢中で第三、第四と手紙を拾ひ上げた。それはいづれも同じやうな、簡單なY――氏からの手紙であつた。ところが、そこに再び私を吃驚させる事が起つた。三通四通と私が讀み且つ調べ進んで行つた第何通目かのをそれを、取上げる刹那に私はふとそこに今迄とは違つた筆蹟――それは最も見馴れてゐる他人の筆蹟――細長い癖のある、オハラの外の誰のものでもない筆蹟を發見したのである。私はその時氣絶しなかつたのが不思議な位であつた。私はその中味を封筒の中から引出す暇もなく、びり／＼と引裂いて、中から可成りの厚味のある手紙を取出した。私は初め夢中でそれの頁を讀んだが、何が書いてあるか、殆ど頭に這入らなかつた。兎に角、そこには前のY――氏の場合の、唯用事だけが簡單に認めてあるのとは違つて、甘い小說家のやうな筆附きで、所々小說の文句などを引用した、青年の戀文にあり勝ちな取止めもないことが際限もなく書き聯ねられてあつた。私は最先に飛ばし飛ばし、一氣に讀んだ。次に飛ばさないで一通り讀み返した。それからもう一度ゆつくりと初めから讀み直した。私はつゞいて一通、又一通と氣狂のやうに拾ひ上げては封筒を引裂いては、その中を讀んで見た。無論、それ等は悉くオハラからのであつた。その中には隨所に、彼女の夫で今は入獄してゐる私に濟まないといふ言葉が書いてあつた。然しさういふ言葉は、私を更に苛々させるばかりで、少しの氣安めにもなる筈がなかつた。私はそれ等の手紙の一々の文字を味ふやうにして讀みながら、一體どちらが先に働きかけたのであるかを知らうとした。この事は、斯ういふ手紙を見る前からも、屢々私を悩ました問題であつた。だが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今この手紙を穴の開く程睨み詰めてゐても、時としては彼からのやうでもあり、或ひはやつぱり彼女からのやうにも見えたり、要するに私の混亂した頭は何の判斷を下すことも出來なかつた。

私が知り得たことは、今妊娠九ケ月で、而もその爲に身體に故障を起して病院に這入つてゐるところの　私の妻の子の親が二人であるといふことだけであつた。だが、私にもつともつと知らなければならぬ事が待つてゐたのであつた。それは彼女の背負ひ上げの中に這入つてゐた手紙はそれで未だ五分の一にも、或ひは十分の一にも當らなかつたからである。それで、人は十分想像することが出來るだらうと思ふ、そこにはまだ色々な、外の人々からの同じやうな種類の手紙が這入つてゐたといふ事を、その中には、彼女が未だ鄕里にゐる時分に、私以外の者から貰つた手紙も這入つてゐたし、當時の私からのも這入つてゐた、が、こんな大きな驚きの後では、そんな鄕里でのことなどは問題にならなかつた、或ひはそんな事で驚いたり、不快になつたりしてゐる暇が與へられなかつた、一分間後には、同じ束の中から、私は醫師のカミサワの手紙を見出した、そして又一分間後には同志のヘンミの手紙を見出した。——

今、私の心持は可成り落着いた境地にあるといふことを、言ひ切ることが出來る。少なくとも、あの頃の事件は、私にはもう先の世の出來事のやうに、離れた心持で考へることが出來る。私の窓からは英吉利の片田舍の野原が見えるのだし、私の朝晩顏を見合はし、言葉を交はす人々は、悉く私の生れた國の人の外の人なのだし、實際、今になつて十數年前の私を考へると、何處か他所の國の他所の人のやうな氣がするのである。けれども、けれども、あの冬の雨の激しく降つた晩を、あの晩のことを思ひ出すと、私の胸は何の抵抗力をも失つて、忽ち掻き亂されるのを感じなければならない。——私の尊敬する先輩が私の妻の情人なのだ、私の友達が、私の同志が、私の故鄕の友達が、悉く私の妻の情人なのだ。而も私の最も堪へ難く思ふことは、私が同志の人たちの罪の大部分を引被つて、監獄に這入つてゐる間に、そ

れ等の大部分が起つたといふことだつた。そして妻は姙娠までしたのである。あの子は一體誰の子だ、誰の子だ? 私はもしあの時私の妻が法律上の妻になつてゐたら、自分の主義も何も忘れて、その翌日の夜が明けると共に、裁判所の門を叩いたかも知れない。私があの時人殺しの罪を犯さなかつたのは人類の奇蹟だ!

私はそれから大凡一週間の間、寢床に這入つたまゝ起きなかつた。無論、入院してゐる妻の見舞にも行かなかつた。その間にカミサワ醫師も尋ねて來てくれたし、その外ヘンミもオハラも、いつもと同じ顏をして見舞ひに來てくれた。多分、監獄生活をした後の疲勞だらう、とカミサワ醫師は言つた。それは出獄してから直に出なくて、却つて忘れた時分に起ることが珍しくない。殊にそんなに丈夫でない身體での、初めての獄中生活の後だから無理のない現象である、唯、困つたのは、折柄細君が病氣で入院してゐる有樣だから、誰も世話する者がないことだ、と言ふので、Y——氏の家から女中が派遣されて來た。(當時、私たちの同志の中で、細君を持つてゐた人は、片手で數へる程もなかつた。) 誰が姦夫の家の女中の世話になぞなるものか、と私は心の中で叫んで、固くそれを斷つたが、それでも、食べることだけでも誰かの世話なしには困るだらうと彼等は言つて、結局三度三度の麪麭を運んでくれることになつた。あゝ、この一週間といふものは、私に一年半の監獄生活が十倍つゞいたよりももつと辛くて、そして忘れられないものであつた。

私はそれに就いてどんな方法で彼女を詰らうかと思つた、ありとあらゆる方法を私は考へた。それから又、私はどんな風にその事に就いて彼等から——無數の彼等から答を求めようかと、これ亦あらゆる手段を考へた。私は晝寢てゐたか、夜起きてゐたか、何時間眠つてゐたか、何時間醒めてゐたか、殆ど夢中であつた。私が今こんな病氣で苦むやうになつたその初めを尋ねることが出來るなら、確にこの時の一週間に培はれたといふことが出來よう。

四日目だつたか、五日目だつたかの夕方、カミサワ醫師のところから使があつて、妻が死產をしたと知らして來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、多分大丈夫だらうと思ふが、出來るなら一度見舞に來てほしいとの醫師からの言傳てがあつたが、「さうですか。」と私は答へた切りで、行くとも行かないとも言はずに、やつぱり頭から蒲團を被つてゐた。そんな子が、生きて生れてたまるものか、と私は心の中で叫んだ。が、何にしてもその知らせは私の氣持を非常に輕くしたことは事實であつた。その晩も、到頭私は彼女を見舞には行かなかつたが、その時分から又少しづゝ私の別の病氣が起りかゝつてゐた。別の病氣といふのは、總ての事をすつかり忘れてしまはう、事を荒立てゝも何も元の通りになる譯ではない。このまゝ自分一人の腹の中に呑み込んでしまつて、許さうといふ氣持――それが決して自發的にではなく、臆病氣から、消極的に許さうといふ氣持なのである。それは或人には德となつて、その人の一生を幸福に導くかも知れない、だが、私にとつては、それが一生の災ひになつた、何故と言つて、凡夫であること私のやうなものに取つては、その時に呑み込んだものが、いつ迄も腹の中で解けなかつたばかりか、一寸した復讐の機會と、それを果すべき誘惑とを與へられて、取返しのつかぬ事を仕出かす元になつたからである。

　私は私自身がどんな人間であるか、屢々解釋に苦んだ、私は心が寛大なのであるか、卑怯なのであるか、忘れつぽいのであるか、投げやりなのであるか。――間もなく、妻は元の身體になつて、私の家に歸つて來た。入院前と入院後と彼女に何の變りも認められなかつた、餘りに何の變りも認められなかつた、變りがないと言へば、私の入獄前とそして入獄後とを比べても、どんな人相見にだつて、彼女に何の變りをも發見することが出來なかつたに違ひない。その事が私を實に恐れさせた。彼女は時として町に買物に出かけることもあるし、同性の同じ主義者を訪問することもある、さうして家を留守にして、今度歸つて來た時、たとへ人殺しをして來ようと、十人の隱し男に會つて來ようと、やつぱり何事もなかつたやうな顏をしてゐることが出來たに違ひない。それは何といふ恐ろしい事であらう。私は若しもその事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を十二時間も考へつゞけたら、恐らく狂死してしまつたかも知れない。が、私の心の寛大さか、卑怯さか、とてもそれを一時間以上考へてゐる事が出來なかつた。けれども、その頃から、私が病的にまで嫉妬深くなつたことは事實であつた。そんなに嫉妬深くなりながら、しかし私の性質としてそれを現すことが出來なかつた。そしてそれを腹の中に收めてしまふと、即ち解けない塊が一つ増えるなり、或ひは以前からある塊がその大きさを加へるなりしたものに違ひない。

彼女は笑ふと更に美しく見える女であつた。その笑ひの中には何とも言へぬ媚を含んでゐた。私はその笑顔をどんなに享樂したか知れない。然し、ふとそれを彼女が私の外の何人の男にしたかと考へると、私は息が詰まる程苦しくなる。而もその男たちがY――氏とか、オハラとか、ヘンミとか、悉く私の知つてゐる、而も始終顏を合はしてゐる男であると想像する時、私は苦しさに噎せ返りさうになる。彼女の善き行、惡き行、私を喜ばせる事、私を悲ませる事、一々の事が悉く私に他の男を、彼女が關係した他の男を想像させる。すると、私は彼女を出來るだけ殘虐な方法で苛めることを、それを唯頭で空想に畫いて辛うじて慰めた。だが、女といふものは何といふ不思議な生き者であらう。彼女はカミサワの家から退院して來た後、或ひはもつと前、即ち多分私が出獄して來た日以來、私のそんな嫉妬深い目を以て窃かに覘つてゐたにも拘らず、私の病的な猜疑心の外に、これと言つて唯の一度も不埒な行をしたやうに見えたことはなかつた。そして、恐らくは彼女はさういふ事をしなかつたらうと思ふ。やつぱり惡いのは女でなくて、男たちなのだと私は屢々考へた。すると私は彼女が次第にいとしいものに思へた。その思がその後ずつと私を彼女と連れ添はす主要な原因となつたに違ひない。それに、若し私が彼女を捨てた後の、その後の、美貌の彼女の生活を想像することは、私の嫉妬心の堪へられないところでもあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次の子が彼女に生れたのは、その翌々年の春であつた。女の子だつたので、妻の名のクキといふのを倒まにして、キクと付けた。

さて、それに續くモトキチ・タカガワの手記の最も重要な部分を、極めて簡單に、或ひは多分に省略してゞなければこゝに傳へる自由を持たないことを、私は讀者に告白しなければならない。何故と言つて、その話の中心は、即ち今から十數年前に彼の本國で起つたところの、陰謀事件の內幕に關することだからである。

彼はキクコが生れてからの一年近くの間の、稍々幸福だつた生活を、子に對する煩悶的な愛情と、復活した家庭の喜びと、さては時々鳥影のやうに射す妻に對する疑惑と嫉妬と不安とに就いて、可成り詳しく書いてゐる。同時に又その抱いてゐる思想や主義に對する、變らぬ熱情もその隨所に見ることが出來る、彼の『自由への道』に收められた論文の大部分も、その時分に書かれたものであることが分る。だが、その中で見逃すことの出來ないのは、主義に對する愛と、同志に對する反感との板挾みに苦しんで居る樣子である。

ところが、それが或時、キクコが彼の子でないといふ疑を持つやうになつてから、彼の救ふべからざる煩悶時代が始まるのである。筆は以前に遡つて、彼の妻が前の子を死產して退院してからも、產後の健康が兎角順調でなかつたので、ずつとカミサワ醫院に通つてゐたこと、その間に彼女とカミサワ醫師との間に特別の關係が生じたこと、而もそれを彼はキクコが生れてから彼れ此れ一年も經つ迄知らずに過ぎた間に、彼が漸く彼女に油斷して、最近カミサワの家で時々催された同志の懇親會なども、彼が著述の用事などで忙しかつたので、大抵代理に彼女を遣つてゐたが、彼女は小さいキクコを抱きながら、その會で顏を合はす又別の二人の同志とも特別の交際を結んだらしいと云ふこと——それを或日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

多分彼女に愛を報いられなかつたので、憤慨したらしい或男の密告に依つて、彼が知つた時のことを、僅か一夜のことではあるが、數十枚にも渡つて小說的に叙述してある。が、それ等の事は、讀者にとつては、以前の時の繰返し以上の興味がないから省くとして、彼はその時こそ、そんなに愛して來た妻にも、又そんなに可愛がつて來た幼な兒にも悉く絕望してしまつたやうに思はれた。或ひは又、そんなに信賴して來た、そんなに許して來た先輩や同志にも、彼はもう恨みの外に何の感情も殘されないやうに見えた。それどころか、さういふ人たちと一緒に長年の間研究を共にし、情熱を共に獻げて來たところの、主義や、思想や、學說にさへも、彼は一種の憤りを覺えるやうになつたとさへ感じられた。

然し、彼は矢張りこの前の時のやうに、又前の前の時のやうに、それをその場で爆發させないで、呻るやうな思をしながらも、腹の中に藏してしまつた。だが、それはこれ迄のやうに、どんなにしても忘れてしまはうとか、許さうとかといふ氣持を以てゞはなかつた。と言つて、さてどんな復讐をしようなどといふ考を矢張り持たなかつた。彼は殆ど何にもしないで一ケ月も二ケ月も、或ひは半年も魂を拔かれたやうに暮してしまつた。

さて、その先の物語なのである。私が讀者諸君に殆ど報告する自由を持たないのは。何故と言つて、それは可成り秘密に屬する政治的な事件で、現にモトキチ・タカガワの本國でゞも、その事に關する記事は、なるべく發表することを禁止されてゐる位だからである。簡單に、そしてその一部分だけを言ふと、タカガワはさういふ心の狀態にあつて、而も當時書く事が唯一の收入であつたのに、その仕事も手につかないでぼんやり暮してゐた。自然、彼は貧窮のどん底に陷ちてゐたが、然しこれ迄のやうにY――氏のところとか、他の同志のところとかへ、援助を賴みに行くことは斷じて辛抱してゐたのである。その頃彼に一人の新しい友達が出來たのである。そしてその男と彼は次第に親密になつて行つた。それは無理もないので、彼に今は古い友達は悉く信ずべからざる、或ひは恨みある者ばかりであつた。その新しい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

友達はどういふ身分の者であるかを彼は知らなかつた。が、やはり、社會主義思想をも持つてゐる者であることだけは確であつた。更に、彼はどういふのか、可成り裕福な男で、始終タカガワに、「つかひ給へ、僕は一人者で、そんなに入らないんだから。」などと言つては、金を貸してくれた。彼は又屢々遊び場所へタカガワを誘つて行つた。當時のタカガワは、流石にさういふ所へ足を踏入れることは、心持に於いて穏かではなかつたが、然し好んでその男と行動を共にするやうにした。後になつて考へて見ると、この男はさうしてタカガワと始終往來してゐる間に、折に觸れては、彼の同志の誰彼と彼の妻との不義の出來事を、何處からとなく聞いて來ては、彼に報告したり、忠告したりした。彼はこの男に依つて、彼の妻に就いて、更に色々今迄知らなかつた、許し難い事實を幾つか聞かされた。彼の心は益々憤りに燃えた。

　タカガワとこの不思議な男との交際が始まつてから半年程後のことであつた、あの恐るべき隱謀事件の計畫の相談を彼がタカガワに持ちかけたのは。タカガワは一も二もなく膝を乘り出した、彼の絶望的な氣持は、外のどんないゝ事をも考へる餘裕を持たなかつた。さうだ、××だ、そして××の外に何もなかつた。××は元より××しなければならないが、憎むべき彼の同志をも悉く破壊してしまへ！　元より自分の妻も、彼女の子も、そして自分自身をも、總て破壊してしまへ！

　即ち、彼には甲を破壊して、乙を建設するといふ望みはなかつた、他人を破壊して、自分が生き残らうといふ望もなかつた。絶望的な心にとつて、これより外に救はなかつた、又、これより外にやり甲斐のある事はなかつた　彼は生れ變つたやうに元氣づいた。彼は段々離れてゐた同志の所を片つ端から尋ねて廻つた、そしてその計畫を勸めて廻つた。その計畫の用意の周到であることと、功果の確實であることと、彼の熱心であることとは、同志の人々を動かすに十分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であつた。初めのうち容易に頭を縦に振らなかつた首領のY——でさへ、到頭乗り出して來た。そしてY——が承諾した事は取も直さず同志全體が承認したことであつた。「これならば、先年の××事件のやうな失敗はないだらう、」とY——も言つた。そして彼は冗談のやうに附加へて、「その代り今度は一つ間違ふと、この前のやうに君一人で罪を背負つてもらふどころか、みんなの首が飛んでしまふんだよ。」

×××を××さして、國中を引つくり返すか、みんなの首を飛ばすか?——モトキチ・タカガワには何方でもよかつた。彼は東西に飛び廻つて、一人で十人以上の仕事をした。ところが、その計畫を始めてから一ケ月と經たない或日のこと、抑もその計畫の最初の發案者であるところの、例の彼の新しい友達である男に、彼は不審な擧動を認めたのである。彼は先の總理大臣で、今A——政黨の主領であるところの、××××・×××の手紙を持つてゐたのである。

モトキチ・タカガワは忽ち眞青になつて、危くその場に倒れさうになつた。彼は一切の事を了解したのである。彼は×××の廻し者だつたのである。タカガワが聲を震はしながらその事を詰問すると、廻し者は少しもあわてないで、「實は君の推察通りだ、」と言つた。「もう一週間も前から、僕の方から君に打明けようと思ひながら、その機會がなかつたのだ。で、今日、わざとこの×××の手紙を君の前で落したのだ。君、氣を落着けてくれ給へ、そして、改めて相談しようではないか。もうこゝ迄事が運んだからには、今更君としても、外の諸君に對して、まさか斯うだつたと事情を打明けてあやまる譯にも行くまい、阪の車だ、もうお互に人の力では後に戻すことは難かしいんだから。」

モトキチ・タカガワは呻り出した。

廻し者の言ふところに依ると、××政黨の主領の×××は、現在の内閣を破壞する爲に、その内閣の治下に、タカガワ等が企てゝゐるやうな陰謀事件を曝露させよう、といふのださうである。もう少し詳く述べると、……(この所、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二十四行削る。）

「……つまり復讐の爲だね、」と廻し者は言葉をつゞけた。「復讐といふものは美德でないとしても、復讐しないで、指を啣えて引込んでゐるといふ事は確に惡德だよ。僕はそんな事を言つて何も君を煽動する譯ではないが、君等の主義は細君まで共有か？　恐らく君はさうではあるまい。然し、事實は――初め、君の友達の同志のうちで……」

「もう止してくれ給へ、止してくれ給へ、」とタカガワは叫んだ。「なアに、やるよ、やるよ、そして僕も死ぬばかりだ！」

「君は死なゝくてもいゝよ、」と廻し者は言つた。「君を死なせる譯には僕が行かない。無論、君も一度は君の同志――君の讐――と一緒に捉まるんだ。そして君の讐は皆死んでもらふんだ。然し、君は僕が死なせないよ。」

「然し……僕は……」

「然し、僕は、どうした？　正義の友よ、」と廻し者は惡魔のやうに冷やかに言つた。「いつの時代が來たつて、帝政の時代でも、共和政府の代でも、正義といふものが成立つことはあり得ないよ。多分、君、それは人間の組立てる世界には金輪際成立することはないよ。君一人清めりだよ、政黨だつて、大臣だつて、無論僕だつて、君が今聞くやうに墮落してゐるんだ、然し、それ等と同じやうに、君の仲間もやつぱり墮落してゐるんだ、僕は君にこんなに近づく迄に、僕がどんなに手段を用ひたと思ふ？　僕は言ふよ、僕は君の細君を……」

「君もか……？」とタカガワは初めて大きな聲を出して叫んだ。流石に廻し者も驚いて次の言葉を呑み込んでしまつた。

「よし！　爆烈彈だ、爆烈彈だ！」と叫んで、タカガワは表に飛び出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その晩と、その翌日との間に、タカガワ等の同志十何人は一網打盡にその筋の手に捕へられてしまつた。そして裁判は一般の傍聽禁止の中に一ケ月足らずの中に片附けられて、一同は恐く××罪で死刑を宣告された。宣告の翌々日刑を執行された。無論、モトキチ・タカガワもその中の一人だつたのである。だが、かの廻し者が彼に約束した言葉が實行されて、彼だけが斷頭臺から國外に追放されたのであつた。そして、その時以來、彼は彼の本國で死んで、今見るやうに外國で生きてゐるのである、彼の言葉に依ると、それは「去勢された如く」生きてゐるのである。

無論、タカガワの手記はそれで終つてゐない。まだ全體の四分の一位は殘つてゐるだらうか。それは彼が外國へ來てからの部分である。若いイクタロー・ハタは彼のお通夜の晩に初めてそれを繙いて、殆ど息もつかずに讀みつゞけた。同じ部屋の中にはミーヤ・ジム初め、マガラや、トーリイや、その外五六人の、彼の初めて見る人たちがゐた。彼だけが人々から離れて、そんなに熱心に讀んでゐたので、時々マガラやトーリイが、「それは Mr. Takagawa の自叙傳なの？　面白い？　悲しい？」などと傍に寄つて來て聞いた。

「えゝ、」と彼は夢中で答へて、幾度か溜息を吐きながら讀みつゞけた。

前の晩と同じやうな月夜であつた。卓子の周圍では、人々は月に就いての感想を話し合つたり、急に又故人に就いての追懷を述べ合つたりしてゐた。一人として、故人の音無しい、聖者のやうな人と爲りを賞めない者はなかつた。中で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マガラ孃が最も雄辯であつた。無口なミーヤ・ジムはその人の善ささうな、白髪に被はれた前額を、時々こくり〳〵と點頭かせてゐた。獨りセシル・トーリイだけが絶えず落着かないやうに見えた。彼は時々椅子から立上つては窓の方に歩いて行つて、ハタの傍に立つて、彼の讀んでゐるものゝ上から覗き込んだりした。然し、そこには彼には一字も讀むことの出來ない文字が並んでゐるだけであつた。

「どういふ事が書いてあるんです？」と彼は言つた。「それはそんなに君の心を捉へましたか？　然し、さうなくてはならないと思ひます、それは Mr. Takagawa がつい半年程前迄、毎日毎日それを讀み返したり、書き直したり、或ひは書き足したりしてゐるやうでした。實際、彼はそれを書く事に生命を懸けてゐたやうに見えました。それを彼は本國で出版したい希望を持つてゐたのですか？」

「さあ？」とハタは讀みつゞけながら答へた。「しかし、これは私たちの本國では迚も出版を許されないでせう。」

こんな風に、この二人の會話が辻褄が合つてゐるのが不思議な位であつた。何故と言つて、話しかけたトーリイも話してゐる外の事を考へてゐたやうだつたし、答へてゐるハタも話とは別のことを考へてゐたやうだつたから。そして、トーリイはそれだけの會話の後、又こと〳〵とハタの傍を歩み去つて、今度は窓から首を出して、暫くの間外の景色に口を曝してゐた。そして又ハタは直にトーリイの存在を忘れて、讀むことに心を集中さしてゐた。

私が今どんな言葉を探し出して來て、彼の心持を説明したところが、恐らく徒勞に歸するだらう。彼は數奇を極めたタカガワの一生を、彼自身もこの一日か二日の間に經驗したやうな思をした。實際又さうに違ひなかつた。彼の驚くべき手記の中に出て來る彼の妻も彼女の娘のキクコも、彼にとつて亦手記の中だけの人物ではなかつたからである。

「自分はあの廻し者のアンナイが言つたやうに、この世の中が一層よりよい状態に改革されないとは信じない、」とタ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

カガワがその手記の中で叫んでゐる。『革命は可能だ、少なくとも可能であり得る。人類はよりよくなるかも知れないそして社界も。だが、女は駄目だ、女は駄目だ！』

若いハタはこゝの所を幾度も繰り返して讀んだ。キクコと彼女の母の姿が色々の繪になつて彼の頭に書かれた。彼は外に人がゐなかつたら、先程から、ともすると椅子を離れては、そわ／＼と部屋の中を歩き廻つてゐるセシル・トーリイに、この言葉を飜譯して聞かしてやりたいと思つた。

すると、ミーヤ・ジムが大きな噫を二度ばかりつゞけてした。

「あゝ、もう夜が明けて來た。」と誰かゞ言つた。

翌日一日、ハタは死者の傍にゐた。彼の外にはマガラがゐた。その晩、Mr. Takigawa の埋葬式が行はれる筈になつてゐた。午前のうち、ハタは續いて故人の手記を讀みつゞけた。即ち彼が本國を追放になつて、佛蘭西に來たところから讀んだ。それに依ると、タカガワは初めにマリイ・ジム、即ちジム夫人と知合ひになつたらしいのである。そして彼女の紹介でミーヤと友達になつた。彼は佛蘭西には半年足らずしかゐなくて、そこから直にこの牧場地に來たのだつた。彼はもうその時分から可成り健康を損つてゐたらしく、從つてジムの所では殆ど食客のやうにして暮してゐた。そのうち、マガラの家庭教師のやうな役目をするやうになつたのであつた。

外國へ來てからの彼は先にも言つたやうに「去勢された如き」人と自分のことを書いてゐるが、手記はその邊から嵐の後のやうな靜かさを讀む人に感じさせる、恐らく、人々が誰も言ふやうに、聖者のやうな心持に凪いでゐたのであら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

う。讀んでゐるハクの心持も、昨夜からの暗い、物凄い記事の後で、靜かに撫でられるやうな感じを受けた。それにも拘らず、唯一つ、女であるところのジム夫人に就いてだけは、彼はやはり呪ひの言葉を掛けてゐることを、見出さねばならなかつた。流石に『赤い花』の著者だけに、小說家的な才分を持つてゐた彼は、巴里の時代及びこの牧場地に來てからも、度々彼女から挑まれた場面を可成り生き生きと書いてゐる。それは生き生きと書かれてあるだけに、讀んでゐるハタを再び憂欝に陷れねばならなかつた。然し、彼は未だ彼女を見てゐないので、あの朴訥な、童顏のミーヤの夫人がどういふ人であるかを、想像することも出來なかつた。そして强ひて想像しようとすると、タカガワの妻であるところの、キクコの母の姿が想像の畫に浮かび上つた。

ところが、最後にハタが言ふ事の出來ない驚きと憂鬱とに引入れられたのは、(どうして筆者はその時に告白しないで、そんなに文章の最後になつて、あわてゝ附加へるやうに書いたのだらう?)といふのは、彼がジム夫人の誘惑に唯一度打ち負かされたことを、彼女を一層呪ふ言葉で埋めながら、懺悔してゐることであつた。

マガラの事に就いては何にも書いてなかつた。

彼も亦「去勢された如き」人になつて、若いハタは死者の枕元の、なるべく窓に寄つた方に椅子を持つて行つて、手記の原稿を膝の上に載せたまゝで、彼は無言の狀態に沈み込んでゐた。同じ部屋に坐つてゐたマガラと、彼は朝から夕方までに、何度と數へる程しか口をきかなかつた。而もマガラが始終部屋から出て行つては歸つて來、歸つて來ては出て行きしてゐた間も、彼は椅子に縛り付けられたやうに動かなかつた。絕えず弔ひの言葉を述べに這入つて來る人々に對しても、總てマガラが應接してゐる間、彼は何を考へてゐたか、何を見てゐたか、まして誰が來たかさへ、殆ど知らなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然し、窓の外はその日も上天氣であつた。唯少し風があつて遙かに見える林の梢が揺れてゐたのを彼は知つてゐる。案外近くに牧場があると見えて、夜はそれ程でもなかつたが、日光と風の加減で、牧場獨得のにほひが可成り强く流れて來たのと、時々遠く或ひは時々近く、近い時は直隣の部屋にでもゐるのではないかと思はれる程近く、乳牛の鳴く聲が聞えて來たのを彼は知つてゐる。そしていつか日が暮れたのを彼は知つてゐる。

埋葬式の終る少し前頃から、月が上つた。イクタロー・ハタとセシル・トーリイとは皆より遲れて墓場を出た。彼等が歩いて行く先の方を、同じ式に列なつた人々の何人かの一團が歩いて行つた。紫色に見える夜景の中で、それ等の人たちが誰と誰とであるか見分けることが出來なかつたが、マガラの甲高い聲だけが明らかに聞きとれるので、その人たちの中に彼女が交つてゐることだけは確められた。

ハタは言ふ迄もなく、トーリイも珍しく默り勝に歩いてゐたが、

「近いうちに僕は倫敦へ行かうと思ひます、」と突然後者が決心したやうに言つた。

「行きつ切りにですか？」

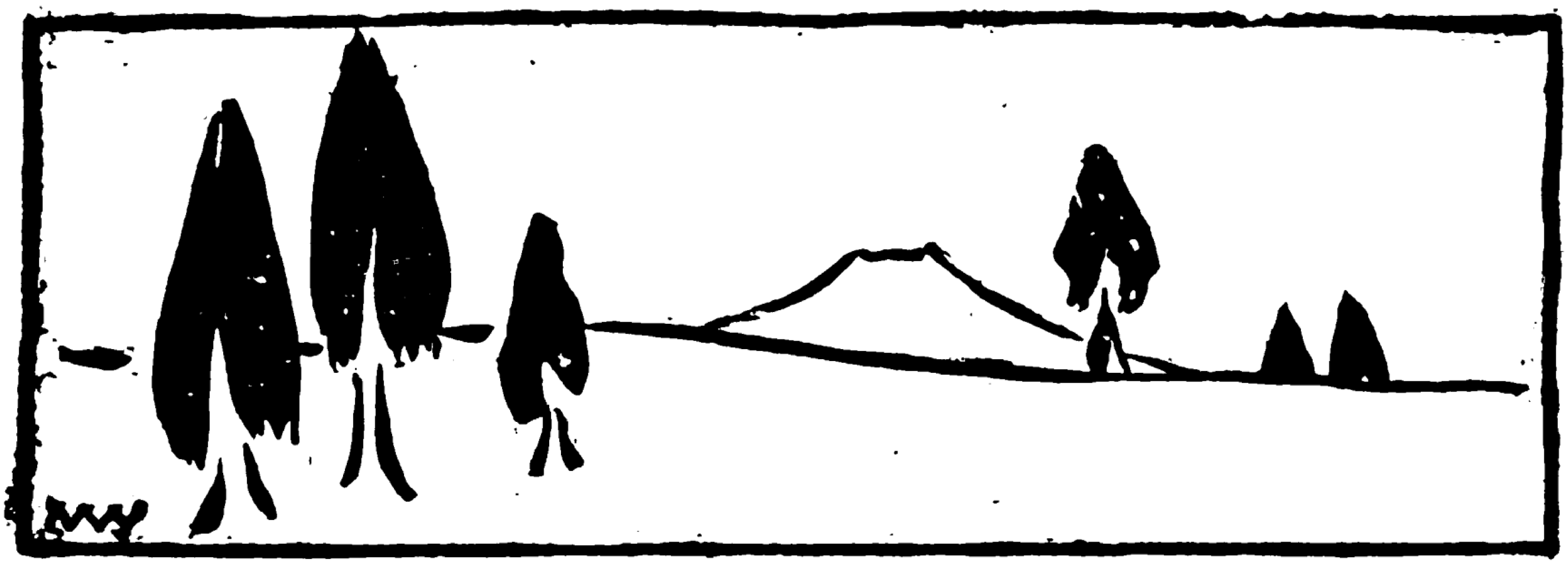
「えゝ、」とトーリイは肩を揺かしながら、然し何處か沈んだ調子で、「そして、僕は實行運動派に加はらうと思つてゐます。」

「革命のですか？」

「勿論です！」

そして又彼等は元の無言にかへつて、麥畑の間を通じてゐる白い路を歩きつゞけた。
「僕も二三日中に此處を立たうと思つてゐます、」と突然ハタが言つた。
「何處へ？」
「分りません。」
「何しに？」
「それも分らないのです。」
そのまゝ、又會話は途切れた。然し、暫くしてから、
「到頭、ジム夫人は間に合ひませんでしたね、」とトーリイが半分獨言のやうに言ふには、「電報を未だ見ないのか知ら？」
が、それにはハタは答へなかつた。その時、再び一直線に道が通じてゐるところへ來たので、先に歩いて行く人々の姿を見ることが出來たと思つたら、
「セシル、早く入らつしやい！」とマガラの快活な聲が、その方から呼ぶのが聞えた。

（十二・十二）



初冬の氣分

德田秋聲

（上）

懷かしい冬が來た。

懷かしいといつても、それは氣分のうへのことで、長いあひだの痼疾の一つである氣管支のわるい、そして其のために、冬中殆んど風邪に冐されづめである小野に取つては、冬はむしろ生活の脅威であつた。しかし其だけに又安靜な隱栖的な親しみの感ぜられるのも冬で、總ての點で老年の心持としつくり合つてくるのが、四季のうちでも冬が一番だと云ふ感じがするのであつた。

年取つてからの小野に冬の懷しまれるのは、恐く北國に產れ育つた彼の鄕土色の還元だともいへるのであつた。彼はこの頃も本鄕の通りをあるいてゐるとき――それは初めて冬らしい感じのする、寒い風の吹く晚で、氷雨のやうな冷い雨さへ降つたり小過んだりしてゐたので、その荒い風につれて、路傍樹の銀杏の葉の黃ばんだのが、濡れて地に

散ばつてゐるのを見ると、北國の町の冬がすぐ聯想されるのであつた。わけても小野が中學時代によく往來をしてゐた或友人の酒屋の家の前にあつた、お寺の境内の古銀杏に野分が吹いて、黄楊の鬢搔によく似た美しい黄ろい葉が、蓮の葉の形をした用水盤や、石疊や、そこら一面に吹き溜められた町の冬が憶出されるのであつた。その頃小野は文藝的才藻に富んだその友達の二階の書齋へよく遊びに行つて、彼の書いた小說などを讀んで聞かされたりした。彼はすら〳〵と面白く書きつゞられたその小說の筋立と、彼の輕い能文には感服したが、それは今から考へると、子供が大人の眞似をした一種の戲作風のもので、小野が共鳴するやうな、その頃の惱みや悶えの多い青年の胸奧には少しも觸れてこなかつた。二人はその頃勃興しつゝあつた明治中葉の文運の所產であつたところの色々の作品を、その酒屋の近所にある、藝者あがりの美しい細君と、垢ぬけのした意氣筋な樣子をした三十ばかりの亭主とでやつてゐる、小綺麗な貸本屋について、春のやおぼろだの、二葉亭四迷だの言ふ人だのの作品といつた風に、取りかへ引つかへ借りて來ては耽讀したものであつた。矢野龍溪の經國美談だとか、東海散士の「佳人之奇遇」なぞも讀んだ。馬琴や種彥なぞも見た。近松西鶴、露伴紅葉、國民之友、早稻田文學、しがらみ草紙……そんなものが、それからそれへとその貸本屋の主人から、小野やその友人のG――の驚異と好奇心をそゝるべく取次がれたが、中には櫻痴居士の「藻鹽草」とか 又は飛はなれて默阿彌の脚本とか 種々雜多なものがあつて、選擇が一向無定見であつたが、一時そんな風に、日本海へ片寄つた暗いその町へも、時代の潮流が、さうした二三軒の貸本屋や、新刊書を取扱ふ或る書肆によつて瀰漫したのであつた。

つひ餘談にわたつてしまつたが、小野の心や感情は、ちやうどその頃から、鄉里とはとかくしつくり合はないものになつてしまつてゐた。鄉里の町、町の人、その人達の生活氣分とまるで沒交涉な――寧ろ反感をさへもつほどに、彼は自分の產れ故鄉に昵むことができなかつた。それはその頃彼の家が、經濟的に殆んど崩壞してしまつて、古いものはそれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自身を支へる力を失ひ、新しきもの——彼の兄たちは、みな各々自分の生きる道を求めるのに迷ひ焦慮らなければならない時期に行逢つてゐたので、漸く生活の目のあきかゝつてゐた小野の心は、劇しい惱みと刺戟に怯えがちであつた。そして一般家庭の青年の誰もが享樂しむことのできる青年期の耀かしい幸福の代りに、慈母によつて甘く弱々しく育まれて來た彼の心は、次第に荒い實生活の波のうへに漂はされつゝあることを、銳敏に感じさせられた。今こそ彼は、目にみえないちよつとした時候の替り目などにどこからか戰いで來る微かな風の匂ひなどにふと幼少の頃かいだことのある北國の冷い荒い風の味を嗅ぎしめて、淡い懷かしみを覺えると同じ工合に、憂鬱な少年期をすごした故郷のその時々の家や庭や人を聯想して、現在の自己の聯續であるところの、遠い過去を想ひ出しこそすれ、その頃の彼の感じから言へば、故郷は單に廢頽した寂しい墳墓とくらゐにしか思へなかつた。人間の生活に最も安定な樂しい感じを與へると同時に、善良な人格的基調を作る筈の家が、彼の少年期では、屢ばそつちこつちへ移し越されたことが、彼の自己尊重と生活愛護の感念を、どのくらゐ傷つけたか知れなかつた。勿論さうした不安定な生活が、彼を反つて一種の自由人に育てあげたのかも知れなかつたけれど、その代り彼の頭腦に頽廢的な暗い陰影を植ゑつけた事も、事實であつた。少くとも彼に若し幼い時からの記憶に刻みつけられた家があつたならば、靜かなその故郷の町は彼に取つて今少し懷かしい愛著を覺えしめたかも知れなかつた。古い傳統をもつた其の町特有の文明——たとへば野性的に育つた彼が、その頃最も不愉快に思つた古い藝術品だとか、お茶や花や謠曲や、又は古くから民衆のあひだに深い根をおろしてゐた他力信心、その他總ての古めかしい禮儀作法遊戲などに、少しでも親しむ餘裕があつたならば、彼はその町を安逸を貪りがちな人間の最も暮しいゝ悅樂土として、深い愛著を感ずると同時に、生れながらの隱遁者として、やくざな安靜な一生をそこに送つたに違ひなかつた。勿論その町には暖かい南の海に沿つた都市や村邑のやうな自然の明さもなかつたし、中部山

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

脈の高原地のやうな秀でた山の美しい姿も見られなかつたけれど、北の海に瀕した陸地に特有な冬の温かい寂しい感じや、長い一冬を殆んど薄暗い室内に籠つて、讀書や談話や飲食ひに耽ることのできるのは、全くその町特得の自然の恩寵であつた。屋敷町の築地に圍まれた庭に、樹木の葉がすつかり振ひおとされる頃には、東西南の國境をうねつてゐる山脈が、凄い暗鬱な雲にすつかり封されてしまつて、時雨が庇や庭木のうへにそつと音を忍ぶやうに、しかしめ〳〵と泣出しさうに降そゝいで來る。すると寒さが日増しに加はつて、一里餘りの距離を隔つた海の潮鳴が、靜かな夜などには物哀しげに枕に音づれて來る。霙が裏の柿の木にふつたり、霰がばら〳〵と板戸を叩いたりする。小野はそんな冬の夜に、薄暗い茶の間で、獵ずきの父の獲物であつた野鴨の暖かい羹を、みんなと一緒に食つてゐたことや、母の作つた鰤味噌や風呂大根を食べてゐた記憶などから、年を取つてからの今、特にまざ〳〵と思ひ出されてならないのであつた。

　小野は去年の冬、大阪に住んでゐた長兄の葬式に詣つたついでに、月の十日頃から暮の二十五日まで京都の郊外にゐた。父の末子であつた彼に取つてはこの兄は、色々の意味で、父と同じやうな尊敬と親愛の情を保たせてゐたが、年は一周りくらゐしか違つてゐなかつた。兄の死を見た彼は、それが取返しのつかない悲しい永遠の別れであると同時に、人間の死がいかに傷ましい、しかし幸福な安息であるかを、誰の場合よりも適切に彼に感じしめた。最も手近いものであつた、兄の死を見た小野は、同じ運命が自分に迫つてくる時の、さう遠くないことを今更のやうに感じた。生活力が衰へて　働くことの辛さが増して來るのが意識され、生きる悅樂が年々に褫はれて來るにつれて、彼は一歩々々坂を下るやうに、死の心易さに近きつゝあることを感じた。死後の生活については、彼はたゞ空虚を感ずるだけであつたが、老ゆるにつれて、彼の存續が少しづゝ感じられるやうに思へて來た。死が一切の終りとは思へなくなつた。時と處とに於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、際涯を知ることのできない萬有の總てが、有機的な微妙な或る連鎖と交錯を保ちつゝ、有らゆる矛盾と諧調とを超えて、永遠に生々流轉しつゝあるものゝやうに――彼はたゞ單純にさう感じるだけであつたが、因果律のやうな理法は、想像し得られないことではなさゝうに思へた。朽ち衰へた老木の根から、若い多くの若芽が簇生するやうに、自分の心意が衰へ行く肉體のうちに、反つて潤ひと生命をもつてくるやうに思へてならなかつた。勿論小野は時によると、もう何の仕事にも働くことのできない、寂しい哀れなものであるかのやうに、健康が屢ば危くなつてくる毎に、ひどく自分を果敢なむことがあつた。彼の内臟機關は、どれもこれも病ひの巣のやうに、生存に役立たなくなつてしまつたかと思ふほど、ちよつとした無理な勞働をつゞけたり、調子づいて口腹の慾望の度を過したりして、胃腸や氣管支を害ねたり、心臟を疲らせたり、腦貧血をおこして卒倒したりする度ごとに、彼は心を脅やかされがちであつたが、しかし又何うかすると、自分にも不思議なほど薄弱ながらに健康を享樂しむ時が、一ト夏もつゞいたりした。

そんな風で、小野は薄い氷を蹈むやうな心持で、去年も今年も花の咲くのに逢つたり、月の冴えるのを見たりして來た。その間には又、直接的な物質的享樂を、自然に回避したり、心持で節制しなければならなかつたりしたけれど、時とすると若い男女だちの集つて來る劇場の廊下に姿を現すことも珍らしいことではなかつた、死の影が、有らゆる幸福に暗く裏づけられてゐるのは寂しいことに違ひなかつたけれど、刹那々々に生きてゐる自分を不思議に感ずるだけでも、彼の悅びであつた。

三週間ばかり滯在してゐた冬の京都の自然ほど、兄に死訣れた悲みのまだ新しい小野の心に、不思議な懷かしさと親しみをもつて、ぴつたり合つて來たものはなかつた。寂寥を愛する心が、孤獨を懷しんだ青年期のそれのやうに、ひた〳〵と彼に迫つて來た。勿論小野の意味する寂寥は、普通にいふ煩累の多い家庭や社交から差當り逃れてゐられるだけ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも、十分であつたのかも知れなかつた。それに一日話を交へる相手にさへ事缺いたり、時々の散歩に心安い伴が一人もなかつたりすることは、寧ろたへがたい苦痛であつた。彼は言はれるまゝに、郊外の甥の家に足を止めてゐた。家といつても、それはその時の彼が、勤めてゐる會社へ通ふのに便宜の多い場所に求めた、哀れなむさくるしい、二室ばかりの狹い住居であつたのは勿論で、それだけに又歡待されてゐた大阪の親類の家と引比べて、いつから心に描いてゐたやうな草の庵をでも見つけたやうな悅びを感じたのであつた。今少しそれが淸らかであつたら、彼はそれ以上を望む必要を更に感じなかつた。それは靜かな北野の片ほとりであつた。衣笠山のなだらかな優しい姿が、緣端から靑々と空を仕切つて望まれた。庭の外には大根などの畑があつた。菊のすがれたのが、そこによろけてゐた。赤い唐辛が干からびてゐたりした。やゝ遠いところの色の濃い竹籔の蔭に人家の軒がみえたり、雜木林の奧に、鷄が餌を漁つてゐたりした。溫かい朝日が、それらの唐辛や菊や、畑の野菜や、林や籔や、霜が融けて、しつとり濡れた其等の土や枝葉のうへに照りわたつてゐるかと思ふと、空がいつとなし薄すらと曇つて來たりして、小野は氣分までが曇るやうに思つた。北山時雨が輕い足取でぽちや〳〵と、板屋根に降そゝいだと思ふと、直きに霽れたりした。

彼は仕事の隙を見て、時とすると、獨りで衣笠山の松林のなかへ、深く分け入つたり、金閣寺の方まで漫歩きの興を趁つたりした。四時頃になると、甥が歸つて來た。小野は一緒によく町へ夕飯を食べに出たり、寺町や四條あたりへ暮の景氣を見に行つたりした。毎晩のやうに、二人は遲く歸つて來た。そして歸つてくると行火に當りながら、話の多い甥から色々な話を聞かされた。郊外の夜はしん〳〵と更けて、寒さが脊へ滲とほつて來た。

「また時雨だね。」

「僕等の町と感じがよう似てゐます。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どこか手頃な家が見つかつたら、借りておいて時々來てもいゝな。やつぱり郊外がいゝ。春は少しだるいけれど、冬はたしかに好い。冬だけでも來てゐたら」。小野は言つた。

「一軒ありますぜ。吉田山の方面で、少し不便だけれど、家は誂ひむきですがね。」そして甥はその家について、地理や間取の工合や、湯殿、庭などの體裁を、畫にかいたり、圖に引いたりして說明した。

「しかし餘り不便でも困るな。町へ出るのに臆劫なところでは、夜分なぞ寂しくて仕方がないだらう。」

「それあ何うせ郊外のことですさかい、便利といふ譯にはいきませんでせう。」

二三日たつてから、小野は甥と一緒に、その家を見に行つた。そこは可也邊僻であつた。それに山と山との間の、行詰つたところにある其の邊の環境が、少しの親しみをも小野に感じさせなかつたけれど、玩具か小住宅の標本のやうな其の家のこま〳〵した間取、節約的に便利に出來てゐること、體裁を作るのに小器用なことは、無器で殺風景な東京などの建物ばかり見てゐた小野には、興味が多かつた。

「何分にも場所が感服しない。京都の郊外らしい細かな感じもないぢやないか。」小野は否定してゐた。

「しかし冬だからいけないですが、春はいゝですぜ。」

「けれど京都や我々の町は、冬が一番いゝんぢやないか。」

「そんな事はないでせう。叔父さんは又えらい京都の冬が氣に入つたものですね。」

小野は氣が進まなかつたけれど、立つとき左に右いくらでもない敷銀を甥にわたしておいたのであつたが、嘘の上手な甥からは、東京へ歸つてから何時までたつても、移轉したともしないとも言つてこなかつた。小野はそれ以上に手數をかけて、京都に住居を求めるのは煩はしかつたので、その他のことでも思つたよりづるくて惡く敏捷い甥との交渉

をたつてしまつたけれど、彼の氣分は、その時を區劃として、不思議にも遙かに閑寂な生涯の冬籠に、何うにかして着手できないであらうかと、それにのみ思ひを致すやうに、めつきり老を感じて來たのであつた。そして其と同時に、安全な隱栖生活に、是非經濟問題の附纒つてくるのを、何うすることも出來なかつた。それに多勢の子供をもつてゐる現在の狀態では、彼の日常生活はとかくに彼の氣分を裏切りがちであつた。彼は生活の單純化と、孤獨への還元とを意圖に描きつゝも、實際生活では、彼は日に〳〵より複雜な、より煩瑣な生活の無限の擴がりに引摺られてゆくより外なかつた。

小野が三年ごし、家の問題で惱まなければならなかつたなども、それの一つの實例であつた。

（下）

小野は今住んでゐる家に、もう十六七年といふ長い月日を過して來た。彼は特別な愛着を、その家に感じてゐたのではなかつた。又感ずる理由もなかつた。勿論最近――といつても七年以來のことだが――では子供の一人をこゝで失くしたと云ふ不幸があつたりして、其の短かい生涯の記憶、何かにつけ家と親密な交渉をもつてゐるところから、そこを離れるのが、妻のかな子に後髮を引かれるやうな思ひをさせるといふやうな事もあつたが、要するに家といふものの觀念が、小野になかつたからのことで、氣分轉換のためどこか清新な感じのする東京の外廓か郊外へ引越したらばと思ひながらも、つひ其なりに引摺られて來たのであつた。

こゝへ引越して來たときには、それが初夏の季節だつたので、青々した建仁寺垣の前に、お能の舞臺の背景のやうな松が三重に枝葉をくねらせてゐる傍に、藥玉のやうな斑入八重の椿が咲いてゐたり、柘榴や木蓮の古木が、青苔の生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

えた庭に、しつとりした陰影を作つてゐたりして、何となくかな落着いた氣分にならせるのであつた。家も狹かつたけれど、簡素なしつくりした建方で、最初それを發見したな子の氣に入つてゐた。かな子は漸く二人の子の母親でしかなかつた。この家へ落着いてから現在までの家の變遷を語るならば、それはやがて小野夫婦の生涯の重要な部分と、子供の或ものゝ生立の主要部分を構成する譯だが、子供の頭數がその當時の三倍に殖え、育つものはめきめき育ち、死ぬものは死に、老ふるものは追々に老いて、生活が三重も四重にも複雜になつて來たと共に、家も次第に古くなつて來た。度々のお産と、主婦としての配慮と勞苦のために持病もちのかな子の體がかたついて來たと同時に、小野も自身の生活すらまだ確立しないうちに、長いあひだの精神の濫費を強ひられて來た果に、年齡と逆比例に年々加はつて來る生活負擔の重いのに倦れてゐた。

最初は書生が一時二人もゐたり、田舍から來て世帶を傳つてくれた女があつたりして、入替り立替り男女の寄食者もゐた位であつたが、今ではそんな部屋にも、足を容れるところのないほど何か知ら荷物が溜りくして、落着いて勉強する場所のない子供たちから不平が出たり、物の仕舞場のないのと出入れに骨の折れるのに困つてゐる妻から苦情が出たり、小野自身も、ゆつくり手足を伸して寢ることすらできないほど、手狹を感じて來た。

「どうも大變なもんだね。」

小野は旅行などから歸つてくると、茶の間にも奧の四疊半にも、簞笥や本箱や机や長火鉢のぎつしり詰つた狹い部屋に、僅かに空地を工面して敷かれた蒲團に、づらりと寢てゐる子供たちを見渡しながら嘆息してゐた。

その家の持主がかはつて、小野が遂に立退きを要求されたのは、三年前の夏の初めであつた。ちやうど借家の拂底を告げてゐる眞最中で、住宅難の聲がそこからも此處からも起つてゐた時分なので、小野も早晩そんな時が來るだらうと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四書、五經を始め、老、莊、韓非、荀子、管子、呂氏等の諸子十餘種、即ち所謂支那哲學の名著を網羅し、外に左傳、國語、史記全編等の史篇を收む。

◎文學部　二十册

楚辭、文選、八家文、唐詩選等の詩文の外、晉唐小説西廂記、琵琶記、還魂記、桃花扇、水滸傳、紅樓夢等各時代の代表的戲曲小説を網羅す。

編纂評議員

（イロハ順）

- 國學院大學長、帝國學士院會員、文學博士　芳賀矢一
- 東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　服部宇之吉
- 帝國學士院長、法學博士、樞密顧問官、男爵　穗積陳重
- 文學博士　幸田露伴
- 東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　上田萬年
- 文學博士（故）　小牧昌業
- 東京帝大教授、帝國學士院會員、文學博士　白鳥庫吉
- 文學博士、醫學博士（故）　森林太郎

執筆譯者

（イロハ順）

- 東京帝大教授文學博士　服部宇之吉
- 文學博士　林泰輔
- 文學博士　幸田露伴
- 東京帝大教授文學博士　宇野哲人
- 學習院教授文學博士　岡田正之
- 文學博士　小柳司氣太
- 東京帝大助教授　箭内亙
- 東洋大學教授　山口察常
- 第一高等學校教授　安井小太郎
- 文學博士　藤田劍峰
- 公田連太郎
- 文學博士　小牧昌業
- 文學博士　兒島獻吉郎
- 拓殖大學教授　後藤朝太郎
- 第一高等學校教授　佐久節
- 笹川臨風
- 拓殖大學教授　宮原民平
- 東京帝大教授文學博士　鹽谷温
- 東洋大學教授　釋清潭
- 平岡龍城

◎四十册

經子史部　二十册
文學部　二十册
兩部又は一部申込隨意

津田青楓氏意匠、菊判總クロース製、天金、一册約八百數十頁

特製和裝は半紙判和紙刷、洋裝一册分を四册に分ち布製帙入

◎申込〆切は一月卅一日限り

略規

- 會費　各部每月金五圓（前金一時拂金九拾四圓）兩部每月金拾圓（前金一時拂金百八拾八圓）（但特製和裝は各部每月金七圓一時拂金百卅貳圓、兩部は此倍額）
- 申込金　各部金五圓、兩部金拾圓（和裝は各部金七圓）（一時拂には申込金不用）但此申込金は最終月の會費に充つ
- 送本　來る三月より每月各部一册宛。但送本料を要す。

◎見本及規定（四拾頁）は御申越次第送呈

東京市神田區小川町一番地
電話神田三二六〇番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

室生犀星新著

忘春詩集

四六判 四百八十余頁 著者自裝本

定價金貳圓五拾錢

書留送料金十八錢

佐藤惣之助著

琉球諸嶋風物詩集

四六判 上質洋紙印刷 著者自裝製本

定價金壹圓八拾錢

書留送料金十八錢

早川孝三 齋藤响共譯

ストリドベルヒ 復活祭 外二曲

四六判 三百五十余頁 天金箱入美本

定價金貳圓貳拾錢

書留送料金十八錢

松永延造新著

長篇創作 夢を喰ふ人

四六判 五百頁 總布裝箱入美本

定價金貳圓五拾錢

書留送料金十八錢

東京本郷區元町壹の參 株式會社 京文社 振替東京八二二六番 電話小石川五九八六番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本號特價 金壹圓八拾錢
郵税金五錢

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市　富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◉定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾四錢）
但支那を除く

冊數／國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾参圓六拾錢外國は金拾八圓参拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所
博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社　一星社

送金注意

一誌代郵税は一切前金さす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢　（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別[illegible]て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年十二月二十五日印刷納本
大正十二年一月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

本號特價金壹圓八拾錢 郵税五錢

お買物は今年も三越
吳服店

三越マーケット
西館五階に常設してあります、實用品のみて値段が廉く品質が良いので毎日大盛況續きてす

第二食堂の好評
東館六階で洋食を始めました、第一食堂は西館の六階で從來の通り日本食、何れも美味好評

◆新年初賣出し…四日より九日迄…◆第四回朱葉會洋畫展覽會…十七日より廿一日迄…◆第八回滑稽會展覽會…廿四日より廿八日迄
九日より十四日迄…◆堂本印象氏新作畫展覽會
◆一月の定休日、一日、二日、三日、十日、廿五日

三越吳服店

◆東京駿河町◆